東京都埋蔵文化財センター調査報告　第 393 集

千代田区

永田町一丁目遺跡Ⅲ

― 内閣府新庁舎（仮称）整備等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 ―

（第 1 分冊）

2025・9

東京都埋蔵文化財センター

永田町一丁目遺跡の調査

永田町一丁目遺跡は、日本の国政の中心である千代田区永田町に位置します。令和３年度から５年度にかけて、内閣府新庁舎（仮称）整備等事業に伴う埋蔵文化財調査を実施しました。遺跡は武蔵野台地東端にあたる麹町（こうじまち）台地の南側斜面に立地しており、南方の眼下には、いまは埋まってしまいましたが、かつての「溜池（ためいけ）」の谷が広がっています。



1　永田町一丁目遺跡周辺の空中写真（下が南）



2　19世紀初頭頃の遺跡周辺



3　永田町一丁目遺跡第３次調査地点の全景写真　【2022 年 6 月 23 日　西から撮影、写真右が「溜池」の方向）

出典：1　国土地理院撮影の空中写真（2019 年撮影）に一部加筆　2 『御府内往還其外沿革図書』四、文化五年（1808）[部分] に一部加筆
国立国会図書館デジタルコレクション

永田町一丁目遺跡第３次調査のあらまし

江戸時代の遺跡一帯は「虎御門内新道」と呼ばれ、旗本屋敷が多く集まる一角でした。第３次調査の範囲は、古地図によれば 1,000 石～ 5,000 石級の中上級の旗本屋敷地計 4 区画にまたがる地にあたります（図２）。現代まで残されていた石垣の段差を地境として南北に隣り合う２区画が主な調査範囲で、北側は成瀬家（のちに鳥居家）が、南側は第１・２次調査の続きで川窪家（のちに保科家）の屋敷地でした。このほか、西側の高台に五井松平家、南東端に医師を勤めた吉田家（のちに別の医師･旗本へと多数変遷）が屋敷を拝領していました（図４）。明治に至り、主要２区画は新政府の高官・佐野常民の邸宅となり、明治時代の終わりには商業地や宅地として細分化されていきました。

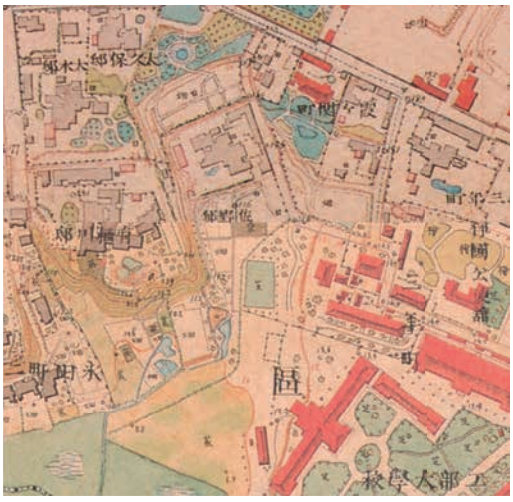
今回の調査で発見された遺構は約 4,000 基、遺物は収納箱約 1,000 箱と膨大な量が得られました。旗本屋敷の居住空間に関わる建物跡・土蔵跡・地下室・井戸・竈・便所跡（埋桶・埋甕）・土間状の地面や雨水などの排水溝、屋敷境（土地の境）を示す石垣や溝､庭園の池や植栽の痕､出産に伴う後産の「胞衣納め」の風習に伴う埋納遺構、ペットとして愛玩されたと思われる犬や猫の埋葬遺構が発見されるなど、当時の旗本の暮らしぶりがうかがえます。大火で発生した大量の焼土や被災瓦を埋め立て、屋敷地を嵩上げした様子も確認されました。造成の客土中からは、近隣の大名屋敷地、特に筑前福岡藩黒田家ゆかりの陶磁器･土器、瓦などの遺物が多量に見つかりました。外部から持ち込まれたとするならば、災害後の瓦礫の後始末を兼ねた斜面地の土地造成のひとつの実態と言えるでしょう。また、旗本屋敷の空間配置や構造は文献史料や絵図史料にはほとんど残されておらず、未だ明らかにはなっていません。旗本屋敷のほぼ全体を発掘調査した例は現時点で極めて少なく、今回の調査で江戸時代の旗本の居住実態を具体的に明らかにすることにより、江戸時代研究に資する重要な成果が得られました。

また、旗本屋敷拝領以前の中世後期～近世初頭期の遺構･遺物も発見され、地形改変の過程と土地利用が明らかになりました。さらに、自然堆積層や盛土造成土中には、縄文時代から中世前期の遺物が含まれていました。調査地周辺に古代以前の遺跡の存在がうかがえる資料の発見は、都心部の知られざる歴史をひもとく糸口となると言えるでしょう。

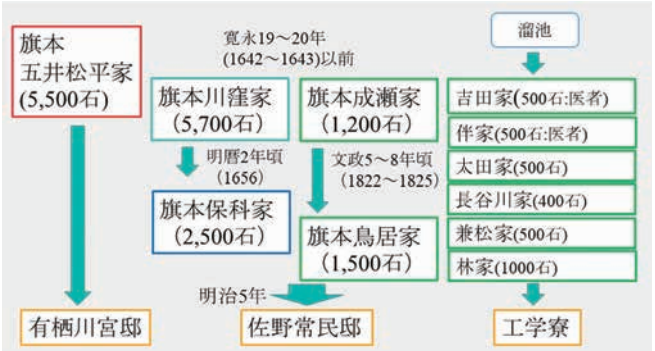




（１）寛永19～20年（1642～43）頃　（２）延宝年中（1673～81）



（３）明治16年（1882）



４　史料からみた拝領者の移り変わり

出典：（1）『（江戸全図）』寛永19～20年（1642～42）頃[部分]　臼杵市教育委員会所蔵　（2）『御府内往還其外沿革図書』四、延宝年中（1673～81）[部分]、国立国会図書館デジタルコレクション　（3）『五千分一東京図測量原図』明治16年（1882）[部分]　国土地理院所蔵

中世から近世初頭の調査―徳川家康入府前のすがた―

調査地周辺では、南東に隣接する溜池遺跡で中世の水田跡が見つかっている他に中世の遺構・遺物はほとんど見つかっておらず、今回の調査で地表面から約３m 下で江戸時代より古い中世の遺構や遺物が検出されたことはまったくの想定外でした。これらは、徳川家康入府以前の土地利用状況を知る上で重要な発見と言えます。

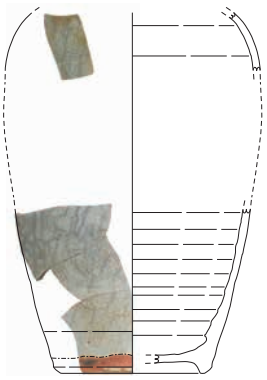
F・H 区では溜池に向かって落ち込む谷の落ち際を段切り（削平）して平坦な地面を造成し、掘立柱建ての建物跡などの施設が形成されていました（図 5）。このほか検出された遺構には竪穴状遺構、井戸、墓（図８）などがあり、中世段階における斜面地での生活空間の一端を示すものと言えます。

遺構やその周辺の盛土層からは中世前期から近世初頭（13 世紀頃から 17 世紀初頭）までの幅広い時期の遺物が見られましたが、その主体を占めるのは中世末から近世初頭（16 世紀から 17 世紀初頭）の所産でした。検出された遺構もその頃に形成され、中世から近世への移行期の様相を示すものであると考えられます。



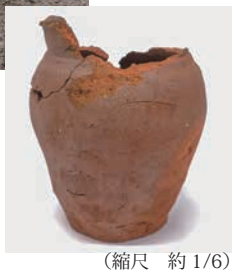


5　谷の落ち際に沿って並ぶ遺構群
上：H-2区北西7面全景・北西から
下：F-1区南側7面全景・西から



6　中世前期の陶磁器
青白磁刻花紋梅瓶（中国　13～14世紀前半・縮尺1/5）





（縮尺　約 1/6）



7　中世末～近世初頭の陶磁器土器（1338号遺構）

8　中世末～近世初頭の火葬墓
（2831号遺構）

小型の壺の中に、火葬された大人の人骨が納められていました。壺は常滑産で、当時蔵骨器（骨壺）として良く使用されていました。形の特徴から、16 世紀後半から 17 世紀前半にかけて造られたものと考えられます。

旗本屋敷地の調査 ―旗本屋敷の空間と暮らし―

■旗本成瀬家－旗本鳥居家屋敷跡の調査（F-1・H 区）

調査地の斜面上方は、旗本成瀬家－旗本鳥居家の屋敷にあたります。西側（F-1 区）が庭園空間、東側（H 区）が屋敷空間と考えられます。庭園空間からは池跡・土蔵基礎・地下室など、屋敷空間からは礎石建物跡などが検出されています。



9　屋敷境の様子と移り変わり（西から）

成瀬家－鳥居家と川窪家－保科家の屋敷境は、調査開始当初は調査地に残っていた段差に設けられた石垣（図 26）のあたりと考えていましたが、この崖面と石垣は明治初頭に築かれたことがわかり、その約 1.5m 北寄りから古い石垣（図版 10 中ア）が現れました。段上の成瀬家・鳥居家の屋敷地南端近くには大型の土坑が連続して掘られており、中には破損した陶磁器や木製品、瓦などが大量に捨てられていました。



10　古い石垣（3390 号・上：南から、左上：南西から）

「間知石（けんちいし）」と呼ばれる四角錐や四角錐台の石を1段ないし2段組み合わせた構造。途中には幅 0.5m 程の北側の屋敷地へと抜ける通路状の空間が設けられていました。



11　大型の礎石建物跡（建物跡 1・北西から）

成瀬家の母屋（おもや）の南側を構成すると考えられる礎石建ての建物基礎。寛政 10 年（1794）の火災で焼失したのち、礎石の一部は抜き取られ、発生した大量の瓦礫処理を兼ねて嵩上げされ整地されていました。

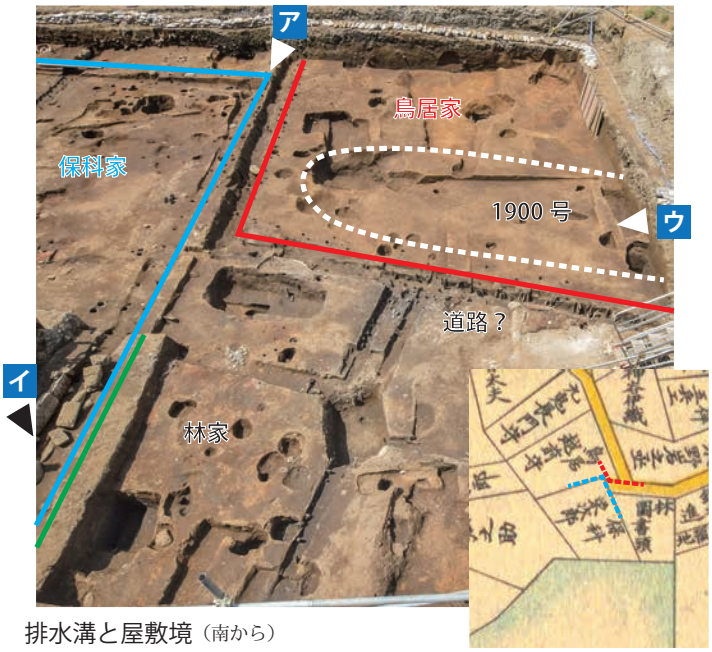


12　土蔵（どぞう）基礎（464 号遺構・西から）

母屋と同時期の土蔵の基礎。間知石積みの基礎土台の上に、漆喰（しっくい）壁の一部が残った状態で検出されました。平面規模は約 5.2m × 4.2 m、重い建物の基礎土台は非常に堅牢に造られますが、464 号遺構では石組の下に細かく砕いた瓦を敷き詰め、さらにその下には大型の円礫を根石として 2 ～ 3 個ずつ固めて埋めるなど、基礎土台の強度を増す試みが行われていました。しかし、この土蔵の下には埋め戻された大型の地下室（750 号）があったためか、強固な根固めにもかかわらず基礎石組の一部は沈み、歪んでいました。

■旗本川窪家－旗本保科家屋敷跡の調査（F-2・G 区）

調査地南側の斜面下方は、旗本川窪家―旗本保科家の屋敷地にあたります。石組溝や木組溝などの排水遺構に囲まれた中に、礎石や土間状遺構など、屋敷建物に関わる遺構が多く検出されました。調査地南東側では大型の素掘りの溝（図 14 中ウ）が東西方向に延びており、屋敷境に設けられた区画施設である可能性があります。



13　排水溝と屋敷境（南から）

調査地南東で見つかった複数の木組溝は、絵図に見られる屋敷境に近い形で延びていました。溝を境にして遺構密度も大きく異なっていることから、これらの溝が屋敷境に設けられた地境の役割を果たしていた可能性が高いと考えられます。また、低地の埋立地では雨水処理が必要となるため、排水施設でもある木組溝が多く作られたと考えられます。888 号木組溝（ア）は、造成に伴い 801 号石組溝（イ）に作り変えられ、屋敷の居住者が入れ替わった後も継続して使用されていたと考えられます。（図出典：『御府内往還其外沿革図書』四、文久元年（1860）[部分] に一部加筆　国立国会図書館デジタルコレクション）





14　屋敷境付近の大型溝状遺構
（1900号遺構・東から）

下層の 3 面から検出された長さ 9m 以上、幅 2 ～ 3 mの堀のような大型遺構で、17 世紀半ばから後半の遺物が捨てられていました。川窪家から保科家に移り変わった頃に機能していたと考えられます。



15　埋められたイヌ（3704号遺構・南西から）

石垣の前から出土した 2 体のイヌの全身骨。今回の調査ではイヌやネコの全身骨が 15 体見つかっています。屋敷境に集中することから、意図的に敷地の片隅に埋められたと考えられます。ペットとして愛玩されていたのでしょう。（保科家：18 世紀）



16　城のミニチュアキット
（966 号遺構ほか）

城の櫓や土塀をかたどった京焼陶器のミニチュアがまとまって出土しました。盆景（箱庭）を制作するキットと考えられます。



17　胞衣納めの儀礼（1418号遺構・南から）

胞衣とは、出産に続けて後産で出てくる羊膜や胎盤などの総称です。産まれた子供の健やかな成長を願い、合わせ口にした素焼きの皿の中に胞衣を収め、母乳の出がよくなるよう祈願した徳利とともに、建物周りの土中に丁重に埋めていました。（保科家：18 世紀末～ 19 世紀前半）

旗本屋敷地の調査―屋敷地の整備―

江戸時代以前の調査地は自然地形そのままの斜面地でしたが、旗本拝領後は、広い屋敷地＝平坦面を確保するために谷を埋め立てて造成されました（図 18）。「火事と喧嘩は江戸の華」の言葉どおり、江戸市中では頻繁に起こる火事で屋敷が類焼することも多く、その度に焼けた瓦や建材などの焼土や瓦礫を敷地内に敷き均したり、敷地内に掘った穴の中にまとめて廃棄したりなどの火災処理を行ったため、地盤が少しずつ嵩上げされました（図 19）。このような土地の造成や整地の痕跡は、調査地内の土層断面で確認することができます。



18　土地造成の痕跡（G-1区南側・西から）

調査地の南東端の G-1・3 区では、旗本拝領直後の江戸時代初期に溜池を埋め立てた様子が確認されました。ローム土や砂が混ざった土を何層にも重ねて谷を埋め、傾斜を解消して屋敷地を造成したことが明らかになりました。



19　火災と整地の痕跡（G-1区北側・南から）

火災や居住者の変更などによる建物の建て替えに伴い、屋敷地内では度々整地が行われました。その度に地盤は嵩上げされていき、写真の地点では江戸前期から幕末にかけての約 250 年間で標高が約 1 m高くなっています。

旗本屋敷地の調査―福岡藩邸の瓦礫のなぞ―

成瀬家－鳥居家の屋敷地内には、大火に伴う焼土や焼けた瓦が大量に廃棄された土坑（瓦溜）や造成層が複数ありますが、とりわけ寛政 6 年（1794）・嘉永 3 年（1850）の大火による被害は甚大で、推定 100t 以上の瓦が廃棄されました。瓦の中には拝領者（はいりょうしゃ）以外の家紋を象った瓦（図 22・ク）が多数含まれ、その 9 割以上を筑前福岡藩黒田家の瓦が占めます。東京の江戸遺跡では類例の数少ない福岡産のやきもの（図 22）を多く伴うことから、何らかの理由で近隣の黒田家江戸藩邸等の被災瓦礫の処理を兼ねた埋立材として当屋敷内に持ち込まれたものと考えられます。





20　発見された家紋瓦と関連大名屋敷

出典：「麹町永田町外櫻田絵図（江戸切絵図）」尾張屋板・万延元年（1860）国会図書館デジタルコレクションを一部加工

21　被災瓦の処理（2100号遺構ほか・東から）


ア


オ


イ


カ


ウ


エ


キ


ク


ケ

22　筑前福岡藩黒田家の国元のやきものと瓦

磁器須恵焼（ア）、高取・小石原系陶器（イ）、「宗七焼」を含む福岡産の茶道用土器（ウ）、「宗七」の刻印（エ）、福岡の瓦工の刻印を持つ瓦（オ・カ）、黒田家家紋（定紋）白餅紋鬼瓦（キ・縮尺 1/8）、黒田家家紋（裏紋）藤巴紋軒丸瓦（ク）、藤巴紋等をあしらった海鼠塀（なまこべい）の竪瓦（たてがわら）（ケ）。

佐野常民邸跡の調査

明治時代に入ると、霞ヶ関・永田町周辺の大名屋敷や武家屋敷地は中央官庁、外国公館、皇族や政府要人の邸宅地へと移り変わります。調査区一帯には「三年町（さんねんちょう）」と町名が付き、有栖川宮邸や大久保利通邸、大木喬任邸が建ち並んでいました。調査区の主要２区画は明治５年（1872）、元老院議長を務め日本赤十字社や日本美術協会の創設に関わった佐野常民（1823-1902）の邸宅となります。佐野邸が描かれた明治 16 年（1882）の地図からは、敷地内に屋敷建物の他に池や井戸があることがわかります（図 23）。

調査では、地図に近い位置から池跡（図 25）や井戸跡（図 24）が発見されました。池の上面からは近代の瓦や陶磁器が出土していますが、池の底からは江戸時代後期の遺物も出土しているため、池自体は江戸時代に造られたものと推測されます。また、地図に描かれた邸宅の形状も、主屋とは別に道沿いに長屋のような建物が見られるなど、江戸時代の武家屋敷の構造と良く似ています。明治初期には政府省庁の建物や役人用の住宅が足りず旗本・御家人屋敷をそのまま転用する例が多くあり、佐野家も旗本鳥居家の屋敷をそのまま受け継いで使っていた可能性が考えられます。



23　明治16年頃の調査地周辺
出典：『五千分一東京図測量原図』明治16年（1882）［部分］国土地理院所蔵に加筆



25　地図に描かれた池（400号遺構）
池は後世の土地造成で大きく削られていましたが、水漏れ防止のために池底に貼られた粘土や、護岸の景石や玉砂利が残っていました（写真左上）。池周辺には複数の不整形の穴が見つかっており、池の周りに美観をもたらせた植栽（樹木）の痕と考えられます。



24　地図に描かれた井戸（815号遺構）
地図に描かれた３基の井戸のうち、真ん中の位置にあたる井戸です。
江戸時代の井戸は大型の桶のような木製の井戸枠を接いで用いるものが多く、発見された井戸も、屋敷の建物とともに明治以降もそのまま使われていたようです。



26　現存していた石垣（790号遺構）
佐野邸は旗本鳥居家・保科家の２つの土地を受け継いでいますが、両家の境界であった位置に新たな石垣を築き直し、階段状に土地を段切りして上下２段の平坦面を造成しています。明治 16 年地図（図 23）では石垣下南方に「畑」の表記が確認できます。段差法面の養生とともに敷地内の土地利用を明確に区画する意図があったと考えられます。石垣は佐野邸無き後も、改築され現代まで残されていました。

SUMMARY

Nagata-cho 1-Chome Site III

The Nagata-cho 1-chome Site (Chiyoda-Ward Site No.37) is located in the center of the government district where the National Diet Building, the Prime Minister's Office of Japan and other major Japanese government office are built up. The site is located on the slope of a small valley at the edge of the Kojimachi Table on the eastern edge of Musashino plateau (Shimo-Sueyoshi Terrace), and on the south side of the site.

The valley line of the "Tameike Pond", which was man-made pond created in a pre-existing valley between the end of the Sengoku (Warring States) period and the beginning of the Edo period, extends to the south of the site. In the Edo period, the area around the Nagata-cho 1-Chome Site was occupied by the estates of hatamoto retainers and was known as "Toranogomon-nai Shinmichi".
Two excavation surveys have been conducted at the Nagatacho 1-chome Site in the past. The latest third excavation survey was conducted on the southeastern half of the Site, covering an area of 2,968 m^2, and was carried out in connection with a project to develop New buldings of Cabinet Office, Government of Japan.

The excavation area was used as mid- to high-ranking Hatamoto residence (two main sections, a total of four sections), with an stipend of 1,000 to 5,000 koku. After the Meiji Restoration, the site was occupied by the mansion of Count Sano Tsunetami (a high-ranking official in the new government,founder of the Japanese Red Cross and the Japan Art Association). Then at the end of the Meiji era, the site was subdivided into commercial and residential areas, and up to the present.

The survey yielded a total of 4,000 features and artifacts in over 1,000 starege box, from the Jomon period and Modern periods. The features from the Edo period, which is the focus of the reserch,consist of building ruins, storehouse, ditch, pond and planting, stonewall and stonework gully, seller, buried dogs and cats, buried placenta bowl features are containing baby's afterbirth (placental expulsion).

The artifacts consist of porcelain, ceramic ware, pottery, clay objects, tiles, wooden objects, coins, metal objects, stone objects and glass objects from the Premodern and Modern periods, are thought to be related to the lives of hatamoto retainers. In addition many artifacts closely related to neaby Mansion of Daimyo, particularly the Kuroda family of Fukuoka Domain, were discovered. The remains are many roof tiles that were burned in the fire, suggesting that they were used in embankment construction work to dispose of the debris from the disaster.

Because the spatial layout and structure of hatamoto residences have yet to be clarified, as almost no written or pictorial historical materials remain and there are currently very few examples of hatamoto residences being excavated in almost their entirety. The results of this surevey will provide important results that will contribute to research into the Edo period by concretely clarifying the actual living conditions of hatamoto in the Edo period.

Before the Hatamoto residence was built, remains and artefacts from the late Middle Ages to the early modern period were also discovered, revealing the process of topographical change and land use. Additionally, artifacts from the Jomon period, Yayoi period, Kofun period, Nara-Heian period, and early medieval periods were found scattered among the natural sedimentary layers and fill soil, suggesting the existence of pre-ancient ruins in the surrounding area.

序　言

千代田区永田町一丁目遺跡は、国会議事堂・首相官邸などが建ち並ぶ国政の中心部・永田町に位置しています。平成 22・23 年および平成 27 年に行われた発掘調査に続き、令和３年から５年にかけて第三次調査として内閣府新庁舎（仮称）整備等事業に伴う発掘調査を行いました。

遺跡は武蔵野台地東端にあたる麹町台地の南側斜面に立地しており、遺跡の南側には戦国時代末期から江戸時代初頭に作られた「溜池」が広がっています。遺跡周辺は江戸時代に「虎御門内新道（とらのごもんないしんみち）」と呼ばれた旗本屋敷地であり、調査地点には主に４家の旗本が屋敷を構えていました。発掘調査では、それぞれの屋敷地内で池や土蔵、建物跡といった武家屋敷に伴う遺構の他に、大規模火災で発生した大量の焼土や被災瓦を埋め立て、屋敷地を嵩上げした様子も確認されました。江戸の街を幾度も襲った大火を乗り越えた人々が残した痕跡は、災害が多発する現代の日本においても、貴重な学びとすることができるでしょう。

今回の調査成果が学術研究の一助となり、地域の歴史を解明するための資料として多くの方々に活用されるとともに、本報告書が埋蔵文化財への理解を深める役割の一端を担うことができれば幸いです。

本報告書の刊行にあたり、ご協力とご指導をいただきました内閣府・国土交通省・東京都教育庁・千代田区教育委員会・永田町 PFI 株式会社・清水建設株式会社に厚くお礼を申し上げます。また、ご教示をいただいた研究者の皆様、ご協力をいただきました地元住民・関係者の皆様方に、心より感謝申し上げます。

令和７年９月

公益財団法人　東京都教育支援機構
理事長　　坂 東　眞理子

例　言

1　本書は、内閣府新庁舎（仮称）整備等事業に伴う永田町一丁目遺跡（千代田区 No.37 遺跡）の発掘調査報告書（東京都埋蔵文化財センター調査報告第 393 集）である。なお、本報告は３分冊構成となっており、各分冊の主な掲載内容は以下のとおりである。

第１分冊：遺跡の概要、調査の概要、遺跡の位置と環境、基本層序、検出された遺構、縄文時代から古代の遺物

第２分冊：中世・近世・近代の遺物、文献史料調査、自然科学分析、調査の成果と課題

第３分冊：遺物観察表・集計表、遺構一覧表、写真図版

2　発掘調査事業は清水建設株式会社からの委託を受け、公益財団法人東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センターが実施した。

3　試掘調査は千代田区教育委員会により、平成 20 年９月 24 日・25 日に実施された。

4　所在地：東京都千代田区永田町一丁目４番・５番

5　発掘調査面積：2,968㎡　(調査対象面積：2,968㎡)

6　調査期間　　令和３年７月１日～令和５年５月 12 日

一次整理期間　　令和３年８月１日～令和６年４月 13 日

二次整理・報告書作成期間　令和５年４月１日～令和７年７月 31 日

7　本事業における事業者との事業調整等は、東京都教育庁地域教育支援部管理課が担当・指導した。

課長代理　　鈴木徳子

埋蔵文化財担当　　平田　健（～令和５年３月 31 日・令和６年４月１日～）

武内　啓（令和５年４月１日～令和６年３月 31 日）

8　調査担当者

東京都埋蔵文化財センター永田町一丁目３分室

調査研究部課長代理　大西雅也（～令和３年３月 31 日）

合田恵美子（令和４年４月１日～）

主任調査研究員　合田恵美子（～令和４年３月 31 日）

大八木謙司（令和４年３月１日～）

五十嵐　彰（令和５年３月１日～３月 31 日）

調査研究員　佐藤亮太（令和３年７月１日～令和７年５月 31 日）

堀　恭介（令和４年７月 19 日～９月９日）

石﨑俊哉（令和６年８月１日～９月 30 日）

調査協力　株式会社ジオダイナミック

株式会社ヒューマンテック

生田建設株式会社

トキオ文化財株式会社

テイケイトレード株式会社

株式会社ラクロ

9　本報告書の執筆は、調査概要、第Ⅰ章～第Ⅵ章、第Ⅸ章については大八木・佐藤・合田・石﨑・及川良彦（東京都埋蔵文化財センター）が行い、文責は各文末に付した。第Ⅷ章については、各節の冒頭に執筆者を記した。編集は大八木・佐藤・合田が行った。

10　発掘調査の写真撮影は大八木・佐藤・合田・堀・五十嵐が、遺物写真撮影は大八木の指導の下株式会社ジオダイナミックが行った。赤外線写真撮影の一部は、黒田恵之（東京都埋蔵文化財センター）が行った。

11　出土金属製品・木製品の保存処理及び出土陶器・磁器・土器・瓦の理化学分析は、長佐古真也（東京都埋蔵文化財センター）が行った。

12　出土木材の樹種同定・年輪解析は、鈴木伸哉氏（昭和女子大学・元東京都埋蔵文化財センター）が行った。

13　出土貝類遺体の同定・分析は、宮本由子（東京都埋蔵文化財センター）が行った。

14　出土文字資料の判読には、渋谷葉子氏（公益財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所）のご教示を得た。

15　本報告に関わる現地指導・分析等委託は、下記のとおりである。

（1）文献史料調査　渋谷葉子氏（公益財団法人徳川黎明会徳川林政史研究所）

（2）出土動物遺体同定・分析　山根洋子氏（港区立郷土歴史館）

（3）出土人骨の形質人類学的鑑定　梶ヶ山眞里氏（国立科学博物館生命史研究部）

（4）石材利用及び石質同定　柴田　徹氏（有限会社考古石材研究所）

（5）堆積土層に関する自然科学分析　パリノ・サーヴェイ株式会社

16　出土遺物および発掘調査・整理に関わる図面・写真等記録類は、東京都教育委員会で保管している。また、出土人骨は分析・鑑定後、国立科学博物館筑波研究施設で収蔵・保管している。

17　本調査については以下で概略を報告しているが、本書の刊行をもって正式報告とする。

佐藤亮太 2022「遺跡だより 132　千代田区永田町一丁目遺跡」『たまのよこやま』130

合田恵美子 2023「千代田区永田町一丁目その 3 地区（永田町一丁目遺跡）」『東京都埋蔵文化財センター年報』42

合田恵美子 2024「千代田区永田町一丁目その 3 地区（永田町一丁目遺跡）」『東京都埋蔵文化財センター年報』43

佐藤亮太 2025「千代田区永田町一丁目遺跡」『第 50 回東京都遺跡調査・研究発表会』発表要旨

大八木謙司 2025「千代田区永田町一丁目その 3 地区（永田町一丁目遺跡）」『東京都埋蔵文化財センター年報』44

18　本文用例等

・遺構番号は第 2 次調査に続いて 300 番から付番し、調査区・時代・種別による区別は行わず、調査区全体で検出順に通し番号とした。

・土層の土色や含有物の面積割合、遺物の色調等の標記には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』（日本色研事業株式会社発行　2005 年）を用いた。

・各挿図の縮尺及び記号の凡例はそれぞれ図中に示した。図中の方位記号は真北を示す。遺構断

面図中に表記した標高値は T.P.（東京湾平均海面：Tokyo Peil）を基準とした計測値を用いている。単位はメートル表記である。

・調査に伴う測量は、世界測地系平面直角座標系Ⅸ系を基準とした。

・各挿図のトーン、各遺物の計測位置は、後述の凡例のとおりである。

・出土遺物の注記は、遺跡略号「NGT1」の以下に地区名・遺構番号・出土層位等を付して表記している。

19　本報告書の著作権（日本国著作権法第 21 条から第 28 条までに規定された権利）、及び編集著作権（著作権法第 12 条第 1 項）は、公益財団法人東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センターが保有する。

20　発掘調査および整理・報告書作成作業に関して、下記の方々と機関にご指導・ご協力を賜った。記して、深謝いたします。（五十音順、敬称略）

相場　峻、石井和帆、石神裕之、井畝良太、市川浩文、岩浪雛子、遠藤啓介、大西智子、小川　望、小野田　恵、加藤裕一、河口綾香、金馬義郎、藏冨士　寛、栗城穣一、黒住耐二、後藤宏樹、小林謙一、小南裕一、近藤晋一郎、坂上和弘、佐々木あきつ、佐藤桜花、新免歳靖、杉山朝香、鈴木裕子、高山慶太郎、田中　暁、都築由理子、鶴間正昭、手島優子、豊崎晃史、仲光克顕、中山なな、濱口　皓、平田博之、藤原友子、堀内秀樹、松田　繁、松田奈穂子、水本和美、宮崎博司、武笠多惠子、森山華那、両角まり、諸田謙次郎、安田美哉、山下啓之、山田暁也、吉松良徳
臼杵市教育委員会、蒲郡市博物館、北九州市教育委員会、九州歴史資料館、鞍手町、公益財団法人三井文庫、国土交通省、国土交通省国土地理院、国立国会図書館、国立科学博物館、佐野常民と三重津海軍所跡の歴史館、須恵町教育委員会、須恵町歴史民俗資料館、須恵町美術センター久我記念館、千代田区教育委員会、千代田区立日比谷図書文化館、東京都公文書館、東京都教育委員会、内閣府、永田町 PFI 株式会社、8 号館 PFI 株式会社、福岡市、福岡市埋蔵文化財センター、福岡市博物館、宗像市教育委員会

凡　例

1　挿図の縮尺　図中に示したが、原則として以下の通りである。

・遺構全体図 1/250、遺構割図 1/100、個別遺構図 1/40、遺物出土状況図 1/20・1/10

・縄文土器 1/3、弥生土器・古墳時代から古代の遺物 1/4

2　各挿図のトーン表示

石・礎石　木材・木製品　漆喰　瓦・遺物範囲

粘土範囲　焼土範囲　火山灰範囲　硬化範囲

3　各挿図の線種

上端線　掘込線　中端線　分遺構線　下端線　分層線　重複遺構（より新しいもの）

オーバーハング部　推定線　攪乱

※第 2 分冊掲載図版の凡例については、第 2 分冊凡例に掲載

目　次

【第 1 分冊】
永田町一丁目遺跡の調査
SUMMARY
序言
例言　凡例
目次
Ⅰ　発掘調査の概要
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．調査の目的と方法 …… 1
　3．調査経過 …… 5
Ⅱ　遺跡の位置と環境
　1．地理的環境 …… 7
　2．歴史的環境 …… 9
　3．既往調査の概要 …… 15
Ⅲ　基本層序
　1．自然堆積層の堆積状況 …… 17
　2．盛土の堆積状況と遺構確認面について …… 22
Ⅳ　検出された遺構
　1．近代 …… 39
　　1）F-1 区 …… 39
　　2）G-1 区 …… 40
　　3）H-2 区 …… 60
　　4）Ⅰ区 …… 73
　2．近世（旗本屋敷拝領以降） …… 74
　　1）F-1 区 …… 74
　　2）Ⅰ区 …… 205
　　3）H-1 区 …… 209
　　4）H-2 区 …… 230
　　5）G-1 区 …… 287
　　6）G-2 区 …… 301
　　7）F-2 区 …… 330
　　8）G-3 区 …… 345
　3．中世（旗本屋敷拝領以前） …… 359
　　1）F-1 区 …… 360
　　2）H-1 区 …… 381

3）H-2 区 …… 387
Ⅴ　縄文時代から古代の遺物 …… 397
1．縄文時代の遺物 …… 397
1）縄文土器 …… 397
2．弥生時代の遺物 …… 398
1）弥生土器 …… 398
3．古墳時代から古代の遺物 …… 402
1）須恵器 …… 402
2）土師器 …… 408
3）埴輪 …… 408
報告書抄録
【第２分冊】
Ⅵ　中世・近世・近代の遺物
1．中世（旗本屋敷拝領以前）の遺物
1）陶磁器土器 …… 1
2）瓦 …… 5
3）石製品 …… 5
2．時期不詳の遺物（土錘） ……14
3．近世・近代の遺物
1）陶磁器土器 ……15
2）瓦 …… 201
3）土製品 …… 262
4）金属製品 …… 282
5）金属加工関連遺物 …… 291
6）銭貨 …… 292
7）木製品 …… 298
8）骨角貝製品 …… 312
9）ガラス製品 …… 315
10）石製品 …… 324
Ⅶ　文献史料の調査　永田町一丁目遺跡における江戸時代の土地利用 …… 345
Ⅷ　自然科学分析
1．永田町一丁目遺跡第３次調査における層序と地形改変 …… 363
2．永田町一丁目遺跡の出土人骨 …… 385
3．永田町一丁目遺跡出土の動物遺体 …… 388
4．千代田区永田町一丁目遺跡第３次調査の貝類遺体 …… 406
5．千代田区永田町一丁目遺跡から出土した遺構構成材・木製品の樹種 …… 422
6．永田町一丁目遺跡第３次調査出土瓦の元素組成に基づく分類の検討 …… 440

Ⅸ　調査の成果と課題
　1．近代 …… 451
　2．近世 …… 451
　3．中世から近世初頭 …… 472
主要参考文献 …… 476

【第３分冊】
近世遺物観察表 …… 1
出土遺物集計表 …… 89
遺構一覧表 …… 119
遺物図版 …… 195
遺構図版 …… 225

挿　図　目　次

（巻頭概要）

1　永田町一丁目遺跡周辺の空中写真…… i
2　19 世紀初頭頃の遺跡周辺 …… i
3　永田町一丁目遺跡第３次調査地点の全景写真…… i
4　史料からみた拝領者の移り変わり…… ii
5　谷の落ち際に沿って並ぶ遺構群…… iii
6　中世前期の陶磁器…… iii
7　中世末～近世初頭の陶磁器土器…… iii
8　中世末～近世初頭の火葬墓…… iii
9　屋敷境の様子と移り変わり…… iv
10　古い石垣 …… iv
11　大型の礎石建物跡 …… iv
12　土蔵基礎 …… iv
13　排水溝と屋敷境 …… v
14　屋敷境付近の大型溝状遺構 …… v
15　埋められたイヌ …… v
16　城のミニチュアキット …… v
17　胞衣納めの儀礼 …… v
18　土地造成の痕跡 …… vi
19　火災と整地の痕跡 …… vi
20　発見された家紋瓦と関連大名屋敷 …… vi
21　被災瓦の処理 …… vii
22　筑前福岡藩黒田家の国元のやきものと瓦 …… viii
23　明治 16 年頃の調査地周辺…… viii
24　地図に描かれた井戸 …… viii
25　地図に描かれた池 …… viii
26　現存していた石垣 …… viii

第 1-1 図　遺跡の位置と調査地点（1/5,000）……2
第 1-2 図　調査区の位置（1/1,500）……3
第 1-3 図　グリッドと調査区割り（1/600）……4
第 1-4 図　遺跡周辺の地形図（1/25,000）……8
第 1-5 図　千代田区内の遺跡地図（1/30,000）…… 10
第 1-6 図　土地利用変遷図 …… 14
第 1-7 図　基本層序セクション位置図 …… 17
第 1-8 図　F-1 区断ち割りトレンチ（1/40）…… 18
第 1-9 図　F-2 区トレンチ１・２（セクション B・C）（1/40）…… 19
第 1-10 図　H-1 区断ち割りトレンチ（セクション D･E）（1/40）…… 20
第 1-11 図　F-1 区基本層序（セクション F）（1/40）…… 23
第 1-12 図　H-1 区基本層序（セクション G）（1/40）…… 25
第 1-13 図　H-2 区１面～３面基本層序（セクション H）（1/40）…… 27
第 1-14 図　H-2 区４面～８面基本層序（セクション I）（1/40）…… 29
第 1-15 図　G-2 区基本層序（セクション J）（1/40）…… 30
第 1-16 図　G-3 区基本層序（セクション K）（1/40）…… 31
第 1-17 図　G-1 区低地トレンチ（セクション L）（1/40）…… 32
第 1-18 図　I 区基本層序（セクション M）（1/120）…… 35
第 1-19 図　I 区基本層序（セクション N）（1/60）…… 36
第 1-20 図　柱状模式図 …… 38
第 1-21 図　近代全体図（1/250）…… 41

第 1-22 図　近代 1 面割図①（1/100）…… 43
第 1-23 図　近代 1 面割図②（1/100）…… 44
第 1-24 図　近代 1 面割図③（1/100）…… 45
第 1-25 図　近代 1 面割図④（1/100）…… 46
第 1-26 図　近代 1 面割図⑤（1/100）…… 47
第 1-27 図　近代 1 面割図⑥（1/100）…… 48
第 1-28 図　近代 1 面割図⑦（1/100）…… 49
第 1-29 図　近代 1 面割図⑧（1/100）…… 50
第 1-30 図　近代 2 面・3 面割図位置図（1/400）…… 51
第 1-31 図　近代 2 面割図①（1/100）…… 52
第 1-32 図　近代 2 面割図②（1/100）…… 53
第 1-33 図　近代 3 面割図①（1/100）…… 54
第 1-34 図　近代面の遺構（1）（1/40）…… 55
第 1-35 図　近代面の遺構（2）（1/6・1/40）…… 56
第 1-36 図　近代面の遺構（3）（1/40）…… 57
第 1-37 図　近代面の遺構（4）（1/40）…… 58
第 1-38 図　近代面の遺構（5）（1/40）…… 59
第 1-39 図　近代面の遺構（6）（1/40）…… 60
第 1-40 図　近代面の遺構（7）（1/80）…… 62
第 1-41 図　近代面の遺構（8）（1/10・1/40）…… 63
第 1-42 図　近代面の遺構（9）（1/120）…… 65
第 1-43 図　近代面の遺構（10）（1/60・1/200）…… 66
第 1-44 図　近代面の遺構（11）（1/80）…… 72
第 1-45 図　近代面の遺構（12）（1/40）…… 73
第 1-46 図　1-1 面全体図（1/250）…… 77
第 1-47 図　1-1 面割図①（1/100）…… 79
第 1-48 図　1-1 面割図②（1/100）…… 80
第 1-49 図　1-1 面割図③（1/100）…… 81
第 1-50 図　1-1 面割図④（1/100）…… 82
第 1-51 図　1-1 面割図⑤（1/100）…… 83
第 1-52 図　1-1 面割図⑥（1/100）…… 84
第 1-53 図　1-1 面割図⑦（1/100）…… 85
第 1-54 図　1-1 面割図⑧（1/100）…… 86
第 1-55 図　1-1 面割図⑨（1/100）…… 87
第 1-56 図　1-1 面割図⑩（1/100）…… 88
第 1-57 図　1-1 面割図⑪（1/100）…… 89
第 1-58 図　1-2 面全体図（1/250）…… 91
第 1-59 図　1-2 面割図①（1/100）…… 93
第 1-60 図　1-2 面割図②（1/100）…… 94
第 1-61 図　2 面全体図（1/250）…… 95
第 1-62 図　2 面割図①（1/100）…… 97
第 1-63 図　2 面割図②（1/100）…… 98
第 1-64 図　2 面割図③（1/100）…… 99
第 1-65 図　2 面割図④（1/100）…… 100
第 1-66 図　2 面割図⑤（1/100）…… 101
第 1-67 図　2 面割図⑥（1/100）…… 102
第 1-68 図　2 面割図⑦（1/100）…… 103
第 1-69 図　2 面割図⑧（1/100）…… 104
第 1-70 図　3-1 面全体図（1/250）…… 105
第 1-71 図　3-1 面割図①（1/100）…… 107
第 1-72 図　3-1 面割図②（1/100）…… 108
第 1-73 図　3-1 面割図③（1/100）…… 109
第 1-74 図　3-1 面割図④（1/100）…… 110
第 1-75 図　3-1 面割図⑤（1/100）…… 111
第 1-76 図　3-1 面割図⑥（1/100）…… 112
第 1-77 図　3-1 面割図⑦（1/100）…… 113
第 1-78 図　3-1 面割図⑧（1/100）…… 114
第 1-79 図　3-1 面割図⑨（1/100）…… 115
第 1-80 図　3-1 面割図⑩（1/100）…… 116
第 1-81 図　3-2 面全体図（1/250）…… 117
第 1-82 図　3-2 面割図①（1/100）…… 119
第 1-83 図　3-2 面割図②（1/100）…… 120
第 1-84 図　3-2 面割図③（1/100）…… 121
第 1-85 図　3-2 面割図④（1/100）…… 122
第 1-86 図　3-2 面割図⑤（1/100）…… 123
第 1-87 図　3-2 面割図⑥（1/100）…… 124
第 1-88 図　3-2 面割図⑦（1/100）…… 125
第 1-89 図　3-2 面割図⑧（1/100）…… 126
第 1-90 図　3-3 面全体図（1/250）…… 127
第 1-91 図　3-3 面割図①（1/100）…… 129
第 1-92 図　3-3 面割図②（1/100）…… 130
第 1-93 図　3-3 面割図③（1/100）…… 131
第 1-94 図　3-3 面割図④（1/100）…… 132
第 1-95 図　3-3 面割図⑤（1/100）…… 133
第 1-96 図　3-3 面割図⑥（1/100）…… 134
第 1-97 図　3-4 面割図①（1/100）…… 135
第 1-98 図　4 面全体図（1/250）…… 139
第 1-99 図　4 面割図①（1/100）…… 141
第 1-100 図　4 面割図②（1/100）…… 142
第 1-101 図　4 面割図③（1/100）…… 143
第 1-102 図　4 面割図④（1/100）…… 144
第 1-103 図　4 面割図⑤（1/100）…… 145
第 1-104 図　4 面割図⑥（1/100）…… 146
第 1-105 図　4 面割図⑦（1/100）…… 147
第 1-106 図　4 面割図⑧（1/100）…… 148
第 1-107 図　4 面割図⑨（1/100）…… 149
第 1-108 図　5 面全体図（1/250）…… 153
第 1-109 図　5 面割図①（1/100）…… 155
第 1-110 図　5 面割図②（1/100）…… 156
第 1-111 図　5 面割図③（1/100）…… 157
第 1-112 図　5 面割図④（1/100）…… 158
第 1-113 図　5 面割図⑤（1/100）…… 159
第 1-114 図　5 面割図⑥（1/100）…… 160
第 1-115 図　5 面割図⑦（1/100）…… 161
第 1-116 図　5 面割図⑧（1/100）…… 162
第 1-117 図　6 面全体図（1/250）…… 163
第 1-118 図　6 面割図①（1/100）…… 165
第 1-119 図　6 面割図②（1/100）…… 166
第 1-120 図　6 面割図③（1/100）…… 167
第 1-121 図　6 面割図④（1/100）…… 168
第 1-122 図　6 面割図⑤（1/100）…… 169
第 1-123 図　6 面割図⑥（1/100）…… 170

第 1-124 図　F-1 区 1 面の遺構（1）（1/80）…… 171
第 1-125 図　F-1 区 1 面の遺構（2）（1/60）…… 172
第 1-126 図　F-1 区 1 面の遺構（3）（1/60）…… 173
第 1-127 図　F-1 区 1 面の遺構（4）（1/40）…… 174
第 1-128 図　F-1 区 1 面の遺構（5）（1/40）…… 175
第 1-129 図　F-1 区 2 面の遺構（1）（1/60）…… 176
第 1-130 図　F-1 区 2 面の遺構（2）（1/60）…… 177
第 1-131 図　F-1 区 2 面の遺構（3）（1/10）…… 179
第 1-132 図　F-1 区 2 面の遺構（4）（1/60）…… 180
第 1-133 図　F-1 区 2 面の遺構（5）（1/60）…… 181
第 1-134 図　F-1 区 2 面の遺構（6）（1/60）…… 182
第 1-135 図　F-1 区 2 面の遺構（7）（1/60）…… 183
第 1-136 図　F-1 区 2 面の遺構（8）（1/60）…… 187
第 1-137 図　F-1 区 2 面の遺構（9）（1/40）…… 188
第 1-138 図　F-1 区 2 面の遺構（10）（1/40）…… 189
第 1-139 図　F-1 区 3-1 面の遺構（1）（1/40）…… 190
第 1-140 図　F-1 区 3-1 面の遺構（2）（1/10）…… 191
第 1-141 図　F-1 区 3-1 面の遺構（3）（1/40）…… 192
第 1-142 図　F-1 区 3-1 面の遺構（4）（1/40）…… 193
第 1-143 図　F-1 区 3-2 面の遺構（1）（1/40）…… 194
第 1-144 図　F-1 区 3-2 面の遺構（2）（1/40）…… 195
第 1-145 図　F-1 区 3-2 面の遺構（3）（1/40）…… 196
第 1-146 図　F-1 区 3-2 面の遺構（4）（1/40）…… 197
第 1-147 図　F-1 区 3-2 面の遺構（5）（1/40）…… 198
第 1-148 図　F-1 区 3-3 面の遺構（1/10・1/40）…… 199
第 1-149 図　F-1 区 4 面の遺構（1/40）…… 200
第 1-150 図　F-1 区 5 面の遺構（1/40）…… 201
第 1-151 図　F-1 区 6 面の遺構（1）（1/40）…… 202
第 1-152 図　F-1 区 6 面の遺構（2）（1/40）…… 203
第 1-153 図　I 区の遺構（1）（1/80）…… 207
第 1-154 図　I 区の遺構（2）…… 209
第 1-155 図　I 区の遺構（3）（1/40）…… 210
第 1-156 図　H-1 区 3-1 面の遺構（1）（1/80）…… 213
第 1-157 図　H-1 区 3-1 面の遺構（2）（1/40・1/80）214
第 1-158 図　H-1 区 3-2 面の遺構（1）（1/40）…… 216
第 1-159 図　H-1 区 3-2 面の遺構（2）（1/40）…… 219
第 1-160 図　H-1 区 3-2 面の遺構（3）（1/40）…… 220
第 1-161 図　H-1 区 3-2 面の遺構（4）（1/40）…… 221
第 1-162 図　H-1 区 3-2 面の遺構（5）（1/40）…… 222
第 1-163 図　H-1 区 3-3 面の遺構（1）（1/40）…… 224
第 1-164 図　H-1 区 3-3 面の遺構（2）（1/40）…… 225
第 1-165 図　H-1 区 3-3 面の遺構（3）（1/40）…… 226
第 1-166 図　H-1 区 3-3 面の遺構（4）（1/40）…… 227
第 1-167 図　H-1 区 4 面の遺構（1）（1/40）…… 229
第 1-168 図　H-1 区 4 面の遺構（2）（1/40）…… 230
第 1-169 図　H-1 区 4 面の遺構（3）（1/40）…… 231
第 1-170 図　H-1 区 5 面の遺構（1）（1/40）…… 232
第 1-171 図　H-1 区 6 面の遺構（1）（1/40）…… 233
第 1-172 図　H-1 区 6 面の遺構（2）（1/40）…… 234
第 1-173 図　H-2 区 1 面の遺構（1）（1/80）…… 237
第 1-174 図　H-2 区 1 面の遺構（2）（1/80）…… 238
第 1-175 図　H-2 区 1 面の遺構（3）（1/400）…… 239
第 1-176 図　H-2 区 1 面の遺構（4）（1/15）…… 240
第 1-177 図　H-2 区 1 面の遺構（5）（1/40）…… 241
第 1-178 図　H-2 区 1 面の遺構（6）（1/40）…… 242
第 1-179 図　H-2 区 1 面の遺構（7）（1/40）…… 243
第 1-180 図　H-2 区 1 面の遺構（8）（1/40）…… 244
第 1-181 図　H-2 区 2 面の遺構（1）（1/60）…… 245
第 1-182 図　H-2 区 2 面の遺構（2）（1/60）…… 246
第 1-183 図　H-2 区 2 面の遺構（3）（1/40）…… 248
第 1-184 図　H-2 区 2 面の遺構（4）（1/40）…… 249
第 1-185 図　H-2 区 2 面の遺構（5）（1/3・1/10）… 250
第 1-186 図　H-2 区 3-1 面の遺構（1）（1/60）…… 253
第 1-187 図　H-2 区 3-1 面の遺構（2）（1/60）…… 254
第 1-188 図　H-2 区 3-1 面の遺構（3）（1/40）…… 256
第 1-189 図　H-2 区 3-1 面の遺構（4）（1/40）…… 257
第 1-190 図　H-2 区 3-1 面の遺構（5）（1/40）…… 259
第 1-191 図　H-2 区 3-1 面の遺構（6）（1/40）…… 260
第 1-192 図　H-2 区 3-1 面の遺構（7）（1/10・1/40）261
第 1-193 図　H-2 区 3-1 面の遺構（8）（1/10・1/40）262
第 1-194 図　H-2 区 3-1 面の遺構（9）（1/40）…… 263
第 1-195 図　H-2 区 3-1 面の遺構（10）（1/40）…… 264
第 1-196 図　H-2 区 3-2 面の遺構（1/40）…… 265
第 1-197 図　H-2 区 3-3 面の遺構（1）（1/40）…… 267
第 1-198 図　H-2 区 3-3 面の遺構（2）（1/40）…… 268
第 1-199 図　H-2 区 3-3 面の遺構（3）（1/40）…… 269
第 1-200 図　H-2 区 3-3 面の遺構（4）（1/40）…… 270
第 1-201 図　H-2 区 3-4 面の遺構（1/40）…… 271
第 1-202 図　H-2 区 4 面の遺構（1）（1/40）…… 273
第 1-203 図　H-2 区 4 面の遺構（2）（1/40）…… 274
第 1-204 図　H-2 区 4 面の遺構（3）（1/10・1/40）… 275
第 1-205 図　H-2 区 5 面の遺構（1）（1/40）…… 277
第 1-206 図　H-2 区 5 面の遺構（2）（1/40）…… 278
第 1-207 図　H-2 区 6 面の遺構（1）（1/40）…… 281
第 1-208 図　H-2 区 6 面の遺構（2）（1/40）…… 282
第 1-209 図　H-2 区 6 面の遺構（3）（1/40）…… 283
第 1-210 図　H-2 区 6 面の遺構（4）（1/40・1/80）… 284
第 1-211 図　G-1 区 1-1 面の遺構（1）（1/40）…… 288
第 1-212 図　G-1 区 1-1 面の遺構（2）（1/10・1/40）…… 290
第 1-213 図　G-1 区 1-1 面の遺構（3）（1/40）…… 291
第 1-214 図　G-1 区 2 面の遺構（1/40）…… 294
第 1-215 図　G-1 区 3 面の遺構（1）（1/40）…… 296
第 1-216 図　G-1 区 3 面の遺構（2）（1/40）…… 297
第 1-217 図　G-1 区 3 面の遺構（3）（1/40）…… 298
第 1-218 図　G-1 区 4 面の遺構（1/40）…… 300
第 1-219 図　G-1 区 5 面の遺構（1/40）…… 301
第 1-220 図　G-2 区 1-1 面の遺構（1）（1/6・1/20・1/40）…… 302
第 1-221 図　G-2 区 1-1 面の遺構（2）（1/40）…… 303
第 1-222 図　G-2 区 1-2 面の遺構（1）（1/4・1/6・1/10・1/40）…… 306

第 1-223 図　G-2 区 1-2 面の遺構（2）（1/4・1/6・1/20・1/40）…… 307
第 1-224 図　G-2 区 1-2 面の遺構（3）（1/40）…… 308
第 1-225 図　G-2 区 1-3 面の遺構（1）（1/40）…… 310
第 1-226 図　G-2 区 1-3 面の遺構（2）（1/4）…… 311
第 1-227 図　G-2 区 1-4 面の遺構（1）（1/40）…… 313
第 1-228 図　G-2 区 2 面の遺構（1）（1/4・1/20・1/40）…… 314
第 1-229 図　G-2 区 2 面の遺構（2）（1/40）…… 315
第 1-230 図　G-2 区 3 面の遺構（1）（1/40）…… 317
第 1-231 図　G-2 区 3 面の遺構（2）（1/40）…… 318
第 1-232 図　G-2 区 4 面の遺構（1）（1/40）…… 322
第 1-233 図　G-2 区 4 面の遺構（2）（1/40）…… 323
第 1-234 図　G-2 区 4 面の遺構（3）（1/40）…… 324
第 1-235 図　G-2 区 4 面の遺構（4）（1/40）…… 325
第 1-236 図　G-2 区 4 面の遺構（5）（1/40）…… 326
第 1-237 図　G-2 区 5 面の遺構（1/40）…… 328
第 1-238 図　F-2 区の遺構（1）（1/60）…… 331
第 1-239 図　F-2 区の遺構（2）（1/40）…… 332
第 1-240 図　F-2 区の遺構（3）（1/40）…… 333
第 1-241 図　F-2 区の遺構（4）（1/40）…… 334
第 1-242 図　F-2 区の遺構（5）（1/40）…… 336
第 1-243 図　F-2 区の遺構（6）（1/40）…… 338
第 1-244 図　F-2 区の遺構（7）（1/4・1/20・1/40）　340
第 1-245 図　F-2 区の遺構（8）（1/40）…… 341
第 1-246 図　F-2 区の遺構（9）（1/40）…… 342
第 1-247 図　G-3 区 1 面割図（1）（1/100）…… 346
第 1-248 図　G-3 区 2 面割図（2）（1/100）…… 347
第 1-249 図　G-3 区 3 面割図（3）（1/100）…… 348
第 1-250 図　G-3 区 4 面割図（4）（1/100）…… 349
第 1-251 図　G-3 区 5 面割図（5）（1/100）…… 350
第 1-252 図　G-3 区 1 面の遺構（1/40）…… 352
第 1-253 図　G-3 区 2 面の遺構（1/40）…… 353
第 1-254 図　G-3 区 3 面の遺構（1/40）…… 354
第 1-255 図　G-3 区 4 ・ 5 面の遺構（1/40）…… 355
第 1-256 図　調査区割図 …… 359
第 1-257 図　7 面全体図（1 /250）…… 361
第 1-258 図　7 面割図①（1 /100）…… 363
第 1-259 図　7 面割図②（1 /100）…… 364
第 1-260 図　7 面割図③（1 /100）…… 365
第 1-261 図　7 面割図④（1 /100）…… 366
第 1-262 図　7 面割図⑤（1 /100）…… 367
第 1-263 図　7 面割図⑥（1 /100）…… 368
第 1-264 図　8 面全体図（1 /250）…… 369
第 1-265 図　8 面割図①（1 /100）…… 371
第 1-266 図　8 面割図②（1 /100）…… 372
第 1-267 図　8 面割図③（1 /100）…… 373
第 1-268 図　F-1 区 7 面の遺構（1）（1 /40）…… 375
第 1-269 図　F-1 区 7 面の遺構（2）（1 /40）…… 376
第 1-270 図　F-1 区 7 面の遺構（3）（1 /40）…… 377
第 1-271 図　F-1 区 7 面の遺構（4）（1 /40）…… 378
第 1-272 図　F-1 区 7 面の遺構（5）（1 /40）…… 379
第 1-273 図　F-1 区 7 面の遺構（6）（1 /40）…… 380
第 1-274 図　H-1 区 7 面の遺構（1）（1/3・1/20）… 382
第 1-275 図　H-1 区 7 面の遺構（2）（1 /40）…… 384
第 1-276 図　H-1 区 8 面の遺構（1）（1 /40）…… 386
第 1-277 図　H-1 区 8 面の遺構（2）（1 /40）…… 388
第 1-278 図　H-2 区 7 面の遺構（1）（1 /40）…… 390
第 1-279 図　H-2 区 7 面の遺構（2）（1 /40）…… 391
第 1-280 図　H-2 区 7 面の遺構（3）（1 /40）…… 392
第 1-281 図　H-2 区 8 面の遺構（1 /40）…… 394
第 1-282 図　縄文時代の土器（1/3）…… 397
第 1-283 図　弥生時代中期前半の土器（1/4）…… 398
第 1-284 図　弥生時代中期後半の土器（1）（1/4）…… 399
第 1-285 図　弥生時代中期後半の土器（2）（1/4）…… 400
第 1-286 図　弥生時代後期の土器（1/4）…… 401
第 1-287 図　古墳時代から古代の遺物（1/4）…… 403

表　目　次

第 1-1 表　調査工程表 …… 6
第 1-2 表　周辺の遺跡 …… 11
第 1-3 表　遺構確認面対応表 …… 22
第 1-4 表　790 号・3437 号石材一覧 …… 67
第 1-5 表　3390 号石垣石材一覧 …… 255
第 1-6 表　3580 号内ピット一覧表 …… 387
第 1-7 表　縄文時代　土器観察表 …… 404
第 1-8 表　弥生時代　土器観察表 …… 404
第 1-9 表　古墳時代・古代　土器・埴輪観察表 …… 408

Ⅰ　発掘調査の概要

1．調査に至る経緯

永田町一丁目遺跡（千代田区 No.37 遺跡）は、現在内閣府及び合同庁舎 8 号館が立ち並ぶ一角にあたる。当遺跡では、平成 19 年に千代田区教育委員会（以下、区教委と略称）による立会調査、平成 22 年・23 年（第 1 次調査）・平成 27 年（第 2 次調査）に中央合同庁舎第 8 号館整備事業等に伴う本調査が断続的に行われてきた（金子 2008、東京都埋蔵文化財センター 2011・2016）。今回の調査はそれらの調査に引き続き、内閣府新庁舎（仮称）整備等事業に先立つ事前調査（本調査）として実施することとなった。

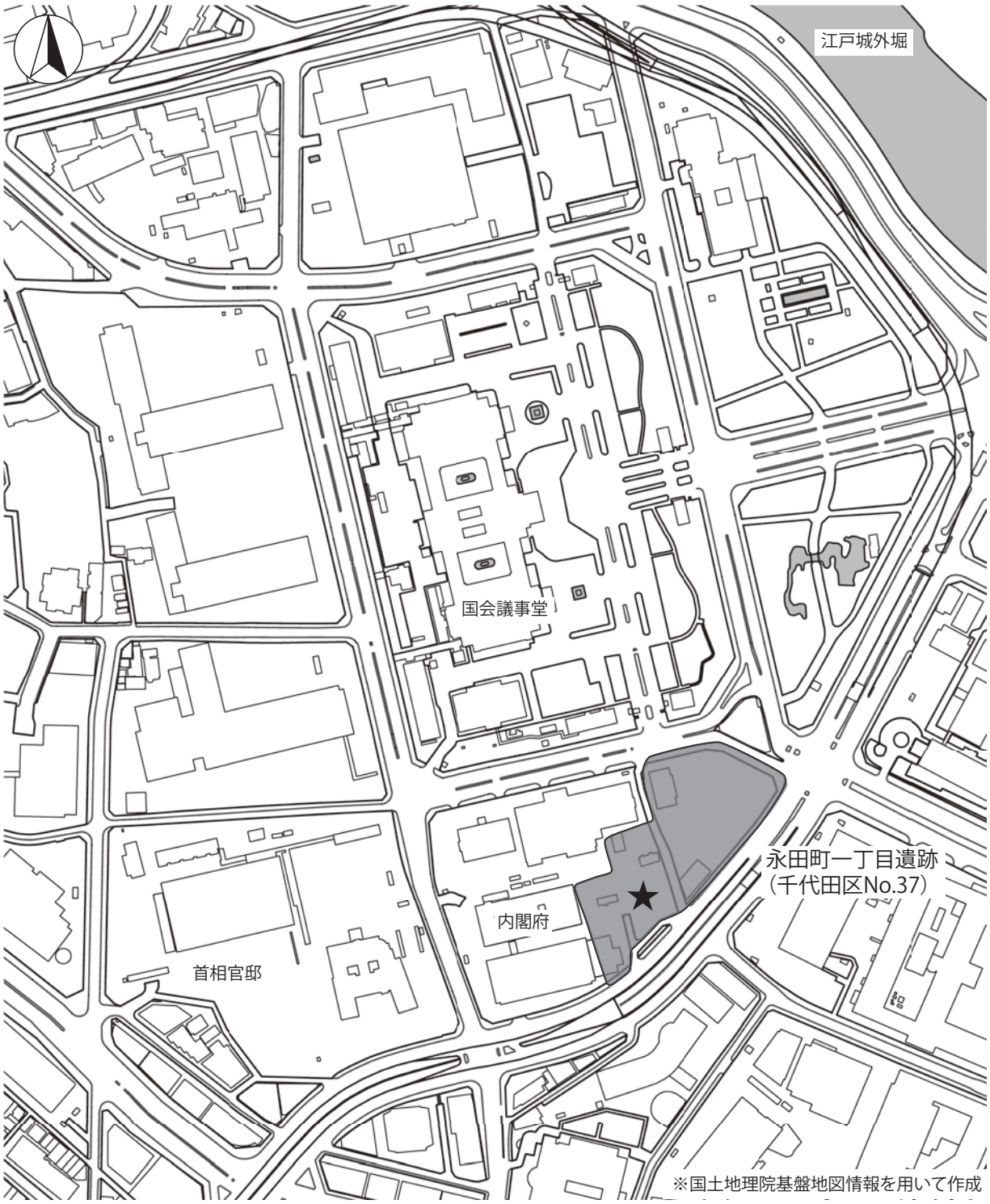
内閣府新庁舎（仮称）整備等事業では永田町一丁目遺跡の南西半にあたる部分に庁舎が新築される計画となっており、この取り扱いについて、内閣府・国土交通省・東京都教育委員会（以下、都教委と略称）・区教委による協議が行われた。平成 20 年に中央合同庁舎 8 号館整備等事業に伴い実施された試掘調査により、当該範囲は遺構・遺物が全面的に残存しており本調査の実施が必要である、と報告されていたことから、協議の結果本調査が実施されることとなり、これを受け発掘調査は公益財団法人東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター（現：公益財団法人東京都教育支援機構東京都埋蔵文化財センター、以下、埋文センターと略称）が担当することとなった。

内閣府新庁舎（仮称）整備等事業は PFI（Private-Finance-Initiative）方式により内閣府・国土交通省・永田町 PFI 株式会社の間で事業契約が結ばれており、埋蔵文化財調査もその事業内で実施されることになっていたたため、永田町 PFI 株式会社･発掘調査業務を委託された清水建設株式会社･都教委･公益財団法人東京都スポーツ文化事業団（以下、財団と略称：なお令和 5 年 4 月に埋文センターは財団から公益財団法人東京学校支援機構（現:公益財団法人東京都教育支援機構）に移管）の 4 者により、埋蔵文化財発掘調査に関する協定書（以下「協定」と略称）が令和 3 年 4 月 9 日に締結された。さらに、清水建設株式会社と財団は同日付けで調査監理委託契約を締結した。文化財保護法第 92 条第 1 項に基づく発掘調査の届出は令和 3 年 4 月 30 日付けで埋文センター所長より区教委を経由して東京都教育長あてに提出され（3 ス文事埋文第 2109 号）、令和 3 年 5 月 26 日付けで発掘調査許可通知を得た（3 教地管理第 629 号の 2）。　（合田）

2．調査の目的と方法

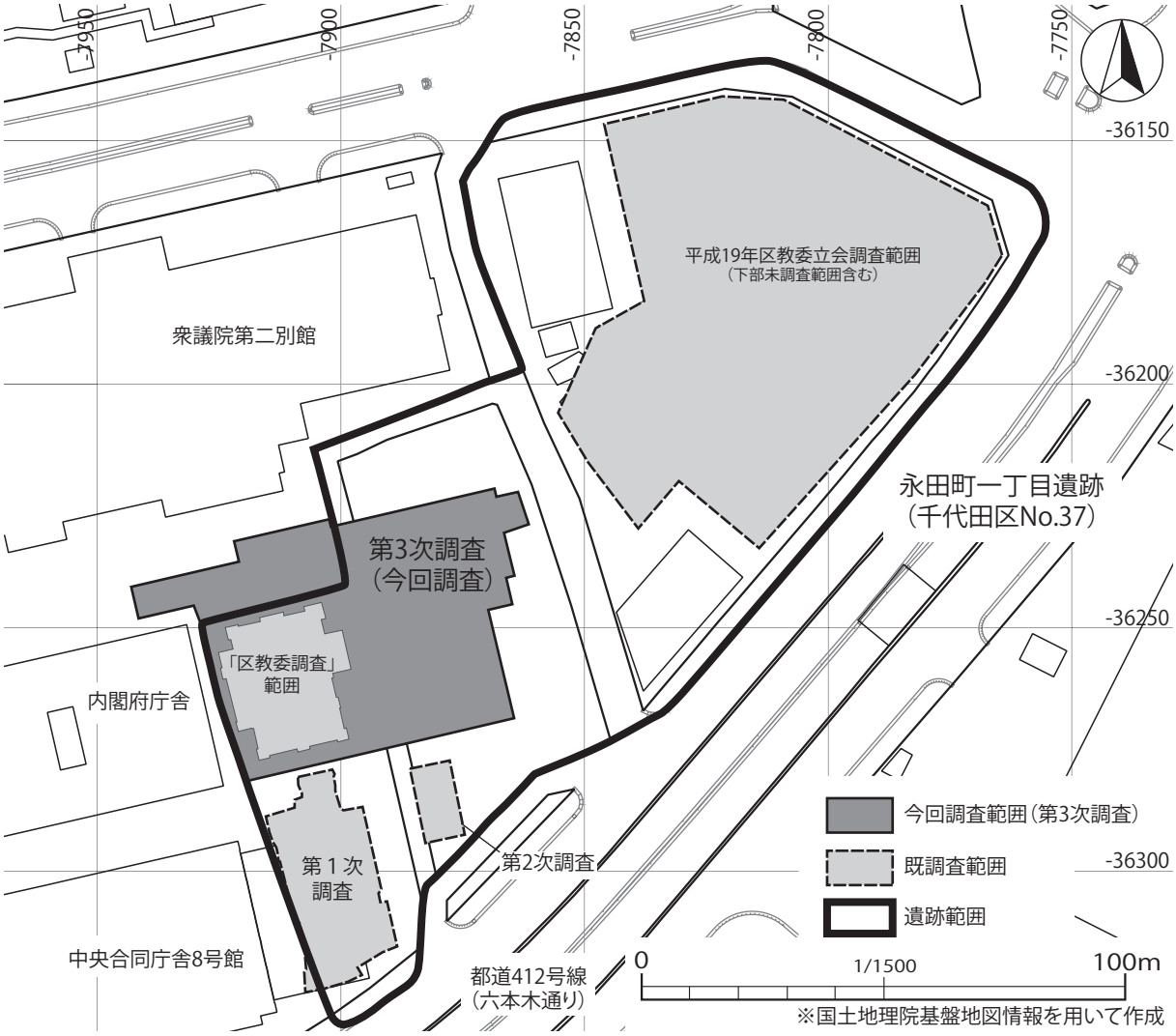
今回の調査は、内閣府新庁舎（仮称）整備等事業に伴う事前調査として実施され、調査対象面積は 2,968㎡である。本調査の目的は同事業地内の埋蔵文化財の記録保存であり、発掘・整理作業を通じて遺構・遺物の質的および量的実態を把握・記録することを主眼とした。

調査地は千代田区永田町一丁目 4 番・5 番に所在し、永田町一丁目遺跡の南西半に位置する（第 1-1 図）。調査地の南側で行われた第 1 次調査・第 2 次調査では 17 世紀後葉から 19 世紀中葉にかけての近世の生活面が確認された。また、第 1 次調査時の文献調査により調査地内には近世全体を通じて 4 ～ 6 筆の旗本屋敷が存在し、さらに明治 5 年から明治 30 年代までは、日本赤十字社創立など日



第 1-1 図　遺跡の位置と調査地点（1/5,000）

本の近代において様々な功績を残した佐野常民（1823-1902）の邸宅が構えられていたことが判明していた（東京都埋蔵文化財センター 2011）。調査地内に残る近代の遺構は「埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化等について」（平成 10 年 9 月 29 日付庁保記念第 75 号 文化庁次長から各都道府県教育長宛て通知）によって示された「近現代の遺跡については、地域において特に重要なものを対象とすることができること」に合致し埋蔵文化財として扱う範囲に含まれるもの、という区教委の意見を踏

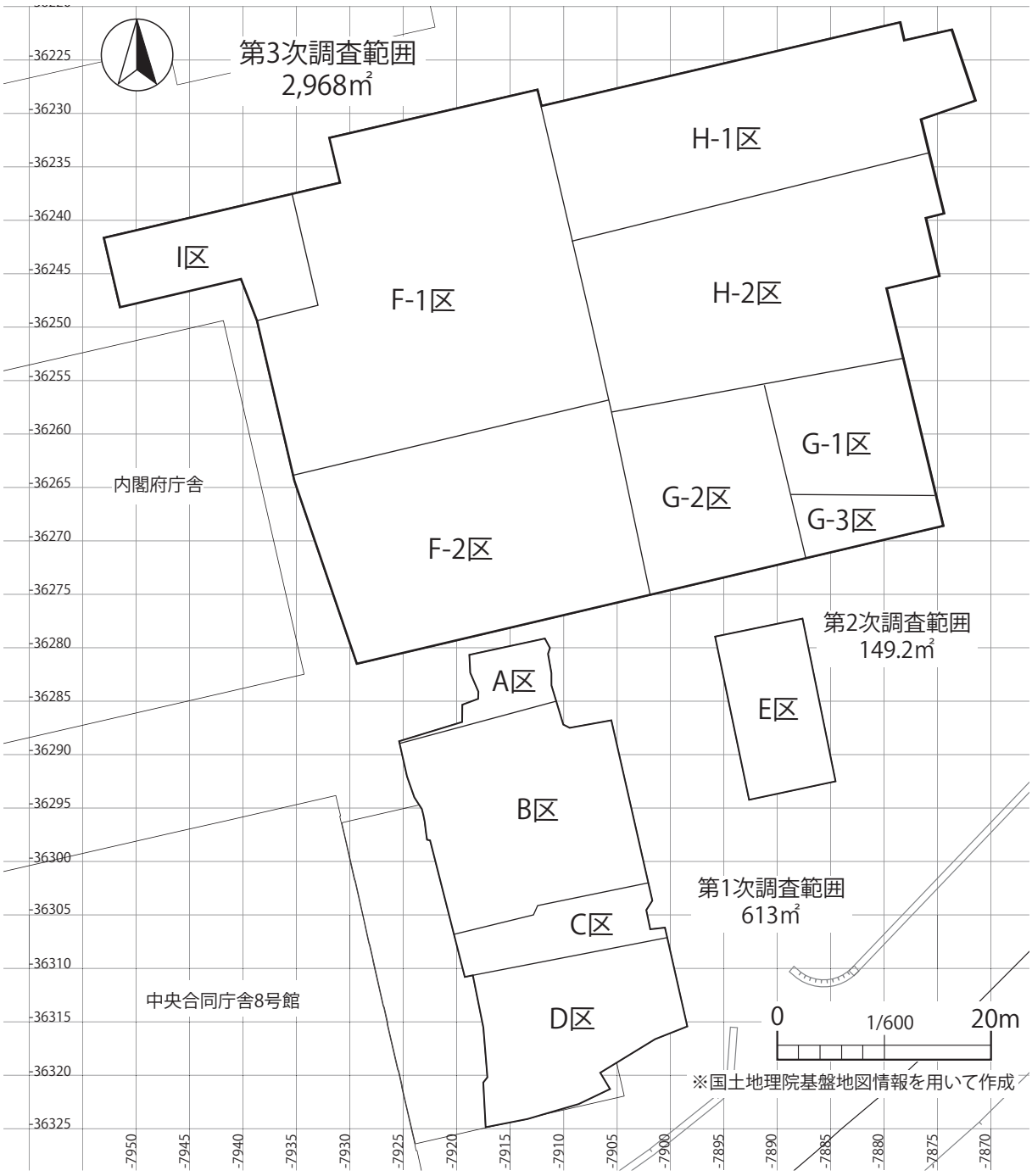


第 1-2 図　調査区の位置（1/1,500）

まえ、都教委の判断により、近代以降の所産である可能性がある遺構についても、近世以前の遺構と共に調査対象とした。

以上を踏まえ、今回の調査では調査地内の江戸時代から近代に至るまでの土地利用の変遷を明らかにすることを主たる目的とし、合わせて第 1 次調査で検出されている中世以前の遺構・遺物の存否を確認することとした。

永田町一丁目遺跡では、第 1次調査で中央合同庁舎 8号館の新設に伴う 613㎡、第 2次調査で南側のオイルタンク新設に伴う 149.2㎡の本調査が実施されている（第 1-2図）。また、今回の調査範囲のうち西半（F-1・F-2 区）は、第 1 次調査と並行して平成 22 年に仮設庁舎及び駐車場整備に伴い区教委が実施した立会調査及び本調査範囲と重なっている（以下「区教委調査」と略称、第 1-2 図）。「区教委調査」は、調査の原因となった仮設庁舎及び駐車場整備に伴う掘削工事が現地表面より -0.8m の範囲にほぼ収まる仮設工事であったため、埋蔵文化財に影響のない深度に工事計画を変更したうえで、かつやむを得ず影響が及ぶ範囲のみ本調査を行う、とされた。調査対象面積は 474㎡で、調査期間は平成 23 年 2 月 8 日から同年 2 月 16 日までである。今回の本調査では、「区教委調査」で調査対象とせず保存された近世以前の堆積層以下が調査対象とされた。



第 1-3 図　グリッドと調査区割り（1/600）

調査地周辺は、国有地となる以前は長年民間の宅地や小規模な工場として細かく分筆され江戸時代以来の地割はわかりにくい状況となっていたが、調査範囲のほぼ中央には比高約 3m の崖地に設けられた石垣が一部残っており、これが江戸時代の屋敷境を踏襲していることが予想された。よって、この石垣のラインで南北を分割し、合わせて調査直前まで残っていた南北方向の現道を境として、第 1 次調査・第 2 次調査の A ～ E 区に続く F ～ H 区の調査区を設定した（第 1-3 図）。

本調査は当初、試掘調査の所見により敷地全体で現地表面より -3.0m で基盤層であるローム層もしくは泥炭層に至ると予測していたが、調査が進むにつれ、調査対象範囲の大半で現地表面より -3.0m

以下に基盤層が存在することが明らかとなった。また、当初２面と想定されていた調査面が最大８面まで存在することも判明したため（第Ⅲ章、第 1-20 図）、文化庁の現地視察・助言を受け、「協定」４者・内閣府・国交省の協議により、全ての遺構面を本調査の範囲とすることとなった。さらに、内閣府庁舎と調査区の境に一部残っていた斜面地および斜面地上の内閣府庁舎北側部分の本調査実施については、隣接する調査区（F 区）の調査結果によって取り扱いを決める、として「協定」4 者・区教委の間で協議がされていたが、F 区の調査が進むにつれて斜面地にも江戸時代の遺構が残っていると判断されたため、本調査の対象となった（I 区）。斜面地上の内閣府庁舎北側部分については、既存施設の解体に合わせて区教委・埋文センターが立会した結果、遺構の残存状況が不良であるとの判断により本調査の対象とはせず、埋文センターが簡易的な記録を行って調査終了とした。

調査に先立ち、調査区内に世界測地系（測地成果 2011）・平面直角座標系Ⅸ系を使用して 5m × 5m のグリッドを設定した。遺構番号は第２次調査に続いて 300 番から付番し、調査区・時代・種別による区別は行わず、調査区全体で検出順に通し番号とした。検出した遺構は、主軸方向・新旧関係を考慮したうえで半截し、土層断面の観察・写真撮影・図化を行った後に全体を掘り上げ、完掘状態でさらに写真撮影・測量・平面図の作成を行った。また、必要に応じ遺物出土状況図やエレベーション図の作成を行った。遺構の測量・図化作業では土層断面図は手作業により縮尺 1 /20 の図面を、遺構平面図はトータルステーション用遺構発掘支援システム（遺構くん CUBIC）により測量・図化を行った。遺物出土状況図と一部の遺構平面図・立面図については、Agisoft Metashape Standard を使用した 3D モデリングによる測量・図化を併用し、作業の効率化に努めた。調査写真は主にデジタル一眼レフカメラ（NikonD3000）を使用し、合わせて 35mm モノクロネガ・リバーサルフィルムにより撮影を行った。出土遺物は遺構単位での一括取り上げを基本とし、大型遺構や整地層については層ごとに取り上げを行った。また一部の遺構では土壌・木材・動物遺体（貝類等）のサンプル採取も行った。

（合田）

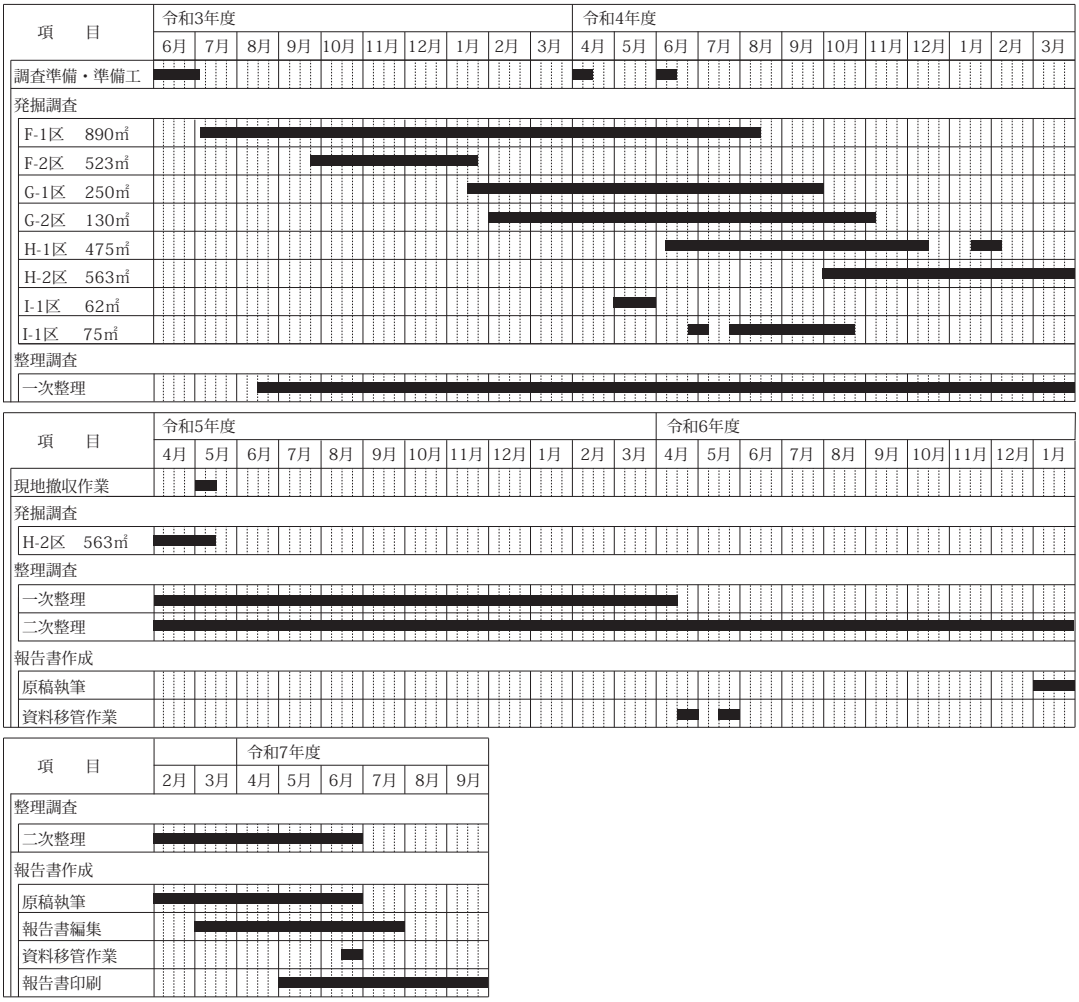
３．調査経過

【発掘調査】

埋文センターは関係機関と調整の後、令和３年６月に調査準備に着手し、同年７月から発掘調査を開始したが、先述のとおり試掘調査で想定されていた調査深度・調査面数よりも大幅に増加することが明らかとなったため、調査と並行して協定者での調査期間延長の協議を行い、調査期間を令和５年３月まで延長することとなった。さらに、追加調査範囲が発生したため、最終的な調査期間は令和５年５月 12 日までとなった。

調査事務所等の設置をはじめ、発掘調査期間中には現地の施工を行っている清水建設株式会社の全面的な協力を得た。発掘作業は F 区から着手し、基準点測量等の準備作業と一部並行しながら表土掘削を行い、第１面で確認した遺構から随時調査を実施した。各調査区における遺構確認面及び掘削深度は第３章「基本層序」、調査工程は第 1-1 表のとおりである。各面ごと遺構確認、遺構調査、調査完了時の全景写真撮影を行い、調査区ごとに全ての調査面が終了した段階で「協定」4 者による終了確認を行い、さらに本体工事の着工・進捗に合わせて都度終了報告を東京都教育長あてに提出した。

第 1-1 表　調査工程表



全ての調査が終了した後の令和 5 年 5 月 17 日付けで麹町警察署に埋蔵物発見届を、同日付で区教委を経由し東京都教育長あて埋蔵文化財保管証及び発掘調査の概要を提出した。これを受け、都教委より令和 5 年 7 月 31 日付けで文化財認定通知（5 教地管理第 1543 号）が発出された。

【整理調査・報告書作成作業】

一次整理作業（遺物洗浄・注記・粗分類）は発掘調査と並行して現地で令和 3 年 8 月中旬から開始し、令和 5 年 3 月 1 日から令和 5 年 9 月までは埋文センター大塚分室にて行った。また、遺物洗浄・注記作業の一部については外部委託とし、令和 5 年 8 月から令和 6 年 4 月まで委託会社の事務所にて実施した。

二次整理作業及び報告書作成作業は、発掘調査の終了より先行して令和 5 年 4 月 1 日より埋文センター大塚分室にて開始し、遺構図面の修正作業・トレース、全体図作成作業、出土遺物の接合・実測・写真撮影作業、調査報告書掲載用の図版・表の作成などを行った。出土遺物・図面・写真等の移管作業は二次整理作業中に複数回に分けて行い、東京都教育委員会五色橋収蔵庫に収蔵した。さらに、令和 7 年 1 月からは報告書の原稿執筆作業、3 月からは編集作業を行い、大塚分室での作業は令和 7 年 6 月 30 日に終了した。その後は埋文センター本部で編集作業を行い、令和 7 年 7 月 31 日に全ての作業を終了した。本書の刊行をもって、永田町一丁目遺跡第 3 次調査は全て終了となった。

（合田）

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

永田町一丁目遺跡（千代田区 No.37 遺跡）は、東京都千代田区永田町一丁目、東京メトロ国会議事堂前駅から南へ約 100m の位置に所在する。遺跡所在地は永田町の中心部にあたり、周辺には国会議事堂、首相官邸、内閣府などが建ち並ぶ。

千代田区は武蔵野台地東端部に位置しており、地形的には西側の武蔵野台地部と東側の東京低地部に概ね二分される。このうち本遺跡は荒川低地と多摩川低地に挟まれた武蔵野台地東端部を形成する下末吉面に比定される淀橋台に属し、東に向かって延びる小台地である麹町台地先端部の南側斜面下部に立地する（第 1-4 図）。遺跡周辺の標高は約 12 ～ 14 mを測るが、遺跡西側は標高約 20m の高台となっており、境界は高低差がおよそ 8m の崖となる。遺跡の南側には西から東へと溜池の谷筋（赤坂谷）が広がっており、東側は溜池から北側へ延びる小支谷があり小さな入江状の地形を呈する。さらに第３次調査により小支谷から北西へ延びる小さな谷が存在していることが明らかになった。第３次調査地点はこの小さな谷の西側斜面から谷底部分にあたり、谷底部分から東側では千代田区教育委員会による立会調査が行われている（金子 2008）。立会調査の結果、遺跡の東端で東京層群の一部である砂層を確認したことが報告され、今次調査においても基盤層として砂層を確認している。本来、この東京層群の上部には少なくとも数mの関東ローム層が堆積するが、関東ローム層が発見されないことから、近世以前の段階で削平が行われ、平坦面が作り出されていたものと考えられる。遺跡周辺は坂が多く、現在でも起伏のある地形だが、このように近世以降に台地の削平が行われており、近世以前はさらに起伏が激しく、平坦面の少ない地形であったと考えられる。

溜池の谷沿いにはかつて多くの湧水点が見られたが、複数の湧水からの水が谷底に集まるため、谷底には泥炭層が堆積している。縄文時代前期には縄文海進により海が入り込んでいたが、海退後の縄文時代後晩期には淡水性の湿地となり、弥生時代になると草地の泥炭地が形成される。そして中世には水田として利用されていたことが明らかになっている。溜池はもともと四谷の南西、鮫が橋を起点とし、東京湾へと注ぐ汐留川であったが、戦国時代末期から江戸時代初頭にかけて河川を堰き止め、大規模な開削を行って近世の溜池が造られたことが発掘調査により検証された（地下鉄７号線溜池・駒込間遺跡調査会 1997）。寛永 13 年（1636）には江戸城外堀の整備に伴い溜池東端に堰が設けられ、溜池は江戸城外堀に接続され完成をみるが、玉川上水が整備される承応２年（1653）まで江戸時代初期の上水道の水源を担っていた。その後、武家屋敷地の不足から徐々に埋め立てられていき、明治 10 年（1877）頃に堰堤が除去されると干上がり、明治 21 ～ 22 年（1888 ～ 1889）の溜池改修工事により完全に埋め立てられた（寺谷 1996）。

遺跡の東側の東京低地には、本郷台地の駿河台から舌状に延びる砂嘴が形成されていた。これは「江戸前島」と呼ばれた微高地に相当し、家康入府以前には、江戸前島によって外湾と仕切られた内湾部分に「日比谷入江」と呼ばれる遠浅の入江が存在していた。文献史料から繙かれる中世の現風景は、江戸前島から三田付近にかけて蘆の生い茂る湿地帯であったとされる（小山 2015）。

（佐藤）



角田清美2016「東京都心部の小地形と海岸線の変化」『駒澤地理』No.52-8を基に作成

第 1-4 図　遺跡周辺の地形図（1/25,000）

2　歴史的環境

千代田区内では、令和 6 年 3 月 29 日時点で 101 か所の遺跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として登録されている。調査地周辺の遺跡に関しては、第 1 次調査および第 2 次調査の報告書（東京都埋蔵文化財センター 2011・2016）ならびに『平成 10 年度特別展　発掘が語る千代田の歴史』（千代田区教育委員会 1998）に詳しい。特に典拠を記さない箇所はこれらに依拠し、ここでは近年の調査事例を含めて当該地周辺の歴史的環境を述べる。なお、近世の土地のあり方と土地利用の変遷については、第 2 分冊に所収した第Ⅶ章「文献史料の調査」に詳述されているので併せて参照されたい。

■旧石器時代

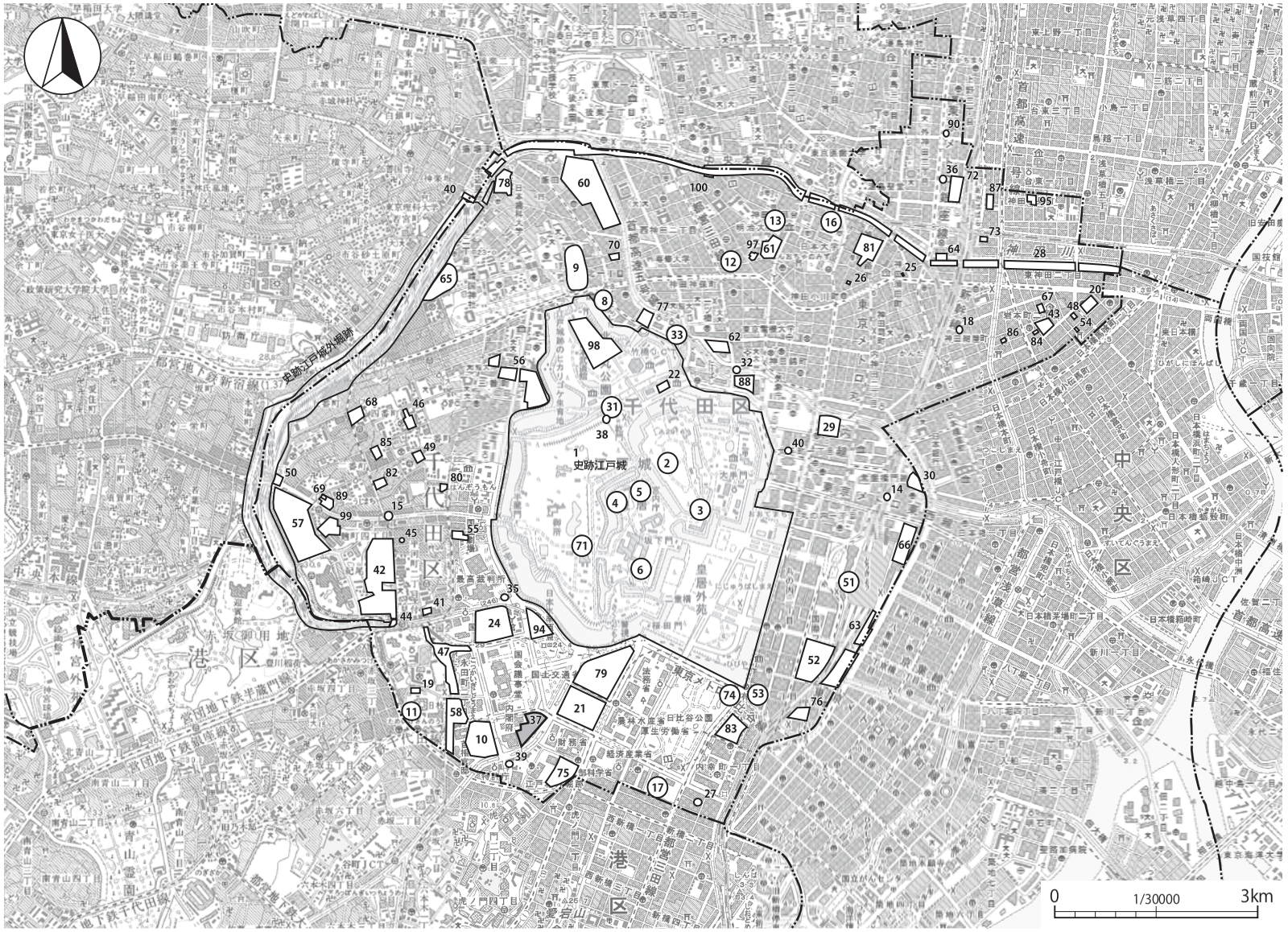
千代田区内の旧石器時代遺跡としては、東京国立近代美術館遺跡（千代田区 No.22。以下「千代田区 No.」を省略）が知られており、立川ロームⅣ層中・下部に相当する層から礫群、石器ブロックが検出されている。このほか、紀尾井町遺跡（42）がある。永田町一丁目遺跡及び近隣遺跡からは、旧石器時代の痕跡はこれまで確認されていない。

■縄文時代

千代田区内では縄文時代の遺跡の形成が見られるのは現在のところ縄文時代早期以降であり、草創期の様相はわかっていない。早期の遺跡としては、永田町二丁目遺跡（10）で早期前半の稲荷台式がまとまって出土している。前期では、東京国立近代美術館遺跡で関山Ⅱ式期の竪穴建物跡が 2 軒、三番町遺跡（56）で諸磯式期の竪穴建物跡が 10 軒検出され、このうち 1 軒からは住居内貝層が検出されている。法政大学構内遺跡（65）からも諸磯式土器がまとまって出土しており、当該期に属すると考えられる土坑が検出されている。中期では、一番町遺跡（49）で土坑が検出されている。紀尾井町遺跡の埋没谷からは、早期前半から晩期までの土器が多量に出土しているが、主体は後期前半の堀之内 1 式で、次いで中期後半の加曽利 E 式が多い。旧本丸西貝塚（2）では後期から晩期までの土器が多量に出土しており、都内では数少ない縄文時代終末期の貝塚として知られている。

■弥生時代

千代田区内における弥生時代の遺構・遺物は後期に属するものが多く、中期に属するものは少ない。現在のところ、唯一弥生時代中期の遺構がまとまって検出されている遺跡として、永田町二丁目遺跡がある。永田町二丁目遺跡からは地点貝塚を伴う中期の環濠集落が発見されており、竪穴建物跡が 5 軒検出されている。弥生時代後期になると遺跡数が急増し、小支谷の発達した起伏の激しい地域に広がる傾向が見られる。東京国立近代美術館遺跡からは後期の竪穴建物跡が 5 軒、一番町遺跡からは後期の方形周溝墓 2 基、溝状遺構や土坑などが検出されている。三番町遺跡では弥生時代終末期から古墳時代にかけての竪穴建物跡が 1 軒検出されている。日比谷入江に面した九段坂上貝塚（9）では後期の環濠と竪穴建物跡が、富士見二丁目遺跡（78）では後期の竪穴建物跡が 9 軒、方形周溝墓が 1 基検出されている。このほか、紀尾井町遺跡や隼町遺跡（55）でも後期の竪穴建物跡が検出されている。また、近年では令和 5 年から同 6 年にかけて英国大使館跡（千代田区一番町 1 ）における発掘調査で、後期とみられる 40 軒以上の竪穴建物跡が確認され、新たに発見された区内最大規模の集落として注目されている（千代田区立日比谷図書文化館 2024）。



地理院タイルに千代田区埋蔵文化財包蔵地の地図（令和 6 年 3 月 29 日時点）を追加

第 1-5 図　千代田区内の遺跡地図（1/30,000）

第 1-2 表　周辺の遺跡

（令和 6 年 3 月 29 日現在）

No	遺跡名	所在地	時代	種別	備考
1	江戸城跡	千代田・北の丸公園・皇居外苑	近	城館	特別史跡江戸城跡
2	旧本丸西貝塚	千代田	縄	貝塚	
3	千代田区№ 3	千代田	弥	包蔵地	
4	紅葉山	千代田	縄	包蔵地	
5	千代田区№ 5	千代田	奈・平	包蔵地	
6	千代田区№ 6	千代田		貝塚	
7	欠番				
8	牛ヶ淵貝塚	九段南一丁目	縄・弥・古・奈・平	貝塚	
9	九段坂上貝塚	九段北一丁目、富士見一丁目	縄・弥・平	貝塚	
10	永田町二丁目	永田町二丁目	縄・弥・近	包蔵地・集落跡・貝塚・屋敷	
11	千代田区№ 11	永田町二丁目	縄	包蔵地	
12	千代田区№ 12	神田神保町一丁目	縄	貝塚	
13	明治大学大学院西側	神田駿河台一丁目	縄	包蔵地	
14	千代田区№ 14	大手町二丁目	中（戦国）	単独出土地	
15	千代田区№ 15	麹町三丁目	近	上水道	
16	千代田区№ 16	神田駿河台四丁目	近	包蔵地	
17	千代田区№ 17	内幸町二丁目	近	包蔵地・上水道	
18	千代田区№ 18	神田富山町	近	包蔵地	
19	日枝神社境内	永田町二丁目	近	包蔵地	
20	都立一橋高校内	東神田一丁目	近	集落跡・社寺	
21	外務省構内	霞が関二丁目	縄・近	包蔵地・上水道・屋敷跡	
22	東京国立近代美術館	北の丸公園	旧～近	集落跡・城館	
23	欠番				
24	国会図書館	永田町一丁目	近	井戸跡	
25	千代田区№ 25	神田須田町一丁目	近	上水道	
26	千代田区№ 26	淡路町一丁目	近	包蔵地	
27	千代田区№ 27	内幸町一丁目	近	上水道	
28	江戸城外堀跡	紀尾井町～東神田三丁目、霞が関三丁目	近	城館跡	史跡江戸城外堀跡
29	大手町一丁目	大手町一丁目	近	城館・屋敷・その他（石垣）	
30	常盤橋門跡	大手町二丁目	近	城館	史跡常盤橋門跡
31	千代田区№ 31	北の丸公園	近	城館	
32	千代田区№ 32	大手町一丁目	近	城館	一ッ橋門石垣
33	雉子橋関連	九段南一丁目	近	城館	
34	欠番				
35	千代田区№ 35	隼町	近	上水道	
36	千代田区№ 36	外神田四丁目	近	上水道	
37	**永田町一丁目**	**永田町一丁目**	**近**	**屋敷**	**本遺跡**
38	千代田区№ 38	千代田	近	上水道	
39	千代田区№ 39	霞が関三丁目	近	上水道	
40	千代田区№ 40	大手町一丁目	近	上水道	
41	平河町	平河町二丁目	縄・弥・古・中・近	包蔵地	
42	紀尾井町	紀尾井町	旧・縄・弥・古・中・近・近代	屋敷・集落跡・包蔵地	
43	弥勒寺跡	岩本町二丁目	近	社寺	
44	千代田区№ 44	紀尾井町	近	下水道	
45	平河町 1-4	平河町一丁目	弥・近	集落跡・町人地跡	
46	四番町 11	四番町	近	武家屋敷	
47	和泉伯太藩・武蔵岡部藩上屋敷跡	永田町二丁目	近	屋敷	
48	東神田 1-5	東神田一丁目	近	墓地跡	
49	一番町	一番町	縄・弥・近	武家屋敷	
50	四谷見附跡	麹町六丁目	近	城館	
51	千代田区№ 51	丸の内一丁目	中	墓地跡	
52	丸の内三丁目	丸の内三丁目	近・近代	城館・屋敷・道	
53	千代田区№ 53	有楽町一丁目	中・近	社寺・上水跡	
54	千代田区№ 54	東神田一丁目	近	墓地跡	
55	隼町	隼町	縄・近	包蔵地・武家屋敷跡	
56	三番町	三番町	縄・弥・近・近代	集落跡・貝塚・屋敷	
57	尾張藩麹町邸跡	麹町六丁目、紀尾井町	縄・近	屋敷	
58	溜池	永田町二丁目	縄・近	包蔵地・社寺・屋敷	
59	欠番				
60	飯田町	飯田橋二丁目・三丁目	縄・古・奈・平・近	包蔵地・屋敷	
61	明治大学記念館前	神田駿河台一丁目	近	武家屋敷	
62	一ツ橋二丁目	一ツ橋二丁目	近	幕府御用地	
63	丸の内一丁目	丸の内一丁目	近	城館	
64	外神田一丁目	外神田一丁目	近	町屋	
65	法政大学構内	富士見二丁目	縄・近	包蔵地・屋敷	
66	東京駅八重洲北口	丸の内一丁目	古・近	包蔵地・屋敷	都旧跡「北町奉行所跡」
67	岩本町二丁目	岩本町二丁目	近	町屋	
68	四番町	四番町	近	屋敷	
69	栖岸院跡	麹町五丁目	近	その他の墓	
70	元飯田町	九段北一丁目	近	屋敷	
71	千代田区№ 71	千代田	縄・弥・平	包蔵地	
72	外神田四丁目	外神田四丁目	近	町人地	
73	千代田区№ 73	神田花岡町	中・近	その他の墓	
74	日比谷門跡	日比谷公園	近	城館	
75	文部科学省構内	霞が関三丁目	平・近	包蔵地・城館・屋敷	
76	有楽町二丁目	有楽町二丁目	近	屋敷	
77	九段南一丁目	九段南一丁目	近	屋敷	
78	富士見二丁目	富士見二丁目	弥・近	屋敷	
79	広島藩浅野家上屋敷跡	霞が関二丁目	近	屋敷	
80	麹町二丁目	麹町二丁目	近	屋敷	
81	神田淡路町二丁目	神田淡路町二丁目	近	屋敷	
82	二番町	二番町	近	屋敷	
83	有楽町一丁目	有楽町一丁目	近	屋敷	
84	千代田区№ 84	岩本町二丁目	近	墓地跡	
85	筒井家屋敷跡	二番町	近	屋敷	
86	千代田区№ 86	岩本町二丁目	近	社寺・その他の墓	
87	神田練塀町	神田練塀町	近	屋敷	
88	一橋徳川家屋敷跡	大手町一丁目	近	屋敷	
89	麹町五丁目	麹町五丁目	近	町屋	
90	千代田区№ 90	外神田五丁目	近	井戸	
91	財務省構内	霞が関三丁目	近	屋敷	
92	千代田区№ 92	東神田一丁目	近	石組溝	
93	千代田区№ 93	神田神保町一丁目	近	屋敷	
94	近江彦根藩井伊家上屋敷跡	永田町一丁目	近・近代	屋敷・陸軍省	
95	伊勢津藩藤堂家上屋敷跡	神田和泉町	近	屋敷	
96	千代田区№ 96	飯田橋三丁目	近	外堀護岸石組	神田川（江戸城外堀跡）
97	神田猿楽町一丁目	猿楽町一丁目	近	屋敷	
98	清水徳川家屋敷跡	北の丸公園	近・近代	屋敷・その他	
99	志摩鳥羽藩稲垣家上屋敷跡	麹町五丁目	縄・近	集落跡・屋敷・その他	
100	千代田区 No.100	神田駿河台二丁目	近	上水道	神田上水
101	神田橋門跡東	大手町一丁目	近	城館	日本橋川護岸

■古墳時代

古墳時代は前期の段階では遺跡数は少ないが、後期に入り増加し、旧平川（神田川流域）を臨む台地上を中心に確認されている。東京国立近代美術館遺跡で古墳時代前期の竪穴建物跡が 5 軒、後期の竪穴建物跡が 9 軒検出されている。東京駅八重洲北口遺跡（66）では古墳時代前期後半から中期を主体とする遺物包含層が確認されている。区内では長らく古墳は発見されていなかったが、平成 17 年に区内で唯一の古墳である富士見二丁目 1 号墳が確認された（千代田区立日比谷図書文化館 2025）。中期の円墳で、規模は直径約 30 mを測り、周溝内からは古墳時代前期の遺物が出土している。東京国立近代美術館遺跡、一ツ橋二丁目遺跡（62）など旧平川を臨む台地上の遺跡において、円筒埴輪片が確認されている。

■古代

古代の千代田区は武蔵国荏原郡および豊島郡に属しており、２つの郡の境界は当初小石川と牛込との間の谷とされていたが、中世に入り、現在の霞が関周辺までが豊島郡に含まれるようになったとされる（千代田区 1960）。永田町一丁目遺跡のある桜田郷は豊島郡と荏原郡の郡境にあたる郷で、日比谷入江沿岸部にあたり、霞山・霞が関を中心地とすると想定される（今野 2008）。また、東京湾沿岸部を北上するとされる古東海道の痕跡は現在まで確認されていないものの、当該期の遺跡は台地縁辺に分布しており、古東海道との関連が推測される。東京国立近代美術館遺跡からは奈良時代以降の竪穴建物跡６軒が検出され、特徴的な遺物では平安時代の石帯や緑釉陶器がある。一ツ橋二丁目遺跡では古墳時代後期～奈良・平安時代の掘立柱建物跡２棟・溝状遺構・井戸状遺構など溝に画された集落跡が確認されている。永田町一丁目遺跡の南に位置する文部科学省構内遺跡（75）では８世紀から９世紀の遺物が出土している。

■中世

12 世紀の平安時代末期から鎌倉時代初期には江戸氏の祖である江戸重継が館を構え、15 世紀半ばには扇谷上杉氏の家臣である太田資長（道灌）が麹町台地東端に江戸城を築城し、江戸城下町の原形が築かれた。太田道灌没後は主君上杉定正による統治を経て、大永 4 年（1524）に小田原北条氏の支配下に入る。中世江戸城の位置は、後の江戸城本丸、二の丸辺りの台地上とされるが詳細は不明である。東京国立近代美術館遺跡の調査では、12 世紀代および 15 世紀後半から 16 世紀前半の遺物とともに溝跡や地下式坑等が検出され、中世江戸城に関連する可能性が指摘されている。

中世の遺跡は区東部で多く確認され、中でも一ツ橋二丁目遺跡では 13 世紀末葉から 14 世紀前葉の溝状遺構や掘立柱建物跡、井戸等の遺構が検出され、集落址とされている。また、16 世紀前半の道路跡が検出されており、平川に沿って本郷台地へと向かう「鎌倉街道下ノ道」との関連が指摘されている。このほか、区東部の平川流域の低地部にある九段南一丁目遺跡（77）、外神田四丁目遺跡（72）で、中世後半に属すると考えられる水田跡が確認されている。

このほか、丸の内から有楽町周辺にかけて、かつて日比谷入江を取り巻く江戸前島があった地域には千代田区 No.51 遺跡（51）・No.53 遺跡（53）・No.57 遺跡（57）・有楽町一丁目遺跡（83）があり、それぞれ中世人骨や板碑の出土例が報告されていることから、14 世紀後半から 16 世紀代にかけて集落・墓域が存在していたと想定されている。入江の東岸に位置する有楽町一丁目遺跡では 16 世紀の溝状遺構や井戸などとともに 6 基の土壙墓、板碑片が出土し、葬送の場であったことがうかがわれる。

一方、区西部にあたる永田町から番町にかけては中世遺跡が数少ない。平河町遺跡（41）では地下式坑や土壙墓、井戸などが検出されている。地下式坑の底面からは 15 世紀後半から 16 世紀に位置づけられる常滑産の壺が出土している。このほかには、二番町遺跡（82）・紀尾井町遺跡・尾張藩麹町邸跡（57）で遺構・遺物が見つかっている。溜池遺跡では遺構・遺物の検出は見られないが、自然科学分析により 13 世紀台の水田の存在が想定されている（地下鉄 7 号線溜池・駒込間遺跡調査会、帝都高速度交通営団 1997）。溜池遺跡周辺は 16 世紀中葉の「小田原所領役帳」にある「一木村」、「桜田村」にあたり、中世末の段階に溜池谷周辺に村落が存在し、水田耕作が行われていたことが指摘されている（後藤 1997）。

また、「鍛冶屋橋人骨」として古くから知られる人骨の出土事例がある。これは大正 2 年（1913）に鍛冶屋橋改架工事の際に発見されたもので、鈴木尚により中世人骨の典型例として取り上げられている（鈴木 1963）。

■近世

天正 18 年（1590）の徳川家康入府以降、江戸城築城の天下普請を経て、江戸は近世城下町として整備される。霞ヶ関には有力外様大名が、永田町には親藩・譜代大名が配され、西の守りとされていた。調査地周辺は、江戸時代には「虎御門内新道」（三年坂）と称された旗本屋敷地が多く集まる一角であった。三年坂から北方に連なる盤曲の道が、遺跡を南北に縦断し本調査区東側を掠める。この道は「サザイジリ（栄螺尻）」と俗されていた（千代田区教育委員会 1998）。

調査地が最初に絵図史料に描かれた寛永 9 ～ 10 年（1632 ～ 1633）「武州豊嶋郡江戸庄図」（第 1-6 図 1）では、調査地西側の高台に相当する範囲に「松平げき（外記）」の名が確認できる以外は、溜池岸まで一帯に樹木が描かれた未開の地であったと解釈される（渋谷 2011）。寛永 19 ～ 20 年（1642 ～ 1643）頃「（江戸全図）」（同図 2）では、調査区北側に成瀬、南側に川窪の名が記され、この頃までに 2 筆が拝領されたことがわかるが、南東端部はまだ溜池北岸が迫り出して描かれている。明暦 2 年（1656）の「新添江戸之図」（同図 3）で、南東端部に吉田の名が記され、調査地一帯の埋立造成が終わり屋敷地が形成されたことがわかる。以来幕末に至るまで、調査区の範囲は主要 2 筆、計 4 筆の屋敷地に跨り、拝領者の変遷を経ても屋敷割は変らず継承された（同図 4・5）。

近世の沿革は第 2 分冊第Ⅶ章に詳述されているため、これを基に各屋敷地の拝領者の変遷について、以下に列記する。

- 北側（F-1 区・H-1・2 区・G-1 区・I 区東側斜面）　①寛永 19 ～ 20 年（1642 ～ 1643）以前：成瀬家（1,200 石）→②文化 10 年（1838）：鳥居家（1,500 石）
- 南側（F-2 区・G-2 区）　①寛永 19 ～ 20 年（1642 ～ 1643）以前：川窪家（2,700 石）→②明暦 2 年（1656）：保科家（2,500 石）
- 南東端張出部（G-3 区）　①明暦 2 年（1656）以前：吉田家（医者）→②元禄 4 年（1691）：伴家（医者）→③延享 2 年（1745）：太田家（500 石）→④宝暦 9 年（1759）：長谷川家（400 石）→⑤寛政 9 年（1797）：兼松家（300 石）→⑥天保 9 年（1838）以前：林家（500 石）
- 西側高台（I 区西側）　①寛永 9 ～ 10 年（1632 ～ 1633）以前：五井松平家（5,500 石）

千代田区内では近世遺跡が多数存在するが、麹町台地上では、国土交通省構内遺跡（79）、外務省



1. 武州豊嶋郡江戸庄図（寛永9～10年）[部分]
国立国会図書館デジタルコレクション



2. （江戸全図）（寛永19～20年頃）[部分] 臼杵市教育委員会所蔵



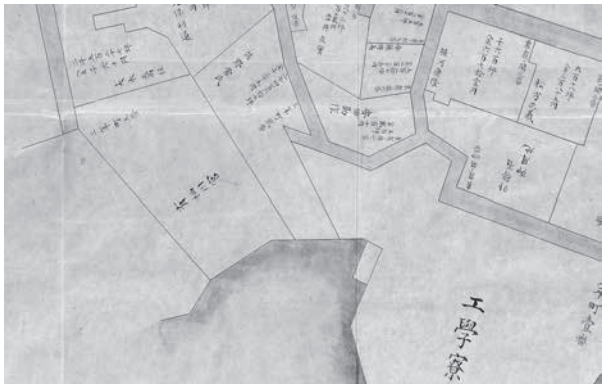
3. 新添江戸之図（明暦２年）[部分]
国立国会図書館デジタルコレクション



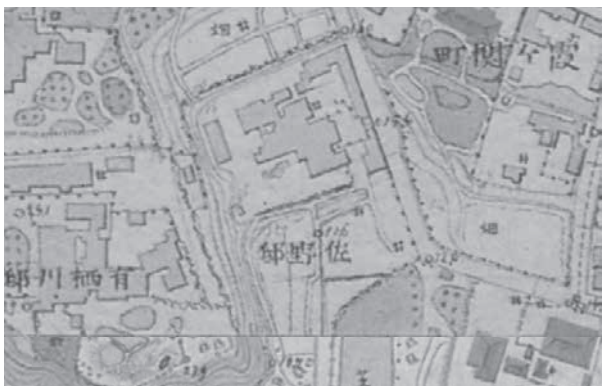
4. 御府内往還其外沿革図書　延宝年中之形 [部分]
国立国会図書館デジタルコレクション



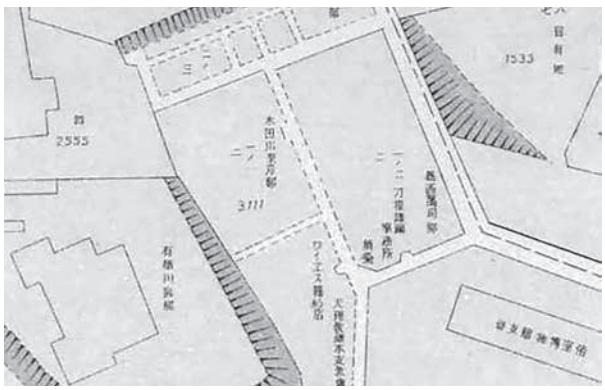
5. 御府内往還其外沿革図書　当時(文久元年)之形 [部分]
国立国会図書館デジタルコレクション



6. 第二大区沽券地図（第二大区一小区）（明治６年）[部分]
東京都公文書館所蔵



7. 五千分一東京図測量原図（明治16年）[部分]
国土地理院所蔵



8. 東京市及接続郡部地籍地図（大正元年）[部分]
国立国会図書館デジタルコレクション

第 1-6 図　土地利用変遷図

構内遺跡（21）、首相官邸内遺跡（10）、千代田区 No.11 遺跡、日枝神社境内遺跡（17）、国会図書館遺跡（24）、近江彦根藩井伊家上屋敷跡（94）などが挙げられる。溜池遺跡は「地理的環境」ならびに「中世」の項で述べたように、近世初頭の上水を担った溜池自体の地点の調査のほか、溜池の谷斜面地あるいは池端に立地する陸奥二本松藩上屋敷や山王神官屋敷地点が調査され、和泉伯方藩上屋敷跡（47）の調査とともに、溜池の埋立てと屋敷地造成、開発による環境悪化の過程が明らかにされている。文部科学省構内遺跡は日向延岡藩内藤家上屋敷が所在した遺跡で、江戸初期の造成痕や区画溝などの遺構が確認されている。東京駅八重洲北口遺跡は都旧跡「北町奉行所跡」であるが、慶長 17 年（1612）のキリスト教禁止令以前に比定されるキリシタン墓が検出されている。開府前後の江戸におけるキリスト教の布教を示す貴重な資料である。

■近代

明治維新後、永田町・霞ヶ関界隈の大名屋敷・武家屋敷地は新政府により収公され、中央官庁や外国公館や宮家や政府要人の邸宅となる。調査地一帯は明治 5 年（1872）に「三年町」と町名が付され、同年の沽券地図（第 1-6 図 6）によると、調査区の主要 2 筆は元老院議長を務め日本赤十字社や日本美術協会の創設に関わった佐野常民（1823-1902）の屋敷に、西側高台（I 区西側）は有栖川宮邸（織仁親王隠邸､明治 36 年に本邸）などの邸宅地となる。南東端部（G-3 区）は明治 6 年（1873）に工学寮工学校（明治 10 年に工部大学校）となる。佐野邸は明治 45 年（1912）頃までに解体されるが、大正元年（1912）の地籍地図（同図 8）では跡地は細分化され、商業地・宅地へと移り変わった様子がうかがえる。三年町の町名は、昭和 42 年（1967）10 月 1 日の住居表示実施により「永田町一丁目」に町名変更が実施された（千代田区教育委員会 1960・1998、平凡社地方資料センター編 2002）。

千代田区内における近代の遺跡としては、軍関連施設や第二次世界大戦下の遺構・遺物が中心となる。北の丸公園内に所在する清水徳川家屋敷跡（98）では、近衛歩兵第一・第二聯隊が駐屯した竹橋陣営の兵舎跡が調査された。陸軍省および参謀本部が置かれていた近江彦根藩井伊家上屋敷跡（94）では、明治期から第二次世界大戦時下の建物跡等が確認された。文部科学省構内遺跡では、第二次世界大戦時下に文部省構内に所在した丸ノ内青年学校の教練に使われた銃刀類が、防空壕内から出土している。（佐藤・大八木）

3　既往調査の概要

永田町一丁目遺跡は、昭和 42 年（1967）の上水木樋の発見に端を発する（東京都教育庁社会教育部文化課 1985）。この時点の遺跡名称は「千代田区 No.37 遺跡」として登録されていた。平成 22 年、周知の埋蔵文化財包蔵地外であった中央合同庁舎第 8 号館整備等事業用地の試掘調査の結果を受けて、千代田区 No.37 遺跡を取り込むように埋蔵文化財包蔵地の範囲が改められ、「永田町一丁目遺跡」と命名された。

本遺跡では､今回の第 3 次調査より前に 2 度の本調査と 2 度の立会調査が行われている（第 1-2 図）。

【千代田区教育委員会による立会調査（平成 19 年）】

遺跡東側に相当する範囲で、平成 19 年の土木工事に伴い立会調査が行われた（金子 2008）。この

立会調査では、掘削が行われる地表下 1m 前後の調査が行われ、それより深い部分については現地保存の措置が取られている。調査範囲の西側では「東京層」の一部にあたる砂層が確認されている。報告では、南東へ向かって急激に下がる傾斜地が段切りされたことにより「東京層」が露出していると推定している。この露出した地山面からは 18 世紀から 19 世紀末までの多数の近世遺構が確認されていることから段切りの時期は近世後半以前と位置付けている。このほか、屋敷境を示すと推定される東西に走る石組溝、上水遺構とされる複数の遺構が検出されている。

【第 1 次調査（平成 22・23 年）】

第 1 次調査は、埋文センターにより中央合同庁舎第 8 号館整備等事業に伴い実施された（東京都埋蔵文化財センター 2011）。発掘調査は 613㎡を対象とし、平成 22 年 10 月 19 日～ 12 月 7 日・同 23 年 7 月 1 日～ 8 月 1 日まで行われた。調査地点は、江戸時代の旗本屋敷地のうち、旗本川窪家から保科家へと変遷した屋敷地内のうち、屋敷の居住空間から南に外れた場所に相当するとされており、調査区中央の遺構分布は希薄であった。検出された遺構は地下室や廃棄土坑と考えられる大型土坑や溝である。年代は 17 世紀後葉から 18 世紀前葉、18 世紀中葉から 19 世紀中葉の 2 期に分かれており、特に 17 世紀後葉から 18 世紀前葉の遺構が集中して検出されている。

【立会調査（平成 22 年区教委調査）】

第 1 次調査地点の北側すなわち第 3 次調査地点の F-1・2 区にあたる地点では、平成 22 年に仮設庁舎および駐車場整備に伴い、第 1 次調査と並行して千代田区教育委員会により立会調査が行われている（東京都埋蔵文化財センター 2011）。調査対象は、工事に伴う掘削が及ぶ地表下約 0.8m までの深度で確認された遺構・遺物である。今回の第 3 次調査 H-2 区で確認された近代の石垣に続くと考えられる石垣が検出されたほか、全体的に江戸時代後期の焼土層が広がっている状況が確認された、と報告されている。焼土層上からは廃棄土坑、溝などの遺構が確認されており、出土遺物からこれらの遺構は 18 世紀末葉から 19 世紀前葉に位置づけられている。なお、第 3 次調査対象範囲のうち、「区教委調査」対象範囲と重なる F-1 区・F-2 区では、「区教委調査」において掘削深度が達しないため現地保存されていた地表面下約 0.8m 以下堆積層が調査対象とされた。

【第 2 次調査（平成 27 年）】

第 2 次調査は、埋文センターにより中央合同庁舎第 8 号館整備等事業に伴い実施された（東京都埋蔵文化財センター 2016）。発掘調査は 149.2㎡を対象とし、平成 27 年 7 月 13 日～ 8 月 31 日まで行われた。調査地点は第 1 次調査地点のすぐ東隣に位置し、第 1 次調査同様旗本川窪家から保科家へと変遷した屋敷地内にあたる。調査の結果 3 面の遺構確認面が検出されており、第 1 面が 18 世紀後葉～ 19 世紀中葉と近代、第 2 面が 17 世紀後葉～ 18 世紀前葉、第 3 面が 17 世紀前葉～中葉に属するとされる。第 1 面では大型の池跡が確認されており、明治 42 年（1909）の 1 万分 1 地形図にも描かれた佐野常民邸に伴うものである可能性が想定されている。第 2 面からは大型の土坑やピット等が検出されている。土坑（235 号遺構）から出土した「野州梁（簗）田郡荒萩村」（現：栃木県足利市）の墨書荷札は、保科家の知行地を直接示す資料である。第 3 面では調査区西側半分で地山が露出するものの、地山は東に向かい傾斜しており、東半分は盛土により平坦面が造られている。この面でも複数の土坑が検出されており、旗本川窪家屋敷に伴うものと想定されている。

（佐藤・大八木）

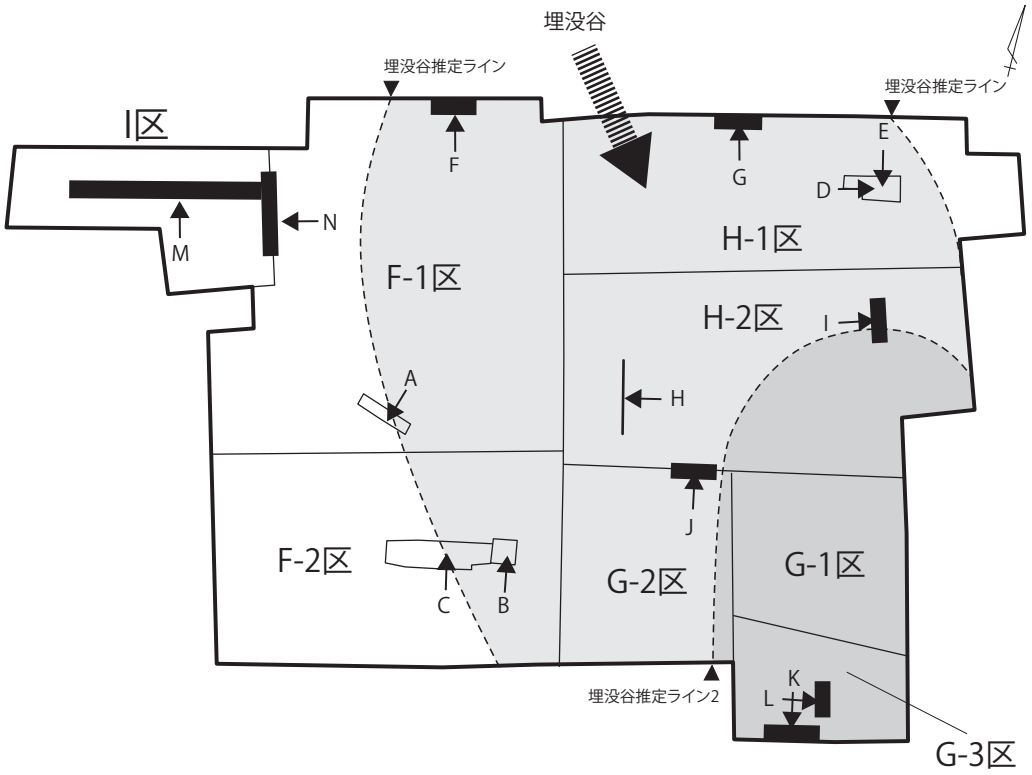
Ⅲ　基本層序

1．自然堆積層の堆積状況

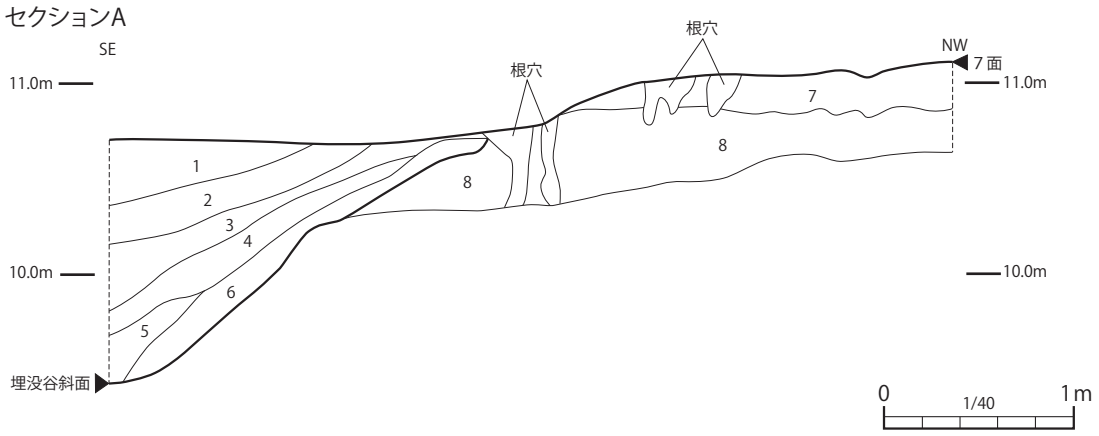
永田町一丁目遺跡は武蔵野台地東端の麹町台地縁辺、南側の溜池に向かって傾斜する斜面地に位置する。第３次調査開始時点では、調査範囲は斜面の中の平坦部となっていたが、これについては武家屋敷地造成に伴い斜面を大きく削平していることが過去調査から明らかになっている。第３次調査範囲の南側（G-2 区）は第１次調査範囲・第２次調査範囲に隣接しており、同一の屋敷地内（旗本川窪家・成瀬家）にあたることから、層序は近い様相にあることが観察された。しかし、調査区北側（F-1 区、H-1 区、H-2 区）は隣接する成瀬家・鳥居家屋敷地内でもあり、層序の様相は大きく異なっていることが判明した。

過去調査時の基本層序、特に自然堆積層について見てみると、第１次調査では下末吉ローム層の下に堆積する海成層「東京層群第１砂質土層」相当の層が基盤層となっている。一方、第二次調査では、黒ボク土に相当する自然堆積層が確認され、これが基盤層となっていた。このような堆積状況について、第２次調査報文では、本来は大きな標高差があったものの、第１次調査地点は武家屋敷造成に伴い、基盤層が大きく削平されたことによるものとしている。

今回調査地点では、最終面にあたる自然堆積層まで掘削したところ、西側高台部（I 区上段）を除くと、大きく分けて調査区西部・中央から南東部・北東部で異なる自然堆積層が確認された。西側では第１次調査で確認された層と同じ「東京層群第１砂質土層」の一部となる砂層、砂質土層、砂質シルト層



第 1-7 図　基本層序セクション位置図



1：10YR3/4(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　ローム粒φ1～2mm2%　白色砂粒φ1mm以下5%
2：10YR2/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　黄褐色砂粒φ1mm以下7%
3：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：やや強い　黄褐色砂粒φ1mm以下10%
4：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　にぶい黄橙色砂質シルトブロックφ10～40mm40%　炭化物粒φ5～20mm2%
5：10YR3/1(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ10～40mm20%
6：2.5Y7/4(浅黄色)　しまり：強い　粘性：あり　砂混じり砂質シルトブロック層　砂質シルトブロックφ10～60mm
7：2.5Y7/6(明黄褐色)　しまり：あり　粘性：なし　ラミナ状に堆積　砂層(東京層第一砂層)
8：2.5Y8/3(淡黄色)　しまり：やや強い　粘性：弱い　ラミナ状に堆積　砂質シルト層(東京層第一砂層)

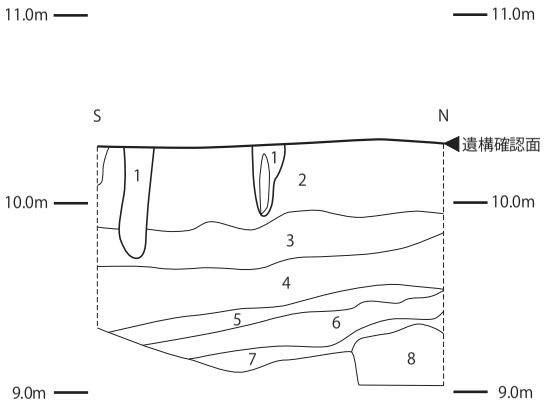
第 1-8 図　F-1 区断ち割りトレンチ（セクション A）(1/40)

およびその上層にあたるローム層が確認された。一方、中央から南東部では第二次調査の際に確認された黒ボク土に対応すると考えられる黒褐色土層及び黒褐色泥炭層が確認された。そして、北東部ではローム層が確認されている。堆積状況を確認するため、調査区内に複数のトレンチを設定し、土層の観察を行った。掘削を行ったトレンチの位置を第 1-7 図に示した。

まず、F-1 区では北西―南東の方向にトレンチを入れたところ、南東に向かって緩やかに傾斜して堆積しているローム層と砂層がトレンチ東端で急激に落ち込んでおり、落ち込んだ部分には黒褐色土が堆積する埋没谷の落ち際にあたることが分かった。第 1-8 図・第 3 分冊図版 3-32-3 にその堆積状況を示した（セクション A)。確認された土層は 8 層に分かれており、1 層から 3 層が黒ボク土に対比される自然堆積層で、ローム粒や砂粒を含んでいる。4 層から 6 層は斜面の崩落に伴い堆積した層と考えられ、黄褐色の砂や砂質シルトをブロック状に含む層となっている。7 層は地山となる砂層で、「東京層群第 1 砂質土層」の一部と考えられる。8 層も同様に「東京層群第 1 砂質土層」の一部と考えられる砂質シルト層である。

F-2 区では、東西方向にトレンチを入れ自然堆積層の堆積状況を確認したところ、F-1 区と同様の砂層とその下層の砂質シルト層が急激に落ち込み、落ち込んだ部分には黒色土が堆積している状況を確認した。第 1-9 図・第 3 分冊図版 3-35-1 にその堆積状況を示した。セクション B では、2 層・3 層が鉄分を吸着した黒色粘質土層であるが、4 層では鉄分の吸着が見られなくなり、5 層と 6 層は黒ボク土に近い土層となる。7 層と 8 層はローム層で、7 層が立川ローム Ⅲ 層、8 層が立川ローム Ⅳ 層に相当するものと考えられる。セクション C で観察された土層は 15 層に分かれており、1 層から 11 層は斜面堆積、12 層から 15 層は水平に堆積していた。1 層から 8 層は黒褐色土層で、粘性が強い。1 ～ 3 層は砂質シルト粒を含み、鉄分の吸着が認められる。4 ～ 8 層は黒ボク土に近い土層で、いずれの層もスコリアを含んでいる。8 層はローム層への漸移層となっており、9 層～ 11 層はローム層となる。9 層～ 11 層はそれぞれ、立川ローム Ⅲ 層、立川ローム Ⅳ 層、立川ローム Ⅴ 層にあたるものと考えられ、セクション B と同様の状況が確認された。12 層から 15 層は水平に堆積する層で、いず

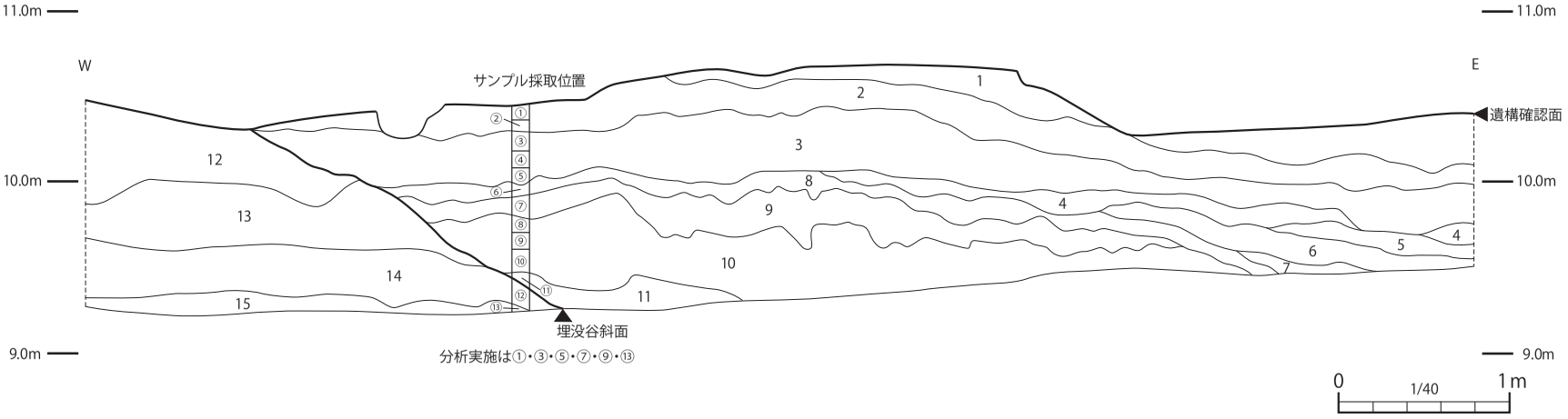
セクションB



SPB-B′
1：10YR2/2(黒褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや強い　砂質シルトブロックφ30mm程度2%　杭跡の覆土
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い　砂質シルト粒φ～3mm3%　鉄分の吸着は南東に行くにしたがい多くなる
3：7.5YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：やや強い　砂質シルト粒φ～3mm5%　しまり極めて強い黄褐色(10YR5/8)粘土ロームブロックφ20～30mm2%　鉄分の吸着が2層・4層より多い
4：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　砂ないし砂質シルト粒φ～3mm2%　北西から南東へ傾斜2・3層と同様北壁の方が乾いている　鉄分の吸着は少ない
5：7.5YR4/3(褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　砂粒φ1mm以下1～2%
6：10YR2/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ3～5mm1%
7：7.5YR4/4(褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　ソフトローム(Ⅲ層)に相当
8：10YR4/6(褐色)　しまり：極強　粘性：強い　橙色スコリアφ～3mm2%　黒色スコリアφ～2mm1%　ハードローム(Ⅳ層)に相当

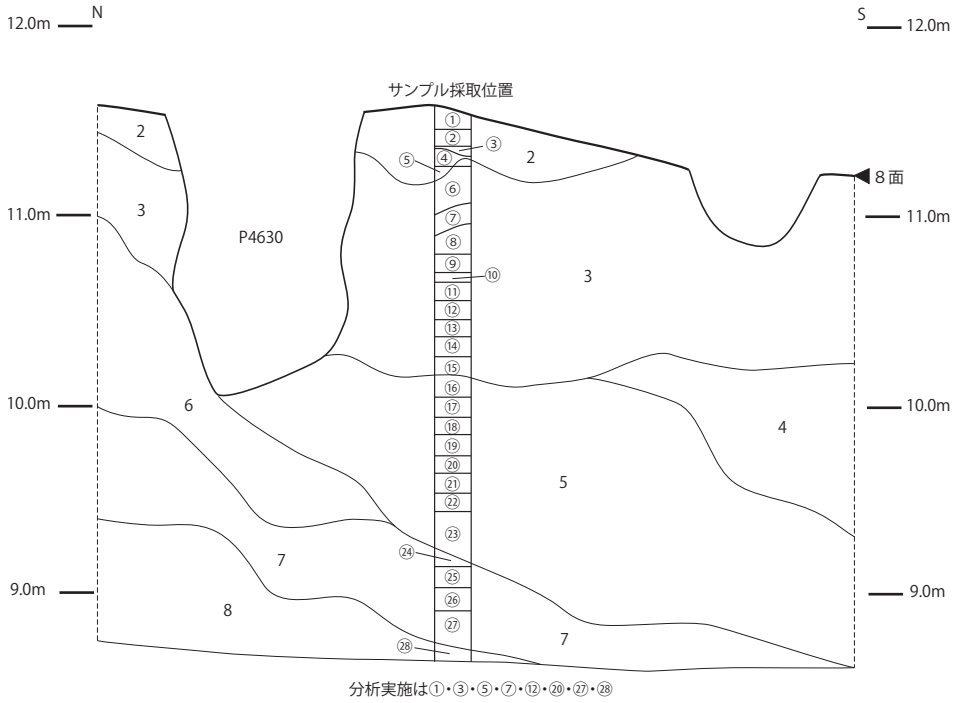
SPC-C′
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い　砂質シルト粒φ～3mm3%　鉄分の吸着は南東に行くにしたがい多くなる
2：7.5YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：やや強い　砂質シルト粒φ～3mm5%　しまり極めて強い黄褐色(10YR5/8)粘土ロームブロックφ20～30mm2%　鉄分の吸着多い
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　砂ないし砂質シルト粒φ～3mm2%　鉄分の吸着少ない
4：7.5YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　しまり：あり　粘性：強い　橙色スコリアφ1～2mm1%未満　炭化物粒φ1～2mm1%未満　ローム粒φ1～5mm5%
5：7.5YR3/3(暗褐色)　しまり：やや弱い　粘性：非常に強い　ローム粒φ1～5mm5%　炭化物粒φ1～2mm1%未満　橙色スコリアφ1～2mm1%未満
6：7.5YR2/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　灰白色(7.5YR8/1)φ1～2mm1%未満　炭化物粒φ1mm1%未満　赤色スコリアφ1～2mm1%
7：10YR2/3(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：強い　暗褐色(10YR3/3)土φ10～15mm10%　赤色スコリアφ1mm1%未満
8：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：強い　黒色スコリアφ1mm1%未満含むロームへの漸移層　赤色スコリアφ1mm1%未満
9：7.5YR4/4(褐色)　しまり：強い　粘性：強い　立川ローム層(ソフトローム)相当か？　赤色スコリアφ1mm1%未満　黒色スコリアφ1mm1%
10：7.5YR4/6(褐色)　しまり：非常に強い　粘性：非常に強い　立川ロームⅣ層相当か？　赤色スコリアφ1mm1%未満　黒色スコリアφ1～2mm1%
11：7.5YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：非常に強い　立川ロームⅤ層相当か？　黒色スコリアφ1mm未満1%未満
12：10YR7/4(にぶい黄橙色)　しまり：非常に強い　粘性：強い　東京層第一砂質土層　灰白色(2.5Y7/1)砂ブロックφ10～50mm5%　褐色(10YR4/4)砂ブロックφ10～20mm3%
13：7.5YR3/4(褐色)　しまり：強い　粘性：強い　東京層第一砂質土層にぶい黄褐色砂(10YR5/4)φ10～20mmのブロック状に15%含む　粒子細　砂質強い
14：10YR5/4(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い　東京層第一砂質土層　にぶい黄褐色(10YR5/4)砂ブロックφ10～20mm5%　にぶい黄橙色(10YR7/4)粘土ブロックφ10～50mm20%
15：7.5YR6/4(にぶい橙色)　しまり：強い　粘性：強い　東京層第一砂質土層　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂ブロックφ10～20mm　浅黄橙色(10YR8/4)粘土ブロックφ5～10mm5%

セクションC

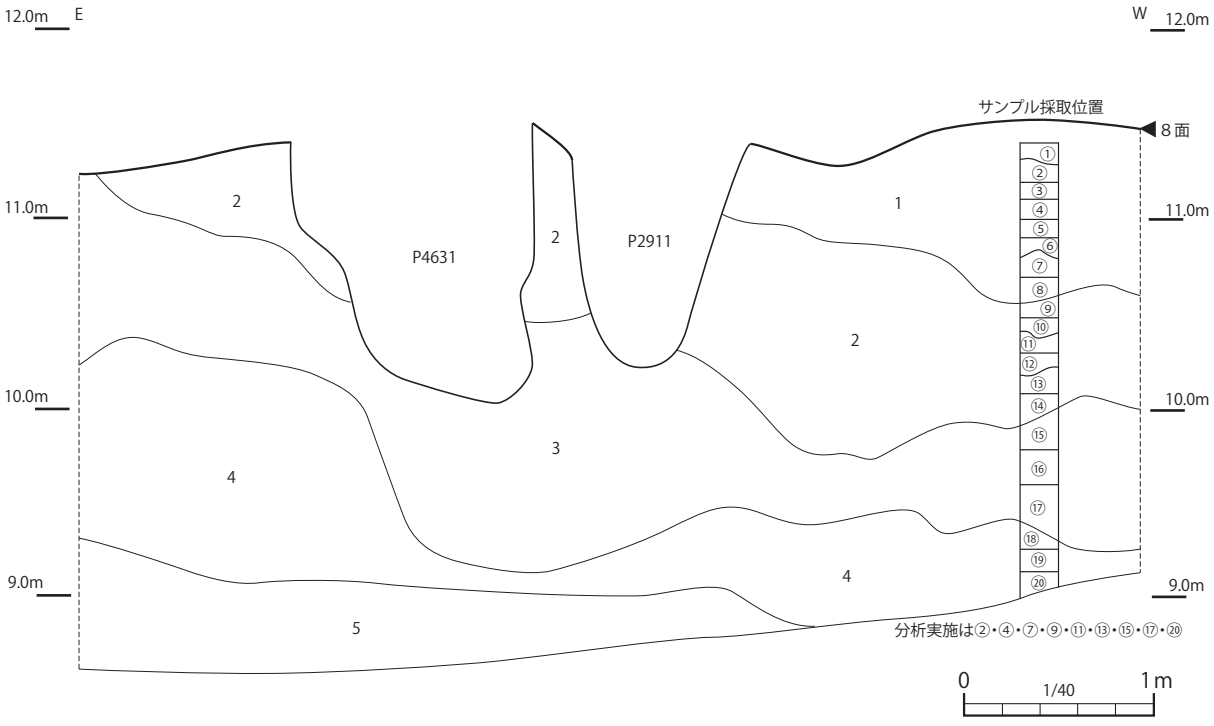


第 1-9 図　F-2 区トレンチ 1 ・ 2 （セクション B ・ C） (1/40)

セクションD



セクションE



1：10YR2/3(黒褐色)　しまり:極強　粘性:極強　ローム粒φ1～5mm1%　焼土粒φ1～3mm1%未満
2：10YR3/4(暗褐色)　しまり:極強　粘性:強い　ローム層φ10～20mmのロームブロック(10YR5/6黄褐色)20%
3：7.5YR3/3(暗褐色)　しまり:極強　粘性:極強　ブロックが固まったように均質でない　橙色スコリアφ1～2mm1%　黒色スコリアφ1～3mm1%　黄色砂粒φ1～5mm2%
4：7.5YR3/3(暗褐色)　しまり:極強　粘性:極強　黄色砂粒φ1～5mm2%
5：10YR3/4(暗褐色)　しまり:強い　粘性:強い　4から６へ漸移的に変化する部分下部ほど砂が多くなる　砂10%
6：10YR5/4(にぶい黄褐色)　しまり:強い　粘性:強い　砂20%　黄褐砂粒φ1～5mm7%
7：10YR3/4(暗褐色)　しまり:極強　粘性:強い　砂15%　黄褐色砂粒φ1～5mm3%　砂質シルト粒φ5～10mm2%
8：10YR5/4(にぶい黄褐色)　しまり:極強　粘性:あり　5Y7/3浅黄砂質シルトブロックφ10～50mm30%

第 1-10 図　H-1 区断ち割りトレンチ（セクション D・E）（1/40）

れの層も「東京層群第一砂質土層」に比定される。

セクションＣでは土層を厚さ５㎝に分割し、連続した土壌サンプルを採取した。サンプル採取位置はセクションＣの図中に示した。採取した①～⑬のサンプルのうち、①・③・⑤のサンプルではテフラの検出同定、⑦・⑨では重鉱物組成分析および火山ガラス比分析、⑬では重鉱物組成分析を行った。その結果、①・③・⑤からは極微量の火山ガラスが検出されたのみであることから武蔵野台地の標準的な黒ボク土層の下半部と対比される。ローム層にあたるサンプル⑦と⑨では、ガラスの特徴から⑦が立川ロームⅢ層に対比され、⑨がⅢ層下部からⅣ層上部に対比される。同じくローム層である⑬はⅢ層下部からⅣ層上部より下位のローム層に対比されることが分析により明らかにされている。

「東京層群第１砂質土層」と黒色土層およびローム層の境界部分は不整合面となっていることから、セクションＣは埋没谷の落ち際にあたり、黒色土層は埋没谷内の堆積土と判断した。また、上層に堆積する１層から３層は砂質シルト粒を含み、鉄分を吸着する粘質土層であることから、黒ボク土相当の４層から８層の堆積後、旗本屋敷拝領までの間に土層が何らかの水の影響を受けるような現象があったものと考えられる。

H-1 区では、調査区東部の堆積状況を確認するため、２ｍ×３ｍのトレンチを設定し、掘削した。第 1-10 図･第３分冊図版 3-34 に東壁（セクションＤ）と南壁（セクションＥ）の土層断面図を示した。セクションＤでは土層は南に傾斜して堆積している状況が観察された。一方、セクションＥでは西に向かって傾斜して堆積していた。土層は８層に分かれており、１層は F-1 区で確認された第 1-8 図１層から３層と同様の黒褐色土層である。２層はローム層である。３層から８層は崩落に伴う堆積と考えられ、３層と４層ではロームブロックや砂を含むが、５層から８層ではロームブロックが含まれず、次第に砂質シルトブロックの含有量が増加していく。

セクションＤとセクションＥではそれぞれ土層を厚さ５㎝に分割し、連続した土壌サンプルを採取した。サンプル採取位置はセクションＤ、セクションＥそれぞれの図中に示した。セクションＤでは採取したサンプル①から㉘のうち、①・③・⑤・⑦で重鉱物組成および火山ガラス比分析を、⑫・⑳・㉗・㉘で重鉱物組成分析を行った。①と③では重鉱物組成から立川ロームⅨ層中部付近に対比される可能性が指摘される。サンプル⑦以下は風化の進んだ状況が観察されたことから台地斜面の表層で崩落などを繰り返して形成されたものと指摘されている。

セクションＥでは、採取したサンプル①～⑳のうち、②と④でテフラ検出同定、⑦・⑨・⑪・⑬・⑮で重鉱物組成および火山ガラス比分析、⑰と⑳で重鉱物組成の分析を行った。②と④の分析からは、武蔵野台地の標準的な黒ボク土層の下半部に対比され、3500 年前以前に形成された土層であると指摘される。重鉱物組成および火山ガラス比分析では⑨が立川ロームⅢ層、⑪がⅢ層下部からⅣ層上部付近に対比され、⑬以下はⅢ層下部からⅣ層上部よりも下位のローム層に対比されるとされた。

以上のことから、F-1 区・F-2 区でその落ち際を確認した埋没谷は南側の溜池に向かって開く谷にあたり、H-1 区北東部に位置するセクションＤやセクションＥで対岸の立ち上がりが確認された。Ⅰ区および F-1 区・F-2 区の一部を除いた調査区の大部分および第１次調査・第２次調査範囲が埋没谷上に形成された遺跡であることが明らかになったと言える。埋没谷の推定ラインを第 1-7 図に示した。また、後述する G-1 区や G-3 区、H-2 区の堆積状況からは埋没谷が調査範囲の南東部分でさらに落ち込んでおり、旗本屋敷地造成まで埋没していなかった可能性が考えられる。

2．盛土の堆積状況と遺構確認面について

永田町一丁目遺跡では、中世以降近代に至るまで盛土造成と整地が繰り返し行われ、その結果多数の生活面が累積していた。調査では、調査区ごとに確認された面を上から順に１面、２面…と付番し、焼土層の重なりなどによりさらに細分できる場合には 3-1 面などと細分した。近代については近代１面、近代２面とした。各面の年代は区ごとに異なっており、その対応関係は第 1-3 表に示した。なお、F-2 区については、自然堆積層（基盤層）まで後世の削平が及んでおり、基盤層上を遺構確認面として調査を行ったため、各時期を一括して１面としている。

各調査区の最終面は前節において述べてきた黒ボク土や砂層、ローム層といった自然堆積層上を遺構確認面としている。この面からは旗本屋敷拝領以前の遺構・遺物が確認されている。F-1 区では７面、H-1 区・H-2 区では８面がそれにあたる。また、H- １区・H-2 区においては旗本屋敷拝領以前の盛土層が確認され、盛土層上を７面として調査を行った。F- ２区・G-1 区・G-2 区では自然堆積層上まで掘削を行ったが旗本屋敷拝領以前の遺構・遺物は確認されていない。最終面からは最初の旗本屋敷拝領者である川窪家に伴うと考えられる遺構が発見されている。

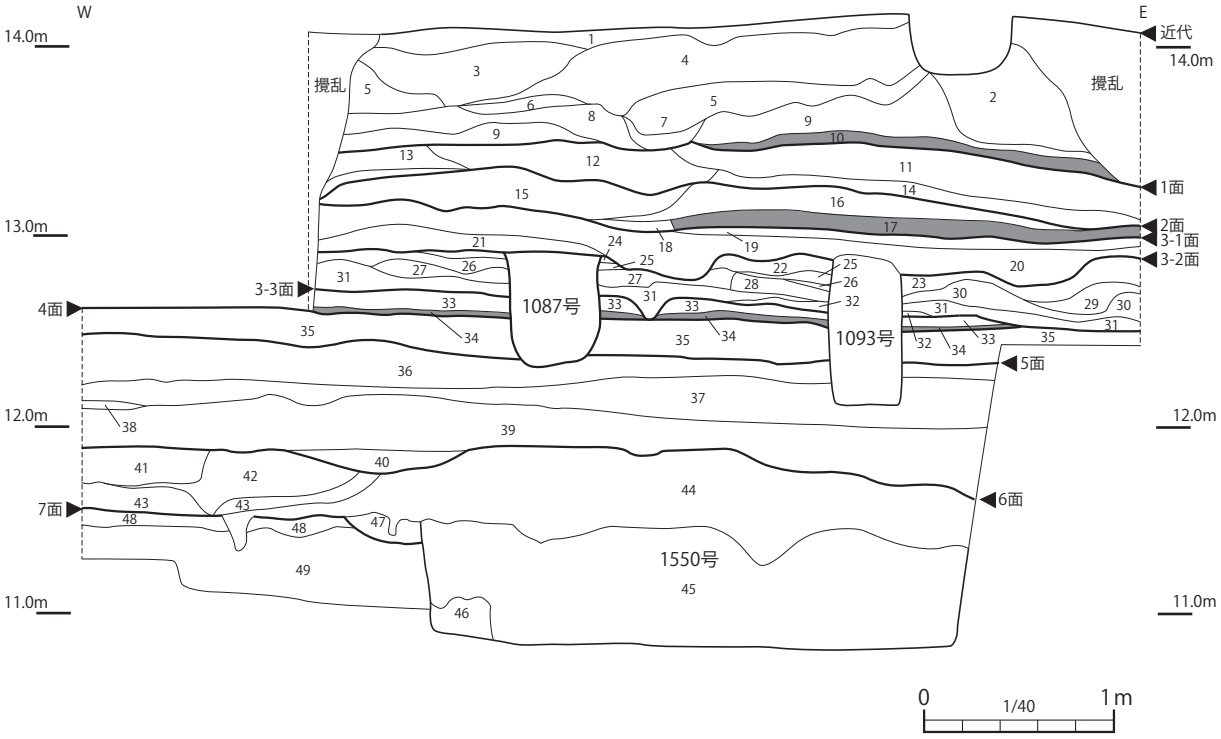
近世に入ると、谷を埋めるために厚い盛土が行われている。その後、成瀬家、鳥居家屋敷範囲にあたる F-1 区と H-1 区、H-2 区では１面、２面、3-1 面、3-2 面、3-3 面、3-4 面、４面、５面、６面の計９面が確認されている。また、G-1 区も絵図上では成瀬家・鳥居家屋敷範囲内ではあるが、確認された面数は１面、２面、３面、４面の計５面となっている。川窪家・保科家屋敷範囲にあたる G-2 区では 1-1 面、1-2 面、1-3 面、1-4 面、２面、３面、４面、５面の計８面を確認している。また、吉田家・林家などの屋敷範囲にあたる G-3 区では１面、２面、３面、４面、５面の計５面を確認している。

各調査区のそれぞれの面の対応関係については、土層の堆積状況、特に宝永火山灰や広域に分布する焼土層や遺構の重複関係、出土遺物から判断している。F-1 区、H-1 区、H-2 区は同じ屋敷地内にあたり、区をまたいで連続して堆積する土層が確認されたことから、遺構が確認できなかった面は一部で見られたものの、各面の年代観は概ね一致しているものと判断している。屋敷地の異なる G-2 区

第 1-3 表　遺構確認面対応表

<table>
<tr><th colspan="10">成瀬→鳥居家</th><th colspan="3">川窪→保科家</th><th colspan="3">川窪→保科家（第１次・２次調査）</th><th>林家ほか</th><th>五井平松家</th><th rowspan="2">備考</th></tr>
<tr><th>F-1</th><th>H-1西</th><th>H-1東</th><th>H-2北西</th><th>H-2北東</th><th>G-1</th><th>H-2南東</th><th>H-2南西</th><th>G-2</th><th>F-2</th><th>第１次</th><th>第２次</th><th>第２次調査における時期区分</th><th>G-3</th><th>I</th></tr>
<tr><td>近代</td><td>近代</td><td>—</td><td>近代</td><td>近代</td><td>近代</td><td>近代</td><td>近代</td><td>近代</td><td rowspan="11">1・2</td><td>Ⅳ期</td><td>Ⅳ期</td><td>Ⅳ期：明治期以降</td><td>近代</td><td>近代</td><td>佐野常民邸</td></tr>
<tr><td rowspan="2">1</td><td rowspan="2">1</td><td rowspan="3">—</td><td rowspan="2">1</td><td rowspan="2">1</td><td>1-1</td><td rowspan="2">1</td><td rowspan="2">1</td><td>1-1</td><td rowspan="2">Ⅲ期</td><td rowspan="2">Ⅲ期</td><td rowspan="2">Ⅲ期：保科家屋敷地他（18 世紀後葉～ 19 世紀中葉）</td><td rowspan="2">1</td><td rowspan="2">1</td><td rowspan="9">旗本屋敷</td></tr>
<tr><td>1-2</td><td>1-2</td></tr>
<tr><td>2</td><td>2</td><td>2</td><td>2</td><td>2</td><td>2</td><td>2</td><td>1-3・1-4</td><td></td><td>2</td><td>2</td></tr>
<tr><td>3-1</td><td>3-1</td><td rowspan="3">3</td><td>3-1</td><td>3-1</td><td rowspan="3">3</td><td>3-1</td><td>3-1</td><td>2</td><td rowspan="4">Ⅱ期</td><td rowspan="4">Ⅱ期</td><td rowspan="4">Ⅱ期：保科家屋敷地他（17 世紀中葉～ 18 世紀中葉）</td><td rowspan="4">3</td><td rowspan="4">3・4</td></tr>
<tr><td>3-2</td><td>3-2</td><td>3-2</td><td>3-2</td><td>—</td><td>—</td><td rowspan="2">3</td></tr>
<tr><td>3-3</td><td>3-3</td><td>3-3・3-4</td><td>3-3</td><td>—</td><td>3-3</td></tr>
<tr><td>4</td><td>4</td><td>4</td><td>4</td><td>4</td><td>4</td><td>4</td><td>4</td><td>4</td><td>4</td><td>5</td></tr>
<tr><td>5</td><td>5</td><td>5</td><td>5</td><td></td><td></td><td></td><td>5</td><td rowspan="2">5</td><td>—</td><td rowspan="2">Ⅰ期</td><td rowspan="2">Ⅰ期：川窪家屋敷地他（17 世紀前葉～中葉）</td><td rowspan="2">5</td><td>—</td></tr>
<tr><td>6</td><td>6</td><td>6</td><td>6</td><td>6</td><td>5</td><td>6</td><td>6</td><td>—</td><td rowspan="2">—</td></tr>
<tr><td rowspan="2">7</td><td>7</td><td>7</td><td>7</td><td>7</td><td>—</td><td>7</td><td>7</td><td>—</td><td>—</td><td>—</td><td>—</td><td>—</td><td>—</td><td>—</td><td>中世末近世初頭</td></tr>
<tr><td>8</td><td>8</td><td>8</td><td>8</td><td>—</td><td>8</td><td></td><td>—</td><td>—</td><td>—</td><td>—</td><td>—</td><td>—</td><td>—</td><td>中世末</td></tr>
</table>

セクションF



1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:やや強い　粘性:やや弱い　ローム粒φ3～5mm5%　炭化物φ3～5mm2%　焼けた瓦細片φ5～10mm10%　近代
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり:あり　粘性:やや弱い　炭化物粒φ10～15mm10%　焼けた瓦細片φ5～15mm10%　砂質土
3：10YR4/1(褐灰色)　しまり:強い　粘性:強い　黄橙(10YR8/6)シルトブロックφ3～5mm10%　炭化物φ3～10mm3%　焼けた瓦細片φ5～10mm5% 粘土層
4：10YR3/4(暗褐色)　しまり:あり　粘性:弱い　黄褐色砂ブロックφ5～10mm10%　焼土粒φ3～5mm2%　炭化物粒φ5～10mm3%
5：10YR3/4(暗褐色)　しまり:やや弱い　粘性:弱い　ローム粒φ3～5mm3%　黄橙シルトブロックφ3～5mm7%　砂質土
6：10YR3/3(暗褐色)　炭化物20%　砂質土
7：10YR3/3(暗褐色)　しまり:やや弱い　粘性:やや弱い　褐灰色(10YR5/1)粘土ブロックφ20～40mm15%
8：10YR3/2(黒褐色)　しまり:あり　粘性:やや弱い　炭化物φ3～5mm7%　焼土or焼けた瓦細片φ3～5mm5%　小円礫φ10～20mm3%砂質土
9：10YR3/2(黒褐色)　しまり:あり　粘性:やや弱い　焼土粒or焼けた瓦細片φ5～20mm20%　瓦多　砂質土
10：10YR3/3(暗褐色)　しまり:あり　粘性:やや弱い　炭化物粒φ5～10mm5%　焼けた瓦細片φ5～15mm20%
11：10YR3/3(暗褐色)　しまり:あり　粘性:弱い　黄褐色砂質シルトブロックφ10～20mm10%　褐灰色粘土ブロックφ10～20mm3%　焼土粒φ3～5mm10%　炭化物粒φ5～10mm7%　砂質土
12：10YR3/2(黒褐色)　しまり:あり　粘性:やや弱い　ローム粒φ3～5mm2%　焼土or焼けた瓦細片φ3～10mm10%　炭化物粒φ5～10mm5%　小円礫φ15～30mm2%　瓦やや多い
13：10YR3/3(暗褐色)　しまり:あり　粘性:弱い　明黄褐色(2.5Y7/6)砂質シルトブロックφ5mm程度3%　褐灰粘土粒φ3～5mm1%　焼土粒φ3～5mm5%　炭化物粒φ3～5mm3%砂質土
14：10YR3/1(黒褐色)　しまり:強い　粘性:強い　小円礫φ20～50mm10%　粘土層
15：10YR3/3(暗褐色)　しまり:あり　粘性:弱い　焼土粒or焼けた瓦細片φ5～10mm20%　炭化物φ5～10mm5%　瓦多　砂質土層
16：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:あり　粘性:やや弱い　炭化物φ10～15mm2%　焼けた瓦細片φ5～10mm10%　瓦含む　砂質土層
17：焼土層　瓦多い
18：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり;あり　粘性:やや弱い　炭化物粒φ3～5mm3%　焼けた瓦細片φ3～10mm15%
19：10YR4/1(褐灰色)　砂混じり粘質土層　しまり:あり　粘性:あり　炭化物φ10～20mm2%
20：10YR3/2(黒褐色)　しまり:あり　粘性:あり　黄褐色砂シルトブロックφ5～10mm3%　炭化物粒φ5～10mm3%
21：10YR3/3(暗褐色)　砂質土　しまり:強い　粘性:弱い　ロームブロックφ10～20mm25%　砂質シルトブロック(10YR7/4)φ10～50mm20%
22：10YR3/2(黒褐色)　砂質土　しまり:あり　粘性:やや弱い　焼土粒φ3～5mm3%　炭化物粒φ5～10mm7%
23：10YR4/3(にぶい黄褐色)　砂質土　しまり:やや強い　粘性:弱い　焼土粒φ3～5mm5%　炭化物粒φ3～5mm3%
24：2.5Y4/6(赤褐色)　炭化物φ5～10mm3%　黄褐色砂ブロックφ20～30mm10%　焼土層
25：10YR3/3(暗褐色)　砂質土　しまり:あり　粘性:弱い　ローム粒φ2～3mm3%　炭化物φ2～5mm3%
26：2.5Y6/6(明黄褐色)　焼土粒φ5～10mm10%　炭化物φ5～10mm3%　砂層
27：2.5YR4/6(赤褐色) しまり:あり 粘性:なし　炭化物φ10～30mm10%　灰φ10～20mm7%　焼土層
28：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:強い　粘性:弱い　黄褐色砂30%　砂まじり粘土層
29：10YR4/4(褐色)　しまり:強い　粘性:あり　砂φ1～3mm30%　炭化物粒φ3～5mm10%
30：炭化物層
31：10YR5/4(にぶい黄褐色)　黄褐色砂30%　砂混じり粘土層
32：2.5Y7/6(明黄褐色)　しまり:あり　粘性:なし　砂層
33：2.5YR3/6(暗赤褐色)　しまり:やや強い　粘性:なし　炭化物粒φ10～30mm10%　近世3-3面粘土層
34：焼土層
35：10YR3/2(黒褐色)　しまり:強い　粘性:あり　ロームブロックφ15～20mm10%　砂質シルトブロックφ15～20mm5%
36：10YR5/3(灰黄褐色)　しまり:強い　粘性:強い　砂混じりシルト層　5面硬化面
37：2.5Y6/6(明黄褐色)　しまり:強い　粘性:弱い　シルト､砂利､砂､黒褐色土(10YR2/3)で構成される硬化面
38：10YR4/1(褐灰色)　しまり:やや強い　粘性:あり
39：10YR3/2　しまり:あり　粘性:あり　ローム粒φ1～3mm7%　焼土粒φ1~3mm1%　炭化物粒φ1~10mm3%
40：土説なし
41：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:やや強い　粘性:やや強い　ロームブロックφ10～40mm3%　黄褐色砂粒φ5mm1%
42：10YR3/1(黒褐色)　しまり:やや強い　粘性:強い　ロームブロックφ10～30mm5%
43：10YR3/2(黒褐色)　しまり:あり　粘性:あり　ロームブロックφ10～20mm5%
44：10YR3/2(黒褐色)　しまり:やや強い　粘性:あり　ローム粒φ1~5mm3%　焼土粒φ1~5mm3%　炭化物粒φ1~5mm3%
45：10YR3/2(黒褐色)　しまり:強い　粘性:あり　ローム粒φ5～10mm2%　焼土粒φ1～3mm1%
46：10YR5/4(にぶい黄褐色)　しまり:強い　粘性:強い　ロームブロック層
47：10YR5/4(にぶい黄褐色)　しまり:強い　粘性:強い　ロームブロック層
48：10YR5/6(黄褐色)　しまり:強い　粘性:強い　ローム層　橙色スコリアφ1～2mm2%　黒色スコリアφ1～2mm5%
49：10YR3/4(暗褐色)　しまり:強い　粘性:強い　ローム層　橙色スコリアφ1～2mm1%　砂3%

第 1-11 図　F-1 区基本層序（セクション F）（1/40）

との対応関係については、例えば、G-2 区では 1-4 面で宝永の火山灰層を確認したが、H-2 区では 2 面で確認されたことから、同時期の生活面としている。

近代は基本的に近代面とした 1 面のみであるが、H-2 区南西部のみ、建物跡基礎や土管などの埋設された遺構の調査のため近代 1 面、近代 2 面、近代 3 面として調査を行っている。この近世の盛土層の堆積状況は屋敷の境界や土地利用の状況により異なっているため、調査区ごとに層序を示す。また、調査区ごとに地表面の標高、掘削深度が異なっているため、それについては第 18 図に柱状図としてまとめた。なお、掘削深度は各面の標高の平均値から作成しており、以下に示す層序とは一致しない。

【F-1 区】

F-1 区は旗本成瀬家・鳥居家屋敷の屋敷範囲にあたる。第 1-11 図・第 3 分冊図版 3-32-1・2 は F-1 区北東部の近代面以下の層序を示したものである（セクション F）。

1 層上面が近代面、11 層から 13 層の上面が 1 面にあたる。なお、10 層は 1 面上で見られた焼土層である。近代盛土層にあたる 1 層から 9 層は焼土や被熱した瓦の細片などを含むのが特徴的である。11 層から 14 層が 1 面盛土層である。11 層から 13 層は砂質土層で、砂質シルトブロックや粘土ブロック、焼土を特徴的に含んでいる。また、14 層は黒褐色の粘土層となっている。

15 層から 17 層の上面が 2 面にあたり、15 層・16 層が 2 面盛土層となる。15 層と 16 層はいずれも砂質土層で、被熱した瓦の細片や炭化物粒を含む。

3 面は F-1 区においては 3 枚の焼土層が検出されたことから 3-1 面・3-2 面・3-3 面に分かれる。2 面盛土層下の 19 層・20 層上面が 3-1 面となる。17 層は 3-1 面上に堆積した焼土層で瓦を多く含んでいる。19 層から 21 層が 3-1 面盛土層である。19 層は砂の混じる粘質土層、20 層はシルトブロックを含む黒褐色土層、21 層はロームブロックとシルトブロックを含む層である。

22 層から 23 層上面が 3-2 面にあたる。3-2 面では 3-1 面や 3-3 面で見られるような焼土層は調査区中央部にのみ分布し、壁面では捉えられなかった。22 層から 32 層が 3-2 面盛土層となる。3-2 面盛土層は多様な層が薄く堆積しており、22 層から 24 層は砂質土層、25 層と 27 層は焼土層、26 層と 32 層は砂層、28 層と 31 層は砂の混じる粘土層、30 層は炭化物層となる。

33 層上面が 3-3 面にあたる。33 層と 34 層が 3-3 面盛土層で、33 層は粘土層、34 層は焼土層である。

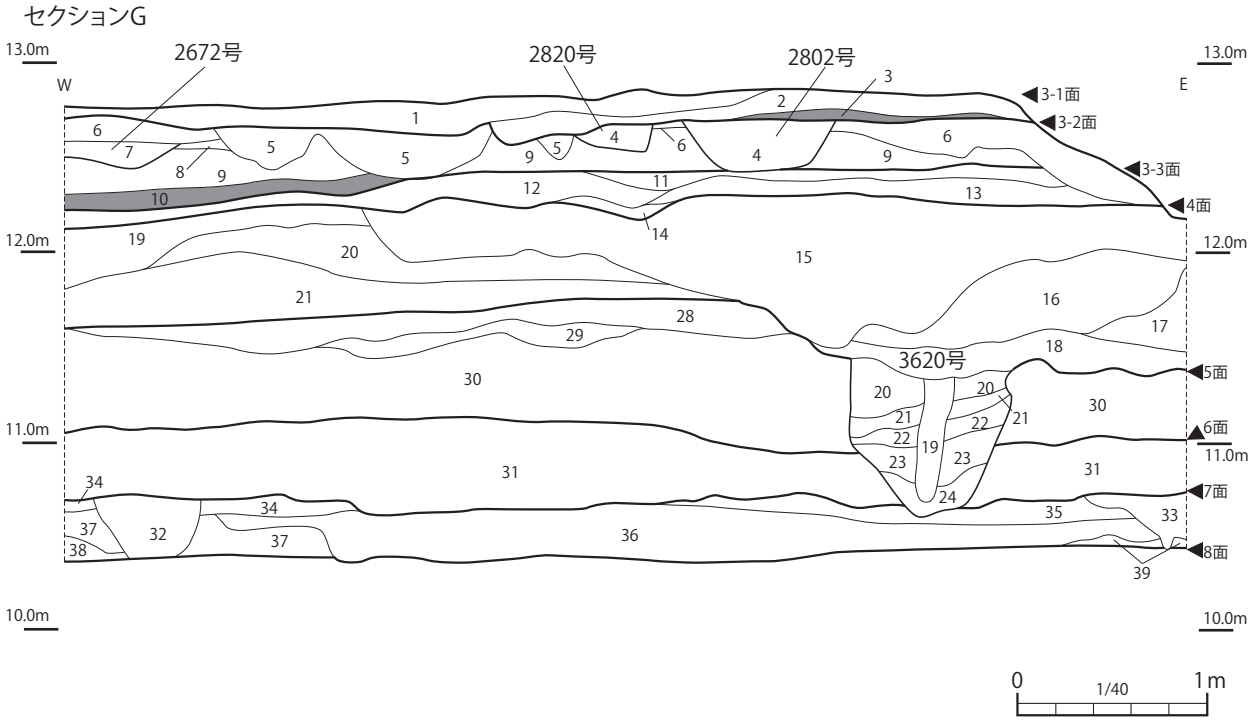
35 層上面が 4 面にあたる。35 層が 4 面盛土層となる。35 層はロームブロックを多く含むのが特徴である。

36 層上面が 5 面にあたる。36 層と 37 層はシルトや粘土、砂などで構成される 5 面のタタキ状の硬化範囲にあたる部分で、F-1 区では北東部のみで見られた。38 層・39 層が 5 面盛土層で、38 層は褐灰色土、39 層はローム粒や焼土粒、炭化物粒を含む黒褐色土層である。

41 層・42 層・44 層上面が 6 面にあたる。41 層～ 44 層が 6 面盛土層で、いずれの層もロームブロックや焼土、炭化物を少量含む層である。48 層上面が 7 面にあたる。7 面以下の 48 層と 49 層は自然堆積層であるローム層である。

【H-1 区】

F-1 区の東に隣接する H- 1 区は同じ旗本成瀬家・鳥居家の屋敷範囲であることから非常に近い堆積状況が見られた。第 1-12 図・第 3 分冊図版 3-33-1・2・3 に H-1 区中央部の堆積状況を示した（セクション G）。



1：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　砂ブロックφ5～15mm2%　粘土φ5～10mm2%　焼土粒φ3～10mm3%　炭化物粒φ2～5mm2%　砂質土層
2：10YR5/4(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：なし　砂層
3：焼土層
4：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　粘土ブロックφ10～100mm3%　炭化物粒φ2～5mm2%　砂質土層
5：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　砂ブロックφ5～15mm1%　粘土ブロックφ1～15mm1%　焼土粒φ2～5mm3%　炭化物粒φ2～5mm2%
6：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　粘土ブロックφ10～20mm3%　炭化物粒φ10～20mm2%
7：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　10YR6/1褐灰色粘土ブロックφ10～20mm3%　砂質土層
8：粘土層
9：10YR7/4(にぶい黄橙)　粘土ブロック層(φ10～30mm50%)10YR5/2灰黄褐色土30%　10YR7/3にぶい黄橙色砂20%
10：焼土層
11：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　9層との境にφ1～2mmの焼土層とφ1～2mmのローム層入る　砂質土層
12：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ5～10mm10%　砂質シルトブロックφ10～15mm2%　粘土ブロックφ10～20mm2%　砂質土層
13：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ2～5mm10%　ロームブロックφ10～20mm5%　粘土ブロックφ10～30mm2%
14：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　黄褐砂φ1～10mm40%
15：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ3～5mm1%　砂ブロックφ10～20mm3%　焼土粒φ2～5mm1%　炭化物粒φ5～10mm3%　黒褐色土ブロックφ10～30mm3%
16：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ3～5mm5%　砂ブロックφ10～20mm　焼土粒φ2～3mm1%　黒褐色土粒φ5～10mm2%
17：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ2～10mm2%　砂質シルトブロックφ10～20mm3%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～2mm1%
18：10TR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：極強　ローム粒φ2～10mm2%　砂質シルト粒φ3～10mm3%　炭化物粒φ2～5mm1%
19：2.5Y6/6(明黄褐色)　砂層　しまり：あり　粘性：なし　暗褐色土φ10～30mm10%
20：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ロームブロックφ10～30mm20%　炭化物粒φ5～10mm2%
21：ロームブロック層　しまり：強い　粘性：強い　10YR5/4にぶい黄褐　砂質シルトブロックφ20～30mm3%　間には10YR4/2灰黄褐土　砂混じり
22：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　砂質シルトブロックφ10～15mm7%　柱痕
23：10YR5/4(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：やや弱い　砂質シルトブロックφ10～20mm10%　粘土ブロック(10YR7/6)φ5～10mm3%10YR3/2粘土20%
24：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：強い　砂質シルト粒φ5～10mm5%　炭化物粒φ2～3mm1%
25：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　ローム粒φ5～10mm3%　砂質シルトφ3～10mm3%
26：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　砂質シルトφ3～5mm2%
27：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：極強　粘性：強い　シルトφ10～20mm10%　10YR3/2黒褐色土φ10～30mm20%
28：10YR3/3(暗褐色)　しまり：極強　粘性：強い　砂質シルトブロックφ10～30mm10%　粘土(10YR8/3)ブロックφ10～15mm2%　炭化物粒φ2～5mm1%
29：10YR3/2(黒褐色)　しまり：極強　粘性：強い　砂質シルト粒φ5～10mm15%　粘土(2.5Y7/8)粒φ3～5mm2%　黒色土(10YR1.7/1)15%
30：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm2%炭化物粒φ5～10mm1%　砂質シルト粒φ3～10mm10%　砂質シルトブロックφ15～150mm15%　黒色土(10YR2/1)30%マーブル状に
31：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ3～5mm2%　粘土(10YR5/2)φ5～10mm2%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ2～5mm1%
32：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂φ40～60mm20%
33：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ロームブロックφ15～30mm2%　砂混じりロームブロックφ20～50mm30%　黒色土(10YR1.7/1)10%
34：2.5Y7/6(明黄褐色)　しまり：あり　粘性：なし　砂層
35：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ロームブロックφ10～100mm5%　褐色ロームブロックφ10～100mm50%
36：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ロームブロックφ10～100mm10%　褐色ロームブロックφ10～100mm30%
37：2.5Y7/6(明黄褐色)　砂層
38：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ロームφ20～100mm20%　炭化物粒φ5～10mm1%

第 1-12 図　H-1 区基本層序（セクション G）(1/40)

第 3 分冊図版 3-33-1 は H-1 区地表下から 3-1 面にかけての堆積状況である。表土層および近代盛土層は崩落予防の土留めを行ったため、セクション図を作成することはできなかったが、表土層および近代盛土層下に 2520 号とした焼土と被熱した瓦の層が厚く堆積していることを確認した。2520 号については第Ⅳ章において詳述するが、層の厚みはおおよそ 1 mから 1.5 mになる。2520 号の底面にはこれとは異なる焼土層が広がっていることが発見され、これを 3-1 面とした。

第 1-12 図・図版 3-33-2 に 3-1 面から 8 面までの層序を示した。1 層の上面が 3-1 面にあたる。1 層と 2 層が 3-1 面盛土層である。1 層は砂質土層、2 層は砂層で、1 層は砂や粘土、焼土などを含む。

6層上面が3-2面にあたる。3層は6層上面に堆積した焼土層で3-2面焼土層とした。4層と7層は3-2面の遺構覆土にあたる。4層と7層はいずれも砂質土層で、砂や粘土、焼土などを含んでいる。5層、6層、8層、9層が3-2面盛土層である5層と、6層、9層は粘土ブロックを特徴的に含む層で、8層は粘土層である。

11層と12層の上面が3-3面にあたる。また、10層は焼土層で、3-3面焼土層とした。11層から14層が3-3面盛土層となる。11層から14層はいずれもしまりの強い砂質土層で、ロームブロックや砂質シルトブロック、粘土ブロックを含んでいる。

15層と18層の上面が4面にあたる。15層から21層が4面盛土層となる。15層から18層はしまりの強い黒褐色土層でローム粒や砂、砂質シルト粒などを含む。19層は砂層、20層はロームブロックを多く含む灰黄褐色土層で21層はロームブロック層となる。

28層と30層の上面が5面にあたる。しかし、土層断面の東側では、28層が見られず、その下層の30層上面が5面となっており、H-1区東側が段切り状に一段低くなる状況が確認された。22層から27層は3620号の覆土にあたる。28層～30層は5面盛土層にあたり、しまりが極めて強く、ローム粒や砂質シルト粒を特徴的に含む層である。

31層上面が6面となる。31層は6面の盛土層である。この31層はローム粒や粘土粒、焼土粒、炭化物粒の他、中世遺物を含む。

33層、34層、35層、36層上面が7面にあたる。32層から38層が7面盛土層にあたる。32層は砂を多く含む層、34層と37層は砂層、33層と35層、36層、38層はロームブロックを多く含む層である。36層、37層、38層下には自然堆積層である黒褐色土層が堆積し、この黒褐色土層上が8面となる。

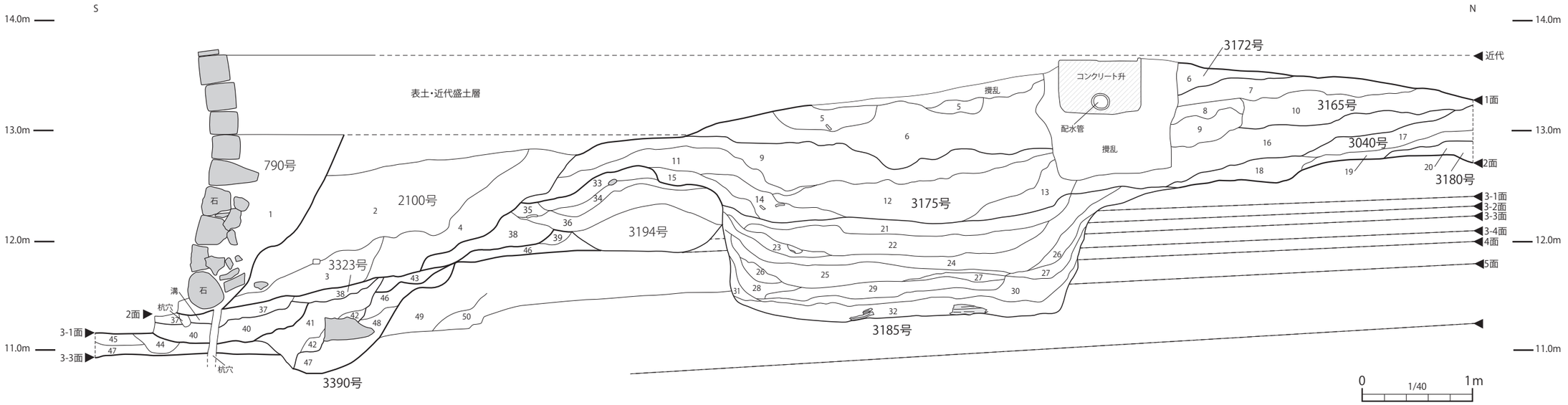
【H-2区】

H-2区は旗本成瀬家・鳥居家屋敷地の南端から旗本川窪家・保科家屋敷地の北東部までを含む調査区で、盛土の堆積状況も屋敷の境界を境に二分される。H-2区北側の旗本成瀬家・鳥居家屋敷地にあたる部分では北側に隣接するH-1区の堆積状況と共通する部分が多く、旗本川窪家・保科家屋敷地に含まれる南西部はG-2区の堆積状況と共通する。また、G-1区は旗本成瀬家・鳥居家屋敷地が南に張り出した部分にあたることから、堆積状況はH-2区南東から北東部と共通する部分が多く見られた。第1-13図・図版3-36-1と第1-14図・図版3-36-2に層序を示した。

セクションH（第1-13図・図版3-36-1）は屋敷の境界にあたる部分である。1層は近代の石垣（790号）の裏込めにあたり、2層から20層が1面の盛土層にあたる。1面の盛土層のなかでも陶磁器や瓦などを含む特徴的な層については遺構番号を付番している。2層から4層は2100号とした瓦層で、旗本成瀬家・鳥居家屋敷地側と旗本川窪家・保科家屋敷地の境界部分に堆積している。5層と6層は3172号とした瓦層にあたる。7層から9層は3172号と3165号の間層となる部分で、砂や炭化物などを含むしまりの強い層で瓦を含まない。10層が3165号にあたる。12層と13層が3175号にあたる層である。14層から16層は瓦を含まない盛土層で、17層と18層が3040号とした瓦層、20層が3180号とした瓦層である。以上のように1面盛土層は瓦層と瓦を含まない盛土層が交互にかつ、南に向かって傾斜して堆積する。

33層、35層、37層、38層、43層の上面が2面にあたり、21層から32層は2面に形成された

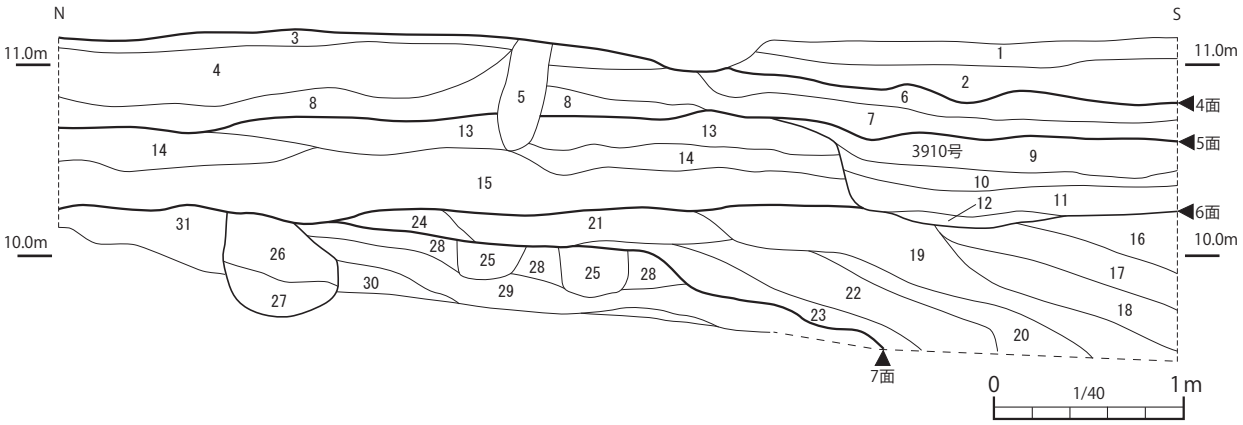
セクションH



1：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　ローム粒φ5～10mm3%　焼土粒φ5～10mm2%　790号裏込め
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　焼土粒：φ5～10mm5%　炭化物粒φ5～10mm2%　瓦を多量に含む　2100号瓦層
4：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　焼土粒：φ1～10mm3%　炭化物粒φ5～10mm1%　瓦を多量に含む　2100号下層
5：2.5Y4/2(暗灰黄色)　しまり：あり　粘性：あり　砂5～10%　細礫φ2～4mm5～10%　中礫φ4～20mm5～10%　焼土粒15～25%　焼土ブロックφ～15mm15～25%
炭化物粒1～3%　炭化物ブロックφ～20mm1～3%
6：2.5YR4/6(赤褐色)　しまり弱い　粘性弱い　細礫φ2～4mm1～3%　中礫φ4～20mm1～3%　焼土粒30～50%　焼土ブロックφ～20mm30～50%　炭化物粒5～10%
炭化物ブロックφ～30mm5～10%　多量の被熱瓦含む焼土主体層
7：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：極めて強い　粘性：あり　砂5～10%　焼土粒φ2~8mm5～10%　炭化物粒1～3%
8：10YR4/1(褐灰色)　しまり：極めて強い　粘性：あり　瓦・礫少ない　焼土粒5～10%　炭化物粒5～10%　炭化物ブロックφ10~15mm5～10%
9：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　砂15～25%　中礫1～3%　焼土粒5～10%　焼土ブロックφ10~20mm5～10%　炭化物粒1～3%
10：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　中礫1～3%　焼土粒5～10%　焼土ブロックφ8~20mm5～10%　炭化物粒5～10%　炭化物ブロックφ～20mm5～10%
瓦・漆喰を含む廃棄層
11：10YR4/1(褐灰色)　しまり：極めて強い　粘性：あり　瓦・礫少ない　焼土粒5～10%　炭化物粒5～10%　炭化物ブロックφ10~15mm5～10%
12：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　シルト5～10%　焼土粒1～3%　焼土ブロックφ10~20mm1～3%　炭化物粒1～3%　貝類・陶磁器類中量含む
13：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　貝類・陶磁器類中量含む
14：10YR4/4(褐色)　しまり：強い　粘性：強い　シルト15～25%　炭化物粒1～3%　炭化物ブロックφ10~15mm1～3%　下位粘土ラミナ状に堆積する
15：10YR4/4(褐色)　しまり：強い　粘性：弱い　砂5～10%　焼土粒5～10%　炭化物粒5～10%
16：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：極めて強い　粘性：あり　砂5～10%　焼土粒φ2~8mm5～10%　炭化物粒1～3%
17：10YR4/3(にぶい黄褐色)　砂+ローム混合層
18：5YR4/1(褐灰色)　しまり：弱い　粘性：あり　炭化物ブロックφ10~80mm5～10%　被熱・非被熱瓦を含む
19：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：極めて強い　粘性：あり　1・3層類似　砂5～10%　焼土粒φ2~8mm5～10%　炭化物粒1～3%
20：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：弱い　粘性：強い　砂30～50%　焼土粒15～25%　焼土ブロックφ10~20mm5～10%　炭化物粒5～10%
被熱瓦層で、空隙が多く砂・粘土が入り込む
21：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　粘土φ~15mm15～25%　砂15～25%　中礫φ4~30mm15～25%　焼土粒1～3%　炭化物粒5～10%　粘質土
陶磁器類・貝類・瓦・炭を含む廃棄層
22：10YR3/2~4/2(黒褐色～灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い　粘土30～50%　砂5～10%　中礫φ4~20mm5～10%　炭化物粒5～10%　炭化物ブロックφ10~25mm5～10%
粘質土　貝類（ハマグリ・アサリ・シジミ主体）は所々で層状の堆積　陶磁器類・瓦多量
23：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い　粘土30～50%　砂1～3%　炭化物粒5～10%　粘土主体層　貝類の含有は少ない　灰集中箇所あり
24：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　粘土15～25%　砂15～25%　大礫φ50~80mm1～3%　焼土粒1～3%　炭化物粒15～25%　炭化物ブロックφ10~30mm15～25%
粘土+砂混合層　上位に炭が層状堆積　貝類の堆積は局所的
25：10YR3/1(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　粘土30～50%　砂1～3%　中礫φ4~20mm5～10%　焼土粒1～3%　炭化物粒15～25%　炭化物ブロックφ10~20mm15～25%
粘土主体層　陶磁器類は中量　灰・漆喰を含む　貝類は上位に層状堆積
26：2.5Y6/2(灰黄色)　しまり：強い　粘性：強い　砂層　6・8層類似　粘土5～10%　砂30～50%　焼土粒1～3%　炭化物粒5～10%　炭化物ブロックφ10~15mm5～10%
27：7.5YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　粘土主体層　瓦片含む　粘土30～50%　砂5～10%　炭化物粒15～25%
28：2.5Y6/2+10YR5/2(灰黄色+灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　粘土15～25%　砂15～25%　焼土粒1～3%　炭化物粒15～25%　砂+粘土+腐植土層
上下位は腐植質土、間層に砂+粘土のラミナ状堆積を挟む　瓦・貝類少量含む
29：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　粘土15～25%　砂15～25%　炭化物粒15～25%　砂+粘土混合層　木材・貝類中量含む
30：10YR4/4(褐色)　しまり：極めて強い　粘性：強い　粘土15～25%　砂30～50%　炭化物粒5～10%　粘土+腐植土層　上下位は腐植質土、間層に砂+粘土堆積を挟む
31：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　粘土50%～　砂5～10%　炭化物粒15～25%　炭化物ブロックφ10~30mm15～25%　壁面に沿って堆積する粘土主体の廃棄層
貝類・炭を含む
32：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：極めて強い　粘性：強い粘土50%～　砂5～10%　中礫φ4~20mm1～3%　炭化物粒5～10%　炭化物ブロックφ10~20mm5～10%　酸化した粘土主体層
一部に炭が層状に入る
33：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm5%　炭化物粒φ5～10mm3%
34：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ロームブロックφ15～20mm5%
35：10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　瓦多く含む
36：10YR4/1(褐灰色)　しまり：やや強い　粘性：あり　焼土ブロックφ15～20mm2%　遺物多く含む
37：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　焼土粒φ2～10mm3%　瓦多い　3323号
38：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　焼土粒φ2～8mm3%　炭化物粒φ2～5mm2%　3323号
39：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ5～10mm3%
40：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm1%　焼土粒φor焼け瓦細片φ5～10mm3%　瓦・遺物多い
41：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　焼土粒φ3～10mm3%　炭化物粒φ3～10mm5%　小円礫φ5～20mm3%　3390号
42：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　焼土粒φ3～10mm3%　小円礫φ5～20mm2%　3390号
43：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　焼け瓦片φ10～50mm10%
44：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：あり　焼土粒φ2～5mm3%　炭化物粒φ3～10mm2%
45：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：あり　焼土粒φ2～10mm15%　炭化物粒φ5～10mm5%
46：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物粒φ10～20mm5%
47：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ3～10mm30%　炭化物粒φ5～15mm5%
48：10YR3/2（黒褐色）　しまり：やや強い　粘性：やや強い　ローム粒φ3～5mm７%　焼土粒φ2～5mm２%　炭化物粒φ2～5mm2%
49：10YR3/2（黒褐色）　しまり：あり　粘性：弱い　焼土粒φ2～3mm1%　炭化物粒φ3～5mm1%　砂質土層
50：10YR3/2（黒褐色）　しまり：強い　粘性：やや強い　炭化物φ10～20mm2%

第 1-13 図 H-2 区 1 面～ 3 面基本層序（セクション H）（1/40）

セクションI



1：7.5YR3/2(暗褐色)　しまり:あり　粘性:弱い　ローム粒φ1～3mm3%　焼土粒φ5%　炭化物φ1～5mm3%
2：2.5Y5/3(黄褐色)　しまり:極強　粘性:弱い　ローム粒φ1～3mm5%　黄褐色砂φ10～15mm15%　炭化物φ1～5mm3%
3：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:強い　粘性:あり　黄色砂30%　小石φ10～20mm15%
4：黄褐色砂層　小石φ3～5mm15%　しまり:弱い　粘性:弱い
5：10YR4/4(褐色)　しまり:極強　粘性:極強　ローム粒φ1～5mm7%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物φ1～5mm5%　白色粒φ1%
6：10YR4/6(褐色)　しまり:極強　粘性:あり　ローム粒φ1～3mm5%　黄褐色砂φ1～10mm10%　黄色砂φ1～10mm15%　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物φ1～5mm3%
7：10YR4/4(褐色)　しまり:極強　粘性:あり　ローム粒φ1～3mm5%　黄色砂φ3～5mm5%　焼土粒φ1～3mm5%　炭化物粒φ1～10mm7%
8：10YR3/4(暗褐色)　しまり:極強　粘性:あり　ローム粒φ1～3mm3%　焼土粒φ1～2mm2%　炭化物φ1～5mm5%　小石φ5～10mm5%　白色粒2%
9：10YR4/4(褐色)　しまり:あり　粘性:あり　ローム粒φ1～3mm5%　黄色砂φ3～5mm5%　焼土粒φ1～3mm5%　炭化物粒φ1～10mm7%
10：10YR3/3(暗褐色)　しまり:あり　粘性:あり　ローム粒φ1～5mm5%　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物φ3～10mm3%
11：10YR3/3(暗褐色)　しまり:強い　粘性:強い　ローム粒φ3～5mm15%　焼土粒φ1～5mm3%　炭化物φ1～3mm3%
12：10YR3/3(暗褐色)　しまり:強い　粘性:強い　ローム粒φ1～5mm5%　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物φ3～10mm3%
13：10YR3/3(暗褐色)　しまり:極強　粘性:強い　ローム粒φ1～5mm5%　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物φ3～10mm3%
14：10YR3/3(暗褐色)　しまり:極強　粘性:強い　灰黄褐色粘質土(10YR5/2)粘土化したローム土φ3～5mm15%(斑紋状)　焼土粒φ1～5mm3%　炭化物φ1～3mm3%
15：10YR3/4(暗褐色)　しまり:極強　粘性:極強　ローム粒φ1mm2%　焼土粒φ1mm1%未満　炭化物φ1mm1%　白色粒3%
16：10YR5/6(黄褐色)　しまり:極強　粘性:極強　ローム粒φ1～10mm10%　ロームブロックφ15～20mm50%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物φ1～3mm5%　黄白色岩片φ1～5mm7%
17：10YR5/4(にぶい黄褐色)　しまり:極強　粘性:極強　ローム粒φ1～10mm10%(斑紋状)　ロームブロック(粘土化)φ15～20mm20%(斑紋状)　黄褐色砂φ10mm5%
18：10YR5/6(黄褐色)　しまり:極強　粘性:極強　黄褐色砂ブロックを含むφ15～20mm10%　黄白色岩片3%
19：10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり:極強　粘性:極強　ロームブロックφ15～30mm15%　黄褐色砂φ10mm5%　黄白色岩片φ1～3mm10%
20：2.5Y5/4(黄褐色)　黄褐色砂層　しまり:弱い　粘性:弱い　黄白色岩片3%
21：10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり:強い　粘性:極強　ロームブロックφ15～50mm20%　黄褐色砂ブロックφ15mm5%
22：2.5Y5/4(黄褐色)　しまり:弱い　粘性:弱い　黄褐色砂層　暗褐色土ブロックφ15mm5%
23：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:極強　粘性:強い　ローム粒φ1～3mm2%　ロームブロックφ15mm7%　白色粒φ1~3mm5%　炭化物粒φ1~3mm3%
24：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:極強　粘性:強い　ローム粒φ3～10mm25%　黄褐色砂3%　炭化物粒φ1~3mm3%
25：10YR3/4(暗褐色)　しまり:強い　粘性:あり　ローム粒φ3～10mm20%　焼土粒φ1～2mm2%　炭化物粒φ1~5mm3%
26：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:極強　粘性:極強　ローム粒φ1～10mm30%　炭化物粒φ1~3mm1%
27：10YR4/4(褐色)　しまり:極強　粘性:極強　ロームブロックφ15～20mm25%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1~3mm3%
28：10YR4/4(褐色)　しまり:極強　粘性:極強　ローム粒φ1～10mm15%　ロームブロックφ15～20mm15%　炭化物粒φ1~3mm3%
29：10YR3/4(暗褐色)　しまり:強い　粘性:極強　ローム粒φ3～10mm20%　焼土粒φ1～2mm2%　炭化物粒φ1~5mm3%
30：10YR4/6(褐色)　しまり:極強　粘性:強い　ローム粒φ3～10mm40%　黄白色岩片φ1～2mm1%　炭化物粒φ1~3mm2%

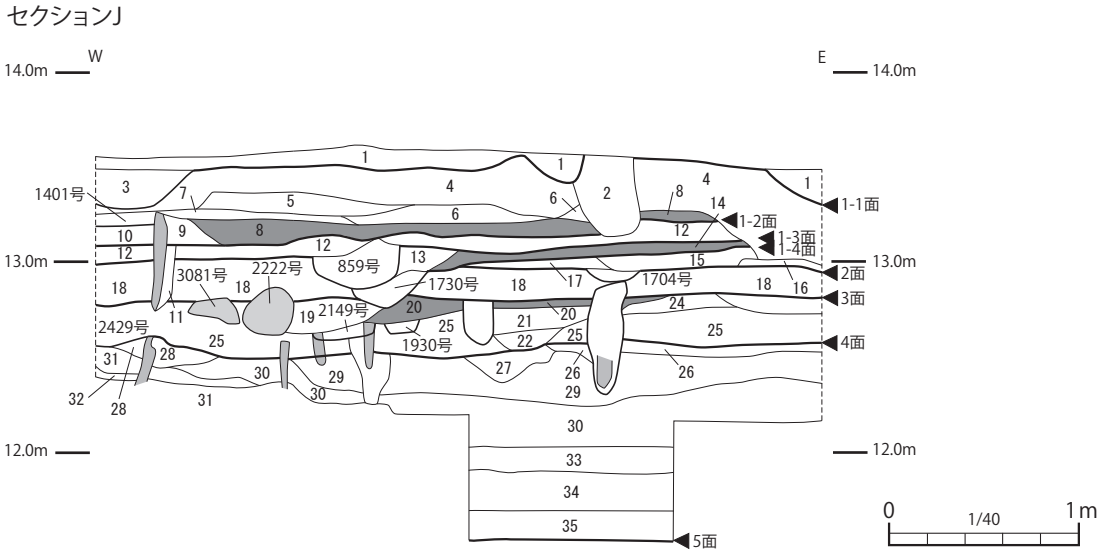
第 1-14 図 H-2 区 4 面～ 8 面基本層序（セクション I ）（1/40）

遺構 3185 号の覆土にあたる。33 層から 36 層、40 層は 2 面盛土層である。33 層・34 層はローム粒やロームブロックを含む層、35 層は瓦を多く含む層である。36 層は焼土を含む層で遺物も多く含んでいた。40 層はローム粒や焼土粒を含む層で、遺物や瓦も多く含む。43 層は 3-1 面の盛土層にあたり、本来は上位に 38 層が堆積していたものの、2100 号により削られている可能性が考えられる。

37 層は 3323 号の覆土である。3323 号覆土の下層には 38 層が流れ込んでいた。41 層と 42 層は石垣 3390 号を覆う土層である。焼土や炭化物の他、石垣の解体に伴うと考えられる礫を含む。

39 層、43 層、44 層、45 層、46 層の上面が 3-1 面にあたる。39 層と 43 層から 47 層が 3-1 面盛土層となる。43 層は被熱した瓦の破片を含む層で、石垣 3390 号に画された上段（成瀬家屋敷）に堆積する。44 層から 47 層は焼土を特徴的に含む層で 3900 号南側の下段（保科家屋敷）に堆積する。48 層は 3390 号の裏込めにあたる。セクションHの最下面が 3-3 面にあたる。49 層と 50 層は 3-3 面盛土層にあたり、49 層は焼土粒や炭化物を含む砂質土層、50 層は炭化物を含む黒褐色土層である。

この他、H-2 区の北側では H-1 区と共通する 3-2 面と H-2 区の一部で 3-4 面とした焼土面を確認している。



1:表土
2:10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり:強い 粘性:あり ローム粒φ1〜5mm3% 黄色砂3% 焼土粒φ1〜10mm7% 炭化物φ1〜5mm5% 白色粒子1%
3:10YR4/4(褐色) しまり:強い 粘性:あり ローム粒φ1~5mm5% 焼土粒φ1~5mm7% 炭化物粒φ1~5mm5% 瓦片5% 小礫φ5〜10mm5%
4:10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり:強い 粘性:あり ローム粒φ1〜5mm3% 黄色砂3% 焼土粒φ1〜10mm7% 炭化物φ1〜5mm5% 白色粒子1%
5:10YR4/2(灰黄褐色) しまり:強い 粘性:弱い 黄色砂3% 焼土粒φ1〜2mm3% 炭化物φ1〜5mm5%
6:10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり:極強 粘性:弱い 黄色砂3% 焼土粒φ1~5mm10% 炭化物φ1〜5mm5%
7:2.5Y5/2(暗灰黄) しまり:強い 粘性:あり 焼土粒φ1〜2mm1% 暗灰黄色主体(50%)
8:5YR4/8(赤褐色) しまり:極強 粘性:弱い 焼土層(φ1〜10mm40%) 炭化物φ1〜5mm7% にぶい黄褐土20%
9:10YR4/6(褐色) しまり:強い 粘性:強い ローム粒φ1~10mm20% 黄褐色砂5% 焼土粒φ1〜10mm10% 炭化物粒φ1~5mm5%
10:0YR4/6(褐色) しまり:強い 粘性:強い ローム粒φ1~10mm20% 黄褐色砂5% 焼土粒φ1〜10mm10% 炭化物粒φ1~5mm5%
11:10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり:強い 粘性:強い ローム粒φ1~3mm3% 焼土粒φ1〜5mm3% 炭化物粒φ1~3mm3%
12:2.5Y5/1(暗灰黄) しまり:あり 粘性:あり 黄色砂5% 灰黄色粘土φ3〜5mm10% 焼土粒φ1〜3mm2% 炭化物φ1〜3mm3% 部分的に瓦入る(3%)
13:2.5Y4/6(オリーブ褐色) しまり:あり 粘性:弱い 黄色砂φ5〜10mm3%
14:5YR4/8(赤褐色) しまり:極強 粘性:弱い 灰黄色粘土φ5〜10mm5% 焼土層(φ1〜5mm60%) 炭化物φ1〜5mm7%
15:2.5Y4/2(暗灰黄) しまり:強い 粘性:あり 暗灰黄色粘土(φ3〜5mm)15% 焼土粒φ1〜2mm1% 炭化物φ1〜5mm5%
16:7.5YR4/4(褐色) しまり:極強 粘性:弱い ローム粒φ1~5mm5% 焼土粒φ1〜10mm15% 炭化物φ1〜5mm5%
17:2.5Y5/2(暗灰黄) しまり:強い 粘性:極強 黄色砂10% 灰黄色粘土φ3〜5mm30% 焼土粒φ1〜3mm2% 炭化物φ1〜3mm3% 粘土主体層
18:2.5Y4/1(褐灰色) しまり:あり 粘性:あり 黄色砂5% 灰黄色粘土φ1〜3mm3% 焼土粒φ1〜2mm2% 炭化物φ1〜3mm3%
19:10YR4/1(褐灰色) しまり:弱い 粘性:弱い 焼土粒φ1〜2mm1% 炭化物φ1〜3mm3% 小石φ3〜5mm5% 褐色砂主体(10YR4/6 50%
20:5YR4/8(赤褐色) しまり:強い 粘性:弱い 焼土層φ1〜2mmの細かい粒子70% 炭化物φ1〜3mm2%
21:2.5Y4/2(暗灰黄) しまり:強い 粘性:あり ローム粒φ1〜5mm5% 黄色砂3% 焼土粒φ1〜5mm5% 炭化物φ1〜10mm10% 白色粒φ1〜2mm1%
22:10YR4/2(灰黄褐色) しまり:強い 粘性:弱い ローム粒φ1〜5mm7% 黄色砂5% 焼土粒φ1〜3mm2% 炭化物φ3〜10mm10%
23:10YR5/4(にぶい黄褐色) しまり:あり 粘性:あり ローム粒φ3〜5mm7%(斑紋状) 焼土粒φ1〜2mm2% 炭化物φ5mm3% 赤錆3%
24:10YR4/2(灰黄褐色) しまり:強い 粘性:弱い ローム粒φ1〜5mm7% 黄色砂5% 焼土粒φ1〜3mm2% 炭化物φ3〜10mm10%
25:10YR4/6(褐色) しまり:強い 粘性:強い ローム粒φ1〜5mm7% 黄色砂3% 焼土粒φ1〜3mm2% 炭化物φ1〜5mm5%
26:10YR4/6(褐色) しまり:強い 粘性:強い ローム粒φ1〜5mm10% 黄色砂5% 焼土粒φ1〜2mm1% 炭化物φ1〜3mm3%
27:2.5Y4/2(暗灰黄) しまり:強い 粘性:あり ローム粒φ1〜5mm5% 黄色砂5% 焼土粒φ1〜5mm5% 炭化物粒φ1〜3mm5%
28:10YR4/1(褐灰色) しまり:極強 粘性:極強 ローム粒φ1〜5mm5% 黄色砂1% 焼土粒φ1〜3mm5% 炭化物粒φ1〜2mm1%
29:10YR4/3(にぶい黄褐色)〜2.5Y4/1(黄灰色) しまり:極強 粘性:極強 ローム粒φ1~3mm3% 炭化物粒φ1~3mm1%
30:10YR4/1(褐灰色) しまり:極強 粘性:極強 ローム粒φ1〜2mm1% 焼土粒φ1〜3mm2% 炭化物φ1〜2mm3% 赤錆5%
31:2.5Y5/3(黄褐色) しまり:あり 粘性:弱い 錆びたローム粒φ1〜2mm1% 黄灰色砂30% 焼土粒φ1〜2mm1% 炭化物φ1〜5mm5%
32:10YR4/1(褐灰色) しまり:あり 粘性:極強 ローム粒φ1~3mm5% 炭化物φ1〜2mm2%
33:黄褐色盛土(ロームブロック、褐色土ブロック)
34:褐色粘質土盛土(黄色砂ブロック、ローム質土)
35:ロームブロック層

第 1-15 図　G-2 区基本層序（セクション J）（1/40）

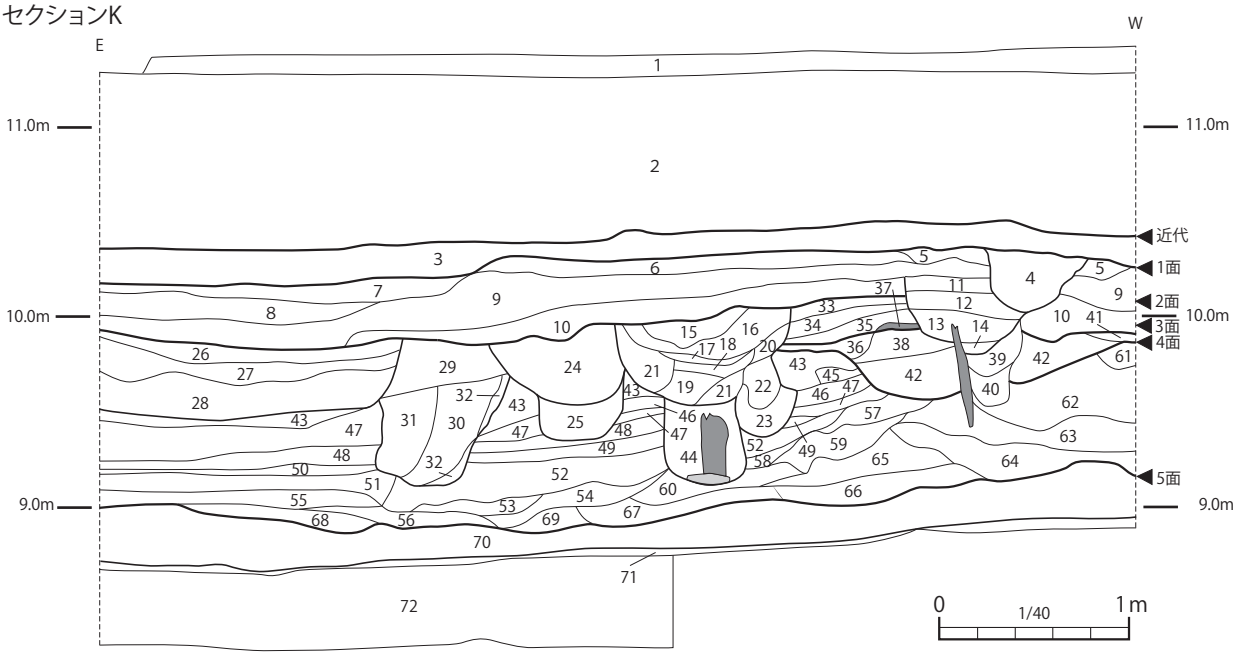
セクション I（第 1-14 図・図版 3-36-2）は H-2 区東壁の 4 面以下の層序を示したものである。1 層と 2 層は 3 面盛土層で、1 層と 2 層はいずれもローム粒を含む層で 2 層は非常にしまりの強い層である。

3 層と 6 層上面が 4 面にあたる。3 層から 8 層が 4 面盛土層で、4 層は砂層で、そのほかの層は褐色ないし暗褐色のローム粒や砂を含む層となっている。

13 層と 14 層の上面が 5 面にあたる。13 層から 15 層が 5 面盛土層で、13 層から 15 層はいずれもしまりの強い暗褐色土層で、ローム粒や焼土粒を含んでいる。

16 層から 21 層の上面が 6 面にあたる。21 層の北側では 6 面盛土層が見られず、7 面が露出する。16 層から 23 層が 6 面盛土層にあたり、27 層・28 層・30 層の上面が 7 面にあたる。7 面は 30 層の露出している北側では平坦であるが、ピット 4193 号を挟んで南に急激に落ち込んでおり、6 面盛土はこの落ち込みを埋めるために盛られた盛土層と考えられる。16 層から 24 層は黄褐色の砂を含む層とにぶい黄褐色の黄白色岩片を含む層が互層になるよう堆積している。

セクションK



1：コンクリート
2：2.5Y6/1(黄灰色)　しまり:極強い　粘性:あり　暗褐色砂(7.5YR3/4)を下面に10%含む(層厚0.5～1.0mm)　褐灰色粘土(10YR6/1)φ5～10mm5%　焼土φ1～5mm2%　炭化物　φ1～5mm2%　瓦片小石3%
3：10YR5/1(褐灰色)　しまり:極強　粘性:あり　ローム粒φ1～5mm5%　褐灰色粘土φ1～2mm3%　焼土φ1～2mm3%　炭化物φ1～3mm3%　砂質
4：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:極強　粘性:あり　暗褐色砂5%　黄色砂φ5～10mm1%　焼土φ1～5mm3%　炭化物φ1～5mm5%　層下面に部分的に2層に似る薄い層あり炭化物層厚0.5～1.0mm　砂質　802号覆土
5：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:極強　粘性:あり　暗褐色砂5%　黄色砂φ5～10mm1%　焼土φ1～5mm3%　炭化物φ1～5mm5%　層下面に部分的に2層に似る薄い層あり炭化物層厚0.5～1.0mm　砂質
6：10YR5/1(褐灰色)　しまり:極強い　粘性:弱い
7：2.5Y5/1(黄灰色)　しまり:極強　粘性:あり　ローム粒φ1～3mm5%　暗褐色砂(黄色砂がさびたもの)7%　焼土粒φ1～5mm5%　炭化物φ1～5mm5%　部分的に焼土炭化物が集中する部分あり
8：7.5YR4/2(灰褐色)　しまり:あり　粘性:あり　焼土粒φ1～5mm20%　炭化物粒φ3～10mm10%　瓦10%　小石φ10～30mm10%
9：10YR5/1(褐灰色)　しまり:強い　粘性:あり　黄褐色砂φ10%　焼土粒φ5～10mm10%　炭化物粒φ1～10mm7%　炭化物ブロックφ15～30mm5%　瓦3%
10：10YR4/1(褐灰色)　しまり:あり　粘性:弱い　黄色砂5%　焼土粒φ1～5mm10%　炭化物φ1～10mm10%　やや空隙あり
11：10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり:あり　粘性:強い　黄褐色砂φ1～3mm10%　焼土粒φ1～2mm2%　炭化物φ1～5mm5%　白色粒φ1mm1%　赤錆3%φ15mm3%　806号覆土
12：10YR5/4(にぶい黄褐色)　しまり:あり　粘性:弱い　灰白色粘土φ5～10mm7%　黄色砂5%　焼土粒φ1～5mm5%　炭化物φ1～　806号覆土
13：2.5Y5/3(黄褐色)　しまり:あり　粘性:弱い　黄灰色砂10%　炭化物φ1～2mm3%　赤錆5%　砂質土　806号覆土
14：砂層　806号覆土
15：10YR4/4(褐色)　しまり:極強　粘性:強　ローム粒φ1～5mm5%　ロームブロックφ15mm5%　焼土・炭化物φ1～3mm3%　1720号覆土
16：10YR3/4(暗褐色)　しまり:極強　粘性:強い　ローム粒φ1～5mm10%　焼土・炭化物φ1～3mm3%　瓦3%　1720号覆土
17：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:強い　粘性:強い　1720号覆土
18：2.5Y5/6(黄褐色)　しまり:弱い　粘性:弱い　黄色砂がラミナ状に堆積　1720号覆土
19：10YR4/1(褐灰色)　しまり:あり　粘性:弱い　褐灰色砂内に黄色砂ラミナ状堆積(10%)　焼土粒φ1～2mm1%　小石φ5mm5%　砂質　1720号覆土
20：10YR4/1(褐灰色)　しまり:あり　粘性:あり　黄色砂5%　焼土粒φ1～2mm1%　炭φ1～2mm2%　1720号覆土
21：10YR4/1(褐灰色)しまり:あり　粘性:弱い　ローム粒φ1～3mm3%　黄色砂5%(ラミナ状)　炭化物・焼土φ1～2mm2%　砂質　1720号覆土
22：10YR4/1(褐灰色)　しまり:あり　粘性:あり　ローム粒φ1～3mm3%　黄色砂φ3%　炭化物φ1～2mm1%　赤錆5%
23：5Y4/1(灰色)　しまり:極強　粘性:極強　ローム粒φ1～5mm5%　オリーブ灰砂φ1～10mm15%　黄色砂φ1～5mm5%
24：7.5YR4/4(褐色)　しまり:あり　粘性:強い　被熱瓦片φ1～10mm15%　炭化物φ1～5mm7%　小石φ10～15mm10%　1725号覆土
25：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり:あり　粘性:強い　ロームブロックφ15mm3%　黄色砂φ5～10mm5%　炭化物・焼土φ1～2mm2%　2293号覆土
26：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり:極強　粘性:弱い　黄褐色砂10%　焼土φ1～5mm5%　炭化物φ1～3mm3%　935号覆土
27：5YR4/4(にぶい赤褐色)　しまり:極強い　粘性:弱い　焼土集中層(φ1～10mm80%)　灰色砂5%　炭化物φ1～5mm5%　白色粒1%　935号覆土
28：5YR2/1(黒褐色)　しまり:弱い　粘性:あり　焼土φ1～10mm3%　炭化物φ1～5mm60%　にぶい黄褐色土(10YR4/3)φ10mm10%　木端を多く含む　935号覆土
29：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:極強　粘性:弱い　黄灰色砂5%　焼土φ1～5mm3%　炭化物φ1～3mm3%　赤錆5%　瓦10%　2294号覆土か
30：5Y4/1(灰色)　しまり:強　粘性:強い　黄色砂φ1～5mm20%　焼土φ1～5mm3%　炭化物φ1～5mm7%　2294号覆土
31：2.5Y4/6(オリーブ褐色)　しまり:極強　粘性:極強　黄色砂10%　炭化物φ1～3mm3%　炭化物粒φ1～3mm10%(斑紋状)　2294号覆土
32：5Y4/1(灰色)　しまり:強　粘性:強い　黄色砂φ1～5mm20%　焼土φ1～5mm3%　炭化物φ1～5mm7%　　オリーブ灰砂30%含む　2294号覆土
33：10YR3/4(暗褐色)　しまり:極強　粘性:強い　ローム粒φ1～5mm10%　焼土・炭化物φ1～3mm3%　瓦3%
34：10YR4/1(褐灰色)　しまり:あり　粘性:あり　黄色砂5%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～2mm2%
35：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:強い　粘性:強い　焼土粒φ5～10mm5%　粘土ブロックφ15～20mm5%
36：10YR3/4(暗褐色)　しまり:やや強い　粘性:あり　黄色砂5%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～2mm2%
37：焼土層
38：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:強い　粘性:強い　黄褐色砂ブロックφ15～20mm5%　粘土ブロックφ15～20mm3%
39：10YR4/4(褐色)　しまり:極強　粘性:強い　錆びたローム粒φ3～5mm5%　黄色砂φ1～10mm7%　炭化物粒φ1～5mm5%
40：2.5Y5/2(暗灰黄色)　しまり:あり　粘性:極強　黄色砂φ3～10mm20%　浅黄色粘土(2.5Y7/3)φ5～10mm5%　炭化物粒φ1～2mm1%
41：2.5Y4/2(暗灰黄色)　しまり:あり　粘性:あり　ローム粒φ1～10mm10%　黄色砂5%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～10mm7%
42：2.5Y5/6(黄褐色)　しまり:極強　粘性:あり　ローム粒φ5～10mm5%　粘土化したロームブロックφ15～30mm30%　黄色砂φ15～20mm20%　赤錆5%
43：10YR3/4(暗褐色)　しまり:極強　粘性:あり　ローム粒φ1～5mm10%　黄色砂1%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～5mm3%
44：10YR4/1(褐灰色)　しまり:あり　粘性:あり　ローム粒φ1～5mm5%　炭化物φ1～5mm5%　2403号覆土
45：10Y R3/2(黒褐色)　しまり:強い　粘性:あり　黄色砂5%　内容物少ない層　42層に似る
46：10YR3/2(黒褐色)　しまり:極強　粘性:極強　ローム粒φ1～5mm5%　黄色砂ブロックφ15mm5%　焼土φ1～2mm1%　炭化物φ1～2mm1%
47：2.5Y6/4(にぶい黄色)　しまり:極強　粘性:極強　にぶい黄色砂主体(80%)
48：10YR3/2(黒褐色)　しまり:極強　粘性:極強　ローム粒φ1～5mm5%　黄色砂ブロックφ15mm5%　焼土φ1～2mm1%　炭化物φ1～2mm1%
49：5Y5/2(灰オリーブ色)　しまり:極強　粘性:あり　灰オリーブ砂と変色したローム粒(5Y4/3暗オリーブ)φ3～5mm10%　炭化物φ1～3mm5%
50：10YR3/3(暗褐色)　しまり：極強　粘性：極強
51：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり:弱い　粘性:極強　ローム粒φ1～5mm5%　灰色粘土(7.5Y4/1)φ10～15mm5%　炭化物φ1～15mm10%　貝殻片3%　遺物を多く含む
52：5Y4/1(灰色)　しまり:極強　粘性:極強　ローム粒φ1～5mm5%　オリーブ灰色砂φ1～10mm15%　黄色砂φ1～5mm5%
53：2.5Y4/4(オリーブ褐色)　褐色砂主体　しまり:あり　粘性:強　ローム粒φ1～2mm5%　炭化物φ1～3mm3%　砂質
54：2.5Y4/1(黄灰色)しまり:弱い　粘性:極強　オリーブ灰砂φ10～15mm7%　炭化物φ5～15mm30%
55：2.5Y4/4(オリーブ褐色)　褐色砂主体　しまり:あり　粘性:強　ローム粒φ1～2mm5%　炭化物φ1～3mm3%　砂質
56：5Y4/1(灰色)　しまり:弱い　粘性:極強　内容物少ない(炭化物φ1～5mm5%砂質
57：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり:あり　粘性:あり　ローム粒φ10mm5%(斑紋状)　黄色砂φ1～3mm3%　炭化物φ1～5mm7%
58：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり:あり　粘性:極強　黄色ロームブロック(5Y5/4オリーブ)φ15mm15%　オリーブ灰色砂φ1～10mm15%
59：10YR3/4(暗褐色)　しまり:あり　粘性:強　ローム粒φ1～10mm15%　黄色砂φ1～10mm20%　炭化物φ1～5mm3%
60：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり:あり　粘性:極強　黄色ロームブロック(5Y5/4オリーブ)φ15mm15%　オリーブ灰色砂φ1～10mm15%
61：2.5Y5/3(黄褐色)　しまり:極強　粘性:あり　ローム粒φ5～10mm5%　粘土化したロームブロックφ15～30mm30%　黄色砂φ15～20mm20%　赤錆5%
62：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり:極強　粘性:あり　ローム粒φ1～2mm1%　黄色砂3%　炭化物φ5mm3%
63：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり:あり　粘性:極強　ローム粒φ1～3mm3%　黄色砂φ5～10mm5%　炭化物φ1～5mm5%
64：10YR3/4(暗褐色)　しまり:あり　粘性:強い　ローム粒φ1～10mm10%　ロームブロックφ15mm10%　黄色砂φ1～5mm5%　炭化物φ1～3mm3%
65：2.5Y5/6(黄褐色)　しまり:極強　粘性:極強　黄褐色砂ブロック主体
66：10YR3/4(暗褐色)　しまり:極強　粘性:強い　ローム粒φ1～10mm10%　灰オリーブ色砂φ10mm10%　炭化物φ1～5mm7%　上部に色調暗い部分(2.5Y4/3)あり
67：2.5Y5/2(灰黄褐色)　しまり:弱い　粘性:強い　ローム粒φ1～10mm20%　炭化物φ1～3mm3%　灰オリーブ色砂φ1～5mm5%
68：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり:弱い　粘性:極強　47層に斑紋状に炭化物を含む(＋10%)　黄褐色砂φ10mm5%
69：5Y4/1(灰色)　しまり:弱い　粘性:極強　内容物少ない(炭化物φ1～5mm5%砂質)
70：5Y3/1(オリーブ黒)　しまり:弱い　粘性:強い　　ロームブロックφ15mm5%　灰色粘質土(5Y6/1)φ15mm15%　炭化物φ15～20mm20%　木端・貝殻片を多量に含む　マトリクスは粘質黒褐色土　2328号覆土
71：7.5Y6/2(灰オリーブ)　しまり:弱い　粘性:弱い　灰オリーブ色砂主体
72：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり:あり　粘性:極強　黄灰色粘質土層

第 1-16 図　G-3 区基本層序（セクション K）(1/40)

27 層から 30 層は 7 面盛土層にあたり、8 面とした自然堆積層上に堆積している。27 層から 30 層はローム粒や焼土粒を含むしまり・粘性の強い土層となっている。

【G-2 区】

セクション J（第 1-15 図・図版 3-35-2）には G-2 区の堆積状況を示した。G-2 区は旗本川窪家・保科家屋敷地にあたり、旗本成瀬家・鳥居家屋敷地である F-1 区や H-1 区とは異なる堆積状況となる。

1 層は近代以降の盛土層で 4 層上面が 1-1 面にあたる。4 層は 1-1 面盛土層で、4 層は東端で落ち込んで落ち、おそらくこの段階における旗本成瀬家・鳥居家屋敷地と旗本川窪家・保科家屋敷地の境界にあたる部分と考えられる。

12 層上面が 1-2 面にあたる。1-2 面上に堆積する 5 層と 6 層は硬化面（1440 号）、8 層は焼土層（1408 号）である。12 層は 1-2 面盛土層で、砂や粘土、焼土を含む土層である。

14 層の上面が 1-3 面にあたる。14 層は火災に伴う焼土層である。

14 層下、15 層上面を 1-4 層としている。1-4 面はこの土層断面では捉えることが出来なかったが、宝永の火山灰が面的に広がっていた。15 層から 17 層は 1-4 面盛土層である。15 層と 16 層は粘土を含む層で、17 層は粘土層となる。

18 層上面が 2 面にあたる。18 層は 2 面盛土層で、砂や粘土を少量含む層となっている。

21 層から 25 層上面が 3 面にあたる。20 層は 3 面上に堆積した焼土層である。3 面盛土層である 25 層は、ローム粒や焼土粒を含むオリーブ褐色土層となる。

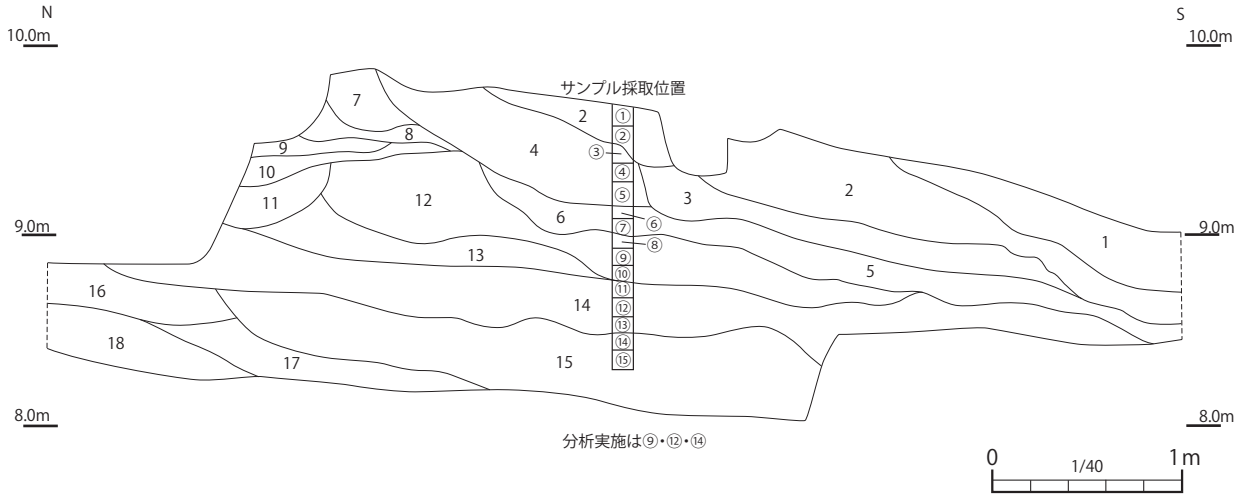
26 層から 30 層上面が 4 面にあたり、26 層から 35 層が 4 面盛土層である。26 層から 30 層、31 層はローム粒や焼土粒、炭化物粒を含むしまりの強い粘質土層である。31 層は砂質土層で、錆びたローム粒を含んでいる。33 層はロームブロック及び褐色土ブロック層、34 層は黄色砂ブロックおよびロームブロック層、35 層はロームブロック層となり、自然堆積層上に堆積する。この最下面の自然堆積層上が 5 面となる。

【G-3 区】

セクション K（第 1-16 図・図版 3-35-3）に G-3 区南壁の層序を示した。1 層はアスファルト層、2 層は近代以降の盛土層で、3 層上面が近代面となる。3 層は近代盛土層で、5 層から 7 層の上面が 1 面にあたる。5 層から 9 層は 1 面盛土層にあたり、5 層から 7 層は砂や焼土粒などを含む層でしまりが強く硬化している。8 層と 9 層は焼土粒や炭化物、砂を含む層である。10 層は砂や焼土、炭化物を含む褐灰色土層である。また、4 層は礎石 802 号掘方の覆土である。11 層から 14 層は 806 号の覆土である。

33 層の上面が 2 面となる。33 層から 35 層が 2 面盛土層にあたる。33 層から 35 層はしまりの強い層で、33 層はローム粒と焼土粒、34 層は砂や焼土粒、炭化物粒、35 層は粘土ブロックを含む。15 層から 23 層は 1720 号の覆土である。24 層・25 層は 1725 号、26 層から 28 層は 935 号の覆土である。

セクション面に掛かる遺構が多く、図面上では明確に示すことが出来なかったが、36 層と 38 層の上面が 3 面となる。37 層は 3 面上に堆積した焼土層である。36 層、38 層、41 層、42 層が 3 面盛土層にあたる。36 層と 38 層は黄色の砂を含む層で、38 層はさらに粘土もブロック状に含む。41 層は同様にローム粒や焼土粒、炭化物粒を含む。42 層はローム粒やロームブロックを多く含む層でしま





1.G-3区低地トレンチ堆積状況(西から)

1：5Y3/1(オリーブ黒)　しまり:弱い　粘性:強い　ロームブロックφ15mm5%　灰色粘質土(5Y6/1)φ15mm15%　炭化物φ15～20mm20%　木端　貝殻片を多量に含む　マトリクスは粘質黒褐色土
2：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり:あり　粘性:極強　黄灰色粘質土層
3：5Y5/3(灰オリーブ)　しまり:極強　粘性:弱い　ローム粒φ1～10mm5%　ロームブロックφ15mm3%　灰オリーブ砂をラミナ状に含む15%　マトリクスは黄褐色だが変色して灰オリーブ色になっている
4：10YR5/8　しまり:極強　粘性:弱い　黄褐色砂ブロックと暗褐色土の瓦層
5：7.5Y6/2(灰オリーブ)　しまり:極強　粘性:弱　灰オリーブ色砂層
6：しまり:極強　粘性:弱い　7層に黄色砂ブロックφ15～20mm30%含む
7：:7.5YR(灰色)　しまり:極強　粘性:あり　ローム粒φ1～5mm5%　黄褐色砂φ1～5mm20%　炭化物φ1～3mm3%
8：5Y3/1(オリーブ黒色)　しまり:強い　粘性:極強　灰オリーブ砂(5Y6/2)φ5～10mm7%　黒褐色粘質土層
9：10YR5/6(黄褐色)　しまり:極強　粘性:弱い　黄色砂が層状に堆積(70%)　黒褐色土(2.5Y3/1)10%
10：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:強い　粘性:強い　ロームブロックφ15～20mm10%　オリーブ灰ブロックφ15～20mm10%　黒褐色土φ5mm5%含む　砂質土層
11：7.5YR5/8(明褐色)　しまり:極強　粘性:弱い　錆びた黄色砂40%　炭化物φ1～2mm1%
12：2.5Y5/6(黄褐色)　しまり:極強　粘性:弱　黄色砂φ1～10mm10%　黄色砂ブロックφ50～70mm60%　赤錆5%　黒褐色土(2.5Y3/1)5%
13：5Y3/1(オリーブ黒色)　しまり:強い　粘性:極強　灰オリーブ砂(5Y6/2)φ5～10mm7%　黒褐色粘質土層
14：10YR5/6(黄褐色)　しまり:極強　粘性:弱い　黄色砂が層状に堆積(70%)　黒褐色土(2.5Y3/1)10%
15：7.5Y6/2(灰オリーブ)　しまり:極強　粘性:弱　灰オリーブ色砂層
16：2.5Y3/1(黒褐色)　しまり:強い　粘性:あり　ローム粒φ1～10mm5%　ロームブロックφ15mm5%　黄色砂φ1～5mm10%
17：2.5Y5/2(黄褐色)　ローム粒φ1～5mm3%　灰オリーブ砂(5Y6/2)マーブル状に30%含む　炭化物φ1～2mm1%　灰オリーブ砂と黄色砂の混合土層
18：2.5Y5/3(黄褐色)　ローム粒φ1～10mm10%　灰オリーブ砂φ10mm3%　黄色砂φ1～10mm5%　炭化物φ1～3mm3%

第 1-17 図　G-1 区低地トレンチ（セクション L）（1/40）

りが極めて強い。

43 層の上面が 4 面となる。3 面と同様にセクション面に掛かる遺構が多く、図面上では明確に示すことが出来なかった。43 層と 45 層から 69 層が 4 面盛土層にあたる。43 層と 45 層から 55 層までは西から東へと傾斜して堆積しており、総じて薄く堆積している。これらの層はしまりが強くロームブロックや砂を含んでいる。一方、61 層から 64 層は西から東へと傾斜して堆積する層で、ローム

粒や砂を含む。56 層から 60 層、65 層から 69 層はセクション中央部に見られる僅かな窪みに落ち込むように堆積する。56 層から 60 層、65 層から 69 層はいずれもローム粒ないしロームブロックと砂を含む層である。25 層は 2293 号、29 層から 32 層は 2294 号、44 層が 2403 号の覆土である。2293 号と 2294 号は 4 面で検出したピットであるが、2 面からの掘り込みの可能性も考えられる。

70 層は木端や遺物を含む層で、2328 号として調査を行った。2328 号は 5 面に所属する遺構で、G-2 区の地山面である 5 面に対応している。2328 号の底面は南に向かって傾斜しており、溜池に落ち込んでいくものと考えられる。71 層と 72 層は 5 面以下の盛土層である。71 層は灰オリーブ色の砂を主体とする層、72 層は黄灰色の粘質土を主体とする層である。

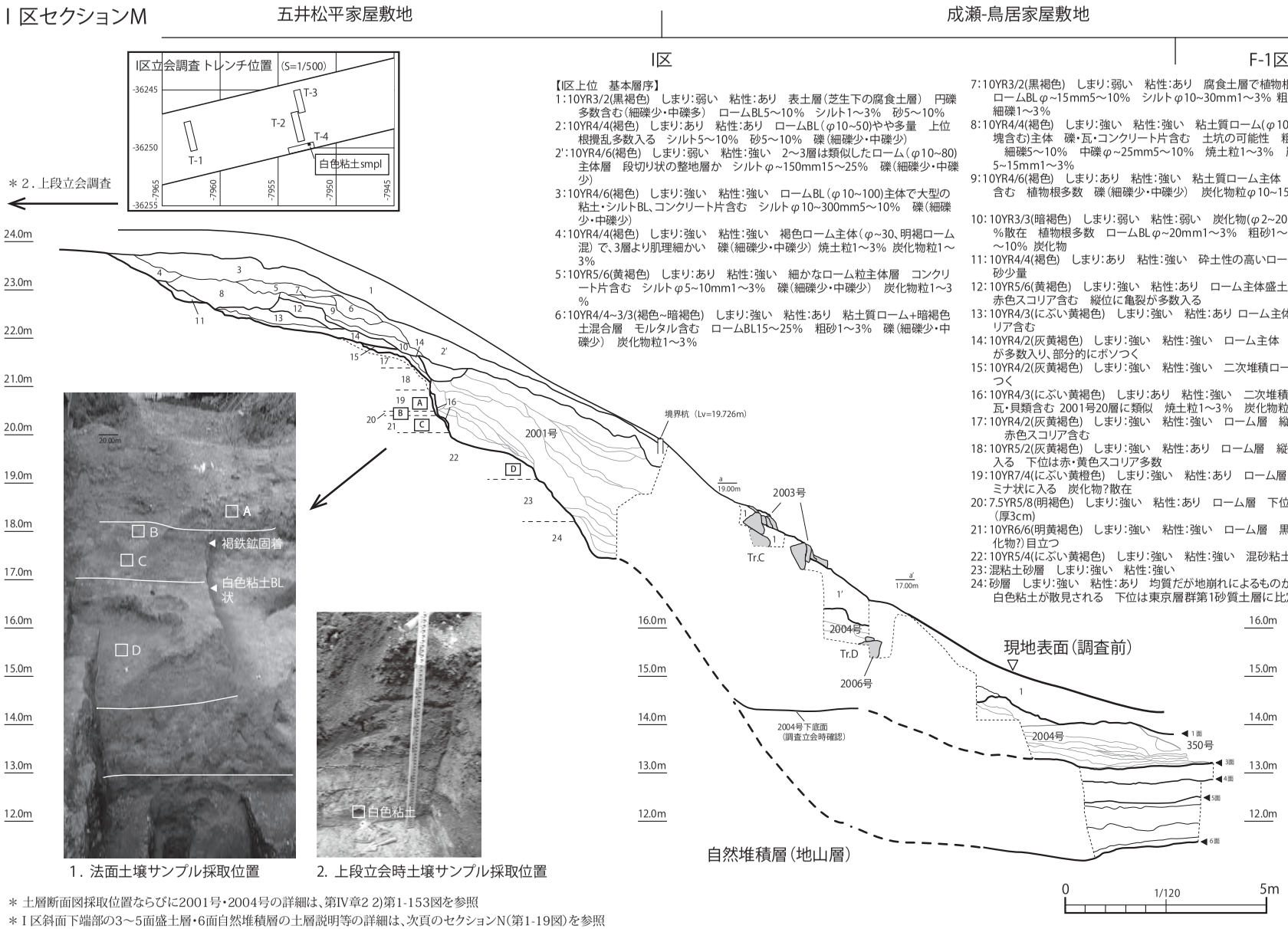
G-3 区ではさらに G-3 区低地トレンチとしてトレンチを入れ、5 面以下の堆積状況を確認した。第 1-17 図に層序を示した（セクションＬ）。1 層は木端や貝殻片を含む層で、2328 号にあたる。2 層から 13 層は砂を主体とする層と粘質土層が互層に堆積する状況が確認された。14 層は黄褐色の砂を主体とする層で 15 層は灰オリーブ色の砂層となる。16 層はローム粒、ロームブロックを含む黒褐色土層、17 層は灰オリーブ色の砂と黄色の砂の混合層である。18 層は 17 層を構成する砂のほか、ローム粒や炭化物を含む黄褐色土層である。

セクションＬでは土層を厚さ 5 ㎝に分割し、連続した土壌サンプルを採取した。サンプル採取位置はセクションＬの図中に示した。セクションＬでは採取したサンプル①から⑬のうち、⑨・⑫・⑭で重鉱物組成および火山ガラス比分析を行った。当初、セクションＬの 14 層以下からは遺物の出土がないこと、旗本屋敷初期段階の遺物が出土したのが 1 層から 2 層にかけてであったことから自然堆積層である可能性が検討されていたが、分析により確認された土層はすべて人為的な堆積であり、自然堆積層はさらに深い部分に堆積しているものであることが示された。したがって、先述の G-2 区では最下面で自然堆積層を確認したが、G-1 区から G-3 区にかけて埋没谷がさらに深く落ち込んでおり、自然堆積層上である G-2 区 5 面段階以降に継続して埋め立てが進められたものと推察される。

【Ⅰ区】

Ⅰ区は調査区北西端、高台端部から斜面地に立地し、旗本成瀬家－鳥居家と西接する五井松平家との屋敷境付近にあたる。現地表面の標高は、高台上端（五井松平家屋敷地）側が約 23.8 m、下端（F-1 区寄り・旗本成瀬－鳥居家屋敷地）側が約 15 mを測り、法面斜度 31 ～ 35 度、比高 9 mの急崖であった。セクションMは斜面を東西に縦断するライン、セクションＮはセクションMの下端に直行する南北ラインとして設定した（第 1-18・19 図・図版 3-36-3）。遺構確認面として、高台上端（セクションM上位）では 2 面、下端（セクションM下位・セクションＮ）では 6 面を確認している。最終面である 6 面は自然堆積層の砂層である。

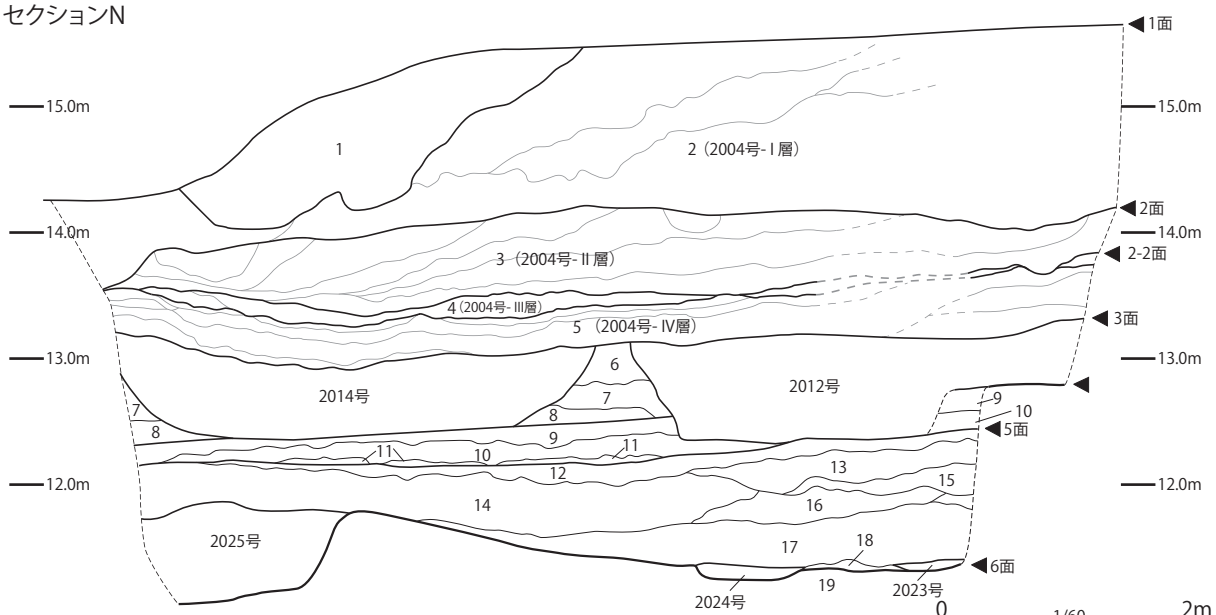
掘削前の斜面表層は、植栽と部分的な簡易な複数の石列による土留め (2003 号）が施工され地表面に露出した状態であった。表層直下は明瞭な近代面は確認されず、近世 1 面とした確認面から、最大 4 m厚におよぶ分厚い焼土瓦礫層が斜面ほぼ全域に亘って広域に確認され、斜面上位を 2001 号、斜面下位を 2004 号と呼称したが、後者は斜面下端で F-1 区北西端の 350 号に連なる。堆積状況は高台上の五井松平家側から斜面に向かって南東方向に投げ捨てられたように堆積する所謂「盛りこぼし盛土」で、版築地業により突き固められた形跡は見受けられない。安全上の問題から、上下の 2001 号・2004 号両遺構の交点を現地では捉えきれず切り合いによる新旧関係を現認できなかった。しかし、



1．法面土壌サンプル採取位置　　2．上段立会時土壌サンプル採取位置

＊土層断面図採取位置ならびに2001号・2004号の詳細は、第Ⅳ章2 2)第1-153図を参照
＊Ⅰ区斜面下端部の3～5面盛土層・6面自然堆積層の土層説明等の詳細は、次頁のセクションN（第1-19図）を参照

第 1-18 図　Ⅰ区基本層序（セクション M）（1/120）



＊2004号は大別層を注釈として掲載。詳細は第Ⅳ章2 2)第1-153図を参照

1：黄褐色砂層　山砂主体　現代の擁壁掘方覆土
2：2004号 - Ⅰ層（被災瓦を含む焼土主体層を中心とする層厚の厚い廃棄層）
3：2004号 - Ⅱ層（陶磁器類・瓦・貝類を主体とする廃棄層）
4：2004号 - ⅢⅢ層（オリーブ褐色～黄褐色砂とシルトを主体とする無遺物層）
5：2004号 - Ⅳ層（陶磁器類・瓦・貝類を主体とする薄層の廃棄層）
6：10YR3/3（暗褐色）　しまり：強い　粘性：強い　ローム・シルト・砂混合　ロームブロックφ10~20mm15～25%　シルト15～25%　粗砂5～10%　細礫1～3%　酸化鉄散在　混入物少なく均質
7：10YR3/1～4/1(黒褐色～褐灰色)　しまり：強い　粘性：強い　ロームブロック・シルト15～20%　粗砂5～10%　細礫1～3%含む　全体的にグライ化　均質
8：10YR2/3(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム・シルト混合砂質土（9層類似）　ロームブロック15～20%　シルト10～15%　粗砂5～10%
9：10YR2/3(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　間層としてローム～シルト主体の薄層を挟む　砂一部層状に見られる　ロームブロックφ10~20mm15～25%　シルト15～25%　粗砂5～10%　細礫1～3%　盛土4面最上層
10：10YR4/3～3/4(にぶい黄褐色～暗褐色)　しまり：強い　粘性：強い　大型のシルト・ロームを含む　酸化　ロームブロックφ10~30mm30～50%　シルト15～25%　粗砂15～25%　細礫1～3%
11：10YR2/1～2/2(黒色～黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　粘土主体層　下位硬化　ロームブロックφ10~20mm15～25%　粘土30～50%　粗砂1～3%　細礫1～3%
12：2.5Y5/6～6/4(黄褐色～にぶい黄色)　しまり：極めて強い　粘性：あり　砂主体層　下位酸化鉄厚く凝集・硬化　ロームブロック5～10%　シルト15～25%　粗砂30～50%　細礫1～3%　盛土5面最上層
13：2.5Y5/6(黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂＋シルト・白色粘土混合層　腐植土ブロック少量　シルト30～50%　粘土15～25%　粗砂30～50%　細礫1～3%　盛土5面最上層
14：2.5Y3/3～6/1(暗オリーブ褐色～黄灰色)　しまり：あり　粘性：あり　砂主体層　腐植土＋炭化物含む　シルト5～10%　粗砂50%～　細礫1～3%
15：2.5Y6/1～(淡黄色～明黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　14・16層中間的な砂主体層で14層より粒子細かい　ロームブロック15～20%　シルト5～10%　細・粗砂50%～　細礫1～3%
16：2.5Y 7 /4～6/8(淡黄色～明黄褐色)　しまり：あり　粘性：極めて弱い　砂主体層　下位へ行くほど酸化　北側下位は還元　白～浅黄色粘土ブロック混在　ロームブロックφ10~30mm15～25%　シルトφ10~30mm30～50%　砂30～50%
17：2.5Y4/3(オリーブ褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い　砂主体層　シルト5～10%　細砂50%～　炭化物粒1～3%
18：2.5Y7/3+4/3(オリーブ褐色+淡黄色)　しまり：やや強い　粘性：弱い　砂主体層　炭化物を部分的に含む　酸化鉄散在　シルトφ10~40mm15～25%　砂30～50%　炭化物粒5～10%
19：5Y8/2～8/3(灰白～淡黄色)　しまり：強い　粘性：弱い　ラミナ明瞭　砂50%～　6面自然堆積層最上層

第 1-19 図　Ⅰ区基本層序（セクション N）（1/60）

包含する遺物の年代観はいずれも 18 世紀後葉を主体とする点は共通するものの、2004 号が 18 世紀末葉を下限とするのに対し、2001 号が 19 世紀第 1 四半期の遺物を若干含むなど相対的に新しい（詳細は第Ⅳ章を参照）。後述するように、自然堆積層の斜面は 60 度前後の急峻な東京層群第一砂層露頭面であり、1 面廃棄層の法面斜度が 24 ～ 27 度と相対的に緩傾斜であることから、盛りこぼし盛土造成により瓦礫の効率的な処理とともに、斜面の斜度を軽減し法面保護の安定化を図った可能性が考えられる。廃棄層と旧地形付近まで特に斜面の急峻な箇所では粘土層と砂層の不整合面が観察できる。

2 面は斜面上端と下端で異なる。斜面上端では斜面崩壊による二次堆積と捉えられるローム土層が基盤となり、遺構分布は希薄である。斜面下端では 1 面同様に廃棄層が広域に堆積するが 1 面よりも薄層の様相となり、遺物を含む廃棄層と遺物をあまり含まない砂や粘土などを主体とする層が互層状に堆積する。第 1-18 図に示した層序は F-1 区 1 面から 3-1 面に対応する。3 面以下は遺物が減少し安定した地盤が形成される。4 面から 6 面の層序はおおむね F-1 区と共通しており、5 面以下は層厚の厚い砂・粘土・ロームを基調とする比較的層厚の厚い盛土層である。6 面は基盤層で東京砂層に比定され、上面には細かなラミナの発達が顕著に残される。7 面に対応する面は確認できなかった。

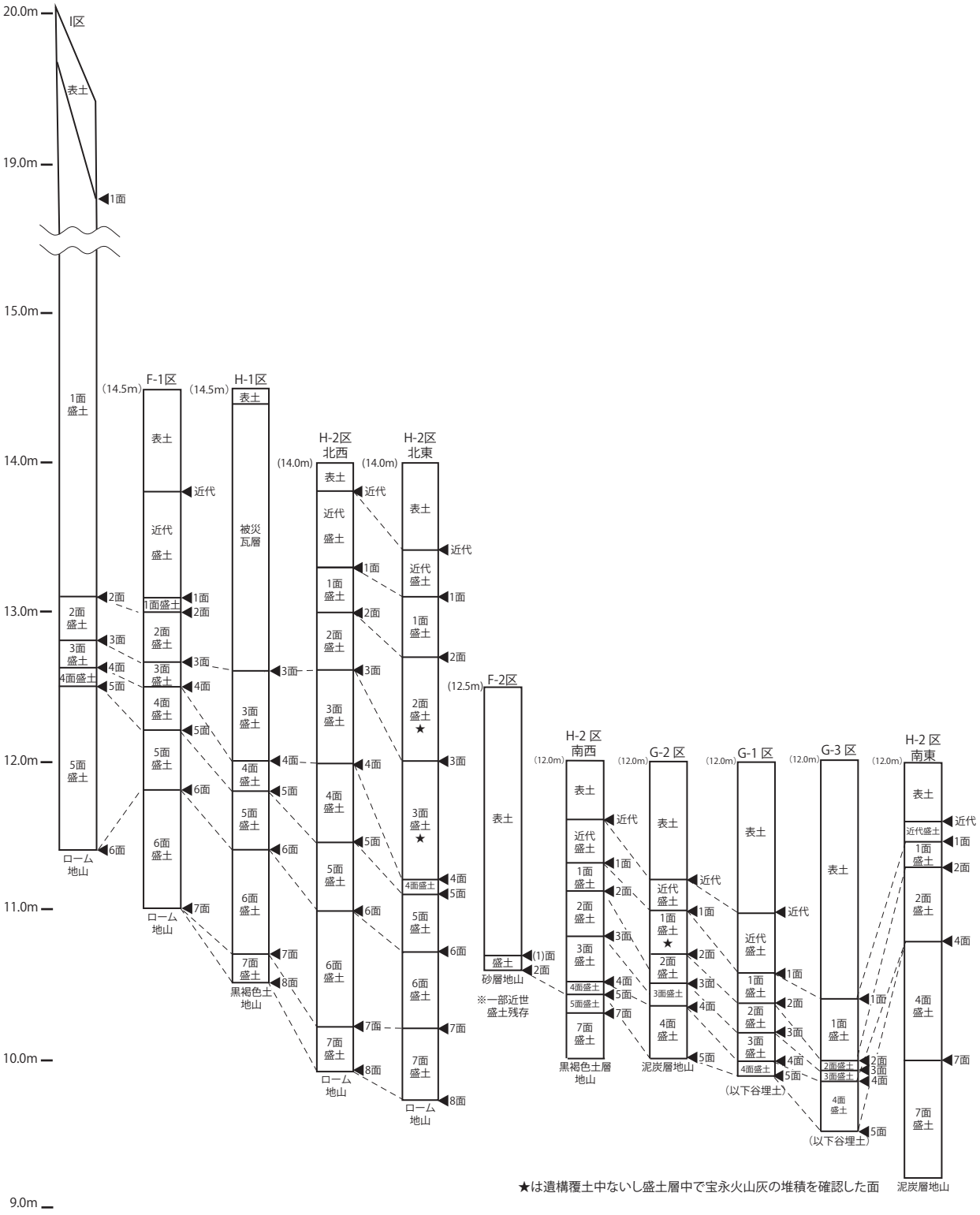
自然堆積の旧地形は、高台上端（五井松平家屋敷地）側が標高約 22 ～ 23 m、下端が標高約 12 ～

13 m、斜度 55 ～ 60 度、比高 10 mを測る、現状より急峻な崖面となっており、標高 19.7 mの高さで切土法面に幅 1.5 mの犬走り状の小段が形成されている。旧地形の斜面の露頭面は著しく摩滅し、掘削痕など人為的な痕跡を看取できない状態であったが、切土地形によって急峻な崖に地形改変が行われた可能性を捉えておきたい。露頭面の堆積層については標高 17 ～ 21 m付近について、セクションM -19 層がローム様の褐色粘土層、21・22 層が褐～淡褐色混砂粘土層、23 層が混粘土砂層、24 層が均質な砂層と観察している。また、高台上段Ⅰ区西側の立会調査の際に設定したトレンチのうち、トレンチ 4（T-4）の過程面付近から白色粘土の土壌サンプルを採取している（標高約 22m 付近）。採取した土壌サンプルを分析した結果、19 層と上段立会時のトレンチ 4 間の白色粘土はいずれもとも渋谷粘土層に比定され、上位のロームを含むことから斜面崩壊による再堆積が確認されている。均質な砂層は「東京層群第 1 砂質土層」と判断される（第 2 分冊第 VIII 章第 1 節参照）。自然地形の崖下端については、安全面から、立会時に重機で廃棄層を掘削する際に一部測量で捉えた範囲に限られるが、斜面下端は、現地表面の下端よりも 10 mほど西へセットバックしていた可能性がある。

第 1-20 図には各調査区の標高の平均値を基に作成した柱状模式図を示した。F-1 区、H-1 区、H-2 区北西、H-2 区北東、H-2 区南東、G-1 区は旗本成瀬家・鳥居家屋敷跡にあたり、F-2 区、G-2 区、H-2区南西は旗本川窪家･保科家屋敷跡にあたる。その比高は調査前の表土面で２m程度になっており、この柱状図からはその標高差が近世段階の２家の旗本屋敷の間で見られた標高差を引き継いでいるものということを読み取ることが出来る。また、Ⅰ区は旗本五井松平家屋敷と旗本成瀬家・鳥居家屋敷の境界の斜面にあたる部分である。Ⅰ区１面盛土層は斜面上部から斜面下の F-1 区へとつながる層が見られたことから標高差が大きく表れている。２面以下は斜面下部から検出された部分のため、標高差は小さくなっている。

また、各調査区の最終面の標高はⅠ区を除くと F-1 区がもっとも高くおよそ 11m、もっとも深くまで掘削した G-3 区ではおよそ 9.5m まで掘削したが、自然堆積層を確認出来ていない。H-2 区南東部では 9.2m 前後で自然堆積層を確認していることから、G-3 区の自然堆積層は 9.2m より標高が低いことが予想される。これはセクションⅠで確認した落ち込みから G-1 区や G-3 区でさらに落ち込んでいく埋没谷の中心部にあたるもので､H-1 区やH-2区北西部分は埋没谷中の平坦部と考えられる。また、G-1 区・G-3 区では谷を埋める盛土層からは旗本屋敷拝領前後の遺物が含まれていることから、旗本屋敷拝領に伴う造成が行われるまでは、埋没していなかったものと想定される。この埋没谷の推定ラインは第 1-7 図に埋没谷推定ライン２として示した。

（大八木・佐藤）


20.0m
19.0m
15.0m
14.0m
13.0m
12.0m
11.0m
10.0m
9.0m
I区
表土
1面
1面盛土
2面盛土
3面盛土
4面盛土
5面盛土
6面盛土
ローム地山
F-1区
(14.5m)
表土
近代
近代盛土
1面盛土
2面盛土
3面盛土
4面盛土
5面盛土
6面盛土
7面盛土
ローム地山
H-1区
(14.5m)
表土
被災瓦層
3面盛土
4面盛土
5面盛土
6面盛土
7面盛土
黒褐色土地山
H-2区北西
(14.0m)
表土
近代
近代盛土
1面盛土
2面盛土
3面盛土
4面盛土
5面盛土
6面盛土
7面盛土
ローム地山
H-2区北東
(14.0m)
表土
近代
近代盛土
1面盛土
2面盛土
2面盛土★
3面盛土★
4面盛土
5面盛土
6面盛土
7面盛土
ローム地山
F-2区
(12.5m)
表土
盛土
(1)面
2面
砂層地山
※一部近世盛土残存
H-2区南西
(12.0m)
表土
近代
近代盛土
1面盛土
2面盛土
3面盛土
4面盛土
5面盛土
7面盛土
黒褐色土層地山
G-2区
(12.0m)
表土
近代
近代盛土
1面盛土★
2面盛土
3面盛土
4面盛土
泥炭層地山
G-1区
(12.0m)
表土
近代
近代盛土
1面盛土
2面盛土
3面盛土
4面盛土
(以下谷埋土)
G-3区
(12.0m)
表土
1面盛土
2面盛土
3面盛土
4面盛土
(以下谷埋土)
H-2区南東
(12.0m)
表土
近代
近代盛土
1面盛土
2面盛土
4面盛土
7面盛土
泥炭層地山
★は遺構覆土中ないし盛土層中で宝永火山灰の堆積を確認した面

第 1-20 図　柱状模式図

Ⅳ　検出された遺構

永田町一丁目遺跡第３次調査で検出された遺構は中世、近世、近代と大きく３時期に分けられる。中世については中世末から近世初頭の所産と位置づけられる遺構があり、明確に分離することが困難であったため、旗本屋敷拝領以前と表記している。

遺構番号は調査時において時期・時代に関わらず調査順に付番している。建物跡については、個々の礎石・ピットに遺構番号を付与し、建物跡と認められたものについては新たに建物跡 1、建物跡 2…と番号を付与した。また、各遺構の掲載に際しては、検出面順（時期が新しい順）→遺構分類順→遺構番号順で掲載している。非抽出遺構および遺構の規模などの基本情報については第３分冊第 3-16 表を参照されたい。また、調査区全体図は遺構確認面対応表に基づいて、各調査区の遺構確認面を掲載している。

１．近代

今回の調査では、F-2 区を除くすべての調査区で近代以降に帰属する遺構を検出した（第 1-21 ～ 33 図）。F-1 区は近代盛土層上で、煉瓦基礎や礎石などの建物跡を確認している。H-1 区では、後世の削平によるものか、近代面を確認することはできなかったが、近世遺構である 2520 号を切るピットを確認し、ピット覆土からは煉瓦がまとまって出土したことから近代遺構として調査を行った。H-2 区では、現地表面に露出していた石垣 790 号を中心に、建物基礎や土管、土坑などを確認している。G-1 区では近代の池跡や井戸、建物基礎などが検出されている。今回確認された遺構は、煉瓦や出土遺物の年代から大半の遺構が明治 30 年代以降に位置付けられるもので、佐野常民邸以後の土地利用を反映したものと考えられる。

１）F-1 区

F-1 区では F-1 区北半を中心に近代盛土層上から建物基礎と解体に伴うと考えられる廃棄土坑が確認された。建物基礎のある F-1 区北半は概ね水平な堆積であったが、F-1 区南半は南側の F-2 区へ向かって傾斜していた。この南に傾斜する F-1 区南半は庭園空間であったと考えられ、建物基礎が存在せず代わりに池跡（328 号）が検出されている。建物基礎は煉瓦基礎と、基礎上部の煉瓦部分が失われたと考えられる布基礎の根切部分や礎石、割栗石が検出されており、その規模は民家一棟分にあたるものと考えられる。

F-1 区では建物基礎が複数検出されている。しかし、後世の開発により基礎の煉瓦部分が失われているものが大半であった。検出された建物基礎のうち、遺存状態のよい 302 号・305 号を図示した。

302 号・305 号（第 1-34 図）

302 号・305 号は F-1 区の中央部に位置している。F-1 区は調査開始時には地表面でコンクリートブロックにより中央部で南北に区画されていたが、302 号・305 号はこの区画に沿って形成されていた。煉瓦基礎は L 字に折れており、屈折部には煉瓦桝が取り付けられていた。煉瓦桝からは区画に沿うように土管が東西に走っており、東側は煉瓦桝（315 号）に接続する。煉瓦基礎は、根切溝内に礎

石が据えられ、礎石状に割栗石が敷かれ平坦に固められた面に煉瓦が積まれていた。北端、東端はどちらも攪乱により失われていた。北側はおそらく割栗石が溝状に敷かれた 314 号に接続するものと考えられる。使用された煉瓦は 302 号、305 号ともに小菅集治監で製作されたとされる「桜」の刻印が入る煉瓦であった。F-1 区で確認された刻印を持つ煉瓦は全て小菅集治監製であり、検出された煉瓦基礎は、佐野常民邸以降に築かれた建築物の一体の基礎と判断される。

328 号（第 1-35 図）

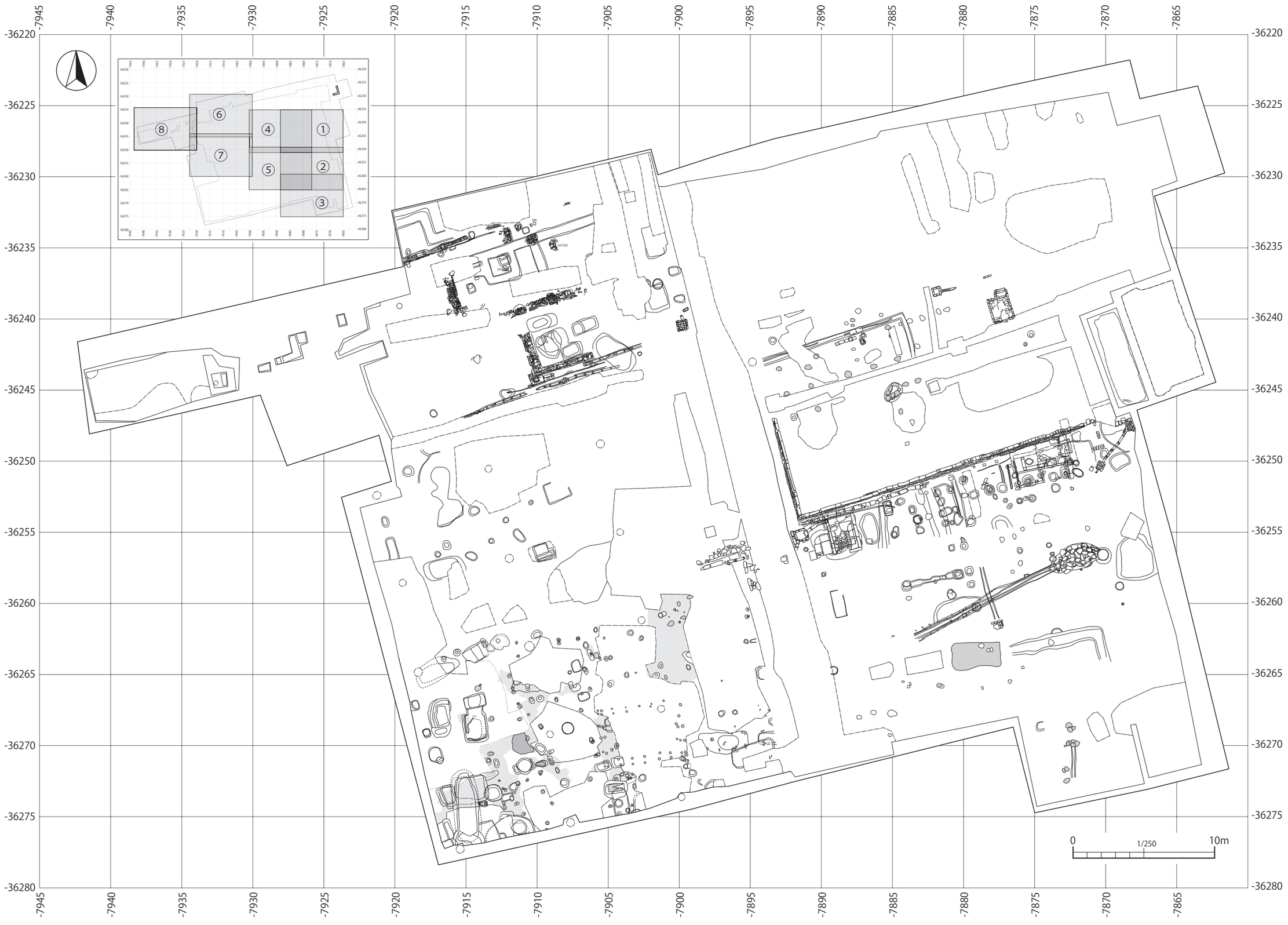
南北に長いモルタル基礎で、池の下部構造である。平面形は東西が攪乱により大きく失われていることから明確ではないが、楕円形であったと予測される。また、このモルタル基礎は本来水平に作られていたものと思われるが、直下に大型の廃棄土坑があるために地盤が沈下し、南側に傾いた状態で検出された。モルタルの厚さは 10 ～ 15cm 程度である。1 層から 3 層は掘方部分の土層である。これらの土層は炭化物粒や瓦片を含む層で、328 号周辺に堆積している近代～近世にかけての盛土層に近い。北側には池の中央部に島があったと思われる高まりが見られた。高まり部分はモルタルが張られていないことから植栽などが存在したものと考えられる。一方、南側では護岸部分に 2 体の甕が横倒しにした状態で埋め込まれた。これは魚溜りと考えられる。1 は魚溜りとして埋設されていた甕である。瀬戸・美濃産の鉄釉甕で、口径 348mm、器高 360mm、底径 220mm、最大径 390mm で、重量は 1,000.0g である。被せガラス、ラスター彩（ノリタケ製品か）が出土していることから、328 号は 20 世紀第 2 四半期（昭和 10 年代）には廃絶されたと考えられる。

2）G-1 区

813 号・860 号（第 1-36・39 図）

G-1 区北側で検出された池で、縁石および底面の玉石敷、漆喰、敷石が検出された。平面は半月状で、断面は皿状に立ち上がる。東端で井戸 815 号と重複しており、813 号の縁石が 815 号の掘方よりも上に配されるが、815 号内部からは 20 世紀第 2 四半期の遺物が出土しているため、井戸の設置よりは後に作られ、井戸本体の廃絶よりも前に埋没したと考えられる。掘方底面から約 20cm 厚の黒褐色土（第 1-36 図 10 層）の上に敷石が置かれ、底面と敷石の間には粘性の弱い黒褐色土が堆積している。敷石の上には砂質土（同図 8・9 層）、締まりの強い褐色土が堆積し、その上面に漆喰（同図 5 層）や粘土（同図 6 層）が薄く貼られていた。さらにその上には玉石（酒匂川産の細粒緑色凝灰岩）が敷き詰められる。池の周縁には底面の敷石に続く形で大ぶりの板石（安山岩製）が配されており、縁石となっている。南側中央や北西角には縁石の抜き取り痕のみが残っていたが（同図 4 層）、検出時の池上面にあった板石が縁石であった可能性がある。最上面に堆積する 1 層内部には薄い粘土層が見られ、玉石の間に充填された粘土と考えられる。

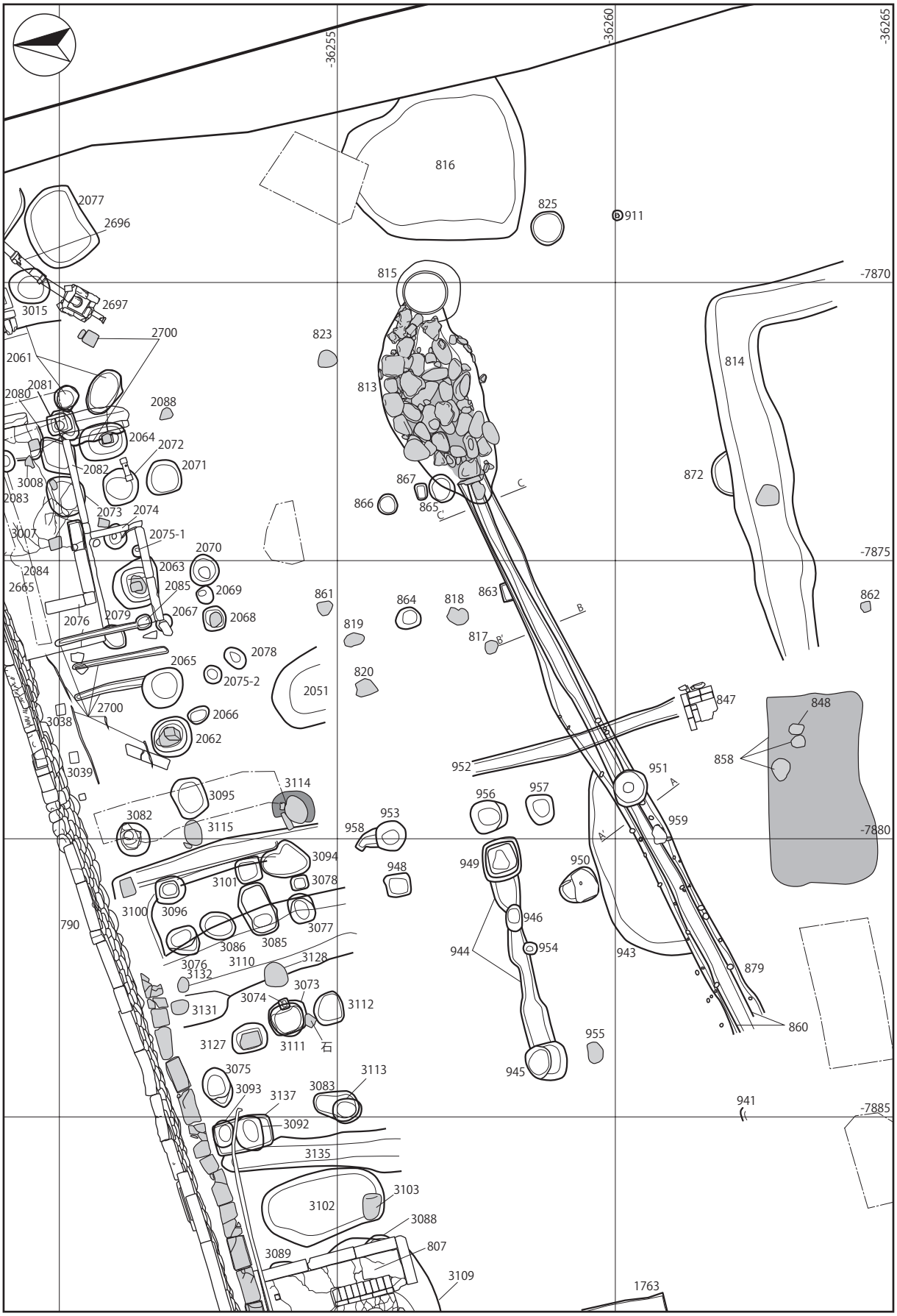
池への給水は 860 号（溝）から行われているようだが（第 1-33 図）、溝と池の接続部分に明確な施設の痕跡は見られなかった。860 号は幅 10cm 程度の細い溝だが、壁面に掘方を伴っており（第 1-39 図セクション A・6 層、セクション B・C 点線部分）木組溝であった可能性もある。溝内部の覆土は黄褐色砂が主体である。813 号の出土遺物は 201 点・7,004.4g で、出土遺物から見た時期は 19 世紀中葉である。860 号の出土遺物は 72 点・2825.9g で、出土遺物から見た時期は 813 号とほぼ同時期である。江戸時代の遺物が少ないことから、明治期以降の佐野常民邸の時期に構築、廃絶さ



第 1-21 図　近代全体図（1/250）



第 1-22 図　近代 1 面割図①（1/100）



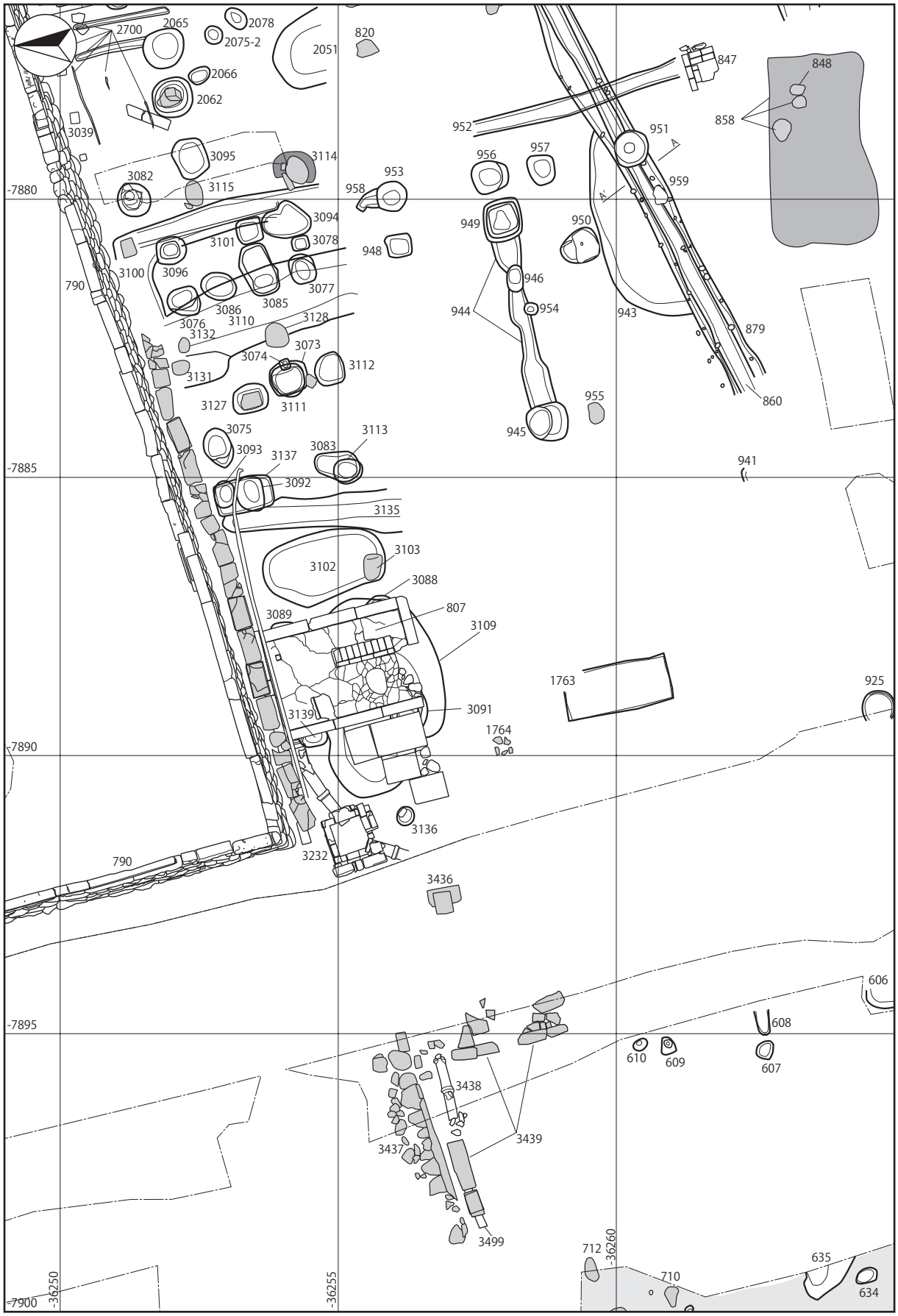
第 1-23 図　近代 1 面割図②（1/100）



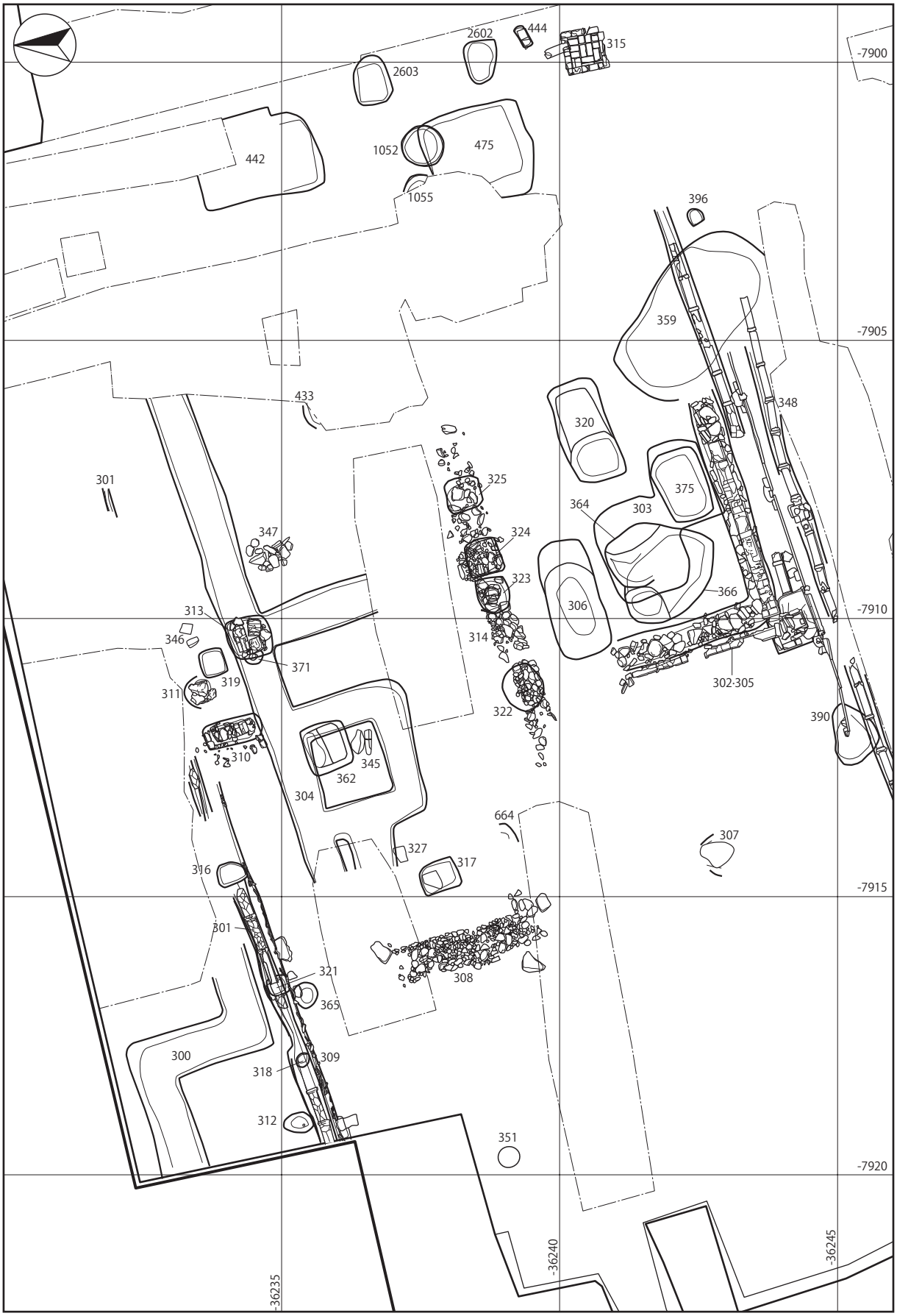
第 1-24 図　近代 1 面割図③（1/100）



第 1-25 図　近代 1 面割図④（1/100）



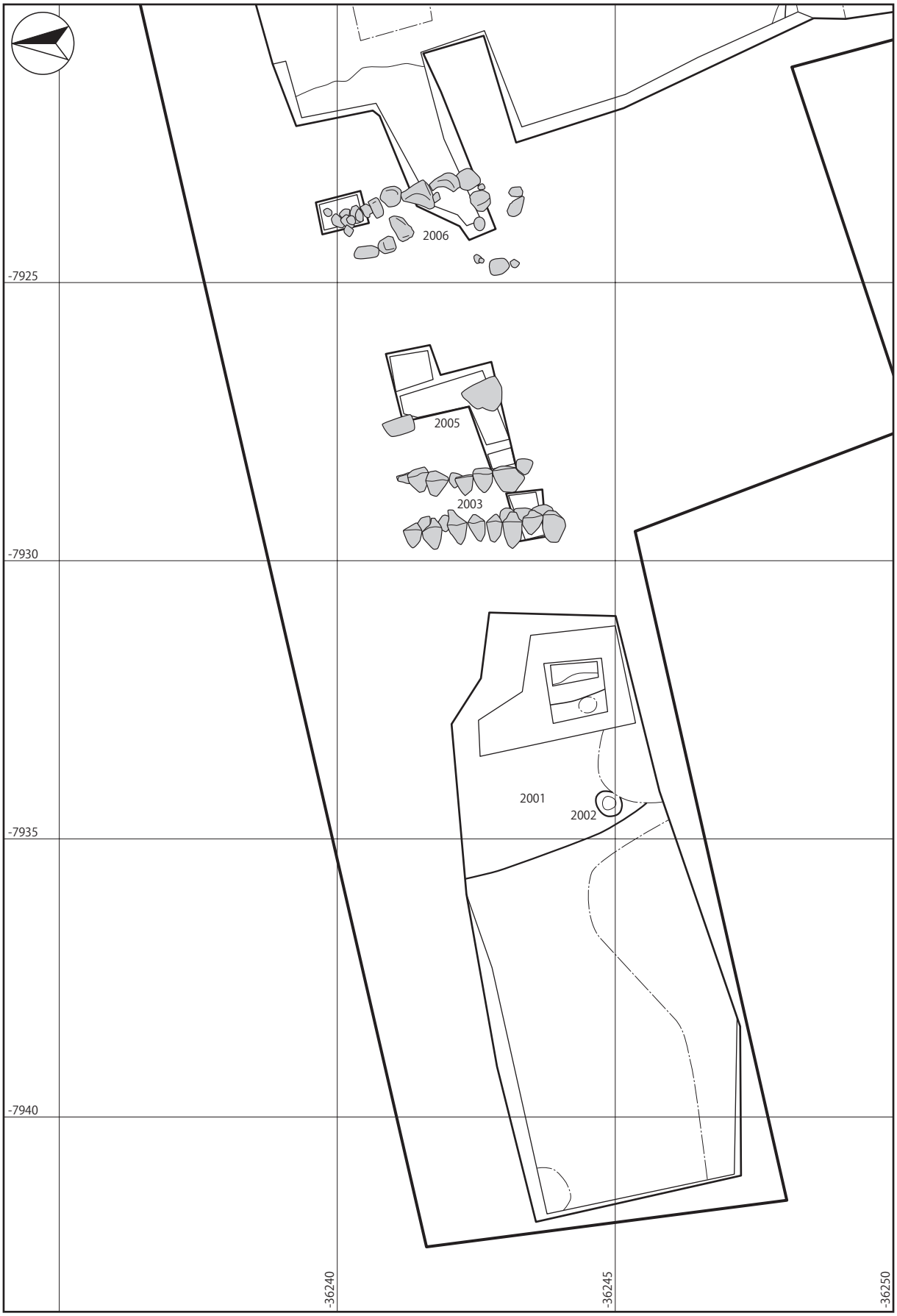
第 1-26 図　近代 1 面割図⑤（1/100）



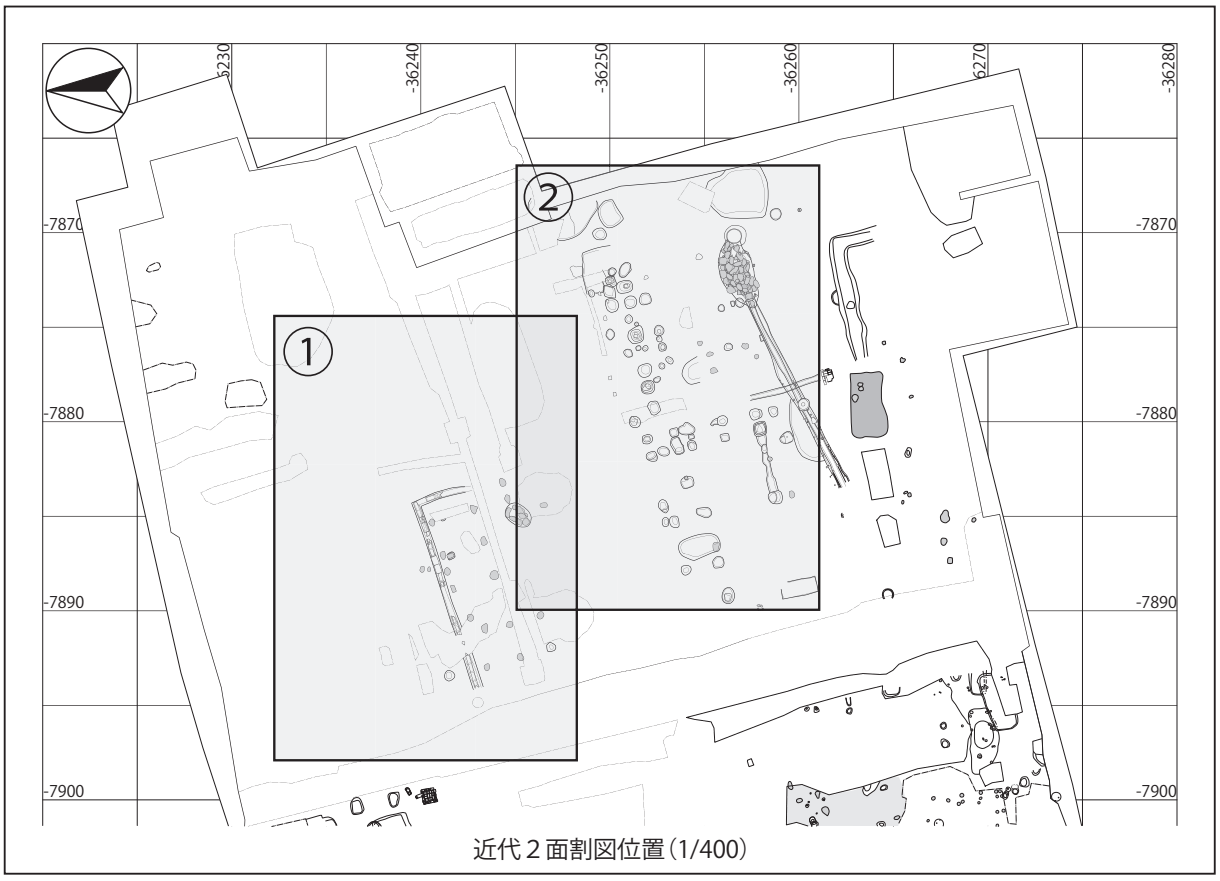
第 1-27 図　近代 1 面割図⑥（1/100）



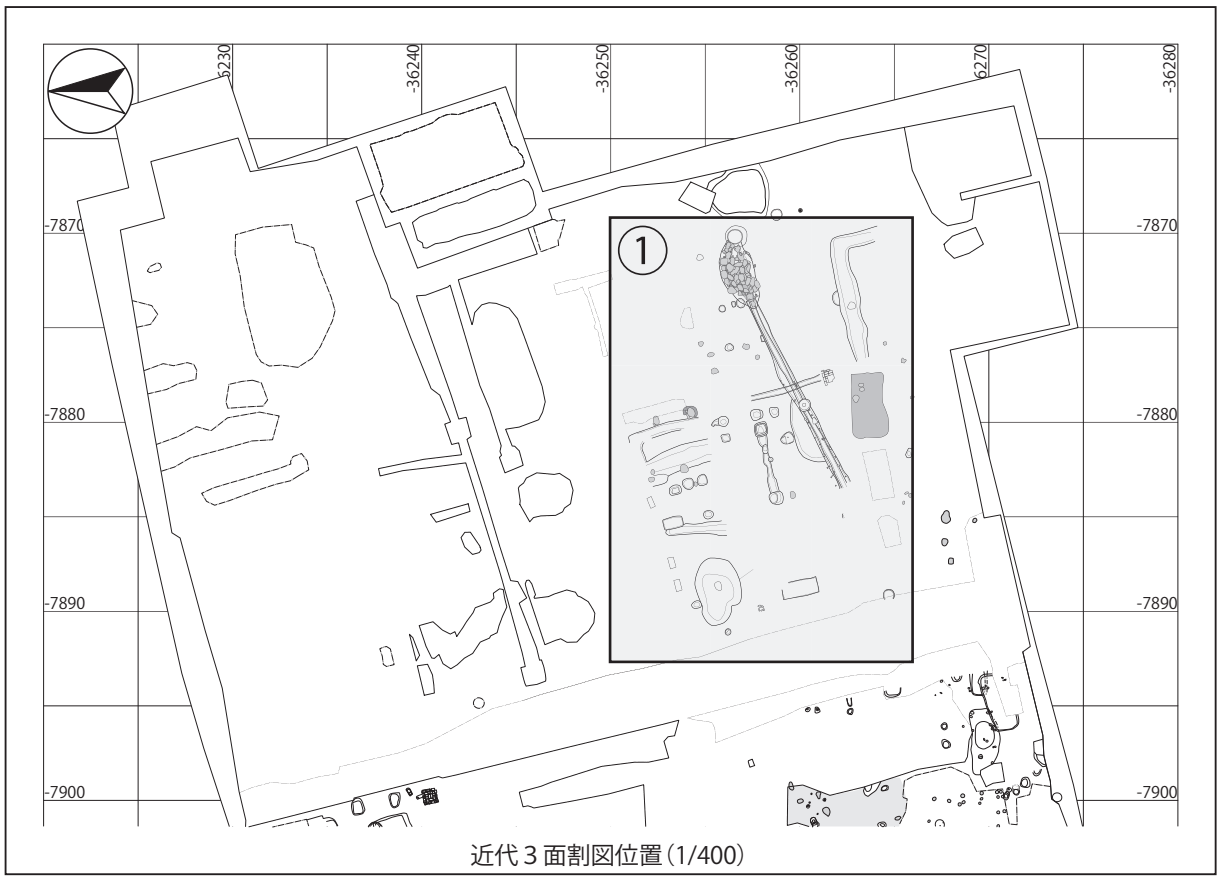
第 1-28 図　近代 1 面割図⑦（1/100）



第 1-29 図　近代 1 面割図⑧（1/100）

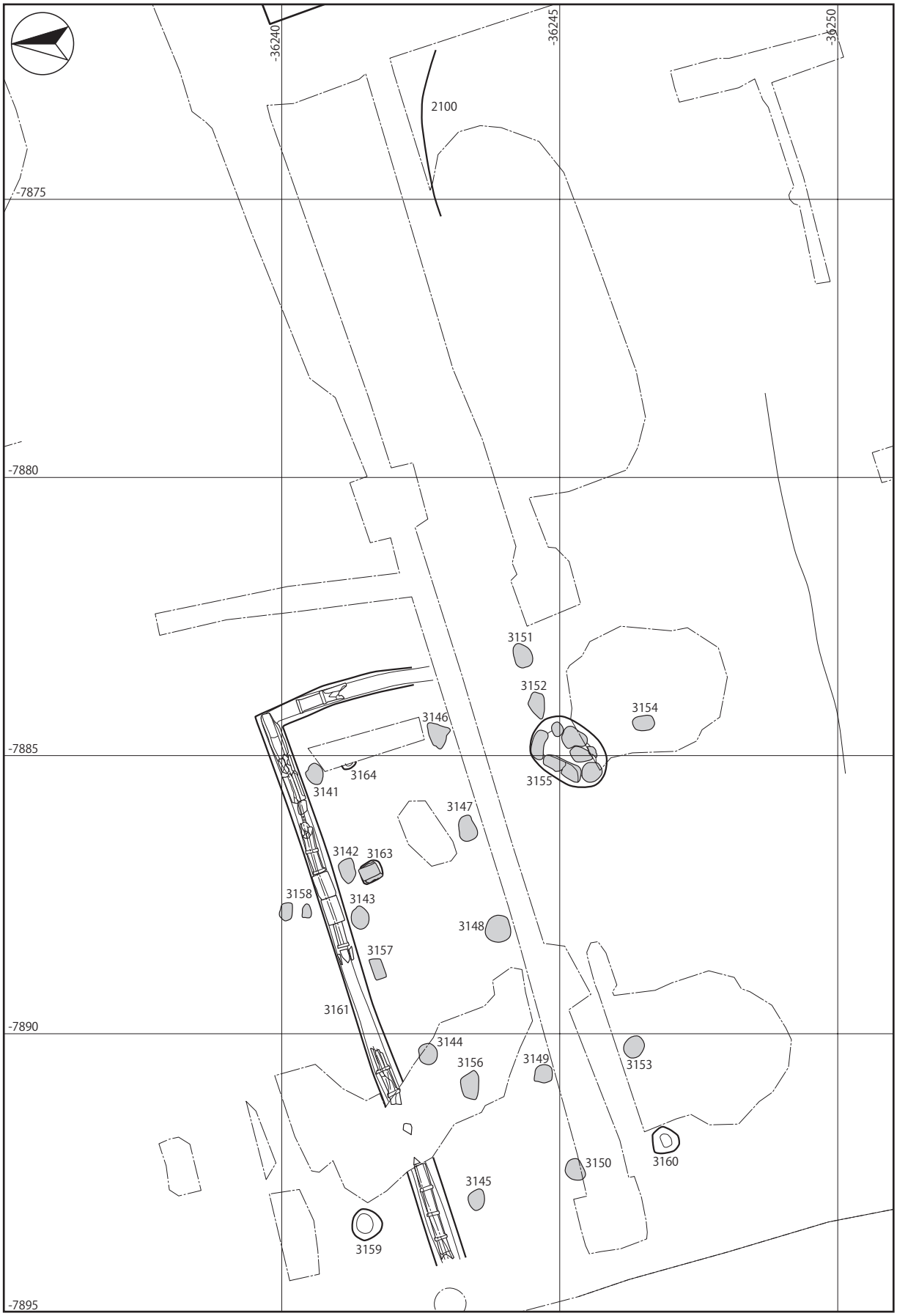


近代２面割図位置（1/400）



近代３面割図位置（1/400）

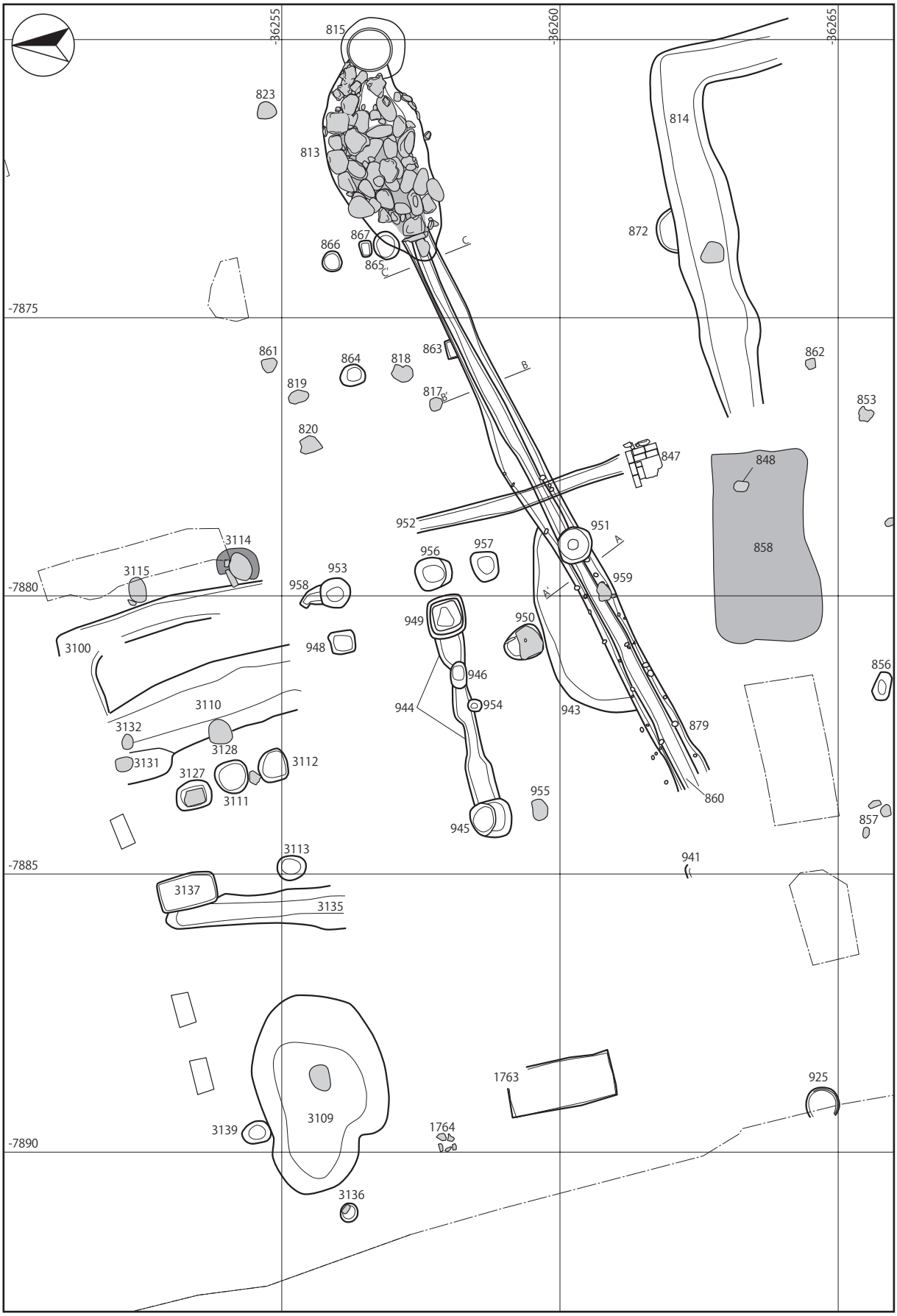
第 1-30 図　近代２面・３面割図位置図（1/400）



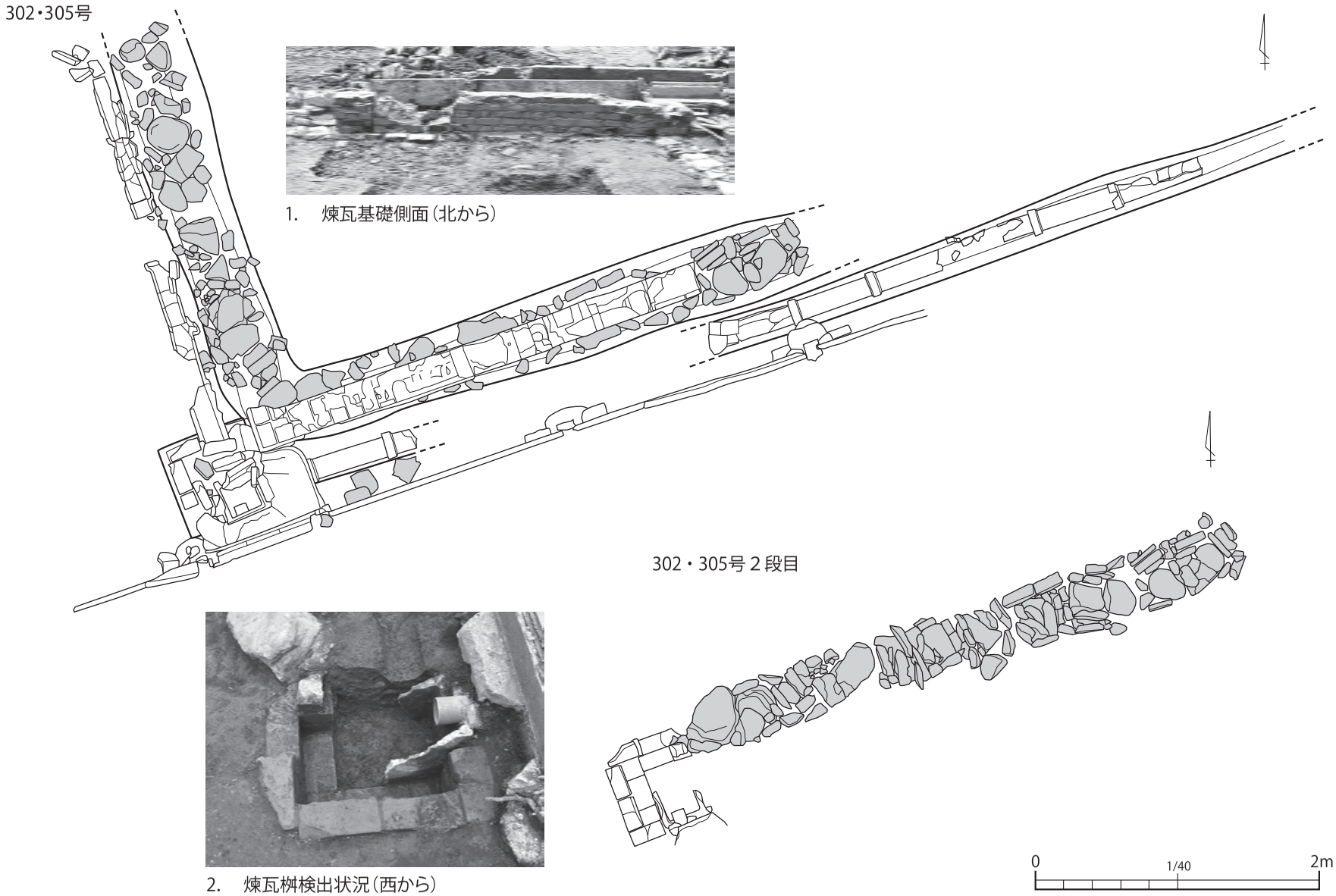
第 1-31 図　近代 2 面割図①（1/100）



第 1-32 図　近代２面割図②（1/100）



第 1-33 図　近代 3 面割図①（1/100）

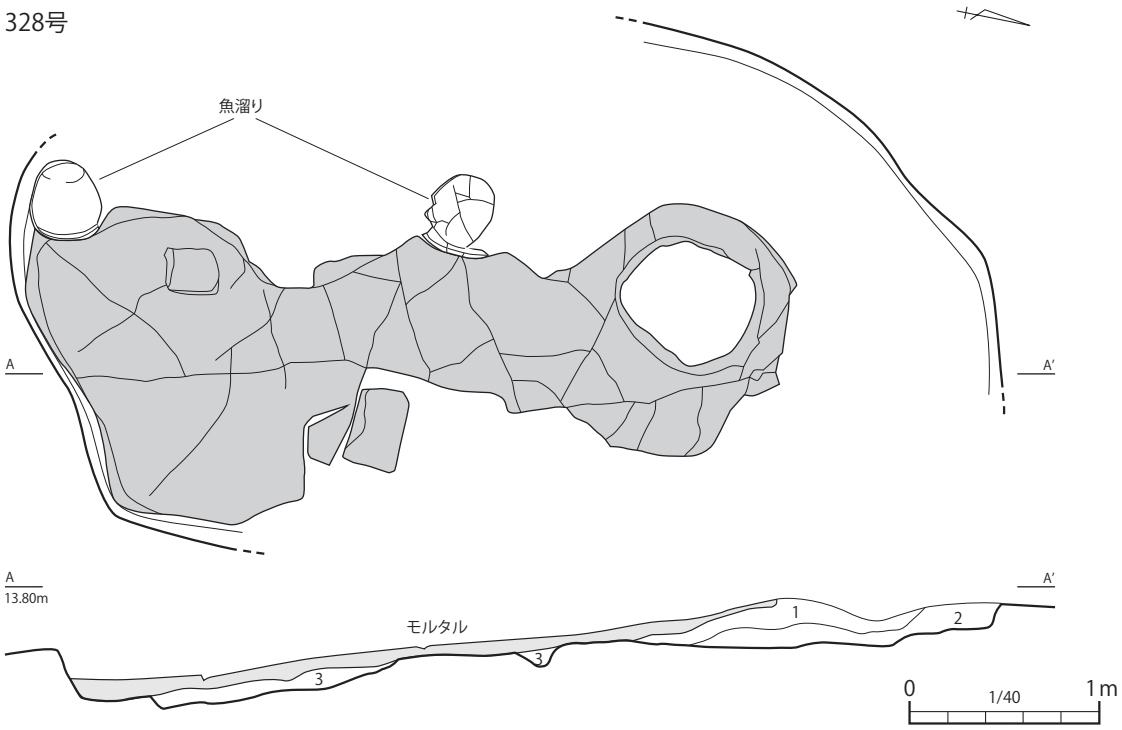


1.　煉瓦基礎側面（北から）

2.　煉瓦桝検出状況（西から）

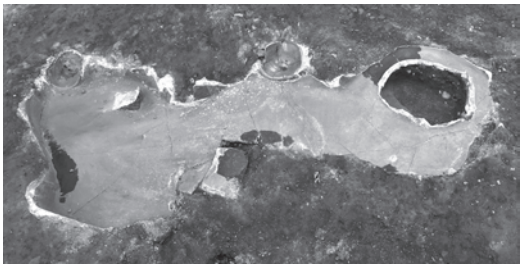
第 1-34 図　近代面の遺構（１）（1/40）

328号

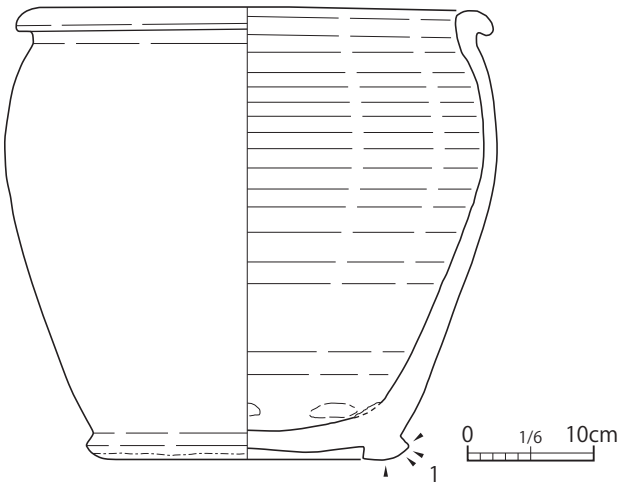


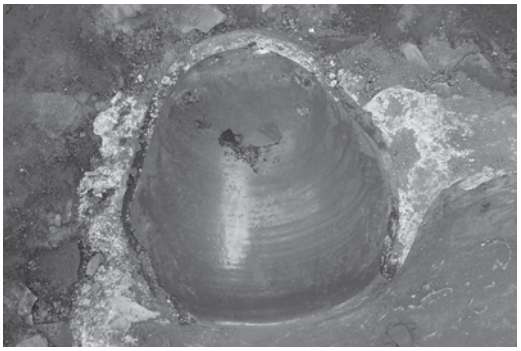
328 号
1：10YR3/3(暗褐色) しまり：あり 粘性：やや弱い 炭化物粒φ1 ～ 10mm1% 瓦片 3%
2：10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり：あり 粘性：やや弱い
3：10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり：あり 粘性：あり 瓦片を多く含む





1. 328号検出状況（西から）

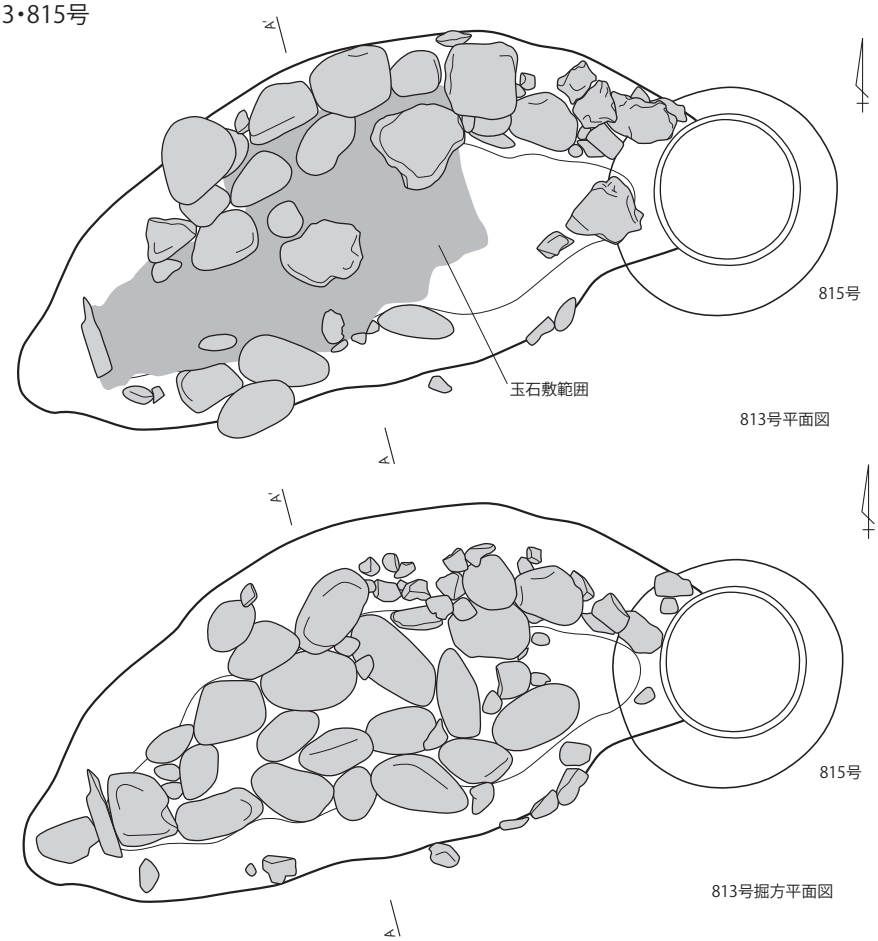




2. 魚溜り検出状況（西から）

第 1-35 図　近代面の遺構（２）（1/40）

813・815号



813号
1：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：弱い　黄色砂5%　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ1～3mm3%　褐灰色(10YR6/1)粘土を薄い層状に10%含む　砂質土層
2：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ3～10mm15%　ロームブロックφ15～20mm10%　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ1～3mm2%　褐灰色粘質土層
3：2.5Y4/6(オリーブ褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い　黄色砂10%　焼土粒φ1～3mm3%　砂質土　玉石層
4：ロームブロック層
5：2.5Y8/1(灰白色)　しまり非常に強い　漆喰層
6：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：強い　焼土粒　炭化物粒φ1～3mm3%　褐灰色粘質土主体
7：10YR4/3(褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ1～10mm5%　焼土φ1mm1%　炭化物層φ1mm1%　粒子細
8：10YR6/6(明黄褐色)　しまり：あり　ロームブロックφ20～30mm5%(斑紋状)　暗褐色(10YR3/3)土ブロックφ20～30mm５%(斑紋状)　砂層
9：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや弱い　粘性：強い　ローム粒φ1～2mm1%　焼土粒φ1mm1%未満　炭化物粒1%未満　砂質土層　粒子細
10：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　ローム粒φ1～3mm5%　黄色砂7%　焼土粒φ1～3mm2%　炭化物粒φ1～3mm3%　赤錆1%

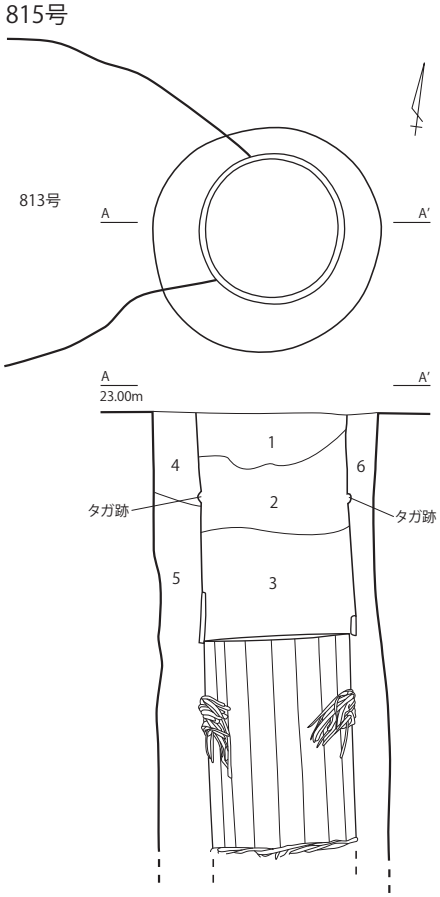
0　1/40　1m

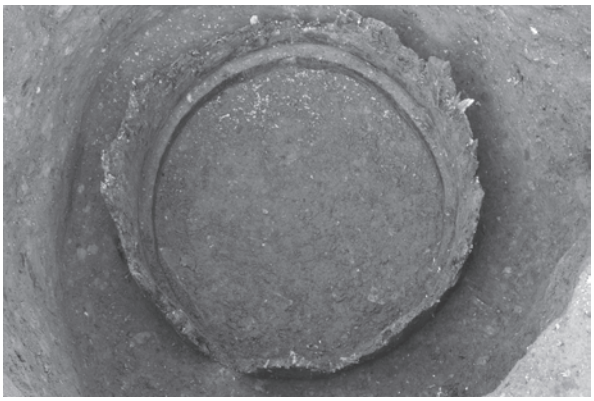

1. 813号砂利層検出状況（南から）


2. 813号敷石検出状況（南から）

第 1-36 図　近代面の遺構（３）（1/40）

815号





1.　815号側板検出状況（南から）

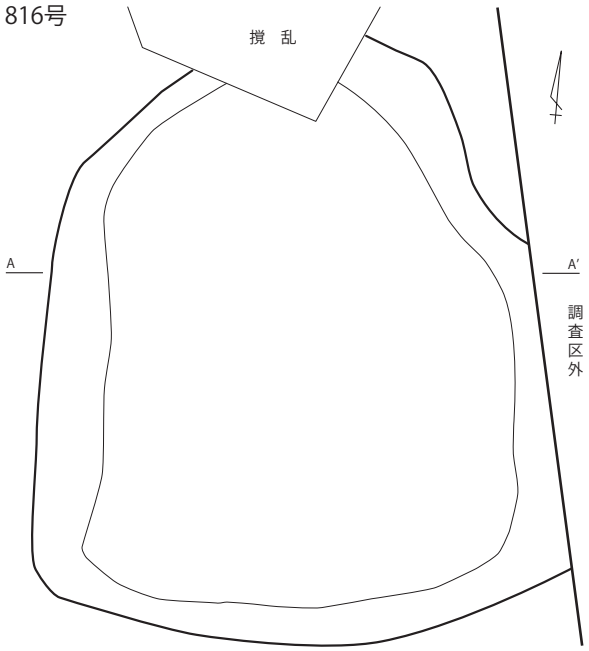


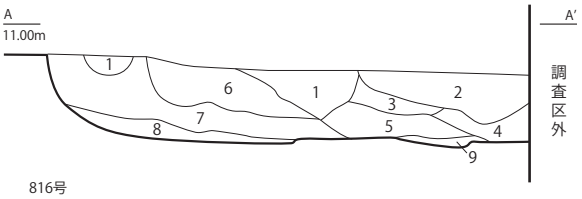
2.　815号断割・側板検出状況（南から）

815号

1：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ1～5mm5%　炭化物粒φ1~3mm3%　瓦片20%　黄灰色粘土15%
2：7.5YR3/1(黒褐色)　しまり：弱い　粘性：強い　褐色砂(7.5YR3/4)5%　焼土ブロックφ15～20mm5%　小砂利10%
3：7.5YR3/1(黒褐色)　しまり：弱い　粘性：強い　褐色砂(7.5YR3/4)5%　焼土ブロックφ15～20mm5%　小砂利10%　粘板岩片5%
4：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ロームブロックφ15mm5%　焼土粒φ3～5mm5%　炭化物粒φ5～10mm3%
5：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒φ5～10mm5%　焼土粒φ3～5mm3%　炭化物粒φ3～10mm7%
6：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ3～10mm10%　黄色砂10%　焼土粒φ3～5mm10%　焼土ブロックφ15mm5%　炭化物粒φ3～5mm5%

816号



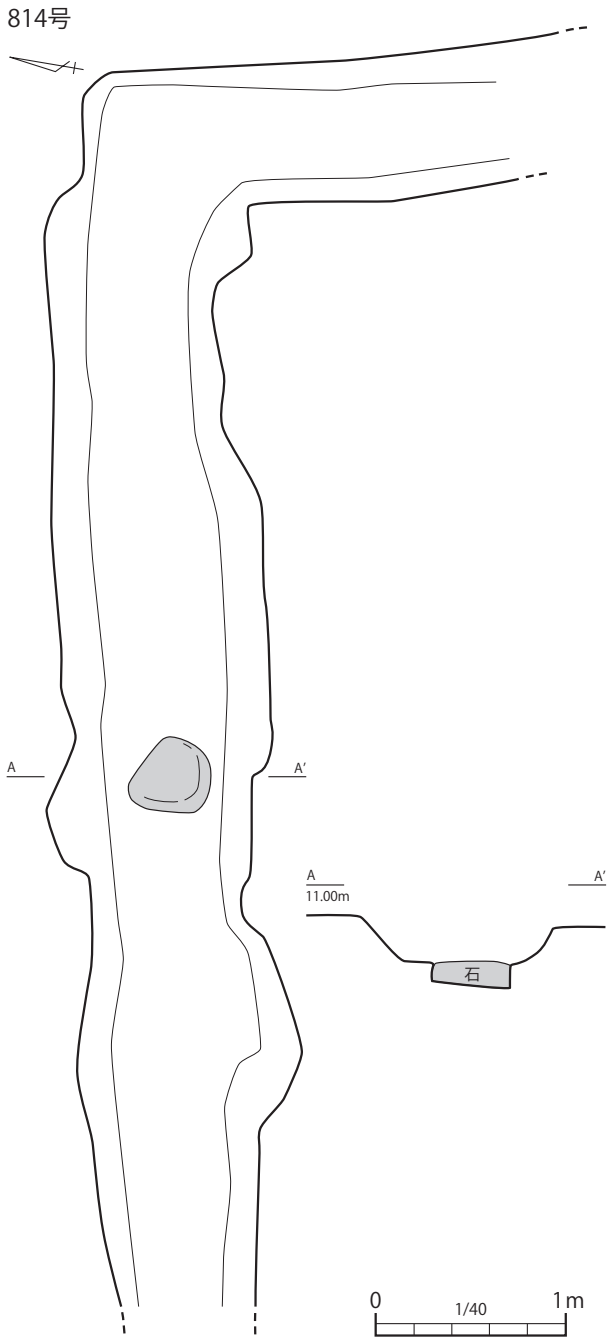


816号

1：10YR5/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：弱い　焼土粒φ3～10mm7%
　炭化物粒φ3～7mm7%　瓦片10%　褐灰色粘質土主体
2：5YR4/6(赤褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い　焼土粒φ1～10mm15%
　焼土ブロックφ15mm15%　炭化物粒φ3～5mm10%　瓦片5%
3：5YR4/2(灰褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　焼土粒φ1～10mm10%
　焼土ブロックφ15～20mm20%　炭化物粒φ5～10mm10%
4：2.5Y4/6(オリーブ褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ3～5mm5%
　炭化物粒φ1～3mm3%　褐色土主体
5：10YR2/1(黒色)　しまり：弱い　粘性：弱い　焼土ブロックφ15～20mm5%
　炭化物主体(70%)
6：5YR4/6(赤褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い　焼土粒φ1～10mm30%
　焼土ブロックφ15mm15%　炭化物粒φ3～10mm10%　瓦片5%　焼土主体
7：5YR4/2(灰褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い　焼土粒φ1～10mm30%
　焼土ブロックφ15mm15%　炭化物粒φ3～10mm10%　灰褐色土10%　瓦10%
8：5YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：弱い　焼土粒φ1～10mm15%
　炭化物粒φ3～5mm10%　瓦片10%
9：2.5YR4/6(オリーブ褐色)　しまり：強い　粘性：あり　黄色砂5%

0　1/40　1m

第 1-37 図　近代面の遺構（4）（1/40）



第 1-38 図　近代面の遺構（５）（1/40）

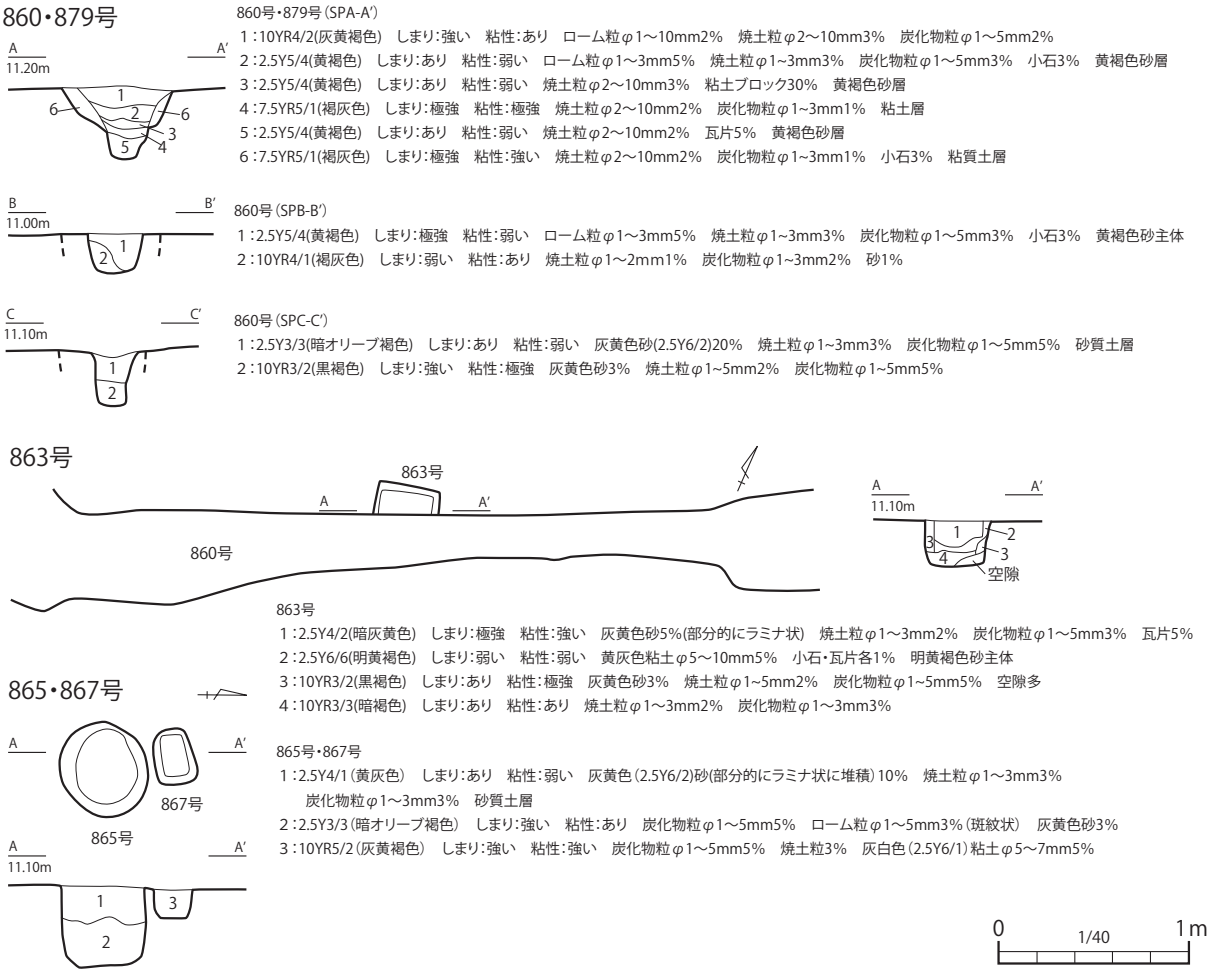
れたものと考えられる。

815 号（第 1-37 図）

G-1 区北東に位置する井戸で、813 号池跡と重複する。813 号で記載したとおり、815 号の構築以降に 813 号池跡が作られているが、廃絶時期は 815 号の方が遅く 20 世紀第２四半期である。直径 79cm の井戸枠外側に直径 126cm の掘方を伴う。井戸枠は幅 12cm、長さ 120cm の木板を用い、箍で締める桶状のものである。井戸枠は確認面から２段分まで調査したが、それ以下は安全上の観点から掘削していない。井戸枠は上段・下段とも杉板を使用していた。井戸内には、最上層に瓦片・黄灰色粘土を多く含む黄灰色土（第 1-37 図１層）が、その下には締まりが弱く粘性が強い黒褐色土（同図２層・３層）が堆積していた。３層にはスレート瓦片が多く含まれていた。完形のものは 27cm × 15cm の粘板岩製で、釘穴が２箇所ある。掘方に褐灰色土（同図５層）・灰黄褐色土（同図６層）が堆積するが、813 号池跡と重複する部分には締まりの強い灰黄褐色土が堆積しており、池の構築に伴う地固めの可能性がある。出土遺物は 380 点・22,132.4g で、出土遺物から見た時期は 20 世紀第２四半期である。よって第二次世界大戦期以前の遺構と考えられるが、明治期の佐野常民邸を表した『五千分一東京図測量原図』（陸軍参謀本部測量局 1883・巻頭図版 23 図）に見られる井戸と位置的には合致していること、813 号池跡より以前に構築されていること、桶状の井戸枠を使用している点で近世の井戸の構造に近いことから、旗本屋敷の時期から第二次世界大戦期まで継続して使用された井戸であった可能性が高い。

816 号（第 1-37 図）

G-1 区北東角に位置する大型の土坑である。長軸 3.21cm、短軸 2.77cm の不整形で、壁はやや急に立ち上がる。底面は凹凸が見られるが、底面が砂層内となるため安定せず削られたと考えられる。覆土は焼土・炭化物・瓦片を多く含む灰褐色土を主体とし、焼土層（第 1-37 図６層）・炭化物層（同図５層）・粘土層（同図１層）等が認められた。各層はモザイク状に堆積しており、おそらく火災後



860号・879号（SPA-A′）
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:強い　粘性:あり　ローム粒φ1～10mm2%　焼土粒φ2～10mm3%　炭化物粒φ1～5mm2%
2：2.5Y5/4(黄褐色)　しまり:あり　粘性:弱い　ローム粒φ1～3mm5%　焼土粒φ1~3mm3%　炭化物粒φ1～5mm3%　小石3%　黄褐色砂層
3：2.5Y5/4(黄褐色)　しまり:あり　粘性:弱い　焼土粒φ2～10mm3%　粘土ブロック30%　黄褐色砂層
4：7.5YR5/1(褐灰色)　しまり:極強　粘性:極強　焼土粒φ2～10mm2%　炭化物粒φ1~3mm1%　粘土層
5：2.5Y5/4(黄褐色)　しまり:あり　粘性:弱い　焼土粒φ2～10mm2%　瓦片5%　黄褐色砂層
6：7.5YR5/1(褐灰色)　しまり:極強　粘性:強い　焼土粒φ2～10mm2%　炭化物粒φ1~3mm1%　小石3%　粘質土層

860号（SPB-B′）
1：2.5Y5/4(黄褐色)　しまり:極強　粘性:弱い　ローム粒φ1～3mm5%　焼土粒φ1~3mm3%　炭化物粒φ1～5mm3%　小石3%　黄褐色砂主体
2：10YR4/1(褐灰色)　しまり:弱い　粘性:あり　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1~3mm2%　砂1%

860号（SPC-C′）
1：2.5Y3/3(暗オリーブ褐色)　しまり:あり　粘性:弱い　灰黄色砂(2.5Y6/2)20%　焼土粒φ1~3mm3%　炭化物粒φ1～5mm5%　砂質土層
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり:強い　粘性:極強　灰黄色砂3%　焼土粒φ1~5mm2%　炭化物粒φ1~5mm5%

863号
1：2.5Y4/2(暗灰黄色)　しまり:極強　粘性:強い　灰黄色砂5%(部分的にラミナ状)　焼土粒φ1～3mm2%　炭化物粒φ1～5mm3%　瓦片5%
2：2.5Y6/6(明黄褐色)　しまり:弱い　粘性:弱い　黄灰色粘土φ5～10mm5%　小石・瓦片各1%　明黄褐色砂主体
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり:あり　粘性:極強　灰黄色砂3%　焼土粒φ1~5mm2%　炭化物粒φ1~5mm5%　空隙多
4：10YR3/3(暗褐色)　しまり:あり　粘性:あり　焼土粒φ1～3mm2%　炭化物粒φ1～3mm3%

865号・867号
1：2.5Y4/1（黄灰色）　しまり:あり　粘性:弱い　灰黄色（2.5Y6/2)砂(部分的にラミナ状に堆積）10%　焼土粒φ1～3mm3%
炭化物粒φ1～3mm3%　砂質土層
2：2.5Y3/3（暗オリーブ褐色）　しまり:強い　粘性:あり　炭化物粒φ1～5mm5%　ローム粒φ1～5mm3%（斑紋状）　灰黄色砂3%
3：10YR5/2（灰黄褐色）　しまり:強い　粘性:強い　炭化物粒φ1～5mm5%　焼土粒3%　灰白色（2.5Y6/1）粘土φ5～7mm5%

第 1-39 図　近代面の遺構（６）（1/40）

の片付けに伴う廃棄土坑と考えられる。出土遺物は 627 点・132,868.4g で、瓦片が多い。出土遺物から見た時期は 19 世紀後葉以降である。

814 号（第 1-38 図）

814 号は建物基礎の下部が残存したものと考えられる。検出時にはすでに上部が削平されており、建物基礎の内の礎石 1 基と根切溝が L 字状に残るのみであった。遺構の時期は統制陶器などが出土していることから戦前から戦中、戦後にかけての時期と考えられる。絵図・地図資料などと比較すると、近世の 1 面段階に作られたと考えられる 801 号（溝）は明治期にも残存しており、近世の区画を踏襲していたものと考えられるが、土地が分割される中で次第に区画が変化していき 814 号がつくられた時期には分割と区割りの変更が進んでいたものと考えられる。

3）H-2 区

H-2 区では石垣（790 号）が調査開始の段階ですでに現地表面に露出していた。近世段階では 2 筆に分かれていたが、明治期になると 2 筆ともに佐野常民邸となる。佐野常民邸以後も土地が分割されていく際に再び近世の土地区画に基づいて土地を区画するために 790 号が利用されている。790 号の北側と南側では異なる屋敷の敷地となる。H-2 区北側は H-1 区に続いて土地が削平されていた。そ

のため、建物基礎の下部にあたる礎石や半地下構造の煉瓦造りの部屋、土管などが検出されている。一方で、H-2 区南側では後世の削平を伴うような開発が行われていなかったため、土間や建物基礎の上部構造が残存していた。

H-2 区では表土上に露出していた遺構と関連する遺構を近代 1 面として調査を行った。続いて、表土層下を近代 2 面、近現代の盛土層下を近代 3 面とし、合計 3 面を調査した。

A　近代 1 面

近代 1 面は表土層中および表土層から露出していた遺構が中心となる。近代 1 面では H-2 区を石垣（790 号）が南北に分割しており、異なる敷地となっていた。近代 1 面の遺構はこの分割された土地の内、南側に多く分布する。検出された遺構は、石垣 1 基、煉瓦建物 3 棟、便所跡 1 基、建物基礎 10 基、根太痕 1 基、煉瓦桝 3 基、土管 6 条、礎石 19 基、礎石跡 1 基、石列 1 条、石敷き 2 基、盛土 1 基、焼土溜り 1 基、瓦溜り 1 基、土坑 25 基、ピット 13 基、イヌ埋葬跡 1 基がある。

807 号（第 1-40 図）

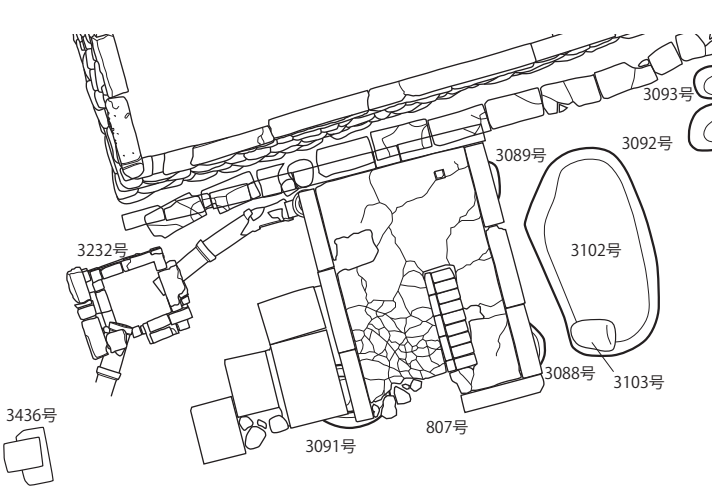
807 号は 790 号に近接する建物基礎で、切石により長方形に区画し、区画内部にモルタルが貼られた遺構である。区画は東西 2 つに分かれており、東側はモルタルがほぼ全面的に残っていたが西側は一部のみ残存している状況であった。807 号の西側ではモルタルの下から 3232 号とした煉瓦桝とそこから延びる土管が検出された。3232 号の西側に延びていく土管は撹乱により 3232 号との接続部の先が失われていたものの、道路部分に延びていくことから本管へと接続するものと考えられる。東側に延びていくものは 807 号の下を通り、東へと続いていた。807 号の東側では長さおよそ 1m の煉瓦基礎があり、また、北東隅ではロウソク石の上部が露出していた。

2061 号・2665 号（第 1-40 図）

2665 号は 807 号と同様の構造を持つ建物基礎である。切石による区画内にモルタルが貼られており、そこから下部のロウソク石が露出している。また、2665 号は 790 号に接しており、790 号とは軸線がずれるものの、790 号より後から作られたようで、790 号を上からモルタルで固めていた。東側には 2061 号が 2665 号に切られている。2061 号は土間状の硬化面であり、硬化面の外周には瓦を立てた状態で並べ、土留めがなされていた。2061 号の南東部には煉瓦桝 2697 号があり、接続されていた可能性が考えられる。2697 号からは南西方向と北東方向に土管が延びていた。南西方向に延びる土管は接続部からすぐに撹乱により失われていた。北東方向に延びる土管は同様の煉瓦桝 2698 号に接続されていた。2698 号は 790 号西端部分に接しており、その先に延びる土管の行き先は確認することができなかった。

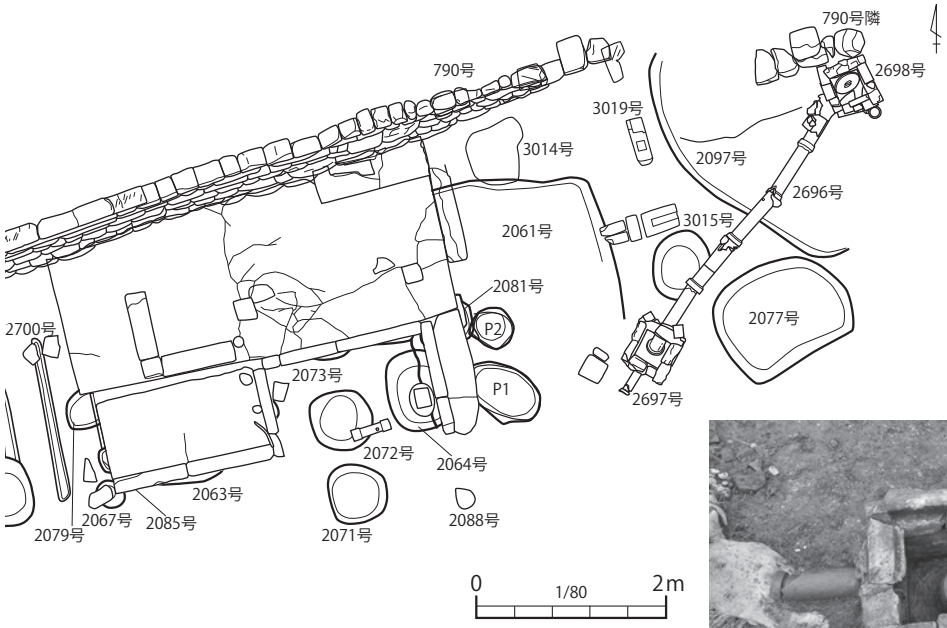
3031 号（第 1-41 図）

北東から検出された半地下式構造の煉瓦遺構である。室部は長方形を呈し、北東側に 2 段の階段が突出する。南東側は階段部と同幅の範囲が後世の埋設管に破壊され煉瓦壁を欠失する。この範囲の床面が南側に一部突出して残存することから、南東側も突出した付帯施設を有していた可能性がある。内面と階段壁・床面は煉瓦積みモルタル貼り構造である。モルタルの厚さは床面で 5 mm 厚、階段蹴込み面で 7 mm 厚を測る。規模は、室部本体が長軸外法 1.76 m（約 1 間）・内法 1.48m、短軸外法 1.57 m・内法 1.35m、階段部を含む最大長軸は 2.41 m以上で、深さは 0.59 m、階段踏面 0.72 m・蹴上 0.20・0.25 mを測る。南西隅にはベンチ状の段差（幅 0.48m、高さ 0.25m）を、床面北西隅には円形（φ





1.　807号全景(北から)





2.　2697号全景(南東から)

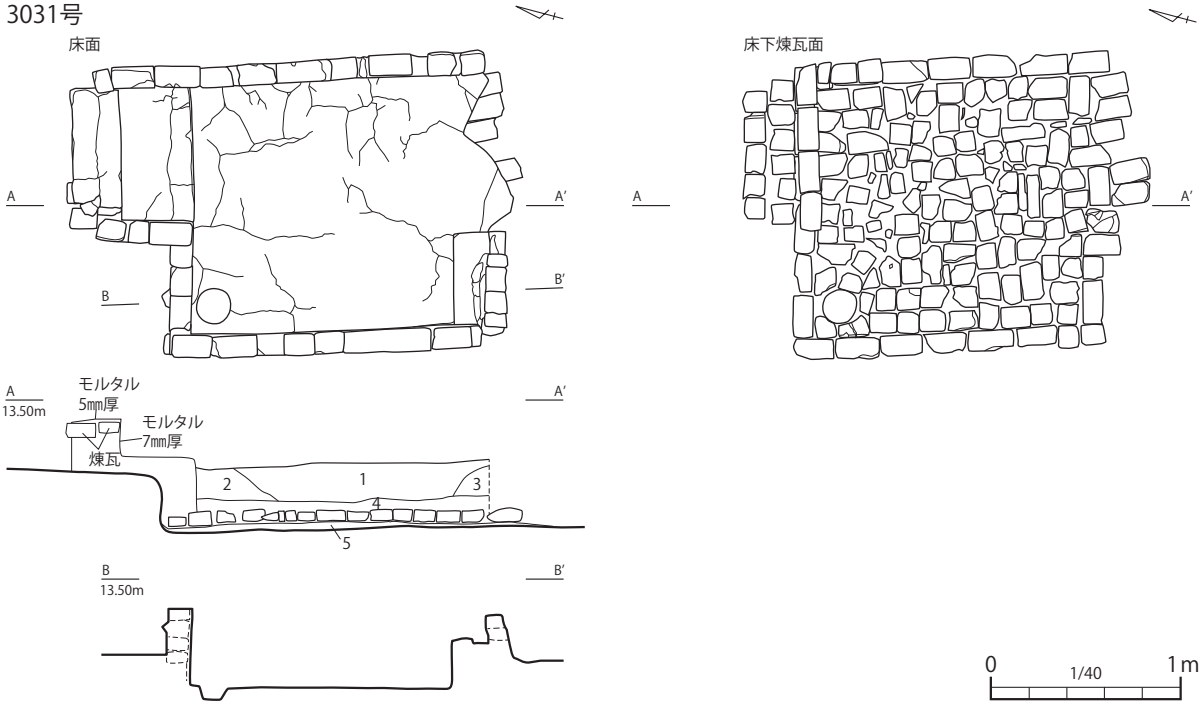


3.　2665号全景(東から)



4.　2061号全景(東から)

第 1-40 図　近代面の遺構（７）（1/80）



3031号
1：2.5YR4/8(赤褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い　焼土粒50%～　細礫5～10%　中礫φ~30mm5～10%　瓦多量､漆喰少量含む　焼土粒＋灰主体層
2：5Y2/1(黒色)　しまり：あり　粘性：弱い　焼土粒5～10%　炭化物粒50%～　炭化物ブロックφ~20mm50%～　灰＋炭化物主体　炭化物は角柱様を呈する
3：7.5Y3/2(オリーブ黒色)　しまり：あり　粘性：弱い　細砂30～50%　焼土粒5～10%　漆喰含む　砂･灰･炭化物混合層
4：5Y2/1(黒色)　しまり：あり　粘性：弱い　炭化物粒φ~10mm50%～　炭化物ブロックφ10～20mm1～3%　床面直上の炭化物集中層
5：10YR4/4(褐色)　しまり：極強　粘性：あり　細砂5～10%　焼土粒15～25%　炭化物粒5～10%　細礫5～10%　中礫φ~15mm5～10%　掘方覆土　混砂粘土層





1.　3031号検出状況（北東から）



2.　3116号検出状況（西から）

第 1-41 図　近代面の遺構（８）（1/10・1/40）

0.18m・深さ 0.08m）で断面逆台形のピットを有する。覆土は５層に分かれ、５層は掘方覆土、４層は床面直上に水平堆積する炭化物が凝集する薄層、２・３層は灰・炭化物主体、１層は被災瓦を含む焼土・灰主体層である。床面から壁面地上付近まで被熱し炭化する。出土遺物は総点数 217 点、総重量 25373.6g、被災遺物を多く含む。陶磁器類は少量で、個体となるものは、室内用のローゼット菊形白磁碍子（1A250 Ⅴ）と植木鉢（陶器２・土器３個体）のみである。煉瓦の刻印には○に「サ」が多く、齋藤煉瓦工場製と考えられる。このほか小菅集治監製の桜など複数の刻印が少量ずつ見られるのは、再利用か補修によるものと考えられる。20 世紀前葉の火災に伴う廃絶と考えられ、戦災まで下る可能性もある。

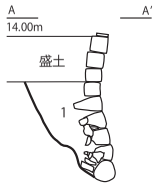
790 号（第 1-42・43 図、第 1-4 表、図版 3-49-5）

790 号は調査直前まで現地に残されていた石垣である。江戸時代以来の屋敷地境をほぼ継承して、北側（H-2 区・F-1 区）と南側（F-2 区・G-1・2 区）を上下２段に段切りして区画する。石垣の平面形態は、Ｌ字形を呈する。南面（東西列）と西面（南北列）の２面で構成される。南面は長さ 24.7 m以上、東端が調査区外へ続き、西端は中央を南北に貫通する旧道の手前で北方へ約 90 度屈曲する。西面（南北）は長さ 7.6 mを測る。旧道を挟み F-1 区に至る西側の延長は、平成 22 年度区教委調査で確認された擁壁（石垣）に連なる。その東側下位の若干南方へずれる位置に 3437 号石垣が検出されている。旧道は東側に角形土管を側溝として伴って検出され、北側から南側へと傾斜して上・下段を繋ぐ。大正元年（1912）の地籍地図（第 1-8 図 8）に描かれた道に相当する。構築当初の石垣は敷地を東西に貫通し南北境界を一直線に段切りしていたが、明治 43 年（1910）頃の佐野家転居以降の敷地分割・道路新設に伴い、道に沿った区画整地に伴い積み直されＬ字形の平面形態に改築されたものと捉えられる。構築時期は、幕末期嘉永５年（1850）の火災処理土坑である 2092・2100 号を切り、裏込内に山水文やコバルト染付の土瓶・磁器を含むことから、明治５年（1883）の佐野常民邸に伴い構築されたものと捉えられる。積み方は布積みを基本とし、複数の積み直し、積み増しを経て最大 10 段積みとなり、高さは 2.4 mを測る。西面は南端石垣隅角部から傾斜に伴って減少し北端部では１段積みとなる。根石には不整楕円形～円形を呈する海岸礫と思われる安山岩・凝灰岩が使用され、下から２・３段目の築石は大型の安山岩を主体とした間知石、４～６段はやや小型となる緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）を主体とした間知石、７段目はその天端石として長手積みで房州石の直方体の切石が使用される。ここまでの法面斜度は概ね 77°を基本とする。８～ 10 段目は直方体の切石の長手積みだが大谷石を使用し、石面の斜度もほぼ垂直となり異なることからも継ぎ足しと判断される。石積みが乱れる南面東側（石 369 ～石 380）直下は本来支えるべき直下の築石が欠失し埋土上に築き直されていた。築石は江戸時代の石垣を土台として継承している可能性も考えられる。石垣裏込の奥行きは短く、栗石を密に伴わないが、破砕礫を含む。覆土はロームを主体とし、堅く締め固められている。出土遺物は総点数 916 点、総重量 67,262.2g と比較的多いが、遺存状態はやや不良で下位の遺構の掘り返しである。

3437 号（第 1-42・43 図、第 1-4 表）

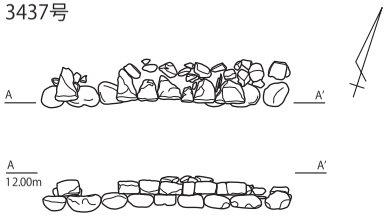
旧道の西側 F-1 区・F-2 区間に位置する東西に連なる石垣で、790 号の西側 4 mに位置する。検出されたのは、下位２段で、根石と築石である。長さ約４m の範囲で確認され、残存高は 0.52 mを測る。石垣の位置は厳密には 790 号の石面ラインよりも南方に 0.8m ずれている。但し 790 号北面東端一

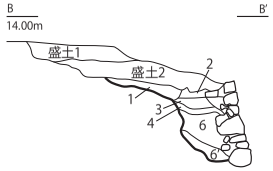
790号



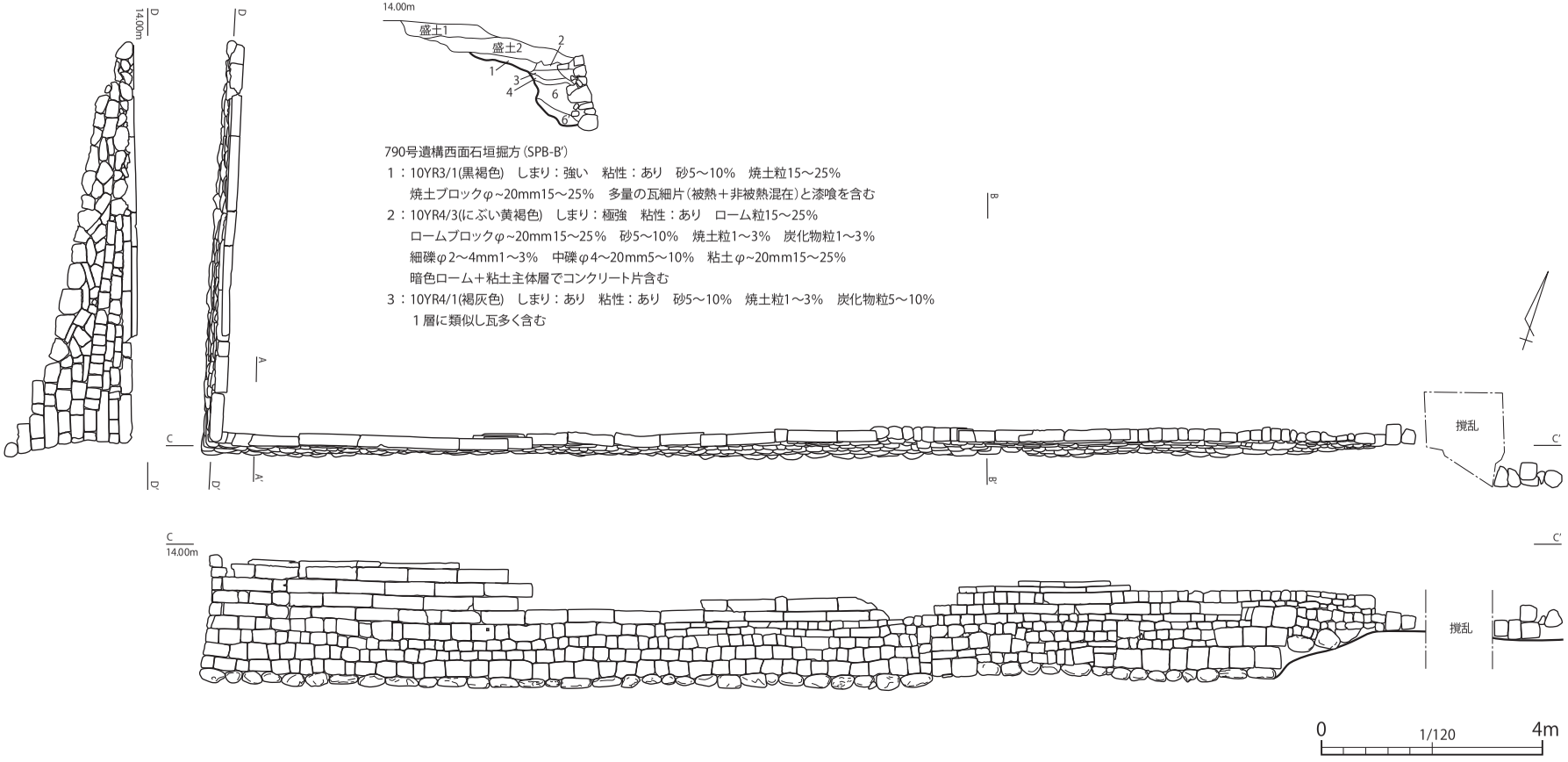
790号遺構西面石垣掘方（SPA-A'）
1：10YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：強い　焼土粒φ1～5mm5%
炭化物粒φ1～5mm7%　小石φ10～20mm10%　瓦片多(40%)

3437号

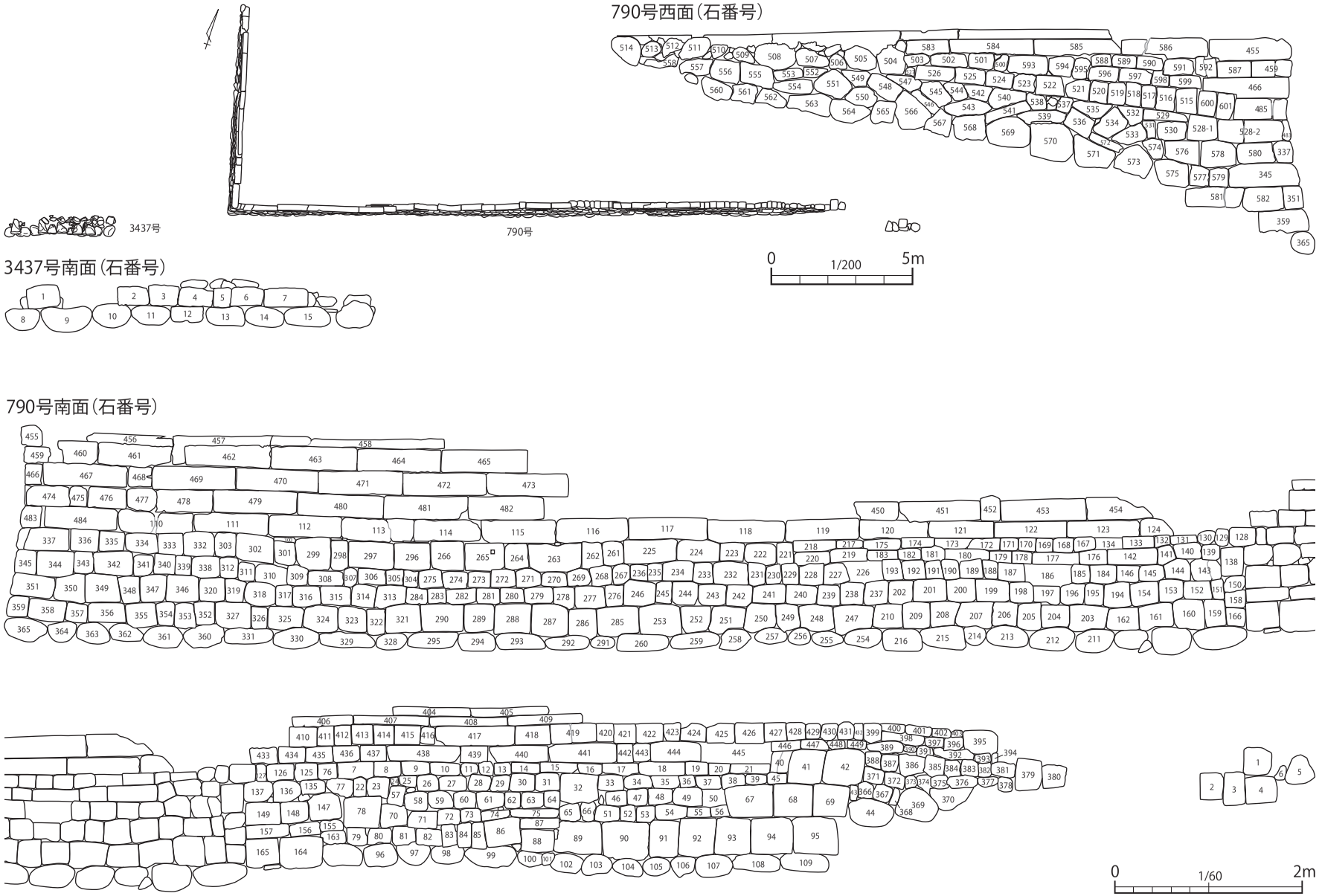




790号遺構西面石垣掘方（SPB-B'）
1：10YR3/1(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　砂5～10%　焼土粒15～25%
焼土ブロックφ~20mm15～25%　多量の瓦細片（被熱＋非被熱混在）と漆喰を含む
2：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：極強　粘性：あり　ローム粒15～25%
ロームブロックφ~20mm15～25%　砂5～10%　焼土粒1～3%　炭化物粒1～3%
細礫φ2～4mm1～3%　中礫φ4～20mm5～10%　粘土φ~20mm15～25%
暗色ローム＋粘土主体層でコンクリート片含む
3：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：あり　砂5～10%　焼土粒1～3%　炭化物粒5～10%
1層に類似し瓦多く含む



第 1-42 図　近代面の遺構（９）（1/120）



第 1-43 図　近代面の遺構（10）（1/60・1/200）

第 1-4 表　第 790 号・3437 号石材一覧

790 号

No.	種別	法量（cm）			重量（kg）	岩石名（石材名）	備考
		縦	横	控え			
【北面】							
1	間知石	30	30	56	56	安山岩	艫面 10 × 6
2	間知石	26	30	37	39.5	安山岩	艫面 15 × 11
3	間知石	20	34	50	53.5	安山岩	艫面 13 × 12
4	間知石	34	31	53	65	安山岩	艫面
5	間知石	18	30	34	23	安山岩	艫面 10 × 6
6	割石	12	18	20	5	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	間詰石
7	切石	22	38	17	26	大谷石	
8	切石	21.5	29	17	19.5	大谷石	
9	切石	20	29	16	16	大谷石	
10	切石	18.5	33	15	16	大谷石	
11	間知石	15.5	19	31	12	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
12	間知石	15	16	32	10	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
13	間知石	13.5	18.5	31	11	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
14	切石	12	30	24	18	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
15	切石	12	40	25.5	25	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
16	切石	11.5	25	24	10	房州石	
17	切石	15	38	19	21.5	安山岩	研磨仕上
18	切石	15	49	32.5	50	安山岩	研磨仕上
19	切石	15	24.5	14	11	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
20	切石	13.5	23	22.5	13	安山岩	研磨仕上
21	切石	11	42	22	23.5	火山礫緑色凝灰岩（伊豆青石）	研磨仕上
22	間知石	21	13.5	34.5	12.5	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
23	間知石	21	23	35	20	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
24	切石	9	9	21	4	房州石	
25	間知石	10	19	33	12	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
26		18	21	27	13	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
27	間知石	15	30	20	16	安山岩	艫面 18 × 11
28	間知石	19	22	40	17	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
29	間知石	17.5	19	29	13	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 7 × 6
30	間知石	18.5	26	50.5	36	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
31	間知石	17	25	31	23	安山岩	艫面 21 × 10.5
32	束石転用	35	40	21	52.5	安山岩	ホゾ穴（□ 1.6 × D2.5）
33	間知石	19	29	38	23.5	安山岩	艫面 16 × 16
34	間知石	17	30	28	19	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
35	切石	15	32	23	15	房州石	
36	間知石	15.5	17	29	7	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
37	切石	16	29	17	14.5	安山岩	
38	間知石	18	26	21	10	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 15 × 9
39	切石	11	22	28	15	石灰質砂質凝灰岩（伊豆白石）	
40	切石	24	20	24	20.5	房州石	
41	間知石	39.5	37	36		安山岩	艫面 13 × 18
42	間知石	41	41	49		安山岩	
43	割石	8	18	18	3.5	安山岩	石間詰め
44	丸石	20	50	31		凝灰岩？	
45	間知石	13	21	26	8.5	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
46	切石	18	22	19	11.5	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
47	間知石	20	22	30	14	安山岩	
48	間知石	19	28	35	19	安山岩	
49	切石	22	32	27	30	安山岩	
50	切石	17	21	11.5	5	房州石	
51	間知石	18	25	26	20		艫面 12 × 12
52	間知石	19	18	33	10.5		
53	間知石	19	20.5	25	12.5		艫面 11 × 7
54	間知石？	17	33	26	21		艫面 17 × 8
55	切石	12.5	25.5	22	13		
56	切石	12.5	19	28	10		
57	間知石	21	15.5	32	15		
58	間知石	18	25	45	28.5		
59	間知石	20	27	48	31		
60	間知石	18	24	23	20		艫面 13.5 × 15
61	間知石	20	29	32	23		
62	間知石	17	18	32	13		
63	間知石？	17.5	23	22	14		艫面 18 × 7
64	間知石	19	15	30	11		
65	間知石	15.5	20	33	20		
66	間知石	16	20.5	24	10		艫面 9 × 7
67	間知石						
68	束石転用	35	42	19	59.5	安山岩	ホゾ穴（□ 6 × D7.5）
69	間知石	32	49	55		安山岩	艫面 20 × 26
70	間知石	21	27	42	38		艫面 12 × 14
71	間知石	20	30	23	28		艫面 19 × 8
72	間知石	17	23	23	15		艫面 8 × 8
73	間知石	15	21	37	15		艫面 7 × 7
74	切石	12	30	27	14		
75	切石	10	53	27	30		
76	切石	25	21	20	13	大谷石	
77	間知石	33	29	22	25	安山岩	
78	間知石	45	34	37	86	安山岩	
79	間知石	21	22	37	19.5	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
80	間知石	18	27	25	19	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 10 × 8
81	間知石	21	25	40	24	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
82	間知石	19	28	42	25	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
83	間知石	17	24	32	17	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
84	間知石	15	26	27	16	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 5 × 8
85	間知石	17	28	27	16	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
86	間知石	31	38	39	65.5	安山岩	艫面 19 × 18
87	切石	12	41	20	23	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
88	間知石	26	35	38	44	安山岩	艫面 18 × 13
89	間知石	36	50	45		安山岩	
90	間知石	40	47	39		安山岩	艫面 21 × 20
91	間知石	34	41	38		安山岩	艫面 11 × 10
92	間知石	43	39	37		安山岩	艫面 14 × 15
93	間知石	40	39	41		安山岩	艫面 20 × 16
94	間知石	42	45	44		安山岩	艫面 16 × 15
95	間知石	42	50	42		安山岩	艫面 11 × 12
96	丸石	31	24	29	36	凝灰岩	
97	丸石	31	21	51		安山岩	
98	丸石	34	19	27	52	安山岩	
99	丸石	53	21	36		凝灰岩	
100	丸石	23	14	45	45	安山岩	
101	丸石	14	11	17	2.5	房州石	
102	丸石	33	19	35	49	凝灰岩	
103	丸石	30	25	34	42	凝灰岩	
104	丸石	30	19	35	33	凝灰岩	
105	丸石	28	19	36	37	凝灰岩	
106	丸石	25	25	37	37	安山岩	
107	丸石	38	25	38	65	安山岩	
108	丸石	51	19	46		緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
109	丸石	46	22	36		凝灰岩	
110	切石	79	24	20		房州石	
111	切石	79	22	21		房州石	
112	切石	77	23	20		房州石	
113	切石	77	24	22	75	房州石	
114	切石	72	23	19		房州石	
115	切石	79	26	22		房州石	
116	切石	77	25	20		房州石	
117	切石	84	23	22		房州石	

No.	種別	法量（cm）			重量（kg）	岩石名（石材名）	備考
		縦	横	控え			
118	切石	83	26	19		房州石	
119	切石	78	23	18		房州石	
120	切石	74	22	17		房州石	
121	切石	69	20	15		房州石	
122	切石	79	20	20		房州石	
123	切石	79	19	17		房州石	
124	切石	33	20	18		房州石	
125	間知石	21	25	37	19.5	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	矢穴
126	切石	19	29	21.5	18.5	大谷石	
127	切石	20	12	25	9	石灰質砂質凝灰岩（伊豆白石）	
128	切石	23	28	32	33	安山岩	
129	切石	20	14	31	10	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
130	切石	11	19	23.5	8.5	石灰質砂質凝灰岩（伊豆白石）	破損
131	切石	10	29	22	11.5	石灰質砂質凝灰岩（伊豆白石）？	
132	間知石	14	17	29	9	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面有
133	切石	13	34	23.5	16	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）？	
134	切石	13	29	21.5	12	房州石	
135	間知石	17	26	31	14.5	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
136	間知石	25	29	35	30	安山岩	
137	間知石	24	30	50	40	安山岩	艫面有　ホゾ穴（□7 × 5）
138	間知石	32	24	45	47	安山岩	艫面 14 × 1
139	切石	17	18	26	12.2	石灰質砂質凝灰岩（伊豆白石）？	
140	間知石	19	29	31	19	変質安山岩	艫面 12 × 5
141	間知石	20	18	24	12	安山岩	艫面 12 × 4
142	切石	19	54	17	56	安山岩	
143	切石	24	33	13	12	房州石	
144	間知石	25	29	40	33	安山岩	艫面有
145	間知石	19	28	34	21	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面有
146	間知石	20	24	24	13	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面有
147	間知石	31	34	47	66	安山岩	
148	間知石	26	30	36	46	安山岩	
149	間知石	27	38	41	46	安山岩	艫面有
150	間知石	18	24	26	13.5	安山岩	艫面有
151	切石	24	12	37	18.5	房州石	
152	間知石	21	29	43	29.5	安山岩	艫面有
153	間知石	26	26	43	38	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面有
154	間知石	27	30	40	38	安山岩	艫面有
155	切石	12	24	23	11	房州石	
156	間知石	14	33	22	16.5	安山岩	艫面有
157	間知石	14	46	31	44	安山岩	
158	間知石	17	23	22	13	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面有
159	間知石	31	24			安山岩	矢穴
160	間知石	35	34	41	62	安山岩	
161	間知石	29	38	40	55.5	安山岩	艫面有
162	間知石	27	33	38	42.5	安山岩	艫面有
163	間知石	15	26	27	12	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面有
164	間知石	36	47	49	100	安山岩	
165	間知石	31	35	40	57	安山岩	艫面有
166	間知石	20	18	32	15	安山岩	艫面有
167	間知石	15.5	23.5	24	13	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面有
168	間知石	17	21.5	22	9	安山岩	艫面有
169	間知石	15.5	18.5	30	9	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
170	間知石	16	18.5	25	10	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面有
171	間知石	14	19.5	25	8	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
172	切石	12.5	32.5	14	11	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
173	切石	11.5	37	23	18	石灰質砂質凝灰岩（伊豆白石）？	
174	切石	11	34.5	21	15	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
175	切石	13.5	41	22	19	房州石	瓦片を飼石状に使用
176	間知石	17.5	30.5	39	26	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 13 × 9
177	切石	14	50	23	28	石灰質砂質凝灰岩（伊豆白石）？	
178	間知石	13.5	21.5	19	10.5	安山岩	艫面 18 × 8 smplNo.179
179	間知石	14	24	21	12.5	安山岩	smplNo.179
180	切石	14	48	32.5	34	石灰質砂質凝灰岩（伊豆白石）？	
181	切石	15.5	25.5	27.5	13.5	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
182	切石	14	15	27.5	14	軟質砂質緑色凝灰岩（伊豆青石）	
183	切石	10	32	26	16.5	砂質緑色凝灰岩	
184	間知石	20	27	28	19.5	安山岩	艫面有
185	間知石	20.5	20	30	17	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面有
186	切石	22	49	15	25	房州石	
187	間知石	20	29	37	28	安山岩	
188	間知石	20.5	16	38	15	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面有
189	間知石	20	24.5	30	20.5	安山岩	艫面有
190	間知石	22	17.5	29	13	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面有
191	切石	20.5	18	35	26.5	火山礫緑色凝灰岩（伊豆青石）*	smplNo.191
192	間知石	21.5	23.5	25	15	安山岩	艫面有
193	間知石	23	20	36	27.5	安山岩	艫面有
194	間知石	28	26.5	37	40.5	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面有
195	間知石	24.5	20	36	20	軟質砂質緑色凝灰岩（伊豆青石）	艫面有
196	間知石	24	25.5	40	26	砂質緑色凝灰岩	
197	間知石	19.5	28.5	34	21	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
198	間知石	23.5	24.5	38	29	安山岩	艫面有
199	間知石	24.5	35.5	26	32.5	安山岩	艫面有
200	間知石	26.5	31	47	60.5	安山岩	艫面有
201	間知石	45.5	35	43	40	安山岩	艫面有
202	間知石	25.5	26	27	27	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面有
203	間知石	27	40.5	45	75	安山岩	艫面有
204	間知石	24	29.5	37	35	安山岩	
205	間知石	29.5	25	38	30.5	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面有
206	間知石	24.5	26	45	36	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面有
207	間知石	25.5	36.5	39	48.5	安山岩	
208	間知石	27	28	43	29.5	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
209	間知石	28.5	29.5	50	40.5	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
210	間知石	26	29.5	30	37	安山岩	艫面有
211	切石	25.5	44	43	58	石灰質砂質凝灰岩（伊豆白石）？	
212	丸石	26.5	48	40	81	安山岩	
213	丸石	25	45	52		安山岩	
214	丸石	20.5	21	38	35	砂岩？	
215	割石	25.5	47.5	40	61	安山岩	
216	間知石	27	40.5	40	94	石灰質砂質凝灰岩（伊豆白石）？	艫面有
217	切石	9.5	29	20.5	10	石灰質砂質凝灰岩（伊豆白石）？	
218	切石	12.5	45.5	22	20	火山礫緑色凝灰岩（伊豆青石）*	smplNo.218
219	間知石	15.5	41	44	38	安山岩	
220	切石	13.5	37	26	22	軟質砂質緑色凝灰岩（伊豆青石）	
221	間知石	22.5	17.5	24	16	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面有
222	切石	23	34	22	32	房州石	
223	間知石	20	25.5	29	24.5	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面有
224	切石	24.5	45	27	51	房州石	

No.	種別	法量（cm）			重量	岩石名（石材名）	備考
		縦	横	控え	(kg)		
225	切石	25	55.5	20	57.5	安山岩	
226	切石	22.5	35	13	15	房州石（砂質）	
227	間知石	23	25	41	29	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
228	間知石	24	26	37	32.5	安山岩	艫面有
229	間知石	23.5	17.5	31	18	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
230	間知石	20.5	16.5	24	9	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
231	間知石	25	18	36	20	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
232	切石	26	36	23	33	房州石	
233	間知石	23	20.5	26	12	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
234	間知石	22.5	32.5	36	36	安山岩	艫面有　風化
235	間知石	19.5	15.5	35	10.5	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
236	間知石	17	18	34.5	13	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
237	間知石	26	24.5	45	32	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	
238	間知石	24	24.5	40	28	安山岩	艫面有
239	間知石	22.5	24	37	18	軟質砂質緑色凝灰岩（伊豆青石）	艫面有
240	間知石	20.5	32.5	37	38	安山岩	艫面有
241	間知石	20.5	35	30	24	安山岩	
242	間知石	25	28.5	47	35	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
243	間知石	22.5	29.5	44	35	安山岩	艫面有　風化
244	間知石	24.5	26.5	48	47	安山岩	艫面有
245	間知石	23	17	50	24	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
246	間知石	25.5	33	33	40.5	安山岩	艫面有
247	間知石	28.5	40.5	40	77	安山岩	艫面有
248	間知石	27.5	36.5	35	47.5	安山岩	艫面有
249	間知石	28	23.5	45	45	安山岩	艫面有
250	間知石	27.5	31	43	52	安山岩	艫面有
251	間知石	25.5	36	46	47	安山岩	
252	間知石	28.5	30.5	40	39	安山岩	艫面有
253	間知石	33	44.5	40	62	安山岩	艫面有
254	丸石	20	38	40	60	安山岩	
255	丸石	16	31.5	32	30	凝灰岩？	
256	丸石	19	23.5	59	57	凝灰岩？	
257	丸石	18	28	60	72	安山岩	
258	丸石	23	28	51	71.5	安山岩	
259	束石転用	26.5	51				上面中央ホゾ穴(□6 × D5cm)
260	丸石	20.5	52.5	38		安山岩	
261	間知石	27	22.5	35	18.5	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	
262	間知石	27	22.5	32	22	石灰質砂質凝灰岩(伊豆白石)？	
263	間知石	30.5	57.5	21	52	安山岩	被熱
264	間知石	29.5	24.5	35	23.5	石灰質砂質凝灰岩(伊豆白石)？	
265	切石	30	42.5	20	46.5	火山礫緑色凝灰岩(伊豆青石) *	ホゾ穴（□ 4 × D1.4) smplNo.265
266	間知石	32	35	55	82	安山岩	
267	間知石	22.5	18.5	42	24	安山岩	モルタル付着
268	間知石	22.5	22.5	33.5	20	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	
269	間知石	20.5	24.5	32	16	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
270	間知石	16.5	27	31	16	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
271	間知石	20	26.5	30	22.5	安山岩	艫面有
272	間知石	19	26	45	27	安山岩	艫面有
273	切石	17.5	24	34	25	房州石	
274	間知石	18.5	26.5	39	20	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有　被熱
275	間知石	20.5	23.5	33	16.5	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
276	間知石	22.5	19	31	15	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
277	間知石	23.5	31	41	33.5	安山岩	艫面有
278	間知石	21.5	22.5	30	16	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	
279	間知石	17.5	31	37	30.5	安山岩	艫面有
280	間知石	15	25	33	15.5	安山岩	艫面有
281	間知石	17.5	24.5	31	17	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	
282	間知石	16	31.5	46	30	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
283	間知石	17	19.5	28	15	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
284	間知石	17.5	22.5	34	14	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	
285	間知石	29.5	43.5	46	114	安山岩	艫面有
286	間知石	29	28.5	50	57	安山岩	艫面有
287	間知石	33.5	38	48	79	安山岩	艫面有
288	間知石	30.5	37.5	46	77	安山岩	艫面有
289	間知石	30.5	31.5	40	52.5	安山岩	艫面有
290	間知石	30.5	43.5	40	67	安山岩	艫面有
291	丸石	15	26	40	34	砂岩？	
292	丸石	15	45	36	50	安山岩？	
293	丸石	20.5	51.5	35	52	安山岩	
294	丸石	23	38.5	32	65	安山岩	
295	丸石	20	52	32	62	安山岩？	
296	切石	30	39	20	43	砂質緑色凝灰岩	
297	切石	31	48.5	22	69	安山岩	被熱
298	間知石	34	18	38	34	安山岩	艫面有　被熱
299	間知石	35.5	37	46.5	81	安山岩	艫面有
300	切石	5	25	18	6.5	房州石	
301	間知石	25.5	23	43	30.5	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
302	間知石	28.5	39.5	43	70	安山岩	艫面有
303	間知石	27.5	23	30	26	安山岩	艫面有
304	間知石	18	15.5	33	11	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
305	間知石	18	19	30	9.5	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
306	間知石	18	30.5	37	24	安山岩	被熱
307	間知石	22	13.5	29.5	10	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	
308	切石	16.5	37.5	22.5	22.5	軟質砂質緑色凝灰岩（伊豆青石）	
309	間知石	22	21.5	26	15		艫面有
310	切石	22	33	18	17	房州石	
311	切石	21	17.5	30	13	房州石	
312	間知石	23	18.5	36	21	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
313	間知石	26	33	40	35	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
314	間知石	26	25	39	26.5	安山岩	smplNo.314
315	間知石	21.5	34	33	34.5	安山岩	艫面有
316	間知石	23	31	39	37	安山岩 *	smplNo.316
317	間知石	23	18	30	16	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
318	切石	26	34	23	31	房州石	
319	間知石	25.5	22	38	18.5	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
320	間知石	27	28	42	35	安山岩	艫面有
321	間知石	30	37.5	42	56	安山岩	艫面有
322	間知石	30	21	40	22.5	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
323	間知石	27	30	43	51	安山岩	艫面有
324	間知石	27.5	38	47	52	安山岩	艫面有
325	間知石	26.5	38	42	60	安山岩	艫面有
326	間知石	23.5	18	45	24	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
327	間知石	27	39	27	49	安山岩	艫面有
328	丸石	18	32	30	33	安山岩	
329	丸石	20	59	38	70	凝灰岩	
330	丸石	25	50	31	54	安山岩	
331	丸石	14	50	42	76	安山岩	
332	間知石	27	33	43	55	安山岩	艫面有
333	間知石	23	27	39	49	安山岩	艫面有
334	間知石	22	35	32	43.5	安山岩	艫面有
335	間知石	22	26.5	46	35	安山岩	艫面有
336	間知石	24	29.5	31	31	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
337	切石	23.5	4.7	22	37.5	房州石	
338	間知石	24.5	30	30	26	安山岩	
339	間知石	22.5	17	38	18.5	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	

No.	種別	法量（cm）			重量（kg）	岩石名（石材名）	備考
		縦	横	控え			
339	間知石	22.5	17	38	18.5	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	
340	間知石	24	22	34	20	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	
341	切石	25	22	33	30	房州石	
342	間知石	27.5	41	35	54	安山岩	
343	間知石	24.5	21	37	23	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	
344	間知石	28.5	40	45	58	安山岩	
345	切石	25	23	76	68	房州石	破損
346	間知石	30	34.5	46	57.5	安山岩	艫面有
347	間知石	30	29	42	46.5	安山岩	艫面有
348	切石	29.5	22	41	33	安山岩	
349	切石	30	37.5	44	82	安山岩	
350	切石	31.5	23	36	54.5	安山岩	
351	切石	25	46.5	20	41	房州石	
352	切石	25.5	22.5	37	22.5	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
353	切石	28	23.5	38	30	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	
354	切石	26	21.5	37	27	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
355	切石	27	32	32	33	安山岩	
356	切石	22	41	37	55	安山岩	
357	切石	21	23	40	26	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	
358	切石	23	40	43	75	安山岩	
359	切石	25	21.5	52	52	房州石	
360	丸石	25	39	37	67	安山岩	
361	丸石	25	43	29	64	安山岩	
362	丸石	20	38	36	54	安山岩	
363	丸石	25	37	27	52	安山岩	
364	丸石	24	30	45	59	安山岩	
365	丸石	28	45	34	53	安山岩	
366	丸石	25	42	35	74	安山岩	
367	丸石	25	58	36	84.5	安山岩	
368	丸石	26	42	42	78.5	安山岩	
369	丸石	25	40	35	51	安山岩	
370	丸石					安山岩	
371,372,375,379,380,383 ～ 391,399						緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	
373,374,376,394,395						安山岩	
392						安山岩（根府川石）	
393						砂質緑色凝灰岩(伊豆青石)	
443						軟質砂質凝灰岩	
378,432,438,441,444,445,483,484						房州石	
397,398,400 ～ 409,440						砂質～スコリア質凝灰岩（房州石？）	
382,396,410 ～ 431,433 ～ 437,439,442,446,447+448,449 ～ 482						大谷石	
【西面】							
500	間知石	20	15	32.5	17	安山岩	艫面有
501	間知石	18	28	48	29	安山岩	
502	間知石	16	39	46	35	安山岩	
503	間知石	14	25	23	11	砂質緑色凝灰岩(伊豆青石) *	艫面有　被熱　西面 Smpl No.4
504	丸石	40	32	19	32.5	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)・円礫	
505	丸石	27	37	20	35	安山岩・円礫	
506	丸石	17	18.5	22	13	砂質緑色凝灰岩(伊豆青石)・円礫	
507	丸石	20	36	16	22	花崗岩・円礫	
508	丸石	28	42	20	45	安山岩・円礫	
509	丸石	15	25	23	14	安山岩・円礫	
510	丸石	14	21	31	15	砂質緑色凝灰岩(伊豆青石)？・円礫	
511	丸石	22	36	25	28	安山岩・円礫	
512	丸石	21	23	31	14	チャート	
513	丸石	19	22	29	24	安山岩・円礫	
514	丸石	25	38	22	30	安山岩・円礫	
515	間知石	28.5	22	33	23.5	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
516	間知石	26.5	21	40	24	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	
517	間知石	24.5	16	44	28	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有

No.	種別	法量（cm）			重量（kg）	岩石名（石材名）	備考
		縦	横	控え			
518	間知石	25	16	37	22	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
519	間知石	24	18	31	23	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
520	間知石	23.5	20	36	22.5	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
521	間知石	22	26	36	25	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石) *	艫面有　西面 Smpl No.5
522	間知石	22	30.5	40	30	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有　矢穴（幅 5.5・深さ 3）
523	間知石	19	24	36	22.5	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	
524	間知石	18	29	32	23	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	
525	間知石	17.5	32	37	26	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	
526	間知石	16	41	30	31	安山岩	艫面有
527	切石	9	10	15.5	3	安山岩 *	西面 Smpl No.3
528-1	間知石	27	27	33	31	安山岩	艫面有
528-2	間知石		29		24	房州石	
529	切石	12	48	24	22	房州石	
530	間知石	20	31	35	25	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)？	艫面有　被熱　表面風化　鉄分付着
531	間知石	21	14	23	5.5	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
532	間知石	20	27	19.5	12	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	
533	間知石	28	37.5	31	31	安山岩（根府川石？）	艫面有
534	間知石	37	27	35	40	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有　表面風化
535	間知石	20	42	20	18	安山岩	艫面有
536	切石	21.5	31	14.5	16.5	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	
537	間知石	17.5	16	27	8	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
538	切石	19.5	24	16	9	房州石	
539	間知石	15	53	32	40	安山岩	艫面有
540	間知石	23	41	16	20	安山岩	艫面有
541	切石	11.5	50	23	22.5	砂質緑色凝灰岩(伊豆青石) *	西面 Smpl No.6
542	間知石	17.5	31	18	11	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	
543	間知石	20	50	23	31	安山岩	艫面有
544	間知石	20	29.5	29	12.5	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	艫面有
545	間知石	21	36	28	27	安山岩	艫面有
546	切石	10	36	20	11	房州石？	
547	切石	16.5	38	17	9	房州石	
548	間知石	22	37	32	35	安山岩	艫面有
549	間知石	18	31	18	11	安山岩	艫面有
550	間知石	23	36	29	19	安山岩（根府川石？）	
551	間知石	31	41	35	51	安山岩	
552	切石	11	26	27	15	安山岩	
553	切石	12	33	26	9	火山礫凝灰岩 *	西面 Smpl No.2
554	間知石	17.5	42	36	31	安山岩	艫面有
555	間知石	24	37	18	28	安山岩 *	西面 Smpl No.1
556	間知石	25	33	21	31	安山岩	艫面有
557	間知石	21	36	28	23.5	安山岩	艫面有
558	丸石	13	38	27	18	不明	
559	切石	11.5	8.5	14	4	凝灰岩	
560	丸石	22	33	20.5	24	石灰質砂質凝灰岩(伊豆白石)	
561	間知石	24	32	22	22	安山岩	艫面有
562	間知石	20	37	33	24	安山岩	
563	割石	21	46	24	33	安山岩	
564	間知石	26	44	27	25	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	
565	丸・割	35	28	27	30	安山岩	
566	割石	33	41	35	45	安山岩	
567	割石	30	28	16	22.5	安山岩	
568	間知石	29	35	27	36	石灰質砂質凝灰岩(伊豆白石)	艫面有
569	間知石	34	47	19	51	緑色凝灰角礫岩(曽我浦青石)	粗

No.	種別	法量（cm）			重量（kg）	岩石名（石材名）	備考
		縦	横	控え			
570	間知石	38	48	27	82	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	粗
571	間知石	35	45	27	48	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	粗
572	切・割	9.5	38	21.5	17	安山岩＊	西面 Smpl No.7
573	間知石	33	48	21	50	安山岩	粗
574	割石	22	21	18	14	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
575	切石	30	36	13	26	安山岩	
576	間知石	26	37	19	30	石灰質砂質凝灰岩（伊豆白石）？	
577	間知石	22	20	25	18	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）？	粗
578	間知石	30	38	20	35	安山岩＊	西面 Smpl No.8
579	切石	22	21	23	20	房州石	
580	切石	22	40	23	36	房州石（井桁目）＊	西面 Smpl No.9
581	切石	23	74	25	84	房州石	
582	間知石	26	44	35	71	安山岩	
583	切石					大谷石	
584	切石					大谷石	
585	切石					大谷石	
586	切石					大谷石	
587	切石					大谷石	
588	間知石	26.0	17.0	29.0	14.0	砂質緑色凝灰岩	
589	間知石	28.0	16.0	30.0	18.0	砂質緑色凝灰岩	
590	間知石	32.0	21.0	36.0	30.0	砂質緑色凝灰岩	
591	間知石	32.0	21.0	36.0	30.0	砂質緑色凝灰岩	
592						砂質緑色凝灰岩	
593	間知石	43.0	23.0	47.0	55.0	安山岩	
594	間知石	27.0	24.0	39.0	27.0	砂質緑色凝灰岩	
595	間知石	17.0	27.0	31.0	24.0	安山岩	艫面 8 × 9
596	間知石	31.0	17.0	26.0	21.5	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 18 × 13
597	間知石	33.0	18.0	34.0	34.0	安山岩	艫面 18 × 11 下にモルタル付着（西面 SmplNo.10）
598	間知石	19.5	19.0	23.0	10.0	多孔質安山岩＊	精加工 西面 Smpl No.11
599	間知石	33.0	16.0	40.0	25.0	大谷石	艫面 8 × 6　上面矢穴（4.5 × 4）
600	間知石					緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
601	間知石					緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	

3437 号

No.	種別	法量（cm）			重量（kg）	岩石名（石材名）	備考
		縦	横	控え			
1	間知石	26	37	53	45	安山岩	艫面 13 × 11
2	間知石	21	33	53	39	安山岩	
3	間知石	22	33	33	28	安山岩	艫面 12 × 17
4	間知石	21	37	40	38	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
5	間知石	22	19	31	16	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 7 × 4
6	間知石	20	33	41	35	安山岩	艫面 8 × 21
7	間知石	20	46	37	50	安山岩	
8	丸石	35	26	35	56	安山岩？	
9	丸石	53	24	34	80	安山岩？	
10	丸石	45	28	36	64	安山岩？	
11	丸石	47	21	33	43	安山岩	
12	間知石	35	19	48	30.5	安山岩	
13	丸石	39	29	32	52	（房州石）	
14	丸石	42	28	33	56	安山岩	
15	丸石	47	22	43	81	（大谷石）	
16	切石	23	39	29	35	（大谷石）	
17	切石	25	92	30	110	（大谷石）	

部にもやや南方へと石面が迫り出した箇所があり、このラインに揃う。上位は区教委調査の擁壁（石垣）にあたるが厳密な対応関係は把握できなかった。石材は安山岩の海岸礫を使用、間知石は安山礫を主体とし、緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）で構成される。この傾向は 790 号の中～下位と同様である。

3116 号（第 1-41 図）

3116 号は H-2 区南東部で検出されたイヌの埋葬跡である。掘り込みを捉えることはできず、埋葬された獣骨が露出したことで検出された。イヌは頭は北、脚は西を向くように横たえられた状態で検出された。一部失われていた箇所はあるものの、おおむね原位置を保った状態で、全身の骨格が検出されていることから埋葬されたものである可能性が高い。推定される体高は 51㎝で大型犬である（第Ⅷ章第 3 節参照）。

B　近代 2 面

H-2 区近代 2 面では、790 号石垣の北側で建物基礎の礎石列とそれを囲むように L 字に曲がる土管および鋳鉄管を確認した。

検出された遺構は、礎石 18 基、礎石跡 3 基、集石土坑 1 基、ピット 2 基である。

建物基礎（第 1-44 図）

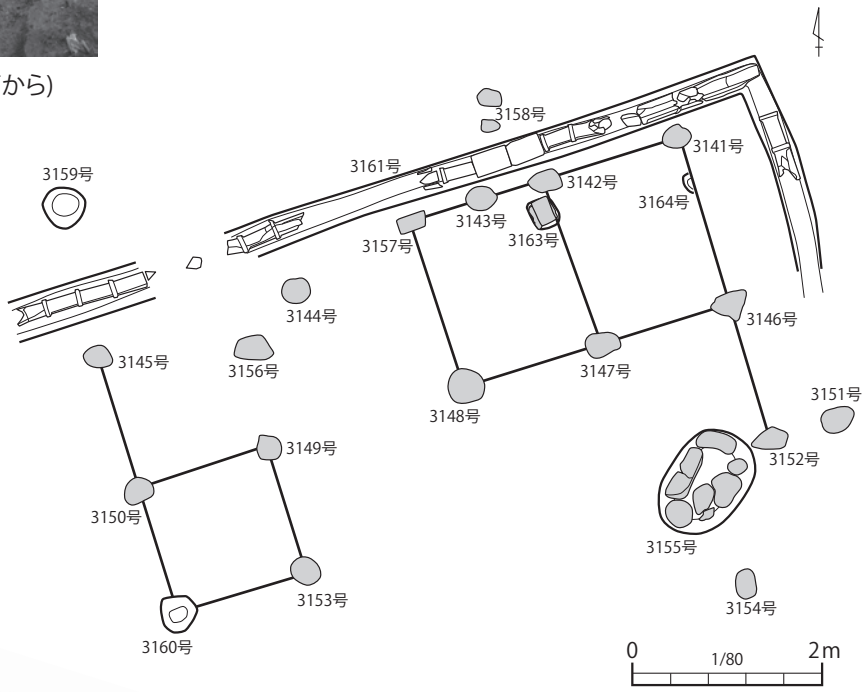
F-1 区などで検出されている煉瓦基礎と同様の構造であれば、H-2 区で確認された建物基礎には煉瓦基礎や割栗石などがあったものと考えられるが、削平により下部の礎石のみが残存した状態で検出されている。構成する遺構は 3141 号、3142 号、3143 号、3145 号、3146 号、3147 号、3148 号、3149 号、3150 号、3152 号、3153 号、3157 号、3160 号である。これらは 1 棟ないし 2 棟分で

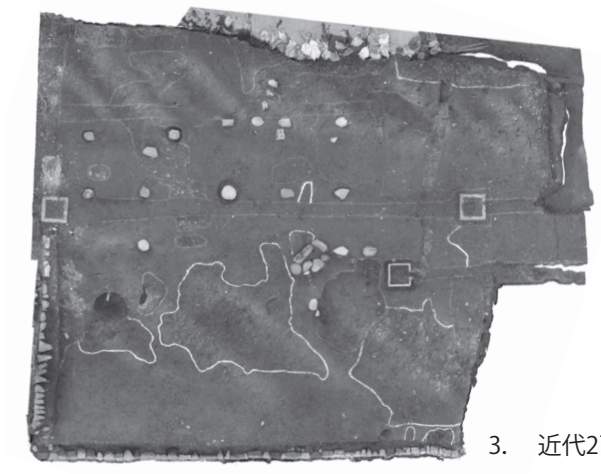


1.　3161号土層断面(西から)



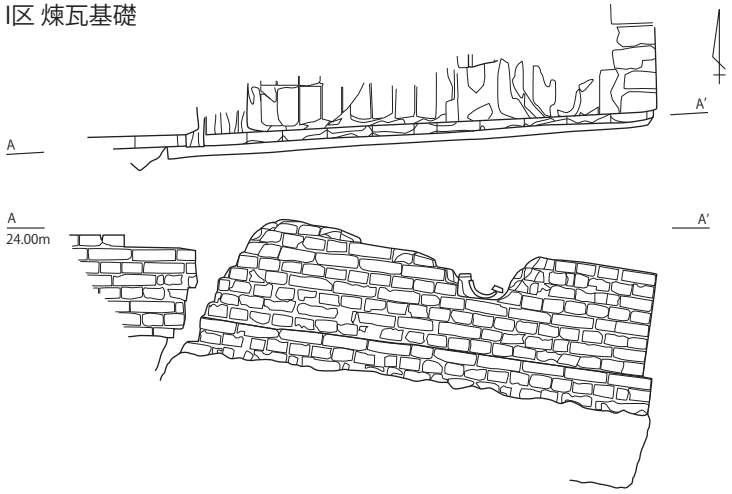
2.　3161号竹樋検出状況(西から)





3.　近代2面全景(オルソ写真)

第 1-44 図　近代面の遺構（11）（1/80）





1.　I区煉瓦基礎検出状況（南から）

0　1/40　1m

第 1-45 図　近代面の遺構（12）（1/40）

あると考えられる。

3145 号、3149 号、3150 号、3153 号、3160 号の礎石の間隔はおよそ 1.2m で、3141 号、3142 号、3143、3146 号、3147 号、3148 号、3152 号、3157 号の礎石の間隔はおよそ 1.6m である。また、南東隅の礎石 3152 号の西側には石組みをもった楕円形の土坑 3155 号がある。これは G-1 区で発見された池跡 813 号と類似する石組みであることから、屋敷に伴う小型の池跡である可能性が考えられる。

3161 号（第 1-44 図）

3161 号は建物基礎を囲むように L 字に曲がる土管である。東側は撹乱により明確ではないものの、旧道下を南北に走る本管へとつながっていたものと考えられる。一方、東側は撹乱により失われているが、南側の 790 号に向かっている。常滑産角形半径土管を縦位に連結しており、内部には鋳鉄管が埋設されていた。

C　近代 3 面（第 1-32・33 図）

H-2 区近代 3 面は 790 号の南側でのみ確認された。発見された遺構はおそらく近代の盛土造成が行われた際の遺構と考えられる。盛土は薄い堆積で一部ではすでに近世段階の盛土層が露出していた。検出された遺構の内訳は礎石 6 基、溝 1 条、礎石跡 1 基、管路 1 条、瓦溜り 2 基、土坑 1 基、ピット 1 基である。この面で検出された礎石は規則的な並びを持たなかった。

4）I 区

I 区では、西側調査区外において工事に伴う立ち合い調査を実施した。立ち合い調査では煉瓦基礎を確認し、測量を行った。第 1-45 図は立ち合い調査において確認された煉瓦基礎である。使用されている煉瓦の中には日本煉瓦製造株式会社製の機械整形煉瓦が含まれており、明治 40 年代以降のものであると考えられる。I 区の高台は絵図・地図史料から、近世段階は五井松平家、近代になると有栖川宮邸となっていることから、発見された煉瓦基礎も有栖川宮邸に伴うものである可能性が考えられる。

（佐藤・大八木・合田）

2．近世（旗本屋敷拝領以降）

永田町一丁目遺跡第 3 次調査地点は、絵図・地図史料から 1,000 石～ 5,000 石級の中上級の旗本屋敷地計 4 区画にまたがることがわかっている。それぞれの屋敷に対応する調査区は、旗本成瀬家―鳥居家屋敷範囲が F-1 区・H-1 区・H-2 区・I 区東部がそれにあたる。また、旗本成瀬家―鳥居家屋敷範囲は南に一部突き出る部分があり、その範囲は G-1 区にあたる。旗本川窪家―保科家の屋敷範囲は F-2 区・G-2 区・H-2 区南端部がそれにあたる。南東部の G-3 区が吉田家に代表される屋敷範囲にあたる。I 区西部が五井松平家屋敷範囲にあたる。

拝領者の変更や火災などのタイミングで屋敷の解体、造成が行われたと考えられ、造成時の嵩上げにより複数の遺構確認面が確認されている。遺構確認面の面数は屋敷の違いや屋敷内での土地利用の差異などにより異なるようで、F-1 区、H-1 区では 8 面、I 区では 6 面、H-2 区では 9 面、G-1 区では 6 面、G-2 区では 8 面、G-3 区では 5 面の遺構確認面が確認されている。それぞれの遺構確認面の対応関係については、第 1-3 表に示した。

近世面の地形はどの面も基本的に北西から南東に向かってゆるやかに傾斜しているが、旗本成瀬家―鳥居家屋敷地と旗本川窪家―保科家屋敷地の屋敷境付近では急傾斜になっている。近代に築かれた石垣（790 号）はこの屋敷境を踏襲したものであり、石垣の下部からは屋敷境を示す溝、石垣、段切りが検出されている。この他、検出された遺構には、旗本屋敷の居住空間に関わる建物跡・土蔵基礎・地下室・井戸・炉状遺構・埋桶・埋甕・硬化面・溝などがある。また、屋敷の裏手にあたる範囲では、庭園空間を構成する池や植栽痕が検出されている。屋敷境の石垣や溝の付近からは飼育されていた考えられるイヌやネコの埋葬跡が検出されており、これは屋敷境周辺の土地利用を示したものと言える。また、造成時の盛土層については、瓦や陶磁器などの遺物を多く含むなど特徴的なものについては遺構番号を付番し調査を行った。

1）F-1 区

F-1 区は調査区北西部に位置し、絵図史料から、旗本成瀬家―鳥居家屋敷地の裏手部分にあたることがわかっている。現地表面の標高はおよそ 14.5m で、F-2 区とは約 2 mの高低差が見られた。F-1 区の中でも北西隅がもっとも標高が高く、南東にむかって傾斜している。F-1 区の西側は I 区となり、盛土は I 区から F-1 区にかけて堆積するものが多く見られる（第Ⅲ章参照）。

F-1 区では、近代、近世、中世合わせて合計 10 面の遺構確認面が検出された。そのうち近世の旗本拝領期にあたるものは 1 ～ 6 面となる。調査時には概ね旗本鳥居家拝領期にあたる面が 1 面、旗本成瀬家拝領期にあたる面が 2 面から 6 面と考えていたが、出土遺物の時期が 19 世紀第 1 四半期を主体とするものが旗本鳥居家拝領期、18 世紀前葉～後葉主体となるもの（358 号・757・758 号）は旗本成瀬家拝領期に伴う遺構と考えられる。

A　1 面

F-1 区 1 面は H-1 区 1 面、H-2 区 1 面に対応する面で、旗本鳥居家屋敷の時期にあたる。この面は瓦片や焼土、炭化物などを含む暗褐色から黒褐色土の盛土上面にあたり、大型の廃棄土坑（350 号・358 号）や池跡（400・401 号）が検出された。特に土坑は、I 区斜面部に続いているもの（350 号・

2004 号）など、Ⅰ区との調査区境から F-2 区に向かい傾斜する斜面の肩の部分から複数の大型廃棄土坑が検出されている。

この面で検出された遺構は、屋敷裏手部分の土地利用を反映したものと考えられる。池 1 基、廃棄土坑 4 基、礎石 4 基、瓦溜り 9 基、瓦層 1 基、硬化面 3 基、木樋 1 基、石敷 3 基、焼土溜り 4 基、土坑 30 基、ピット 27 基、盛土層 1 基である。

【池】

400 号・401 号（第 1-124 図・図版 3-53-2・第 3-16 表）

F-1 区北東で検出された池状遺構である。覆土中に 19 世紀末～ 20 世紀初頭の遺物が含まれており、『五千分一東京図測量原図』（明治 16 年、巻頭図版 25）に描かれた佐野常民邸の池と位置的にも近いことから、明治期以降も機能していた池と考えられる。一方で、上記地図に描かれた構造が江戸時代の武家屋敷の構造と同じであることから、佐野邸は近世以来の旗本屋敷を継承して使用していた可能性が高く、これにより遺構の構築は江戸時代に遡ると判断し、1 面の遺構として報告する。上部は明治期以降に大きく削られており、確認面から底面の深さは平均して約 20cm であった。また、東側は敷地内道路、中央は下水管による大規模な撹乱を受けていたため残存していたのは池全体の僅かな一部と判断されるが、隣接する H-1 区で続く遺構は確認されなかったため、東側は敷地内道路の範囲内で収まっていたものと考えられる。底面は灰色粘土が約 5cm の厚さで貼られていた（第 1-124 図 6 層）が、東側にはそれが認められない部分もあった。南側には細く張り出す箇所（401 号）があり、扁平な大型の景石で護岸が行われ、底面には花崗岩製の玉石が敷き詰められていた。景石の端部に底面の灰色粘土が貼り付く部分と灰色粘土が景石よりも下にある部分のいずれも確認できたことから、景石と灰色粘土の敷設は同時に（あるいは交互に）行われたものと考えられる。また、池の南側壁には扁平な玉石が集中する箇所や景石の抜き取り痕が部分的に認められることから、南側壁も張り出し部分同様に護岸が行われていた可能性がある。張り出し部分の景石には多孔質安山岩、緑色片岩が使用されていた。池の周辺には黄色砂ブロックを多く含む褐色土が堆積する不整形な掘り込み（428 号・469 号）が広がっており、これらも池の付属施設や植栽であった可能性があるが、調査所見では新旧関係は判然とせず、確定はできなかった。池内に堆積した覆土は、近代以降の整地層に似る粘性・しまりの強い上層（同図 1 層）と、しまりが 1 層に比べて弱い褐色土を主体とする下層（同図 3 ～ 5 層）に分けられ、1 層は明治期以降に行われた削平・造成に伴い池内部に入り込んだ堆積土である。その下にはローム粒を多く含む褐色土（同図 3.・4 層）、灰黄褐色粘土粒を多く含むにぶい黄褐色土（同図 5 層）が堆積し、さらにその下が池底面に貼られた粘土層（同図 6 層）となる。南側の張り出し部分も、底面の粘土層の上にはローム粒を多く含む褐色土（同図 1 層）が堆積していた。

池内の堆積土についてはコラムサンプルを採取し、珪藻分析、花粉分析および植物珪酸対分析を行った（第Ⅷ章第 1 節参照）。珪藻分析は池底面の粘土層よりも上位に堆積していた 1 層・4 層・5 層の 3 点、花粉分析および植物珪酸対分析は 1 層・ 5 層の 2 点で実施した。その結果、いずれの土層も池周囲の土壌が流れ込んだものと判断されている。また、植物珪酸体分析からは、タケ亜科を始めとしたイネ科草本類が周辺に生育していたと想定される一方で、水辺で生育するヨシ属は認められず、周辺の植生を復元するには至らなかった。出土遺物は 1,032 点・30,209.4g と少量で、19 世紀末葉から 20 世紀初頭を主体とする。手描きのコバルト染付平碗などが含まれ、確認面付近からは白磁管状

碍子や型紙摺の磁器が出土している。遺構の形成年代は遺物からは判断できないが、他の遺構との重複関係から（400 号がより新しい）、F-1 区の最後の拝領者である旗本鳥居家の拝領期と判断される。

【土坑】

357 号・360 号・379 号・388 号（第 1-125・126 図・第 3-16 表）

360 号は 357 号や 380 号を切る細い溝状の土坑である。壁面は真っすぐに立ち上がっており、底面は段状に南に向かって下がっていく。４層が 360 号の覆土にあたる。４層は瓦層で、瓦片が隙間なく堆積していた。

380 号や 383 号は楕円形の小土坑、379 号と 388 号は方形の浅い土坑でいずれの土坑も 357 号より新しい。これらの土坑の覆土は総じて焼土粒や炭化物粒を含む土層である。

357 号は２面の 470 号の上部にあたり、470 号覆土の沈み込んだ部分を廃棄土坑としたものと考えられる。

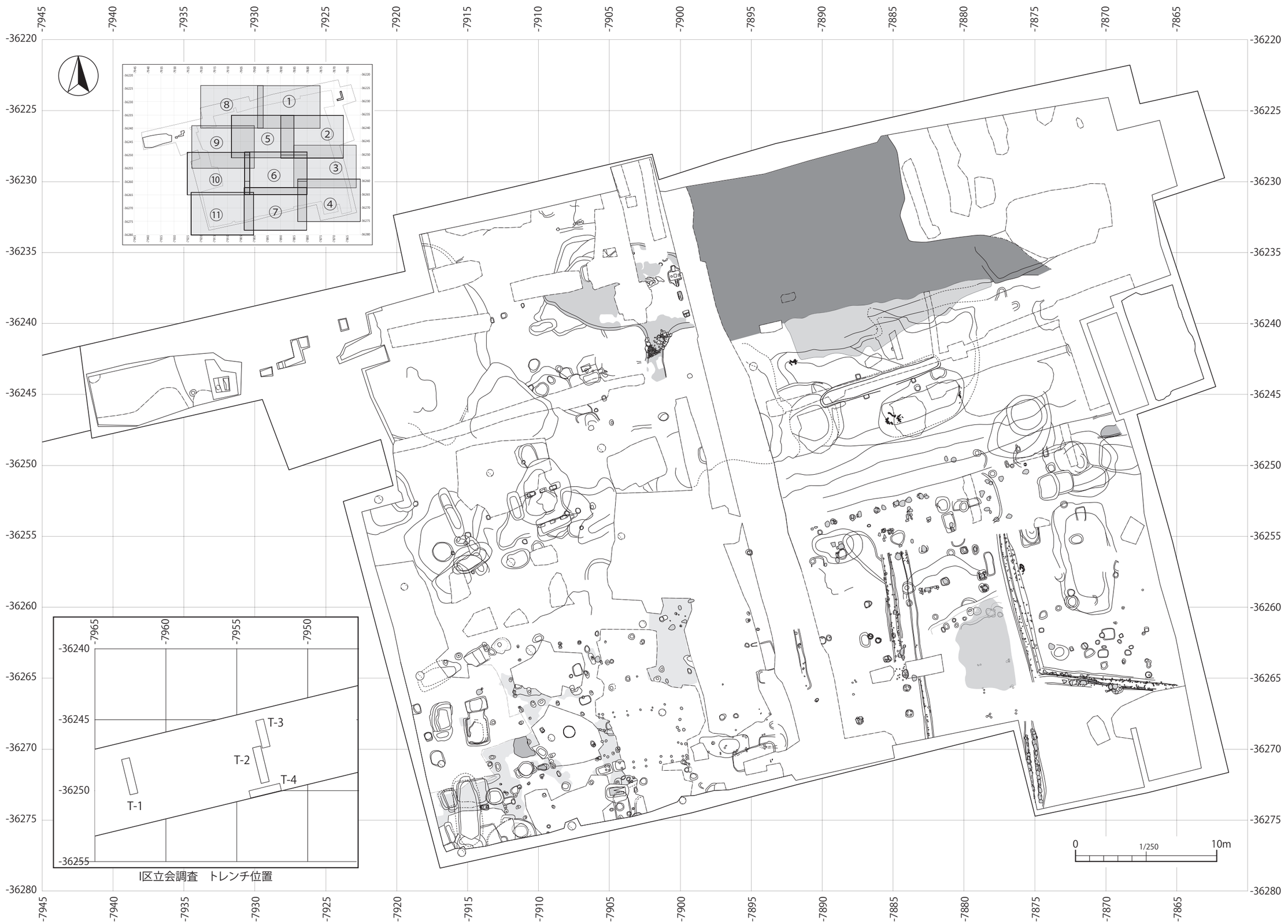
出土した遺物の点数・重量は 357 号が 1,929 点、93,216.9g、360 号が 263 点、63,127.2g、379 号が 70 点、12,442.2g、388 号が 443 点、31,261.2g であった。これらの遺構は出土遺物から 18 世紀末葉から 19 世紀前葉に位置付けられる。

358 号（第 1-55・126 図・第 3-16 表）

350 号（I 区に掲載・第 1-153 図）の南東に広がる大型廃棄土坑である。南側は近代以降に削平されているが、最も長い部分で 5.33 m、深さ約 0.6m の不整形を呈する。セクション A-A’ では壁がほぼ垂直に立ち上がるが、それ以外の部分ではなだらかに立ち上がる。覆土は、土坑上面に堆積した瓦溜り（第 1-126 図 1 層）、覆土掘り返しと考えられる部分（同図２～４層）、灰黄褐色土を主体とする覆土上層（同図５・６層）、瓦を多く含む覆土下層（同図７層）に分けられる。覆土中からは極めて多くの遺物が出土している。覆土下層に瓦が多く含まれる点では 350 号と類似する特徴を有しており、おそらく 350 号と一連の遺構と考えられる。出土遺物は 3,420 点・144,356.9g で、陶磁器類が多量に出土している。器種も豊富で、揃い、蓋身セットを含む。時期は 18 世紀後葉から 19 世紀初頭を主体とし、350 号同様に成瀬家拝領期に廃絶されたと考えられるが、下限となる 19 世紀第 1 四半期の遺物は鳥居家拝領期に掘り返され混入したものと判断される。

382 号・402 号・1196 号（第 1-127 図・第 3-16 表）

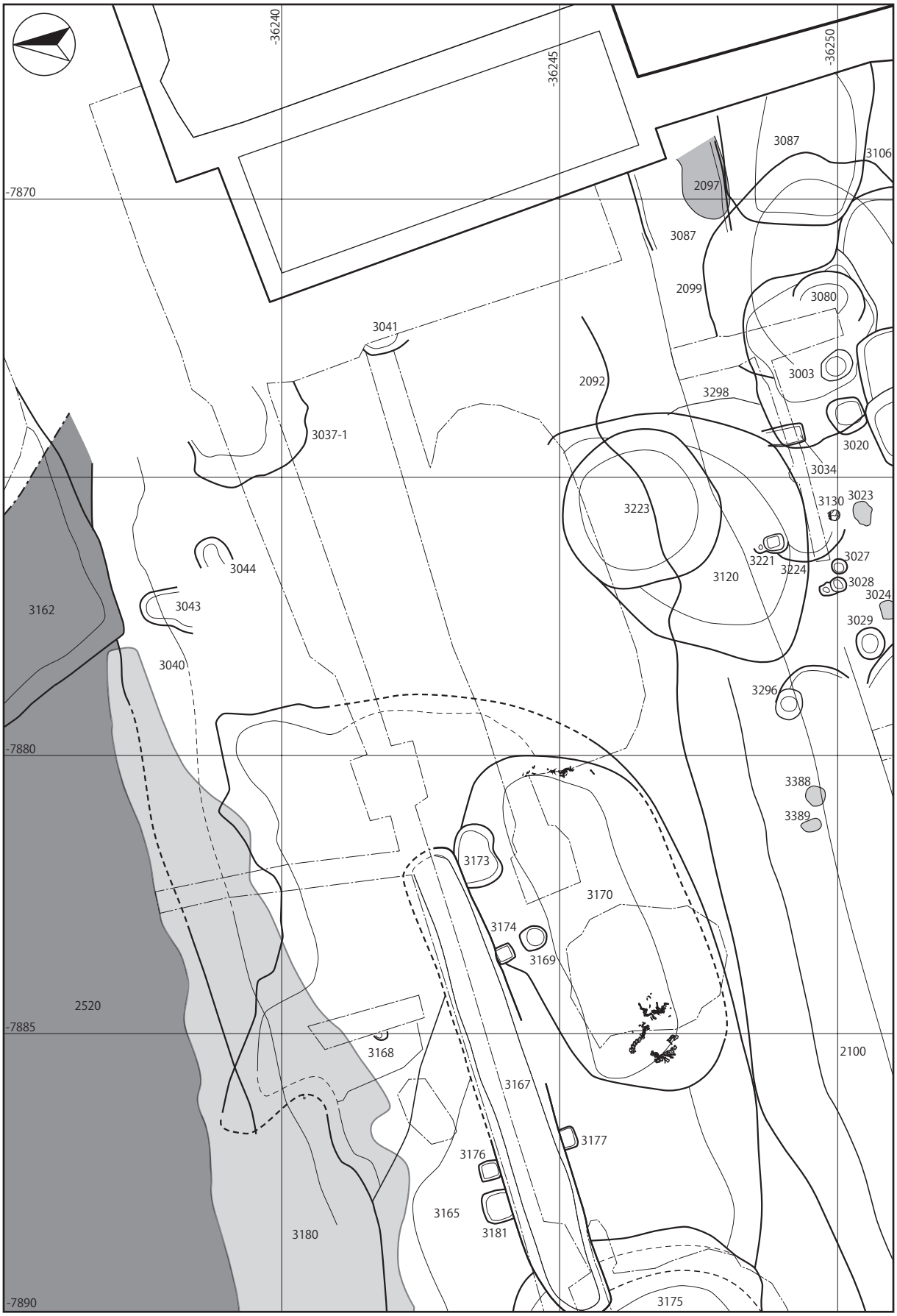
F-1 区南中央で検出された大型の土坑である。長軸が 4.78m、短軸が 3.83m の不整形を呈する。東側の壁は段状に掘り込まれているが、それ以外の部分はなだらかに立ち上がる。覆土は上面の盛土層に近い暗褐色土の最上層（第 1-127 図 1 層）、しまりの弱い灰黄褐色土を主体とする上層（同図２・３層）、しまり・粘性とも弱い黒褐色土を主体とする下層（同図５～７層）に分けられる。上層と下層の境には部分的に瓦集中層（同図４層）が堆積していた。出土遺物は多く、大型廃棄土坑と考えられる。382 号の底面では、方形の板石３枚が並ぶ 402 号石列を検出した。板石はそれぞれ 25 × 56 × 15cm・34kg の房州石、24 × 47 × 11cm・23kg の緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）、23 × 47 × 13cm の凝灰岩である。382 号の底面より約 15 ～ 20cm 下まで掘り込んだ方形の掘方内に、上記の板石を 35 ～ 40cm 間隔で並べている。掘方内はしまり・粘性とも弱い灰黄褐色土が堆積していた。382 号の出土遺物は 2,358 点・109,449.9g とやや多く、19 世紀第 1 四半期を主体とする。また、370 号・388 号・429 号・471 号・3040 号と遺構間接合が認められた。



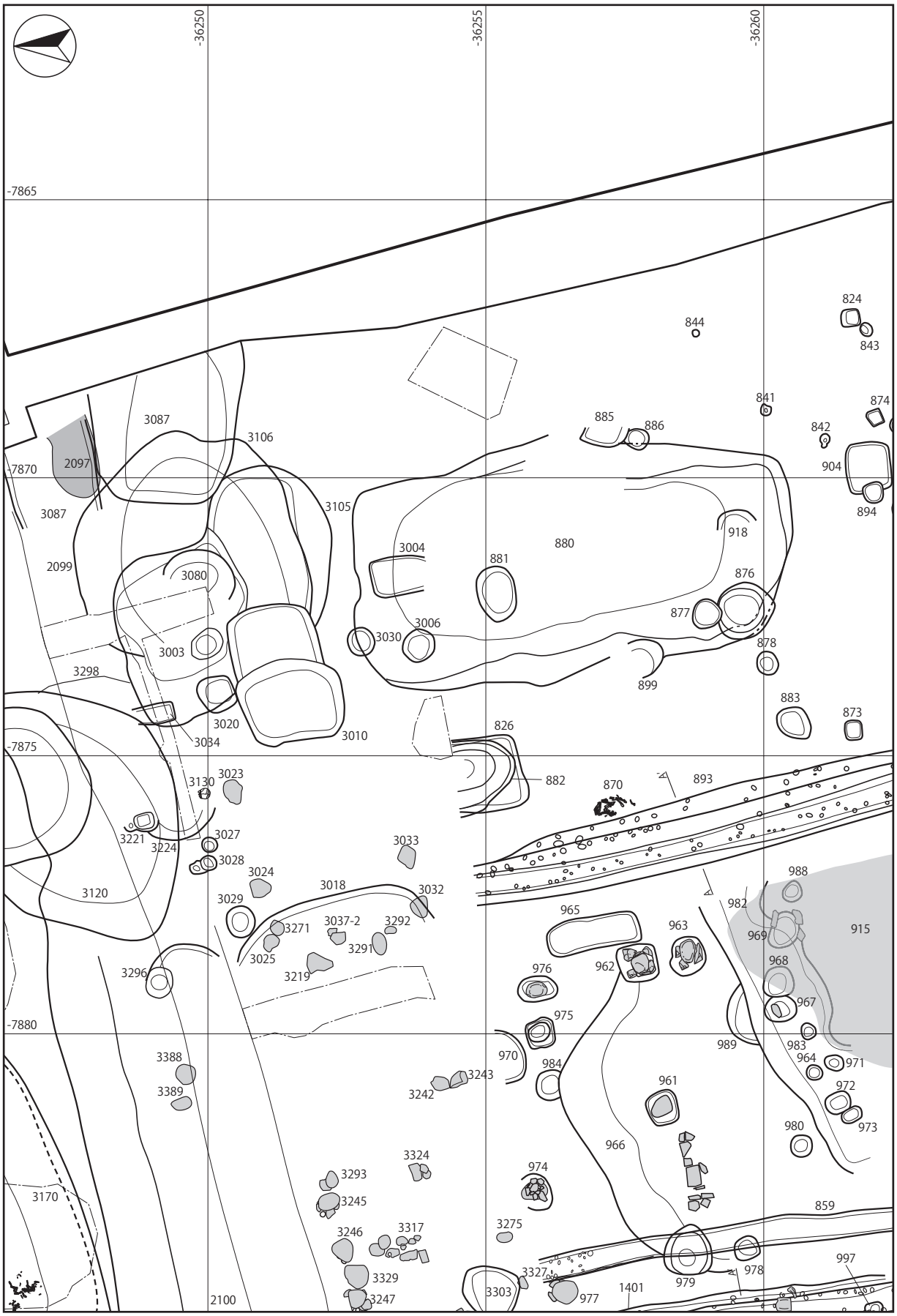
第 1-46 図　1-1 面全体図（1/250）



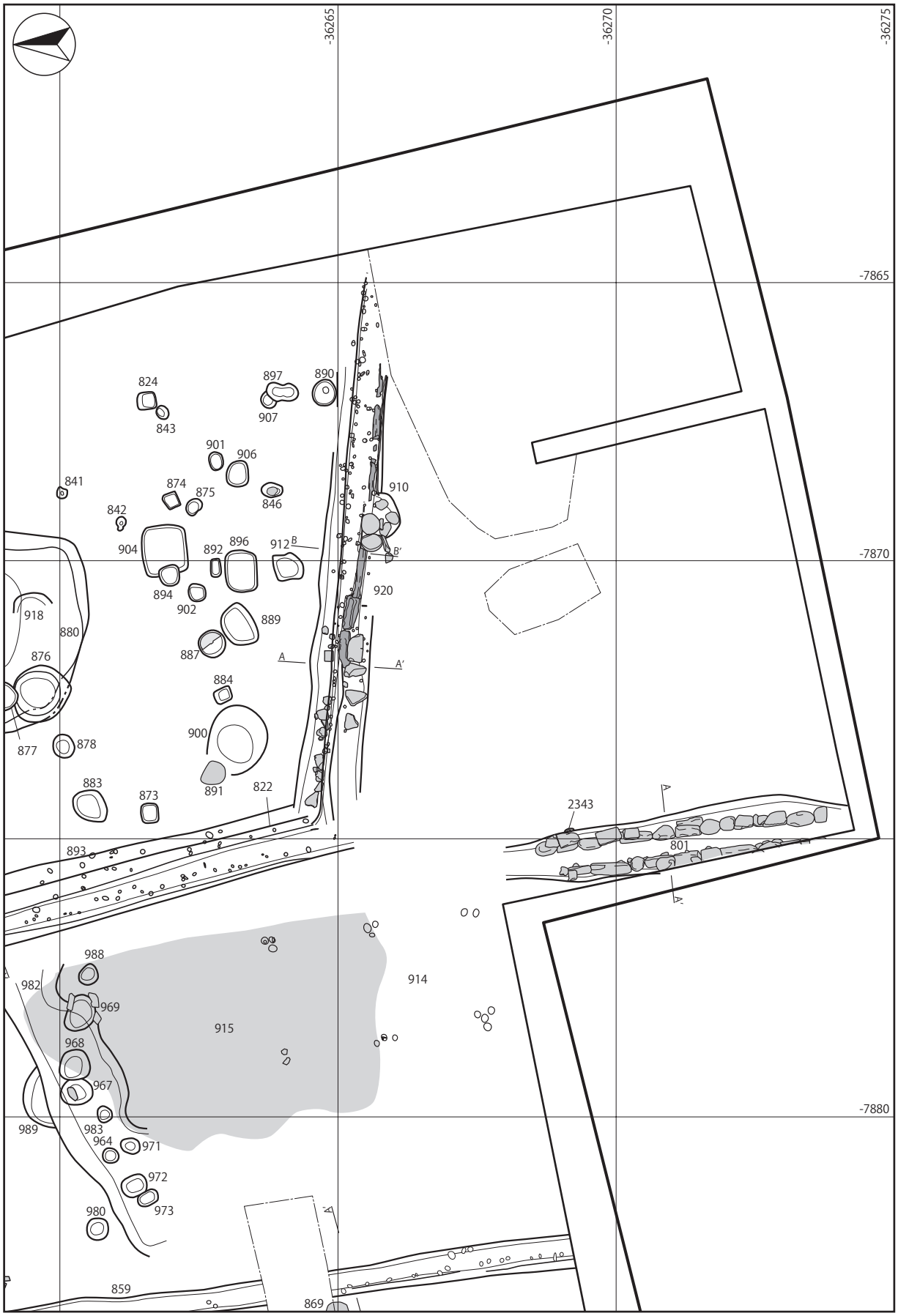
第 1-47 図　1-1 面割図①（1/100）



第 1-48 図　1-1 面割図②（1/100）



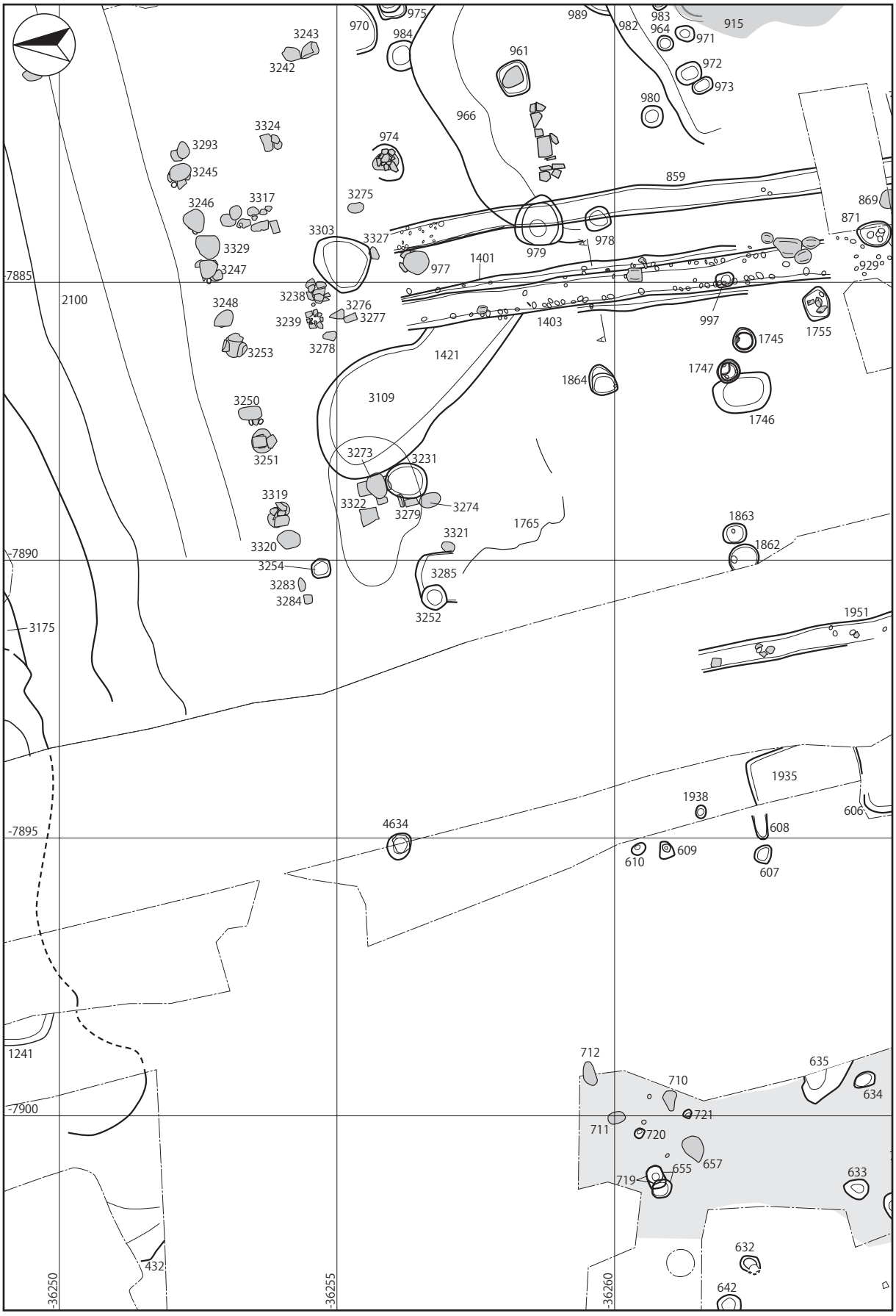
第 1-49 図　1-1 面割図③（1/100）



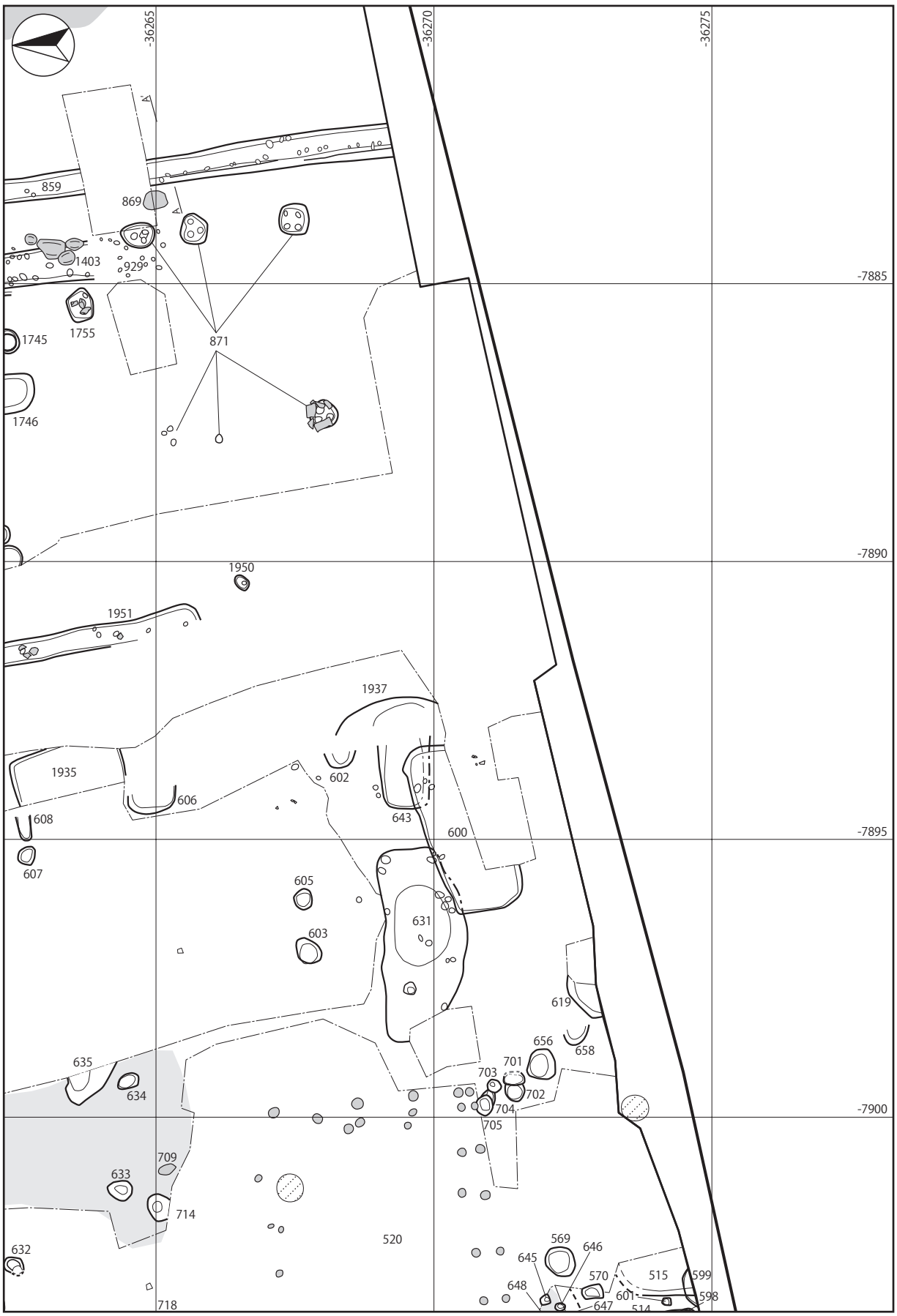
第 1-50 図　1-1 面割図④（1/100）



第 1-51 図　1-1 面割図⑤（1/100）



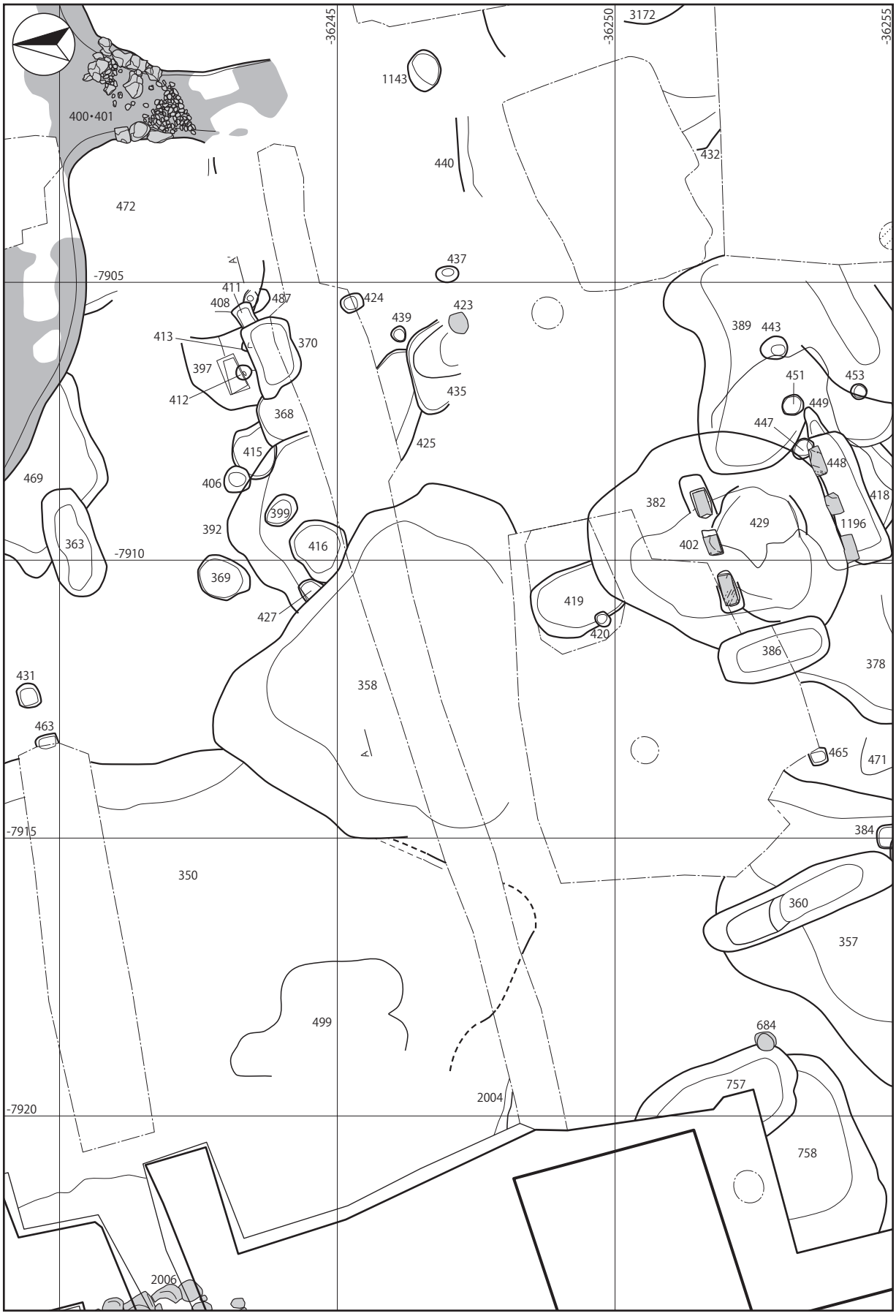
第 1-52 図　1-1 面割図⑥（1/100）



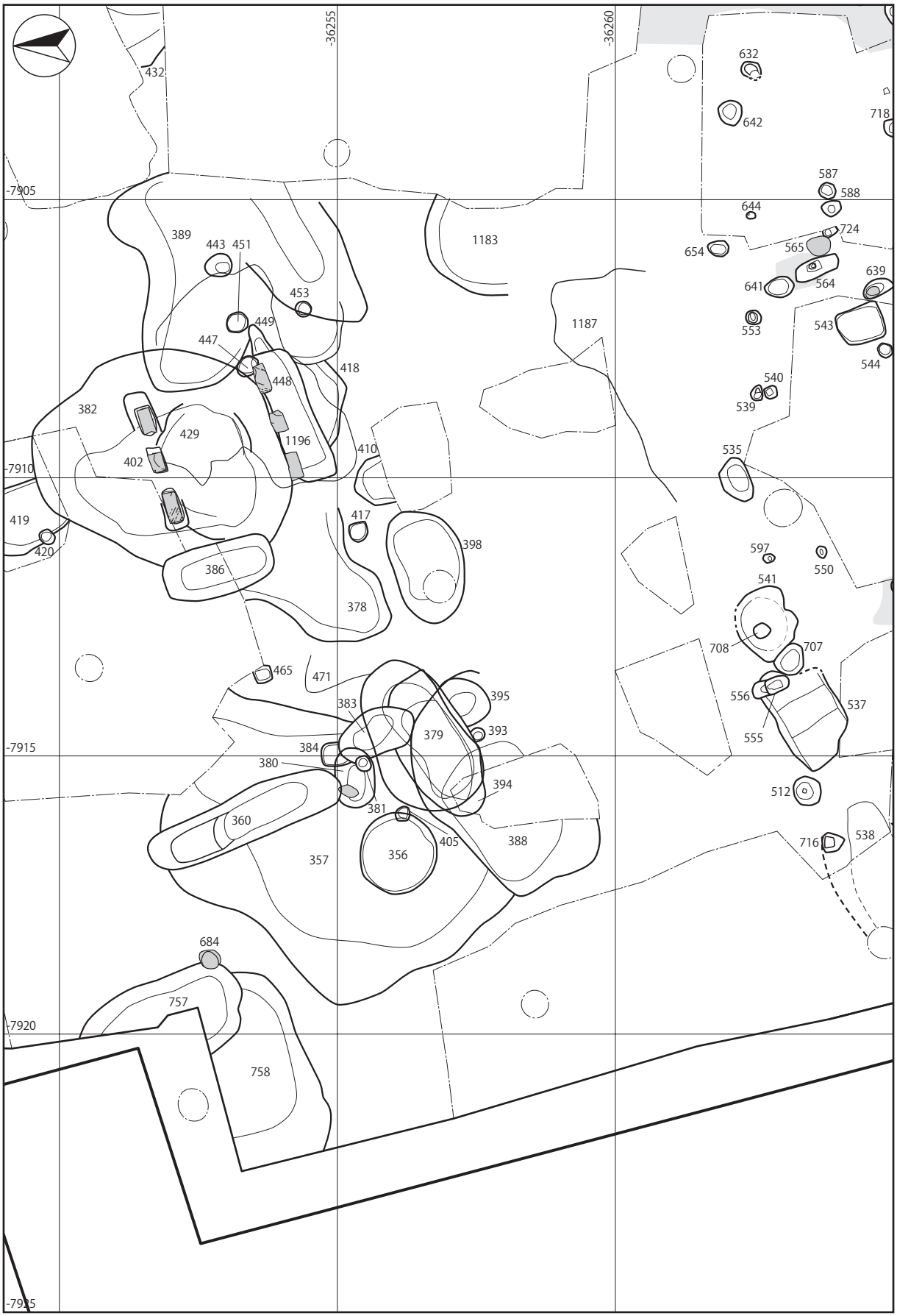
第 1-53 図　1-1 面割図⑦（1/100）



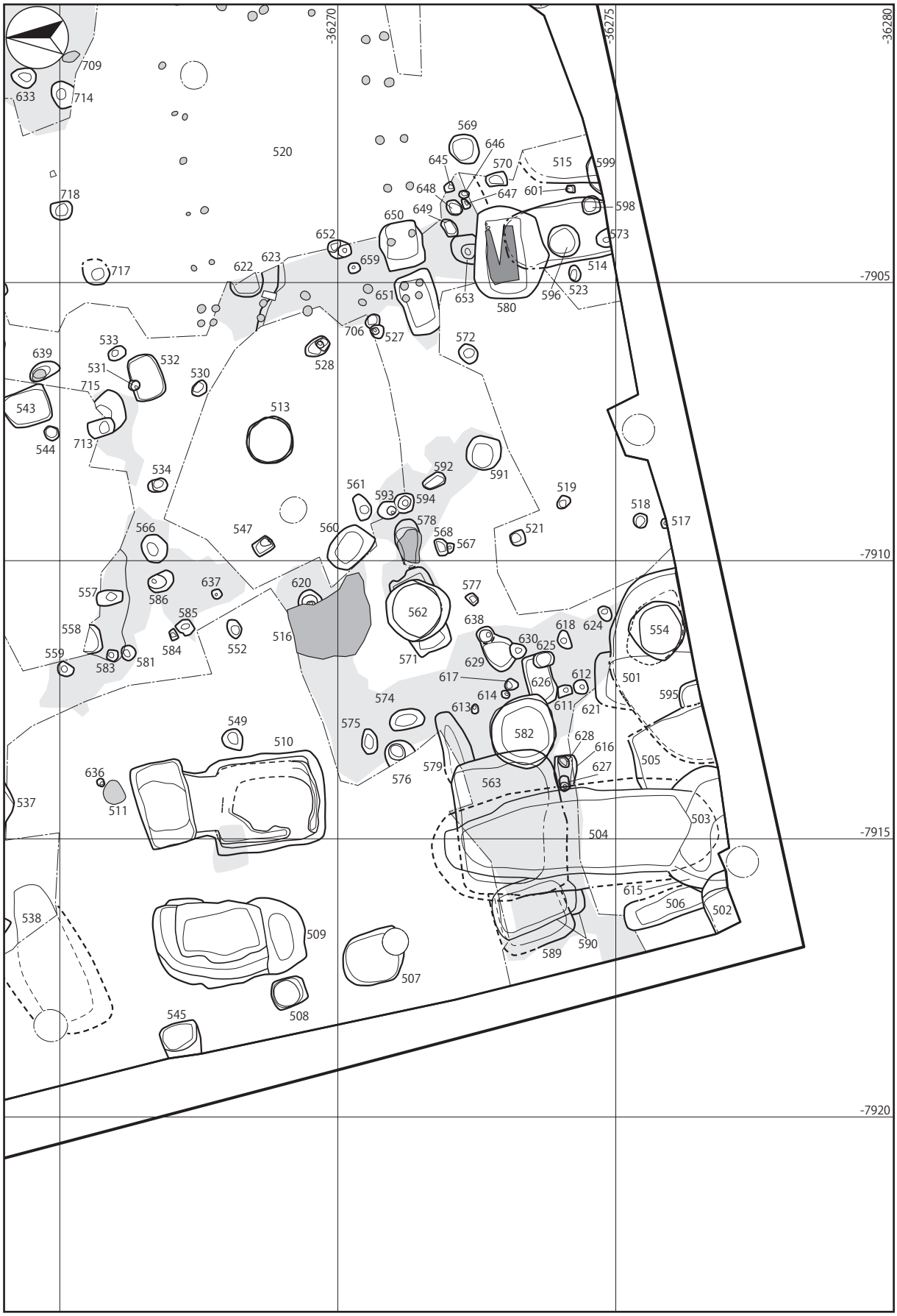
第 1-54 図　1-1 面割図⑧（1/100）



第 1-55 図　1-1 面割図⑨（1/100）



第 1-56 図　1-1 面割図⑩（1/100）



第 1-57 図　1-1 面割図⑪（1/100）

402 号石列の南約 2 mの位置で、同じく板石が 3 枚並ぶ 1196 号石列を検出した。板石は幅約 20 ～ 25cm、長さ 40 ～ 50cm、厚さ 10 ～ 15cm の凝灰岩製（緑色凝灰角礫岩・火山礫凝灰岩）で、402 号石列と同規模の板石を使用している。板石の上面レベル（T.P.）は 402 号が 12.3 m、1196 号が 12.1 mと約 20cm の高低差があるが、それぞれの板石は南北方向で揃っており、一連の遺構である可能性も考えられる。なお、1196 号の上部には 402 号の掘方と形状が似る長方形土坑 448 号が位置しているが、周辺に多くの遺構が重複していたため、448 号が 1196 号の掘方であるかは確認できなかった。しかし、402 号掘方と軸の方向や規模がほぼ同一であることから見て、1196 号も 402 号同様掘方を有する石列であった可能性がある。

757・758 号（第 1-128 図・第 3-16 表）

F-1 区西端中央で検出された土坑である。いずれも半分以上が調査区外となるため、規模は不明である。土層断面では黄褐色土 4 層が 758 号上面近くから 758 号床面近くまで堆積していることから、757 号が 758 号に先んじて埋没していたと考えられる。757 号は不整楕円形で、壁面ははややなだらかに立ち上がる。覆土はロームブロックを主体とし、下層に薄い砂層（第 1-128 図 10 層）が堆積する。出土遺物は 168 点・3,118.2g で、18 世紀第 2 四半期を主体とする。

758 号は長楕円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は底面に炭化物粒を多く含む暗褐色土（同図 6 層）、黒褐色土（同図 5 層）が堆積し、先述の 4 層を挟んでその上に瓦片を大量に含む黒褐色土（同図 1 層）が堆積する。出土遺物は 307 点・14,775.2g で瓦片が多く、757 号同様に 18 世紀第 2 四半期を主体とする。

【瓦溜り】

370 号（第 1-55・126 図・第 3-16 表）

F-1 区中央で検出された東西方向に長い小型の方形土坑に瓦が集中する。東西軸が 1.47m、南北軸が 0.74m、深さ約 60cm を測る。覆土はにぶい黄褐色土を主体とし、特に 2 層に赤錆を多く含む。出土遺物は 146 点・2,128.9g で、19 世紀初頭以降を主体とする。370 号周辺で検出された 368 号・392 号・397 号は浅い土坑状を呈し、416 号は瓦が集中する小型の瓦溜りである。調査段階では土坑と考えていたが、いずれも 1 面の盛土層の一部と考えられる。

B　2面

F-1 区 2 面は H-1 区 2 面や H-2 区 2 面に対応する面である。この面では土蔵基礎、廃棄土坑、屋敷境の溝などが検出された。特に調査区中央部では 489 号・500 号を中心とする大型の土坑が連続して作られている。また、このほかにも、長方形の大型の廃棄土坑（470 号・1166 号）がある。

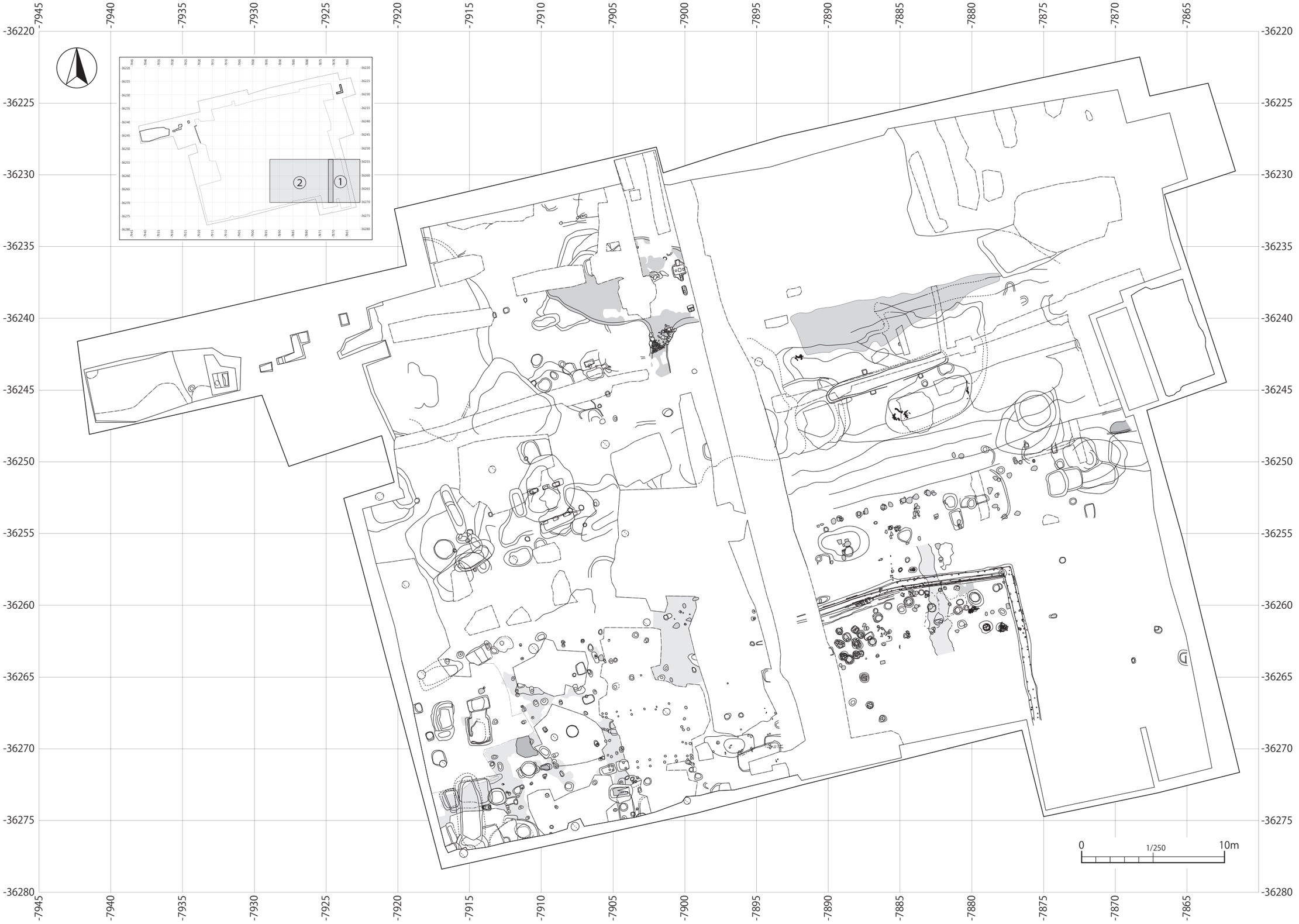
2 面の上面にはロームブロックや砂を多く含む盛土が F-1 区南側を中心に確認されており（1 面盛土、第 1-11 図 F-1 区基本層序 11 ～ 14 層に相当）、この盛土が 489 号・500 号などの大型の土坑の最上部に堆積している状況が確認された。

2 面では土蔵基礎 1 基、廃棄土坑 2 基、瓦溜り 3 基、杭 1 基、杭列 2 条、イヌ埋葬跡 1 基、礎石 2 基、焼土溜り 1 基、土坑 29 基、ピット 23 基、盛土層 1 基を検出した。

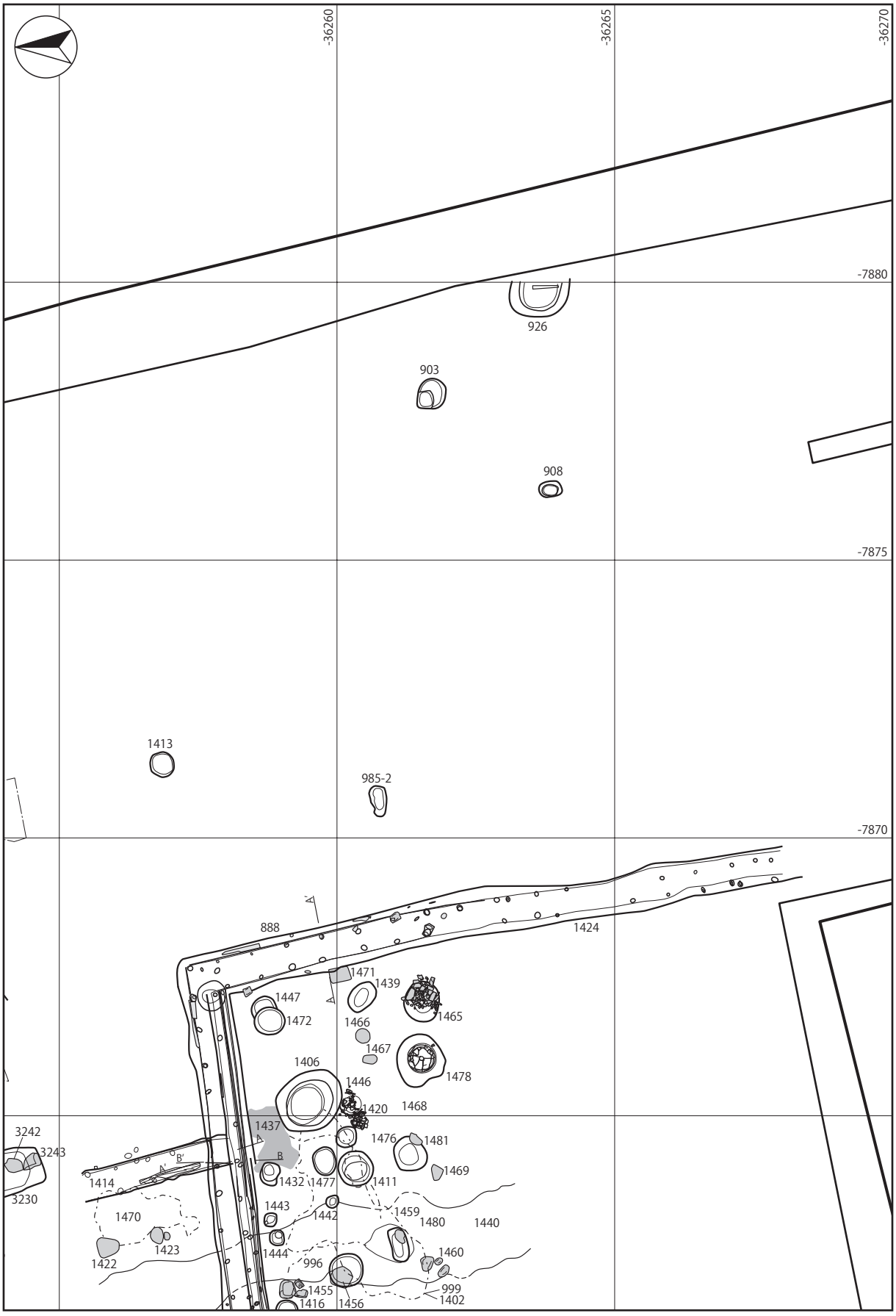
【土蔵基礎】

464 号（第 1-137・138 図・巻頭図版 12・図版 3-53-3 ～ 5・第 3-16 表）

F-1 区北西で検出された土蔵基礎である。東西に長い長方形を呈し、掘方の東西軸で 5.90m、南北



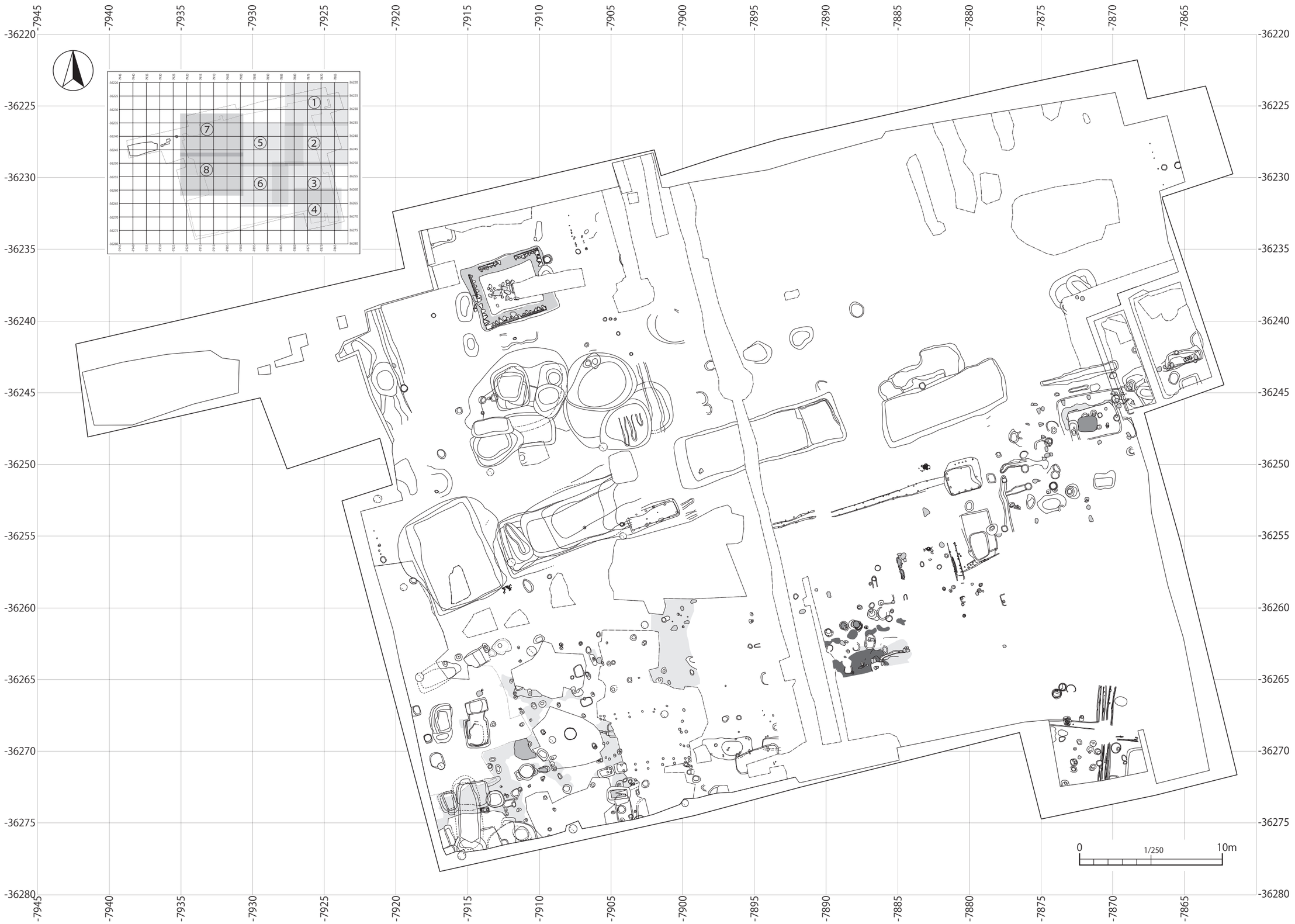
第 1-58 図　1-2 面全体図（1/250）



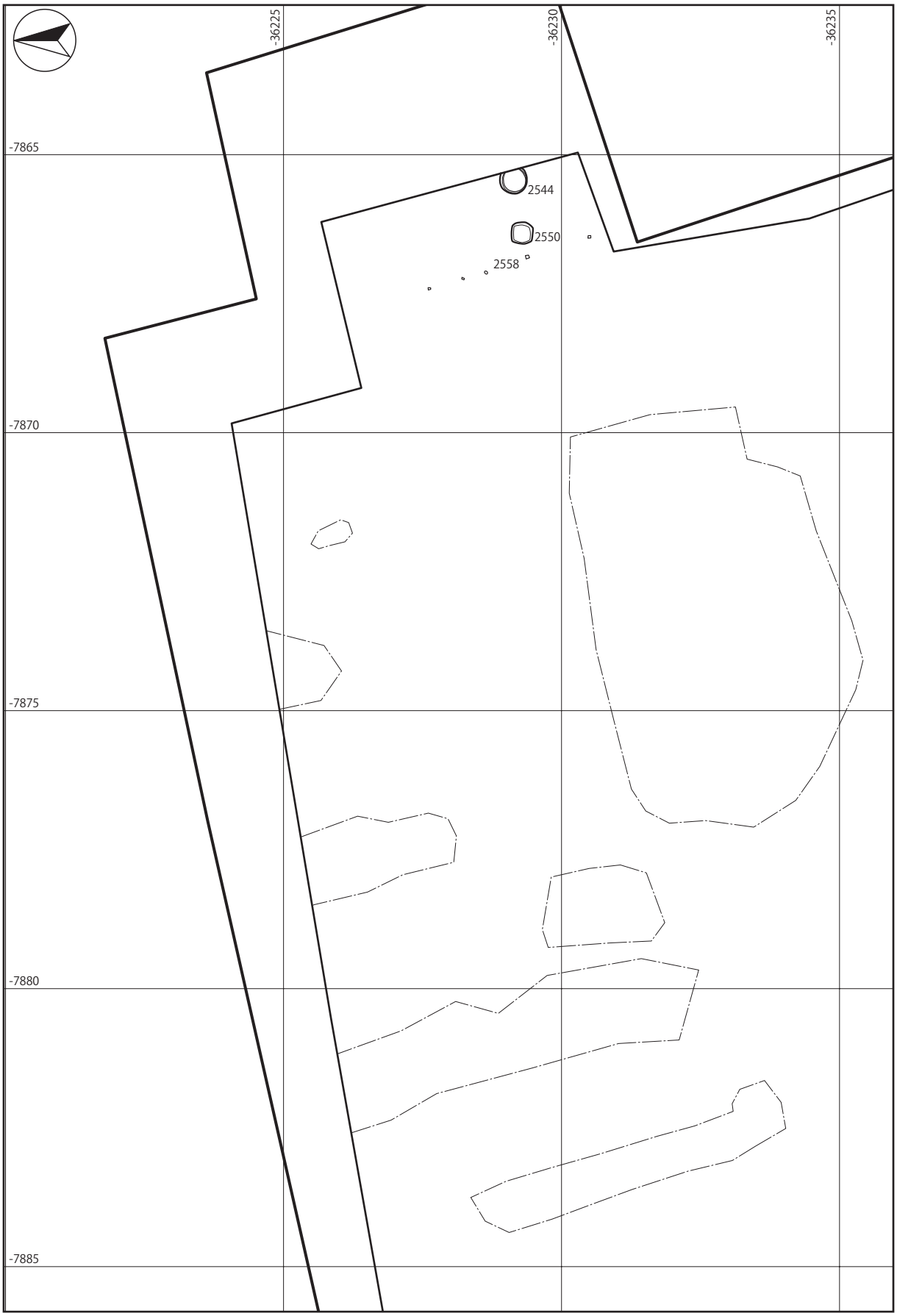
第 1-59 図　1-2 面割図①（1/100）



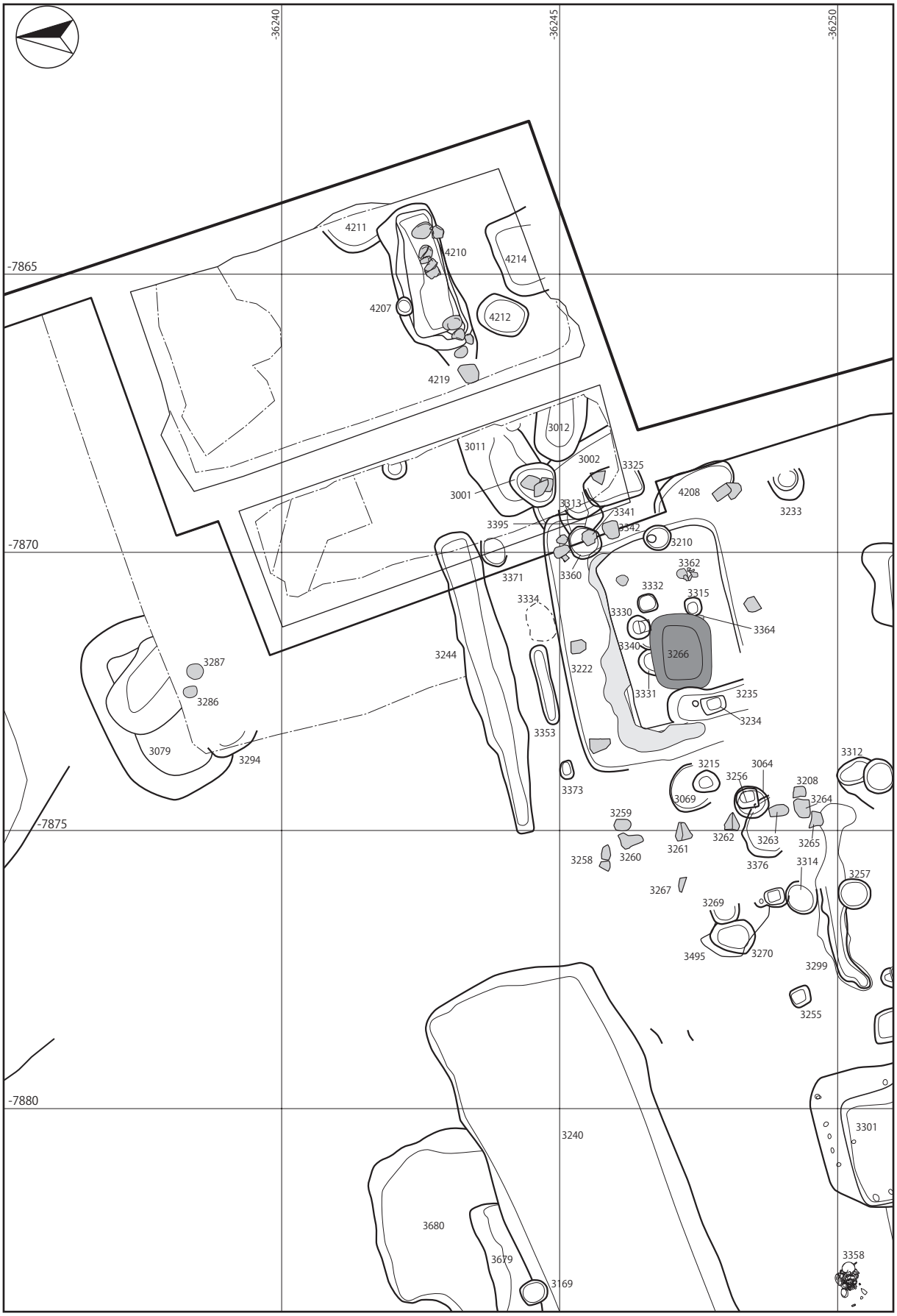
第 1-60 図　1-2 面割図②（1/100）



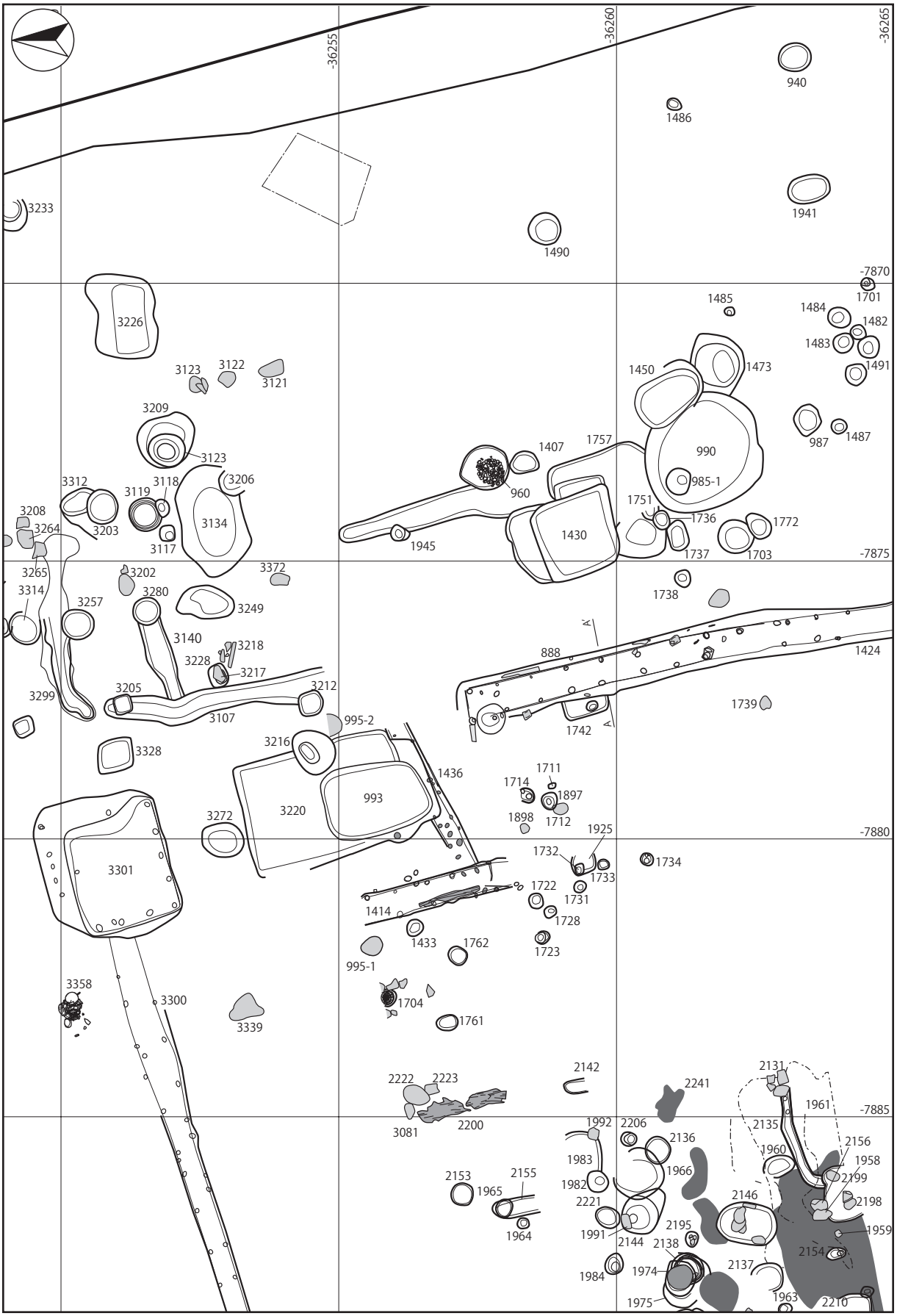
第 1-61 図　2 面全体図（1/250）



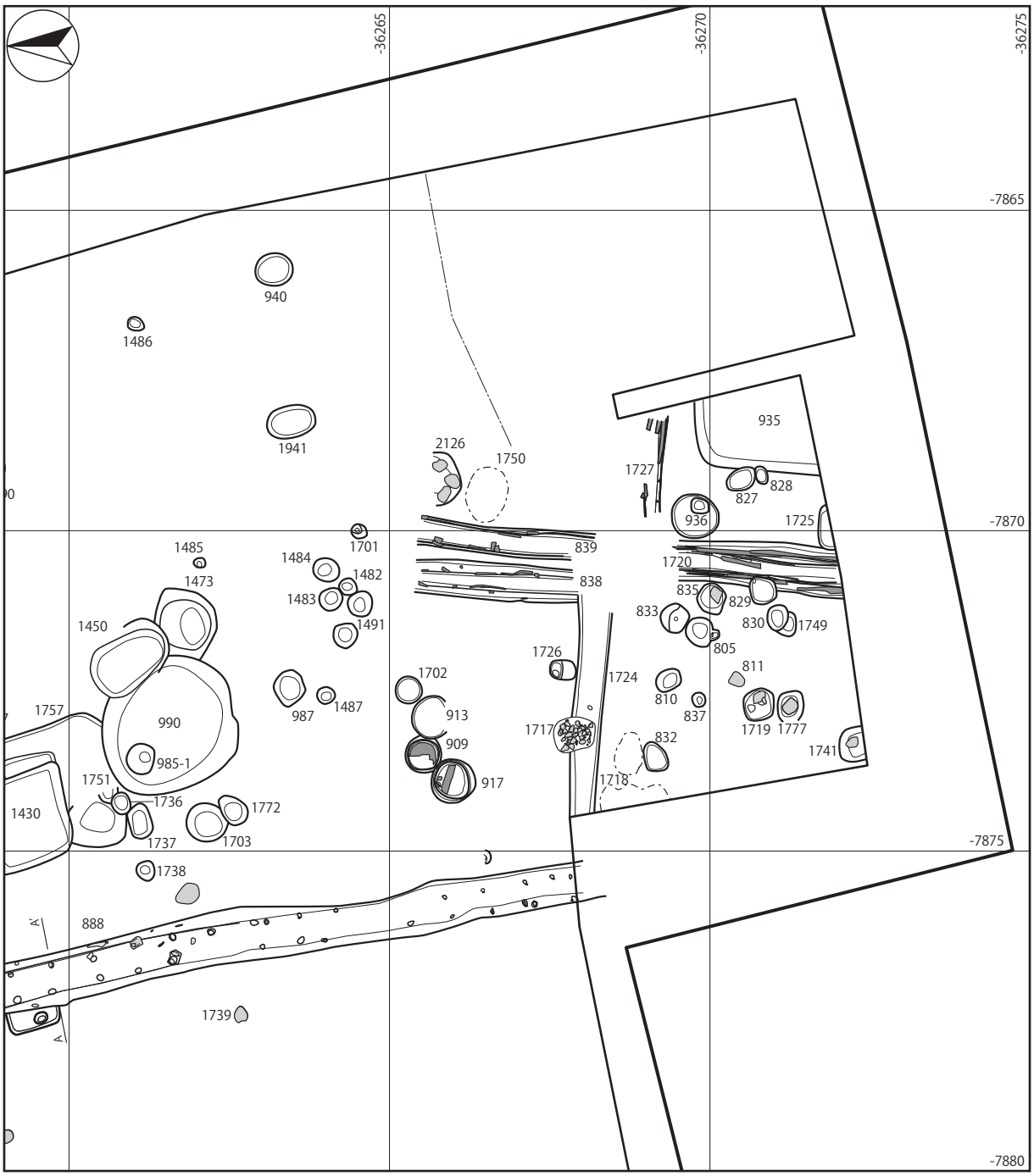
第 1-62 図　2 面割図①（1/100）



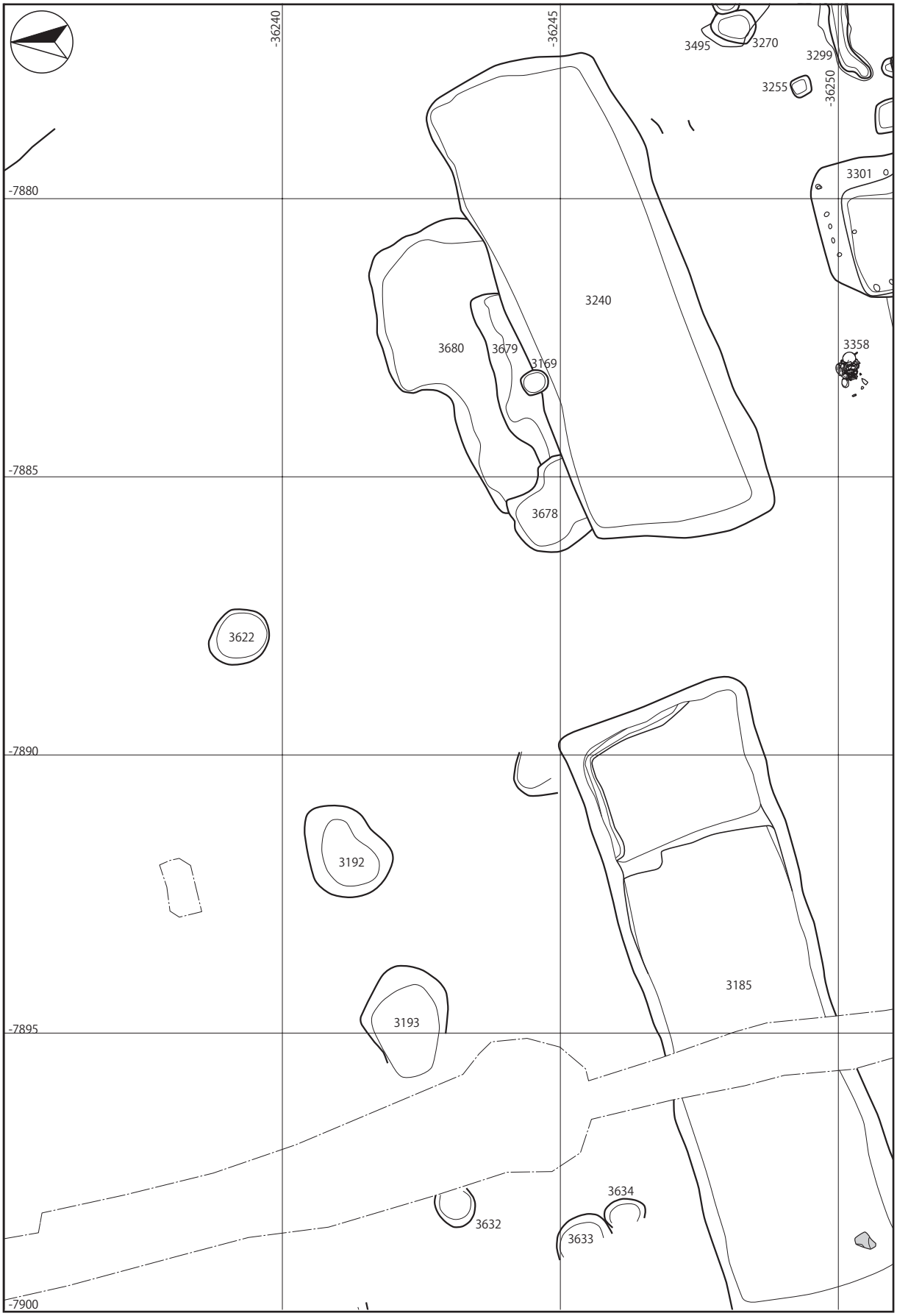
第 1-63 図　2 面割図②（1/100）



第 1-64 図　2 面割図③（1/100）



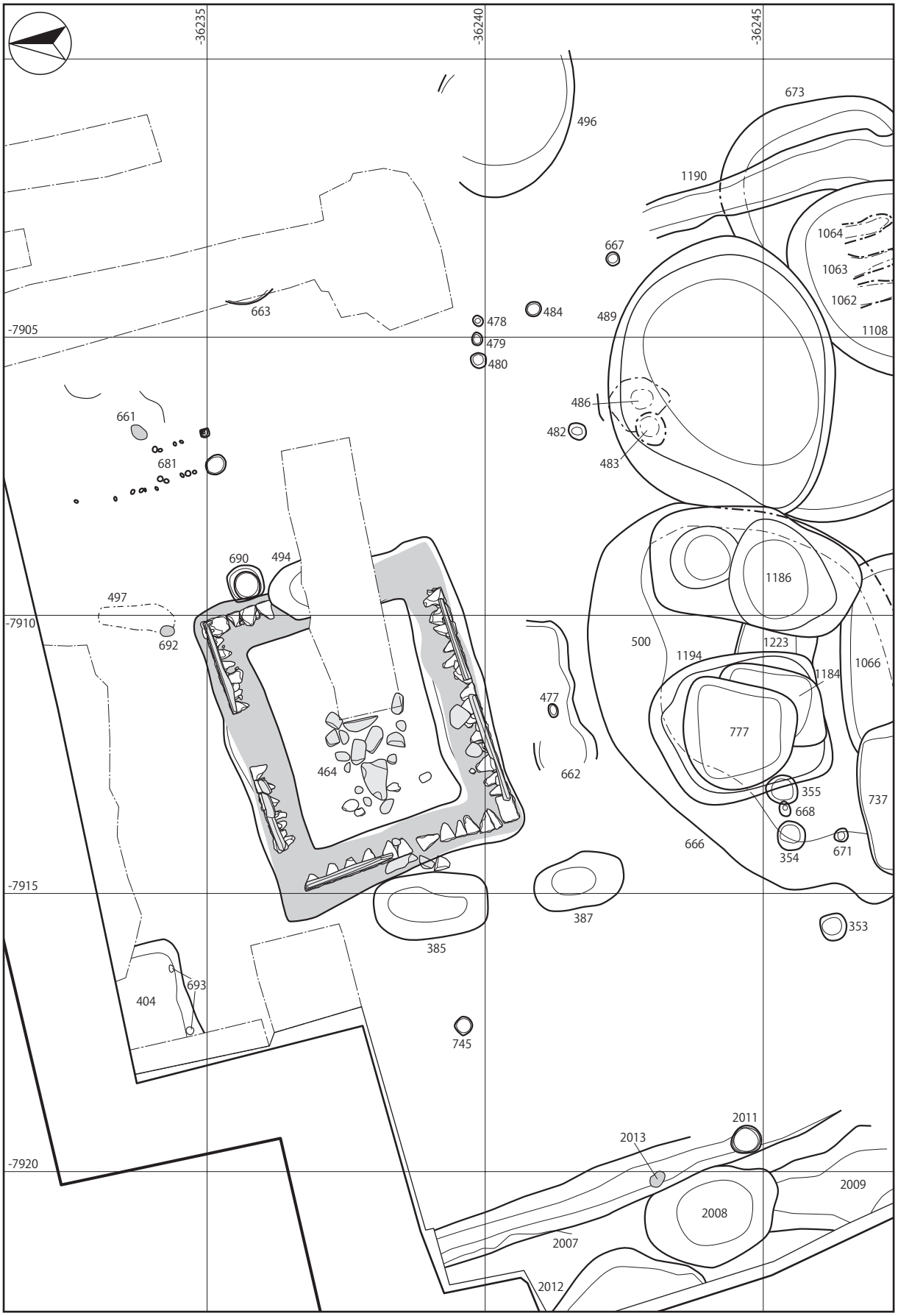
第 1-65 図　2 面割図④（1/100）



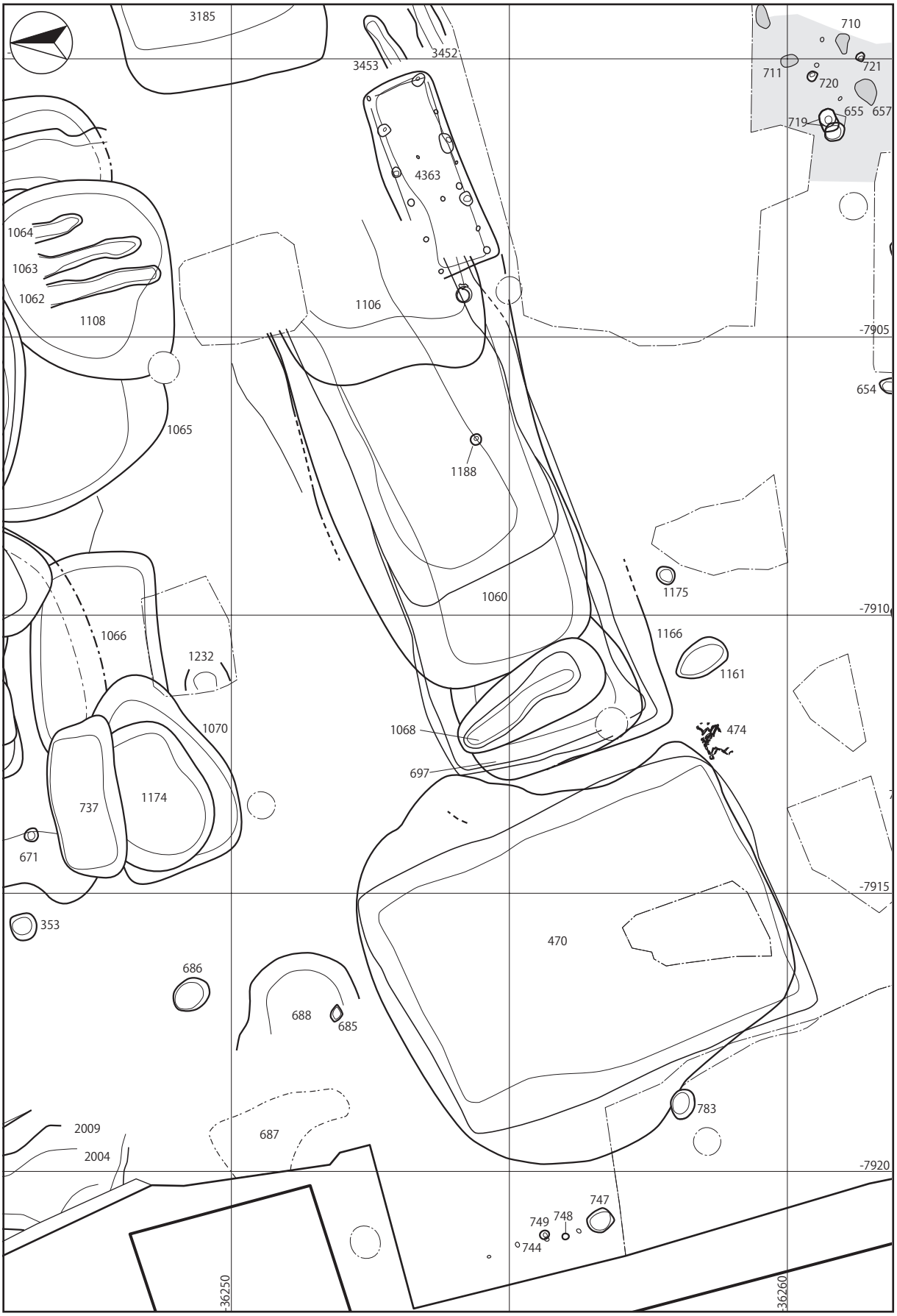
第 1-66 図　2 面割図⑤（1/100）



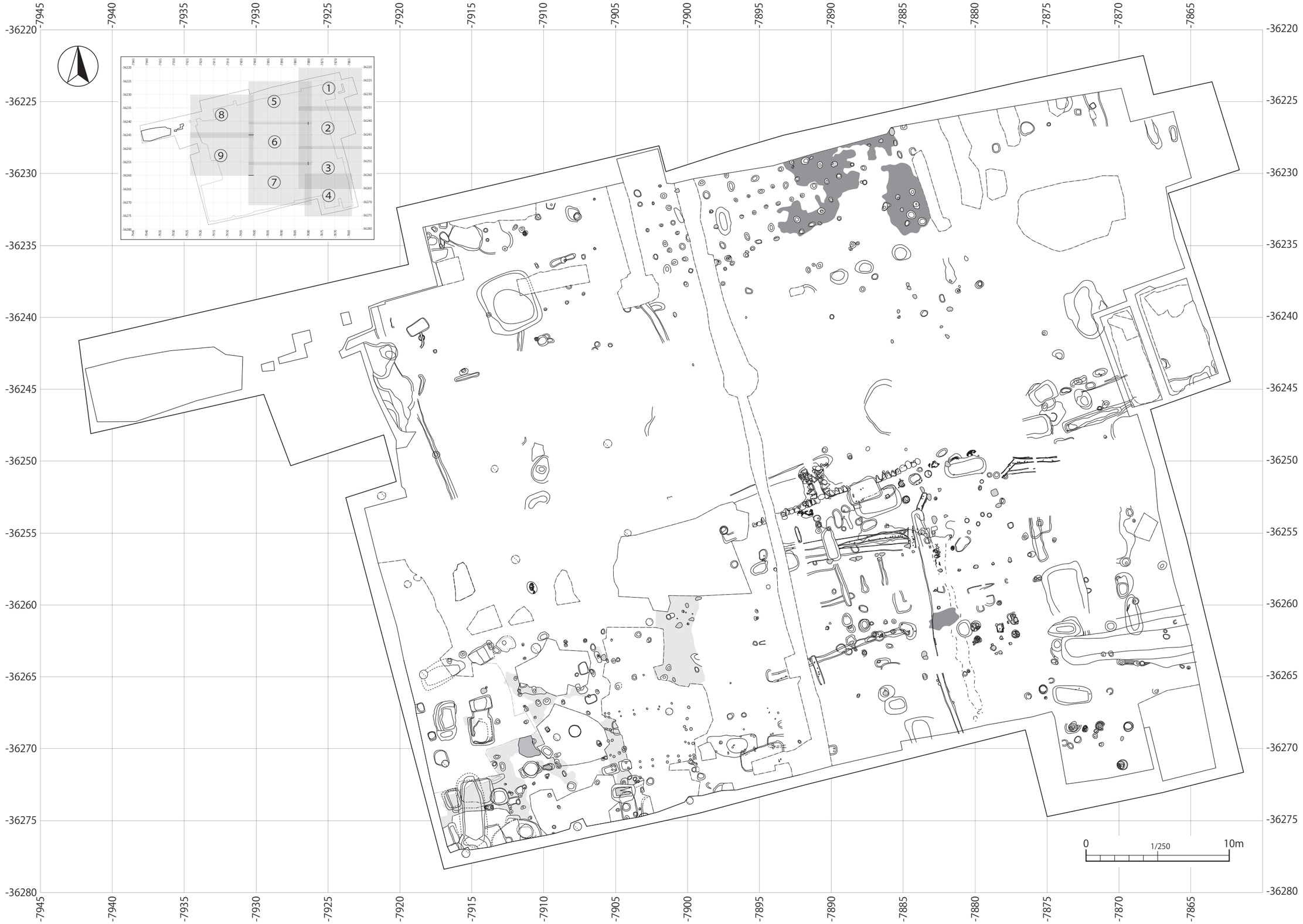
第 1-67 図　2 面割図⑥（1/100）



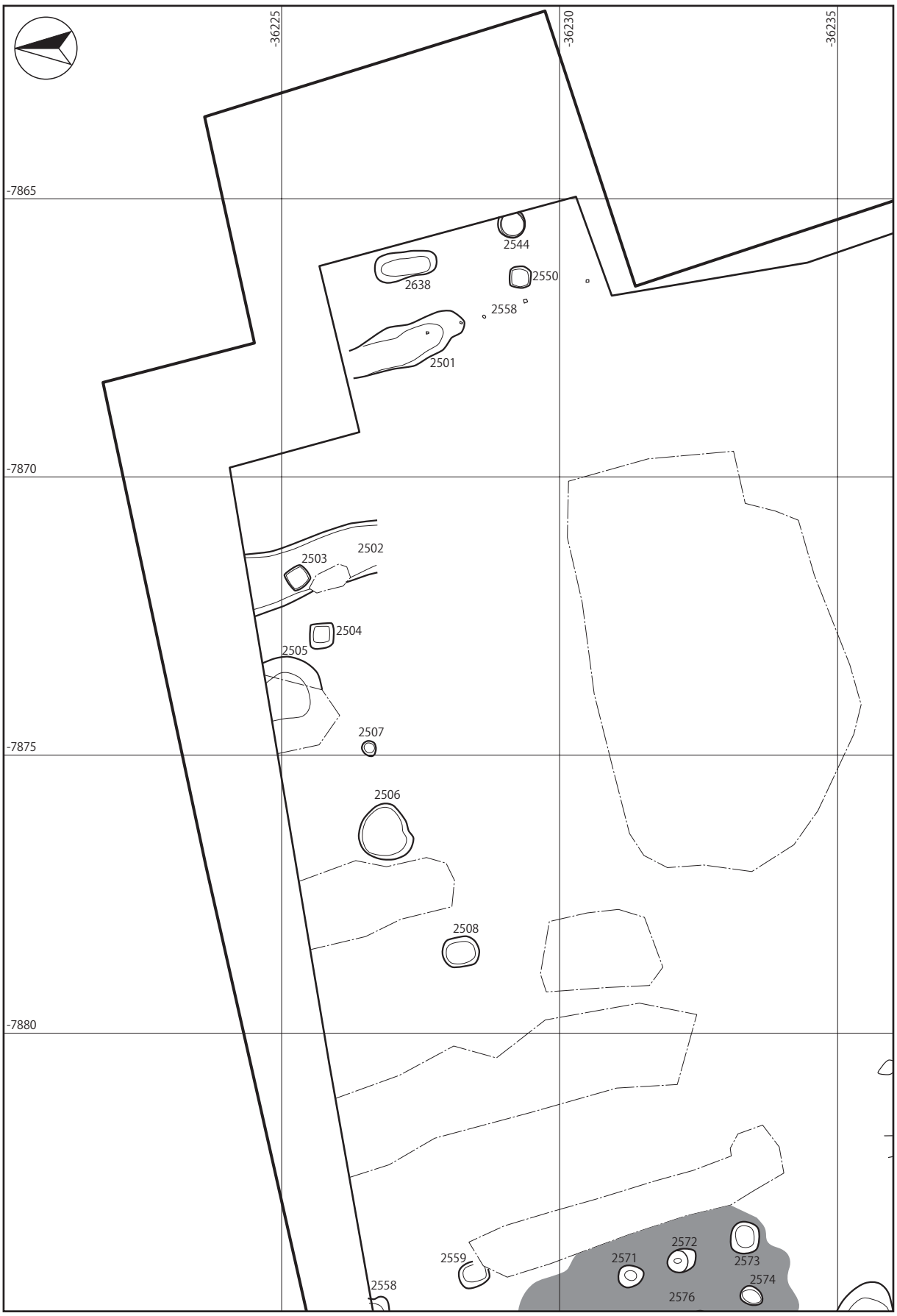
第 1-68 図　2 面割図⑦（1/100）



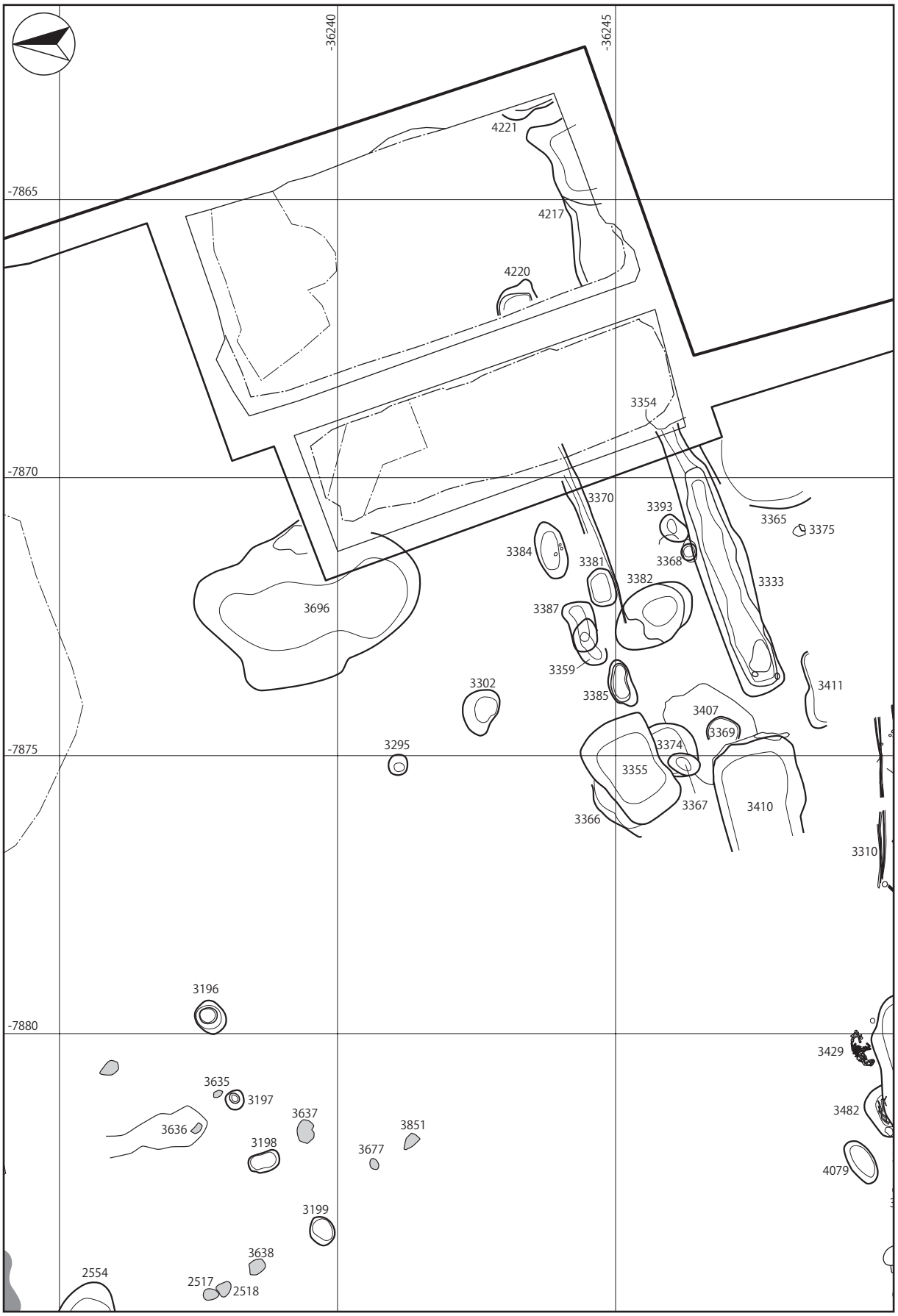
第 1-69 図　2 面割図⑧（1/100）



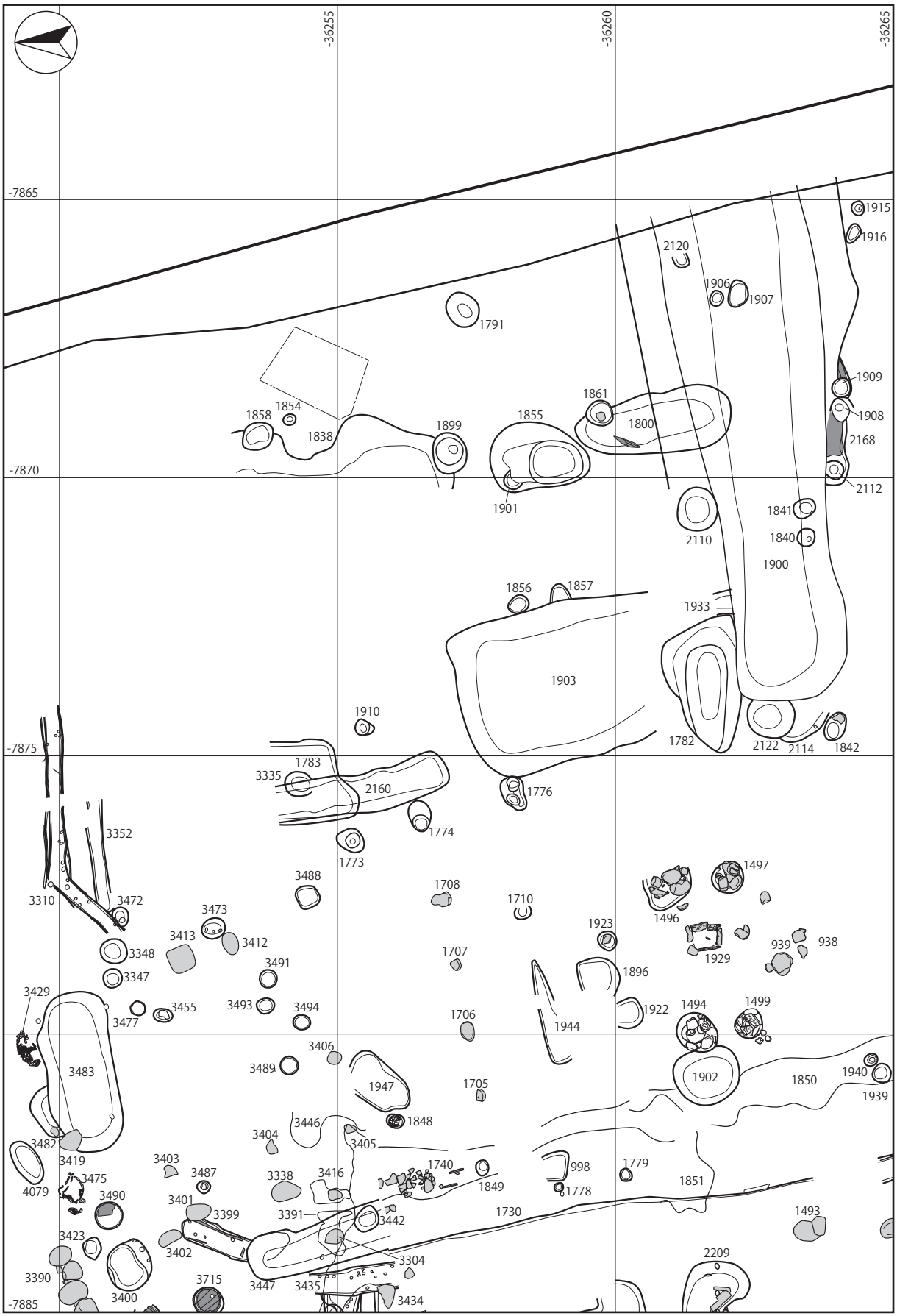
第 1-70 図　3-1 面全体図（1/250）



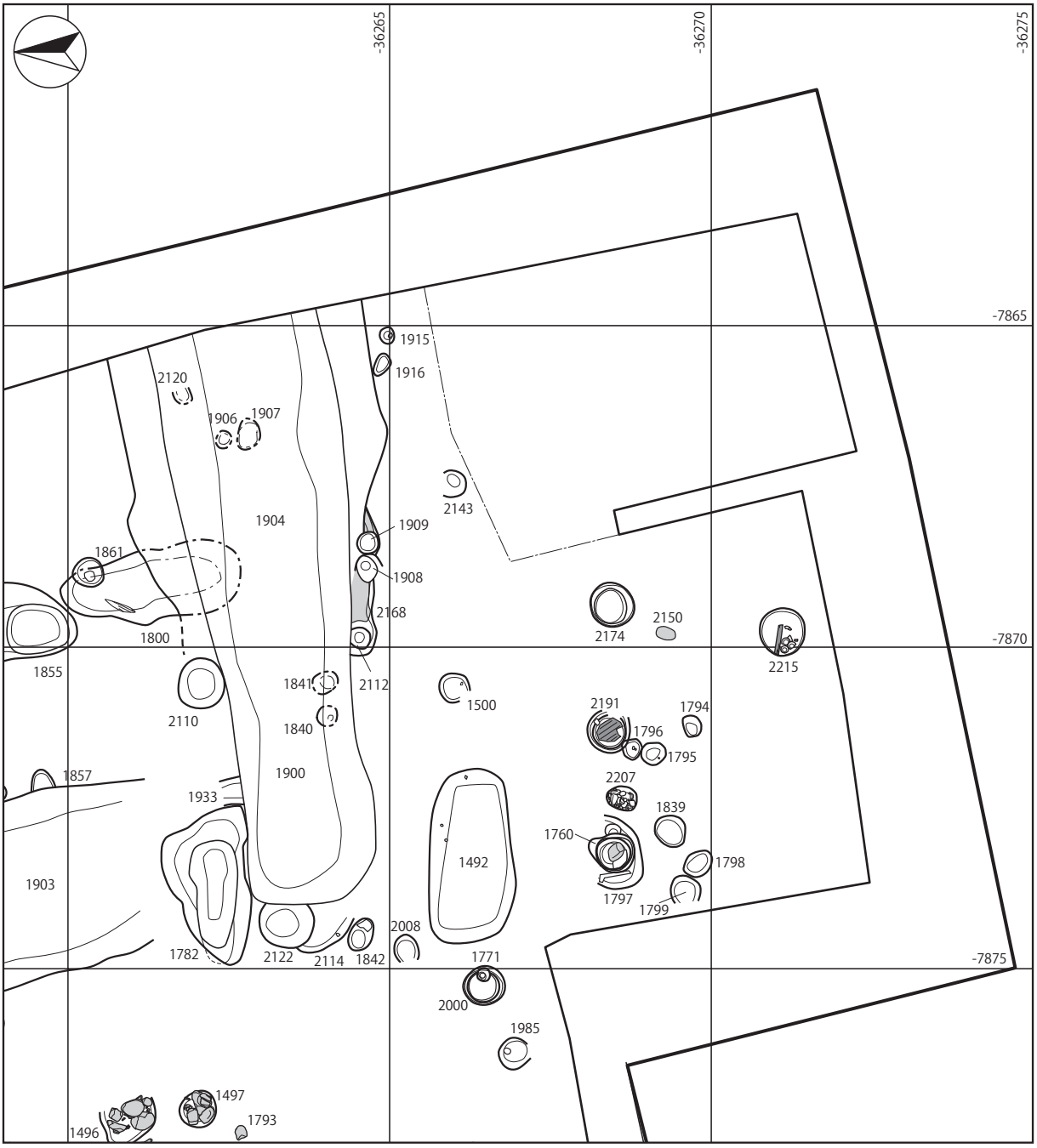
第 1-71 図　3-1 面割図①（1/100）



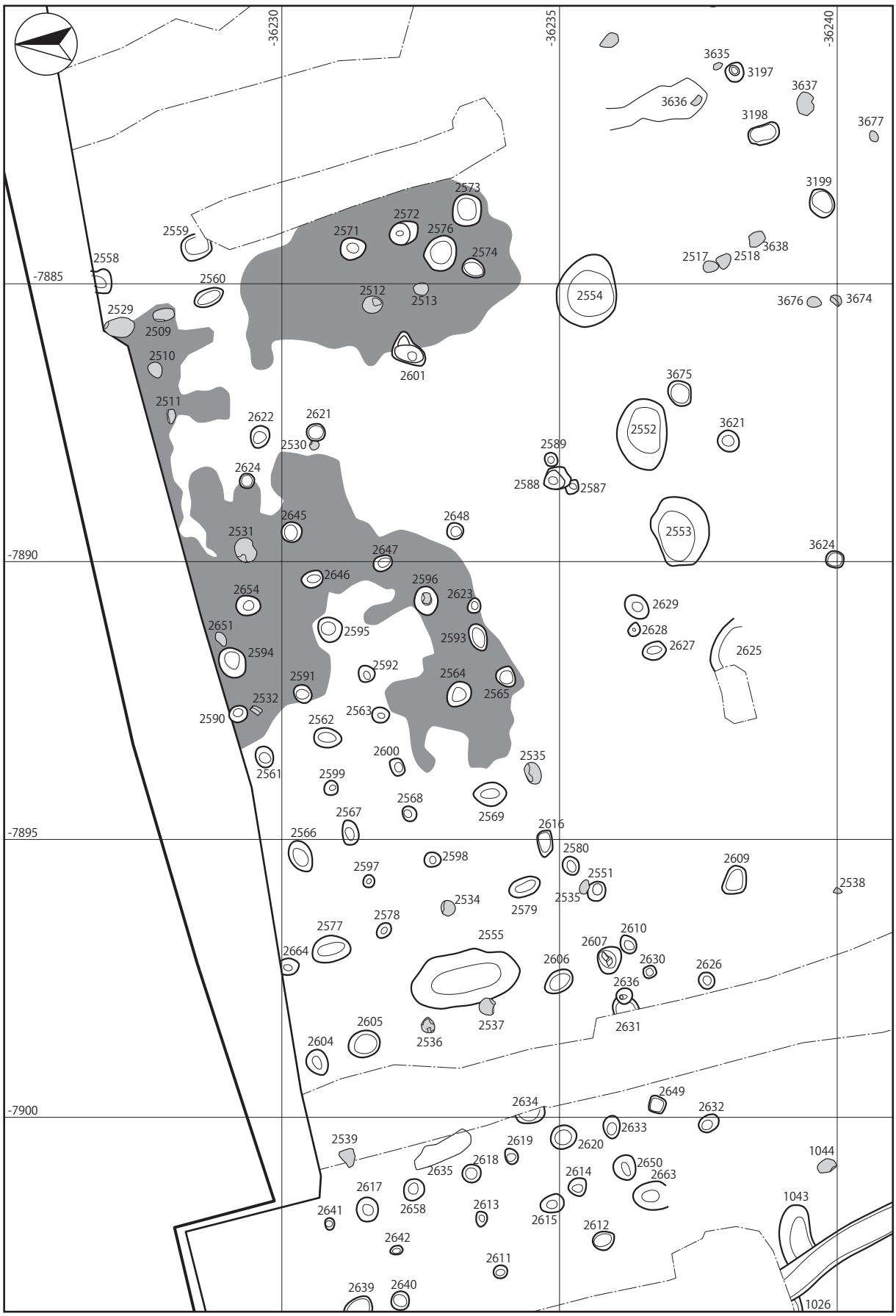
第 1-72 図　3-1 面割図②（1/100）



第 1-73 図　3-1 面割図③（1/100）



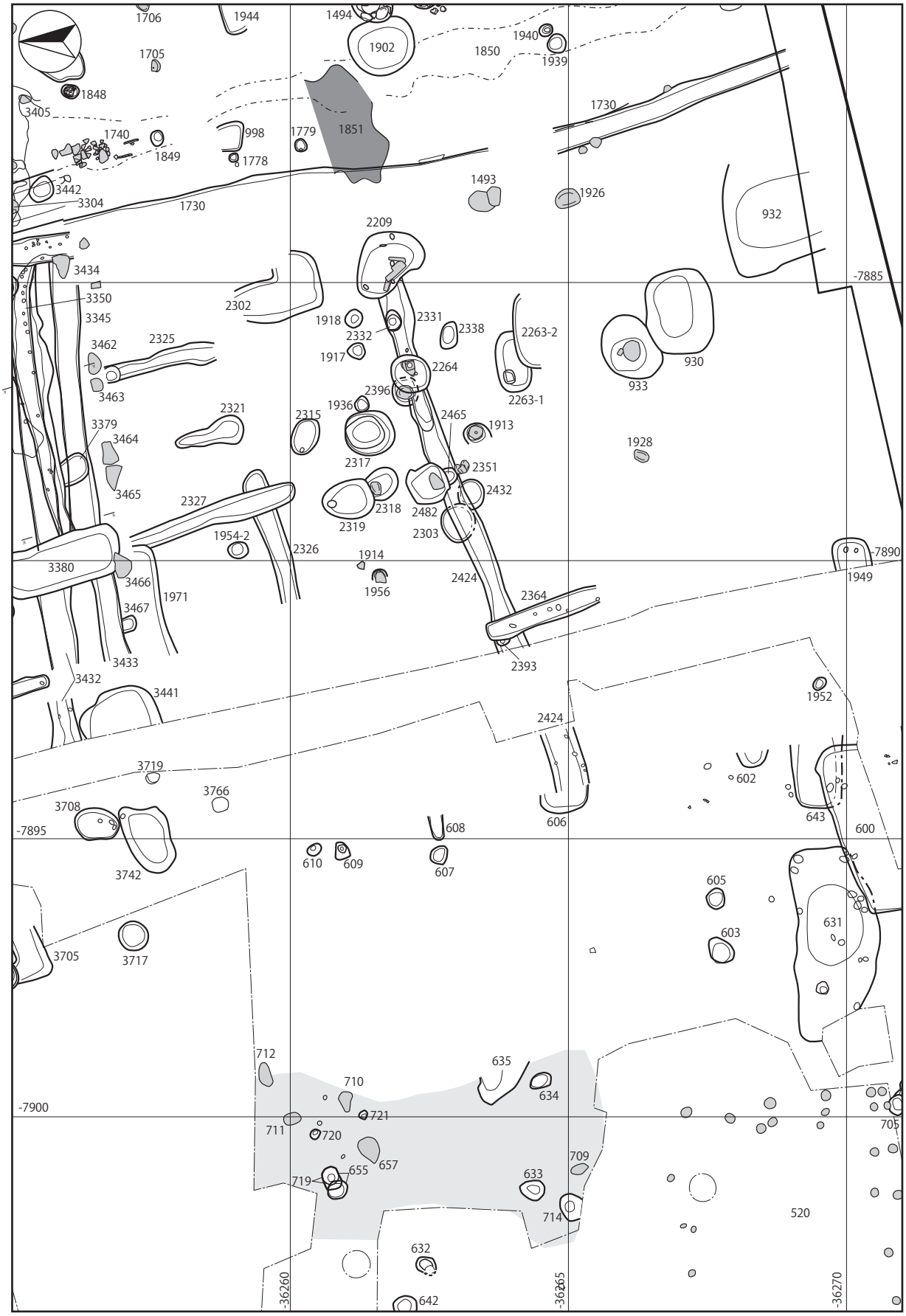
第 1-74 図　3-1 面割図④（1/100）



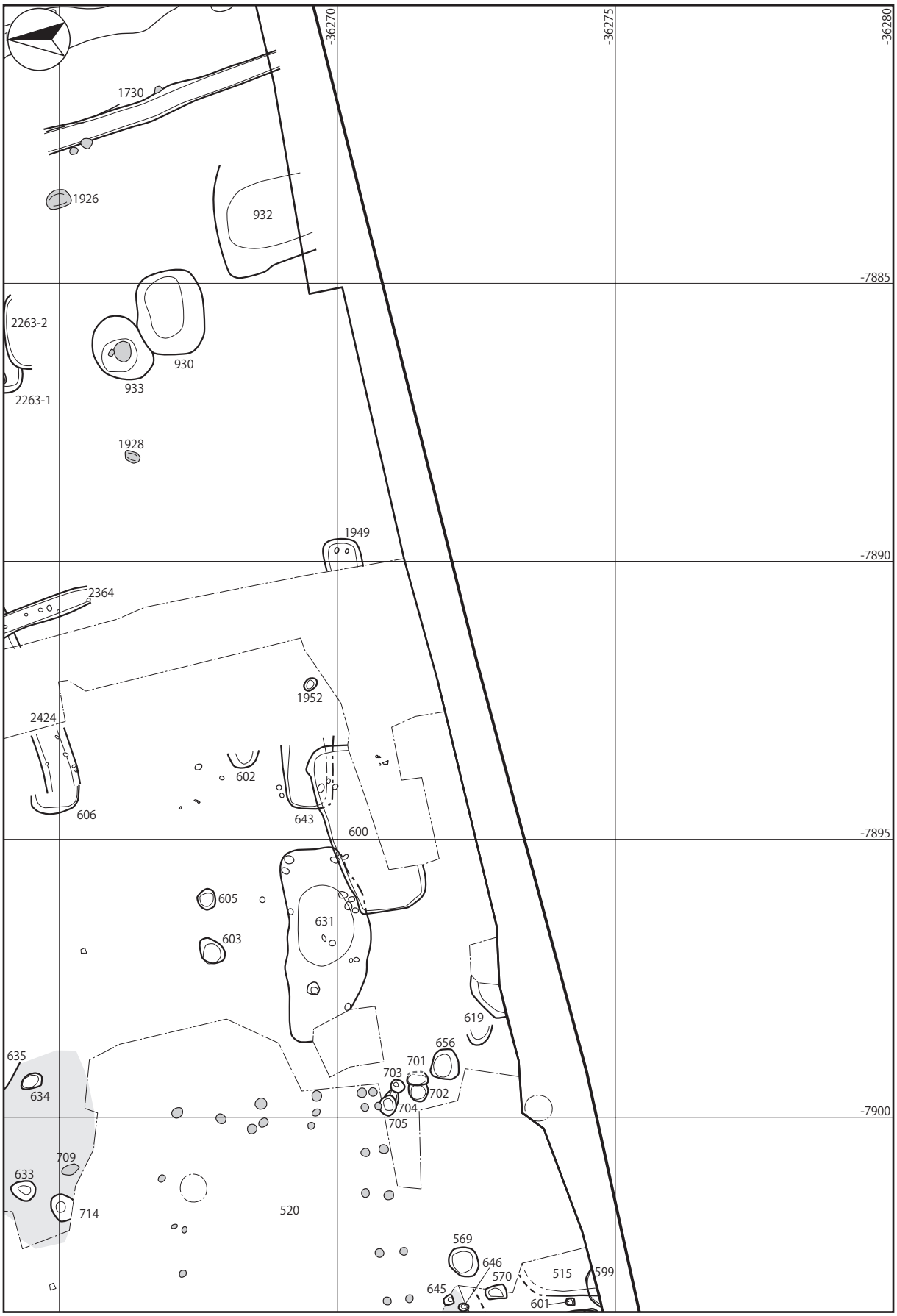
第 1-75 図　3-1 面割図⑤（1/100）



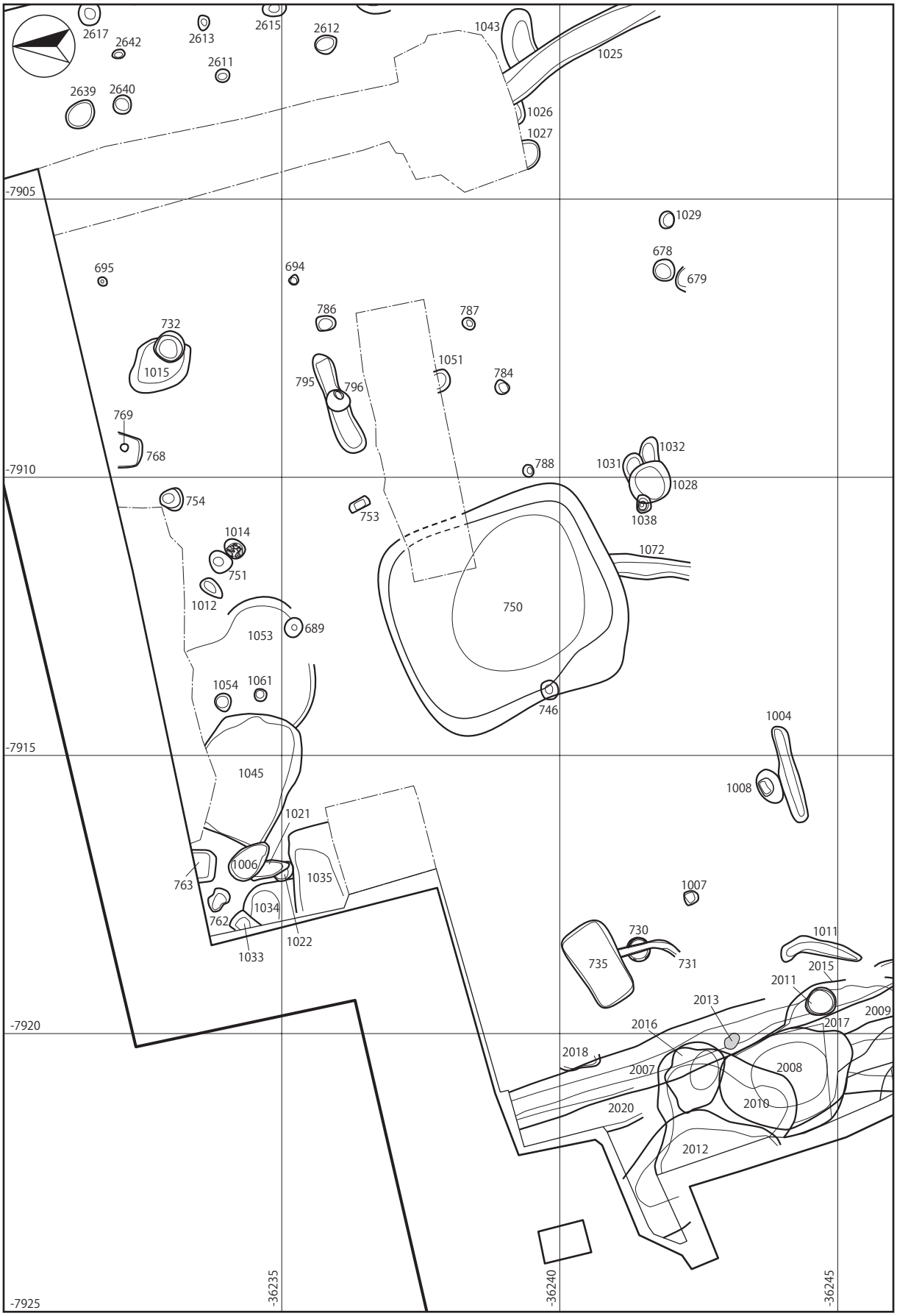
第 1-76 図　3-1 面割図⑥（1/100）



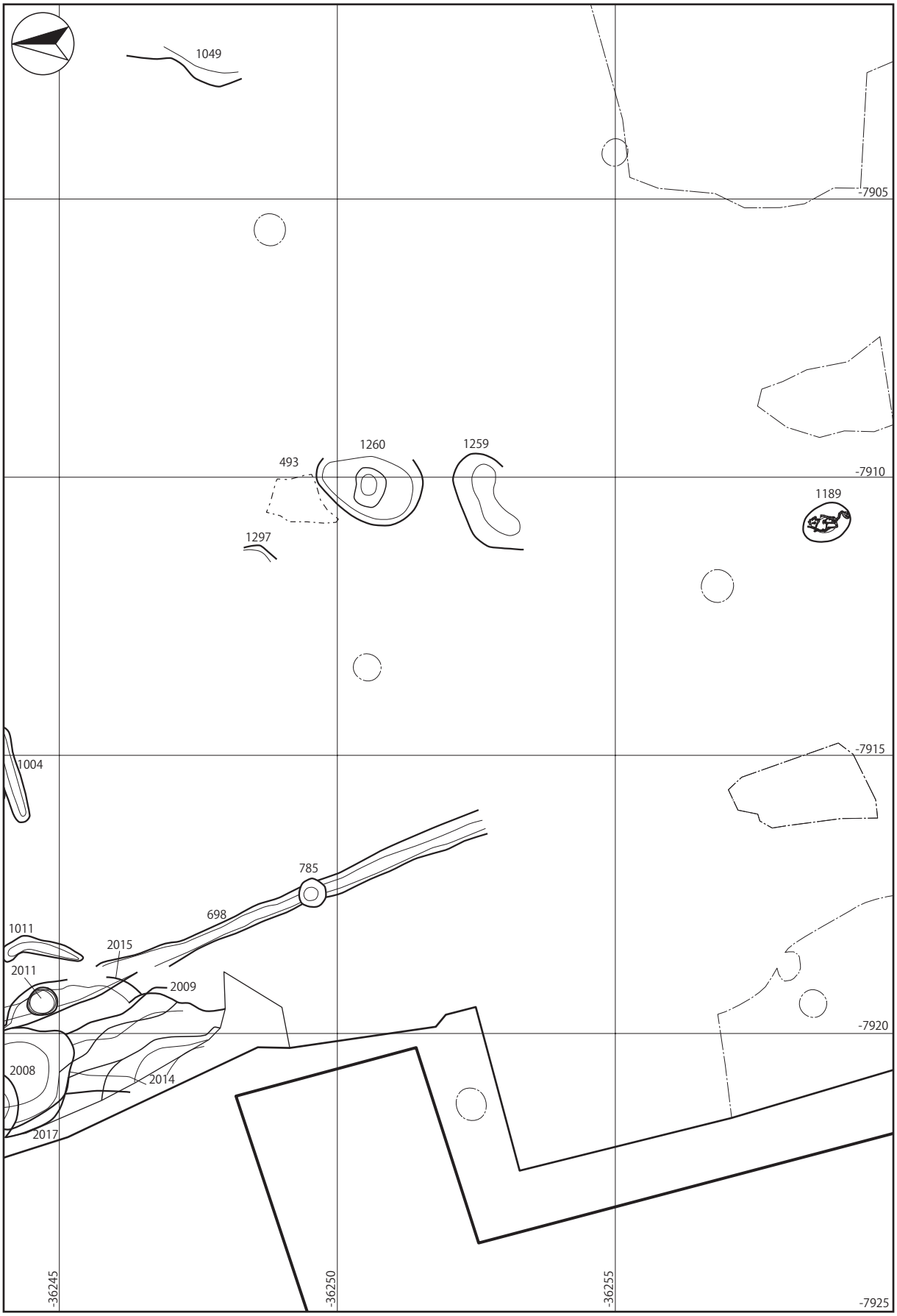
第 1-77 図　3-1 面割図⑦（1/100）



第 1-78 図　3-1 面割図⑧（1/100）



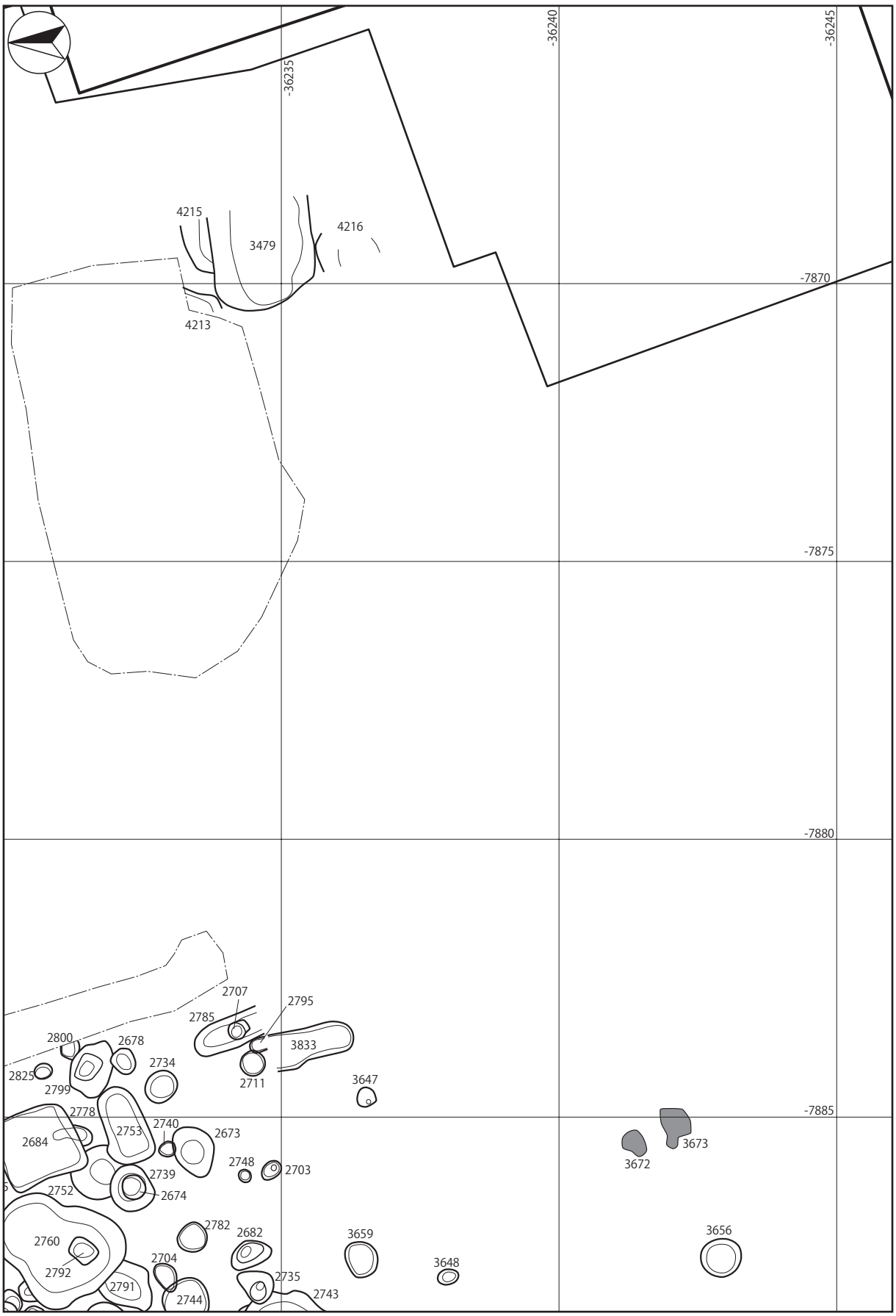
第 1-79 図　3-1 面割図⑨（1/100）



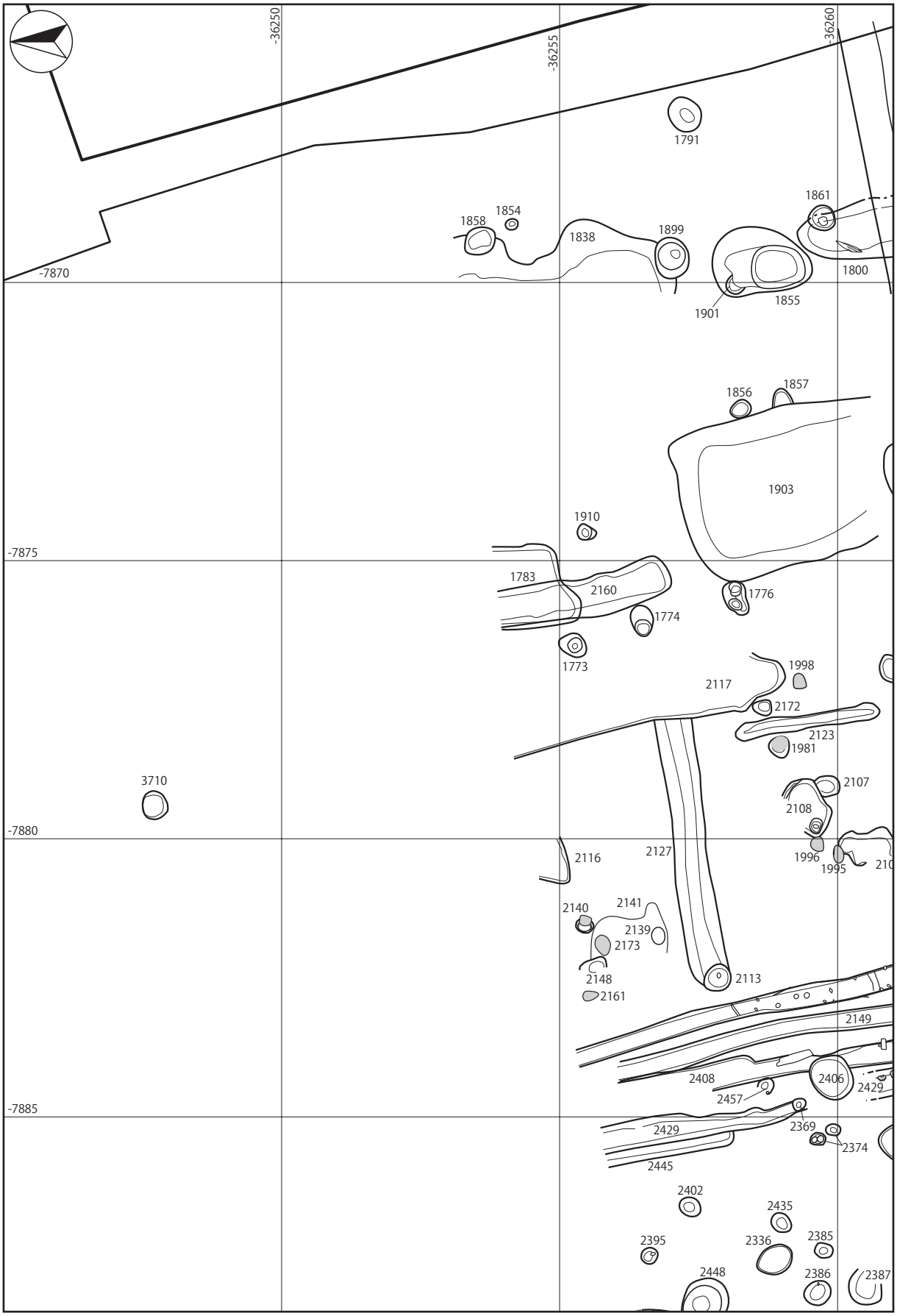
第 1-80 図　3-1 面割図⑩（1/100）



第 1-81 図　3-2 面全体図（1/250）



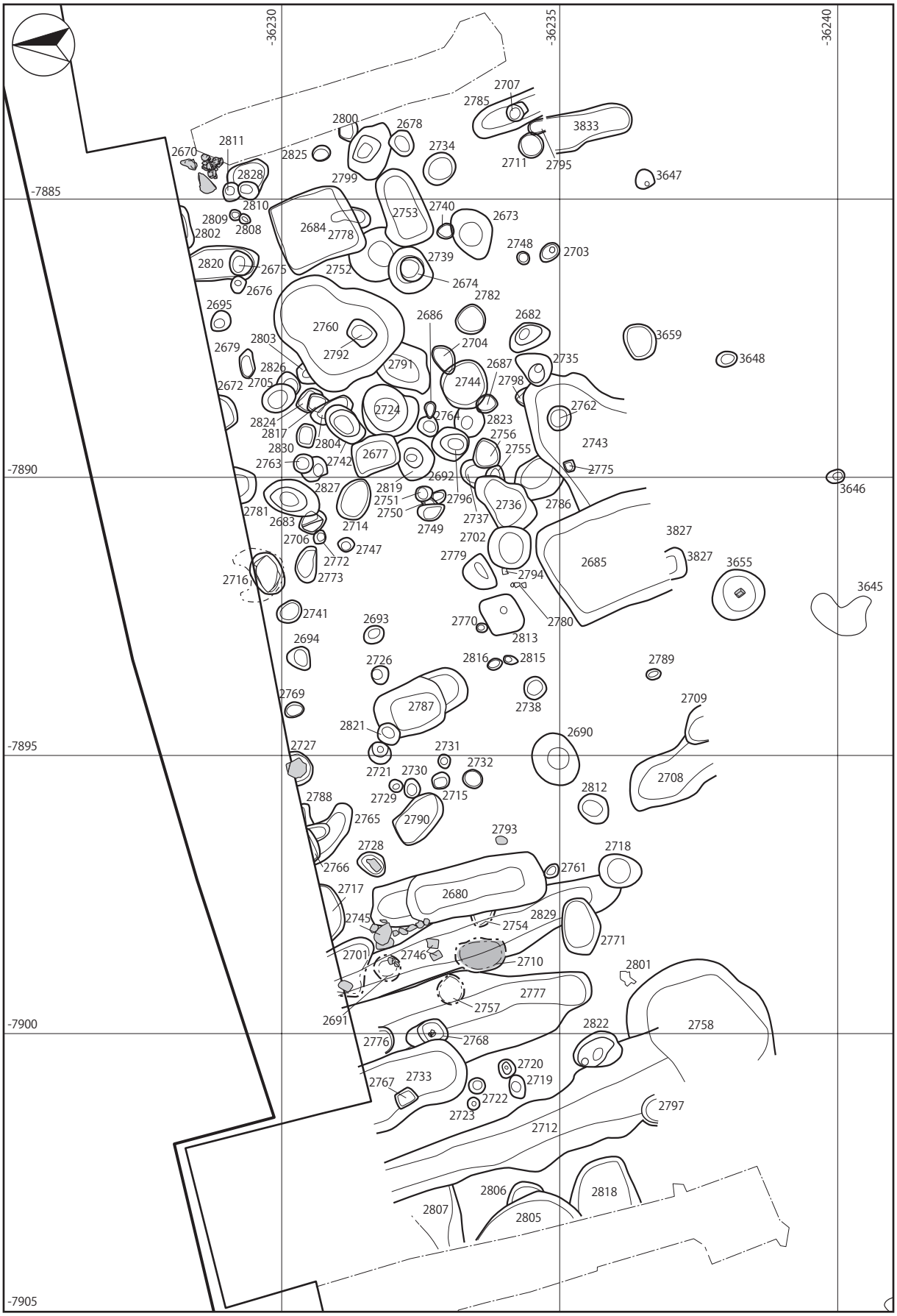
第 1-82 図　3-2 面割図①（1/100）



第 1-83 図　3-2 面割図②（1/100）



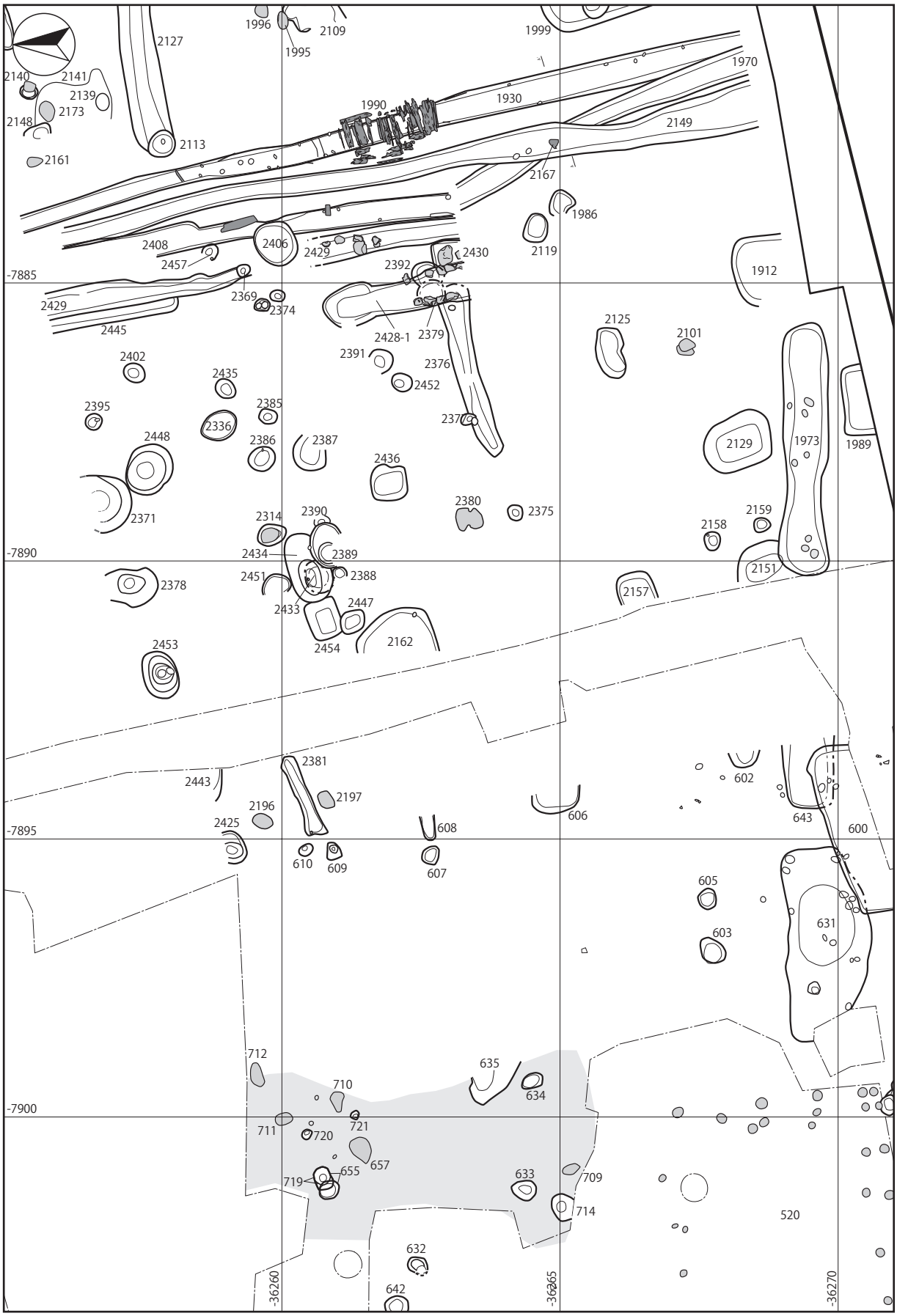
第 1-84 図　3-2 面割図③（1/100）



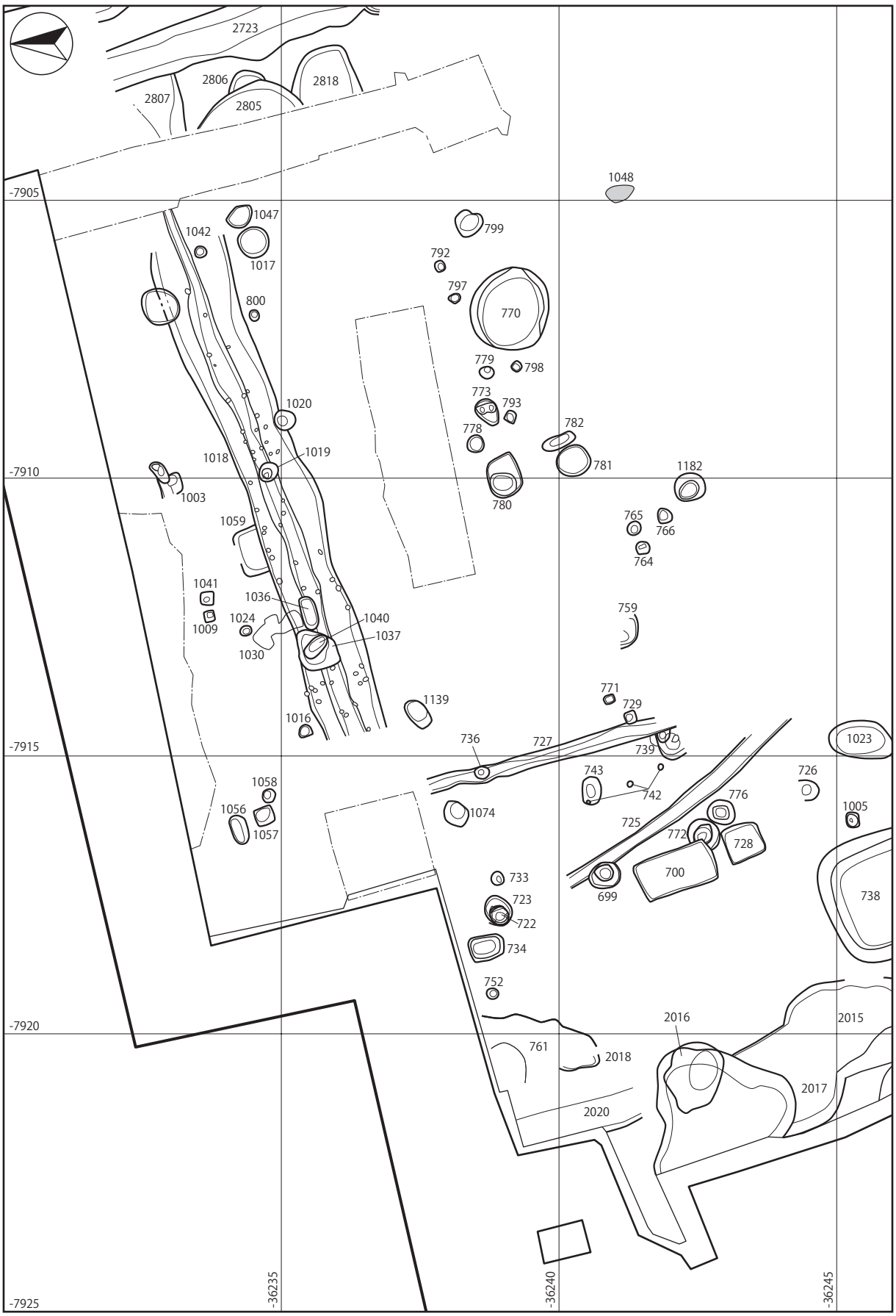
第 1-85 図　3-2 面割図④（1/100）



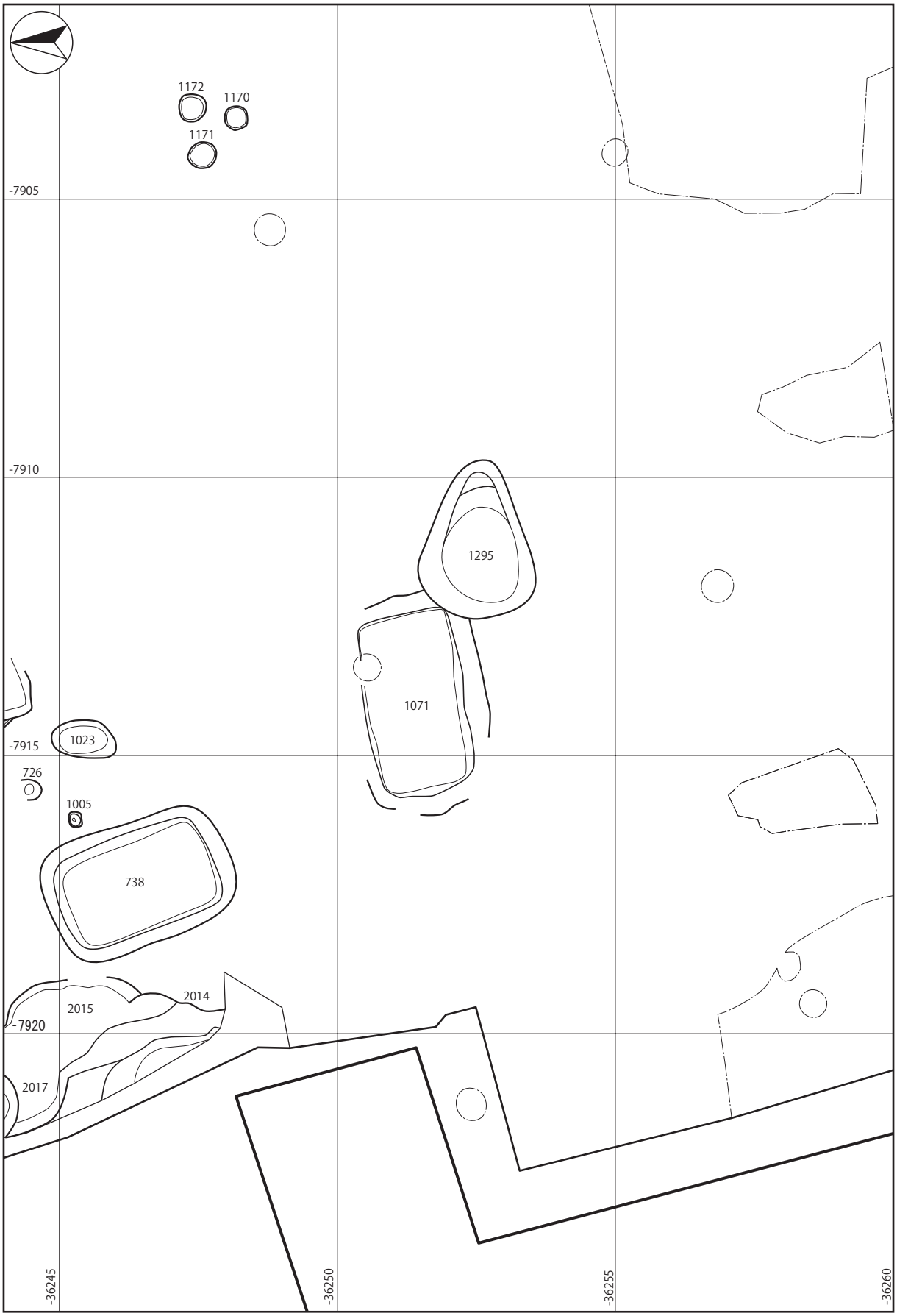
第 1-86 図　3-2 面割図⑤（1/100）



第 1-87 図　3-2 面割図⑥（1/100）



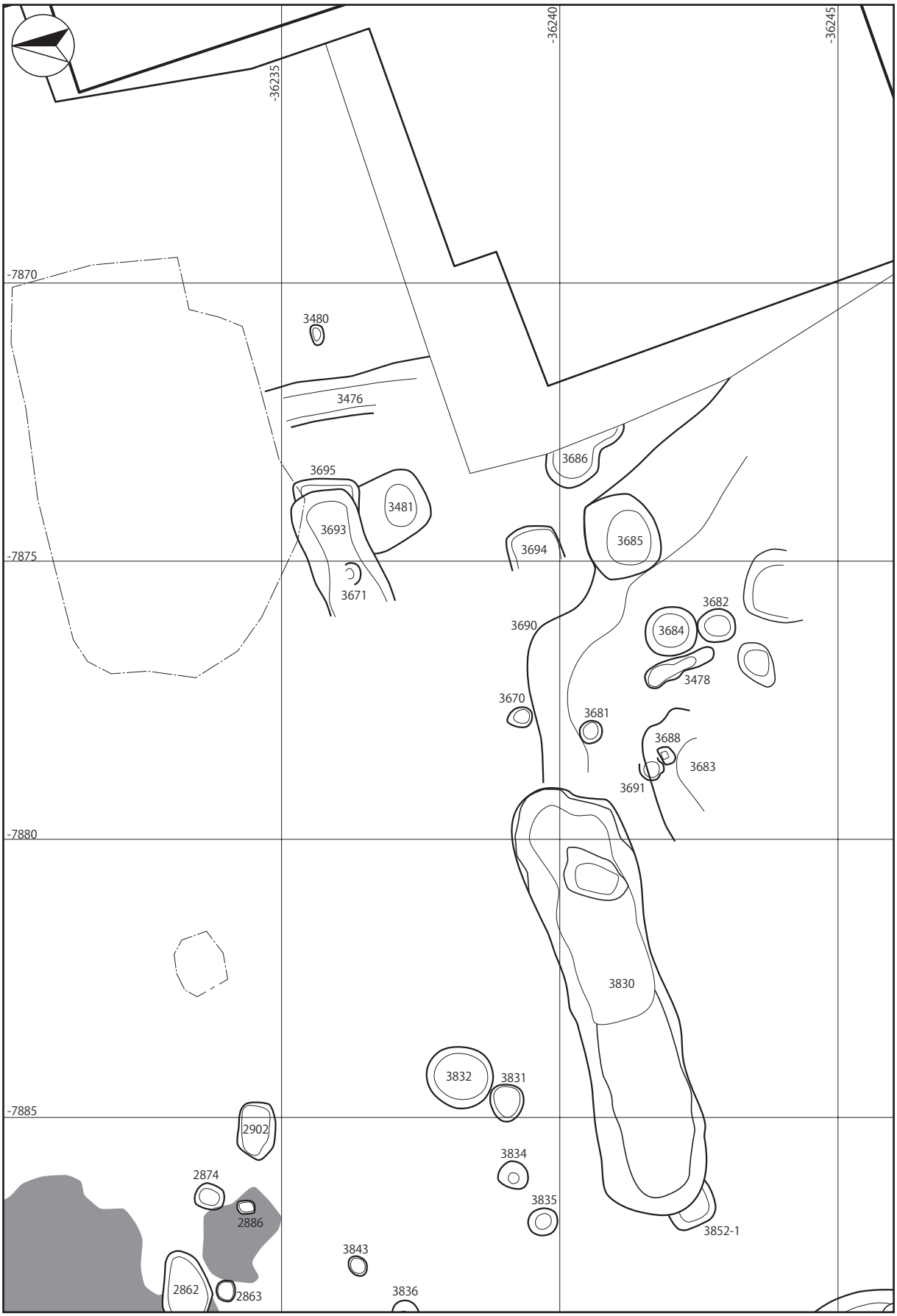
第 1-88 図　3-2 面割図⑦（1/100）



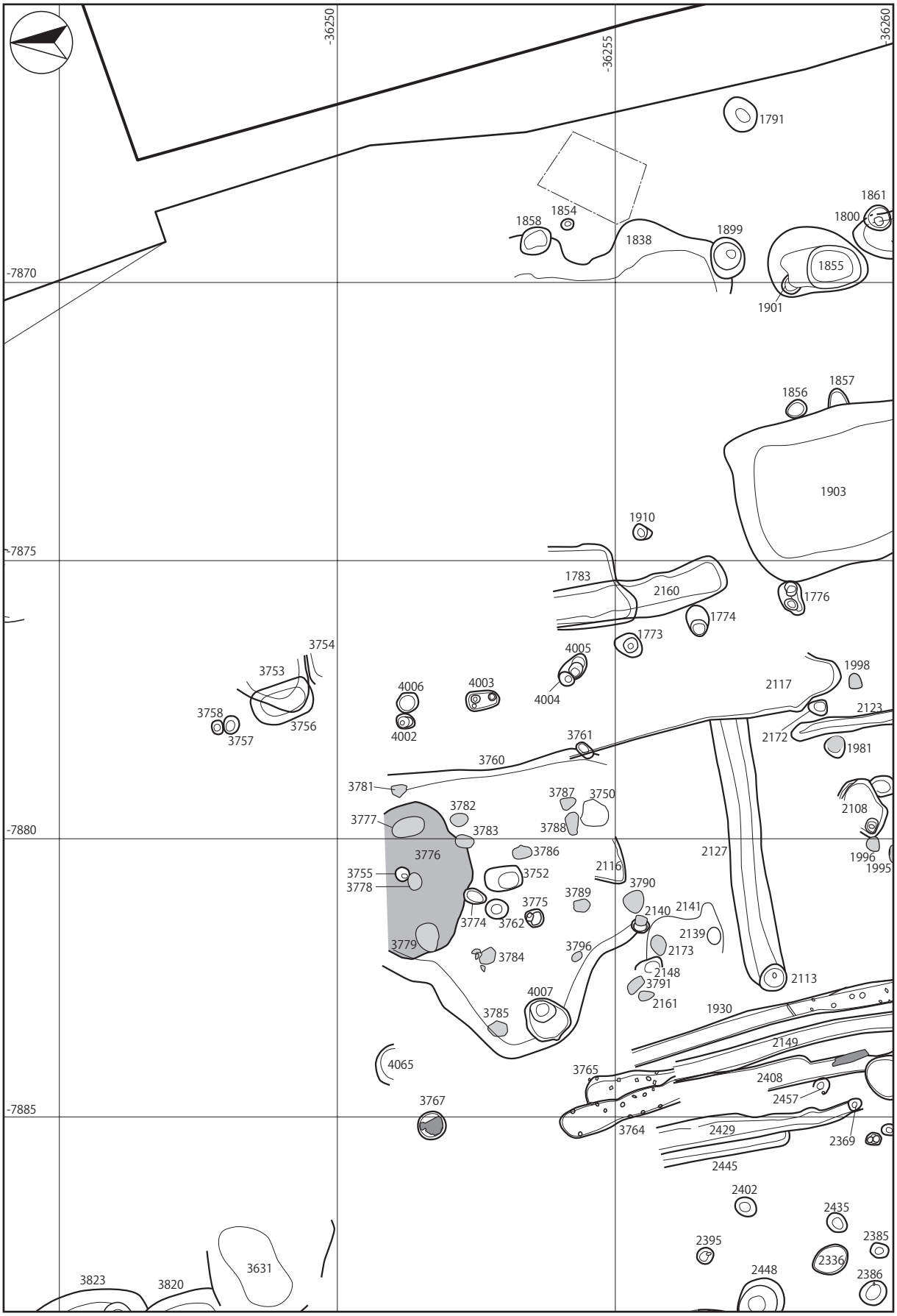
第 1-89 図　3-2 面割図⑧（1/100）



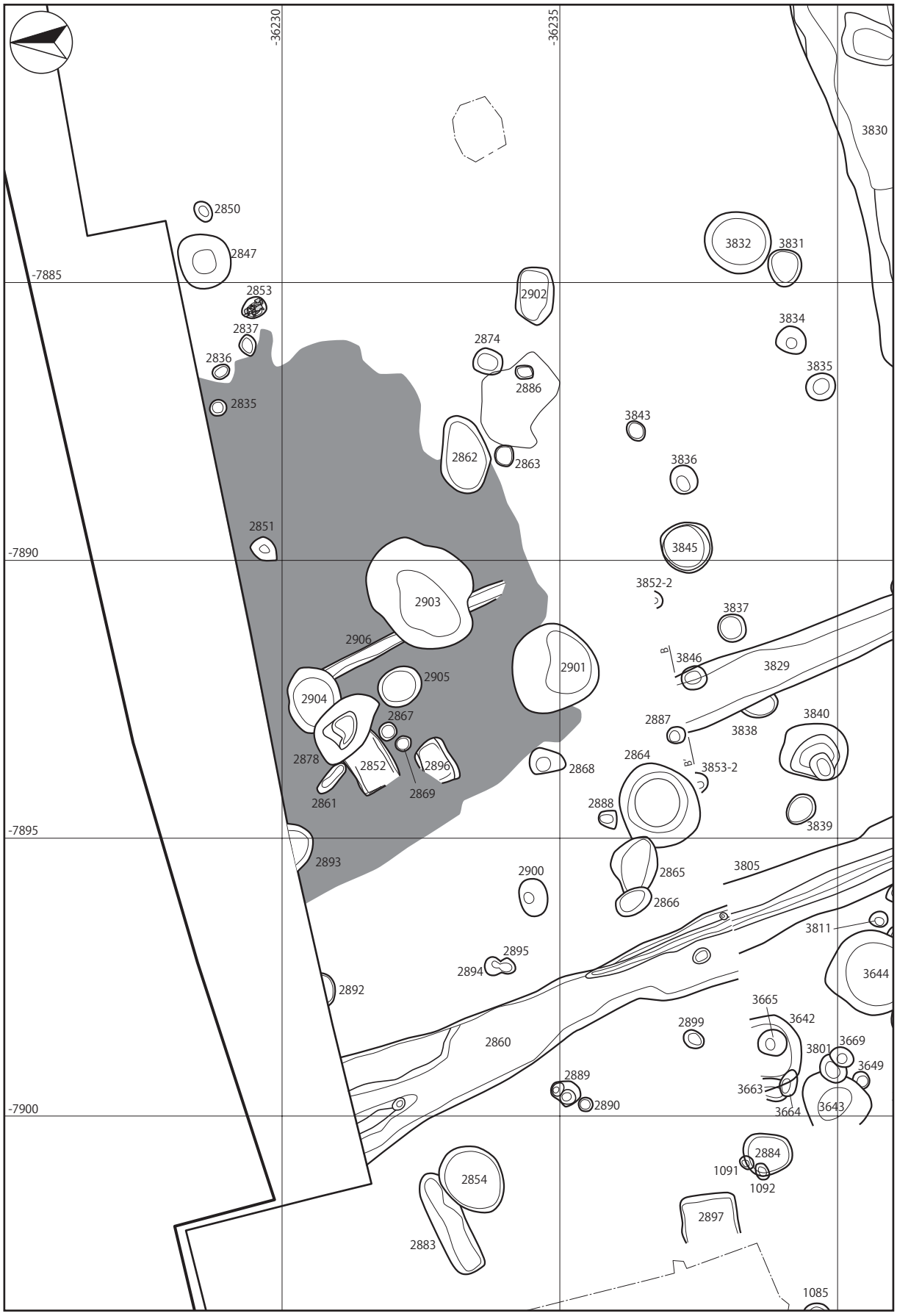
第 1-90 図　3-3 面全体図（1/250）



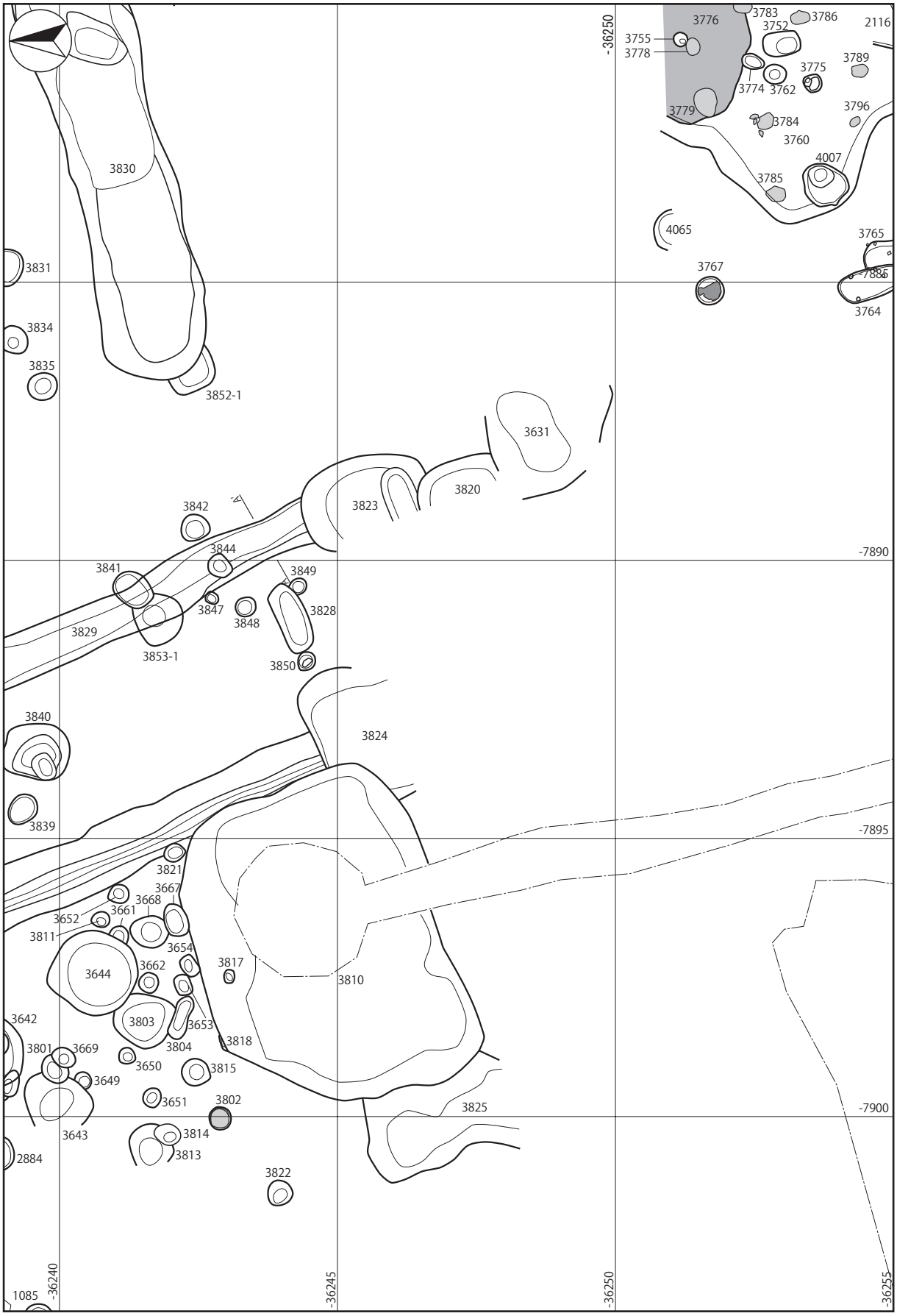
第 1-91 図　3-3 面割図①（1/100）



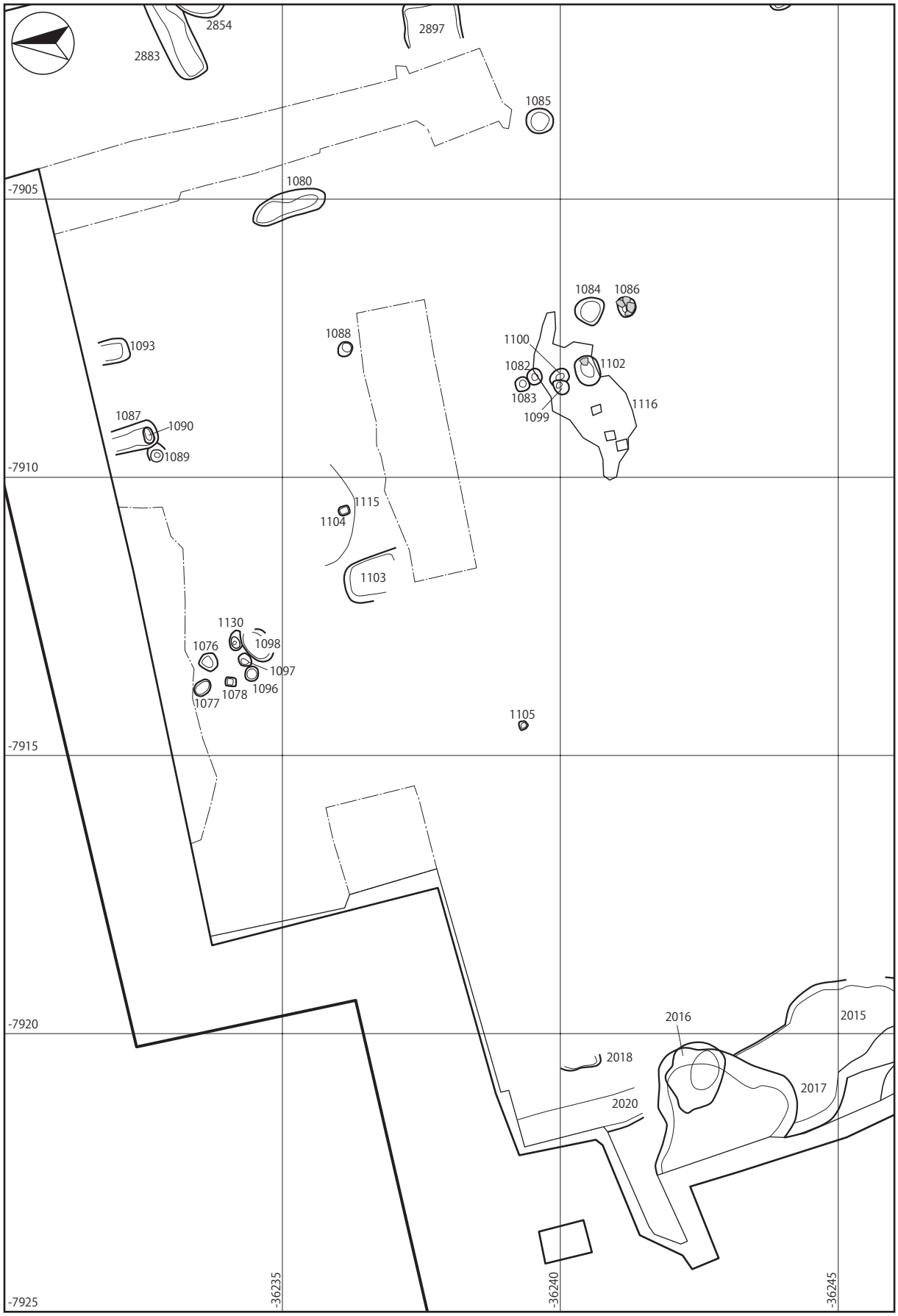
第 1-92 図　3-3 面割図②（1/100）



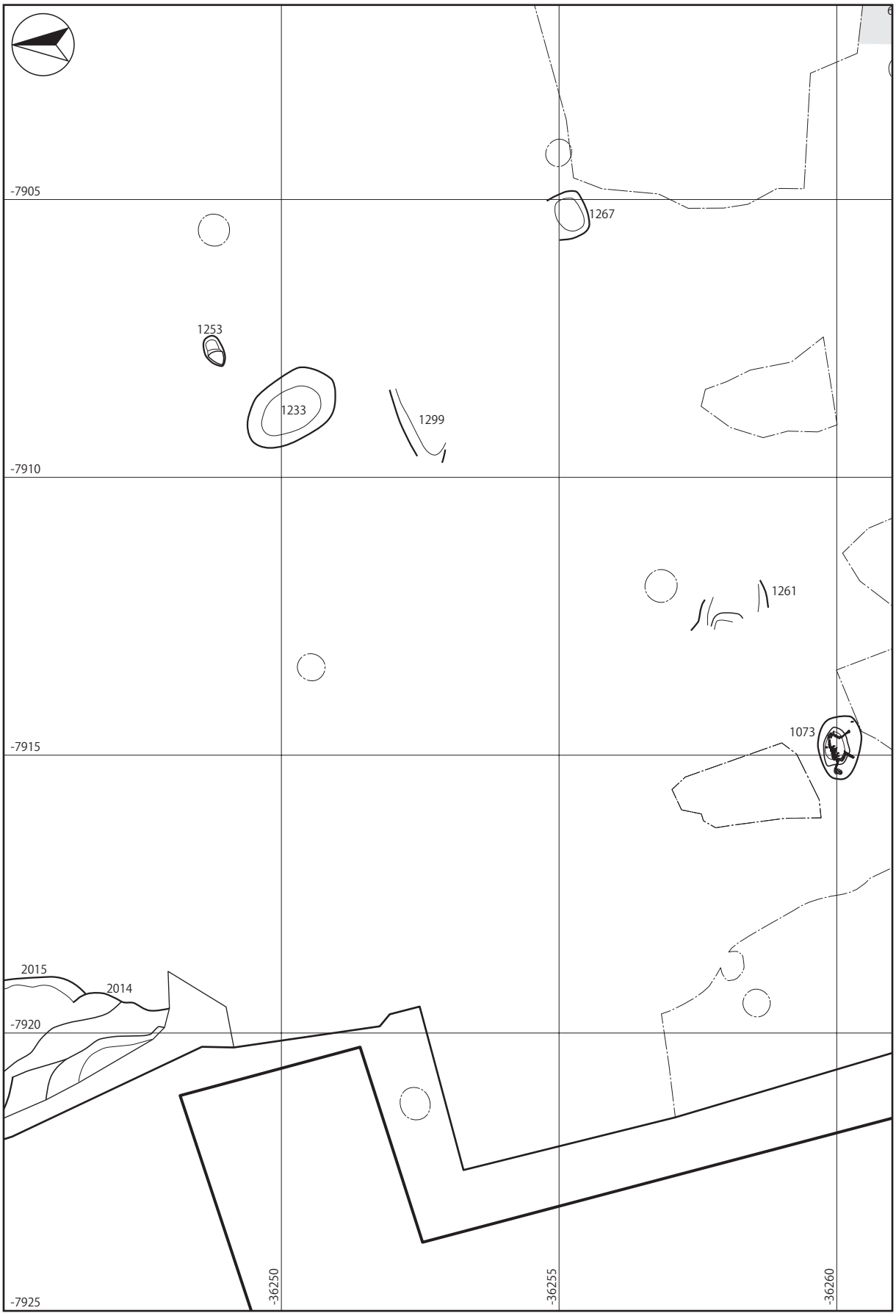
第 1-93 図　3-3 面割図③（1/100）



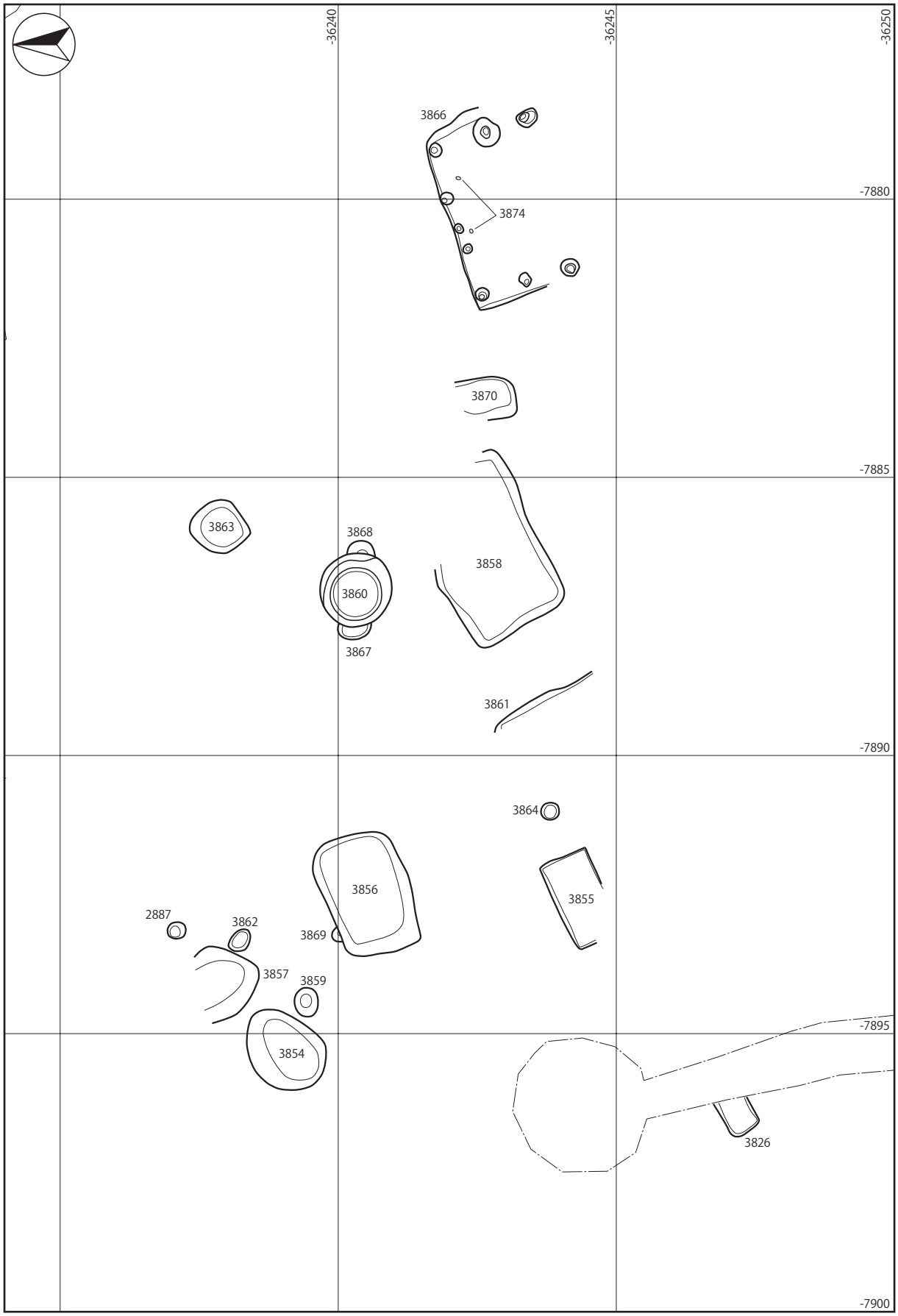
第 1-94 図　3-3 面割図④（1/100）



第 1-95 図　3-3 面割図⑤（1/100）



第 1-96 図　3-3 面割図⑥（1/100）



第 1-97 図　3-4 面割図①（1/100）

軸で 4.77m を測る。幅約 0.8 ～ 1 mの溝をロの字状に掘った後､3 ～ 4 個の人頭大の円礫や扁平な礫、またはそれよりも小ぶりな礫を多く固めて 1m 間隔で根石としたと考えられるが（図版 3-53-4)、配列が乱れたり礫が破砕したりしているため、建築当時の状況は明確ではない。礫の上には瓦片が密に敷き詰められ（図版 3-53-5)、さらにその上に緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）を主体とする間知石が 1 段積まれていた（図版 3-53-3)。間知石は東壁の南半と北壁中央と北西角にはなく、西壁中央は配列が乱れた状態であった。また、南壁・北壁とも西半の間知石が沈み、配列が歪んでいる（巻頭図版 12)。この箇所は 464 号下で検出された大型土坑 750 号（3-1 面）と重複しているため、土蔵の重みに 750 号覆土が耐えられず沈んだものと考えられる。間知石の上には部分的に厚さ 10 ～ 20cm 程度の漆喰が壁状に残存し、中央の土間部分には漆喰の塊が集中していた（図版 3-53-3)。おそらく、壁体の漆喰を破壊後に廃棄したものと考えられる。掘方の壁は第 1-137 図セクション A-A'・B-B' のいずれも明確ではなく、南壁の間知石外側でわずかに立ち上がりが確認された（第 1-137 図 7・8・10 層)。間知石及び壁体の内側はしまり･粘性とも極強いにぶい黄褐色土(同図 4 層･東側のみで検出)、褐色土（同図 5 層)、褐灰色土（同図 6 層）が堆積している。その上面には、 1 面の下に堆積する盛土層に似るオリーブ褐色土が落ち込んでおり（同図 3 層)、この土層は間知石の外側まで広がっていることから、土蔵壁体が壊された後に盛土層が上面を覆ったものと考えられる。間知石及び壁体の外側には、土蔵北側にしまり・粘性とも極強い黄褐色土（同図 19 層)、土蔵南側には同様にしまり・粘性とも極強い黄褐色土（同図 17 層)、灰黄褐色土（同図 18 層）が堆積する。18 層は間知石外面に接し土蔵掘方の上面を覆う薄い堆積層で、土蔵構築時に間知石外側を固めた土層の可能性がある。土蔵南側に堆積する 19 層は F-1 区中央の大型土坑群付近（489 号・500 号など）まで広がる 1 面盛土に相当する土層で、この土層が 489 号・500 号の上層に落ち込んでいることから、464 号は 2 面の遺構の中でも一段階新しい可能性がある。出土遺物は掘方内を中心として 2,690 点・215,470.6g で細片が多く、18 世紀第 4 四半期を主体とする。

【土坑】

470 号（第 1-129・130 図、図版 3-55-1・2、3-56-1・2・第 3-16 表）

470 号は F-1 区南西部で検出された平面形が方形を呈する大型廃棄土坑で、遺構の規模は長軸 7.30m、短軸 6.10m を測る。470 号の深さは検出面から 2.78m あり、底面は「東京層群第一砂質土層」の一部にあたる砂層に達している。470 号の底面は平滑に掘られており、壁面の形状は、下部はほぼ垂直に立ち上がり、上部は緩やかに開くものと考えられる。西側壁面では一部で壁面の崩落が観察された。470 号は F-1 区南西部の F-1 区から南側の F-2 区へと傾斜する斜面の落ち際に位置しており、大型の廃棄土坑である 1166 号に連なる。

覆土は、南北方向の SPA-A' では 61 層、SPB-B' では 34 層に分かれるが、層の類似性からⅠ～Ⅶ層および木端層①・②に分けて調査を行い、遺物もⅠ～Ⅶ層および木端層①・②を単位として取り上げている。土層との対応関係は第 1-130 図中段に示した。Ⅰ層は最上部に堆積する土層で、 1 層から 23 層がそれにあたる。Ⅰ層はロームや砂、粘土などを含む暗褐色の砂質土を中心とする層で、北側の遺構外へと堆積が続いており、 1 面盛土層の一部と考えられる。Ⅱ層は 24 層と 25 層が該当する。焼土粒や炭化物粒を含む層で､特に 24 層は遺物を多く含んでいた。Ⅲ層は 26 層から 32 層が該当し、砂を含む砂質土が主体を占める。Ⅳ層は 33 層から 35 層、43 層、46 層が該当する。Ⅳ層も砂を含む

砂質土が主体となっている。Ⅴ層は 36 層、38 層、44 層、45 層、47 層、48 層が該当する。Ⅵ層は 48 層、50 層から 52 層が該当する。Ⅵ層は炭化物粒などを含む層で遺物を多く含んでいた。54 層が木端層①、55 層・56 層が木端層②にあたる。いずれの層も木端を多く含むほか、56 層は貝片を多く含んでいた。Ⅶ層は 57 層から 59 層が該当する。Ⅶ層上部の 57 層は木端層②に接する層で、木端を含む。58 層と 59 層は砂を多く含む層である。遺物が多く出土したのはⅡ層、Ⅵ層、木端層①、木端層②で、Ⅱ層とⅥ層の間にはⅢ層からⅤ層までの砂質土を主体とする遺物をあまり含まない層が堆積する。Ⅱ層として取り上げた遺物は器形のわかる大きな破片が多く見られたが、その大半がⅢ層の上面に散布されたかのように出土していた（図版 3-55-2）。Ⅵ層、木端層①、木端層②はⅢ層からⅤ層にパックされたような状態となっており、遺物はⅡ層とⅥ層との間で時期的な断絶が見られた。廃棄土坑に遺物を廃棄し、一端埋戻したものの、落ち込みとして残存しており、その落ち込みを再び廃棄土坑として再利用したものと考えられる。出土遺物の総量は 24,171 点、909,916.0g で遺物多量、遺存状態も良好である。墨書資料が多く、500 号、673、698、1049、1186 号との遺構間接合が認められる。木端層からは、桶樽の側板・蓋底板や下駄を中心に曲物、漆器椀・膳などの木製品が出土しているが、量はさほど多くはない。また、Ⅴ層から安永 5 年（1776）の紀年銘を持つ瀬戸美濃産刷毛目碗（第 2-17 図 220）が出土している。出土した遺物から 470 号は 18 世紀第 4 四半期の遺構に位置づけられるが、遺物の時期からみてもⅡ層・Ⅲ層間には断絶があり、Ⅱ層以上は寛政 6 年（1794）火災後の整地造成層と一連の土層と考えられる。470 号と類似する遺構（1185 号）などに共通して、18 世紀 3 四半期に埋没が始まり、途中まで埋まった段階で寛政 6 年の火災が起こり、その後造成が行われる、といった経過を辿ると考えられる。

489 号・673 号・1065 号・1108 号（第 1-132 図、図版 3-54-1 ～ 5、第 3-16 表）

F-1 区南中央に位置する大型の土坑群である。F-2 区に向かう斜面地の上方に位置しており、旗本鳥居家の屋敷南境に近い場所にあたる。東西 2 つのグループに分けられ、東側は 489 号、西側は 500・666 号を中心とし、土層断面からは 500・666 号がより新しいと判断されるが（第 1-133 図断面模式図）、覆土中位から下位にかけて部分的に新旧が逆転する層があり、さらに上層では両遺構にまたがる土層が確認されていることから、埋没はほぼ同時に進行したと考えられる。

東側の 489 号を中心とする一群は 673 号・1065 号・1108 号を加えた 4 基で構成されるが、それぞれが独立した土坑というよりも、複数回の掘り返しや拡張が行われた結果の最終形態と考えられる。また、南北断面（第 1-134 図）の堆積状況から、673 号・1065 号・1108 号が埋没した後、489 号が掘り返されたと想定される。重複が著しいためそれぞれの規模は不明だが、最も新しい 489 号で長軸 4.95m、短軸 4.15 m、深さ 2.09 mを測る。壁面は、南北方向は急角度で落ち込み、東西方向はそれに比べややなだらかである。底面は平坦ではなく皿状を呈するが、底面が締まりの弱い粘質土にあたるため、本来の形状を保っていない可能性もある。

489 号の覆土は大きく最上層・上層・中層・下層に分類され、最上層は 1 面盛土に類似するロームブロック・砂を多く含む褐灰土・黄褐色土・黒褐色土である（第 1-133 図 1 ～ 4 層）。上層も砂を多く含む黄褐色土を主体とし（第 1-133 図 5 ～ 14 層・24 層）、間に極薄い硬化面が複数認められる（第 1-133 図 10・10′・13 層）。この硬化面は土坑全面ではなくブロック状に認められるものである。中層は、最上層・上層に比べると締まりが弱い灰黄褐色土を主体とする（第 1-133 図 25 ～ 27 層）。中

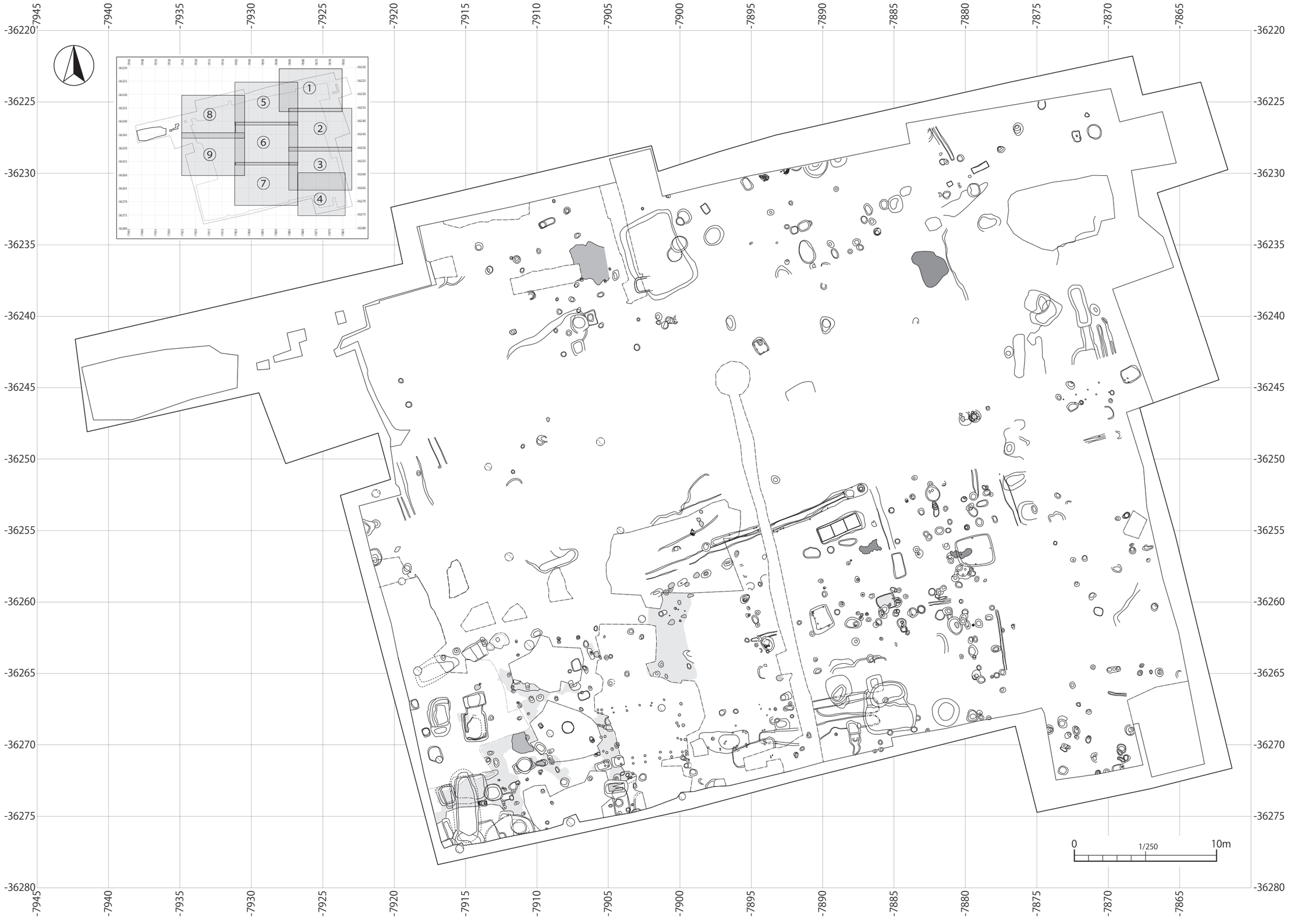
層には遺物が大量に含まれており、特に瓦片が多い。また、25 層には焼土がやや多く含まれる。底面上に堆積する下層は木片・遺物を大量に含み、粘性が極強い黒色土である（第 1-133 図 28 層）。覆土断面の観察から埋没過程を復元すると、①土坑底面に木片・遺物が多量に廃棄される（下層：芥溜として利用か）。→②瓦片を中心とする遺物が灰黄褐色土とともに廃棄される（中層）。→③砂を多く含む黄褐色土が堆積する。堆積が進行する間に、複数回硬化面が作られる。この時点で 489 号の埋没はほぼ完了する。（上層）→④ 1 面盛土形成時に土坑上面が覆われ、上層の一部が土坑内に落ち込む、となる。最上層・上層とも 489 号の南側にあたる斜面下方に向かってより厚く堆積していることから、F-1 区 2 面では斜面の上端は 1 面段階よりもより南に位置しており、これらの大型土坑群の上面と斜面落ち際に行われた盛土地業（ 1 面盛土）により、屋敷地の平坦面を南側に広げていたと考えられる。さらに、673 号・1065 号・1108 号のうち、1108 号の覆土断面を第 1-1134 図上段に示した。様々な色調を呈する土層がブロック状に堆積しており、全体的にしまりが弱い。

489 号出土遺物は 5,655 点・248,984.4g で、陶磁器類が多量に含まれる。遺存状態は比較的良好で、陶器皿を中心に墨書資料が目立つ。673 号出土遺物は 729 点・37,883.0g で、470 号との遺構間接合が複数認められる。1065 号出土遺物は 334 点・10,540.8g で、 2 面上面の小規模な整地痕跡から出土した遺物との接合が認められる。1108 号出土遺物は 1487 点・66,440.8g とやや多く、「明和九年（1772）」紀年銘の墨書を持つ瀬戸美濃産練鉢（第 2-31 図 470）が出土している。時期は 489 号・673 号・1065 号が 18 世紀第 4 四半期を主体とし、旗本成瀬家の拝領期に廃棄された遺物群と考えられるが、1108 号のみ 19 世紀第 1 四半期を主体とする。調査所見では 1108 号よりも 489 号の方が新しいと判断され遺物時期と逆転するが、一方で先述の紀年銘資料は 18 世紀第 4 四半期で他の遺構の遺物時期と一致していることから、1108 号は旗本鳥居家の拝領期に部分的に掘り返され、遺物が廃棄されたと考えられる。

500・666 号・737 号・777 号・1066 号・1070 号・1174 号・1184 号・1186 号・1194 号・1223 号（第 1-132 図、図版 3-54-1 ～ 5、第 3-16 表）

F-1 区南中央に位置する大型土坑群のうち、西側は 500・666 号・737 号・777 号・1066 号・1070 号・1174 号・1184 号・1186 号・1194 号・1223 号の 10 基である。489 号を中心とする一群同様、複数回の掘り返しや拡張が行われた結果の最終形態と考えられる。方形の土坑群 737 号・777 号・1066 号・1070 号・1174 号・1184 号・1186 号・1194 号・1223 号の上に、不整楕円形を呈する大型土坑 500・666 号が掘り込まれており、489 号との新旧関係は前述のとおり 500・666 号が新しいが、埋没は同時に進行したと考えられる。重複が著しくそれぞれの規模は不明だが、最も新しい 500・666 号遺構は長軸 8.15m、短軸 5.51m、深さ 2.32m を測る。489 号同様、南北方向は急角度で落ち込み、東西方向はそれに比べややなだらかである。

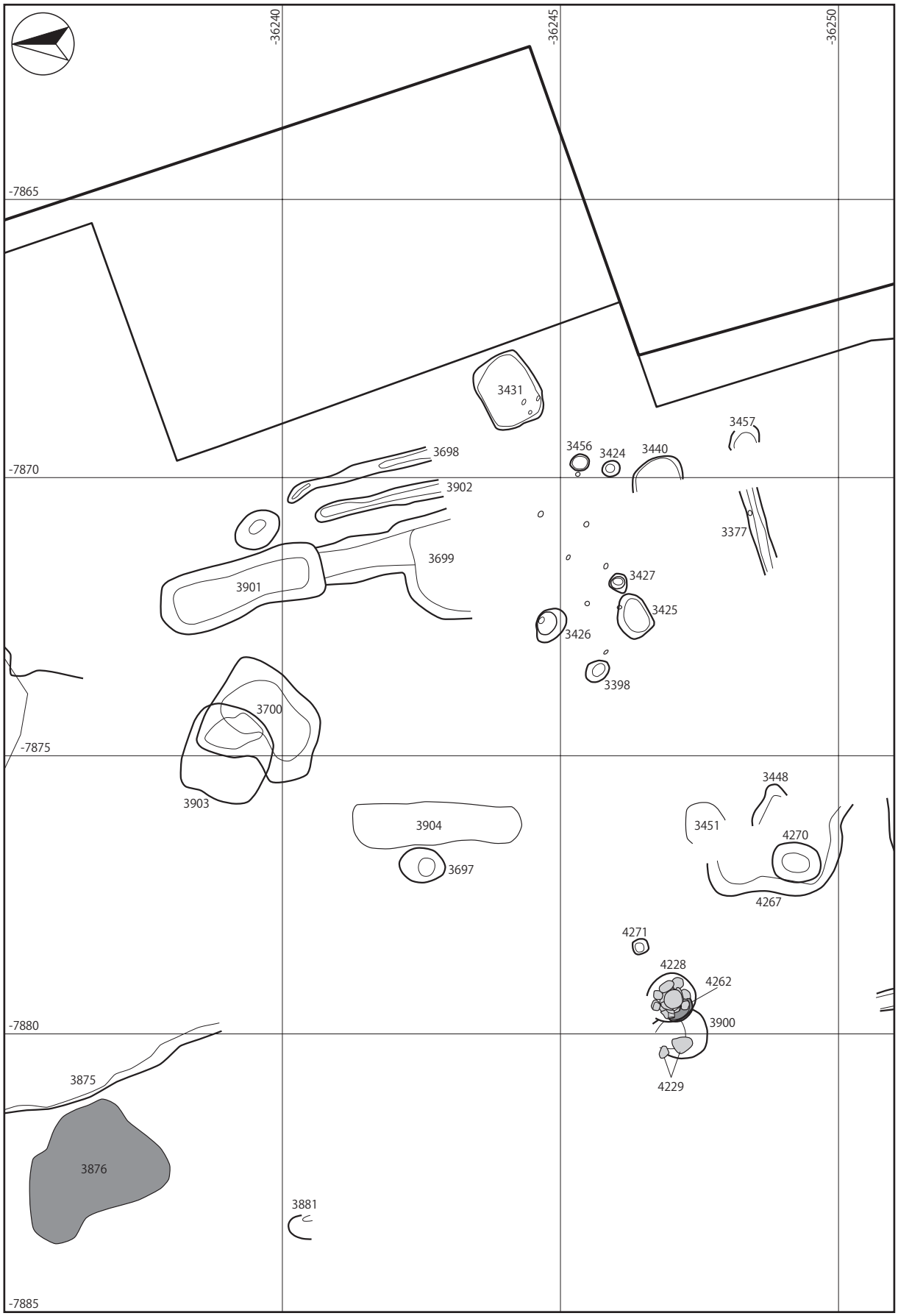
500・666 号の覆土は、上層（第 1-134 図 1 ～ 4 層）・下層（同図 6 ～ 14 層）に分けられ、上層と下層の間に薄い砂層（同図 5 層）が堆積する。上層は 489 号の上層、すなわち 1 面盛土に対応する土層で、しまりのある黄褐色土を主体とする。上層直下の薄い砂層は黄褐色砂と褐灰色土を主体とし、著しく硬化している。この砂層以下の下層中にも薄い硬化面が認められ（同図 7 層・13 層）、489 号上層に見られた部分的な硬化面同様、500・666 号でも埋没過程で硬化面が作られたと考えられる。硬化面の下は褐灰色粘質土層を主体とし、木片を多く含む黒褐色土（同図 9 層）や黄灰色粘土層（同図 11 層）



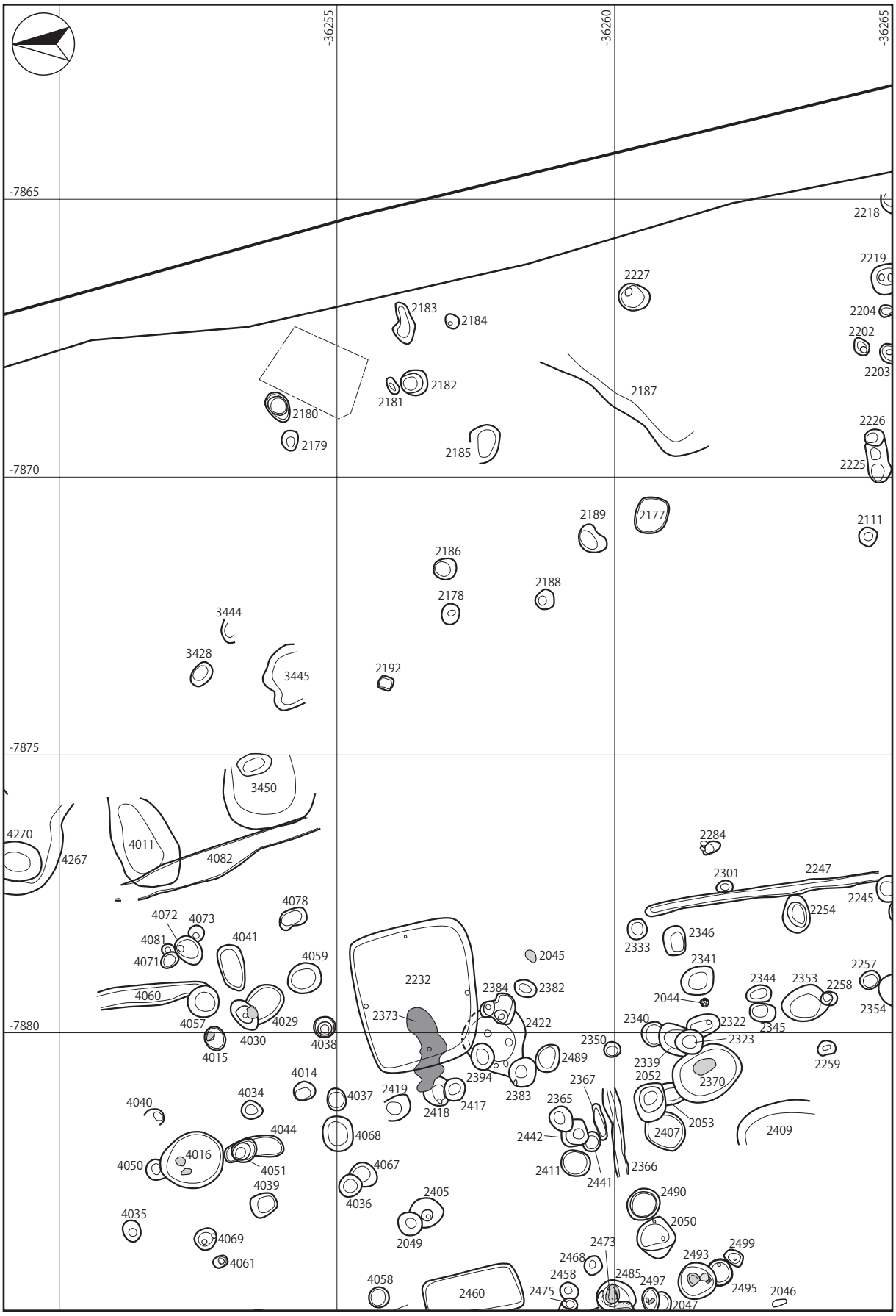
第 1-98 図　４面全体図（1/250）



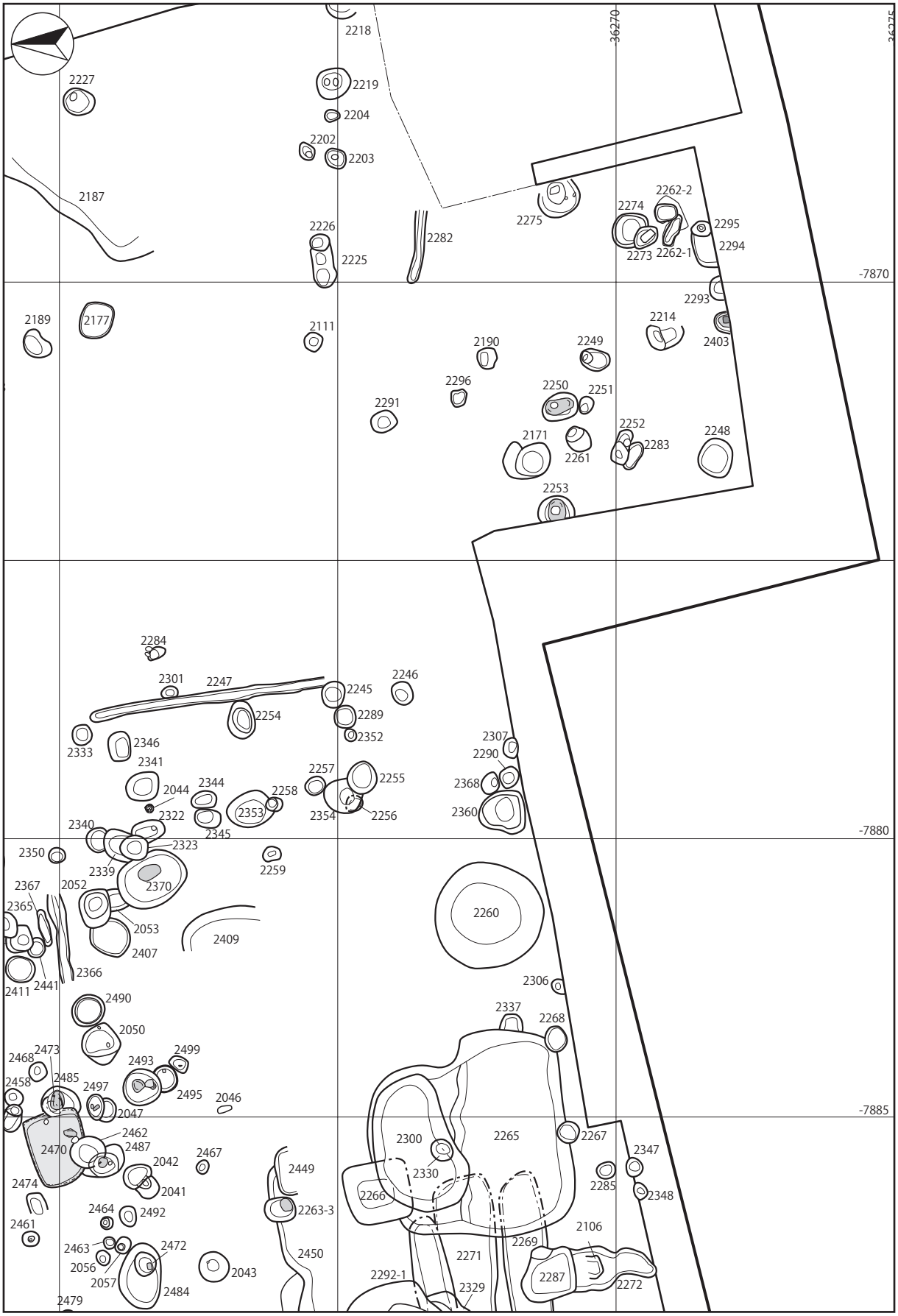
第 1-99 図　4 面割図①（1/100）



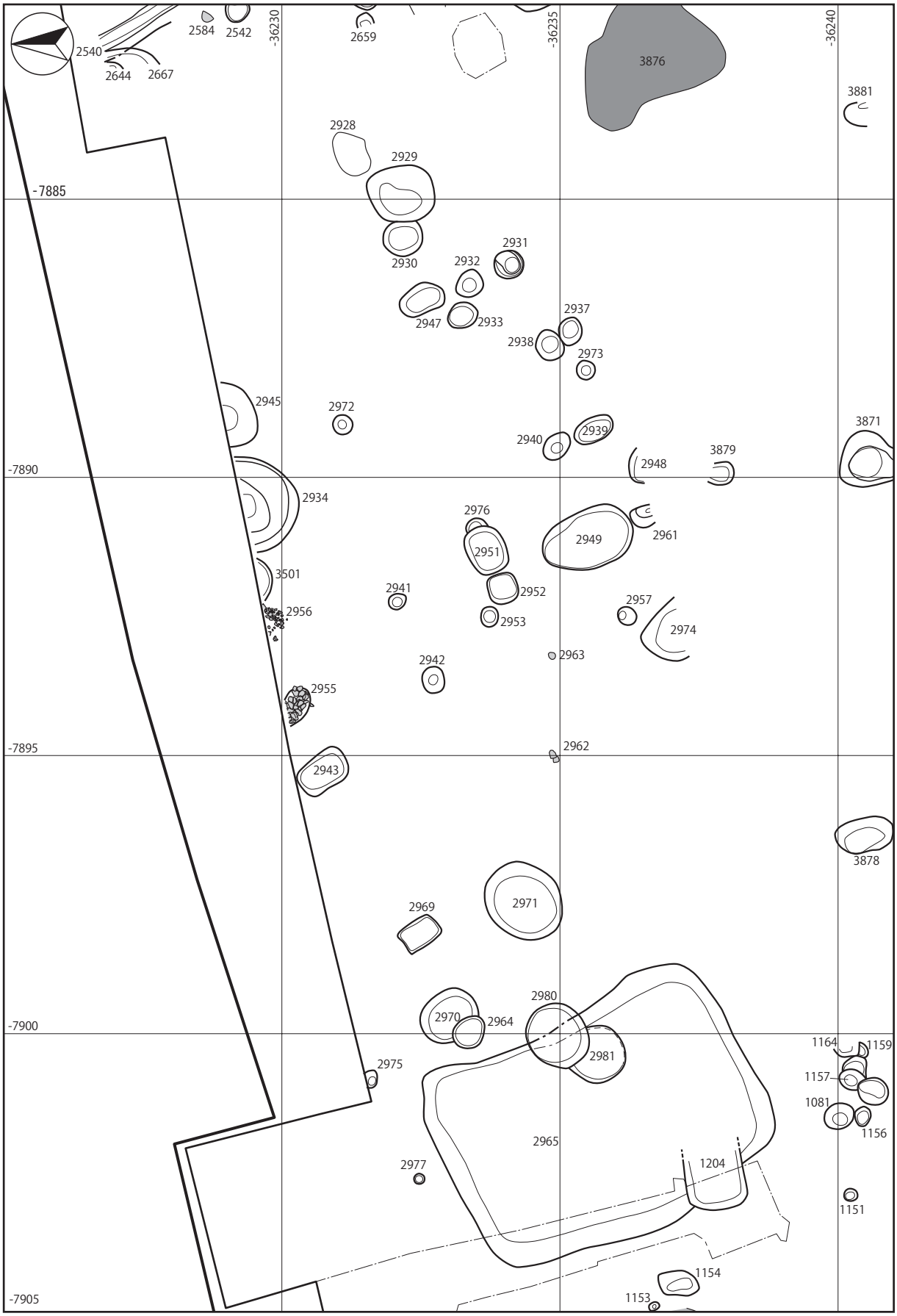
第 1-100 図　4 面割図②（1/100）



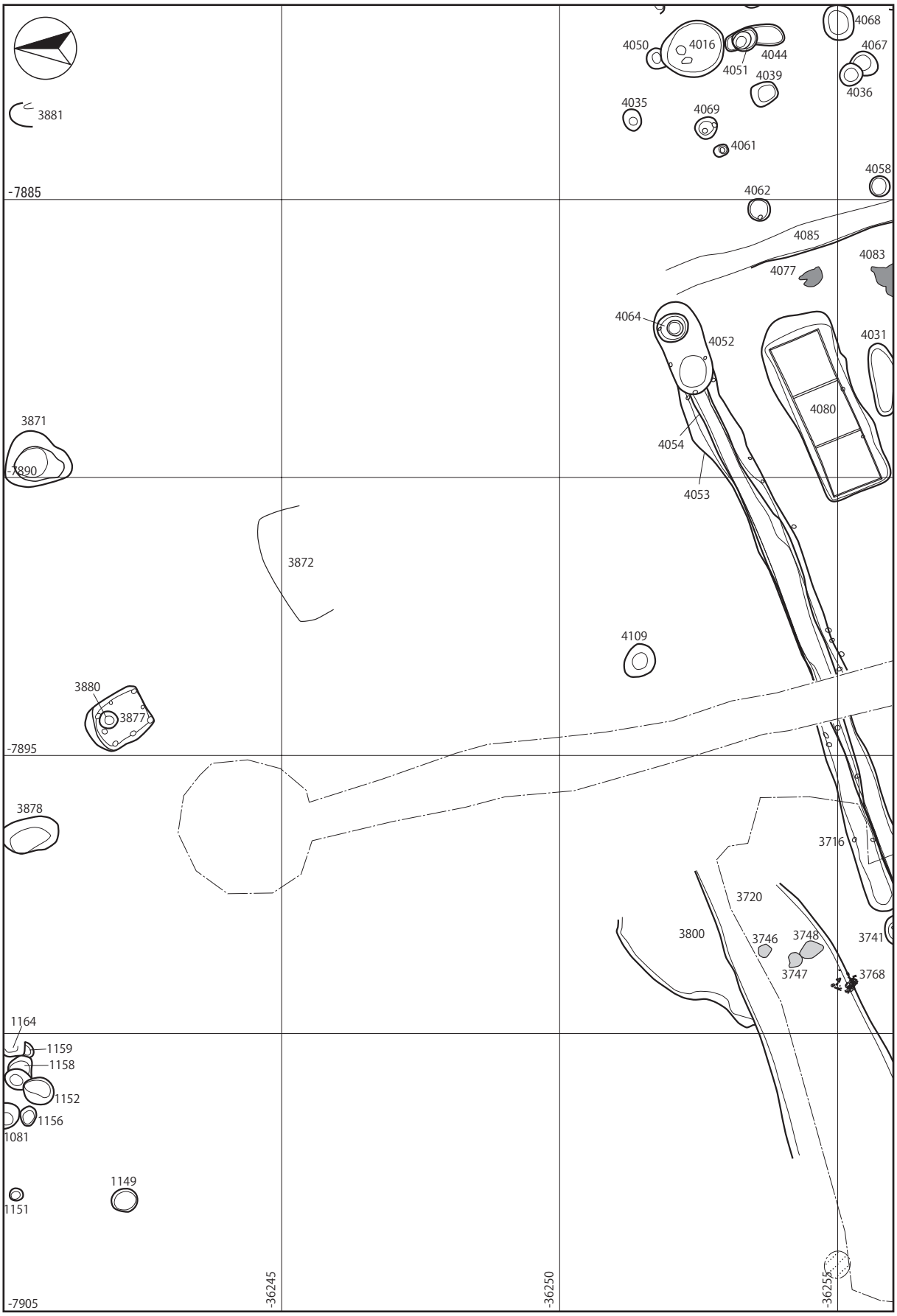
第 1-101 図　4 面割図③（1/100）



第 1-102 図　4 面割図④（1/100）



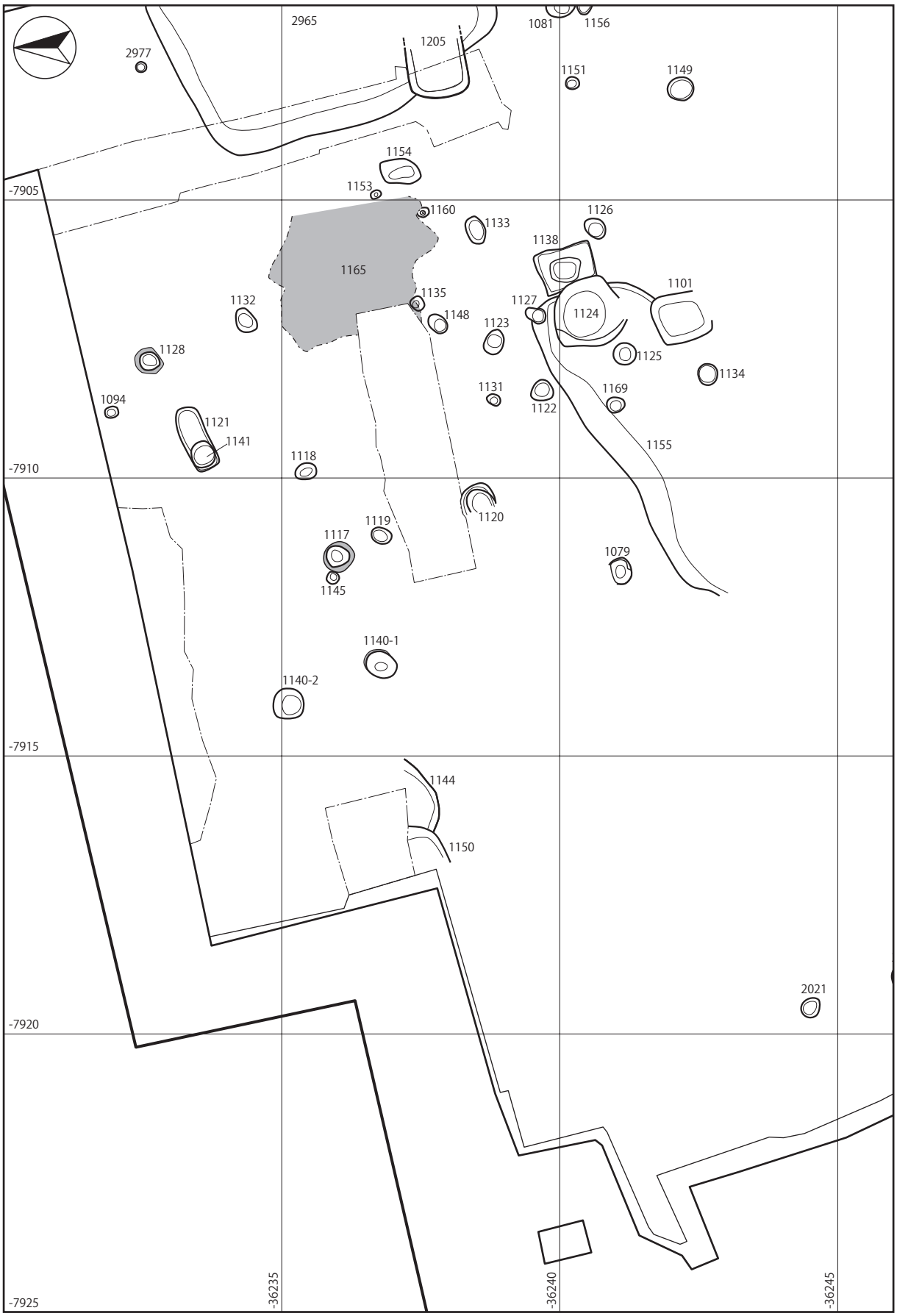
第 1-103 図　4 面割図⑤（1/100）



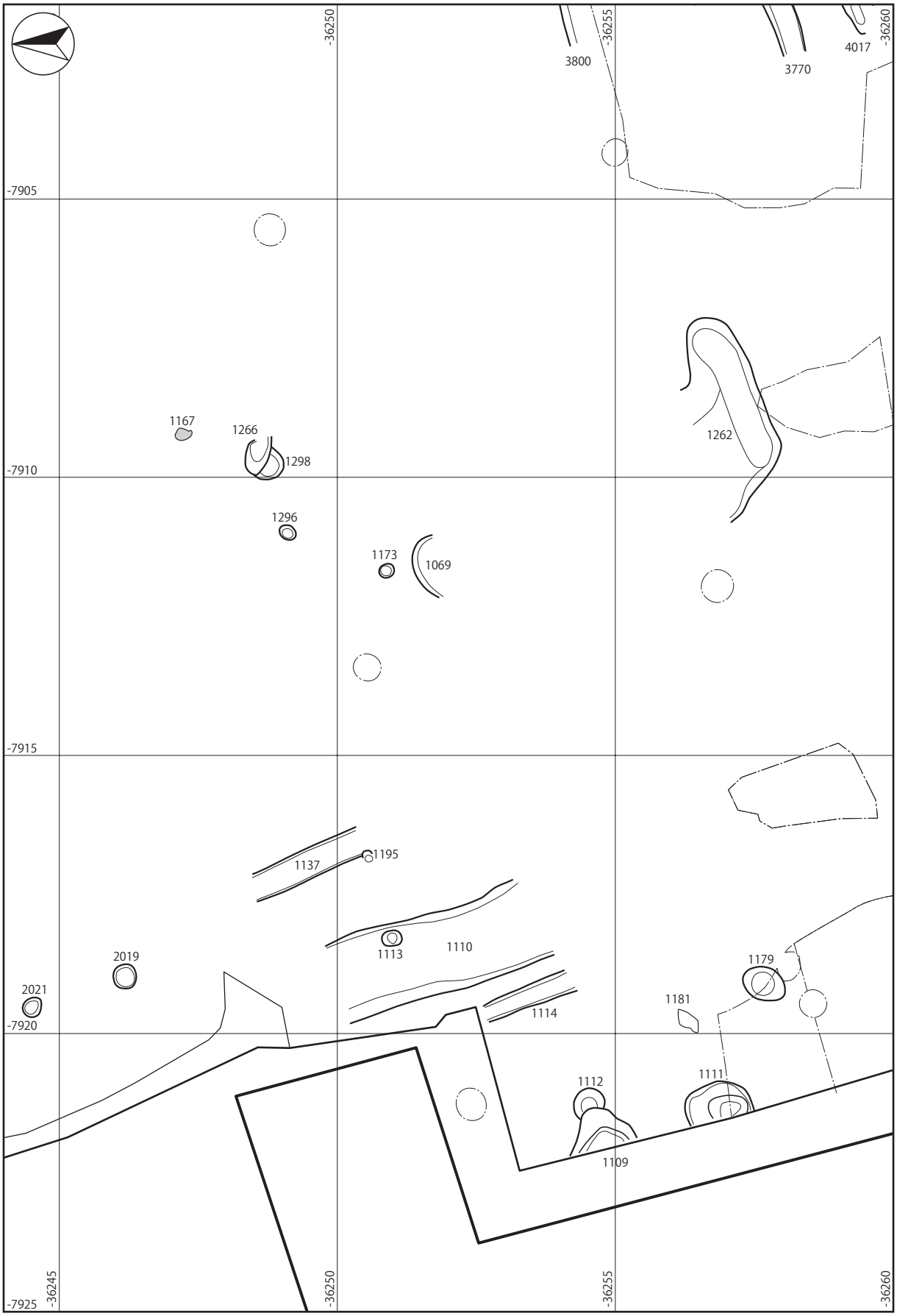
第 1-104 図　4 面割図⑥（1/100）



第 1-105 図　4 面割図⑦（1/100）



第 1-106 図　4 面割図⑧（1/100）



第 1-107 図　4 面割図⑨（1/100）

が互層状に堆積する。737 号・1066 号の上面に当たる部分では砂質の薄い黄褐色土層（第 1-133 図 16 層）が見られた。500・666 号下の方形の土坑群のうち、覆土断面が記録できた遺構は 737 号（第 1-133 図 17 ～ 20 層）・1066 号（同図 32・33 層）・1186 号（第 1-134 図 15 層～ 25 層）である。737 号は上層にロームブロック・粘土ブロックを含む黒褐色土（第 1-133 図 17・18 層）、下層はしまりの強い黄褐色土（同図 19･20 層）が堆積する。特に底面に堆積する 20 層は著しくしまりが強い。1066 号は褐灰色粘土ブロックを含む黒褐色土（同図 32 層）を主体とし、底面に 737 号同様に著しくしまりの強い黄褐色土（同図 33 層）が堆積する。1066 号は木片を大量に含む黒褐色粘質土（第 1-134 図 17・18・22 層）、木片・遺物を大量に含む暗灰黄粘質土（同図 20 層）、焼け膨れた瓦片とともに木片・遺物を多く含む黄灰色粘土層（同図 23 層）が互層状に堆積する。底面には木片を多く含む砂混じりの褐灰色粘質土が堆積している。全体的に木片を多く含んでおり、芥溜として利用された土坑であろう。

500・666 号出土遺物は 7,478 点・413,650.3g と多量であり、1186 号（836 点・45,951.9g）・737 号（1442 点・64,219.0g）と遺構間接合が多く見られる。また、1174 号（294 点・14,680.9g）は 737 号と遺構間接合が見られる。他の方形土坑の出土遺物は 1070 号が 1637 点・30,006.8g、1066 号が 362 点・19,160.4g である。1194 号、1223 号からは遺物は出土していない。出土遺物の時期は 18 世紀後半（第 3 四半期～第 4 四半期）を主体とし、旗本成瀬家の拝領期に廃棄された遺物群と考えられる。調査所見では 489 号より 500・666 号が新しいと判断されるが、出土遺物の時期はほぼ同じであり、一連の廃棄土坑と考えられる。489 号の項でも記したとおり、これらの遺構は 18 世紀第 3 四半期から遺物廃棄および埋没が始まり、19 世紀第 1 四半期に埋没が完全に完了したと見られる。また、土坑群の最上層に 1 面盛土が堆積していることから、 1 面の盛土地業（整地）は 19 世紀初頭から第 1 四半期にかけて行われたと想定される。

697 号・1060 号・1068 号・1106 号（第 1-135 図、図版 3-54-7・8・第 3-16 表）

697 号・1060 号・1068 号・1106 号は F-1 区から F-2 区へと向かって傾斜する斜面の落ち際に位置する土坑群である。この中では 1106 号と 1068 号が新しく、次いで 1060 号が形成されており、方形土坑 697 号はこのなかでもっとも古くに形成されたことが明らかとなっている。1060 号と 1106 号の東側は撹乱を受けている。

697 号は方形の土坑で壁面はゆるやかに立ち上がっており、底面は平坦である。土層は 33 層から 36 層が覆土にあたり、34 層・35 層は砂を含む層で 36 層は砂層である。1068 号は平面形が楕円形、断面形がＶ字形の土坑である。 2 層から 12 層が覆土にあたる。 2 層から 5 層はロームブロックを含む層で、下部の 6 層から 12 層は砂や焼土粒、炭化物粒を含む層である。1060 号は平面形が長方形、壁面はゆるやかに立ち上がっており、底面は東に向かって傾斜していた。直下には 1166 号があり、1166 号覆土が沈み込んだ部分を廃棄土坑としたものと考えられる。土層は 21 層から 32 層が覆土にあたる。いずれもロームブロックやシルトブロックを含む層である。1106 号は東側が撹乱により失われていたが、平面形は 1060 号と同様に長方形となると考えられる。壁面は外に開きながら真っ直ぐに立ち上がっており、底面は凹凸があり東に向かって傾斜していた。土層は 14 層から 20 層が覆土となる。いずれの層も 1060 号と同様にロームブロックやシルトブロックを含む層である。

出土遺物の点数・重量は 697 号が 947 点・29,623.4g、1060 号は 2,040 点・58,714.7g、1068

号は 155 点・3,310.3g、1106 号は 1,666 点・116,628.0g となっている。697 号と 1060 号、448 号の間で遺構間接合が認められる。また、1106 号では墨書土器が比較的多く出土している。出土遺物から遺構の年代は 697 号、1060 号、1106 号が 18 世紀第 4 四半期、1068 号が 18 世紀末葉から 19 世紀初頭以降に位置づけられる。

1166 号・1191 号（第 1-136 図、図版 3-55-3、第 3-16 表）

1166 号は F-1 区から F-2 区へと至る斜面の肩の部分に位置し、470 号の東側に隣接する。さらに H-2 区にもまたがる遺構である。1060 号、1106 号の底面から検出され、東側の一部は攪乱に切られるものの、東端部は H-2 区側で確認されている。1166 号は 1188 号に切られる。また、1259 号、1267 号、1295 号は 2 面以下の遺構で、一部を 1166 号に切られている。

1166 号は大型の廃棄土坑で平面形は長方形を呈する。1166 号の断面形は西端では底面が平坦な箱形であるが、中ほどから段状に深くなっていくが、深くなっている部分ではＵ字形となっており、底面は東に向かって段状に傾斜していた。遺構の規模は残存部分で長軸 10.41m、短軸 4.26m を測る。遺構の深さは検出面から 1.75m あり、 6 面盛土層中に達していた。遺構の形態や屋敷内での位置は H-2 区 2 面で検出された 4185 号や 4240 号に類似することから、同種の遺構と考えられる。覆土は中央部の段状に深くなる部分（SPA-A’）では 11 層に分かれ、西端（SPB-B’）では 6 層に分かれており、それぞれ堆積の状況も異なっていた。SPA-A’ の堆積は、上層の 1 層は黄褐色の砂層、2 層は砂をブロック状に含む層で、中層の 3 層から 6 層は炭化物を含む層である。下層の 7 層から 11 層は粘性の強い土層となっている。 7 層、 8 層、10 層は粘土ブロックを含むほか、多量に木端を含んでいた。 9 層は木端を含まない以外は 8 層に類似する層である。11 層は最下層で、灰白色の粘土層である。

一方、SPB-B‘ では 1 層から 3 層が砂を多く含む層であり、 4 層から 6 層は粘土を含む層となり、木端を多量に含むような状況は見られなかった。1166 号出土遺物の点数、重量は 11,445 点、387,641.3g で、18 世紀第 3 四半期に位置付けられる。下層から木製品（下駄、桶樽側板・蓋底板、曲物容器、箸、漆器椀など）が多数出土しており、建材（色紙・鴨居・障子の桟など）も確認された。1178 号・3185 号と遺構間接合も認められる。

また、1191 号は 1166 号を切る遺構で、1060 号、1106 号の底面で検出された土坑である。出土した遺物の点数、重量は 80 点、2,435.2g である。出土した遺物から遺構の年代は 18 世紀前葉に位置づけられる。

【イヌ埋葬跡】

474 号（第 1-131 図、第 3-16 表）

474 号は F-1 区南西隅から検出された。474 号は北側の遺構上部を僅かに 2 面の遺構 470 号に切られていた。また、474 号の位置は F-2 区に向かって傾斜する斜面の落ち際にあたり、遺構が形成された当時においても、旗本成瀬家屋敷地と旗本保科家屋敷地の境界付近であったと考えられる。F-1 区南西隅では東京層群第 1 砂質土層に含まれる砂層がすでに一部で露出しており、474 号は掘方を捉えることは出来なかったが、砂層とその上部に堆積する盛土層を掘り込み形成されていたものと考えられる。検出された獣骨は頭部を除いた体部すべての骨が原位置を保った状態で埋没しており、獣骨は頭部が北東を向き、足が南を向くように横たえた状態で埋められていた。推定される体高は 48㎝で、若齢である（第Ⅷ章第 3 節参照）。

C　3-1 面

F-1 区３面では調査区内に大きく広がる焼土層が３枚確認された。３枚の焼土層に基づきそれぞれ 3-1、3-2、3-3 面の３つの面に分割して調査を行った。3-1 面・3-2 面それぞれの出土遺物の中に 18 世紀第３四半期の遺物を複数含むものの、各面から検出されている遺構および第Ⅶ章文献史料の調査で示された調査地の火災履歴から判断すると、3-1 面焼土層は 18 世紀第２四半期、享保の２度の火災（享保 12 年（1727）か同２年（1717））のどれか、3-2 面焼土層は 18 世紀第２四半期、享保の２度の火災（享保 12 年（1727）か同２年（1717））のどれか、あるいは 18 世紀第１四半期の未知の火災と想定される。最も古い 3-3 面の焼土層は寛文８年（1668）の火災によるものと想定される。

最も新しい 3-1 面は北西から南東に傾斜しており、焼土層は北東部に堆積する。この焼土層は H-1 区 3-1 面や H-2 区 3-1 面で検出された焼土層に対応するものであり、後述する H-1 区 3-1 面では成瀬家屋敷に伴うと考えられる礎石建物跡が発見されている。おそらく H-1 区側が屋敷部分、F-1 区側が庭園部分にあたるものと考えられ、大型の地下室の可能性がある方形の土坑などが確認されている。

3-1 面からは、溝７条、礎石１基、硬化面１基、瓦溜り１基、埋桶２基、土坑 13 基、ピット 33 基、杭跡１基、イヌ埋葬跡１基が検出された。

【地下室】

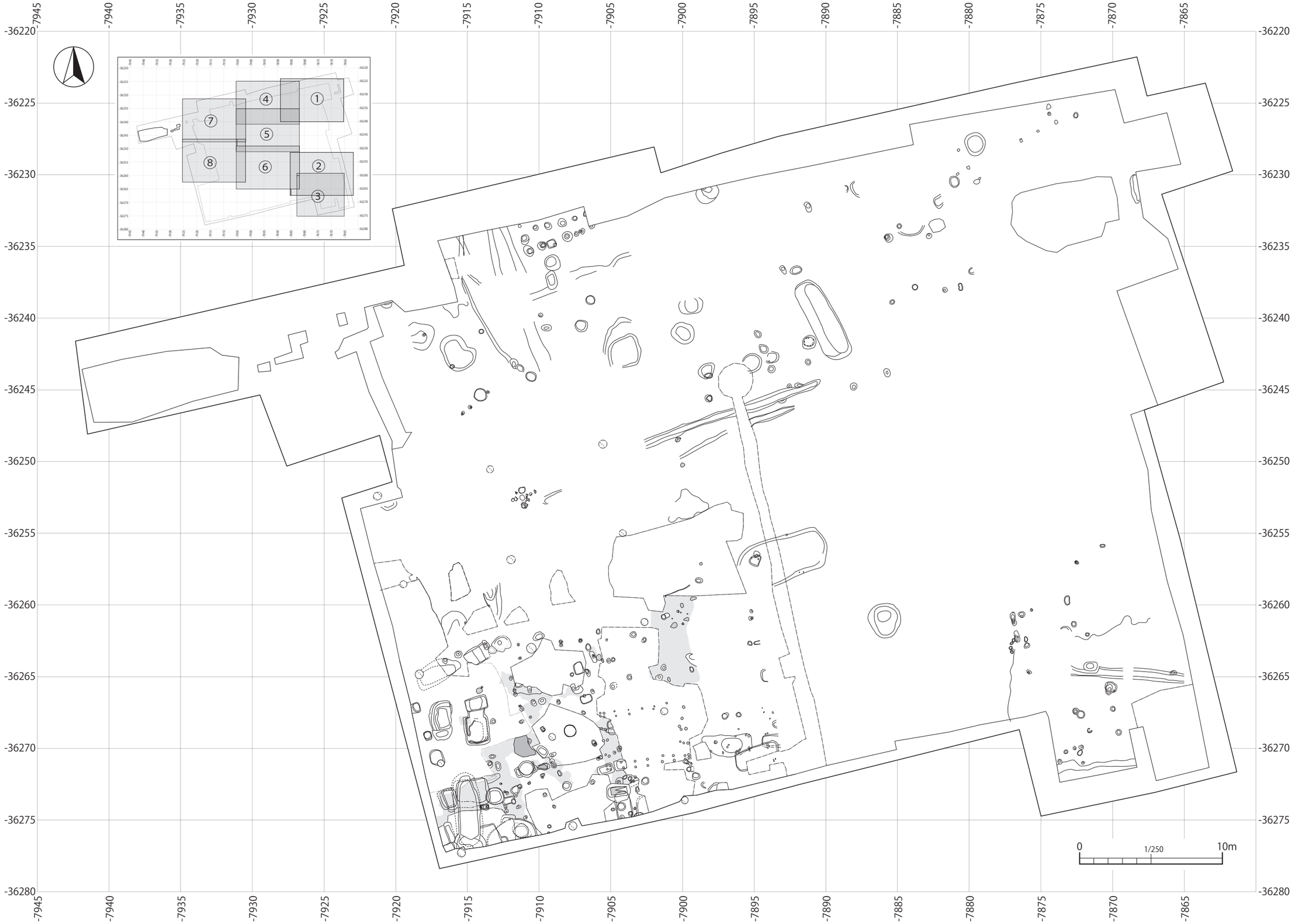
750 号（第 1-139 図、図版 3-56-4、第 3-16 表）

750 号は大型の地下室と考えられる遺構である。平面形は方形で F-1 区北側の中央部に位置している。壁面は床面から真っすぐに立ち上がり、半ばから外に開いていく。南壁のみ、崩落によるものか、凹凸のあるやや斜めに立ち上がる壁面となっていた。また、南西角部分にはテラス状の段が見られた。底面は凹凸があり、ところどころ落ちくぼんでいる状況であった。覆土は 17 層に分かれる。上部（１層から４層）は２面盛土層に類似する土層で、黄褐色の砂やローム粒、炭化物粒を含んでいる。５層は粘質土層で、薄い層であるが６層以下をパックするように全面的に堆積していた。６層以下は炭化物などを含む粘質土層と内容物が見られない粘土層が堆積する。８層と 10 層、11 層、15 層は粘土層にあたり、特に 15 層は遺構内全域に広がる。また、底面や壁面で付随するピットや杭穴、板材などは見られなかった。出土した遺物の点数は 1,881 点、重量は 39,598.5g で、17 世紀後葉から 18 世紀前半の遺物群である。1106 号、1252 号と遺構間接合が認められる。元文２年（1737）暦文碗（第 2-95 図 1423）が出土しており（3830 号と遺構間接合）、暦文から 1737 年以降の 18 世紀第２四半期の廃絶と推定される。

【溝】

698 号（第 1-141 図、第 3-16 表）

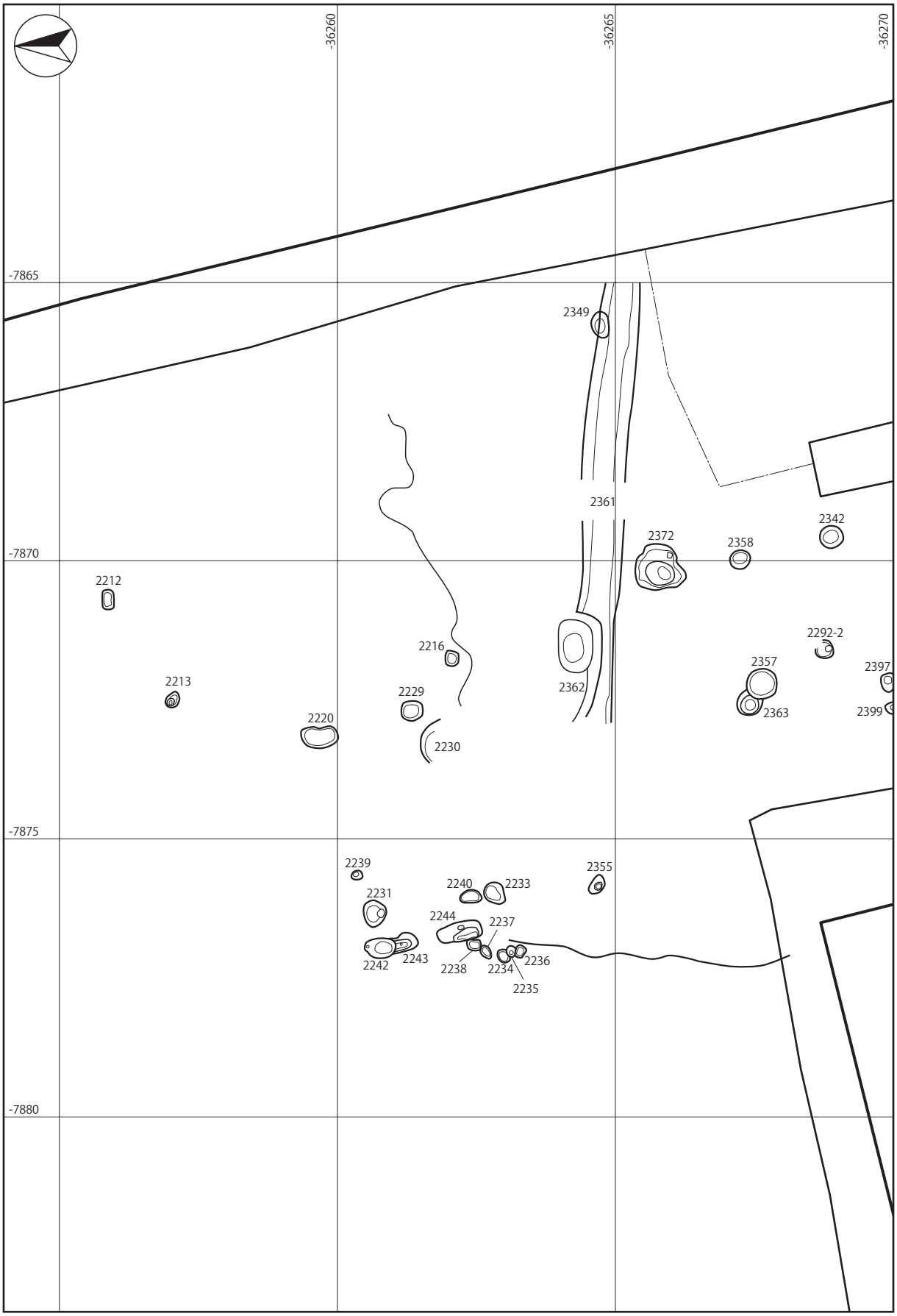
698 号は断面Ｕ字形の溝で F-1 区西端からⅠ区へ南北に延びており、北側の延長はⅠ区側に至り 2007 号に連なる。屋敷の西端を区画するとともに排水を目的とした溝と考えられる。698 号の底面は南に傾斜しているが、その先は２面の遺構 470 号に切られ、失われている。また、途中ピット 785 号にも切られる。覆土は４層に分かれる。１層は灰色シルト混合層で、ローム粒や焼土粒、炭化物粒の他、瓦片を含んでいる。２層から４層はシルトとローム粒を含む層である。４層は粘性が強く、含まれるローム粒は水の影響を受けグライ化していることから溝として利用されていた時期に堆積したものと考えられる。698 号から出土した遺物の点数、重量は 89 点、2,515.0g である。出土遺物か



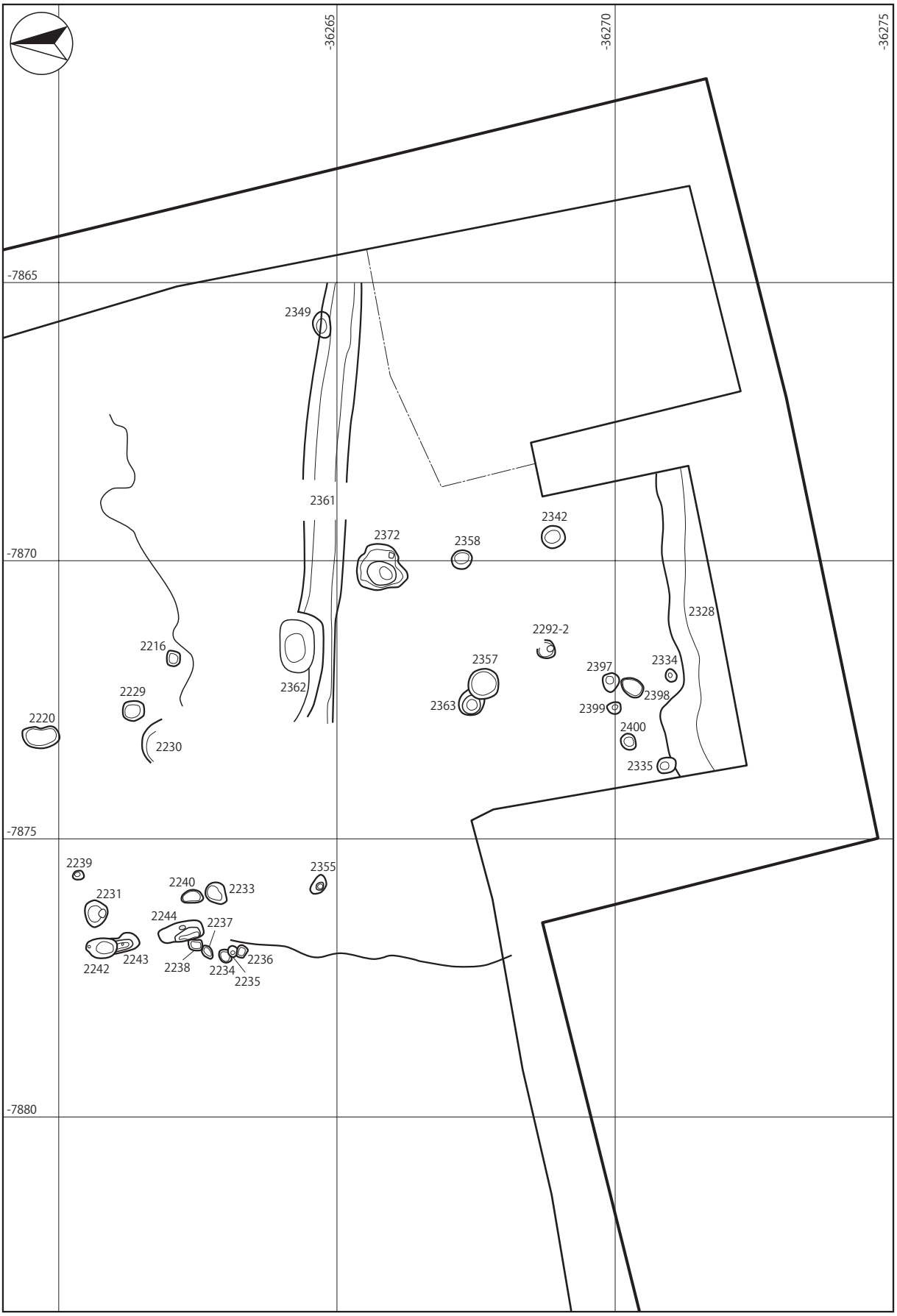
第 1-108 図　5 面全体図（1/250）



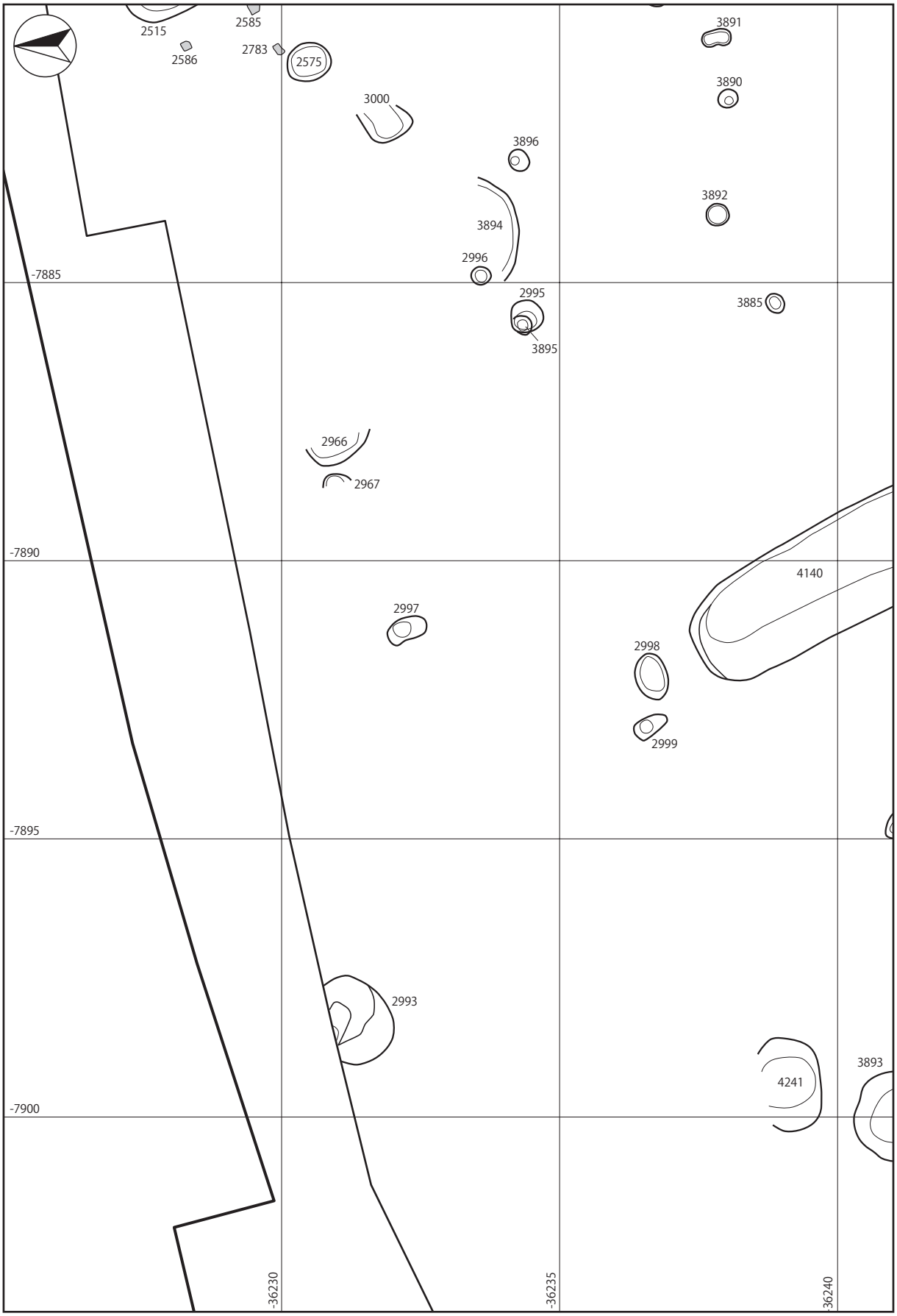
第 1-109 図　5 面割図①（1/100）



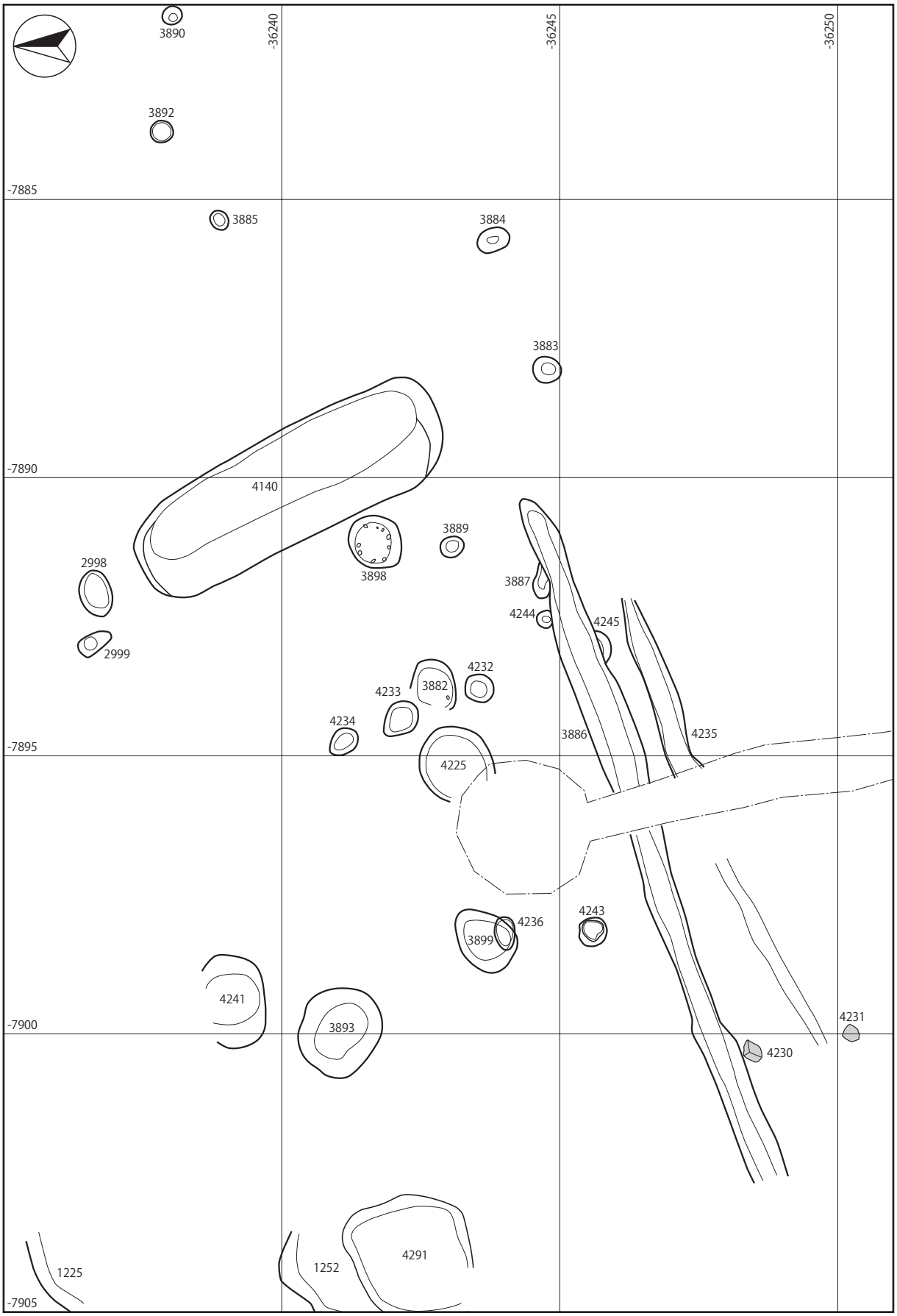
第 1-110 図　5 面割図②（1/100）



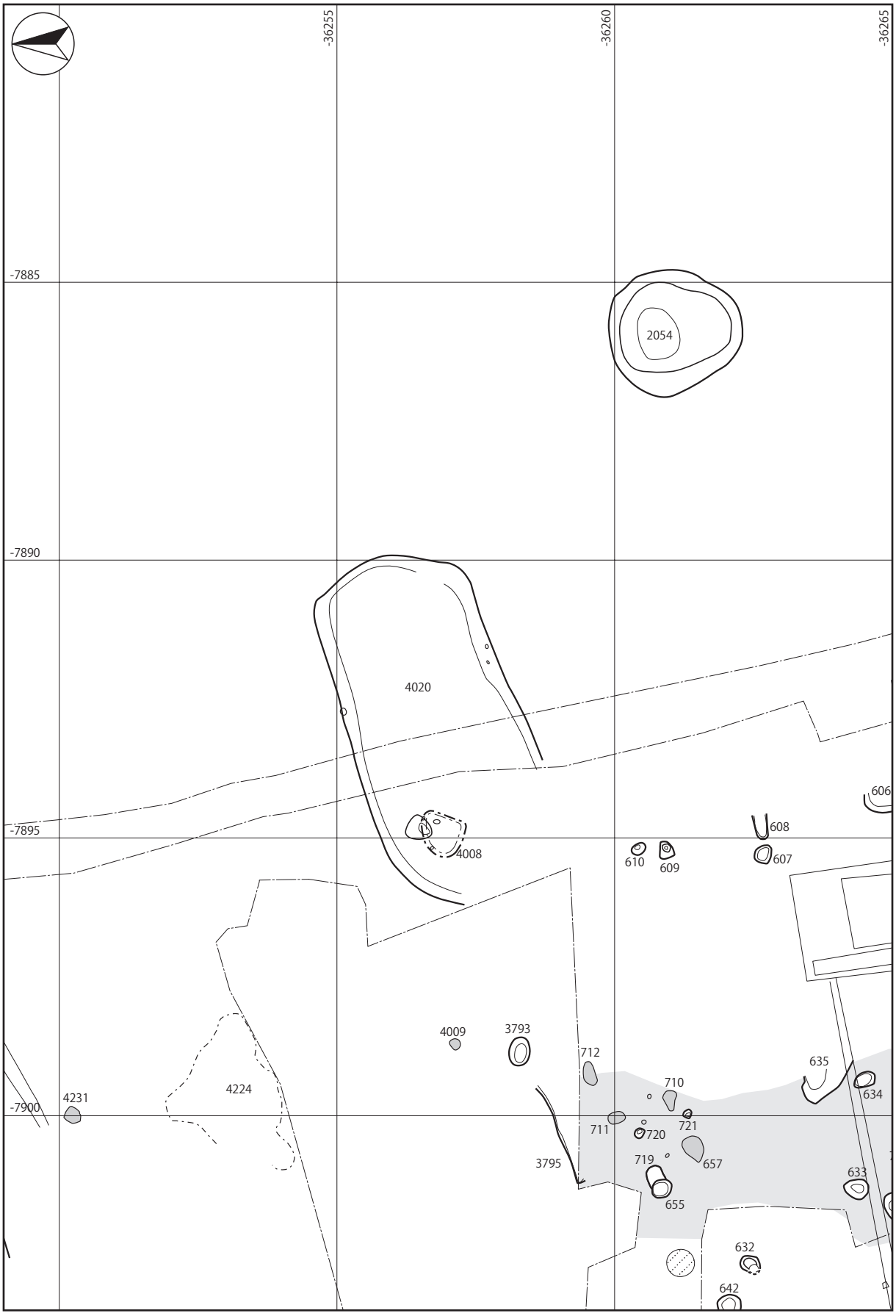
第 1-111 図　5 面割図③（1/100）



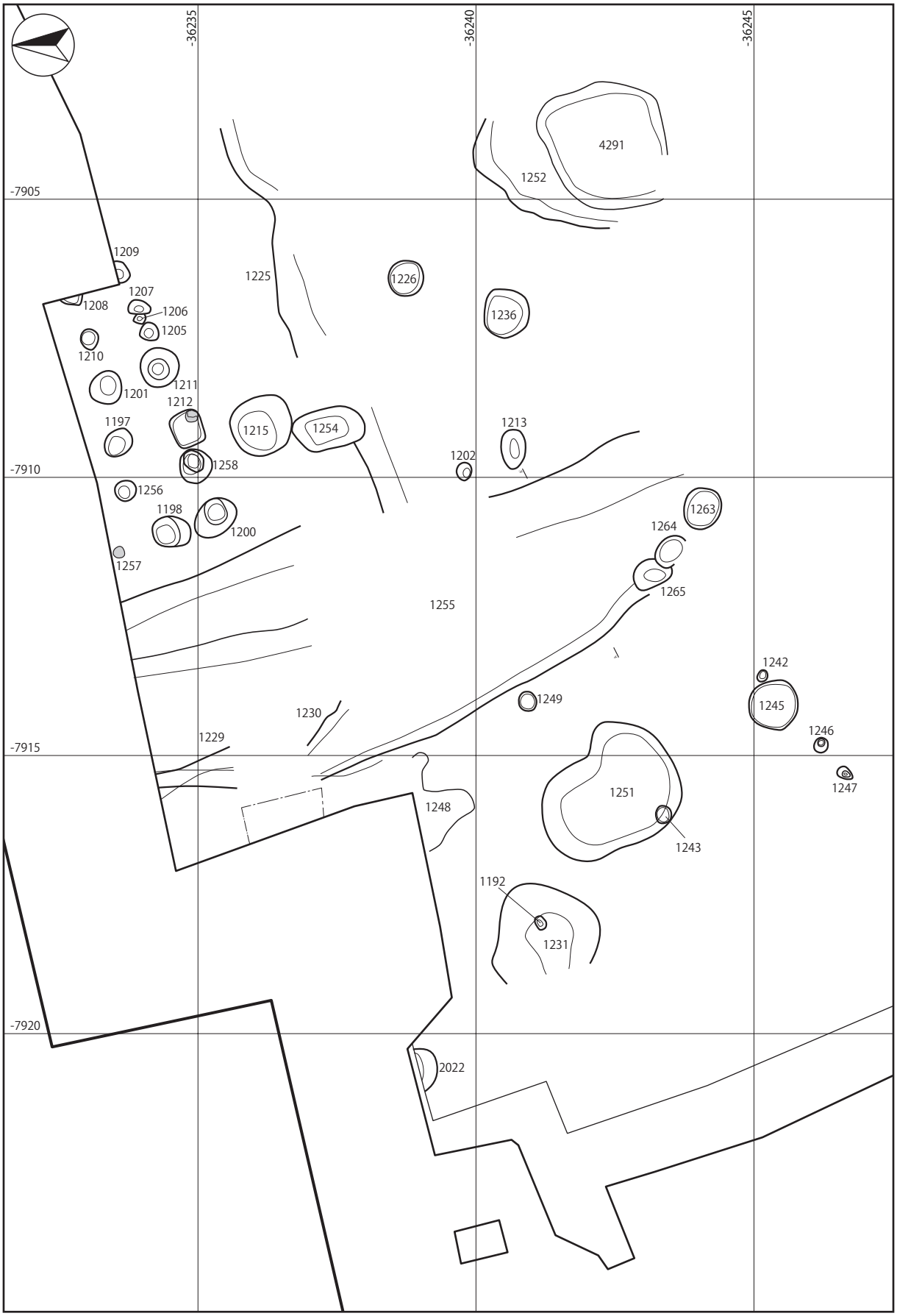
第 1-112 図　5 面割図④（1/100）



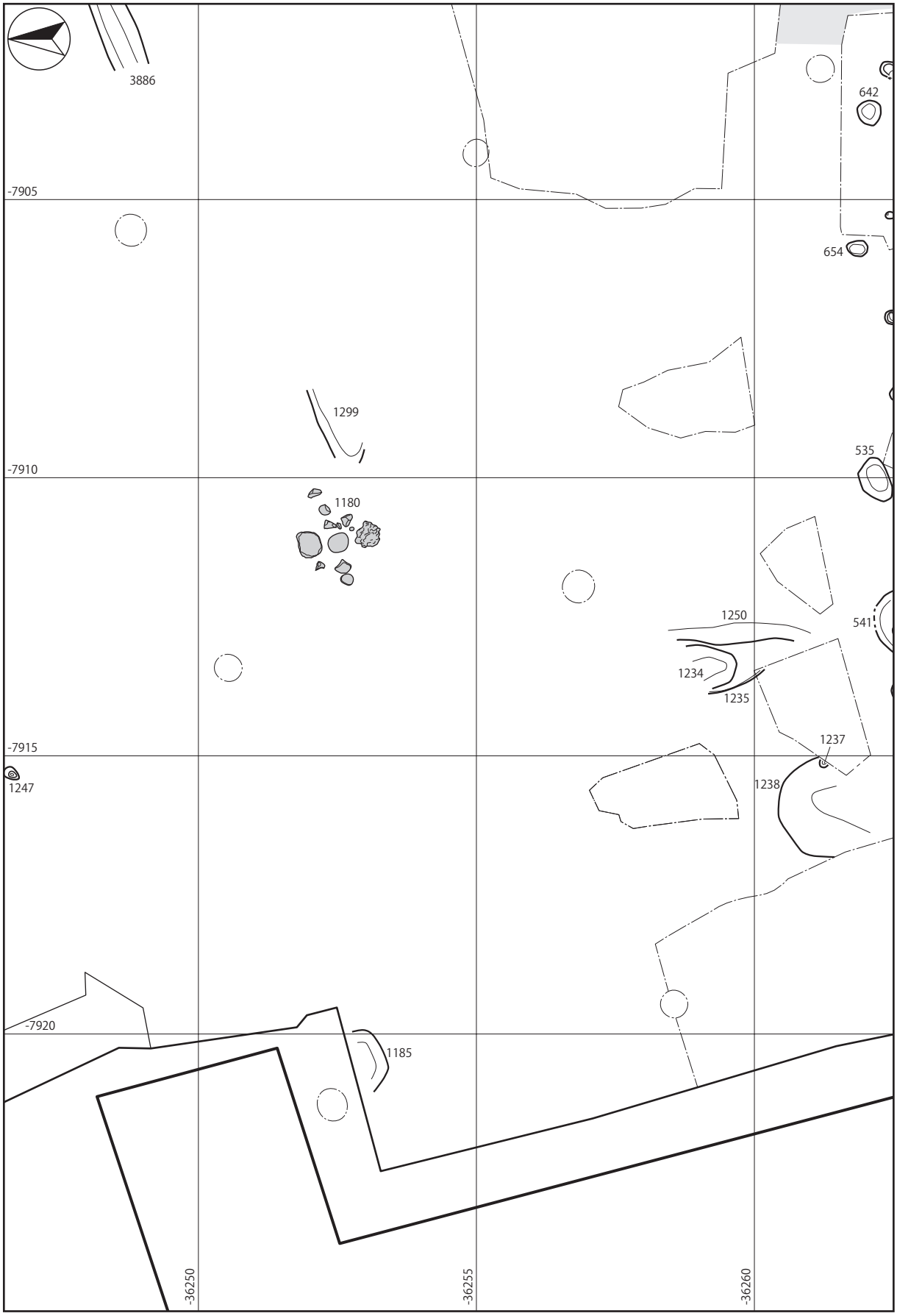
第 1-113 図　5 面割図⑤（1/100）



第 1-114 図　5 面割図⑥（1/100）



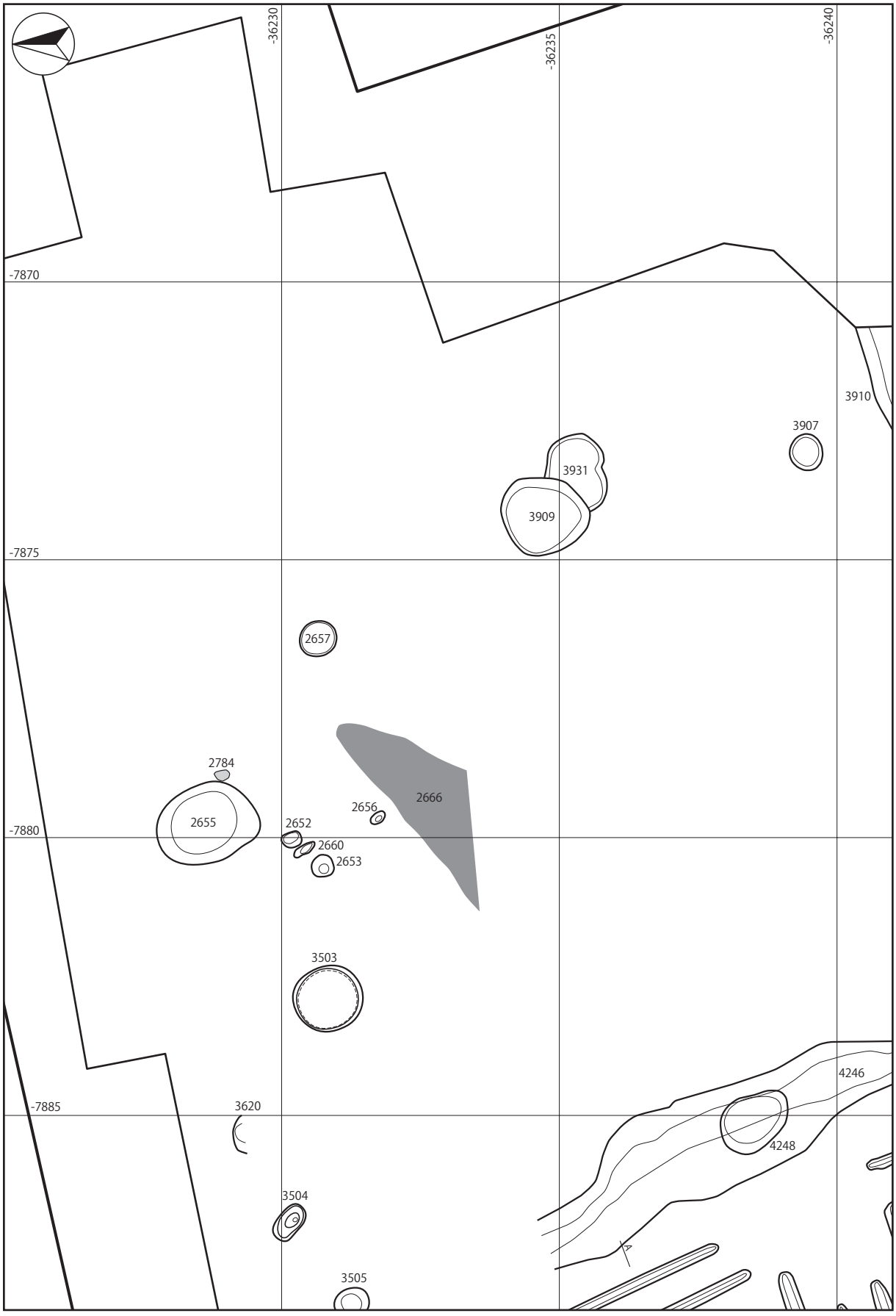
第 1-115 図　5 面割図⑦（1/100）



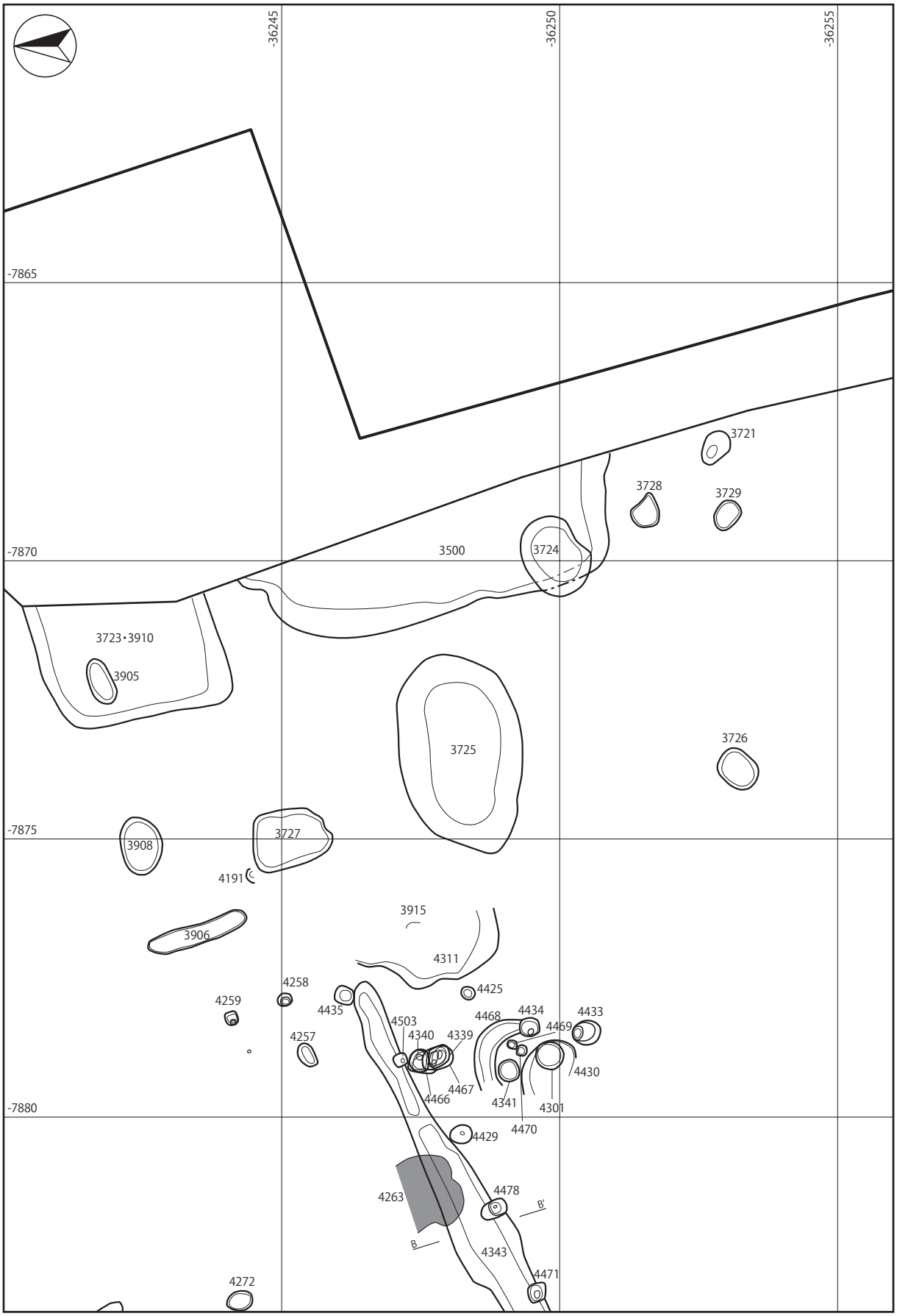
第 1-116 図　5 面割図⑧（1/100）



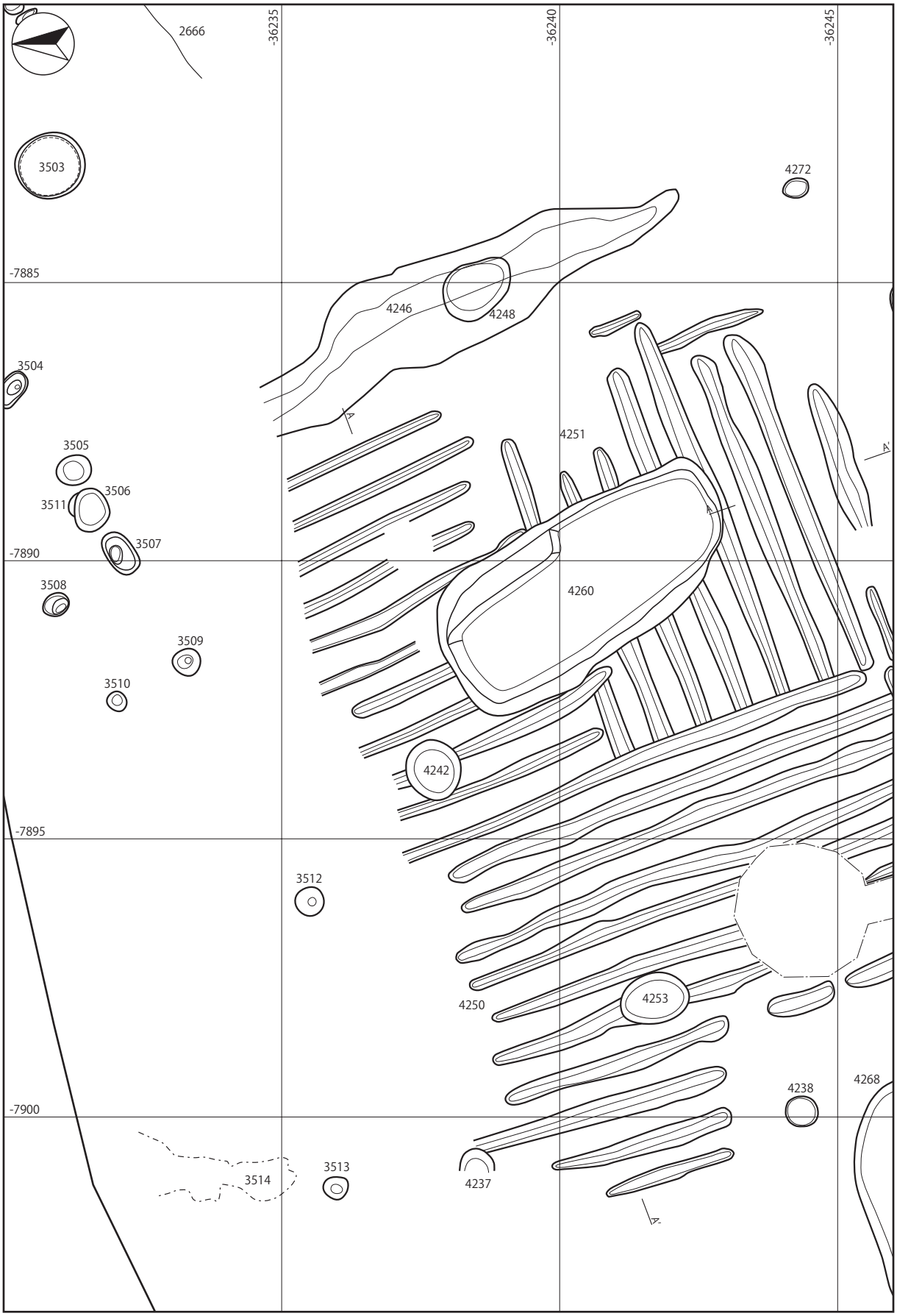
第 1-117 図　6 面全体図（1/250）



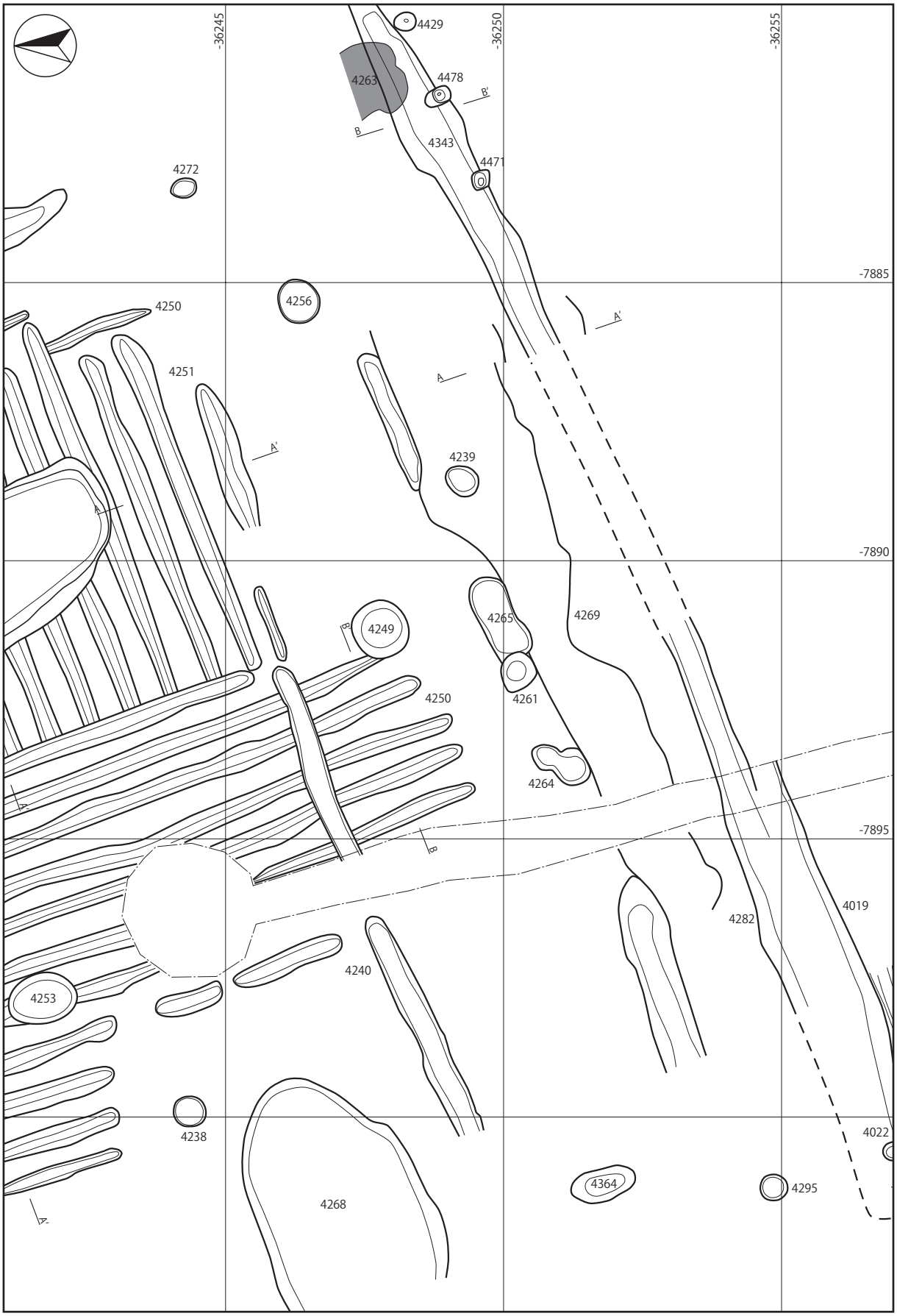
第 1-118 図　6 面割図①（1/100）



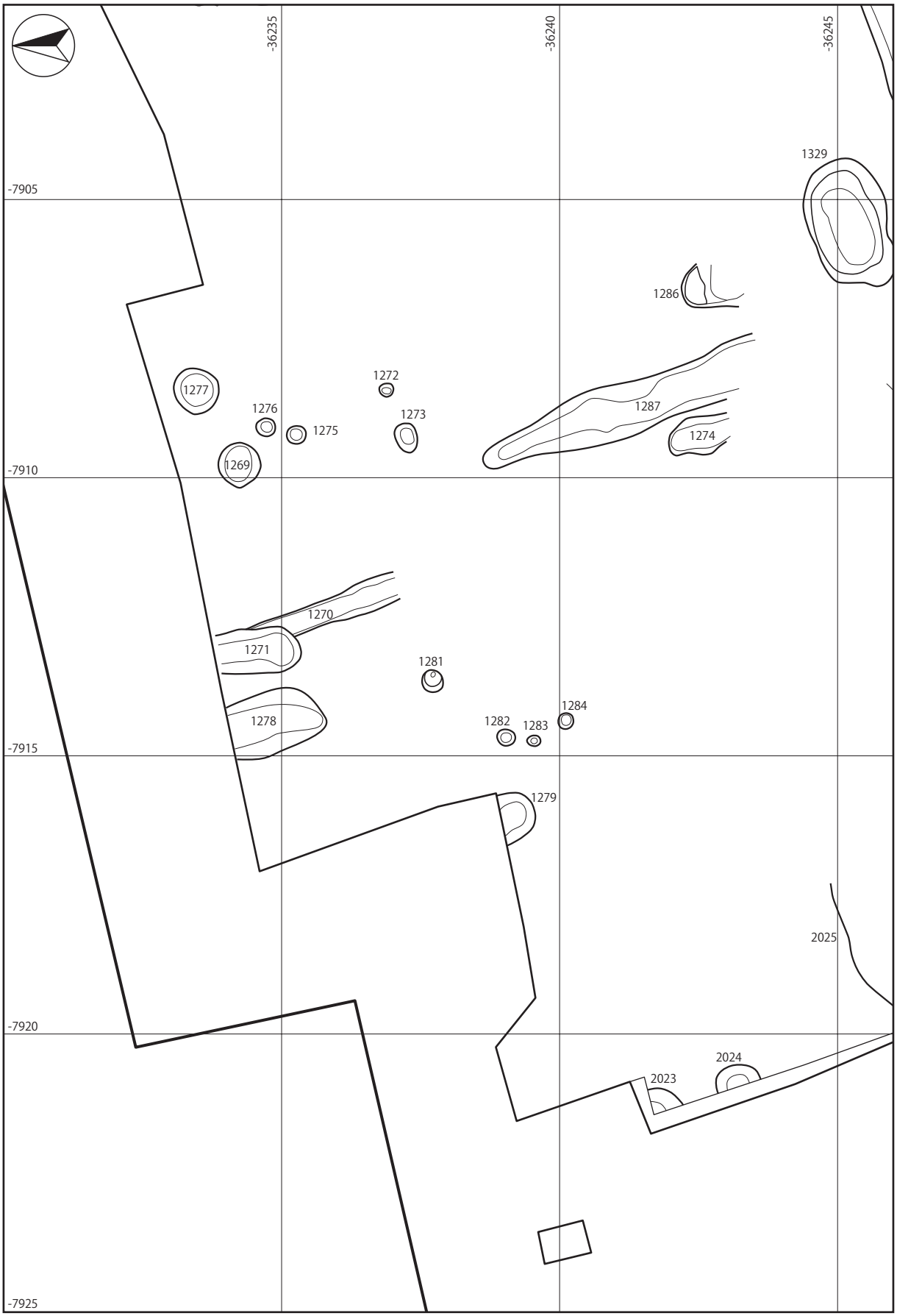
第 1-119 図　6 面割図②（1/100）



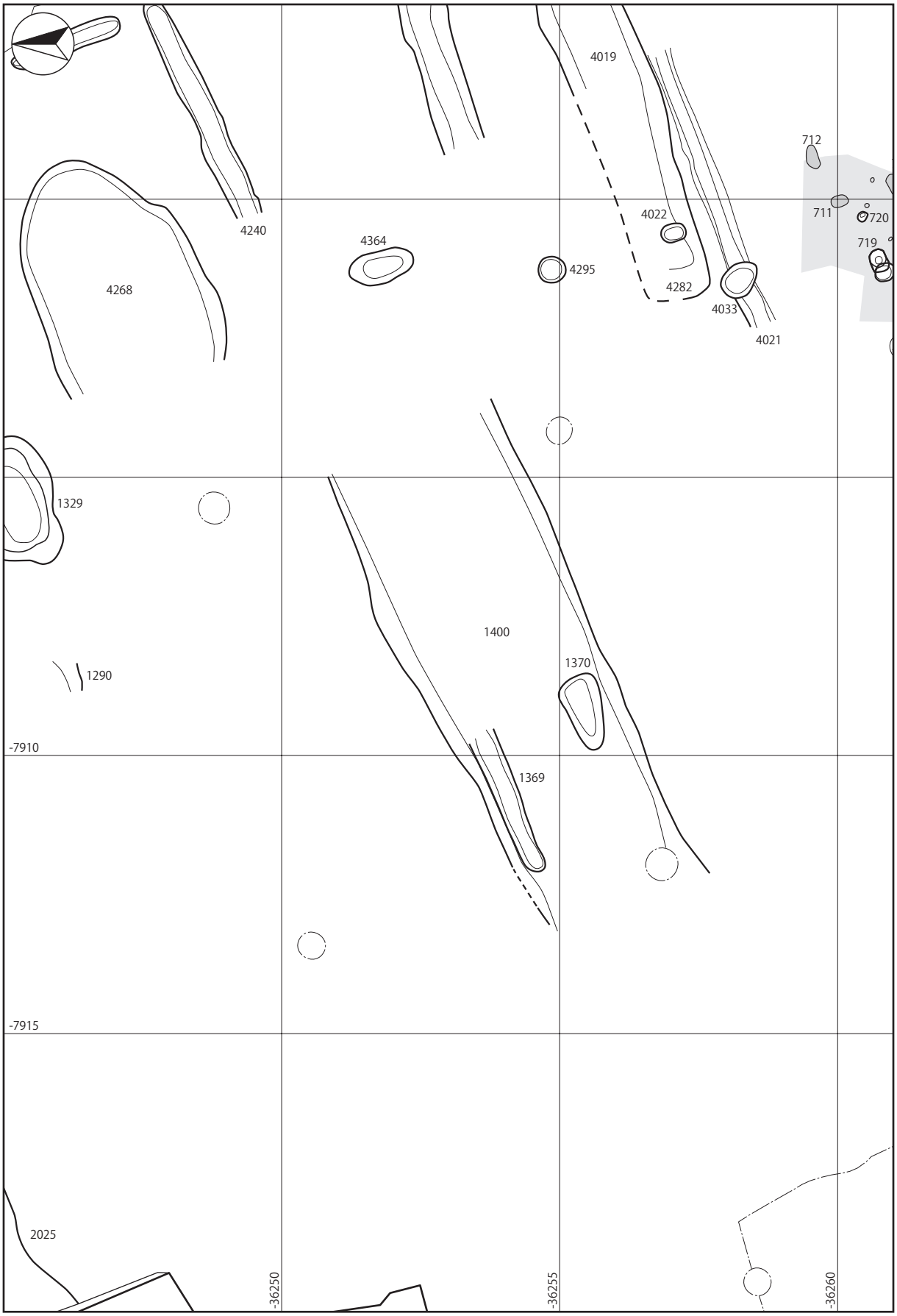
第 1-120 図　6 面割図③（1/100）



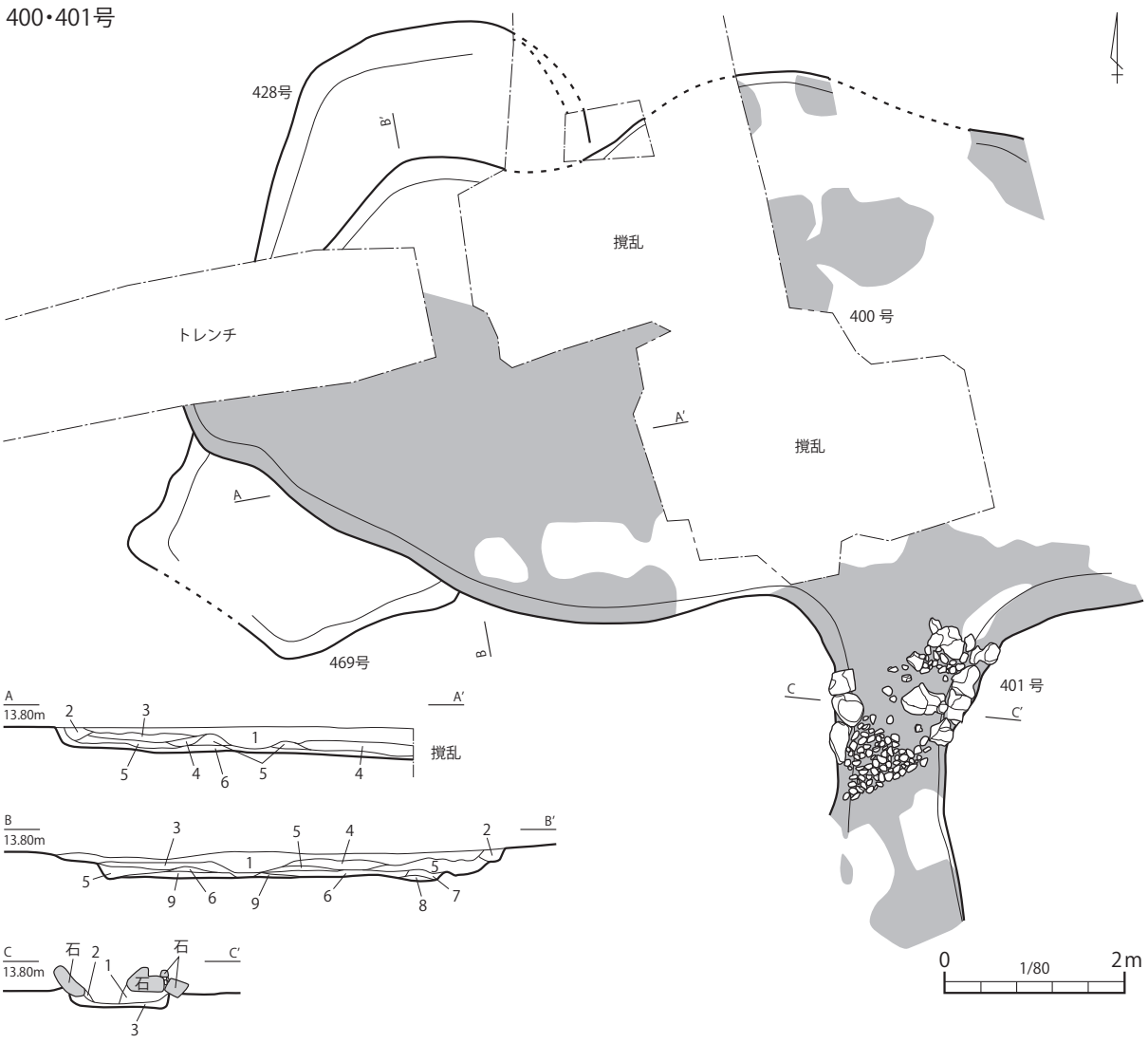
第 1-121 図　6 面割図④（1/100）



第 1-122 図　6 面割図⑤（1/100）



第 1-123 図　6 面割図⑥（1/100）

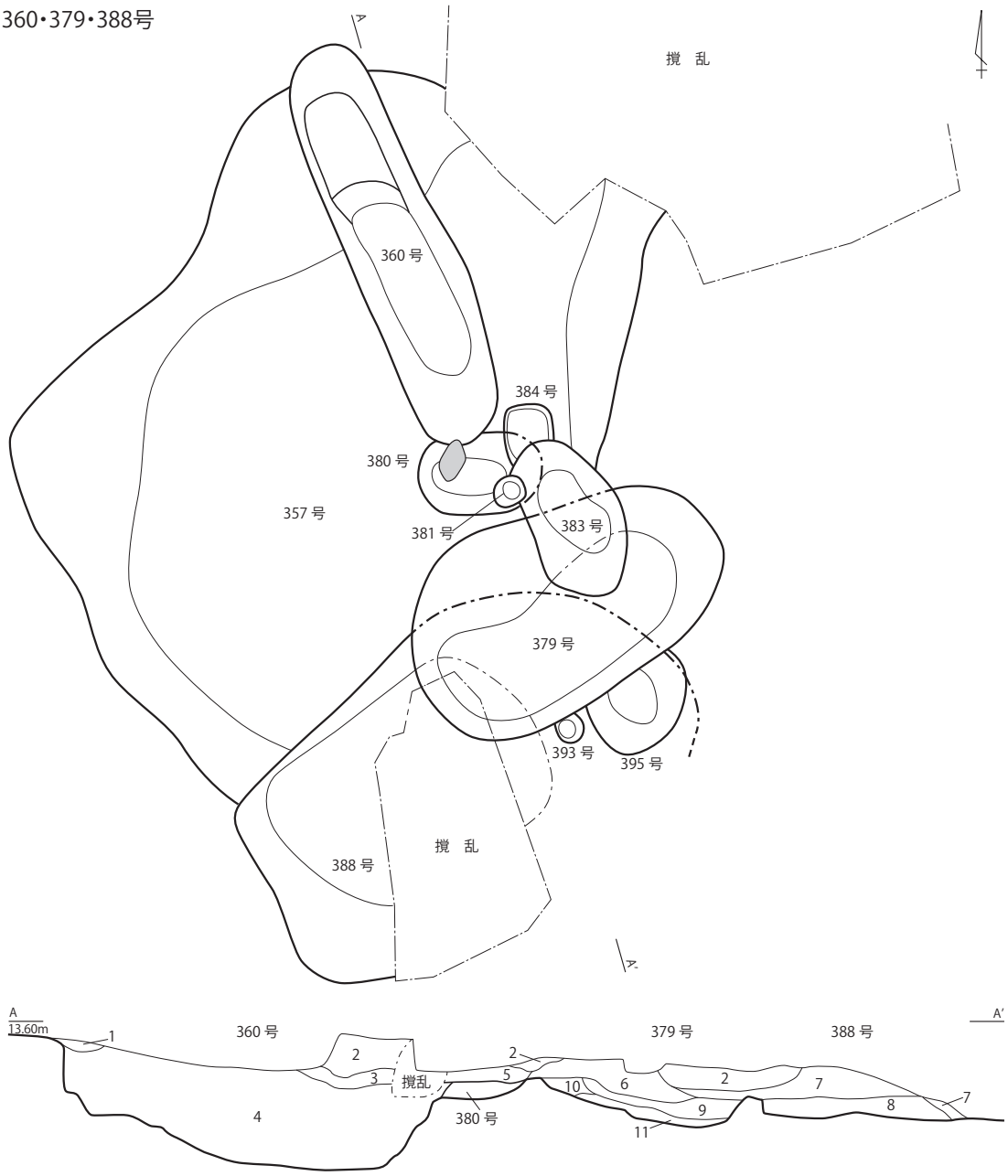


400号（SPA-A′・SPB-B′共通）
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：極強　粘性：強い　ロームブロックφ15～20mm10%　焼土粒φ3～10mm5%　炭化物粒φ3～10mm7%　灰白粘土ブロックφ15～30mm15%　小石・礫・瓦片を5%程含む　近代以降の池埋土か
2：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：極強　粘性：あり　ローム粒φ3～5mm5%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～3mm3%　褐灰色粘土ブロックφ15mm25%
3：10YR4/4(褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm15%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～3mm2%　小石φ5～10mm3%
4：10YR4/4(褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ3～5mm10%　　焼土粒φ1～3mm2%　炭化物粒φ1～3mm10%
5：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い　灰黄褐色粘土10%　焼土粒・炭化物粒φ1mm1%　内容物少ない
6：2.5Y6/1(黄褐色)　しまり：強い　粘性：極強　焼土粒φ1～5mm3%　炭化物粒φ3～5mm3%　池底面貼られた粘土　黄灰色粘土主体
7：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ1～3mm5%　焼土粒φ1mm1%　炭化物粒φ1～2mm1%
8：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ1～3mm5%　焼土粒φ1mm1%　炭化物粒φ1～2mm1%　褐灰色粘土粒φ5mm3%
9：10YR5/6(黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm30%　灰黄色砂φ1～5mm3%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～3mm1%　400号掘り方か

401号（SPC-C′）
1：10YR4/4(褐色)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒φ1～5mm10%　焼土粒φ1～3mm1%　炭化物粒φ1~5mm2%
2：10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒φ3～5mm10%　ロームブロックφ15～mm5%　炭化物粒φ1～5mm2%　焼土粒φ1～3mm2%　褐灰色粘土粒φ5～7mm5%　錆3%
3：粘土層

第 1-124 図　F-1 区 1 面の遺構（1）（1/80）

357・360・379・388号

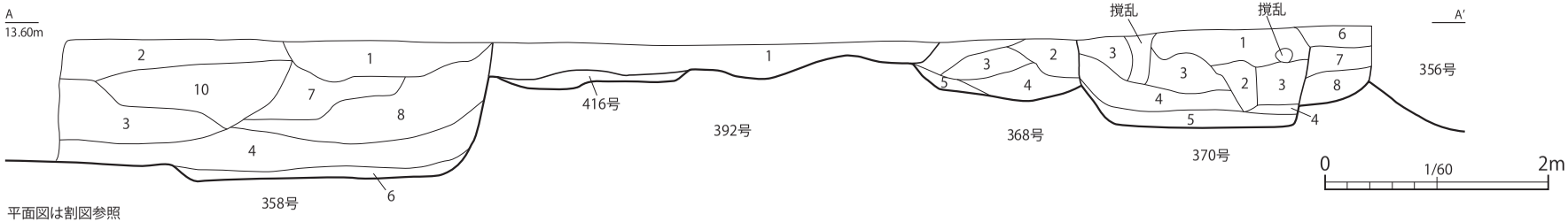


360号・379号・388号
1：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　黄褐色砂ブロックφ10～20mm10%
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　焼土粒φ1～10mm2%
3：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　黄褐色砂ブロックφ10～30mm10%
4：瓦層　暗褐色土（10YR3/3)10%
5：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ1～10mm1%　炭化物粒φ1～10mm1%　褐灰色粘土ブロックφ20～40mm3%
6：10YR4/2(褐灰色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ1～10mm2%　炭化物粒φ1～20mm2%
7：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　焼土粒φ1～10mm3%　炭化物粒φ1～10mm10%
8：10YR3/1(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　焼土粒φ1～10mm3%　炭化物粒φ1～10mm15%　貝片７%
9：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物粒φ1～20mm15%　貝片φ1～30mm10%
10：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物粒φ1～10mm2%
11：2.5Y3/3(暗オリーブ褐色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物粒φ1～10mm5%

0　1/60　2m

第 1-125 図　F-1 区 1 面の遺構（２）（1 /60）

358号・368号・370号・392号・416号



平面図は割図参照

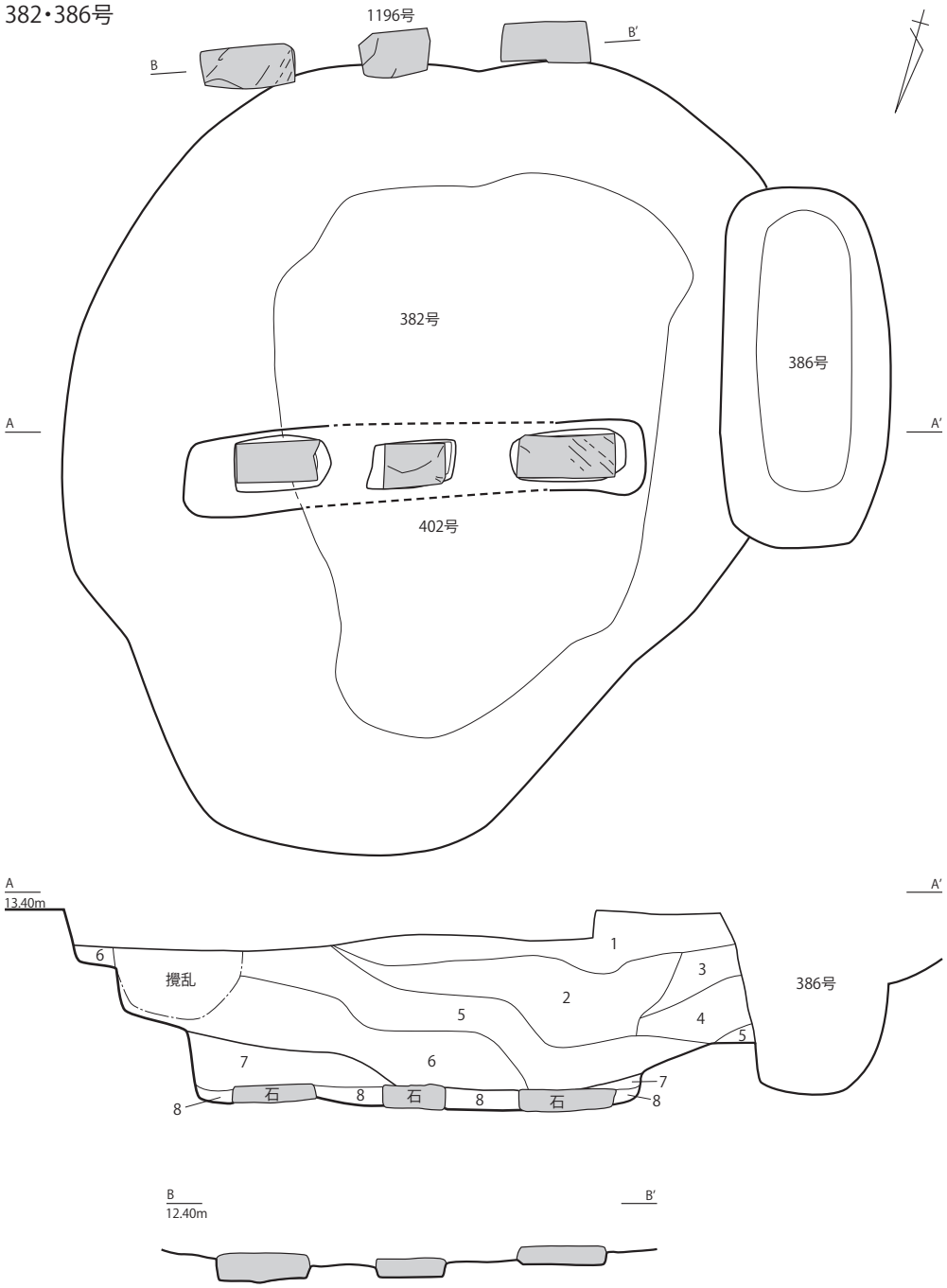
358号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　瓦20%　小礫φ10～40mm5%
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ1～20mm2%　焼土粒φ1～10mm3%　炭化物粒φ1～10mm1%
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　ローム粒φ1～10mm3%　焼土粒φ1～10mm5%　炭化物φ1～10mm5%　瓦5%　砂質土層
4：10YR4/1(褐灰色)　しまり：やや弱い　粘性：やや強い　粘土ブロックφ30～50mm5%　炭化物粒～ブロックφ1～30mm3%　瓦30%　粘土層
5：10YR3/1(黒褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや強い　黄褐色砂粒φ1～20mm5%　炭化物粒φ1～20mm2%　焼土粒φ1～3mm1%
6：10YR4/1(褐灰色)　しまり：やや強い　粘性：強い　炭化物粒φ1～20mm10%　粘土粒φ1～10mm2%　粘土層
7：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い　焼土粒φ3～5mm10%　ローム粒φ3～5mm5%　炭化物粒φ3～10mm5%　瓦片10%　砂質ローム粒φ3～5mm3%　赤錆5%
8：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：弱い　粘性：あり　ローム粒φ3～5mm5%　焼土粒φ3～5mm3%　炭化物粒φ3～5mm3%　瓦片20%　赤錆10%
9：10YR5/4(にぶい黄褐色)　しまり：弱い　粘性：強い　焼土粒φ1～3mm2%　炭化物φ1～10mm7%　他の層に比べやや内容物少なく緻密　粘質ローム主体
10：10YR5/6(黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ3～5mm40%　焼土粒φ１～3mm3%　炭化物粒φ1～5mm5%

416号
1：10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ5～10mm10%　焼土粒φ3～5mm5%　炭化物φ5～10mm7%　灰黄褐色粘土粒φ10mm10%　瓦片20%

392号・368号
1：10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ3～5mm3%　砂質ローム粒φ1～3mm1%　焼土粒φ5mm5%　炭化物粒φ3～10mm10%　小石φ5～10mm5%
2：10YR5/4(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂質ローム粒φ1～2mm3%　焼土粒φ5mm5%　炭化物φ3～5mm5%
3：10YR5/4(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10mm1%　錆びたローム粒φ3～5mm5%　焼土粒φ5～10mm10%　炭化物粒φ5～10mm5%　赤錆5%
4：10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒φ5mm3%　砂質ローム粒φ1～3mm5%　焼土粒φ1～5mm5%　炭化物粒φ3～5mm7%　小石φ5mm3%
5：10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒φ3～5mm10%　砂質ロームブロックφ10mm3%　焼土粒φ5mm2%　灰褐色粘土粒φ3～5mm3%

370号
1：10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ3～5mm3%　砂質ローム粒φ1～3mm1%　焼土粒φ5mm5%　炭化物粒φ3～10mm10%　小石φ5～10mm5%
2：10YR5/2(灰褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ1～3mm1%　ロームブロックφ10mm3%　炭化物φ5mm5%　褐灰色粘土φ5～10mm5%
3：10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　錆びたローム粒φ1～3mm3%　砂質ローム粒φ1～2mm3%　焼土粒φ5mm5%　炭化物粒φ3～5mm5%　赤錆5%
4：10YR2/1(黒色)　しまり：弱い　粘性：あり　炭化物層φ5～20mm70%　灰黄褐色粘土φ10～20mm10%　赤錆7%
5：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：弱い　粘性：強い　砂質ローム粒φ5mm3%　焼土粒φ5mm5%　炭化物φ5～10mm10%　赤錆5%　小石φ10～15mm5%
6：10YR5/4(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　ローム粒φ3～10mm15%　灰黄褐色砂φ1～3mm2%　炭化物粒φ1～3mm1%　灰白色粘土φ5mm3%
7：2.5Y 5/4(黄褐色)　しまり：強い　粘性：弱い　明黄褐色（2.5Y7/6)砂φ10～15mm40%　ローム粒φ1～5mm5%　焼土粒φ3～5mm3%　炭化物粒φ3～5mm5%
8：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒φ5mm40%　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ1～3mm2%

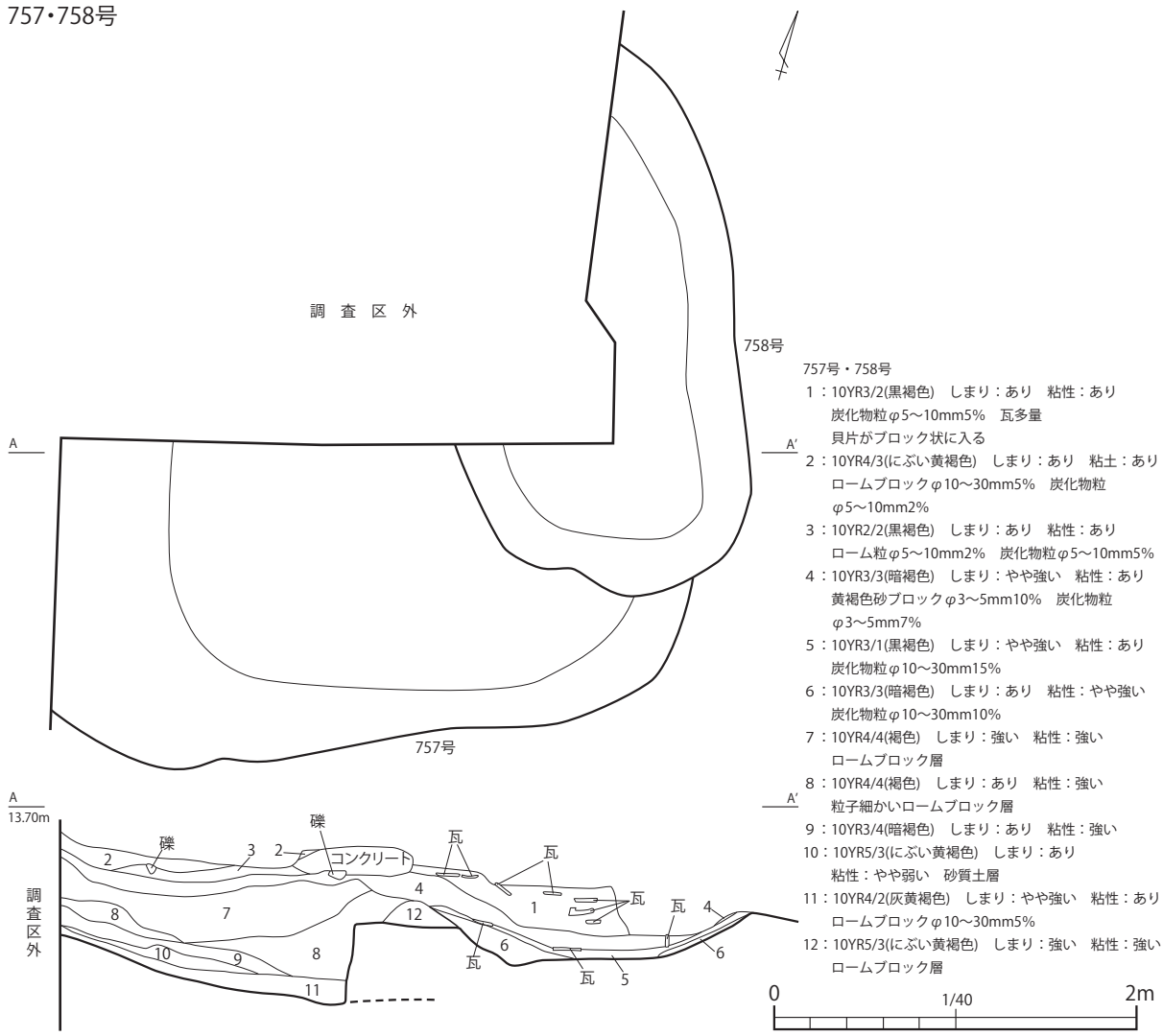
第 1-126 図　F-1 区 1 面の遺構（３）（1 /60）



382号・402号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ1～10mm3%　炭化物粒φ1～10mm2%
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：弱い　粘性：やや弱い　焼土粒φ1～3mm1%
3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや弱い　粘性：あり　炭化物粒φ10～30mm10%　貝片φ1～30mm3%
4：瓦層　10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：弱い　粘性：やや弱い　貝片φ1～30mm10%
5：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い　炭化物粒～ブロックφ5～30mm3%　貝片φ10～100mm7%
6：10YR3/2(黒褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い　瓦を多く含む
7：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
8：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや弱い　粘性：弱い

0　1/40　1m

第 1-127 図　F-1 区 1 面の遺構（4）（1/40）



第 1-128 図　F-1 区 1 面の遺構（5）（1/40）

ら 18 世紀第 3 四半期以降に位置づけられる。

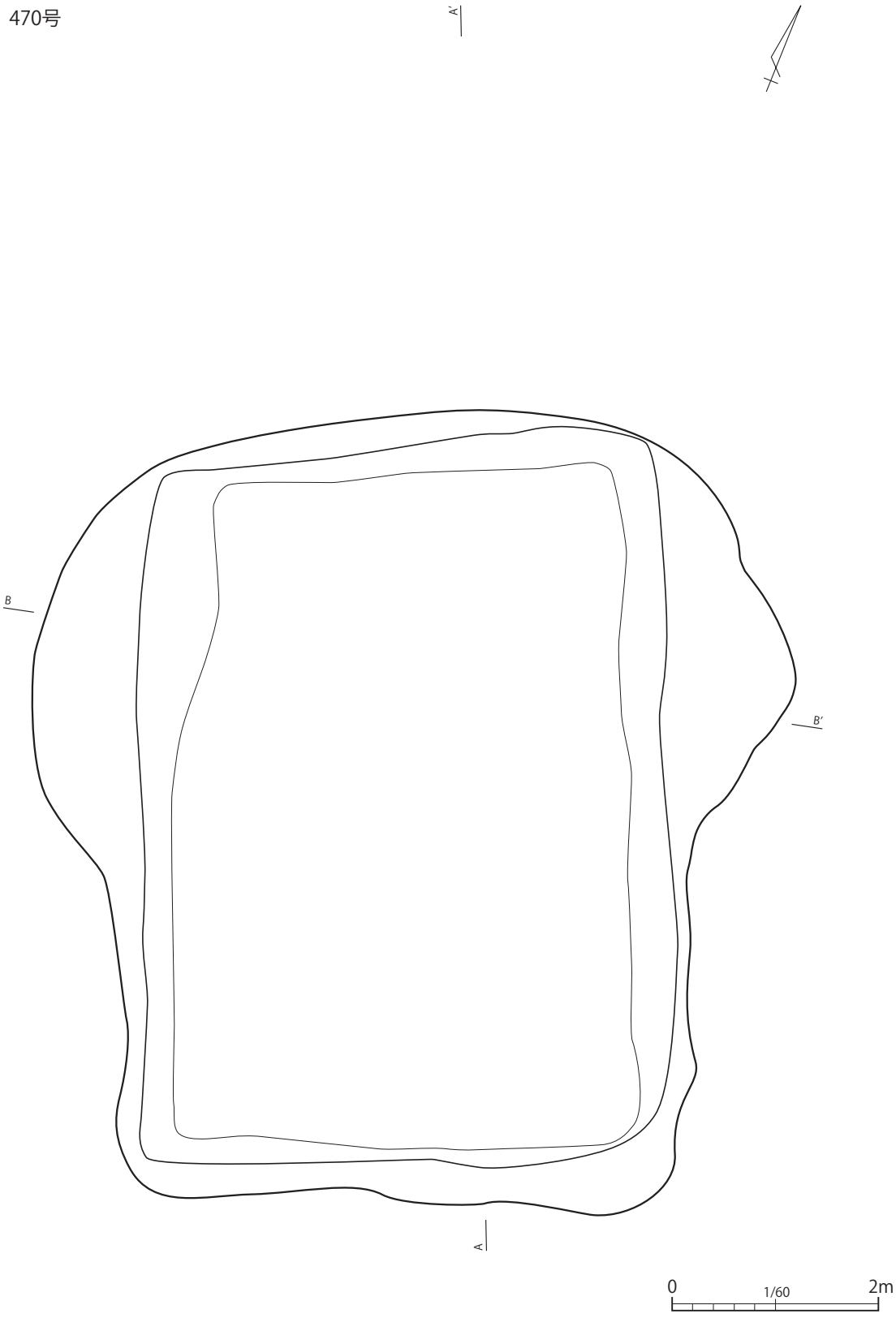
【イヌ埋葬跡】

1189 号（第 1-140 図、第 3-16 表）

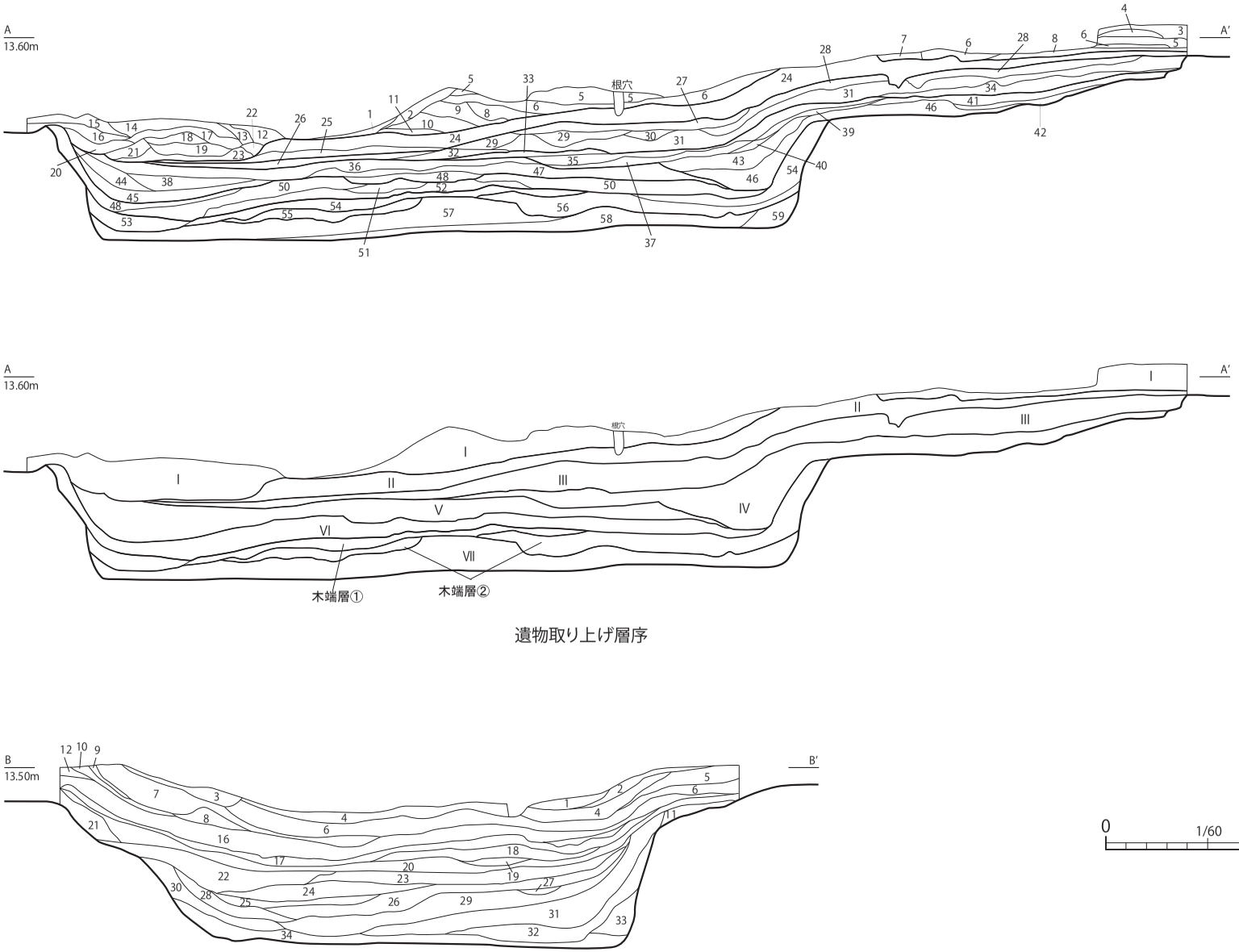
1189 号は F-1 区南端部、南側の F-2 区に向かって傾斜する斜面の落ち際に位置する。楕円形の掘り込みで底面からイヌの全身骨格を検出した。全身骨格が原位置を保っていることから掘り込みを伴う、埋葬の跡とした。イヌの全身骨格は頭を南に、脚を東に向けた状態で検出されており、他の獣骨埋葬跡とは頭位方向が異なるのが特徴的である。推定される体高は 49㎝、雄である（第Ⅷ章第 3 節参照）。出土した遺物の点数・重量は 7 点、658.1g である。

D　3-2 面

3-1 面焼土層下から確認された 3-2 面焼土層を 3-2 面として調査を行った。3-1 面焼土層と 3-2 面焼土層の間に見られる盛土層は薄く、短い期間の間に形成されたものと考えられる。この 3-2 面焼土層は後述する H-1 区 3-2 面や H-2 区 3-2 面で見られる焼土層につながるもので、18 世紀第 2 四半期

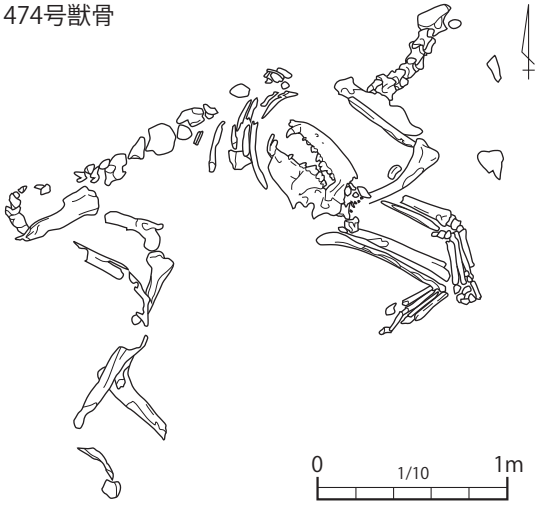


第 1-129 図　F-1 区 2 面の遺構（1）（1/60）



第 1-130 図　F-1 区 2 面の遺構（2）（1/60）

470号（SPA-A'）
1：10YR4/6(褐色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物φ5～10mm1%　砂質土層
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　砂ブロックφ10～100mm30%
黄褐色粘土φ5～10mm5%
3：10YR4/4(褐色)　しまり：強い　粘性：やや弱い　ローム粒φ1～5mm15%
白色砂粒30%　炭化物粒φ3～20mm5%
4：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm15%
砂ブロックφ10～40mm20%
5：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ローム粒φ2～5mm3%
砂ブロックφ5～50mm3%　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ5～10mm1%
6：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：弱い　ローム粒φ10～20mm2%
砂ブロックφ5～10mm20%　黒褐色粘土φ5～10mm3%
7：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　赤錆を含む
8：10YR4/4(褐色)　しまり：あり　粘性：弱い
にぶい黄褐色砂ブロックφ10～30mm10%　黄褐色粘土ブロックφ10～40mm10%
9：10YR4/4(褐色)　しまり：あり　粘性：弱い
10：10YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　粘土粒φ5～10mm5%
砂ブロックφ10～20mm3%　層上部に砂を多く含む砂質土層
11：10YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄褐色粘土ブロックφ10～50mm25%
砂質土層
12：10YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　ローム粒φ5～10mm10%
粘土粒φ5～10mm5%　砂質土層
13：10YR3/4(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い
ロームブロックφ10～30mm10%
14：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ5～20mm10%
にぶい黄褐色粘土φ5～10mm7%　砂質土層
15：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ10～30mm10%
砂ブロックφ40～60mm30%
16：10YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10～30mm15%
砂少量含む
17：10YR4/4(褐色)　しまり：やや弱い　粘性：弱い　粘土φ5～10mm5%
砂を多く含む砂質土層
18：10YR3/4(暗褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い　砂ブロックφ10～20mm10%
粘土ブロックφ10～15mm2%　砂質土層
19：10YR4/4(褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　ロームφ5～20mm5%
砂多い砂質土層
20：10YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　粘土ブロックφ30～50mm30%
21：10YR4/4(褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い　粘土ブロックφ5～20mm7%
砂多い砂質土層
22：10YR3/4(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い
ロームブロックφ10～30mm10%
23：10YR3/4(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　砂ブロックφ10～30mm3%
24：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ1～5mm2%
炭化物粒φ5～30mm10%　遺物を多く含む
25：2.5Y3/6(暗灰黄)　しまり：あり　粘性：強い　焼土粒φ1～2mm1%
炭化物φ3～5mm7%　粘質土層
26：10YR5/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ1～3mm3%
炭化物φ3～5mm7%　赤錆多い
27：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　ロームブロックφ10～30mm1%
砂を多く含む砂質土層
28：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　ロームブロックφ10～30mm1%
砂を多く含む砂質土層　27層よりも黄色砂の割合多い
29：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い　ローム粒φ3～10mm7%
砂ブロックφ5～10mm3%　ボソボソした土
30：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い　ローム粒φ1～5mm25%
31：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い　ローム粒φ1～5mm15%
ロームブロックφ10～50mm3%　砂ブロックφ10～30mm5%
炭化物粒φ10～20mm3%
32：7.5YR4/4(褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い
29層に対応するが赤味強く錆び多い　空隙多くボソボソした土層
33：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い　炭化物粒φ10～20mm2%
酸化した砂を含む
34：10YR4/3（にぶい黄褐色）　しまり：やや強い　粘性：あり
ロームブロックφ10～20mm10%　砂ブロックφ10～15mm7%
35：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm3%
炭化物粒φ5～10mm2%　錆が入る
36：10YR3/4(暗褐色)　しまり：極強　粘性：強い　ローム粒φ5～10mm7%
炭化物φ3～5mm5%　南斜面際にも堆積
37：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：弱い　黄褐色砂ブロックφ10～30mm30%
38：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　黄褐色砂を多く含む砂質土
39：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物粒～ブロックφ5～20mm5%
焼土粒φ1～5mm1%
40：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　若干砂を含む
41：10YR4/2（灰黄褐色）　しまり：やや強い　粘性：あり
ロームブロックφ20～30mm3%　焼土粒φ3～4mm2%　砂ブロックφ5～10mm5%
42：10YR4/2（灰黄褐色）　しまり：あり　粘性：あり　炭化物粒φ5～15mm15%
灰黄褐色粘土ブロックφ10～20mm10%
43：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　小石を多く含む
44：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
45：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　炭化物粒φ20～40mm10%
46：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　礫多い
47：10YR3/6(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ10～20mm5%
炭化物粒φ5～10mm10%
48：10YR2/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い　炭化物粒φ10～20mm5%
49：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり
ロームブロックφ20～50mm3%
50：10YR2/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　炭化物粒φ5～10mm5%
にぶい黄橙粘土粒φ10～20mm3%
51：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや弱い　粘性：あり　瓦多い　木片を含む
52：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや弱い　粘性：あり　遺物多い
53：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　炭化物粒φ10～20mm3%
54：10YR2/1(黒色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物φ10～60mm10%　木端層①に対応
55：10YR3/1(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ10～20mm3%　炭化物粒φ5～10mm7%
56：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　小石φ20～40mm多　貝片多
57：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　木端は20層より多く、かつ緻密
木端層②に対応
58：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い　黄褐色砂ブロックφ5～10mm15%　焼土粒φ3～5mm5%
59：10YR2/3(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い
黄褐色砂ブロックφ3～10mm10%　焼土粒φ3～8mm10%
炭化物φ10～15mm1%
60：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ5～10mm10%
炭化物粒φ5～10mm2%
61：104/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり
黄褐色砂質シルトブロックφ5～10mm2%　炭化物粒φ5～10mm3%
白色粒子φ1～2mm10%
470号　SPB-B'
1：10YR4/4(褐色)　しまり：強い　粘性：あり　砂質土層
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物粒φ5～10mm5%
礫・瓦・貝を多く含む
3：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　粘土粒φ5～10mm5%
砂質土
4：10YR3/4(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　ローム粒φ1～5mm2%
砂ブロックφ10～20mm15%　炭化物粒φ1～5mm1%
5：10YR3/4(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　砂ブロックφ5～30mm20%
6：10YR4/6(褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　砂層
7：10YR3/4(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　砂ブロックφ5～20mm10%
粘土ブロックφ5～10mm10%　粘土ブロックφ400～500mm10%
8：7.5YR6/3(にぶい褐色)　しまり：やや弱い　粘性：弱い　砂層
9：7.5YR6/3(にぶい褐色)　しまり：やや弱い　粘性：弱い　錆が入る　砂層
10：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂ブロックφ5～10mm3%
粘土ブロックφ10～20mm3%
11：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂質土層
12：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂ブロックφ5～10mm2%
粘土ブロックφ5～10mm2%　炭化物φ5～10mm3%
13：10YR4/4(褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　砂ブロックφ5～20mm30%
14：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　砂ブロックφ5～10mm10%
砂質土層
15：10YR4/3(褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　砂質土層
16：10YR3/2（黒褐色）　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ1～5mm2%
炭化物粒φ5～30mm10%　遺物を多く含む　SPA-A'24層に対応
17：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　ロームブロックφ10～30mm1%
砂をかなり多く含む砂質土　SPA-A'27層に対応
18：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い　ローム粒φ3～10mm7%
砂ブロックφ5～10mm3%　ボソボソした土　SPA-A'29層に対応
19：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い　ローム粒φ1～5mm15%
ロームブロックφ10～50mm3%　砂ブロックφ10～30mm5%
炭化物粒φ10～20mm3%
20：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い　炭化物粒φ10～20mm2%
酸化した砂を含む　SPA-A'33層に対応
21：10YR3/1(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　炭化物粒φ5～10mm10%
22：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm10%
焼土粒φ3～5mm1%　炭化物粒φ5～10mm1%
灰黄褐色(10YR5/2)粘土ブロックφ10～20mm2%
23：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm3%
炭化物粒φ5～10mm2%　錆が入る　SPA-A'35層に対応
24：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　炭化物粒φ5～10mm5%
黄褐色砂粒7%　灰黄褐色粘土ブロックφ10～15mm5%　小円礫7%
25：10YR2/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　炭化物粒φ5～30mm15%
灰黄褐色粘土ブロックφ20～40mm15%
26：10YR3/6(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ10～20mm5%
炭化物粒φ5～10mm10%　SPA-A'47層に対応
27：10YR3/4(暗褐色)　しまり：極強　粘性：強い　ローム粒φ5～10mm7%
炭化物φ3～5mm5%
28：10YR2/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　炭化物ブロックφ10～30mm10%　灰黄褐色粘土ブロック7%　貝片7%
29：10YR2/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　にぶい黄橙粘土粒φ10～20mm3%　炭化物粒φ5～10mm5%　SPA-A'50層に対応
30：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　炭化物粒φ5～10mm5%
灰黄褐色粘土ブロックφ10～30mm10%　貝片10%
31：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　小石φ20～40mm多　貝片多
32：10YR3/1(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　炭化物粒φ5～10mm15%
貝片少量　SPA-A'56層に対応
33：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物粒φ5～10mm15%
黄褐色砂ブロックφ10～20mm2%
34：10YR2/3(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い
黄褐色砂ブロックφ3～10mm10%　焼土粒φ3～8mm10%　炭化物φ10～15mm1%
SPA-A59層に対応





1.　474号獣骨検出状況(南から)

第 1-131 図　F-1 区 2 面の遺構（３）(1/10)

の享保 12 年（1727）または享保２年（1717)、あるいは 18 世紀第 1 四半期の未知の火災によるものと判断される。また、3-1 面と同様に、旗本成瀬家屋敷の時期にあたる面であり、北西から南東に向かって傾斜している。

3-2 面で検出された遺構は北～北西～西に多く分布しており、そこでは礎石建物跡や溝、地下室などが見られた。3-2 面からは溝３条、地下室３基、土坑 13 基、礎石３基、ピット 48 基、杭列１条、砂利敷１基が検出された。

【建物跡】

建物跡６（第 1-143 図、第 3-16 表）

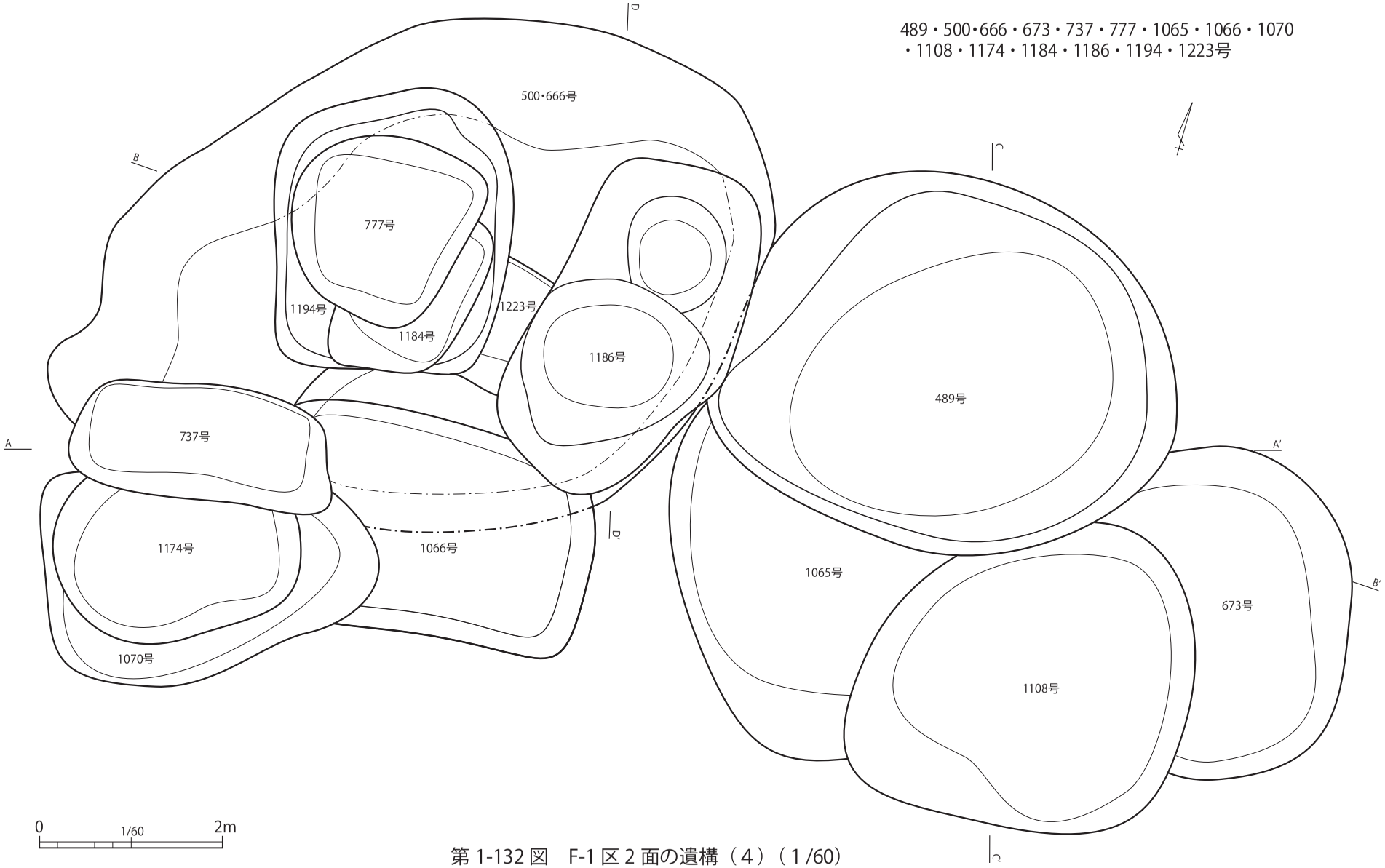
建物跡６は F-1 区西端に位置し、723 号、699 号、772 号、726 号、739 号、759 号、1074 号、1139 号により構成される建物跡である。建物跡６を構成するこれらのピットのなかで、礎石をもつものは確認されなかった。しかし、これらのピットすべてが礎石が据えられたと考えられる、ロームブロックや粘土ブロック、シルトブロック、砂を固めた硬化面をもっていることを確認した。このことから建物跡６は礎石建物跡であったと判断した。ピットの間隔はおよそ２ｍで、遺構の規模は残存部分で長辺６ｍ、短辺が４ｍであった。

遺構の重複関係は、725 号を切るが、3-1 面の遺構 750 号・1004 号・1008 号と 3-2 面の遺構 700 号・727 号・740 号に切られている。

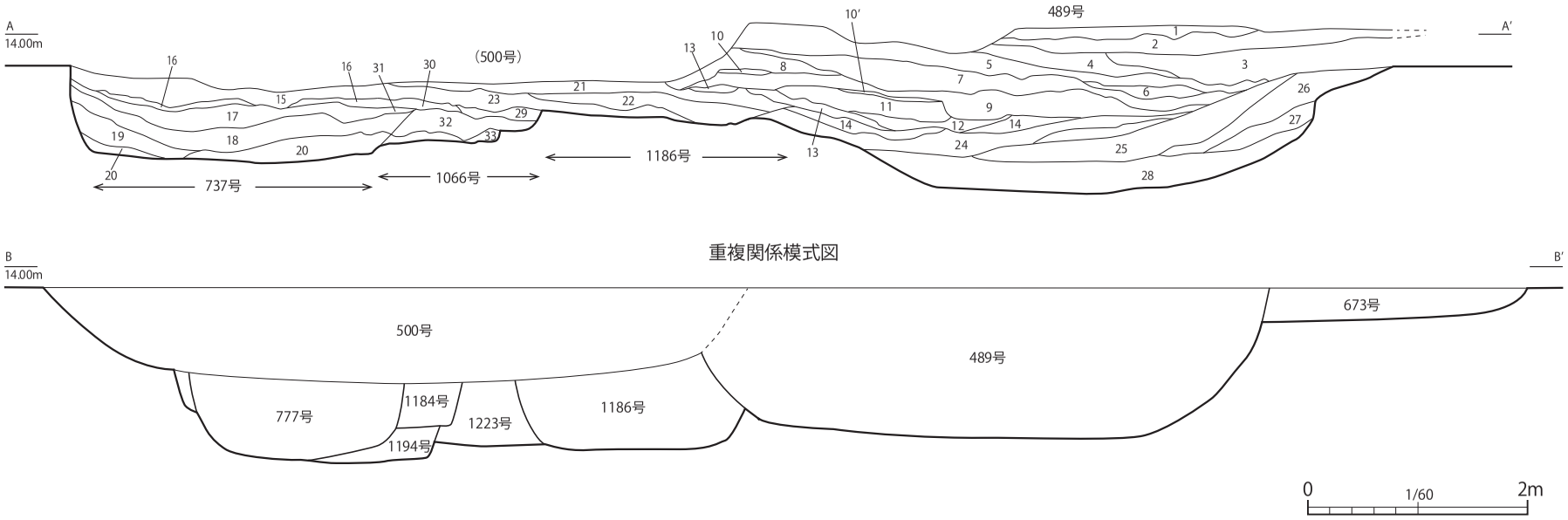
【溝】

1018 号（第 1-146 図、図版 3-57-2、第 3-16 表）

1018 号は F-1 区北壁沿いに東西に走る溝である。西側調査区外から東側の H-1 区へと続いているが、H-1 区では検出されなかったことから F-1 区と H-1 区の間の攪乱内で収束したものと考えられる。また、1018 号は 1019 号・1020 号・1053 号に切られている。1018 号はさほど深くない溝であるが、中央部が一段深く掘り込まれており、全体が東へ向かって傾斜している。SPA-A′は１層が 1054 号、２層から４層が 1053 号、５層から８層が 1018 号の覆土にあたる。1054 号は 1053 号を切る円形のピットである。1053 号は 1018 号を切る浅い不整円形の土坑で、覆土は２層から４層の３層に分かれるが、



第 1-132 図　F-1 区 2 面の遺構（4）（1/60）



SPA-A′

1：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：やや強い　ロームブロックφ30～40mm5%

2：10YR8/4(浅黄橙色)　砂質シルト　しまり：やや強い　粘性：あり

3：10YR3/1(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　褐灰(10YR5/1)色粘土ブロックφ20～30mm5%

4：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い　焼けた瓦細片3%

5：10YR5/6(黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ3～10mm10%　ロームブロックφ15～7%　黄色砂5%　黄色砂ブロックφ10～5%　炭化物粒φ3～10mm5%

6：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い　砂質シルト粒５%　炭化物粒15%　粘土粒５%

7：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ3～5mm20%　ロームブロックφ15～5%　黄色砂ブロックφ5～15mm15%　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ3～10mm7%　黄灰色粘土粒φ5～10mm7%

8：10YR5/1(褐灰色)　しまり：やや強い　粘性：あり　グライ化した砂質土層

9：10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり：極強　粘性：強い　ローム粒φ1～5mm15%　ロームブロックφ15mm3%　黄色粒(砂)1%　焼土粒φ1～5mm3%　炭化物粒φ3～10mm7%

10・10′：10YR5/6(黄褐色)　しまり：極強　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm40%　白色粒φ1～2mm3%　薄い硬化面

11：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　黄灰砂ブロックφ10～20mm2%　白色粒φ1～2mm3%

12：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒φ3～5mm7%　炭化物粒φ3～10mm15%　黄色砂3%

13：2.5Y6/6(明黄褐色)　しまり：極強　粘性：弱い　炭化物φ5～7mm3%　小石1%　黄褐色砂主体　薄い硬化面

14：10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ5～10mm15%　白色粒φ1～2mm5%

15：2.5Y5/2(暗黄灰)　しまり：極強　粘性：極強　ロームブロックφ15mm5%(斑文状)　黄灰色砂3%　暗黄灰色粘土主体　焼土粒φ1～5mm2%　炭化物粒φ3～5mm2%(硬化面)

16：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ロームブロックφ15～30mm10%　黄灰色砂3%

17：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ロームブロックφ10～15mm7%　黄灰色砂3%

18：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　白色粒φ1～2mm3%　褐灰(10YR5/1)色粘土ブロックφ20～30mm3%

19：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm3%　焼土粒φ5～10mm1%　炭化物粒φ5～10mm5%

20：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：極強　粘性：強い　ロームブロックφ20～40mm3%

21：2.5Y5/1(黄灰色)　しまり：強い　粘性：極強　灰白色粘土(2.5Y7/1)φ5～10mm7%　炭化物粒φ3～10mm10%　黄灰色粘土主体

22：2.5Y5/2(暗黄灰色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ5～10mm10%　炭化物粒φ5～10mm5%　黄灰色砂3%

23：2.5Y5/2(暗黄灰色)　しまり：極強　粘性：極強　ロームブロックφ15mm5%(斑文状)　黄灰色砂3%　暗黄灰色粘土主体　焼土粒φ1～5mm2%　炭化物粒φ3～5mm2%(硬化面)

24：2.5Y5/2(暗黄灰色)　しまり：極強　粘性：極強　ロームブロックφ15mm5%(斑文状)　黄灰色砂3%　暗黄灰色粘土主体　焼土粒φ1～5mm2%　炭化物粒φ3～5mm2%(硬化面)

25：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　ローム粒φ5～10mm2%　焼土粒φ3～10mm5%　焼土ブロックφ15～5%　炭化物粒φ3～10mm2%

26：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　ローム粒φ3～10mm3%　炭化物粒φ5～10mm2%

27：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm3%　炭化物粒φ5～10mm5%

28：2.5Y2/1(黒色)　しまり：やや強い　粘性：強い　ロームブロックφ20～40mm2%　炭化物粒φ5～10mm2%　木片を多量に含む

29：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ロームブロックφ115～30mm10%　白色粒子φ1～5mm2%

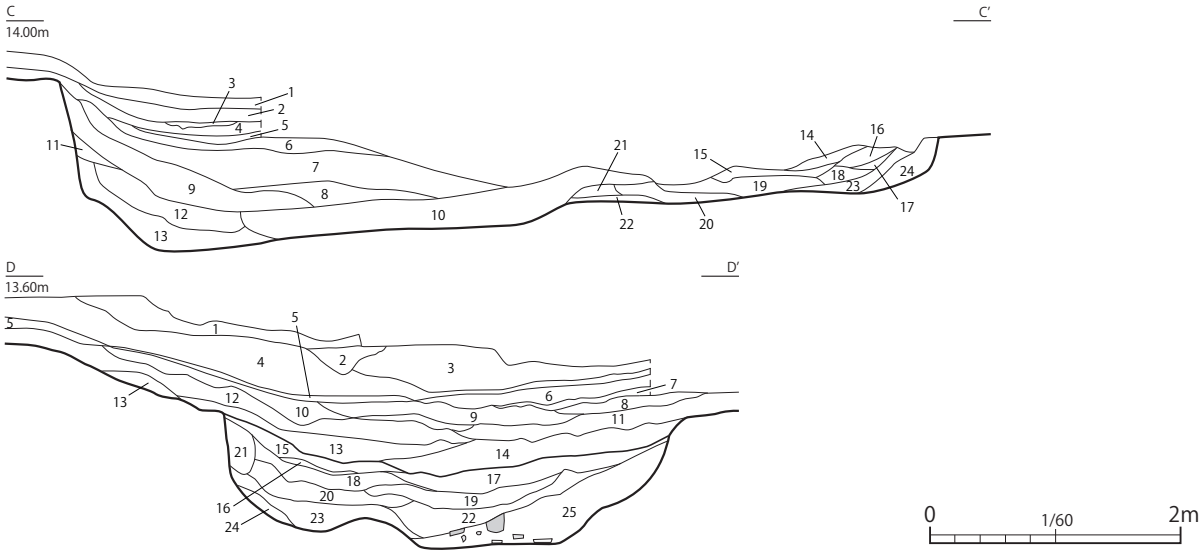
30：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ロームブロックφ15～30mm10%　黄灰色砂3%

31：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10～15mm7%　黄灰色砂3%

32：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　褐灰(10YR5/1)色粘土ブロックφ20～30mm3%　白色粒φ1～2mm3%

33：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：極強　粘性：強い　ロームブロックφ20～40mm3%

第 1-133 図　F-1 区 2 面の遺構（５）（1 /60）



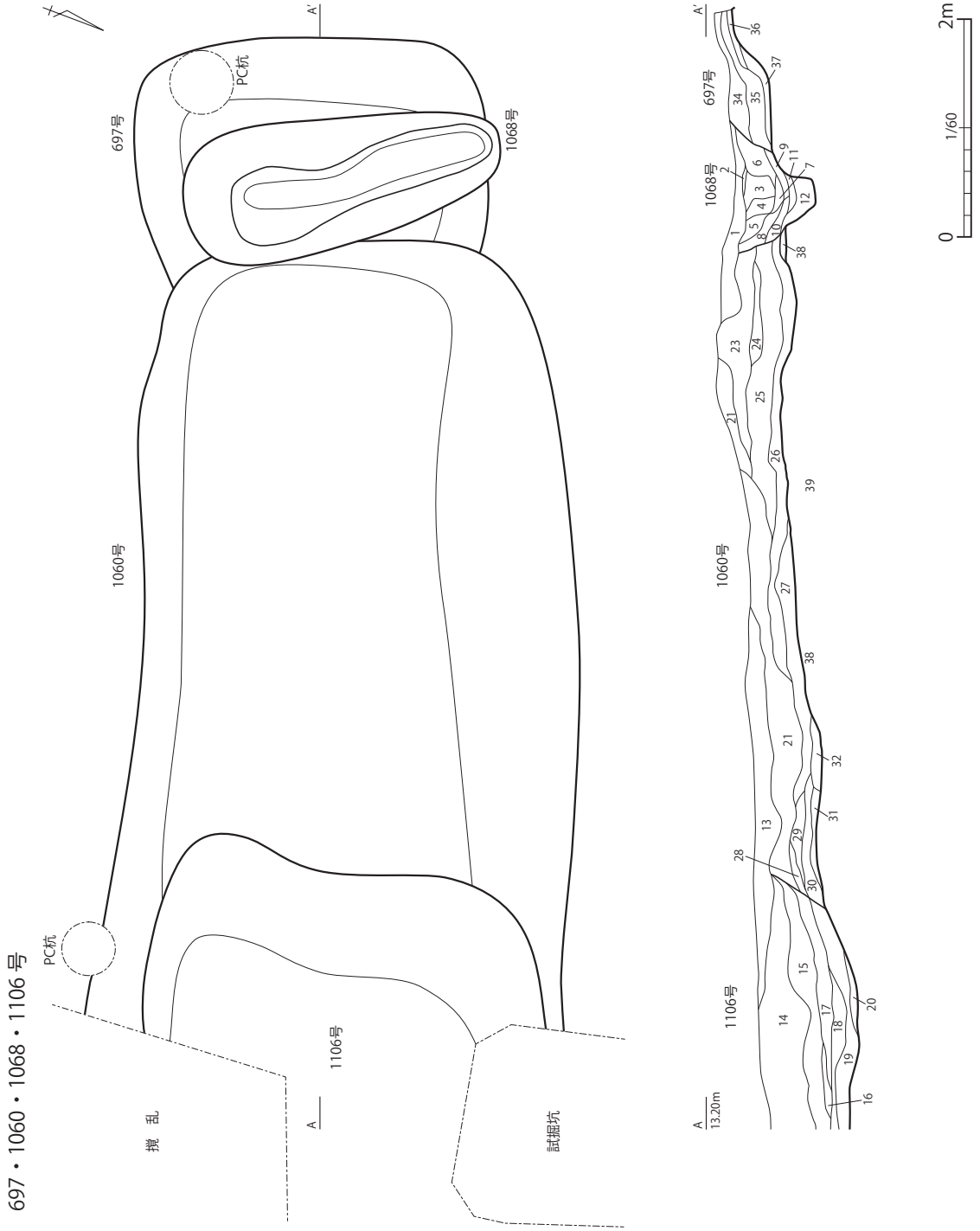
SPC-C′

1：10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり：あり 粘性：弱い 黄色砂 5% 焼土粒φ1 ～ 3mm1% 炭化物φ1 ～ 3mm3% 近世 1 面盛土
2：10YR4/4(褐色) しまり：あり 粘性：あり ローム粒φ5 ～ 10mm5% 黄色砂ブロックφ5 ～ 10mm7% 焼土粒φ1 ～ 3mm2% 炭化物 2φ3 ～ 5mm5%
3：2.5Y7/3(浅黄色) 砂層
4：10YR4/2（褐灰色） しまり：強い 粘性：強い 炭化物ブロック 15 ～ 30mm15% 焼土粒φ1 ～ 5mm5% 小石 5% 遺物を多量に含む 近世 1 面盛土
5：2.5Y7/3(浅黄色) 砂層
6：10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり：あり 粘性：強い ローム粒φ3 ～ 5mm3% 灰白色粘土φ5mm1% 焼土粒φ1 ～ 3mm2% 炭化物φ1 ～ 3mm3%
7：2.5Y4/1(黄灰色) しまり：弱い 粘性：あり ローム粒φ1 ～ 3mm2% 焼土粒φ3 ～ 5mm3% 炭化物φ3 ～ 5mm3% 内容物少なく空隙弱い
8：10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり：弱い 粘性：強い ローム粒φ1 ～ 3mm2% 内容物極少ない
9：10YR4/1(褐灰色) しまり：強い 粘性：極強 焼土粒φ1 ～ 5mm5% 炭化物φ10 ～ 20mm20% 小石 5% 遺物・木片を大量に含む
10：10YR4/1(褐灰色) しまり：弱い 粘性：極強 木片を多量に含む
11：10YR4/1(褐灰色) しまり：弱い 粘性：極強 木片を少量に含む
12：10YR5/1(褐灰色) しまり：あり 粘性：極強 焼土粒φ1 ～ 5mm3% 瓦・木片を多く含む 粒子径の内容物は少ない シルト質土層
13：10YR4/2(灰黄褐色) しまり：弱い 粘性：強い ローム粒φ1 ～ 5mm3% 焼土粒φ1 ～ 3mm3% 炭化物φ1 ～ 10mm5%
14：10YR3/3(暗褐色) しまり：あり 粘性：あり 焼土粒φ3 ～ 5mm3% 炭化物φ10 ～ 30mm5%
15：10YR3/2(黒褐色) しまり：あり 粘性：あり 黄褐色砂粒φ3 ～ 5mm10% 炭化物φ10 ～ 30mm10%
16：10YR4/2(灰黄褐色) しまり：やや強い 粘性：あり 焼土粒φ3 ～ 5mm5% 炭化物φ10 ～ 20mm3%
17：10YR4/2(にぶい黄褐色) しまり：あり 粘性：やや弱い 炭化物φ5 ～ 10mm2%
18：10YR3/2(黒褐色) しまり：やや強い 粘性：あり 瓦多い
19：10YR4/1(褐灰色) しまり：あり 粘性：あり にぶい黄褐色砂混じり土ブロックφ30 ～ 50mm30% 炭化物φ10 ～ 30mm10%
20：10YR3/3(暗褐色) しまり：やや強い 粘性：あり 黄褐色砂ブロックφ5 ～ 10mm7%
21：2.5Y7/6(明黄褐色) 砂層 灰白色粘土 (2.5Y8/1)φ10 ～ 30mm5%
22：10YR3/2(黒褐色) しまり：やや強い 粘性：やや強い
23：10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり：あり 粘性：あり 炭化物φ5 ～ 10mm7%
24：10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり：あり 粘性：あり 黄褐色砂ブロックφ5 ～ 10mm10%

SPD-D′

1：10YR5/8(黄褐色） しまり：強い 粘性：あり ロームブロックφ15mm15% 砂 5% 焼土粒φ1 ～ 3mm3% 炭化物粒φ3 ～ 5mm5%
2：10YR4/3(にぶい黄褐色） しまり：あり 粘性：あり ローム粒φ5 ～ 10mm15% 黄色砂 3% 炭化物粒φ2 ～ 3mm3% 灰白色粘土粒φ3 ～ 5mm3%
3：10YR5/3(にぶい黄褐色） しまり：弱い 粘性：あり ローム粒φ1 ～ 10mm10% 焼土粒φ1 ～ 2mm1% 炭化物粒φ1 ～ 5mm5%
4：2.5Y5/3(黄褐色) しまり：極強 粘性：弱い 黄色砂 20% 錆びたローム粒φ5 ～ 10mm5% ロームブロックφ15 ～ 20mm10% 炭化物φ3 ～ 5mm5%
5：10YR5/6(黄褐色) しまり：極強 粘性：あり ローム粒φ5 ～ 10mm40% 白色粒φ1 ～ 2mm3% 薄い硬化面
6：10YR5/1(褐灰色) しまり：やや強い 粘性：あり グライ化した砂質土層
7：10YR5/6(黄褐色) しまり：極強 粘性：あり ローム粒φ5 ～ 10mm40% 白色粒φ1 ～ 2mm3% 薄い硬化面
8：10YR5/3(にぶい黄褐色) しまり：極強 粘性：強い ローム粒φ1 ～ 5mm15% ロームブロックφ15mm3%
9：10YR3/1(黒褐色) しまり：やや強い 粘性：強い ローム粒φ5 ～ 10mm5% 木片含む
10：10YR4/2(褐灰色) しまり：極強 粘性：弱い 焼土粒φ1 ～ 3mm1% 炭化物粒φ1 ～ 3mm1% 砂 3%
11：2.5Y5/1(黄灰) しまり：強い 粘性：極強 灰白色粘土 (2.5Y7/1)φ5 ～ 10mm7% 炭化物 黄灰色粘土主体
12：10YR5/1(褐灰色) しまり：強い 粘性：強い ローム粒φ3 ～ 5mm7% 焼土粒φ3 ～ 5mm5% 炭化物粒φ5 ～ 10mm15% 小石 5%
13：10YR6/1(褐灰色) しまり：強い 粘性：強い ローム粒φ1 ～ 5mm3% 焼土粒φ1 ～ 32%(硬化面) 炭化物φ3 ～ 10mm5% 赤錆 褐灰色粘質土層
14：2.5Y5/2(暗黄灰色 しまり：強い 粘性：強い ローム粒φ5 ～ 10mm10% 炭化物粒φ5 ～ 10mm5% 黄灰色砂 3%
15：10YR5/6(黄褐色) しまり：極強い 粘性：あり ローム粒φ3 ～ 10mm60% 白色粒 (砂)3% 炭化物粒φ3 ～ 10mm3% 赤錆
16：10YR5/2(灰黄褐色) しまり：弱い 粘性：強い 黄褐色砂 5% 褐灰色粘土粒φ3 ～ 10mm30% 木片多量
17：10YR3/1(黒褐色) しまり：やや強い 粘性：強い ローム粒φ5 ～ 10mm5% 木片含む
18：2.5Y3/2(黒褐色) しまり：弱い 粘性：極強 黄灰色砂 5% 炭化物φ3 ～ 10mm 7% 木片多量 粘土層
19：10YR4/1(褐灰色) しまり：やや強い 粘性：強い 炭化物粒φ10 ～ 20mm3% 木端含む 砂がまざる粘質土
20：2.5Y5/2(暗灰黄色) しまり：弱い 粘性：極強 黄褐色砂 10% 炭化物φ5 ～ 15mm15% 空隙多 遺物多量 木片多量
21：2.5Y5/2(暗灰黄) しまり：強い 粘性：強い ローム粒φ1 ～ 3mm3% 焼土粒φ3 ～ 5mm5% 炭化物φ3 ～ 10mm10%
22：10YR2/2(黒褐色) しまり：やや強い 粘性：強い 木片多量
23：2.5Y5/1(黄灰色) しまり：弱い 粘性：極強 ロームブロックφ15mm10% 褐色砂 (7.5YR3/3)5% 炭化物φ3 ～ 5mm7% 焼けぶくれた瓦を多く含む 遺物多量 木片多量 黄灰色粘土主体
24：10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり：あり 粘性：あり ローム粒φ1 ～ 3mm2% 焼土粒φ1 ～ 2mm1% 炭化物粒φ1 ～ 2mm2% 壁崩落土
25：10YR4/1(褐灰色) しまり：やや強い 粘性：やや強い 木片含む 砂混じり粘質土層

第 1-134 図 F-1 区 2 面の遺構（6）（1/60）



第 1-135 図　F-1 区 2 面の遺構（7）（1/60）

697号・1060号・1068号
1：10YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10～30mm20%
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10～20mm30%
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10～15mm3%　焼土粒φ3～5mm2%　炭化物粒φ5mm程度5%
4：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10～20mm30%
5：10YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10～20mm10%
6：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄色(2.5Y8/6)砂ブロックφ5～10mm5%　焼土粒φ5～10mm1%　炭化物粒φ5～10mm5%
7：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　ローム粒φ3～5mm10%　焼土粒φ3～5mm2%
8：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い　ローム粒φ5～10mm5%　炭化物粒φ5～10mm7%
9：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い　ローム粒φ5～10mm5%　炭化物粒φ5～10mm7%
10：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　黄色砂ブロックφ3～5mm3%　焼土粒φ5～10mm2%　炭化物φ5～10mm2%
11：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い　黄色砂(2.5Y8/6)30%　炭化物粒φ3～5mm2%
12：10YR2/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　炭化物φ10～30mm3%
13：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ロームブロックφ5～10mm10%　炭化物粒φ5～10mm5%　焼瓦細片φ10～20mm
14：2.5Y5/6(黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　15層との層理面が凹凸激しい崩落の痕跡か
15：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：あり　にぶい黄橙色(10YR6/4)砂質シルトブロックφ30～40mm30%
16：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　砂質シルトブロックφ10～40mm10%　炭化物粒φ5～10mm3%　白色粒子φ1～5mm7%
17：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm3%　炭化物粒φ5～15mm5%　白色粒子φ～2mm10%
18：10YR4/4(褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ローム粒φ3～10mm10%　炭化物粒φ5～10mm5%
19：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ローム粒φ3～5mm5%　白色粒子φ～2mm7%
20：7.5YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　焼土粒φ3～10mm5%
21：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ3～5mm2%　焼土粒φ3～5mm3%　炭化物粒φ5～10mm1%
22：7.5YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　焼土粒φ5～10mm15%
23：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ローム粒φ1～3mm2%　炭化物粒φ3～5mm2%　白色粒子φ～2mm7%
24：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm5%　にぶい黄橙(10YR7/2)砂質シルトブロックφ20～40mm40%
25：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　白色粒子φ1～2mm2%
26：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ロームブロックφ10～40mm20%　にぶい黄橙(10YR7/2)砂質シルトブロックφ20～40mm10%
27：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10～20mm15%
28：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10～20mm5%　黄褐色(10YR5/6)砂が筋状に入る
29：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ローム粒φ3～5mm3%　白色粒子φ～2mm2%
30：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ3～5mm15%　ロームブロックφ10～30mm10%
31：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ10～20mm10%　炭化物粒φ5～10mm2%
32：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm10%　黄褐色砂ブロックφ10～20mm1%　焼土粒φ5～10mm1%
33：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　浅黄色(2.5Y7/4)砂質シルトブロックφ10～20mm10%　黄色(2.5Y7/8)砂質シルトブロックφ10～20mm10%
34：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや弱い　粘性：あり　焼土粒φ3～5mm2%　炭化物粒φ5～10mm15%
35：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　ローム粒φ3～5mm5%　砂粒3%
36：2.5Y6/8(明黄褐色)　しまり：弱い　粘性：なし　砂層

いずれも黄褐色の砂をブロック状に含む土層である。1018 号の覆土は上層で焼土粒が多く、下層で炭化物粒が多く見られた。SPB-B′では 1 層が 1019 号の覆土、2 層・3 層が 1018 号の覆土にあたる。1019 号の覆土である 1 層は褐白色粘土ブロックを多く含む層である。1018 号の覆土は、2 層が炭化物粒と黄褐色の砂を多く含み、3 層は黄褐色砂質シルトブロックと焼土粒を多く含む層である SPC-C′では 1 層から 5 層が 1020 号の覆土にあたり、1 層は柱痕である。1018 号の覆土は 6 層と 7 層がそれにあたり、6 層は SPB-B′2 層、7 層は SPB-B′3 層に対応している。

1018 号から出土した遺物の点数、重量は 507 点、13,392.8g で、18 世紀第 3 四半期を主体とする。覆土中の焼土には被熱遺物を含むが、下位の 3-3 面焼土層（寛文 8 年火災）の遺物と組成が一致し接合も多数認められるなど親和性が高いことから、焼土層を掘り返してすぐ埋め戻したものと考えられる。

【地下室】

738 号（第 1-144 図、図版 3-57-1、第 3-16 表）

738 号は長方形の地下室で、F-1 区西端から検出された。壁面は底面から真っすぐに立ち上がるが、中ほどから屈曲し外に開いていく。すべての壁面で屈曲していることから、壁面の崩落ではないと判断した。底面は中央部付近が落ちくぼむようにやや深くなっている。この落ちくぼむ部分には砂質シルトブロックを含む黄褐色土（第 1-144 図 18 層）が堆積していた。また、付随するピットや杭穴、側板などは検出されていない。遺構の規模は長辺が 3.35m、短辺が 2.25m となる。覆土は 18 層に分けられる。 1 層から 14 層は 3-1 面盛土層に由来すると考えられる層で、黄褐色の砂や砂質シルトブロック、粘土ブロックを含んでいた。なお、 9 層は炭化物層である。15 層は酸化した砂の層である。錆により硬く固まっており、16 層以下をパックしていた。16 層から 18 層は砂質シルトブロックを含む層で、16 層はこの他に黄褐色の砂や炭化物粒を含んでいた。また、17 層は砂質土層である。16 層から 18 層は粘質土層ではないものの、砂層であった 15 層に水が溜まるような状況であったと考えられる。738 号から出土した遺物の点数、重量は 502 点、13,190.0g であった。出土遺物から 18 世紀第 2 四半期に位置づけられる。

740 号（第 1-145 図、図版 3-56-5、第 3-16 表）

740 号は長方形の地下室で、738 号のすぐ東側で検出された。南側を 2 面の遺構である 500・666 号に切られている。東西の壁面は 738 号と同様に底面から真っすぐに立ち上がるが、中ほどから屈曲し外に開いていた。北壁は廃絶後の壁面の崩落によるものか、凹凸が見られた。北側の底面は平坦であるが、途中から南へと傾斜している。また、付随するピットや杭穴、側板などは検出されていない。遺構の規模は長辺が 2.50m、短辺が 1.84m となる。覆土は 6 層に分かれる。 1 層はしまりの強い砂質シルト層である。 1 層、 2 層、 4 層は炭化物を含むが、特に 4 層は多量に含んでいる。最下層である 5 層は黄褐色の砂を含む層で、φ 10 ～ 20㎝程度の礫を含んでいた。740 号から出土した遺物の点数、重量は 1,076 点、34,871.4g で、18 世紀前葉を主体とする。出土遺物には肥前産色絵濁手猪口 2 客揃い（第 2-37 図 595）や京焼など優品を含むほか、化粧関連用具（紅猪口、合子）が目立つ。また、470 号と遺構間接合が認められた。

【土坑】

1295 号（第 1-145 図、第 3-16 表）

1295 号は東側が突き出た崩れた楕円形の土坑で、1299 号を切る。北側の壁面はなだらかに立ち上がっているが、東側の壁面は段状に掘り込まれている。底面は平坦で、凹凸は少ない。覆土は 10 層に分かれる。10 層は黄褐色砂ブロック層である。 1 層、 2 層、 4 層、 7 層から 9 層はローム粒や砂、焼土、炭化物などを含む層である。 3 層、 5 層、 6 層は砂を非常に多く含む層である。1295 号から出土した遺物の点数、重量は 303 点、8,142.5g で、時期は 17 世紀中葉から 18 世紀後葉まで幅広いが、後出する 18 世紀中～後葉の遺物は新旧関係にある 1166 号の遺物群に様相が近く、1166 号からの流れ込みである可能性が高い。よって、廃絶年代は 18 世紀前半と考えられる。

【ピット】（第 1-147 図、第 3-16 表）

3-2 面では建物跡 6 を構成する遺構を除くピットが 48 基検出された。これらに規則的な配列は見られず、柱痕をもつものもわずかであった。ここでは柱痕をもつなどの代表的なものを図示した。

E　3-3 面

3-2 面焼土層下から確認された 3-3 面焼土層上を 3-3 面として調査を行った。3-1 面や 3-2 面と同じく、北西から南東に向かって傾斜し、各面の焼土層の間には薄い盛土層が堆積する。また、3-3 面焼土層は 3-1 ～ 3-3 面のなかでは最も広域に広がる焼土層で、先述の通り、寛文 8 年（1668）の火災層と考えられ、H-1 区 3-3 面や H-2 区 3-3 面の焼土層につながるものである。3-3 面では焼土層が 3-1 ～ 3-3 面の中で最も広く堆積するものの、検出された遺構は少なく、礎石 1 基、土坑 7 基、ピット 23 基、獣骨 1 体となっている。複数検出されたピットは、1082 号等柱痕を持つものがあるが（第 1-148 図）、等間隔に並ぶような状況は確認できなかった。

【イヌ埋葬跡】

1073 号（第 1-148 図、第 3-16 表）

掘り込みの平面形は円形で、底面から獣骨（イヌ）の全身骨格が検出された。イヌの頭位方向は西を向いており、脚が南を向いて横たえられた状態で確認された。検出状況からこの獣骨は埋葬されたものである可能性が高い。推定される体高は 49㎝である（第Ⅷ章第 3 節参照）。出土した遺物の点数、重量は 97 点、3,241.5g である。

Ｆ　４面

F-1 区 4 面は 3-3 面焼土層下にあり、寛文 8 年（1668）の火災直前と考えられる面だが、一部同火災に伴う火災処理遺構と考えられる遺構も含まれる（1138 号）。4 面は 3 面と同様に旗本成瀬家屋敷の時期にあたり、H-1 区 4 面や H-2 区 4 面に対応する。4 面は北西から南東に向かって傾斜しており、南東端が最も標高が低い。調査中央部に遺構がややまとまっており、特にピットが多く検出されているが、1135 号や 1157 ～ 1159 号のように浅いものが多く（第 1-149 図）、規則的な配列も確認出来なかった。4 面からは溝 2 条、硬化面 1 基、粘土範囲 1 基、炭化物集中 1 基、土坑 13 基、ピット 42 基が検出された。

【土坑】

1101 号（第 1-149 図、第 3-16 表）

1101 号は 1155 号を切る方形の土坑で、南側の一部を 2 面で確認されている 489 号に切られている。1101 号は壁面、底面ともに凹凸が顕著である。また、底面は北に向かって傾斜しており、北側の壁面はややハングしている。覆土は 4 層に分かれる。1 層から 3 層は砂質土層で、4 層は砂質シルトブロックを含む層である。出土した遺物の点数、重量は 21 点、247.5g である。出土した遺物から遺構の年代は 17 世紀後葉以降と考えられる。

1124 号（第 1-149 図、第 3-16 表）

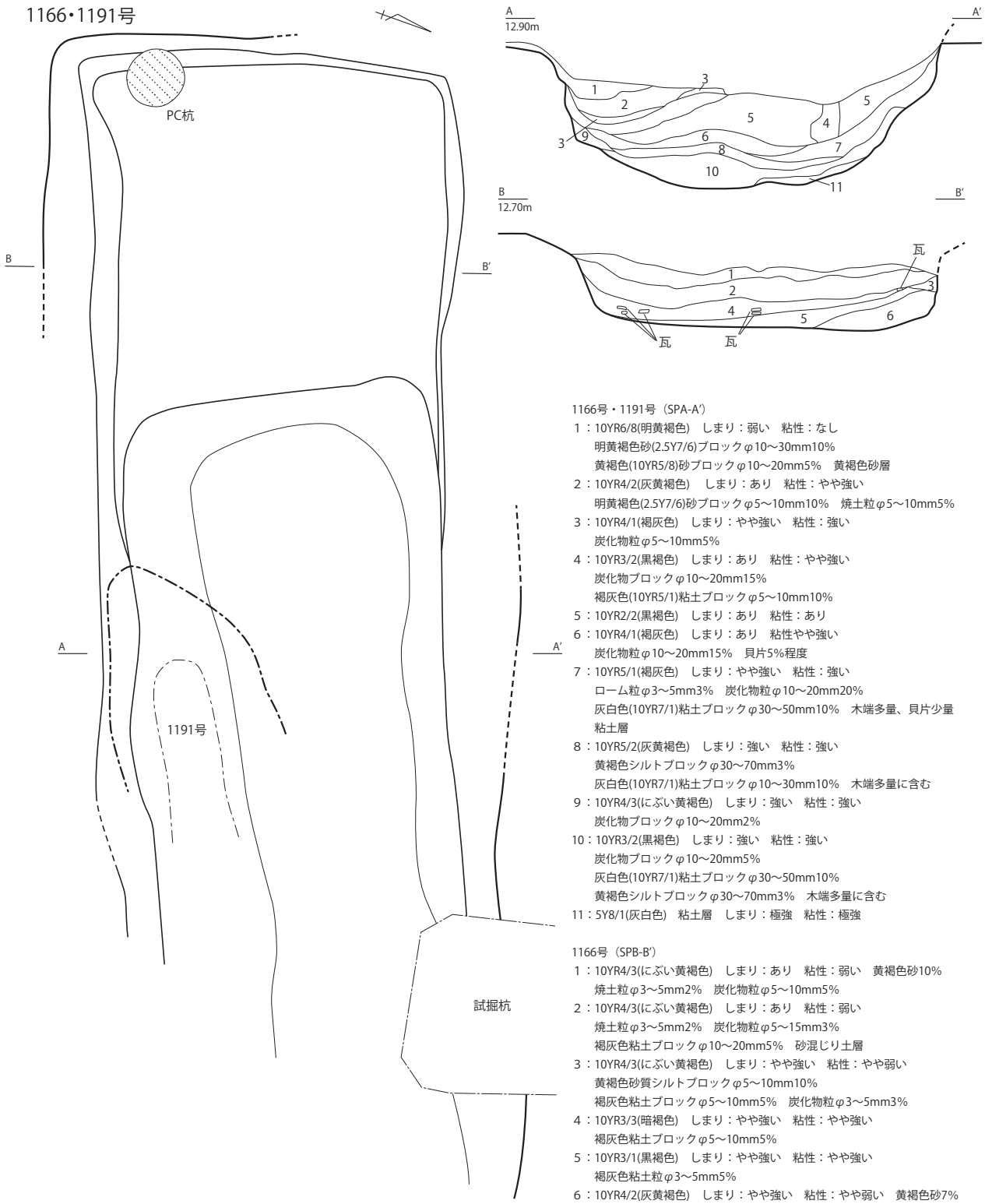
1124 号は円形の土坑である。中央部を 3-3 面の遺構である 1084 号に切られている。また、4 面の遺構 1155 号と 1138 号を切る。壁面はやや緩やかに外に開きながら立ち上がるが、西側は段状に掘り込まれている。底面は南に向かって傾斜している。覆土は 3 層に分かれるが、1 層は 3-3 面 1084 号の一部である可能がある。2 層と 3 層は確実に 1124 号の覆土と考えられる層で、2 層は砂や焼土粒を含み、3 層は粘土ブロックを含む。1124 号から出土した遺物の点数、重量は 12 点、287.2g である。

1138 号（第 1-149 図、第 3-16 表）

1138 号は方形の土坑で、西側を 1124 号に切られている。北壁の上部が崩落しているものの、壁面は真っすぐに立ち上がっている。底面は中央部に楕円形の凹みを持つ。覆土は 2 層に分かれる。1 層は焼土層で炭化物や灰を含んでいる。2 層は底面に薄く堆積する炭化物層で、焼土や灰は含まない。このように覆土の大半を焼土が占めているが、壁面や底面は被熱した痕跡は見られなかった。焼土処理坑として用いられた可能性も考えられるだろう。遺物の出土はなかったが、莚状の炭化繊維材を検出した。覆土の状況から 3-3 面焼土層と同様に寛文 8 年（1668）の火災に伴うものと考えられる。1121 号 (第 1-149 図、図版 3-57-3) なども同様の時期の遺構と考えられる。

Ｇ　５面

F-1 区 5 面は H-1 区 5 面や H-2 区 5 面に対応し、旗本成瀬家屋敷のあった時期にあたる。5 面では調査区北東隅に、タタキ状に粘土が盛られ固められた箇所が確認された（図版 3-57-4）。このタタキ状の箇所の北側は調査区外へと続いており、東側は 1255 号、南側は 1225 号に画される。1255 号は溝、1225 号は落ち込みとして調査を行ったが、特に 1225 号は 5 面盛土層との差がほとんど判別のつかない落ち込みであることからタタキ部分は 5 面盛土層上にマウンド状に盛られていた可能性も考えられる。タタキ上からは礎石、ピットが確認されている。また、タタキ周辺以外では遺構の分布は散漫で

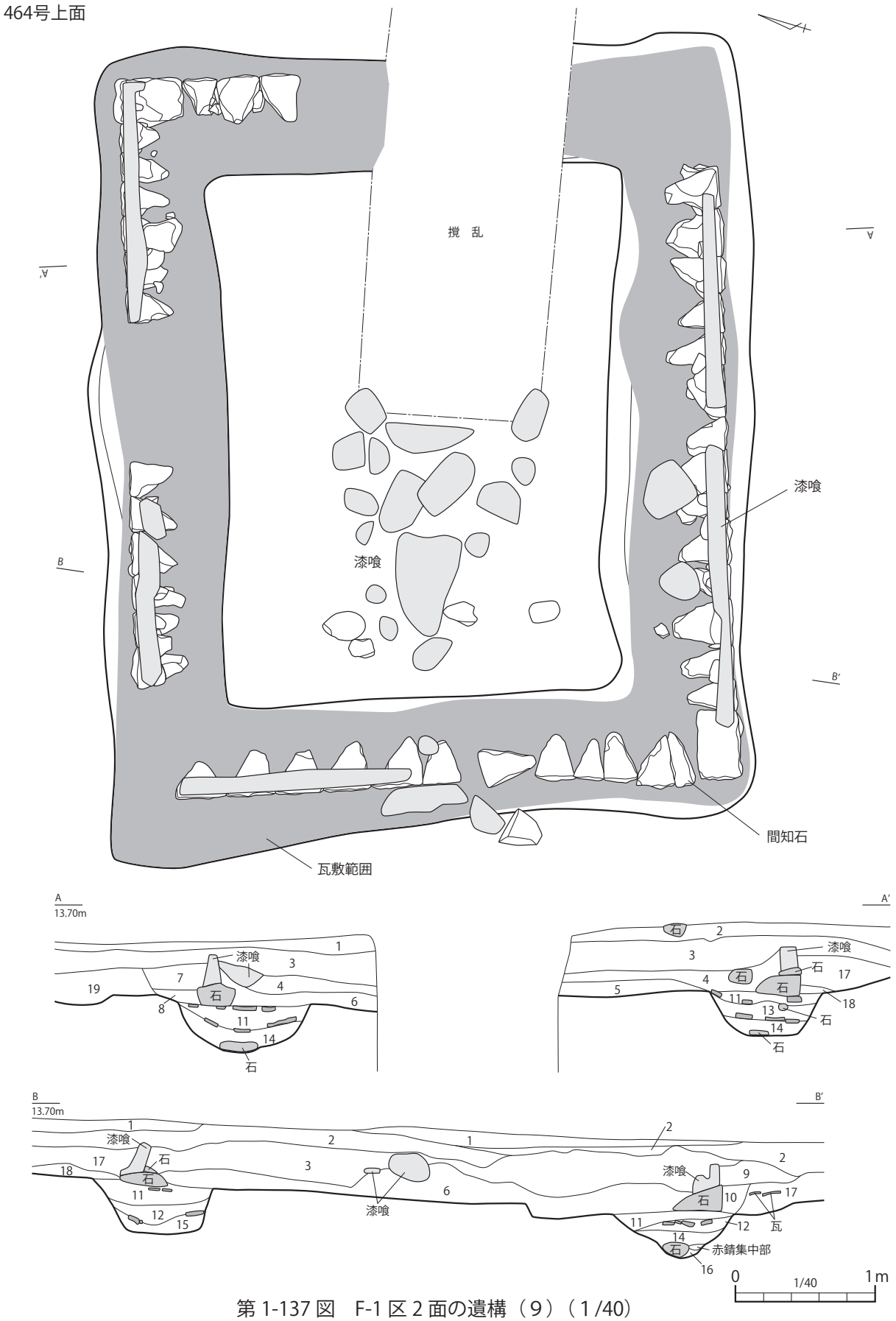


1166号・1191号（SPA-A′）
1：10YR6/8(明黄褐色)　しまり：弱い　粘性：なし
　明黄褐色砂(2.5Y7/6)ブロックφ10～30mm10%
　黄褐色(10YR5/8)砂ブロックφ10～20mm5%　黄褐色砂層
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い
　明黄褐色(2.5Y7/6)砂ブロックφ5～10mm10%　焼土粒φ5～10mm5%
3：10YR4/1(褐灰色)　しまり：やや強い　粘性：強い
　炭化物粒φ5～10mm5%
4：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い
　炭化物ブロックφ10～20mm15%
　褐灰色(10YR5/1)粘土ブロックφ5～10mm10%
5：10YR2/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
6：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性やや強い
　炭化物粒φ10～20mm15%　貝片5%程度
7：10YR5/1(褐灰色)　しまり：やや強い　粘性：強い
　ローム粒φ3～5mm3%　炭化物粒φ10～20mm20%
　灰白色(10YR7/1)粘土ブロックφ30～50mm10%　木端多量、貝片少量
　粘土層
8：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い
　黄褐色シルトブロックφ30～70mm3%
　灰白色(10YR7/1)粘土ブロックφ10～30mm10%　木端多量に含む
9：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い
　炭化物ブロックφ10～20mm2%
10：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い
　炭化物ブロックφ10～20mm5%
　灰白色(10YR7/1)粘土ブロックφ30～50mm10%
　黄褐色シルトブロックφ30～70mm3%　木端多量に含む
11：5Y8/1(灰白色)　粘土層　しまり：極強　粘性：極強

1166号（SPB-B′）
1：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　黄褐色砂10%
　焼土粒φ3～5mm2%　炭化物粒φ5～10mm5%
2：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い
　焼土粒φ3～5mm2%　炭化物粒φ5～15mm3%
　褐灰色粘土ブロックφ10～20mm5%　砂混じり土層
3：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い
　黄褐色砂質シルトブロックφ5～10mm10%
　褐灰色粘土ブロックφ5～10mm5%　炭化物粒φ3～5mm3%
4：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い
　褐灰色粘土ブロックφ5～10mm5%
5：10YR3/1(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い
　褐灰色粘土粒φ3～5mm5%
6：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　黄褐色砂7%
　褐灰色粘土ブロックφ5～10mm10%

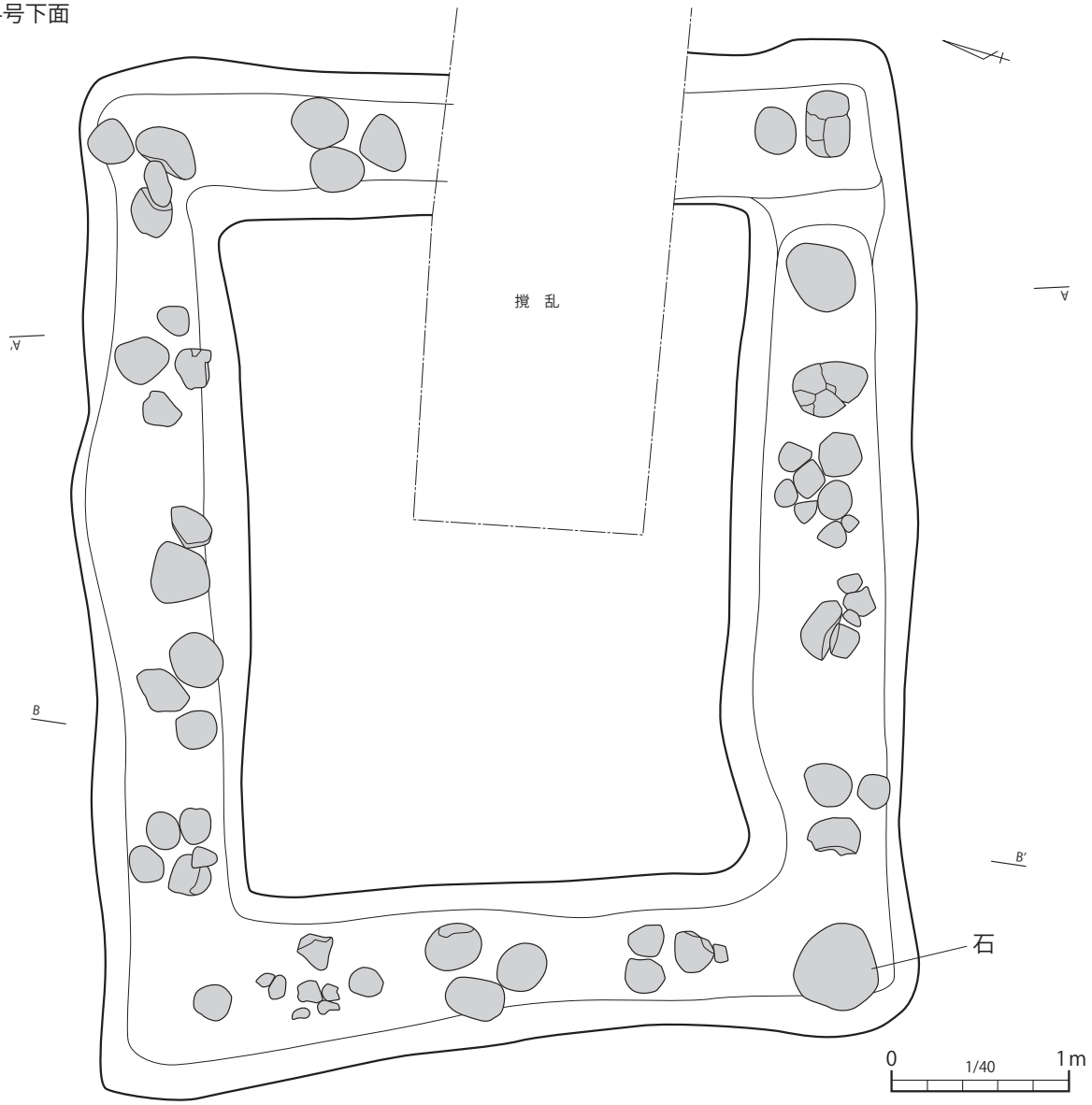
0　1/60　2m

第 1-136 図　F-1 区 2 面の遺構（8）（1/60）



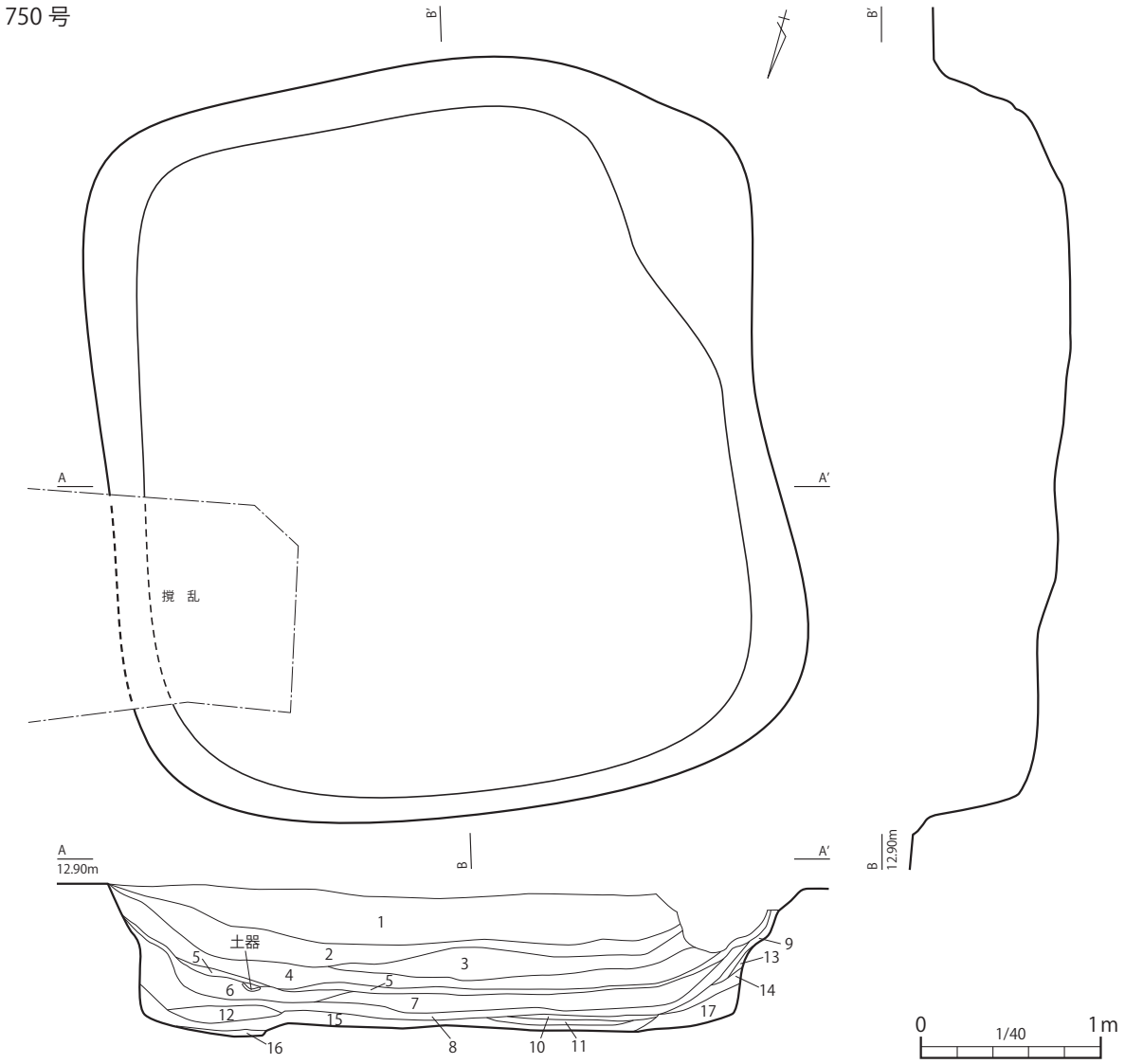
第 1-137 図　F-1 区 2 面の遺構（9）（1 /40）

464号下面



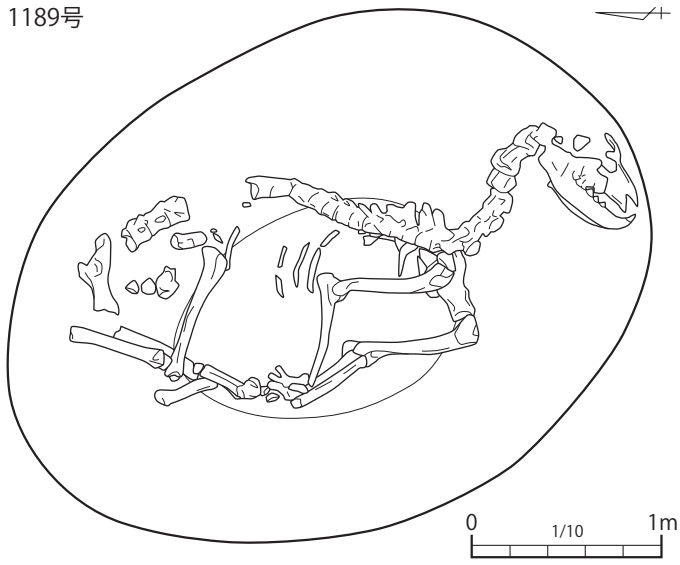
464号
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：極強　粘性：弱い　ローム粒φ1～3mm2%　焼土粒φ1～5mm7%　炭化物粒φ3～7mm10%
2：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　褐色(7.5YR4/3)土10%　褐灰色粘土3～5%
3：2.5YR4/6(オリーブ褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ3～5mm20%　黄色砂3%　褐灰色粘土粒φ5～10mm7%　焼土粒φ3～5mm5%　炭化物粒φ1～7mm5%
4：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：極強　粘性：強い　ローム粒φ1～10mm5%　ロームブロックφ15mm3%　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ1～5mm5%
褐色(7.5YR4/3)土10%(斑紋状)　砂3%
5：7.5YR4/3(褐色)　しまり：極強　粘性：あり　ローム粒φ1～5mm10%　ロームブロック2φ15～30mm0%　焼土粒3φ1～3mm%　炭化物粒φ1～5mm5%　砂5%
6：10YR4/1(褐灰色)　しまり：極強　粘性：強い　ローム粒φ1～3mm2%　砂3%　焼土粒φ1～5mm2%　炭化物粒φ3～10mm%　空隙少なく緻密
7：7.5YR4/3(褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ1～3mm2%　褐灰色粘土粒φ5～10mm7%　焼土粒φ3～5mm3%　炭化物粒φ3～7mm10%　褐色土20%
8：10YR5/3(黄褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い　暗褐色土10%　黄褐砂主体(50%)
9：2.5Y6/3(にぶい黄色)　しまり：弱い　粘性：弱い　炭化物粒φ3～5mm3%　黄色砂主体
10：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：弱い　粘性：強い　炭化物粒φ1～3mm3%　灰白色粘土粒φ3～５mm3%　砂質土層
11：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：極強　粘性：弱い　砂1%　炭化物粒φ1～5mm5%　内容物少ない　上面に瓦続きあり
12：しまり：極強　粘性：あり　ロームφ3～10mm5%　砂5%　焼土粒φ1～5mm2%　炭化物粒φ3～10mm%
13：2.5Y5/1(黄灰色)　しまり：極強　粘性あり　ローム粒φ1～2mm1%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～3mm1%　砂っぽい　赤錆やや含む
14：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：極強　粘性：あり　ローム粒φ3～5mm7%　赤錆含む
15：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：極強　粘性：あり　ローム粒φ3～5mm7%　炭化物粒φ3～10mm10%　赤錆
16：7.5YR6/2(灰色)　しまり：極強　粘性：あり　赤錆を多く含む(上下に層状)　下部の瓦層
17：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：極強　粘性強い　焼土粒φ1～5mm3%　炭化物粒φ1～5mm20%
18：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：極強　粘性：強い　炭化物粒φ1～5mm7%　空隙の少なく緻密
19：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ1～5mm5%　砂1%　焼土粒φ3～5mm5%　炭化物粒φ3～10mm7%　灰白色粘土粒φ3～10mm7%

第 1-138 図　F-1 区 2 面の遺構（10）（1 /40）



750 号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ5 ～ 10mm5%　炭化物ブロックφ10 ～ 20mm7%
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物粒～ブロックφ5 ～ 20mm10%
3：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い　ローム粒φ5 ～ 10mm3%　炭化物ブロックφ10 ～ 20mm5%
4：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10 ～ 30mm15%
5：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：強い
6：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや弱い　粘性：あり　炭化物ブロックφ10 ～ 30mm30%
7：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：強い　ローム粒φ10 ～ 20mm3%　炭化物ブロックφ10 ～ 30mm10%
8：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　粘土層
9：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや弱い　粘性：あり　炭化物ブロックφ10 ～ 30mm30%
10：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　粘土層
11：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い　粘土層
12：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い　炭化物ブロックφ10 ～ 20mm5%
13：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ5 ～ 10mm20%
14：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物粒φ3 ～ 5mm3%
15：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　粘土層
16：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ロームブロックφ10 ～ 20mm10%　白色砂粒φ1mm 以下 5%　炭化物粒φ5 ～ 10mm5%
17：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い　炭化物ブロックφ10 ～ 20mm5%

第 1-139 図　F-1 区 3-1 面の遺構（1）（1/40）





1. 1189号獣骨検出状況（西から）

第 1-140 図　F-1 区 3-1 面の遺構（２）（1/10）

あり、調査区外へと続いていることから、該期の施設が北側調査区外へと展開するものと考えられる。

５面では、溝１条、硬化面１基、礎石１基、集石１基、土坑 14 基、ピット 27 基が検出された。

【溝】

1255 号（第 1-150 図、第 3-16 表）

1255 号は F-1 区５面で検出されたマウンド状の硬化面の西側に位置する。1255 号は南北に走り、南に向かって傾斜する溝で、西壁では「東京層群第一砂質土層」の一部である砂層が露出する。南に向かって収束していくものと平面形からは想定されるが、南側端部は２面の遺構 500・666 号に代表される土坑群に切られており確認することは出来なかった。覆土は２層に分かれる。１層はロームブロックを多く含む暗褐色土層、２層は黄褐色砂ブロックを含む暗褐色土層で、その様相は隣接する落ち込み 1225 号に類似する。西壁で露出した砂層上には５面盛土層が堆積するが、1255 号以東では同様の盛土層の堆積が見られず大半が 1225 号となることから、硬化面を取り囲む 1225 号と一体の落ち込みの可能性もある。1255 号から出土した遺物の点数、重量は 26 点、1,348.4g である。出土遺物から 17 世紀中葉の遺構である可能性が高い。

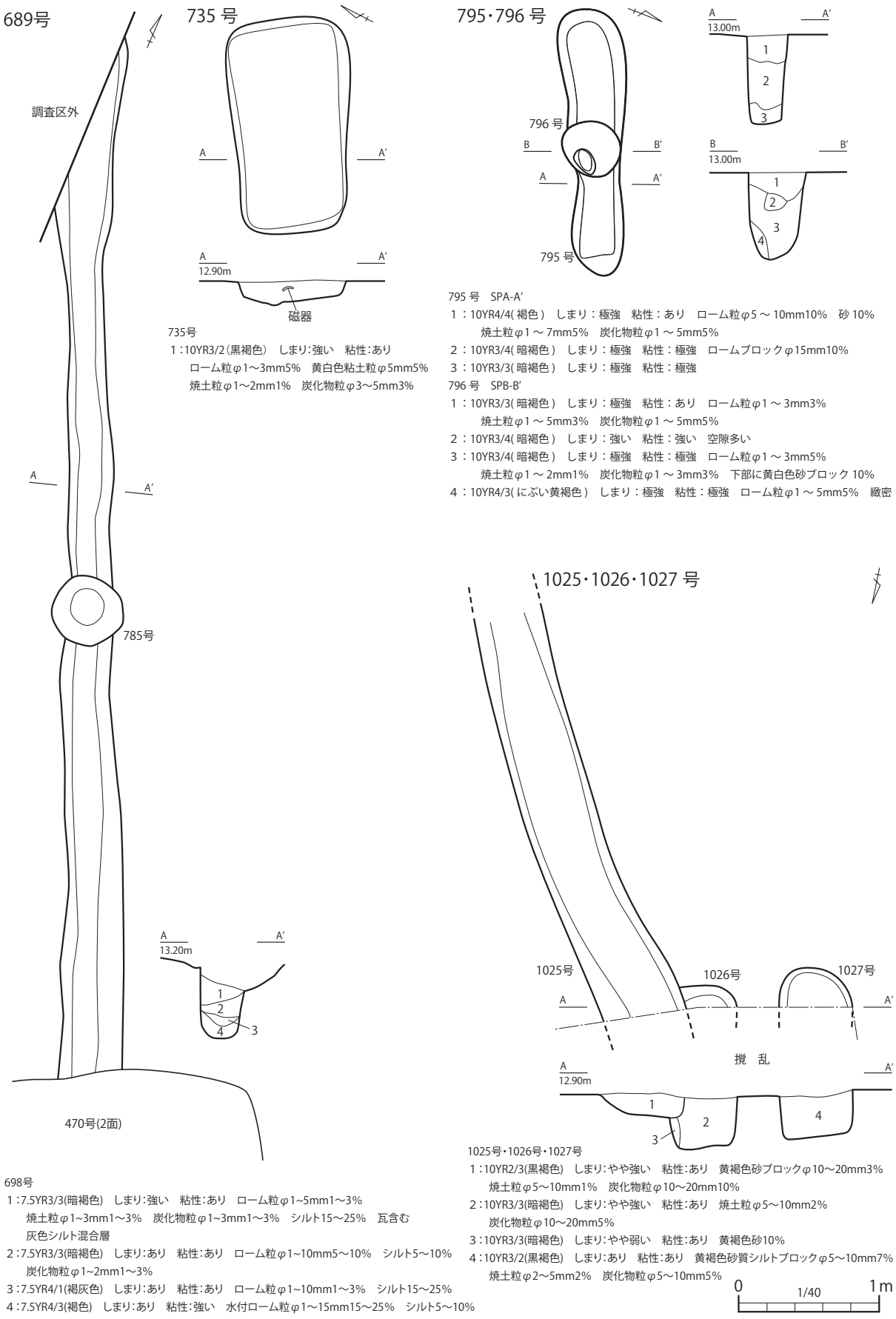
【土坑】

1231 号（第 1-150 図、図版 3-57-5、第 3-16 表）

方形の土坑 1231 号は F-1 区西端に位置しており、一部が I 区部分へと続いている。覆土は３層に分かれる。１層はロームブロックや砂質シルトブロックを多く含む層、２層はロームブロックを含む層、そして３層が砂やシルトブロックを含む層となっている。1231 号から出土した遺物の点数、重量は２点、34.6g である。

1251 号（第 1-150 図、第 3-16 表）

1251 号は不整円形の土坑で F-1 区西端に位置している。掘り込みは５面盛土層を超え、砂層に達している。底面は平坦で、壁面は真っすぐに立ち上がっているが、東側の壁面の上半は捉えることが出来なかった。覆土は７層に分かれる。１層と２層は５面盛土層に類似する土層である。３層、４層、



735号
1：10YR3/2（黒褐色）　しまり:強い　粘性:あり
　ローム粒φ1～3mm5%　黄白色粘土粒φ5mm5%
　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ3～5mm3%

795 号　SPA-A′
1：10YR4/4(褐色)　しまり：極強　粘性：あり　ローム粒φ5 ～ 10mm10%　砂 10%
　焼土粒φ1 ～ 7mm5%　炭化物粒φ1 ～ 5mm5%
2：10YR3/4(暗褐色)　しまり：極強　粘性：極強　ロームブロックφ15mm10%
3：10YR3/3(暗褐色)　しまり：極強　粘性：極強

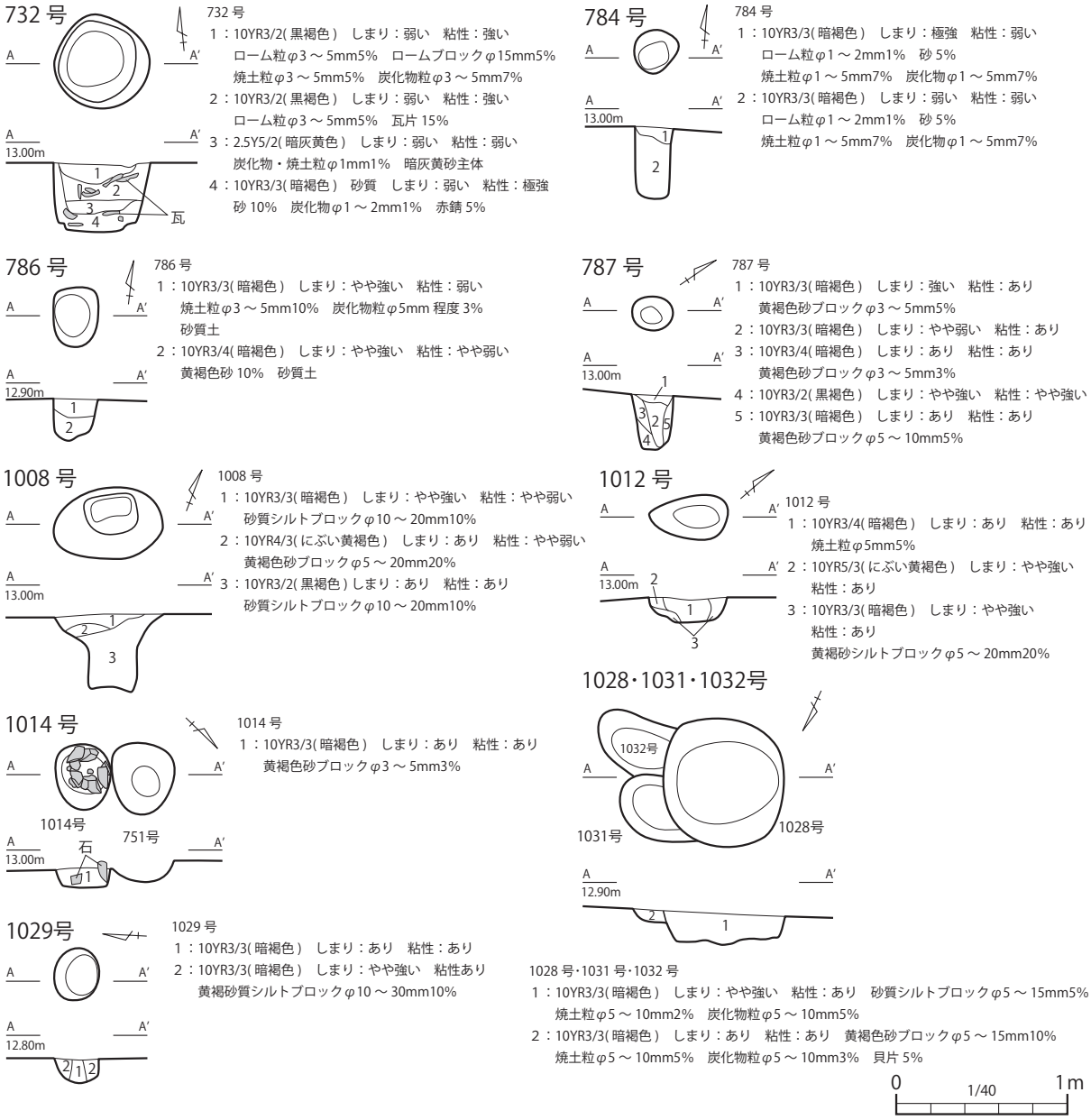
796 号　SPB-B′
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：極強　粘性：あり　ローム粒φ1 ～ 3mm3%
　焼土粒φ1 ～ 5mm3%　炭化物粒φ1 ～ 5mm5%
2：10YR3/4(暗褐色)　しまり：強い　粘性：強い　空隙多い
3：10YR3/4(暗褐色)　しまり：極強　粘性：極強　ローム粒φ1 ～ 3mm5%
　焼土粒φ1 ～ 2mm1%　炭化物粒φ1 ～ 3mm3%　下部に黄白色砂ブロック 10%
4：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：極強　粘性：極強　ローム粒φ1 ～ 5mm5%　緻密

698号
1：7.5YR3/3(暗褐色)　しまり:強い　粘性:あり　ローム粒φ1~5mm1～3%
　焼土粒φ1~3mm1～3%　炭化物粒φ1~3mm1～3%　シルト15～25%　瓦含む
　灰色シルト混合層
2：7.5YR3/3(暗褐色)　しまり:あり　粘性:あり　ローム粒φ1~10mm5～10%　シルト5～10%
　炭化物粒φ1~2mm1～3%
3：7.5YR4/1(褐灰色)　しまり:あり　粘性:あり　ローム粒φ1~10mm1～3%　シルト15～25%
4：7.5YR4/3(褐色)　しまり:あり　粘性:強い　水付ローム粒φ1～15mm15～25%　シルト5～10%

1025号・1026号・1027号
1：10YR2/3(黒褐色)　しまり:やや強い　粘性:あり　黄褐色砂ブロックφ10～20mm3%
　焼土粒φ5～10mm1%　炭化物粒φ10～20mm10%
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり:やや強い　粘性:あり　焼土粒φ5～10mm2%
　炭化物粒φ10～20mm5%
3：10YR3/3(暗褐色)　しまり:やや弱い　粘性:あり　黄褐色砂10%
4：10YR3/2(黒褐色)　しまり:あり　粘性:あり　黄褐色砂質シルトブロックφ5～10mm7%
　焼土粒φ2～5mm2%　炭化物粒φ5～10mm5%

0　1/40　1m

第 1-141 図　F-1 区 3-1 面の遺構（3）（1 /40）



第 1-142 図　F-1 区 3-1 面の遺構（4）（1 /40）

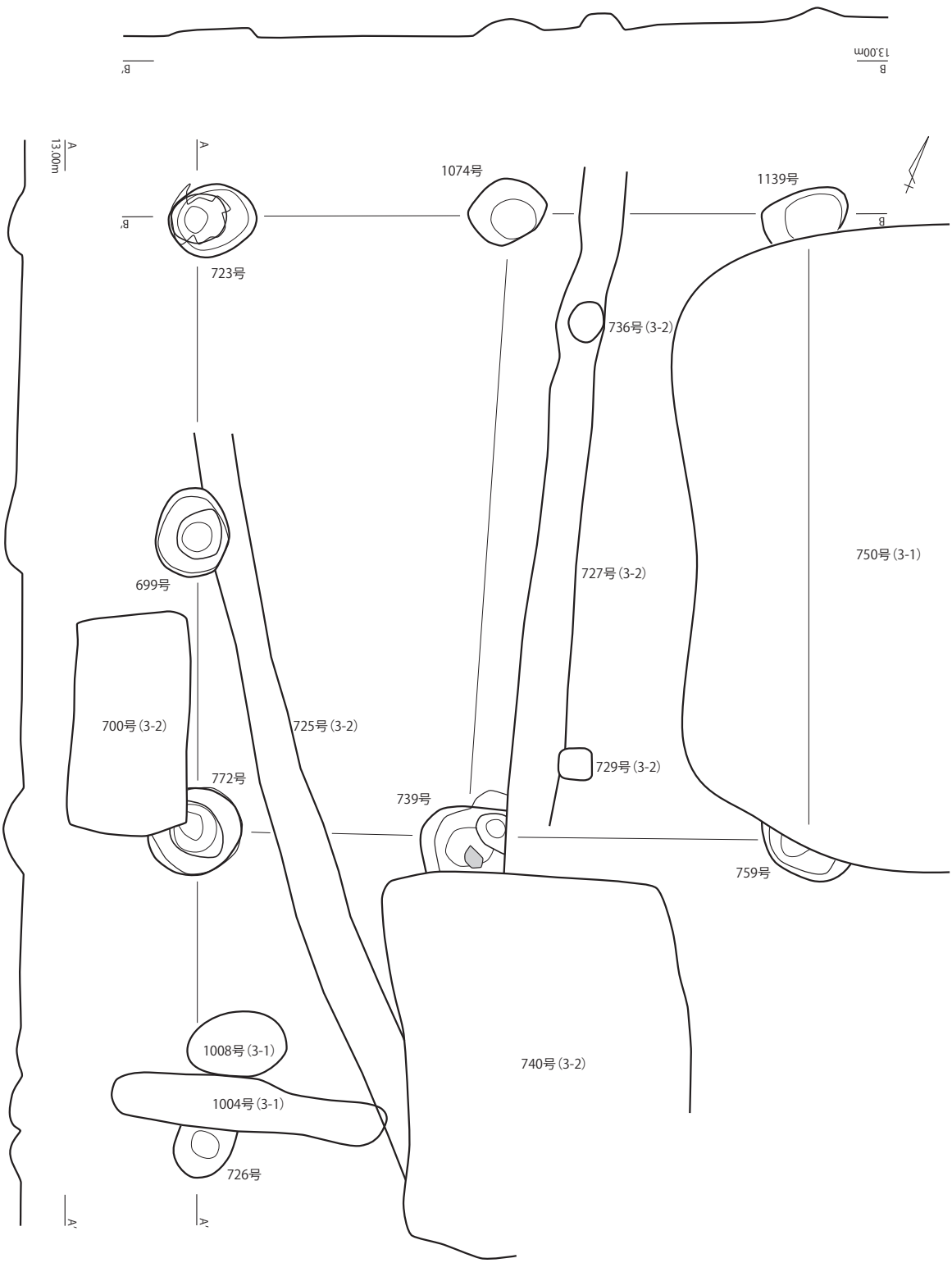
6 層は砂を多く含む土層、 5 層と 7 層は砂層となる。1251 号から出土した遺物の点数、重量は 7 点、163.9g である。

【ピット】（第 1-150 図、図版 3-57-4、第 3-16 表）

1198 号・1200 号・1201 号・1211 号・1212 号はタタキ上で検出されたピットである（第 1-150 図・図版 3-57-4）。

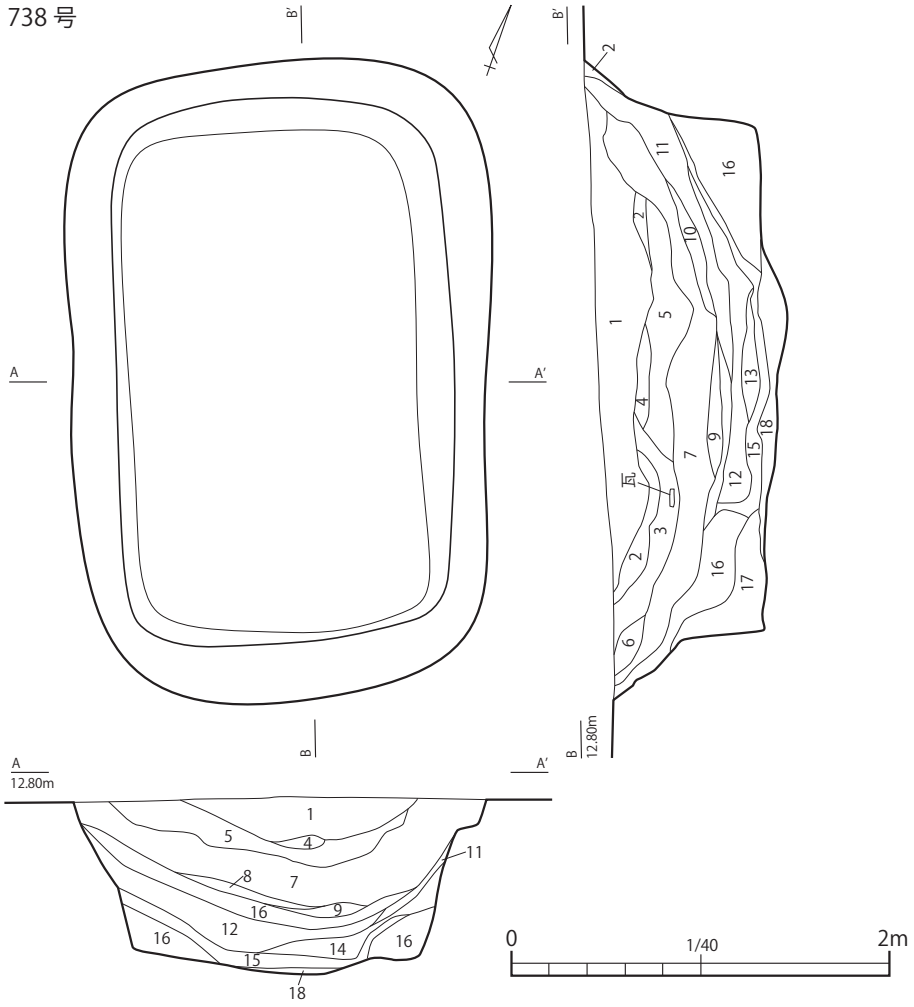
1198 号は円形のピットである。覆土は 4 層に分けられる。最下層の 4 層がロームブロック層となっている。1200 号は円形のピットで最下層の 3 層はロームブロック層ではなくロームブロックと砂質シルトブロックを含むしまりの強い土層となる。1201 号は円形のピットで、覆土は 2 層に分けられる。2 層はロームブロック層となる。1211 号も同様に円形のピットで最下層にロームブロック層が認め

建物跡 6



0 1/40 1m

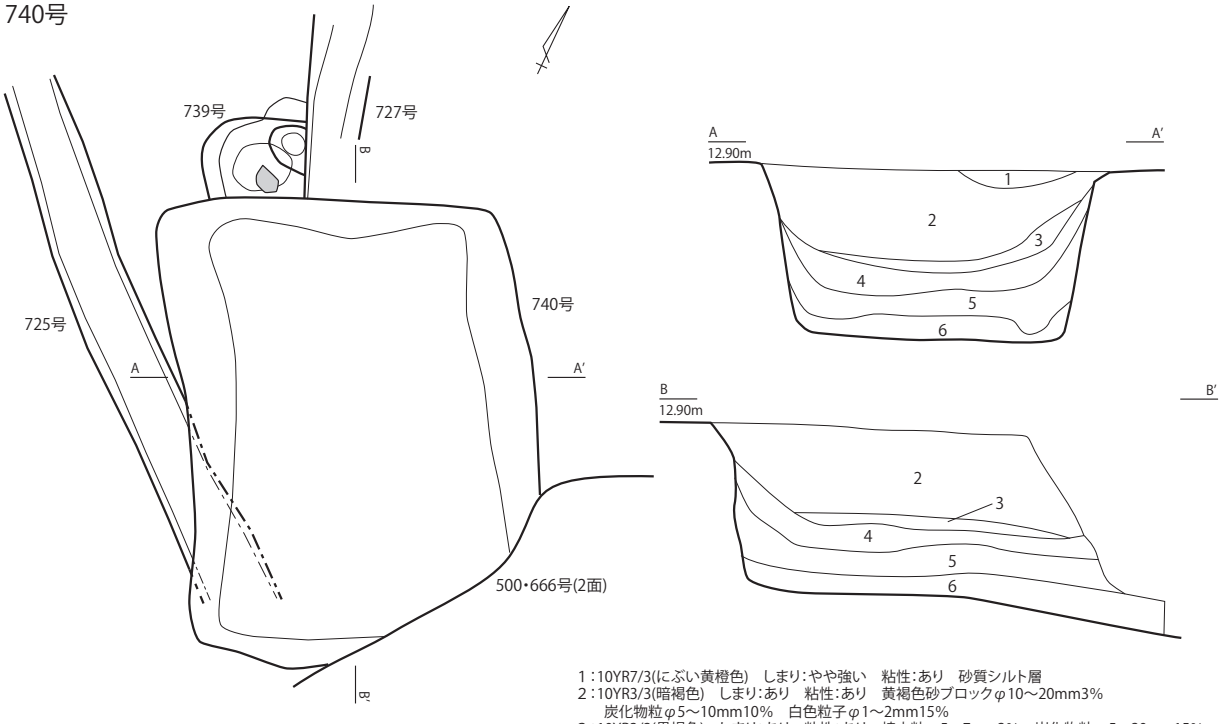
第 1-143 図　F-1 区 3-2 面の遺構（1）（1 /40）



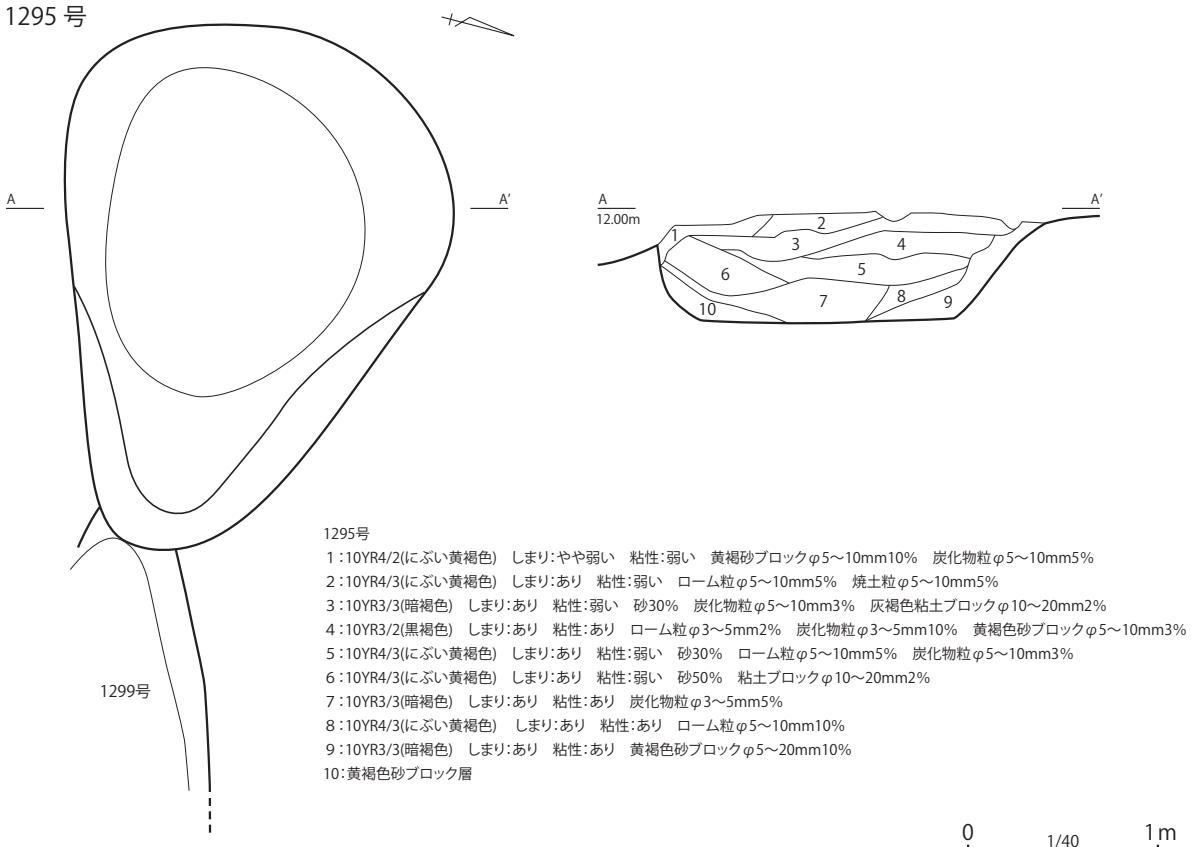
738号

1：10YR3/2(黒褐色)　しまり:あり　粘性:やや弱い　黄褐色砂ブロックφ10～20mm5%　炭化物粒φ5～10mm7%　砂質土層
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり:あり　粘性:あり　黄褐色砂ブロックφ5～20mm10%　炭化物粒φ5～10mm3%
3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:あり　粘性:あり　砂質シルトブロックφ10～30mm5%　炭化物粒φ3～10mm5%
4：10YR3/2(黒褐色)　しまり:やや弱い　粘性:あり　炭化物粒φ3～5mm3%
5：10YR4/1(褐灰色)　しまり:あり　粘性:あり　炭化物粒φ3～10mm10%　粘土(2.5Y5/2)ブロックφ10～30mm25%
6：10YR3/3(暗褐色)　しまり:あり　粘性:やや弱い　黄褐色土ブロックφ5～10mm10%　粘土(2.5Y5/2)ブロックφ10～20mm30%
7：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:やや強い　粘性:やや弱い　黄褐色砂ブロックφ5～20mm5%　炭化物粒φ3～5mm5%
8：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:あり　粘性:やや強い　粘土(2.5Y5/2)ブロックφ5～10mm30%
9：10YR3/2(黒褐色)　しまり:あり　粘性:やや強い　炭化物粒～ブロックφ3～20mm50%　炭化物層
10:10YR4/1(褐灰色)　しまり:やや強い　粘性:強　炭化物ブロックφ10～20mm7%
11:10YR2/1(黒色)　しまり:やや強い　粘性:やや強い　炭化物粒3φ3～5mm%
12:10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:やや強い　粘性:やや弱い　黄褐色砂ブロックφ3～5mm3%　炭化物粒φ3～5mm2%
13:10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:やや強い　粘性:やや弱い　炭化物が厚さ3～5㎝筋状に入る(主体50%以上)
14:10YR4/2(灰黄褐色)　粘土ブロックφ5～10mm5%
15:5YR3/6(暗褐色)　しまり:強い　粘性:弱い　酸化した砂層
16:10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:やや強い　粘性:やや弱い　砂質シルトブロックφ5～20mm5%　黄褐色砂ブロックφ30～40mm3%　炭化物粒φ3～5mm3%
17:10YR3/3(暗褐色)　しまり:強い　粘性:弱い　砂質シルトブロックφ5～20mm10%　砂質土層
18:10YR5/6(黄褐色)　しまり:やや強い　粘性:弱い　砂質シルトブロックφ20～30mm10%

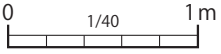
第 1-144 図　F-1 区 3-2 面の遺構（2）（1 /40）



1：10YR7/3(にぶい黄橙色)　しまり:やや強い　粘性:あり　砂質シルト層
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり:あり　粘性:あり　黄褐色砂ブロックφ10～20mm3%
　炭化物粒φ5～10mm10%　白色粒子φ1～2mm15%
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり:あり　粘性:あり　焼土粒φ5～7mm2%　炭化物粒φ5～20mm15%
4：10YR3/3(暗褐色)　しまり:あり　粘性:あり　焼土粒φ5～7mm3%
5：10YR3/1(黒褐色)　しまり:あり　粘性:あり
　炭化物粒φ5～30mm40%
6：10YR3/3(暗褐色)　しまり:あり　粘性:やや強い　黄褐色砂粒φ5～10mm5%

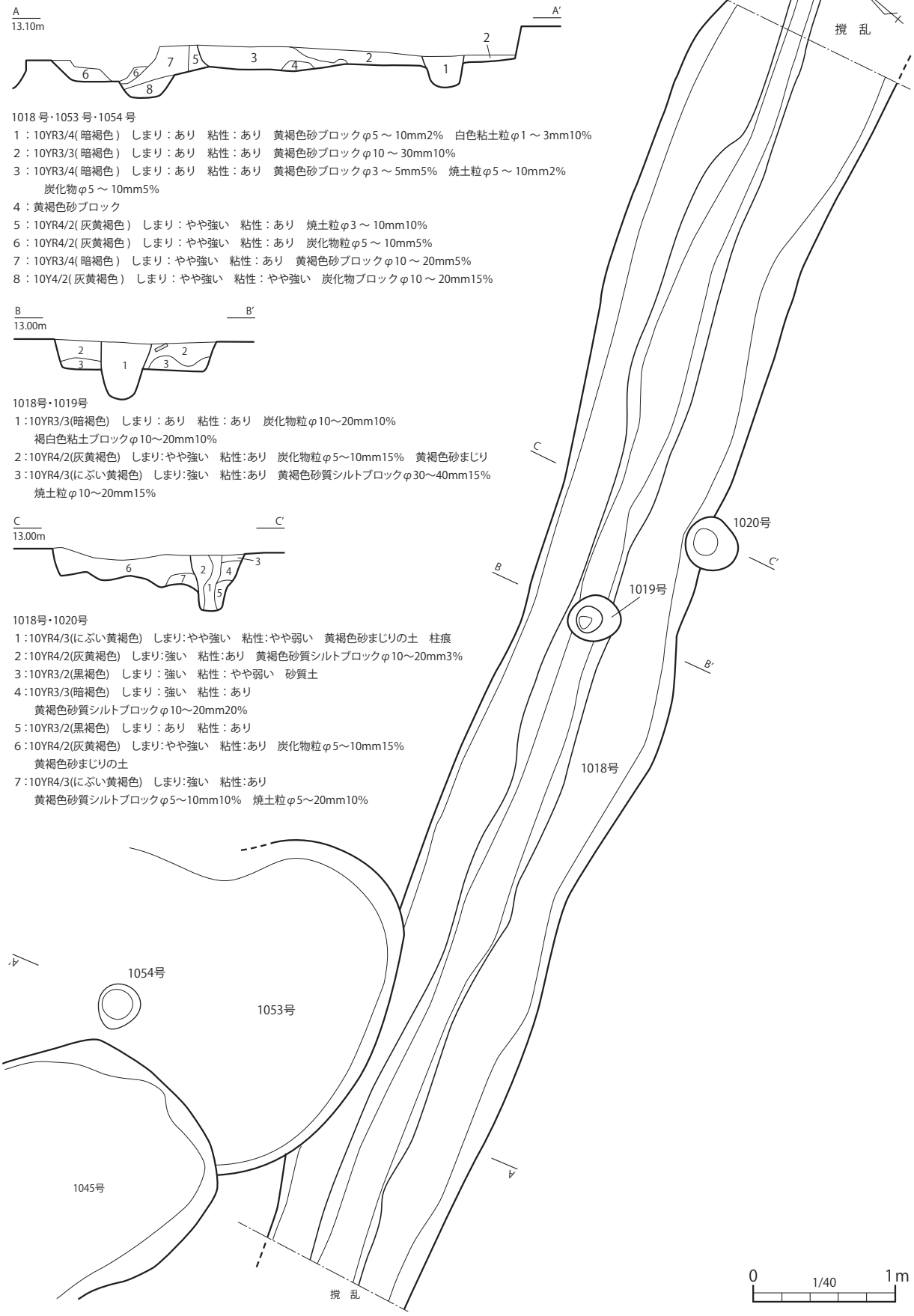


1295号
1：10YR4/2(にぶい黄褐色)　しまり:やや弱い　粘性:弱い　黄褐砂ブロックφ5～10mm10%　炭化物粒φ5～10mm5%
2：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:あり　粘性:弱い　ローム粒φ5～10mm5%　焼土粒φ5～10mm5%
3：10YR3/3(暗褐色)　しまり:あり　粘性:弱い　砂30%　炭化物粒φ5～10mm3%　灰褐色粘土ブロックφ10～20mm2%
4：10YR3/2(黒褐色)　しまり:あり　粘性:あり　ローム粒φ3～5mm2%　炭化物粒φ3～5mm10%　黄褐色砂ブロックφ5～10mm3%
5：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:あり　粘性:弱い　砂30%　ローム粒φ5～10mm5%　炭化物粒φ5～10mm3%
6：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:あり　粘性:弱い　砂50%　粘土ブロックφ10～20mm2%
7：10YR3/3(暗褐色)　しまり:あり　粘性:あり　炭化物粒φ3～5mm5%
8：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:あり　粘性:あり　ローム粒φ5～10mm10%
9：10YR3/3(暗褐色)　しまり:あり　粘性:あり　黄褐色砂ブロックφ5～20mm10%
10：黄褐色砂ブロック層



第 1-145 図　F-1 区 3-2 面の遺構（3）（1 /40）

1018・1019・1020・1053・1054号

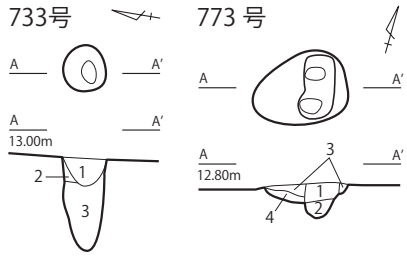


1018 号・1053 号・1054 号
1：10YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ5 ～ 10mm2%　白色粘土粒φ1 ～ 3mm10%
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ10 ～ 30mm10%
3：10YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ3 ～ 5mm5%　焼土粒φ5 ～ 10mm2%
　炭化物φ5 ～ 10mm5%
4：黄褐色砂ブロック
5：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　焼土粒φ3 ～ 10mm10%
6：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　炭化物粒φ5 ～ 10mm5%
7：10YR3/4(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ10 ～ 20mm5%
8：10Y4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　炭化物ブロックφ10 ～ 20mm15%

1018号・1019号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物粒φ10～20mm10%
　褐白色粘土ブロックφ10～20mm10%
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:やや強い　粘性:あり　炭化物粒φ5～10mm15%　黄褐色砂まじり
3：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:強い　粘性:あり　黄褐色砂質シルトブロックφ30～40mm15%
　焼土粒φ10～20mm15%

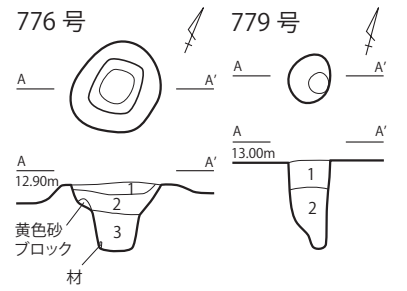
1018号・1020号
1：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:やや強い　粘性:やや弱い　黄褐色砂まじりの土　柱痕
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:強い　粘性:あり　黄褐色砂質シルトブロックφ10～20mm3%
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：やや弱い　砂質土
4：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：あり
　黄褐色砂質シルトブロックφ10～20mm20%
5：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
6：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:やや強い　粘性:あり　炭化物粒φ5～10mm15%
　黄褐色砂まじりの土
7：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:強い　粘性:あり
　黄褐色砂質シルトブロックφ5～10mm10%　焼土粒φ5～20mm10%

第 1-146 図　F-1 区 3-2 面の遺構（4）（1 /40）



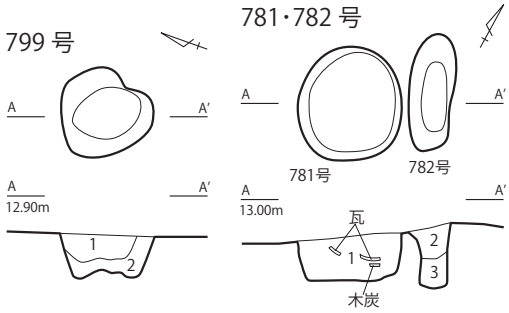
733 号
1：10YR5/2(灰黄褐色） 砂質　しまり：あり　粘性：弱い　ローム粒φ1 ～ 5mm5%　砂 5%
焼土粒φ1 ～ 2mm1%　炭化物粒φ2 ～ 3mm1%
2：2.5Y6/4(にぶい黄色） 黄色砂層　しまり：弱い　粘性：弱い
3：10YR3/2(黒褐色） しまり：強い　粘性：強い (部分的にしまり弱い） ローム粒φ1 ～ 3mm3%　砂 3%
内容物少ない

773 号
1：10YR4/2(灰黄褐色） しまり：極強　粘性：弱い　ローム粒φ5 ～ 7mm5%　砂 5%　焼土粒φ1 ～ 3mm3%
炭化物粒φ1 ～ 3mm3%
2：10YR4/2(灰黄褐色） しまり：極強　粘性：弱い
3：5YR4/6(赤褐色） しまり：極強　粘性：弱い　ロームブロックφ15mm7%　焼土粒φ1 ～ 5mm30%
焼土ブロックφ15mm10%　炭化物粒φ3 ～ 5mm5%　砂質土層
4：10YR5/3(にぶい黄褐色） しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ1 ～ 5mm5%　炭化物粒φ1 ～ 3mm2%
砂質土層



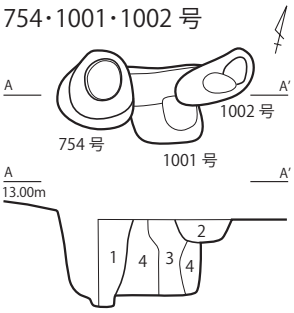
776 号
1：10YR5/2(灰黄褐色） しまり：極強　粘性：強い　ローム粒φ1 ～ 3mm5%　黄色砂ブロックφ10 ～ 15mm7%
砂 3%　焼土粒φ1 ～ 5mm2%　炭化物粒φ3 ～ 5mm3%　赤錆 5%　著しく固くしまる
2：2.5Y5/3(黄褐色） しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ3 ～ 5mm7%　砂 7%　炭化物粒φ1 ～ 3mm2%
赤錆 3%
3：2.5Y5/3(黄褐色） しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ3 ～ 5mm7%　砂 7%　炭化物粒φ1 ～ 3mm2%
赤錆 3%

779 号
1：10YR4/3(にぶい黄褐色） しまり：やや強い　粘性：やや弱い　炭化物粒φ5 ～ 10mm1%　砂質土層
2：10YR4/3(にぶい黄褐色） しまり：やや弱い　粘性：やや弱い　空隙多い　砂質土層

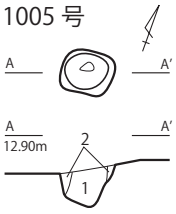


781 号・782 号
1：10YR3/3(暗褐色） 砂質　しまり：極強　粘性：弱い　ローム粒φ5 ～ 10mm3%　砂 5%
焼土粒φ5 ～ 10mm5%　炭化物φ3 ～ 5mm7%
2：7.5YR4/2(灰黄褐色） 砂質　しまり：極強　粘性：弱い　ローム粒φ1 ～ 3mm7%
焼土粒φ1 ～ 7mm5%　炭化物φ1 ～ 3mm5%
3：7.5YR4/2(灰黄褐色） 砂質　しまり：強い　粘性：弱い　ローム粒φ1 ～ 3mm7%
焼土粒φ1 ～ 7mm5%　炭化物φ1 ～ 3mm5%

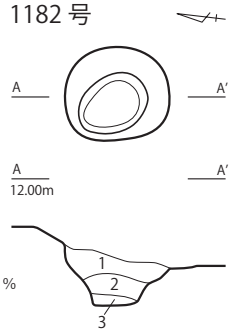
799 号
1：10YR3/3(暗褐色） しまり：あり　粘性：あり　黒褐色砂シルトブロックφ10 ～ 20mm10%
2：10YR3/3(暗褐色） しまり：あり　粘性：あり　底面は焼土層が覆土



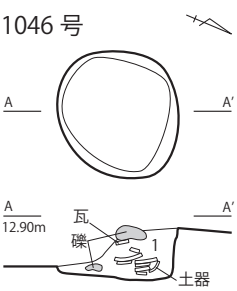
754 号・1001 号・1002 号
1：10YR3/3(暗褐色） しまり：あり　粘性：あり　ボソボソした土
2：10YR3/2(黒褐色） しまり：あり　粘性：やや強い　炭化物粒φ5 ～ 10mm5%
3：10YR3/3(暗褐色） しまり：やや弱い　粘性：あり　黄色砂ブロックφ5 ～ 10mm5%　炭化物粒φ10 ～ 20mm5%
4：10YR3/4(暗褐色） しまり：やや強い　粘性：あり　ロームブロックφ1 ～ 20mm3%　焼土粒φ5 ～ 10mm3%



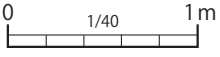
1005号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり:あり　粘性:あり　柱痕
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:強い　粘性:あり　砂質シルトブロックφ10～20mm10%



1182号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり:強い　粘性:あり
ロームブロックφ40～50mm20%
明黄褐色砂ブロックφ20～30mm3%
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり:あり　粘性:あり
黄褐色砂ブロックφ10～20mm2%
3：2.5Y8/1 (灰白色)　砂質土層

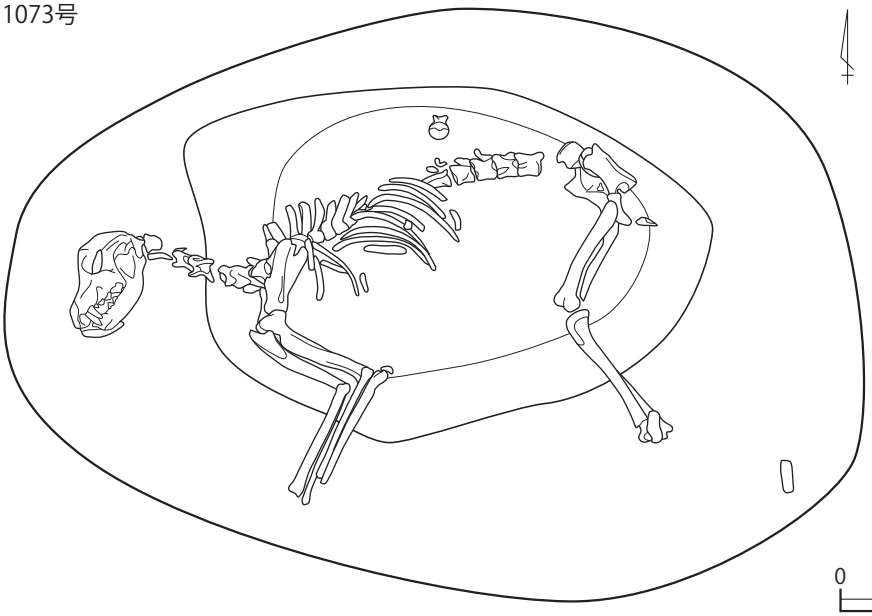


1046号
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:やや強い　粘性:あり
黄褐色砂粒φ5～10mm2%　炭化物粒φ5～10mm1%



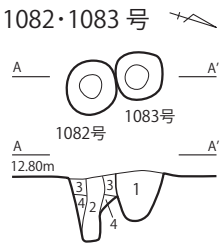
第 1-147 図　F-1 区 3-2 面の遺構（5）（1 /40）

1073号



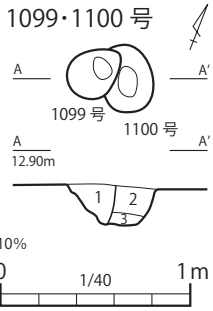


1.　1073号獣骨検出状況(南から)



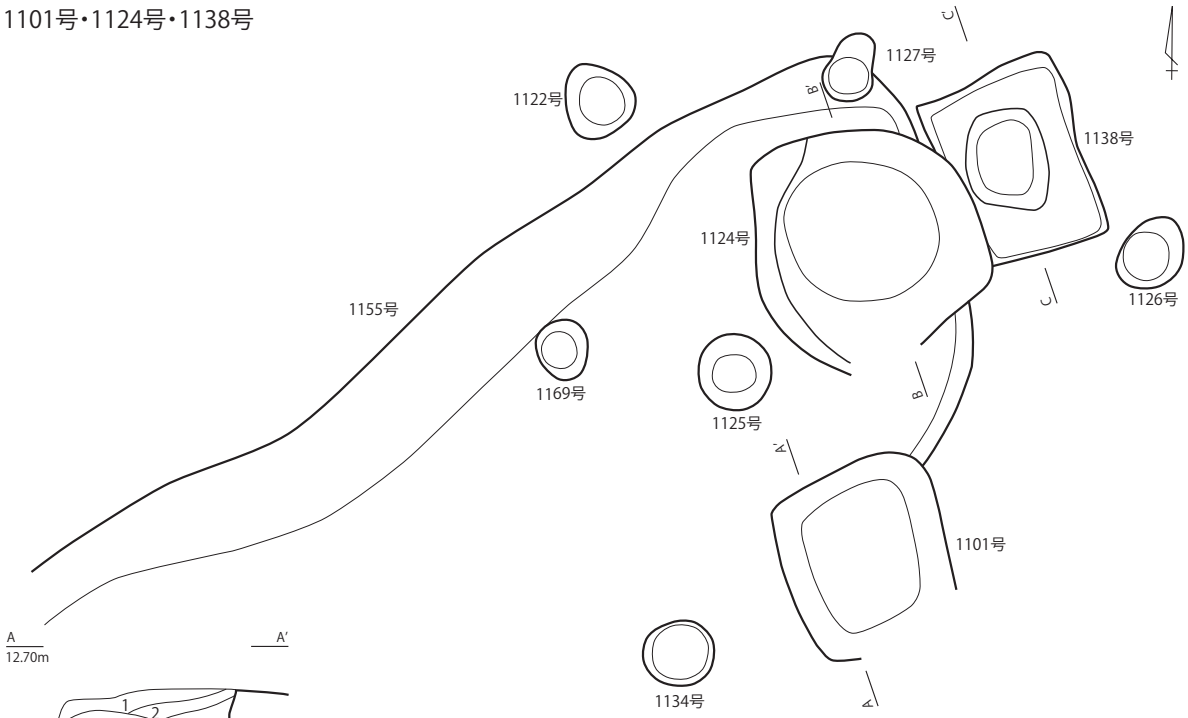
1082号・1083号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ5mm程度10%
　焼土粒φ3～5mm2%　炭化物粒φ3～5mm3%
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　焼土粒φ5～10mm10%
3：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　焼土粒φ5～10mm10%
4：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ロームブロックφ10～20mm10%

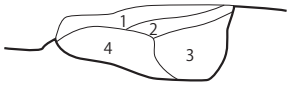
1099号・1100号
1：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　黄褐色砂30%斑に入る　焼土粒φ3～5mm3%
　炭化物粒φ5～10mm2%
2：10YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　黄褐色砂10%　焼土粒φ5～10mm1%　炭化物粒φ3～5mm10%
3：10YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　焼土粒φ3～5mm5%　炭化物粒φ3～5mm7%



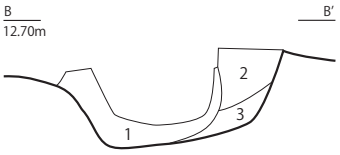
第 1-148 図　F-1 区 3-3 面の遺構（1/10・1/40）

1101号・1124号・1138号

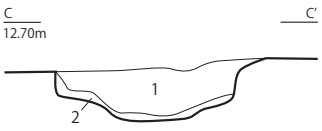




1101号（SPA-A′）
1：10YR3/4(暗褐色)　しまり:あり　粘性:弱い　焼土粒φ3～5mm3%　炭化物粒φ3～5mm5%
　砂質土層
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり:あり　粘性:やや弱い　黄褐色砂ブロックφ5～10mm10%
　炭化物粒φ5～10mm5%　砂質土層
3：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:あり　粘性:やや弱い　黄褐色砂ブロックφ3～10mm10%
　炭化物粒φ3～10mm5%　砂質土層
4：10YR3/3(暗褐色)　しまり:やや強い　粘性:あり　黄橙色砂質シルトブロックφ30～50mm10%
　炭化物粒φ5～10mm3%

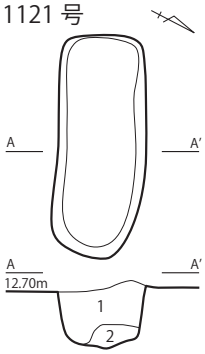


1124号（SPB-B′）
1：10YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm10%
　焼土粒φ5～10mm3%
2：10YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ5～10mm5%
　焼土粒φ5～10mm7%
3：10YR2/1(黒色)　しまり：弱い　粘性：やや弱い　粘土ブロックφ10～30mm15%

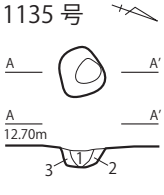


1138号（SPC-C′）
1：2.5YR4/8(赤褐色)　しまり：あり　粘性：なし　炭化物ブロックφ10～30mm10%
　灰ブロックφ10～20mm5%　焼土層
2：炭化物層

1121 号

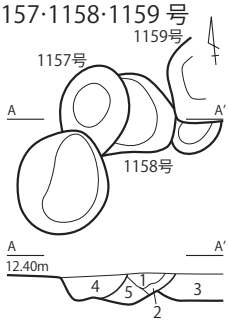


1135 号

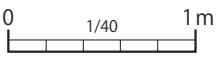


1121 号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10 ～ 20mm15%　砂質シルトブロックφ10 ～ 50mm10%
　炭化物ブロックφ10 ～ 20mm2%
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10 ～ 30mm20%　砂質シルトブロックφ10 ～ 30mm20%

1157·1158·1159 号

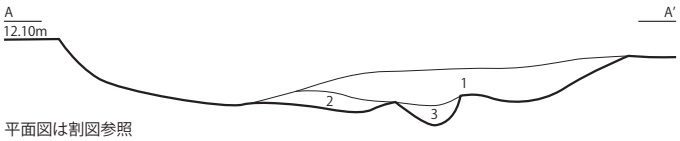


1135 号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ3 ～ 5mm10%
　炭化物粒φ5 ～ 10mm15%
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄褐砂ブロックφ3 ～ 5mm
3：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：やや強い　ロームブロックφ5 ～ 10mm10%
1157 号·1158 号·1159 号
1：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　ローム粒φ3 ～ 5mm5%
　焼土粒φ2 ～ 5mm1%　炭化物粒φ3 ～ 5mm3%　砂質土
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　黄褐色砂ブロックφ3 ～ 5mm10%
4：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ3 ～ 5mm10%
　焼土粒φ3 ～ 5mm3%
5：10YR2/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり



第 1-149 図　F-1 区 4 面の遺構（1 /40）

1255 号



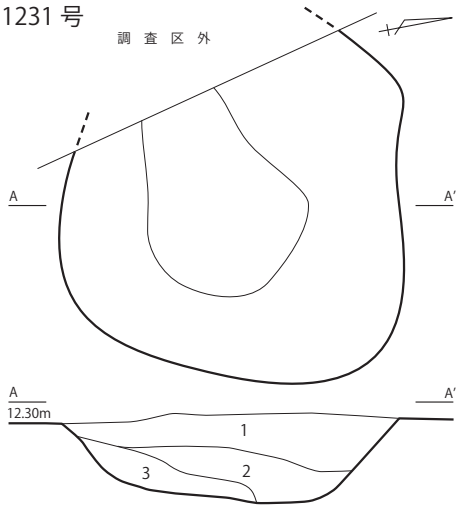
平面図は割図参照

1255号

1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10～60mm30%

2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり 粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ5～10mm5%

1231 号



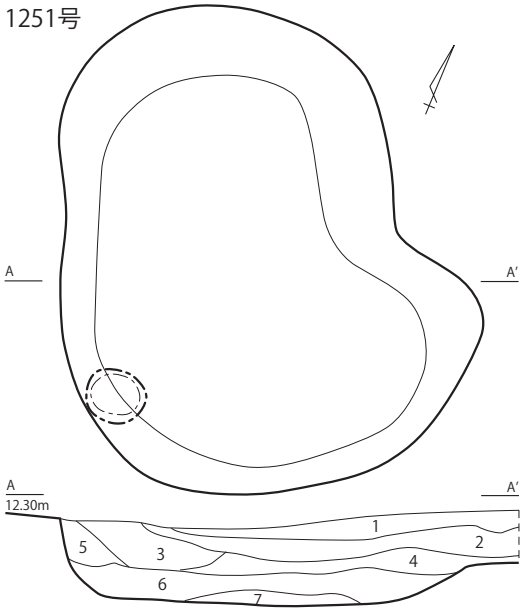
1231 号

1：10YR2/2(黒褐色)　しまり:やや弱い　粘性あり　ロームブロックφ20 ～ 60mm20%
　砂質シルトブロックφ30 ～ 60mm30%

2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10 ～ 20mm20%

3：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い
　シルトブロック (2.5Y7/6)φ30 ～ 60mm10%　灰白色 (2.5Y8/1) 砂 20%
　砂ブロック 7(2.5Y6/6)φ10 ～ 30mm7%

1251号



1251号

1：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い
　ロームブロックφ10～40mm30%

2：ロームブロック層

3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄褐色砂20%

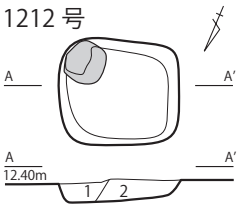
4：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm3%

5：2.5Y6/8(明黄褐色)　しまり：あり　粘性：なし　砂層

6：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂ブロックφ30～40mm5%

7：2.5Y6/8(明黄褐色)　しまり：強い　粘性：なし　暗褐色土ブロックφ50～80mm40%
　砂層

1212 号

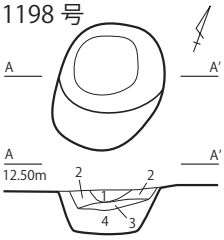


1212 号

1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い
　砂ブロックφ30 ～ 50mm20%

2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや弱い　粘性：弱い
　砂質シルトブロックφ20 ～ 40mm10%
　粘土ブロックφ30 ～ 40mm15%

1198 号



1198 号

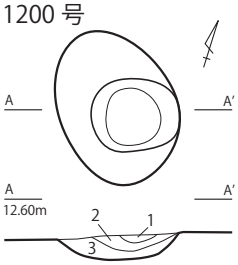
1：10YR2/1(黒色土)　しまり：あり　粘性：あり

2：2.5YR7/6(明黄褐色)　しまり：弱い　粘性：なし
　砂層

3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり

4：10YR4/4(褐色)　しまり：強い　粘性：強い
　ロームブロック層

1200 号



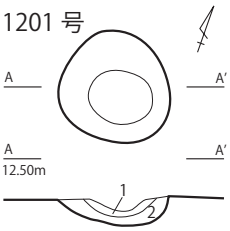
1200 号

1：10YR2/1(黒色土)　しまり：あり　粘性：あり
　焼土粒φ5 ～ 10mm3%　炭化物φ5 ～ 10mm5%

2：黄褐色　しまり：あり　粘性：なし
　焼土とロームブロックφ30 ～ 40mm20%

3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：強い
　ロームブロックφ30 ～ 50mm10%
　砂質シルトブロックφ40 ～ 60mm10%

1201 号

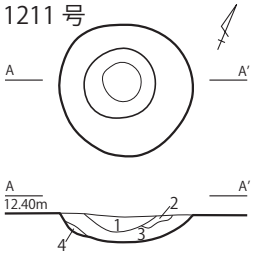


1201 号

1：2.5Y8/6(明黄褐)　しまり：弱い　粘性：なし

2：ロームブロック層φ20 ～ 50mm

1211 号



1211 号

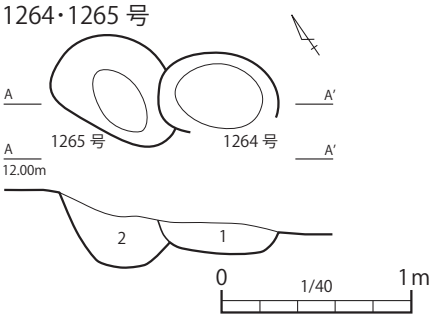
1：10YR4/4(褐色)　しまり：弱い　粘性：なし　砂

2：10YR7/4(にぶい黄橙)　しまり：弱い　粘性：強い
　砂質シルト

3：10YR5/4(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い
　ロームブロック層

4：10YR2/1(黒色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い

1264・1265 号

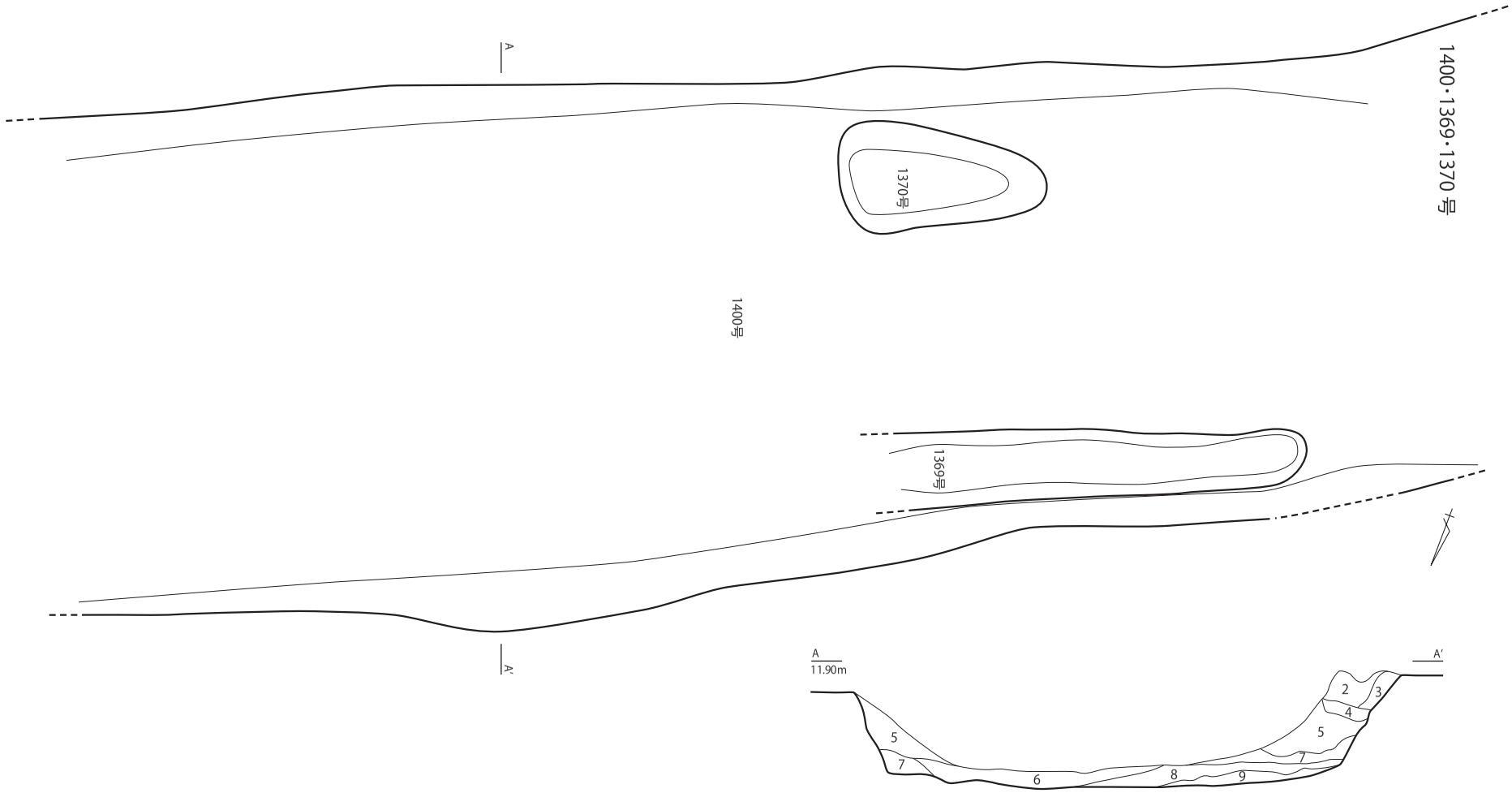


1264 号・1265 号

1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い
　ロームブロックφ10 ～ 20mm5%　炭化物φ5 ～ 10mm2%

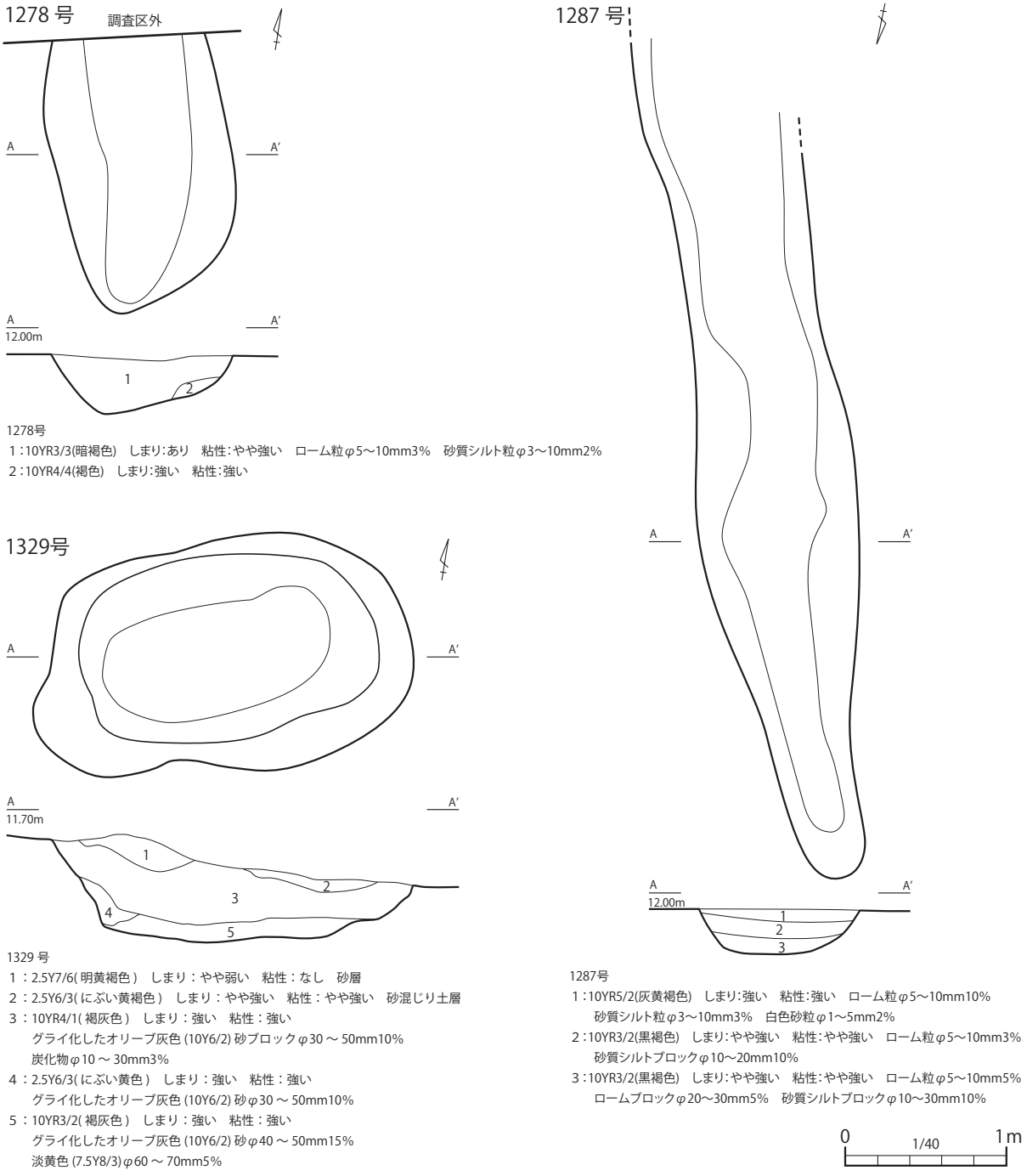
2：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い
　ロームブロックφ10 ～ 50mm10%　黄褐色砂ブロックφ10 ～ 20mm3%

第 1-150 図　F-1 区 5 面の遺構（1 /40）



1400 号
1：10YR3/3(暗褐色) しまり：やや強い 粘性：あり 黄褐色砂ブロックφ3 ～ 5mm5% 焼土粒φ2 ～ 5mm5% 炭化物粒φ3 ～ 5mm3%
2：10YR4/2(灰黄褐色) しまり：強い 粘性：粘性：強い 黄褐色砂ブロックφ10 ～ 15mm2% 10YR6/1 褐灰色粘土ブロックφ10 ～ 20mm15%
3：10YR3/3(暗褐色) しまり：やや強い 粘性：あり 白色砂粒φ～ 2mm2% 炭化物粒φ5 ～ 10mm2%
4：2.5Y6/8(明黄褐色 しまり：弱い 粘性：なし 灰黄褐色 (10YR4/2) ブロックφ50 ～ 70mm40% 砂層
5：10YR4/1(褐灰色) しまり：強い 粘性：強い 黄褐色砂ブロックφ5 ～ 10mm5% 炭化物粒φ10 ～ 20mm10%
6：10YR4/1(褐灰色) しまり：強い 粘性：やや強い 錆 50%程度
7：10YR5/1(褐灰色) しまり：強い 粘性：強い ロームブロックφ10 ～ 30mm10% 黄褐色砂質シルトブロックφ10 ～ 30mm10%
8：10YR3/2(黒褐色) しまり：強い 粘性：やや強い 黄褐色砂粒φ3 ～ 5mm5%
9：10YR3/2(黒褐色) しまり：強い 粘性：やや強い

第 1-151 図　F-1 区 6 面の遺構（1）（1 /40）



1278号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり:あり　粘性:やや強い　ローム粒φ5～10mm3%　砂質シルト粒φ3～10mm2%
2：10YR4/4(褐色)　しまり:強い　粘性:強い

1329 号
1：2.5Y7/6(明黄褐色)　しまり：やや弱い　粘性：なし　砂層
2：2.5Y6/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　砂混じり土層
3：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：強い
　グライ化したオリーブ灰色 (10Y6/2) 砂ブロックφ30 ～ 50mm10%
　炭化物φ10 ～ 30mm3%
4：2.5Y6/3(にぶい黄色)　しまり：強い　粘性：強い
　グライ化したオリーブ灰色 (10Y6/2) 砂φ30 ～ 50mm10%
5：10YR3/2(褐灰色)　しまり：強い　粘性：強い
　グライ化したオリーブ灰色 (10Y6/2) 砂φ40 ～ 50mm15%
　淡黄色 (7.5Y8/3)φ60 ～ 70mm5%

1287号
1：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり:強い　粘性:強い　ローム粒φ5～10mm10%
　砂質シルト粒φ3～10mm3%　白色砂粒φ1～5mm2%
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり:やや強い　粘性:やや強い　ローム粒φ5～10mm3%
　砂質シルトブロックφ10～20mm10%
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり:やや強い　粘性:やや強い　ローム粒φ5～10mm5%
　ロームブロックφ20～30mm5%　砂質シルトブロックφ10～30mm10%

第 1-152 図　F-1 区 6 面の遺構（2）（1/40）

られる。1198 号や 1200 号、1201 号、1211 号は礎石の抜根された痕跡と考えられる。礎石はロームブロック層上に据えられており、ロームブロック層上に堆積した土層は礎石の抜根後に堆積したものと考えられる。

1212 号は礎石抜根の痕跡が見られなかったピットで、平面形は方形となる。底面から大型の礫が検出されている。この礫は礎石の可能性もあるが、礎石が据えられたロームブロック層は見られなかった。そのため、この礫は抜根され廃棄された礎石の内の一つであるのかもしれない。

Ｈ　６面

旗本屋敷拝領時の造成（17 世紀前葉）に伴う６面盛土層の上面を６面として調査を行った。この６面盛土は 1m 前後の厚さがあり、自然堆積層上に形成された７面を覆っている。６面盛土層は F-1 区内全域に堆積しているものの、均質な土層となっており、それは H-1 区や H-2 区でも同様の状況が確認されている。F-1 区南半では東西に走る溝 1400 号がおり、面的に捉えることは出来なかったものの、６面盛土層は南に隣接する F-2 区に向かい傾斜していくことが予想される。最初期の盛土層である６面盛土層上では遺構は散漫に分布しており、溝４条、土坑７基、ピット 11 基が検出された。

【溝】

1287 号（第 1-152 図、第 3-16 表）

1400 号よりも北側で検出された溝で、1400 号に直行するように南北に走る。断面形はＵ字状で、覆土は３層に分かれている。１層はしまり、粘性の強い灰黄褐色土層で、ローム粒や砂質シルト粒、白色砂粒を含む。２層と３層は黒褐色土層で、２層はローム粒と砂質シルトブロック、３層はローム粒、ロームブロック、砂質シルトブロックを含む。1287 号から出土した遺物の点数、重量は５点、57.0g で、白色系かわらけが出土している。出土した遺物から遺構の年代は 17 世紀前葉に位置づけられる。

1400 号（第 1-152 図、図版 3-57-6、第 3-16 表）

1400 号は２面で検出された大型土坑 1166 号の直下に位置しており、1166 号により覆土が大きく失われていた。1400 号は調査区を東西に走る溝で、H-2 区で検出された屋敷境を区画する溝 4019 号、4282 号、4343 号よりもやや北側に位置するが、平行するように同じ方向に走ることから屋敷境の区画施設の一部とした。覆土は８層に分かれている。１層はしまり、粘性の強い黄褐色土で、砂や粘土を含む。２層は白色粒子や炭化物粒を含む暗褐色土層、３層は明黄褐色の砂層、４層から６層はしまり、粘性の強い褐灰色土層、７層と８層はしまり、粘性の強い黒褐色土層が堆積する。1400 号の底面からは細い溝 1369 号と土坑 1370 号を検出している。1369 号は H-2 区６面の溝 4240 号の延長線上に位置しており、幅や深さも共通することから、1369 号も 4240 号と共に区画施設と言える。

1400 号から出土した遺物の点数、重量は 181 点、11,306.6g である。出土遺物から遺構の年代は 17 世紀中葉に位置づけられる。また、1369 号から出土した遺物の点数、重量は１点、300.0g である。

【土坑】

1278 号（第 1-152 図、図版 3-57-7、第 3-16 表）

1278 号は楕円形の土坑で、北側が調査区外へと伸びている。底面は西に向かって傾斜しており、壁面は緩やかに立ち上がっている。覆土は２層に分かれる。１層はローム粒、砂質シルト粒を含む暗褐色土層、２層はごく一部に堆積する土層で、しまり・粘性の強い褐色土層である。出土遺物は 17 世紀初頭から 17 世紀前半代にまとまる。肥前産磁器に初期Ｕ字高台の碗を含み、17 世紀第２四半期を下限とする

1329 号（第 1-152 図、図版 3-57-8、第 3-16 表）

1329 号は楕円形の土坑で、F-1 区南東部から検出された。底部は一段下がるように深く掘り込まれている。壁面は酸化しており、赤錆が付着している。覆土は５層に分かれている。表層に堆積する１層は砂層、２層は砂質土層である。３層から５層は覆土の主体となる部分で、いずれの層もブロック状にグライ化した砂を含んでおり、しまり、粘性ともに強い層である。グライ化した砂が含まれる

ことから、1329 号は埋没前には水が溜まるような状況であったことが推察される。1329 号から出土した遺物の点数、重量は 45 点、969.2g である。出土した遺物から遺構の年代は 17 世紀第 2 四半期に位置づけられる。（佐藤・合田）

2）I区

I区は調査区北西端の急崖斜面下端部から高台端部にかけて東西に細長い範囲で、江戸時代の絵図では、旗本成瀬家－鳥居家の裏手と高台上に西接する五井松平家との屋敷境にまたがる。現地表面の標高は、平坦部上端側が約 23.8 m、斜面部下端が約 15.0 mを測り、法面勾配 31 ～ 35 度、9 mの比高を有する。高台上を「平坦部」、斜面地を「斜面部」と称し、安全上の配慮から次の方法で調査を行った。平坦部と斜面部上段までは高台側に重機を据え、斜面部下段は F-1 区側から、それぞれ北側隣地擁壁から 2 mの離隔範囲を設定し掘削深度に応じた犬走りや法面により安全を確保しながら調査を行い、終了後に斜面に重機を据えるステージを段階的に嵩上げしながら斜面中位～下位の深掘調査を行った。なお､平坦部では掘削工事に伴う立会調査と近代の煉瓦基礎(第 1-45 図)の記録を行った。

調査区前には斜面部中位に間知石を使用した 3 列の石列（2003 号）が露出していた。間知石の石尻側を縦位に 2 段鋸歯状に組み合わせて斜面に据え付けた構造を呈しており、使用された石材は転用と考えられる。斜面裾部北側にも地表面より若干埋没したかたちで南北に石列（2006 号）が確認された。石質・形状が多様であり、転用と考えられる。いずれも現代に施工された土留ないし法面養生の用途が考えられる。

遺構確認面は､斜面部上端が 2 面､斜面部下端が 6 面である。6 面は自然堆積の東京層群第 1 砂層で、中央が東西方向に谷状に窪む。検出遺構は 27 基、廃棄・造成層 2 、廃棄土坑 4 、溝 2 、埋桶 1 、石列 3 、集石土坑 1 、礎石 1 、植栽痕跡 5 、土坑 2 、ピット 5 、段切 1 箇所で、 1 面検出を含めてそのほとんどが成瀬家拝領期である。旧地形と切土･盛土地業については、第 III 章「基本層序」第 2 節【I区】の項をあわせて参照されたい。

A　1面

2001 号、350 号・2004 号（第 1-18・19・153・154 図、図版 3-36・69、第 3-16 表）

I区 1 面斜面部上段から裾部までほぼ全域にわたり広域に確認され、さらに F-1 区北西側に及ぶ範囲にまで広がる廃棄と斜面造成を兼ねた遺構群である。I区斜面部上半を 2001 号、斜面部下半から裾部までの 2004 号、2004 号から連なる F-1 区側を 350 号と称する。全長は東西 22.4 m、南北 14.3 m以上で北側は調査区へ延びる。遺構全体の比高は 8 mに及ぶ。垂直方向の最大深度は深さ 4.5 mを測るが、斜面裾部から F-1 区側は 0.5 ～ 0.6 mとほぼ均等な深さとなる。旧地形は勾配 55 ～ 60 度の急峻な崖面となり、渋谷粘土層～東京層群第 1 砂質土層が露頭している。壁面が観察される箇所では標高 19.7 mと 14.5 mの切土法面に幅 1.5m ～ 2 mの犬走り状の小段が形成されている。露頭面には著しい摩滅が認められ、掘削痕は視認できなかったが、人為的な開削と判断され、粘土・砂採掘を本来の目的とした段切りの可能性がある。

覆土の堆積状況は高台上の五井松平家側から斜面に向かって南東方向に投げ捨てられたように堆積する所謂「盛りこぼし盛土」である。覆土は瓦礫・動物遺体（特に貝類）を多く含む廃棄層であるが、2001 号は焼土層を含まず、上位はやや層厚が厚く、下位は層厚がやや薄くなる。350 号・2004

号の覆土は次のように大別できる。I 層は焼土主体の層厚の厚い層、II 層は複数層で形成される廃棄層で 2001 号に類似する。III 層はほぼ無遺物のローム・盛土を主体とするⅣ層以下を被覆する層、IV 層は複数の薄層で形成される水平堆積の廃棄層である。安全上の問題から 2001 号と 2004 号の関係性を把握しきれなかったが、覆土の様相からは 2001 号と 2004 号 II 層が類似する。但し、遺物の年代観はいずれも 18 世紀後葉を主体としながらも 2004 号 I 層が 18 世紀末葉を下限とするのに対し、2001 号は信楽産端反碗 19 世紀第 1 四半期の遺物を若干含むなど相対的に新しい。出土遺物は 2001 号が 3,266 点 222,510.3g、350 号が 4,383 点 408,522g。2004 号が 11,716 点 1,719,828.8g に及ぶ。遺存状態は総じて高いが接合率は低調である。藤巴紋や福岡今宿瓦師の刻印を有する福岡藩黒田家関連瓦（第 2-133 ～ 136 図）が多量に出土しているほか、福岡産高取系陶器も複数出土している（第 2-47 図）。2004 号 I 層の焼土は寛政 6 年（1794）の火災に起因する可能性が高く、18 世紀第 4 四半期の様相である。2001 号は 19 世紀第 1 四半期まで下る可能性が考えられる。斜面地造成を目的として外部から搬入されたごみの可能性が高い。

B　2面

2007 号（第 1-155 図、図版 3-70-3、第 3-16 表）

斜面部下端の F-1 区との境界付近で検出された南北に連なる溝で、南方へと下がり F-1 区側に至り 698 号に連なる。断面 U 字形で開口部で外反する。幅 0.88 m、深さ 0.29 mを測る。出土遺物は 522 点 50,926.6g と比較的多く、化粧関連遺物が目立ち、18 世紀後葉の 2004 号と同時に廃絶された可能性が考えられる。

2011 号（第 1-155 図、第 3-16 表）

斜面部下端から検出された埋桶である。桶径 0.42 m、掘方径 0.58 m、上位を大きく削平を受け残存深 0.24 mを測る。出土遺物は 95 点 2,878.6g、廃絶年代は 18 世紀第 4 四半期と推定される。

C　3面

2014 号（第 1-155 図、第 3-16 表）

斜面裾部の西壁際南側から検出された土坑で、南北 2.25 m以上、東西 1.8 m以上、深さ 0.56 mを測る。西側へ起伏を持ちながら下がる。出土遺物は 321 点 4,792.7g。覆土は砂を主体とする。他の遺構に比べて金属製品が 18 点（点数比 5 %）と多く、なかには仏具の可能性がある鏡合金製細片も含まれる（第 2 -186 図 157）。廃絶年代は、陶磁器類の年代観から 18 世紀第 2 四半期と推定される。

D　4面

2019 号・2021 号（第 1-155 図、図版 3-70-3、第 3-16 表）

斜面裾部東側から検出された、南北に 1 .8 m（ 1 間）間隔で並ぶ円形を呈するピットである。2019 号は径 0.41 ～ 0.43 m、深さ 0.23 m、2021 号は径 0.33 ～ 0.37m、深さ 0.16 mを測る。柱痕は確認されず、覆土は 3 層盛土に類似する。いずれからも遺物は出土していない。

E　5面

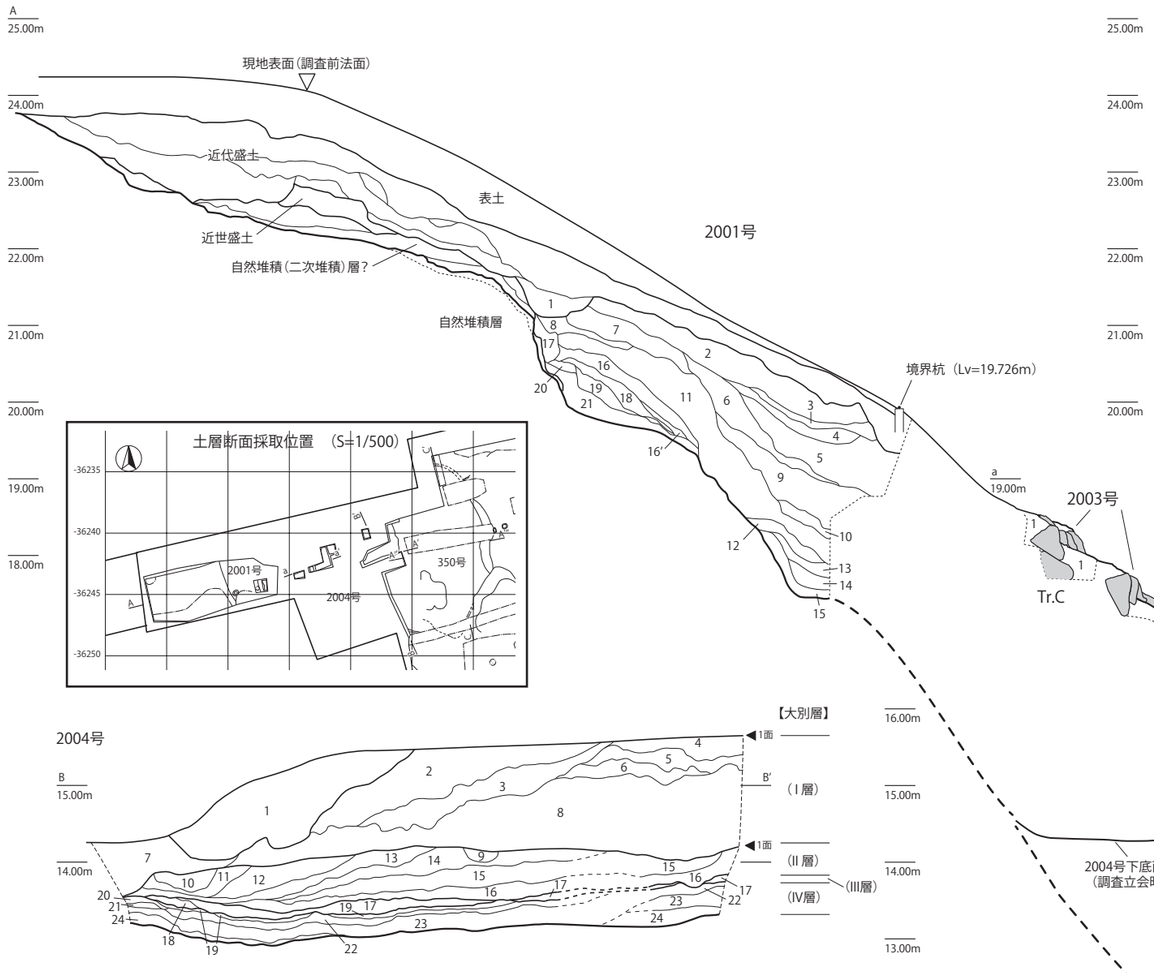
2023 号・2024 号（第 1-155 図）

砂層を基調とする浅い土坑で、盛土基底面の起伏にあたる可能性もある。無遺物である。

F　6面

2025 号（第 1-155 図、第 3-16 表）

2001号、350号・2004号



2004号 A-A′ sec・a-a′sec
1：10YR3/1(黒褐色) しまり:あり 粘性:弱い 表土（近現代） 植物根多く入り、礫上位に多い ローム粒1～3% 礫（細礫少・中礫φ~30mm中量） 焼土粒1～3% 炭化物粒1～3%
1′:2.5Y8/2+10YR3/3(灰白色+暗褐色) しまり:あり 粘性:弱い 表土（近現代） 砂混合層 ローム粒・BLφ~20mm15～25% 細砂30～50% 細礫1～3% 炭化物BLφ~20mm1～3%
2：10YR4/4(褐色) しまり:あり 粘性:強い 粘土主体の廃棄層（瓦多量） 中礫φ10~30mm5～10% 焼土粒1～3% 炭化物粒5～10%
3：10YR6/1(褐灰色) しまり:あり 粘性:強い 粘土主体の廃棄層（瓦・灰多量、陶磁器類・貝少量含む） 2・3層間層で炭入る 中礫φ10~50mm15～25% 焼土粒1～3% 炭化物粒5～10% 炭化物BLφ10~30mm5～10%
4：10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり:あり 粘性:強い 粘質土主体の廃棄層（陶磁器類・貝多量含む） 3・4層間被熱か（間層で炭入る）・ ロームBLφ10~20mm15～25% 中礫φ10~20mm5～10% 炭化物粒φ2~10mm5～10%
5：10YR4/1(褐灰色) しまり:あり 粘性:あり 6層より焼土減 中礫φ~30mm1～3% 焼土粒15～25% 焼土BLφ~20mm15～25% 炭化物粒5～10%
6：2.5YR4/8(赤褐色) しまり:弱い 粘性:あり 焼土+被熱瓦層 中礫φ~20mm1～3% 焼土粒50%～ 焼土BLφ~30mm50%～ 炭化物粒・BLφ~20mm5～10%
7：10YR5/4(にぶい黄褐色) しまり:弱い 粘性:強い 明度の高いロームBL散在 焼土粒1～3%
8：10YR5/6(黄褐色) しまり:強い 粘性:あり ロームBL主体層 暗褐色土少量 砂1～3% 焼土粒φ2~5mm1～3% 炭化物粒・BLφ2~20mm5～10%
9：10YR3/1(黒褐色) しまり:弱い 粘性:あり 粘質土 瓦主体（非被熱）廃棄層 細砂5～10% 礫（細礫少・中礫φ~60mm中量） 焼土粒15～25% 炭化物粒15～25%
10：2.5Y4/2(暗灰黄色) しまり:あり 粘性:強い 粘質土 廃棄層（瓦減少・貝類少量含む） 細砂5～10% 礫（細礫少・中礫微量） 焼土粒1～3% 炭化物粒・BLφ5~20mm5～10%
11：2.5Y4/1(黄灰色) しまり:強い 粘性:強い 粘質土 10層に類似 ロームBL5～10% 礫（細礫微量・中礫微量） 炭化物粒1～3%
12：2.5Y4/1(黄灰色) しまり:あり 粘性:強い 廃棄層（瓦・貝主体） 砂5～10% 中礫φ10~40mm15～25% 焼土粒1～3% 炭化物粒φ1~10mm15～25%
13：2.5Y4/3(オリーブ褐色) しまり:強い 粘性:やや強い ロームBL主体（武蔵野ローム か） 暗褐色土少量含む 細砂1～3% 焼土粒1～3% 炭化物粒1～3%
14：2.5Y4/1(黄灰色) しまり:強い 粘性:強い 粘質土 廃棄層（瓦・陶磁器類） 粘土φ10~20mm1～3% 炭化物粒・BLφ~15mm15～25%
15：2.5Y4/3(オリーブ褐色) しまり:強い 粘性:やや強い ロームBL主体層（武蔵野+脱色ローム） 細砂1～3% 焼土粒φ1~5mm1～3% 炭化物粒φ1~5mm1～3%
16：5Y4/1(灰色) しまり:強い 粘性:強い 16・17層類似した廃棄層（陶磁器類・貝類） 酸化 ロームBL1～3% シルト5～10% 細砂15～25% 中礫φ10~30mm15～25% 焼土粒・BLφ~20mm15～25% 炭化物粒・BLφ~30mm15～25%
17：5Y4/1(灰色) しまり:あり 粘性:強い 廃棄層（16層より貝類多い） シルト 細砂5～10% 中礫φ10~30mm5～10% 焼土粒1～3% 炭化物BLφ~30mm15～25%
18：2.5Y4/3(オリーブ褐色) しまり:強い 粘性:強い シルト+粘土質ローム+砂混合層 ロームBL30～50% シルトφ1~15mm15～25% 細砂5～10% 中礫φ~10mm1～3% 炭化物粒φ1~3mm1～3%

2004号（B-B′sec）
1：黄褐色砂層 山砂主体 現代の擁壁掘方覆土
2：10YR4/2(灰黄褐色) しまり:あり 粘性:やや弱い ローム粒φ1～3mm1% 炭化物φ1～30mm3% 貝φ1～40mm3%BL状に入る 小石φ1～10mm2% 瓦片含む
3・4層：瓦層
5：10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり:強い 粘性:あり
6：10YR4/2(灰黄褐色) しまり:強い 粘性:あり
7：10YR4/2(灰黄褐色) しまり:あり 粘性:やや弱い ローム粒φ1～3mm1% 炭化物φ1～30mm3% 貝φ1～40mm3%BL状に入る 小石φ1～10mm2% 瓦片含む
8：5YR3/4(暗赤褐色) しまり:弱い 粘性:弱い 瓦片(焼)20% 焼土層
9：10YR3/3(暗褐色) しまり:強い 粘性:強い ローム粒5～10% 細礫1～3% 焼土粒5～10% 炭化物粒5～10%
10：10YR3/3(暗褐色) しまり:強い 粘性:強い 均質
11：10YR4/2~4/4(灰黄褐色～褐色) しまり:強い 粘性:強い ローム粒φ1~5mm5～10% 粘土50%～ 砂30～50% 酸化鉄散在 砂・粘土混合層
12：2.5Y5/4+10YR5/6~4/6(黄褐色～褐色) しまり:あり 粘性:あり ローム粒φ1~10mm15～25% ロームBLφ10~40mm30～50% 粘土15～25% 砂50%～ 炭化物粒1～3% 酸化鉄散在 砂・ローム・粘土混合層
13：2.5Y4/2(暗灰黄色) しまり:あり 粘性:強い ローム粒φ1~10mm30～50% ロームBLφ10~20mm5～10% 粘土1～3% 砂5～10% 炭化物粒5～10%
14：10YR3/3(暗褐色) しまり:強い 粘性:強い ローム粒5～10% ロームBLφ10~15mm5～10% 粘土 砂5～10% 細礫1～3% 焼土粒5～10% 炭化物粒5～10%
15：10YR3/2(黒褐色) しまり:あり 粘性:強い 砂5～10% 細礫1～3% 焼土粒5～10% 炭化物粒15～25% 炭化物BLφ~15mm15～25% 瓦含む
16：10YR4/1(褐灰色) しまり:あり 粘性:あり 砂5～10% 細礫5～10% 中礫5～10% 焼土粒5～10% 炭化物粒15～25% 廃棄層
17：2.5Y4/4(オリーブ褐色) しまり:強い 粘性:やや弱い 砂30～50% 炭化物粒1～3%
18：2.5Y4/6~10YR5/6(オリーブ褐~黄褐色) しまり:強い 粘性:弱い 粘土15～25%砂50%～ 砂主体層
19：10YR4/1(褐灰色) しまり:あり 粘性:強い 砂5～10% 焼土粒5～10% 炭化物粒30～50% 炭化物BLφ~30mm30～50% 陶磁器類・灰を含む廃棄層
20：10YR4/1(褐灰色) しまり:あり 粘性:強い 砂30～50% 22層に類似
21：10YR4/6(褐色) しまり:あり 粘性:弱い 砂20～30% 炭化物粒1～3% 22層に類似
22：10YR4/6(褐色) しまり:強い 粘性:弱い 砂30～50% 炭化物粒1～3%
23：10YR4/1(褐灰色) しまり:あり 粘性:強い 砂5～10% 焼土粒1～3% 炭化物粒15～25% 炭化物BLφ~30mm15～25% 陶磁器類・貝類を含む廃棄層
24：10YR4/4(褐色) しまり:強い 粘性:強い ローム粒5～10% 粘土φ白色mm 砂15～25% 炭化物粒5～10%

350号（SPA″-A‴）
1：10YR4/2(灰黄褐色) しまり:あり 粘性:やや弱い ローム粒φ1～3mm1% 炭化物φ1～30mm3% 貝φ1～40mm3% 小石φ1～10mm2% 瓦片含む
2：瓦層 SPC-4層相当 黒褐色土（10YR3/2)が間に入る
3：焼土層 5YR3/4(暗赤褐色) しまり:弱い 粘性:弱い 瓦片(焼)20% SPB-6層
4：10YR4/2(灰黄褐色) しまり:あり 粘性:弱い 焼土粒φ1～10mm2% 炭化物φ1～20mm1% 貝φ1～40mm3% 礫φ10～50mm2% 砂質土
5：10YR5/3(にぶい黄褐色) しまり:あり 粘性:あり 焼土粒φ1～10mm1% 炭化物φ1～10mm1%
6：10YR3/4(暗褐色) しまり:あり 粘性:あり
7：10YR4/1(褐灰色) しまり:やや弱い 粘性:あり 炭化物φ1～10mm10%

350号（SPC-C′）
1：10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり:やや弱い 粘性:やや弱い 焼土粒φ1～20mm2% 瓦片を含む
2：10YR4/2(灰黄褐色) しまり:あり 粘性:やや弱い ローム粒φ1～5mm1% 焼土粒φ1～10mm1% 炭化物φ1~30mm5% 粘土(2.5YR5/1)BLφ50～60mm5% SPA″-A‴1層
3：10YR3/2(黒褐色) しまり:あり 焼土粒φ1～10mm2% 粘性:やや弱い 炭化物φ10～30mm10% 瓦片20%
4：SPA″-A‴-2層（瓦層）に対応
5：SPA″-A‴-3層（焼土層）に対応 焼土・焼けた瓦片に同じだが、同層よりセクション面に瓦が多く、特に北側はほぼ瓦で充填され、空隙に焼土が入る
6：SPA″-A‴-5層（にぶい黄褐色土層）に対応

＊ 基本層序（盛土層・自然堆積層）の土層説明等の詳細は、第Ⅲ章2 セクションM・N（第1-18・19図）を参照

0 1/80 4m

第 1-153 図 Ⅰ区の遺構（１）（1/80）

2001号（A-A'sec）
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒5～10%　ロームブロックφ～15mm5～10%　粗砂1～3%　細礫φ2~4mm1～3%　焼土粒5～10%　貝含む　後世の別遺構の可能性高い
2：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　ロームブロック1～3%　中礫φ4~30mm5～10%　大礫φ60~100mm1～3%　焼土粒1～3%　炭化物粒5～10%　炭化物ブロックφ～15mm5～10%　遺物（陶磁器・貝）・灰少量含む
3：10YR2/1(黒色)　しまり：強い　粘性：弱い　泥炭質　炭化物集中　ロームブロック1～3%　焼土粒1～3%　炭化物粒50%～
4：10YR2/1(黒色)　しまり：あり　粘性：強い　焼土粒1～3%　焼土ブロックφ~20mm1～3%　炭化物粒30～50%　遺物（陶磁器・貝）・灰少量含む
5：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや弱い　粘性：弱い　上位礫多数　下位灰を層状に含む　貝含む　中礫φ10~40mm15～25%
6：5Y3/2~4/2(オリーブ黒~灰オリーブ色)　しまり：弱い　粘性：強い　貝・砂多量、下位粘土多量に含む　粘土　粗砂30～50%　細礫1～3%　中礫φ~10mm1～3%　炭化物粒φ~10mm1～3%
7：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　細礫5～10%中礫φ5~30mm5～10%　焼土粒φ~10mm1～3%　炭化物ブロックφ~20mm15～25%　瓦・漆喰・陶磁器類・貝含む
8：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：強い　1層類似　無遺物層　ロームブロックφ10~30mm15～25%
9：10YR5/6(黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　大型のロームブロック(φ30~150)主体　上位は細砂中量、下位は白色粘土やや多く含む
10：10YR4/6(褐色)　しまり：あり　粘性：強い　9層より砕土性の高いロームブロック（φ10~50）主体層　砂・白色粘土減少　粘土5～10%　細砂5～10%
11：10YR5/6(黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　下位は大型ロームブロック多量、白色粘土含
12：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　砕土性の高いローム混合層　ロームブロックφ10~40mm15～25%　粘土5～10%　細砂5～10%
13：10YR4/6(褐色)　しまり：あり　粘性：強い　12層よりローム多い　ロームブロックφ10~50mm30～50%　粘土15～25%　砂5～10%
14：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　廃棄層　瓦・貝類（遺存度高）含む　ロームブロック5～10%　粘土1～3%　砂1～3%　炭化物粒5～10%
15：10YR4/4(褐色)　しまり：強い　粘性：あり　壁沿いに二次堆積する砂質土層　黒褐色土(14層基調)少量入るほかは均質　砂30～50%
16：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い　廃棄層　上位は炭化物が層状に入る　貝類少量含む　ロームブロックφ~20mm15～25%　中礫φ10~30mm5～10%　炭化物BL5～10%
17：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い　混ローム崩落土　20層に類似　瓦・貝微量含む　ロームブロックφ~40mm30～50%　焼土粒1～3%　炭化物粒1～3%
18：10YR3/2(黒褐色)　しまり：弱い　粘性：あり　廃棄層　上層と様相異なり貝減少　ロームブロックφ~20mm15～25%　粗砂15～25%　中礫φ10~30mm5～10%　炭化物粒5～10%　炭化物BL30～50%
19：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒30～50%　ロームブロック5～10%　中礫φ10~30mm5～10%　炭化物粒1～3%　貝微量含む
20：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　暗～黒褐色土含むローム崩落土　ロームブロックφ~15mm30～50%　ローム粒30～50%　中礫φ10~30mm5～10%
21：15：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　二次堆積ローム土　ボソつく

第 1-154 図　Ⅰ区の遺構（２）（1/40）

斜面裾部南端の自然堆積の砂層上での一部のみの検出であるが、段切りと推定される。東西３m以上、南北 2.3 m以上、深さ 0.50m を測る。壁・底面は起伏が著しく、南東方向に段状に下がる。遺物は出土していないが、検出面から 17 世紀前半の旗本成瀬家拝領当初に位置づけられる。　（大八木）

３）H-1 区

H-1 区は調査範囲北東部、F-1 区の東側に隣接する調査区で、F-1 区と同様に旗本成瀬家・鳥居家の屋敷範囲に相当する。F-1 区は屋敷の庭園空間であったが、H-1 区は居住空間部分にあたる。現地表面の標高は 14.5m で、南に向かって緩やかに傾斜している。H-1 区では、近代、近世、中世合わせて合計 11 面の遺構確認面が検出された。そのうち、近世の旗本屋敷期にあたるものは 1 面から 6 面となる。隣接する F-1 区と同様に、1 面が旗本鳥居家屋敷の時期にあたり、2 面から 6 面が旗本成瀬家にあたるものと考えられる。H-1 区の東側は後世の開発により大きく攪乱を受けており、1 面から 3-3 面までに及んでいる。

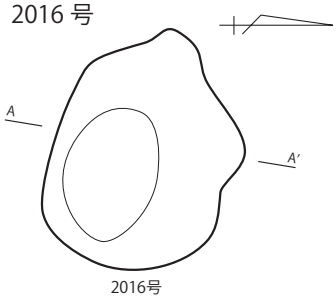
各面の盛土層は H-1 区北側では水平堆積となるが、途中から南に向かって傾斜しはじめ、H-1 区南壁付近では、H-1 区北壁とは異なる堆積となって確認される。特に H-1 区東側では明確に遺構確認面を捉えることが困難な堆積状況となっていた。遺構も攪乱を受けた 1 面から 3-3 面を除き、４～６面では東側は分布が希薄であった。このような状況は H-2 区東側でも共有されて H-2 区北東部は遺構の分布が希薄になる。これは、屋敷内での空間利用の差を反映しているものと考えられる。

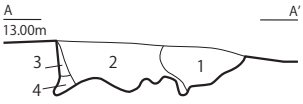
Ａ　１・２面

H-1 区 1 面は F-1 区 1 面、H-2 区 1 面に対応する。H-1 区 1 面では東側は大きく攪乱を受けており、東端の一部は残存していたものの東側の大部分が 4 面近くまで失われていた。一方、西側は攪乱を受けておらず表土層下で 2520 号を検出している。1 面検出レベルは F-1 区近代面に近いレベルであるが、出土した遺物の時期などから F-1 区 1 面に対応する旗本鳥居家屋敷の時期とした。

1 面から検出された遺構は焼土・瓦層 1 基と瓦溜り 1 基である。また、2 面においては調査区東端

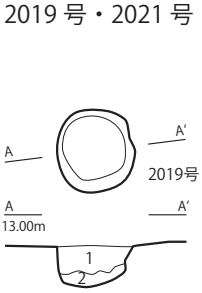
2016 号

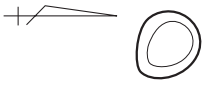




2016号
1：10YR4/4(褐色)　砂20～30%　2層を基調とするがピット状に酸化鉄を多く含む層
2：10YR4/1(褐灰色)　砂20～30%　炭化物φ1～5mm5～10%　粘土φ5～10mm15～20%　酸化鉄散在　瓦・陶磁器をやや多　遺存度高
3：10YR4/1(褐灰色)　砂10～15%　粘土15～20%　2層類似
4：10YR3/1(黒褐色)　炭化物φ3～10mm10～15%　2層を基調とし貝類やや多　酸化鉄散在

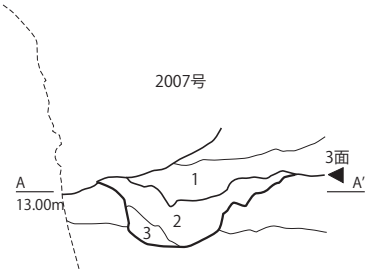
2019 号・2021 号





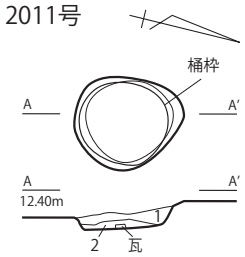
2019号
1：2.5YR3/4(暗赤褐色)　しまり：強い　粘性：強い　砂5～10%　炭化物粒φ5~10mm1～3%　粘土φ5~20mm5～10%　中礫φ10~25mm1～3%　全体的に酸化　3面盛土に類似
2：5Y4/2(灰オリーブ色)　しまり：強い　粘性：極強　砂30～50%　粘土50%～　砂・粘土BL
2021号　(単層のため、断面図なし)
1:10YR3/4(暗褐色)　しまり:やや強い　粘性:強い　2019号1層に類似するが酸化弱い　下位は白色粘土BL目立つ　ロームBLφ10~20mm1～3%　粘土φ2~15mm5～10%　砂15～25%　炭化物粒φ5~15mm1～3%　炭化物BL1～3%

2007 号



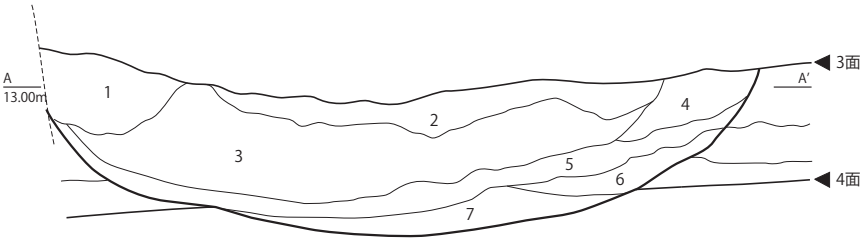
2007 号
1：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：弱い　やや赤味を帯びる　粘土1～3%　砂5～10%　炭化物 BL5～10%　上位1面盛土沈降
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　灰・割礫含む　ガサつく　粗砂5～10%　細礫15～25%　中礫φ~40mm15～25%
3:10YR3/4(暗褐色)　しまり:あり　粘性：弱い　層理面に沿って酸化鉄固着　粗砂5～10%　細礫5～10%　中礫5～10%

2011号



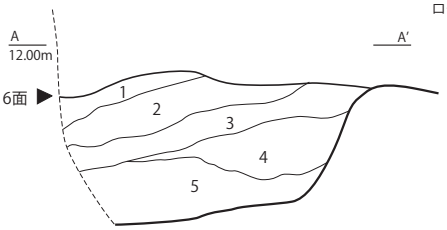
2011号
1：10YR4/3(黒褐色)　しまり：強い　粘性：弱い　焼土粒φ5%　炭化物粒φ2～5mm5%　黄褐色細砂少量(20～25%)　細礫(10～15%)下へいくほど酸化鉄多くなる　黄灰色粘土
2：砂質シルト主体　しまり：強い　粘性：弱い　焼土粒1～3%　炭化物粒φ1～3mm3～5%　粘土粒1～3%　掘方覆土

2014号



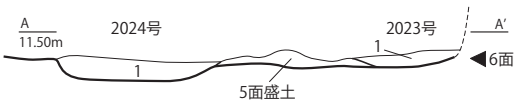
2014 号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：強い　均質
2：10YR4/2~4/4(灰黄褐色～褐色)　しまり：強い　粘性：強い　砂・粘土混合層　3層類似　酸化鉄散在　ローム粒φ1~5mm5～10%　粘土50%～　砂30～50%
3：2.5Y5/4+10YR5/6~4/6(黄褐色～褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂・ローム・粘土混合層　酸化鉄散在　遺存度の良好な陶磁器類を含む　ローム BLφ10~40mm30～50%　ローム粒φ1~10mm15～25%　粘土15～25%　砂50%～　炭化物粒1～3%
4：2.5Y4/2(暗灰黄色)　しまり：あり　粘性：強い　3・5層混合層　ローム BLφ10~20mm5～10%　ローム粒φ1~10mm30～50%　粘土1～3%　砂5～10%　炭化物粒5～10%
5：10YR3/1(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　細～中礫（円・割）微量含む　酸化鉄散在　ローム粒5～10%　粘土15～25%　砂5～10%　炭化物粒φ5~10mm15～25%　炭化物 BLφ10~20mm15～25%
6：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：強い　粘土主体層　4層類似　酸化鉄散在　ローム BLφ10~20mm5～10%　ローム粒15～25%　粘土30～50%　砂1～3%　炭化物粒1～3%
7：2.5Y4/2~4/3(暗灰黄色~オリーブ褐色)　しまり：強い　粘性：強い　粘土・ローム混合層　6層類似　酸化鉄散在　ローム BLφ10~30mm30～50%　ローム粒15～25%　粘土30～50%　砂1～3%　炭化物粒φ1~5mm1～3%

2025号



2025 号
1：10YR3/3+2.5Y4/4(暗褐色＋オリーブ褐色)　しまり：強い　粘性：あり　粘質土　ローム BLφ10~20mm5～10%　粘土5～10%　砂5～10%
2：10YR5/6~5Y7/3(黄褐～浅黄色)　しまり：あり　粘性：弱い　粘土 BL 主体層　粘土 50%～砂15～25%
3：10YR6/1~2.5Y6/4(褐灰～にぶい黄色)　しまり：あり　粘性：弱い　粗砂・粘土薄層互層を形成　上下層理面に酸化鉄固着　粘土30～50%
3（下位）：2.5Y6/2(灰黄色)　しまり：あり　粘性：弱い　粗砂～細礫主体層　酸化鉄多く散在
4：5Y7/3(浅黄色)　しまり：強い　粘性：あり　細砂～中砂主体層
5：5Y8/2~8/3()　しまり：あり　粘性：あり　粗砂主体層　腐植土・炭化物・酸化鉄含む 2023・2024 号に類似　炭化物粒 30～50%

2023号・2024号



2023 号
1：2.5Y5/4(黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　盛土8・9層を基調とした砂主体層　2024 号に類似　粘土5～10%　炭化物粒 15～25%
2024 号
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　焼土粒φ3～10mm10%　炭化物粒φ3～5mm3%　粘土粒φ10～30mm3%

＊ 2007号・2014号・2023号・2024号・2025号の平面形は、全体図・割図を参照。土層断面図採取位置は、いずれも調査区壁面で図化した。

0　1/40　1m

第 1-155 図　Ⅰ区の遺構（3）（1/40）

部において埋桶 1 基、杭列 1 条、ピット 1 基を検出したが、攪乱により大きく削平されており、底面付近の痕跡が捉えられたのみである。

【焼土・瓦層】

2520 号（第 1-47 図、図版 3-33-1）

2520 号は H-1 区の表土層下より検出された焼土・瓦層で、その層の厚さはおよそ 1.5m となる。2520 号の範囲は、H-1 区の西側を覆い、H-2 区との区境を超えるが、H-2 区側の区境付近で収束する。また、H-1 区東側は 4 面・5 面にまでおよぶ攪乱により失われていた。2520 号の西端についても F-1 区との境界付近で攪乱を受けており、F-1 区への広がりを捉えることは出来なかった。2520 号の上部にはすぐに表土層が堆積しており、本来 2520 号上に堆積していた近代の盛土層はすでに削平されてしまっていた可能性が高い。また、1 面においても、F-1 区の遺構群に対応すると考えられる遺構は見られず、存在しなかったものと考えられる。覆土は焼土と被熱した瓦によって構成されており、そのほか陶磁器などの遺物も多量に包含している。出土した遺物の総点数は 19,285 点で、総重量は 6,033,574.1g である。瓦が大半を占めており、9,176 点・5,635,790.0g となっている。遺物の年代から、2520 号は成瀬家拝領期に寛政 6 年（1794 年）の火災に被災した際に廃棄されたものであると考えられる。瓦の産地は江戸を主体とし東海を少量含むなど、福岡産の瓦を含まない点において、周辺の同時期の瓦溜とは異なる様相を呈する。

Ｂ　3-1 面

H-1 区 3-1 面は F-1 区 3-1 面、H-2 区 3-1 面に対応し、旗本成瀬家屋敷の段階にあたる。2520 号を掘削したところ、焼土層や礎石が確認された。検出面のレベルや出土遺物から F-1 区 3-1 面に対応する面として、H-1 区 3-1 面として調査を行った。なお、H-1 区東側は広く攪乱を受けており、3-1 面は確認することができなかった。焼土層は 3-1 面残存範囲である調査区西側の中でも特に北半に広がっており、特に残りが良い部分については範囲を全体図に示している。また、焼土範囲内からは 4 棟の礎石建物跡を確認した。

3-1 面では礎石建物跡を構成する遺構も含めて埋桶 1 基、礎石 77 基、溝 2 条、瓦層 1 基、土坑 10 基、ピット 24 基が検出された。

【礎石建物跡】

3-1 面では礎石建物跡 4 棟とそれには含まれない礎石や礎石跡が検出されている。発掘調査段階で、礎石建物跡の範囲を確定させることが困難であったため、SB01 ～ SB04 と仮称し、セクション図、エレベーション図を作成した。整理作業において検討を加え、それらの範囲と建物跡の範囲は概ね一致していたものの一部で遺構の追加や削除を行ったものを建物跡とした。

建物跡 1（第 1-156 図、図版 3-62-1、第 3-16 表）

建物跡 1 は調査区西側の中央部を占める礎石建物跡で、隣接する礎石柵列も含めて建物跡 1 としている。発掘調査時においては記録作業の都合上、便宜的に SB01 と呼称し調査を行った。確認できた礎石はごく一部であったが、周辺のピットも礎石と同程度の規模であり、また等間隔に並んで検出されたことから礎石を抜き取られた礎石跡として調査を行った。建物跡の規模は 4 間× 3 間（桁行 7.3 m×梁行 3.7m）で田舎間で 8.2 坪、京間で 7 坪（27㎡）となる。検出された礎石および礎石跡には大小あり、大型のものは長軸が 0.6 m前後、小型のものは 0.3 m前後と規模が明確に分かれている。

大型のものは廂部分を除いた外周を巡るように配置されており、小型のものはその内部と南側の廂部分に配置されている。礎石の配置からおそらく回廊部分と部屋部分にあたるものと考えられる。回廊部分外周の礎石の柱間は 1 間（約 1.8m）であるが、西辺のみ間隔がやや狭まる。部屋部分の柱間は半分の半間となっている。北西隅の礎石跡は更におよそ半間の間隔をあけ調査区外へ礎石が続いていることから建物跡 1 は独立した 1 棟であるものの、主屋と回廊により接続される構造であると考えられる。また、建物跡 1 の西側には攪乱を挟み建物跡 4 が検出されている。建物跡 4 も 1 間単位の並びと半間単位の並びが混在する柱配置となっており、かつ軸線も揃うことから建物跡 1 と接続する可能性もあるが、繋がりが捉えきれないことからここでは別棟としている。大半の礎石が廃絶時に外されたと考えられ、各礎石跡の覆土は建物跡 1 の上面を覆う 2520 号下部の焼土層となっていた。

建物跡 2（第 1-156 図、図版 3-62-4、第 3-16 表）

建物跡 2 は建物跡 1 の東に隣接する礎石建物跡である。発掘調査時においては、便宜的に SB02 と呼称し調査を行った。建物跡の規模が半間× 1 間（桁行 2.0m ×梁行 1.0m）と小規模な建物跡で、納屋などの施設の可能性が考えられる。礎石は 2509 号と 2529 号以外は廃絶時に外されたと考えられ、建物跡 1 の上面を覆う 2520 号下部の焼土層を覆土とする礎石跡として検出されている。

建物跡 3（第 1-157 図、図版 3-62-3、第 3-16 表）

建物跡 3 は調査区中央部に位置する礎石建物跡ですぐ東側は攪乱を受ける。発掘調査時においては、便宜的に SB03 と呼称し調査を行った。建物跡の規模が建物跡 2 と同様に半間× 1 間（桁行 2.0m ×梁行 1.0m）と小規模な建物跡で、納屋などの施設の可能性が考えられる。礎石は 2512 号と 2513 号以外は廃絶時に外されたと考えられ、建物跡 1 の上面を覆う 2520 号下部の焼土層が覆土とする礎石跡として検出されている。

建物跡 4（第 1-157 図、図版 3-62-2、第 3-16 表）

建物跡 4 は調査区西端、建物跡 1 の西側で検出された礎石建物跡である。発掘調査時においては、便宜的に SB04 と呼称し調査を行った。先述の通り、建物跡 1 と接続する可能性もあるが、ここでは別棟として扱っている。建物跡の規模は 2.5 間× 1.5 間（桁行 4.6m ×梁行 2.0m）である。建物跡 4 では残存する礎石はなく、すべて礎石跡として検出されており、覆土には焼土が堆積する。

C　3-2 面

F-1 区 3-2 面、H-2 区 3-2 面に対応し、旗本成瀬家屋敷地の時期にあたる。2520 号の直下から検出された焼土層の内の 2 枚目の焼土層上を 3-2 面として調査を行った。なお、調査区東側は攪乱を受けており、焼土層と遺構が確認されたのは調査区西側のみとなっている。3-2 面焼土層は調査区中央部にのみ堆積しており、調査区西端では検出されなかった。また、遺構の分布には偏りがあり、調査区中央部の焼土層周辺には土坑が密集し、調査区東側には調査区を縦断する溝が複数走る。

3-2 面からは溝 4 条、礎石 5 基、配石 1 基、石列 1 条、瓦層 1 基、落ち込み 1 基、胞衣皿埋納遺構 1 基、土坑 50 基、ピット 80 基が検出された。

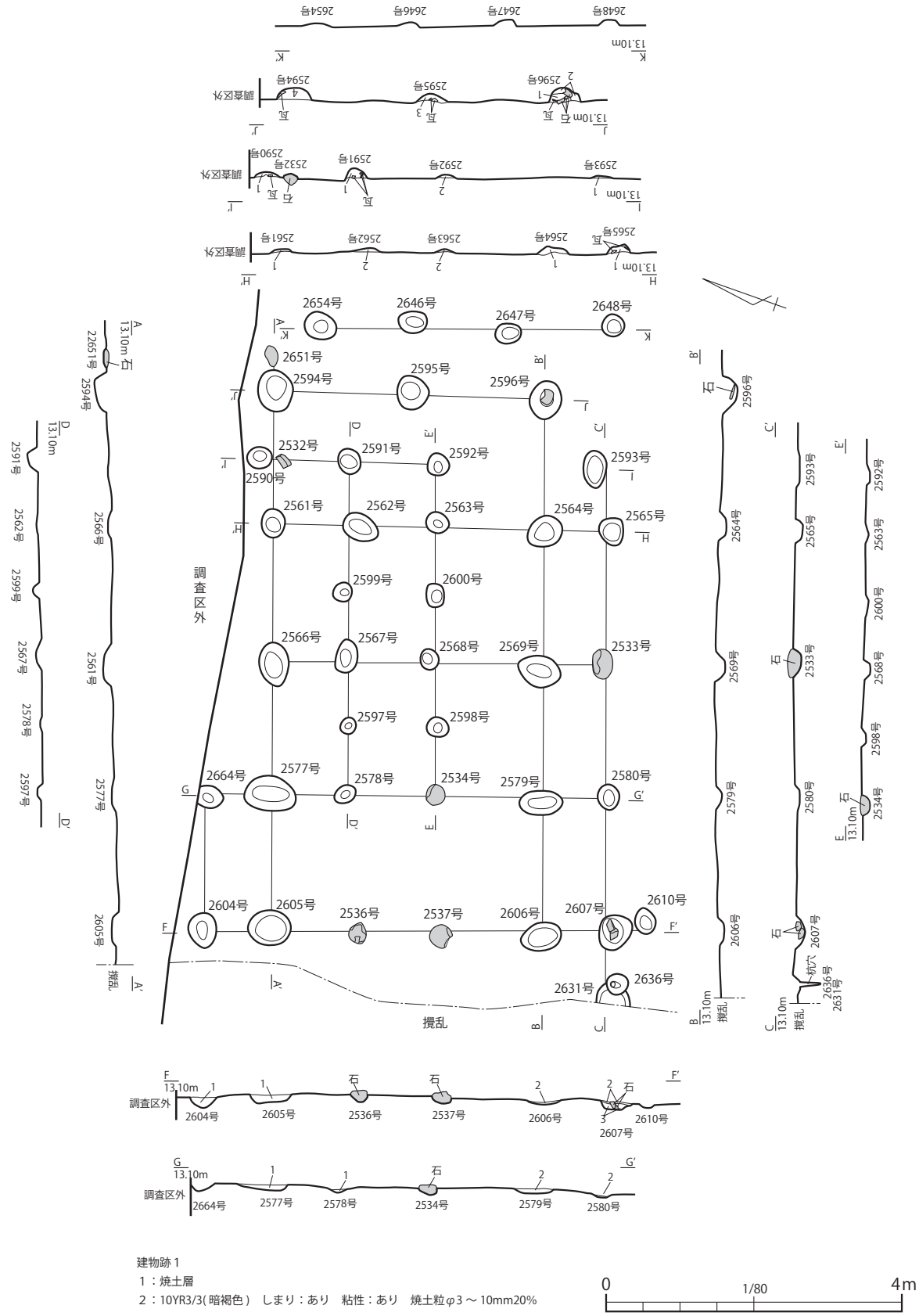
【溝】

3-2 面では調査区東側に密集して溝が検出されている。溝は 4 条あり、いずれの溝も南北に走る。

2680・2718・2745・2776・2777・2829（第 1-158 図、図版 3-63-1、第 3-16 表）

2680 号は断面 U 字形の溝で溝（2829 号）、ピット（2754 号）を切る。また北東側では覆土の上

建物跡 1

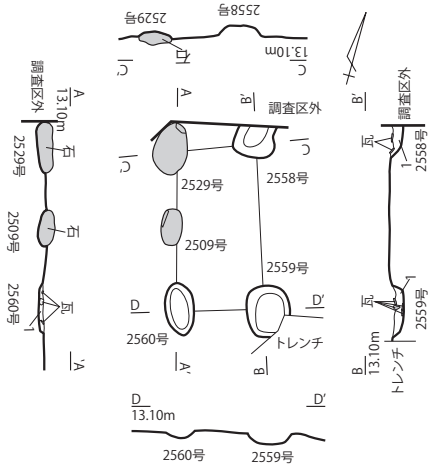


建物跡 1
1：焼土層
2：10YR3/3(暗褐色) しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ3 ～ 10mm20%

0　1/80　4m

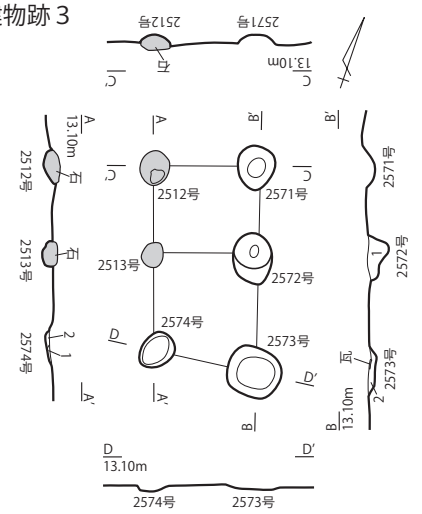
第 1-156 図　H-1 区 3-1 面の遺構（1）（1/80）

建物跡 2



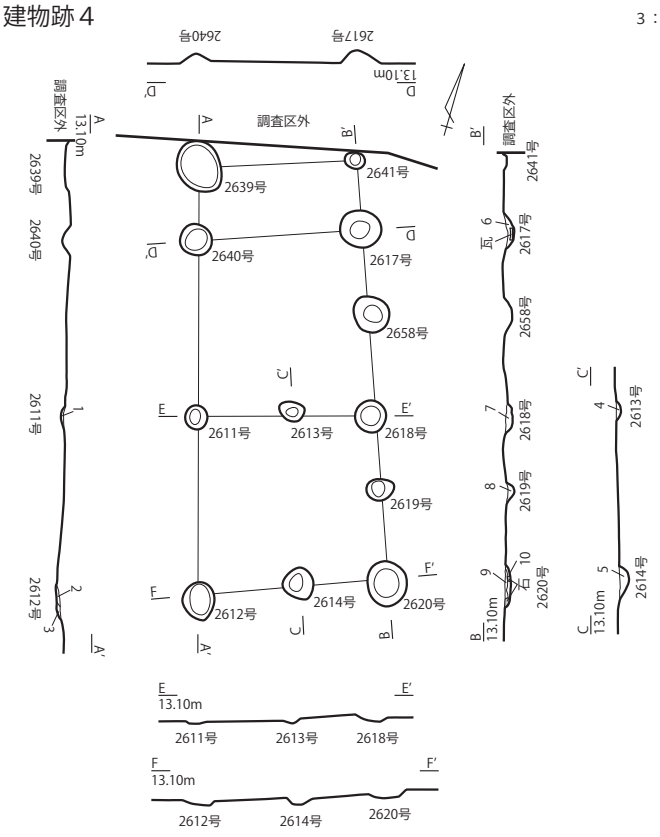
建物跡 2
1：焼土層

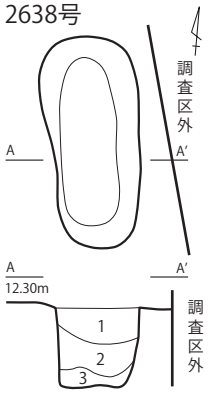
建物跡 3



建物跡 3
1：焼土層
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ5～10mm10%
　焼土ブロックφ30～60mm20%
3：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　白色砂粒φ1mm2%

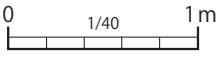
建物跡 4

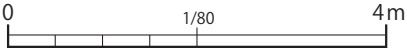




2638号
1：2.5Y4/1(黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　黄褐砂10%
2：N3/0(灰色)　しまり：強い　粘性：強い
　褐灰色(10YR5/1)粘土粒φ5～10mm2%　焼土粒φ2～5mm2%
　炭化物粒φ2～5mm2%
3：N3/0(灰色)　しまり：強い　粘性：強い
　緑灰色(7.5GY6/1)砂粒φ5～10mm10%　炭化物粒φ3～5mm2%

建物跡 4
1：10YR2/2(極暗赤褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ5～10mm10%　炭化物粒φ5～10mm5%
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土ブロックφ10～20mm20%
3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり
4：5R1.7/1(赤黒色)　しまり：やや弱い　粘性：弱い　焼土粒φ5～10mm10%　炭化物層
5：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
6：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い　焼土粒φ3～10mm30%　炭化物粒φ5～10mm5%
7：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ3～5mm3%　焼土粒φ3～5mm3%　炭化物粒φ2～3mm2%
8：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ3～10mm10%　炭化物粒φ3～5mm5%
9：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒～ブロックφ5～20mm20%
10：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ2～3mm3%





第 1-157 図　H-1 区 3-1 面の遺構（2）（1/40・1/80）

面から石列（2745 号）が検出されている。2680 号は北側にテラス状の段が見られ、また、底面は比較的平坦で、若干ではあるが南に向かって傾斜している。覆土は 3 層に分かれる。1 層は焼土粒や炭化物を含む褐灰色土で南側に堆積する。2 層は炭化物を多く含む褐灰色土層、3 層は暗灰黄色の砂層である。出土した遺物の点数は 117 点で重量は 3,895.9g である。出土した遺物から遺構の年代は 18 世紀第 2 四半期に位置付けられる。

2829 号は 2680 号、2777 号、2701 号、2691 号、2710 号、2771 号、2718 号に切られており、この 3-2 面の密集する溝のなかでは最も古い溝となる。2680 号と同様に断面形が U 字形となる溝で、北側調査区外へと続いている。覆土は 8 層に分かれる。1 層は白色砂粒や砂質シルト粒を含む灰黄褐色土層、2 層は炭化物を含む黒褐色土層、3 層は砂質シルトブロック層である。4 層から 6 層はいずれも褐灰色土層で、砂質シルトブロックを含んでいる。砂層である 7 層を挟み、8 層から 12 層も砂質シルトブロックを含む層となる。2718 号は小型の円形土坑で、炭化物粒を含む粘質土を覆土とする。底面付近には礫が多数含まれていた。出土遺物の点数は 46 点、重量は 1,183.4g であった。出土した遺物から遺構の年代は 18 世紀前葉と考えられる。

2745 号は北側の安山岩や緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）の大型礫を起点とし、直径 20㎝程度の礫が列をなすように配置されている。2829 号の周辺からは 2745 号を構成する礫と同サイズの礫が多々見られた。第 1 -158 図 SPA-A′では 12 層上面でまとまって礫が検出されている。また、2745 号の走る方向は 2680 号や 2829 号などの溝に平行していることから、これらの溝と何らかの関係があるものと考えられる。

2777 号は 2829 号を切り、2733 号、2776 号、2768 号、2757 号、2710 号に切られる溝で、2829 号に平行するように走る。2680 号・2829 号と比較すると底面が平坦でかなり浅いが幅の広い溝となっている。SPC-C′の 3 層、4 層、5 層が 2777 号の覆土にあたる。3 層はローム粒や炭化物粒を含む灰黄褐色土層で、4 層は同じ灰黄褐色土層であるが粘性が極めて強い。5 層は砂質シルトブロックを含む層でしまり、粘性ともに強い。出土した遺物の点数は 144 点、重量は 2,961.8g である。出土した遺物から遺構の年代は 18 世紀前葉に位置付けられる。

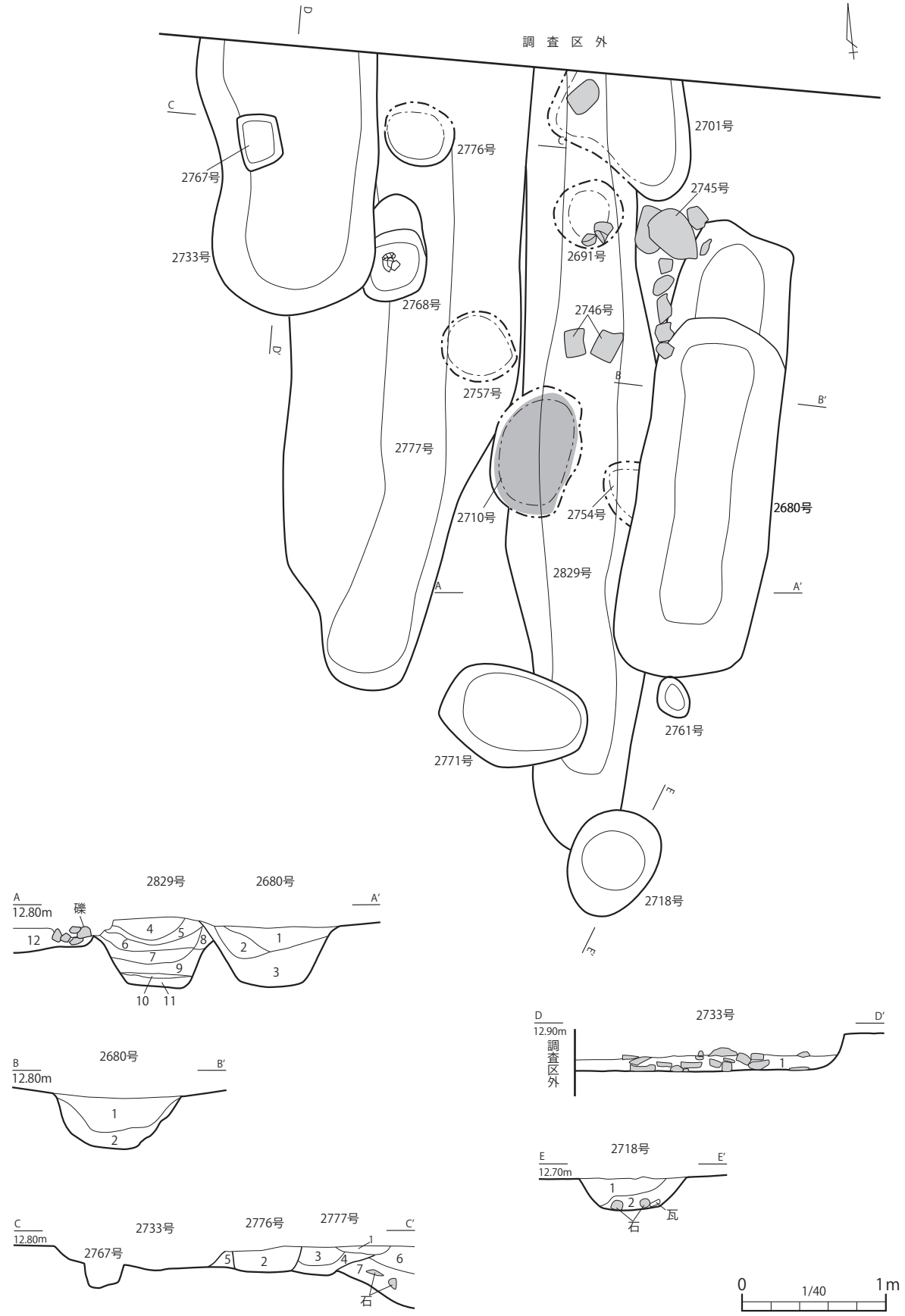
2712・2758・2822 号（第 1-159 図、第 3-16 表）

2712 号調査区東端に位置する溝で、2807 号や 2758 号、2822 号、2797 号を切る。断面形は浅い U 字形で、南側ほど幅が広くなる。北側の SPA-A′では覆土は単層で、焼土粒や炭化物粒を含む黒褐色土が堆積する。南側の SPB-B′では覆土は 4 層に分かれる。1 層は明青灰色の粘土層で砂質シルトブロックを含む。2 層と 3 層は灰黄褐色土層、4 層はにぶい黄褐色土層で、いずれも粘性が強い。出土した遺物の点数は 110 点、重量は 30,547.9g である。出土した遺物から遺構の年代は 18 世紀第 2 四半期と考えられる。

2758 号は 2712 号に切られる円形の土坑で、底面は概ね平坦と言える。覆土は 3 層に分かれる。1 層は砂質シルトや炭化物を含む砂質土層、2 層は砂質シルトブロックや粘土ブロック、炭化物を含む青灰色土層、3 層は砂質シルト、炭化物を含む褐灰色土層である。

2822 号は楕円形の土坑で、2712 号に切られる。覆土は 3 層に分かれる。2 層と 3 層は白色砂粒、焼土粒、炭化物粒を含むにぶい黄褐色土層、4 層はブロック状に砂を含む灰黄褐色土層である。なお、1 層は 2822 号を切る杭にあたる。出土した遺物の点数は 110 点、重量は 30,547.9g である。

2680・2718・2733・2776・2777・2829号



第 1-158 図　H-1 区 3-2 面の遺構（1）（1/40）

2829 号・2680 号（SPA-A'・SPB-B' 共通）
1：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：やや強い　焼土粒φ3 ～ 5mm2%
　炭化物粒φ5 ～ 10mm2%
2：10YR4/1(褐灰色)　焼土粒φ3 ～ 5mm2%　炭化物粒～ブロックφ1 ～ 20mm10%
3：2.5Y5/2(暗灰黄)　しまり：あり　粘性：なし　砂主体
4：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　白色砂粒φ～ 1mm2%
　砂質シルトφ5 ～ 10mm3%　炭化物粒φ5 ～ 10mm3%
5：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物粒φ5 ～ 15mm10%
6：2.5Y8/4(淡黄色)　砂質シルトブロック層
7：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：あり
　砂質シルトブロックφ20 ～ 30mm10%　炭化物粒φ5 ～ 10mm2%
8：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：強い
　砂質シルトブロックφ30 ～ 40mm20%
9：10YR4/1(褐灰色)　しまり：やや弱い　粘性：強い
　砂質シルトブロックφ30 ～ 40mm20%
10：砂層
11：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
　砂質シルトブロックφ10 ～ 20mm5%　黒色土ブロックφ10 ～ 20mm3%
12：10YR3/1(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い
　砂質シルトブロックφ10 ～ 20mm10%

2767号・2777号（SPC-C'）
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　焼土粒φ2～5mm5%
　炭化物粒φ3～5mm5%
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　黄色砂質シルトφ5～20mm7%
　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒～ブロックφ3～30mm15%
3：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い　ローム粒φ5～10mm2%
　炭化物粒φ5～10mm10%
4：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：極強　ローム粒φ5～10mm2%
　炭化物粒φ5～10mm10%
5：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い
　砂質シルトブロックφ10～30mm10%
6：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　炭化物ブロックφ10～20mm10%

2733号（SPD-D'）
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い
　黄褐色砂ブロックφ5～10mm5%　焼土粒φ2～5mm2%
　炭化物粒φ5～20mm10%　礫を多く含む

2718 号（SPE-E'）
1：10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い　炭化物粒φ3 ～ 10mm2%
2：N5/1(灰色)　しまり：あり　粘性：強い　炭化物粒φ3 ～ 10mm2%

【土坑】

H-1 区 3-2 面では、調査区中央部で土坑が密集する状況が確認された (図版 3-62-5)。密集する土坑は平面形から、円形・楕円形・方形・長方形・不整形の 5 類に分けられる。これらの土坑に分布の偏りは見られず、混在する状況であった。ここでは各分類群の典型的なものを図示した。

2683 号（第 1-160 図、第 3-16 表）

2683 号は 2706 号を切る楕円形の土坑である。底面は凹凸が激しい。覆土は 4 層に分かれており、1 層は砂質土層、2 層は砂層となる。3 層は黒褐色土層、4 層は焼土粒を含む暗褐色土層である。2683 号に切られる 2706 号は楕円形の土坑で、5 層を覆土とする。5 層はロームブロックを多く含む暗褐色土である。出土遺物の点数・重量は 4 点、24.5g である。

2684 号（第 1-161 図、第 3-16 表）

2684 号は方形の土坑で、2752 号・2778 号を切る。壁面は北側はゆるやかに、残りの 3 面は真っ直ぐに立ち上がっており、底面は平坦になっている。覆土は 5 層に分けられ、1 層と 2 層は砂質シルトブロックを含む層で、2 層は砂質土層である。3 層は砂を主体とする層、4 層は粘土ブロックを含む層、5 層は粘土粒や焼土粒、炭化物粒を含む層である。出土した遺物の点数は 18 点、重量は 267.4g である。遺構の年代は 18 世紀第 1 四半期の可能性が考えられる。

2733 号（第 1-158 図、第 3-16 表）

2733 号は 2777 号を切り、2767 号に切られる、長楕円形の土坑で、平坦な底面を持ち、壁面は真っ直ぐに立ち上がっている。覆土は単層で黄褐色砂ブロックや焼土粒、炭化物粒を含む黒褐色土が堆積する。また、層中には礫を多数含んでいる。出土遺物の点数は 35 点、重量は 2,117.6g である。出土した遺物から遺構の年代は 18 世紀前葉以降と考えられる。

2752 号・2753 号（第 1-161 図、第 3-16 表）

2752 号は 2684 号と 2739 号、2753 号に切られる円形の土坑、2753 号は 2752 号を切る長方形の土坑である。2753 号は壁面がゆるやかに立ち上がり、底面は概ね平坦な土坑である。覆土は 2753 号が 1 層から 3 層、2752 号が 4 層から 6 層に分かれる。2753 号覆土の 1 層はグライ化した青灰色の粘土ブロックを含む。2 層と 3 層は灰黄褐色土層で、3 層は砂質シルトブロックを含んでいる。2752 号覆土の 4 層は砂質シルトブロック・焼土ブロックを含む層で、5 層は焼土粒、炭化物粒を含

む砂質土層、6層は砂質シルト粒や焼土粒、炭化物粒を含む層である。出土した遺物の点数・重量は、2752号が5点、65.9g、2753号は7点88.9gである。

2742号（第1-160図、第3-16表）

2742号は2804号を切る楕円形の土坑で断面形が逆台形状となる。覆土は6層に分かれる。1層は砂質シルトブロックや焼土粒を含む灰黄褐色土層で、東側壁面付近を除く検出面から底面まで堆積する。2層から6層は東側壁面付近に堆積する土層である。2層から4層は黄褐色の砂や焼土粒、炭化物粒を含む。5層は焼土層、6層は粘性の強い黒褐色土層である。遺物の出土は無かった。

2744号（第1-160図、第3-16表）

2744号は円形の土坑で、壁面は真っ直ぐに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は3層に分けられ、1層と2層は灰黄褐色土層で、1層はロームブロックや砂、2層は砂質シルトブロックを含む。3層は黒褐色土層で焼土粒や炭化物粒を含む。出土した遺物の点数・重量は12点、221.3gである。出土した遺物から遺構の年代は17世紀後葉以降と考えられる。

2760号（第1-160図、第3-16表）

2760号は2791号・2803号を切り、2792号に切られる土坑である。平面形は不整形で、底面も凹凸が目立つ。覆土は3層に分けられ、1層と2層は灰黄褐色土層で、1層は砂質シルトブロックや焼土粒、炭化物粒を、2層は砂や焼土粒を含む。3層は粘土ブロックを含む土層である。出土した遺物の点数・重量は25点、3,913.1gである。

【ピット】（第1-162図、第3-16表）

図示したものはいずれも円形のピットで、このうち2695号、2707号、2772号、2825号は柱痕を持つ。また、2691号は浅い丸底のピットであるが、壁面に沿うように薄く炭化物層が堆積しており、埋桶の一部であった可能性も考えられる。覆土はいずれのピットも、砂質シルトブロックや粘土ブロック、焼土粒を含む灰黄褐色土ないしにぶい黄褐色土が主体となっている。

D　3-3面

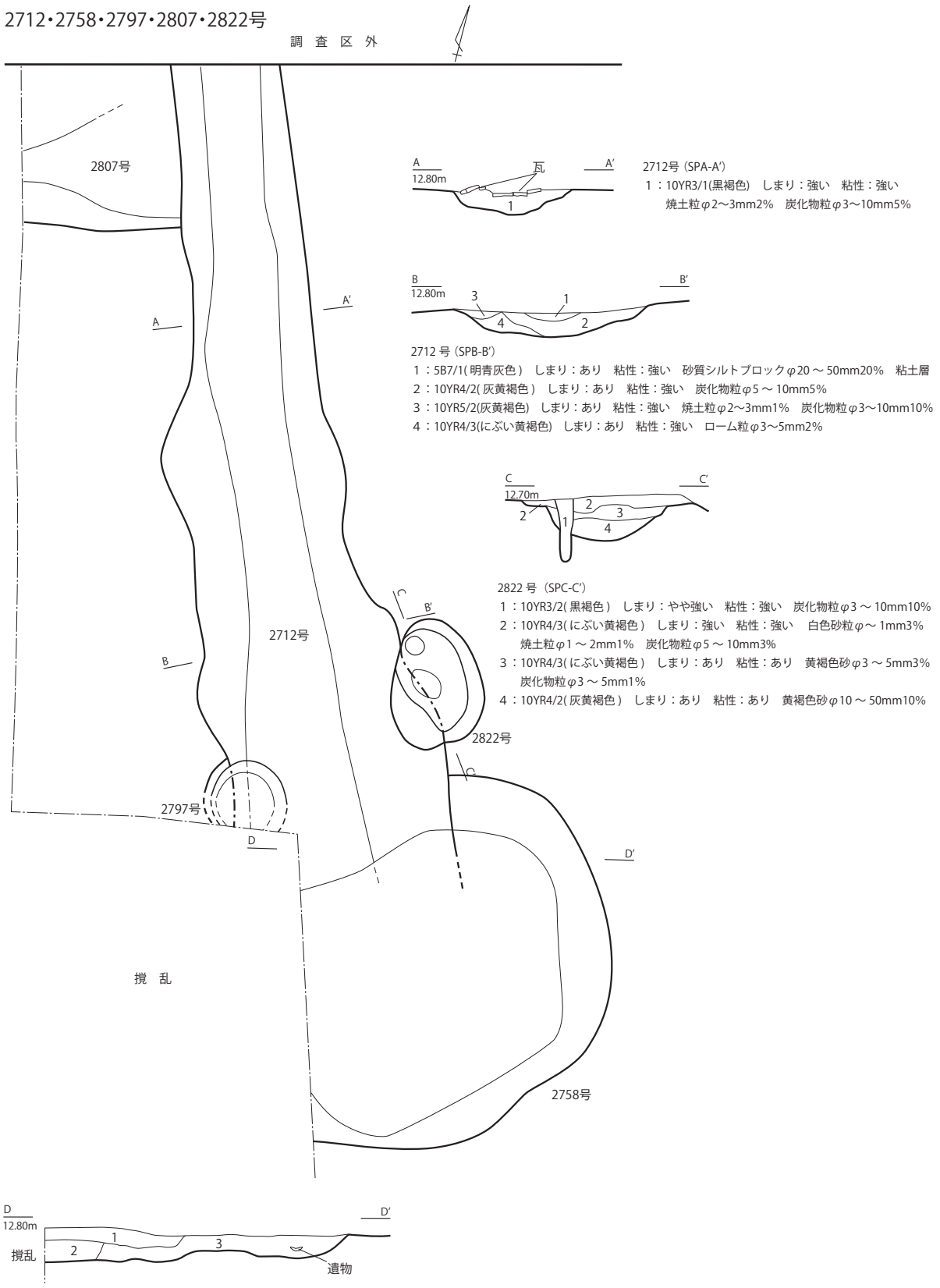
F-1区3-3面、H-2区3-3面に対応し、旗本成瀬家屋敷地の時期にあたる。2520号の直下から検出された焼土層の内の3枚目の焼土層上を3-3面として調査を行った。なお、調査区東側はこの面まで攪乱を受けており、焼土層と遺構が確認されたのは調査区西側のみとなっている。3-3面は調査区全体が西から東へと傾斜している。特に調査区中央から東部にかけて焼土層下に堆積する3-3面盛土層が南東に向かい落ち込んでいく状況が確認されている。H-1区東側は攪乱により不明な点が多いが、南に向かって緩やかに傾斜した斜面となっていたものと考えられる。3-3面焼土層は調査区中央部に、10センチ程度の厚さをもって堆積していた。この焼土層はF-1区3-3面の焼土層と対応しており、その形成は寛文の大火によるものと、焼土層中の出土遺物等から判断した。

3-3面では遺構の分布に偏りは見られず、井戸1基、溝2条、土坑16基、ピット23基が検出された。

【井戸】

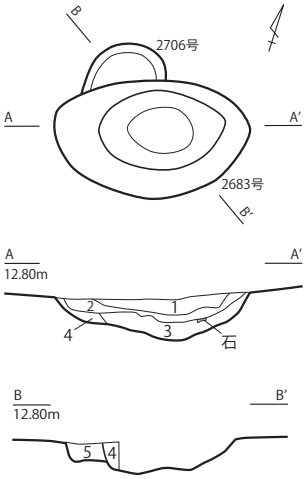
2864号（第1-163図、図版3-63-2～3、第3-16表）

2864号は円形の井戸で、土坑（2865号）に切られている。覆土の中層以下では井戸側が検出されており、底を抜いた桶を積み上げた井戸側が残存していた。覆土は9層に分かれる。セクション図では1層が2866号、2層と3層が2865号の覆土にあたり、4層から12層が2864号の覆土にあ



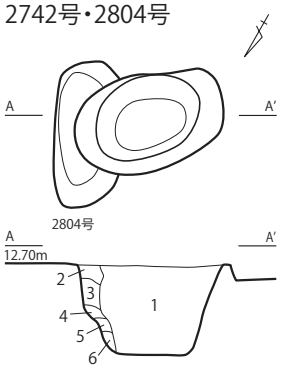
第 1-159 図　H-1 区 3-2 面の遺構（2）（1/40）

2683号・2706号



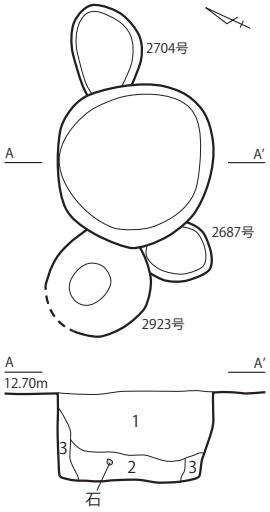
2683 号
1：10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり：あり 粘性：やや弱い 焼土粒φ2 ～ 3mm2%
炭化物粒φ2 ～ 3mm2% 砂質土層
2：2.5Y8/4(淡黄色) 砂層
3：10YR3/2(黒褐色) しまり：弱い 粘性：あり
4：10YR3/3(暗褐色) しまり：あり 粘性：あり 焼土粒φ2 ～ 3mm2%
5：10YR3/3(暗褐色) しまり：あり 粘性：あり
ロームブロックφ10 ～ 30mm20% 焼土粒φ1 ～ 2mm1%

2742号・2804号



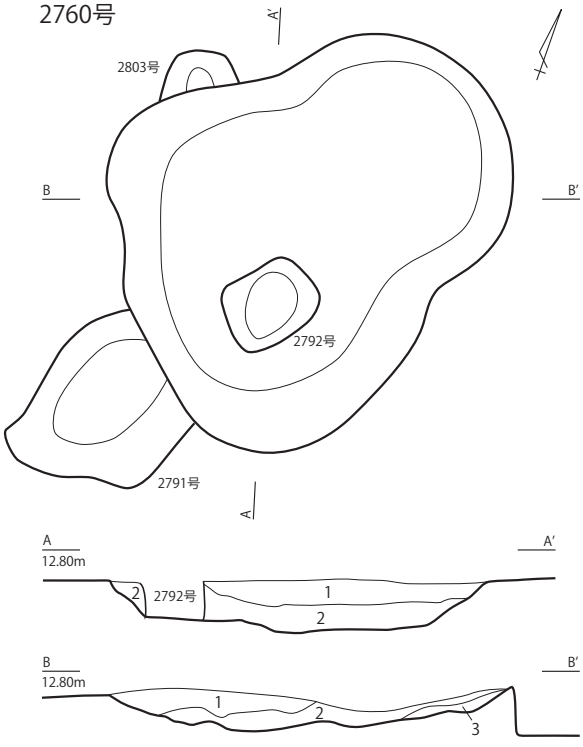
3742 号
1：10YR4/2(灰黄褐色) しまり：やや強い 粘性：あり
砂質シルトブロックφ5 ～ 10mm3% 焼土粒φ2 ～ 5mm3
2：10YR4/2(灰黄褐色) しまり：やや強い 粘性：あり 黄褐色砂 10%
焼土粒φ2 ～ 3mm2% 炭化物粒φ2 ～ 3mm2%
3：10YR4/2(灰黄褐色) しまり：あり 粘性：あり
4：10YR4/2(灰黄褐色) しまり：あり 粘性：あり ロームブロックφ30mm10%
5：焼土層
6：10YR3/2(黒褐色) しまり：あり 粘性：やや強い

2744号

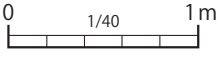


2744 号
1：10YR4/2(灰黄褐色) しまり：やや強い 粘性：あり
ロームブロックφ5 ～ 10mm1% 砂 10% 焼土粒φ2 ～ 3mm2%
炭化物粒φ3 ～ 5mm2%
2：10YR4/2(灰黄褐色) しまり：あり 粘性：あり
砂質シルトブロックφ10 ～ 30mm5% 炭化物粒φ5 ～ 10mm3%
3：10YR3/2(黒褐色) しまり：あり 粘性：あり 焼土粒φ2 ～ 3mm3%
炭化物粒φ5 ～ 10mm10%

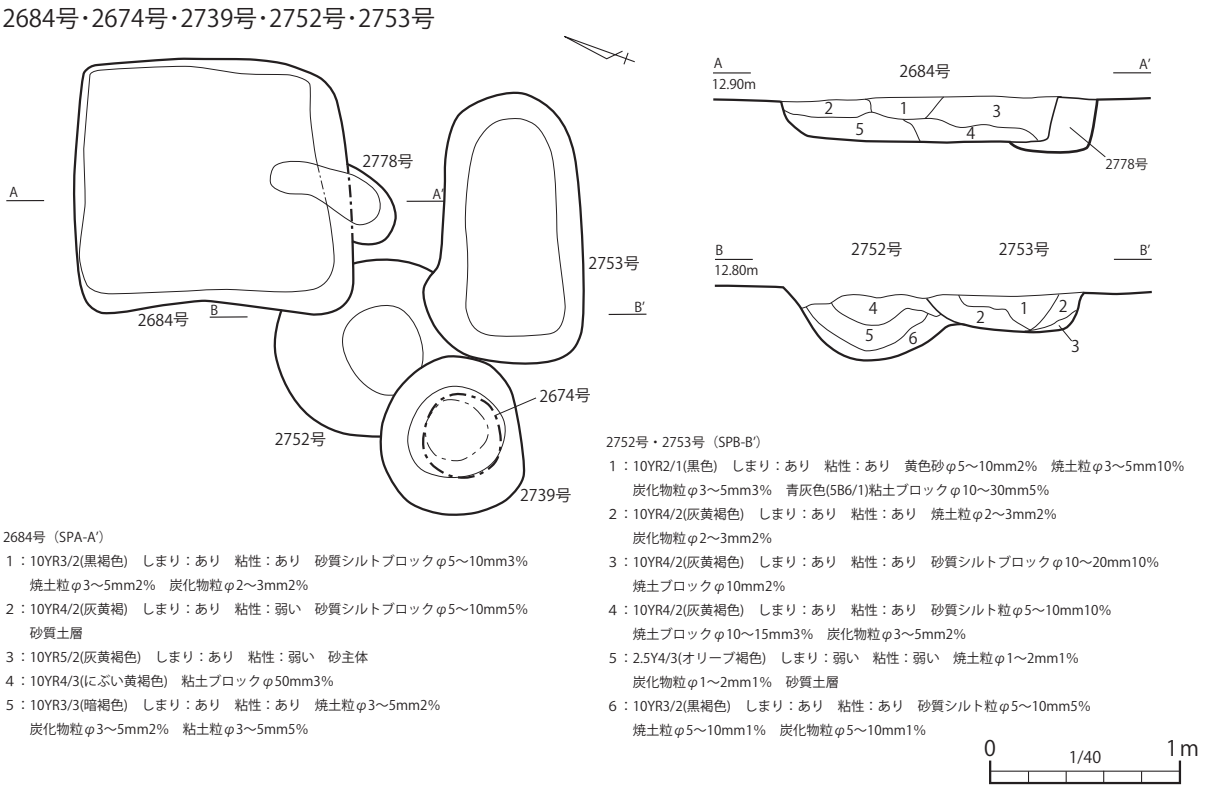
2760号



2760 号
1：10YR4/2(灰黄褐色) しまり：あり 粘性：あり 砂質シルトブロックφ10 ～ 15mm3%
焼土粒φ5 ～ 10mm3% 炭化物粒φ3 ～ 5mm2%
2：10YR4/2(灰黄褐色) しまり：あり 粘性：あり 黄色砂φ5 ～ 10mm2% 焼土粒φ2 ～ 5mm1%
3：10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり：やや弱い 粘性：弱い 粘土ブロックφ10 ～ 20mm2%



第 1-160 図　H-1 区 3-2 面の遺構（3）（1/40）



第 1-161 図　H-1 区 3-2 面の遺構（4）（1/40）

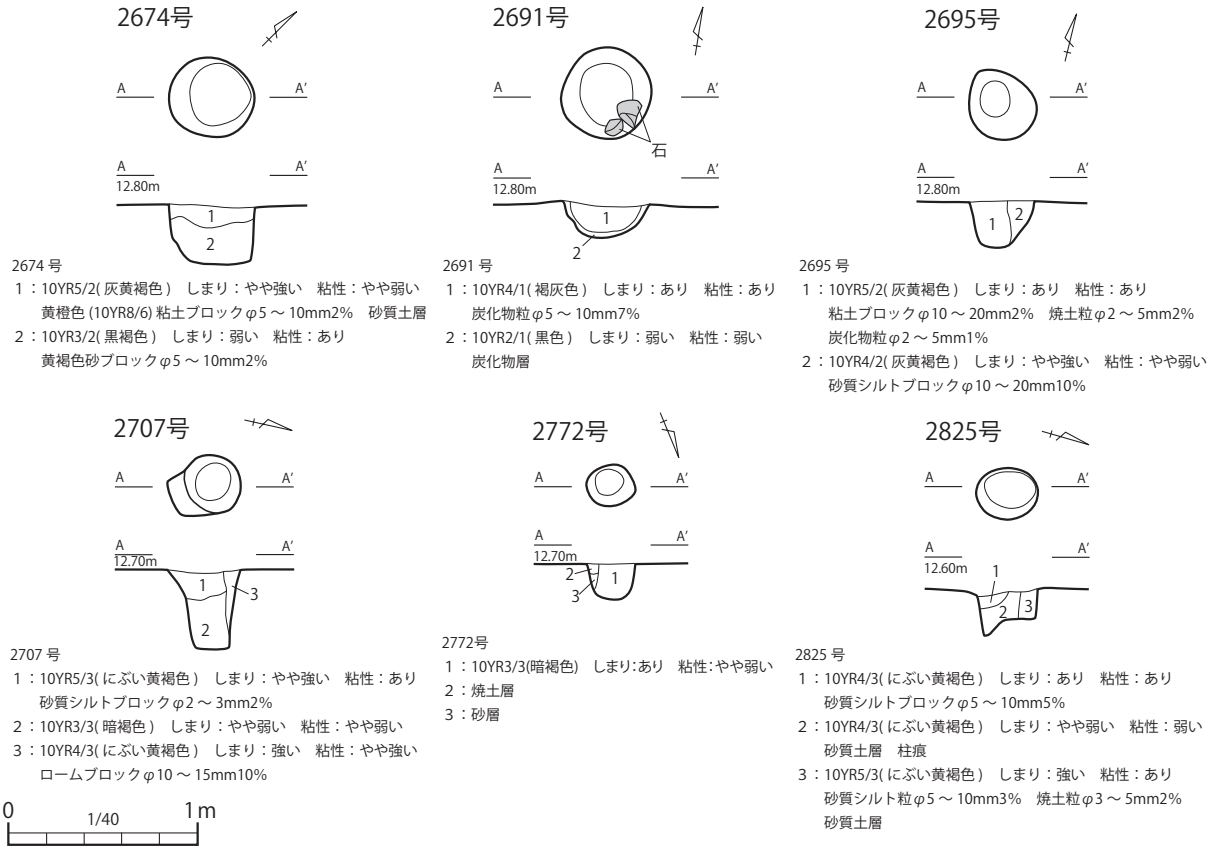
たる。4 層と 5 層は表層にあたり、砂質シルトブロックや砂、ロームブロック、粘土ブロックを含む灰黄褐色土層である。6 層と 7 層は中心部が崩落し、落ち込んでいた。埋没時に空隙があったものと考えられる。8 層は砂質シルトを、9 層は砂を含み 10 層は砂質土層となる。11 層は暗灰色の粘質土層で、砂や焼土粒、炭化物粒を含む。12 層は掘方部分の土層にあたり、砂層となる。底面は検出面からおよそ 3.4m 掘り下げたところで検出された。底面は平坦で、付属する施設は確認出来なかったが、底面付近まで側板が存在していた。2864 号からは 148 点、5,787.7g、2865 号からは 3 点、120.0g の遺物が出土した。2866 号からの遺物の出土は無かった。出土遺物から 2864 号は 18 世紀前葉、2865 号は 17 世紀後葉以降に位置付けられる。

【溝】

2860 号（第 1-164 図、第 3-16 表）

2860 号は調査区西側で検出された溝で、調査区を南北に縦断し、北側は調査区外へ、南側は H-2 区へと続く。遺構の掘り込みは浅く、底面は凹凸が目立っており、調査区北端部分では細い 2 本の溝に分岐する状況が確認されている。南側では底面にさらに細い溝が掘り込まれている。覆土は 4 層に分かれる。1 層は砂質シルトブロックを含む、粘性が非常に強い土層、2 層は砂質シルトブロックを含む粘土層である。3 層は砂層であるが、グライ化している。4 層は粘性の極めて強い土層で、砂質シルト粒を含んでいる。F-1 区や H-2 区で検出されている屋敷境の溝や石垣におおむね直行する方向に走ることから、屋敷内の何らかの区画施設であると考えられる。出土した遺物の点数・重量は 86 点、1,691.1g である。出土遺物から遺構の年代は 17 世紀末葉から 18 世紀初頭に位置付けられる。

【木組土坑】



第 1-162 図　H-1 区 3-2 面の遺構（5）（1/40）

2852 号（第 1-165 図、図版 3-63-5、第 3-16 表）

2852 号は長方形の土坑で、板材を組み合わせた側板と底板が検出されたことから木組土坑とした。東側を楕円形の土坑（2878 号）に切られている。側板と底板の厚さは 1 ～ 2cm 程度で、底板は中央部が落ちくぼんでいるが、掘方も中央部が落ち窪んでおり、盛土層の沈下に起因するものであると考えられる。覆土は 2 層に分かれる。第 1-165 図 SPA-A′ では 1 層と 2 層にあたり、1 層は焼土層、2 層は被熱した粘土ブロック層となる。2 層で見られる粘土ブロックには藁のような植物の繊維が含まれていることから、この粘土ブロックは土壁の一部である可能性が指摘できる。出土遺物の点数・重量は 8 点、34.8g である。

【土坑】

2847 号（第 1-166 図・第 3-16 表）

2847 号は平面形が円形の土坑で、断面形が U 字形を呈する。覆土は 3 層に分かれる。いずれの層も砂質シルトブロックを含んでおり、1 層と 2 層はさらに焼土粒を含んでいる。遺物は 1 点、重量 9.7g が出土している。

2896 号（第 1-163 図、第 3-16 表）

2896 号は不整方形の土坑で、長辺に段状のテラスを持つ。底面は平坦で、覆土は 2 層に分かれる。1 層はシルトブロックや粘土ブロック、焼土を含む層である。2 層は砂を主体とする層で、シルトブロックや粘土粒を含む。遺物は出土していない。

2897 号（第 1-166 図、第 3-16 表）

2897 号は方形の土坑である。壁面は真っ直ぐに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は 3 層に分かれる。いずれの層も粘土層で、1 層はローム粒や焼土粒などを含む粘土層で、2 層はグライ化した粘土層、3 層はシルトを少量含む粘土層となる。遺物は出土していない。

2901 号（第 1-166 図・第 3-16 表）

2901 号は円形の土坑で、壁面はゆるやかに立ち上がり、底面が平坦に掘りこまれている。覆土は 2 層に分けられ、1 層は砂質シルト粒や焼土粒、炭化物粒を含む層で、2 層は焼土粒を多量に含む層である。出土遺物の点数・重量は 104 点、3,032.9g である。2901 号は寛文 8 年（1668）の火災により被災した遺物が見られたことから 17 世紀後葉以降に位置付けられる。

2903・2904・2905 号（第 1-163 図、第 3-16 表）

2903 号、2904 号、2905 号は円形の土坑で断面形は擂鉢状を呈する。2903 号と 2904 号は細い溝（2906 号）を切り、2904 号は 2878 号に切られている。2904 号の覆土は 4 層に分かれる。第 1-165 図 SPA-A′ では 3 層から 6 層がそれにあたる。3 層は焼土層で、2852 号覆土 1 層の焼土層が流れ込んでいる可能性が指摘できる。 4 層は砂を多く含む層で、粘土ブロックもわずかに含む。5 層と 6 層は砂質シルトブロックを含む層となっている。2903 号出土の遺物の点数・重量は 67 点、2501.1g である。2903 号は寛文 8 年（1668）の火災により被災した遺物が見られたことから 17 世紀後葉以降に位置付けられる。2904 号と 2905 号の点数・重量は、2904 号が 1 点 15.0g、2905 号が 3 点、27.8g である。

【ピット】（第 1-166 図、第 3-16 表）

代表的なピットを図示した。2886 号は方形のピットで中心に杭穴が見られる。覆土は 3 層に分かれ、杭穴部分は 1 層があたる。1 層はしまりの弱い黒褐色土層で 2 層と 3 層はしまりが強く、2 層は黄褐色の砂、3 層は焼土粒を含む。2899 号と 2900 号は楕円形のピットである。2899 号の覆土は 2 層に分けられる。1 層は砂質シルト粒を含んでおり､2 層は砂質シルトブロックを多量に含む層である。2900 号の覆土は 2 層に分けられる。1 層はロームブロックを含む層で、2 層は砂を含む層である。

E　4 面

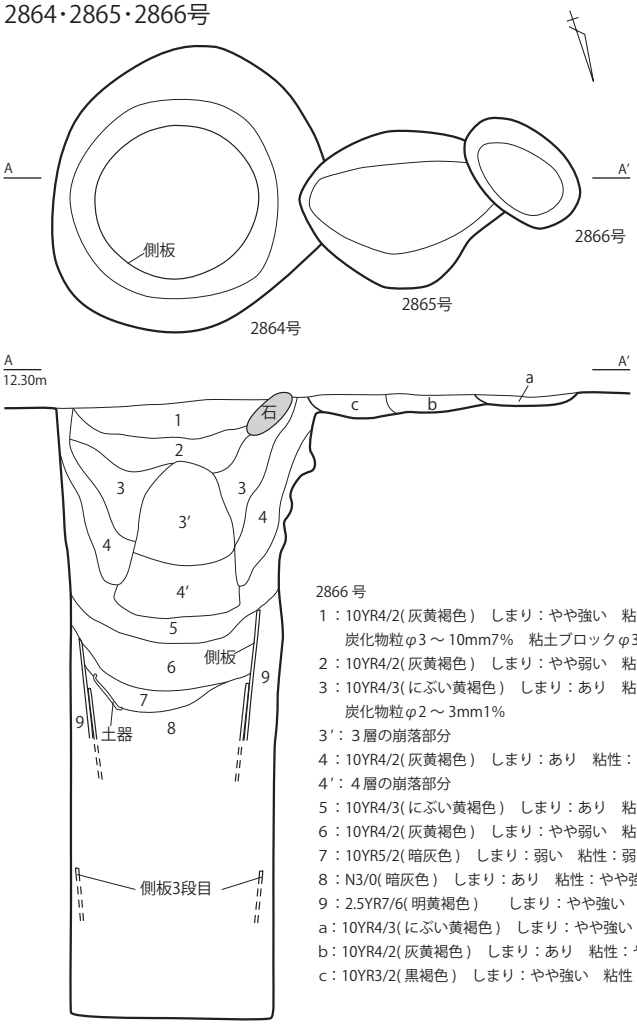
H-1 区 4 面は F-1 区 4 面、H-2 区 4 面に対応し、旗本成瀬家屋敷地の時期にあたる。3-3 面焼土層下で確認した遺構確認面を 4 面として調査を行った。4 面は西から東に向かって緩やかに傾斜しており、地点により異なる盛土層が露出している。西端ではシルトや粘土を主体とする盛土層、東側では黄褐色の砂や砂質土、ロームブロックなどを含む盛土層上で遺構を確認した。 4 面から検出された遺構は調査区西端に大型土坑（2965 号）があるほかには、土坑やピットが散漫に分布している。

4 面では木組土坑 1 基、集石 2 基、礎石 5 基、土坑 23 基、焼土跡 1 基、埋桝遺構 1 基、粘土溜り 1 基、ピット 28 基が検出された。

【木組土坑】

2545 号（第 1-168 図、図版 3-63-4、第 3-16 表）

2545 号は長方形の土坑で、四方の壁面に沿うように側板が組まれている状況が確認されたことから木組土坑とした。一方で、底面では底板は確認できなかった。覆土は 4 層に分かれる。1 層は粘土を主体とし、ローム粒や焼土粒、炭化物粒を含む。2 層から 4 層は類似した層で、粘土を多量に含むほか、焼土粒、炭化物粒を含んでいる。また、2 層と 4 層は焼土と炭化物が帯状に堆積する。掘方は



第 1-163 図　H-1 区 3-3 面の遺構（１）(1/40)

検出されていないことから、掘り込みの壁面に側板が組み付けられたものと考えられる。遺物は 1 点、7.6g が出土した。出土した遺物から遺構の年代は 17 世紀後葉と考えられる。

【土坑】

2965 号（第 1-167 図、図版 3-63-7、第 3-16 表）

2965 号は隅丸長方形の大型土坑で、H-1 区西端に位置しており、西側の一部は F-1 区に含まれる。F-1 区側では 1205 号に切られており、H-1 区側である東側では 2980・2981 号を切っている。底面は平坦に掘りこまれており、壁面はやや緩やかに立ち上がる。覆土は 6 層に分かれている。上部の 1 層から 4 層はグライ化した砂を含む粘質土層と一部グライ化した砂層が互層になるように堆積している。下部の 5 層と 6 層は粘性の強い土層で、どちらもシルトブロックを含んでいる。覆土は西から東へと流れ込んだように堆積している。出土遺物の点数・重量は 91 点、3,821.0g である。出土遺物から遺構の年代は 17 世紀後葉、1670 年代と考えられる。

2980 号・2981 号（第 1-167 図、図版 3-63-6、第 3-16 表）

2980 号と 2981 号は 2965 号の底面で検出された円形の土坑で、2980 号が 2981 号を切る。どちらも壁面が真っ直ぐに立ち上がり、底面が平坦に掘り込まれている。2980 号が 1 層から 4 層、2981



第 1-164 図　H-1 区 3-3 面の遺構（２）(1/40)

号が 5 層が覆土にあたる。1 層は粘土と砂の混合層で 2 層との層理面には酸化鉄が固着していた。2 層はグライ化した砂と粘土の混合層で炭化物粒を含む。3 層はグライ化した砂の層である。4 層は粘土を主体とする層で、ローム粒や砂を含んでおり、底面付近には酸化鉄が縞状に見られる。2981 号の覆土である 5 層は粘土と砂の混合層であり、ローム粒や砂、炭化物を含んでいた。いずれも砂と粘土の混合層が主体で、複数箇所で酸化鉄が見られたことから、埋没の過程において水につかるような状況にあったものと考えられる。2980 号は 5 点 61.7g、2981 号は 6 点 102.0g の遺物が出土している。どちらも出土遺物から 17 世紀中葉の所産であると考えられる。

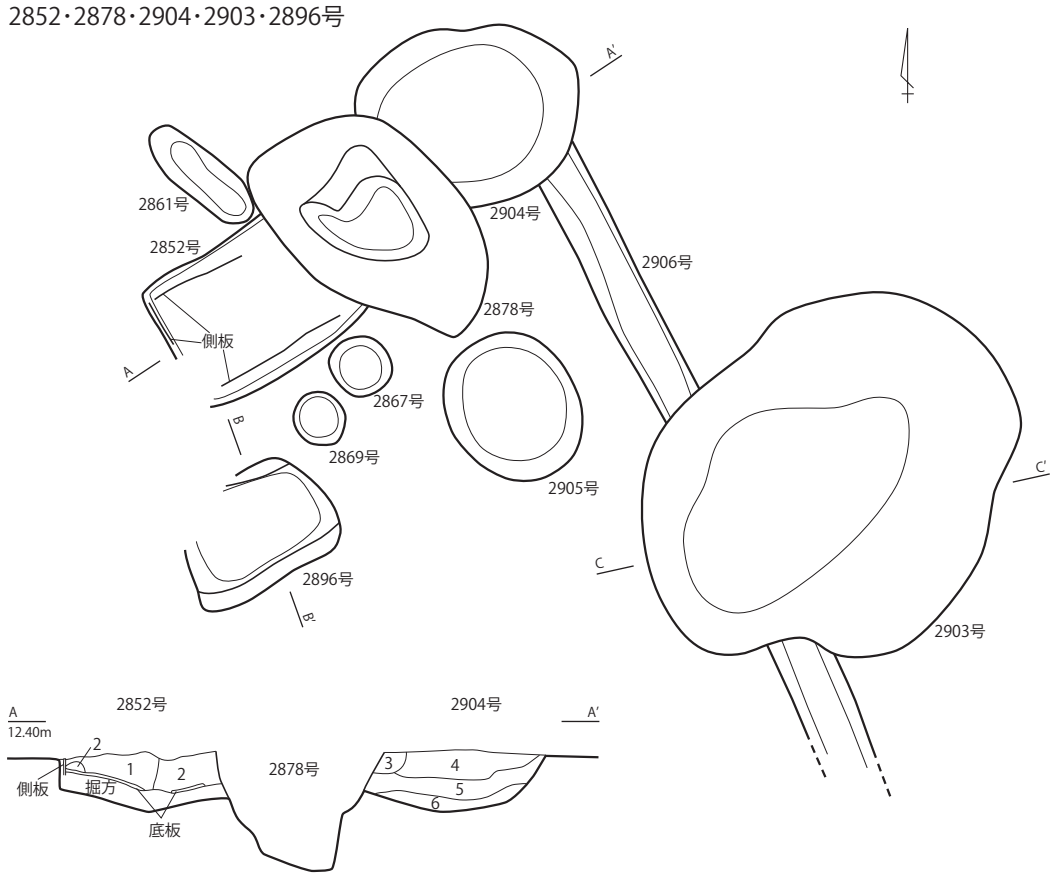
2527・2528・2929・2930 号（第 1-168 図、第 3-16 表）

2527 号、2528 号、2929 号、2930 号は平面形が円形を呈する土坑群である。

2527 号は底面が西に向かって傾斜するように掘りこまれている土坑で、平面形は円形を呈する。覆土は 4 層に分かれる。1 層は炭化物層、2 層はロームブロックを多量に含む層である。3 層と 4 層は黒褐色土層で、3 層はシルト粒や炭化物粒を含む。遺物は出土していない。

2528 号は円形の土坑で、底面中央部に凸部を持つ。覆土は 7 層に分かれる。1 層と 2 層は粘土ブロックを含む層で、1 層は砂質土と暗褐色土の混合層である。3 層と 4 層は赤色土をブロック状に含む層で、5 層は粘土粒を含む砂質土層である。6 層は粘性の強い層で、炭化物や砂質土ブロックを含む。7 層は砂質土との混合土層となる。遺物は出土していない。

2929 号は 2930 号を切る土坑で、底面が



2852 号 ·2878 号 ·2904 号 (SPA-A′)

1：10R4/6(赤色) しまり：あり 粘性：なし 焼土層

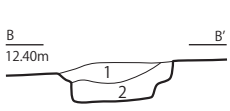
2：10YR7/2(にぶい黄橙色) しまり：あり 粘性：なし 粘土ブロックφ20 ～ 30mm 被熱した植物繊維を含む 被熱粘土ブロック層

3：10YR4/1(褐灰色) しまり：やや強い 粘性：あり 焼土粒φ2 ～ 3mm3% 焼土ブロックφ10 ～ 30mm5% 炭化物粒φ2 ～ 3mm2%

4：10YR4/2(灰黄褐色) しまり：やや強い 粘性：あり 砂 30% 粘土ブロックφ10 ～ 30mm2%

5：10YR3/2(黒褐色) しまり：あり 粘性： あり 砂質シルトブロックφ10 ～ 20mm10% 焼土粒φ2 ～ 5mm2%

6：10YR2/2(黒褐色) しまり：あり 粘性：あり 砂質シルトブロックφ10 ～ 20mm2%

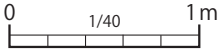




2896号(SPB-B′)

1：10YR4/2(灰黄褐色) しまり：強い 粘性：あり 砂15～25% 焼土粒φ5~10mm5～10% 焼土ブロックφ10~25mm5～10% 細礫1～3%
浅黄色シルトブロックφ5~20mm10% 暗オリーブ褐色粘土ブロックφ5~15mm5% 酸化鉄顕著

2：10YR5/6+7.5YR5/6(黄褐色+明褐色) しまり：強い 粘性：弱い 浅黄色シルトブロックφ5~15mm20% 暗オリーブ褐色粘土φ3~5mm3% 酸化鉄顕著
均質な砂主体層

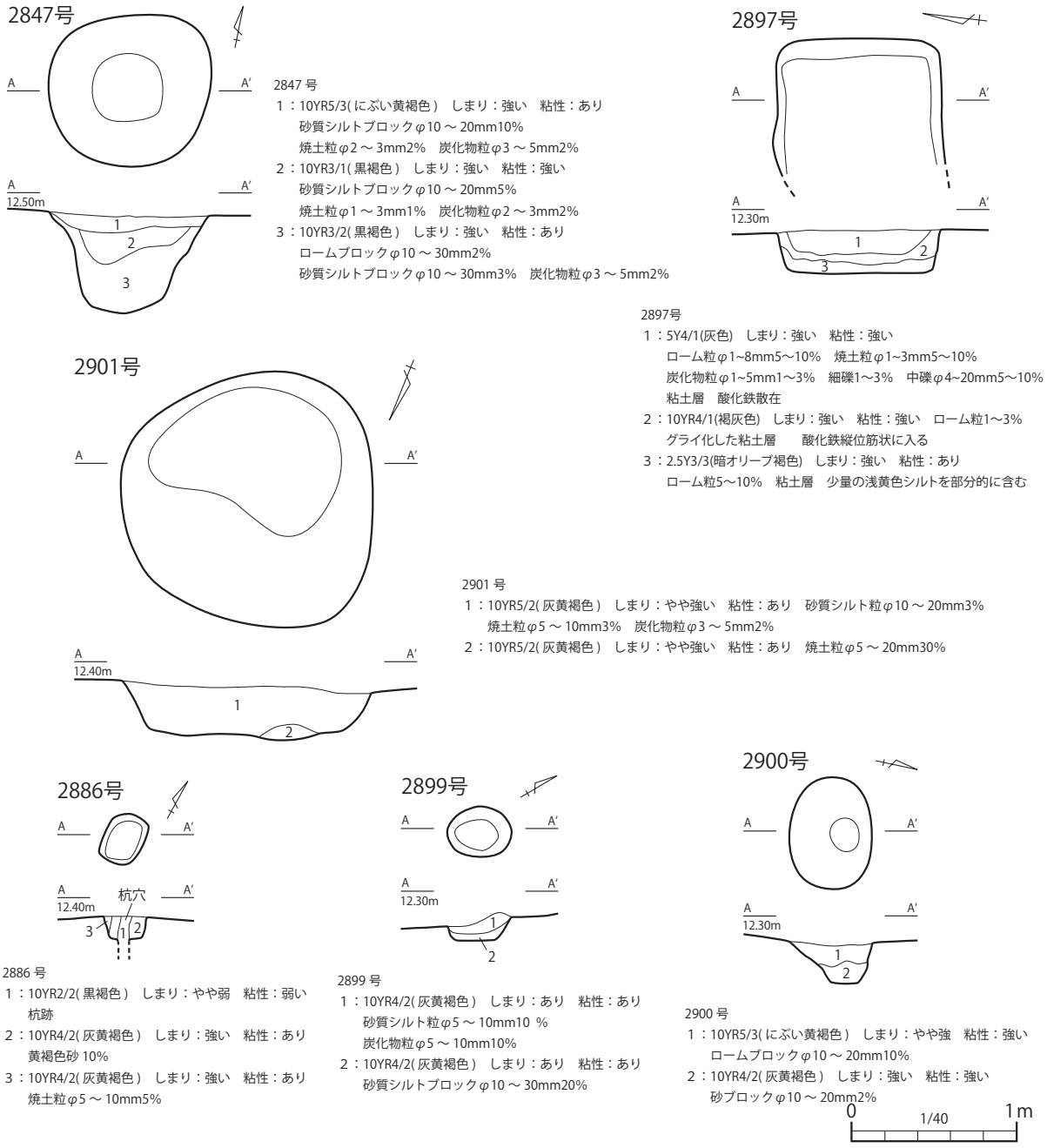


第 1-165 図　H-1 区 3-3 面の遺構（3）(1/40)

北に向かって傾斜するように掘りこまれている。覆土は 5 層に分かれる。いずれの層も灰黄褐色土層で、1 層は砂質シルトブロックや焼土粒、炭化物粒、粘土ブロック、2 層は砂、焼土粒、炭化物粒を含み、3 層は焼土粒を含む。4 層は砂質土層で、5 層は砂を多量に含んでいる。出土した遺物の点数・重量は 8 点、34.7g である。2930 号は底面が南に向かい傾斜するよう掘りこまれている。両者ともに砂を多く含む灰黄褐色土を覆土とする。遺物は出土していない。

【ピット】（第 1-169 図、第 3-16 表）

2516 号は円形のピットで柱痕を持つ。2525 号は方形のピットで、一部に側板の痕跡が見られた。2541 号は円形ピット 2542 号を切る円形のピット。2543 号は柱痕、礎石を持つ円形のピット。



第 1-166 図　H-1 区 3-3 面の遺構（4）(1/40)

2643 号は柱痕を持つ円形のピット。2931 号は円形のピットで覆土は粘土を主体とする。2932 号も円形の浅いピットで覆土は粘土と砂を主体としている。2947 号は楕円形のピットで灰黄褐色の砂質土を覆土とする。

F　5 面

F-1 区 5 面、H-2 区 5 面に対応し、旗本成瀬家屋敷地の時期にあたる。4 面盛土層下のロームブロックやシルトブロックを多く含む盛土層の上面を 5 面とし、調査を行った。H-1 区 5 面は西側では西から東への傾斜が見られたが、東端部分では東から西への傾斜が見られた。これは埋没谷の落ち際という旧地形を反映してのものと考えられ、中央部は南へと傾斜している。F-1 区 5 面で確認されたような硬化面は確認できず、遺構も散漫に分布するのみであった。

5面では礎石8基、土坑8基、ピット6基が検出された。

【土坑】

2515号（第1-170図、第3-16表）

2515号は浅い円形の土坑である。覆土は4層に分かれるがいずれの層も焼土を主体とする。1層は焼土粒を主体とし、砂やシルト粒、炭化物のほか、4面盛土層に由来する土がブロック状に含まれる層である。一部、焼土がブロック状に入っている。2層は1層同様焼土を多量に含むほか、砂やシルト粒を含む。3層と4層は焼土層であるが、1層とは異なり、焼土をブロック状に含む様子は見られなった。遺物は出土していない。

【ピット】（第1-170図、第3-16表）

2570号は柱痕を持つ円形のピットで、柱痕部分はにぶい黄褐色の砂質土で、そのほかは粘土が主体となる。2575号と2995号はいずれも柱痕をもたない円形のピットである。2575号は覆土が粘土主体となる。2995号は砂質土を覆土とする。2997号は不整楕円形のピットで黄褐色砂ブロックを含む黒褐色土を覆土とする。

G　6面

H-1区6面はF-1区6面、H-2区6面に対応し、旗本成瀬家屋敷地の時期にあたる。F-1区から続く旗本屋敷拝領時の造成に伴う盛土層の上面を6面とし、調査を行った。この6面盛土はH-1区内においてはフラットに堆積しており、また均質な盛土である。6面盛土中からは中世の遺物などが出土している。

6面では井戸1基、礎石1基、土坑2基、焼土跡1基、硬化面1基、ピット15基が検出された。

【井戸】

3503号（第1-171図、図版3-63-8、第3-16表）

平面形が円形を呈する素掘りの井戸で、単一の覆土で埋没しており、足掛け等の付随施設は確認されなかった。覆土は5面盛土に近似する粘土や砂、ロームブロックのしまりが強い混合土であり、5面造成時に廃絶され埋められた可能性がある。出土遺物の点数・重量は5点、198.4gである。出土遺物から見た遺構の年代は17世紀第3四半期と、5面盛土層と近い年代に位置付けられる。

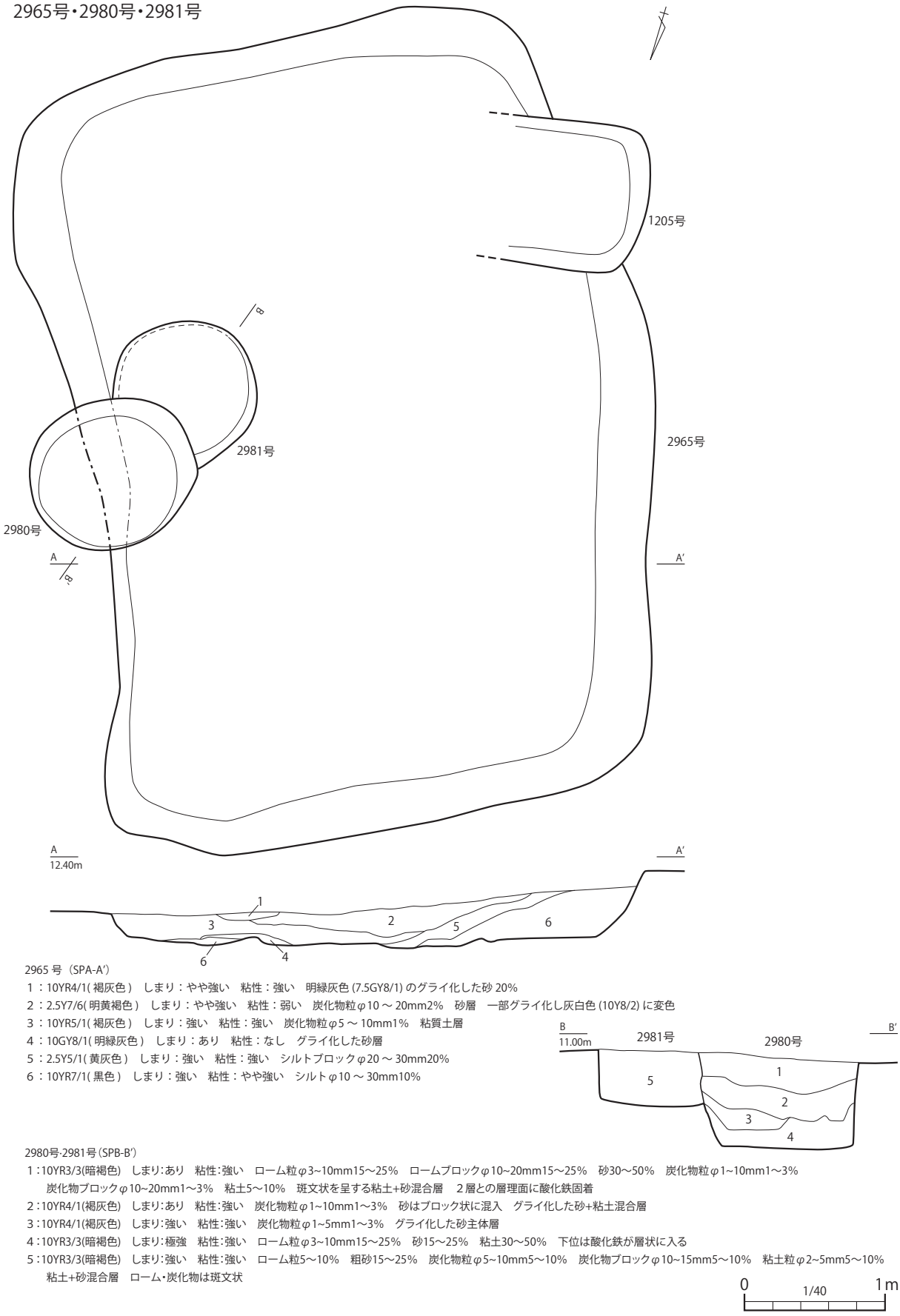
【土坑】

2655号（第1-171図、第3-16表）

2655号は楕円形の浅い土坑で底面は平坦に掘られている。覆土は2層に分けられる。1層と2層はどちらも黒褐色土層で、1層は黄褐色の砂をブロック状に含み、2層はさらにそれに加えて黄褐色の粘土ブロックを含む。出土した遺物の点数・重量は3点、55.2gである。出土遺物から遺構の年代は17世紀前葉に位置付けられる。

【ピット】（第1-171図、第3-16表）

3504号と3507号は平面形が長方形を呈するピットで、どちらも底面中央部に凹部が見られるのが特徴的である。3505号と3508号は円形のピットで3505号は底面に杭穴様の凹部が見られる。3508号は斜めに掘りこまれたピットである。いずれの遺構も覆土は砂やローム粒を含む黒褐色土が主体となる。3509号、3510号、3512号は柱痕を持つピットである。いずれの遺構も平面形は円形で、削平を受けたためか浅い掘り込みとなっている。覆土は柱痕部が砂やローム粒を含む黒褐色土で、そ



2965 号（SPA-A′）

1：10YR4/1(褐灰色)　しまり：やや強い　粘性：強い　明緑灰色 (7.5GY8/1) のグライ化した砂 20%

2：2.5Y7/6(明黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：弱い　炭化物粒φ10 ～ 20mm2%　砂層　一部グライ化し灰白色 (10Y8/2) に変色

3：10YR5/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：強い　炭化物粒φ5 ～ 10mm1%　粘質土層

4：10GY8/1(明緑灰色)　しまり：あり　粘性：なし　グライ化した砂層

5：2.5Y5/1(黄灰色)　しまり：強い　粘性：強い　シルトブロックφ20 ～ 30mm20%

6：10YR7/1(黒色)　しまり：強い　粘性：やや強い　シルトφ10 ～ 30mm10%

2980号·2981号（SPB-B′）

1：10YR3/3(暗褐色)　しまり:あり　粘性:強い　ローム粒φ3~10mm15～25%　ロームブロックφ10~20mm15～25%　砂30～50%　炭化物粒φ1~10mm1～3%　炭化物ブロックφ10~20mm1～3%　粘土5～10%　斑文状を呈する粘土+砂混合層　2 層との層理面に酸化鉄固着

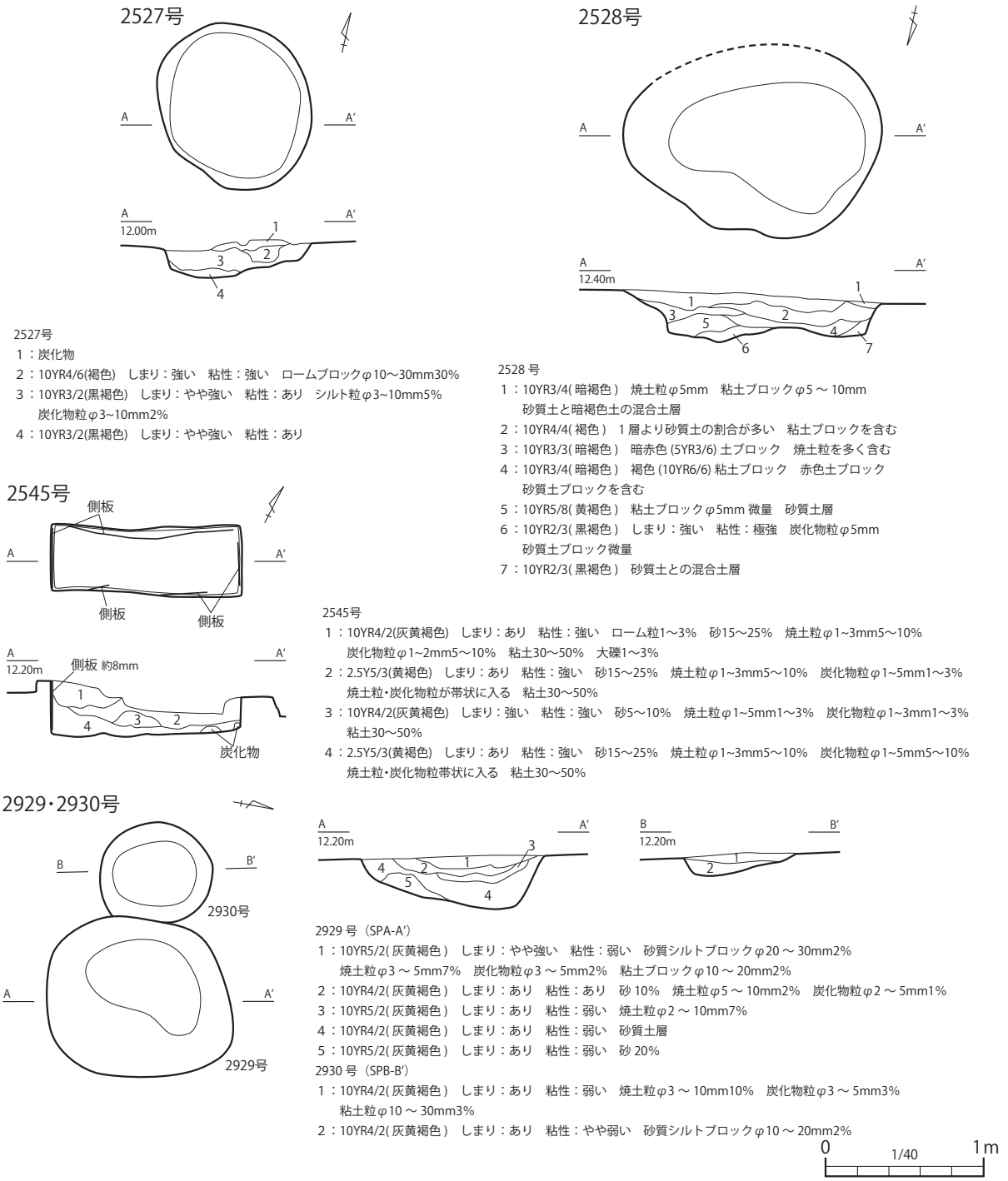
2：10YR4/1(褐灰色)　しまり:あり　粘性:強い　炭化物粒φ1~10mm1～3%　砂はブロック状に混入　グライ化した砂+粘土混合層

3：10YR4/1(褐灰色)　しまり:強い　粘性:強い　炭化物粒φ1~5mm1～3%　グライ化した砂主体層

4：10YR3/3(暗褐色)　しまり:極強　粘性:強い　ローム粒φ3~10mm15～25%　砂15～25%　粘土30～50%　下位は酸化鉄が層状に入る

5：10YR3/3(暗褐色)　しまり:強い　粘性:強い　ローム粒5～10%　粗砂15～25%　炭化物粒φ5~10mm5～10%　炭化物ブロックφ10~15mm5～10%　粘土粒φ2~5mm5～10%　粘土+砂混合層　ローム・炭化物は斑文状

第 1-167 図　H-1 区 4 面の遺構（1）(1/40)



2527号
1：炭化物
2：10YR4/6(褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ロームブロックφ10～30mm30%
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　シルト粒φ3~10mm5%
炭化物粒φ3~10mm2%
4：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり

2528 号
1：10YR3/4(暗褐色)　焼土粒φ5mm　粘土ブロックφ5 ～ 10mm
砂質土と暗褐色土の混合土層
2：10YR4/4(褐色)　1 層より砂質土の割合が多い　粘土ブロックを含む
3：10YR3/3(暗褐色)　暗赤色 (5YR3/6) 土ブロック　焼土粒を多く含む
4：10YR3/4(暗褐色)　褐色 (10YR6/6) 粘土ブロック　赤色土ブロック
砂質土ブロックを含む
5：10YR5/8(黄褐色)　粘土ブロックφ5mm 微量　砂質土層
6：10YR2/3(黒褐色)　しまり：強い　粘性：極強　炭化物粒φ5mm
砂質土ブロック微量
7：10YR2/3(黒褐色)　砂質土との混合土層

2545号
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒1～3%　砂15～25%　焼土粒φ1~3mm5～10%
炭化物粒φ1~2mm5～10%　粘土30～50%　大礫1～3%
2：2.5Y5/3(黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い　砂15～25%　焼土粒φ1~3mm5～10%　炭化物粒φ1~5mm1～3%
焼土粒・炭化物粒が帯状に入る　粘土30～50%
3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　砂5～10%　焼土粒φ1~5mm1～3%　炭化物粒φ1~3mm1～3%
粘土30～50%
4：2.5Y5/3(黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い　砂15～25%　焼土粒φ1~3mm5～10%　炭化物粒φ1~5mm5～10%
焼土粒・炭化物粒帯状に入る　粘土30～50%

2929 号（SPA-A′）
1：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：弱い　砂質シルトブロックφ20 ～ 30mm2%
焼土粒φ3 ～ 5mm7%　炭化物粒φ3 ～ 5mm2%　粘土ブロックφ10 ～ 20mm2%
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂 10%　焼土粒φ5 ～ 10mm2%　炭化物粒φ2 ～ 5mm1%
3：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　焼土粒φ2 ～ 10mm7%
4：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　砂質土層
5：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　砂 20%
2930 号（SPB-B′）
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　焼土粒φ3 ～ 10mm10%　炭化物粒φ3 ～ 5mm3%
粘土粒φ10 ～ 30mm3%
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　砂質シルトブロックφ10 ～ 20mm2%

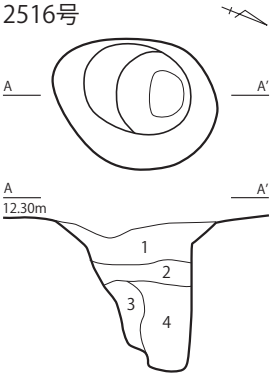
第 1-168 図　H-1 区 4 面の遺構（2）(1/40)

のほかも同様に黒褐色土だが砂をより多く含んでいる。　（佐藤）

4）H-2 区

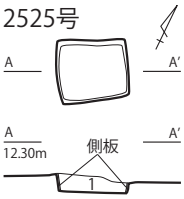
H-2 区は調査区中央部から東側に位置している。H-2 区南側には東西に走る石垣（790 号）があり、H-2 区を南北に分割している。絵図・地図史料から、石垣を挟んで北側が旗本成瀬－鳥居家と南側が旗本川窪－保科家にあたることがわかっている。現地表面の平均標高はおよそ 14.5m で、G -1 区・

2516号



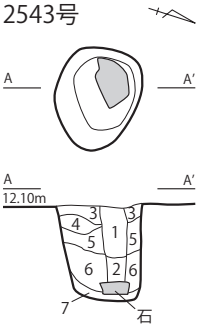
2516号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり:あり　粘性:あり　砂質土ブロックφ5～10mm30%
2：10YR3/4(暗褐色)　しまり:あり　粘性:あり　砂質土ブロックφ5～10mm20%
3：10YR2/2(黒褐色)　しまり:あり　粘性:あり　砂質土ブロックφ5～10mm20%
4：10YR2/2(黒褐色)　しまり:あり　粘性:やや強い
　砂質土ブロックφ5～10mm10%

2525号



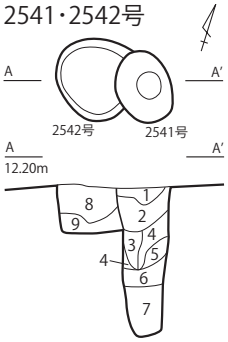
2525 号
1：7.5YR3/4(暗褐色)　焼土ブロック (φ10mm30%)
　木枠が炭化して残る

2543号

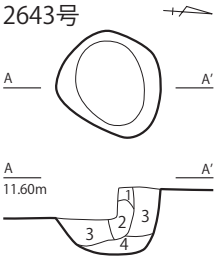


2543号
1：10YR5/4(にぶい黄褐色)　しまり：やや弱い　粘性：強い　ローム粒15～25%　細砂30～50%
　柱痕　酸化　下位へいくほどローム粒減少
2：2.5Y3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　細砂30～50%　粘土5～10%
3：5Y2/2(オリーブ黒色)　しまり：やや強い　粘性：強い　ロームブロック1～3%
　シルト(青灰・浅黄色シルト混在)φ10~20mm5～10%
4：5Y2/2(オリーブ黒色)　しまり：やや強い　粘性：強い　ロームブロック1～3%　シルト1～3%
5：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：強い　シルトブロックφ10~20mm1%
6：10YR3/1(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い
7：2.5Y3/1(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い

2541・2542号



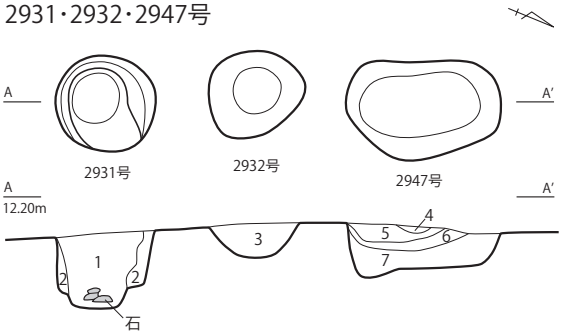
2643号



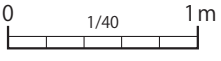
2643号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　砂質土層
2：2.5Y7/6(明黄褐色)　しまり：やや弱い　粘性：なし　砂　柱痕
3：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：あり　砂ブロックφ10～20mm10%
4：10YR2/2（黒色）　しまり：やや強い　粘性：やや強い

2541号·2542号
1：2.5Y3/3(暗オリーブ褐色)　しまり：強い　粘性：やや弱い　シルト5～10%　砂15～25%　焼土粒1～3%　炭化物粒1～3%
2：10YR2/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　シルト～粘土ブロックφ10~25mm30～50%　白～浅黄色シルト混合粘質土層
3：10YR2/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　粘土粒φ1~5mm15～25%　粘質土層　柱痕か
4：10YR2/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　砂15～25%　粘土粒φ5~10mm5～10%
5：2.5Y3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　砂5～10%　粘土粒10~15mm5～10%
6：10YR3/2(黒褐色)　しまり:やや強い　粘性:強い
7：10YR2/2(黒褐色)　しまり:強い　粘性:強い
8：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い　ロームブロック15～25%　砂15～25%　焼土粒φ1~5mm1～3%
　炭化物粒φ1~3mm5～10%
9：10YR2/3(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　粘土ブロックφ10~15mm1～3%

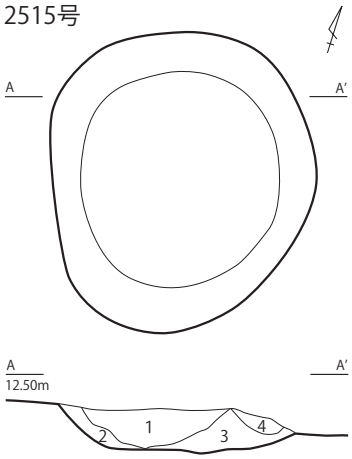
2931・2932・2947号



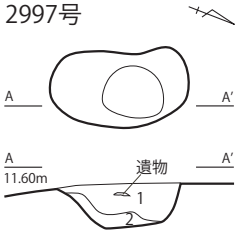
2931号·2932号·2947号
1：7.5YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10~15mm5～10%
　ローム粒φ1~10mm15～25%　砂15～25%　焼土粒5～10%　炭化物粒1～3%
　割礫φ5~10mm若干量　粘土主体層
2：7.5YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒5～10%　シルト30～50%
　砂15～25%　焼土粒5～10%　焼土ブロックφ10~40mm5～10%　粘土主体層
3：2.5Y3/3(暗オリーブ褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ1~10mm15～25%
　砂15～25%　焼土粒φ1~5mm5～10%　下位は礫集中する　粘土+砂主体層
4：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：弱い　砂質シルトブロックφ20～30mm2%
　焼土粒φ3～5mm7%　炭化物粒φ3～5mm2%　粘土ブロックφ10～20mm2%
5：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂10%　焼土粒φ5～10mm2%
　炭化物粒φ2～5mm1%
6：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　焼土粒φ2～10mm7%
7：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　砂質土層



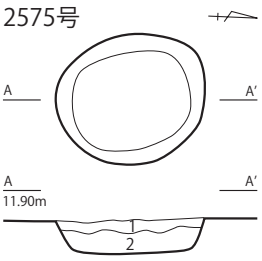
第 1-169 図　H-1 区 4 面の遺構（3）(1/40)



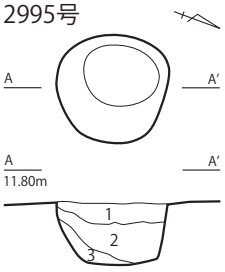
2515 号
1：10YR4/2(灰黄褐色） しまり：やや弱い 粘性：弱い 砂 10%
シルト粒φ1 ～ 5mm10 ～ 15% 焼土粒φ1 ～ 3mm30%
焼土ブロックφ10 ～ 20mm1 ～ 3% 炭化物粒φ3 ～ 10mm3 ～ 5%
4面盛土層ブロックを含む
2：10YR4/2(灰黄褐色） しまり：あり 粘性：あり 砂 10 ～ 15% シルトφ1 ～ 5mm10%
焼土粒φ1 ～ 3mm25 ～ 30%
3：2.5YR4/4(にぶい赤褐色） 焼土層
4：10YR4/2(灰黄褐色） 焼土粒を含む



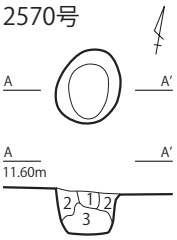
2997 号
1：10YR3/1(黒褐色） しまり：あり 粘性：あり 黄褐色砂ブロックφ10 ～ 20mm2%
2：10YR2/1(黒色） しまり：あり 粘性：あり 砂質シルトブロックφ10 ～ 20mm5%



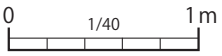
2575 号
1：10YR4/2(灰黄褐色） しまり：あり 粘性：極強
黄褐砂ブロックφ10 ～ 20mm10% 焼土粒φ10 ～ 20mm10% 粘土層
2：10YR4/2(灰黄褐色） しまり：あり 粘性：やや強い 砂 5% 焼土 2%



2575 号
1：10YR4/2（灰黄褐色） しまり：あり 粘性：やや弱い ローム粒φ2 ～ 5mm2%
2：10YR4/3(にぶい黄褐色） しまり：あり 粘性：やや弱い
砂質シルトブロックφ10 ～ 20mm1%
3：10YR3/2(黒褐色） しまり：あり 粘性：やや弱い



2570 号
1：10YR4/3(にぶい黄褐色） しまり：強い 粘性：やや弱い
白色砂粒φ～ 1mm3% 砂質土層 柱痕
2：10YR3/2(黒褐色） しまり：強い 粘性：強い
白色砂粒φ～ 1mm3% 炭化物粒φ2 ～ 5mm2%
3：10YR4/2(灰黄褐色） しまり：強い 粘性：極強 粘土層



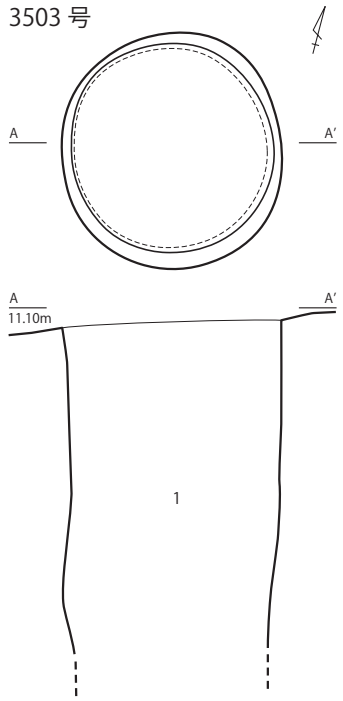
第 1-170 図 H-1 区 5 面の遺構（1/40）

G-2 区とは約 2 mの高低差が見られた。また、H-2 区の中でも北西隅がもっとも標高が高く、南東にむかって傾斜している。屋敷境となる石垣（790 号）は現地表面から露出し、調査時においても土地区画としての役割を果たしていた。790 号の下部からはより古い石垣である 3390 号や溝（4343 号など）が確認されており、近世から現代にいたるまで土地の区画が継承されていたことが明らかとなっている。

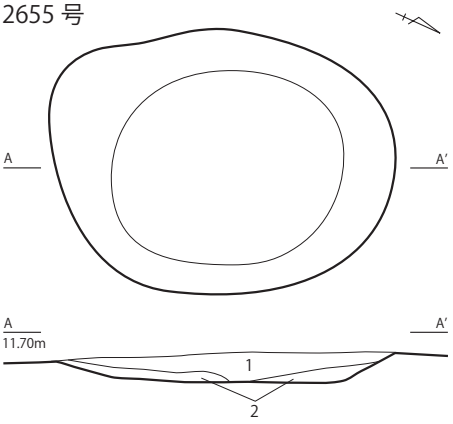
H-2 区では、近代、近世、中世合わせて合計 13 面の遺構確認面が検出され、そのうち近世、旗本屋敷期にあたるものは 1 ～ 6 面となる。 1 面～ 6 面の内、旗本鳥居家屋敷の時期にあたるものが 1 面、旗本成瀬家屋敷の時期にあたるものが 2 面～ 6 面となるが、F-1 区同様に 1 面の中に成瀬家の拝領期にあたる遺構も一部含まれている。また、H-2 区南側では 1 面から 4 面が旗本保科家屋敷の時期にあたり、 5 面は旗本川窪家屋敷の時期にあたる。

A 1 面

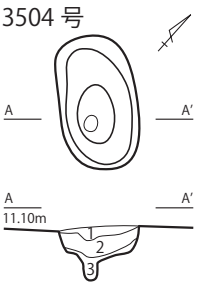
H-2 区 1 面は F-1 区 1 面や H-1 区 1 面および G-1 区・G-2 区の 1-1 面・1-2 面に対応しており、H-2



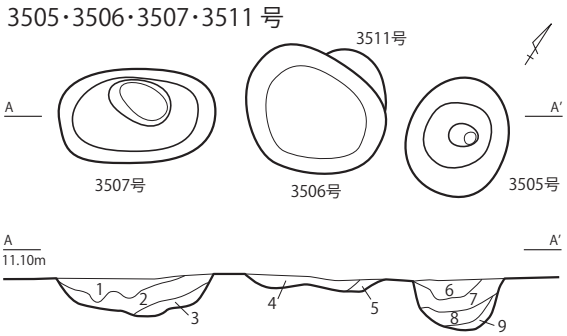
3503 号
1：10YR5/4~5/3+2.5Y7/4(にぶい黄褐色～浅黄色)　しまり：強い　粘性：強い
ローム粒φ1~10mm15 ～ 25%　粗砂 30 ～ 50%　細礫 1 ～ 3%
黒褐色土中量混入　粘土・砂・ローム混合層

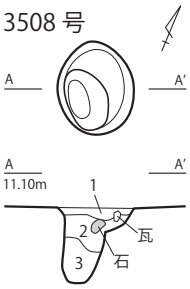


2655 号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ5 ～ 10mm10%
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　黄褐色砂ブロックφ5 ～ 20mm20%
黄褐色粘土ブロックφ5 ～ 10mm3%



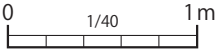
3504 号
1：10YR2/3(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
浅黄橙色 (10YR8/4) 砂粒φ3 ～ 10mm7%(斑紋状)
炭化物粒φ1 ～ 2mm 1 %　粒子やや粗い
2：10YR2/3(黒褐色)　しまり：やや弱い　粘性：強い
にぶい黄橙色 (10YR7/4) 砂粒φ3 ～ 10mm40%(斑紋状)
粒子細
3：10YR2/3(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い
にぶい黄橙色 (10YR7/4) 砂粒φ3 ～ 8mm5%
粒子細



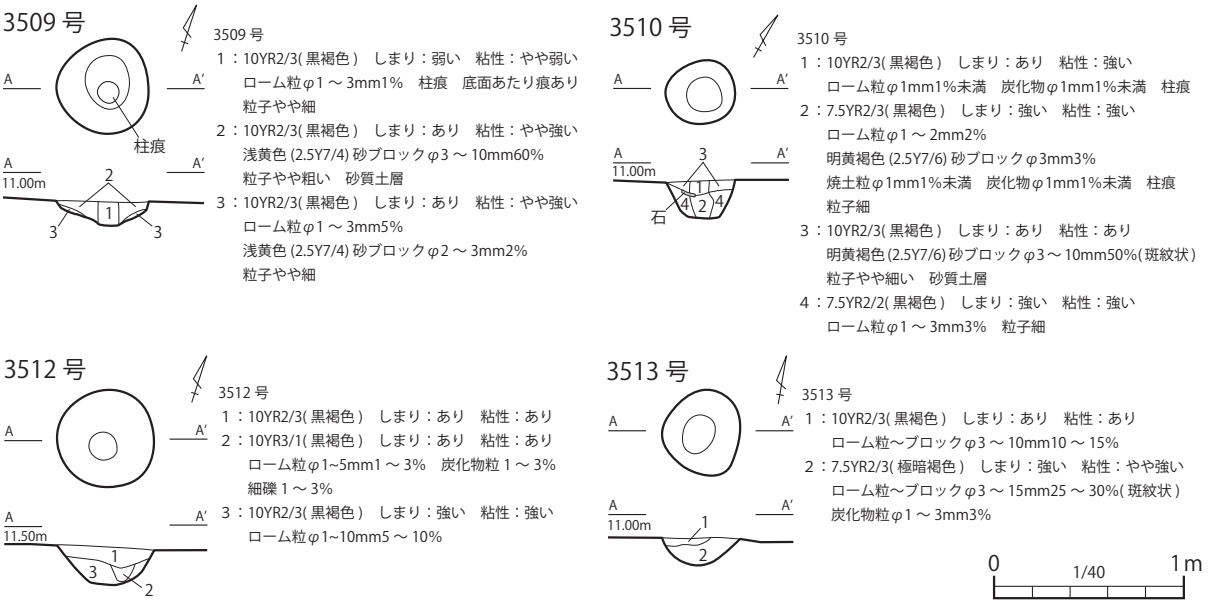


3505 号・3506 号・3507 号・3511 号
1：10YR2/3(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　浅黄橙色 (10YR8/4) 砂粒φ3 ～ 10mm7%(斑紋状)　炭化物粒φ1 ～ 2mm 1 %　粒子やや粗い
2：10YR2/3(黒褐色)　しまり：やや弱い　粘性：強い　にぶい黄橙色 (10YR7/4) 砂粒φ3 ～ 10mm40%(斑紋状)　粒子細
3：10YR2/3(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　にぶい黄橙色 (10YR7/4) 砂粒φ3 ～ 8mm5%　粒子細
4：10YR2/3(黒褐色)　しまり：やや弱い　粘性：強い　ローム粒～ブロックφ1 ～ 15mm2%　浅黄～にぶい黄色砂 (2.5Y7/4 ～ 6/4) 粒～ブロックφ3 ～ 40mm25%(斑紋状)　粒子細
5：10YR2/2(黒褐色)　しまり：やや弱い　粘性：弱い　にぶい黄色 (2.5Y6/4) 砂粒φ3 ～ 10mm5%　粒子粗い
6：10YR3/3(黒褐色)　しまり：やや弱い　粘性：強い　明黄褐 (10YR7/6 ～ 2.5Y7/6) 砂粒φ3 ～ 10mm15%(斑紋状)　炭化物粒φ1 ～ 3mm10%　粒子細
7：10YR2/3（黒褐色）　しまり：弱い　粘性：強い　明黄褐色 (10YR7/6 ～ 2.5Y7/6) 砂粒φ3 ～ 10mm10%(斑紋状)　炭化物粒φ1 ～ 3mm1%未満
8：10YR2/3(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　明黄褐色 (2.5Y7/6) 砂粒φ3 ～ 5mm5%　焼土粒φ1 ～ 2mm1%未満　炭化物粒φ1 ～ 3mm1%　粒子細
9：10YR2/3(黒褐色)　しまり：弱い　粘性：強い　明黄褐色 (2.57/6) 砂粒φ3mm1%　炭化物粒φ1mm1%未満　粒子細

3508 号
1：10YR2/3(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ロームブロックφ10~30mm15 ～ 25%　砂ブロック状にみられる
2：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　炭化物粒φ1~5mm1 ～ 3%
3：10YR3/1(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ5~10mm5 ～ 10%　炭化物粒φ1~5mm5 ～ 10%



第 1-171 図　H-1 区 6 面の遺構（1）(1/40)



第 1-172 図　H-1 区 6 面の遺構（2）(1/40)

区の北側は旗本鳥居家、南側は旗本保科家屋敷の時期にあたる。H-2 区 1 面は北西から南東へ緩やかに傾斜しているが、旗本鳥居家と旗本保科家の屋敷境にあたる部分で急斜面となり、旗本保科家の屋敷地内に入ると再び緩やかな傾斜へと戻る。

1 面では、2 時期の被災処理遺構を確認したが、これ以外の日常的な営為に伴う遺構は極めて希薄である。790 号石垣後背部にあたる南北の屋敷境から被災瓦を多量に含む瓦溜が検出され、嘉永 3 年（1850）の火災処理に比定される。これに切られ H-2 区ほぼ全域に亘る広域な廃棄層は、寛政 6 年（1794）の火災（あるいは短期間の複数の火災）に伴う塵芥処理を兼ねた盛土整地の地形層と見なされる。H-2 区北側では、瓦や陶磁器類を含む廃棄層が連続的に堆積している状況が確認された。H-2 区南側では建物跡や礎石列、廃棄土坑などが確認された。

1 面からは、溝 2 条、礎石 40 基、埋桶 1 基、埋甕 1 基、土坑 13 基、ピット 13 基、焼土溜り 1 基、焼土層 2 基がある。その他に胞衣埋納遺構 1 基、イヌ埋葬跡 2 基、礎石 40 基、瓦層 5 基、瓦溜り 8 基　溝 2 条、集石 2 基、盛土層 2 基が検出された。

【瓦層】

2092・2100 号（第 1-175 図、第 3-16 表）

屋敷地境に沿って検出された大量の被災瓦・遺物を含む一連の瓦層である。2092 号が上層（[第 1-175 図 2 層）、2100 号が下層（同図 3・4 層）に比定される。長軸 12.9 m以上、短軸 3.76 m以上、深さ 1.64 mを測る。3296 号、3388 号、3389 号を切る。南辺を 790 号石垣構築時に掘り返される。堆積状況は、2 面段階までの屋敷境の段上にあたる鳥居家屋敷地側から南側段下の保科家屋敷地側へと流れ込むように堆積する。瓦礫処理に伴い段上から盛りこぼし整地を行ったものと判断される。覆土については、全体に被災瓦を含むが、上層 2092 号は焼土が少なく瓦にも被熱の痕跡が少ない傾向があり、下層 2100 号は被災瓦を伴う焼土を多量に含む。出土遺物は 2092 号が 2,233 点・433,475.6g、2100 号が 8,186 点・1,638,845.7g である。あわせて瓦が約 3500 点・1.85t 超、陶磁器類も約 5,500 点・168kg 超と膨大な遺物が検出されている。陶磁器類は中程度の遺存状態である。

瓦の産地組成は江戸在地系を主体に多量の福岡産瓦で構成され、大坂系、東海系の瓦を含む。福岡産では藤巴紋の軒丸瓦、軒平瓦・軒桟瓦のほか輪違瓦、塀瓦や竪瓦（海鼠瓦）が出土しているのも特徴的である。廃絶年代は出土遺物から 19 世紀中葉、嘉永３年（1850）火災に伴う廃絶と考えられる。

【塵芥処理・盛土整地地業層】

3040・3165・3170・3172・3175・3180 号遺構群（第 1-173 図、図版 3-64-1、第 3-16 表）

H-2 区南側屋敷地際１・２面で広域に検出された一連の塵芥処理・盛土整地地業層である。範囲は、東側は次第に薄くなるが調査区外にまで、西側は旧道に破壊され延長は不詳ながら、西方にあたる F-1 区西側の土坑群に連なる。掘削前に、当該遺構群を切る攪乱壁面の様相から、焼土層と廃棄層とが互層状に堆積することを把握していた。そこで、その堆積に時期差やタイムラグが看取できるのかどうか把握するために、覆土の様相が変化する単位ごとに別遺構番号を付して調査を行った。堆積の重複状況からは、次のような堆積順となる。

① 3172 号、3175 号（焼土層）→② 3165 号上盛土（１面盛土）→③ 3165 号（廃棄層）、3170 号→④ 3040 号上層（砂層）→⑤ 3040 号上層（火災層）→⑥ 3040 号下層→⑦ 3180 号（火災層）・屋敷境際の土坑（3240 号・3185 号）

結果としては、下位の２面検出とした 3185 号土坑・3240 号土坑を含めて、廃絶時期は 18 世紀後葉にまとまることから、18 世紀第４四半期・寛政６年（1794）の火災に伴う一連の塵芥処理を兼ねた整地造成の地形跡と判断される。ただし、④ 3040 号上層（砂層）で下位を覆うような堆積を示し、上位と不整合となる堆積状況からは、タイムラグも考えられる。

①～⑥の各遺構番号が示す範囲は地形層の一部であり、全体的に北側から南側へと層厚を増しながら堆積するため、覆土の薄い北側では立ち上がりが不明瞭となり平面的な広がりを捉えにくい。また、南側のラインは１面 2100 号の北側ラインと重複するが、東西に連なるマウンド状の高まりとなるこのあたりが比高ある屋敷地境の上端に比定される。火災が単体か複数回か課題は残るが、いずれにせよ、この時期に屋敷境際まで集中的に盛土造成を行い嵩増しを行ったものと推定される。

本遺構群全体での遺物出土量は 60,000 点弱・4.5 トンにも及ぶ。各遺構（堆積層）間で接合する資料が非常に多く、とくに 3040 号、3165 号、3170 号間での接合率が高く、次いで 3165 号・3185 号間、3172 号・3175 号間の接合資料も目立つ。

次に、上層から順に各遺構（堆積層）の特徴を説明する。ここでの位置に関する説明は、当該遺構群の中での位置を示す。

3172 号は西寄り東西 11 m、南北７mの範囲に広がる焼土層で旧道によって東西に分断される。遺物は 965 点・156,619.2g が出土している。

3175 号は 3172 号から東方へ連なる焼土層で、２面 3185 号東側に重なる４～５mの範囲で落ち窪むような堆積を示す。遺物は、2,007 点・105,450.3g が出土している。

3165 号は中央～西側にかけて、東西 15 m、南北９mの半円形の範囲に広く展開する。遺物は 9,872 点・632,947.9g が出土している。須恵焼や高取系陶器を含み、瓦は江戸を主体とし福岡産を多数含む。福岡瓦はこれ以外では比較的少ない。上面を覆うように無遺物に近い均質な層が確認できる。獣骨集中部が３箇所（No.1 ～ 3）あり、このうち No.1・２はネコの全身骨、No.3 はイヌの集骨である（第 1-176 図）。3170 号は 3165 号から連続する廃棄層である。南東寄り 3240 号遺構の西側直上に位置

し、東西 6.7 m、南北 3.5 mの不整楕円形の範囲で、3240 号の北縁から同遺構の中位以下の深さまで流れ込む。深さは最大で 1.2 mを測る。覆土中には一部焼土を含むが、多量の炭化物や陶磁器類、瓦、貝類などを含む。獣骨集中部が 7 箇所（No.1 ～ 7）あり、このうち No.3 はイヌの全身骨、このほかは一部連結した状態のウシ・ウマ、鳥類の部分骨である。遺物は 3,681 点・261,034.7g が出土しており、遺存状態も良好である。

3040 号は、北から北東にかけて東西 17 m、南北 9 mの範囲で検出され、2 面の東西に直列する大規模土坑 3185 号、3240 号内に流れ込んだのち、同遺構の南壁から上端にかけてマウンド状に堆積する。覆土は大まかに上層（砂層）・上層 2（廃棄層）・上層（焼土層）・下層（廃棄層）と四分して取り上げた。本遺構群では最も遺物の多い廃棄層で、遺物は 27,437 点・1,486,863.2g が出土しており、比較的遺存度の高い陶磁器類、瓦、金属製品、動物骨（ネコ全身骨）などが出土している。動物骨は屋敷境に密集しており、このほかにも周辺からは 3022 号や 3045 号としたイヌ埋葬跡が発見されている。

3180 号（第 1-175 図、第 3-16 表）

北寄り東西 15m、南北 2.5 mの範囲で確認された被災瓦層で、H-1 区 2072 号に連続すると考えられる。出土遺物は 1424 点・890,932.3g で瓦が点数比でも 7 割以上を占め、本遺構群のなかでも筆頭である。瓦には福岡産を含まず、2072 号と同様江戸瓦と若干の東海瓦で構成される。

【礎石列】

3245・3246・3247・3248・3250・3251・3253・3293・3316・3329・3401（第 1-179 図、第 3-16 表）

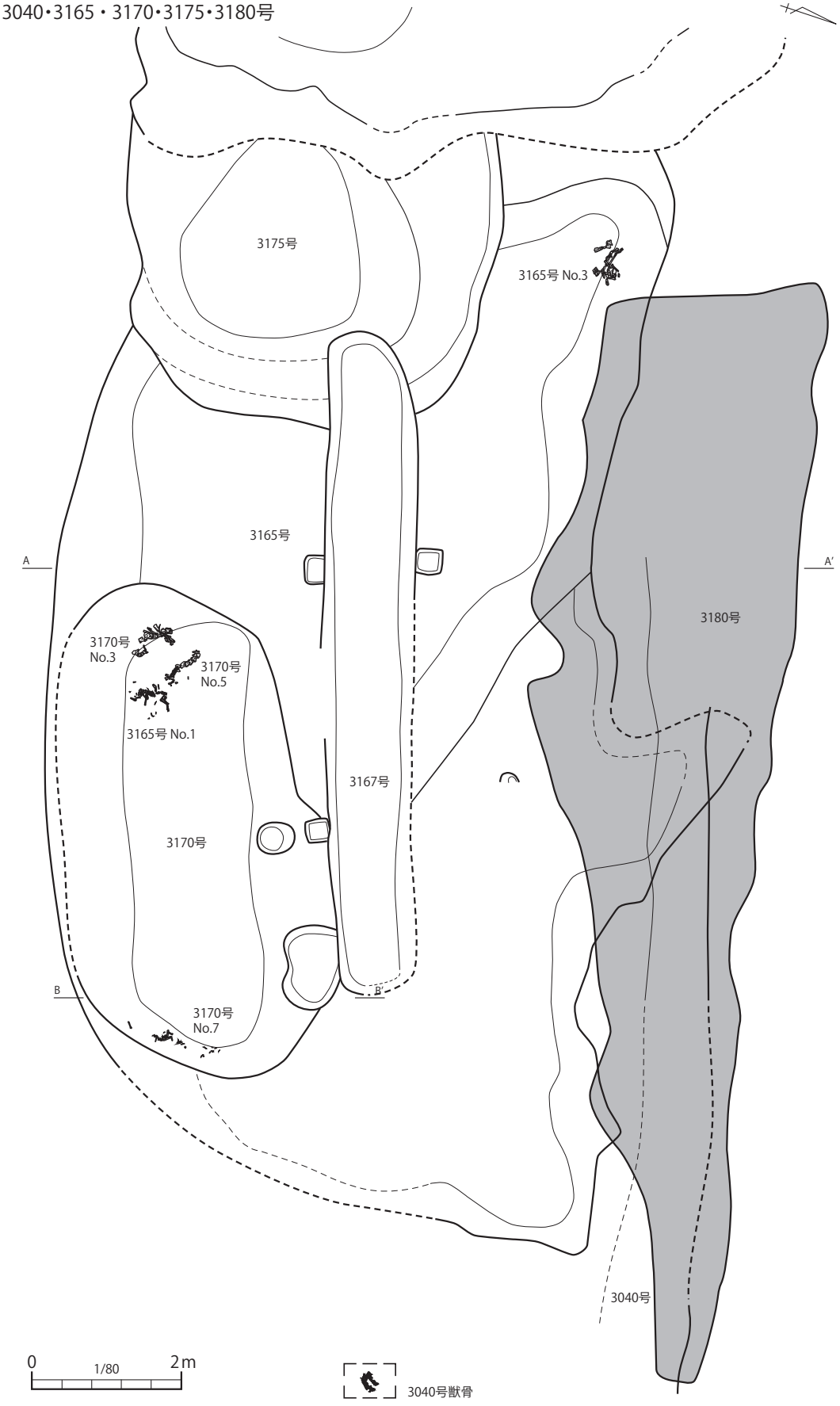
H-2 区南側、2100 号のすぐ南に位置しており、これらの礎石が列をなすように並んだ状態で検出された。これらの礎石は等間隔に並んではいないものの構造が類似することから一体のものとした。これらの礎石はいずれも杭上に 2 段から 3 段の礎石を配置する。いずれの礎石も安山岩を使用するが、3251 号は安山岩とともに房州石が、3316 号は安山岩とともに砂質緑色凝灰岩が使用されていた。

3260・3261・3262・3263・3264 号（第 1-179 図・第 3-16 表）

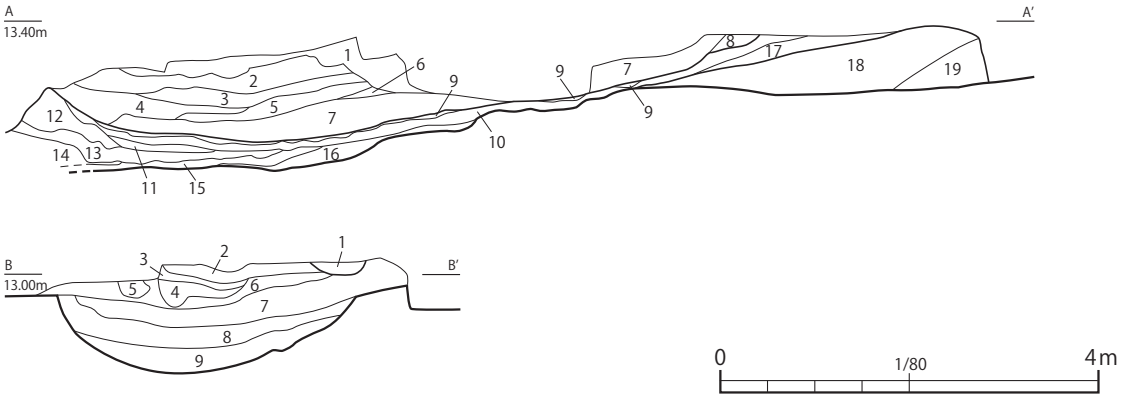
H-2 区南東に位置する礎石列で、3120 号（1 面・土坑）と重複する。北から 3260 号 -3261 号 -3262 号 -3264 号と 4 基の礎石が並ぶが、周辺にも礎石と考えられる礫が点在しており（3256・3260・3263・3208・3265 号）、元の礎石列がより新しい 3120 号の掘削に伴い乱された可能性がある。軸方向はピット列（3255 他）と同一だが、ピット列の南北列と重複しており、新旧関係があるものと考えられる。石材はいずれも緑色凝灰岩である。ピット列（3255 号他）同様、建物跡とする判断材料には乏しく、屋敷内の空間を区切る施設である可能性も否定できない。

【ピット列】（第 1-180 図、第 3-16 表）

H-2 区南東で確認された柱穴列である。東西 4 間 7.3 m、南北 2 間 3.7 m分が確認されている。東側、南側はさらに列が続く可能性があり本来の規模は不明だが、おそらく東西方向の構造物である。東西列（3255 号 -3221 号 -3256 号 -3234 号 -3315 号）は東側で土蔵基礎（3222 号）と重複し、ピット列の方が新しい。ピットはいずれも方形の掘方を呈し、それぞれ 30 ～ 40cm 角と比較的小規模である。覆土はしまりが弱く粘性が強い褐灰土を主体とし、瓦片が多く含まれる。これは、上面に位置する近代盛土に多く含まれていた瓦片が土壌ともに落ち込んだ可能性がある。また、覆土には柱痕や抜き取り痕を示す特徴も認められなかった。さらに、3228 号を除き底面は平坦で柱の当たりは認



第 1-173 図　H-2 区 1 面の遺構（1）（1/80）



3165号（SPA-A′）
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　焼土粒φ5～10mm3%
2：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ2～5mm2%　粘土ブロックφ10～50mm5%
3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ5～10mm3%
4：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土ブロックφ10～20mm3%
5：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物粒φ5～10mm10%　粘土粒φ5～10mm2%　貝片10%
6：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ2～5mm10%　炭化物粒φ2～3mm3%　貝片2%
7：2.5Y7/8(黄色)　しまり：あり　粘性：強い　粘土層
8：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ3～5mm10%
9：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ15mm20%　黄褐色砂ブロックφ15～20mm5%
10：5Y5/2+2.5Y5/1(灰オリーブ色+黄灰色)　しまり：強い　粘性：あり　炭化物粒15～25%　炭化物ブロックφ10~30mm15～25%　粘土15～25%
11：2.5Y5/3+10YR4/3(黄褐色+にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：やや弱い　砂30～50%　焼土粒5～10%　炭化物粒15～25%　粘土15～25%
12：10YR3/1(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　砂30～50%　炭化物粒15～25%　粘土15～25%　細礫5～10%　中礫φ4~20mm5～10%
13：10YR3/1(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　砂5～10%　焼土粒1～3%　炭化物粒15～25%　炭化物ブロックφ10~20mm15～25%　粘土15～25%　細礫15～25%　中礫φ4~20mm15～25%
14：2.5YR4/6~4/8(赤褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　焼土粒30～50%　炭化物粒1～3%
15：5Y5/2(灰オリーブ色)　しまり：強い　粘性：強い　砂15～25%　焼土粒1～3%　炭化物粒5～10%　炭化物ブロックφ10~30mm5～10%　粘土30～50%　粘土層
16：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：強い　砂5～10%　炭化物粒5～10%　炭化物ブロックφ10~30mm5～10%　粘土50%～　粘土層
17：10YR4/2+2.5Y5/1(灰黄褐色＋黄灰色)　しまり：極弱　粘性：あり　炭化物粒φ~10mm1～3%　粘土粒～ブロックφ~20mm30～50%
18：2.5YR5/2(灰赤色)　しまり：弱い　粘性：弱い　シルト5～10%　砂5～10%　焼土粒15～25%　焼土ブロックφ10~15mm30～50%　中礫φ10~30mm5～10%
19：2.5YR4/3(にぶい赤褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い　砂1～3%　焼土粒15～25%　焼土ブロックφ~30mm50%～　シルト1～3%　瓦多量に含む
3170号（SPB-B′）
1：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
2：10YR3/4+5/8(暗褐色+黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ロームブロックφ10~40mm30～50%　焼土粒5～10%　明度の高いローム+暗褐色土の混合層　焼土ブロックφ10~20mm5～10%　炭化物粒φ~5mm5～10%　瓦細片少量含む
3：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：あり　細砂5～10%　細礫1～3%　中礫φ10~20mm1～3%　粘土5～10%
4：5YR3/4～5/6(暗～明赤褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い　焼土粒5～10%　焼土ブロックφ10~20mm30～50%　炭化物粒φ~5mm1～3%　被熱瓦を含む　焼土主体層
5：5YR3/4～5/6(暗～明赤褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　ローム粒15～25%　焼土粒15～25%　炭化物粒5～10%　黒褐色土(10YR2/2）10%　被熱瓦を含まない　焼土粒主体層
6：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：弱い　細砂15～25%　焼土粒1～3%　焼土ブロックφ10~20mm1～3%　炭化物粒1～3%　粘土5～10%
7：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂5～10%　焼土粒φ~5mm5～10%　焼土ブロックφ2~10mm15～25%　中礫φ20~50mm5～10%　炭化物粒φ~20mm15～25%　粘土粒～ブロックφ~15mm15～25%　多量の炭化物と少量の貝類・漆喰を含む
8：2.5Y5/1(黄灰色)　しまり：やや弱い　粘性：あり　焼土粒φ~10mm5～10%　炭化物粒φ~15mm5～10%　粘土粒～ブロックφ~30mm30～50%
9：10YR4/2+2.5Y5/1(灰黄褐色＋黄灰色)　しまり：極弱　粘性：あり　炭化物粒φ~10mm1～3%　粘土粒～ブロックφ~20mm30～50%

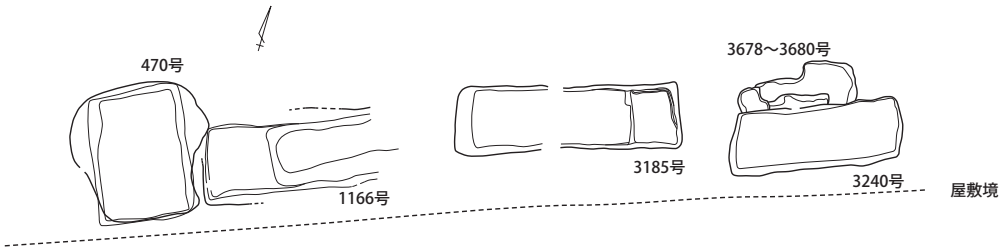
第 1-174 図　H-2 区 1 面の遺構（2）(1/80)

められず建物跡とする判断材料に乏しいため、ピット列として報告する。南北列（3255 号 -3205 号 -3228 号）は、成瀬家－保科家屋敷の南東張り出し部分を区切る溝（G-1 区 812 号・893 号）の延長上に位置しており、屋敷内の空間を区切る柵等であった可能性もある。いずれのピットからも遺物は出土していない。

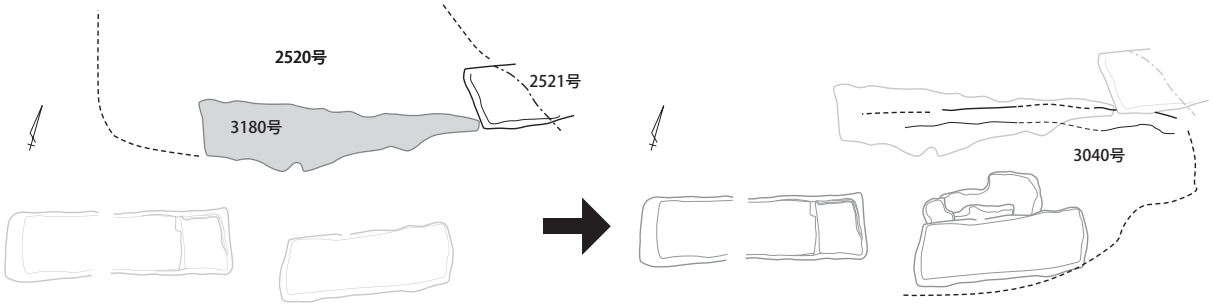
【廃棄土坑】

3105・3106・3087 号（第 1-177・178 図、第 3-16 表）

いずれも H-2 区南東に位置する大型の廃棄土坑である。3105 号は明確な遺構形状が認められず、遺物を大量に含む褐灰色粘質土（約 40cm 厚）がアメーバー状に広がっていた範囲を記録し（第 1-177 図）、便宜上土坑として報告する。覆土上層（同図 SPA-A′・1 層）は締まりが極強い褐色土で、黄褐色砂を多く含む。下層（同図 SPA-A′・２層）は上層に比べしまりが弱く、粘性が強い褐灰色土で

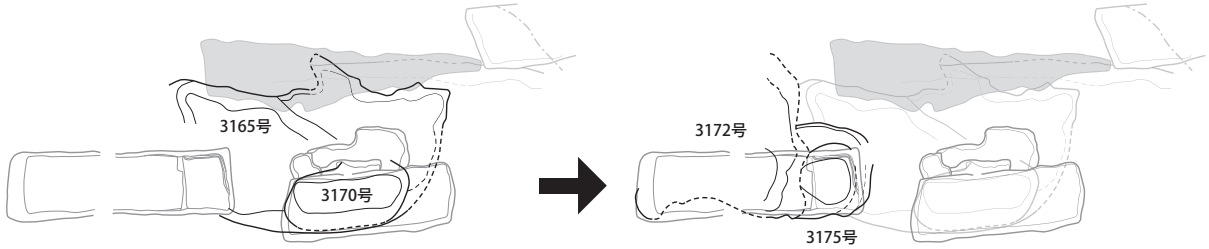


1）屋敷際に沿って東西に並ぶ大型土坑群（⑦）：



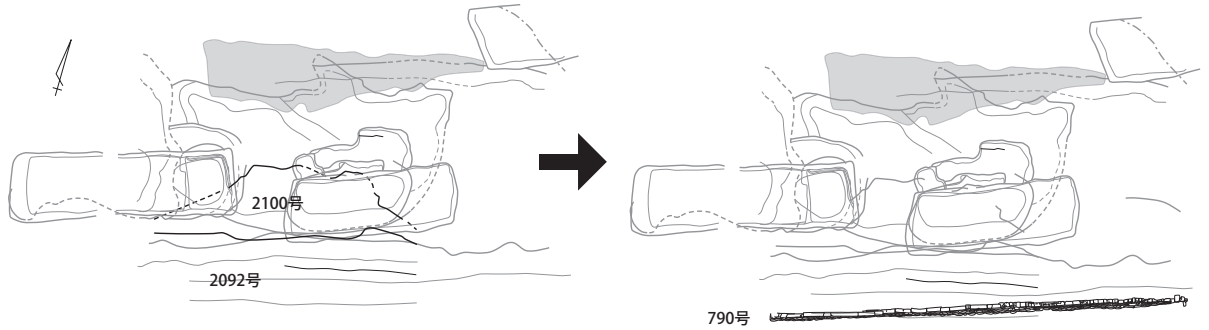
2）被災瓦を含む焼土：H-1区母屋側の建物跡1を中心に展開（被災瓦に福岡を含まず）

3）被災瓦を含む焼土層：H-2区屋敷地際の東寄りの遺構群に流れ込むように堆積（④・⑤・⑥）



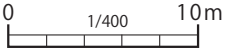
4）焼土を一部に含む瓦礫層：H-2区屋敷地際の東寄りの遺構群を埋めつくすように堆積（②・③）

5）焼土を一部に含む瓦礫層：H-2区屋敷地際の西寄りの遺構群を埋めつくすように堆積（①）



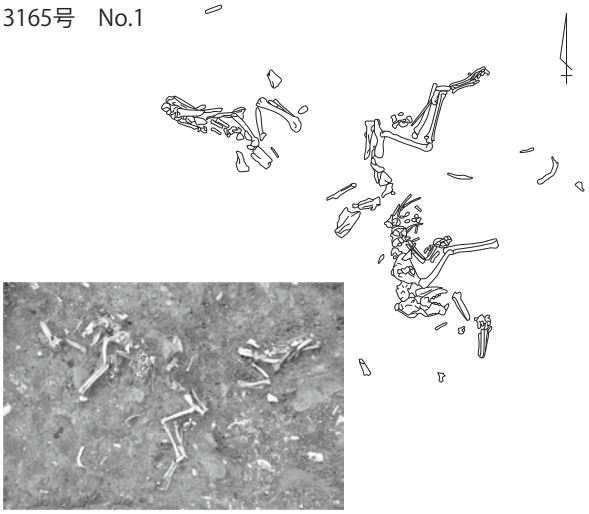
6）屋敷境から斜面下にかけて被災瓦を含む焼土層が展開　（嘉永3年 [1850]）の火災か

7）佐野常民邸へと変遷し、旧屋敷境に石垣が築かれ、段切り状の整地が行われる　（明治５年[1872頃か）



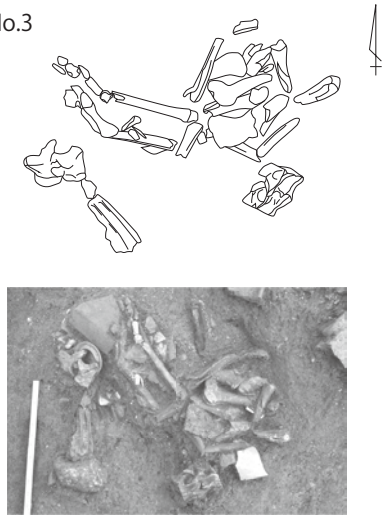
第 1-175 図　H-2 区 1 面の遺構（３）（1/400）

3165号　No.1



1.　3165号No. 1 出土状況(北東から)

3165号　No.3



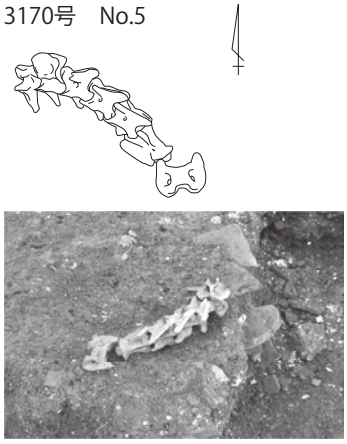
2.　3165号No. 3 出土状況(南から)

3170号　No.3



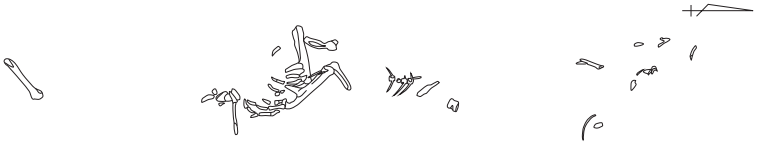
3.　3170号No.3出土状況(東から)

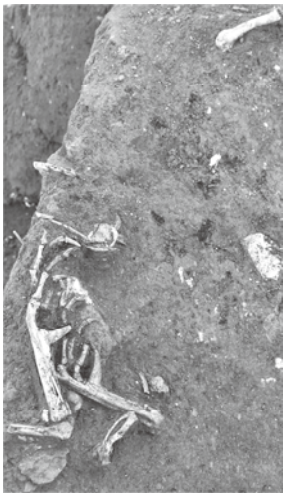
3170号　No.5



4.　3170号No. 5 出土状況(東から)

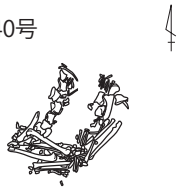
3170号　No.7





5.　3170号No.7出土状況(北から)

3040号

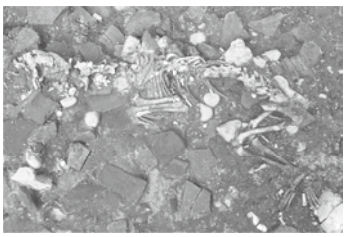




6.　3040号獣骨出土状況(南から)



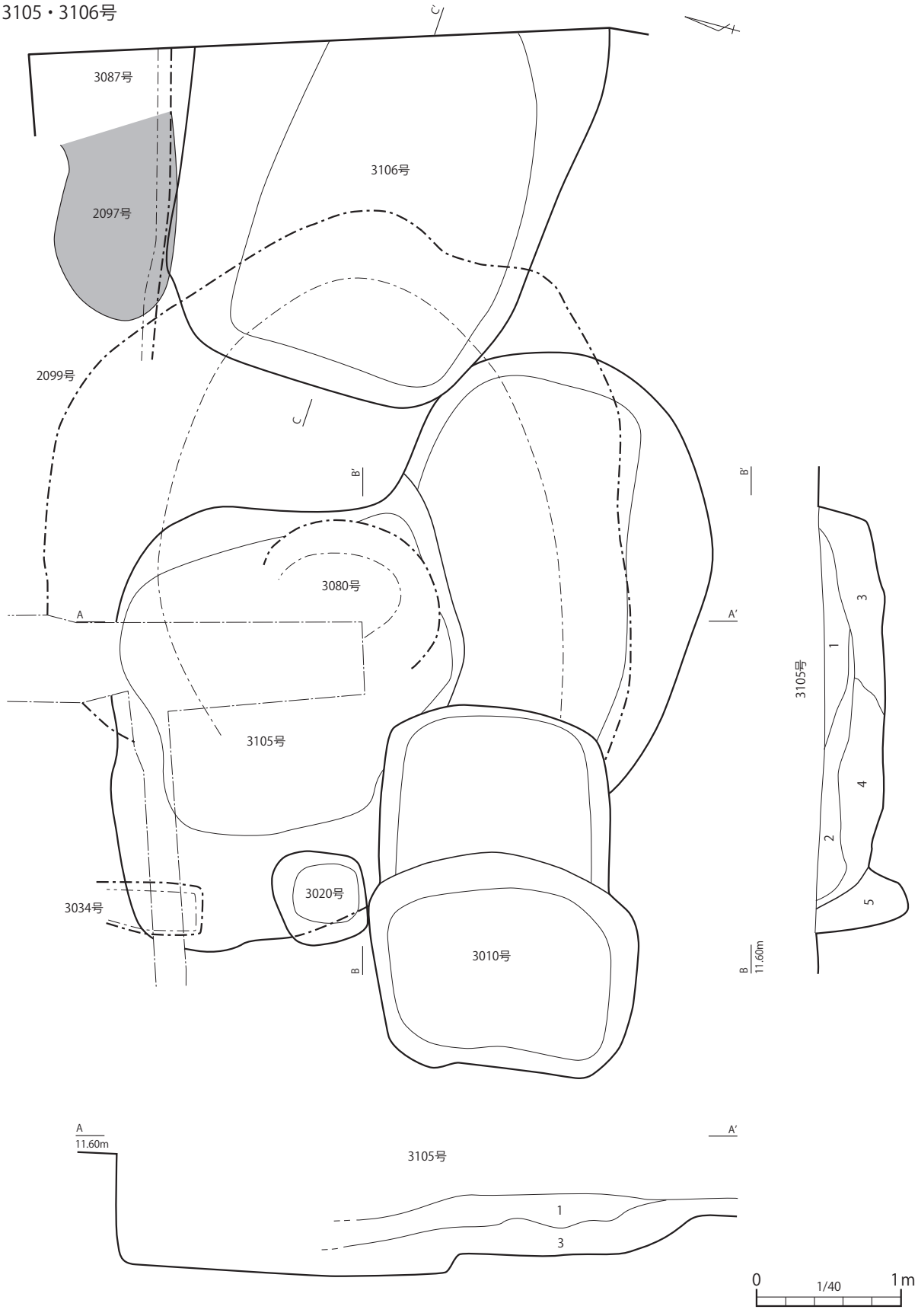
7.　3022号獣骨検出状況（南から）



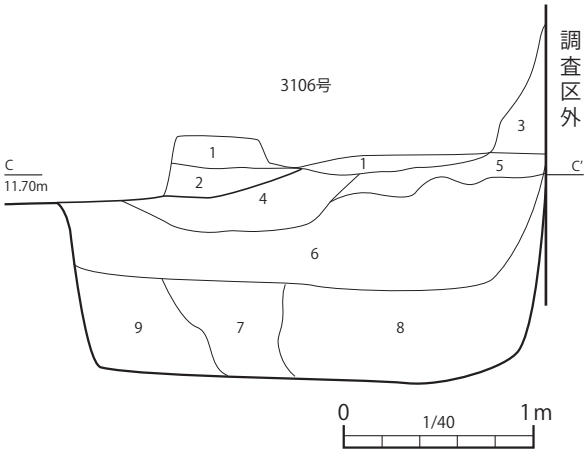
8.　3045号獣骨検出状況（南から）

0　1/15　50cm

第 1-176 図　H-2 区 1 面の遺構（4）（1/15）



第 1-177 図　H-2 区 1 面の遺構（5）（1/40）



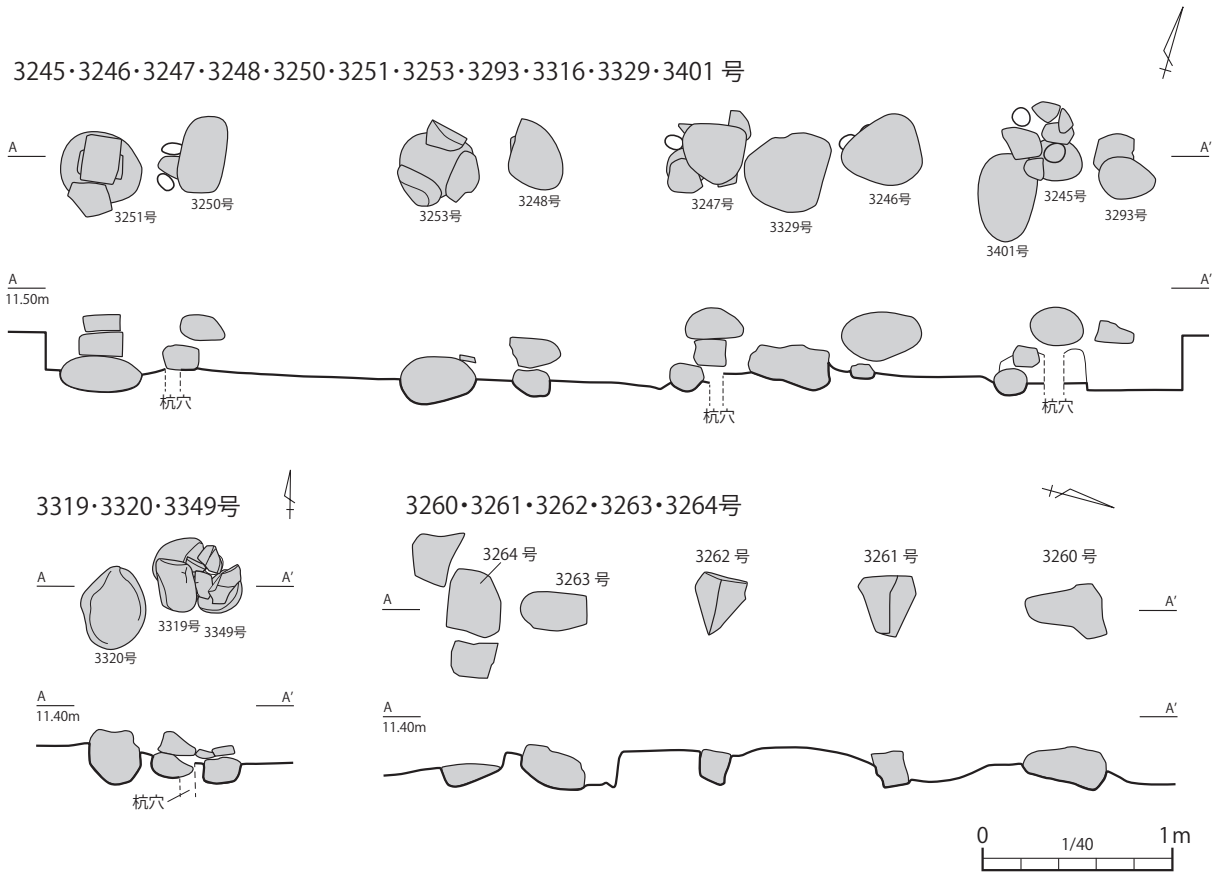
3105号（SPA-A'・SPB-B'共通）
1：10YR4/6（褐色） しまり：極強 粘性：あり
黄褐色砂φ1～10mm15% 炭化物粒φ1～5mm5%
焼土粒φ1～3mm3%
2：10YR5/1（褐灰色） しまり：あり 粘性：強い
焼土粒φ1～3mm3% 炭化物粒φ1～7mm７%
漆喰片（貝殻片)φ1～3mm2% 遺物を多く含む
3：10YR4/1（褐灰色） しまり：あり 粘性：強い
焼土粒φ1～5mm5% 炭化物粒φ5～10mm15%
黄灰色粘土粒φ5～10mm5% 小礫φ10～20mm5%
4：10YR4/1（褐灰色） しまり：あり 粘性：強い
焼土粒φ1～5mm5% 炭化物粒φ5～10mm15%
黄灰色粘土粒φ5～10mm5% 漆喰片（貝殻片)７%
小礫φ10～20mm
5：2.5Y5/1（黄灰色） しまり：強い 粘性：強い
焼土粒φ1～5mm3% 炭化物粒φ1～5mm15% 赤錆5%
黄灰色砂質粘質土10%

3106号（SPC-C'）
1：10ＹＲ5/2(灰黄褐色) しまり：強い 粘性：強い ローム粒φ1～5mm7% 灰黄色粘土粒φ5～10mm7% 焼土粒φ1～5mm5% 炭化物粒φ3～10mm20%
灰黄褐色粘質土と褐灰色粘質土の混合土
2：7.5ＹＲ4/2(灰褐色土) 瓦集中層 しまり：強い 粘性：弱い 焼土粒φ1～5mm10%
3：2.5Y4/1(黄灰色) しまり：極強 粘性：強い ローム粒φ1～5mm5% 黄褐色砂5% 灰黄色粘土2.5Ｙ7/2φ5～10mm5% 焼土粒φ1～5mm5% 炭化物粒φ1～10mm10%
小石φ10～20mm15% 貝片15%遺物を多量含む3106号上層 空隙多
4：10YR5/2(灰黄褐色) しまり：あり 粘性：強い ローム粒φ1～5mm7% 灰黄色粘土φ1～5mm10%(斑紋状) 焼土粒φ1～3mm5% 炭化物粒φ1～5mm10% 赤錆5%
小石φ10～20mm7%
5：10YR5/2(灰黄褐色) しまり：あり 粘性：強い ローム粒φ1～5mm7% 灰黄色粘土φ1～5mm10%(斑紋状) 焼土粒φ1～3mm5% 炭化物粒φ1～5mm10% 赤錆5%
小石φ10～20mm7% 瓦片40%
6：10YR5/2(灰黄褐色) しまり：あり 粘性：極強 焼土粒φ1～5mm7% 炭化物粒～ブロックφ5～20mm20% 貝殻片10% 小石φ10～20mm10% 赤錆7%
灰黄色粘質土主体 遺物を多量含む
7：10YR5/1(褐灰色) しまり：弱い 粘性：極強 瓦片40% 焼土粒φ1～5mm5% 赤錆７% 炭化物粒φ1～5mm5%
8：2.5Y5/1(黄灰色) しまり：あり 粘性：強い 漆喰片・貝片30% 炭化物粒φ1～10mm10% 赤錆10% 焼土粒φ1～5mm７%
9：2.5Y5/2(暗灰黄色) しまり：弱い 粘性：極強 炭化物粒φ3～10mm15% 焼土粒φ1～3mm2% 炭化物粒φ1～3mm5%

第 1-178 図　H-2 区 1 面の遺構（6）(1/40)

ある。マトリクスは上層と同じ褐灰土だが、炭化物・遺物を大量に含んでおり、部分的に漆喰片・貝殻片が含まれる(同図 SPB-B'・2 層)。覆土下層は隣接する 880 号(廃棄土坑•G-1 区)の上面まで広がっていることから、3105 号は 880 号よりも新しい。出土遺物は 2,478 点・155,006.2g と多く、3106 号・3072 号（近代）との遺構間接合が多く認められる。3106 号とは同時に廃棄行為が行われたと考えられる。3072 号は 20 世紀代の整地痕跡であり、3105 号の上面に位置するため遺物が混在したものと考えられる。また、3105 号には福岡産の陶器・土器が多数含まれており（第 2-85 図)、屋敷外から持ち込まれた遺物である可能性が高い。時期は 19 世紀後葉を主体とする。

3106 号は H-2 区南東の東壁際に位置する。平面は方形を呈し、東側は調査区外へと続く。規模は長軸 2.9m 以上、短軸 2.71 ｍで遺構の深さは 1.06 ｍを測るが、調査区壁で観察した限りではさらに深い土坑であったと考えられる。壁はいずれもほぼ直に立ち上がる。覆土は上層（４～６層）と下層（7 ～ 9 層）の間に不整合なラインが見られることから、おそらく下層が堆積した後に掘り返しが行われたと考えられる。また、上層の上には近代の整地に伴う土層（１～３層）が堆積している。上層はしまり・粘性とも強い灰黄褐色度で、瓦片を多く含む。さらに、灰黄褐色粘質土を主体とする 6 層には遺物が大量に含まれており、これらが 3105 号の遺物と遺構間接合している。下層はしまりが極強い灰黄褐色土、褐灰色土を主体とする。覆土には炭化物が多く含まれており、さらに調査区東壁際に堆積する 8 層には漆喰片・貝殻片が多く含まれる。出土遺物は 2,287 点・107,927.2g と多く、3105 号遺構同様に福岡産の陶器・土器が多く含まれる。時期は 19 世紀第 1 四半期を主体とする。



第 1-179 図　H-2 区 1 面の遺構（7）（1/40）

B　2 面

H-2 区 2 面は F-1 区 2 面や H-1 区 2 面および G-1 区 2 面・G-2 区の 1-3 面・1-4 面に対応しており、H-2 区の北側は旗本成瀬家、南側は旗本保科家屋敷の範囲にあたる。

2 面は 1 面と同様に北西から南東へ緩やかに傾斜しているが、旗本成瀬家と旗本保科家の屋敷境にあたる部分で急斜面となり、旗本保科家の屋敷地内に入ると再び緩やかな傾斜へと戻る。

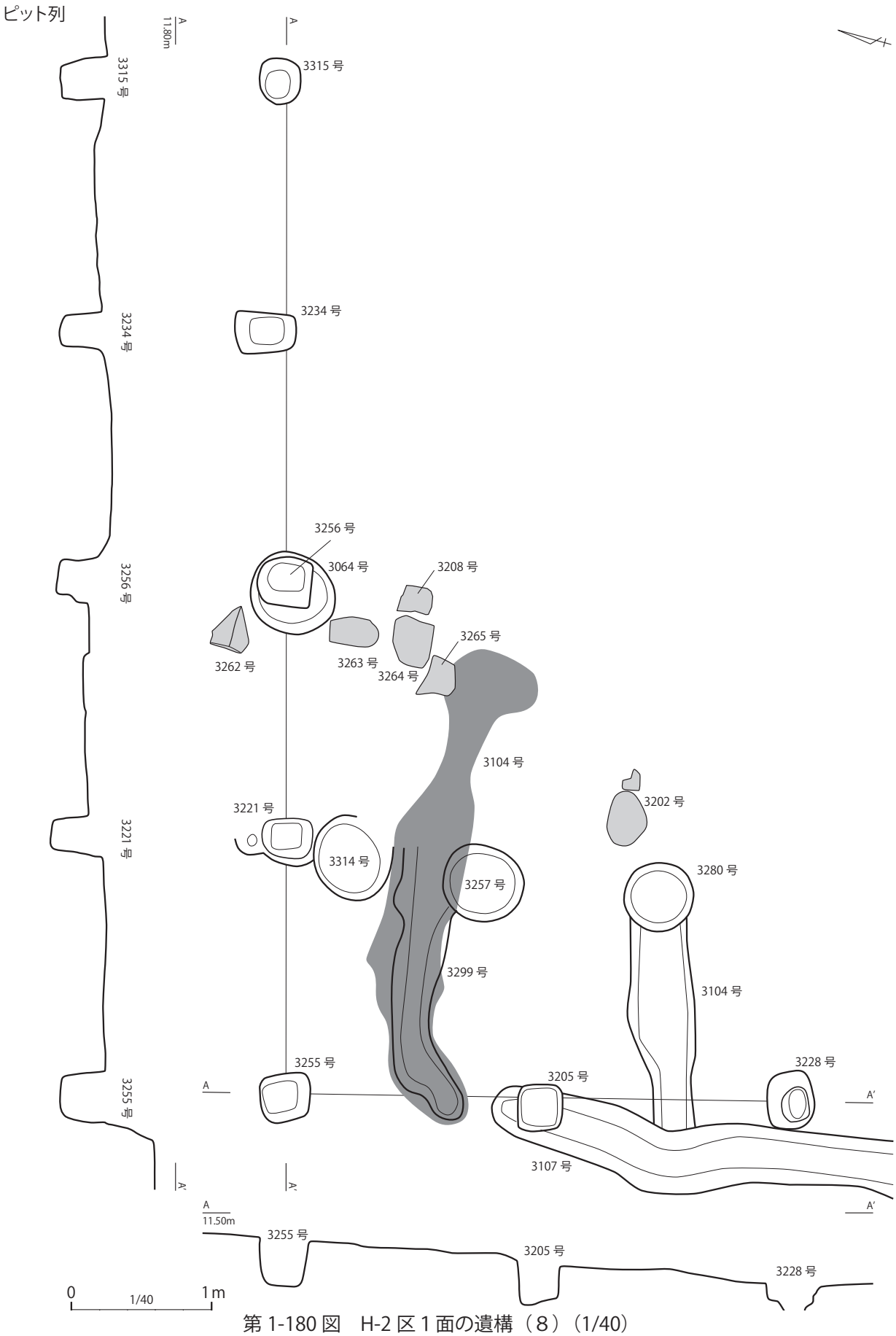
H-2 区北側では、大型の廃棄土坑が屋敷境付近に集中する状況が確認された。H-2 区南側では土蔵基礎や溝、地下室、廃棄土坑などが確認されている。

2 面からは、土蔵基礎 1 基、イヌ埋葬跡 1 基、溝 6 条、礎石 31 基、礎石跡 1 基、砂利基礎 1 基、集石 1 基、埋桶 10 基、瓦溜り 3 基、廃棄土坑 3 基、土坑 40 基、落ち込み 2 基、ピット 19 基、杭列 1 条、杭穴 1 基、焼土層 1 基、粘土層 1 基、遺物集中 1 基が検出された。

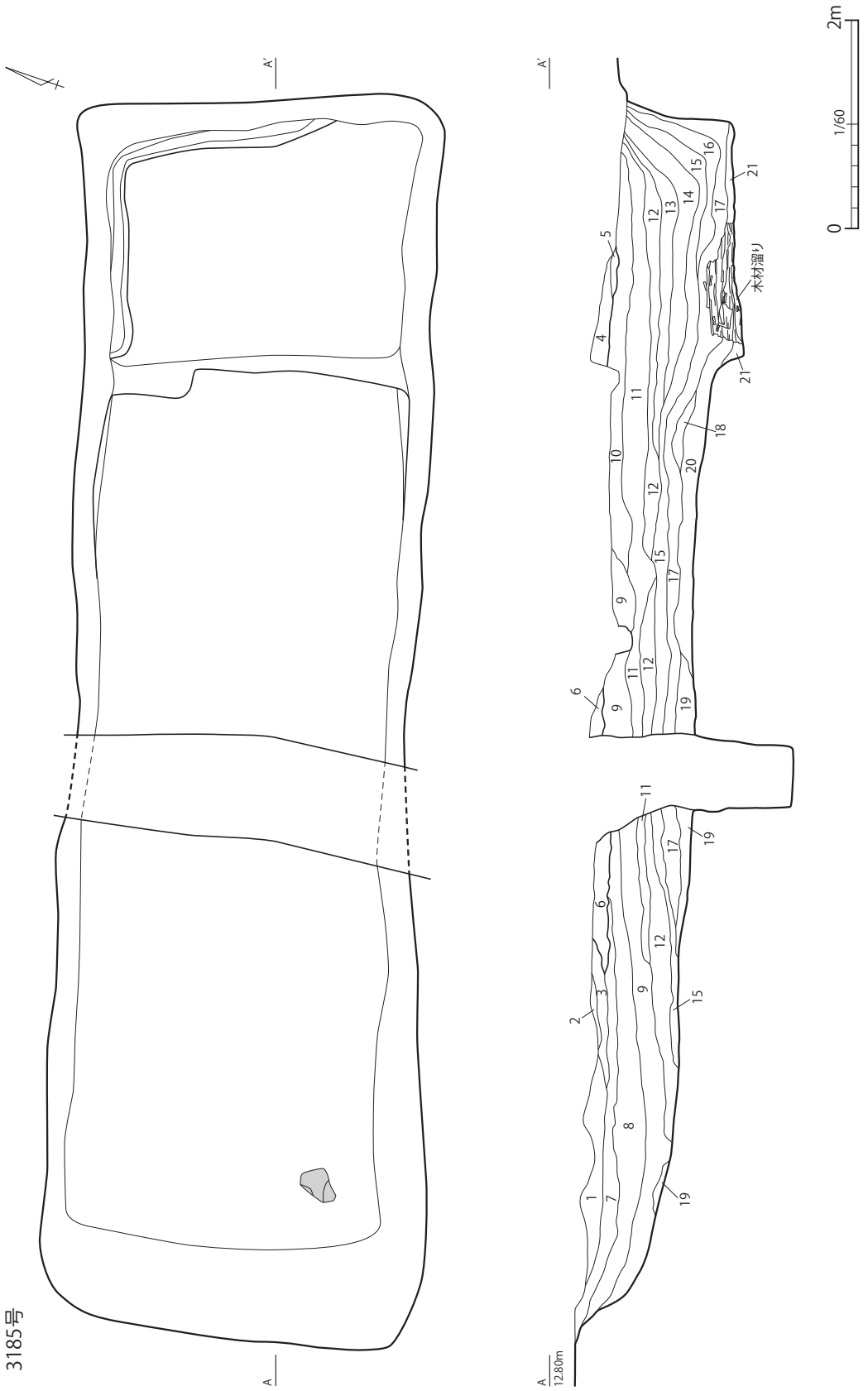
【土蔵基礎】

3222 号（第 1-183 図、第 3-16 表）

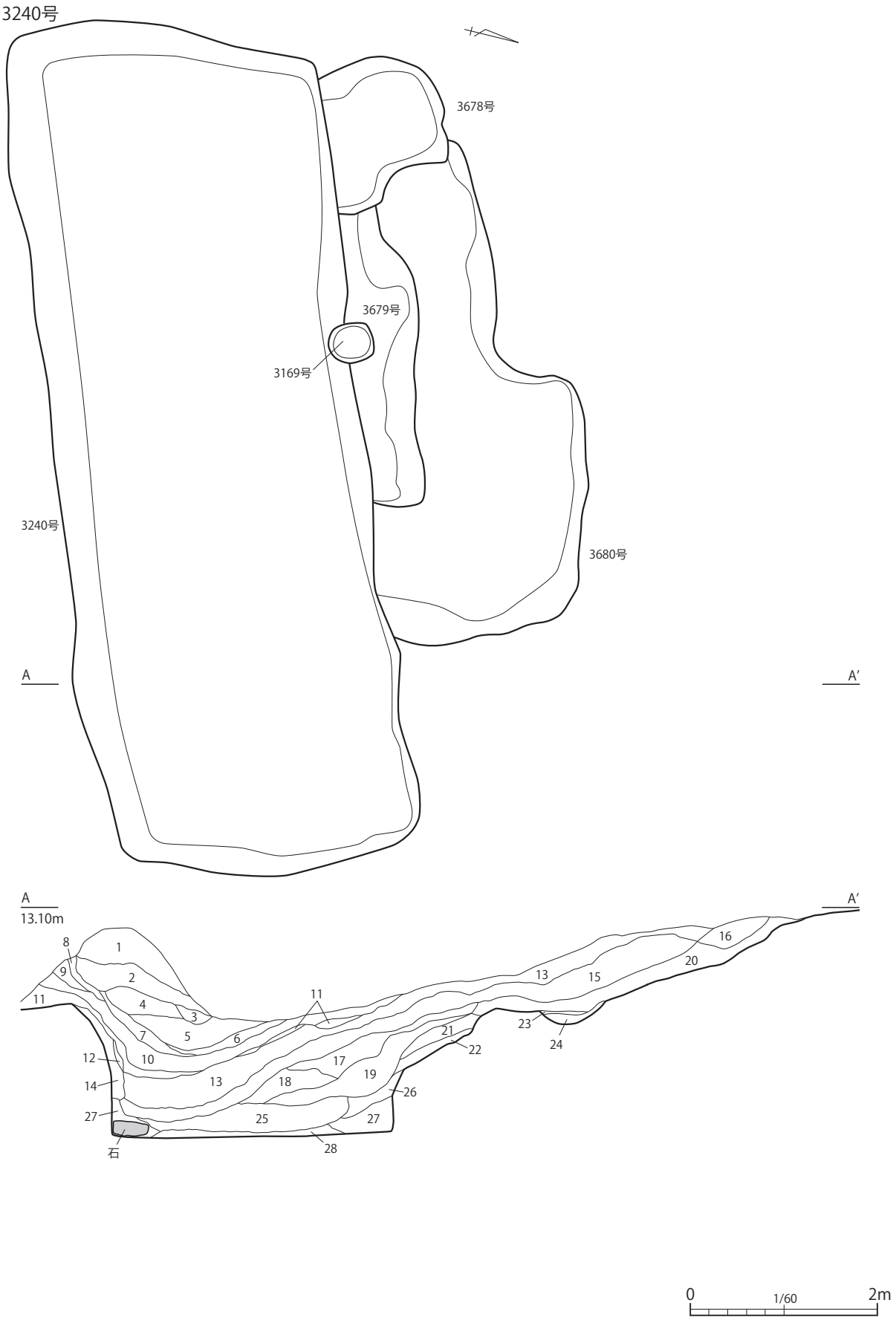
H-2 区南東に位置する土蔵基礎である。ロの字形の掘方の溝と礎石からなるもので、東面・南面の溝は 1 面の 3105 号（廃棄土坑）により削られ残っていない。また、土蔵壁や基礎構造は検出されていない。規模は東西 4.71 m、南北 3.25 m（推定値）で、掘方の溝の幅は残存部で約 1 mである。溝は深さ 30 ～ 50cm 程度である。溝の覆土はしまりがかなり強いにぶい黄褐色粘質土を主体とし、黄褐色砂を多く含む（第 1-184 図・9 層）。掘方底面には地固めと考えられる礫が、三隅と東西方向の



第 1-180 図　H-2 区 1 面の遺構（8）（1/40）



第 1-181 図　H-2 区 2 面の遺構（1）（1/60）



第 1-182 図　H-2 区 2 面の遺構（2）（1/60）

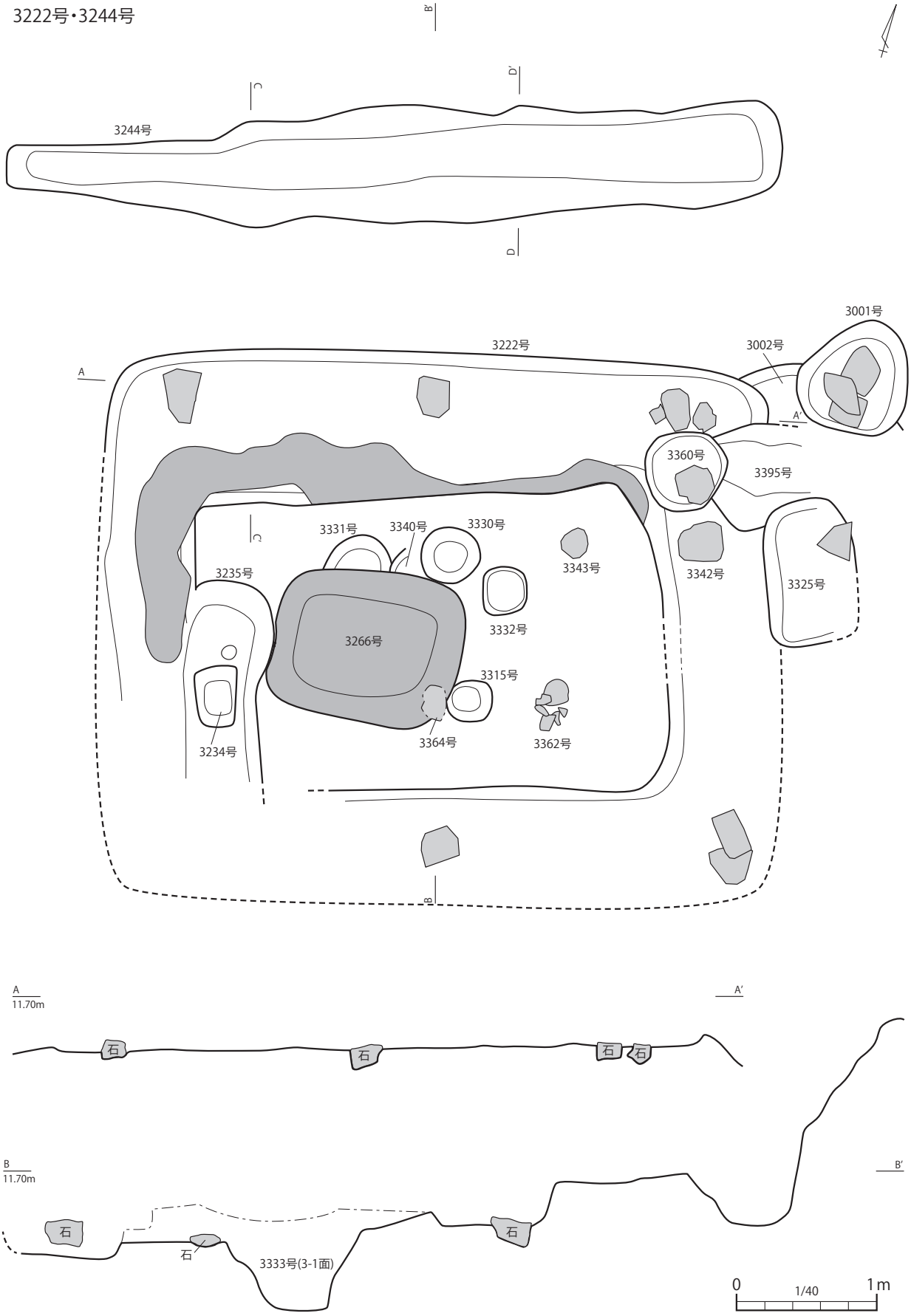
3240 号
1：10YR5/2(灰黄褐色) しまり：強い　粘性：弱い　ローム粒 15 ～ 25%
ロームブロック 15 ～ 25%　砂 30 ～ 50%　焼土粒φ 2 ～ 8mm1 ～ 3%
炭化物粒φ 1 ～ 8mm1 ～ 3%　細礫 15 ～ 25%　中礫φ 4 ～ 10mm5 ～ 10%　粘土 1 ～ 3%
砂・ローム混合層　瓦片を少量含む
2：10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり：強い　粘性：あり　ローム粒 15 ～ 25%
砂 15 ～ 25%　焼土粒φ 1 ～ 5mm1 ～ 3%　炭化物粒φ 1 ～ 5mm1 ～ 3%　細礫 1 ～ 3%
中礫φ 4 ～ 8mm1 ～ 3%　粘土 15 ～ 25%　砂・粘土・ローム混合層　北側下位で炭増量
3：10YR4/2(灰黄褐色) しまり：あり　粘性：弱い　ローム粒 5 ～ 10%　砂 15 ～ 25%
焼土粒φ 1 ～ 10mm15 ～ 25%　炭化物粒φ 1 ～ 10mm15 ～ 25%
炭化物ブロックφ 10 ～ 20mm15 ～ 25%　粘土 15 ～ 25%　4 層に類似する粘質土層
焼土は特に下位に多い
4：10YR4/2(灰黄褐色) しまり：強い　粘性：あり　ローム粒 5 ～ 10%　砂 5 ～ 10%
焼土粒φ 1 ～ 8mm1 ～ 3%　炭化物粒φ 1 ～ 5mm5 ～ 10%　細礫 1 ～ 3%
中礫φ 4 ～ 8mm1 ～ 3%　粘土 15 ～ 25%　粘質土
5：10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり：強い　粘性：あり　砂 15 ～ 25%
焼土粒φ 1 ～ 5mm1 ～ 3%　炭化物粒φ 1 ～ 5mm1 ～ 3%　細礫 1 ～ 3%
粘土 5 ～ 10%　2 層に類似
6：2.5Y4/1(黄灰色) しまり：強い　粘性：強い　ローム粒 5 ～ 10%　砂 15 ～ 25%
焼土粒φ 1 ～ 5mm1 ～ 3%　炭化物粒φ 1 ～ 10mm5 ～ 10%　粘土 50%～　粘土主体層
7：10YR4/3+2.5Y4/1(にぶい黄褐色＋黄灰色) しまり：強い　粘性：あり
ローム粒 5 ～ 10%　ロームブロックφ 10 ～ 50mm15 ～ 25%　砂 15 ～ 25%
焼土粒φ 1 ～ 10mm1 ～ 3%　炭化物粒φ 1 ～ 5mm1 ～ 3%　粘土 15 ～ 25%
被熱瓦を含む　ローム土には TP を含む
8：10YR3/2(黒褐色) しまり：強い　粘性：強い　焼土粒φ 1 ～ 5mm1 ～ 3%
炭化物粒φ 1 ～ 8mm15 ～ 25%　細礫 1 ～ 3%　中礫φ 4 ～ 20mm15 ～ 25%
9：10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり：強い　粘性：あり　ローム粒 5 ～ 10%
ロームブロックφ 10 ～ 30mm15 ～ 25%　砂 15 ～ 25%　焼土粒φ 1 ～ 5mm1 ～ 3%
炭化物粒φ 1 ～ 8mm1 ～ 3%　粘土 30 ～ 50%　ローム＋砂主体層
10：10YR3/1(黒褐色) しまり：強い　粘性：強い　砂 5 ～ 10%　焼土粒φ 1 ～ 5mm1 ～ 3%
炭化物粒φ 1 ～ 10mm15 ～ 25%　炭化物ブロックφ 10 ～ 20mm15 ～ 25%　細礫 1 ～ 3%
中礫φ 4 ～ 10mm1 ～ 3%　粘土 30 ～ 50%　粘土層　下位は貝類（ハマグリ）多く含む
11：2.5YR4/8(赤褐色) しまり：やや弱い　粘性：やや弱い　ローム粒 1 ～ 3%　砂 5 ～ 10%
焼土粒φ 1 ～ 10mm50%～　炭化物粒 5 ～ 10%　粘土 1 ～ 3%
3040 号上層 (焼土層) から連続する被熱瓦を含む焼土＋灰層　暗褐色土中量含む
12：10YR3/1(黒褐色) しまり：あり　粘性：強い　焼土粒 1 ～ 3%　炭化物粒 1 ～ 3%
粘土 5 ～ 10%　均質
13：10YR3/1(黒褐色) しまり：強い　粘性：強い　砂 15 ～ 25%　焼土粒 1 ～ 3%
炭化物粒φ 5 ～ 10mm15 ～ 25%　炭化物ブロックφ 10 ～ 20mm15 ～ 25%
細礫 5 ～ 10%　粘土 30 ～ 50%　10 層に類似する粘土層　炭・灰がラミナ状に入る
陶磁器類・瓦・貝（ハマグリ等）は上位に多い
14：10YR4/1(褐灰色) しまり：強い　粘性：強い　焼土粒φ 1 ～ 5mm1 ～ 3%
炭化物粒 5 ～ 10%　炭化物ブロックφ 10 ～ 20mm5 ～ 10%　粘土 30 ～ 50%　粘土層
15：2.5Y4/1(黄灰色) しまり：強い　粘性：強い　砂 30 ～ 50%　焼土粒 5 ～ 10%
炭化物粒φ 5 ～ 10mm15 ～ 25%　炭化物ブロックφ 10 ～ 20mm15 ～ 25%
中礫φ 4 ～ 20mm15 ～ 25%　粘土 30 ～ 50%　粘土＋砂主体層
上位に砂、下位に炭化物主体土がラミナ状に堆積　貝（ハマグリ・シジミ等）多量、
陶磁器類・瓦・漆喰中量含む
16：2.5Y4/1(黄灰色) しまり：強い　粘性：強い　焼土粒 1 ～ 3%
炭化物粒φ 5 ～ 10mm5 ～ 10%　炭化物ブロックφ 10 ～ 25mm5 ～ 10%
細礫 5 ～ 10%　中礫φ 4 ～ 15mm5 ～ 10%　粘土 30 ～ 50%　粘土＋砂主体層
15 層にほぼ同じであるが、貝類極多量に含む
17：2.5Y4/1(黄灰色) しまり：あり　粘性：強い　焼土粒 1 ～ 3%
炭化物粒φ 5 ～ 10mm5 ～ 10%　炭化物ブロックφ 10 ～ 30mm5 ～ 10%
細礫 5 ～ 10%　中礫φ 4 ～ 10mm5 ～ 10%　粘土 30 ～ 50%　粘土層
陶磁器類・貝類を多量、灰を中量含む
18：5Y4/2(灰オリーブ色) しまり：やや強い　粘性：強い　ローム粒 5 ～ 10%
砂 5 ～ 10%　炭化物粒φ 5 ～ 10mm5 ～ 10%　中礫φ 10~40mm15 ～ 25%
グライ化し黒変した粘土層　瓦細片・破砕貝を少量含む
19：5Y4/2(灰オリーブ色) しまり：あり　粘性：強い　ローム粒 5 ～ 10%　砂 15 ～ 25%
炭化物粒φ 5~10mm15 ～ 25%　炭化物ブロックφ 10 ～ 20mm15 ～ 25%
細礫 5 ～ 10%　グライ化し黒変した粘土層で 18 層に類似
瓦細片・破砕貝を少量含み、18 層より砂・木材が増加する
20：5Y4/2(灰オリーブ色) しまり：強い　粘性：強い　砂 5 ～ 10%
炭化物粒φ 5 ～ 10mm5 ～ 10%　細礫 15 ～ 25%
グライ化し黒変した粘土層で 19 層に類似　灰・瓦を含む
貝類は局所的な出土でやや少ない
21：2.5Y4/2(暗灰黄色) しまり：強い　粘性：強い　ローム粒 1 ～ 3%　砂 30 ～ 50%
焼土粒 1 ～ 3%　炭化物粒 5 ～ 10%　粘土 15 ～ 25%　粘土層
砂・炭・木材ラミナ状に堆積　貝微量、瓦・陶磁器類含む
22：5Y4/2(灰オリーブ色) しまり：強い　粘性：強い　ローム粒 5 ～ 10%
砂 30 ～ 50%　焼土粒 5 ～ 10%　炭化物粒 1 ～ 3%　粘土 30 ～ 50%
地山の盛土層（砂質粘土）崩落土と思われる
23：2.5Y3/3(暗オリーブ褐色) しまり：極強　粘性：強い　砂 30 ～ 50%
炭化物粒φ 1 ～ 5mm1 ～ 3%　粘土 15 ～ 25%　均質な粘土層
24：5Y4/2(灰オリーブ色) しまり：強い　粘性：強い　砂 5 ～ 10%
炭化物粒φ 2 ～ 8mm5 ～ 10%　粘土 50%～　グライ化した粘土層
基調となる粘土以外の色調の灰色粘土をブロック状に含む
瓦片・陶磁器類を少量含む
25：5Y3/1(オリーブ黒色) しまり：強い　粘性：あり　砂 30 ～ 50%
炭化物粒 5 ～ 10%　粘土 30 ～ 50%　粘土＋砂主体層で、木っ端・木材が集中
貝類（シジミ・アサリ等）は減少し散在する
26：2.5Y2/1(黒色) しまり：あり　粘性：強い　砂 15 ～ 25%　炭化物粒 1 ～ 3%
粘土 30 ～ 50%　泥炭質の粘土主体層
27：2.5Y5/2(暗灰黄色) しまり：弱い　粘性：強い　ローム粒φ 1 ～ 10mm5 ～ 10%
ロームブロックφ 10 ～ 15mm5 ～ 10%　砂 50%～　炭化物粒 1 ～ 3%
粘土 30 ～ 50%　脆弱な砂＋粘土主体層で、下位に木材多く含む
28：5Y3/1(オリーブ黒色) しまり：強い　粘性：強い　ローム粒 1 ～ 3%　砂 15 ～ 25%
粘土 50%～　底面直上の均質な混砂粘土層

溝の中心で計 5 基検出されたが、南西隅の礎石は失われていた。礫の中には緑色凝灰岩製の間知石も混ざっていた。3222 号北面溝より南側には貼床状の粘土層が認められ、その上に黒色砂、黄灰色砂、焼土を多く含む暗褐色土、灰色粘土粒が多く含まれる暗灰黄色土が薄く互層状に堆積しており、貼床状の粘土層も含め、3222 号の構築以前に 2 面下に施された部分的な盛土と考えられる。なお、この盛土下で 3333 号（溝）が検出されている（第 1-183 図）。溝で囲まれた内側にはピットや小規模な礎石があるが、3222 号に伴うものかは確認できなかった。また、粘土が充填された土坑（3266 号）が検出されたが、これは 3222 号の基礎とは軸を違えており、伴うものではないと判断した。溝覆土の上には灰黄褐色粘土粒を多く含む灰黄褐色土層（1 面盛土の一部・第 1-184 図・SPD-D’ 4 層）が薄く堆積しており、同じ土層が北側に隣接する 3244 号溝覆土の上にも堆積している。F-1 区の 464 号土蔵基礎と異なり、3222 号は溝のみを残して上面はかなり平坦な面となっていることから、1 面の盛土地業時に土蔵駆体はきれいに取り除かれたものと考えられる。出土遺物は 554 点・32,603.5g で 19 世紀第 1 四半期以降が主体となり、2 面の中では新しい時期に属している。

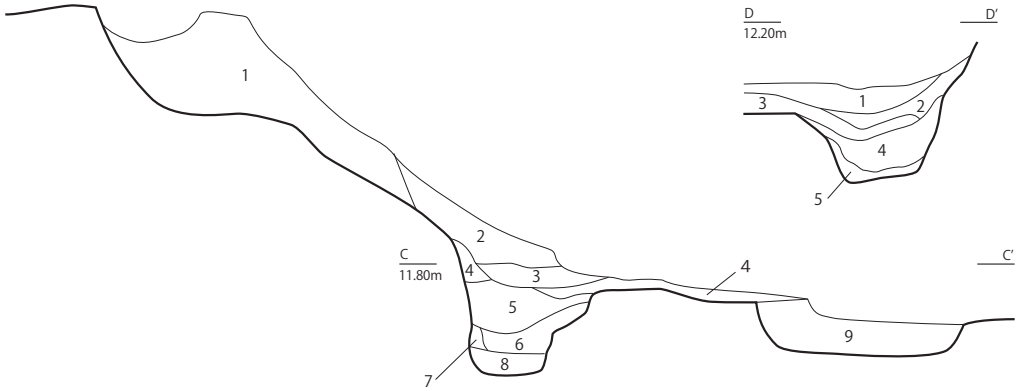
【土坑】

3185 号（第 1-173 図、図版 3-64-2・3-65-2、第 3-16 表）

2 面から屋敷地境で検出された堀状の不整長方形土坑で、東側には 2.2 mの間隔を空けて同規模の 3240 号が、西側には 2m 程度の間隔を置いて 1166 号が隣接する。底面は規模は長軸 13.5 m、短

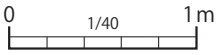


第 1-183 図　H-2 区 2 面の遺構（3）（1/40）



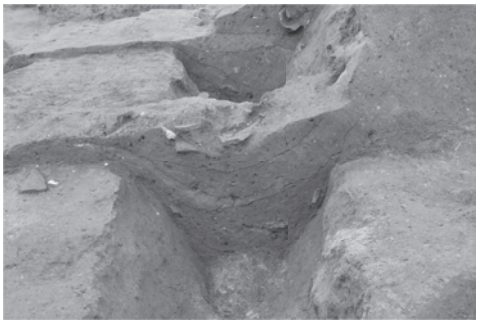
3222号・3244号(SPC-C′)
1:10YR4/4(褐色)　しまり:強い　粘性:極強　ローム粒φ1～3mm3%　黄褐色砂5%　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ1～5mm5%　黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒φ3～5mm10%
2:10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:強い　粘性:あり　ローム粒φ1～5mm5%　黄褐色砂φ1～5mm5%　焼土粒φ1～3mm5%　炭化物粒φ1～5mm7%　灰黄色粘土粒φ3～7mm10%
3:5Y5/1(灰色)　しまり:極強　粘性:あり　灰色粘土(砂質)主体
4:10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:弱い　粘性:あり　ローム粒φ1～5mm3%(斑紋状)　灰黄色粘土粒φ3～5mm10%　焼土粒φ1～5mm5%　炭化物粒φ3～10mm5%
5:10YR5/4(にぶい黄褐色)　しまり:強い　粘性:強い　黄褐色砂20%　炭化物φ1～3mm3%
6:2.5Y4/6(オリーブ褐色)　しまり:極強　粘性:弱い　ローム粒φ1～5mm5%(斑紋状)　黄褐色砂粒φ1～10mm10%　黄灰色砂粒φ3～10mm7%　焼土粒φ1～5mm2%　炭化物粒φ1～3mm5%　灰黄色粘土粒φ3～5mm3%
7:10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:弱い　粘性:あり　ローム粒φ1～5mm5%　焼土粒φ1～2mm2%　炭化物粒φ1～3mm2%　灰黄色粘土粒φ3～5mm15%
8:10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:強い　粘性:あり　黄褐色砂3%　炭化物粒φ1mm1%
9:10YR5/4(にぶい黄褐色)　しまり:強い　粘性:強い　黄褐色砂20%　炭化物粒φ1～3mm3%

3244号(SPD-D′)
1:10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:強い　粘性:あり　ローム粒φ1～5mm5%　黄褐色砂粒粒φ1～5mm5%　焼土粒φ1～5mm5%　炭化物粒φ1～5mm7%
灰黄褐色粘土粒φ3~7mm10%
2:10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:強い　粘性:あり　ローム粒φ1～5mm2%　黄褐色砂3%　焼土粒φ1～2mm2%　炭化物粒φ1～3mm3%
3:5Y5/1(灰色)　しまり:極強　粘性:あり　灰色粘土(砂質)主体
4:10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:弱い　粘性:あり　ローム粒φ1～5mm5%　焼土粒φ1～5mm5%　炭化物粒φ3～10mm5%　灰黄色粘土粒φ3～5mm10%
5:10YR5/4(にぶい黄褐色)　しまり:強い　粘性:強い　黄褐色砂20%　炭化物粒φ1～3mm３%

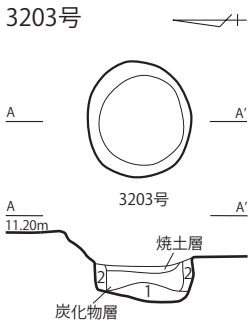




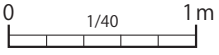
1.　3222号・3244号全景(東から)



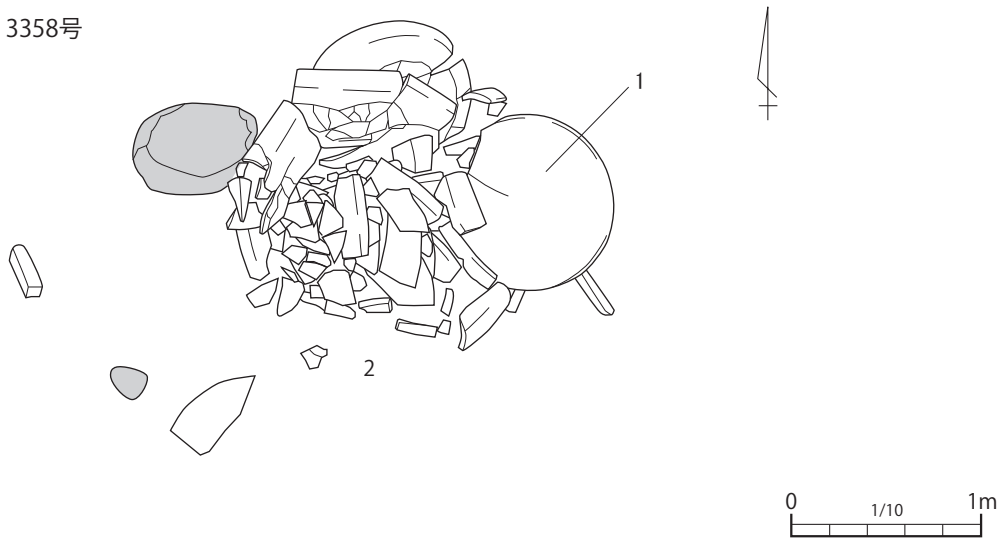
2.　3244号土層断面(SPD-D′)(東から)



1：2.5Y5/1(黄灰色)　黄灰色砂主体　しまり：あり　粘性：強い
2：10YR5/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：あり　黄灰色砂 5%　褐灰色 (10YR6/1) 粘土粒φ3 ～ 7mm20%
炭化物粒φ1 ～ 10mm5%　木質 15%　部分的に砂質土　褐灰色土がマトリクス

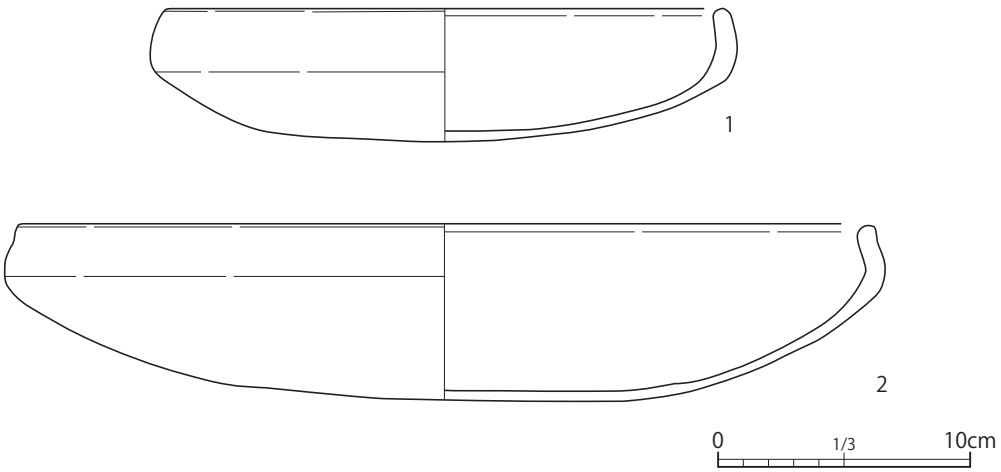


第 1-184 図　H-2 区 2 面の遺構（4）(1/40)




1.　3358号遺物出土状況上層(南から)


2.　3358号遺物出土状況下層(南から)



第 1-185 図　H-2 区 2 面の遺構（5）（1/3・1/10）

軸 3.72m、深さ 2.19 mを測る。壁面は西側がやや緩やかに立ち上げるが、他はほぼ垂直に立ち上がるが、西壁のみやや緩やかである。底面は全体的に起伏が少なく東側へと下がり、東端で一段段差を有する（比高 0.3 m）。一段下がった東壁から北壁の立ち上がり際に沿って幅狭の溝がＬ字形に巡る。覆土は上層 3040 号の北側から流れ込む堆積を示すが、全体として陶磁器類・貝類・木材・炭化物など遺物を多く包含する薄い廃棄層が重層的な堆積を示す。出土遺物は 10,914 点･793,250.1g である。陶磁器類は多量かつ遺存状態も良好で、屋号等を記した墨書資料が多く、中国磁器、鍋島藩窯製品が目立つ点が特徴的である。

3240 号（第 1-182 図、図版 3-65-1、第 3-16 表）

3185 号の東隣の屋敷地境で検出された堀状の不整長方形を呈する土坑である。長軸 9.11 m、幅 3.49 m、深さ 1.25 mを測る。3169 号、3678 号、3679 号を切る。底面は平坦、壁面は垂直に立ち上がり上端付近で外反する。断面箱形を呈する。覆土は上位には 3040 号覆土が北側から流れ込むような一連の堆積が見られ、下位は多量の遺物や炭化物・灰を含むグライ化した粘土層で、下底面付近は泥炭化し、木製品を含む建築土木材が大量に集積していた。南西側の壁際に沿って人頭大の円礫・亜円礫が多量に出土した。礎石ないし石垣根石に使用されていたものと考えられる。出土遺物は 3,270 点 180,278.4g　南壁際付近に大型の礫が多数集中する。安山岩を主体とし、一部に被熱した破砕礫を含む。陶磁器類・木製品が多く、瓦は少ない。安永 3 年（1773）の紀年銘を有する墨書木札（第 2-200 図 100）が共伴する。廃絶年代は紀年銘資料と陶磁器類の年代観から 18 世紀第 4 四半期と推定される。

3266 号（第 1-183・184 図、第 3-16 表）

3222 号（土蔵基礎）の掘方溝で囲まれた内側に位置する土坑である。平面は東西にやや長い長方形を呈し、規模は長軸 1.32m、短軸 1.08m、深さ約 30cm である。断面は皿状を呈する。内部には灰黄褐色粘土が充填されており、しまり、粘性とも極強い。この粘土は、3222 号周辺に施された貼床状の粘土とほぼ同じである。3266 号は 3222 号との関連を念頭に調査を進めたが、軸方向が土蔵基礎の軸方向とはずれること、覆土も異なることから別の遺構と考えた。出土遺物は 17 点･3,077.0g と極わずかで、時期は不明である。

3678 号（第 1-182 図、第 3-16 表）

不整楕円形の土坑で、長軸 1.28 m以上、短軸 1.49 m、深さ 0.80 mを測る。3629 号に切られ、3679 号、3680 号を切る。全体的にやや起伏に富み、壁面は垂直に立ち上がる。出土遺物は獣骨を含む 19 点・1,905.9g である。

3679 号（第 1-182 図、第 3-16 表）

南側を大きく 3240 号に切られるため不詳ながら、長軸 3.13 m以上、短軸 0.71 m以上、深さ 0.39 mを測る。3240 号以外にも 3169 号、3678 号に切られ、3680 号を切る。底面は起伏に富む。出土遺物は 19 点・550.3g である。

3680 号（第 1-182 図、第 3-16 表）

不整形な土坑で、長軸 5.06 m以上、短軸 1.79 m以上、深さ 0.73 mを測る。3240 号、3678 号、3679 号に切られる。全体的に起伏に富む。下底面付近には拳～人頭大の円礫・破砕礫が複数散乱した状態であった。出土遺物は 132 点・9,719.6g で、陶磁器類は少量で遺存状態は中程度で、廃絶年

代は陶磁器類の年代観から 18 世紀第 4 四半期と推定され、上位にあたる 1 面 3040 号と時期差がほとんどない。

【遺物集中】

3358 号（第 1-185 図、第 3-16 表）

3358 号は H-2 区の北から南へと傾斜する斜面部、1 面の遺構 2100 号の底面から検出された遺物集中部である。2100 号の下部は、北側の旗本成瀬家屋敷地と南側の旗本保科家屋敷地との境界にあたる斜面となっている。3358 号は斜面の中ほどで確認した。おそらく、斜面へと不要になったものを投棄した痕跡と考えられる。3358 号から出土した遺物を接合した結果、4 枚の焙烙で構成されていたことが明らかになった。出土した焙烙は径の小さいもの（径 24cm）と大きいもの（径 34cm）がそれぞれ 2 個体ずつであり、18 世紀第 4 四半期以降と考えられる。出土遺物の点数、重量は 192 点、3,734.9g である。

【溝】

3244 号（第 1-183・184 図、第 3-16 表）

H-2 区南東に位置する溝である。調査区内に残る段差（2100 号北壁）の下端に沿って掘られた溝だが、東西端とも立ち上がりが確認されている。規模は長さ 5.55m、上面の幅 0.84m・底面の幅 0.4 mで、深さ 0.6m である。壁は北側がほぼ直に、南側は途中に段がついて立ち上がる。覆土は、2 面盛土（同図 SPC-C’ 1 ～ 4 層、SPD-D’ 1 ～ 3 層）の下に堆積し、上層（同図 SPC-C’ 5 ～ 7 層、SPD-D’ 4 層）・下層（同図 SPC-C’ 8 層、SPD-D’ 5 層）に分類できる。上層は東側ではしまりの弱い灰黄褐色土、西側では締まりの強い黄褐色土・灰オリーブ褐色土を主体としており、覆土が部分的に異なっている。底面は黄褐色砂を多く含む黄褐色土が堆積していた。3244 号から 3222 号の周辺には、2 面盛土に相当する貼床状の粘土層や部分的な盛土層が見られ、複雑な堆積状況を示している。また、遺構上面にも 1 面盛土に相当する粘土層や盛土層が見られ、遺構の構築前・廃絶後に断続的に盛土地業が行われたものと考えられる。出土遺物は 407 点、総重量 37,259.7g で 18 世紀第 4 四半期を主体とする。

C　3-1 面

H-2 区 2 面は F-1 区 3-1 面や H-1 区 3-1 面および G-1 区 3 面・G-2 区の 2 面に対応し、H-2 区の北側は旗本成瀬家、南側は旗本保科家屋敷の時期にあたる。

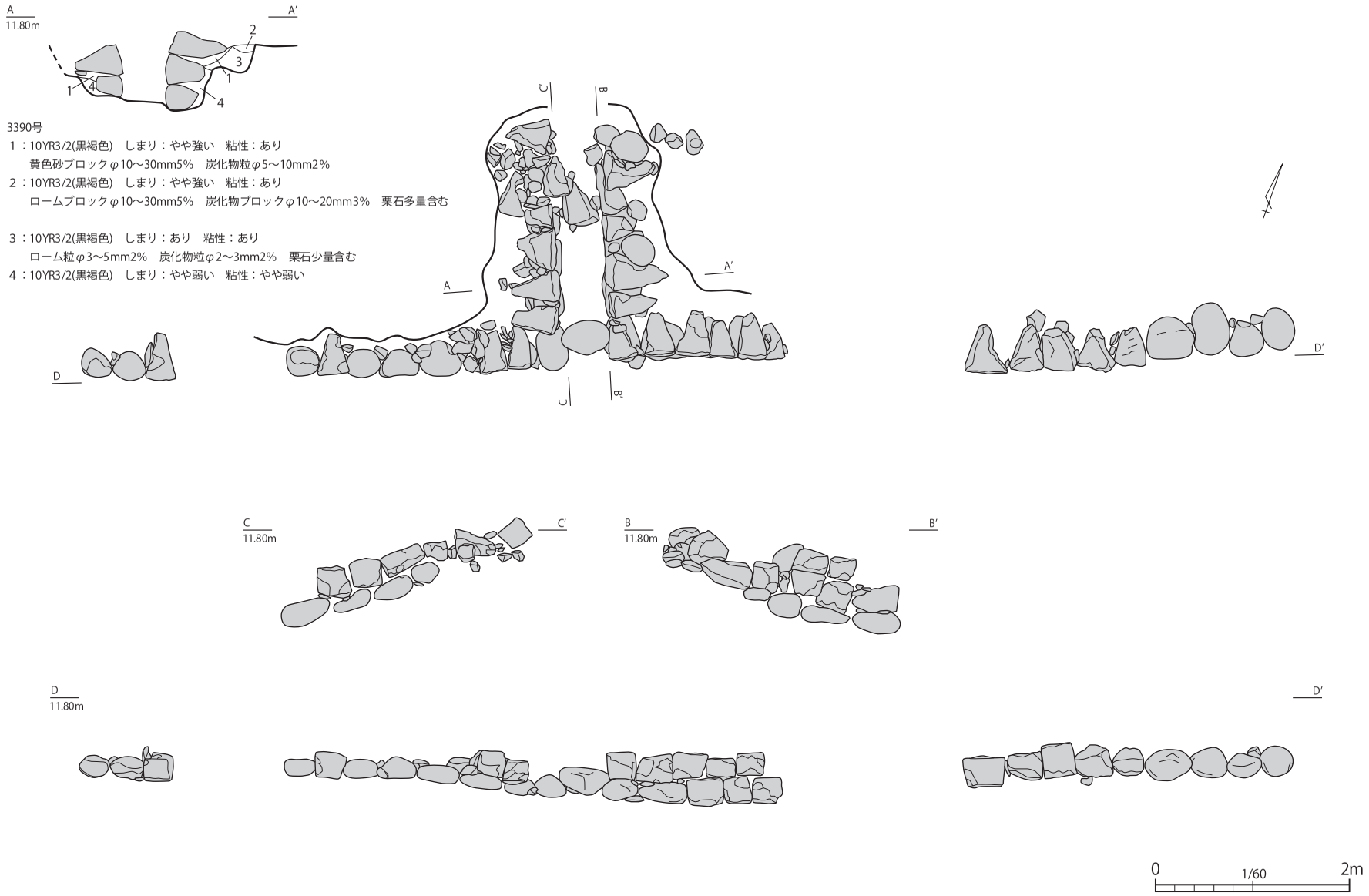
3-1 面は 1 面・2 面と同様に北西から南東へ緩やかに傾斜しているが、旗本鳥居家と旗本保科家の屋敷境にあたる部分では再び石垣（3390 号）を確認した。旗本保科家の屋敷地内に入ると再び緩やかな傾斜へと戻る。H-2 区北側では、廃棄土坑が屋敷境付近に集中する状況が確認された。石垣の南側では焼土層が広がり、溝、地下室、埋桶などが確認されているほか、石垣の周辺からは埋葬された可能性のあるイヌの全身骨格などが検出されている。

3-1 面からは、石垣 1 基、地下室 2 基、段切り 1 基、溝 11 条、礎石 26 基、礎石跡 1 基、石敷 1 基、集石 1 基、埋桶 8 基、イヌ埋葬跡 5 基、土坑 28 基、落ち込み 1 基、ピット 36 基、焼土層 2 基、炭化物層 1 基、火山灰層 1 基、粘土層 1 基、盛土層 1 基、硬化面 1 基、遺物集中 1 基、炭化物集中 1 基、石 4 基が検出された。

【石垣】

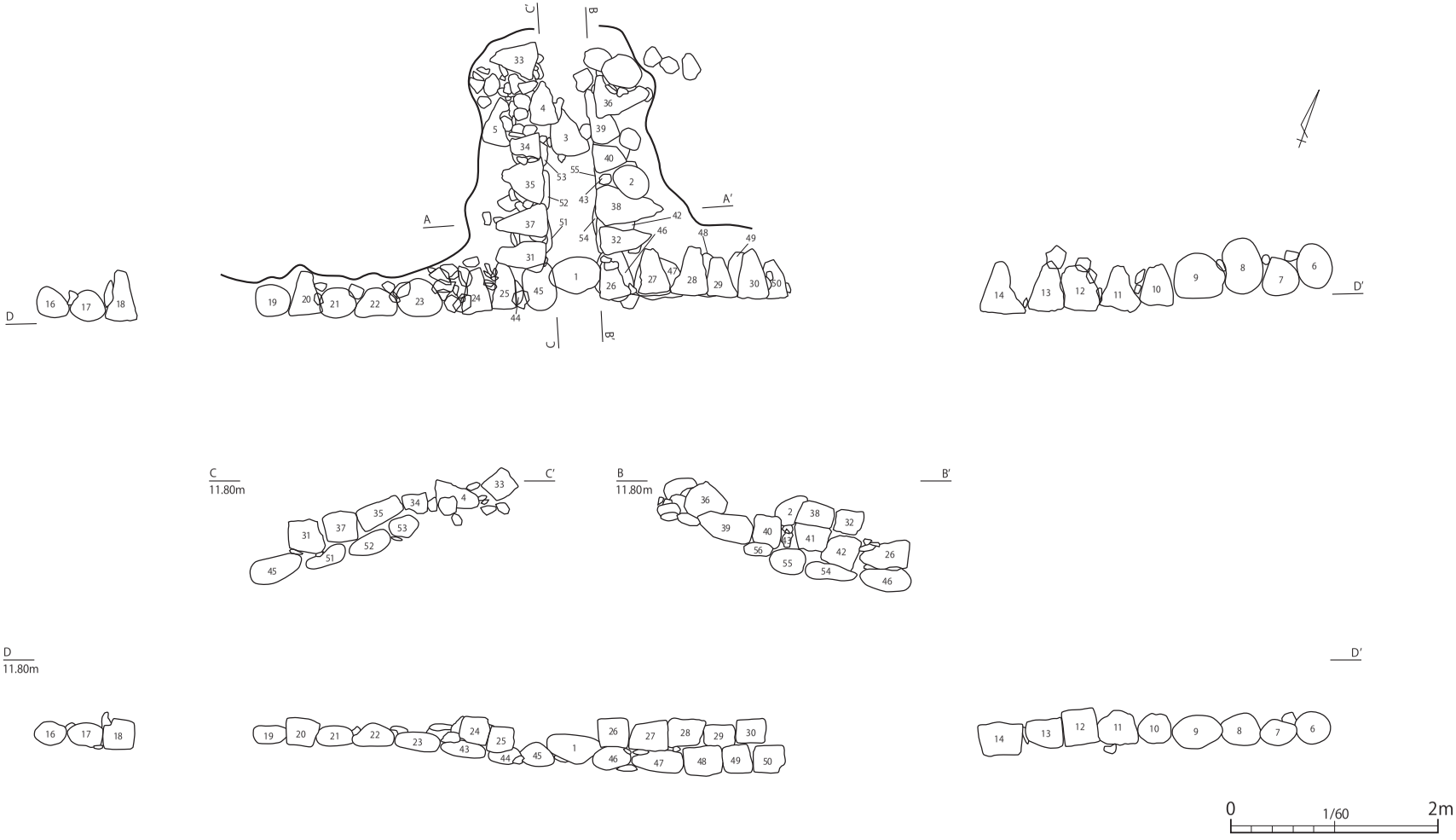
3390 号（第 1-186・187 図、第 1-6 表、図版 3-65-3 ～ 4、第 3-16 表）

3390号



第 1-186 図　H-2 区 3-1 面の遺構（1）（1/60）

3390号



第 1-187 図　H-2 区 3-1 面の遺構（２）（1/60）

第 1-5 表　第 3390 号石材一覧

石材番号	種別	法量（cm）			重量	岩石名（石材名）	備考
		縦	横	控え	(kg)		
1	丸石	36	52	25	76	安山岩	
2	丸石	29	38	14	45	安山岩	
3	間知石	30	53	22	53	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 8 × 12
4	間知石	28	42	18	25	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 5 × 7
5	間知石	24	44	27	38	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 5.5 × 13
6	丸石	31	45	33	75	安山岩？	
7	丸石	15	34	34	42	安山岩	
8	丸石	25	52	36	84	安山岩	
9	丸石	26	47	38	85	安山岩	
10	間知石	21	31	31	37	凝灰岩	
11	間知石	27	35	35	45	凝灰岩	艫面 12 × 14
12	間知石	33	31	36	69	凝灰岩	艫面 18 × 20
13	間知石	28	35	48	43	凝灰岩	
14	間知石	32	42	49	59	凝灰岩	
15	丸・割	15	29	34	30	安山岩	
16	丸・割	27	35	23	33	安山岩	
17	丸・割	17	32	30	28	安山岩	
18	間知石	24	30	48	36	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 11 × 11
19	丸・割	18	32	29	30	安山岩	
20	間知石	28	32	42	39	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 11 × 12
21	丸石	20	36	30	29	安山岩	
22	丸・割	27	39	18	30	安山岩	
23	丸石	18	43	37	50	安山岩	
24	間知石	27.5	29	45	34	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 8 × 11
25	間知石	21	25	43	32	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 17 × 13
26	間知石	28	30	51	43	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
27	間知石	30	36	43	53	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 6 × 13
28	間知石	28	36	48	46	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 10 × 12
29	間知石	20	30	39	24	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 9 × 10
30	間知石	25	30	48	40	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 8 × 11
31	間知石	31	35	51	57	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 10 × 15
32	間知石	24	27	49	33	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
33	間知石	26	30	45	34	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
34	間知石	20	24	30	14	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 9 × 15
35	間知石	22	43	41	43	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 9 × 15
36	間知石	29	40	56	56	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	小面五角形
37	間知石	31	33	48	43	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 7 × 7
38	間知石	23	36	59	63	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
39	間知石	25	55	28	52	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	横倒しで使用
40	間知石	27	27	40	37	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 9 × 16
41	間知石	25	37	51	49	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 9 × 12
42	間知石	32	33	52	54	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 8 × 10
43-1	丸・割	12	12	30	12	安山岩	
43-2	丸・割	15	40	31	31	安山岩	
44	丸石	17	35	27	27	安山岩	
45	丸石	25	33	51	66	安山岩	
46	丸石	22	25	51	74	安山岩	
47	丸石	20	46	41	61	安山岩	
48	間知石	26	38	40	46	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 10 × 8
49	間知石	28	28	44	38	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	
50	間知石	26	31	38	32	緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）	艫面 9 × 10
51	丸石	20	42	32	45	安山岩	
52	丸・割	17	43	31	37	安山岩	
53	丸・割	26	33	38	45	安山岩	
54	丸・割	25	51	40	74	安山岩	
55	切石	33	33	45	64	多孔質安山岩＊	
56	切・割	10	23	36	12	軽石＊	被熱

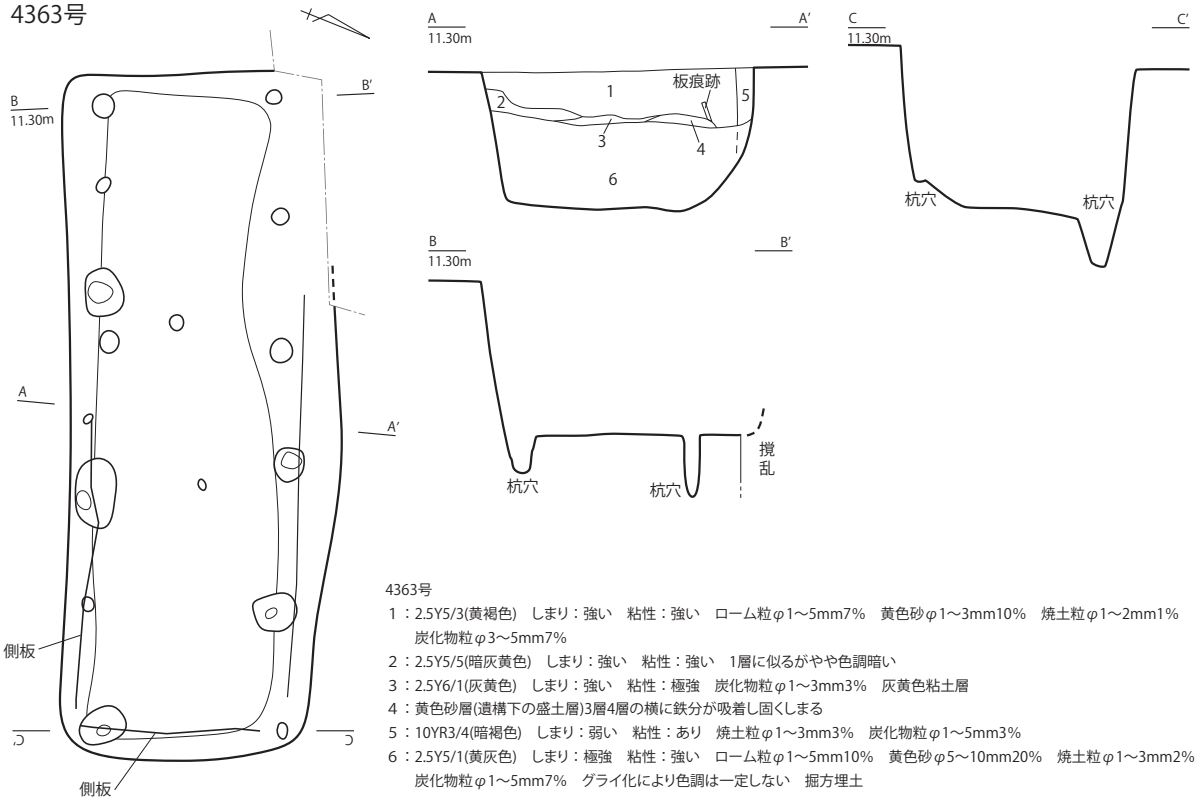
3390 号は 3-1 面における屋敷地の境界部分にあたる石垣で、近代 1 面で検出されている石垣 790 号のやや北側に位置しており、H-2 区を北側と南側の上下 2 段に段切りして区画している。石垣の平面形態は、東西に真っすぐに南北を区分しているが、中ほどで北へ伸びる石組溝状の部分が見られた。石垣は大半が 1 段目の根石が残存するのみで、石組溝状に北へ伸びる部分のみ 2 段目から 3 段目が残存していた。1 段目の根石は安山岩の丸石とが混在する状況であった。2・3 段目の築石は緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）の間知石が使用される。石垣裏込の奥行きは短く、破砕礫を含む。裏込めの覆土は 4 層に分かれるが、いずれもローム粒や砂を含む層で 2 層と 3 層は特に栗石である破砕礫を含んでいる。石垣の南北で接続する溝などの施設が確認されていないものの、幅が 50㎝程度と通路としては非常に幅が狭いため石組溝状の部分は石垣以北からの排水を目的とした施設であると考えられる。出土遺物は総点数 1,603 点、総重量 50,777.7g である。裏込め部分などからの出土遺物から遺構の年代は 18 世紀前葉に築造され、18 世紀後葉ごろに廃絶されたものと考えられる。

【地下室】

4363 号（第 1-188 図、図版 3-67-1、第 3-16 表）

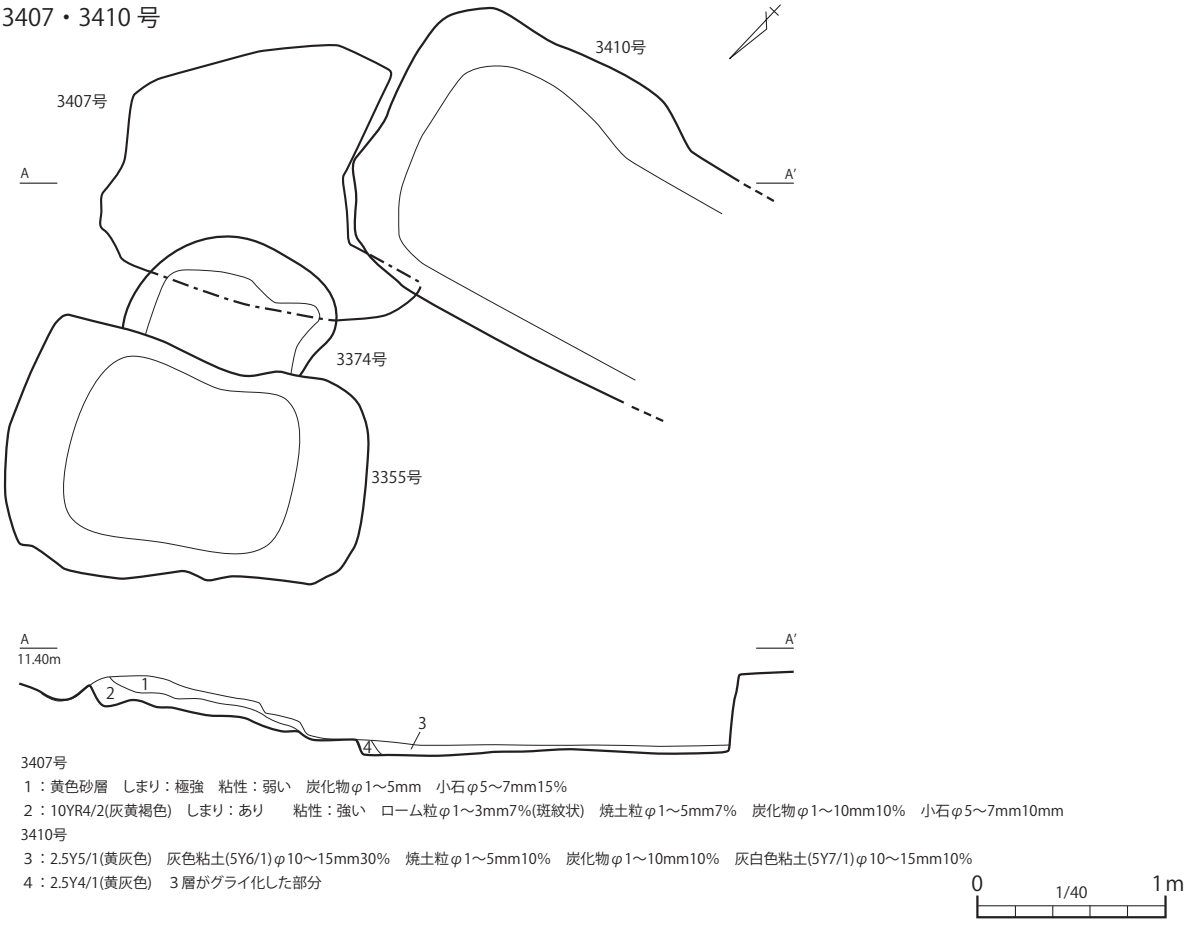
4363 号は H-2 区西端、F-1 区との境界付近に位置する長方形の地下室である。底面は一部で凹凸

4363号



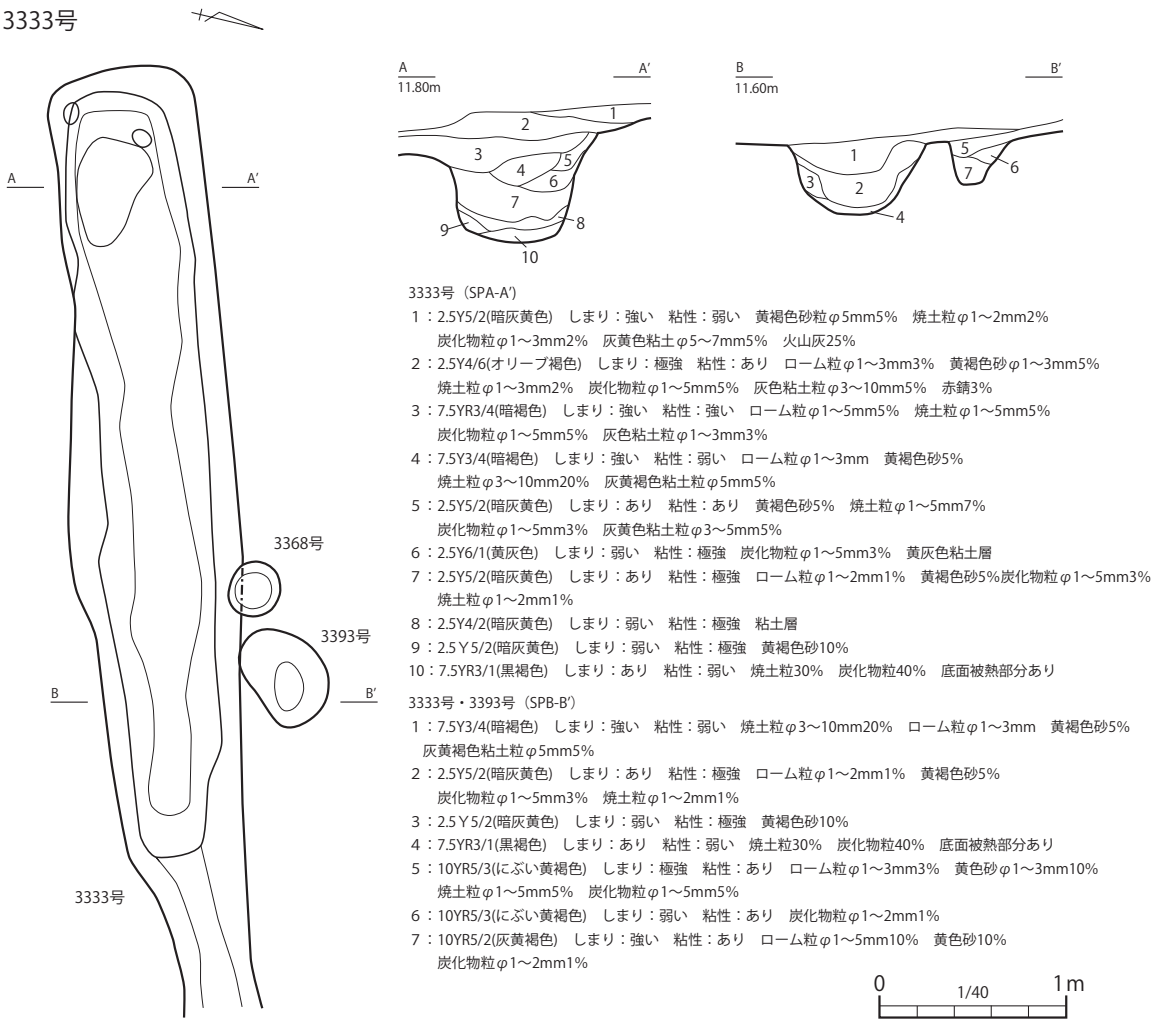
4363号
1：2.5Y5/3(黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ1～5mm7%　黄色砂φ1～3mm10%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ3～5mm7%
2：2.5Y5/5(暗灰黄色)　しまり：強い　粘性：強い　1層に似るがやや色調暗い
3：2.5Y6/1(灰黄色)　しまり：強い　粘性：極強　炭化物粒φ1～3mm3%　灰黄色粘土層
4：黄色砂層(遺構下の盛土層)3層4層の横に鉄分が吸着し固くしまる
5：10YR3/4(暗褐色)　しまり：弱い　粘性：あり　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ1～5mm3%
6：2.5Y5/1(黄灰色)　しまり：極強　粘性：強い　ローム粒φ1～5mm10%　黄色砂φ5～10mm20%　焼土粒φ1～3mm2%　炭化物粒φ1～5mm7%　グライ化により色調は一定しない　掘方埋土

3407・3410 号



3407号
1：黄色砂層　しまり：極強　粘性：弱い　炭化物φ1～5mm　小石φ5～7mm15%
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　　粘性：強い　ローム粒φ1～3mm7%(斑紋状)　焼土粒φ1～5mm7%　炭化物φ1～10mm10%　小石φ5～7mm10mm
3410号
3：2.5Y5/1(黄灰色)　灰色粘土(5Y6/1)φ10～15mm30%　焼土粒φ1～5mm10%　炭化物φ1～10mm10%　灰白色粘土(5Y7/1)φ10～15mm10%
4：2.5Y4/1(黄灰色)　3層がグライ化した部分

第 1-188 図　H-2 区 3-1 面の遺構（3）（1/40）



第 1-189 図　H-2 区 3-1 面の遺構（4）（1/40）

が見られ、壁面は真っすぐに立ち上がる。壁際を巡る側板がわずかに残存していたほか、側板を固定する杭穴も壁際を巡っているが、その間隔は不規則であった。遺構の規模は長軸が 3.7m、短軸が 1.4m であった。覆土は 6 層に分かれる。1 層から 2 層はローム粒や焼土粒、炭化物粒などを含む層、3 層は粘土層、4 層は砂層、5 層は焼土粒や炭化物粒を含む層である。6 層は掘方覆土にあたる層で、一部がグライ化していた。掘方覆土である 6 層は 1 層から 5 層以上の厚さを持つ層であることから、上部を大きく削平されているものと考えられる。出土した遺物の点数、重量は 224 点、4,690.1 g である。掘方および覆土出土の遺物から 4363 号は 17 世紀後葉以降に構築され、18 世紀第 4 四半期に廃絶されたものと考えられる。底面で検出した P4 には杭が残存しており、樹種同定の結果クリ材が使用されていたことが明らかになっている（第Ⅷ章 5 項参照）。

【土坑】

3407 号・3410 号（第 1-188 図、第 3-16 表）

3407 号は 3374 号を切り、3410 号に切られる楕円形の土坑、3410 号は方形の土坑である。両者とも H-2 区南東部に位置しており、上部を削平されていた。3407 号は底面の凹凸が顕著で、壁面はわずかに残る程度であった。3410 号の底面は平坦で、壁面は真っ直ぐに立ち上がっている。覆土は

4 層に分かれ、1 層と 2 層が 3407 号、3 層と 4 層が 3410 号の覆土にあたる。1 層は砂層、2 層はローム粒や焼土粒、炭化物粒などを含む層である。3 層は粘土を多く含む層で、4 層は 3 層がグライ化した部分である。出土遺物の点数、重量は、3407 号が 7 点、79.0g、3410 号が 117 点、3,238.7g である。

3460 号（第 1-191 図・第 3-16 表）

3460 号は長方形の土坑で、H-2 区南西部の石垣 3390 号のすぐ南に位置する。長方形の土坑である 3421 号に切られている。底面は平坦で、西側は段が付いており深くなっている。壁面はゆるやかに外に開いている。覆土は 8 層に分かれる。1 層から 3 層は粘土を多く含む層で、特に 2 層は木端を多く含む木端層である。4 層から 8 層はローム粒や焼土粒、炭化物粒などを含む層である。底面からは木製の桝が潰れた状態で出土している。出土遺物の点数、重量は 412 点、32,808.3g である。出土遺物から遺構の年代は 18 世紀中葉に位置付けられる。

3483 号（第 1-191 図、第 3-16 表）

3483 号は H-2 区南西部に位置する長方形の土坑で、3419 号や 3482 号を切る。底面は平坦で、西側の壁面はゆるやかに外に開き、東側の壁面は真っ直ぐに立ち上がっている。覆土は 7 層に分かれる。1 層と 4 層から 7 層は粘質土層、2 層と 3 層は砂質土層である。出土遺物の点数、重量は 243 点、8,569.6g である。出土遺物から遺構の年代は 18 世紀第 2 四半期ないし第 4 四半期と考えられる。

3629 号（第 1-194 図、第 3-16 表）

H-2 区南側屋敷境付近から検出された土坑で、3678 号を切り、 2 面 3240 号に東側を切られる。規模は長軸 3.90 m、短軸 2.0 m以上、深さ 0.79 mを測る。全体的に起伏を持ち、南から西壁は垂直に、北壁は緩やかに立ち上がる。覆土は 9 層に分かれる。焼土や瓦を多く含む廃棄層と瓦を含む灰色粘土が互層状に堆積する。最下層の灰色粘土層は混入物が少なく均質である。出土遺物は 353 点 25,527.9g、遺存状態が比較的良好で被熱遺物を含む。3830 号との遺構間接合資料を含む。廃絶年代は、陶磁器類の年代観から 18 世紀後葉と推測される。

【ネコ埋葬跡】

3641 号（第 1-193 図、第 3-16 表）

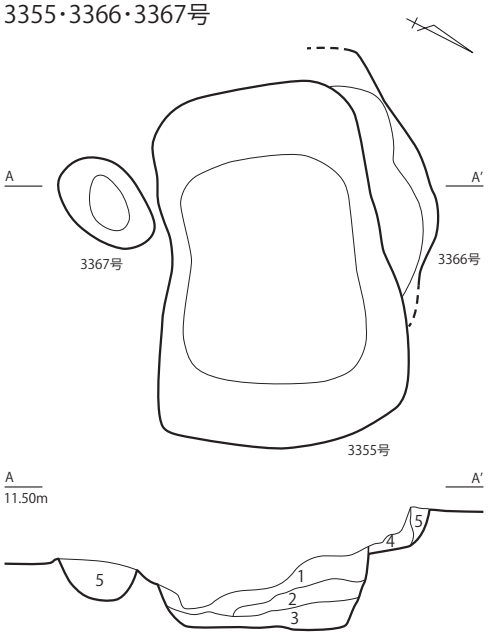
3240 号南側の屋敷地際に位置する、獣骨を含む遺物集中遺構で、掘方は判然としない。獣骨は頭部など欠失するがネコの椎骨・四肢骨等がほぼ一個体まとまって出土している。解剖学的な位置を留めていないが、埋葬跡として報告する。出土遺物は 243 点、6,039.5g と比較的多く、遺存度も良好である。無刻印の焼塩壺片を下限とし、18 世紀後葉と推測される。

【溝】

3333 号（第 1-189 図、第 3-16 表）

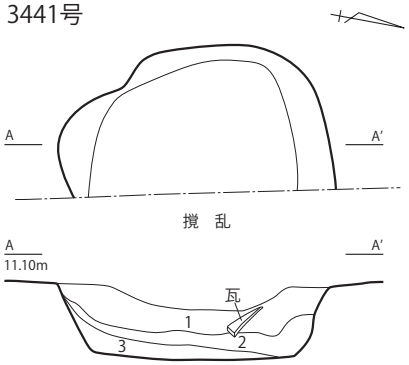
H-2 区南東に位置する溝である。3222 号（土蔵基礎）の調査後に、遺構周辺の 2 面盛土に相当する整地層（第 1-189 図 SPA-A’ 1 ・ 2 層）を掘り下げたところ、その下から東西方向に延びる溝を検出した。規模は長さ 5.06 m、幅 0.92 m、深さ 0.53 mを測り、西側では約 0.3 m程度まで浅くなる。断面は箱形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面には部分的に被熱による赤化が認められた。2 面の 3244 号溝同様に西端・東端とも立ち上がり、東端はより幅狭で浅い溝に接続している。覆土は上層（同図 SPA-A’ 4 ～ 6 層）・中層（ 7 ・ 8 層）下層（ 9 ・ 10 層）に分けられる。上層はしまりの極強い暗褐色土（ 4 層）・黄褐色砂や灰黄色粘土粒を含む暗灰黄色土（ 5 層）・黄灰色粘土（ 6 層）がブ

3355･3366･3367号



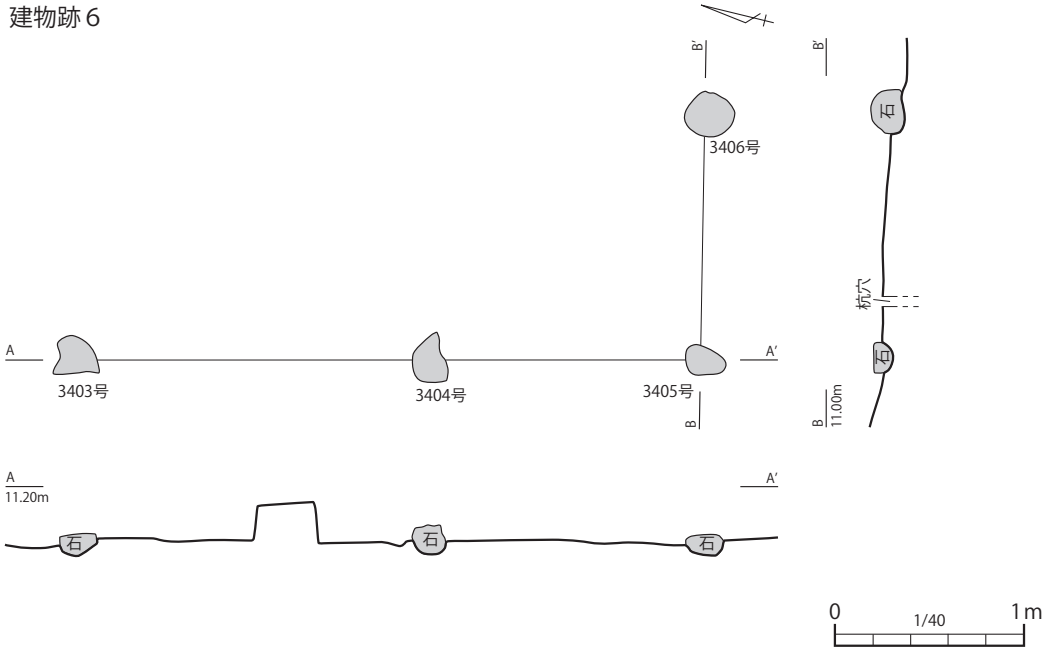
3355号・3366号・3367号
1：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ1～3mm7%　黄褐色砂7%　焼土粒φ3～5mm3%　炭化物粒φ3～7mm5%　黄灰色粘土粒φ3～10mm15%
2：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　焼土粒φ1～5mm15%　炭化物粒φ1～5mm7%
3：2.5Y4/2(暗灰黄色)　しまり：あり　粘性：強い　黄褐色砂10%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～3mm1%　黄灰色粘土粒φ1～5mm20%(粒子細)
4：7.5YR4/3(褐色)　しまり：強い　粘性：あり　焼土粒φ1～7mm15%　炭化物粒φ1～10mm7%　黄色(2.5Y6/1)粘土粒φ3～5mm7%
焼土を多く含む暗褐色土3355号3層に似るが焼土粒がより多い
5：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：極強　粘性：強い　焼土粒φ1～5mm2%　炭化物粒φ1～10mm5%　灰色(5Y5/1)粘土粒φ3～5mm10%

3441号

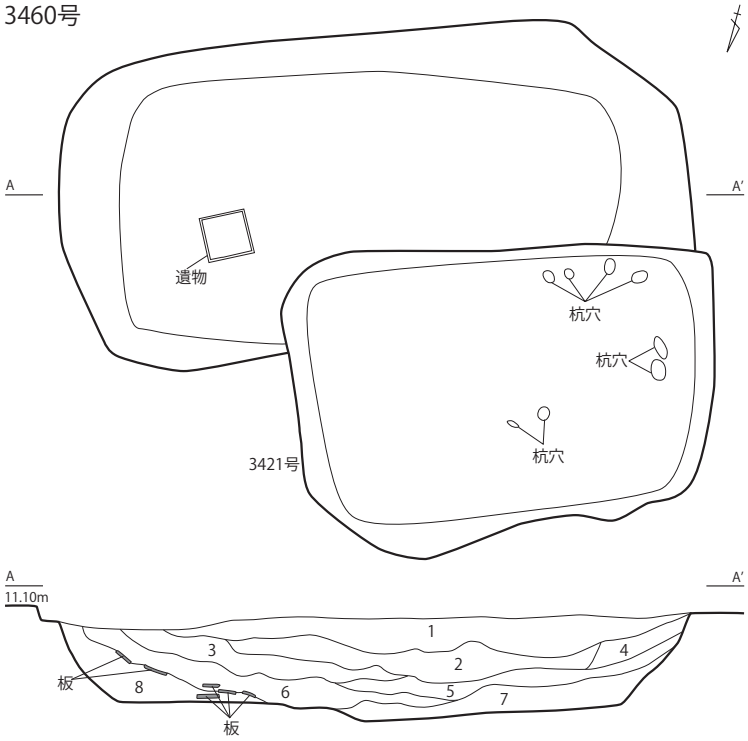


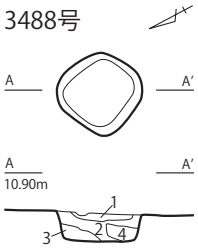
3441号
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10～20mm1%
黄色砂ブロックφ10～20mm3%　焼土粒φ2～10mm5%　炭化物粒φ5～10mm5%
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ3～5mm2%
炭化物ブロックφ10～20mm20%
3：10YR2/1(黒色)　しまり：弱い　粘性：極強　ローム粒φ1～10mm10%
焼土粒φ1～10mm10%　灰黄褐色粘質土ブロックφ10～20mm20%
炭化物集中層(層上面に特に集中)

建物跡6



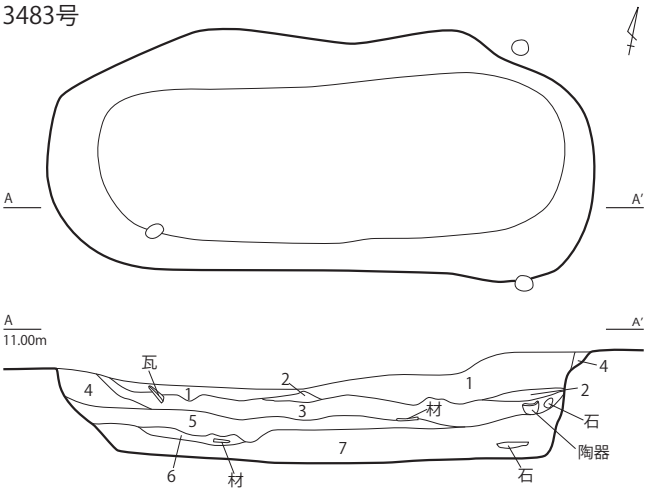
第 1-190 図　H-2 区 3-1 面の遺構（5）（1/40）

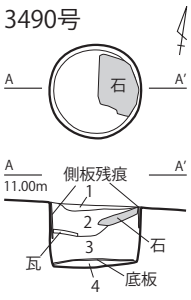




3488号
1：10YR3/1（黒褐色）　しまり：弱い　粘性：あり
黄褐色砂粒φ1～3mm5%　焼土粒φ1～2mm1%
炭化物粒φ1～10mm20%　炭化していない木端10%
小石φ10～20mm5%　木端を多く含む炭化物層
2：10YR5/2（灰黄褐色）　しまり：極強　粘性：極強
ローム粒φ1～3mm1%（斑紋状）　焼土粒φ1～3mm1%
炭化物粒φ1～5mm5%
3：10YR5/1（褐灰色）　しまり：強い　粘性：極強
ローム粒φ1～2mm1%　焼土粒φ1～2mm2%
炭化物粒φ1～3mm3%
4：10YR2/3（黒褐色）　しまり：弱い　粘性：あり
腐朽した木質の集中層

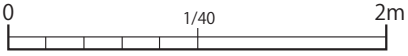
3460号
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ3～10mm2%　炭化物ブロックφ10～20mm7%　粘土ブロックφ10～20mm3%
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ3～5mm2%　炭化物ブロックφ10～50mm10%　粘土ブロックφ10～30mm3%　木端層
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10～20mm2%　炭化物ブロックφ10～30mm5%　粘土ブロックφ10～30mm5%
4：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂ブロックφ10～30mm10%　焼土粒φ5～10mm2%
5：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ1～3mm1%　炭化物ブロックφ10～30mm5%
6：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ20～30mm25%　炭化物ブロックφ10～30mm10%
7：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ2～5mm3%　炭化物ブロックφ20～30mm1%
8：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　焼土粒φ5～10mm2%　炭化物ブロックφ5～10mm2%



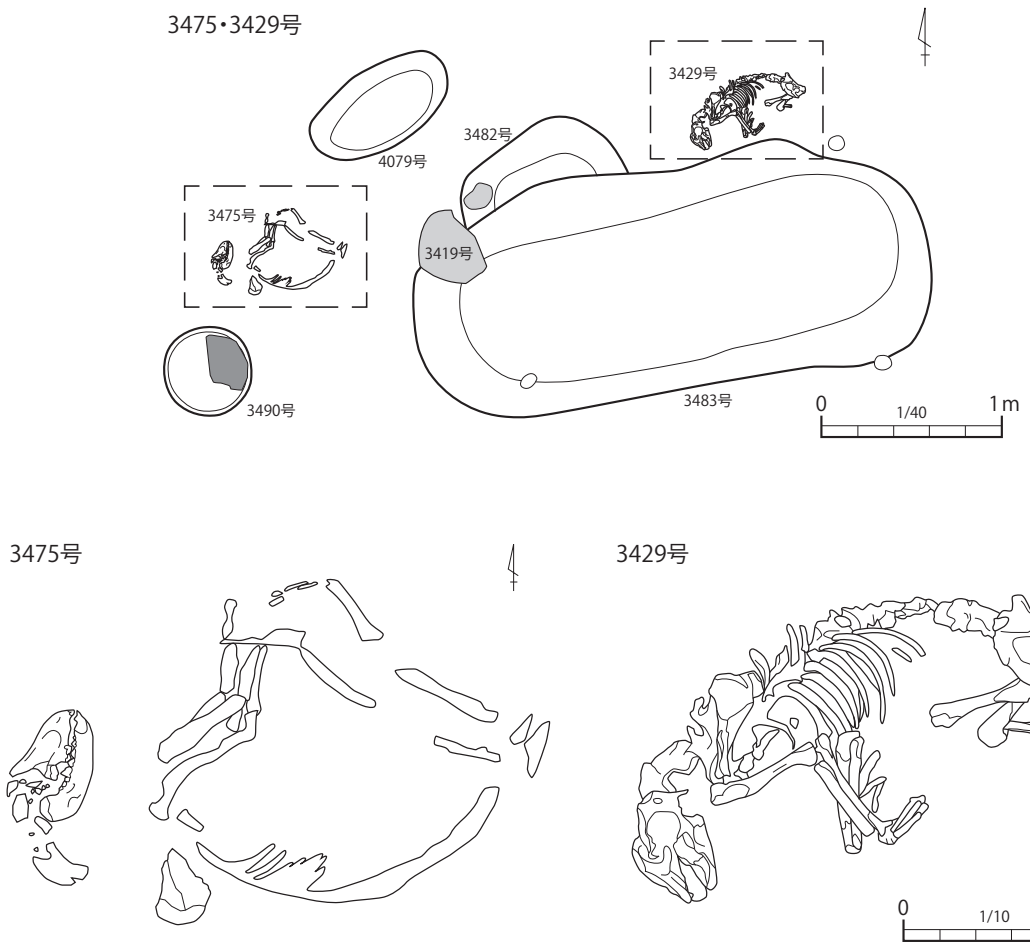


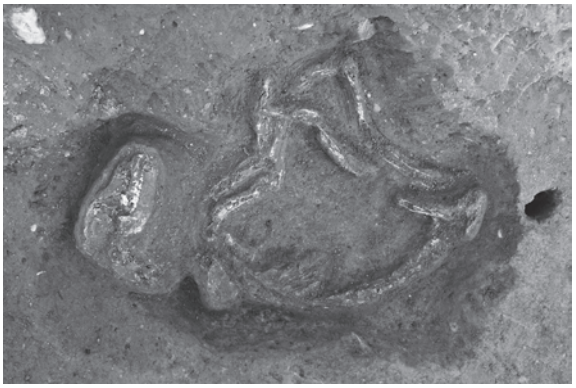
3490号
1：2.5Y5/1(黄灰色)　しまり：強い　粘性：強い　焼土粒φ1～5mm3%
炭化物粒φ1～5mm5%　暗褐色土10%
2：2.5Y5/2(暗灰黄色)　しまり：強い　粘性：極強　焼土粒φ1～2mm3%
炭化物粒φ1～3mm3%　灰色(5Y6/1)粘土粒φ3～5mm10%
3：2.5Y5/2(暗灰黄色)　しまり：あり　粘性：強い　焼土粒φ1～2mm1%
炭化物粒φ1～2mm1%
4：10YR2/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり

3483号
1：2.5Y5/2(暗灰黄色)　しまり：強い　粘性：極強　ローム粒φ1～3mm10%(斑紋状)　黄色砂5%　焼土粒φ1～5mm3%　炭化物粒φ1～5mm5%
黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒φ3～5mm5%　赤錆5%
2：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：極強　粘性：弱い　黄灰砂5%　焼土粒φ1～5mm1%　炭化物粒φ1～2mm1%　砂質土層
3：2.5Y3/2(黒褐色)　しまり：弱い　粘性：あり　ローム粒φ1～5mm10%　焼土粒φ1～3mm2%　炭化物粒φ1～5mm7%
4：2.5Y5/2(暗灰黄色)　しまり：極強　粘性：強い　ローム粒φ1～3mm10%(斑紋状)　黄褐色砂5%　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ1～3mm3%
5：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　黄褐色砂ブロックφ20～40mm5%
6：2.5Y3/1(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い
7：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い



第 1-191 図　H-2 区 3-1 面の遺構（6）（1/40）



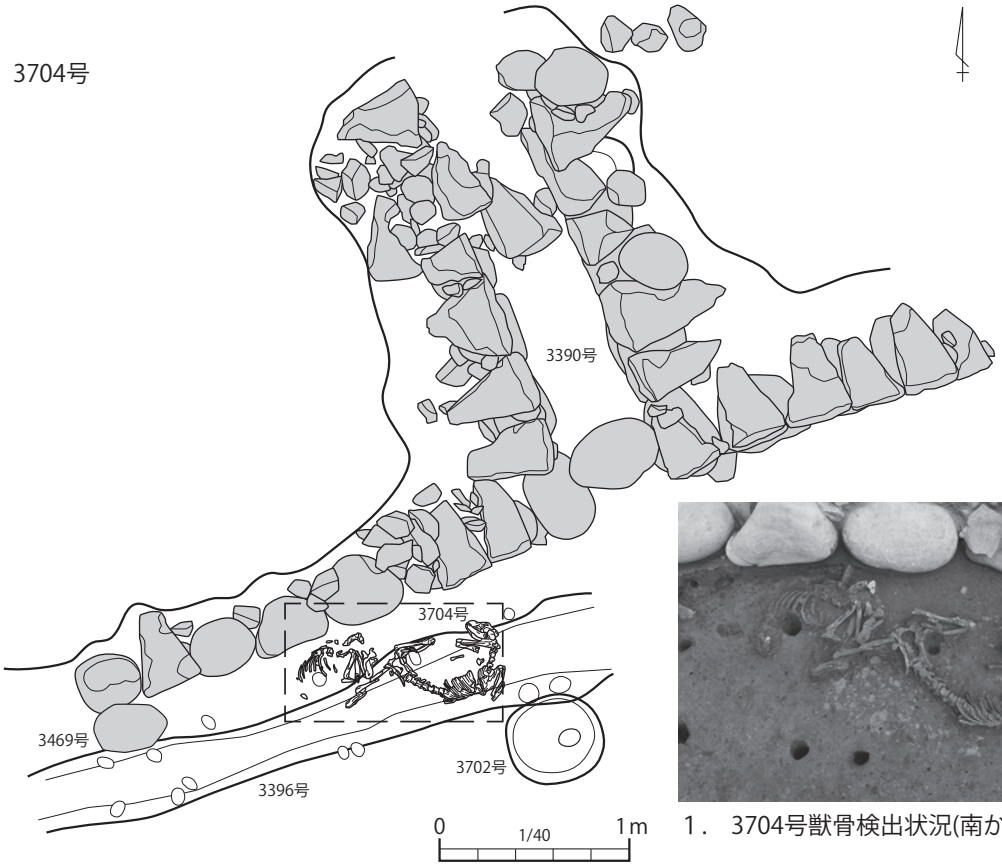


1.　3475号獣骨検出状況(南から)

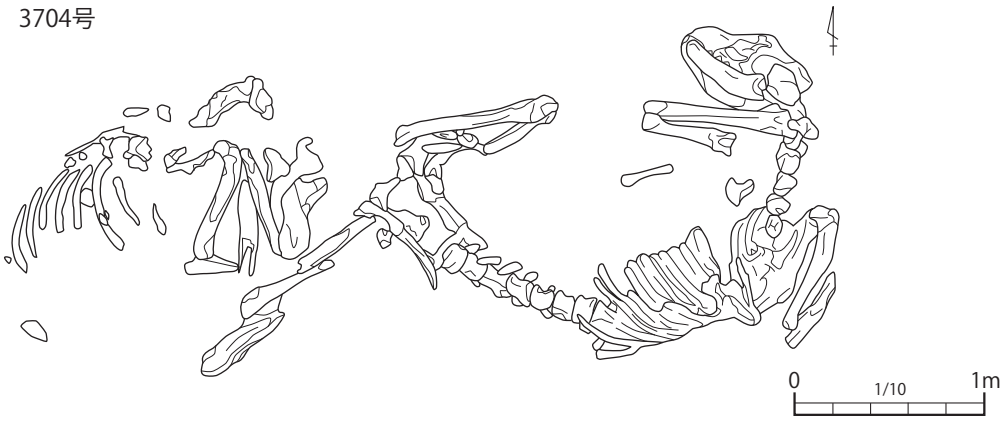


2.　3429号獣骨検出状況(南から)

第 1-192 図　H-2 区 3-1 面の遺構（7）（1/10・1/40）



1． 3704号獣骨検出状況(南から)



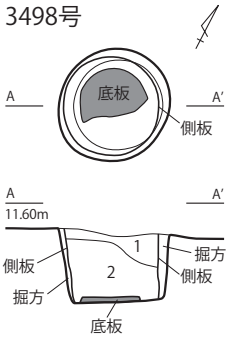
3641号



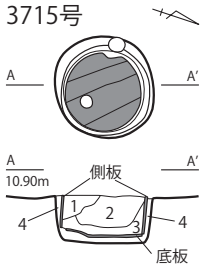
出土位置は全体図（第1-70図）・割図（第1-76図）参照

2． 3641号獣骨検出状況(東から)

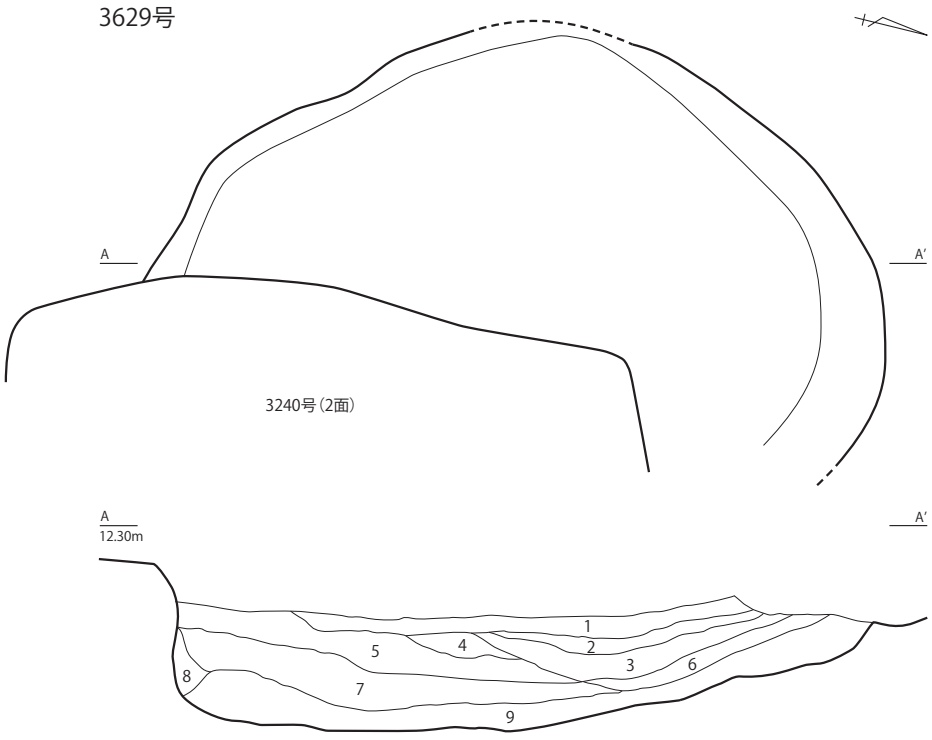
第 1-193 図　H-2 区 3-1 面の遺構（8）（1/10・1/40）



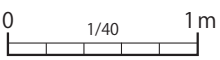
3498号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：弱い
2：2.5Y5/2(暗灰黄色)　しまり：弱い　粘性：強い　焼土粒φ5～10mm10%脆弱
炭φ2～10mm10～15%　瓦片(細・被熱・非被熱)多量に含む　粘土層



3715号
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い　焼土粒φ5～10mm2%　炭化物粒φ2～5mm3%
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ3～10mm10%
3：10YR4/2(褐灰色)　しまり：やや弱い　粘性：弱い　砂まじり
4：10YR4/2(褐灰色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ3～5mm1%　炭化物粒φ5～10mm1%　掘方

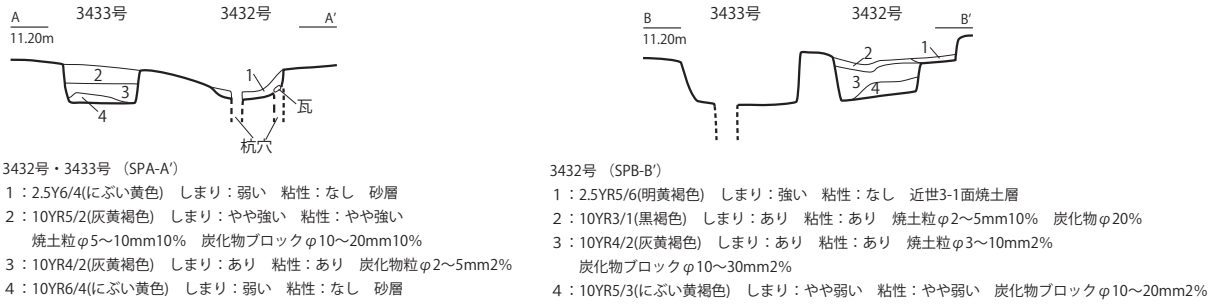


3629号
1：5Y4/2(灰オリーブ色)　しまり：強い　粘性：強い　焼土粒5～10%　炭化物粒1～3%　炭化物ブロックφ~15mm1～3%　細礫5～10%　粘土30～50%　シルト質粘土層
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂30～50%　焼土粒5～10%　炭化物粒15～25%　炭化物ブロックφ~20mm15～25%　細礫15～25%
中礫φ4~10mm15～25%　粘土15～25%　2～4層は類似したシルト質粘土主体層
3：2.5Y4/2(暗灰黄色)　しまり：あり　粘性：あり　砂30～50%　焼土粒5～10%　細礫1～3%　中礫φ4~8mm1～3%　粘土15～25%
4：2.5Y4/2(暗灰黄色)　しまり：弱い　粘性：あり　砂15～25%　焼土粒5～10%　細礫5～10%　中礫φ4~20mm5～10%　粘土15～25%
5：2.5Y4/2(暗灰黄色)　しまり：強い　粘性：あり　砂30～50%　焼土粒5～10%　粘土30～50%
6：2.5YR4/8(赤褐色)　しまり：強い　粘性：あり　砂15～25%　焼土粒15～25%　粘土粒～ブロックφ5~75mm50%　被熱瓦・焼土を中量含む
7：2.5YR4/8(赤褐色)　しまり：強い　粘性：あり　砂15～25%　焼土粒φ2~5mm30～50%　焼土ブロックφ20~60mm5～10%　細礫1～3%
粘土粒～ブロックφ5~20mm30～50%　被熱瓦・焼土を多く含む
8：5Y4/1(灰色)　しまり：強い　粘性：あり　砂30～50%　焼土粒5～10%　焼土ブロックφ10~20mm5～10%　炭化物粒1～3%　粘土30～50%
9：5Y4/1(灰色)　しまり：強い　粘性：あり　砂15～25%　焼土粒1～3%　粘土50%　均質な粘土層　南側は瓦多い



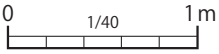
第 1-194 図　H-2 区 3-1 面の遺構（9）（1/40）

3432･3433号



3432号・3433号（SPA-A′）
1：2.5Y6/4(にぶい黄色)　しまり：弱い　粘性：なし　砂層
2：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い
　焼土粒φ5～10mm10%　炭化物ブロックφ10～20mm10%
3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物粒φ2～5mm2%
4：10YR6/4(にぶい黄色)　しまり：弱い　粘性：なし　砂層

3432号（SPB-B′）
1：2.5YR5/6(明黄褐色)　しまり：強い　粘性：なし　近世3-1面焼土層
2：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ2～5mm10%　炭化物φ20%
3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ3～10mm2%
　炭化物ブロックφ10～30mm2%
4：10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い　炭化物ブロックφ10～20mm2%



第 1-195 図　H-2 区 3-1 面の遺構（10）（1/40）

ロック状となる。中層は粘性が極めて強い暗灰黄色粘質土（７層）を主体とし、約 20cm 厚で堆積する。下層は黄褐色砂を多く含む暗灰黄色粘質土（９層）･焼土粒･炭化物粒を多く含む黒褐色土（10 層）である。下層は火災に伴う焼土処理の痕跡と考えられる。2 面の溝（3244 号）と形状・規模ともよく似ているが、3333 号の上面には 3244 号が掘り込む 2 面盛土（同図 SPA-A'1 ～ 3 層）が堆積しており、また、3333 号底面に見られる被熱痕跡は 3244 号には認められないことからも、明らかに時期差があると判断される。出土遺物は 214 点・総重量 4,391.4g で、18 世紀前葉を主体とする。遺物の時期から見て、溝底面の被熱痕跡および覆土下層の焼土処理は、享保 12 年（1727）または同 2 年（1717）の火災に伴うものである可能性が高い。

3432 号・3433 号（第 1-77・195 図、第 3-16 表）

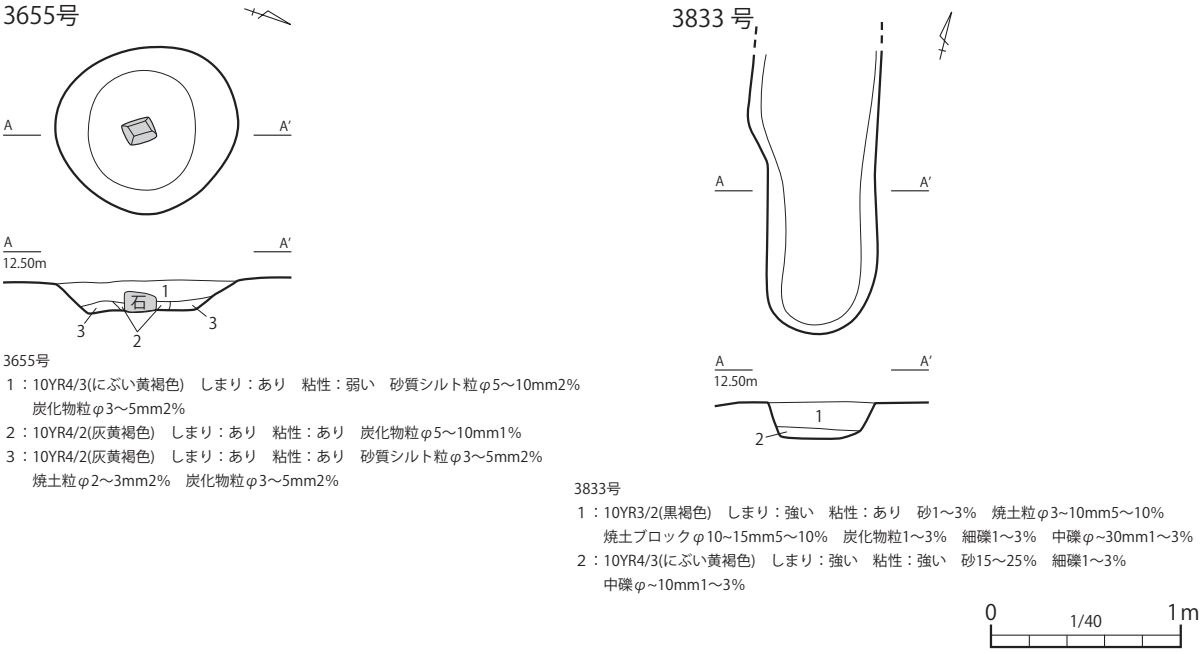
3432 号と 3433 号は平行して東西に走る木組溝である。両者とも東端は 3435 号に切られており、西端は攪乱を受けていた。またこのほかに 3380 号に切られている。どちらも壁面は真っ直ぐに立ち上がっており、底面は平坦で、東に向かって傾斜していた。また、側板は検出されなかったが、底面から杭穴が複数検出されている。3432 号と 3433 号は 3-1 面の焼土粒を多く含む盛土層を掘りぬいており、覆土は焼土粒や炭化物粒を含む層となっている。出土遺物からいずれの遺構も年代は 19 世紀第 1 四半期以降と考えられる。出土遺物の点数、重量は 3432 号が 371 点、4,872.4g、3433 号が 99 点、1,504.6g である。

【埋桶】

3488 号（第 1-191 図、第 3-16 表）

3488 号は H-2 区南西部に位置し、平面形が隅丸方形となる埋桶である。側板や底板は検出されなかったが、炭化物層が面的に広がっていたことから埋桶の残存した部分であると判断した。覆土は 4 層に分かれている。1 層は炭化していない木端を含む炭化物層であり、上層に薄く円形に広がることから本来は底板にあたるものと考えられる。2 層、3 層はしまり・粘性が強くローム粒や焼土粒、炭化物粒を含む土層で掘方にあたる。4 層は腐朽した木質部分である。出土遺物の点数、重量は 11 点、225.3g である。出土遺物から遺構の年代は 18 世紀中葉以降と考えられる。

3490 号（第 1-191 図、第 3-16 表）



3655号
1：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　砂質シルト粒φ5～10mm2%
　炭化物粒φ3～5mm2%
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物粒φ5～10mm1%
3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂質シルト粒φ3～5mm2%
　焼土粒φ2～3mm2%　炭化物粒φ3～5mm2%

3833号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　砂1～3%　焼土粒φ3~10mm5～10%
　焼土ブロックφ10~15mm5～10%　炭化物粒1～3%　細礫1～3%　中礫φ~30mm1～3%
2：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　砂15～25%　細礫1～3%
　中礫φ~10mm1～3%

第 1-196 図　H-2 区 3-2 面の遺構（1/40）

3490 号は H-2 区南西部に位置する埋桶で側板および底板が残存していた。覆土は 4 層に分かれる。1 層から 3 層は類似する土層で、焼土粒や炭化物粒を含む粘質土層である。2 層と 3 層の境界には薄い板状の石が据えられていた。また、3 層と 4 層の境界には底板が残存していた。4 層は掘方の覆土にあたる黒褐色土層である。側板部分の掘方は検出されなかった。出土遺物の点数、重量は 21 点、1,022.2g である。出土遺物から遺構の年代は 19 世紀第 1 四半期以降と考えられる。

3498 号（第 1-194 図、第 3-16 表）

3498 号は H-2 区南西部のなかでも西端に位置している平面形が円形の埋桶で、側板と底板が炭化した状態で残存していた。側板のやや外側を回るように掘方が検出されているが、底板の下からは掘方にあたるものは検出されていない。覆土は 2 層に分かれる。1 層は周辺に堆積する 3-1 面盛土層が落ち込んだ部分で焼土粒を含む土層である。2 層は被熱している瓦片と被熱していない瓦片、焼土粒を含む粘土層である。出土遺物の点数、重量は 40 点・1,200.0g である。出土遺物から遺構の年代は 19 世紀第 3 四半期以降と考えられる。

3715 号（第 1-194 図、第 3-16 表）

3715 号は H-2 区南西部に位置する平面形が円形の埋桶で、側板と底板が残存していた。側板のやや外側を回るように掘方が検出されているが、底板の下からも掘方にあたる土層が検出されている。覆土は 4 層に分かれる。1 層は周辺に堆積する 3-1 面盛土層が落ち込んだ部分で焼土粒を含む土層である。2 層は焼土粒を含む層で、3 層は砂を含む層である。4 層は掘方部分の土層で、焼土粒や炭化物粒を含む土層である。出土遺物の点数、重量は 26 点、6,784.9g である。出土遺物から遺構の年代は 18 世紀第 1 四半期以降と考えられる。

【イヌ埋葬跡】

3429 号（第 1-192 図、第 3-16 表）

石垣 3390 号のすぐ南に位置する 3429 号はイヌの全身骨格で、埋葬の痕跡であると考えられる。

全身骨格が原位置を保って出土したことから、掘り込みを確認することは出来なかったものの埋葬である可能性が高い。イヌは頭を西に、足を南に向けて横たわった状態で埋葬されていた。遺存状態は悪く体長等は不明である。出土遺物は 1 点、262.7g である。

3475 号（第 1-192 図、第 3-16 表）

石垣 3390 号のすぐ南に位置する 3475 号はイヌの全身骨格で、埋葬の痕跡であると考えられる。風化が進んでいたものの、全身骨格が原位置を保って出土したことから、掘り込みを確認することは出来なかったが、埋葬である可能性が高い。イヌは頭を西に、足を北に向けて横たわった状態で埋葬されていた。大型の個体と推定される（第Ⅷ章第 3 節参照）。出土遺物の点数、重量は 7 点、273.4g である。出土遺物から遺構の年代は 18 世紀前葉以降と考えられる。

3704 号（第 1-193 図、第 3-16 表）

石垣 3390 号のすぐ南に位置する 3704 号では 2 体分のイヌの全身骨格を検出した。全身骨格が原位置を保って出土したことから、掘り込みを確認することは出来なかったものの埋葬である可能性が高い。2 体のイヌの一方は頭を西に、足を南に向けて横たわった状態で埋葬されていた。もう一方のイヌは、頭を東に、足を北に向け横たわった状態で埋葬されていた。いずれも大型のイヌである（第Ⅷ章第 3 節参照）。出土遺物の点数、重量は 42 点、1,337.9g である。出土遺物から遺構の年代は 18 世紀前葉以降と考えられる。

【建物跡】

建物跡 6（第 1-190 図、第 3-16 表）

建物跡 6 は礎石 3403 号、3404 号、3405 号、3406 号により構成される礎石建物跡で H-2 区南西部に位置する。礎石の間隔にはやや乱れがあり、3403 号と 3404 号間は 1.9 m、3404 号と 3405 号間は 1.45 m、3405 号と 3406 号間は 1.3 mとなる。3403 号と 3404 号は安山岩の割石、3405 号は凝灰岩の丸石、3406 号は安山岩の丸石が使用されていた。

D　3-2 面

H-2 区 3-2 面は H-2 区の北側のみで確認された。F-1 区 3-2 面や H-1 区 3-2 面に対応し、旗本成瀬家屋敷の時期にあたる。H-2 区 1 面は北西から南東へ緩やかに傾斜しているが、旗本鳥居家と旗本保科家の屋敷境にあたる部分で急斜面となり、旗本保科家の屋敷地内に入ると再び緩やかな傾斜へと戻る。F-1 区 3-2 面や H-1 区 3-2 面で検出されたような焼土層は検出されず、遺構の分布も希薄であった。この段階では、積極的に土地が利用されていたのは旗本成瀬家屋敷地の中でも北部に限られていたようである。

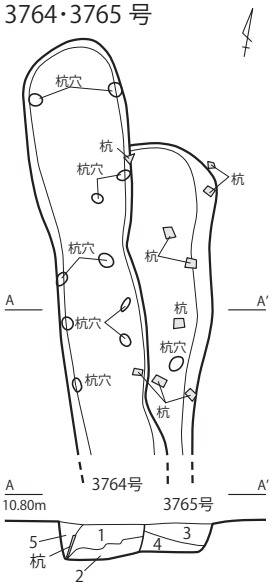
3-2 面からは、溝 1 条、礎石 1 基、砂利敷 1 基、土坑 10 基、ピット 15 基、遺物集中 1 基が検出された。

【溝】

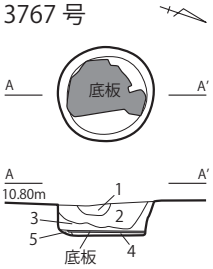
3833 号（第 1-196 図、第 3-16 表）

H-2 区中央北側 3-2 面から検出された溝で、北方の H-1 区側では確認されず不詳となっている。長さは確認された範囲で 1.48 m、幅 0.38 m、深さ 0.17 mを測る。覆土は 2 層に分かれており、1 層は焼土・炭化物中量、2 層は砂をやや多く含む。遺物は 7 点 129.1g、極細片のみである。材質別の内訳は、磁器 2 点 15.9g、陶器 1 点 7.5g、土器 4 点 105.7g である。廃絶年代は 17 世紀後葉以降である。

3764･3765 号



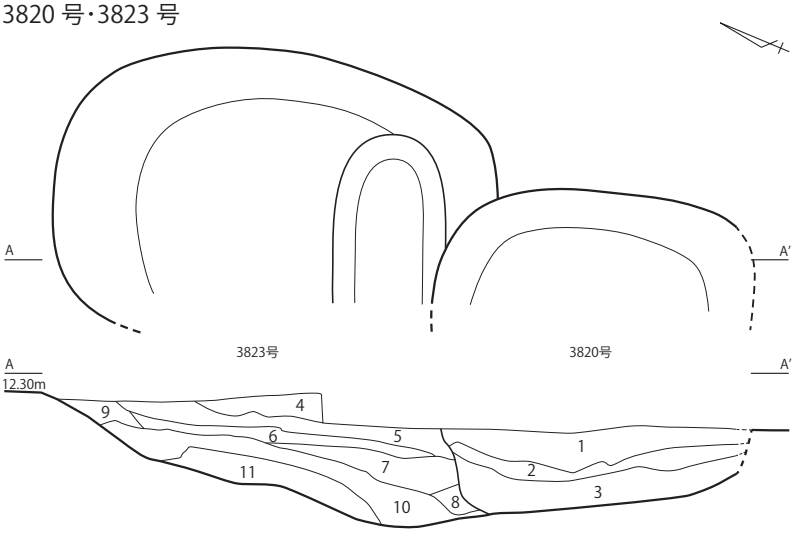
3767 号



3767号
1：10YR4/1(灰褐色)　しまり：あり　粘性：あり
2：2.5Y4/6(赤褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　焼土粒φ2～5mm5%
3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ2～5mm1%
　炭化物粒φ5～10mm1%
4：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　黄褐色砂10%
5：10YR2/2(黒褐色)　しまり：やや弱い　粘性：あり

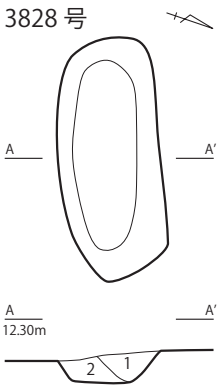
3764号･3765号
1：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：あり　白色砂粒φ5～10mm3%
2：2.5Y8/6(浅黄橙色)　しまり：あり　粘性：なし　砂層
3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　錆入る
4：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　炭化物粒φ5～10mm2%
5：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　黄褐色砂粒φ5～10mm2%

3820 号･3823 号

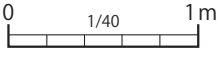


3820号・3823号
1：2.5Y4/2(暗灰黄色)　しまり：強い　粘性：強い　シルト15～25%　砂5～10%　細礫1～3%　焼土粒1～3%　炭化物粒5～10%　炭化物ブロックφ10~15mm5～10%
2：2.5Y4/2(暗灰黄色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒1～3%　シルト15～25%　砂15～25%　焼土粒1～3%　炭化物粒1～3%
3：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　シルト30～50%　砂1～3%　焼土粒1～3%　炭化物粒15～25%　炭化物ブロックφ10~20mm15～25%
　中礫φ5~20mm5～10%　貝・礫・瓦（非被熱）細片・炭化物を含む廃棄層　礫は一部に集中する
4：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ロームブロックφ15～20mm2%　炭化物粒φ5～10mm3%
5：10YR5/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：強い　炭化物ブロックφ15～30mm2%
6：5YR3/6(暗赤褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　焼土ブロックφ15～20mm3%　炭化物粒φ5～10mm２%
7：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　炭化物ブロックφ15～30mm3%
8：10YR4/6(褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ロームブロック層
9：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：やや強い　ローム粒φ5～10mm2%
10：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：強い　ロームブロックφ15～30mm3%　炭化物ブロックφ15～20mm2%　貝片多く含む
11：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：やや強い　ロームブロックφ15～20mm5%

3828 号

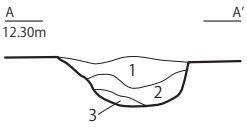


3828 号
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：弱い　ロームブロックφ10 ～ 20mm5 ～ 10%　ローム粒φ1 ～ 10mm5 ～ 10%
　シルト 1 ～ 3%　砂 15 ～ 25%　焼土粒 1 ～ 3%　炭化物粒 1 ～ 3%
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：弱い　ロームブロックφ10 ～ 20mm15 ～ 25%　ローム粒φ1 ～ 10mm15 ～ 25%
　砂 1 ～ 3%　焼土粒φ2 ～ 5mm5 ～ 10%　焼土ブロックφ10 ～ 25mm5 ～ 10%　炭化物粒φ2 ～ 10mm5 ～ 10%
　炭化物ブロックφ10 ～ 15mm5 ～ 10%　1・2 層類似　南から北方への斜行堆積 砂はブロック状に散在する

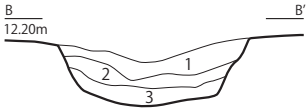


第 1-197 図　H-2 区 3-3 面の遺構（1）（1/40）

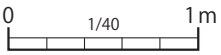
3829 号



3829号 （SPA-A′）
1：7.5YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm5～10%　ロームブロックφ10～15mm5～10%　シルトφ5～40mm15～25%　砂5～10%　焼土粒1～3%
　炭化物粒φ8～10mm5～10%　炭化物ブロックφ10~15mm5～10%　2層に類似　シルト斑文状に含む
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　砂5～10%　焼土粒1～3%　炭化物ブロックφ10～20mm1～3%
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm15～25%　ロームブロックφ10～20mm15～25%　シルト5～10%　焼土粒5～10%



3829号 （SPB-B′）
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒1～3%　シルト5～10%　砂5～10%　焼土粒5～10%　炭化物粒1～3%　シルト+粘土層　間層の一部で砂ラミナ状堆積
2：10YR2/3(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　シルト30～50%　砂5～10%　焼土粒φ2～8mm15～25%　混焼土腐植土を含む
3：2.5Y5/6～4/6(黄褐色～オリーブ褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10～12mm1～3%　ローム粒φ5～10mm1～3%　シルト5～10%　砂50%～
　炭化物ブロックφ10~30mm1～3%　砂主体層　砂は2層よりも粗粒



第 1-198 図　H-2 区 3-3 面の遺構（２）（1/40）

【土坑】

3655 号（第 1-196 図、第 3-16 表）

H-2 区北側 3-2 面から検出された円形土坑である。規模は長軸 0.96 m、短軸 0.88 m、深さ 0.19 m を測る。断面形は皿形を呈し、全体的に起伏は少なく平坦である。中央底面直上に□ 18cm の破砕礫が検出されている。覆土は 3 層に分かれるが、炭化物を若干量含む類似した層である。出土遺物は 2 点 46.7g、陶磁器類極細片のみである。廃絶年代は不詳ながら、18 世紀中葉以降である。

E　3-3 面

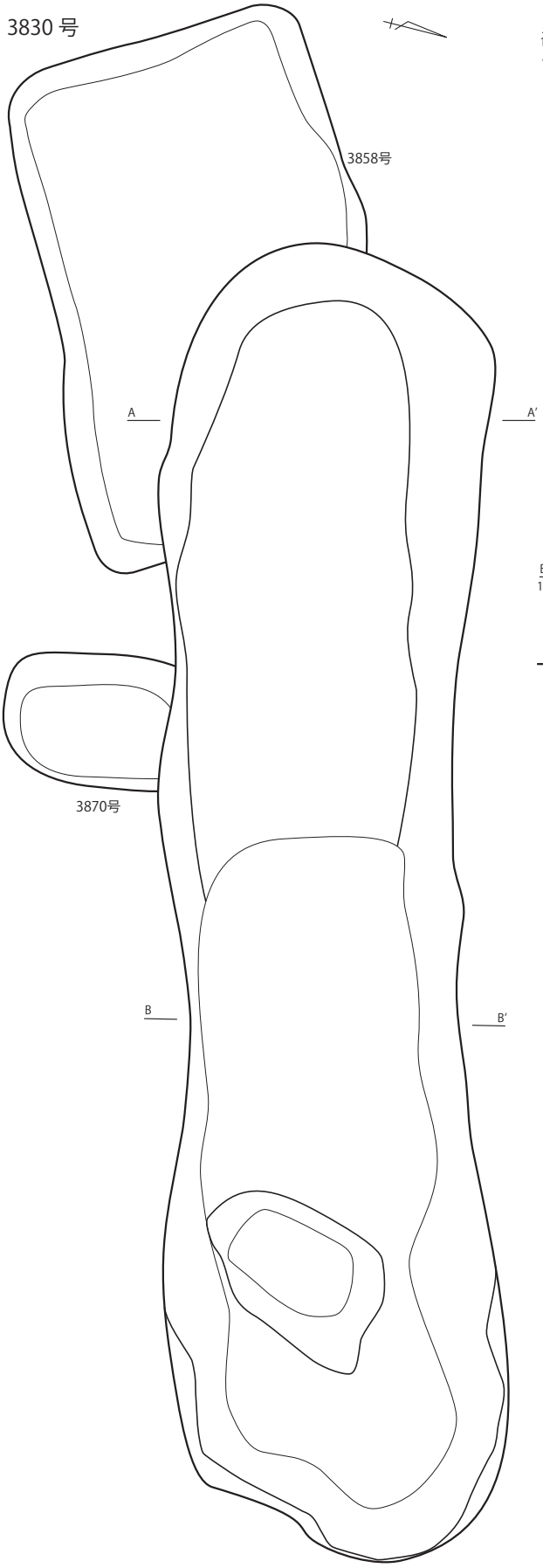
H-2 区 3-3 面は F-1 区 3-3 面や H-1 区 3-3 面および G-1 区・G-2 区の 3 面に対応し、H-2 区の北側は旗本成瀬家、南側は旗本保科家屋敷の範囲にあたる。H-2 区 1 面は北西から南東へ緩やかに傾斜しているが、旗本成瀬家と旗本保科家の屋敷境にあたる部分で急斜面となり、旗本保科家の屋敷地内に入ると再び緩やかな傾斜へと戻る。H-2 区北西部で F-1 区や H-1 区で検出されている焼土層に対応する焼土層が検出されている。また、H-2 区南西部においても焼土層の広がりを確認した。

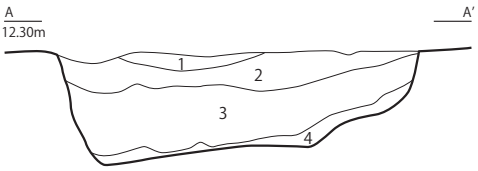
3-3 面からは、溝 7 条、井戸 1 基、礎石 2 基、埋桶 1 基、廃棄土坑 1 基、火山灰溜り 1 基、イヌ埋葬跡 2 基、土坑 29 基、落ち込み 2 基、ピット 56 基、焼土層 2 基、硬化面 1 基が検出された。

【溝】

3764・3765 号（第 1-197 図、第 3-16 表）

3764 号と 3765 号はどちらも南北に走る木組溝で、3764 号が 3765 号を切る。H-2 区の南端に位置しており、南側は G-2 区へと続くが G-2 区側では接続する遺構が検出されなかった。覆土は 5 層に分かれており、1 層と 2 層が 3764 号覆土、3 層と 4 層が 3765 号覆土にあたる。5 層は壁面の杭が内側に倒れ込んでいるため、掘方に 3-3 面盛土層が混入している可能性が高い。出土遺物の点数、重量は、3764 号が 15 点・291.7g、3765 号が 2 点・15.2g である。どちらも出土遺物から 17 世紀後





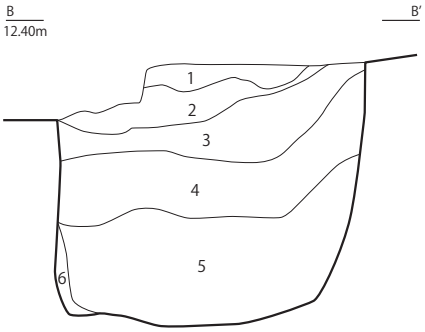
3830号（SPA-A′）

1：5YR5/6+7.5YR7/6(赤褐色+にぶい橙色)　しまり：極強　粘性：弱い　砂30～50%
焼土粒15～25%　炭化物粒1～3%　粘土ブロックφ10～50mm15～25%
砂(+細礫)・シルトの薄層がラミナ状堆積　硬化

2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒5～10%　シルト5～10%
粘土5～10%　焼土粒1～3%　炭化物粒φ1～8mm5～10%　粘質土層
２・３層類似　３層より炭化物少なく焼土を含む　粘質減少

3：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　炭化物粒φ5～40mm15～25%
粘質土層　南へいくほど炭化物減少し、灰色シルト増量　酸化鉄散在
陶磁器類やや多く含む

4：10YR3/4(暗褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒15～25%
ロームブロックφ10～15mm15～25%　砂15～25%　細礫1～3%　粘質土層
底面は部分的に酸化鉄固着する



3830号（SPB-B′）

1：10YR5/2+7.5YR7/6(灰黄褐色+にぶい橙色)　しまり：極強　粘性：弱い　砂50%～
焼土粒φ1～3mm1～3%　炭化物粒φ1～3mm1～3%　細礫15～25%
粘土15～25%　砂(+細礫)・粘土の薄層がラミナ状堆積　硬化
A-A'sec付近よりも酸化鉄混入少ない

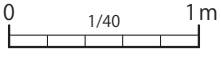
2：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒5～10%　砂5～10%
焼土粒φ1～5mm1～3%　炭化物粒φ1～5mm1～3%　細礫1～3%
グライ化したシルト層　２～５層類似　瓦少量含む

3：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：強い
ロームブロックφ10～20mm5～10%　ローム粒5～10%　砂5～10%
焼土粒1～3%　炭化物粒φ1～5mm5～10%　細礫1～3%
中礫φ10～30mm1～3%　シルト～粘土層　酸化鉄多量に入る
陶磁器類少量含む

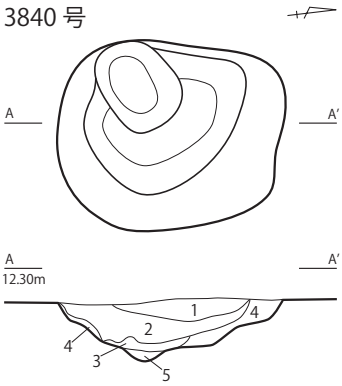
4：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒1～3%　砂15～25%
焼土粒1～3%　炭化物粒φ1～10mm15～25%
炭化物ブロックφ10～15mm5～10%　シルト層
下位から5層にかけて一部グライ化　酸化鉄散在

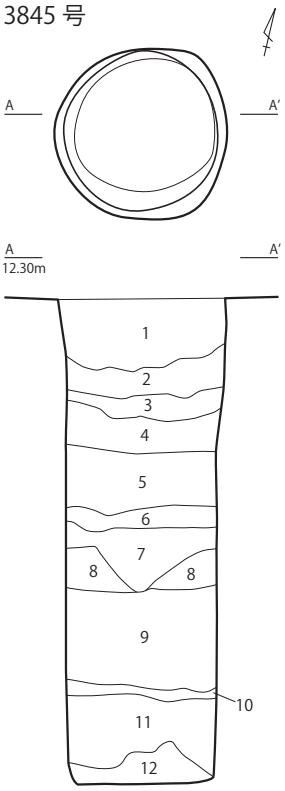
5：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒5～10%
ロームブロックφ10～30mm5～10%　砂5～10%　焼土粒1～3%
炭化物粒φ5～10mm15～25%　炭化物ブロックφ10～20mm15～25%
シルト層　一部グライ化　酸化鉄散在　多量の木っ端と陶磁器類・木製品・貝類
を含む

6：2.5Y3/1(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　均質なシルト層



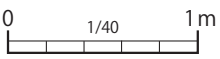
第 1-199 図　H-2 区 3-3 面の遺構（３）（1/40）





3840号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ2～10mm5～10%
　ロームブロックφ10～15mm5～10%　砂1～3%　シルト5～10%　炭化物粒1～3%　酸化
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm30～50%
　ロームブロックφ10～30mm30～50%　シルト粒～ブロックφ3～20mm30～50%
　粘土5～10%　ローム・脱色ローム・シルト・白色粘土を斑文状に含む
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm15～25%
　ロームブロックφ10～15mm15～25%　砂5～10%　シルト30～50%
4：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒1～3%　砂1～3%　シルト1～3%
　焼土粒1～3%　炭化物粒1～3%
5：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒15～25%　砂1～3%
　シルト5～10%　炭化物粒1～3%

3845号
1：2.5Y5/6~4/6(黄褐色～オリーブ褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm15～25%
　ロームブロックφ10～30mm15～25%　砂30～50%　焼土粒1～3%　炭化物粒1～3%　覆土は全て砂主体
2：2.5Y3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒5～10%　砂15～25%　炭化物粒1～3%
3：2.5Y4/5(オリーブ褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒5～10%　砂50%～
4：2.5Y5/6(黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒1～3%　シルト1～3%　砂30～50%
5：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂ブロックφ10～20mm5%
6：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂ブロックφ10～20mm15%
7：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い
8：砂層
9：10YR5/6(黄褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い　黒色土15%　黄色砂主体（錆びて一部黄褐色化）
10：9層に錆が吸着した部分
11：2.5YR5/4(黄褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い　ローム粒φ1～5mm3%　黄褐色砂主体
12：３層に黒褐色土ブロック(壁の崩れか)φ15～20mm40%



第 1-200 図　H-2 区 3-3 面の遺構（4）（1/40）

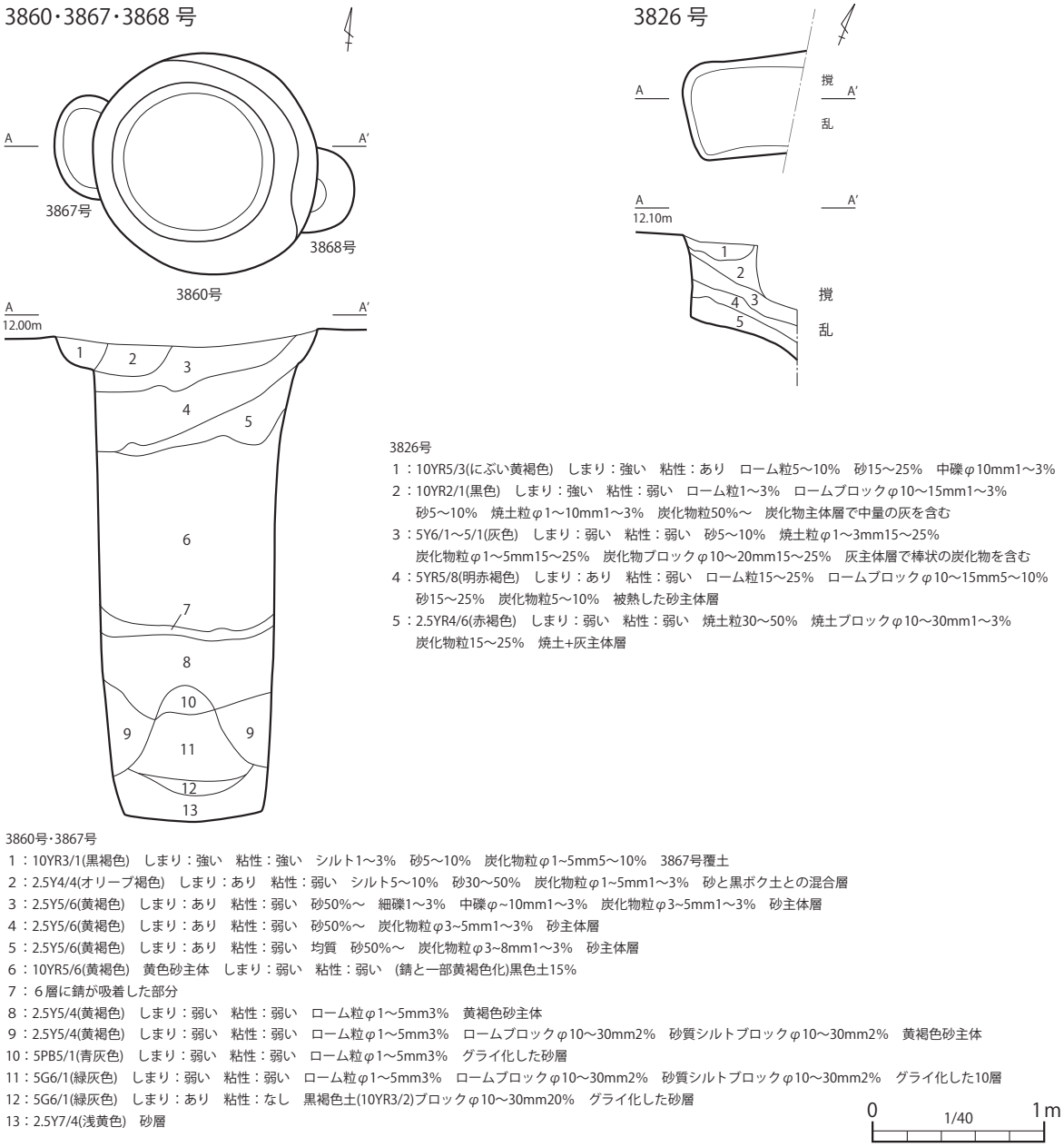
葉以降の遺構と考えられる。

3829 号（第 1-93・94・198 図、第 3-16 表）

H-2 区・H-1 区際 3-3 面から出土した南北に連なる溝である。南端は 3823 号土坑により切られ、北方 H-1 区側は次第に浅くなり不詳となる。確認された長さは 7.5 m以上、幅は 1.06 m、深さ 0.54 m。断面形は歪な皿形で、東壁はやや急角度で西壁は緩やかに立ち上がる。南北方向では南側へと下がる。覆土は３層に分かれており、シルト・砂を比較的多く含み、最下層３層にはロームブロックを含む。遺物は 65 点・1,581.9g、細片が多い。廃絶年代は検出面と陶磁器類の年代観から 18 世紀前葉と考えられる。

【井戸】

3845 号（第 1-200 図、図版 3-67-6、第 3-16 表）



3826号
1：10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒5～10%　砂15～25%　中礫φ10mm1～3%
2：10YR2/1(黒色)　しまり：強い　粘性：弱い　ローム粒1～3%　ロームブロックφ10～15mm1～3%
　砂5～10%　焼土粒φ1～10mm1～3%　炭化物粒50%～　炭化物主体層で中量の灰を含む
3：5Y6/1～5/1(灰色)　しまり：弱い　粘性：弱い　砂5～10%　焼土粒φ1～3mm15～25%
　炭化物粒φ1～5mm15～25%　炭化物ブロックφ10～20mm15～25%　灰主体層で棒状の炭化物を含む
4：5YR5/8(明赤褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　ローム粒15～25%　ロームブロックφ10～15mm5～10%
　砂15～25%　炭化物粒5～10%　被熱した砂主体層
5：2.5YR4/6(赤褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い　焼土粒30～50%　焼土ブロックφ10～30mm1～3%
　炭化物粒15～25%　焼土+灰主体層

3860号・3867号
1：10YR3/1(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　シルト1～3%　砂5～10%　炭化物粒φ1~5mm5～10%　3867号覆土
2：2.5Y4/4(オリーブ褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　シルト5～10%　砂30～50%　炭化物粒φ1~5mm1～3%　砂と黒ボク土との混合層
3：2.5Y5/6(黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　砂50%～　細礫1～3%　中礫φ~10mm1～3%　炭化物粒φ3~5mm1～3%　砂主体層
4：2.5Y5/6(黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　砂50%～　炭化物粒φ3~5mm1～3%　砂主体層
5：2.5Y5/6(黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　均質　砂50%～　炭化物粒φ3~8mm1～3%　砂主体層
6：10YR5/6(黄褐色)　黄色砂主体　しまり：弱い　粘性：弱い　(錆と一部黄褐色化)黒色土15%
7：６層に錆が吸着した部分
8：2.5Y5/4(黄褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い　ローム粒φ1～5mm3%　黄褐色砂主体
9：2.5Y5/4(黄褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い　ローム粒φ1～5mm3%　ロームブロックφ10～30mm2%　砂質シルトブロックφ10～30mm2%　黄褐色砂主体
10：5PB5/1(青灰色)　しまり：弱い　粘性：弱い　ローム粒φ1～5mm3%　グライ化した砂層
11：5G6/1(緑灰色)　しまり：弱い　粘性：弱い　ローム粒φ1～5mm3%　ロームブロックφ10～30mm2%　砂質シルトブロックφ10～30mm2%　グライ化した10層
12：5G6/1(緑灰色)　しまり：あり　粘性：なし　黒褐色土(10YR3/2)ブロックφ10～30mm20%　グライ化した砂層
13：2.5Y7/4(浅黄色)　砂層

第 1-201 図　H-2 区 3-4 面の遺構（1/40）

H-2 区北西 3-3 面から検出された井戸である。径 0.80 m前後の円形を呈し、深さ 2.61 mで底に達する。壁面は垂直に立ち上がり、平滑に調整されている。底面は平坦である。覆土は 12 層に分かれるが、全体的に比較的均質な砂を主体とし、各層で混入物や色調がやや異なる。出土遺物は 5 点・144.3g、肥前産初期高台無釉碗を含む 17 世紀代の陶磁器類のみで極細片である。廃絶年代は不詳ながら、17 世紀後葉以降に位置付けられる。

【埋桶】

3767 号（第 1-197 図、図版 3-67-2、第 3-16 表）

3767 号は H-2 区南西部に位置する埋桶である。側板は確認されなかったが、底面で底板を検出している。覆土は 5 層に分かれる。5 層は掘方部分にあたる。掘方は底板の下部にのみ認められ、壁面

は部分に掘方は認められなかった。廃絶時にすでに側板部分が失われていた可能性が指摘できる。出土遺物の点数、重量は 32 点、186.9g である。

【土坑】

3820 号（第 1-197 図、第 3-16 表）

H-2 区中央 3-3 面から検出された土坑で、長軸 1.69 m、短軸 0.66m、深さ 0.49 mを測る。北側で 3823 号土坑を切り、南端を 3631 号に、西側を 3185 号に切られる。断面形は浅桶形に近く、全体的にやや起伏を持つ。覆土は３層に分かれ、１・２層はシルト・砂がやや多く、３層は炭化物・礫・瓦・貝類を含む廃棄層である。出土遺物は 83 点 2,089.9g で、量は少ないが比較的遺存度の高い陶磁器類（灯明具、くらわんか手厚手磁器碗など）や貝類を含む。廃絶年代は 18 世紀前葉と考えられる。

3823 号（第 1-197 図、第 3-16 表）

H-2 区中央 3-3 面から検出された廃棄土坑である。長軸 2.33 m、短軸 1.4 m、深さ 0.86 mを測る。南側を 3820 号に、西側を 3185 号に切られる。覆土は８層に分かれる。下層付近に貝類を含む以外は比較的均質である。当初は 3800 号（粘土層）と同一の可能性も考えたが遺物が多いため別遺構とした。出土遺物は 185 点 4,360.3g で、切り合う 3820 号同様、量は少ないが比較的遺存度の高い陶磁器類や貝類（サザエ等）を含む。陶磁器類では、土器特にかわらけが多く（小皿 10・五寸皿２個体）、「堺本湊焼／吉右衛門」印の焼塩壺（第 2-94 図 1407）を共伴する。廃絶年代は 18 世紀前葉と考えられる。

3828 号（第 1-197 図、第 3-16 表）

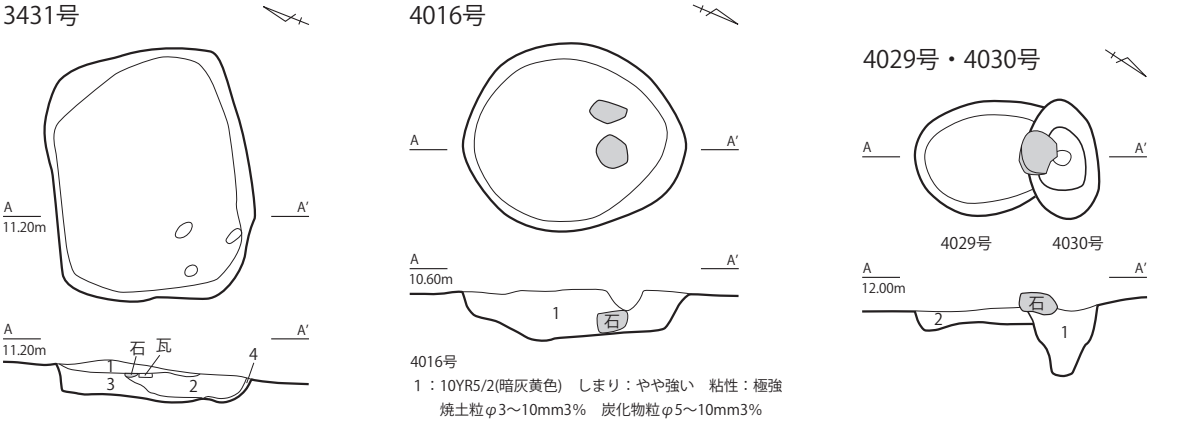
H-2 区西側 3-3 面から検出された、東西に長い不整楕円形を呈する土坑である。長軸 1.28 m、短軸 0.54 m、深さ 0.23 mを測る。断面形は皿形で、起伏は少ない。覆土は２層に分かれ、1 層は砂、２層はローム土を多く含む。出土遺物は 5 点 54.7g、陶磁器類の細片のみである。廃絶年代は不詳ながら、17 世紀第４四半期以降に位置付けられる。

3830 号（第 1-199 図、図版 3-67-5、第 3-16 表）

H-2 区中央 3-3 面、旗本成瀬家屋敷地から検出された、東西に長い長楕円形の土坑である。3690 号、3852-1 号、3870 号を切るほか、3-4 面に比定され宝永火山灰を覆土中に包含する 3866 号と切り合う。規模は長軸 7.99 m・短軸 2.1 m、底面は西側から東側へとスロープ状に傾斜し、東側で最深 1.61 mを測る。全体的に起伏を持ち、南壁～東壁面下位の一部はオーバーハングする。掘具の工具痕を残す箇所も見られる。覆土は東側の B-B’ セクションでは５層に分かれており、最上位１層は堅く埋め戻され、以下は全体的に砂が多くグライ化した覆土で、５層は特に遺物が多く、多量の木端や端材と陶磁器類・貝類を含む廃棄層である。覆土同様に底面から壁面立ち上がりにかけてもグライ化し酸化鉄が固着した状態であった。遺物は 1,681 点 69,467.0g が出土している。採取した遺物では遺存度の高い陶磁器類を主体とし、瓦が少ないのが特徴的である。元文２年（1737）の暦が記された京焼系陶器筒茶碗２個体（第 2-95 図 1422・1423）が共伴することから、廃絶年代は 18 世紀第２四半期後半～中葉と考えられる。

3840 号（第 1-200 図、第 3-16 表）

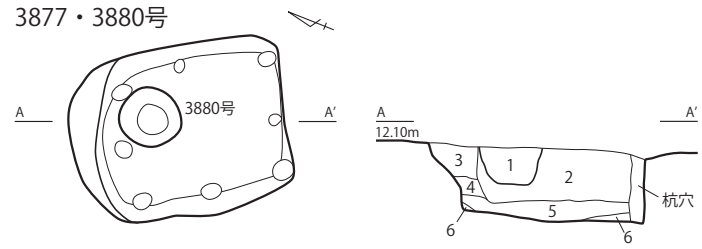
H-2 区北西側 3-3 面から検出された不整楕円形を呈する土坑である。長軸 1.38 m、短軸 1.00 m、深さ 0.40 mを測る。底面は段状に起伏を持ち、北西側でピット状に窪む。覆土は５層に分かれ、大半を占める３・４層はローム土・シルトを多く含む。出土遺物は、炻器極細片２点 42.1g のみである。



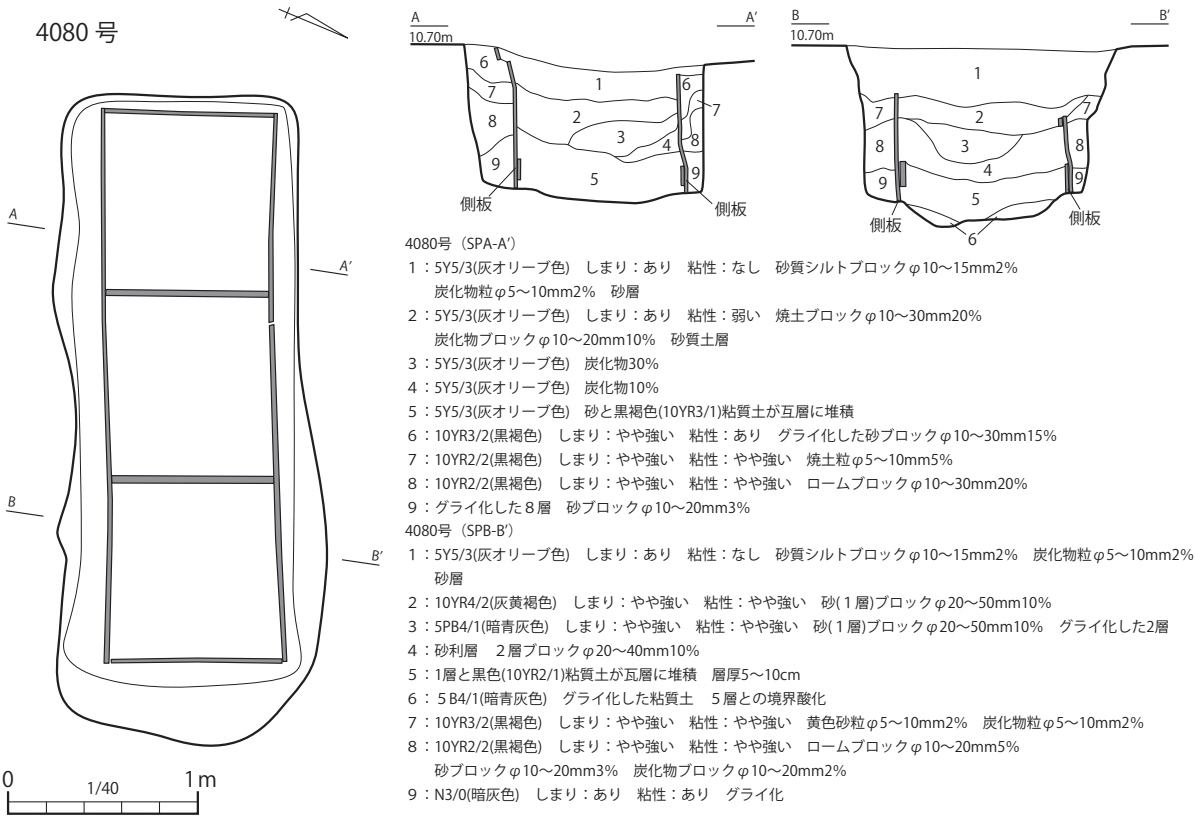
4016号
1：10YR5/2(暗灰黄色)　しまり：やや強い　粘性：極強
焼土粒φ3～10mm3%　炭化物粒φ5～10mm3%

3431号
1：10YR4/4(褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　砂質シルト粒φ3～10mm2%
焼土粒φ3～5mm1%　炭化物粒φ5～10mm2%
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　焼土粒φ3～5mm1%
炭化物粒φ5～10mm1%
3：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　シルト粒φ3～10mm2%
4：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：あり

4029・4030号
1：10YR3/1(黒褐色) しまり：あり　粘性：あり　黄色砂ブロックφ10～20mm5%
焼土粒φ3～5mm5%　炭化物粒φ5～10mm10%
2：10YR3/1(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　黄色砂ブロックφ10～20mm2%
焼土ブロックφ10～30mm3%　炭化物ブロックφ10～20mm3%



3877号・3880号
1：10YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：強い
ローム粒φ3~10mm5～10%　ロームブロックφ10～20mm5～10%
シルト粒～ブロックφ5～30mm5～10%　ロームは脱色
2：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：極強　粘性：あり
ローム粒φ1～5mm5～10%　粘土粒φ1～8mm5～10%
3：2.5Y3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒5～10%
粘土粒φ1~5mm1～3%　瓦片含む
4：2.5Y6/6+10YR4/6(明黄褐色～褐色)　しまり：弱い　粘性：あり
砂30～50%　シルト30～50%　混入物の少ない均質な砂層
酸化鉄を含むラミナ堆積
5：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　砂5～10%
炭化物粒φ1～3mm5～10%
6：5Y4/1(灰色)　しまり：強い　粘性：強い　焼土粒φ1～3mm1～3%
炭化物粒φ1～3mm5～10%　均質なシルト層

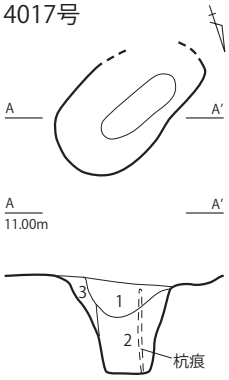


4080号（SPA-A′）
1：5Y5/3(灰オリーブ色)　しまり：あり　粘性：なし　砂質シルトブロックφ10～15mm2%
炭化物粒φ5～10mm2%　砂層
2：5Y5/3(灰オリーブ色)　しまり：あり　粘性：弱い　焼土ブロックφ10～30mm20%
炭化物ブロックφ10～20mm10%　砂質土層
3：5Y5/3(灰オリーブ色)　炭化物30%
4：5Y5/3(灰オリーブ色)　炭化物10%
5：5Y5/3(灰オリーブ色)　砂と黒褐色(10YR3/1)粘質土が互層に堆積
6：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　グライ化した砂ブロックφ10～30mm15%
7：10YR2/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　焼土粒φ5～10mm5%
8：10YR2/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　ロームブロックφ10～30mm20%
9：グライ化した８層　砂ブロックφ10～20mm3%

4080号（SPB-B′）
1：5Y5/3(灰オリーブ色)　しまり：あり　粘性：なし　砂質シルトブロックφ10～15mm2%　炭化物粒φ5～10mm2%
砂層
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　砂(１層)ブロックφ20～50mm10%
3：5PB4/1(暗青灰色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　砂(１層)ブロックφ20～50mm10%　グライ化した2層
4：砂利層　２層ブロックφ20～40mm10%
5：1層と黒色(10YR2/1)粘質土が瓦層に堆積　層厚5～10cm
6：５B4/1(暗青灰色)　グライ化した粘質土　５層との境界酸化
7：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　黄色砂粒φ5～10mm2%　炭化物粒φ5～10mm2%
8：10YR2/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　ロームブロックφ10～20mm5%
砂ブロックφ10～20mm3%　炭化物ブロックφ10～20mm2%
9：N3/0(暗灰色)　しまり：あり　粘性：あり　グライ化

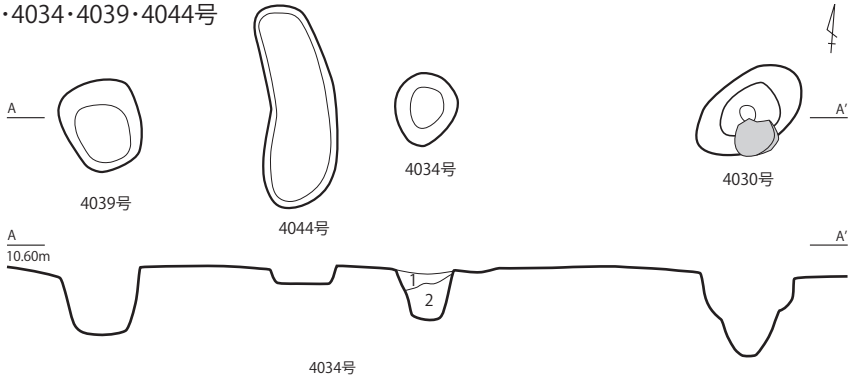
第 1-202 図　H-2 区 4 面の遺構（１）(1/40)

4017号



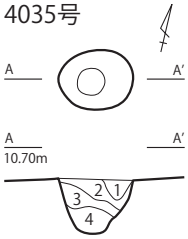
4017号
1：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：極強　粘性：強い　ローム粒φ3～5mm10%
　焼土粒φ3～7mm10%　炭化物粒φ1～3mm5%
　黄灰色(2.5Y6/1)粘土粒φ3～5mm10%
2：2.5Y4/2(暗灰黄色)　しまり：極強　粘性：極強　ローム粒φ3～5mm10%
　焼土粒φ3～5mm3%　炭化物粒φ3～5mm10%
　黄灰色粘土粒φ3～5mm5%　マトリクス暗灰黄粘質土
3：2.5Y5/3(黄褐色)　しまり：極強　粘性：強い　焼土粒φ3～5mm5%
　炭化物粒φ1～5mm5%　黄灰色粘土粒φ3～5mm10%　黄褐色粘質土主体

4030・4034・4039・4044号



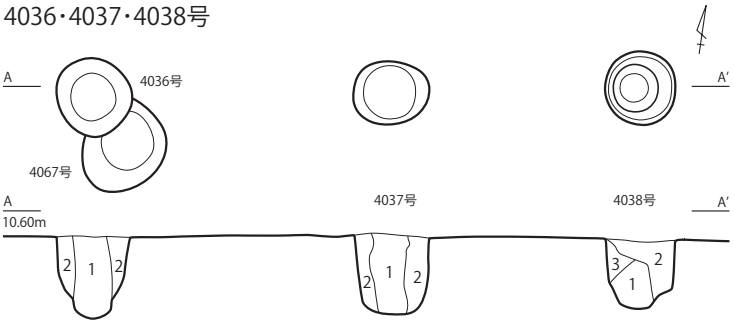
4034号
1：N4/0(灰色)　しまり：強い　粘性：強い　黄色砂ブロックφ20～30mm20%
2：N4/0(灰色)　しまり：強い　粘性：強い　黄色砂ブロックφ10～20mm10%
　一部酸化

4035号



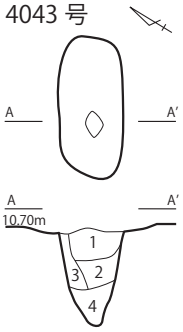
4035号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
　黄色砂粒φ3～10mm10%
3：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　錆入る
4：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　黄色砂20%

4036・4037・4038号

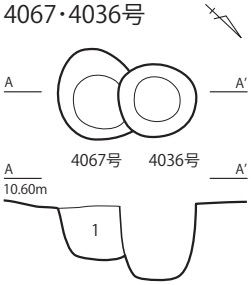


4036号・4037号・4038号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
　黄色砂粒φ5～10mm2%　柱痕
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
　黄色砂粒φ5～10mm15%
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
　黄色砂φ5～10mm5%

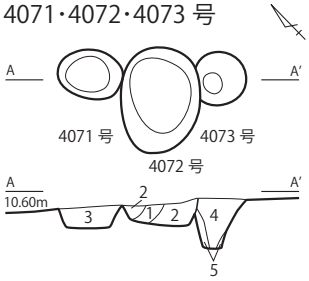
4043 号



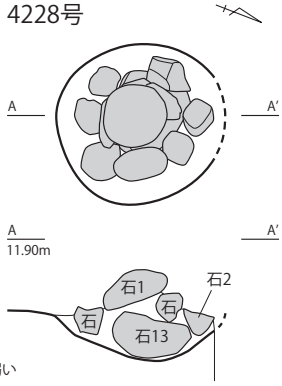
4067・4036号



4071・4072・4073 号



4228号



4067号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い
　焼土粒φ5～10mm5%　炭化物粒φ5～20mm2%
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり

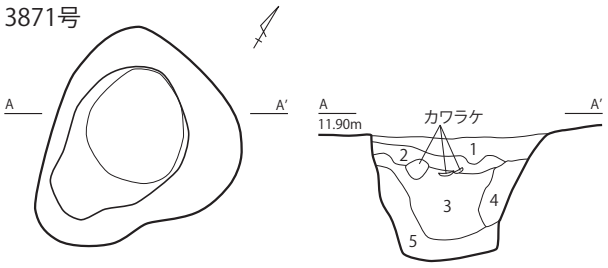
4043号
1：2.5Y4/2(暗灰黄色)　しまり：強い　粘性：極強　ローム粒φ3～５mm5%
　焼土粒φ1～5mm3%　炭化物粒φ1～3mm3%　灰白色粘土粒φ5mm5%
2：2.5Ｙ5/2(暗灰黄色)　しまり：極強　粘性：極強　ローム粒φ1～5mm5%
　焼土粒φ1～3mm2%　炭化物粒φ1～5mm5%　黄灰色粘土粒φ3～7mm20%
3：2.5Y5/2(暗灰黄色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ1～5mm5%
　焼土粒φ1～3mm20%　炭化物粒φ1～5mm5%　黄灰色粘土粒φ3～7mm20%
4：2.5Y5/3(黄褐色)　しまり：極強　粘性：強い　焼土粒φ3～5mm5%
　炭化物粒φ1～5mm5%　黄灰色粘土粒φ3～5mm10%　黄褐色粘質土主体

4071号・4072号・4073号
1：10YR3/1(黒褐色)　しまり：やや弱い　粘性：弱い
　炭化物粒φ5～10mm5%
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
　黄色砂ブロックφ10～20mm3%
　炭化物粒φ5～10mm5%
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い
　黄色砂φ10～20mm3%　炭化物粒φ3～5mm2%
4：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い
　黄色砂φ10～20mm5%　炭化物粒φ3～5mm2%
5：N3/0(暗灰色)　しまり：やや強い　粘性：なし
　グライ化した砂層

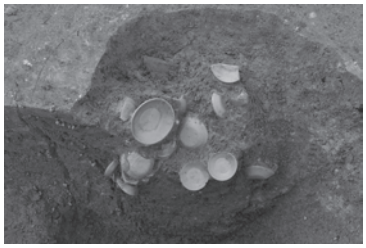
0　1/40　1m

第 1-203 図　H-2 区 4 面の遺構（２）（1/40）

3871号

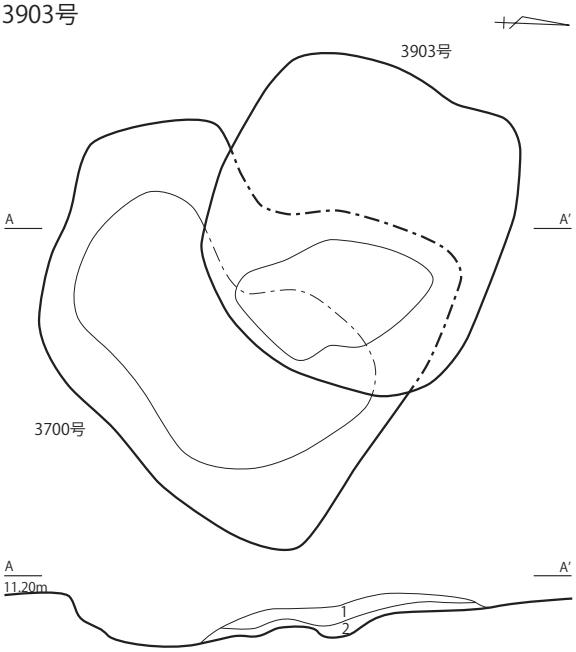


3871号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒5～10%　砂15～25%
　炭化物粒φ3～10mm15～25%　細礫1～3%　中礫φ～10mm1～3%
　粘土ブロックφ10～30mm5～10%
2：2.5Y4/2(暗灰黄色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒1～3%　砂5～10%
　シルト30～50%　炭化物粒φ3～8mm5～10%　粘質土層
　2～3層上位にかけてかわらけ集中域あり
3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒5～10%　砂15～25%
　シルト15～25%　粘質土層
4：2.5Y3/2(黒褐色)　しまり：弱い　粘性：強い　砂5～10%　シルト30～50%
　炭化物粒φ5～10mm30～50%　炭化物ブロックφ10~15mm30～50%
5：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒5～10%　砂5～10%
　シルト15～25%　焼土粒1～3%　シルト層

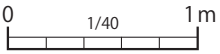


1.　3871号かわらけ
　　出土状況（南から）

3903号

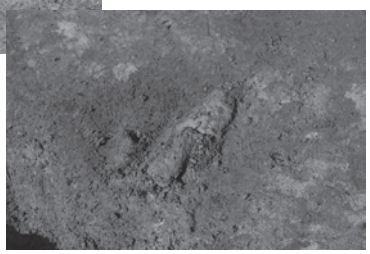


3903号
1：10YR5/3（にぶい黄褐色）　しまり：強い　粘性：あり
　黄褐色砂粒φ3～10mm15%　焼土粒φ1～3mm2%
　焼土ブロックφ15mm3%（偏在）　炭化物粒φ1～10mm10%
　赤錆φ5～10mm5%
2：10YR4/3(にぶい黄橙色)　しまり：強い　粘性：あり　焼土粒φ1～5mm２%
　炭化物粒φ１～５mm1%



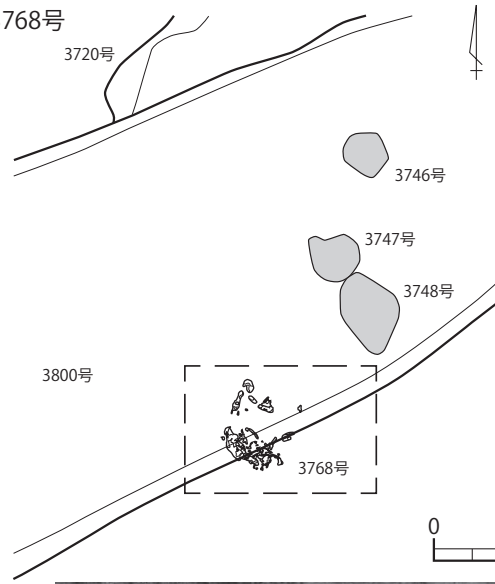


2.　3903号鉄製刀No.1
　　出土状況（東から）



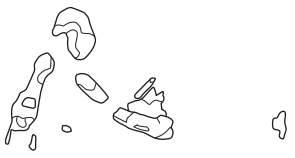
3.　3903号鉄製刀No.2
　　出土状況（東から）

3768号

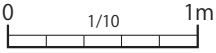




3768号 獣骨









4.　3768号獣骨検出状況（南から）

第 1-204 図　H-2 区 4 面の遺構（３）（1/10・1/40）

廃絶年代は不詳ながら 17 世紀後葉以降に位置付けられる。

Ｆ　3-4 面

H-2 区 3-4 面は局地的にとらえられた遺構確認面で、H-2 区北西部の一部のみに広がっており H-2 区 3-3 面とはさほど時期差はないものと考えられる。

3-4 面からは、溝 1 条、井戸 1 基、木枠土坑 2 基、土坑 7 基、ピット 7 基が検出された。

【井戸】

3860・3867・3868 号（第 1-201 図、図版 3-67-4、第 3-16 表）

H-2 区北西 3-4 面から検出された井戸である。径 1.28 ～ 1.36 mの円形を呈し、深さ 2.89 mで底に達する。東西に平面規模 0.5 ～ 0.6 m、深さ 0.2 m程のピットを付帯する（西側 3867 号、東側 3868 号）。壁面は調整されているが、3845 号井戸に比べると調整は粗くやや起伏を持つ。底面は平坦である。覆土は 12 層に分かれるが、全体的に比較的均質な砂を基調とし下位ではややグライ化が進行する。出土遺物は 14 点 588.9g。陶磁器類はごく細片である。金属製品では麻紐様の緡紐で連ねた銭緡銭 120 枚が 13 層上面から出土している（第 2-191 図 92-1 ～ 4）。判別できる銭名は古寛永銭のみである。廃絶年代は不詳ながら、17 世紀後葉頃の可能性がある。

【土坑】

3826 号（第 1-201 図、第 3-16 表）

H-2 区西側 3-4 面から検出された長方形を呈する土坑で、東側を攪乱（下水管）に切られる。長軸 0.62 m以上、短軸 0.57 m、深さ 0.64 mを測る。壁面はほぼ垂直で、底面は東側へと大きく下がる。覆土は 5 層に分かれるが全体的に被熱痕跡を有し、焼土・炭化物・灰・被熱した砂などが堆積する。内容物と遺構規模から判断すると、竈など日常的に火気を扱う場所の塵芥処理を行った廃棄土坑と思われる。出土遺物は 19 点 603.4g、陶磁器類の細片のみである。廃絶年代は不詳ながら、17 世紀後葉以降に位置付けられる。

Ｇ　4 面

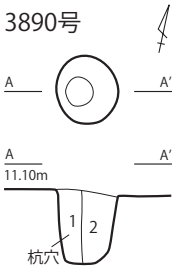
H-2 区 4 面は F-1 区 4 面や H-1 区 4 面および G-1 区・G-2 区の 4 面・ 4 面に対応する。H-2 区の北側は旗本成瀬家、南側は旗本保科家屋敷の範囲にあたる。H-2 区 1 面は北西から南東へ緩やかに傾斜しているが、旗本成瀬家と旗本保科家の屋敷境にあたる部分で急斜面となり、旗本保科家の屋敷地内に入ると再び緩やかな傾斜へと戻る。

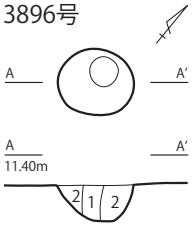
4 面からは、溝 16 条、埋桶 5 基、礎石 12 基、ピット 69 基、土坑 29 基、落ち込み 1 基、遺物集中 2 基、築山状遺構 1 基、杭穴 1 基、杭列 1 基、硬化面 3 基、イヌ埋葬跡 1 基、盛土層 2 基、焼土層 1 基、炭化物集中 1 基、炭化物層 3 基が検出された。

【地下室】

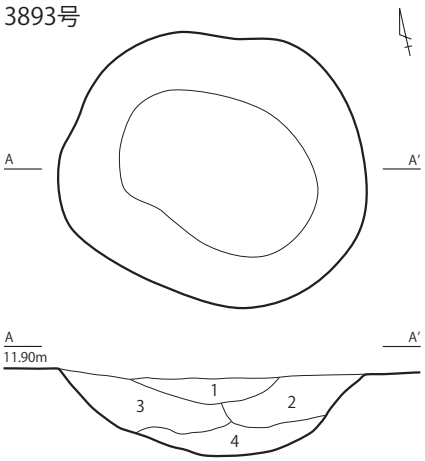
4080 号（第 1-201 図、図版 3-66-3 ～ 5、第 3-16 表）

4080 号は H-2 区南西部に位置し、東西方向に長辺を持つ長方形の地下室である。壁面は 4 面とも側板が残存していた。側板は横方向に板材を組み、桟木で抑え固定されていた。さらに土圧で潰れることのないよう角材の梁 2 本が渡され、補強がなされていた。また、この固定部分には釘は使用されておらず､木を組むことで固定されていた。遺構の規模は梁行が半間(約 1m)､桁行が 1 間半(約 2.9m)であった。各部材の樹種は、側板がアカマツ・トガサワラ・モミ属、桟木がアカマツとモミ属、梁が

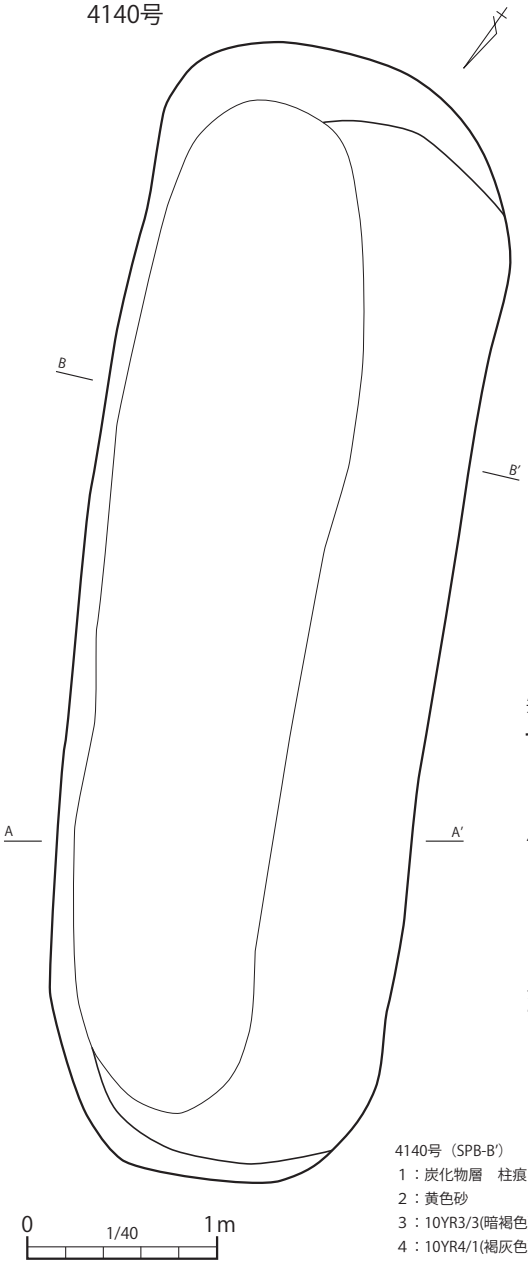


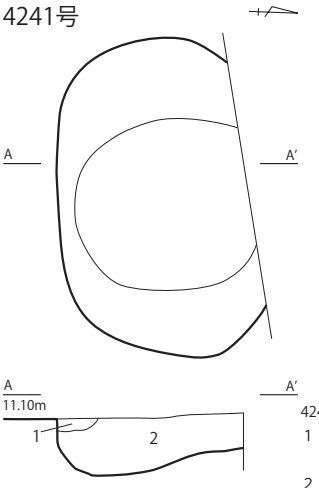


3890・3896号共通
1：10YR4/1(褐灰色)　しまり：弱い　粘性：極強
　柱痕(腐食木材残る)の内部に２層がダマ状に入る(φ3～5mm60%)
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：極強　ローム粒φ1mm1%
　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ1～3mm5%　マトリクス灰黄褐粘質土

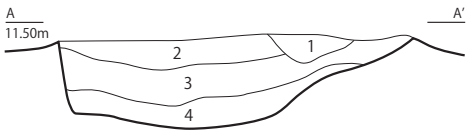


3893号
1：10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：なし　黄色砂質シルトブロックφ10～20mm3%
　砂層
2：10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：なし　黄色砂質シルトブロックφ10～30mm10%
3：10YR6/3(にぶい黄橙色)　しまり：やや強い　粘性：なし　砂層
4：10YR6/3(にぶい黄橙色)　シルトブロックφ50～60mm20%　砂層

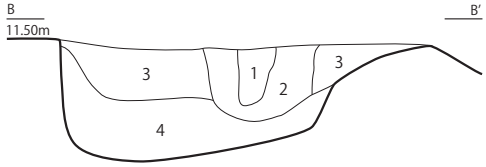




4241号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
　砂質シルトブロックφ10～20mm5%
2：砂質シルトブロック層φ30～200mm



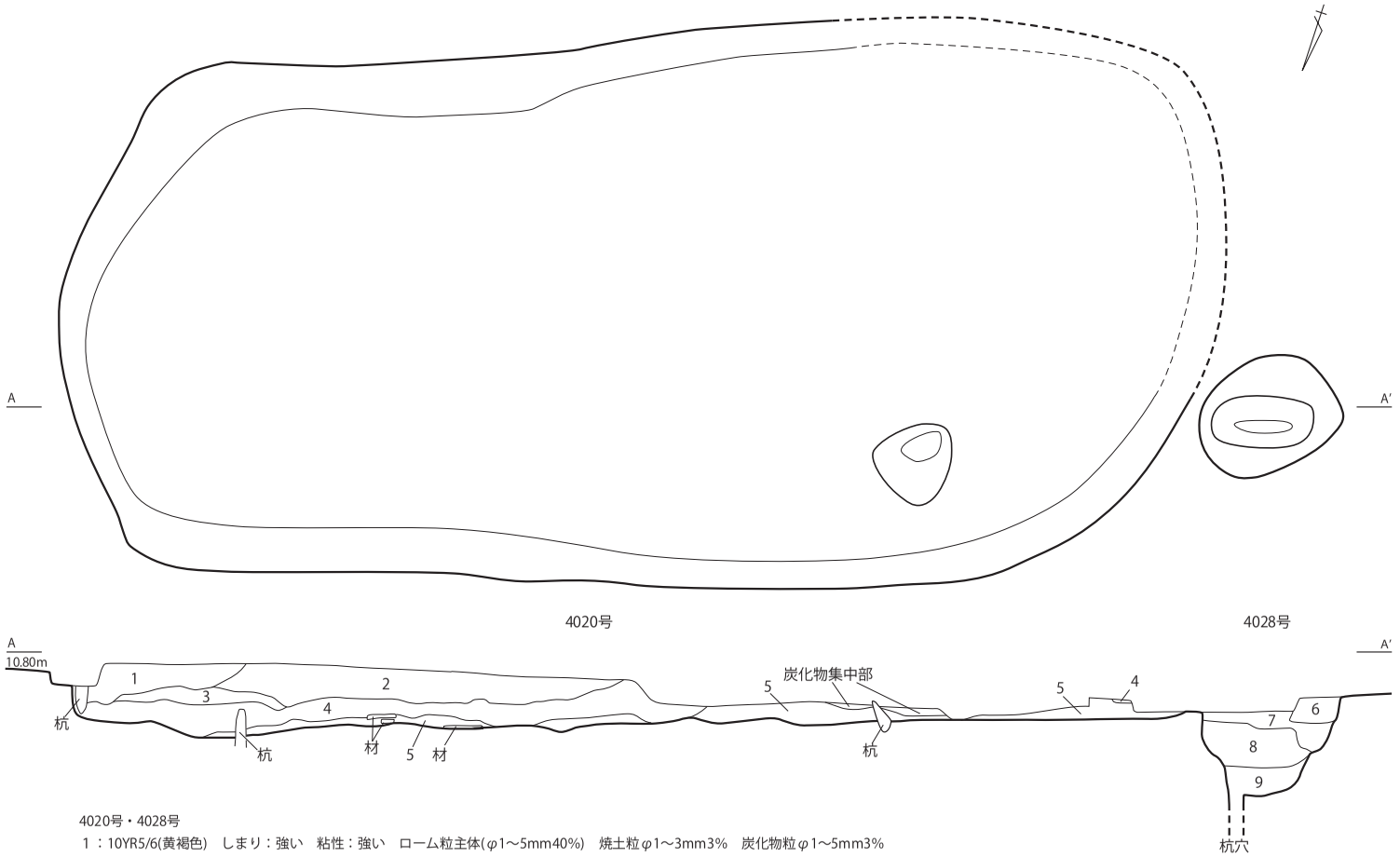
4140号（SPA-A′）
1：10YR4/1(褐灰色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　砂質シルトブロックφ10～30mm15%
2：10YR4/1(褐灰色)　しまり：やや強い　粘性：強い　3層との境界に層厚2～4mmの砂層
3：10YR5/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：強い　砂ブロックφ30～100mm10%
4：10YR5/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：強い　砂30%



4140号（SPB-B′）
1：炭化物層　柱痕
2：黄色砂
3：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10～30mm3%
4：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：やや強い　黄色砂ブロックφ10～20mm5%　炭化物ブロックφ5～10mm5%

第 1-205 図　H-2 区 5 面の遺構（１）(1/40)

4020・4028号



4020号・4028号

1：10YR5/6(黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒主体(φ1～5mm40%)　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ1～5mm3%

2：2.5Y5/1(黄灰色)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒φ1～5mm5%　焼土粒φ1～2mm2%　炭化物粒φ1～5mm7%　空隙ややあり砂質

3：10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：極強　ローム粒(錆)φ1～2mm20%　焼土粒φ1～2mm2%

4：2.5Y5/2(暗灰黄色)　しまり：強い　粘性：強い　黄色砂粒φ3～10mm5%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～10mm10%　黄灰色粘土粒φ3～7mm5%　赤錆5%

5：7.5YR6/2(灰褐色)　しまり：強い　粘性：極強

6：2.5Y5/4(黄褐色)　しまり：極強　粘性：あり　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～3mm1%　黄褐色(2.5Y5/3)粘土粒φ5～10mm20%

7：2.5Y5/1(黄灰色)　しまり：強い　粘性：極強　ローム粒φ3～5mm5%　焼土粒φ1～5mm5%　炭化物粒φ1～3mm3%　黄褐色粘土粒φ5～10mm10%
マトリクス黄灰色粘質土

8：2.5Y5/2(暗灰黄色)　しまり：あり　粘性：極強　黄褐色砂5%　焼土粒φ1～5mm5%　炭化物粒φ1～5mm5%　錆5%　暗灰黄粘土主体

9：2.5Y4/1(暗灰黄色)　しまり：あり　粘性：極強　錆びたローム粒φ1～5mm5%　黄褐色砂10%　炭化物粒φ1～3mm1%

0　1/40　1m

第 1-206 図　H-2 区 5 面の遺構（2）（1/40）

モミ属となっている（第Ⅷ章 5 項参照）。SPA-A′では 1 層から 5 層が室部の覆土、6 層から 9 層が掘方の覆土にあたる。1 層から 5 層は類似した土層で、砂質シルトブロックや炭化物粒を含む砂質土層である。6 層から 8 層は砂や焼土粒、ロームブロックを含む黒褐色土層で、9 層は 8 層がグライ化した部分である。SPB-B′では側板の上部が失われていた。1 層は側板が失われた後に堆積した土層、2 層から 6 層が室部の覆土、7 層から 9 層が掘方部分の覆土である。1 層は砂質シルトブロックや炭化物粒を含む砂層である。2 層と 3 層は砂をブロック状に含む層で、3 層は 2 層がグライ化した部分である。4 層は砂利層で、5 層は砂層と粘質土層が互層に堆積する部分である。6 層は 5 層で見られた粘質土層がグライ化した部分である。掘方部分の 7 層と 8 層は黒褐色土層で、砂やローム粒、炭化物粒を含む。9 層は 8 層がグライ化した部分である。出土遺物の点数、重量は 357 点、9,907.7g である。出土遺物から遺構の年代は 17 世紀第 3 四半期に位置付けられる。

【土坑】

3431 号（第 1-202 図、第 3-16 表）

3431 号は H-2 区南東部に位置する方形の土坑で、壁面は真っ直ぐに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は 4 層に分かれており、砂質シルトや焼土粒、炭化物粒などを含む層が堆積する。出土遺物から遺構の年代は 18 世紀前葉に位置付けられる。

3871 号（第 1-204 図、第 3-16 表）

3871 号は不整円形の土坑である。壁面は凹凸があり、外に開くように立ち上がる。覆土は 5 層に分けられる。1 層はローム粒や炭化物粒、粘土粒を含む層である。2 層と 3 層はシルトを多く含む粘質土層で、2 層下部から 3 層の上部にかけてかわらけが折り重なるようにまとまって出土した。4 層と 5 層も同様にシルトを含む粘質土層である。出土遺物は総点数 225 点、総重量 4,747.8g である。出土遺物から遺構の年代は 18 世紀初頭に位置付けられる。

3877・3880 号（第 1-202 図、図版 3-68-3、第 3-16 表）

3877 号は H-2 区北西部に位置する土坑である。平面形は方形を呈し、壁際に杭がめぐる。杭は側板を固定していたものと考えられるが、側板自体は残存していなかった。底面は平坦で、壁面も真っすぐに立ち上がるが、北側の壁面は段状に掘り込まれている。覆土は 1 層が 3880 号覆土、2 層かが 6 層が 3877 号の覆土にあたる。3880 号は円形のピットで、覆土（1 層）はロームやシルトを含む粘質土層である。3877 号覆土（2 層から 6 層）のうち 3 層から 6 層は掘方部分にあたる。2 層はローム粒や粘土粒を含むしまりが極めて強い土層で、杭に囲まれた内部に堆積する。3 層は同様にローム粒や粘土粒を含む土層、4 層はシルトと砂で構成される層、5 層は炭化物粒を含む粘質土層、6 層はシルト層である。出土遺物の点数、重量は 16 点、480.9g である。出土遺物から遺構の年代は 17 世紀後葉以降であると考えられる。

3903 号（第 1-204 図、第 3-16 表）

3903 号は楕円形の浅い土坑である。ブロック状の砂や焼土を含む土層を覆土とし、壁面や底面は凹凸が目立つ。覆土中からは鉄製刀が出土している（第 2-186 図 142）。出土遺物の点数、重量は 87 点 1,595.7g である。出土遺物から遺構の年代は 17 世紀後葉と考えられる。

4016 号（第 1-202 図、第 3-16 表）

4016 号は H-2 区南西部に位置する円形の土坑で、底面には礫が据えられていた。壁面は外に開く

ように真っ直ぐに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は単層で焼土粒や炭化物粒を含む粘質土が堆積する。出土遺物の点数、重量は 10 点、273.9g である。出土遺物から遺構の年代は 17 世紀後葉以降と考えられる。

4029・4030 号（第 1-202 図、第 3-16 表）

H-2 区南西部に位置する 4029 号は楕円形の土坑、4030 号は肩の部分に礎石が据えられたピットで 4029 号を切る。どちらの覆土も類似しており、砂や焼土、炭化物粒などを含む層である。遺物は出土しなかった。

【礎石】

4228 号（第 1-203 図、第 3-16 表）

4228 号は H-2 区北西部の中でも南部の屋敷境付近に位置する。円形の掘方をもつ礎石で、単独で検出された。礎石は二つの石が積み上げられており、1 段目の石は根石で固定される。出土遺物の点数、重量は 215 点、4,912.0g である。出土遺物から遺構の年代は 18 世紀第 2 四半期に位置付けられる。

【ピット】（第 1-203 図、第 3-16 表）

H-2 区 4 面からは 14 個のピットが検出されている。そのうち、H-2 区南西部に位置する 4030 号、4039 号、4034 号の 3 つと 4036 号、4037 号、4038 号は等間隔に並ぶピット列をなす。4036 号、4037 号、4038 号はいずれも柱痕をもつピットであり、なんらかの上部構造を持っていたと考えられる。ピットの間隔は 4030 号、4039 号、4034 号が 1.6 m程度、4036 号、4037 号、4038 号が 1.4 ～ 1.5 mであった。

【イヌ埋葬跡】

3768 号（第 1-204 図、第 3-16 表）

3768 号は H-2 区南西部、3800 号上から検出されたイヌの全身骨格である。明確な掘り込みを伴わず、骨は遺存状態も不良であるが、原位置を保っているとみられる。頭が南に向くよう横たえた状態で埋められていた。比較的大きなイヌである（第Ⅷ章第 3 節参照）。

H　5 面

H-2 区 5 面は F-1 区 5 面、H-1 区 5 面に対応する面で、旗本成瀬家の屋敷の時期にあたる。H-2 区南端部分は旗本屋敷保科家の屋敷地にあたり、G-2 区 4 面に対応する。

5 面からは、溝 2 条、礎石 3 基、埋桶 1 基、土坑 9 基、ピット 20 基、焼土層 1 基、硬化面 1 基、遺物集中 1 基が検出された。

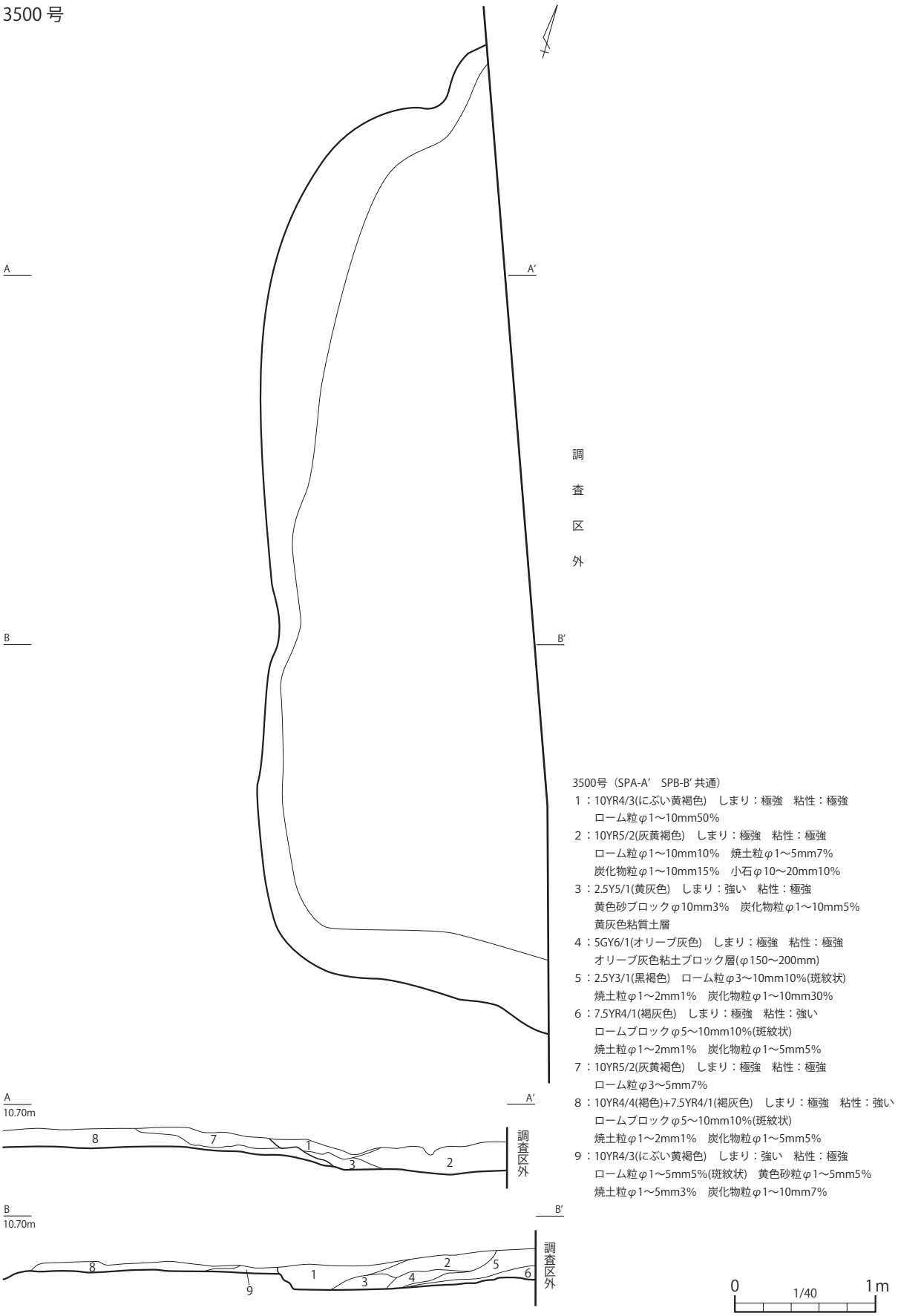
【土坑】

3893 号（第 1-205 図、第 3-16 表）

3893 号は H-2 区北西部に位置する円形の土坑で、壁面はゆるやかに立ち上がる。覆土は 4 層に分かれるが総じて砂を多く含む層であり、1 層、3 層、4 層は砂層である。遺物は出土しなかった。

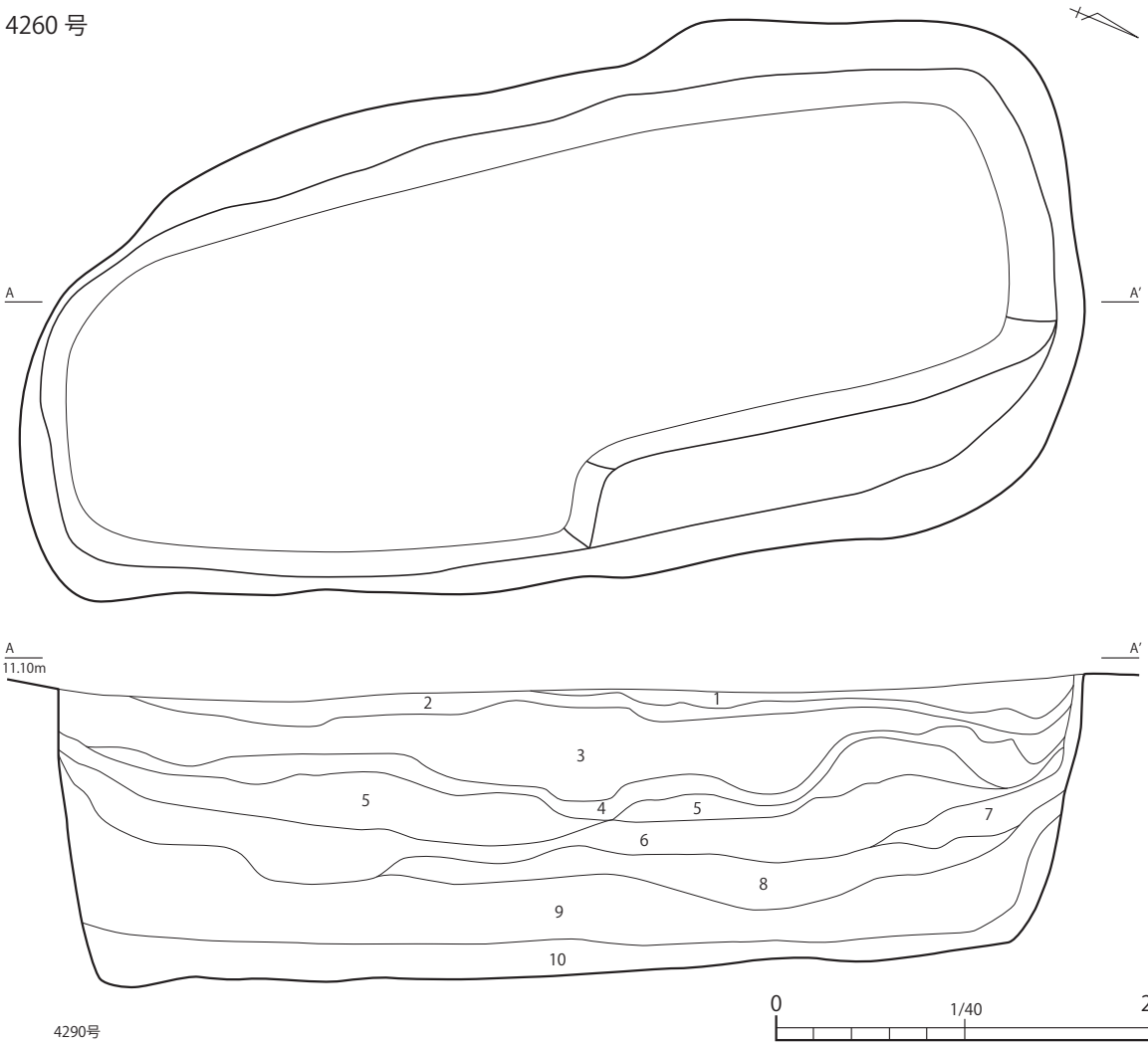
4140 号（第 1-205 図、図版 3-68-1、第 3-16 表）

4140 号は H-2 区北西部に位置する長方形の大型土坑である。直下には 6 面の 4260 号が位置しており、盛土が落ち込んだ部分が利用されたものと考えられる。4140 号の壁面は、東側では真っ直ぐに立ち上がるが、西側はゆるやかに立ち上がっている。覆土も西から東へと流れ込むように堆積していた。覆土の堆積状況は南北で異なり、北側（SPA-A'）では覆土は 4 層に分かれるが、すべて砂を多



3500号（SPA-A′　SPB-B′共通）
1：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：極強　粘性：極強
　ローム粒φ1～10mm50%
2：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：極強　粘性：極強
　ローム粒φ1～10mm10%　焼土粒φ1～5mm7%
　炭化物粒φ1～10mm15%　小石φ10～20mm10%
3：2.5Y5/1(黄灰色)　しまり：強い　粘性：極強
　黄色砂ブロックφ10mm3%　炭化物粒φ1～10mm5%
　黄灰色粘質土層
4：5GY6/1(オリーブ灰色)　しまり：極強　粘性：極強
　オリーブ灰色粘土ブロック層(φ150～200mm)
5：2.5Y3/1(黒褐色)　ローム粒φ3～10mm10%(斑紋状)
　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～10mm30%
6：7.5YR4/1(褐灰色)　しまり：極強　粘性：強い
　ロームブロックφ5～10mm10%(斑紋状)
　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～5mm5%
7：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：極強　粘性：極強
　ローム粒φ3～5mm7%
8：10YR4/4(褐色)+7.5YR4/1(褐灰色)　しまり：極強　粘性：強い
　ロームブロックφ5～10mm10%(斑紋状)
　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～5mm5%
9：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：極強
　ローム粒φ1～5mm5%(斑紋状)　黄色砂粒φ1～5mm5%
　焼土粒φ1～5mm3%　炭化物粒φ1～10mm7%

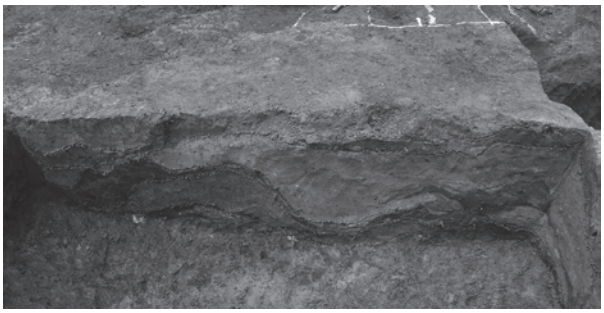
第 1-207 図　H-2 区 6 面の遺構（1）（1/40）



4290号
1：10YR7/6(橙色)　しまり：あり　粘性：なし　砂層
2：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：強い　粘土層
3：2.5Y7/6(明黄褐色)　しまり：あり　粘性：なし　砂層
4：N3/0(暗灰色)　しまり：強い　粘性：強い　粘土層
5：5BG7/1(明青灰色)　しまり：あり　粘性：なし　グライ化した砂層
6：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：やや強い　青灰色砂20%
7：5BG(明青灰色)　しまり：あり　粘性：なし　砂層
8：10YR3/1(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い
9：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：強い
10：N2/0(黒色)　しまり：極強　粘性：極強



2.　4260号全景（南東から）

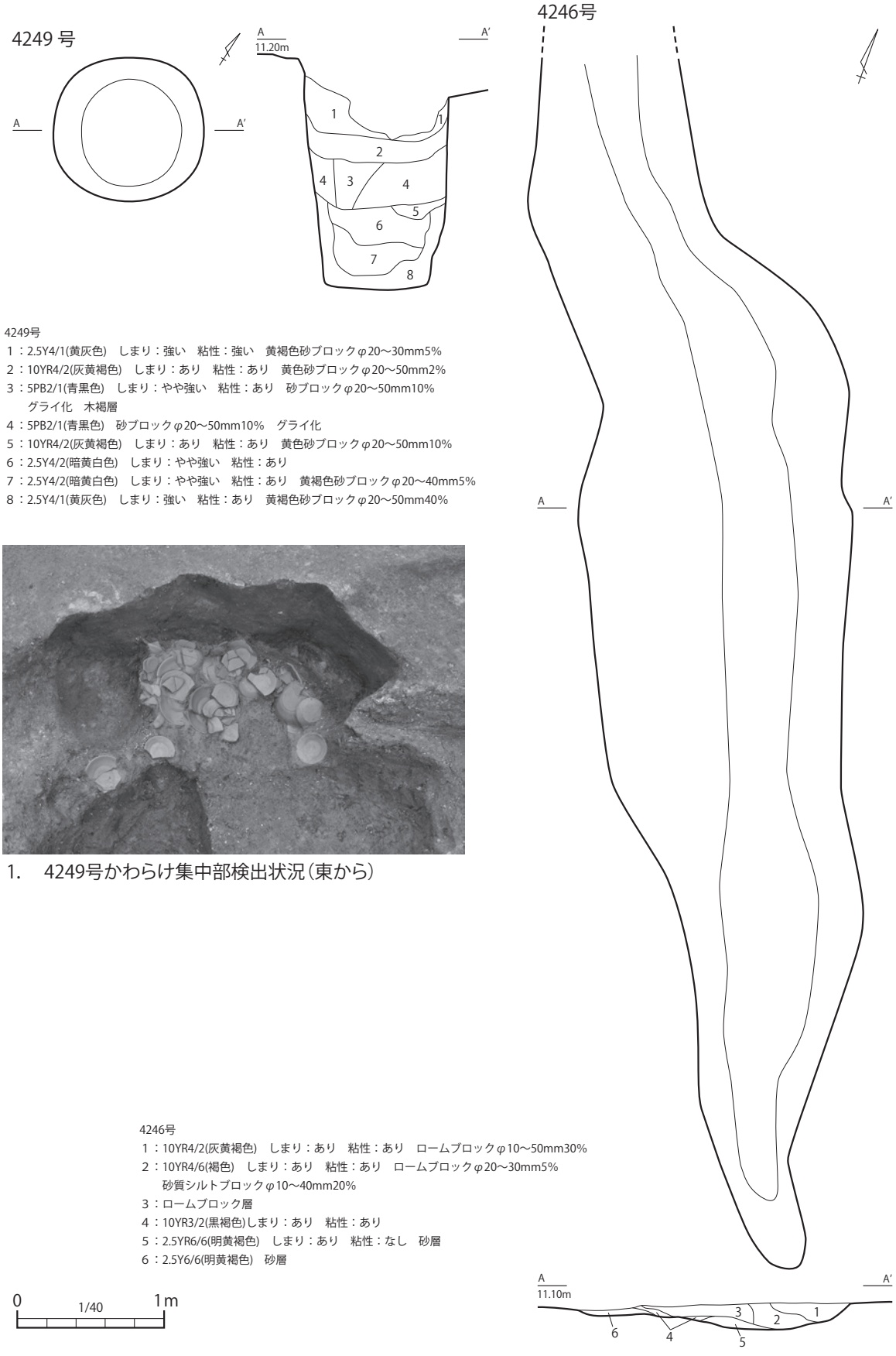


2.　4260号南側上部土層断面（東から）



3.　4260号南側下部土層断面（東から）

第 1-208 図　H-2 区 6 面の遺構（２）（1/40）



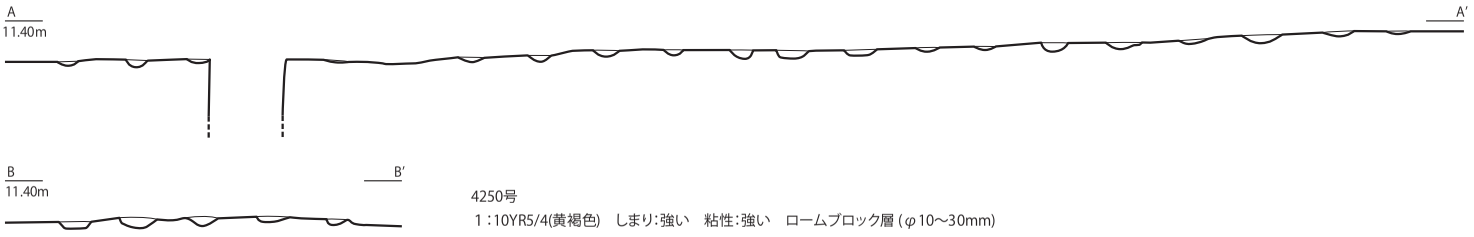
4249号
1：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：強い　粘性：強い　黄褐色砂ブロックφ20～30mm5%
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄色砂ブロックφ20～50mm2%
3：5PB2/1(青黒色)　しまり：やや強い　粘性：あり　砂ブロックφ20～50mm10%
　グライ化　木褐層
4：5PB2/1(青黒色)　砂ブロックφ20～50mm10%　グライ化
5：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄色砂ブロックφ20～50mm10%
6：2.5Y4/2(暗黄白色)　しまり：やや強い　粘性：あり
7：2.5Y4/2(暗黄白色)　しまり：やや強い　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ20～40mm5%
8：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：強い　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ20～50mm40%

1.　4249号かわらけ集中部検出状況（東から）

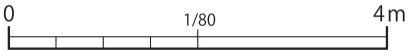
4246号
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10～50mm30%
2：10YR4/6(褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ20～30mm5%
　砂質シルトブロックφ10～40mm20%
3：ロームブロック層
4：10YR3/2(黒褐色)しまり：あり　粘性：あり
5：2.5YR6/6(明黄褐色)　しまり：あり　粘性：なし　砂層
6：2.5Y6/6(明黄褐色)　砂層

第 1-209 図　H-2 区 6 面の遺構（３）(1/40)

4250 号



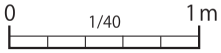
4250号
1：10YR5/4(黄褐色)　しまり:強い　粘性:強い　ロームブロック層（φ10～30mm）



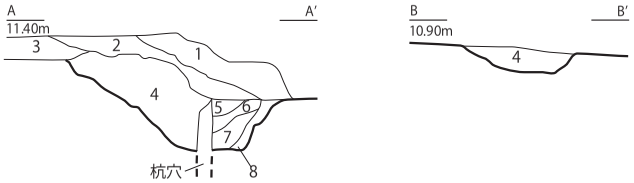
4251 号



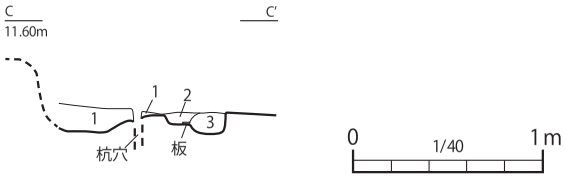
4251号
1：砂質シルトブロックφ10～20mm10%
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり:あり　粘性:あり　ロームブロックφ50～80mm20%　砂質シルトブロックφ20～50mm30%



4343 号



4019・4021 号



4343号（SPA-A′　SPB-B′）
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:やや強い　粘性:やや弱い　砂粒φ5～10mm2%　白色砂粒φ1～3mm3%　焼土粒φ5～10mm1%　炭化物ブロックφ10～20mm5%　砂質土層
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:やや強い　粘性:あり　ローム粒φ5～10mm2%　焼土粒φ5～10mm2%　炭化物粒φ5～10mm2%
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり:弱い　粘性:あり　ロームブロックφ10～30mm2%　炭化物粒φ5～10mm2%
4：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:強い　粘性:強い　ローム粒φ3～10mm2%　炭化物粒φ5～10mm1%　粘土層
5：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:強い　粘性:強い　黄色砂と層厚2～3cmでの互層に堆積
6：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:強い　粘性:強い　ローム粒φ3～10mm2%　炭化物粒φ5～10mm1%　粘土層
7：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:強い　粘性:強い　ローム粒φ3～5mm3%　ロームブロックφ10～20mm5%
8：10YR4/1(褐灰色)　しまり:あり　粘性:やや強い　砂ブロックφ5～10mm2%
4019号・4021号　SPC-C′
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:強い　粘性:強い　ローム粒φ3～10mm2%　炭化物粒φ5～10mm1%　粘土層
2：10YR4/1(褐灰色)　しまり:強い　粘性:強い　黄色シルト粒φ5～10mm5%　白色砂粒φ1～3mm2%　炭化物粒φ3～5mm1%　粘土粒φ1～5mm
3：10YR3/1（黒褐色）　しまり:やや強い　粘性:あり　ローム粒φ1～3mm1%

第 1-210 図　H-2 区 6 面の遺構（4）（1/40・1/80）

く含む粘質土で構成されている。一方、南側（SPB-B‘ では、1 層は柱痕と見られる炭化物層、2 層は砂層で、1 層を覆うように堆積する。3 層はローム粒を含む層で、4 層は黄色の砂や炭化物粒を含む層である。出土遺物の点数、重量は 150 点、6,733.2g である。出土遺物から遺構の年代は 17 世紀第 4 四半期に位置付けられる。

4020 号（第 1-206 図、図版 3-67-7、第 3-16 表）

4020 号は H-2 区南西部に位置する楕円形の大型土坑である。底面は凹凸が顕著である。壁面は真っすぐに立ち上がっている。当初、地下室を想定して調査を行ったものの、側板や杭などといった地下室に付随するものは検出されなかったため土坑とした。ただ、最下層である 5 層では炭化物集中が見られたことから、側板などが存在した可能性も考えられる。覆土は 1 層から 5 層がそれにあたる。5 層の上面には炭化物集中がみられた。出土遺物の点数、重量は 943 点、25,339.1g である。出土遺物から遺構の年代は 18 世紀初頭に位置付けられる。

4241 号（第 1-205 図、第 3-16 表）

4241 号は H-2 区北西部に位置する円形の土坑である。壁面は真っ直ぐに立ち上がり、底面は北に向かって浅くなっている。覆土は砂質シルトブロック層である。遺物は出土しなかった。

l　6 面

H-2 区の 6 面は近世最初期の盛土層（以下、6 面盛土層）上にあたる。この 6 面盛土層は旗本屋敷地として最初に造成が行われた際の盛土層であり、6 面で検出された遺構は旗本屋敷地のなかでも最も古い段階を占めるものであると言える。H-2 区の 6 面は F-1 区 6 面、H-1 区 6 面に対応する。6 面は南に向かってゆるやかに傾斜しているのを除き、起伏は見られないが、これは 5 面造成時に削平されたことによる可能性が高い。6 面は発見された遺構から屋敷部分ではなく、屋敷境付近の未利用地にあたるものと考えられる。

6 面からは、溝群 2 区画、溝 8 条、土坑 28 基、落ち込み 2 基、ピット 25 基、盛土層 1 基、イヌ埋葬跡 1 基が検出された。

【土坑】

4260 号（第 1-208 図、図版 3-68-4、第 3-16 表）

4260 号は H-2 区北西部に位置する長方形の大型土坑である。覆土中には遺物を多量に含む廃棄層と呼べるものは見られず、地下室である可能性も考えられる。壁面は真っすぐに立ち上がり、底面は南に向かって若干傾斜するも平坦である。また、北東部にはテラス状の段が見られた。

覆土は 10 層に分かれるが、砂層と粘土層により構成される。1 層、3 層、5 層、7 層は砂層で 5 層はグライ化した砂層である。2 層、4 層、6 層、8 層から 10 層が粘土層で 6 層はグライ化した砂を含んでいる。出土遺物の点数は 50 点、重量は 5,127.8g である。出土遺物から遺構の年代は 17 世紀第 3 四半期に位置付けられる。

4249 号（第 1-208 図、図版 3-67-3、第 3-16 表）

4249 号は H-2 区北西部に位置する円筒形の土坑である。井戸であることが想定されたが、検出面から 1 . 7 m で底面に到達しており、周辺の井戸よりも浅いことから土坑とした。覆土は 8 層に分かれ、そのうち 2 層の上面には、かわらけが折り重なるようにまとまった状態で廃棄されていた。1 層と 2 層は黄褐色の砂をブロック状に含む層で、3 層と 4 層はグライ化した砂を含む層である。3 層は 4 層

を切りこむように堆積しており、木端を多量に含んでいた。5層から8層は黄褐色の砂をブロック状に含む層で、脱色したような色調から水の影響を受けているものと考えられる。出土遺物の点数、重量は178点、4,947.4gである。出土遺物から遺構の年代は18世紀前葉以降の可能性が考えられる。

【溝群】

4250・4251号（第1-120・121・210図、図版3-68-2・5、第3-16表）

4250号・4251号はH-2区北西部に広がる、浅い溝が等間隔に並ぶ遺構で、4250号が南北方向、4251号が東西方向に溝が走っている。4250号と4251号どちらに含まれる溝も深さは10㎝程度であるが、これは上部が5面の造成時に削平されたためと考えられる。覆土は4250号がロームブロック層、4251号が砂質シルトブロック層となっており、いずれの覆土も5面盛土層に由来するものである。また、4250号から出土した遺物の点数、重量は10点、165.9gである。畑地であれば、畝上もしくは畝間溝に耕作土の堆積が見られるが、畝部分は5面造成時に削平されており、残る覆土からも耕作土と考えられる堆積は確認されなかった。一方で、土取りを目的とした溝の可能性も考えられるが、底面などに掘削時の工具痕も確認されていない。また、4250号・4251号が位置しているのはH-2区北西部であり、旗本成瀬家屋敷地内であるものの、屋敷部分からは外れた屋敷境に近い位置にあたる。屋敷地内の未利用地を畑地として利用していた可能性も十分に考えられるが、いずれにせよ、居住空間ではないことは確かであろう。

【溝】

4019・4343号（第1-121・123・210図、第3-16表）

H-2区の南西部を東西に走り、旗本成瀬家屋敷地と旗本川窪―保科家屋敷地を区画する屋敷境の溝である。覆土はSPA-A′1層から3層が5面盛土層、4層から8層が4343号覆土にあたる。4343号中央に見られる杭を境に4層と5層から8層に分かれて堆積しており、4層と6層は粘土層、5層は砂を薄い層状に含む粘土層であり、7層と8層はローム粒やロームブロック、砂を含む粘質土である。

掘り込み面は南北で標高差が見られることから、両屋敷地には標高差があり、屋敷境は段がついていたことがわかる。4343号底面の中心部には杭が見られるが、土層の堆積を見ると、杭を境に南北で堆積状況が異なっている。南北で屋敷地に標高差があることから本来、この杭は土留めを目的としたものであると思われる。また、その後の屋敷地の利用の違いや造成の違いにより杭を境に堆積が異なる状況が生まれたのであろう。なお、4343号東部のSPB-B′では単層の浅い溝として検出されている。これは4250号と同様に5面造成時に上部を削平された可能性が考えられる。4343号の西側に連なる4019号も南北で掘り込み面に標高差が見られ、同様の状況を示しているが、こちらも削平の影響か単層の溝として検出されている。4343号の出土遺物の点数、重量は136点、3,442.2gである。出土遺物から4343号は17世紀第4四半期に位置付けられる。

4246号（第1-210図、第3-16表）

4246号はH-2区北西部を南北に走る溝である。4246号は深さが20～30ｃｍ程度と浅い溝であるが、4250号と同様に上部が削平されているものと考えられ、蛇行しながらH-1区へと続いている。

覆土は6層に分かれるが、その上部の1層から3層は5面盛土層である。4層は黒褐色土層、5層と6層が砂層となる。蛇行する状況や底面に砂が堆積する状況から水の流路であったと考えられる。H-1区では4246号に接続すると考えられる溝は検出することができなかった。また、遺物は出土し

ていない。

【落ち込み】

3500 号（第 1-207 図、第 3-16 表）

3500 号は H-2 区の南東部から検出された落ち込みである。平面形は楕円形と見られ、東半分が調査区外へと続いている。底面はやや凹凸があるものの、おおむね平坦で、壁面はなだらかに立ち上がる。覆土中からは近世初頭の遺物、特にかわらけがまとまって出土した。3500 号周辺の盛土層は凹凸が目立つことから、3500 号は盛土層の落ち込みを利用して、遺物が廃棄されたものと考えられる。覆土は 6 層に分かれる。いずれの層も非常に粘性の強い土層であり、特に 4 層はオリーブ灰色粘土ブロック層となっている。なお、7 層から 9 層は 6 面盛土層の一部である。出土遺物は総点数 628 点、総重量 29,044.6g である。出土した遺物から遺構の年代は 1620 ～ 30 年代に位置付けられる。

（佐藤・大八木・合田）

5）G-1 区

G-1 区は調査区南東部に位置している。絵図・地図史料から、調査区北側を占める旗本成瀬家－鳥居家の屋敷地が南にせり出した部分で、旗本川窪家－保科家屋敷地との境界部分にあたる。また、南側も G-3 区と接しており、林家や吉田家などの屋敷との境界にあたる。1-1 面・2 面で検出された溝（812・822・888 号ほか）はこれらの屋敷地境界に設けられた溝と考えられる。

第Ⅲ章基本層序ですでに述べてきたが、G-1 区は埋没谷の中でも特に深い部分であり、中世段階においても谷地形のまま埋没していなかったようで旗本屋敷拝領以前の遺構は確認されていない。

G-1 区では、近代、近世合わせて合計面の 6 面の遺構確認面が検出され、そのうち 1-1 面から 5 面が近世、旗本屋敷期にあたる。

A　1-1 面

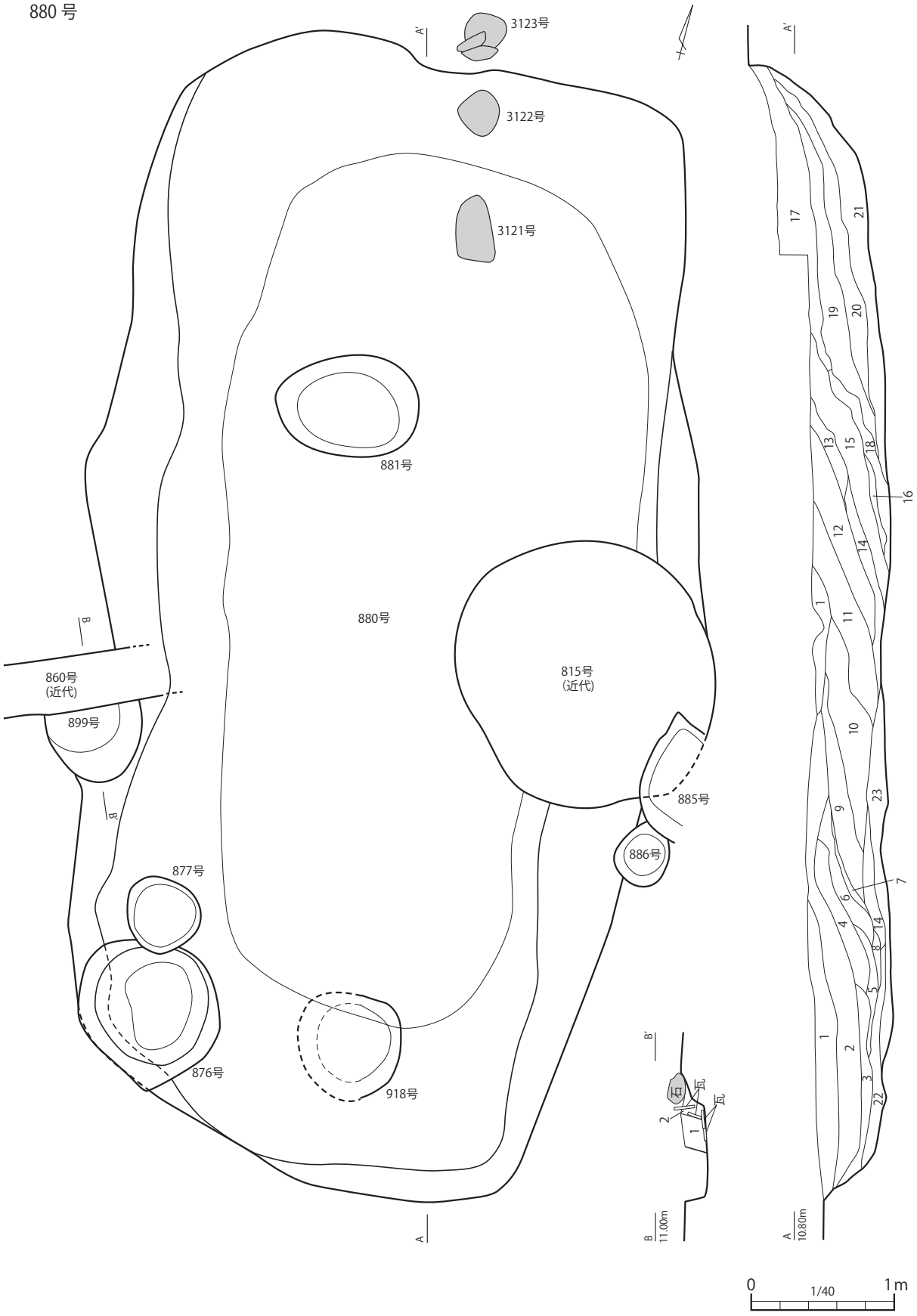
G-1 区 1- 1 面は G-2 区の 1-1 面および H-2 区 1 面に対応しており、旗本鳥居家屋敷の時期にあたる。812 号・822 号・920 号等の溝によって区画される旗本成瀬家－鳥居家敷地の南東角から張り出した部分に相当し、H-2 区 1 面から続いて北西から南東へ緩やかに傾斜している。880 号（大型土坑）、876 号（粘土堆積土坑）、900 号（瓦廃棄土坑）の他には小規模な土坑やピット、単独の埋桶が点在するのみで、明確に建物遺構等に比定される遺構はなく、屋敷内で積極的にこの空間を利用した痕跡は認められなかった。後述するように、保科家と成瀬家の南北面の屋敷境（G-2 区・H-2 区の調査区境界周辺）では、1-1 面から 3-3 面にかけてイヌの全身骨が 14 頭検出されているが（第Ⅷ章第 3 項、第 2-240 図）、保科家と成瀬家の東西面屋敷境（G-1 区と G-2 区の調査区境界付近、882 号南北方向部分）でも、イヌ 1 頭分の全身骨が検出された（870 号）。南北面同様に成瀬家側の屋敷境で発見されており、成瀬家では屋敷境にイヌの遺体を埋葬（または廃棄）することが繰り返されたと考えられる。

1-1 面では溝 5 条、埋桶 2 基、瓦溜り 1 基、土坑 10 基、ピット 22 基、杭跡 2 基、炭化物集中 1 基、硬化面 1 基、イヌ埋葬跡 1 基が検出されている。

【溝】

812 号・822 号・893 号・920 号（第 1-49・50・212 図、第 3-16 表）

822 号は G-1 区と G-2 区の境を南北に走る溝で、812 号は 822 号南端から約 160 度の角度で東に



第 1-211 図　G-1 区 1-1 面の遺構（1）（1/40）

880号(SPA-A')
1:10YR4/4(褐色)　しまり::極強　粘性:あり　黄色砂10%(φ3〜5mmブロック3%)　焼土粒φ1〜3mm2%　炭化物粒φ1〜5mm7%　白色粒5%
2:10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:極強　粘性:強　ローム粒φ1〜7mm10%　焼土粒φ1〜10mm2%　炭化物粒φ1〜7mm5%
3:7.5YR4/3(褐色)　しまり:あり　粘性:強い　ローム粒砂質シルト粒5%　焼土粒3%　炭化物粒φ1〜5mm3%
4:10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:極強　粘性:あり　ローム粒φ1〜10mm7%　焼土粒φ5〜10mm7%　焼土ブロックφ15mm7%　炭化物粒φ3〜10mm10%　灰色粘土粒φ5mm3%
5:7.5YR4/2(灰褐色)　しまり:あり　粘性:弱い　焼土粒φ1〜2mm20%　炭化物粒φ1〜3mm3%　黄色砂3%
6:2.5Y5/3(黄褐色)　しまり:強い　粘性:弱い　ローム粒φ1〜5mm5%　黄色砂10%　焼土粒φ1〜3mm3%　炭化物粒φ1〜10mm7%
7:7.5YR4/2(灰褐色)　しまり:あり　粘性:弱い　焼土粒φ1〜2mm20%　炭化物粒φ1〜5mm3%
8:2.5Y5/1(黄灰色)　しまり:弱い　粘性:強い　黄灰色粘土主体70%　炭化物粒φ1〜5mm3%
9:2.5Y5/3(黄褐色)　しまり:強い　粘性:弱い　ローム粒φ1〜5mm5%　黄色砂10%　焼土粒φ1〜3mm3%　炭化物粒φ1〜10mm7%
10:2.5Y5/3(黄褐色)　しまり:あり　粘性:弱い　黄色砂10%　焼土粒φ10%　焼土粒φ1〜3mm5%　炭化物φ1〜3mm5%
11:10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:極強　粘性:あり　ローム粒φ1〜3mm7%　黄色砂5%　白色粒5%　焼土粒φ1〜3mm3%　炭化物粒φ1〜7mm3%
12:7.5YR4/6(褐色)　しまり:極強　粘性:あり　ローム粒φ1〜5mm5%　焼土粒φ3〜10mm15%　焼土ブロックφ15mm5%　炭化物粒φ3〜7mm15%　灰黄色粘土ブロックφ15mm3%
13:2.5Y5/4(黄褐色)　しまり:極強　粘性:弱い　黄色砂10%(ラミナ状)　焼土粒φ1〜5mm2%　炭化物粒φ1〜3mm2%
14:2.5Y5/4(黄褐色)　しまり:強い　粘性:強い　ローム粒φ3〜5mm5%　黄色砂5%　焼土粒φ3〜10mm5%　炭化物粒φ3〜5mm5%
15:10YR3/4(暗褐色)　しまり:強い　粘性:強い　ローム粒φ1〜5mm3%　焼土粒φ3〜10mm10%　焼土ブロックφ15mm5%　炭化物粒φ3〜10mm10%
16:2.5Y6/6(明黄褐色)　しまり:弱い　粘性:強い　黄色砂主体60%　暗褐色土(14層のマトリクス部分)を20%含む
17:2.5Y6/6(明黄褐色)　しまり:弱い　粘性:弱い　黄色砂主体80%
18:7.5YR4/6(褐色)　しまり:強い　粘性:強い　黄色砂5%　焼土粒φ5〜10mm15%　焼土ブロックφ15mm5%　炭化物粒φ3〜10mm10%　焼土層
19:10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり:強い　粘性:強い　ローム粒斑紋状φ1〜5mm5%　黄色砂2%　黄色砂粒φ5〜7mm2%　焼土粒φ3〜5mm7%　炭化物粒φ1〜3mm5%
20:7.5YR4/6(褐色)　しまり:強い　粘性:あり　ローム粒φ3〜5mm5%　焼土粒φ3〜10mm15%　焼土ブロックφ15mm10%　炭化物粒φ3〜5mm10%　灰黄色粘土粒φ3〜5mm5%
21:10YR2/1(黒)　しまり:弱い　粘性:弱い　炭化物層(φ3〜15mm50%)　マトリクスは黄灰色(2.5Y5/1)粘土と灰黄褐色(10YR5/2)粘質土
22:10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:極強　粘性:極強　焼土粒φ1〜3mm2%　炭化物粒φ1〜3mm5%
23:2.5Y4/2(暗灰黄色)　しまり:極強い　粘性:強い　ローム粒φ1〜3mm2%　焼土粒φ1mm1%　炭化物粒φ1〜3mm1%

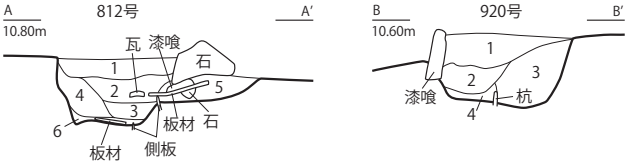
899号(SPB-B')
1:10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:弱い　粘性:あり　黄色砂3%　焼土粒φ3〜5mm3%　炭化物粒φ3〜5mm5%
2:10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり:強い　粘性:あり　黄色砂1%　焼土粒φ1〜3mm2%　炭化物粒φ5〜10mm3%　瓦片10%

曲がり、G-1 区と G-３区の境を東西に走る溝である。両者は一連の溝と考えられるが、接続部分と考えられる箇所に撹乱を受け覆土の残存状況が不良だったことにより連続性が確定できなかったため、別の遺構番号を付して調査を行った。822 号は G-1 区 2 面の 888 号（木組溝）と並走し、812 号は 920 号（木組溝）とほぼ重なっている。822 号は成瀬家敷地が南に張り出した箇所と保科家敷地の地境にあたり、812 号・920 号は成瀬家敷地と林家（または兼松家）敷地の地境にあたると考えられる。いずれの溝も検出状況から 1-1 面として報告するが、実際にはさらに古い時期から同じ位置に繰り返し掘り込まれた溝の最終形態が残っていたものと考えられる。

822 号は上半が開く逆台形、底面から約 15 〜 20cm まで箱型を呈するゆるい薬研状の断面となっている。底面には細い杭跡が多くかつランダムに認められる。南北方向北側の東側壁は、検出面から約 20cm で更に東側に広がり、２段のテラス状となっている。断面の覆土観察で、テラス部分の覆土を 822 号が掘り込んでいることが確認されたため（図 1-212）、テラス部分は 893 号として扱った。893 号は 822 号よりも色調が明るい褐灰色土やにぶい黄褐色土が堆積し、かなり強く締まる。822 号の西側から 888 号にかけてまでも同じ土層が確認できたことから、893 号は 882 号より西側の整地痕跡である可能性が高い。822 号は G-1 区の調査区北壁付近で急激に浅くなる。調査区北壁断面ではかろうじて掘り込みが確認できていたが、H-2 区側の調査では面的に確認できなかった。部分的に検出された H-2 区 3-1 面の木組溝 3310 号・3352 号とつながる可能性もあるが、周辺は近代の遺構により掘削を受けているため、確定には至らなかった。822 号の覆土は、締まりが極強い灰褐色土を主体とする。底面の箱型部分はそれより上層の覆土に比べ締まりがやや弱く、水平に堆積している。上層は炭化物や焼土を多く含む灰黄褐色土で、部分的に瓦片を大量に含む。

812 号も断面が薬研状となっていたと考えられるが、地盤が軟弱なため全体的に歪み、明確な断面形状は不明である。中央から東端にかけて小ぶりの間知石が点在しているため、石組を伴っていた可能性も考えられる。さらに、南壁に沿って部分的に漆喰が残っていた。覆土は 822 号の上層と似

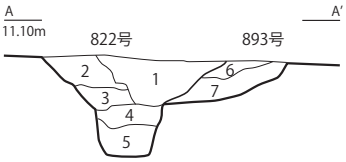
812・920号



812号・920号

1：10YR3/2(黒褐色)　しまり:極強　粘性:強い　焼土粒φ3～5mm5%　炭化物粒φ3～10mm10%　瓦片多(10%)
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり:極強　粘性:極強　焼土粒φ3～5mm3%　炭化物粒φ3～10mm5%
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり:極強　粘性:極強　焼土粒φ3～5mm3%　炭化物粒φ3～10mm5%　瓦片40%
4：10YR2/2(黒褐色)　しまり:強い　粘性:強い　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～5mm3%　礫φ5～10mm2%含む　場所により瓦片を多量に含む　粒子細
5：10YR4/1(褐灰色)　しまり:強い　粘性:強い　ローム粒φ1～2mm1%　焼土粒φ1～5mm3%　炭化物粒φ1～5mm2%　空隙なく緻密
6：10YR5/4(にぶい黄褐色)　しまり:極強　粘性:強い　ローム粒φ1～3mm7%　黄色砂3%　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ3～5mm5%

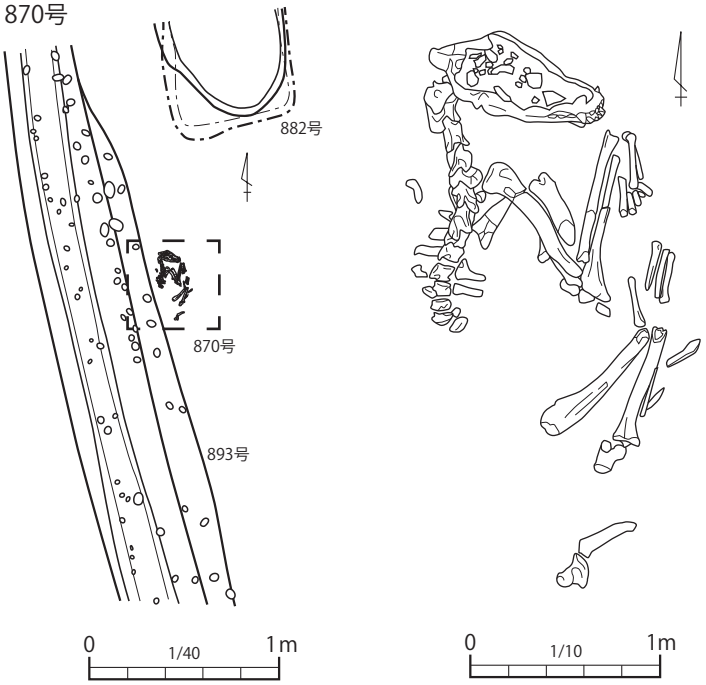
822・893号



822号・893号

1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:強い　粘性:あり　ローム粒φ1～5mm5%　焼土粒φ1～10mm10%　炭化物粒φ1～10mm10%
　瓦片20%　小石10%
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:極強　粘性:あり　ローム粒φ1～5mm5%　焼土粒φ1～10mm10%　炭化物粒φ1～10mm10%
3：10YR4/1(褐灰色)　しまり:極強　粘性:あり　ローム粒φ1～10mm5%　焼土粒φ1～10mm10%　炭化物ブロックφ15mm15%
4：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり:強い　粘性:強い　ローム粒φ1～5mm5%　黄色砂3%　焼土粒φ1～10mm10%
　炭化物粒φ1～10mm10%
5：10YR5/1(褐灰色)　しまり:強い　粘性:極強　ローム粒φ1～5mm3%　焼土粒φ1～5mm3%　炭化物粒φ1～3mm5%
　黄灰色粘土φ5～10mm10%　赤錆φ5～10mm10%
6：10YR4/1(褐灰色)　しまり:極強　粘性:あり
7：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり:極強　粘性:あり　ローム粒φ1～3mm5%　焼土粒φ1～5mm７%　炭化物粒φ1～5mm5%

870号



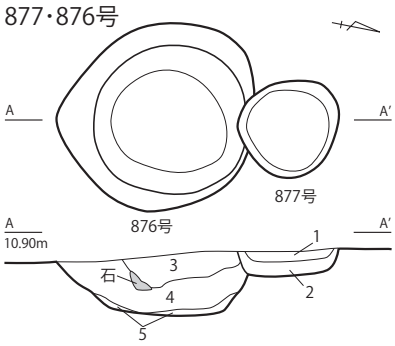


1.　870号獣骨検出状況(東から)

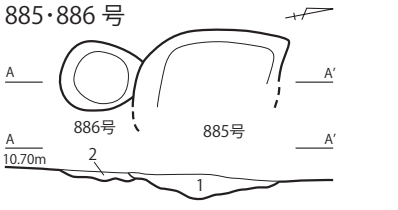
第 1-212 図　G-1 区 1-1 面の遺構（２）(1/10・1/40)

た土層が堆積しており、瓦片を多く含む。812 号の出土遺物は 202 点・7,013.4g で、19 世紀中葉・19 世紀第 4 四半期の 2 期にまとまっており、掘り返しが繰り返されたという調査所見と一致する。822 号の出土遺物は 943 点・54,027.2g で、19 世紀第 2 四半期から第 3 四半期にまとまる。調査所見では 812 号との連続性が確認できなかったが、出土遺物も若干の時期差があり、両者が機能していた時期は異なる可能性がある。893 号の出土遺物は 983 点・63,532.0g で、19 世紀第 3 四半期にまとまる。822 号とほぼ同時期に埋没したと考えてよいだろう。

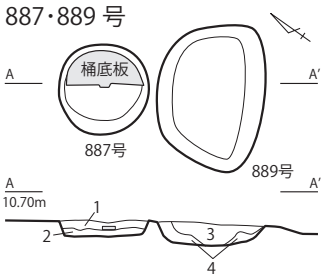
920 号は幅約 80cm を測る断面箱形の木組溝で、両壁に側板とそれを押さえる細杭、さらに内側に胴木が部分的に残っていた。大部分が後から掘り込まれた 812 号により壊されており、残存状況



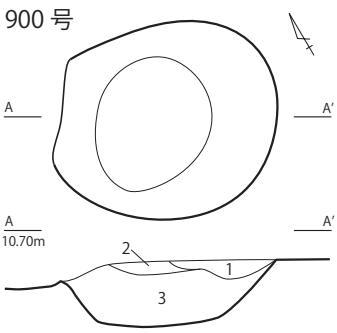
876号・877号
1：2.5Y4/6(オリーブ褐色)　しまり：強い　粘性：弱い　焼土粒φ1～2φ1～2mm2%　炭化物粒φ3～5mm2%
黄色砂1%　灰黄色(2.5Y6/2)粘土粒φ5～7mm15%　赤錆5%
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ1～3mm2%　炭化物粒φ1～5mm2%　桶跡？
3：2.5Y6/2(灰黄)　しまり：極強　粘性：あり　焼土粒φ1～3mm1%　炭化物粒φ1～5mm2%
灰褐色土粒～ブロックφ5～15mm15%　　灰黄色粘土主体
4：2.5Y6/2(灰黄色)　しまり：強い　粘性：弱い　焼土粒φ1～5mm2%　炭化物粒φ3～10mm3%　灰黄色粘土主体
5：10YR4/2(灰褐色)　しまり：強い　粘性：強い　炭化物粒φ3～10mm5%　灰黄色粘土粒φ5～10mm10%
灰褐色土主体
6：7.5YR3/2(黒褐色)　しまり：極強　粘性：弱い　黄色砂5%　焼土粒φ1～5mm10%　焼土ブロックφ10～15mm5%
炭化物粒φ3～5mmφ5～10mm3%　灰白色(2.5Y6/1)粘土5%



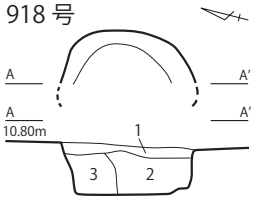
885号・886号
1：10YR2/1（黒色）　しまり：弱い　粘性：あり
黄色砂7%　錆びたローム粒φ3mm1%
炭化物粒φ３～10mm50%
2：2.5Y4/6（オリーブ褐色）　しまり：強い　粘性：弱い
錆びたローム粒φ5～10mm5%　黄色砂15%
炭化物粒φ3～5mm10%



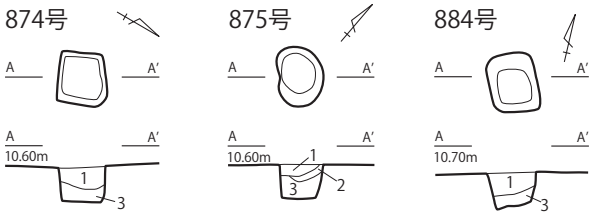
887号・889号
1：2.5Y4/3(オリーブ褐色)　しまり：極強　粘性：弱い
砂1%　焼土粒φ1～5mm3%　炭化物粒φ1～3mm3%
2：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：強い
褐灰色粘質土　木質か？
3：2.5Y5/4(黄褐色)　しまり：極強　粘性：弱い
ローム粒φ1～5mm7%　焼土粒φ1～5mm2%
炭化物粒φ1～5mm3%
4：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：極強　粘性：あり　砂3%
焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～3mm2%



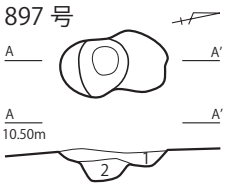
900号
1：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：極強　粘性：弱い
ローム粒φ5～10mm3%　砂1%
焼土粒φ3～10mm7%　炭化物粒φ3～10mm5%
褐灰色粘質土ブロックφ15mm5%
2：5YR4/8(赤褐色)　しまり：極強　粘性：あり
焼土主体φ3～10mm60%
炭化物粒φ1～5mm5%
3：瓦集中層　黄灰色(2.5Y6/1)粘土が間に少量含まれる
被熱・非被熱瓦両方含む



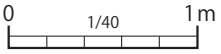
918号
1：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：極強　粘性：弱い　焼土粒φ1～5mm3%　炭化物粒φ1～5mm5%　白色粒5%
2：10YR5/1(褐灰色)　しまり：極強　粘性：あり　焼土粒φ1～5mm3%　炭化物粒φ1～5mm5%　瓦片5%　玉石φ3～5mm20%
3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：極強　粘性：強い　ローム粒φ1～2mm1%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～5mm5%　赤錆3%



874号・875号・884号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ1～3mm3%　黄色砂1%
焼土粒φ1～5mm3%　炭化物粒φ3～5mm7%　小石5%
2：2.5Y6/4(にぶい黄色)　しまり：弱い　粘性：弱い　黄色砂主体層
3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い　黄色砂φ5mm3%　焼土粒φ1～3mm2%
炭化物粒φ1～3mm2%



897号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：極強　粘性：あり
2：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：弱い　ローム粒φ1～3mm2%
砂3%　炭化物粒φ1～5mm5%
3：10YR4/1(褐灰色)　しまり：極強　粘性：弱い　砂1%　炭化物粒φ1～3mm3%



第 1-213 図　G-1 区 1-1 面の遺構（3）（1/40）

は不良である。地盤が軟弱なためか、壁のラインは歪んでいる箇所が多い。G-3 区 2 面の木組溝（838 号・839 号）につながる可能性も考えられたが、軟弱地盤による溝形状の歪みや、一部が撹乱で失われていたことにより、判断ができなかった。杭の樹種はサンプリングした 7 本のうち 1 本がアカマツ、他はスギが用いられていた。側板はサンプリングした 4 箇所のうち、モミ属、アスナロ、スギが確認された（1 箇所は同定不能）。胴木はサンプリングした 1 箇所がアカマツという結果であった（第Ⅷ章第 5 節参照）。920 号の覆土は上層・下層とも砂質の黄灰色土で、上層には明褐色砂がラミナ状に含まれる。出土遺物は 398 点・27,815.4g で遺存状態は不良だが、18 世紀後葉以降に比定される。出土遺物の時期から見ても、812・822 号よりは一段階古い時期の溝であった可能性が高い。

【イヌ埋葬遺構】

870 号（第 1-212 図、第 3-16 表）

G-1 区北西、893 号遺構の東側で検出されたイヌである。ほぼ全身骨が残存しており、体高 52cm の雄の大型犬である（第Ⅷ章第 3 節参照）。第 1-212 図の写真で見える窪みは調査時に便宜的に掘り下げた状況であり、明確な掘り込みは確認できなかったが、四肢骨を折り曲げた状態で検出されていることから、埋葬状態であった可能性が高い。遺物は出土していない。

【廃棄土坑】

880 号（第 1-211 図、図版 3-60-1、第 3-16 表）

G-1 区・H-2 区にまたがる大型土坑で、南北に長い隅丸方形を呈する。壁は全面なだらかに立ち上がり、断面形状は船底形を呈する。遺構底面は 3 面盛土の砂層上面に達する。東壁中央には 815 号（井戸・近代）が重複する。おそらく井戸につながる管路跡である 860 号（溝）も遺構中央で重複していたと考えられる。覆土は、しまり・粘性とも極強い暗灰黄色土・灰黄褐色土（22・23 層）が遺構南側に薄く堆積し、遺構北側の壁から底面にかけてしまり・粘性とも弱い炭化物層（21 層）が堆積した後、黄褐色土が北から南に向かって傾斜しながら堆積する。7 層と 9 層、15 層と 16・18 層の間に不整合面が見られることから、北側の堆積が早い方から順に 16 ～ 20 層、8 ～ 15 層、1 ～ 7 層の 3 つのまとまりに分けられ、いずれも黄褐色土を主体とする層が中心となる。堆積状況からおそらく遺構は北側から自然堆積により埋没したと考えられるが、それぞれのまとまりの中に焼土層（12・20 層）や黄灰色粘土層（8 層）、黄色砂層（16・17 層）が認められることから、埋没過程で時折焼土や砂、粘土がまとまって投げ込まれたものと考えられる。出土遺物は 2,320 点・71,350.1g と極めて多い。よって廃棄土坑と考えられるが、周辺地山は砂を主体とする砂層であり、元は砂取り目的で掘られた可能性もある。出土遺物の時期は 19 世紀第 3 四半期以降を主体とするが、上層には近代の遺物が含まれており、埋没の完了は隣接する 813 号（近代・池）と同時期である可能性が高い。

【土坑・埋桶】

876・877 号（第 1-213 図、第 3-16 表）

880 号と重複する土坑（876 号）・埋桶（877 号）で、いずれも 880 号より古い。876 号は断面が皿状を呈する不整楕円形の土坑で、灰黄色粘土が内部に堆積する。遺構の性格は不明である。876 号は円形を呈し、断面は浅い桶状を呈する。桶の木質は残存していなかったが、壁際に垂直に立ち上がる灰黄褐色土が堆積しており、桶の痕跡と考えられる。底面には約 10cm の厚さで締まりが極強い黒褐色土が堆積しており、掘方と考えられる。876 号の出土遺物は 9 点・71.3g、877 号の出土遺物は 9 点・88.5g でいずれもわずかであり、出土遺物の時期は不明である。

887 号（第 1-213 図、第 3-16 表）

G-1 区南中央、822 号（溝）北側に位置する埋桶である。断面が浅い桶状を呈する円形の土坑で、桶底板と考えられる木質が底面に残っていた。掘方はない。底板の上には締まりが極強いオリーブ褐色土が堆積していたが、残存部分が少なく詳細は不明である。北東側に 889 号が隣接するが、これは不整形の極浅い掘り込みで、おそらく整地面の凹凸を遺構と認識したものと考えられる。出土遺物は 2 点・5.3g とわずかであり、出土遺物の時期は不明である。

900 号（第 1-213 図、第 3-16 表）

G-1 区南西、822 号（溝）が曲がる角に隣接する土坑である。平面は西側がやや凹む不整楕円形で、断面は逆台形を呈する。遺構内には瓦片が集中して堆積（3 層）しており、その上面に焼土層（2 層）が堆積する。瓦片は被熱し赤化したもの、被熱していないものの両方が含まれる。出土遺物は 76 点・11,937.7g で、18 世紀第 3 四半期以降に比定される。

【ピット】

874 号・875 号・884 号（第 1-213 図、第 3-16 表）

いずれも G-1 区南に位置する方形のピットである。等間隔で並ぶ 824 号・874 号・（902 号）・884 号は平面・断面とも方形かつよく似た覆土を持つピットで、柱列の可能性も視野にいれ調査・整理を行ったが、他に組むピットは見つからず、さらに、列から外れた位置にある 875 号遺構にも 874 号・884 号と同じ覆土が堆積していることが明らかとなったため、柱列とはせず 874 号・875 号・884 号の土層断面のみ掲載した。覆土は上層が黒褐色土、下層が灰黄褐色土で、いずれも砂が混ざる。いずれのピットからも柱痕は確認されなかった。874 号の出土遺物は 6 点・22.7g、875 号の出土遺物は 1 点・93.6g、884 号の出土遺物は 9 点・34.5g といずれも極わずかである。

Ｂ　1-2 面

G-1 区 1-2 面は G-2 区 1-2 面に対応しており、旗本鳥居家屋敷の時期にあたり、H-2 区 1 面から続いて北西から南東へ緩やかに傾斜している。G-1 区 1-2 面では遺構の分布は散漫で、溝 1 条、礎石 1 基、土坑 1 基、ピット 2 基のみが検出されている。個別の遺構図面は掲載しなかった。

Ｃ　2 面

G-1 区 2 面は G-2 区 1-3 面と 1-4 面、H-2 区 2 面に対応する面で、旗本成瀬家屋敷の時期にあたる。H-2 区 2 面の南側に続いて北に向かって傾斜している。888 号（木組溝）以外の区画施設は見られないが、 1 -1 面の 920 号はこの面から区画として存在していた可能性もある。成瀬家屋敷の張り出し部には 1-1 面同様に用途がわかる遺構が存在せず、不整形の土坑やピットが点在する。砂利を敷き詰めた基礎状の遺構（960 号）が 1 基検出されたが、他に組む遺構は検出されず、用途は不明である。

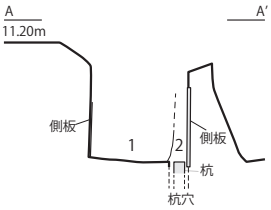
G-1 区 2 面では溝 2 条、石敷、砂利基礎、礎石が各 1 基、土坑 11 基、ピット 16 基が検出されている。

【溝】

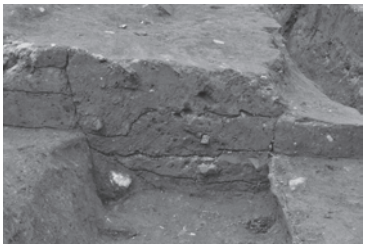
888 号（第 1-60・211 図、第 3-16 表）

G-1 区・G-3 区東端に南北方向に走る溝である。部分的に側板が残り、壁際に杭跡が見られるため、木組溝と考えられる。断面は箱形を呈し、確認面からの深さは浅い部分で 15cm、深い部分で 26cm を測る。幅は残存部分で約 50 から 60cm である。北側で 90°西に曲がり、1424 号へと接続する。南端は近代の 801 号（石組溝）と接続するが、801 号は 888 号の上に作り変えられたものと考えられる（巻頭図 14 ア）。801 号は調査区際となり、安全面から下位の調査を行う事ができなかったが、石組溝の直下に 888 号の延長となる木組溝が存在したものと考えられる。888 号の中央から北半には胴木や側板が残存していた。胴木は樹種同定が行えなかったが、側板は全てスギであった（第Ⅷ章第 5 節参照）。覆土は締まりが極強い褐灰土を主体とする。内容物は少なく、粒子は細かく緻密である。溝の方向や他の木組溝と比べ規模が大きい点からみて、成瀬家と保坂家の地境に沿って延びる溝と考えてよいだろう。また、検出状況から判断して 2 面の遺構として報告したが、1-1 面の 812 号・920 号同様、近代に至るまで同じ位置で繰り返し作り変えられたものと考えられる。

888号

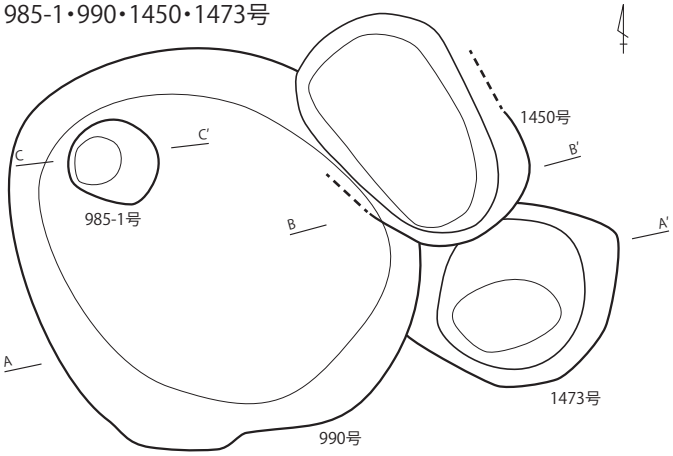


888号　SPA-A′
1：10YR4/1(褐灰色)　しまり：極強　粘性：あり　焼土粒φ1～3mm5%
炭化物φ1～5mm10%　灰白色粘土φ10～15mm5%　瓦片3%
2：10YR4/1(褐灰色)　しまり：極強　粘性：強
ローム粒φ1～2mm2%　焼土粒φ1～3mm2%
炭化物粒φ1～3mm1%　灰白色粘土ブロックφ10～15mm5%
粒子細かく緻密

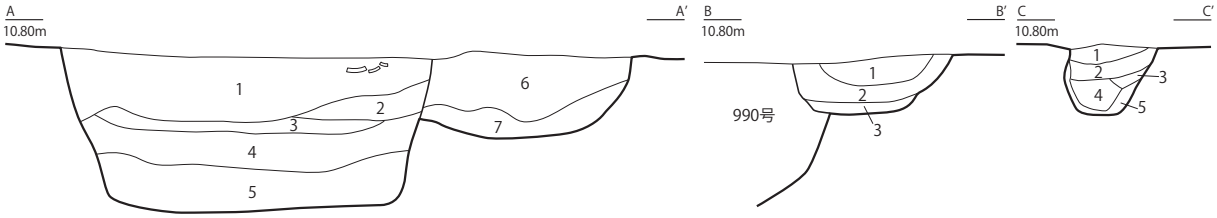


1.　888号土層堆積状況（南から）

985-1・990・1450・1473号



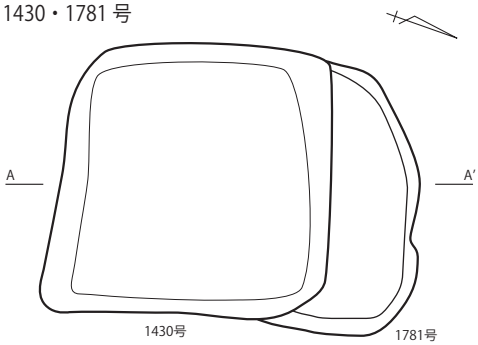
990号・1473号　SPA-A′
1：10YR3/4(暗褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ1～3mm1%
焼土粒φ1～5mm7%　炭化物粒φ1～5mm10%
褐灰色(10YR6/1)粘土ブロックφ10～15mm5%　砂3%
2：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：極強　粘性：弱い　焼土粒φ1～5mm5%
炭化物粒φ3～5mm7%　褐灰色(10YR6/1)粘土ブロックφ10～15mm5%
砂3%
3：10YR4/4(褐色)　しまり：強い　粘性：極強　焼土粒φ1～3mm3%
炭化物粒φ1～10mm7%　褐灰色粘土φ10～15mm10%　赤錆5%
4：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：あり　粘性：強い　黄色砂5%
焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ3～10mm7%
褐灰色粘土φ10～15mm15%　木片5%　瓦3%　シルト質土層
5：木片集中層
6：10YR3/4(暗褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ1～3mm1%
焼土粒φ1～5mm7%　炭化物粒φ1～5mm10%
7：10YR5/1(褐灰色)　しまり：弱い　粘性：強い　焼土粒φ1～5mm3%
炭化物粒φ1～10mm5%　1層をφ15～20mmのブロック状に10%含む
赤錆5%



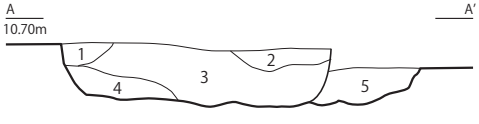
1450号　SPB-B′
1：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：極強　粘性：弱い　焼土粒φ1～5mm3%
炭化物粒φ1～10mm7%　灰白色粘土粒～ブロックφ5～15mm10%　瓦3%
2：2.5Y5/2(暗灰黄)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ1～5mm3%
炭化物φ3～10mm10%　灰白色粘土φ3～5mm3%　砂質土層
3：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い　焼土粒φ1～5mm3%
褐灰色(10YR5/1)粘土粒φ5～10mm3%(斑紋状)　赤錆3%

985-1号　SPC-C′
1：10YR3/4(暗褐色)　しまり：極強　粘性：弱い　ローム粒φ3～5mm5%
焼土粒φ1～10mm10%　炭化物粒φ3～5mm7%　にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土粒φ10mm3%
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：極強　焼土粒φ1～3mm3%
炭化物粒φ3～10mm5%　瓦片3%
3：10YR3/3(暗褐色)　しまり：弱　粘性：強い　焼土粒φ1～3mm2%　炭化物粒φ3～5mm3%
4：2.5Y2/3(にぶい黄色)　しまり：弱　粘性：極強　礫φ3cm10%　にぶい黄色粘土主体
空隙多くしまり弱い
5：10YR3/4(暗褐色)　しまり：強　粘性：強　炭化物粒・焼土粒φ1～2mm1%

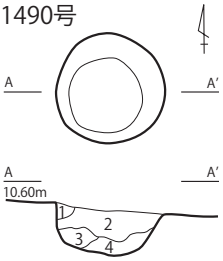
1430・1781 号



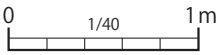
1430 号・1781 号
1：10YR5/1(褐灰色)　しまり：極強　粘性：弱い　黄色砂 3%　炭化物粒φ1 ～ 3mm1%　木根の痕か
2：2.5Y5/3(黄褐色)　しまり：強い　粘性：弱い　灰黄色砂粒φ 1 ～ 3mm15%
焼土粒φ1 ～ 10mm10%　炭化物粒φ1 ～ 7mm5%
3：10YR4/3(暗褐色)　しまり：極強　粘性：弱い　ローム粒φ1 ～ 5mm10%
灰黄色 (2.5Y7/2) 砂粒φ1 ～ 3mm5%　灰黄色砂ブロックφ15mm5%　焼土粒φ1 ～ 5mm7%
炭化物粒φ1 ～ 5mm5%
4：10YR4/3(暗褐色)　しまり：極強　粘性：あり　ローム粒φ1 ～ 3mm7%
黄褐色砂粒φ1 ～ 2mm7%　焼土粒φ1 ～ 5mm5%　炭化物粒φ1 ～ 10mm7%
5：10YR4/3(暗褐色)　しまり：極強　粘性：弱い　黄色砂 10%　焼土粒φ1 ～ 5mm3%
炭化物粒φ3 ～ 5mm7%



1490号



1490号
1：2.5Y6/3(にぶい黄色)　しまり：強い　粘性：弱い　黄色砂主体(60%)
2：2.5Y5/2(暗灰黄)　しまり：あり　粘性：強い
ローム粒φ1～10mm10%　黄色砂10%　炭化物粒φ1～10mm5%
赤錆φ5mm3%　砂質土層
3：2.5Y6/6(明黄褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い　黄色砂ブロック
4：2.5Y4/6(オリーブ褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　黄色砂15%
炭化物粒φ1～2mm3%　赤錆φ5mm3%



第 1-214 図　G-1 区 2 面の遺構（1/40）

さらに、G-1区からG-3区にかけての「屋敷渡預絵図証文」の絵図には南北方向の溝が書き込まれ、「下水弐尺、両支配」の書き込みが添えられている（第Ⅶ章、第2-229図）。この絵図の溝は、保科家屋敷地と共用であった幅2尺（約60cm）の溝であったと考えられ、溝の方向と規模から見て、888号がこれに相当する。絵図のとおり、溜池への排水を目的とした溝であろう。

888号の出土遺物は564点・41,233.4gで19世紀第2四半期を主体とし2面の他の遺構よりもやや新しいが、おそらく上面にあったと考えられる801号（溝）の遺物が混在したものだろう。

【土坑】

985-1・990・1450・1473号遺構（第1-214図、図版3-60-2、第3-16表）

990号はG-1区中央に位置する不整円形の土坑で、断面は逆台形を呈する。覆土は水平に堆積しており、下層（4・5層）は黄灰色の粘質土で、底面から約20cmまで木片を大量に含んでいた。その上に粘性が極めて強い褐色土（2層・3層）が薄く堆積する。最上層の1層は、上面となる1面の盛土が落ち込んだものである。芥溜とも考えられるが、遺構の性格は判然としない。985-1号は990号と重複するピット、1450号・1473号は990号と重複する不整形の土坑で、いずれも用途は不明である。990号の出土遺物は531点・61,992.3gで、18世紀中葉に比定される。1450号の出土遺物は132点・10,509.3gで、18世紀第3四半期に比定される。1473号の出土遺物は126点・6,313.7gで、18世紀第2四半期前後に比定される。

1430・1781号（第1-214図、第3-16表）

G-1区中央に位置する方形の土坑である。断面はやや開きながら立ち上がる皿状を呈し、底面は凹凸が多く見られる。覆土は締まりが強く粘性が弱い暗褐色土を主体とし、砂を多く含む。用途は不明である。1781号は重複する不整形の土坑として調査したが、覆土は1430号とよく似た暗褐色土であり、一体の土坑の可能性もある。1430号の出土遺物は94点・4,804.8g、1781号は8点・164.1gでいずれも時期は不明である。

1490号（第1-214図）

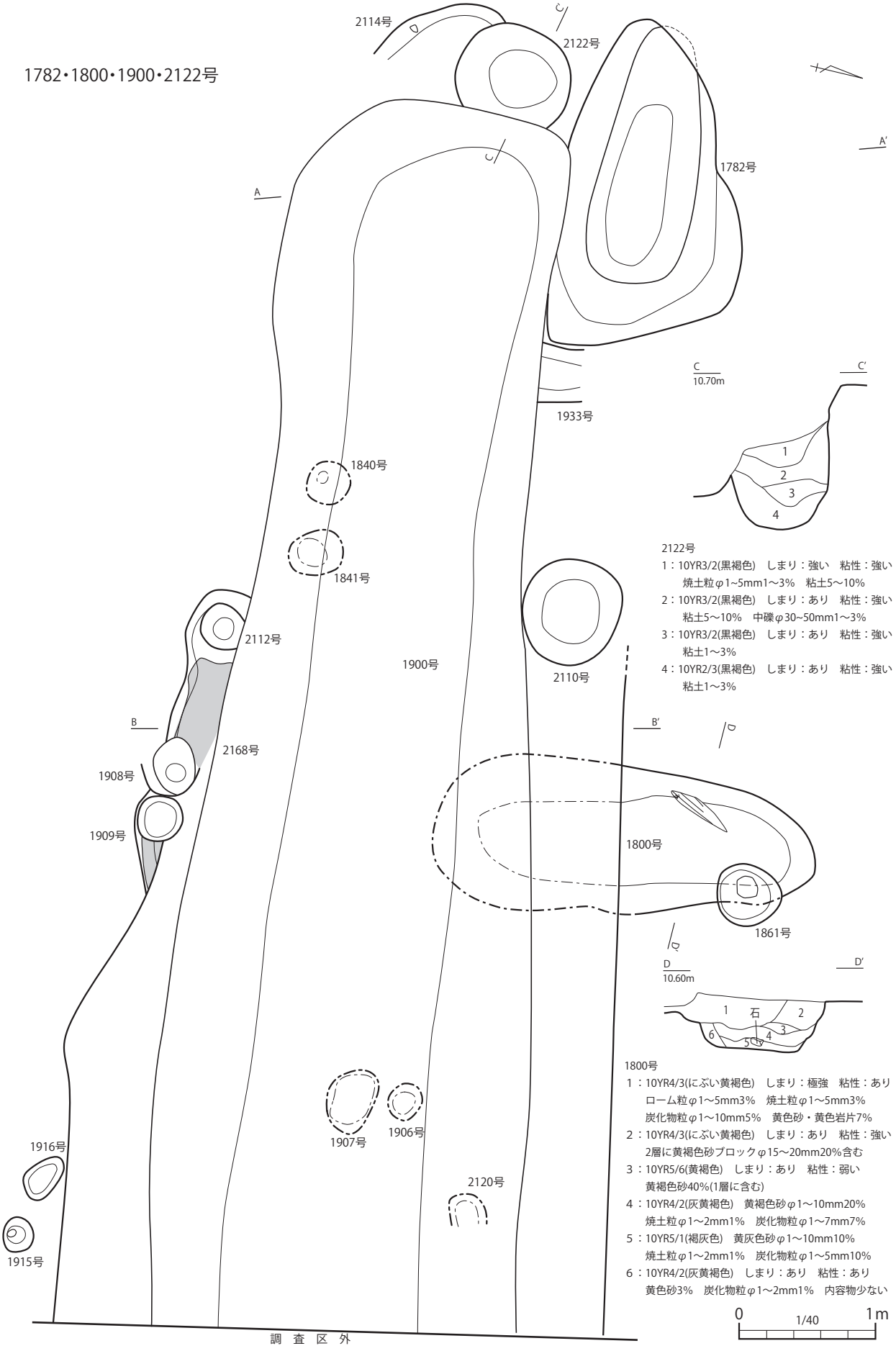
1490号はG-1区の東端に位置する円形の土坑である。断面形が椀形の土坑で、覆土は4層に分かれる。1層は砂を主体とする層、2層から4層は砂のほか、炭化物などを含む層である。1490号からは遺物の出土は見られなかった。

C　3面

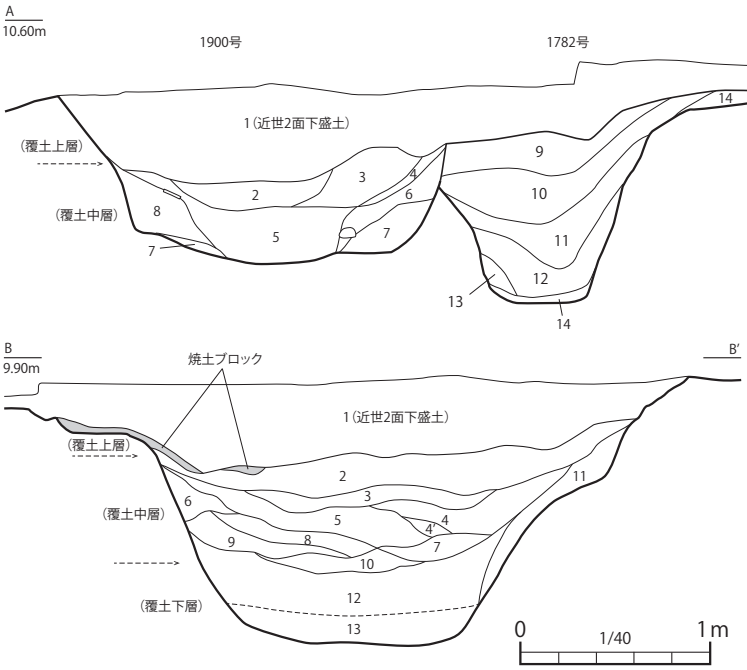
G-1区3面はG-2区2面から3面、H-2区3面に対応する面で旗本成瀬家屋敷の時期にあたる。2面同様北から南へ向かって傾斜しており、G-3区との境界付近から東西に走る溝（1900号）や土坑などが検出されている。成瀬家と林家、保科家の敷地境に、大型土坑が複数認められる（1782号・1900号・1903号）また、保科家との境には不整形ながら溝状の遺構（2160号）が見られ、屋敷地を区切っていた可能性が考えられる。一方で、それらの区画の北側（成瀬家南東張り出し部）は1-1面から2面と変わらず用途不明の不整形な土坑（1800号など）が数基見られるのみで、やはり積極的な利用はされていなかったと考えられる。

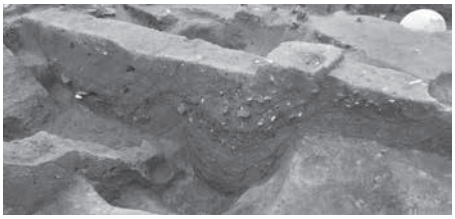
3面からは、溝1条、礎石1基、土坑11基、ピット23基、落ち込み1基、焼土層1基が検出されている。

【溝】

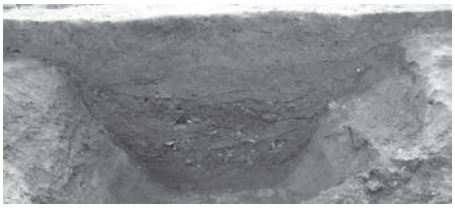


第 1-215 図　G-1 区 3 面の遺構（1）(1/40)





1. 1782号・1900号土層断面（SPA-A′）



2.　1900号土層断面（SPB-B′）

1782・1900号(SPA-A′)

［1900号覆土上層］

1：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ1～3mm5%(斑紋状)　黄褐色砂10%　焼土粒φ1～3mm1%　炭化物φ1～5mm5%　砂質土　近世2面下盛土

［1900号覆土中層］

2：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：あり　粘性：強い　ロームブロックφ15mm30%(斑紋状)　黄色砂10%　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ1～10mm7%

3：2.5Y4/1(黄灰)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒φ1～5mm3%　黄褐色(2.5Y5/4)ローム粒φ1～5mm10%(斑紋状　変色したローム土か)　黄色砂3%　炭化物粒φ1～5mm5%

4：10YR4/1(褐灰色)　褐灰色粘質土主体　しまり：弱い　粘性：強い　ローム粒φ1～3mm2%　黄色砂1%　炭化物粒φ1～5mm5%

5：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：強い　黄色砂3%　灰オリーブ色(5Y6/2)粘質土粒φ5～10mm3%　炭化物粒φ1～5mm10%

6：2.5Y5/1(黄灰)　しまり：強い　粘性：強い　黄褐色(2.5Y5/4)粘質土ブロックφ10～15mm20%(斑紋状)　灰オリーブ色(5Y6/2)粘質土粒φ1～5mm2%　炭化物粒φ1～10mm7%　赤錆5%

7：2.5Y4/1(黄灰)　しまり：あり　粘性：強い　炭化物φ1～5mm5%　赤錆7%

8：2.5Y4/4(オリーブ褐色)　しまり：強い　粘性：強い　錆びたローム粒φ3～5mm10%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～5mm10%　赤錆5%

［1782号覆土］

9：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：弱い　錆びたローム粒φ1～3mm5%　黄色砂70%　炭化物粒φ3～10mm7%

10：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ1～3mm3%　炭化物φ1～3mm3%　7層をφ5～10mmの粒子状に15%含む　黒味の強い黄灰色粘質土主体

11：10YR2/1(黒色)　しまり：強い　粘性：極強　ローム粒φ1～3mm3%　黄褐色砂5%　焼土粒φ3～5mm5%　炭化物集中層(φ3～20mm70%)

12：2.5Y5/2(暗灰黄)　しまり：弱い　粘性：極強　脱色したローム粒(2.5Y7/2)φ1～5mm7%(斑紋状)　黄色砂1%　炭化物粒φ1～5mm5%　暗灰黄粘質土主体

13：2.5Y5/2(暗灰黄)　しまり：弱い　粘性：極強　ローム粒φ1～10mm10%(斑紋状)　錆びたローム粒φ1～5mm5%　焼土粒φ1～5mm5%　炭化物粒φ1～5mm5%

14：2.5Y3/1(黒褐色)　しまり：弱い　粘性：極強い　暗灰黄色粘質土粒φ5～10mm20%　焼土粒φ1～3mm2%　炭化物粒φ1～10mm7%　暗灰黄粘質土と黒褐色粘質土の混合層

1900号(SPB-B′)

［1900号覆土上層］

1：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ1～3mm5%(斑紋状)　黄褐色砂10%　焼土粒φ1～3mm1%　炭化物粒φ1～5mm5%　近世2面下盛土

［1900号覆土中層］

2：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄色砂5%　焼土粒φ1～5mm5%　炭化物粒φ1～10mm7%　灰白色粘土粒φ5～10mm5%　小石φ1～3mm3%
1層と似るが、黄色砂少なく炭化物多い

3：2.5Y4/1(黄灰)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒φ1～5mm3%　黄色砂1%　炭化物粒φ3～10mm7%　オリーブ灰色(7.5Y6/1)粘土粒φ5～10mm3%

4：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：あり　粘性：強い　ロームブロックφ15mm5%　黄色砂粒φ3～5mm10%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ3～5mm10%　木片多

4′：2.5Y4/3（オリーブ褐色）　しまり：あり　粘性：極強　4層に灰オリーブ色（5Y5/2）粘土ブロックφ15mm20%を含む

5：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：強い　黄色砂3%　炭化物粒φ1～5mm10%　灰オリーブ色(5Y6/2)粘質土粒φ5～10mm3%　木製品・木片多　SPA-A′5層と同じ

6：2.5Y4/4(オリーブ褐色)　しまり：強い　粘性：強い　錆びたローム粒φ3～5mm10%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～5mm10%　赤錆5%　SPA-A′8層と同じ

7：2.5Y4/2(暗灰黄)　しまり：強い　粘性：強い　砂質ロームブロックφ15mm7%　黄色砂φ1～10mm30%　炭化物粒φ1～5mm3%

8：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：あり　粘性：強い　黄褐色(2.5Y5/3)土粒φ1～5mm5%(黄褐色砂が粘性をおびたもの)　黄褐色砂1%　炭化物粒φ1～3mm3%

9：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：極強　黄色砂1%　炭化物粒φ1～10mm3%

10：2.5Y4/1(黄灰色)　暗灰黄色(2.5Y5/2)土20%　炭化物粒φ3～5mm5%　黄灰色粘土φ1～10mm7%　赤錆5%　貝片・木片を多く含む

11：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄色砂φ1～10mm20%　焼土粒φ1～3mm1%　炭化物粒φ1～5mm3%　壁際崩落土

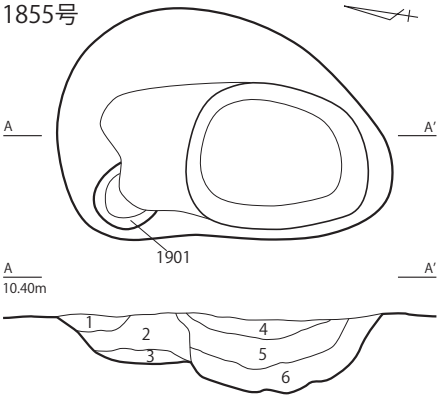
［1900号覆土下層］

12：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：あり　粘性：強い　黄色砂3%　炭化物粒φ1～10mm10%　黄灰色(2.5Y5/1)粘土粒φ3～10mm5%　暗灰黄粘土10%　貝片・木製品・木片多
5層に似る粘質土層

13：2.5Y4/2（暗灰黄色）　しまり：極強　粘性：極強　ローム粒φ5mm5%　炭化物粒φ1～3mm3%　焼土粒φ1～2mm1%　暗灰黄色（2.5Y5/1）粘土粒φ5～10mm3%
上面にローム粒・黄色砂が約３cm厚で堆積する

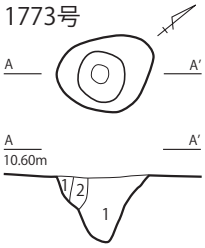
第 1-216 図　G-1 区 3 面の遺構（２）（1/40）

1855号



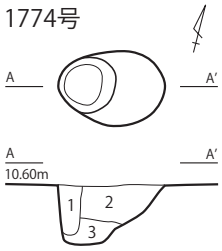
1855号
1：10YR4/4(褐色)　しまり：極強　粘性：弱い　ローム粒φ5～10mm15%　黄褐色砂5%
炭化物φ1～5mm3%　2面下に点在するローム主体の硬化部分
2：10YR4/3（にぶい黄褐色）　しまり：弱い　粘性：強い　ローム粒φ1～3mm3%
黄褐色砂ブロックφ15mm3%　黄褐色砂3%　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ1～3mm3%
3：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ1～3mm3%　黄色砂5%
焼土粒φ1～3mm2%　炭化物粒φ1～3mm3%
4：10YR4/3（にぶい黄褐色）　しまり：極強　粘性：あり　ローム粒φ3～5mm3%　黄色砂5%
炭化物粒φ1～3mm3%
5：10YR4/3（にぶい黄褐色）　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒φ1～5mm5%　ロームブロックφ15mm3%
黄色砂3%　黄色砂ブロックφ15mm3%　焼土粒φ1～3mm1%　炭化物粒φ1～3mm5%
6：10YR5/3（にぶい黄褐色）　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ1～2mm3%　黄色砂2%
黄色砂ブロック15mm5%　炭化物粒φ1～5mm5%　粒子細かく緻密

1773号



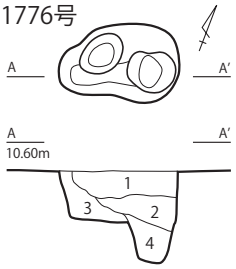
1773号
1：10YR5/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：あり　黄色砂φ3～10mm10%
黄色砂ブロックφ15mm3%　焼土粒φ1～5mm5%　炭化物粒φ1～3mm5%
2：10YR3/1(黒褐色)　しまり：弱い　粘性：極強　黄色砂5%　ひび割れて空隙あり
杭の腐朽部分か？　粘質土主体

1774号



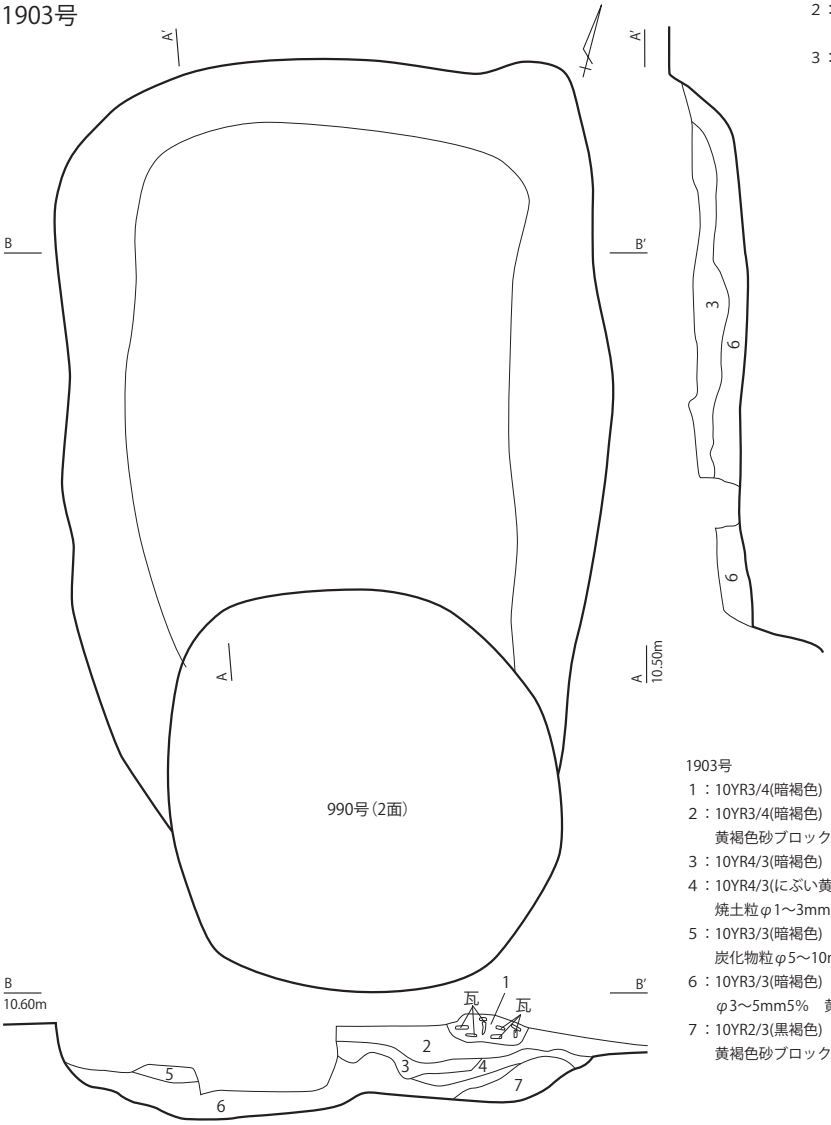
1774号
1：10YR5/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：あり
黄色砂φ3～10mm10%　黄色砂ブロックφ15mm3%
焼土粒φ1～5mm5%　炭化物粒φ1～3mm5%
2：10YR3/1(黒褐色)　しまり：弱い　粘性：極強　黄色砂5%
粘質土主体
3：10YR5/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：極強
焼土粒φ1～5mm3%　炭化物粒φ1～3mm3%
粒子細かい粘性土層

1776号

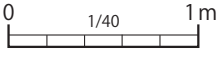


1776号
1：10YR5/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：あり
黄色砂粒φ3～10mm10%　黄色砂ブロック
φ15mm3%　焼土粒φ1～5mm5%　炭化物粒
φ1～3mm5%
2：10YR5/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：あり
黄色砂粒3～7mm5%
黄色砂ブロックφ15mm3%　焼土粒φ1～5mm5%
炭化物粒φ1～3mm5%　赤錆5%
3：10YR5/1(褐灰色)　黄褐色砂(黄色砂の錆たもの)
φ1～5mm5%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒
φ1～3mm3%
4：10YR5/1(褐灰色)　黄褐色砂(黄色砂の錆たもの)
φ1～5mm5%　黄色砂ブロックφ15mm15%
焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～3mm3%

1903号



1903号
1：10YR3/4(暗褐色)　しまり：強い　粘性：あり　砂混じり　瓦多い
2：10YR3/4(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い
黄褐色砂ブロックφ10～20mm7%　炭化物粒φ5～10mm3%
3：10YR4/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：弱い　黄褐色砂30%
4：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：なし　黄褐色砂40%
焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ5～10mm10%
5：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：強い　焼土粒φ3～5mm1%
炭化物粒φ5～10mm5%
6：10YR3/3(暗褐色)　しまり：極強　粘性：強い　黄褐色砂ブロック
φ3～5mm5%　黄褐色砂ブロックφ3～5mm3%　炭化物粒φ3～5mm5%
7：10YR2/3(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い
黄褐色砂ブロックφ5～10mm10%　炭化物粒φ3～5mm3%



第 1-217 図　G-1 区 3 面の遺構（3）（1/40）

1900・1782・2122 号（第 1-215 図、図版 3-60-4・5、第 3-16 表）

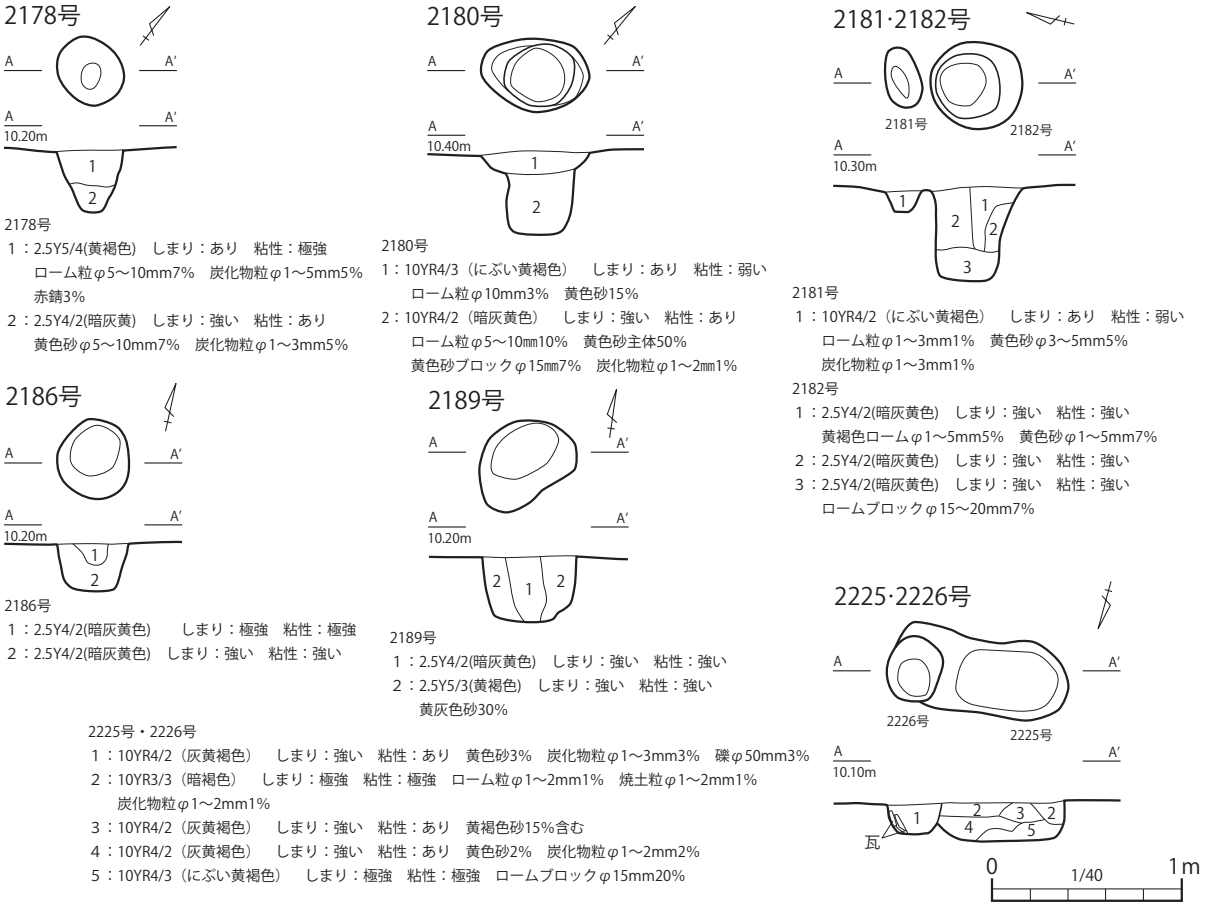
1900 号遺構は G-1 区南端に位置する大型の溝で、規模としては堀に近い。東側は調査区外へと続いており、調査された範囲で長さ約 9m、幅 4m、深さは最も深い部分で 1.4m である。断面は逆台形を呈し、西から東へ向かって深さが増していく。西端は緩やかに立ち上がる。西端の北寄りにピット（2122 号）や不整形の土坑（1782 号）が位置するが、土層断面で重複関係が確認されており、1900 号一体の遺構ではない。断面は逆台形を呈し、中央部断面（SPB-B’）では約 60 度で底面から立ち上がるが、底面から 60 ～ 80cm の間は軟弱地盤層にあたるため、当時の形状が保たれていない可能性はある。北側壁は南側壁に比べてやや緩い角度で立ち上がり、底面より 70 ～ 80cm 上で部分的にテラス状の平坦面が作られている。覆土は大きく上層・中層・下層に分けることができる（第 1-216 図）が、西端近くでは下層にあたる土層（同図 SPB-B’・２～ 10 層）が見られないこと、中央部から東端にかけては下層（SPB-B’・12 層）が厚く堆積し、上面がほぼ水平となることから、中央部から東端にかけては底面から約 40cm までを埋め戻した後、中層が堆積し、その上に 2 面下の盛土造成に伴って上層が堆積したと考えられる。下層（SPB-B’12・13 層）は黄灰色の粘質土層で、底面は青灰色砂層（シルト層）である（基本層序 72 層に相当・第Ⅲ章第 1-16 図参照）。下層の上部（12 層）には木片・貝片を多量に含むが、薄い砂層を挟んで下部（13 層）は木片・貝片は少なく、13 層は遺構下部の盛土層である可能性も否定できない。また、先述のとおり西側では下層に相当する層は認められない。中層は黄色味を帯びた粘質土を主体とする。中央部では粘土を多く含む層と砂質層が互層状となり、中位に木製品・木片を大量に含む粘質土層（5 層）が堆積する。この 5 層は西端では底面に厚く堆積し（SPA-A’）、やはり木片を大量に含んでいた。西側の中層は、中央部とは異なり一層一層が比較的厚く堆積しており、砂層は少なかった。中央部の南壁側では、上層と中層の境に焼土がブロック状に点在している（第 1-216 図 SPB-B’）。1900 号が埋没した後、2 面下の盛土造成が行われる前に堆積したものであろう。遺物は中層以下を中心として 2,106 点・104,097.5g と大量に出土しており、17 世紀第 4 四半期を中心とする。1-1 面の区画遺構（920 号・812 号）とほぼ同じ位置にあることから、1900 号遺構も屋敷地の区画に伴う遺構と考えられる。出土遺物の時期から見て、1900 号西側の敷地が川窪家から保科家に移った頃に機能していた可能性が高い。

1782 号は、1900 号西端の北西角に接する不整形の土坑である。断面は逆台形を呈するが、北壁の一部はオーバーハングし、底面も上面に比べかなり幅狭となっている。覆土は締まりが弱く粘性が極めて強い粘質土を主体とし、中位に炭化物集中層（11 層）、その上下に暗灰黄色粘質土（12 層）、黄灰色粘質土（10 層）が堆積する。また、最上層は黄色砂を主体とする灰黄褐色土が堆積しているが、これは 1900 号最上層同様に、2 面下盛土の一部と考えられる。出土遺物は 387 点・27,512.8g で、17 世紀第 3 四半期を中心とする。1900 号遺構と同時期に機能していた遺構と考えられるが、性格は不明である。

【土坑】

1800 号（第 1-215 図、第 3-16 表）

G-1 区中央に位置する長楕円形の土坑である。1900 号の上面に掘り込まれており、より新しい。断面は逆台形を呈するが、砂質の盛土内や遺構覆土内に掘り込まれているため、壁や底面は崩落による凹凸が見られる。特に西側の壁は 2 面下盛土（1 層）により大きく崩れている。覆土は黄褐色砂を



第 1-218 図　G-1 区 4 面の遺構（1/40）

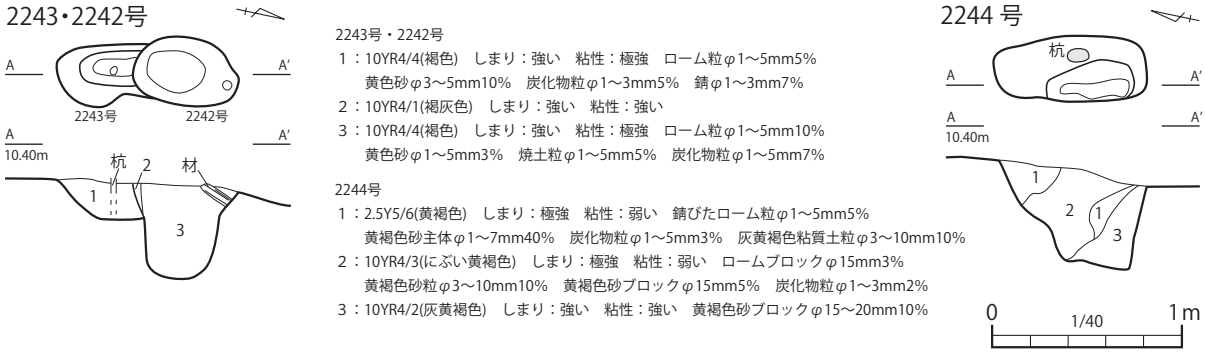
主体とする。主軸方向は 1900 号と直交し、区画方向に一致するものと考えられるが、遺構の性格は不明である。出土遺物は 149 点・8,016.7g で、17 世紀後葉を主体とする。

1855 号（第 1-217 図・第 3-16 表）

1855 号は楕円形の土坑である。底面は南側が深く掘り込まれており、北側は浅いテラス状になる。覆土は南側の深い部分に新しい土層が堆積していることから掘り返されている可能性が高い。覆土は南側に 1 層から 3 層が堆積しており、いずれもローム粒や砂などを含む層で 1 層は特にしまりが強い。4 層から 6 層は北側に堆積する土層で、1 層から 3 層に類似したローム粒や砂などを含む層となっている。1855 号からは遺物の出土は見られなかった。

1903 号（第 1-217 図、第 3-16 表）

G-1 区南西に位置する大型の土坑で、1900 号の西端から直角方向に位置する。おそらく 1900 号と重複または一体の遺構と考えられるが、2 面の 990 号および 3 面の 1782 号が掘り込まれて該当箇所が失われているため、重複関係は不明である。不整な長楕円形を呈し、断面は皿状を呈するが、底面は凹凸が見られる。覆土は締まりの強い暗褐色土を主体とし、全体的に砂を多く含む。上面には 2 面下盛土に似た暗褐色土が堆積し、底面には締まり・粘性とも強い暗褐色土が堆積している。1900 号との位置関係から見て、屋敷境に沿って掘り込まれた区画施設である可能性が考えられる。出土遺物は 64 点・2,302.1g で時期は不明である。



2243号・2242号
1：10YR4/4(褐色)　しまり：強い　粘性：極強　ローム粒φ1～5mm5%
黄色砂φ3～5mm10%　炭化物粒φ1～3mm5%　錆φ1～3mm7%
2：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：強い
3：10YR4/4(褐色)　しまり：強い　粘性：極強　ローム粒φ1～5mm10%
黄色砂φ1～5mm3%　焼土粒φ1～5mm5%　炭化物粒φ1～5mm7%

2244号
1：2.5Y5/6(黄褐色)　しまり：極強　粘性：弱い　錆びたローム粒φ1～5mm5%
黄褐色砂主体φ1～7mm40%　炭化物粒φ1～5mm3%　灰黄褐色粘質土粒φ3～10mm10%
2：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：極強　粘性：弱い　ロームブロックφ15mm3%
黄褐色砂粒φ3～10mm10%　黄褐色砂ブロックφ15mm5%　炭化物粒φ1～3mm2%
3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　黄褐色砂ブロックφ15～20mm10%

第 1-219 図　G-1 区 5 面の遺構（1/40）

【ピット】

3 面ではピットを 23 基検出している。しかし、その中から規則的に並ぶものは見られなかった。ここでは代表的なピットを図示した（第 1-217 図）。また、遺物の出土がなく、遺構の年代が不明なものも多いが、図示した 1774 号や 1776 号は遺物が出土しており、遺物の年代から 17 世紀後葉以降の可能性が高い。

D　4 面

G-1 区 4 面は G-2 区 4 面、H-2 区 4 面に対応する面で、旗本成瀬家屋敷の時期にあたる。4 面は北から南に傾斜するが、G-2 区との境界付近では急激に東へ向かって傾斜しており、盛土が旧地形の影響を受けており、埋没谷上の盛土が沈みこんでいる様相が確認された。

4 面からは、砂利敷 1 基、土坑 5 基、ピット 21 基、落ち込み 1 基が検出された。

【ピット】

G-1 区 4 面では他の種別の遺構と比べてピットが多く検出されている。検出されているピットの中には柱痕のあるものが見られたが、規則的な配列は見いだせなかった。ここでは代表的なピットを図示した（第 1-218 図、第 3-16 表）。そのうち、2182 号、2186 号、2189 号は柱痕をもつピットである。いずれも遺物の出土はなかった。いずれのピットも覆土は類似した土層が堆積しており、ローム粒や砂などを含む土層を覆土としている。

E　5 面

G-1 区 5 面は G-3 区 5 面に対応する面で、G-1 区の最下面である。G-1 区 5 面と G-3 区 5 面は埋没谷内の近世盛土層上で確認した面で、自然堆積層上の G-2 区 5 面に対応する可能性が高い。G-1 区 5 面は調査区の中ほどで南北に段切りされている状況が確認された。段切りの下段は G-3 区 5 面につながる。段切りのラインに沿うように溝が走っており、屋敷境等の区画にあたる可能性が考えられる。

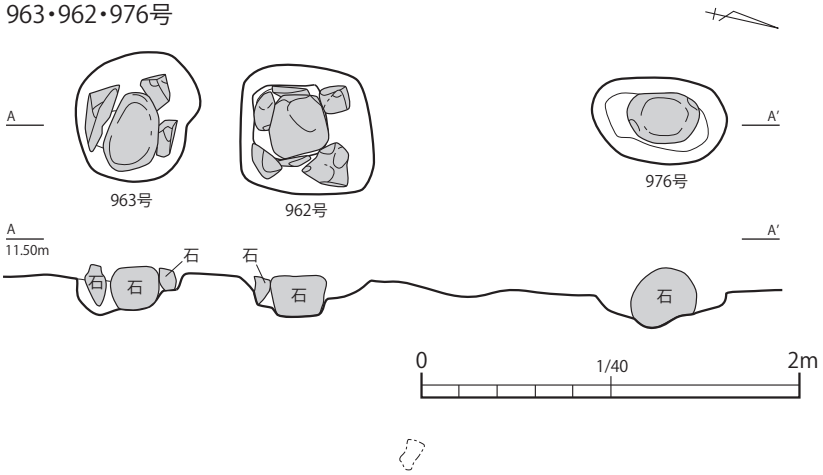
5 面からは、段切り 1 基、溝 1 条、土坑 3 基、ピット 17 基が検出された。

【ピット】

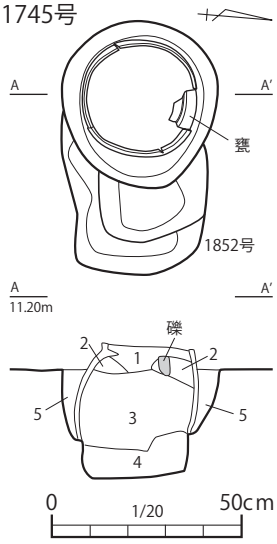
G-1 区 5 面からはピット 17 基が検出されている。ピットは段切りのラインと埋没谷の落ち際がぶつかる部分に密集して分布しており、段切り上段の平坦面には散漫に分布するのみであった。いずれもピットに規則的な配列は見いだせなかった。ここでは代表的な 3 基を図示した（第 1-218 図、第 3-16 表）。

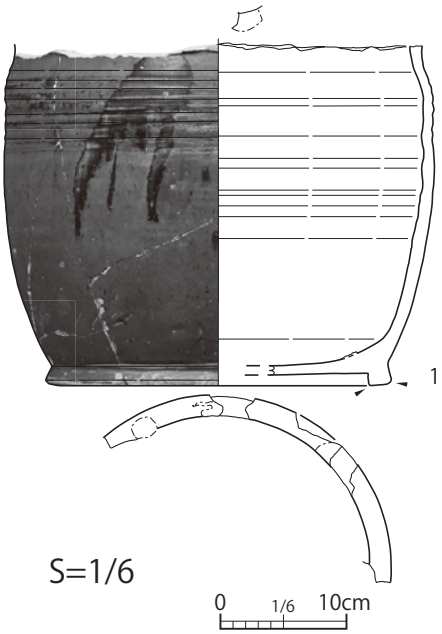
（佐藤・合田）

963・962・976号

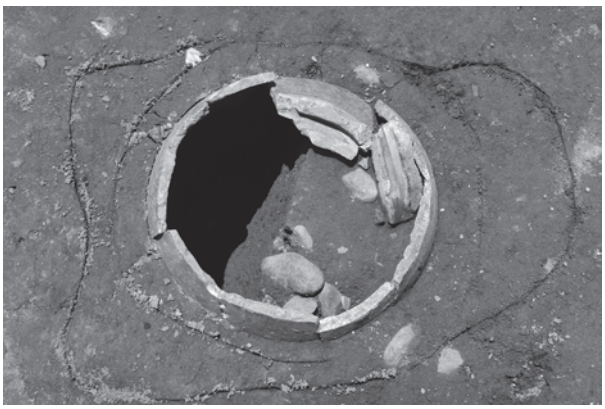


1745号



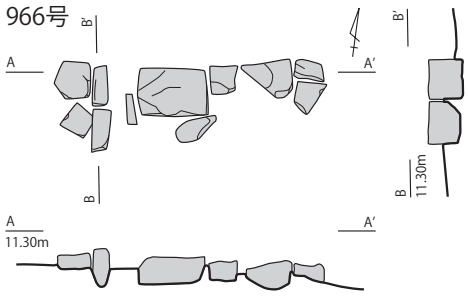


1745号
1：10YR3/4(暗褐色)　しまり：強い　粘性：弱い　細砂5～10%　炭化物粒1～3%
　中礫φ30~60mm15～25%
2：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　砂1～3%　炭化物粒1～3%　細礫5～10%
3：2.5Y3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　焼土粒1～3%　炭化物粒1～3%
4：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ10～20mm5%
5：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ5～10mm3%　焼土粒φ3~5mm2%
　炭化物粒φ3~10mm3%　炭化物ブロックφ20mm2%

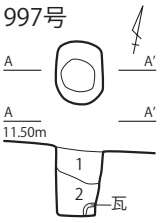


1.　1745号　甕検出状況（北から）

966号

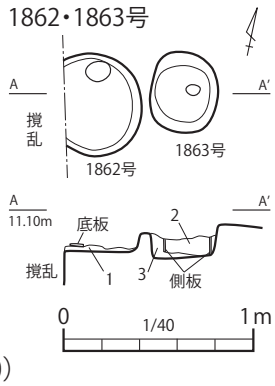


997号

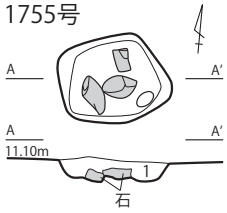


997号
1：10YR3/2（黒褐色）　しまり：強い　粘性：強い
　ローム粒φ5～10mm7%（斑紋状）　焼土粒φ1～3mm2%
　瓦片5%
2：10YR3/2（黒褐色）　しまり：弱い　粘性：強い
　ローム粒φ1～2mm3%　焼土粒φ1~3mm2%
　炭化物粒φ1～3mm2%　瓦片3%

1862・1863号



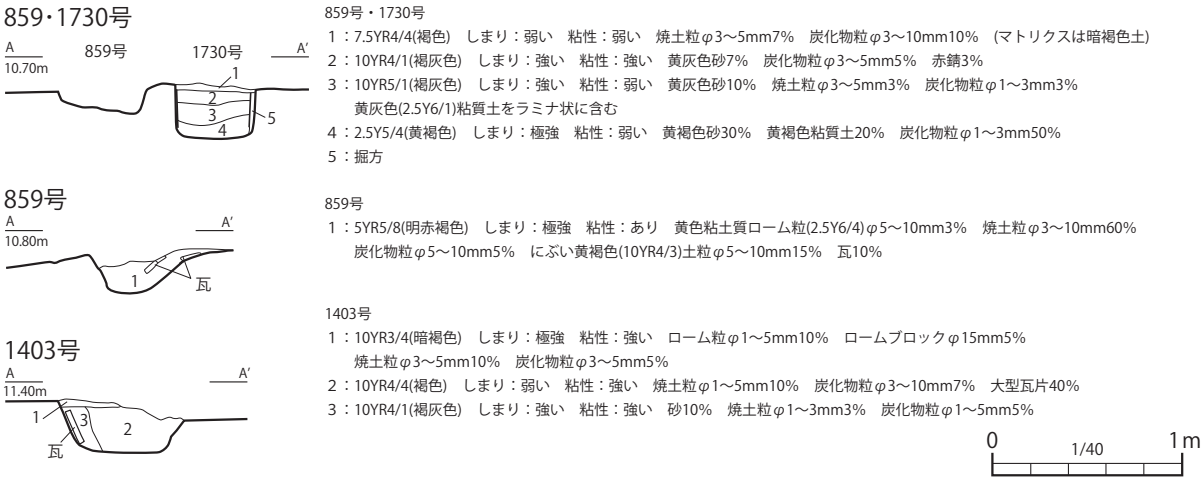
1755号



1755号
1：2.5Y3/3(暗オリーブ褐色)　しまり：強い　粘性：弱い
　焼土粒15～25%　焼土ブロックφ~15mm15～25%
　炭化物粒φ1~5mm5～10%

1862号・1863号
1：10YR3/2（黒褐色）　しまり：あり　粘性：あり
2：10YR4/1（褐灰色）　しまり：あり　粘性：あり　砂10%
　焼土粒φ3～5mm3%　炭化物粒φ1~3mm3%
3：10YR3/1（黒褐色）　しまり：強い　粘性：やや強い　掘方

第 1-220 図　G-2 区 1-1 面の遺構（1）（1/6・1/20・1/40）



第 1-221 図　G-2 区 1-1 面の遺構（２）（1/40）

６）G-2 区

G-2 区は石垣（790 号）に区画された、調査区のなかでも標高の低い南側の下段の一部分に位置しており、旗本川窪家－保科家の屋敷地にあたる調査区である。G-2 区の現地表面の標高は約 12m で、石垣の上段にあたるF-1区やH-2区とは標高差が約２m程度見られた。また、G-2区は北から南に向かって緩やかに傾斜していた。

G-2 区からは近代面と、近世の旗本屋敷の段階にあたる 1 面から 5 面、合計 6 面の遺構確認面が検出されている。近世の 1 面から 4 面は旗本保科家屋敷の時期にあたり、自然堆積層上に形成された 5 面は旗本川窪家屋敷の時期にあたると考えられる。また、G-2 区北半は遺構が密集し、G-2 区南半や隣接する G-1 区とは異なる堆積状況が見られたことから、遺構の重複や盛土の堆積状況に基づき、1-1 面から 1-4 面の 4 面に細分して調査を行った。なお、G-2 区では F-1 区や H-1 区、H-2 区で確認された旗本屋敷拝領以前に対応する遺構確認面は検出されなかった。

Ａ　1-1 面

G-2 区 1-1 面は G-1 区 1-1 面、H-2 区 1 面に対応し、北側に隣接する H-2 区南西部と共に旗本保科家の屋敷にあたる。G-2 区 1-1 面は G-2 区全域で確認されている。

礎石 8 基、礎石跡 3 基、溝 4 条、瓦溜り 1 基、焼土層 3 基　杭基礎 2 棟、杭跡 2 基、土坑 5 基、ピット 14 基が検出されている。

【溝】

859・1730 号（第 1-52・53・221 図、第 3-16 表）

G-2 区中央付近を南北に貫く溝で、南側の西壁側は部分的にテラス状に浅く開口する。全体的に起伏を有し、南側へと若干傾斜する。長さは確認範囲で 13.4 m、幅 0.62 m（約２尺）、深さ 0.28 mを測る。覆土は単層で被災瓦を含む焼土を主体とする。出土遺物は総点数 549 点、総重量 57,648.0g で、遺存状態は中程度である。検出遺物の年代観からは 19 紀世第 1 四半期を下限とするが、検出面からは 19 世紀中葉段階まで下る。嘉永 3 年（1850）の火災に伴う廃絶と推定される。

1403 号（第 1-52・221 図、第 3-16 表）

G-2 区 1-1 面中央付近を南北に縦断する溝で、長さは確認範囲で 7.7 m、中央北寄りで 1000 号遺構と交差し、北端で 3135 号（近代 3 面）に連なる。859 号の西側に並走する。断面形は逆台形に開口し、確認面付近では幅 0.74m（約 2 尺半）だが、下底面では 0.45 m（1 尺半）となる。深さは 0.28m を測る。997 号に切られ、1421 号、1860 号、1886 号を切る。両側面に木杭留めの木枠を伴う。覆土は 3 層に分かれ、2 層は大型瓦片を大量に含み、1 層は溝を覆う薄層で突き固められたように堅くしまる。出土遺物は総点数 502 点、総重量 31,435.9g と規模に比して多い。瓦以外に陶磁器類も目立ち、白磁合子や土器灯明具など完形の遺物も含む。廃絶年代は、19 世紀第 3 四半期と推定される。

【礎石】

1-1 面では並びを捉えることはできなかったものの、複数の礎石を検出した。

963 号・962 号・976 号（第 1-220 図、図版 3-61-1、第 3-16 表）

これらは掘方を持つ礎石で、963 号と 962 号間は芯々で 0.9m（田舎間半間）、962 号と 976 号間は 1.88 m（田舎間 1 間強）を測る。962 号と 963 号は複数の礫を組み合わせた礎石で、掘方の中央に大型の礫を配置され、それを囲むように小型の礫が配置されている。962 号と 963 号からは礎石の上部構造と礎石の下部構造は確認されなかった。石材はいずれも安山岩である。976 号は大型の礫が単独で配置された礎石である。石材は安山岩である。

966 号（第 1-220 図）

966 号は G-2 区の中央部に位置する石列で、切り石を東西方向に列状に配置している。966 号の周辺には粘土層が堆積しており、また、礎石が見られることから屋敷に伴う何らかの施設と考えられる。

【埋桶】

1862・1863 号（第 1-220 図、第 3-16 表）

1862 号と 1863 号は両者ともに埋桶で、G-2 区北西部に位置する。1862 号は上部が削平されており、辛うじて底板と底板の下に堆積した掘方覆土を確認した。1863 号は側板と掘方は検出したが、底板は検出されなかった。覆土は 3 層に分かれており、1 層が 1862 号掘方、2 層が 1863 号の覆土、3 層が 1863 号掘方にあたる。1 層と 3 層は黒褐色土層、2 層は焼土粒や炭化物粒を含む層である。

1862 号からは遺物は出土しなかった。1863 号出土遺物の点数、重量は 9 点、76.9g である。出土した遺物から 1863 号の年代は 19 世紀第 2 四半期以降と考えられる。

【埋甕（水琴窟）】

1745 号（第 1-220 図、第 3-16 表）

東側で検出された埋甕で、頸部を打ち欠き、口縁部を欠失した陶器中甕を逆位で埋設する。掘方は径 40cm 程の円形を呈し、検出面からの深さは 0.28 mを測る。1852 号、1853 号を切る。遺構下底面には排水・浸透等に関わる造作がないため不詳ながら、用途としては水琴窟の地下施設の可能性が挙げられる。覆土は 5 層に分けられ、1 層から 3 層が甕内の覆土、4 層と 5 層が掘方にあたる。

甕は胴丸形を呈する瀬戸美濃産中甕で、口縁付近に灰釉（黒）が打ち掛けられた鉄釉中甕である。口径径 32cm・器高 27cm・底径径 24cm を測る。1845 号と遺構間で接合する。出土遺物は埋納甕を含めて 4 点 5,172.6g である。埋納年代は、19 世紀前葉以降である。

B　1-2 面

G-2 区 1-2 面は G-2 区全域で確認されている。北側に隣接する H-2 区南西部と共に旗本保科家の屋

敷にあたる。

【溝】

1000 号（第 1-60・224 図、第 3-16 表）

G-2 区 1- 2 面を東西に走る溝で長さ 13.1 m以上、幅 41cm（約 1 尺半）、深さ 0.26 mを測る。横断面はコの字形を呈し、南北壁に木枠を有し、南壁側一部に土留石列、溝内両壁際に土留め杭を伴う。底面レベルの比高では西から東側へと傾斜する。石材は安山岩、緑色凝灰角礫岩（曽我浦青石）、房州石等様々で、杭木の遺存状態が悪く樹種の同定は不可であった。直下に 1-2 面 1424 号溝がほぼ同ラインに並走することから、1-1 面段階で溝幅を細くして作り替えられたものと考えられる。東端は南北に直行する 888 号溝に L 字形に接続する。西側は直行する 1403 号(1-1 面;19 世紀第 3 四半期)と交差した辺りで主軸方向が 10°程南に振れ、西端は攪乱に切られ不明瞭となる。中央付近では北側から 1414 号溝が接続する。出土遺物は総点数 415 点、総重量 15,727.1g と、遺構規模に比して比較的多いが、細片が大半である。廃絶年代は、遺物の年代から 19 世紀第 3 四半期と推定される。

1414 号（第 1-60・224 図、第 3-16 表）

G-2 区 1-2 面中央北側から検出された南北方向の溝で、南側へと傾斜し南端部で直交する 1000 号遺構に接続する。確認された範囲では長さ 2.75 m、幅 0.57m（約半間）、深さ 0.09 mを測る。両側面に木枠と木杭を伴う。覆土は全体的に黄色系の砂が多く焼土・炭化物は少ない。出土遺物は総点数 169 点、総重量 4854.9g とやや少ないが、遺存状態が良好な遺物を含み、1000 号との交点からは完形の灰釉徳利が検出されている。廃絶年代は 19 世紀第 2 四半期以降と推定される。

1424 号（第 1-59・224 図、第 3-16 表）

G-2 区北側を東西に貫く溝で、西から東へと傾斜する。東端で 888 号溝と接続し南方へと 90 度屈曲する。全体では L 字形の平面形となり、西端の様相は旧道により破壊されるため不詳である。規模は確認された範囲で長さ 15.4 m。断面形はコの字形で幅は 0.65 m（半間強）、深さ 0.32 mを測る。南北壁には側板・木杭を伴う。801 号、1471 号に切られ、1723 号、1965 号を切る。直上 1-1 面段階の 1000 号溝が軸を同じくして並走し、同位置で造り替えられていることがわかる。覆土は最上層では 1-2 面焼土面盛土にパックされる。溝内覆土は薄層の水平堆積で、下層（ 4 ・ 5 層）は一様ではないが砂質土が堆積する傾向があり使用時の水性堆積と思われる。出土遺物は総点数 1,077 点、総重量 48,077.9g と溝にしては多いが、遺存度が低く細片が大半である。廃絶年代は 19 世紀中葉、嘉永 3 年（1850）の火災を下限とする。

【埋桶】

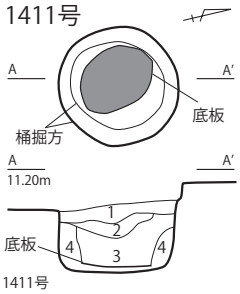
922 号（第 1-222 図、第 3-16 表）

922 号は埋桶であるが、底板のみが確認されている。北側 2 mに同様の埋桶である 924 号が位置する。規模は径 0.52 ～ 0.55 mの円形を呈し、深さ 0.43 mを測る。掘方の断面形は桶形で平坦に調整されている。覆土は 4 層に分かれており、最下層である 4 層が掘方部分にあたる。 1 層と 3 層は粘土を多く含み、間層と底面直上に砂主体層が堆積する。出土した遺物の点数は 37 点、重量は 1,788.9g である。

1411 号（第 1-222 図、第 3-16 表）

1411 号は G-2 区北西部に位置する埋桶である。平面形は円形で底面からは桶の底板が検出されて

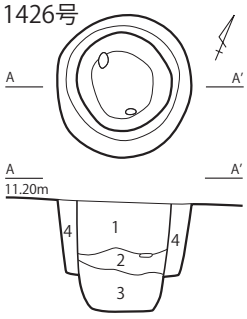
1411号



1411号
1：10YR5/1（褐灰色）　しまり：極強　粘性：強い　焼土粒φ3～5mm7%
　炭化物粒φ1～3mm2%　暗黄灰色粘土φ10mm5%　赤錆3%　褐灰色粘土主体
2：10YR5/2（暗灰黄色）　しまり：強い　粘性：極強　焼土粒φ1～3mm3%
　炭化物粒φ1～5mm5%　暗黄灰色粘土主体
3：10YR5/2（暗灰黄色）　しまり：あり　粘性：極強　　暗黄灰色粘土主体
4：10YR4/2（灰黄褐色）　しまり：あり　粘性：あり　黄色砂3%
　焼土粒φ3～5mm5%　炭化物粒φ3～5mm3%　埋桶掘方

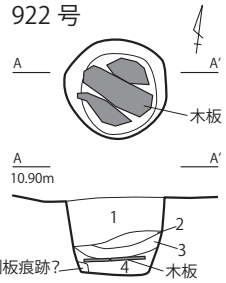
1426号
1：5Y5/2(灰オリーブ色)　しまり：弱い　粘性：強い　錆びたローム粒φ1～3mm1%
　炭化物粒φ1～3mm3%　砂質粘土主体
2：2.5Y4/1(褐灰色)　しまり：弱い　粘性：極強　黄褐色砂3%　焼土粒φ1～3mm1%
　小石φ15～20mm5%
3：2.5Y4/6(オリーブ褐色)　しまり：弱い　粘性：強い　錆びたローム粒φ3～5mm5%
　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ3～5mm5%
4：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　焼土粒φ5～10mm5%
　炭化物粒φ1～3mm1%

1426号

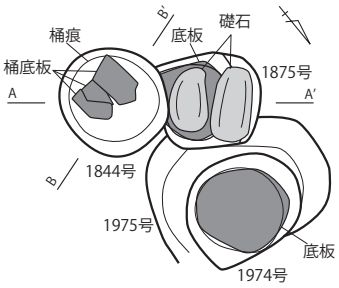


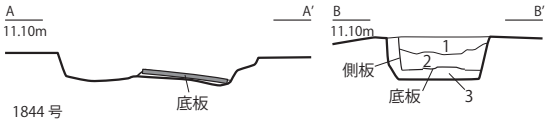
922号
1：2.5Y5/2(暗灰黄)　しまり：極強　粘性：あり
　ローム粒φ3～5mm5%　焼土粒φ1～3mm3%
　炭化物粒φ1～5mm3%
　灰黄色(2.5Y6/2)粘土粒φ5～15mm30%
2：2.5Y4/6(オリーブ褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い
　オリーブ褐色砂主体80%　焼土粒φ1～3mm2%
　炭化物粒
3：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：弱い　粘性：強い
　オリーブ褐色砂3%　炭化物粒φ1～3mm2%
　黄灰色粘質土主体
4：10Y5/1(灰色)　しまり：弱い　粘性：弱い
　灰色砂とオリーブ褐色砂が互層状に堆積

922 号



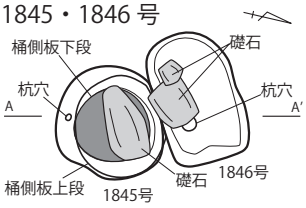
1844・1875・1974・1975 号

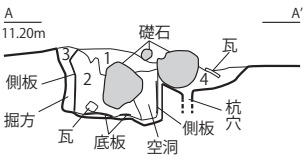




1844 号
1：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：あり　細砂 5 ～ 10%　焼土粒φ1~5mm5 ～ 10%　炭化物粒φ1~5mm5 ～ 10%
　瓦含む
2：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：あり　細砂 5 ～ 10%　焼土粒φ1~3mm5 ～ 10%　炭化物粒φ1~3mm1 ～ 3%
3：2.5Y4/2(暗灰黄色)　しまり：強い　粘性：あり　シルトφ1~5mm5 ～ 10%　焼土粒φ1~3mm1 ～ 3%
　炭化物粒φ1~3mm1 ～ 3%　掘方覆土

1845・1846 号

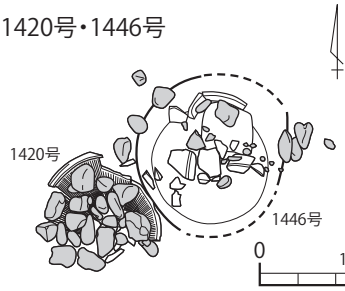




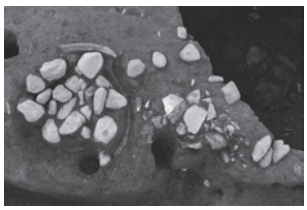
1845 号・1846 号
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：弱い　粘性：強い　焼土粒 5 ～ 10%
　炭化物粒φ1~5mm1 ～ 3%　硬化する　礎石上の柱抜き取り埋土
2：2.5Y4/6(オリーブ褐色)　しまり：あり　粘性：あり
　焼土ブロックφ10~20mm50%　炭化物粒φ1~10mm5 ～ 10%　掘方覆土
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　焼土粒φ3~5mm3%
　炭化物粒φ5~10mm3%
4：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：弱い　焼土粒φ1~5mm5 ～ 10%
　炭化物粒φ1~5mm5 ～ 10%

0　1/40　1m

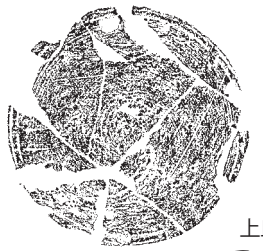
1420号・1446号



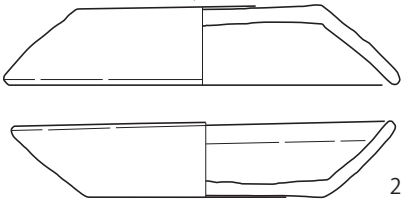
0　1/10　1m



1.　1420号礫群検出状況
（南から）



上皿



2

下皿

1435号

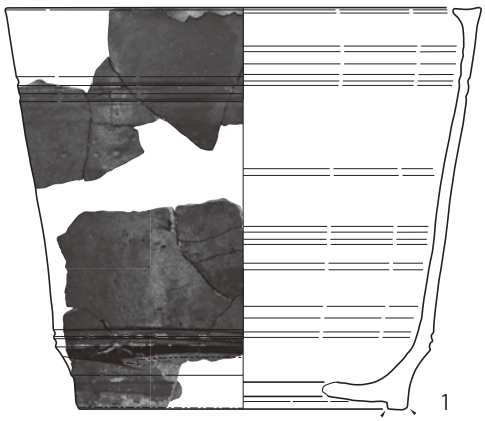


0　1/10　1m



2.　1435号胞衣皿検出状況
（南から）



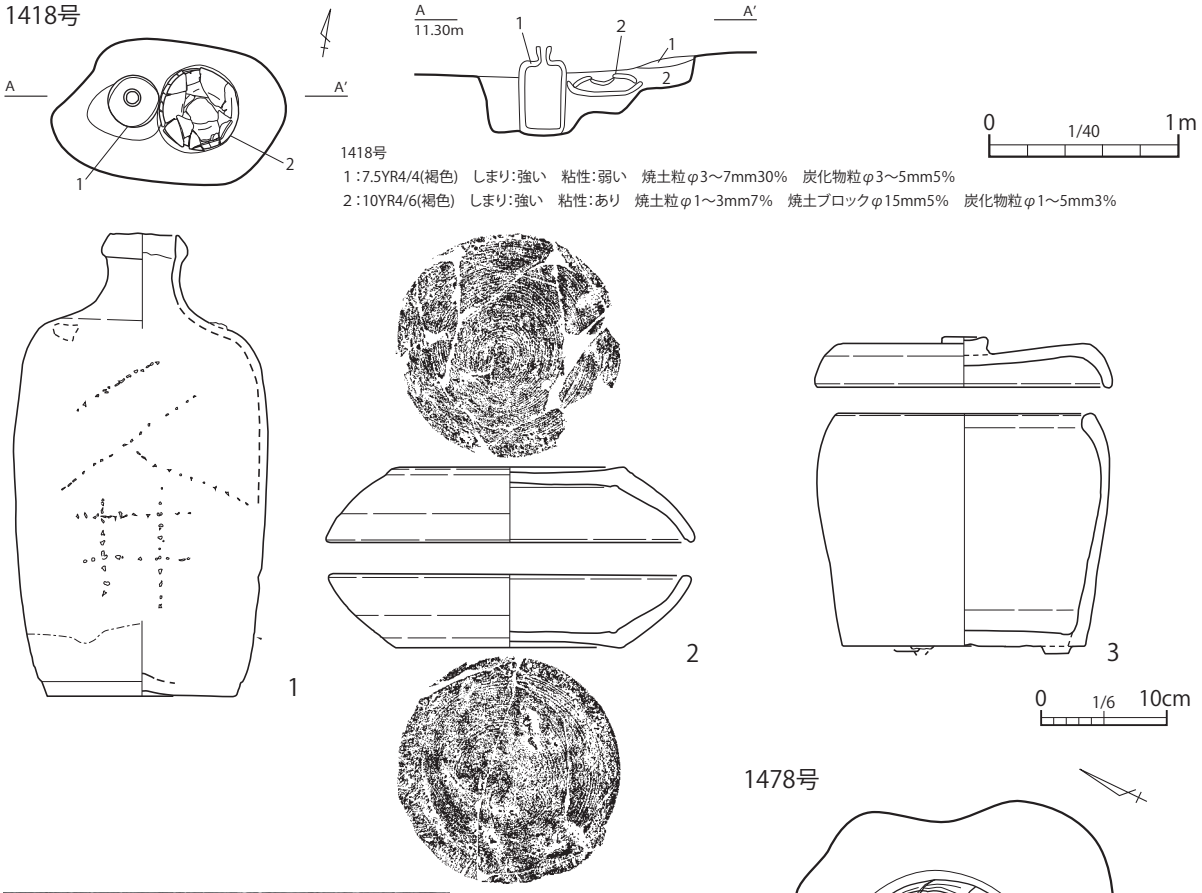


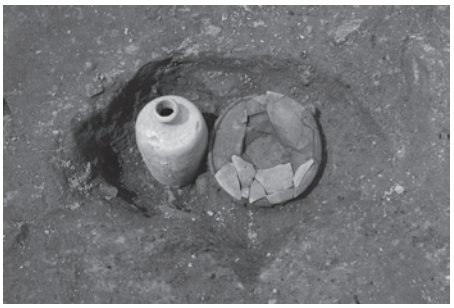
1

0　1/6　10cm

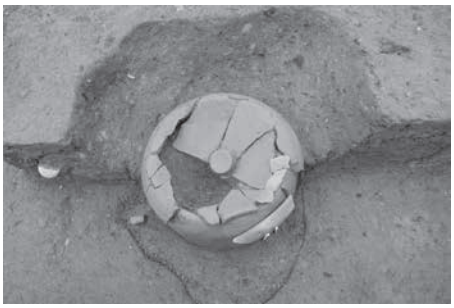
0　1/4　10cm

第 1-222 図　G-2 区 1-2 面の遺構（１）（1/4・1/6・1/10・1/40）

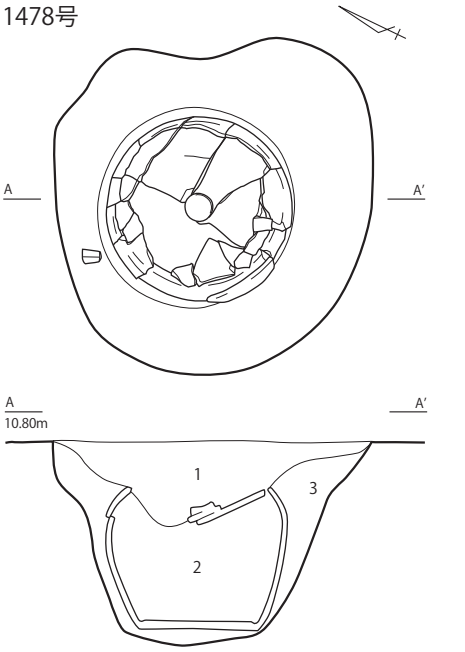


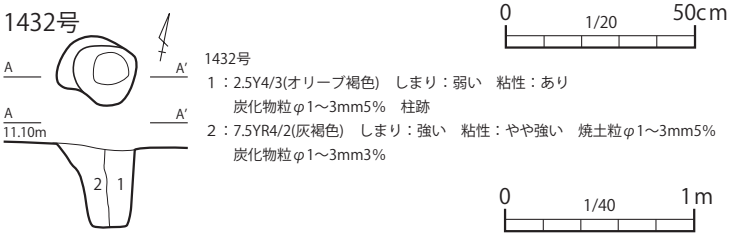


1. 1418号　徳利・胞衣皿検出状況（南から）

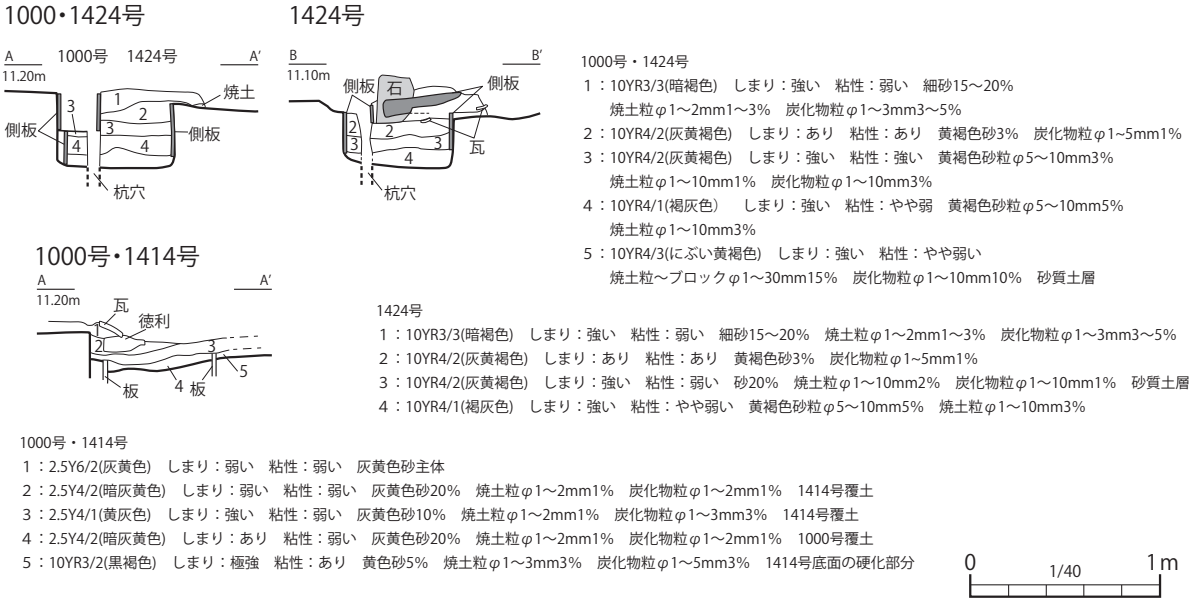


2. 1478号火消壺検出状況(西から)





第 1-223 図　G-2 区 1-2 面の遺構（２）（1/4・1/6・1/20・1/40）



第 1-224 図　G-2 区 1-2 面の遺構（3）（1/40）

いる。しかし、側板は検出できなかった。覆土は 4 層に分かれており、4 層は掘方にあたる。1 層と 2 層は粘土を主体とする層で、3 層は粘質土、4 層は砂や焼土粒、炭化物粒を含む層である。出土遺物の点数、重量は 7 点、33.7g である。出土遺物から遺構の年代は 18 世紀後葉以降と考えられる。

1426 号（第 1-222 図、第 3-16 表）

G-2 区北側から検出された埋桶である。径 0.72 ～ 0.75 mの円形を呈し、中央が段状に一段窪み最深 0.61 mを測る。基底面に 2 基の木杭痕が残る。覆土は 4 層に分かれ、1 層は層厚の厚い砂質粘土層、4 層は掘方覆土である。出土遺物は 88 点 2,503.4g で、細片が多い。廃絶年代は 19 世紀第 2 四半期以降である。

1844・1875・1974・1975 号（第 1-222 図、第 3-16 表）

1844 号は、北西側から検出された埋桶である。掘方は径 0.57 mの円形を呈する。上位を削平され、残存する深さは 0.26 mである。東側で 1875 号埋桶を切る。木桶の遺存状態は悪いが径 40cm と推定される。出土遺物は 40 点 556.9g、細片である。廃絶年代は不詳ながら 18 世紀後葉以降、おそらく 19 世紀前半であろう。

1845・1846 号（第 1-222 図、第 3-16 表）

1845 号は、北西側から検出された埋桶である。掘方は径 0.6m 程、深さ 0.41 m、木桶は径 0.45m を測る。1846 号を切る。埋桶内からは底面から浮いた状態で 40cm 大の安山岩の円礫が 1 点検出されている。礎石と推定される。出土遺物は 27 点 3,676.1g で、大半は瓦細片である。廃絶年代は不詳ながら、陶磁器類からは 18 世紀後葉以降、おそらく 19 世紀前半と推定される。

【胞衣埋納遺構】

1418 号（第 1-223 図、第 3-16 表）

掘方は歪な隅丸長方形を呈し、長軸0.57m、短軸0.37mを測る。底面は西側へと段状に 2 段落ち込み、最深 0.27m を測る。径 20cm 弱のかわらけを上下合わせ口にして重ね、西側に瀬戸美濃産一升徳利 1 個体を伴う。かわらけの口径は上皿が径 19.5cm。下皿が径 19.1cm。埋納された年代は遺物からは

18 世紀後葉以降、おそらくは 19 世紀前半と考えられる。

1435 号（第 1-222 図、第 3-16 表）

1-2 面から検出された。掘方は隅丸長方形で、規模は長軸 0.32 m、短軸 0.24 m、深さ 0.11 mを測る。かわらけ（中皿）を上下合わせ口にして重ねる。下皿の内面は白変した状態である。かわらけの口径は上皿が径 20.4cm、下皿が径 19.9cm。埋納された年代は共伴遺物からは不詳ながら、19 世紀代であろう。

【埋甕】

1446 号（第 1-222 図、第 3-16 表）

東側 1-2 面から検出された遺構で、長軸 0.41 m、短軸 0.35 m以上、深さ 0.18 mを測る。南側を近代の 860 号溝に切られるなど遺存状態は不良であるが、多数の亜円礫を伴って瀬戸美濃産鉄釉半胴甕が潰れた状態で出土した。西接する 1420 号擂鉢埋納遺構は亜円礫を伴う共通点などから関連性が高い。掘方の底面は平坦である。本来は甕を正位ないし逆位で埋設していたと推定されるが、構造上高さが足りないため、1-1 面以上の高い面に帰属していた可能性がある。半胴甕は推定口径 38cm・器高 32cm・底径 26cm。埋納年代は不詳ながら、19 世紀代前半と推定される。

【火消壺埋納遺構】

1478 号（第 1-223 図、第 3-16 表）

東側間口付近に位置し、蓋を伴う火消し壺が埋納され、土圧で蓋が内部に落ち込んだ状態で検出された。長軸 0.96 m、短軸 0.88 mの不整円形を呈し、深さ 0.54 mを測る。掘方の断面形は逆台形で上端付近で外反する。覆土は 3 層に分かれ、3 層は掘方である。口径は 20.3cm、口縁内湾形の典型的な江戸在地系火消し壺である。埋納年代は 19 世紀前半と考えられる。

【擂鉢埋納遺構】

1420 号（第 1-222 図、第 3-16 表）

1-2 面、1446 号埋甕に西接して検出された擂鉢埋納遺構である。上位が削平を受け口縁一部が欠失し、南側を近代の 860 号溝に切られるなど遺存状態は不良である。正位に埋設された堺産擂鉢内に径 50 ～ 80mm 大の亜円礫が充填される。砂岩・チャート・ホルンフェルスの多摩川構成礫と酒匂川起源の細粒緑色凝灰岩が混在する。南東 2.5 mに位置する 1465 号（砂利基礎）と同じ石質組成とされる（柴田徹氏の同定結果による）。1446 号埋甕とともに庭園に伴う施設の可能性が考えられる。擂鉢の形態から 18 世紀後葉以降、おそらくは 19 世紀以降の構築であろう。

【ピット】

1432 号（第 1-223 図、第 3-16 表）

1-2 面から検出された柱穴で、長軸 0.40 m、短軸 0.32 mの不整円形を呈し、深さ 0.46 mを測る。径 15cm の柱痕を有する。

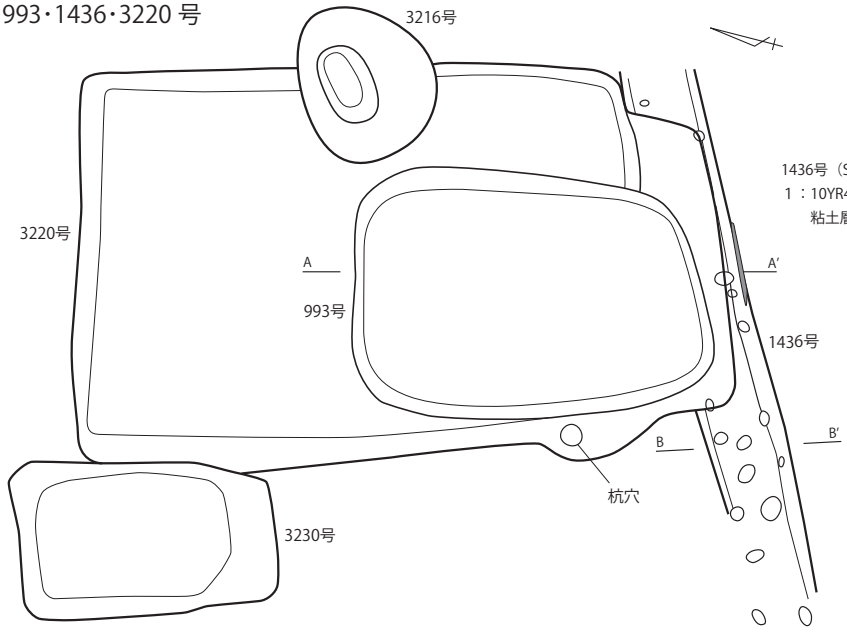
C　1-3 面

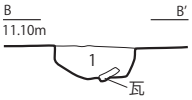
G-2 区 1-3 面は G-2 区北西部のみで確認されている。北側に隣接する H-2 区南西部と共に旗本保科家の屋敷にあたり、H-2 区 2 面に対応する。

【地下室】

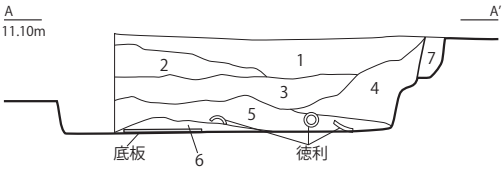
993・1436・3220 号（第 1-225 図、第 3-16 表）

993・1436・3220 号



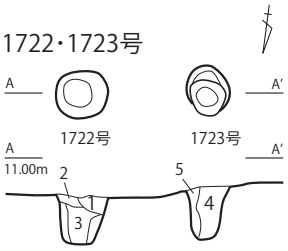


1436号（SPB-B′）
1：10YR4/1(褐灰色)　細粗砂5～10%　焼土粒φ1～3mm3～5%
　粘土層(単層)　瓦多量



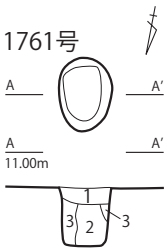
993号（SPA-A′）
1：10YR3/1(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ1～3mm2%　焼土粒φ1～3mm5%
　炭化物粒φ3～5mm15%　赤錆3%　砂質土
2：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：極強　灰黄色粘土を含むφ10～15mm15%
3：2.5Y4/2(暗灰黄)　しまり：極強　粘性：極強　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物φ3～10mm10%
　灰黄色粘土φ10～20mm30%　木端多い
4：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ1～2mm1%　焼土粒φ1～3mm3%
　炭化物粒φ3～10mm15%　小石円礫φ30mm10%
5：2.5Y 4/1(黄灰色)　しまり：弱い　粘性：極強　遺物(特に徳利)・木端多い
6：10YR3/1(黒褐色)　しまり：弱い　粘性：極強　特に遺物を多い
7：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　炭化物粒φ5～10mm5%

1722・1723号



1722号
1：2.5Y3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　細砂15～25%
　焼土粒1～3%　炭化物粒φ1~5mm5～10%
2：5Y8/3(淡黄色)　しまり：強い　粘性：あり
　シルト　中礫φ10~50mm1～3%　砂主体層
3：2.5Y3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い
　焼土粒φ1~5mm5～10%　炭化物粒1～3%　中礫1～3%
4：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：強い　酸化鉄散在
　シルトφ1~5mm5～10%　焼土粒1～3%　炭化物粒1～3%
5：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：強い　炭化物粒1～3%

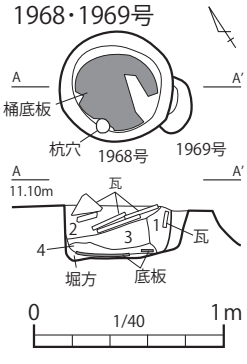
1761号



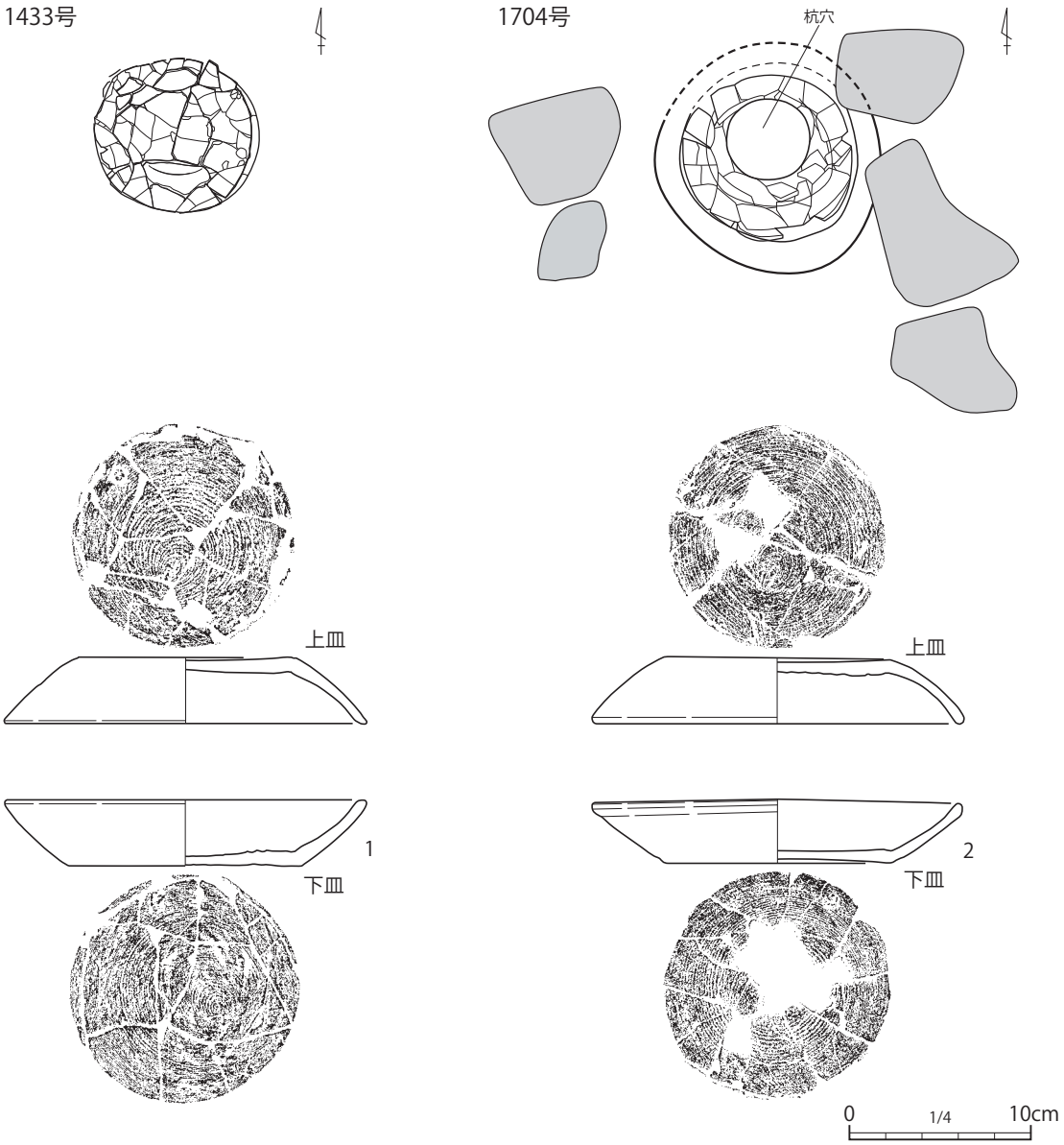
1761号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　ローム粒5～8%
　砂(細)10～15%　焼土粒φ1～5mm5～8%　炭化物 粒φ1～5mm5～8%
2：5Y3/6(オリーブ黄色)　しまり：あり　粘性：弱い
　焼土粒～ブロックφ10～12mm25～30%　炭化物粒φ1～5mm5～8%
3：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　焼土粒5～8%
　炭化物粒φ1～3%φ1～5%

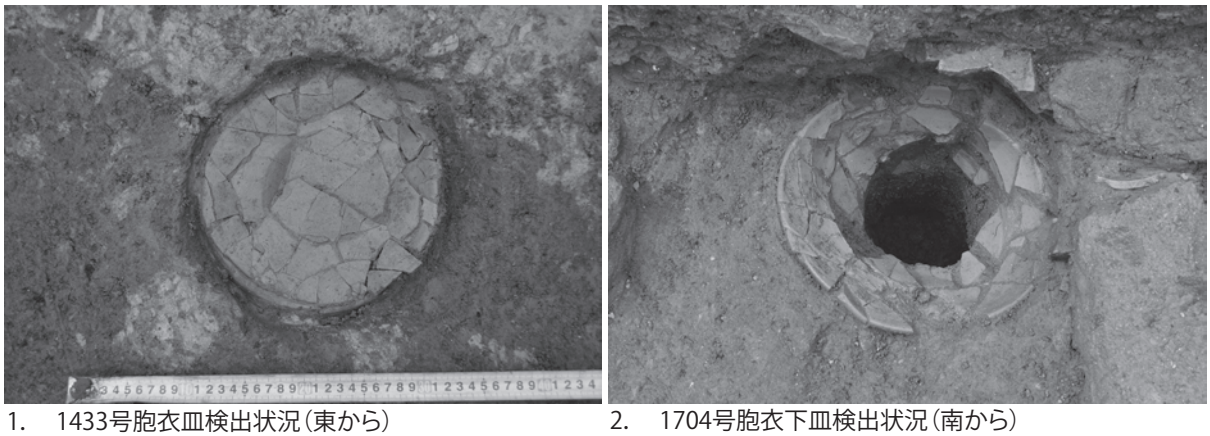
1968号
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い
　黄褐色砂ブロックφ3～5mm5%
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い
　焼土粒φ1～2mm1%
3：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：やや弱い
　炭化物φ5mm1%　砂質土
4：10YR4/4(褐色)　しまり：弱い　粘性：なし　砂層
　一部酸化ヒビ入る

1968・1969号



第 1-225 図　G-2 区 1-3 面の遺構（1）(1/40)





1.　1433号胞衣皿検出状況（東から）　　2.　1704号胞衣下皿検出状況（南から）

第 1-226 図　G-2 区 1-3 面の遺構（２）（1/4）

993 号と 3220 号はどちらも長方形の地下室である。G-2 区北東部に位置しており、北端は H-2 区で確認した。993 号は 3220 号よりも新しい地下室で、かつ深くなっている。

993 号からは側板は検出されなかったが、底面から底板が検出されている。掘方も認められない。底面の底板は北側でのみ確認されている。底面からは徳利が複数検出されている。出土遺物の点数は 4,573 点、重量は 155,273.8g である。遺構の年代は出土遺物から 19 世紀第 3 四半期（1860~70 年代）に位置づけられることから、993 号は 1-1 面から掘り込まれた遺構である可能性が考えられる。

3220 号は 993 号の他、3216 号と 3230 号に切られる。また、木組溝である 1436 号を切る。3220 号は当初、G-2 区側では 993 号と一体の遺構として調査を行っていたが、H-2 区側を調査し、993 号とは異なる地下室であることを確認し、3220 号とした。3220 号は壁面が真っ直ぐに立ち上がり、底面は平坦な断面形が箱形となる地下室で、993 号とは異なり側板や底板といった付属施設の痕跡は確認出来なかった。遺物は 1,030 点 36,619.2g 出土している。出土遺物から、遺構の年代は 19 世紀第 2 四半期に位置づけられる。

1436 号は東西に走る木組溝である。側板は検出されなかったものの、底面から複数の杭を検出したことから木組み溝とした。覆土は単層で、瓦片を多量に含む粘土層が堆積する。遺物は 33 点 698.6g 出土している。出土遺物から遺構の年代は 19 世紀中葉に位置づけられる。

【埋桶】

1968 号・1969 号（第 1-225 図、第 3-16 表）

1968 号は埋桶であるが、底板のみが確認されている。平面形は円形で、壁面は真っすぐに立ち上がる。検出された底板は 5 枚の板を組み合わせて製作されていた。覆土は 5 層に分かれており、1 層から 4 層が桶内の覆土、5 層が掘方にあたる。1 層から 3 層は砂質土層で、桶底板上に堆積する 4 層は砂層であった。

【胞衣埋納遺構】

1433 号（第 1-226 図、第 3-16 表）

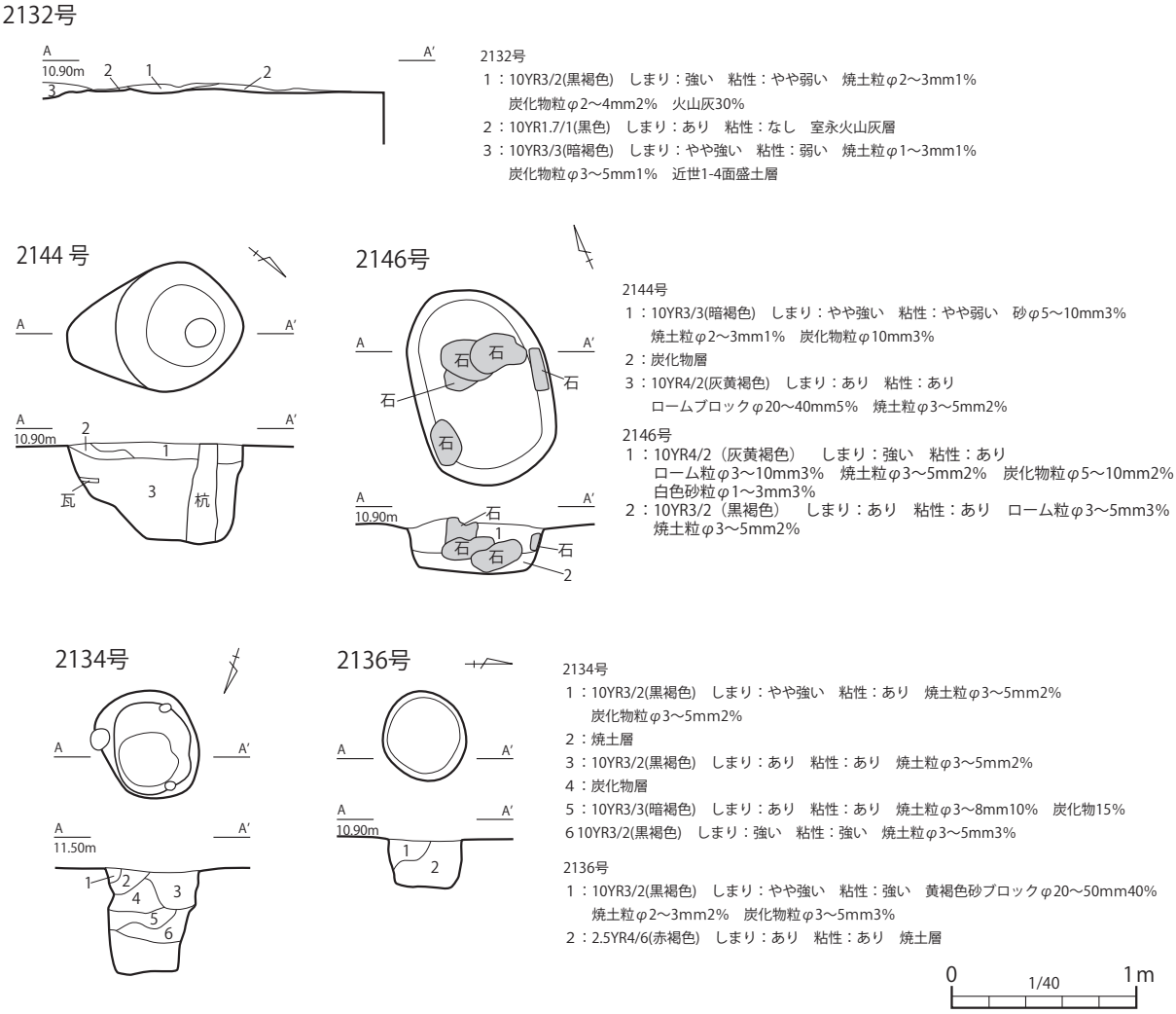
1433 号は上部が削平され、埋納された胞衣皿の上部が露出した状態で検出された。掘方は確認することが出来ず、削平され底面のみが残存していたものと考えられる。胞衣皿が 2 枚合わせ口状に配置された状態で検出されており、胞衣皿内に堆積する覆土からは胎盤が変質したとみられる痕跡は確認されなかった。埋納された胞衣皿は上皿が口径 199mm、器高 36mm、底径 120mm、下皿が口径 199mm、器高 36mm、底径 128mm を測る。

1704 号（第 1-226 図、第 3-16 表）

1704 号は周囲を礫に囲われた胞衣埋納遺構である。胞衣皿の中心部は上位の面から打ち込まれた杭により失われていた。礫および胞衣皿の上部が露出した状態で検出され、胞衣皿と礫の掘方は捉えられなかった。埋納された胞衣皿は上皿が口径 201mm、器高 37mm、底径 125mm、下皿が口径 200mm、器高 35mm、底径 125mm を測る。また、胞衣皿を囲む礫は凝灰岩製の切り石で、被熱によるものか、かなり風化が進んでいた。

D　1-4 面

G-2 区 1-3 面盛土層を掘削したところ、広範囲に宝永火山灰層が広がっている状況を確認し、その層上を 1-4 面として調査を行った。G-2 区 1-4 面は宝永火山灰層堆積範囲にあたる G-2 区北西部のみ



第 1-227 図　G-2 区 1-4 面の遺構（1）（1/40）

で確認されている。北側に隣接する H-2 区南西部と共に旗本保科家の屋敷範囲にあたり、H-2 区 2 面に対応する。また、東側に隣接している G-1 区 2 面に対応する。1-4 面は概ね水平な面となっている。

1-4 面からは砂利敷 1 基、礎石 7 基、埋桶 2 基、火山灰層 1 基、溝 1 基、土坑 2 基、ピット 11 基、炭化物集中 1 基、胞衣埋納遺構 1 基が検出された。

【火山灰層】

2132 号（第 1-67・227 図、第 3-16 表）

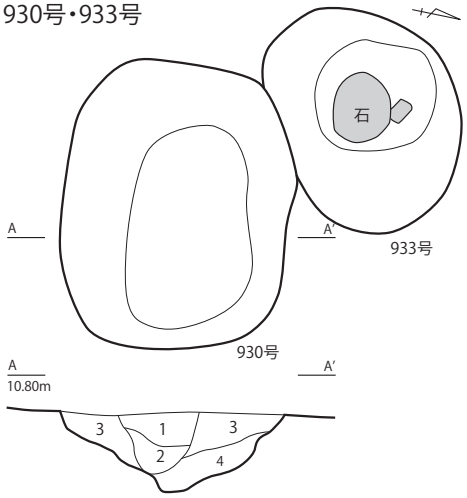
1-4 面では、面的に宝永火山灰が 3 ～ 5 ㎝の厚さを持って堆積する状況が確認された。火山灰が堆積している範囲は G-2 区北西の一部のみとなる。面的に火山灰層が広がっていたことから、富士山の宝永噴火（1707 年）に伴う降灰後に火山灰が堆積したまま盛土造成が行われたものと考えられる。出土した遺物の点数は 20 点、重量は 172.8g である。

【土坑】

2144 号（第 1-227 図、第 3-16 表）

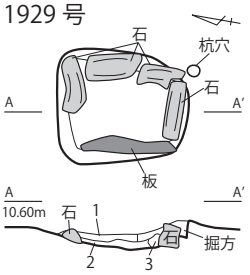
楕円形の土坑で、宝永火山灰層 2132 号を切る。南東側壁面はテラス状の段があり、その他は真っ

930号・933号



930号
1：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：極強　粘性：強い　ローム粒φ1～5mm5%(斑紋状)　焼土粒φ1～5mm7%
炭化物粒φ1～10mm7%
2：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ1～3mm5%(斑紋状)　焼土粒φ1～10mm7%
炭化物粒φ3～10mm7%　灰白色粘土粒φ3～5mm5%　砂質土層
3：5YR4/4(にぶい赤褐色)　しまり：極強　粘性：弱い　灰黄色(2.5Y6/2)砂10%　焼土粒φ1～10mm20%
焼土ブロックφ15～20mm15%　炭化物粒φ3～10mm10%　炭化物ブロックφ15～30mm10%　粒子粗
空隙やや多い　砂質土層
4：5YR4/3(にぶい赤褐色)　しまり：強い　粘性：弱い　灰黄色砂20%　焼土粒φ1～10mm30%
炭化物粒φ3～10mm15%　砂質土層
5：10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　錆びたローム粒φ1～5mm7%
炭化物粒φ1～10mm3%

1929 号

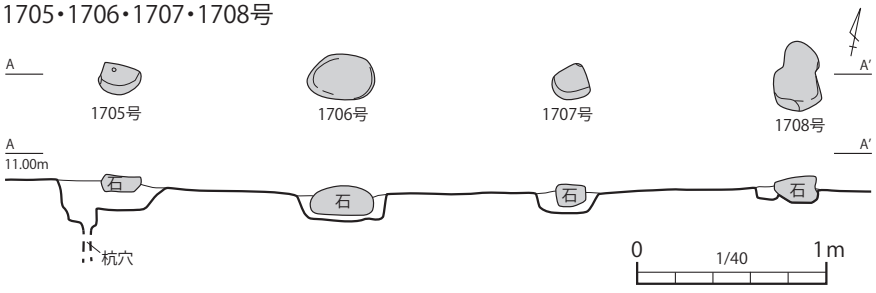


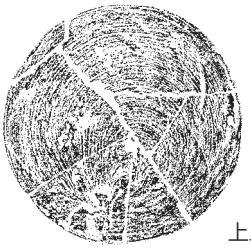
1929号
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　焼土粒φ1～5mm7%
炭化物粒φ3～10mm10%　にぶい黄褐色(10YR6/3)粘土ブロックφ15～20mm5%
黄灰色(2.5Y6/1)粘土ブロックφ10～15mm15%
2：10YR7/2(灰黄褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い
明黄褐色(2.5Y7/6)砂ブロックφ3～5mm2%　焼土粒φ2～4mm2%　灰層
3：2.5Y4/4(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：なし　焼土層　燃焼部



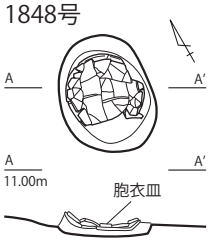
1.　1929号 灰層検出状況（西から）

1705・1706・1707・1708号



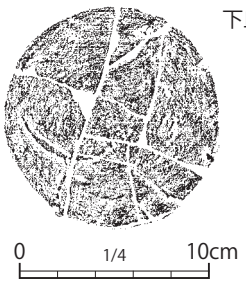


1848号



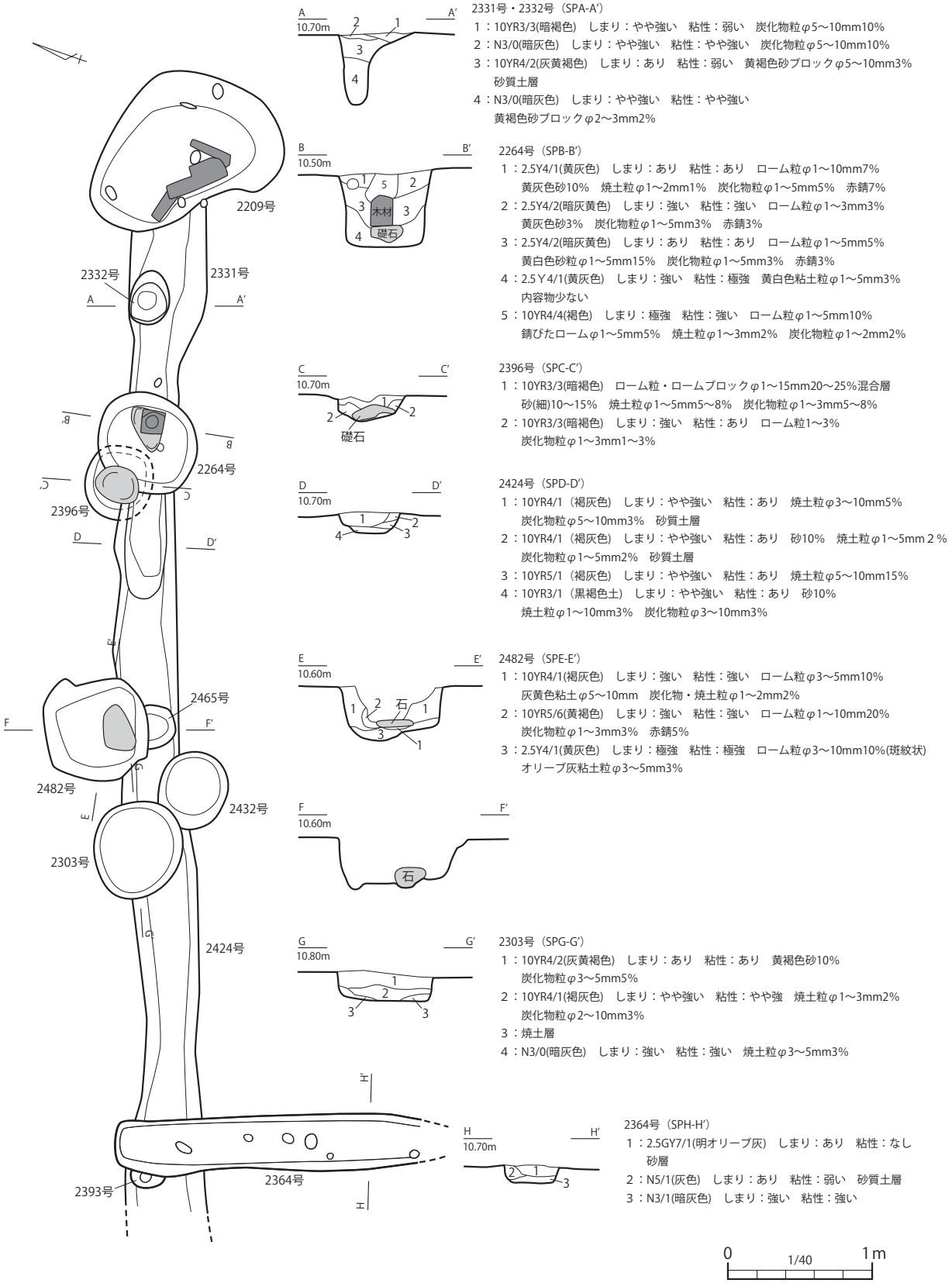


2.　1848号 胞衣皿検出状況（東から）



第 1-228 図　G-2 区 2 面の遺構（１）（1/4・1/20・1/40）

2209・2264・2331・2332・2364・2393・2396・2424・2465・2482号



2331号・2332号（SPA-A′）
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：弱い　炭化物粒φ5～10mm10%
2：N3/0(暗灰色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　炭化物粒φ5～10mm10%
3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　黄褐色砂ブロックφ5～10mm3%
砂質土層
4：N3/0(暗灰色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い
黄褐色砂ブロックφ2～3mm2%

2264号（SPB-B′）
1：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ1～10mm7%
黄灰色砂10%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～5mm5%　赤錆7%
2：2.5Y4/2(暗灰黄色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ1～3mm3%
黄灰色砂3%　炭化物粒φ1～5mm3%　赤錆3%
3：2.5Y4/2(暗灰黄色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ1～5mm5%
黄白色砂粒φ1～5mm15%　炭化物粒φ1～5mm3%　赤錆3%
4：2.5Y 4/1(黄灰色)　しまり：強い　粘性：極強　黄白色粘土粒φ1～5mm3%
内容物少ない
5：10YR4/4(褐色)　しまり：極強　粘性：強い　ローム粒φ1～5mm10%
錆びたロームφ1～5mm5%　焼土粒φ1～3mm2%　炭化物粒φ1～2mm2%

2396号（SPC-C′）
1：10YR3/3(暗褐色)　ローム粒・ロームブロックφ1～15mm20～25%混合層
砂(細)10～15%　焼土粒φ1～5mm5～8%　炭化物粒φ1～3mm5～8%
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒1～3%
炭化物粒φ1～3mm1～3%

2424号（SPD-D′）
1：10YR4/1（褐灰色）　しまり：やや強い　粘性：あり　焼土粒φ3～10mm5%
炭化物粒φ5～10mm3%　砂質土層
2：10YR4/1（褐灰色）　しまり：やや強い　粘性：あり　砂10%　焼土粒φ1～5mm２%
炭化物粒φ1～5mm2%　砂質土層
3：10YR5/1（褐灰色）　しまり：やや強い　粘性：あり　焼土粒φ5～10mm15%
4：10YR3/1（黒褐色土）　しまり：やや強い　粘性：あり　砂10%
焼土粒φ1～10mm3%　炭化物粒φ3～10mm3%

2482号（SPE-E′）
1：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ3～5mm10%
灰黄色粘土φ5～10mm　炭化物・焼土粒φ1～2mm2%
2：10YR5/6(黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ1～10mm20%
炭化物粒φ1～3mm3%　赤錆5%
3：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：極強　粘性：極強　ローム粒φ3～10mm10%(斑紋状)
オリーブ灰粘土粒φ3～5mm3%

2303号（SPG-G′）
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄褐色砂10%
炭化物粒φ3～5mm5%
2：10YR4/1(褐灰色)　しまり：やや強い　粘性：やや強　焼土粒φ1～3mm2%
炭化物粒φ2～10mm3%
3：焼土層
4：N3/0(暗灰色)　しまり：強い　粘性：強い　焼土粒φ3～5mm3%

2364号（SPH-H′）
1：2.5GY7/1(明オリーブ灰)　しまり：あり　粘性：なし
砂層
2：N5/1(灰色)　しまり：あり　粘性：弱い　砂質土層
3：N3/1(暗灰色)　しまり：強い　粘性：強い

0　1/40　1m

第 1-229 図　G-2 区 2 面の遺構（２）（1/40）

すぐに立ち上がる壁面となっている。底面と土層断面で上部から打ち込まれたと考えられる杭跡を確認している。覆土は杭跡を除き、３層に分かれる。1 層は砂や焼土粒、炭化物粒を含む層、２層は炭化物層、３層はロームブロックと焼土粒を含む層である。

出土した遺物の点数は 12 点、重量は 1,007.8g である。出土した遺物から遺構の年代は 18 世紀中葉以降に位置付けられる。

2146 号（第 1-227 図、第 3-16 表）

2146 号は長方形の土坑で、宝永火山灰層 2132 号を切る。底面は平坦で、壁面は真っ直ぐに立ち上がる。覆土は２層に分かれるが、１層と２層のどちらかの層にも多量の礫が含まれていた。出土した遺物の点数は 11 点、重量は 153.7g である。出土遺物からは 19 世紀前葉に位置付けられる可能性がある。

Ｅ　２面

G-2 区２面は G-2 区全域で確認されている。北側に隣接する H-2 区南西部と共に旗本保科家の屋敷にあたり、H-2 区 3-1 面に対応する。また、東側に隣接している G-1 区３面に対応する。

２面からは礎石 21 基、埋桶 1 基、硬化面 1 基、砂利敷 1 基、溝 7 条、土坑 17 基、ピット 19 基、杭穴２基、胞衣埋納遺構 1 基が検出された。

【土坑】

930・933 号（第 1-228 図、第 3-16 表）

930 号は 933 号を切る楕円形の土坑で、断面形は擂鉢状を呈し、壁面は凹凸が激しい。覆土は４層に分かれる。１層と２層は柱痕状の堆積であるが、どちらもしまり・粘性ともに強い土層であり、柱痕とは断定できない。３層と４層はどちらも砂質土層で、３層は焼土と炭化物を多量に含んでいる。930 号から出土した遺物の点数は 74 点、重量は 4,057.5g である。933 号からは 15 点、205.9g の遺物が出土している。

【炉状遺構】

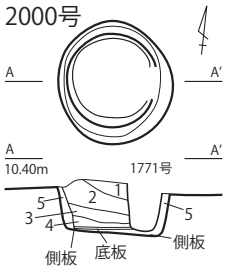
1929 号（第 1-228 図、図版 3-61-2、第 3-16 表）

1929 号は炉状遺構である。平面形は横長の長方形で、３辺に軟質緑色凝灰岩（伊豆青石）製の切石が配され、西側の残りの１辺には板材が設置される。北側に配置された切石は他の石と比較してより被熱していた。また、北西隅は石が配置されていなかったが、石が据えられた痕跡が残っており、廃絶以後に抜き取られたものと考えられる。石に囲まれた内部に堆積する土層は３層に分かれる。１層は表層にあたり、黄灰色粘土を多く含む他、焼土粒や炭化物粒を含んでいる。２層は灰層で砂や焼土粒が混ざる。３層の上面が燃焼面にあたり、遺構の中央部を中心に円形に被熱していた。また、１層の上部には２面盛土層が堆積していた。２層が灰層、３層上面が燃焼面であることから１層は廃絶以後に堆積した土層で、含まれる粘土は炉状遺構の周辺で使用されていたものの可能性が指摘できる。出土遺物の点数は 26 点、重量は 200.8g で、26 点すべてを金属製品が占めていた。

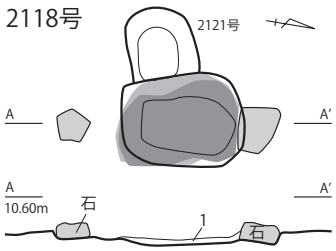
【礎石列】

1704 号・1706 号・1707 号・1708 号（第 1-228 図、第 3-16 表）

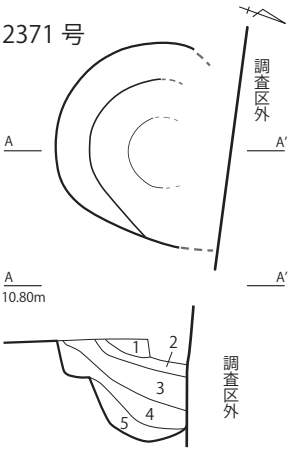
1704 号・1706 号・1707 号・1708 号は等間隔に並ぶ礎石列で、それぞれの礎石の間隔はおよそ 1.2m である。



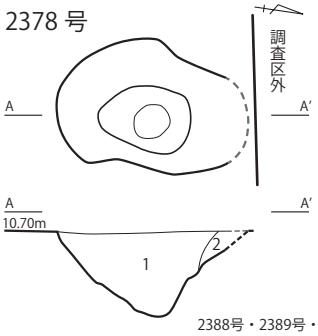
2000号
1：10YR3/4(暗褐色)　しまり：極強　粘性：弱い　ローム粒φ1～3mm5%　焼土粒φ1～5mm20%　炭化物粒φ1～5mm10%
　灰白色粘土粒φ1～3mm3%
2：5YR5/8(明赤褐色)　しまり：極強　粘性：弱い　炭化物粒φ5～10mm3%(層下部に薄い層状に炭化物集中あり)
　黄褐色(2.5Y5/4)土ブロックφ15～20mm10%　暗褐色(10YR3/4)土ブロックφ15mm5%　焼土主体層
3：2.5Y5/4(黄褐色)　しまり：極強　粘性：弱い　褐色(7.5YR4/6)土を斑紋状に含む(20%)
　炭化物粒φ3～5mm5%(３・４層間に炭化物集中あり)　黄褐色粘質土主体
4：2.5Y5/4(黄褐色)　しまり：極強　粘性：弱い　焼土粒φ1～2mm3%
5：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ロームブロックφ5～10mm5%　焼土粒φ1～5mm7%　炭化物粒φ1～10mm5%
　５層内側に桶側板の痕跡残る



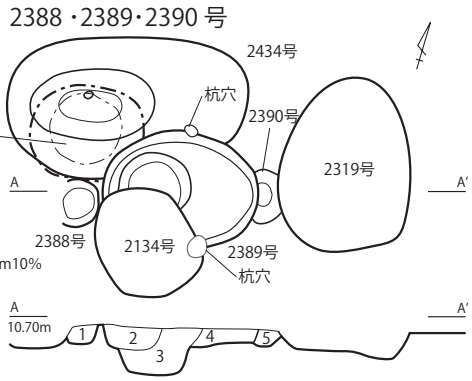
2118号
1：7.5YR6/3(にぶい褐色)　しまり：強い　粘性：弱い　焼土粒φ5～10mm15%
　炭化物粒φ1～10mm10%　下部に厚さ0.5～10mmの炭化物層あり
　１層の下は周縁に被熱面　中央は被熱面なし　にぶい褐色粘土主体60%



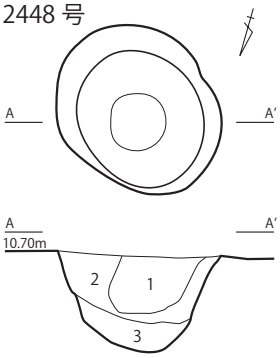
2371号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ5～10mm3%
　明黄褐色砂(2.5Y7/6)φ3～5mm2%
2：10YR4/4(褐色)　しまり；やや弱い　粘性：あり　炭化物粒φ3～5mm2%
　ソフトロームブロック層厚さ10～40mm入る
3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い
　ロームブロックφ20～30mm3%
　褐灰色(10YR5/1)粘土ブロックφ10～30mm10%　焼土粒φ3～5mm2%
　炭化物粒φ1～30mm5%
4：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　焼土粒φ2～3mm3%
　炭化物ブロックφ10～30mm3%
5：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：強い　黄褐色砂ブロックφ5～10mm5%



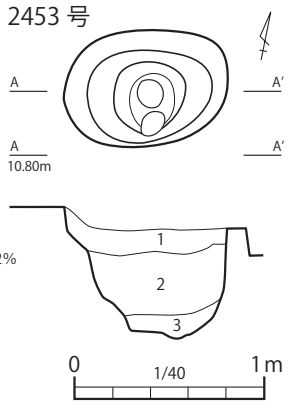
2378号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：強い
　焼土粒φ2～10mm2%　炭化物粒φ2～5mm2%
2：焼土層



2388号・2389号・2390号
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　白色砂粒φ1～2mm3%
　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ3～5mm2%
2：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ロームブロックφ10～15mm10%
　焼土粒φ2～3mm2%　炭化物粒φ3～5mm
3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　砂ブロックφ3～5mm3%
　黄褐色砂ブロックφ3～5mm3%　焼土粒φ2～3mm2%
4：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ2～3mm2%
5：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　炭化物粒φ3～5mm3%

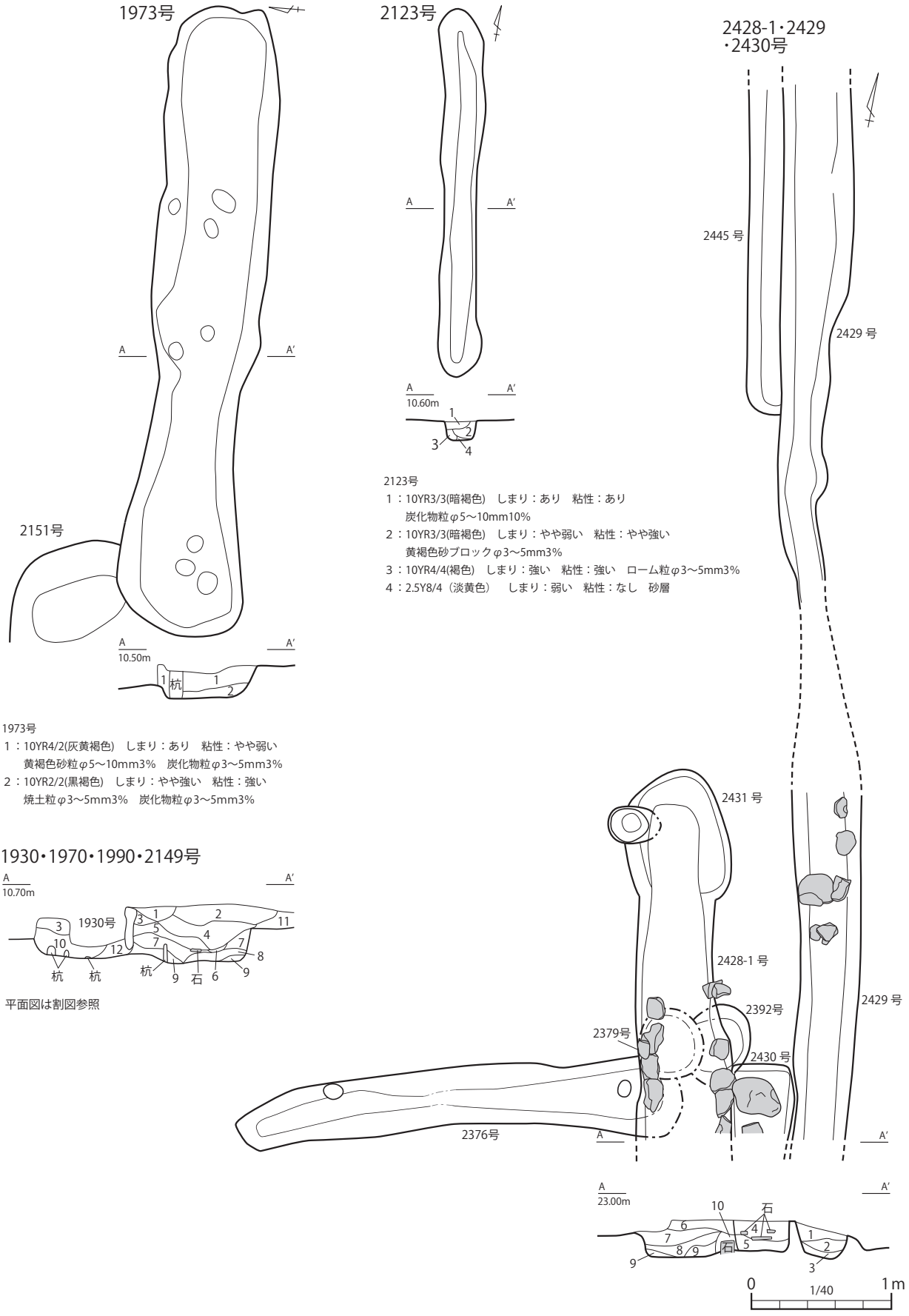


2448号
1：10YR3/4(暗褐色)　しまり：弱い　粘性：やや強い　ローム粒φ1～3mm5%
　ロームブロックφ5～30mm15%
2：10YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒φ1～3mm5%
　ロームブロックφ15mm15%　炭化物φ1～3mm1%
　黄灰色粘質土ブロックφ15mm10%　　赤錆30%
3：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ1～5mm5%(斑紋状)
　炭化物φ1～3mm3%　赤錆5%　緻密



2453号
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ロームブロックφ15～20mm2%
　焼土粒φ2～5mm2%　炭化物粒φ5～10mm5%
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：やや強い　黄褐色砂粒φ5～10mm3%
　焼土粒φ2～5mm2%
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　黄褐色砂粒φ5～10mm2%

第 1-230 図　G-2 区 3 面の遺構（１）(1/40)



1973号
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い
　黄褐色砂粒φ5～10mm3%　炭化物粒φ3～5mm3%
2：10YR2/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：強い
　焼土粒φ3～5mm3%　炭化物粒φ3～5mm3%

2123号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり
　炭化物粒φ5～10mm10%
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや強い
　黄褐色砂ブロックφ3～5mm3%
3：10YR4/4(褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ3～5mm3%
4：2.5Y8/4（淡黄色）　しまり：弱い　粘性：なし　砂層

平面図は割図参照

第 1-231 図　G-2 区 3 面の遺構（2）(1/40)

1930号・1970号・1990号・2149号
1：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：弱い　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～3mm3%　赤錆3%
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：極強　粘性：あり　ローム粒φ1～3mm2%　黄色砂3%　焼土粒φ1～5mm3%　炭化物粒φ1～10mm7%
3：10YR4/1(褐灰色)　しまり：極強　粘性：弱い　黄色砂5%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物φ1～5mm3%
4：7.5YR4/2(灰黄褐色)　しまり：極強　粘性：あり　ローム粒φ1～3mm5%　黄色砂5%　焼土粒φ1～5mm2%　炭化物粒φ1～5mm3%　赤錆5%
5：2.5Y5/1(黄灰色)　しまり：あり　粘性：弱い　黄色砂7%　焼土粒φ1～3mm2%　焼土ブロックφ5mm1%　炭化物粒φ1～3mm3%
6：2.5Y5/1(黄灰色)　しまり：弱い　粘性：弱い　黄色砂30%　焼土粒φ1～3mm2%　焼土ブロックφ5mm1%　炭化物粒φ1～3mm3%
7：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：あり　粘性：弱い　黄色砂7%　焼土粒φ1～3mm2%　焼土ブロックφ5mm1%　炭化物粒φ1～3mm3%
8：2.5Y4/2(暗灰黄色)　黄色砂主体60%　しまり：弱い　粘性：弱い　炭化物粒φ1～3mm5%　一部赤く錆びる
9：2.5Y5/1(黄灰色)　しまり：極強　粘性：強い　壁際土(3面下盛土黄色砂が混ざりあった部分)
10：2.5Y5/4(黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　炭化物粒φ1～5mm3%　赤錆3%　黄灰色砂主体60%
11：10YR3/4(暗褐色)　しまり：極強　粘性：弱い　ローム粒φ1～3mm5%　黄色砂3%　焼土粒φ1～2mm2%　炭化物粒φ1～5mm5%
12：5Y4/1(灰色)　しまり：極強　粘性：極強　灰色粘質土層

2428-1号・2490号・2430号
1：2.5Y4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ1～5mm5%　黄色砂3%　焼土粒φ1～2mm2%　炭化物粒φ1～5mm5%
2：2.5Y6/4(にぶい黄色)　黄色砂主体　しまり：弱い　粘性：弱い　3層ブロックφ10～15mm5%
3：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：強い　粘性：強い　黄色砂10%　炭化物粒φ1～3mm2%
4：2.5Y5/1(黄灰色)　しまり：強い　粘性：弱い　ローム粒φ5～10mm5%　黄褐色砂粒5～10mm5%　焼土粒φ3～10mm3%
5：2.5Y5/1(黄灰色)　しまり：あり　粘性：強い　黄色砂5%　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ1～5mm5%　赤錆7%
6：2.5Y5/1(黄灰色)　しまり：強い　粘性：弱い　ローム粒φ1～3mm3%　黄色砂7%　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ1～2mm2%
7：2.5Y5/1(黄灰色)　しまり：あり　粘性：弱い　ローム粒φ1～3mm2%　黄褐色砂10%　焼土粒φ1～5mm7%　炭化物粒φ1～3mm3%
8：2.5Y4/6(オリーブ褐色)　しまり：強い　粘性：弱い　黄褐色砂20%　黄灰色粘土φ3～5mm3%　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～5mm3%
9：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：あり　粘性：あり　黄色砂5%　炭化物φ1～2mm2%　赤錆3%
10：10YR4/2（灰黄褐色）　しまり：やや強い　粘性：あり　黄褐色砂ブロック5%

【胞衣埋納遺構】

1848 号（第 1-228 図、第 3-16 表）

1848 号は上部が削平され、埋納された胞衣皿の上部が露出した状態で検出された。残存する掘方の平面形は円形を呈する。胞衣皿は２枚合わせ口状に配置された状態で検出された。胞衣皿内に堆積する覆土からは、胞衣皿内に胎盤が変質したとみられる痕跡は確認されなかった。

埋納された胞衣皿は上皿が口径 194mm、器高 38mm、底径 126mm、下皿が口径 193mm、器高 36mm、底径 116mm を測る。

Ｆ　３面

G-2 区３面は G-2 区全域で確認されている。北側に隣接する H-2 区南西部と共に旗本保科家の屋敷にあたり、H-2 区 3-2 面・3-3 面に対応する。また、東側に隣接している G-1 区３面に対応する。

溝 13 条、埋桶 1 基、木組遺構 1 基、炉状遺構 1 基、焼土跡 1 基、焼土層 1 基、礎石 17 基、土坑 22 基、ピット 37 基、杭穴３基が検出されている。

【溝】

2424 号・2331 号（第 1-229 図、第 3-16 表）

2424 号は G-2 区中央部を東西に走る溝で、複数の遺構に切られている。2424 号を切る遺構には 2264 号・2396 号・2482 号・2465 号・2303 号・2432 号・2364 号・2393 号がある。2331 号は 2424 号との新旧関係は不明だが、2424 号に接続する同規模の溝で、2209 号に切られ、収束する。

2424 号は断面形が箱形の溝で、東側で底面が落ち込んでおり、2331 号に接続するものと考えられる。覆土は４層に分かれる（SPD-D′）。１層と２層は砂質土層、３層は焼土粒を含む褐色土層となる。４層は 2331 号に向かって落ち込む部分に堆積する土層で、砂や焼土粒、炭化物粒を含む黒褐色土層である。出土した遺物の点数は、78 点、重量は 1,911.6g である。出土遺物から遺構の年代は 17 世紀後葉に位置付けられる。

2331 号は 2424 号の 2331 号に向かって落ち込んでいる部分ほどの深度はなく、2264 号に切られている部分で立ち上がっているものと考えられる。覆土は SPA-A’ の１層と２層がそれにあたり、１層

と 2 層どちらも炭化物を多く含む層である。なお、SPA-A' の 3 層と 4 層は 2331 号の底面から検出されたピット 2332 号の覆土にあたり、 3 層と 4 層どちらも黄褐色の砂をブロック状に含む層である。出土した遺物の点数は 4 点で、重量は 179.2g である。遺構の年代は出土遺物から 18 世紀第 2 四半期以降であると考えられる。

2364 号は 2424 号を切る溝で、側板は検出されていないものの、底面から複数の杭を検出しており、木組み溝であった可能性がある。北側は 2424 号と重複する部分を始点としており、南に伸びていくが、攪乱により失われている。このほか、北側でピット 2393 号を切っている。2364 号の覆土は 3 層に分かれる（SPH-H'）。最上部の 1 層は砂層で、 2 層は砂質土層となる。最下層である 3 層は暗灰色の粘質土が堆積する。覆土中から遺物の出土はなかった。

2424 号と 2331 号を切る 2264 号は円形の柱穴で、覆土中から礎石と礎石に据えられた柱材を検出している。対応する柱穴を検出することは出来なかったが、形態の類似する柱穴が検出されている。2396 号と 2482 号がそれにあたり、どちらも礎石を持つ。2396 号と 2482 号の底面に据えられた礎石の標高は 2264 号よりもやや高く、かつ上部を削平されているため浅い掘り込みとなっているが、本来は 2264 号と同様の構造を持つ遺構であったと考えられる。なお、2264 号の礎石は安山岩の丸石が使用されていた。出土した遺物の点数は 25 点、重量は 809.6g である。出土遺物から遺構の年代は 18 世紀前葉以降と考えられる。

1973 号（第 1-231 図、第 3-16 表）

1973 号は断面形が船底状の溝で、東西に走る。西端で土坑 2151 号を切る。覆土は 2 層に分かれる。上層は砂質土層、下層は粘質土層となる。出土した遺物の点数は 124 点、重量は 5,865.6g である。出土遺物から 18 世紀第 3 四半期に位置付けられる。

1930・1970・2149 号（第 1-87・231 図、第 3-16 表）

1930 号・1970 号・2149 号は G-2 区東側を南北に走る木組溝である。 3 条の溝は、いずれも底面が南に向かって傾斜する。壁面は真っすぐに立ち上がるが、明確に捉えられない部分が多く、掘方も確認することができなかった。3 条の溝では 1970 号がもっとも新しく、続いて 1930 号が新しい溝であると考えられる。そしてこの中でもっとも古い溝が 2149 号である。なお、1930 号は一部に板材を渡した蓋（1990 号）が残存するなど遺存状態が他の溝に比べ良好であった。覆土は 12 層に分かれており、1 層から 9 層が 1930 号覆土、11 層は盛土層、3 層・10 層、12 層が 2149 号の覆土にあたる。1 層はローム粒や焼土粒、炭化物粒を含む上面の盛土層に由来する層である。2 層から 11 層まで砂を多く含む層となっていおり、12 層は灰色粘質土層となる。1930 号の遺物出土点数は 301 点、15,252.0g である。1970 号は 127 点、3,376.8g の遺物が出土している。2149 号の遺物出土点数は 193 点、重量は 4,800.2g である。これらの遺物の年代から 1930 号は 18 世紀前葉、1970 号は 18 世紀第 3 四半期、もっとも古い 2149 号が 18 世紀第 1 四半期の所産と考えられる。

2123 号（第 1-231 図、第 3-16 表）

2123 号は南北に走る細い溝で、断面形は U 字形で底面は南に向かって傾斜している。覆土は 4 層に分かれる。1 層と 2 層は類似する層で、炭化物や黄褐色の砂をブロック状に含んでいる。3 層はローム粒を含む層で、4 層は砂層である。G-2 区東端に位置しており、屋敷に伴う何らかの区画施設と考えられる。出土遺物の点数は 4 点、84.2g である。

2428-1・2429・2430 号（第 1-231 図、図版 3-61-5、第 3-16 表）

2428-1 号と 2429 号は G-2 区東側を南北に走る溝である。2428-1 号は 2376 号・2379 号・2392 号に切られ、2430 号・2431 号を切る。2429 号は 2445 号を切っている。2430 号は 2428-1 号に切られる方形の土坑である。

2428-1 号は断面形が箱形の溝で、底面は南に向かって傾斜する。肩の部分には礫が並べられており、かつては石組溝であった可能性も考えられる。2429 号は断面形が U 字形の溝で、2428-1 号と同様に底面は南に向かって傾斜する。また、底面には大型の礫が複数見られた。2430 号は方形の土坑で底面からは大型の礫が確認されている。底面は平坦で、壁面は真っすぐに立ち上がっている。覆土は 10 層に分かれており、1 層から 3 層は 2429 号、4 層と 5 層が 2430 号、6 層から 10 層が 2428-1 号の覆土にあたる。1 層から 3 層はしまりが強く、ローム粒や砂、焼土粒、炭化物粒を含む層である。4 層も同様の土層で、5 層は焼土を含む砂質土層である。6 層、7 層も焼土を含む砂質土層で、8 層は砂層である。最下層の 9 層は粘質土層、10 層は再び砂層となる。2428-1 号から出土した遺物の点数は 7 点で、重量は 156.1g である。2429 号から出土した遺物の点数は 14 点で、重量は 114.8g である。2430 号から出土した遺物の点数は 2 点で、重量は 850.0g である。出土した遺物から各遺構の年代は、2428-1 号が 17 世紀末葉から 18 世紀初頭、2429 号が 18 世紀前葉以降と考えられる。

【埋桶】

2000 号（第 1-230 図、第 3-16 表）

2000 号は側板と底板が組まれた桶が埋設される遺構である。掘方を含めて平面形は円形で、上部を 1771 号に切られている。底板は 8 枚の板材を組み合わせて作られている。覆土は 5 層に分かれる。1 層は上面にあたる 2 面の盛土層が落ち込んだ部分にあたる。2 層は焼土層、3 層と 4 層は砂質土層となる。5 層は掘方部分の土層にあたり、5 層と 2 層から 4 層との境界部分には薄く桶の側板の痕跡が残っていた。出土遺物の点数は 9 点、重量は 381.0g であった。出土遺物から 2000 号は 18 世紀後葉の遺構であると考えられる。

【炉状遺構】

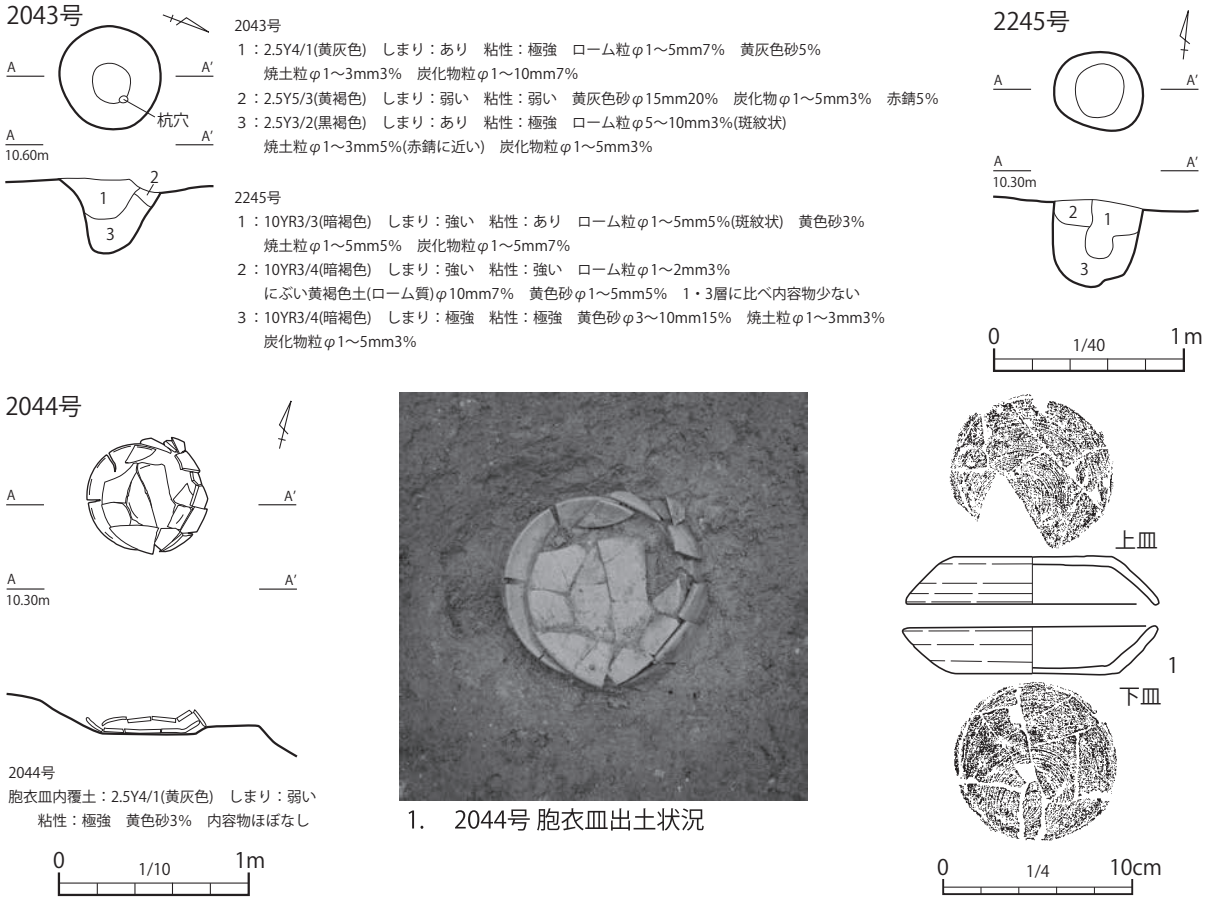
2118 号（第 1-230 図、第 3-16 表）

2118 号は炉状遺構で、2121 号を切っている。平面形は横長の長方形で 2 面で検出された 1929 号と形態が類似するが、遺存状態は不良であり、短辺にあたる 2 辺のみ切石が残っていた。しかし、南側の切石は堆積した覆土からやや距離をおいており、原位置を保っていない可能性がある。切石は 1929 号と同様に凝灰岩が使用されており、被熱し風化している。覆土はにぶい褐色の粘土層が堆積し、下部には厚さ 0.5 ～ 1.0cm の炭化物層が見られた。底面は中心を避けるように被熱していた。出土遺物の点数は 4 点、重量は 758.9g である。

【土坑】

2371 号・2378 号・2448 号・2453 号（第 1-230 図、第 3-16 表）

2371 号・2378 号・2448 号・2453 号はいずれも単独の楕円形土坑で断面形は U 字形、長軸がおおむね 1m、深さが 0.6 ～ 0.8 m と遺構の規模も近似する一群である。すべて G-2 区北西隅に位置する。覆土には類似性はなくそれぞれが異なる土層を覆土とする。各遺構の出土遺物の点数、重量は、2371 号が 11 点 201.9g、2378 号が 3 点 22.1g、2453 号が 1 点 34.6g である。2448 号は遺物の出



第 1-232 図　G-2 区 4 面の遺構（1）（1/4・1/10・1/40）

土がなかった。出土遺物から遺構の年代は 17 世紀後葉以降と考えられる。

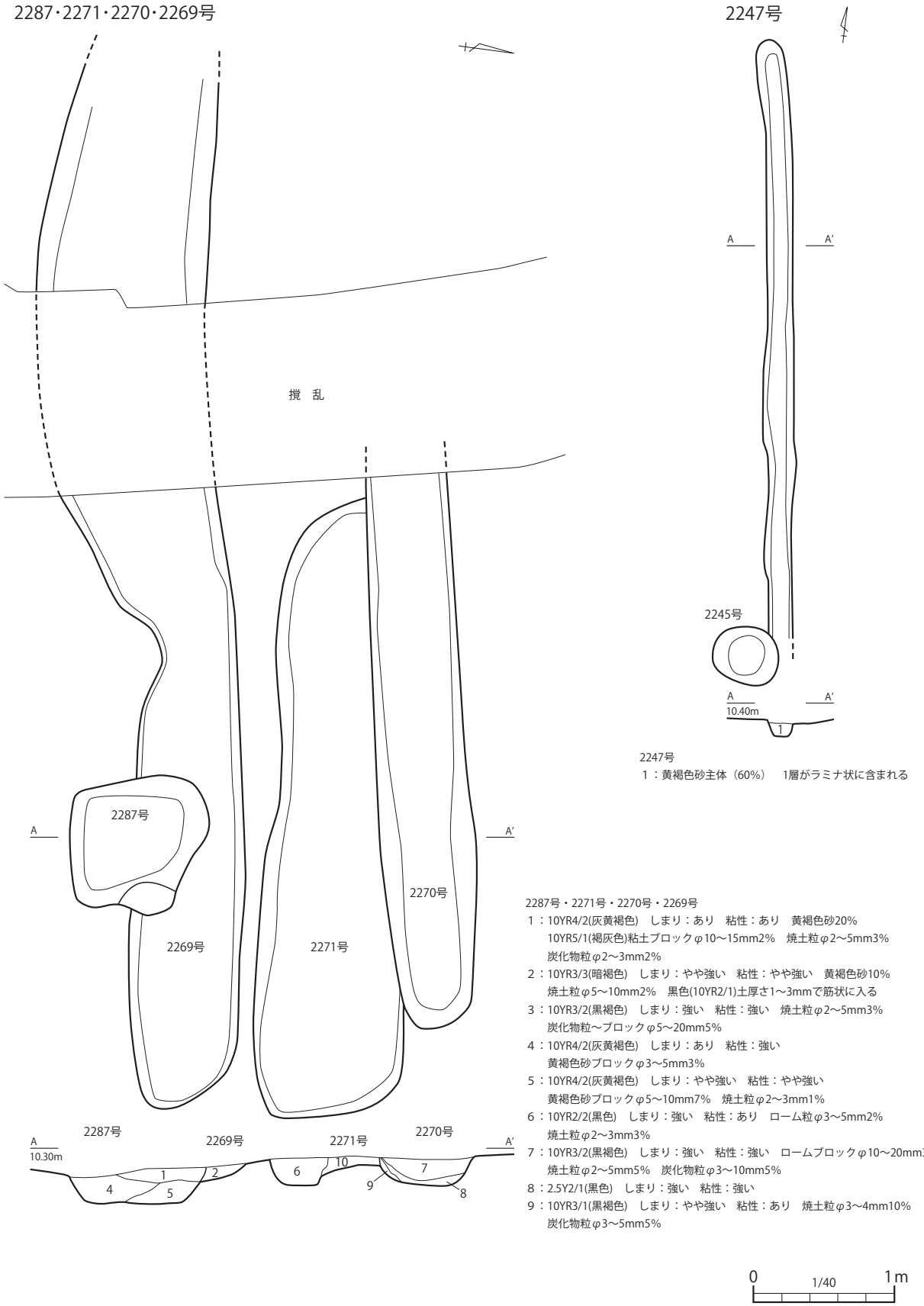
2388 号・2389 号・2390 号（第 1-230 図、第 3-16 表）

2388 号は円形のピット、2389 号は楕円形の土坑、2390 号は円形のピットである。2389 号は 2390 号の他、2433 号や 2434 号を切っている。2389 号の底面は西側が一段深く掘り込まれており、これは土層から見ると埋没後に掘り返されているものと考えられる。土層は 5 層に分かれており、1 層が 2388 号、2 層から 4 層が 2389 号、5 層が 2390 号の覆土にあたる。各遺構からの出土遺物の点数、重量は、2388 号が細片のみ 6.3g、2389 号が 6 点、556.3g で、2390 号は遺物の出土が無かった。2389 号は出土遺物から 18 世紀前葉以降の遺構と考えられる。

G　4 面

G-2 区 4 面は G-2 区全域で確認されている。北側に隣接する H-2 区南西部と共に旗本保科家の屋敷地にあたり、H-2 区 4 面に対応する。G-2 区 4 面は概ね水平に堆積しているが、東側の G-1 区との境界付近から緩やかに南東に向かって傾斜し始める。遺構はこの落ち際よりもやや西に寄った平坦部に集中して分布している。しかし、同じ平坦部である F-2 区との境界付近では検出される遺構が少なくなる。

4 面からは溝 8 条、地下室 2 基、焼土跡 1 基、硬化面 1 基、胞衣埋納遺構 1 基、埋桶 2 基、土坑 22 基、落ち込み 1 基、ピット 107 基、杭 1 基が検出された。



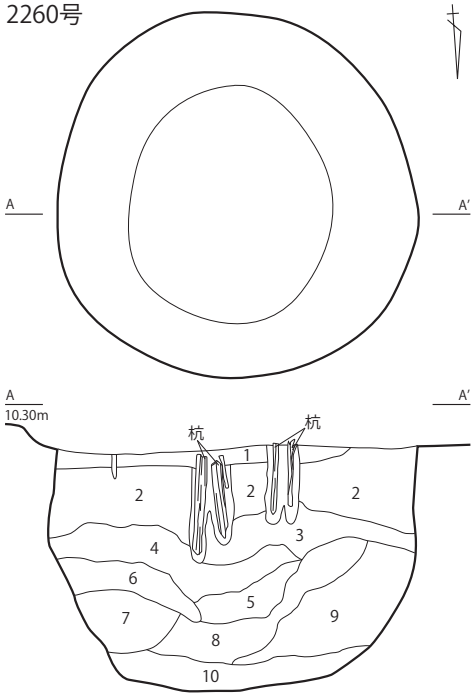
2247号
1：黄褐色砂主体（60%）　1層がラミナ状に含まれる

2287号・2271号・2270号・2269号
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄褐色砂20%
10YR5/1(褐灰色)粘土ブロックφ10～15mm2%　焼土粒φ2～5mm3%
炭化物粒φ2～3mm2%
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　黄褐色砂10%
焼土粒φ5～10mm2%　黒色(10YR2/1)土厚さ1～3mmで筋状に入る
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　焼土粒φ2～5mm3%
炭化物粒～ブロックφ5～20mm5%
4：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い
黄褐色砂ブロックφ3～5mm3%
5：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い
黄褐色砂ブロックφ5～10mm7%　焼土粒φ2～3mm1%
6：10YR2/2(黒色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ3～5mm2%
焼土粒φ2～3mm3%
7：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ロームブロックφ10～20mm3%
焼土粒φ2～5mm5%　炭化物粒φ3～10mm5%
8：2.5Y2/1(黒色)　しまり：強い　粘性：強い
9：10YR3/1(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　焼土粒φ3～4mm10%
炭化物粒φ3～5mm5%

0　1/40　1m

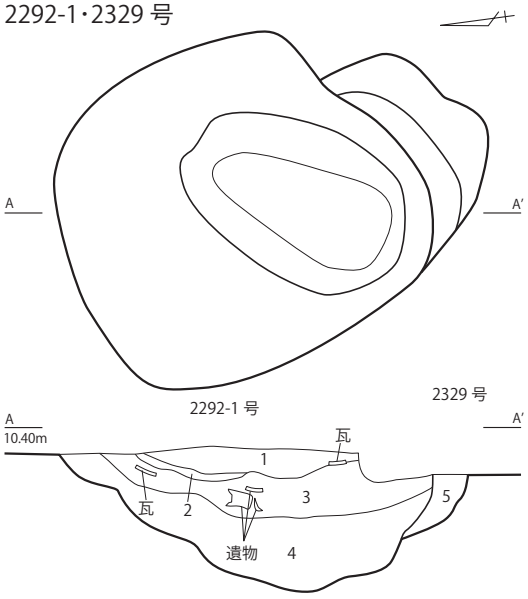
第 1-233 図　G-2 区 4 面の遺構（2）（1/40）

2260号



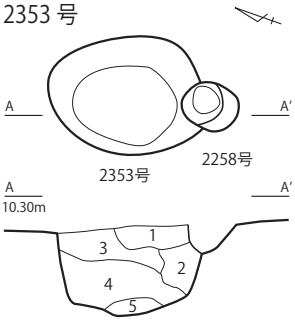
2260号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　黄褐色砂20%
2：10YR4/1(褐灰色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　黄褐色砂ブロックφ5～30mm20%　一部酸化
3：2.5Y7/6(明黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　砂層
4：10YR2/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　黄褐色砂ブロックφ10～30mm10%
5：2.5Y7/6(明黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　砂層
6：10YR2/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　黄褐色砂ブロックφ10～30mm10%
7：10YR2/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　黄褐色砂ブロックφ10～30mm10%　一部酸化
9：10YR2/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　ローム粒φ5～20mm5%
10：10YR2/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　黄褐色砂ブロックφ10～30mm7%
11：10YR2/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　一部酸化
12：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ10～30mm30%

2292-1・2329 号



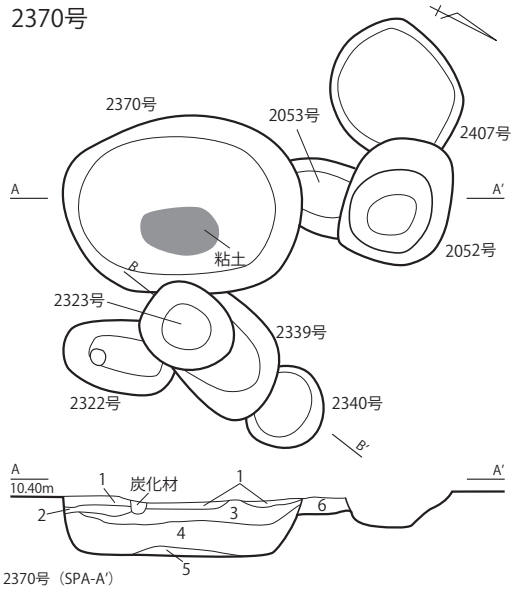
2292-1号・2329号
1：10YR4/2(灰黄褐色)　黄褐色砂ブロックφ20～40mm7%
焼土粒φ2～5mm3%　炭化物粒φ2～3mm3%
円礫φ10～20mm2%
2：炭化物層
3：N3/0(暗灰色)　しまり：強い　粘性：強い
黄褐色砂ブロックφ10～30mm2%
4：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：強い
黄褐色砂ブロックφ20～30mm10%
5：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：やや強い
明黄褐色シルト粒φ5～10mm5%

2353 号

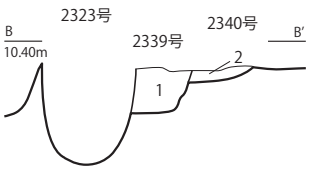


2353号
1：N3/0(暗灰色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物粒φ2～5mm3%
2：N3/0(暗灰色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ2～3mm3%
3：N4/1(暗オリーブ灰色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ2～3mm3%
炭化物粒φ2～5mm3%
4：N3/1(暗オリーブ灰色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ2～3mm3%
炭化物粒φ2～5mm2%
5：N3/1(暗オリーブ灰色)　しまり：あり　粘性：あり
黄褐色砂ブロックφ10～20mm10%

2370号



2370号（SPA-A′）
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強　粘性：あり　焼土粒φ2～5mm15%　炭化物粒φ5～20mm10%
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　明黄褐色(2.5Y7/6)砂30%
3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ2～5mm3%
4：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり
5：2.5Y3/1（灰白色）　しまり：極強　粘性：極強　粘土層
6：10YR3/1(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　黄褐色砂粒φ5～10mm5%　焼土粒φ2～10mm3%
炭化物粒φ5～10mm2%　白色砂粒φ3～5mm3%

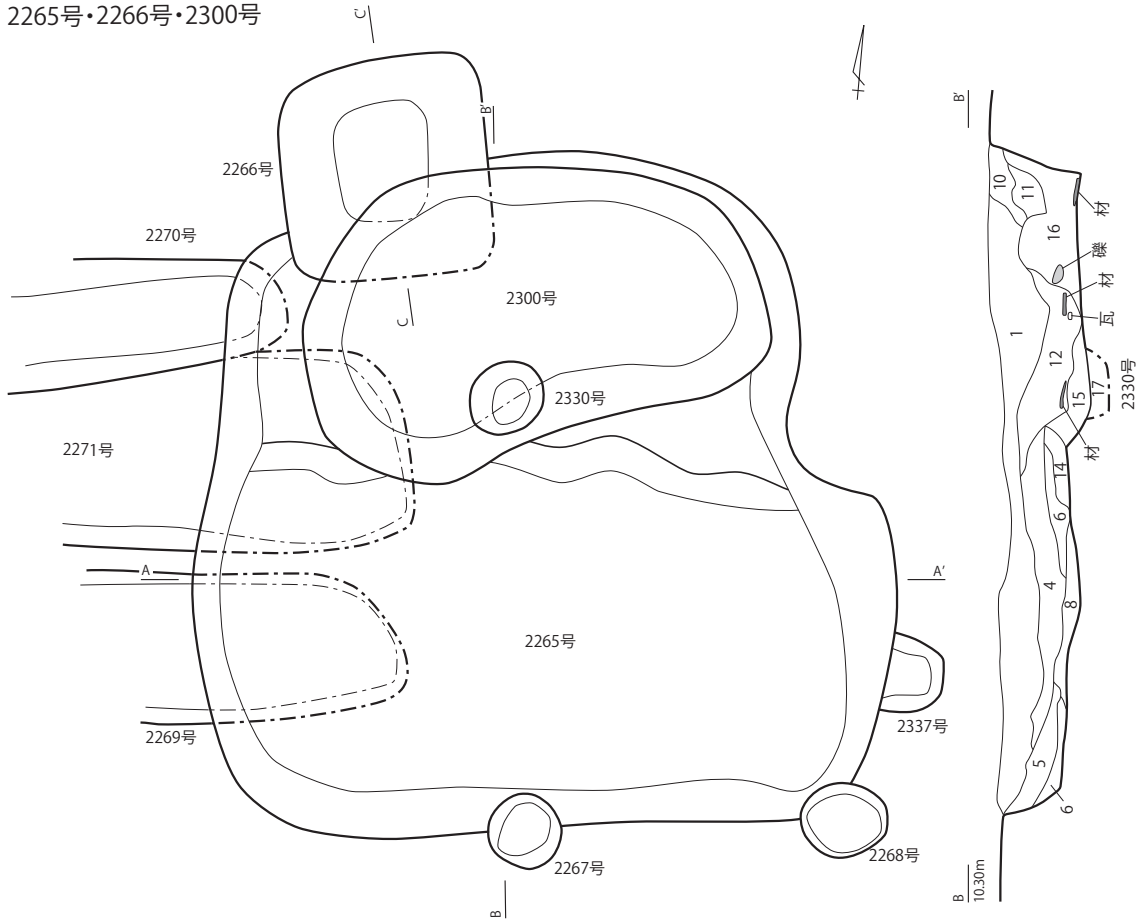


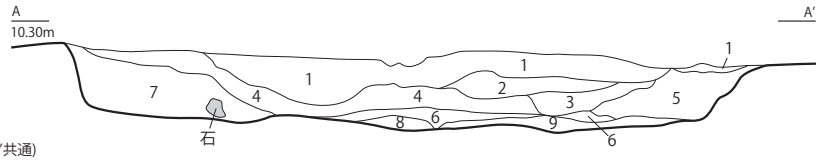
2339号・2340号（SPB-B′）
1：10YR3/3(褐色)　ローム粒φ1～5mm5%　焼土粒φ1～3mm3%
炭化物粒φ1～3mm5%
2：10YR3/3(褐色)　しまり：あり　粘性：あり

0　1/40　1m

第 1-234 図　G-2 区 4 面の遺構（3）(1/40)

2265号・2266号・2300号



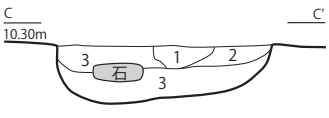


2265号(SPA-A'・SPB-B'共通)

1：10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ローム粒φ2～3mm2%　黄褐色砂ブロックφ3～10mm2%　焼土粒φ2～5mm3%　炭化物粒φ5～40mm10%
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　黄褐色砂ブロックφ10～50mm10%　焼土粒φ3～5mm1%　炭化物粒φ2～5mm3%
3：N4/0(灰色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　炭化物粒φ3～5mm2%　にぶい黄褐色(10YR7/2)粘土ブロックφ5～10mm1%
4：7.5YR3/1(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　明オリーブ灰色砂(2.5GY7/1)ブロックφ20～50mm20%　炭化物粒φ5～20mm7%
5：N2/0(暗灰色)　しまり：強い　粘性：強い　ロームブロックφ40mm2%　焼土粒φ3～5mm2%　炭化物粒φ2～5mm2%
6：2.5Y7/6（明黄褐色）　しまり：あり　粘性：なし　砂層
7：N3/0(暗灰色)　しまり：強い　粘性：強い　砂ブロックφ30～60mm20%　炭化物粒φ3～10mm5%
8：7.5YR3/1(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　黄褐色砂ブロックφ10～50mm10%　鋪入る
9：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：あり　黄褐色砂を含む
10：10ＹＲ4/1(灰褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　焼土粒φ2～4mm3%　炭化物粒φ2～5mm5%
11：10YR5/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　黄褐色砂10%　焼土粒φ2～5mm1%
炭化物粒φ2～5mm3%
12：N4/0(灰色)　しまり：強い　粘性：やや強い　砂質シルトブロックφ30～60mm15%　炭化物粒φ5～20mm10%
13：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄褐色砂φ1～２cm　焼土粒φ2～5mm2%
炭化物粒φ3～5mm2%
14：N4/0(灰色)　しまり：強い　粘性：強い　黄褐色砂3%　にぶい黄褐色(10YR7/2)粘土ブロックφ3～5mm1%
15：10YR3/1(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　焼土粒φ2～3mm2%　炭化物粒φ3～5mm2%
16：N2/0(黒色)　しまり：強い　粘性：極強　炭化物粒φ2～3mm3%



1.　2265号焜炉出土状況（東から）



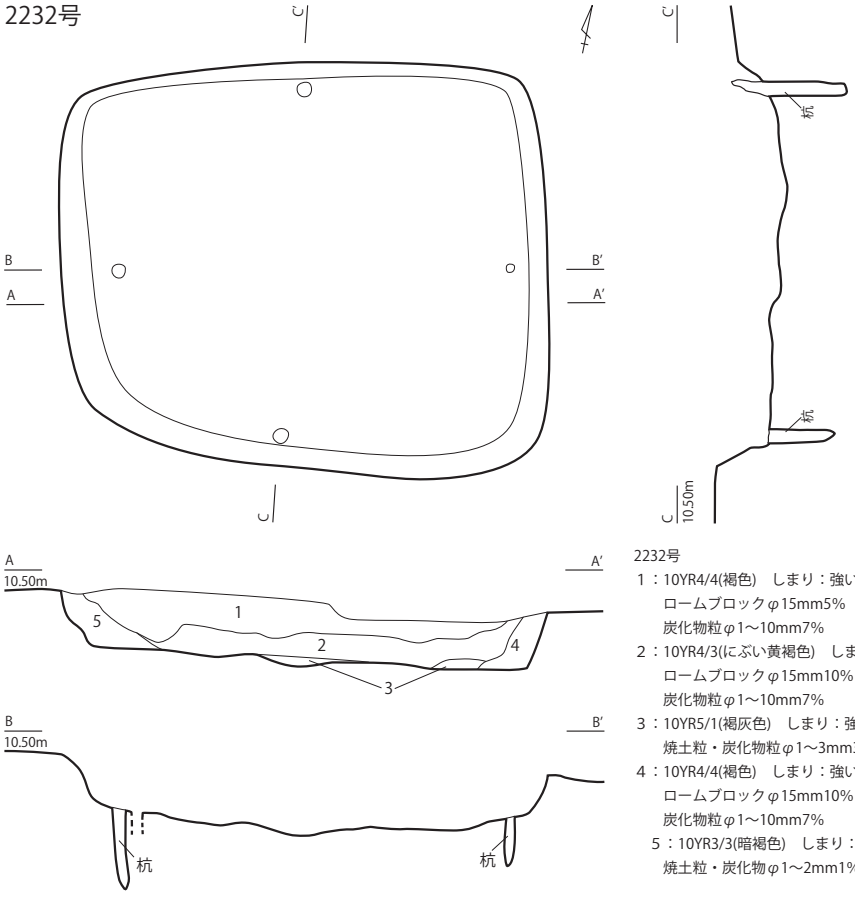
2266号(SPC-C')

1：10YR2/1(黒色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い
2：10YR3/1(褐灰色)　しまり：やや強い　粘性：強い　焼土粒φ2～3mm2%　炭化物粒φ3～5mm3%
にぶい黄橙色(10YR7/2)粘土粒φ5～10mm3%
3：10YR2/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　黄褐色砂ブロックφ20～30mm10%

0　1/40　1m

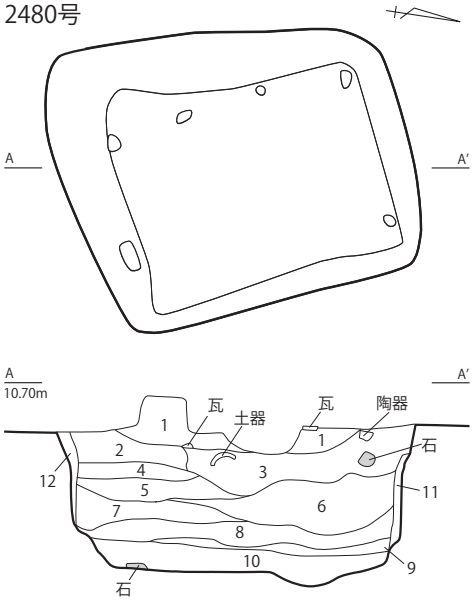
第 1-235 図　G-2 区 4 面の遺構（4）（1/40）

2232号

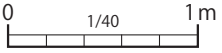


2232号
1：10YR4/4(褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ1～10mm15%
ロームブロックφ15mm5%　黄灰色砂5%　焼土粒φ1～3mm5%
炭化物粒φ1～10mm7%
2：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒φ1～10mm20%
ロームブロックφ15mm10%　黄灰色砂5%　焼土粒φ1～3mm5%
炭化物粒φ1～10mm7%
3：10YR5/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ1～2mm2%
焼土粒・炭化物粒φ1～3mm3%　底面に薄く溜まった粘質土層
4：10YR4/4(褐色)　しまり：強い　粘性：極強　ローム粒φ1～10mm15%(斑紋状)
ロームブロックφ15mm10%　黄灰色砂5%　焼土粒φ1～3mm5%
炭化物粒φ1～10mm7%
5：10YR3/3(暗褐色)　しまり：極強　粘性：極強　黄色砂φ1～5mm10%
焼土粒・炭化物φ1～2mm1%

2480号



2480号
1：10YR4/4(褐色)　しまり：極強　粘性：あり　ローム粒φ1～10mm15%
黄褐色砂ブロックφ1～5mm10%　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ1～5mm7%
2：10YR4/1(褐灰色)　しまり：極強　粘性：弱い　ローム粒φ1～3mm3%(錆)
黄灰色砂φ5～10mm10%　焼土粒φ1～2mm2%　炭化物φ1～10mm7%
3：5Y4/1(灰色)　しまり：弱い　粘性：弱い　ローム粒φ1～3mm2%　黄褐色砂φ3～5mm5%
炭化物φ1～10mm7%　赤錆1%　灰色粘質土主体
4：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：極強　粘性：極強　炭化物粒φ1～5mm3%
灰オリーブ色粘土粒φ5～10mm15%　赤錆5%
5：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：極強　ローム粒φ1～5mm5%　黄褐色砂10%
焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～5mm3%
6：5YR4/1(灰色)　しまり：あり　粘性：極強　オリーブ褐色土(砂質)15%
灰黄色(2.5Y6/2)粘土粒φ5～10mm10%　オリーブ灰色粘土(2.5GY6/1)をラミナ状に10%含む(斑紋状)
7：10YR4/4(褐色)　しまり：強い　粘性：極強　ローム粒φ1～5mm3%　褐色砂20%
焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ1～2mm2%　灰黄色粘土粒φ5mm5%　砂質土層
8：5Y4/1(灰色)　しまり：あり　粘性：極強　オリーブ灰色粘土粒φ5mm7%　炭化物粒φ1～3mm3%
内容物をほとんど含まない　灰色粘質土層
9：2.5Y4/3(オリーブ褐色)　しまり：極強　粘性：極強　ローム粒φ5～10mm15%
オリーブ灰色粘土粒φ3～10mm15%　マトリクスは下部層と同じ
暗褐色粘質土ロームブロックは北に、オリーブ灰色粘土は南に偏る
10：10YR3/3(暗褐色)　しまり：極強　粘性：極強　ローム粒φ1～5mm5%　焼土粒φ1mm1%未満
炭化物粒φ1～2mm1%　オリーブ灰色粘土粒φ3～5mm7%
褐色ローム土(10YR4/6)を下部にラミナ状に含む
11：10YR4/4(褐色)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒φ1～3mm3%　焼土粒・炭化物粒φ1～5mm
12：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ1～2mm2%　焼土粒φ1～2mm1%
炭化物粒φ1～5mm2%



第 1-236 図　G-2 区 4 面の遺構（5）（1/40）

【溝】

2269・2270・2271・2287 号（第 1-233 図、第 3-16 表）

2269 号･2270 号･2271 号は東西に走る溝である。2269 号は 2265 号を切り､2287 号に切られる。2270 号は 2265 号と 2271 号を切る。2271 号は 2265 号を切り､2270 号に切られる。3 条の溝（2269 号・2270 号・2271 号）は上部が削平されている可能性もあるが、いずれも浅く、断面Ｕ字形の溝である。底面は東に向かって傾斜していた。

2269 号は 2265 号との重複部分を始点とし、中央部にくびれを持つ。くびれの西は緩やかにカーブしながら F-2 区へと延びるが、F-2 区では攪乱により削平されたためか、2269 号に接続する溝を確認出来ていない。また、方形の土坑 2287 号に切られる。2270 号は 2265 号との重複部分を始点とし真っすぐに西へと延びるが、G-2 区を南北に縦断する攪乱により西端は確認出来なかった。また、2271 号を切る。2271 号は 2269 号や 2270 号と同様に 2265 号との重複部分を始点とし西へと延びるが、2270 号を切る攪乱の手前で収束する。1 層から 3 層が 2287 号、4 層が 2269 号、5 層から 7 層が 2270 号、8 層と 9 層が 2271 号の覆土にあたる。いずれの層もローム粒や黄褐色の砂などを含む層となっている。遺物は 2269 号からは 64 点・3,085.2g、2270 号からは 17 点・402.7g、2271 号からは 7 点・379.7g 出土している。出土遺物から 2269 号は 18 世紀前葉、2270 号は 17 世紀後葉以降、2271 号は 17 世紀後葉に位置付けられる。

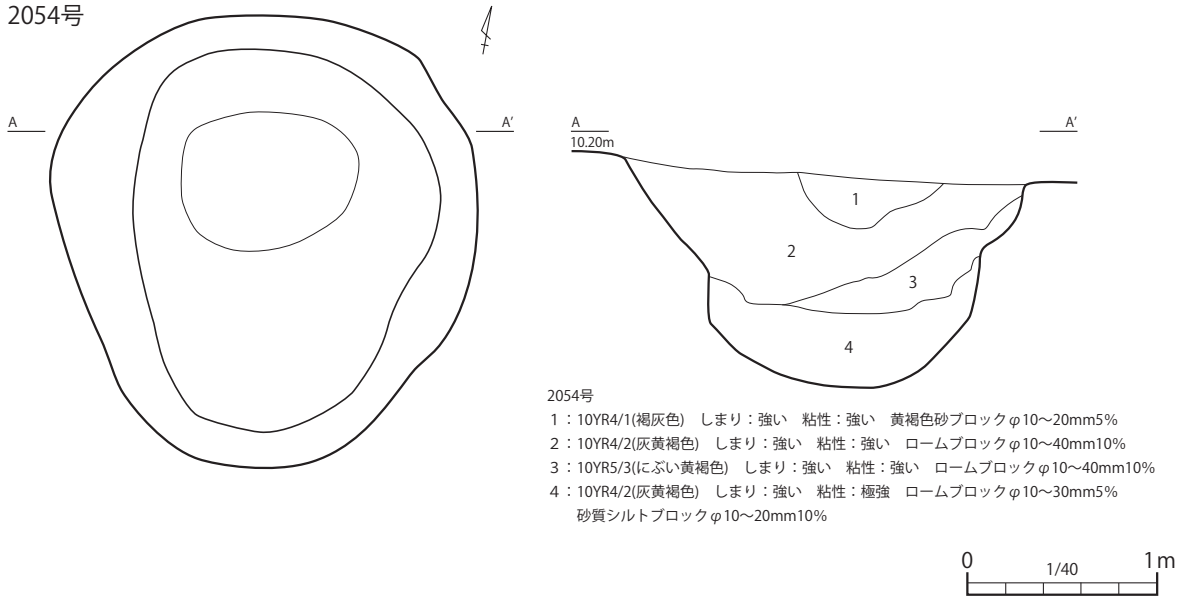
【地下室】

2232 号（第 1-236 図、第 3-16 表）

2232 号は方形の地下室である。G-2 区北東部に位置している。2232 号の断面形は壁面がやや開く逆台形である。各辺の中央部に杭穴をもち、底面は凹凸が見られる。杭は 4 本確認された。覆土は 5 層に分かれる。1 層・2 層はローム粒・ロームブロックを顕著に含む土層、3 層は底面に堆積する粘質土層で、焼土粒や炭化物粒を含んでいた。4 層と 5 層は壁面近くに堆積する土層である。本来は杭に抑えられた側板が 4 層と 2 層、5 層と 2 層の境界に存在しており、4 層と 5 層は掘方にあたると考えられる。出土遺物の総点数は 40 点、総重量は 731.5g である。出土遺物から遺構の年代は 17 世紀第 4 四半期から 18 世紀初頭に位置付けられる。

2480 号（第 1-236 図、第 3-16 表）

2480 号は方形の地下室である。2232 号と同様に底面から杭穴を検出している。2232 号では各辺の中央部に杭が配されていたが、2480 号では壁面際でも特に東壁からまとまって検出されている。壁面は真っ直ぐに立ち上がっているが、底面近くで四方を巡る段が付く。底面はおおむね平坦であるが、一部、ピット様の浅い掘り込みを検出している。この形態は H-2 区 3877 号と同様の形態となっている。2480 号も 2232 号と同様に側板を持っていた。壁面に沿うように堆積する 11 層と 12 層は側板の外側に堆積しており、2480 号の掘方部分にあたるものと考えられる。覆土は 12 層にわかれている。1 層と 2 層は 2480 号の上部に堆積する土層で、3 面盛土層に類似する。3 層から 9 層は粘質土層で、ローム粒や砂、焼土粒、炭化物粒などを含む。10 層はローム粒や焼土粒、炭化物粒、粘土粒を含む層で、しまり・粘性ともに極めて強い層で、底面から壁面に見られる段まで、およそ 20 ㎝の厚さを持つ。10 層の上面が掘方部分である 11 層と 12 層の下端にあたることからも、10 層上面が 2480 号の床面にあたるものと考えられる。出土遺物の総点数は 113 点、総重量は 13,835.6g



第 1-237 図　G-2 区 5 面の遺構（1）（1/40）

である。出土遺物から 17 世紀第 3 四半期に位置付けられる。

【土坑】

2265・2300 号（第 1-235 図、図版 3-61-6、第 3-16 表）

2265 号は大型の不整形土坑で、G-2 区南部に位置する。2265 号は 2266 号、2267 号、2268 号、2269 号、2270 号、2271 号に切られており、2337 号を切る。また、2265 号は 2300 号と重複するが、ほぼ同時に埋没したものと考えられ、土層の堆積状況からは 2265 号と 2300 号の新旧関係は明確に捉えることは出来なかった。また、2300 号の底面からは 2330 号を検出している。北、南、西側の壁面はやや開きながら真っ直ぐに立ち上がるが、東側の壁面はゆるやかに開きながら立ち上がっており、凹凸が見られる。底面は北側が一段高いテラス状になるが、テラス部の大部分が 2300 号との重複部分となる。また、2265 号の底面は凹凸が見られたが、2300 号の底面は平坦に掘り込まれていた。2265 号と 2300 号の覆土は 16 層に分かれる。1 層は 2265 号と 2300 号内に広く堆積する土層で、ローム粒や黄褐色砂ブロック、焼土粒、炭化物粒を含んでおり、3 面盛土層に近い様相にある。2 層から 9 層は 2265 号の覆土にあたる。10 層から 12 層、15 層、16 層が 2300 号の覆土にあたる。12 層は 2265 号覆土である 4 層の上から堆積している。一方で、2265 号の覆土である 14 層は 2300 号覆土である 15 層の上から堆積していることから、2265 号と 2300 号が同時に埋め戻されたものとした。2265 号の底面からはほぼ完形の焜炉が潰れた状態で出土した（第 2-69 図 1047）。焜炉はその形態から 17 世紀前半に位置付けられる。2265 号と 2300 号の出土遺物の総点数は 402 点、総重量は 20,442.5g である。出土遺物から 2265 号、2300 号どちらも 17 世紀第 4 四半期に位置付けられる。

2260 号（第 1-234 図、第 3-16 表）

2260 号は G-2 区南東部、埋没谷の落ち際近くに位置している。平面形は円形で、深さはおよそ 1.4m となる。壁面上部は真っ直ぐに立ち上がっているが、壁面下部は土坑中央に向かってすぼまっており、底面は平坦である。覆土は 12 層に分かれる。そのうち、3 層と 5 層は砂層である。その他の層はい

ずれも砂を多く含む層で、2 層や 7 層、11 層は一部に酸化鉄が固着している。出土遺物の総点数は 69 点、総重量は 4,447.4g である。

2292-1 号（第 1-234 図、図版 3-61-3・4、第 3-16 表）

2292-1 号は楕円形の土坑で、2270 号、2271 号に切られ、2329 号を切る。北側の壁面は凹凸が激しくゆるやかに立ち上がっている。南側は同様に凹凸があるが、北側ほどゆるやかには立ち上がらない。覆土は 4 層に分かれており、1 層から 4 層は 2292-1 号、5 層が 2329 号の覆土である。1 層は黄褐色砂の砂や焼土粒、炭化物粒を含む層、2 層が炭化物層である。3 層は砂を含む暗灰色層で遺物がまとまって出土している。4 層は最下層にあたり、明黄褐色のシルト粒を含む灰黄褐色土層である。3 層からは完形の焼塩壺および蓋などが出土している（第 2-68 図 1039・1040）。出土遺物の総点数は 83 点、総重量は 5,116.7g である。出土遺物から 17 世紀第 2 四半期に位置付けられる。

【胞衣埋納遺構】

2044 号（第 1-232 図、第 3-16 表）

2044 号は上部が削平され、埋納された胞衣皿の上部が露出した状態で検出された。残存する掘方の平面形は円形を呈し、底面からは胞衣皿と見られるかわらけが 2 枚合わせ口状に配置された状態で検出された。胞衣皿内に堆積する覆土は砂を含む黄灰色土層で、胞衣皿内に胎盤が変質したとみられる痕跡は確認されなかった。埋納された胞衣皿は上皿が口径 132mm、器高 25mm、底径 85mm、下皿が口径 135mm、器高 25mm、底径 89mm を測る。

H　5 面

4 面盛土層下から確認された自然堆積層の上面を 5 面として調査を行った。5 面は西から東へと傾斜する黒褐色土層（泥炭層）の上面にあたり、土坑 2054 号が検出されている。確認面とした黒褐色土層（泥炭層）は F-2 区東側で確認されていたものであるが、F-2 区で検出された標高よりも低く、標高の平均値では 0.8m の差が見られる。また、東側の G-1 区との境界部分でこの黒褐色土層は大きく落ち込んでおり、溜池へ向かう埋没谷へと続いている。北側に隣接する H-2 区南西部と共に旗本川窪家の屋敷にあたり、H-2 区 6 面に対応する。隣接する H-2 区南西部も G-2 区 5 面同様に遺構の分布が希薄であった。検出された遺構は土坑 1 基（2054 号）のみである。

【土坑】

2054 号（第 1-237 図、第 3-16 表）

G-2 区の中央部から検出された平面形が円形で、断面形は漏斗状の土坑である。覆土は 4 層に分けられる。いずれの土層もしまり・粘性がともに強い土層である。1 層は黄褐色の砂をブロック状に含み、2 層から 4 層はロームブロックを含んでいる。また、4 層は砂質シルトブロックも含んでいる。発掘調査中、G-2 区では地下に浸透した雨水が染み出し、調査区内に溜まるような状況が度々見られたことから、2054 号のようにおよそ 1 m程度の深度であっても水が溜まるような状況であった可能性がある。したがって、覆土からは水が溜まっていた痕跡は見られなかったものの、その形状から井戸ないし溜井戸である可能性も考えられる。出土遺物の総点数は 4 点、総重量は 22.4g である。出土した遺物から 17 世紀中葉ごろの所産と考えられる。

（佐藤・大八木）

7）F-2 区

F-2 区は調査区南西部に位置しており、絵図・地図史料から旗本川窪家・保科家屋敷地にあたることが分かっている。F-2 区では一部に整地層を残すものの、大部分が地山面まで後生の開発に伴う攪乱を受けており、近代面等 F-1 区に対応する遺構確認面を確認することはできなかった。そのため、すべてを基盤層上の単一の面として調査を行った。遺構一覧表の遺構確認面についても F-2 区についてはすべて同一の面としている。南側の隣接部分にあたる第 2 次調査で確認されているように、F-2 区では斜面を大きく削平し、平坦部を形成し旗本屋敷地としていることが確認されており、単一の面のみの調査であるものの、17 世紀中葉から 19 世紀までの遺構が確認された。攪乱の下から露出した自然堆積層は、西側で砂層、中央部で砂質シルト層、東で黒褐色粘質土層へと移り変わる。攪乱はいずれも自然堆積層に達するが、F-2 区東側、520 号周辺で見られた攪乱はひときわ深く、盛土層の残存部分の自然堆積層上から 0.4 ～ 0.5m 下がっていた。

残存する盛土層についても、単一の土層だけではなくそれぞれ異なる土層の堆積状況を示している。盛土層中から出土した遺物の年代もばらつきがあり、同一の時期の盛土層ではない可能性を示している。残存する盛土層の範囲は第 1-46・56・57 図に示している。隣接する G-2 区の成果から、F-2 区で検出された遺構は旗本川窪家の時代、旗本保科家の時代、近代の大きく 3 期にわかれるものと考えられるが、遺存状態が不良であること、出土遺物が少ないことなどから、各期の土地利用を把握することが困難であった。そのため、すべての遺構の時期を細別せずに一括して扱い、遺構の形態、出土遺物から時期の絞り込めたものに関してのみ、その時期を記載している。

F-2 区からは土蔵基礎（杭）1 棟、溝 1 条、井戸 3 基、埋桶 1 基、胞衣皿埋納遺構 1 基、杭列 3 条、焼土跡 1 基、焼土・瓦層 1 基、礎石 7 基、地下室 5 基、廃棄土坑 1 基、土坑 36 基、ピット 113 基が検出された。

【土蔵基礎】

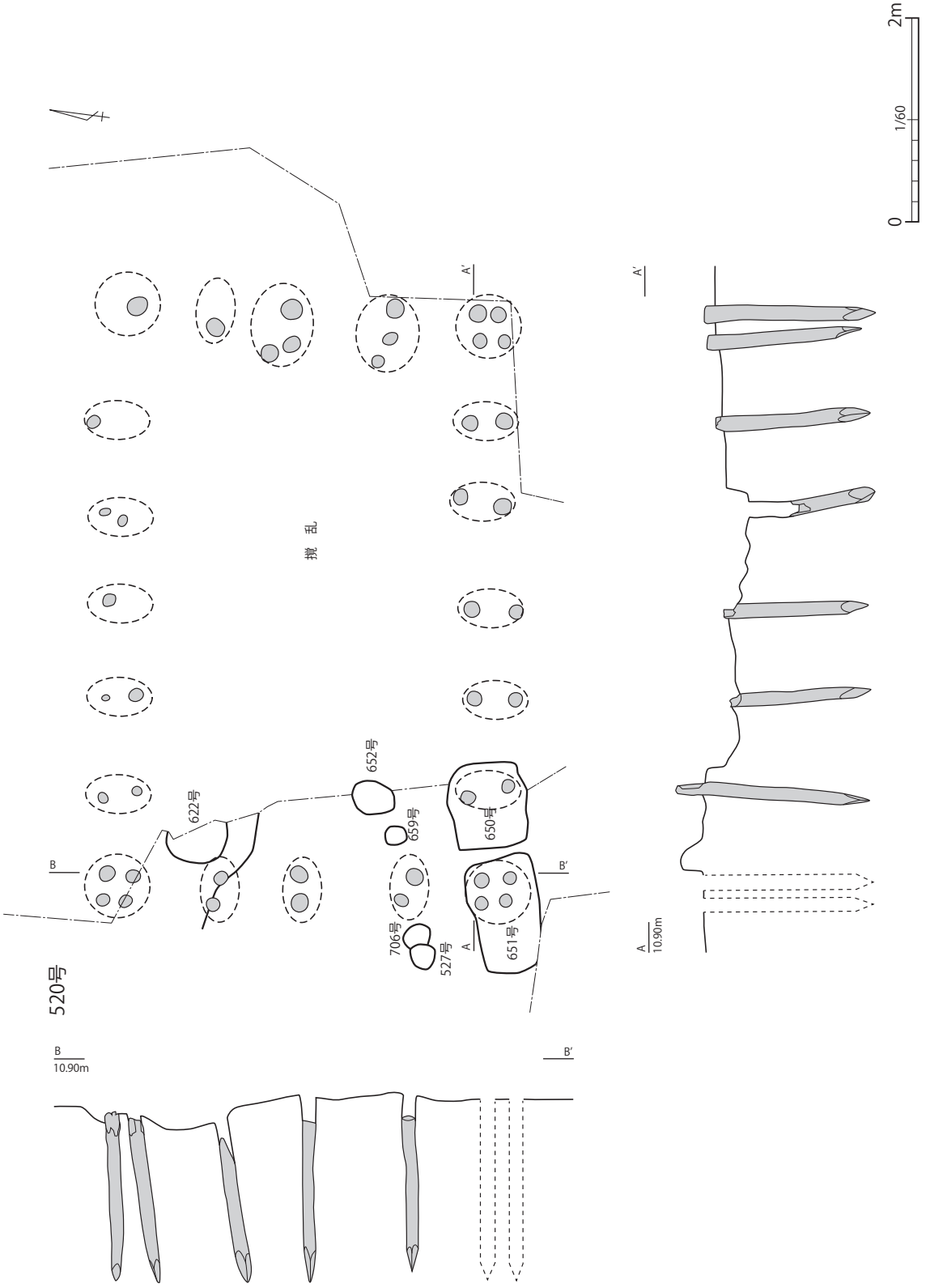
520 号（第 1-238 図、図版 3-59-3・3-59-4、第 3-16 表）

520 号は土蔵基礎で、調査区東側に位置しており、623 号、650 号、651 号等の周辺の遺構を切る形で方形に杭列が検出されている。著しく攪乱を受けており、杭のみが残存し検出されており、上部構造を復元できるほどの遺存は認められなかった。検出された杭は検出面から 1.3m ～ 1.5m 程度残存していた。これらの杭は上部に切断された痕跡があることから検出された状態が杭の最上部ではなく、実際には遺構確認面よりも高いレベルに杭頭があり、礎石などが配置されていたものと考えられる。杭の切断は後世の開発に伴うものと考えられる。520 号の杭は四隅が 4 本、各辺には 2 本ずつ見られるが、東側の短辺のみ 2 か所で 3 本組の杭が見られる。これはこの土蔵の入口部分にあたり、東向きに入口を持っていたと考えられる。検出された杭は 44 本あり、いずれの杭もアカマツを素材としている。杭の間隔は半間（およそ 1 m）で、桁行 3 間（5.5 m）×梁行 2 間（3.5 m）を測る。

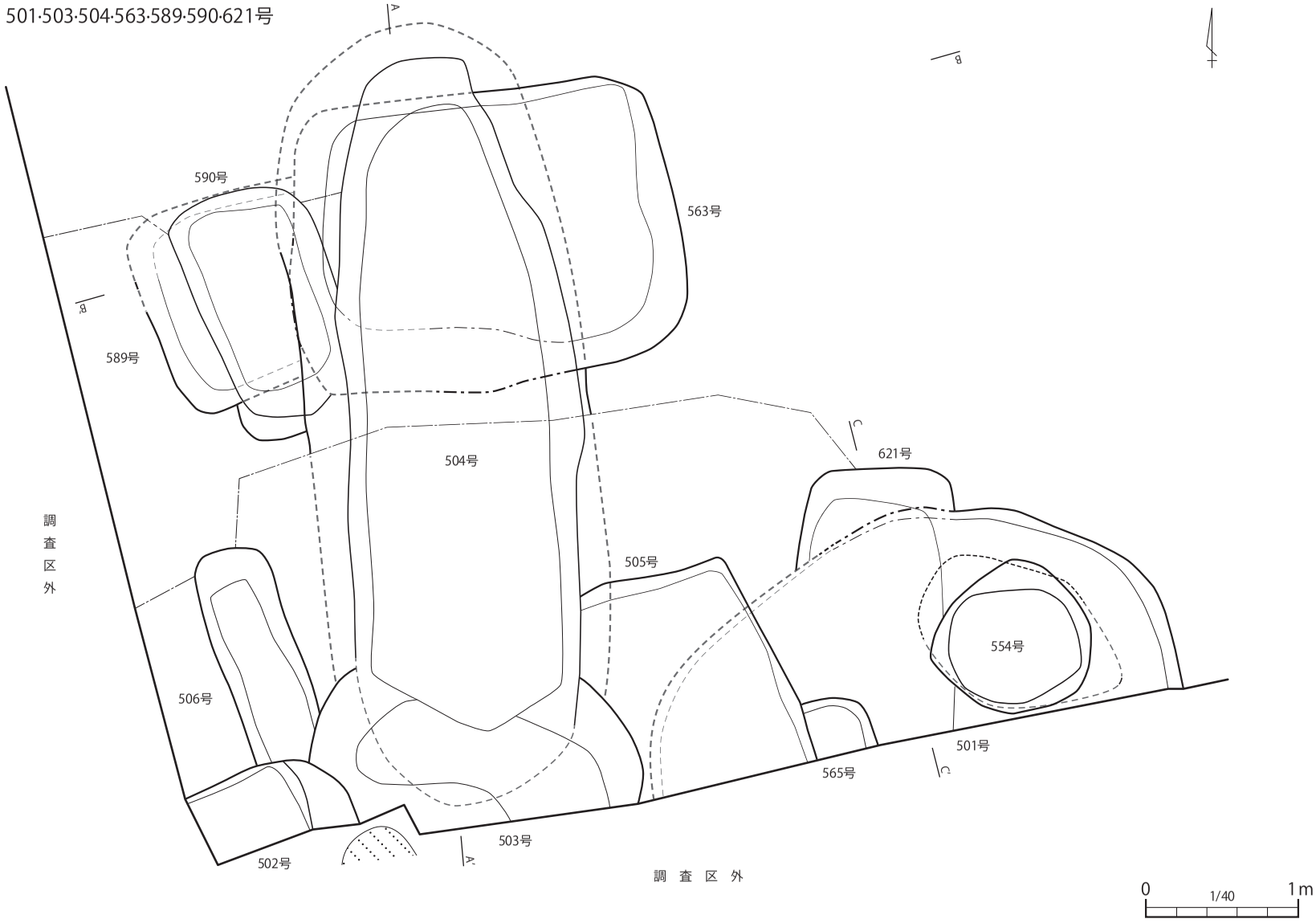
杭のみが遺存する状態であり、遺構に伴う遺物は見られなかった。そのため、遺構の形態から遺構の時期は近世末から近代と判断した。

【廃棄土坑】

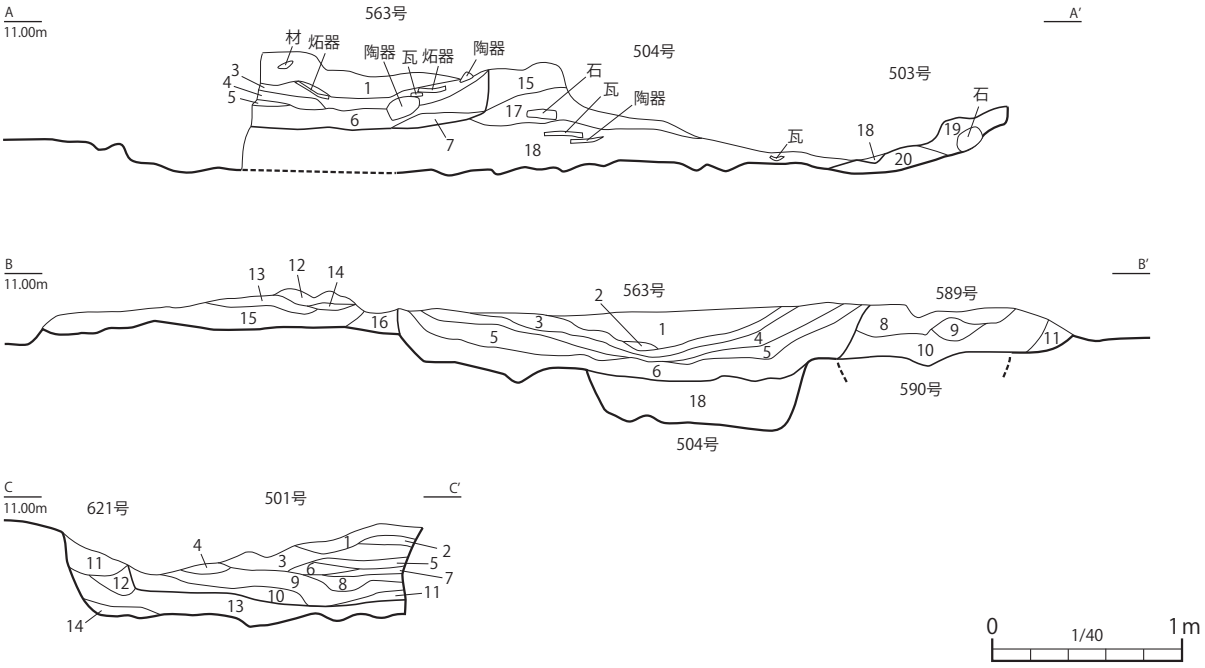
501 号・505 号・563 号・589 号（第 1-239・240 図、図版 3-58-2・6・8・3-59-2、第 3-16 表）



第 1-238 図　F-2 区の遺構（1）（1/60）



第 1-239 図　F-2 区の遺構（２）（1/40）



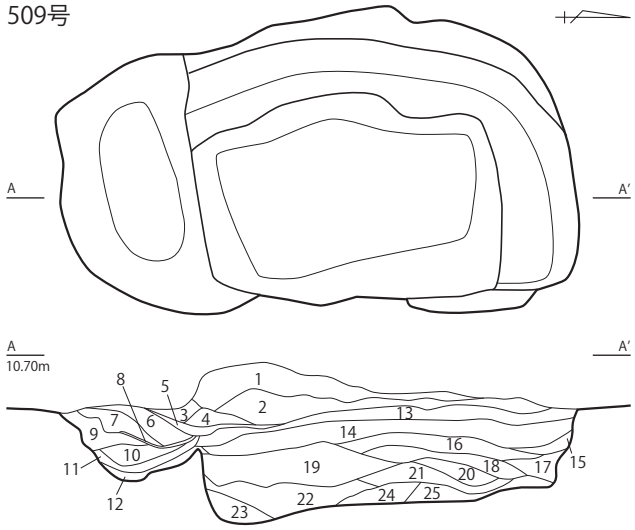
503号・504号・563号・589号・590号（SPA-A′・SPB-B′共通）

1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや弱い　粘性：あり　褐色(10YR4/4)土ブロックφ5～40mm10%　炭化物ブロックφ10～20mm5%
2：7.5YR4/6(褐色)　しまり：やや弱い　粘性：あり
3：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物ブロックφ10～20mm7%　褐色(10YR4/4)土ブロックφ5～10mm5%
4：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや弱い　粘性：あり　褐色土ブロックφ5～20mm10%　炭化物ブロックφ10～40mm5%
　にぶい黄橙色粘土ブロックφ5～20mm7%
5：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　褐色土ブロックφ5～10mm5%　炭化物ブロックφ10～30mm3%　下部は酸化(錆)入る
6：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや弱い　粘性：あり　褐色土粒φ3～5mm7%　焼土粒φ3～5mm3%　炭化物ブロックφ10～20mm2%
7：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや弱い　粘性：あり　炭化物粒φ5～10mm2%
8：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ5～20mm10%
9：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物粒φ5～10mm10%
10：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ5～10mm10%　炭化物粒φ5～10mm10%
11：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや弱い　粘性：あり　炭化物粒φ5～10mm3%
12：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂質シルトブロックφ5～10mm10%　炭化物粒φ3～5mm3%
13：10YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　焼土粒φ3～5mm2%　炭化物粒φ5～10mm2%　砂質土層
14：10YR5/8(黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　砂層
15：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ3～5mm3%　炭化物粒φ5～10mm3%
16：10YR4/4(褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　炭化物粒φ5～10mm２%　砂質土層
17：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い　炭化物ブロックφ20～30mm10%　小礫多
18：10YR4/1(褐灰色)　しまり：やや弱い　粘性：あり　炭化物ブロックφ10～20mm10%　貝片小礫含む
19：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い　炭化物粒φ5～10mm15%　小礫多
20：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い　ロームブロックφ5～10mm3%　炭化物ブロックφ10～20mm5%

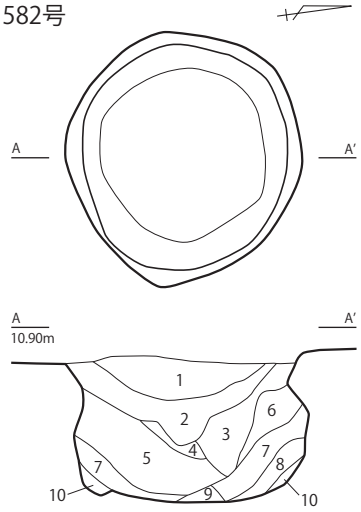
501号・621号（SPC-C′）

1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物粒φ5～10mm10%　貝片多
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物ブロックφ10～20mm10%　灰30%
3：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ3～8mm5%　焼土粒φ3～5mm2%　炭化物粒φ5～10mm3%
4：10YR2/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物ブロックφ10～30mm10%　灰黄褐色(10YR5/2)粘土ブロックφ10～20mm10%
5：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ3～5mm2%　炭化物粒～ブロックφ5～20mm7%
6：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い　炭化物粒～ブロックφ5～30mm30%
7：10YR2/1(黒色)　しまり：あり　粘性：やや強い　黄褐色砂ブロックφ5～7mm3%　炭化物粒φ5～10mm3%
8：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物粒φ5～10mm3%　焼けた瓦の細片少量
9：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ3～5mm3%　炭化物粒φ5～10mm3%　遺物多い
10：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ3～4mm2%　炭化物粒φ5～30mm5%
11：10YR3/4(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い　炭化物粒～ブロックφ5～20mm5%
12：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ロームブロックφ20～40mm10%
13：10YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ20～30mm10%
14：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　砂質シルトブロックφ10～30mm10%　砂質土層

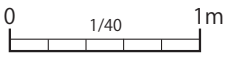
第 1-240 図　F-2 区の遺構（3）（1/40）



509号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い
黄褐色砂ブロックφ5～30mm10%　赤褐色砂ブロックφ5～10mm5%
炭化物粒φ5～8mm1%
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い　焼土粒φ3～5mm2%
炭化物粒φ5～10mm2%
3：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ5～10mm5%
炭化物粒φ5～15mm3%
4：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ5～10mm10%
5：10YR3/1(黒褐色)　しまり：やや弱い　粘性：あり
6：10YR4/4(褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い　焼土粒φ5～10mm5%
砂質土層
7：10YR5/6(黄褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い
砂質シルトブロックφ10～20mm20%　砂質土層
8：10YR1.7/1(黒色)　しまり：あり　粘性：あり
9：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い
砂質シルトブロックφ5～20mm5%　焼土粒φ3～5mm10%　砂質土
10：10YR4/4(褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い　焼土φ1～5mm2%　砂層
11：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり
12：10YR4/4(褐色)　しまり：あり　粘性：なし
砂質シルトブロックφ5～30mm30%　焼土ブロックφ15～20mm1%
13：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂質シルトブロックφ10～30mm10%　焼土粒φ5～10mm3%
14：10YR4/6(褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　砂質シルトブロックφ10～30mm10%　焼土粒φ3～10mm10%
炭化物ブロックφ10～20mm2%　砂層
15：10YR3/4(暗褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い　砂質シルトブロックφ20～30mm20%　砂層
16：10YR4/4(褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　砂質シルトブロックφ20～30mm10%　焼土粒φ5～10mm10%
炭化物粒φ5～10mm2%
17：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　被熱瓦片含む砂層
18：10YR6/4(にぶい黄橙色)　砂質シルトブロックφ20～30mm30%　砂層
19：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　焼土粒φ5～10mm3%　炭化物ブロックφ10～20mm7%
20：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　炭化物ブロックφ10～20mm10%　瓦片多く含む
21：5YR4/6(赤褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　焼土層
22：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い　砂質土層
23：10YR6/4(にぶい黄橙色)　しまり：弱い　粘性：なし　焼土ブロックφ10～20mm7%　砂層
24：10YR4/2(灰黄褐色)　砂層
25：10YR4/6(褐色)　砂層



582号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い　砂質シルトブロックφ5～15mm3%
2：10YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い
3：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い　黄褐色砂少量
4：10YR4/1(褐灰色)　しまり：やや弱い　粘性：やや強い
5：10YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂質シルトブロックφ10～20mm3%
6：10YR4/6(褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い　砂層
7：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや弱い　粘性：弱い　砂質土
8：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　黄褐色砂ブロックφ20～30mm5%
黒褐色土ブロックφ30～40mm5%　砂質土層
9：10YR2/1(黒色)　しまり：あり　粘性：あり
10：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり



第 1-241 図　F-2 区の遺構（4）（1/40）

501 号は地山砂層上で検出された東西方向に長軸を持つ平面形が楕円形を呈する土坑で、南半は調査区外となる。また、505 号、554 号、565 号、621 号を切る。上部が大きく攪乱を受けており、壁面はわずかに残る程度であった。遺存状態は悪いものの、F-2 区では最も多くの遺物が出土している遺構となる。第 1-240 図 SPC-C′ は 501 号と 621 号の土層を示したものである。501 号の覆土は 10 層に分かれる。1 層から 7 層は炭化物粒を特徴的に含む層で、8 層は被熱した瓦を含む層である。9 層は黒褐色土層で　最も遺物を含む。10 層は焼土粒や炭化物粒を含む層である。また、11 層から 14 層は 621 号の覆土にあたり、11 層は炭化物粒を、12 層と 13 層はロームブロックを多く含んでいる。また、14 層は砂質シルトブロックを含む砂質土である。出土遺物は総点数 619 点、総重量 19,123.2g である。出土遺物から 19 世紀第 1 四半期後半に位置付けられる。

504 号（図版 3-58-1・3-58-6）は砂層上で検出された南北に走る溝で、503 号、505 号を切り、563 号に切られる。また、重複箇所以外も大きく攪乱を受けており、遺存状態は不良である。底面は工具痕が顕著に残り、凹凸が激しい。屋敷境のラインに直行する方向に伸びていることからも、保科家屋敷に伴う溝であると考えられる。覆土は 3 層に分かれており、15 層、17 層、18 層が 504 号覆土にあたる（第 1-240 図 SPA-A'・SPB-B'）。15 層は焼土粒、炭化物粒を含む暗褐色土層、17 層は小礫を含む暗褐色土層、18 層は貝殻片や小礫を含む灰黄褐色土層となっている。出土遺物は総点数 696 点、総重量 41,425.3g である。出土遺物から 17 世紀末から 18 世紀初頭に位置付けられる。

505 号（図版 3-58-2）は砂層上で検出された。平面形が方形を呈する土坑で、地下室の可能性が考えられる。501 号、503 号、504 号に切られており、かつそれ以外の大半が撹乱を受け、4 分の 1 程度のみ残存している状態で検出された。501 号同様壁面はわずかに残るのみと遺存状態は不良であったが、その平面形から地下室とした。底面は平滑に仕上げられている。底面からピットや杭穴などの付属施設の存在は確認できなかった。覆土はわずかではあるが砂質シルトブロックを含む暗褐色土が堆積していた。出土遺物は総点数 12 点、総重量 586.4g である。

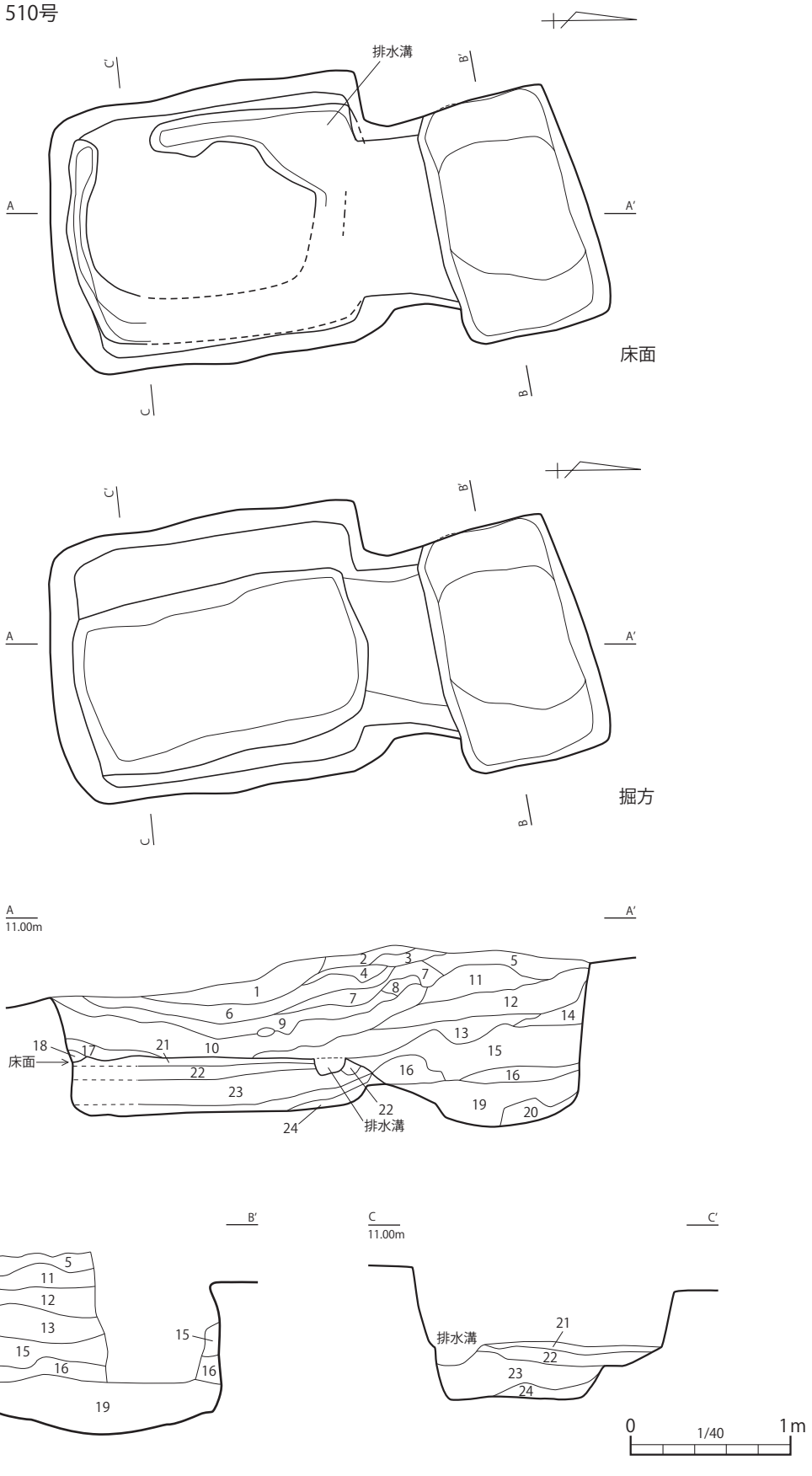
563 号（図版 3-58-6・図 3-58-8）も 501 号と同様に廃棄土坑と考えられる方形の土坑である。504 号、589 号を切り、北半が攪乱を受けている。底部は平坦で、壁面は緩やかに立ち上がる土坑で、覆土は 7 層に分かれる（SPA-A'、SPB-B'）。1 層と 3 層、4 層は褐色土ブロックを含む層で 4 層はさらににぶい黄橙色粘土ブロックを含んでいる。6 層は炭化物粒を多く含む黒褐色土層で、7 層は黄褐色砂をブロック状に含む黒色土層である。出土遺物は総点数 289 点、総重量 26,553.1g である。出土遺物から 18 世紀後葉、特に 1770 年代に位置付けられる。

589 号（図版 3-59-2）は 563 号に切られる土坑で、平面形は方形を呈する。589 号の底面からは 590 号が検出されている。覆土は 3 層に分かれる（SPB-B'）。いずれも暗褐色土層で、8 層はロームブロック、9 層は炭化物粒、10 層は両者を含む。出土遺物は総点数 85 点、総重量 5,314.2g である。出土遺物から 590 号と共に 17 世紀第 3 四半期以降に位置付けられる。

【地下室】

509 号（第 1-241 図、図版 3-58-5、第 3-16 表）

509 号は南北方向に長軸を持つ長方形の地下室で、510 号と並んで砂層上で検出された。平面形は 510 号に類似しており、南側に入口と考えられるテラス状の段（以下、テラス部）が見られることから同様の構造をもった地下室であったと考えられる。テラス部の底面は中央が掘りくぼめられている。一方、主室部の底面はテラス部に向かって傾斜しており、雨水の侵入を防ぐ作りになっていたものと考えられる。北側と東側の壁は垂直に立ち上がり、南側と西側の壁は同様に垂直に立ち上がるが、途中から緩やかに立ち上がるようになる。壁面には工具痕が残っており、特に南・西壁面で顕著に観察される。工具痕も 510 号に近似しており、また遺物からもおおむね同時期の遺構であると考えられるが、入口にあたると考えられるテラス部分が 510 号とは反対の南を向いており、若干の時間差があるものと考えられる。覆土は 25 層に分かれる。1 層から 5 層は覆土の沈み込んだ部分に堆積した、盛土層に由来する土層で、砂や焼土粒、炭化物粒を含んでいる。6 層から 12 層はテラス部分に堆積する土層で、主室部に流れ込んでいないことから埋没の過程に時間差があったものと考えられる。8 層は黒色土層、9 層は砂質シルトブロックを含む砂質土層、10 層は砂層、11 層は暗褐色土層、12 層は



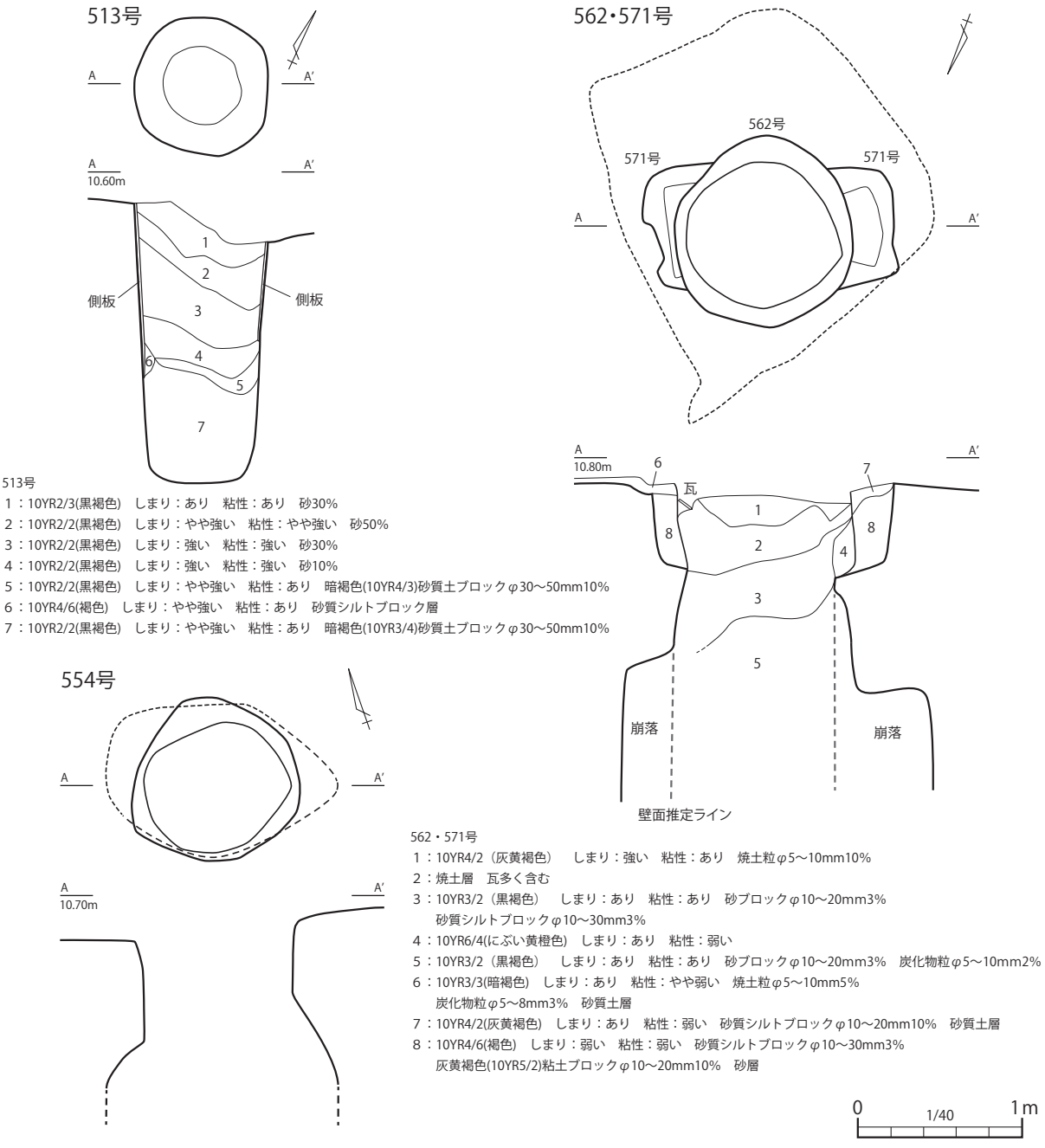
第 1-242 図　F-2 区の遺構（5）（1/40）

510号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　砂質(2.5Y7/6明黄褐色)シルトブロックφ20～50mm30%　炭化物ブロックφ10～30mm2%　砂質土層
2：10YR3/4(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　砂質シルトブロックφ10～20mm10%　焼土粒φ5～10mm10%　炭化物ブロックφ10～20mm3%
3：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い　砂質シルト粒～ブロックφ5～20mm20%　焼土粒φ5～8mm3%　砂層
4：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　砂質シルトブロックφ5～20mm20%　砂質土層
5：10YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　砂質シルト粒φ5～10mm3%　焼土粒～5mm5%　炭化物粒φ5～10mm2%　砂質土層
6：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　砂質シルト粒～ブロックφ5～20mm30%　焼土粒φ5～10mm3%　炭化物粒φ5～10mm2%
7：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　砂質シルトブロックφ10～40mm30%　焼土粒φ5～10mm3%　炭化物粒φ5～10mm2%　砂質土層
8：2.5Y5/6(黄褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い　砂層
9：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　砂ブロックφ5～10mm5%　瓦層
10：8と同じ
11：9と同じ
12：8と同じ
13：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　焼土粒φ3～10mm5%　炭化物粒φ5～10mm3%
14：10YR4/4(褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　砂質シルト粒φ5～10mm3%　焼土粒φ5～8mm3%　炭化物粒φ5～10mm5%　砂質土層
15：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂質シルトブロックφ5～10mm3%　焼土粒φ5～10mm5%　炭化物ブロックφ10～20mm7%
16：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂質シルトブロックφ5～30mm3%
17：10YR6/4(にぶい黄橙色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　砂質シルトブロックφ5～30mm30%　焼土粒φ5～10mm2%　炭化物粒φ5～10mm3%　砂層
18：10YR4/4(褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　砂質シルトブロックφ5～30mm50%　砂質シルトブロックφ50mm40%　炭化物粒φ5～10mm10%
19：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　砂質シルトブロックφ5～20mm15%　砂質土層
20：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　焼土粒φ5～10mm10%　炭化物粒φ5～10mm2%　砂質土層
21：10YR4/6(褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　砂質シルトブロックφ5～20mm20%　焼土粒φ5～10mm2%　炭化物粒φ5～10mm2%　砂質土層
22：砂質シルトブロック層　間に10YR3/1の砂質土が20%程度入る
23：10YR3/4(暗褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い　砂質シルト粒φ5mm程度3%　砂質土層
24：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　砂質シルト粒φ5～10mm10%　砂質土層

砂質シルトブロックを多く含む層である。13 層から 25 層は主室部に堆積する土層である。13 層と 14 層、16 層は砂質シルトブロックを特徴的に含む層となる。15 層、18 層、23 層から 25 層は砂層で、23 層は焼土ブロックを含む。17 層と 20 層は瓦片を多く含む層、19 層は焼土層となっている。また、19 層と 22 層は暗褐色の砂質土層となる。崩落した天井部の痕跡や床面の痕跡を確認することは出来なかったが、17 層や 20 層のような瓦層や 19 層のような焼土層が見られることから、主室部は廃絶後に廃棄土坑に転用された可能性も考えられる。また、その結果として、テラス部と主室部の埋没時期に時間差が見られるものと推察される。出土遺物は総点数 150 点、総重量 7,846.5g である。なお、遺構の時期については出土遺物と遺構の形態から 17 世紀中葉（1650 ～ 60 年代）に位置付けられることから旗本川窪家屋敷に伴う遺構と考えられる。

510 号（第 1-242 図、図版 3-58-5、第 3-16 表）

510 号は 509 号と平行に並び南北方向に長軸をもつ長方形の地下室で、F-2 区西部の砂層上で検出した。北側に入口となる竪坑を持っており、509 号とは南北反対の位置にあたる。主室北側に位置する竪坑の平面形は東西方向に長軸を持つ長方形となっている。壁は垂直に近く底面も東西方向に長軸をもつ長方形であるが、中央部がやや掘り窪められている。主室は南北方向に長軸を持つ長方形で、北側の竪坑に向かって緩やかに傾斜する床を作出している。また、床面の壁際には排水のためと考えられる溝が巡らせてある。主室掘方の底面は羨門底面よりも深くまで掘り込まれており、床面からの深さは深い箇所で 40㎝程になる。また、主室部の壁面は工具痕が残り、凹凸が著しいが、竪坑部の壁面は平滑に仕上げられている。覆土は 24 層に分かれる。1 層から 20 層は覆土、21 層から 24 層は主室部の床面の土層にあたる。1 層から 7 層は砂質土層で、砂質シルトブロックや焼土粒を含んでいる。8 層・10 層・12 層は砂層、9 層・11 層は瓦層が堆積する。13 層は焼土粒、炭化物粒を含む黒褐色土層で排水溝にも堆積している。14 層と 17 層は砂質土層、18 層は砂質シルトブロック層である。18 層は壁面の崩落に伴う堆積と考えられる。1 ～ 14 層は北側の竪坑から流れ込んだように南側に傾斜して堆積している。15 層・16 層・19 層・20 層は竪坑内に堆積する土層である。15 層、



513号
1：10YR2/3(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂30%
2：10YR2/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　砂50%
3：10YR2/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　砂30%
4：10YR2/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　砂10%
5：10YR2/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　暗褐色(10YR4/3)砂質土ブロックφ30～50mm10%
6：10YR4/6(褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　砂質シルトブロック層
7：10YR2/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　暗褐色(10YR3/4)砂質土ブロックφ30～50mm10%

562・571号
1：10YR4/2（灰黄褐色）　しまり：強い　粘性：あり　焼土粒φ5～10mm10%
2：焼土層　瓦多く含む
3：10YR3/2（黒褐色）　しまり：あり　粘性：あり　砂ブロックφ10～20mm3%
　砂質シルトブロックφ10～30mm3%
4：10YR6/4(にぶい黄橙色)　しまり：あり　粘性：弱い
5：10YR3/2（黒褐色）　しまり：あり　粘性：あり　砂ブロックφ10～20mm3%　炭化物粒φ5～10mm2%
6：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　焼土粒φ5～10mm5%
　炭化物粒φ5～8mm3%　砂質土層
7：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　砂質シルトブロックφ10～20mm10%　砂質土層
8：10YR4/6(褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い　砂質シルトブロックφ10～30mm3%
　灰黄褐色(10YR5/2)粘土ブロックφ10～20mm10%　砂層

0　1/40　1m

第 1-243 図　F-2 区の遺構（6）(1/40)

16 層はそれぞれ黒褐色土層と暗褐色土層で、19 層と 20 層はどちらも灰黄褐色砂質土層となる。19 層は水平に堆積しており、水平な層上に 15 層と 16 層は堆積していた。羨門や主室部の天井は残存しておらず、いずれの堆積層においても崩落した天井の痕跡を確認することが出来なかった。21 層から 24 層は 509 号には見られなかった床面部分の土層である。21 層は砂質シルトブロックを多く含む褐色砂質土、22 層は砂質シルトブロック層、23 層と 24 層は砂質シルト粒を含む砂質土層で、水平に堆積している。出土遺物は総点数 379 点、総重量 19.377.9g である。遺構の時期については出土遺物と遺構の形態から 17 世紀中葉（1650 ～ 60 年代）に位置付けられることから、旗本川窪家屋敷に伴う遺構と考えられる。

582 号（第 1-241 図、第 3-16 表）

582 号は壁面がオーバーハングする平面形が円形を呈する地下室で、地山砂層上で検出された。砂層を掘りこんでいるため、水の影響等で壁面が崩落し、オーバーハングする可能性があるが、土層からは壁面の崩落の痕跡は観察されなかったため、人為的にオーバーハングして掘り込まれているものと判断した。その形状から地下室に類する施設であると考えられる。

覆土は 10 層に分かれる。1 層と 2 層、5 層、10 層は暗褐色土層で 1 層と 5 層は砂質シルトブロックを含む。3 層と 7 層、8 層はにぶい黄褐色砂質土層で、8 層は黄褐色砂ブロックや黒褐色土ブロックを含んでいる。9 層は底面に堆積する黒色土層となっている。出土遺物は総点数 46 点、総重量 2,225.4g である。出土した遺物から 17 世紀の後葉の所産と考えられる。

【井戸】

513 号（第 1-243 図、図版 3-59-1、第 3-16 表）

513 号は平面形が円形を呈する井戸で、壁面からはわずかに残る側板が検出されている。検出面から約 2 m で底面が検出されている。後述の 562 号や 554 号では検出面から 1 m前後（標高 9.8 m前後）で水の影響と考えられる壁面の崩落が見られるが、513 号では壁面の崩落は見られなかったものの、壁面から足掛けは検出されなかった。覆土は 7 層に分かれる。1 層から 5 層は黒褐色土層で、2 層は砂を多く含み、5 層は暗褐色砂質土ブロックを含んでいる。6 層は砂質シルトブロック層で、7 層が最下層にあたり、暗褐色砂質土ブロックを含む黒褐色土が堆積する。出土遺物は総点数 1 点である。

562 号・571 号（第 1-243 図・第 3-16 表）

562 号は盛土層上で検出された井戸で、盛土層下の 571 号を切る。平面形は円形を呈する。素掘りの井戸であったと考えられ、側板の痕跡は確認できず壁面は砂層が露出した状態であった。壁面は砂層であったことから、砂層の下部で壁面が激しく崩落している状況が確認された。壁面の崩落が始まるのは標高 9.8m 程度掘削したところからで、全周にわたって壁面が失われている。覆土は 8 層に分かれており、1 層から 5 層が 562 号の覆土、7 層と 8 層が 571 号の覆土にあたる。1 層は焼土を多く含む層で、2 層が焼土層となる。3 層は砂、砂質シルトをブロック状に含む層、4 層はにぶい黄橙色土層、5 層は砂、炭化物を含む層となる。571 号覆土にあたる 7 層は砂質シルトブロックを含む砂質土層、8 層は砂層となる。562 号の出土遺物は総点数 77 点、総重量 10,821.4g である。一方、571 号の出土遺物は総点数 22 点、総重量 1,601.4g となっている。出土した遺物からは 562 号が 19 世紀第 2 四半期、571 号が 18 世紀末葉以降に埋没したものと考えられる。

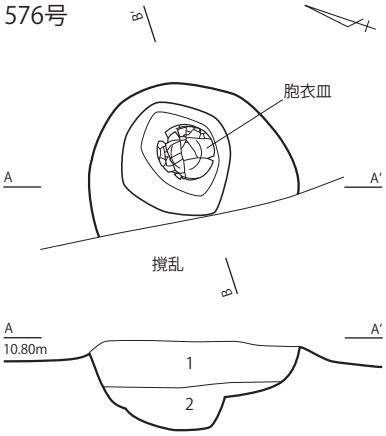
554 号（第 1-243 図、図版 3-58-7、第 3-16 表）

554 号は平面形が円形を呈する井戸で、501 号の底面から検出された。砂層を掘り込んでいるため、562 号と同様に壁面の崩落が著しい。調査中に壁面とともに土層断面が崩落したため、土層堆積状況は確認することが出来なかった。また、壁面の崩落により掘削時の足掛け等の施設も確認できていない。壁面の崩落は標高 10m 程度から始まっており、562 号と近い標高値となっていることから、井戸内の水位が崩落の開始位置近くにまで及んでいた可能性が示唆される。出土遺物は総点数 52 点、総重量 2,779.3g である。出土した遺物から 19 世紀後葉に埋没したものと考えられる。

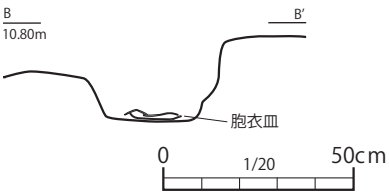
【胞衣埋納遺構】

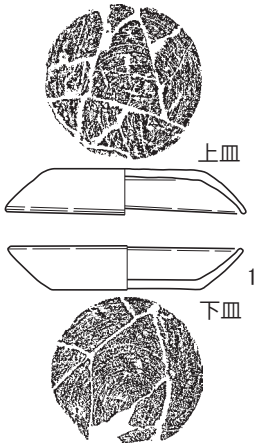
576 号（第 1-244 図、第 3-16 表）

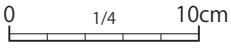
576号



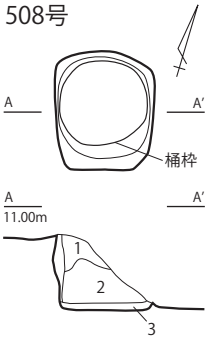
576号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物φ5～10mm2%
2：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い



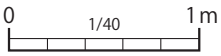


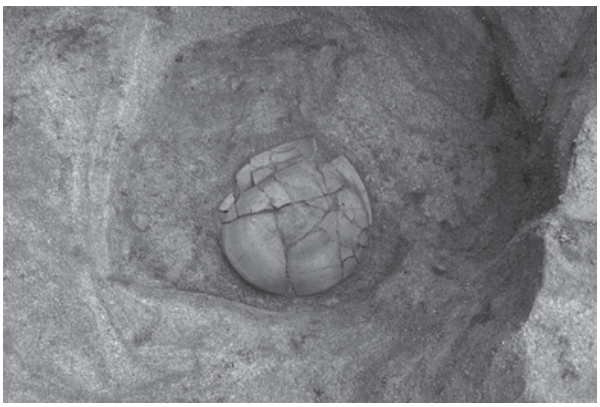


508号

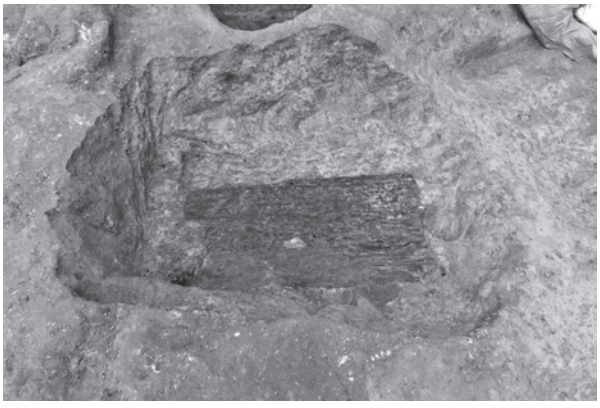


508号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い
焼土粒φ3～10mm10%　炭化物粒φ3～5mm2%
2：5YR4/8(赤褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い
炭化物ブロックφ40～50mm5%　焼土層
3：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり
黄褐色砂ブロックφ5～10mm5%
1層2層の境界には炭化材おそらく埋桶



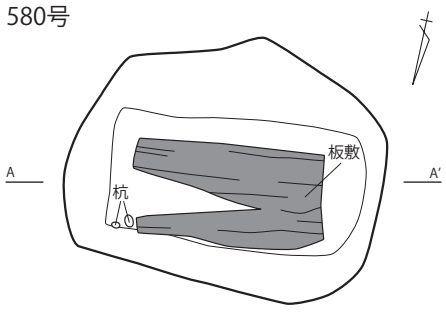


576号胞衣皿検出状況(南から)

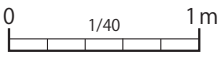


580号全景(北から)

580号

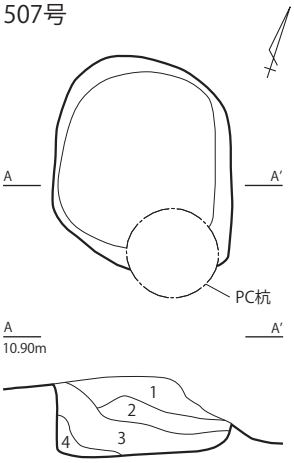


580号
1：10YR4/4(褐色)　しまり：あり　粘性：あり　焼土粒φ5～10mm20%
2：10YR4/4(褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ50～100mm15%
砂質シルトブロックφ50～100mm15%　焼土粒φ5～10mm15%
炭化物粒～ブロックφ5～20mm2%
3：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂質シルトブロックφ150mm30%
4：10YR3/4(暗褐色)　焼土粒φ5～10mm10%　焼土層
5：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い
砂質シルトブロックφ100mm30%
6：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり
砂質シルトブロックφ100～150mm30%　焼土粒φ10～20mm15%
7：10YR3/4(暗褐色)　しまり：やや弱い　粘性：やや弱い　焼土粒φ5～10mm15%
炭化物粒φ5～15mm10%



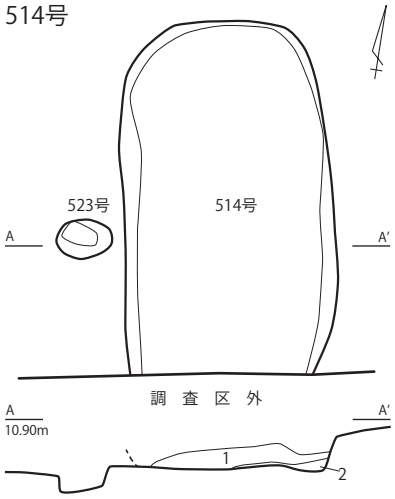
第 1-244 図　F-2 区の遺構（7）（1/4・1/20・1/40）

507号



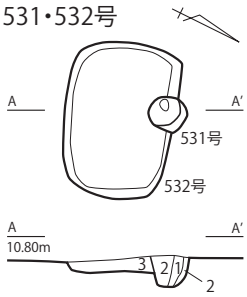
507号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ3～8mm5%
　明黄褐色砂ブロックφ3～10mm5%　焼土粒φ3～5mm2%　炭化物粒φ5～10mm3%
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　明黄褐色砂ブロックφ3～20mm15%
　炭化物粒φ5～10mm7%
3：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い
4：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　明黄褐色砂ブロックφ20～60mm30%

514号



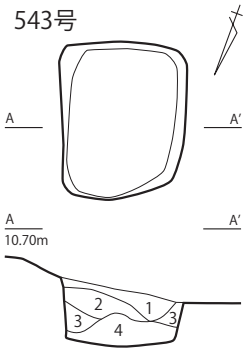
514号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い　炭化物φ10～20mm10%
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い
　黄褐色砂ブロックφ10～15mm5%　砂質土層

531・532号



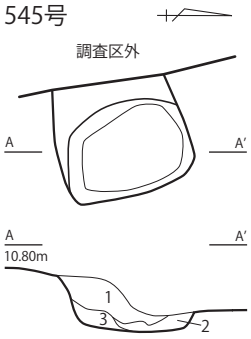
531号・532号
1：杭穴　材が残る
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂ブロックφ3～5mm10%　粘質土層
3：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや弱い　粘性：あり　砂質シルトブロックφ5～30mm10%
　粘土ブロックφ5～30mm5%

543号



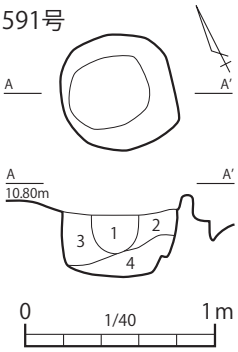
543号
1：10YR2/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂質シルトブロックφ5～50mm10%
2：10YR2/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂質シルトブロックφ5～50mm30%
3：10YR2/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂質シルトブロックφ5～50mm７%
4：10YR8/3(浅黄橙)　しまり：あり　粘性：弱い　シルトブロックφ10～50mm30%　砂層

545号



545号
1：10YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ10～20mm7%
　褐灰色(10YR4/1)粘土ブロックφ5～7mm2%
2：10YR4/4(褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　砂質土層
3：2.5Y7/4(浅黄色)　砂ブロック層φ10～30mm

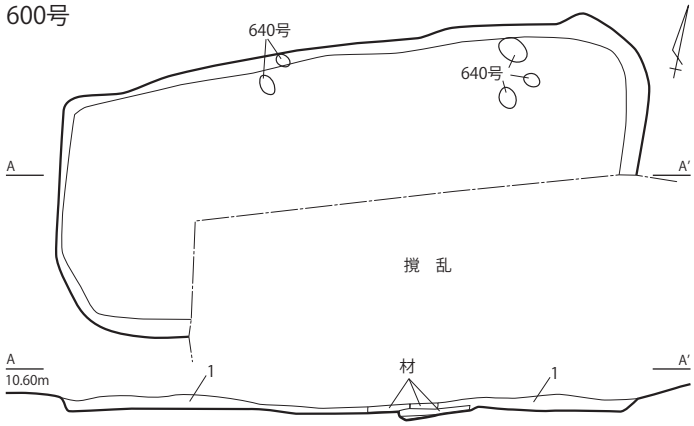
591号



591号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ1~5mm2%
　焼土粒φ3～5m1%　炭化物粒φ3～5mm1%　柱痕
2：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ10~20mm5%
　砂質シルトブロックφ10㎜1%　焼土粒φ3～5m2%　炭化物粒φ3～5mm2%
3：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：やや弱い　黄褐色砂ブロックφ10～20mm20%
　焼土粒φ3～5m1%　炭化物粒φ3～5mm1%
4：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：やや弱い　黄褐色砂ブロックφ10～20mm10%
　砂質シルトブロックφ10~15mm5%　焼土粒φ3～5m1%　炭化物粒φ3～5mm1%

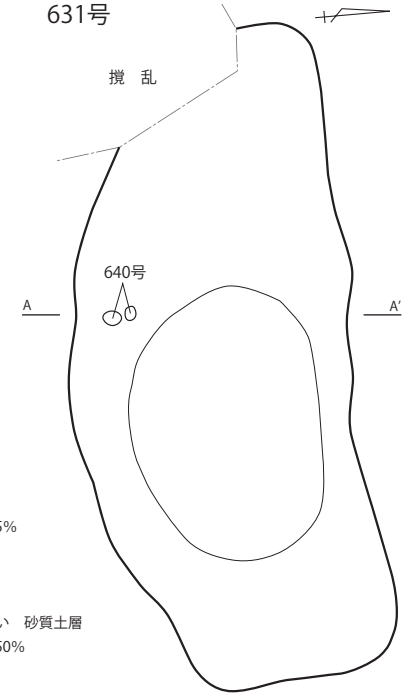
第 1-245 図　F-2 区の遺構（8）（1/40）

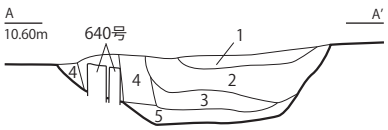
600号



600号
1：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：強い　浅黄色(5Y7/4)砂ブロックφ10~30mm15%

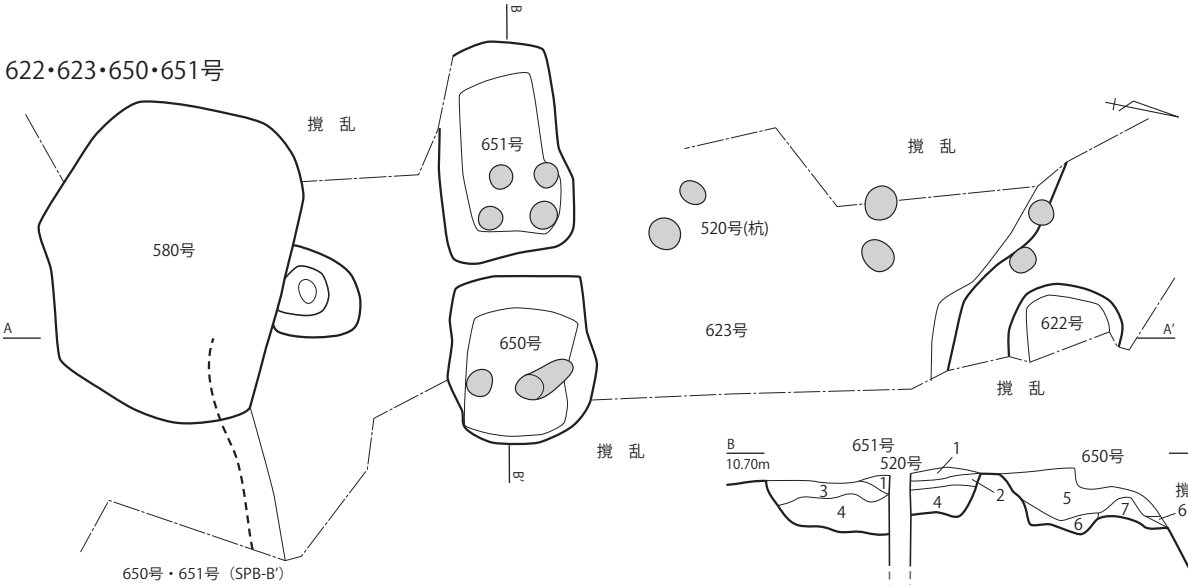
631号

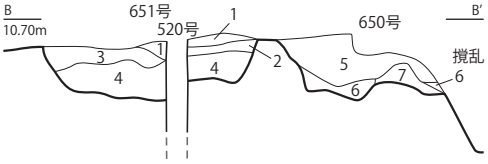




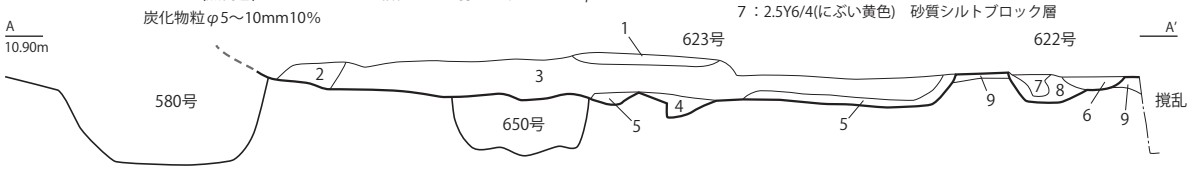
631号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄色砂5%
炭化物ブロックφ10~30mm７%
2：10YR3/1(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い
炭化物粒~ブロックφ5~20mm15%
3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い　砂質土層
4：10YR4/1(褐灰色)　しまり：やや強い　粘性：あり　砂50%
焼土粒φ3~5mm3%
5：10YR2/1(黒色)　しまり：やや強い　粘性：強い

622・623・650・651号

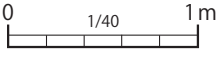




650号・651号（SPB-B′）
1：10YR4/2(灰黄褐色)　砂質土　しまり：あり　粘性：弱い　焼土粒φ5~10mm3%
炭化物ブロックφ10~20mm7%
2：10YR4/1(褐灰色)　砂質土　しまり：あり　粘性：弱い　砂ブロックφ5~10mm3%
焼土粒φ5~10mm3%
3：2.5Y6/4(にぶい黄色)　砂質シルトブロック層
4：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　砂ブロックφ5~10mm7%
炭化物粒φ5~10mm10%
5：10YR3/1(黒褐色)　砂質土　しまり：あり　粘性：やや弱い
砂質シルトブロックφ3~7mm10%
6：10YR3/1(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり
砂質シルトブロックφ3~10mm15%
7：2.5Y6/4(にぶい黄色)　砂質シルトブロック層



622号・623号
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　焼土粒φ3~5mm10%　炭化物φ5~10mm5%
2：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　砂質シルトφ5~20mm10%　砂質土層
3：10YR3/1(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　炭化物φ5~20mm5%　瓦多い
4：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い　砂質シルトφ10~20mm10%
5：10YR4/2(灰黄褐色)　砂質シルトφ5~10mm5%　砂質土層
6：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い
焼土粒φ5~10mm10%　砂質土層
7：焼土層
8：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　砂質土層
9：黄褐色砂



第 1-246 図　F-2 区の遺構（9）（1/40）

胞衣埋納遺構（576 号）は地山砂層上で検出された遺構で、西側は攪乱を受ける。平面形は円形を呈する。胞衣皿と見られるかわらけが２枚合わせ口状に底面に配置された状態で検出された。覆土は２層に分かれる。１層は炭化物粒をわずかに含む暗褐色土層、２層は砂層となっており、２層の下から胞衣皿が検出されていることから、胞衣皿を埋納したのち、直ちに掘方の残土を用いて埋め戻されたものと考えられる。なお、胞衣皿内に胎盤が変質したとみられる土層は確認されなかった。遺構構築物である胞衣皿以外の遺物は出土しなかった。出土遺物は総点数３点、総重量 223.1g である。材質別の内訳は、炻器１点 18.5g、土器２点 204.6g である。埋納された胞衣皿は上皿が口径 125mm、器高 24mm、底径 80mm、下皿が口径 122mm、器高 23mm、底径 79mm を測る。

【埋桶】

508 号（第 1-244 図、第 3-16 表）

埋桶（508 号）は側板と底板が組まれた桶が埋設される遺構である。F-2 区西端の調査区際の砂層上で検出された。埋設された桶は炭化しており、遺存状態は良好ではなかったため、桶材の詳細な規模を確認することはできなかった。桶内の覆土は２層に分かれており、１層は焼土を多く含む暗褐色土層、２層が焼土層となる。掘方は平面形が方形を呈し、覆土は３層にあたり黄褐色の砂を含む暗褐色土である。出土遺物の点数、重量は３点、326.9g である。

【土坑】

507 号（第 1-245 図、第 3-16 表）

507 号は平面形が方形を呈する土坑で、覆土が西側から流れ込んだかのように斜め方向に堆積している。覆土は４層に分けられ、いずれも暗褐色土層である。１層はローム粒や明黄褐色砂ブロック、焼土粒、炭化物を含み、２層と４層は明黄褐色砂ブロックを含む。出土遺物は総点数 14 点、総重量は 394.3g である。出土遺物から 507 号は 1670 ～ 80 年代に位置付けられる。

514 号（第 1-245 図、第 3-16 表）

514 号は長方形の土坑で、上部は攪乱を受けている。底面は平坦で、壁面は真っ直ぐに立ち上がる。覆土は２層に分かれており、１層は炭化物粒を多く含む黒褐色土層、２層は黄褐色砂ブロックを含む暗褐色砂質土層である。出土遺物は 230 点、総重量は 3,916.9g である。出土遺物から 19 世紀中葉に位置付けられる。

531 号・532 号（第 1-245 図、第 3-16 表）

532 号は方形の土坑で、ピット 531 号に切られている。532 号の底面は平坦で、壁面は真っ直ぐに立ち上がる。覆土は３層に分かれており、１層と２層が 531 号、３層が 532 号の覆土にあたる。１層は杭穴で、材が残っていた。２層は黒褐色の粘質土層でブロック状に砂を含む。３層は砂質シルトブロックや粘土ブロックを含む暗褐色土層である。531 号、532 号いずれも遺物の出土はなかった。

543 号（第 1-245 図・第 3-16 表）

543 号は方形の土坑である。底面は平坦で、壁面は真っ直ぐに立ち上がる。覆土は４層に分かれる。１層から３層は黒褐色土層で、砂質シルトブロックを含む。４層はシルトブロックを含む浅黄橙色の砂層である。覆土中からの遺物の出土はなかった。

545 号（第 1-245 図、第 3-16 表）

545 号も 507 号と同様の形態の土坑で、上部は攪乱を受けている。覆土は３層に分かれる。１層

は黄褐色砂ブロックや粘土ブロックを含む。2 層は砂質土、3 層は砂層である。出土遺物の総点数は 3 点、総重量は 213.8g である。

580 号（第 1-245 図、第 3-16 表）

580 号は平面形が隅丸長方形を呈する土坑で、底面から板材が敷かれた状態で検出された。板材は状態が悪く、樹種等を特定するには至らなかった。覆土は 7 層に分けられる。1 層と 2 層は褐色土層で、1 層は焼土粒、2 層は焼土粒の他、黄褐色砂ブロックや砂質シルトブロックを含む。3 層、4 層、6 層、7 層は暗褐色土層で、3 層は砂質シルトブロック、4 層は焼土粒を含み、6 層は砂質シルトブロックと焼土粒、7 層は焼土粒と炭化物を含む。5 層は黒褐色土層で砂質シルトブロックを含んでいる。出土遺物の総点数は 113 点、総重量は 4,140.1g である。出土した遺物からは 17 世紀後葉～ 18 世紀前葉の所産であると考えられる。

600 号（第 1-246 図、第 3-16 表）

600 号は長方形の浅い土坑である。F-2 区東端の黒褐色泥炭層上で検出された。覆土は単層で、褐灰色の粘性の強い土を覆土としており、底面からまとまって木材が出土している。

出土遺物の総点数は 138 点、総重量は 6,946.7g である。出土した遺物から 19 世紀の中葉ごろの所産と考えられる。

631 号（第 1-246 図、第 3-16 表）

631 号は南西隅が攪乱を受ける平面形が長楕円形の土坑で、F-2 区東部の砂層の上層に堆積する黒褐色泥炭層上で検出された。覆土は 5 層に分かれる。1 層は砂や炭化物を含む黒褐色土層、2 層は炭化物を多く含む黒褐色土層、3 層は灰黄褐色の砂質土層、4 層は焼土粒を含む褐灰色土と砂の混合層、5 層は黒色土層となる。1 層や 2 層からは箸など多くの木製品が出土した。出土遺物の総点数は 952 点、総重量は 30,141.7g である。なかでも木製品がまとまって出土しており、その点数は 86 点、重量は 1,025.0g を測る。出土した遺物から 18 世紀後葉の所産と考えられる。

622・623・650・651 号（第 1-246 図、第 3-16 表）

623 号は盛土上で検出された大型の土坑であるが、東西を撹乱により失われているため、平面形は不明である。580 号、650 号、651 号を切り、520 号に切られている。SPA-A’ が 622 号と 623 号の覆土の土層にあたる。623 号の覆土は 5 層に分かれている。1 層は焼土粒や炭化物粒を含む灰黄褐色土層、2 層は壁面近くに堆積する層で、砂質シルト粒を含むにぶい黄褐色砂質土層である。3 層は 623 号内に広く堆積している層で、瓦を多く含む黒褐色土層である。4 層と 5 層は底面に堆積する層で、4 層は砂質シルト粒を含む灰黄褐色土層、5 層は灰黄褐色砂質土層である。3 層には完形に近い擂鉢が出土するなど、検出面からの深度は浅いが覆土には多くの遺物が含まれていた。6 層から 8 層は隣接するピット 622 号の覆土にあたる。6 層は焼土粒を含む灰黄褐色砂質土層、7 層は焼土層、8 層は暗褐色砂質土層である。9 層は検出面の地山層で、黄褐色砂層である。623 号の出土遺物の総点数は 236 点、総重量は 10,066.8g で出土遺物から 19 世紀第 3 四半期に位置付けられる。

650 号、651 号は 623 号底面で検出された平面形が方形を呈する土坑で、520 号に切られ、650 号はさらに東端が撹乱で失われている。SPB-B’1 層から 4 層が 651 号、5 層から 7 層が 650 号の覆土にあたる。1 層と 2 層は灰黄褐色砂質土層で、1 層は焼土粒や炭化物粒を含み、2 層は焼土粒や砂をブロック状に含む。3 層は砂質シルトブロック層で 4 層は炭化物と砂を含む黒褐色土層である。5

層と 6 層は砂質シルトブロックを含む黒褐色砂質土層、7 層は砂質シルトブロック層である。650 号の出土遺物の総点数は 29 点、総重量は 1,803.7g である。651 号の出土遺物の総点数は 31 点、総重量は 885.0g である。出土遺物から 650 号は 18 世紀中葉以降、651 号は 17 世紀末葉から 18 世紀初頭以降の遺構と考えられる。

【ピット】

591 号（第 1-245 図、第 3-16 表）

591 号は柱痕をもつ平面形が円形を呈するピットである。覆土は 4 層に分かれており、1 層が柱痕部分にあたる。1 層はローム粒や焼土粒を含む黒褐色土層で、2 層から 4 層は黄褐色の砂を含む暗褐色土層である。F-2 区内では他に柱痕を残すピットは検出されず、柱の配置は不明である。出土遺物の総点数は 8 点で、総重量は 395.9g である。（佐藤）

8） G-3 区

G-3 区は、調査対象範囲のうち南東側に部分的に張り出した部分となる。東半は調査直前まで存在したビルの地下構造および擁壁状の構造物により完全に破壊されており、西半のみが調査対象となった。あわせて狭小範囲を段状に掘り下げたため調査範囲は狭めざるをえなかったが、調査範囲の中では最も溜池に近い箇所となるため、トレンチ調査を併用して屋敷地としての利用状況および埋め立て状況の把握に努めた。絵図等の史料で確認された限りでは、G-3 区北側端が成瀬家－鳥居家の屋敷地南東側張出部と吉田家－林家屋敷地との境にあたり、G-3 区はほぼ全体が吉田家－林家の屋敷地と判断される。拝領者は明暦 2 年（1656）以前段階の吉田家に始まり、天保 9 年（1838）以前段階の林家に至るまで、計 6 家の武家が確認されている。発掘調査では 5 面が確認されたが、旗本拝領後の屋敷地としての利用が想定できる面は 1 ～ 4 面である。5 面は近世初期の溜池の埋め立てに伴う造成段階と考えられる（第Ⅲ章・第Ⅷ章第 1 節参照）。

A　1 面

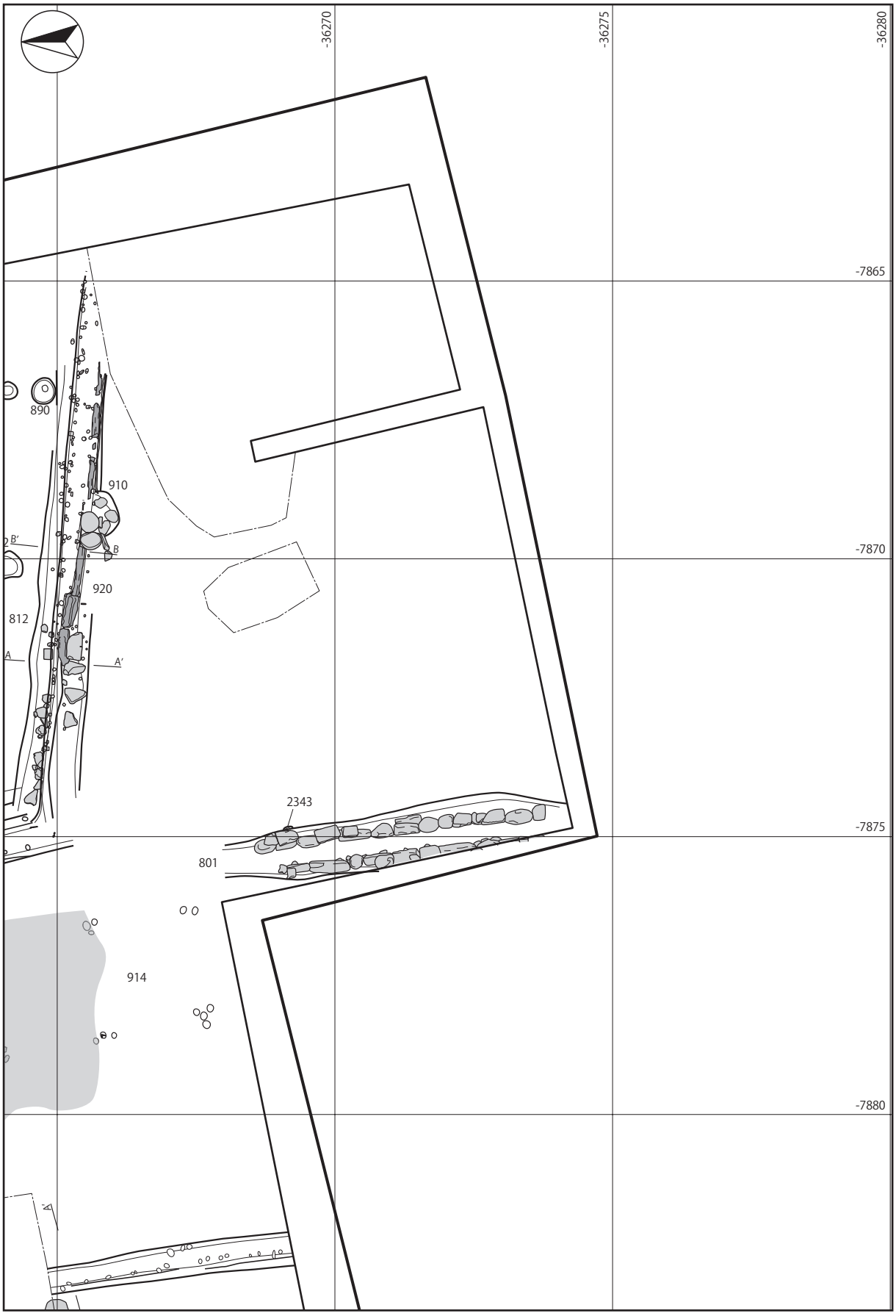
調査時に 1 面とした面では石組溝（801 号）1 条、溝 2 条、礎石 6 基が検出されたが、801 号以外は出土遺物や遺構形状から近代の所産と判断された。801 号は廃絶年代は明治期以降と考えられるものの、旗本屋敷段階から機能していた溝と判断されたため、ここに掲載した。

【石組溝】

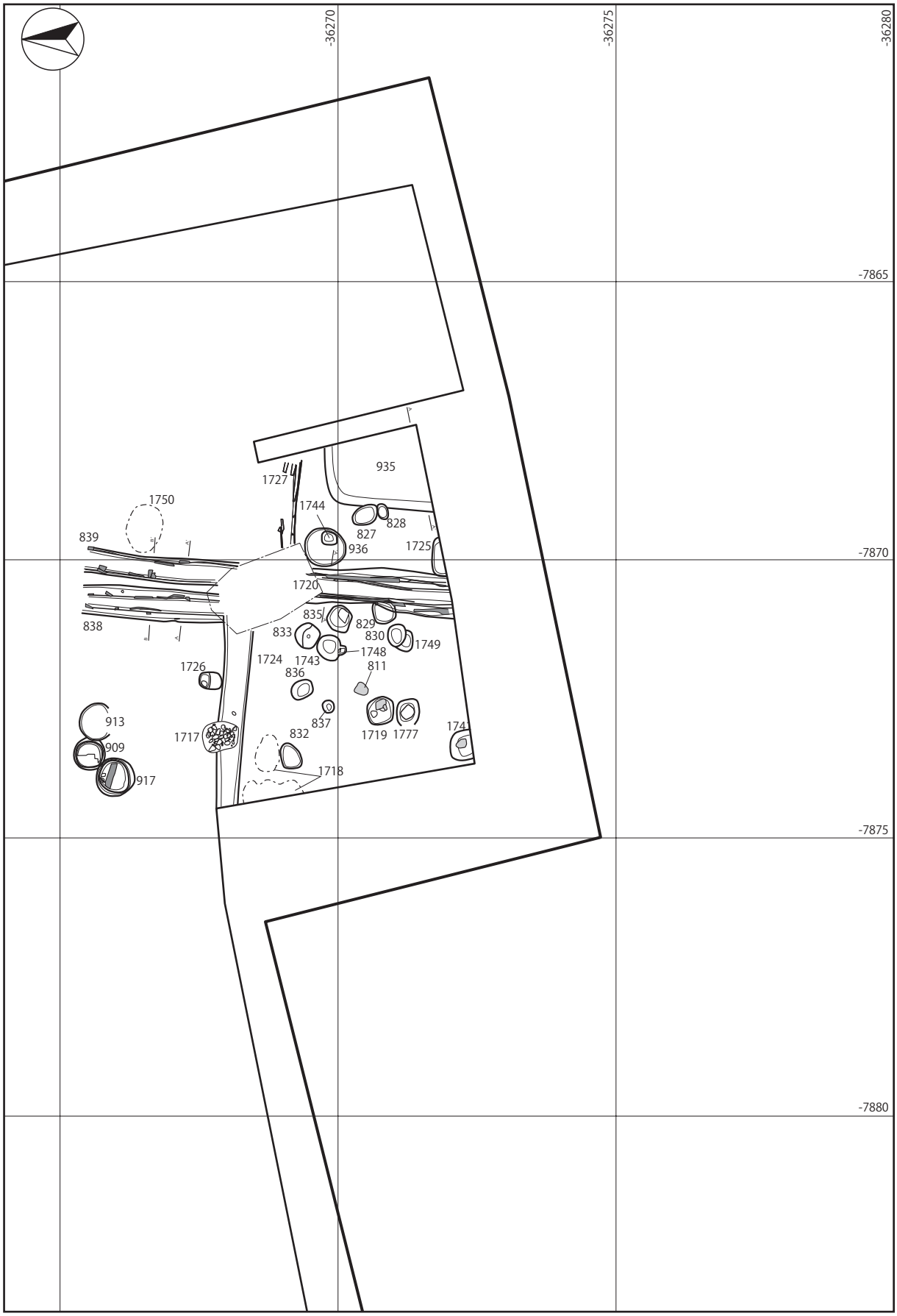
801 号（第 1-247・1--252 図、第 3-16 表）

G-3 区西壁に沿って南北に走る石組溝である。石組の上面で幅 0.3 m、掘方底面での幅 0.7 mを測り、調査区内では約 6 mが残存していた。壁には切石や円礫を 2 段積んでおり、さらに、上段は部分的に扁平な円礫を掘方壁に対し斜めに据えているなど規則的な配置とはなっていないことから、補修や作り変えが行われた可能性がある。切石は房州石・曽我浦石・伊豆青石が主体であった。801 号の北側延長部分には 888 号（木組溝）が位置し、801 号の下部にも延びている可能性が高いと推測されたが、安全上からより下位の掘削が行えなかったため、確証は得られなかった。覆土はしまり・粘性とも弱い黄灰色土で、黄褐色砂を多く含む。出土遺物は 501 点・29,546.0g で、19 世紀第 3 四半期が主体となっている。

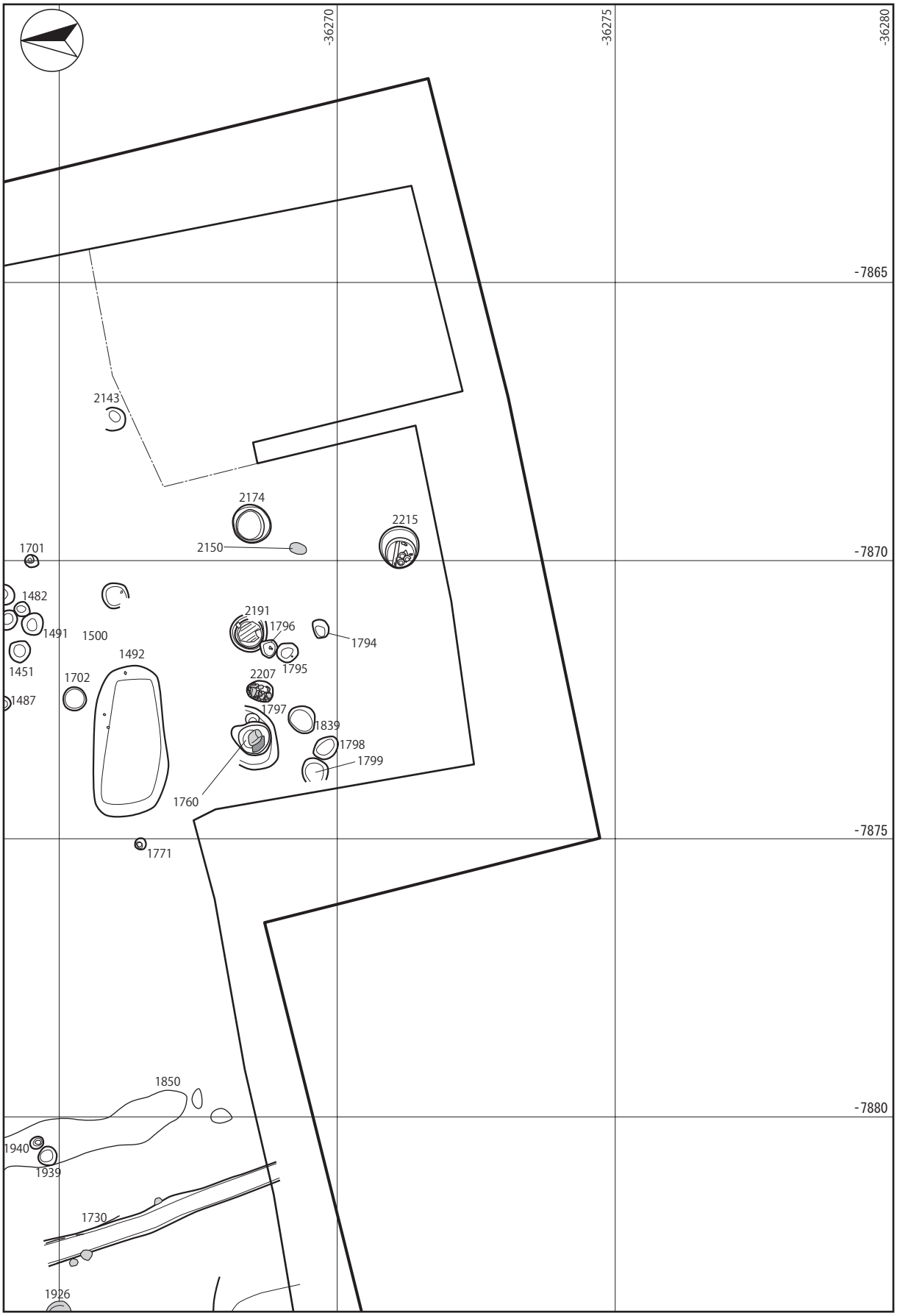
B　2 面



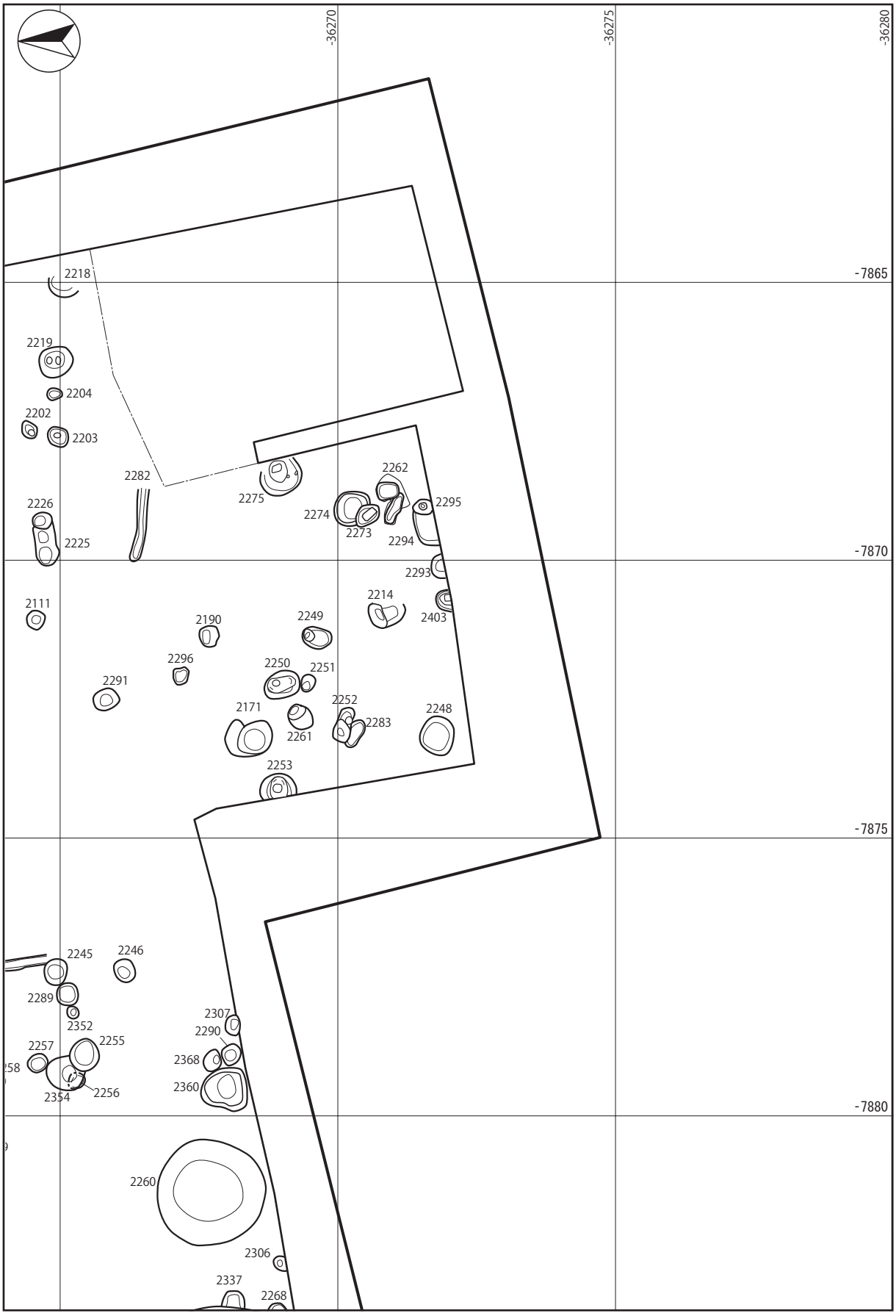
第 1-247 図　G-3 区 1 面割図（1）（1/100）



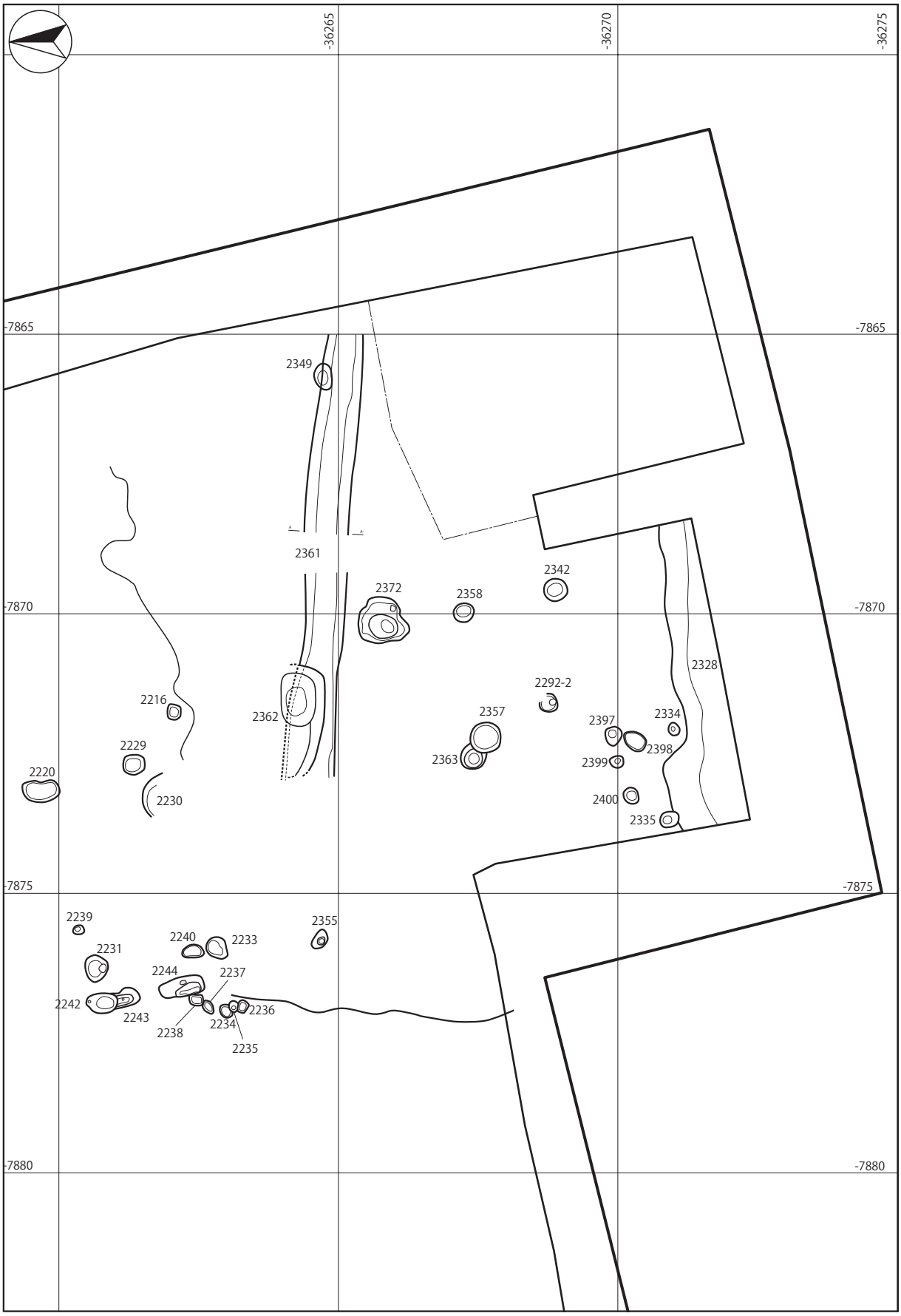
第 1-248 図　G-3 区 2 面割図（2）（1/100）



第 1-249 図　G-3 区 3 面割図（3）（1/100）



第 1-250 図　G-3 区 4 面割図（4）（1/100）



第 1-251 図　G-3 区 5 面割図（5）（1/100）

2 面では溝、木組溝、埋桶、石敷・瓦敷遺構、柱穴、ピット等が検出された。以下個別に記載する遺構の他に、石敷（1717 号・1718 号）や瓦敷（1750 号）といった部分的な整地に伴う遺構が検出されている。これらはいずれも掘方がなく、地面に直接敷設されたものである。また、東西方向に走る溝（1727 号・1724 号）の南側には小規模なピットが多く認められた。中には底石を伴うもの（835 号・1719 号）もあったが、建物を想定できる配列とはならなかった。935 号は、寛政 6 年（1794）の火災に伴う焼土廃棄土坑と考えられる。同じく 2 面で検出された木組溝 1724 号、埋桶 909 号・917 号も内部に焼土層が認められるため、935 号と同時期の遺構である可能性が高い。これらの遺構の存在から、宝暦 9 年（1759）段階での拝領者である長谷川家あるいは寛政 9 年（1797）段階での拝領者である兼松家に属する生活面と考えられる。

【木組溝・溝】

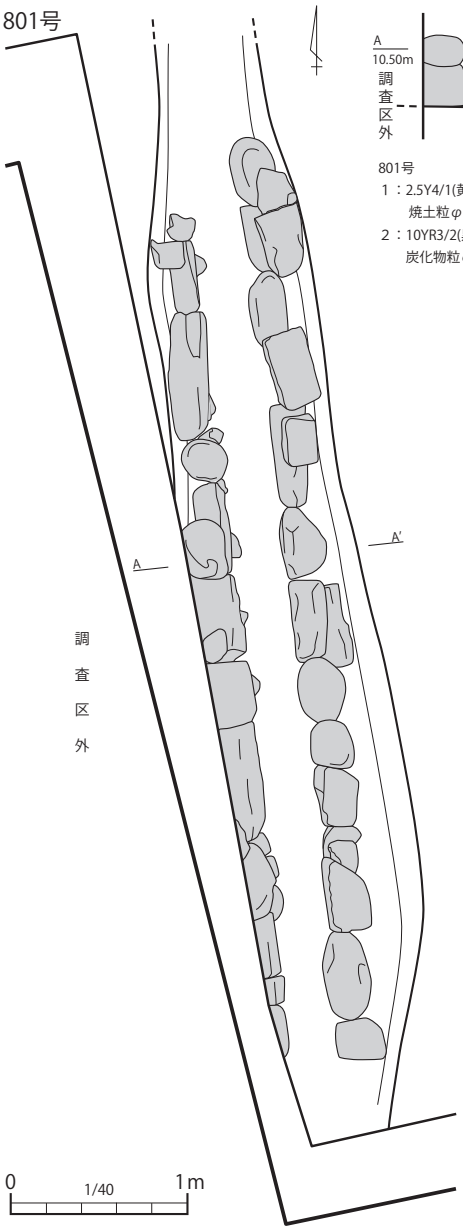
838・839・1720・1727・1724 号（第 1-248・253 図、図版 3-61-8、第 3-16 表）

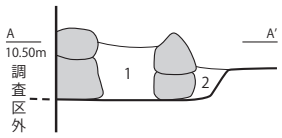
G-3 区中央に位置する溝・木組溝である。東西方向に走るもの（1727 号・1724 号）、南北方向に走るもの（838 号・839 号・1720 号）があるが、両者の交点が撹乱されており、一体のものか否かを明らかにすることはできなかった。また、軟弱地盤に掘り込まれているため遺構の形状がかなり歪み、かつ数回にわたり作り変えが行われたためか、覆土断面と平面の側板ラインが一致せず、溝の定数や作り変えの回数を判断することは難しかった。特に 1720 号は、側板が数列確認できたものの原位置を保っていると判断できるものはほぼなく、平面図は検出状況をそのまま記録化するにとどまっている。838 号・839 号は並行して南北方向に延びる木組溝で、いずれも側板とそれを止める杭が残っていた。幅 50 ～ 60cm、残存する深さは約 20 ～ 30cm と小規模なもので、両溝の底面はほぼ同レベルである。断面は箱型を呈するが、壁面はかなりゆがみ、形状を保てていない部分が大半だった。覆土は、838 号が淡黄色砂・黄灰色砂を多く含む黒色土が堆積するのに対し、839 号は内容物をあまり含まない、粒子の細かい黒褐色土が堆積する。839 号の杭 1 点の樹種同定を実施知ったところ、アカマツとの結果が出ている（第Ⅷ章参照）。出土遺物は 838 号が 110 点・9,791.4g、839 号が 75 点・5314.9g で瓦片が中心である。出土遺物から見た時期は 18 世紀第 4 四半期である。

1720 号は、撹乱を挟んで 383 号・839 号の南側に延びる木組溝である。位置から見て 838 号・839 号の延長と考えられるが確証は得られていない。先述のとおり作り変えが多く行われた結果によるものか、側板の並びや壁面はかなり乱れている。838 号・839 号に比べ幅広で、幅約 80c m、深さ約 50cm を測る。側板・杭は多く残存しており、側板はスギ・ヒノキ・アカマツ・アスナロ、杭はスギ・ヒノキが用いられていた（第Ⅷ章参照）。樹種同定が可能だった木組溝の構成材中で、側板にアスナロが含まれるのは 1720 号のみである。覆土は灰オリーブ砂をラミナ状に多く含むオリーブ黒色土である。出土遺物は 64 点・10,790.2g で瓦片が多く、出土遺物から見た時期は 18 世紀第 4 四半期である。

1727 号は東西方向に延びる木組溝である。北側壁は撹乱で乱されており、幅約 25cm、深さ約 10cm と残存状況は著しく不良である。断面は箱形を呈する。内部には焼土が堆積し、火災に伴い廃絶された可能性がある。出土遺物は 4 点・316.4g と極わずかで、時期は不明である。

1724 号は、838 号と直角に接する溝である。検出面では幅約 50cm、深さ 10cm 程度だが、調査区西壁断面では上部に 30cm ほどの掘り込みが確認できる。断面は浅い皿状を呈する。覆土は砂質で非常にしまりが強い。出土遺物はない。時期は 17 世紀後葉以降である。





801号
1：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：弱い　粘性：弱い　黄褐色砂ブロックφ10～20mm10%
　焼土粒φ1～3mm5%　炭化物粒φ3～10mm5%　小石3%
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　黄褐色砂ブロックφ10～20mm10%　焼土粒φ1～3mm5%
　炭化物粒φ3～10mm5%



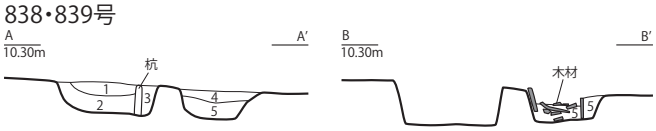
1.　801号土層断面（南から）



2.　801号全景（南から）

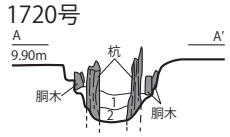
第 1-252 図　G-3 区 1 面の遺構（1/40）

838・839号



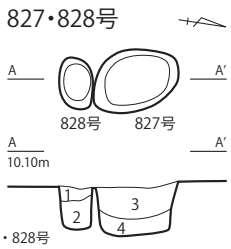
838号・839号
1：2.5Y3/2(暗オリーブ褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　焼土粒φ1～2mm2%　炭化物粒φ1～5mm3%
　淡黄色(2.5Y8/3)砂を層面端に30%含む　粒子細
2：2.5Y2/1(黒色)　しまり：あり　粘性：やや強い　黄灰色(2.5Y5/1)砂粒φ5mm3%含む　炭化物粒φ1～3mm2%　粒子細
3：2.5Y2/1(黒色)　しまり：あり　粘性：強い　ローム粒φ1mm1%未満　炭化物粒φ1～3mm2%　838号裏込め土　粒子細
4：2.5Y3/1(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ1mm1%未満　焼土粒φ1～5mm3%　粒子細
5：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強　粘性：強　ローム粒φ1～3mm1%　焼土粒φ1mm1%未満　炭化物粒φ1～2mm1%
　粒子細

1720号



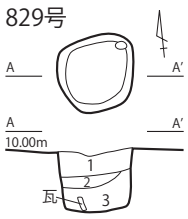
1720号
1：5Y3/1(オリーブ黒色)　しまり：強い　粘性：弱い
　炭化物粒φ1～3mm5%　赤錆3%
　灰オリーブ色砂をラミナ状に20%含む
2：N/04/1(灰色)　しまり：弱い　粘性：極強
　灰オリーブ砂3%　炭化物粒φ1～5mm5%

827・828号



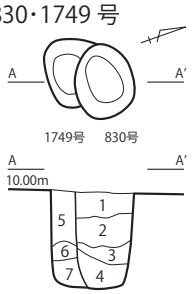
827号・828号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：弱い
　焼土粒φ1～5mm15%　炭化物粒φ1～3mm2%
2：10YR2/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：弱い
　ローム粒φ1～5mm7%　焼土粒φ1mm1%
3：10YR2/2(黒褐色)　しまり：弱い　粘性：強い
　焼土粒φ1～10mm5%　炭化物粒φ1～10mm3%
4：10YR2/1(黒)　しまり：あり　粘性：強い
　焼土粒φ1～3mm1%　炭化物粒φ1～2mm2%

829号



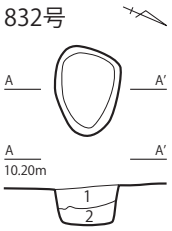
829号
1：10YR2/1(黒)　粘性：強い　しまり：弱い
　ローム粒φ1～3mm1%　炭化物粒φ1～2mm2%
　瓦片5%
2：10YR3/1(黒褐色)　粘性：強　しまり：あり
　ローム粒φ1～5mm1%　炭化物粒φ1～3mm1%
3：10YR2/1(黒)　粘性：やや強い　しまり：あり
　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～2mm1%
　礫φ5mm1%

830・1749 号



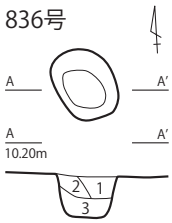
830号・1749号
1：7.5YR3/4(暗褐色)　しまり：あり　粘性：強い
　ローム粒φ3～10mm10%　焼土粒φ1～3mm7%
　炭化物粒φ1～5mm10%　灰色粘土粒φ5～10mm5%
2：10YR4/4(褐色)　しまり：強い　粘性：強い　黄色砂粒φ5～10mm7%
　焼土粒φ1～5mm5%　炭化物粒φ1～5mm5%
3：10YR4/4(褐色)　しまり：強い　粘性：強い　黄色砂10%
　黄褐色岩片φ5～10mm5%
4：7.5YR4/3(褐色)　しまり：弱い　粘性：弱い　砂5%
　黄褐色岩片φ3～10mm10%　焼土粒φ1～5mm5%
　炭化物粒φ1～5mm5%
5：10YR4/2(灰黄褐色)　粘性：強い　しまり：強い　焼土粒φ1mm1%
　炭化物粒φ1mm1%　灰白色(10YR7/1)粘土粒～ブロックφ5～20mm15%
6：10YR5/1(褐灰色)　粘性：強い　しまり：あり　焼土粒φ1mm1%未満
　炭化物φ1mm1%未満　灰白色(10YR7/1)粘土粒φ1～5mm5%
7：10YR2/2(黒褐色)　粘性：強い　しまり：強い　ローム粒φ1～3mm1%

832号



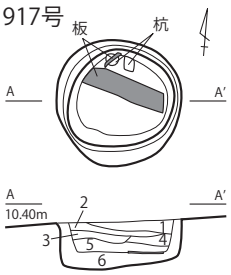
832号
1：10YR2/1(黒)　しまり：強い　粘性：強い
　ローム粒・炭化物粒各φ1～2mm2%　礫φ5～10mm5%
2：2.5Y3/1(黒褐色)　粘性：強い　しまり：やや弱い
　炭化物粒φ1mm1%　灰白色(2.5Y7/1)粒φ1mm1%

836号



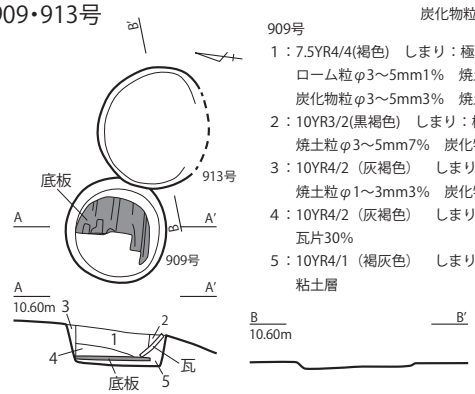
836号
1：10YR3/2(黒褐色)　粘性：強い　しまり：強い
　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～3mm
2：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：強い
　焼土粒φ1～5mm5%　炭化物粒φ1mm1%
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い
　炭化物粒φ1mm1%未満

917号



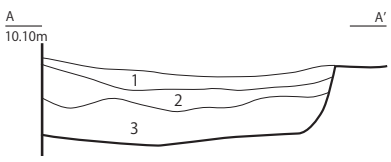
917号
1：10YR5/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：あり　焼土粒φ1～3%
　炭化物粒～ブロックφ5～30mm5%　細砂混じりシルト層
2：2.5YR2/4(極暗赤褐色)　しまり：強い　粘性：弱い
　焼土粒φ1～10mm10～15%　炭化物φ1～3mm3～5%　焼土層
3：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：強い　砂20%～25%
　シルト層
4：10YR3/1(黒褐色)　しまり：強い　粘性：やや強い　砂質シルト層
5：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：あり
　ローム粒φ5～15mm3%　炭化物粒φ1～5mm1～3%
　礫φ5～20mm3%　砂質シルト層

909・913号



909号
1：7.5YR4/4(褐色)　しまり：極強　粘性：あり
　ローム粒φ3～5mm1%　焼土粒φ3～10mm5%
　炭化物粒φ3～5mm3%　焼土層炭化物層が瓦層状に堆積
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：極強　粘性：あり
　焼土粒φ3～5mm7%　炭化物粒φ3～10mm10%
3：10YR4/2（灰褐色）　しまり：極強　粘性：あり
　焼土粒φ1～3mm3%　炭化物粒φ1～3mm2%
4：10YR4/2（灰褐色）　しまり：極強　粘性：あり
　瓦片30%
5：10YR4/1（褐灰色）　しまり：強い　粘性：極強
　粘土層

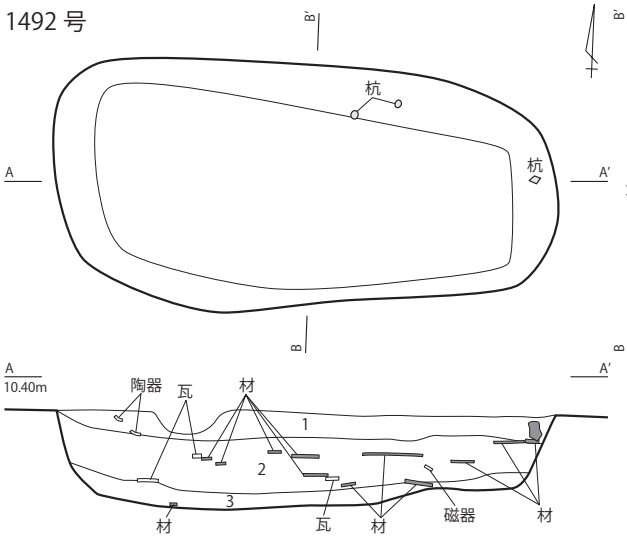
935号

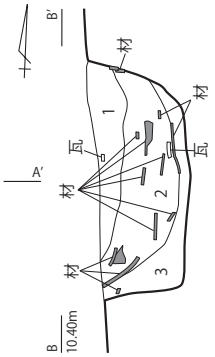


935号
1：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：極強　粘性：弱い　黄褐色砂10%　焼土粒φ1～5mm5%　炭化物粒φ1～3mm3%
2：5YR4/4(にぶい赤褐色)　しまり：極強い　粘性：弱い　灰色砂5%　焼土粒φ1～10mm80%
　炭化物粒φ1～5mm5%　白色粒1%　焼土層
3：5YR2/1(黒褐色)　しまり：弱い　粘性：あり　焼土粒φ1～10mm3%　炭化物粒φ1～5mm60%
　にぶい黄褐色(10YR4/3)土粒φ10mm10%　木端を多く含む

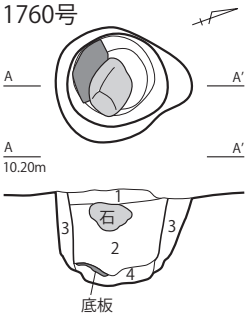
0　1/40　1m

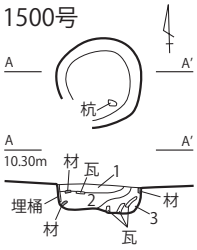
第 1-253 図　G-3 区 2 面の遺構（1/40）



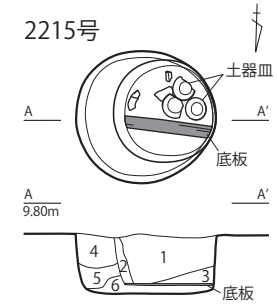


1492号（SPA-A′・SPB-B′）
1：5Y5/1(灰色)　しまり：極強　粘性：あり
黄褐色(2.5Y5/3)土砂7%　焼土粒φ1〜3mm3%
炭化物 粒φ1〜10mm10%　小石φ3〜10mm5%
灰色土主体
2：5Y3/1(黒褐色)　しまり：極強　粘性：極強
焼土粒φ1〜5mm5%　炭化物粒φ3〜15mm15%
灰黄褐色土ブロックφ15mm20%　木製品木片集中層
3：5Y4/1(灰色)　しまり：強い　粘性：強い
黄褐色砂15%　焼土粒φ1〜3mm5%　灰色粘土主体

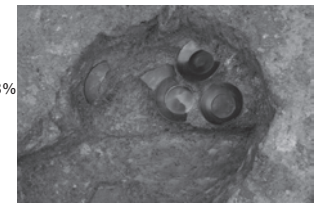




1760号
1：7.5YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：極強　ローム粒φ1〜7mm10%
焼土粒φ1〜5mm7%　炭化物粒φ1〜5mm5%　褐灰色(10YR6/1)粘土粒φ3〜5mm3%
2：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：極強　黄褐色砂3%
黄褐色砂ブロックφ15mm5%　焼土粒φ1〜10mm10%　炭化物粒φ3〜5mm5%
3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：極強　黄褐色粘土φ5mm3%
黄灰色粘土粒φ3〜5mm3%　炭化物粒φ1〜5mm5%
4：7.5YR4/4(褐色)　しまり：強い　粘性：極強　黄色砂30%炭化物粒φ1〜3mm3%

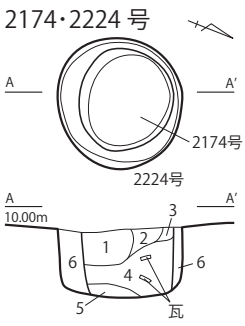


1500号
1：2.5Y4/4(オリーブ褐色)　しまり：極強　粘性：あり　ローム粒φ5mm3%
砂3%　炭化物粒φ3〜5mm5%
2：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：あり　炭化物粒φ1〜3mm3%
砂質土層
3：2.5Y4/4(オリーブ褐色)　しまり：極強　粘性：あり　赤錆5%

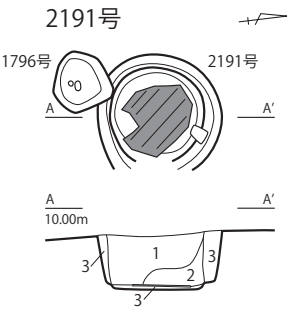


1．2215号出土状況(北から)

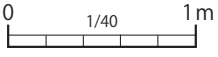
2215号
1：2.5Y4/2(暗灰黄色)　しまり：あり　粘性：強い
ローム粒φ5〜10mm20%　黄色砂3%
炭化物粒φ1〜10mm10%　赤錆5%
2：N4/0(灰色)　しまり：あり　粘性：極強　黄色砂3%
炭化物φ1〜5mm5%
3：10YR4/2(褐灰色)　しまり：極強　粘性：極強
ロームブロックφ15mm15%　炭化物粒φ1〜3mm3%
4：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：極強　粘性：極強
ローム粒φ1〜3mm5%　ロームブロックφ15mm3%
黄色砂φ3〜10mm15%　焼土粒φ1〜3mm5%
焼土ブロックφ15mm1%　炭化物粒φ1〜5mm5%
5：10YR4/4(褐色)　しまり：極強　粘性：極強い
ローム粒φ5〜10mm5%　黄色砂3%
焼土粒φ1〜5mm3%　炭化物粒φ1〜5mm3%
6：7.5Y4/1(灰色)　しまり：強い　粘性：極強
黄白色砂粒φ5〜10mm7%　焼土粒φ1〜3mm1%
炭化物粒φ1〜5mm5%



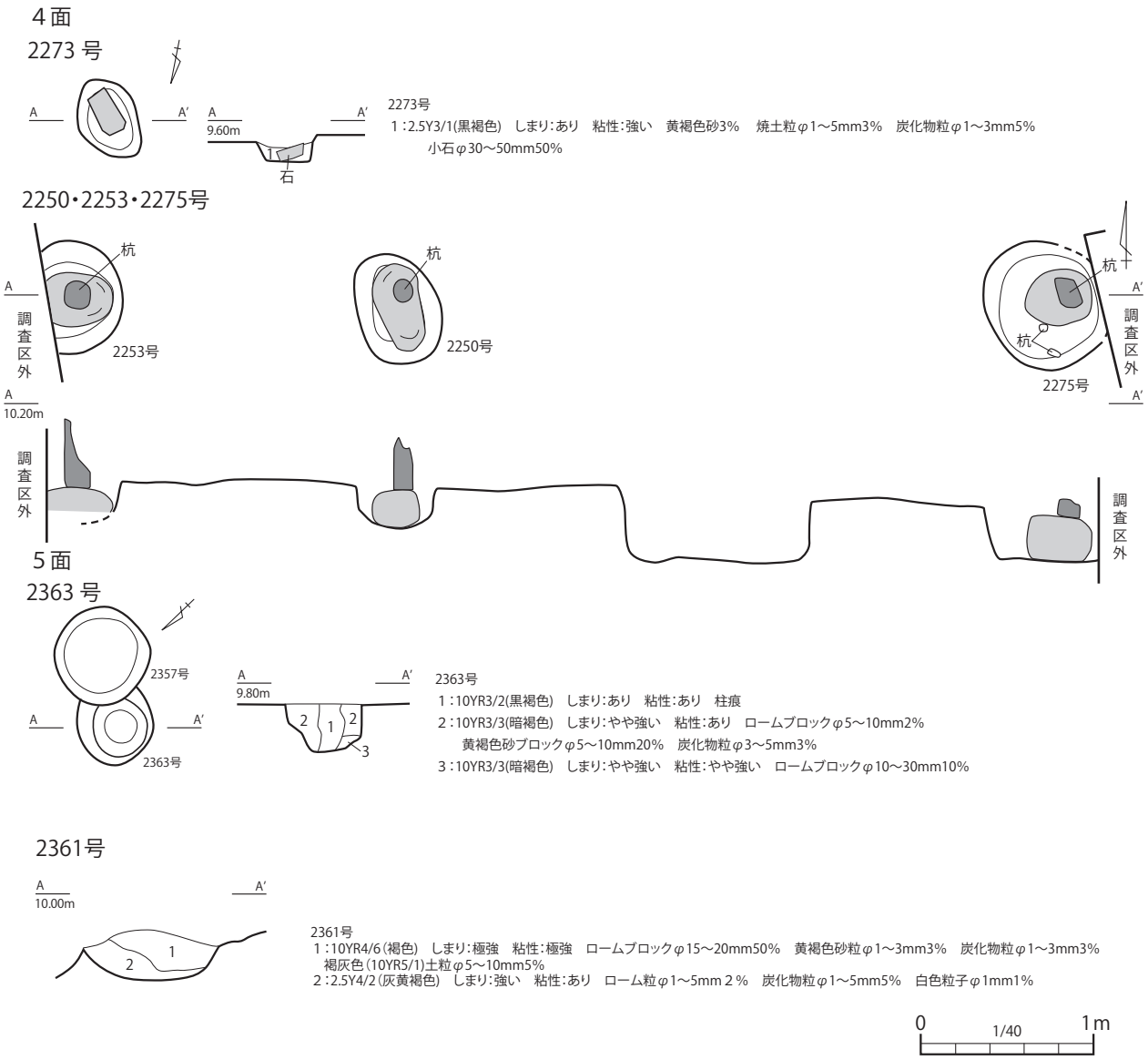
2174 号・2224 号
1：2.5Y5/4(黄灰色)　しまり：あり　粘性：極強　黄色砂 5%
黄灰色 (2.5Y7/2) 砂ブロックφ15mm3%　焼土粒φ1 〜 2mm1%
炭化物粒φ1 〜 5mm5%　　砂質粘質土層
2：2.5Y4/6(オリーブ灰色)　しまり：あり　粘性：強い
ローム粒φ3 〜 5mm10%(斑紋状)　焼土粒φ1 〜 5mm5%
炭化物粒φ3 〜 10mm7%
3：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：極強　粘性：極強　ローム粒φ3 〜 5mm(斑紋状)
焼土粒φ1 〜 5mm3%(斑紋状)
4：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：強い　粘性：極強　黄色砂φ1 〜 5mm3%
灰オリーブ色粘土粒φ5 〜 10mm5%　炭化物粒φ1 〜 5mm7%　赤錆 5%
5：5YR4/6(赤褐色)　しまり：強い　粘性：弱い　ローム粒φ1 〜 5mm5%
褐灰色粘土粒φ5mm5%　焼土粒φ1 〜 10mm20%
炭化物粒φ1 〜 5mm5%
6：N4/0(灰色)　しまり：あり　粘性：あり　灰色砂 7%　焼土粒φ1 〜 2mm1%
炭化物粒φ3 〜 10mm10%　砂質土　マトリクスは灰色粘土



1：7.5YR4/3(褐色)　しまり：強い　粘性：強い　黄色砂粒φ1〜5mm10%　焼土粒１〜５mm10%　焼土ブロックφ15〜20mm3%
炭化物粒φ1〜10mm7%　灰白色粘土粒φ1〜5mm3%　赤錆5%
2：7.5YR4/6(褐色)　しまり：強い　粘性：弱い　黄色砂5%　焼土粒φ1〜5mm20%　炭化物粒φ1〜5mm3%
3：2.5Y4/1(黄灰色)　しまり：強い　粘性：強い　黄色砂粒φ5〜10mm5%　炭化物粒φ3〜5mm5%　赤錆3%



第 1-254 図　G-3 区 3 面の遺構（1/40）



第 1-255 図　G-3 区４・5 面の遺構（1/40）

【埋桶】

909・917 号（第 1-253 図、第 3-16 表）

G-3 区北西に位置する埋桶である。909 号は径約 60cm、深さ約 30cm を測る。底板の一部のみ残存しており、桶の直径は約 40cm とみられる。桶内部には褐色土層・焼土層・炭化物層が互層状に堆積している。桶底板の下には褐灰色粘土が敷き詰められていた。917 号は径約 70cm、深さ 30cm を測る。底板はなく、炭化した側板のみ残存していた。桶の直径は約 60cm とみられる。桶の内部には褐灰色土層・焼土層・砂層が互層状に堆積していた。909 号は 21 点・2294.6g、917 号は 12 点・153.4g といずれの埋桶も遺物は極わずかしか出土していないが、時期は 18 世紀第 4 四半期以降と見られる。935 号同様に寛政 6 年（1794）の火災により火を受けたものと考えられる。

【土坑】

935 号（第 1-248・1-253 図、第 3-16 表）

G-3 区南東に位置する方形の土坑で、大半は調査区外となる。調査した範囲は 180 × 150cm で、深さは約 20cm だが、調査区南壁では深さ 40cm 程度と認められた（第 1-253 図）。底面は砂層の盛土内となっており凹凸が見られる。壁は、調査範囲ではほぼ垂直に立ち上がる。下層に締まりが弱く木片を多く含む黒褐色土、上層に締まりが極強い焼土層が堆積し、上面には薄く褐灰色土が堆積する。元は芥溜めとして利用されていた遺構が、火災処理に伴い焼土の廃棄に利用されたものと考えられる。遺物の出土量は 311 点・20,127.8g と多く、肥前産の磁器皿等が出土している（第 2-73 図）。時期は 18 世紀後葉と考えられ、おそらく寛政 6 年（1794）の火災に伴うものであろう。

C　3 面

3 面以下は盛土が平坦に堆積する部分が少なく、面の検出に際し困難を極めた。北側には、G-1 区 3 面の遺構上面に落ち込んでいた 2 面下盛土同様の土層が部分的に確認されている。埋桶、芥溜と考えられる土坑の他には小ピットが点在している。2207 号遺構は掘方を有する礫集中だが、建物を想定できるような遺構は他に存在せず、単発の地固めと考えられる。各遺構の出土遺物は 18 世紀第 3 四半期から 17 世紀第 4 四半期と開きがあるが、G-1 区 3 面と同時期と考え、17 世紀第 4 四半期が中心と判断した。明暦 2 年（1656）以前の拝領者である吉田家から元禄 4 年（1691）の拝領者である伴家に入れ替わる時期の生活面であろう。

【埋桶】

2174 号・2191 号・1760 号（第 1-249・254 図、第 3-16 表）

G-3 区中央で東西方向に約 2 m間隔で並ぶ埋桶である。2174 号は径約 70cm、深さ 35cm を測る。側板のみが残存しており、桶の直径は約 50cm である。桶内部には黄灰色粘質土（1 ～ 4 層）が堆積し、底面近くに焼土がブロック状に堆積していた（5 層）。また、桶外側には灰色粘土が堆積しており、桶の裏込に粘土を用いたものと考えられる。時期は 17 世紀後葉である。2191 号は径約 70cm、深さ 35cm を測る。底板が残存し、側板も底面近くにわずかに残っていた。桶の直径は約 45cm とみられる。桶内部にはしまり、粘性とも強い黄灰色土（1 層）が堆積し、底面近くには焼土が多く含まれていた（2 層）。底板の下には黄色砂が堆積する。また、桶の外側には締まりが極強い砂質の黄灰色土が堆積していた。1760 号は長径 70cm、短径 60cm の楕円形を呈し、深さは 43cm を測る。底板のみ残存しており、桶の直径は約 50cm である。桶内部にはオリーブ灰色土が堆積し、上面に薄く堆積する砂質の黄灰色土が堆積するが、この上面の土層は G-1 区 3 面の 1900 号上面に堆積していた 2 面下盛土と同じ土層と考えられる。2174 号は 11 点・166.6g、2191 号は 9 点・768.5g、1760 号からは 20 点・1397g が出土しているが、いずれも少量で遺存状態は不良である。等間隔に並ぶ点、下位の 4 面でほぼ同じ位置と軸方向で礎石列が並ぶ点から建物を構成する遺構の可能性も考えたが、柱等の存在を示す痕跡は認められなかった。

1500 号（第 1-254 図、第 3-16 表）

G-3 区北側に位置する埋桶で、径 45cm、深さ 20cm を測る。側板の一部のみ残存しており、桶の直径は掘方とほぼ同じ 45cm とみられる。桶内部には砂質の褐灰色土が堆積しており、おそらく 2 面下盛土が内部に落ち込んだものと考えられる。出土遺物は瓦 7 点・800g のみで、時期は不明である。

2215 号（第 1-254 図、第 3-16 表）

G-3 区南東に位置する埋桶で、径約 70cm、深さ 30cm を測る。底板が残存しており、桶の直径は約 50cm とみられる。桶内部には炭化物を多く含む暗灰黄色土（1 層）が堆積し、側板の内側には灰色粘土（2 層）が堆積する。1 層中からはかわらけが 3 点が出土した（第 1-254 図写真、第 2-74 図 1100）。桶底板の下には砂質の灰色土、側板外側には粘性が極強い褐色土・黄褐色土が堆積する。出土遺物は 31 点・755.4g と微量だが遺存度は中程度で、上記のかわらけの他に瀬戸・美濃産の陶器香炉・水滴が出土している（第 2-74 図 1098・1099）。時期は 17 世紀第 4 四半期である。

【土坑】

1492 号（第 1-254 図、図版 3-61-7、第 3-16 表）

G-3 区北西に位置する長軸 2.5m、短軸 1.2m の長楕円形の土坑である。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、北壁・東壁はやや外側に開いている。深さは約 60cm である。北東側の壁面に細い杭跡が見られるが、遺構周辺には細い杭跡がランダムに見られることから、これらも遺構に伴う杭跡ではない可能性が高い。覆土は、南壁から底面にかけて灰色粘土（3 層）が堆積した後、木製品や木片を多量に含み、しまり、粘性とも著しく強い黒褐色土（2 層）が堆積する。上面には、3 層と似た灰色粘土が堆積する。出土遺物は 604 点・31,874.1g でやや多く、遺存状態は中程度である。時期は 18 世紀第 3 四半期である。芥溜として利用された土坑であろう。遺構検出面は 3 面だが、出土遺物、遺構上面に明確に 2 面下盛土が認められないことを考えると、2 面段階で機能していた遺構とも考えられる。

D　4面

近世 4 面では、柱材が残る礎石列（2275 号・2250 号・2253 号）が検出された。この礎石列とは別に、同じく柱材が残る礎石 2403 が確認されており、建物が存在した可能性もある。他には底石を伴うピット（2273 号）や小ピットが点在している。遺物が出土した遺構がほぼなく明確に時期を判断できる材料は少ないが、下位の 5 面が 17 世紀中葉の近世初期段階、上位の 3 面が 17 世紀第 4 四半期であることから、17 世紀第 3 四半期を中心とする時期と推定される。明暦 2 年（1656）以前の拝領者である吉田家に属する面と考えられよう。

【礎石列】

2250・2253・2275 号（第 1-255 図、第 3-16 表）

G-3 区北側で東西方向に並ぶ礎石列である。礎石の上には角柱状の木柱が残っていたが、いずれも腐朽が著しく進んでおり、樹種同定用のサンプルは採取できなかった。2275 号は（推定）長軸 80cm ×短軸 70cm の円形の掘方内に 40 × 30cm の丸石が置かれ、その上に 10cm 角の木柱が据えられる。東側約 1/3 が調査区外となる。2250 号は長軸 65cm ×短軸 50cm の円形の掘方内に 50 × 30cm の凝灰岩製の丸石が置かれ、その上に 10cm 角の木柱が据えられる。2253 号は長軸 70cm × 短軸 60cm の円形の掘方内に 45 × 30cm の安山岩製の丸石が置かれ、その上に 10cm 角の木柱が据えられる。西側約 1/3 が調査区外となる。いずれも木柱周囲に柱間は、木柱の中心からの距離で 2275 号 -2250 号が 385cm（田舎間 2 間）、2250 号 -2253 号が 190cm（田舎間 1 間）と一定しないが、2275 号 -2250 号間にあった礎石が、その位置にある撹乱により失われた可能性が高い。2250・2253 号の掘方は、締まりが強く内容物が少ない褐灰土を主体とし、2275 号は掘方に粘性が極強く浅黄色粘土を多く含む黄灰色土が堆積していた。2253 号は G-3 区西壁でも断面が観察しており、これによれば木柱の周りには灰色・灰黄色粘土を覆う含む黄灰色粘質土が確認されており、木柱の周りは

粘土で固められていた可能性もある。なお、この柱列以外に建物を構成するような礎石・柱は検出されなかった。G-3 区調南端中央にはこれらと同様に礎石の上に柱が残る 2403 号が存在する（第 1-16 図）が、2275 号 -2250 号 -2253 号の柱列とは並ばず、調査区外に位置する別の建物を構成するものと考えられる。出土遺物は 2275 号が 5 点・463.5g、2250 号が 38 点・238.5g、2253 号が 3 点・557.0g といずれも微量で、時期は不明である。

Ｅ　5 面

5 面は G-3 区の基底面である。自然体積層である黄灰色粘質土の上に、部分的に灰オリーブ色砂が堆積している。北から南にかけて緩やかに傾斜しており、さらに調査区南壁際で一段下がる掘り込みが確認された（2328 号）。北端では、2 面・3 面の区画施設と同方向に走る溝（2361 号）が確認された。他に 2363 号のように柱痕が見られる小ピットが点在しているが、規則的な配列は見られなかった。2328 号・236 1 号からは 17 世紀中葉の遺物が出土しており、土壌分析の結果から 5 面以下の堆積土は全て人為的造成土と判断されることから、近世初期の造成面と考えられる（第Ⅲ章・第Ⅷ章第 1 節参照）。

【落ち込み】

2328 号（第 1-16・17・251 図、第 3-16 表）

G-3 区南端で検出された落ち込みである。調査時には段切り状の遺構とも考えたが、調査区西壁断面や基本層序確認用トレンチ（第Ⅲ章・第 1-17 図セクション L）では遺構の断面形状がなだらかな傾斜を有することから、自然地形の傾斜である可能性も考え落ち込みとした。調査した範囲では、幅 1m ～ 1.5m、最も深いところで深さ約 25cm である。調査区南西角から南東角に向かって緩やかに下がる。底面は黄灰色粘質土で、基本層序の第Ⅲ章 1-16 図 72 層・1-17 図 2 層）に相当する。内部には木片や貝殻片、炭化物を大量に含む黒褐色粘質土（1-16 図 70 層）が堆積する。出土遺物は 25 点・1,458.5g で、中国景徳鎮窯磁器、瀬戸・美濃産白天目碗等が出土している。

【溝】

2361 号（第 1-251・255 図、第 3-16 表）

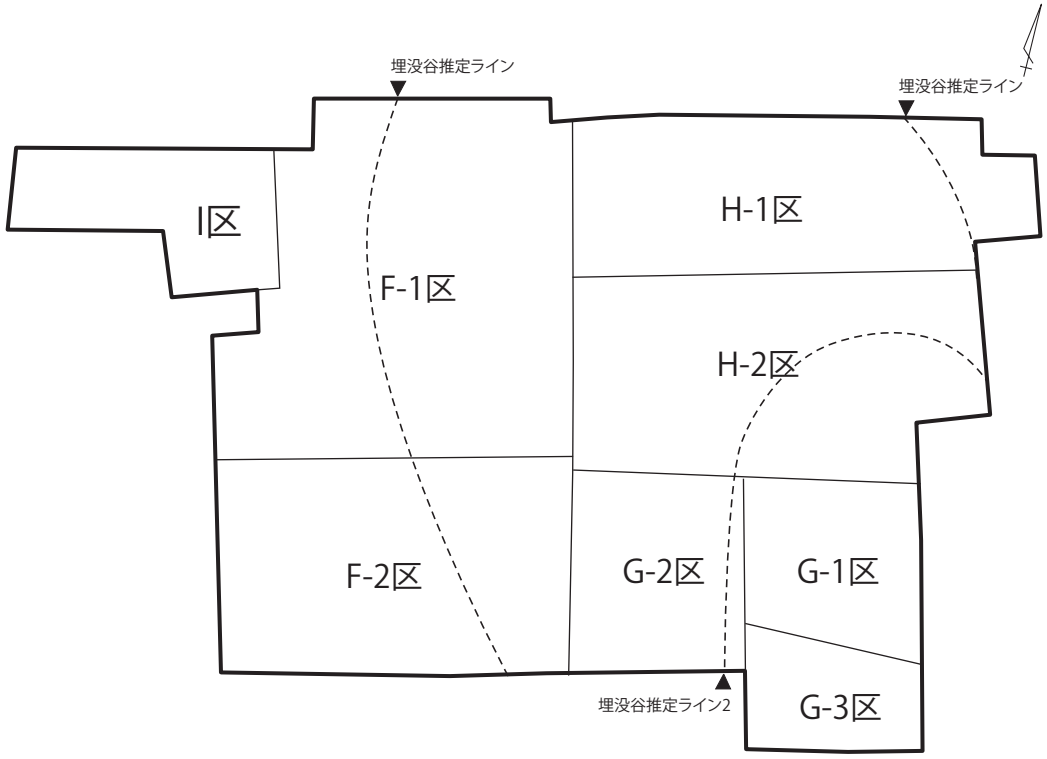
G-3 区北端で検出された溝である。3 面の大型溝 1900 号を調査中に、1900 号南壁の地山と考えていた土層が、低地堆積土確認用のトレンチ（第Ⅲ章・第 1 -17 図セクション L）で断面 U 字状に立ち上がることが判明したため、東西方向に延びる溝状遺構と判断したものである。上面には 3 面の 920 号木組溝が重複しており、その掘方の可能性も考えたが、920 号よりも幅広で側板等の痕跡も認められず、覆土中からは近世以前の遺物がほぼ出土せず中世以前の遺物が出土したため、より古い時代の遺構とした。断面は U 字状だが、壁が砂層や粘質土層となるため崩れて皿状となる部分もある。覆土は上層がロームブロックを主体とし粘性・しまりとも極めて強い褐色土（ 1 層）、下層は内容物が少ない締まり・粘性とも極めて強いにぶい黄褐色土（ 2 層）を主体とする。上層と下層の間は漸移的である。溝の方向は 1900 号や 920 号とほぼ同方向であり、敷地区画が中世段階まで遡る可能性を示す遺構と考えられる。出土遺物は 15 点・1,051.0g と微量であり、遺存状態も不良である。

（合田）

3. 中世（旗本屋敷拝領以前）

今回の調査では、F-1 区や H-1 区、H-2 区の 7 面および 8 面において旗本屋敷拝領以前（16 世紀～ 17 世紀前葉）に帰属する遺構を検出した。F-1 区では自然堆積層上である 7 面のみ検出されたが、H-1 区と H-2 区では自然堆積層上に薄い盛土層が堆積しており、その盛土層上を 7 面とし、自然堆積層上を 8 面として調査を行っている（第 1-20・256 図）。

F-1 区は自然堆積層上となる 7 面のみで遺構を確認したが、検出した遺構は H-1 区・H-2 区の 7 面・8 面の 2 時期の遺構を含んでいるものと考えられる。一方、H-1 区・H-2 区で検出された 7 面はしまりの強い盛土層の上面にあたり、いずれも 6 面盛土とした旗本屋敷期最初期の盛土層にパックされた状態で検出された。H-1 区 7 面では東端部分においてローム層が露出し、F-1 区 7 面と同様の状況が見られた。H-1 区および H-2 区で 7 面盛土の堆積を確認したのは調査区北東の埋没谷の落ち際から、H-2 区北西の埋没谷部分かけての範囲のみであった。さらに南東側に位置する H-2 区南東部や G-1 区、G-3 区ではさらに埋没谷が深く落ち込んでいるためか、7 面盛土層や旗本屋敷拝領以前の遺構は確認できていない。H-1 区・H-2 区の 8 面は埋没谷内に堆積した黒褐色土層上にあたるが、遺構が確認されたのは H-1 区と H-2 区北半に限られる。F-1 区 7 面と H-1 区・H-2 区 8 面を合わせた遺構確認面における自然堆積層の状況を概観すると、F-1 区と H-1 区東端において埋没谷の落ち際部分が見られ、H-1 区の大半と H-2 区北半は埋没谷内部に形成された南に向かい緩やかに傾斜する平坦面となっている。H-2 区南半は急な斜面となっており、さらに深く落ち込んでいる。さらに標高が低い G-1 ～ 3 区では溜池に接していたものと想定され、確認した自然堆積層も水際に堆積した黒色粘質土（泥炭層）となる。ここでは中世段階の遺構や遺物は見られず、埋没谷内に堆積する盛土層からは近世の遺物が出土していることから、旗本屋敷拝領以前には埋没しきっておらず、旗本屋敷の拝領に伴い埋め立て



第 1-256 図　調査区割図

盛土が行われ完全に埋没した可能性が高い。

7 面と 8 面の遺構の分布を見ると、旗本屋敷期から現代まで受け継がれた土地区画とは異なる遺構の分布となる。旗本屋敷期から現代までは絵図・地図史料と同様の屋敷の境界を区画する石垣（H-2 区 790 号、H-2 区 3390 号）や溝（H-2 区 4343 号など）があり、近代面、および 1 面～ 6 面までは区画を超えて形成される遺構は見られなかった。しかし、7 面段階になると同じ位置に土地の境界を区画する溝などの施設が見られなくなり、遺構の分布からも同様の境界の存在を確認することが出来なかった。このことから出土遺物の年代と合わせて、旗本屋敷拝領以前に形成された遺構群であると判断した。

7 面および 8 面から検出された遺構には、段切り、掘立柱建物跡、竪穴状遺構、区画溝、井戸、方形土坑、焼土跡、墓、土坑、ピットがある。

1）F-1 区

A　7 面

F-1 区では 6 面を形成する旗本屋敷拝領期最初期の盛土層を掘削したところ、自然堆積層上で遺構を確認し、7 面として調査を行った。 F-1 区西側では東京層第一砂層に含まれる砂層が、北東部では砂層上に堆積するローム層が露出していた。F-1 区南東部は埋没谷の落ち際にあたり、埋没谷の埋土である黒褐色土層が露出していた。7 面は I 区に近い F-1 区北西隅がもっとも標高が高く（12.04m）、南東隅がもっとも標高が低くなっている（10.64m）が、北西隅では段切り（1338 号）が行われており、標高の高い部分は一段高くなる部分にあたる。段切りの東側は埋没谷の落ち際にあたり、ローム層と黒褐色土層が削平され平坦面が形成されている。遺構は主にこの段切りにより形成された平坦部に集中して分布しており、埋没谷内の黒褐色土層上では散漫に分布する。

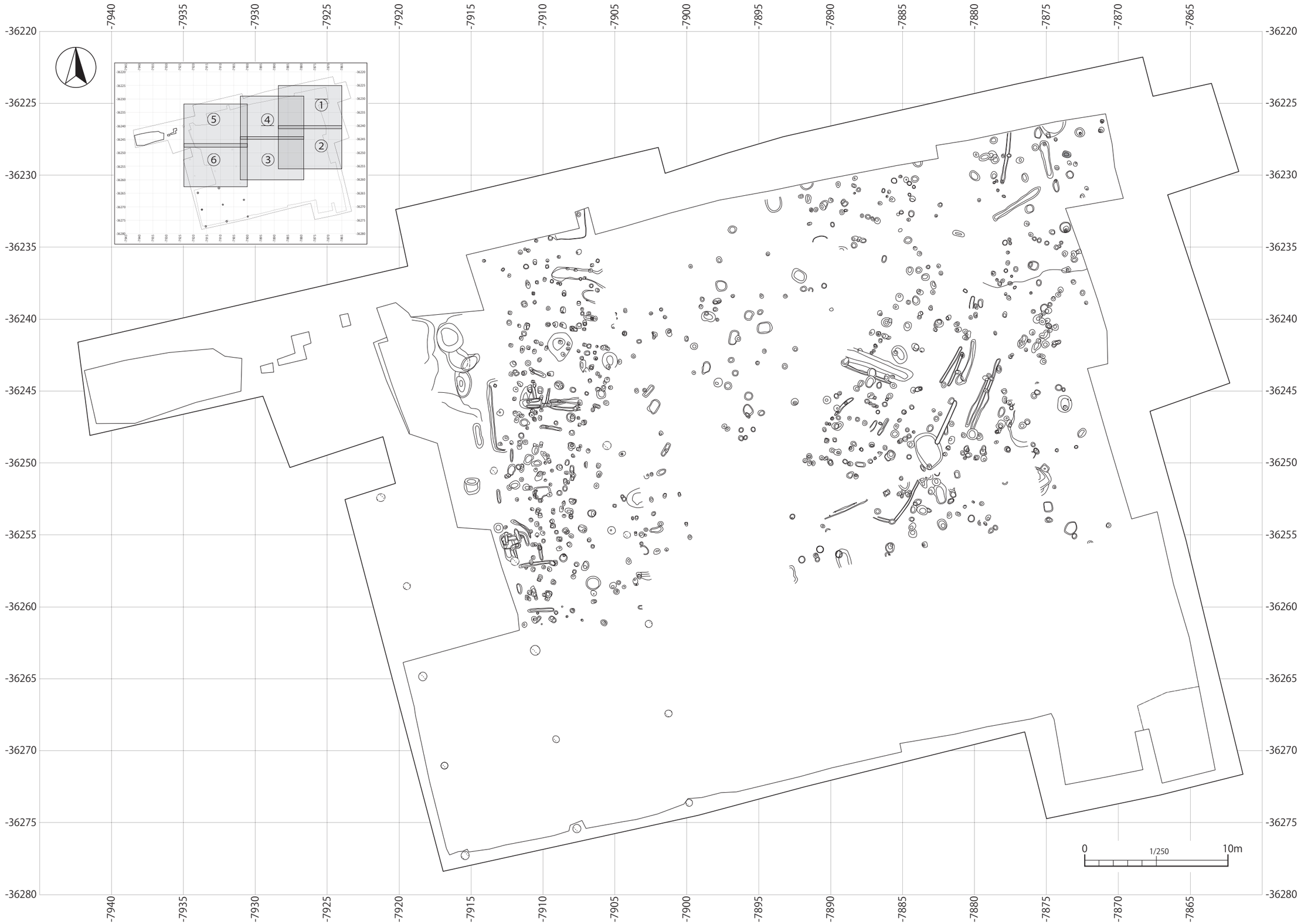
検出された遺構は、段切り 1 基、掘立柱建物跡 1 棟、溝 14 条、土坑 37 基、柱穴を含むピット 278 基である。

【段切り】

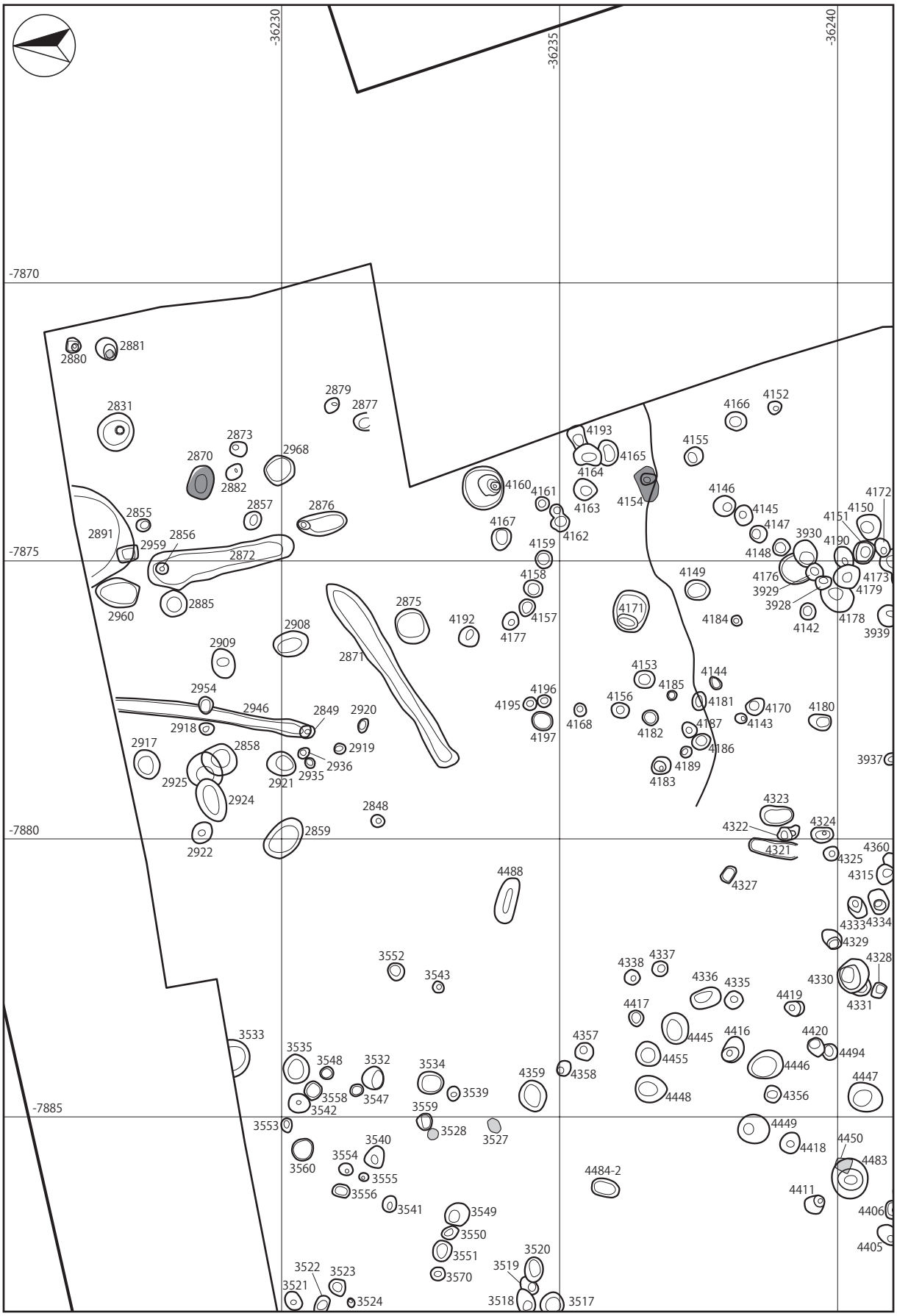
1338 号（第 1-270 図、図版 3-50-2、第 3-16 表）

1338 号は F-1 区北西側の砂層の標高が高くなる位置で検出されており、段切りの一部と考えられる遺構である。地山砂層をコ字形に大きく掘り込んでおり、西壁は真っすぐに立ち上がる壁面が見られるが、東側は壁面を確認することができなかったことから、段切りと判断した。また、南北の壁面の広がりについても図示した以上の広がりを確認することはできなかった。1338 号の底面には細い溝が壁周溝のように北西角から南東に向かって壁に沿うように入っている。排水等の目的で段切り部に設けられたものと考えられ、標高の高い北側を始点とし、南へと続いていた。また段切りの底面は壁面に近い部分では平坦であるが、途中から東へと傾斜し始める。1338 号より西側は 40㎝程度の標高差の高台となっており、この高台部分からは土坑 1289 号・1291 号・1292 号・1294 号が検出されているが、東側で見られるような集中するピット群は検出されなかった。

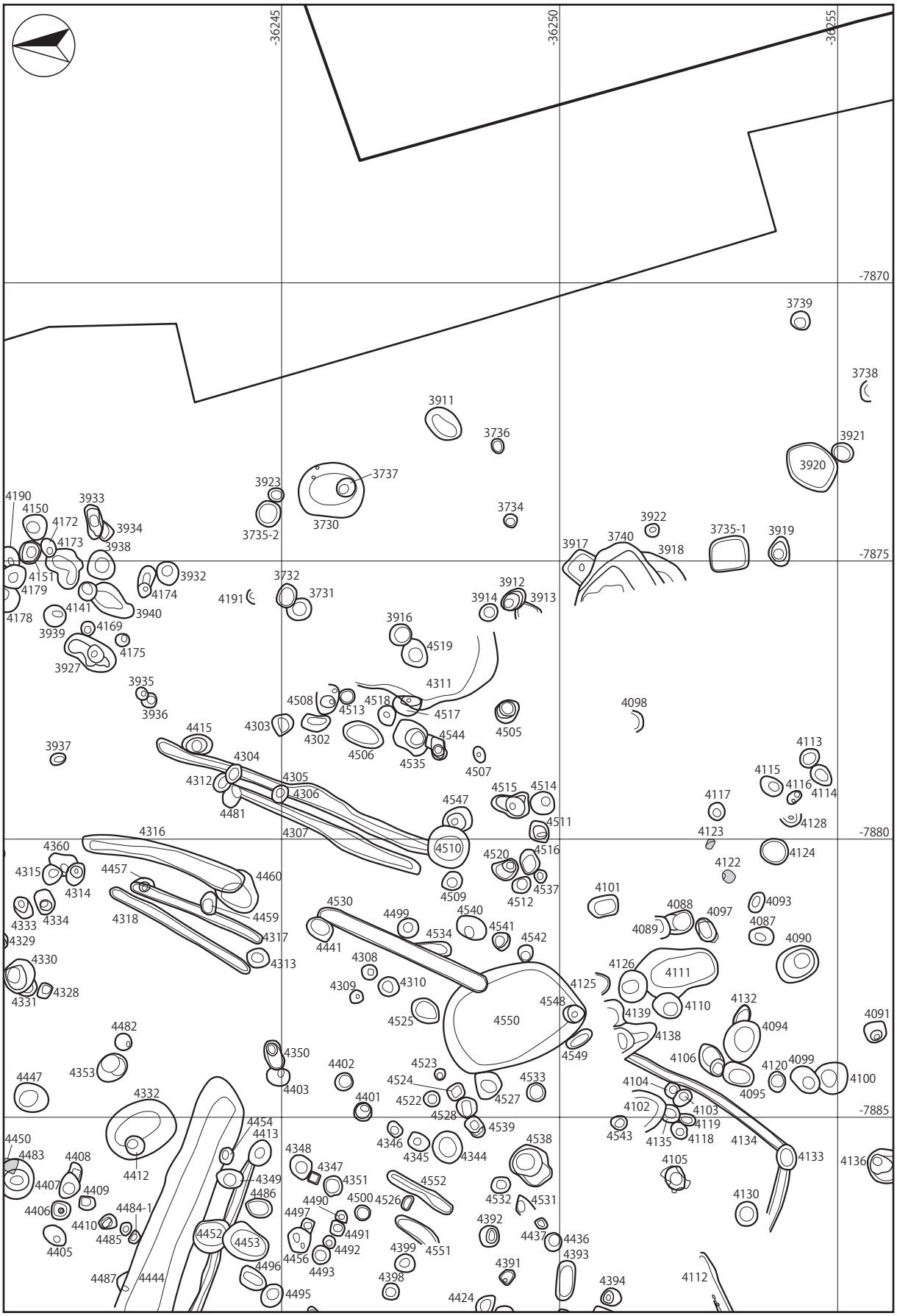
削平された部分に堆積した土層は 6 層に細分される。1 層と 2 層は上部に薄く堆積した層で、1 層と 2 層は黄褐色の砂を含む砂質土層である。3 層と 4 層は段切りから東の平坦面に展開していく土層で、3 層はロームブロックを含む黒褐色土層、4 層は黄褐色砂ブロックを含むにぶい黄褐色土層であり、



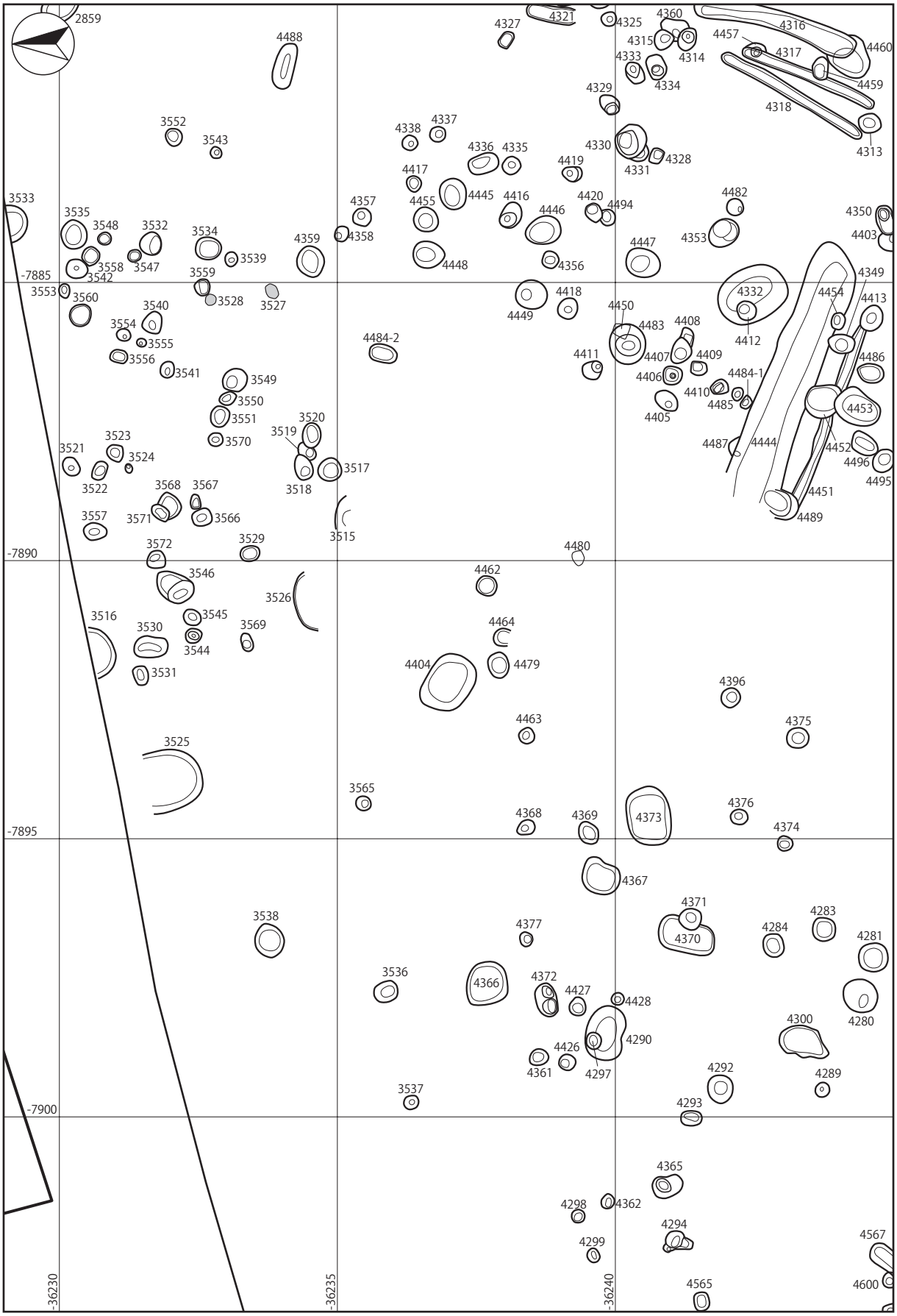
第 1-257 図　7 面全体図（1 /250）



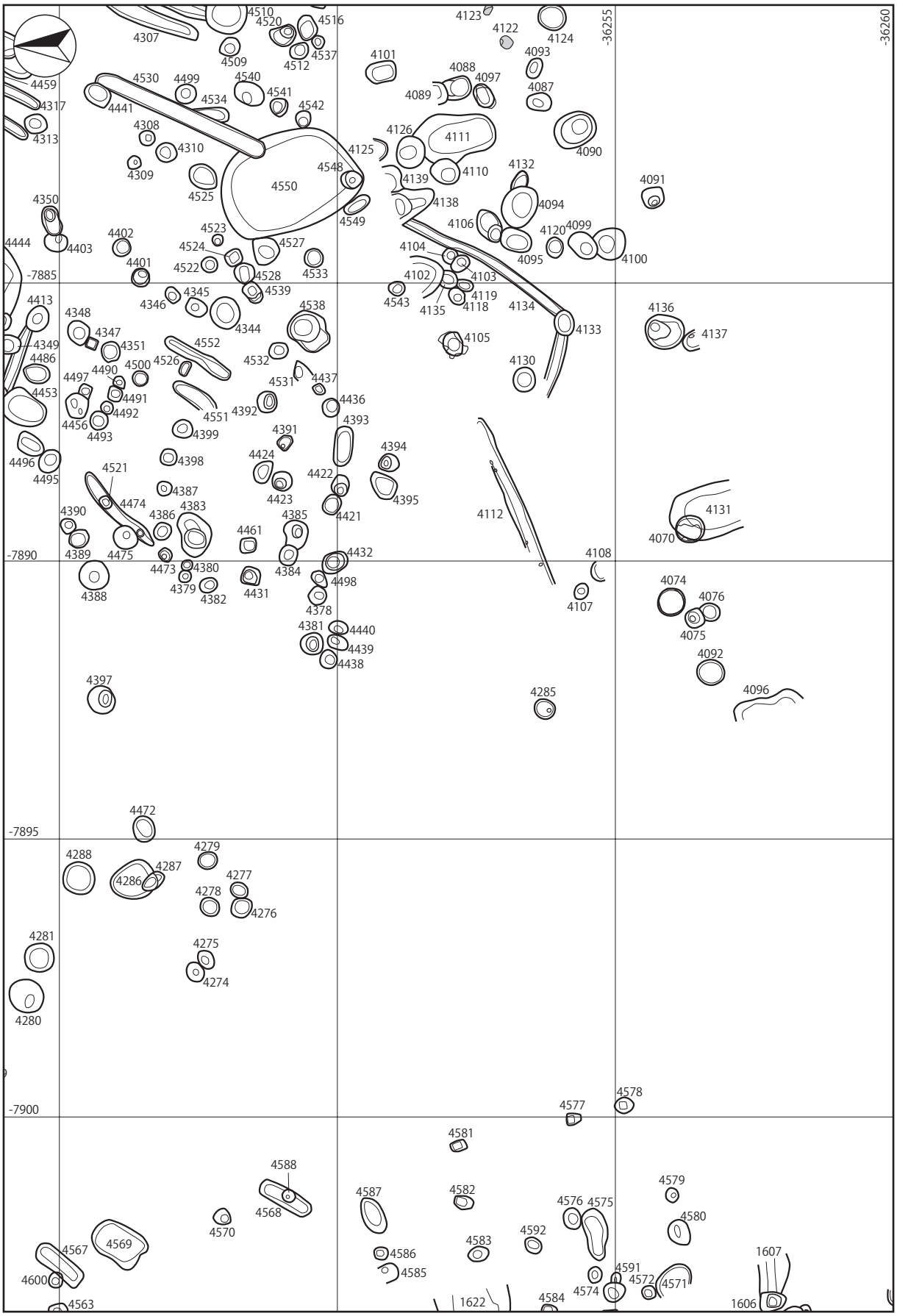
第 1-258 図　7 面割図①（1 /100）



第 1-259 図　7 面割図②（1 /100）



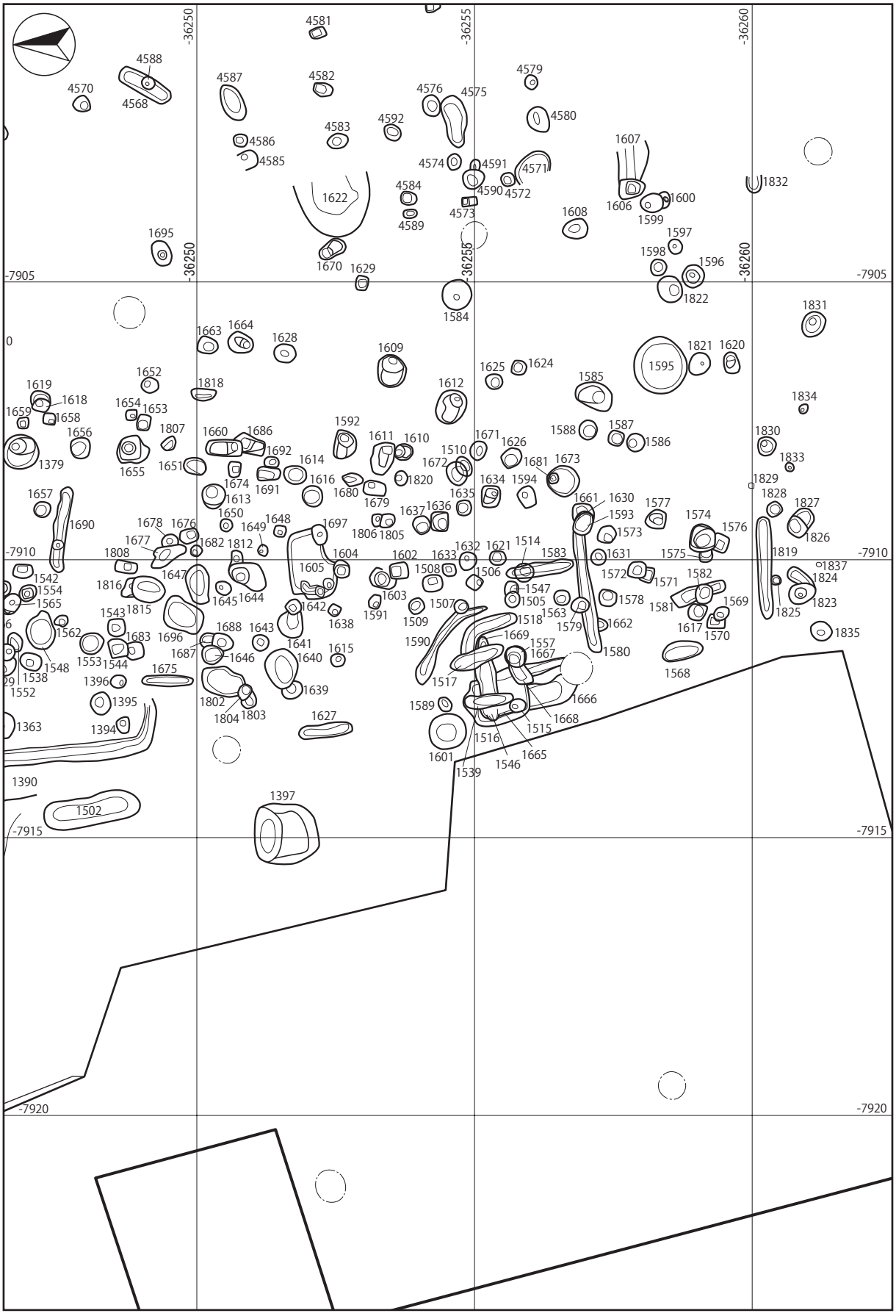
第 1-260 図　7 面割図③（1 /100）



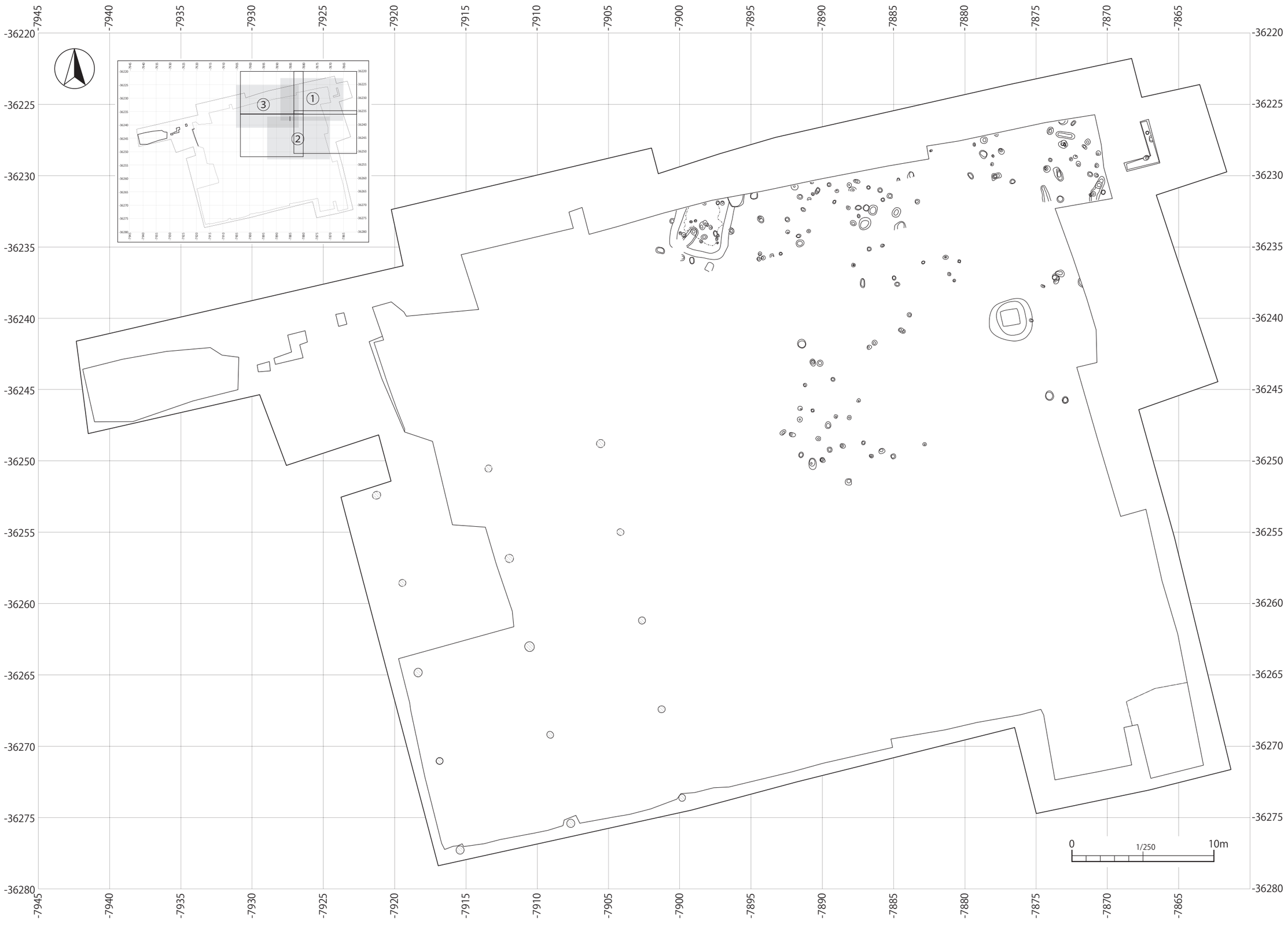
第 1-261 図　7 面割図④（1/100）



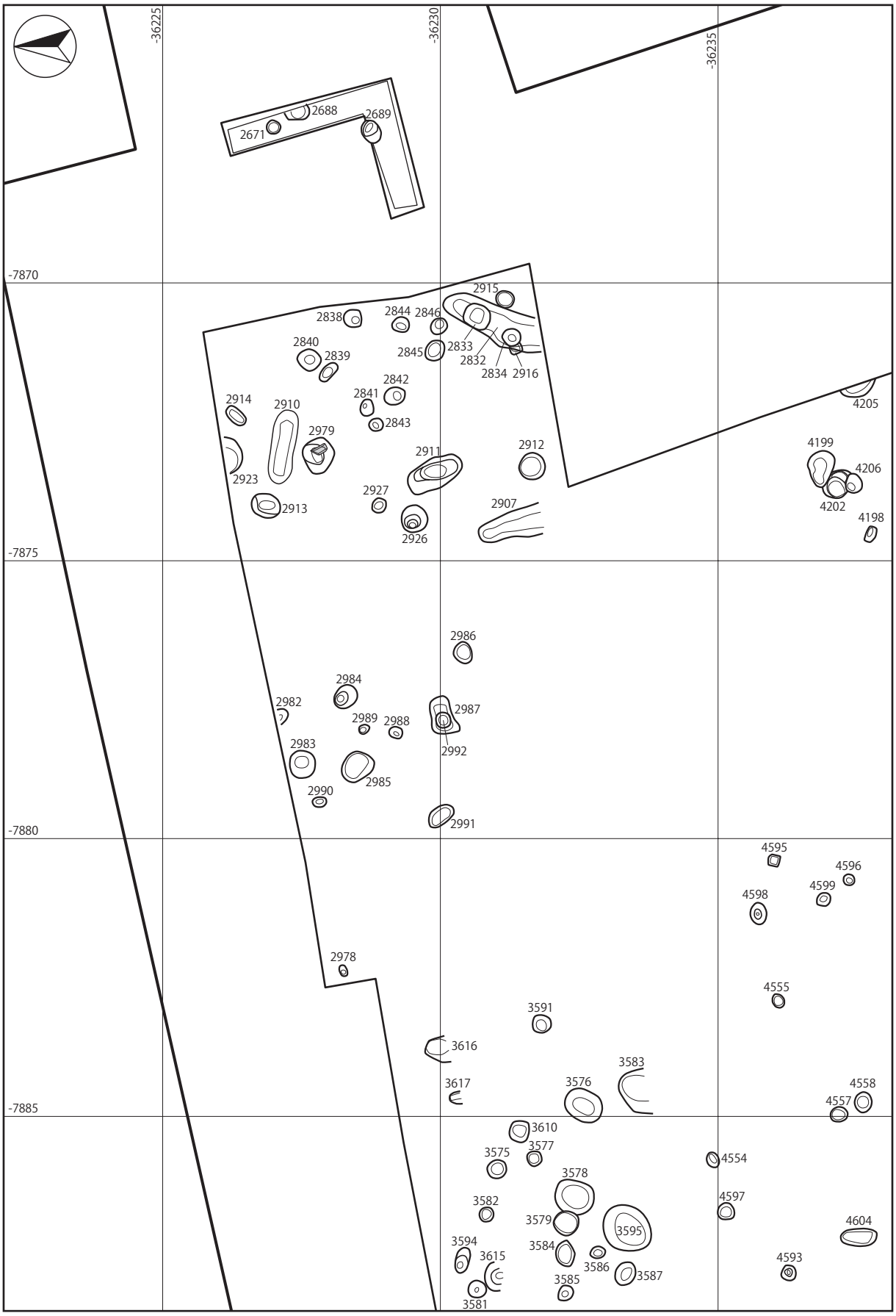
第 1-262 図　7 面割図⑤（1 /100）



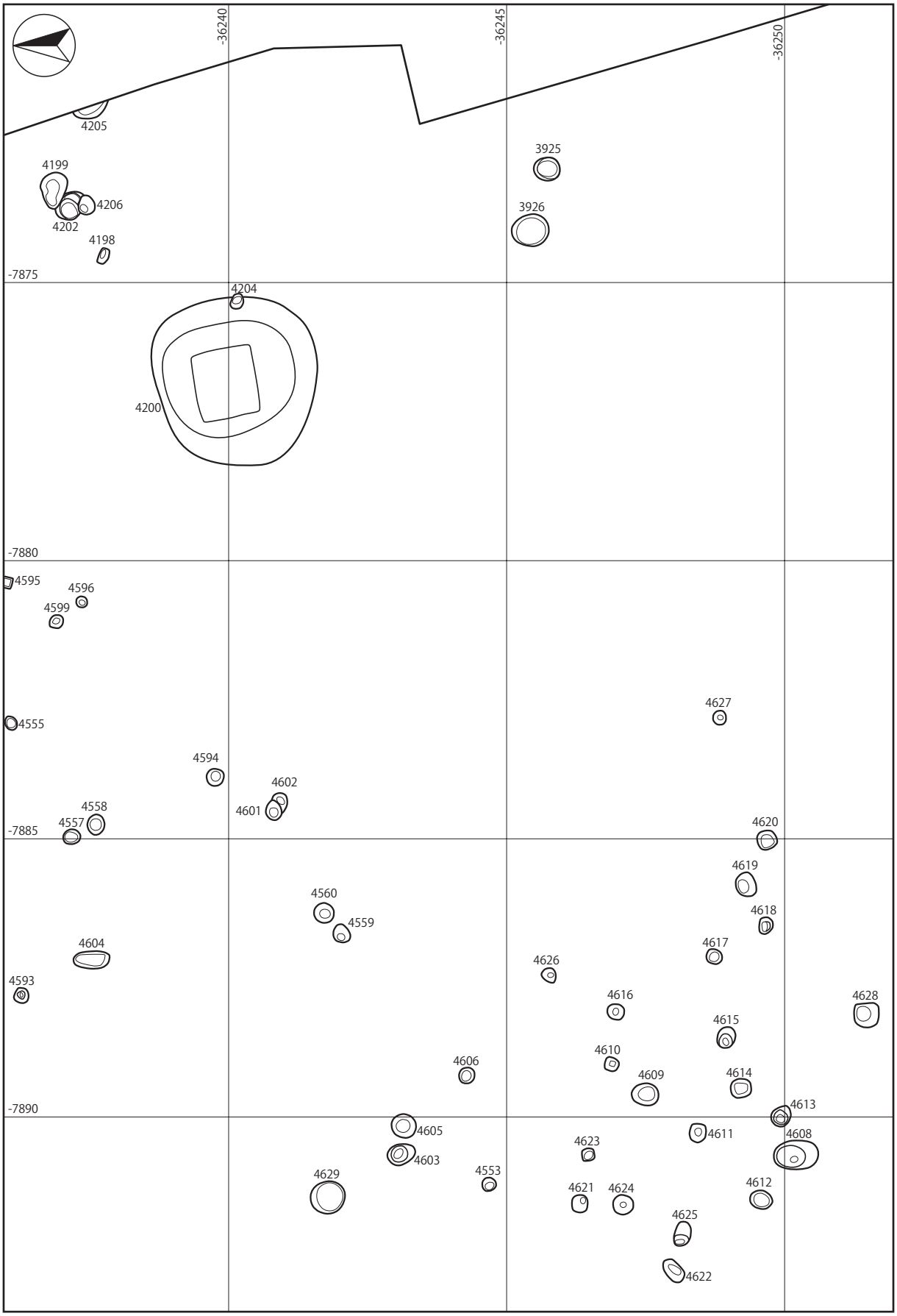
第 1-263 図　7 面割図⑥（1 /100）



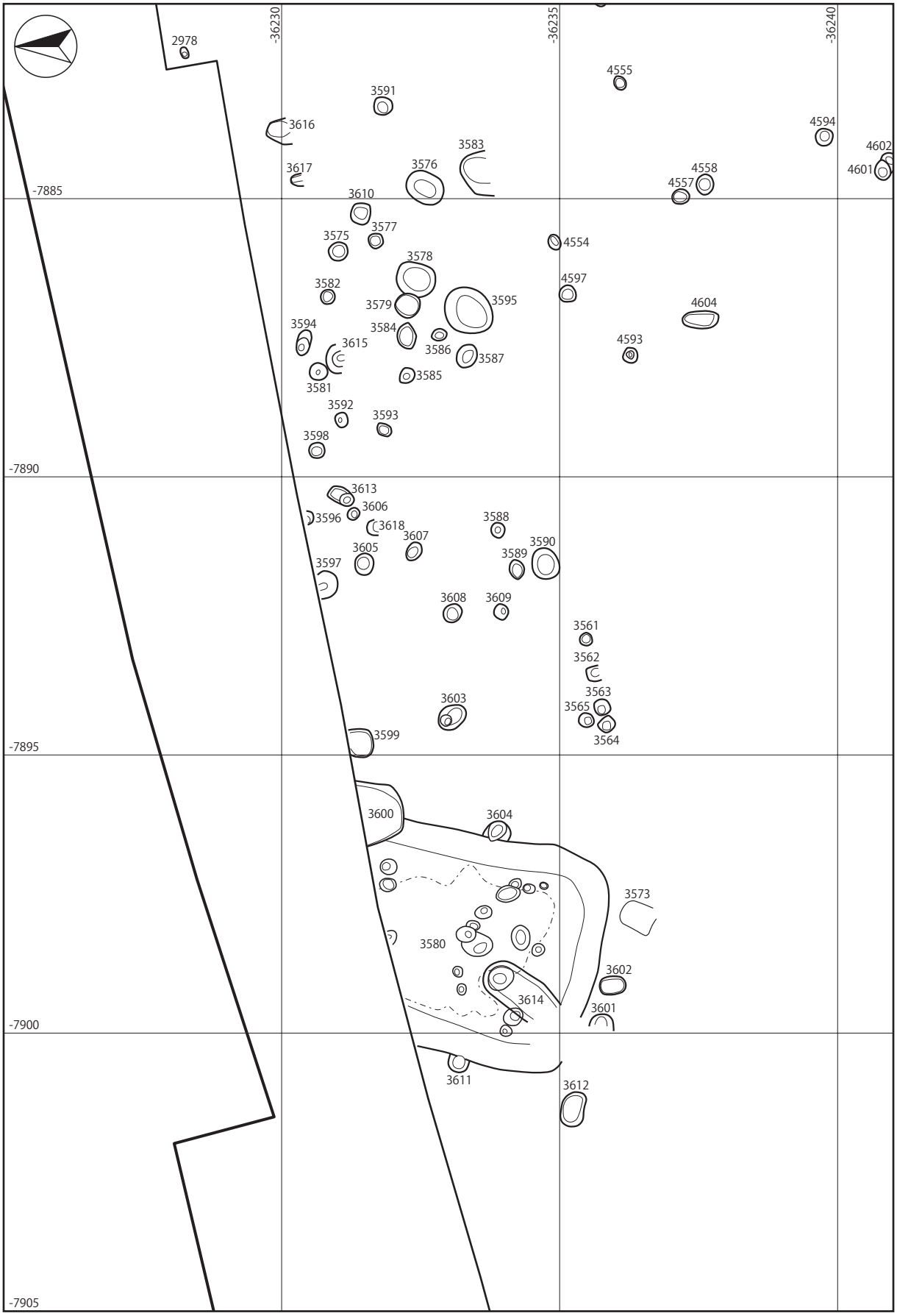
第 1-264 図　8 面全体図（1 /250）



第 1-265 図　８面割図①（１/100）



第 1-266 図　8 面割図②（1 /100）



第 1-267 図　８面割図③（１/100）

F-1 区北壁壁面で確認した 6 面盛土層とは異なる土層である。5 層は黄褐色砂ブロックを含む暗褐色土層で、コの字状に段切りされた空間内部に堆積する。6 層は溝の覆土で、黄褐色砂ブロックを含む黒褐色土層である。出土遺物は全て中世に位置付けられ、遺物の年代から 1338 号は 16 世紀ごろの所産であると考えられる。出土遺物は総点数 19 点、総重量 835.5g である。

【掘立柱建物跡】

建物跡 7（第 1-268・1-269 図、図版 3-50-1・7・8、第 3-16 表）

建物跡 7 は F-1 区北西部の平坦部に位置し、1542 号・1808 号・1644 号・1604 号・1379 号・1655 号・1660 号・1592 号により構成される、平面形が南北方向に長い長方形の掘立柱建物跡である。建物跡の規模は桁行の柱間隔が 1.8m で、桁行 5.5m ×梁行 2.05m となる。

各柱穴の平面形は円形のものと、長方形のものがある。また、柱痕が確認されたものも限られており、柱痕を持つものは 1656 号のみであった。1379 号の覆土は 3 層に分かれており、いずれも灰黄褐色土で 1 層と 3 層にはローム粒、ロームブロックを多く含んでいる。1604 号は土坑 1605 号を切るピットで、覆土は 3 層に分かれており、1 層と 3 層はしまりの強いにぶい黄褐色土層で、1 層は砂や炭化物粒を含んでいる。1 層と 3 層の間には 2 層である黄褐色砂層が見られた。1644 号の覆土は 3 層に分かれるが、1 層から 3 層のいずれの層も暗褐色土層で上層ほど多く黄褐色の砂を含んでいる。1655 号の覆土は 2 層に分かれており、1 層は砂や炭化物粒を含むにぶい黄褐色土層、2 層は砂を多く含む黄褐色土層である。1656 号の覆土は 4 層に分かれており、1 層と 2 層は柱痕部分にあたり、粘性の強い灰黄褐色土層となっている。3 層は黄褐色土層、4 層は黄褐色砂ブロック層である。柱穴覆土中の出土遺物から、掘立柱建物跡（建物跡 7）は 16 世紀末から 17 世紀初頭の所産と考えられる。

【溝】

1374 号・1375 号・1376 号（第 1-270 図、第 3-16 表）

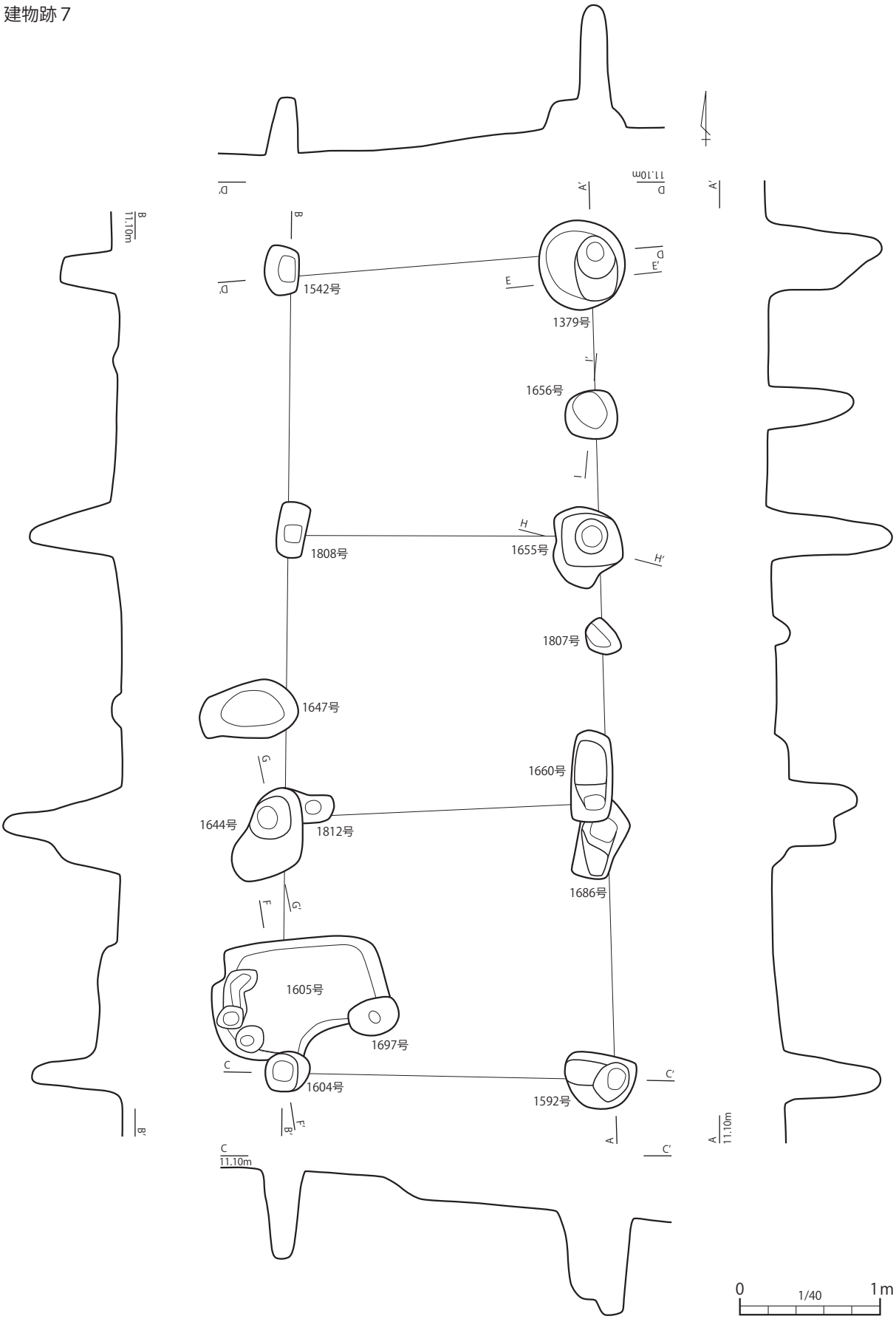
1374 号・1375 号・1376 号は東西方向に走る、互いに重複する細い溝で地山砂層上から検出した。1377 号は 1375 号を切り、ピット（1377 号、1693 号）に切られている。1375 号は 1374 号、ピット（1377 号、1527 号、1551 号）に切られ、1376 号、溝（1564 号）を切る。1376 号は 1375 号、ピット（1378 号、1527 号）に切られる。3 遺構ともに底面が平坦な断面 U 字形の溝で、底面は東へと傾斜している。覆土は炭化物粒や砂を含む暗褐色土を覆土とする。遺物の出土はなく、検出面から旗本屋敷拝領以前の所産とした。

【方形土坑】

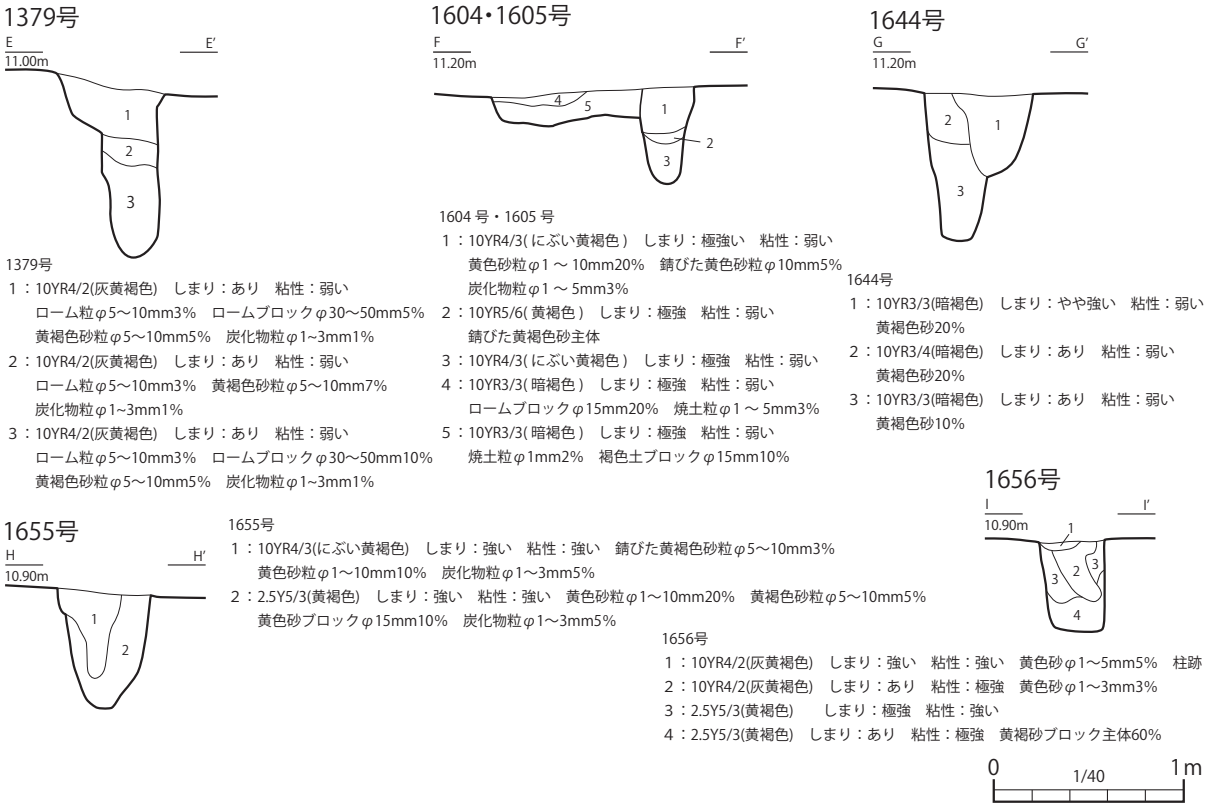
1550 号（第 1-272 図、図版 3-50-6、第 3-16 表）

1550 号は F-1 区北東部に位置する、地山ローム面で検出された深い方形の土坑で、北側調査区外へと伸びている。H-1 区 8 面で確認した竪穴状遺構 3580 号とは異なり、底面で床面となる硬化面やピットを検出することは出来なかったため、方形土坑とした。遺構の規模は残存部分の長軸が 2.54m、短軸が 2.03m で、深さは 0.68m となる。覆土は 2 層に分かれるが、2 層は壁際に壁面の崩落による堆積と考えられるロームブロック層で、覆土の大半は 1 層としたローム粒や焼土粒を含む黒褐色土層となる。このようにほぼ単一の土層で埋没していることから、廃絶時に一気に埋め戻されたものと考えられる。1550 号のような土坑は本遺跡では定形的な土坑と言えるもので、他には H-2 区 4550 号がある。いずれも 0.5 m以上の深さを持っており、旗本屋敷拝領以前に位置づけられる土坑の中では突

建物跡７



第 1-268 図　F-1 区 7 面の遺構（１）（1 /40）



第 1-269 図　F-1 区 7 面の遺構（2）（1/40）

出した深さとなっていることから土坑とは別に方形土坑とした。遺物の出土はなく、検出面から旗本屋敷拝領以前の所産とした。

【土坑】

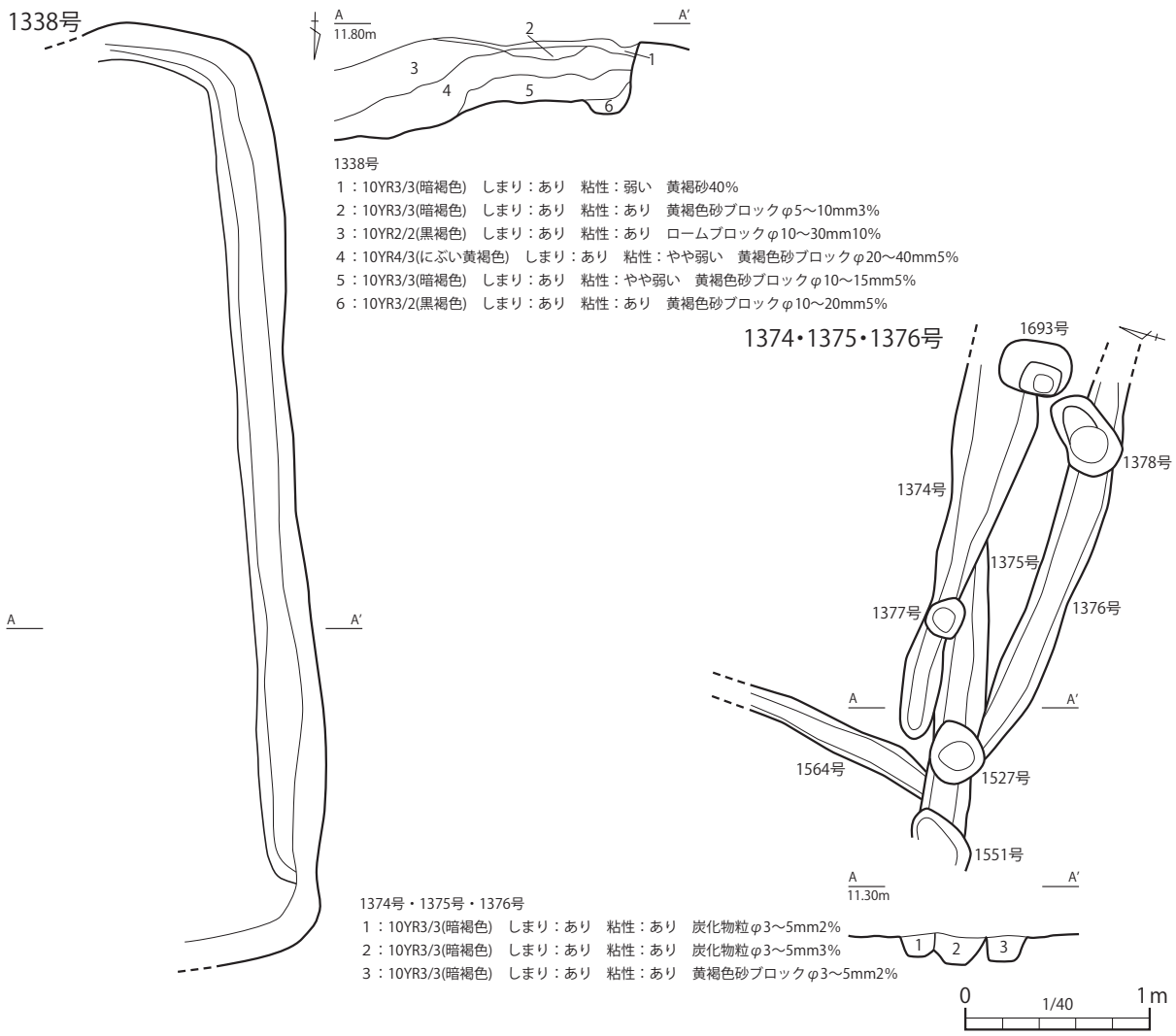
1289 号・1291 号・1293 号・1294 号（第 1-271 図、図版 3-50-4、第 3-16 表）

1289 号・1291 号・1292 号・1294 号は南北に連なる楕円形の土坑で、段切り（1338 号）の西側、段切りされていない一段高い地山砂層上から検出した。1291 号を切る 1289 号は西に向かって深く掘り込まれている。覆土は 5 層に分かれており、1 層と 3 層は明黄褐色の砂を多く含む暗褐色土層、2 層はロームブロックを含む黒褐色土層、底面には砂層である 4 層と 5 層が堆積する。出土遺物は総点数 3 点、総重量 113.6g である

1291 号は 1289 号に切られ、1292 号、1294 号を切っている。底面は平坦で、下部の土層しか確認できなかったものの、覆土は 2 層に分かれており、1 層は黄褐色砂ブロックを含む暗褐色土層、2 層は黄褐色の砂を主体とし、黄褐色砂ブロックを含む砂層となる。出土遺物は総点数 3 点、総重量 100.6g である。

1292 号は 1291 号に切られる楕円形の土坑で、覆土は 3 層に分かれており、1 層は黄褐色砂を多く含むにぶい黄褐色土層、2 層は明黄褐色砂層、底部付近に堆積する 3 層が砂の混じる黒色土層となる。出土遺物は総点数 1 点、総重量 7.4g である。

1291 号に切られる 1294 号は底面の中央部が楕円形に深く掘り込まれている。覆土は単層で、黄褐色砂ブロックを多く含む暗褐色砂質土が堆積する。これらの土坑は形態および覆土が類似している



第 1-270 図　F-1 区 7 面の遺構（3）（1/40）

ことから、土取りなどを目的とした連続した掘り込みであると考えられる。

これらの遺構に伴う遺物は少ないが、出土遺物から 1289 号については 16 世紀末から 17 世紀初頭の所産であると考えられる。1291 号・1292 号・1294 号についても検出面や形状、そして 1289 号に切られていることから同時期と位置付けられる。

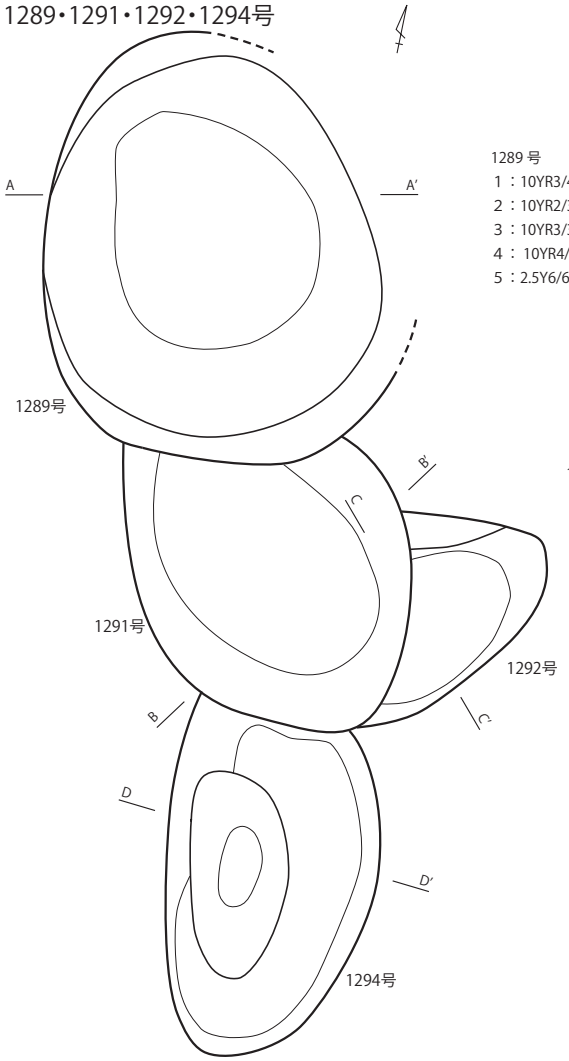
1397 号（第 1-271 図、第 3-16 表）

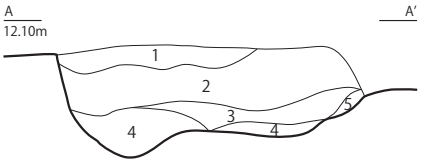
1397 号は隅丸方形の土坑で、北側が一段深く掘り込まれている。覆土は 2 層に分かれており、1 層はにぶい黄褐色土層で、地山砂層の下層に堆積する砂質シルト層由来と考えられる砂質シルトブロックを含んでいる。2 層は北側の 1 段深く掘り込まれた部分に堆積する土層で、黒褐色土ブロックを含むにぶい黄褐色土層である。遺物の出土はなく、検出面から旗本屋敷拝領以前の所産とした。

1516 号・1519 号・1605 号（第 1-272 図、図版 3-50-3、第 3-16 表）

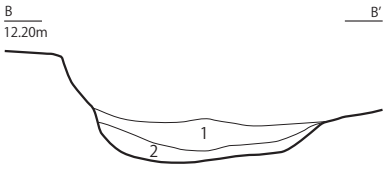
1516 号・1519 号・1605 号はそれぞれ長方形の土坑で、いずれの土坑も多数の溝状の掘り込みと重複する。溝状の小土坑は土坑を切るもの、切られるもの多数あるが、これらの土坑の周辺以外では密集して検出されていないことから、土坑とセットで何らかの目的をもって掘られているものと考えられる。1516 号は方形の土坑で、砂層上で検出された。同じく方形の土坑である 1666 号を切り、

1289・1291・1292・1294号

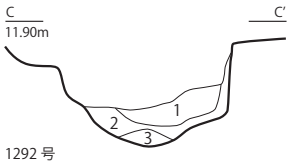




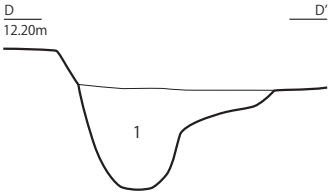
1289 号
1：10YR3/4(暗褐色) しまり：弱い 粘性：弱い 2.5Y7/6 明黄褐色砂 40%
2：10YR2/3(黒褐色) しまり：やや弱い 粘性：やや弱い ロームブロックφ20 ～ 50mm10%
3：10YR3/3(暗褐色) しまり：あり 粘性：弱い 明黄褐色 (2.5Y7/6) 砂 30%
4： 10YR4/6(褐色) しまり：あり 粘性：なし 暗褐色土ブロックφ10 ～ 30mm5% 粒子の粗い砂層
5：2.5Y6/6(明黄褐色) しまり：あり 粘性：なし 砂層



1291号
1：10YR3/3(暗褐色) しまり:あり 粘性:あり 黄褐色砂ブロックφ10～30mm5%
2：2.5Y5/6(黄褐色) しまり:あり 粘性:弱い 黄褐色砂ブロックφ10～30mm10% 黄褐色砂主体

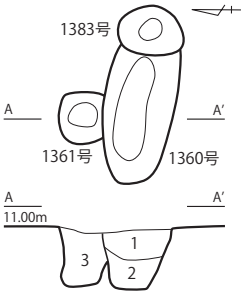


1292 号
1：10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり：やや弱い 粘性：弱い 黄褐砂 30%
2：2.5Y6/6(明黄褐) しまり：やや弱い 粘性：なし にぶい黄褐色土 10% 砂層
3：10YR2/1(黒) しまり：やや弱い 粘性：やや弱い 砂混じり



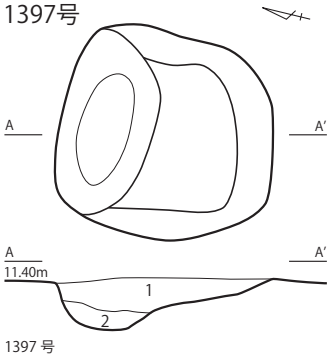
1294 号
1：10YR3/3(暗褐色) しまり：やや弱い 粘性：弱い 黄褐色砂ブロックφ20 ～ 50mm40%

1360・1361・1383号

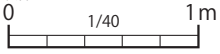


1360 号・1361 号・1383 号
1：10YR4/6(褐色) しまり：極強 粘性：極強 ローム粒φ1 ～ 10mm10%
ロームブロックφ15mm20%
2：10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり：強い 粘性：極強 ローム粒φ1 ～ 5mm5%
ロームブロックφ15mm15%
3：10YR4/4(褐色) しまり：あり 粘性：極強 ローム粒φ1 ～ 5mm15%
ロームブロックφ15mm10%

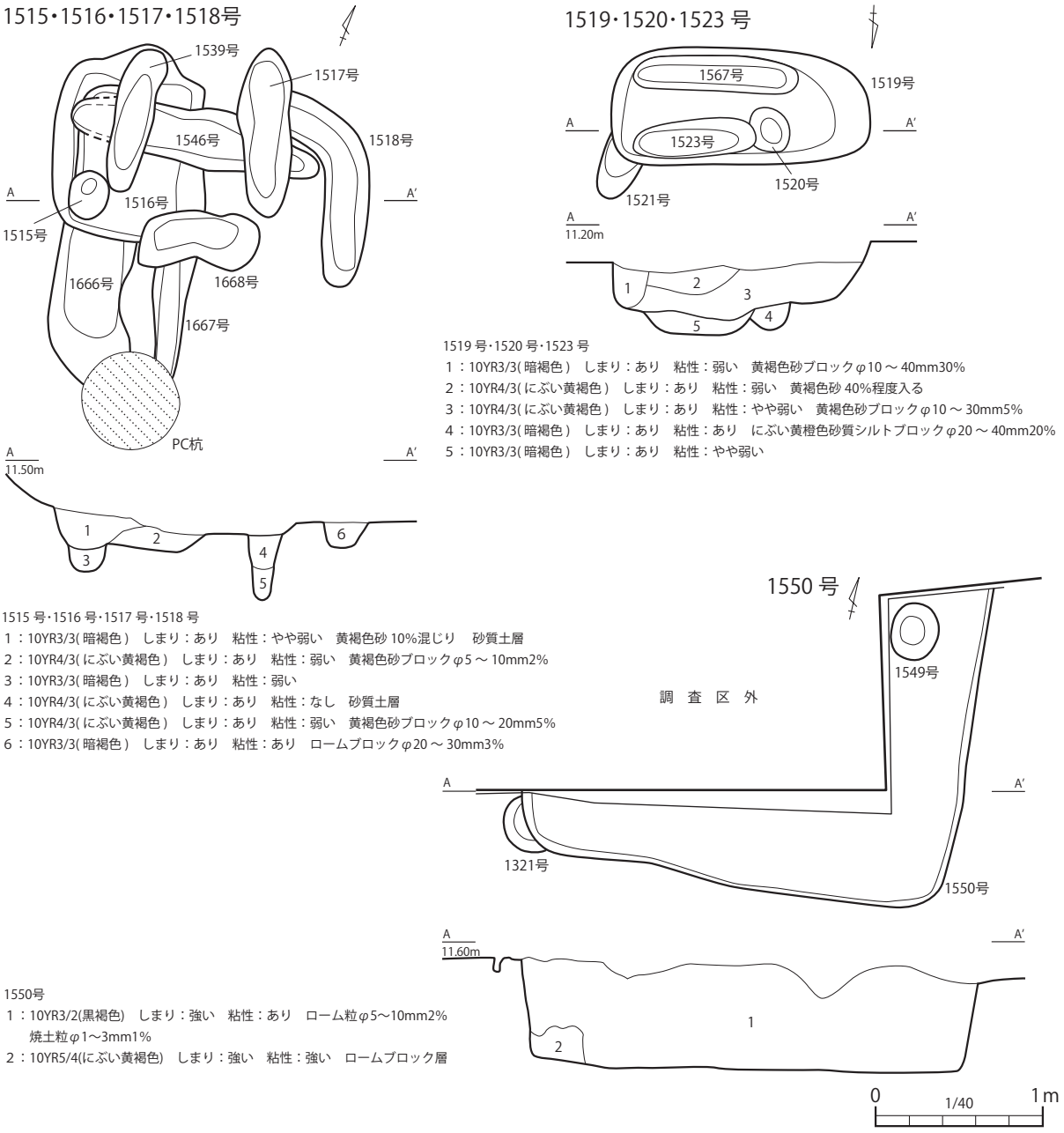
1397号



1397 号
1：10YR5/3(にぶい黄褐色) しまり：やや強い 粘性：なし
砂質シルトブロックφ10 ～ 30mm20% 砂質土層
2：10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり：やや弱い 粘性：なし
10YR3/2 黒褐色土ブロックφ10 ～ 30mm10% 砂層



第 1-271 図 F-1 区 7 面の遺構（4）（1 /40）



1519 号・1520 号・1523 号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　黄褐色砂ブロックφ10 ～ 40mm30%
2：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　黄褐色砂 40%程度入る
3：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　黄褐色砂ブロックφ10 ～ 30mm5%
4：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　にぶい黄橙色砂質シルトブロックφ20 ～ 40mm20%
5：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い

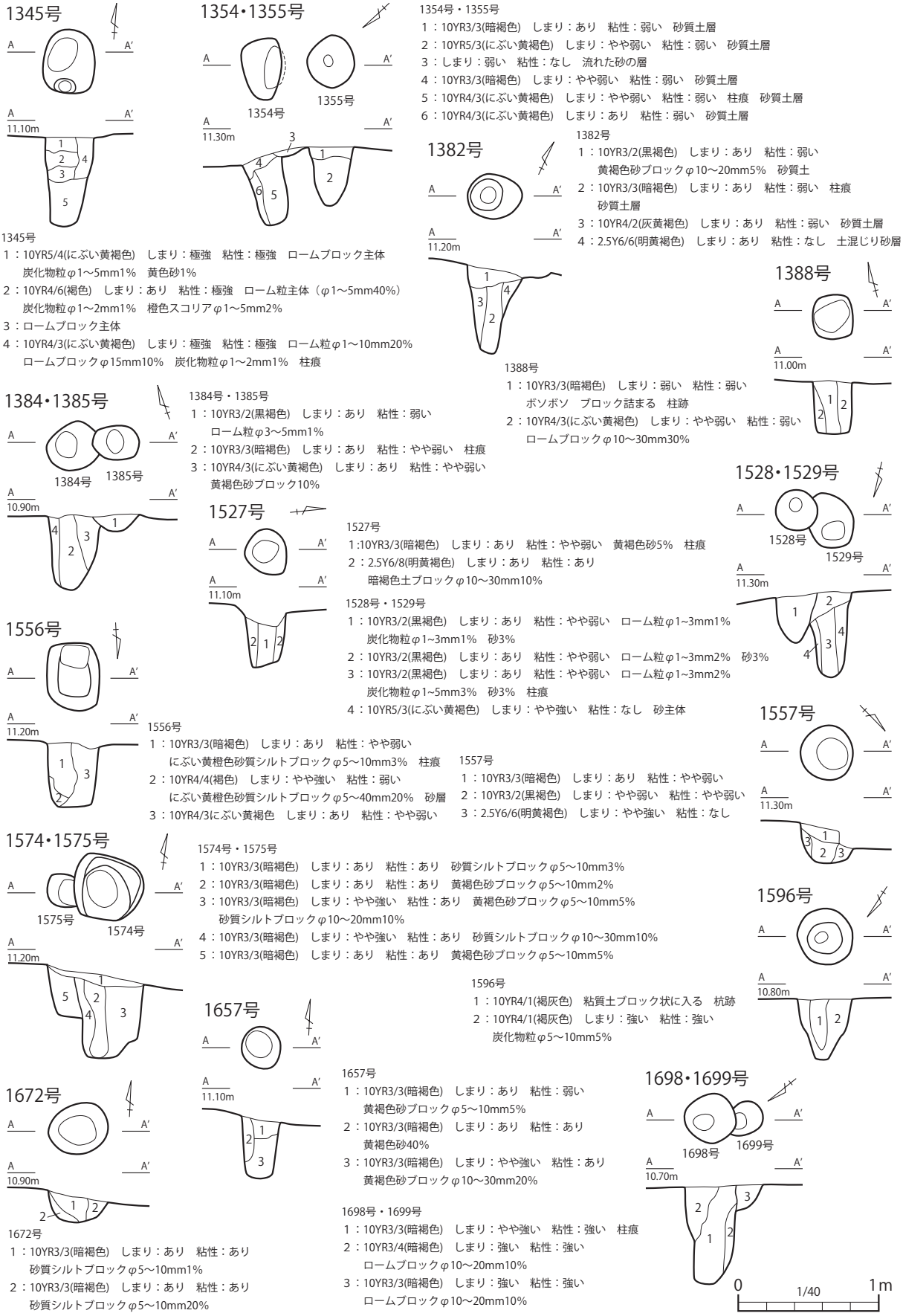
1515 号・1516 号・1517 号・1518 号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　黄褐色砂 10%混じり　砂質土層
2：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　黄褐色砂ブロックφ5 ～ 10mm2%
3：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：弱い
4：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：なし　砂質土層
5：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：弱い　黄褐色砂ブロックφ10 ～ 20mm5%
6：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ20 ～ 30mm3%

1550号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm2%
　焼土粒φ1～3mm1%
2：10YR5/4(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ロームブロック層

第 1-272 図　F-1 区 7 面の遺構（5）（1/40）

溝状の小土坑 1539 号や 1546 号、1668 号に切られている。また、底面からピット 1515 号を検出している。1516 号の底面は平坦で、壁面も垂直に近い形で立ち上がっている。覆土は 2 層に分かれており、1 層は黄褐色砂を含む暗褐色砂質土層、2 層は黄褐色砂ブロックを含むにぶい黄褐色土層である。また、溝状の小土坑 1517 号の覆土は 2 層に分かれており、4 層はにぶい黄褐色砂質土層、5 層が黄褐色砂ブロックを含むにぶい黄褐色土層である。1518 号も溝状の小土坑で、1517 号よりも長く、くの字に折れ曲がる。覆土は単層で、ロームブロックを含む暗褐色土層である。出土遺物は総点数 3 点、総重量 40.7g である。1516 号は出土遺物から 16 世紀の所産である可能性が考えられ、重複する遺構もおおむね同時期のものと考えられる。

1519 号は隅丸長方形の土坑で、砂層上で検出された。1519 号は底面からピット 1520 号、溝状の



第 1-273 図　F-1 区 7 面の遺構（6）（1 /40）

小土坑 1523 号・1567 号を検出、また、1521 号を切っている。1519 号は 1516 号同様、底面は平坦で、壁面は真っ直ぐに立ち上がる。覆土は、1519 号は 3 層に分かれ、1520 号と 1523 号は単層である。1 ～ 3 層は 1519 号覆土で、1 層は黄褐色砂ブロックを含む暗褐色土層、2 層は黄褐色砂を含むにぶい黄褐色土層、3 層は黄褐色砂ブロックを含むにぶい黄褐色土層である。4 層は 1520 号覆土で、にぶい黄褐色の砂質シルトブロックを含む暗褐色土層である。5 層は 1523 号覆土で、暗褐色土層となっている。いずれも遺物の出土はなく、検出面から旗本屋敷拝領以前の所産とした。

1360 号（第 1-271 図、第 3-16 表）

1360 号は 1517 号や 1518 号と同様の溝状の小土坑が単独で検出されたもので、ピット 1361 号を切り、1383 号に切られている。覆土は 3 層に分かれており、1 層と 2 層が 1360 号の覆土で、1 層はローム粒・ロームブロックを含むしまり・粘性の極めて強い褐色土層、2 層はローム粒・ロームブロックを含むしまり、粘性の強いにぶい黄褐色土層となる。3 層はピット 1361 号の覆土で、ローム粒・ロームブロックを含む粘性の極めて強い褐色土層となる。どちらも遺物の出土はなく、検出面から旗本屋敷拝領以前の所産とした。

【ピット】（第 1-273 図、第 3-16 表）

掘立柱建物跡としたピット以外にも、周辺からは柱痕を持つ柱穴が複数確認されており、検出された 1 棟以外にも掘立柱建物が存在していた可能性がある。掘立柱建物跡とは別に主だった柱穴を図示した。図示したもののうち、柱痕が確認されているものは 1656 号・1354 号・1388 号・1382 号・1384 号・1527 号・1529 号・1556 号・1557 号・1596 号・1574 号・1657 号・1672 号・1698 号がある。いずれの遺構も平面形は円形で、ロームブロックないし黄褐色砂ブロックを含む砂質土を覆土とする。ピットの時期は出土遺物がなく詳細が不明なものが多いが、出土した遺物から時期の絞り込めるものは 1383 号・1596 号・1647 号があり、それぞれ 16 世紀、17 世紀初頭、16 世紀末葉から 17 世紀初頭の所産の可能性が高い。（佐藤）

2）H-1 区

A　7 面

H-1 区は区の大半が埋没谷内の平坦部にあたり、地山面上に盛られた盛土層上を 7 面とした。なお、H-1 区東端では 7 面段階ですでに地山ローム層が露出しており、埋没谷が調査区外へ向かって急激に立ち上がる状況が確認されている。H-1 区 7 面から検出された遺構は溝 3 条、土坑 9 基、柱穴を含むピット 76 基、墓 1 基、焼土跡 3 基がある。

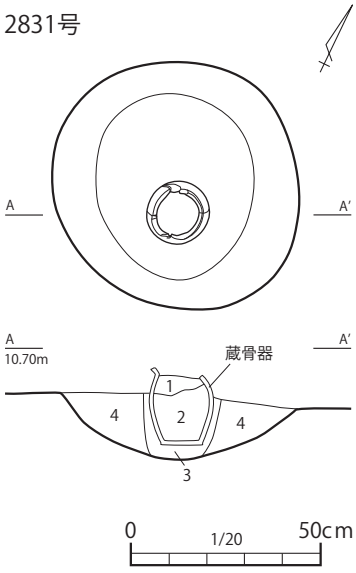
6 面盛土、7 面直上からは 16 世紀から 17 世紀前葉までの遺物が出土しており、7 面から検出された遺構の大半も当該期の所産であると考えられる。

【墓】

2831 号（第 1-274 図、図版 3-52-2、第 3-16 表）

本遺構は平面形が円形を呈する土坑の底面中央に蔵骨器を配置し埋納した遺構で、単独で検出された。墓に伴う集石は確認することが出来なかったが、第 1-274 図中写真で示したように遺構確認面である 7 面からは若干浮いた状態で検出されている。

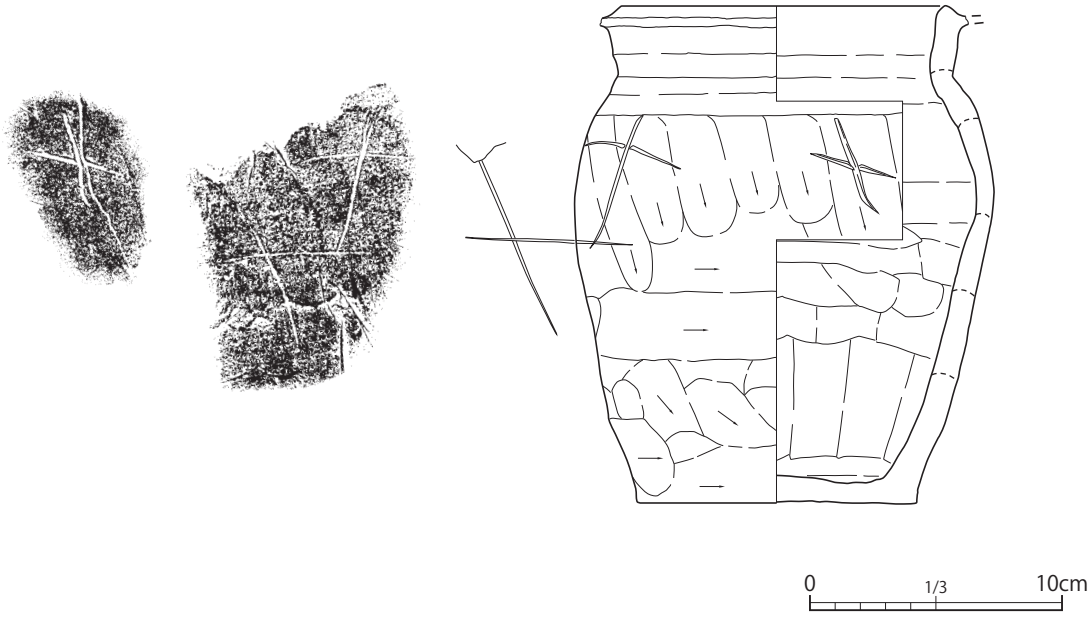
蔵骨器内には火葬された人骨が納められていた。蔵骨器内は 2 層に分層されるが、1 層はわずかに





1.2831号断ち割り状況(南から)

2831 号
1：10YR3/1(黒褐色) しまり：あり 粘性：あり 僅かに骨小片混ざる
2：10YR3/1(黒褐色) しまり：弱い 粘性：あり 骨破片多く混ざる
3：10YR3/1(黒褐色) しまり：あり 粘性：あり
4：10YR3/2(黒褐色) しまり あり 粘性：やや弱い ローム粒φ１～３mm１％ 黄褐色砂粒φ１～５㎜３％



第 1-274 図　H-1 区 7 面の遺構（１）（1/3・1/20）

骨片の入る黒褐色土層で 2 層が火葬人骨部分にあたる。掘方にあたる 3 層と 4 層はわずかにローム粒や黄褐色砂粒の混ざる黒褐色土層で、6 面盛土に近い土層となっている。蔵骨器内の覆土はすべて回収し、篩により選別し分析を行った。蔵骨器内から出土した人骨の総重量は 343.1g と成人 1 個体分を下回っていたが、全身の各部位が含まれていた。色調は全体が白色から灰白色を呈しており、高温で均質に焼成がなされていたことがわかっている。また、人骨の発達度合いから死亡年齢は成人と推定されている。分析の詳細については第Ⅷ章第 2 項を参照されたい。

埋納されていた蔵骨器は常滑産の広口壺で、現存高 197mm、胴径 107mm、底径 111mm を測り、総重量 1,584g である。口縁部は一部を残して後世の攪乱により欠いている。口縁部形態等の特徴か

ら 16 世紀後半から 17 世紀初頭に位置づけられるが、6 面盛土層下で検出していることから旗本屋敷拝領以前の所産であると考えられる。

【焼土跡】

2870 号（第 1-275 図、図版 3-51-3、第 3-16 表）

2870 号は H-1 区東側に位置し、2831 号に近接する。平面形は楕円形の掘り込みで、底面が赤く焼けた燃焼面となっている。覆土は 3 層が固く焼きしまった燃焼面で、2 層である焼土層と 1 層の砂層が入る。遺物の出土はなく、明確な時期は明らかではないが、検出面から 16 ～ 17 世紀前葉の所産であるとした。また、2870 号は 2831 号に近接していることから、2831 号との関連があった可能性がある。近隣の事例としては、新宿六丁目遺跡からおおむね同時期に位置づけられる焼土跡が複数検出されており、骨粉・焼骨片が出土したことから地下式坑と関連した宗教的な施設である可能性が指摘されている（東京都埋蔵文化財センター 2005）。

【溝】

2946 号（第 1-275 図、第 3-16 表）

2946 号は H-1 区の東側に位置する南北に走る細い溝である。ピット 2849 号に切られ、ピット 2954 号を切る。ピット 2849 号と重複する部分から南側からは 2946 号の続きとなる溝は検出されなかったことから、2849 号と重複する部分が 2946 号の始点であると言える。北側は調査区外へと続いていく。何らかの区画施設の可能性が考えられるが、他の調査区において同様の遺構が検出されているものの、H-1 区では 2946 号のみの検出であり、はっきりとした用途は不明である。出土遺物は細片が 1.6g 出土しているのみである。検出面から旗本屋敷拝領以前の所産とした。

【土坑】

3525 号（第 1-275 図、第 3-16 表）

3525 号は平面形が楕円形の土坑で、底面はやや凹凸があり、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土は 2 層に分かれており、いずれの層もローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土層であるが、2 層はしまり・粘性が強くなる。遺物の出土はなく、検出面から旗本屋敷拝領以前の所産とした。

【ピット】（第 1-275 図、第 3-16 表）

ピットは 6 基を掲載した。いずれのピットも平面形が円形で、柱痕を持つ。中でも、2881 号は底面に円形の礎石が確認された。覆土はロームブロックないし黄褐色砂ブロックを含む黒褐色土が覆土となる。柱痕や礎石など柱穴と捉えられるピットはあるが、柱穴列や掘立柱建物跡を構成するものは発見出来なかった。

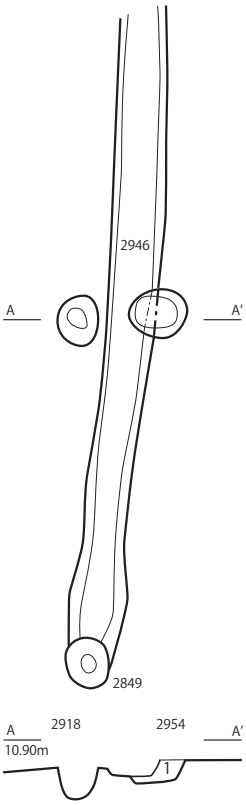
Ｂ　8 面

7 面盛土層下で確認された自然堆積層である黒色土層上を 8 面として調査を行った。黒色土層は F-1 区 7 面の南東部で確認された黒色土層に対応し、埋没谷埋土にあたる。H-1 区中央部が谷の中心にあたり、標高がもっとも低くなっており、東側は 7 面検出時に確認されているローム面につながる。一方、H-1 区と隣接する F-1 区の北東角ではローム層を確認していたが、H-1 区 8 面では F-1 区から続くローム層を確認することはできなかった。

検出された遺構は竪穴状遺構 1 基、溝 1 条、土坑 11 基、柱穴を含むピット 76 基である。

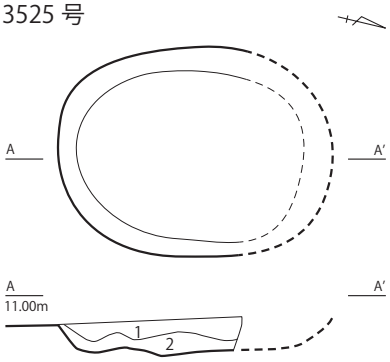
【竪穴状遺構】

2918・2946・2954 号



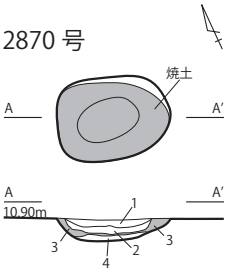
2954 号
1：10YR5/2(灰黄褐色) しまり：あり 粘性：やや弱い 焼土粒φ3~10mm3%
炭化物粒φ5 ～ 10mm5%

3525 号



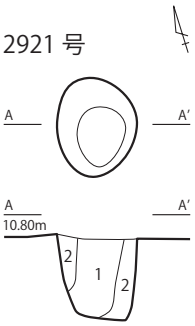
3525 号
1：10YR3/2(黒褐色) しまり：やや強い 粘性：あり
ローム粒φ2 ～ 5mm2% ロームブロックφ20 ～ 40mm3%
2：10YR2/2(黒褐色) しまり：強い 粘性：やや強い
ローム粒φ2 ～ 3mm2% ロームブロックφ20 ～ 40mm3%

2870 号



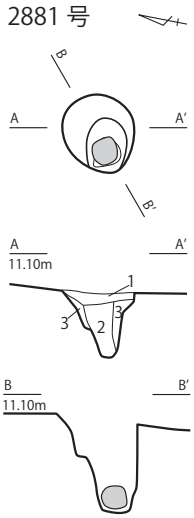
2870 号
1：2.5Y8/4(淡黄色) しまり：あり 粘性：なし 黒色土ブロックφ30~50mm20% 砂層
2：焼土層

2921 号



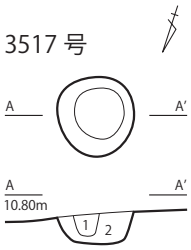
2921 号
1：10YR4/2(灰黄褐色) しまり：あり 粘性：やや弱い
黄褐色砂 15% 砂質土層 柱痕
2：10YR2/2(黒褐色) しまり：強い 粘性：強い
黄褐色砂φ2 ～ 3mm2% 焼土粒φ2 ～ 3mm1%
3：10YR2/2(黒褐色) しまり：強い 粘性：強い

2881 号



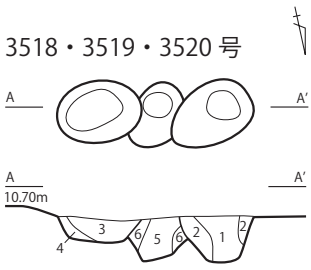
2881 号
1：10YR3/3(暗褐色) しまり：強い 粘性：あり
砂質シルト粒φ2 ～ 10mm10%
2：10YR4/2(灰黄褐色) しまり：あり 粘性：あり
ローム粒φ2 ～ 3mm2%
3：10YR3/4(暗褐色) しまり：強い 粘性：強い
ロームブロック層

3517 号



3517 号
1：10YR3/2(黒褐色) しまり：あり 粘性：やや弱い
黄褐色砂 5% 黒色土粒φ3 ～ 5mm2%
2：10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり：あり 粘性：やや弱い
ローム粒φ3 ～ 10mm3% 黄褐色砂ブロックφ3 ～ 4mm5%

3518・3519・3520 号



3518・359・3520 号
1：10YR3/2(黒褐色) しまり：あり 粘性：やや弱い 砂 2%
2：10YR3/2(黒褐色) しまり：やや強い 粘性：やや弱い ロームブロックφ10 ～ 20mm2%
黄褐色砂ブロックφ10 ～ 20mm
3：10YR3/2(黒褐色) しまり：あり 粘性：やや弱い ローム粒φ3 ～ 5mm1% 黄褐色砂 3%
4：2.5Y7/6(明黄褐色) 砂層
5：10YR4/2(灰黄褐色) しまり：あり 粘性：やや弱い黄褐色砂φ10 ～ 30mm10% 柱痕
6：10YR3/2(黒褐色) しまり：やや強い 粘性：やや弱い

0 1/40 1m

第 1-275 図 H-1 区 7 面の遺構（2）（1 /40）

3580 号（第 1-276 図・第 1-4 表、図版 3-51-5・3-52-1、第 3-16 表）

3580 号は平面形が隅丸長方形を呈する竪穴状遺構で、8 面の黒褐色土を掘り込んで構築される。南東角を 2980 号、北東部を 3600 号に切られ、3614 号を切る。床面は平坦で、中央部には踏み固められたような硬化面が見られた。また、壁面はやや外に開くように立ち上がっている。床面からは 17 基のピットを検出したが、いずれのピットも浅く主柱穴と呼べるものは 1 基（P2）を除いて発見することができなかった（表 1-4）。しかし、3580 号が切るピット 3604 号と 3611 号はいずれも 3580 号長辺の中心寄りに位置しており、唯一の主柱穴の可能性のある P2 を通り一直線に並んでいることから壁柱穴である可能性が考えられる。この他、付随する施設は確認できなかった。

覆土は 13 層に分けられる。1 層は遺構内全体に広がる土層で、ローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土層である。2 層～ 6 層は覆土の下層にあたり、2 層と 3 層はローム粒や炭化物粒を含む黒褐色土層、4 層～ 6 層はローム粒を含む灰黄褐色土で壁面近くに堆積している。7 層～ 10 層はピット覆土にあたり、7 層と 8 層は P1、9 層、10 層は P2 の覆土である。10 層は P4 の覆土とも共通する。7 層はローム粒や炭化物粒を含む黒色土層、8 層はローム粒を多く含むにぶい黄褐色土層、9 層・10 層はローム粒を含む灰黄褐色土層で 10 層はさらに砂をブロック状に含む。11 層～ 13 層は床面と考えられる硬化面にあたる。11 層はしまりの強い暗褐色土層でローム粒を含んでいる。12 層も同様にローム粒を含む灰黄褐色土層である。13 層は黒色土層でローム粒などは見られなかった。3580 号も方形土坑である F-1 区 1550 号や H-2 区 4550 号と同様にほぼ単一の層で埋没しており、廃絶時に一気に埋め戻された可能性が高い。また、14 層から 17 層は 8 面以下の土層で、埋没谷内に堆積した自然堆積層にあたる。

竪穴建物は中世段階の遺跡において特徴的に見られる遺構である。竪穴建物については、「方形の竪穴を掘り込んでいながら上屋構造を持つであろうもの」（齋木・河野 1982）と定義がなされている。今回検出された 3580 号は P 2 を除いて柱穴と認められるか確証を得られない浅いピットのみであり、上屋構造を持たない可能性もあることから竪穴状遺構とした。竪穴建物の用途は住居説や工房説などがあるが、近年は倉庫説が主流となっている。3580 号は F-1 区で見られたピット群とは距離をおき、埋没谷推定ライン内に位置しているところから、竪穴建物と同様に倉庫としての用途が想定される。出土遺物は総点数 22 点、総重量 332.4g である。遺構の形態、出土遺物から 16 世紀の所産であると考えられる。

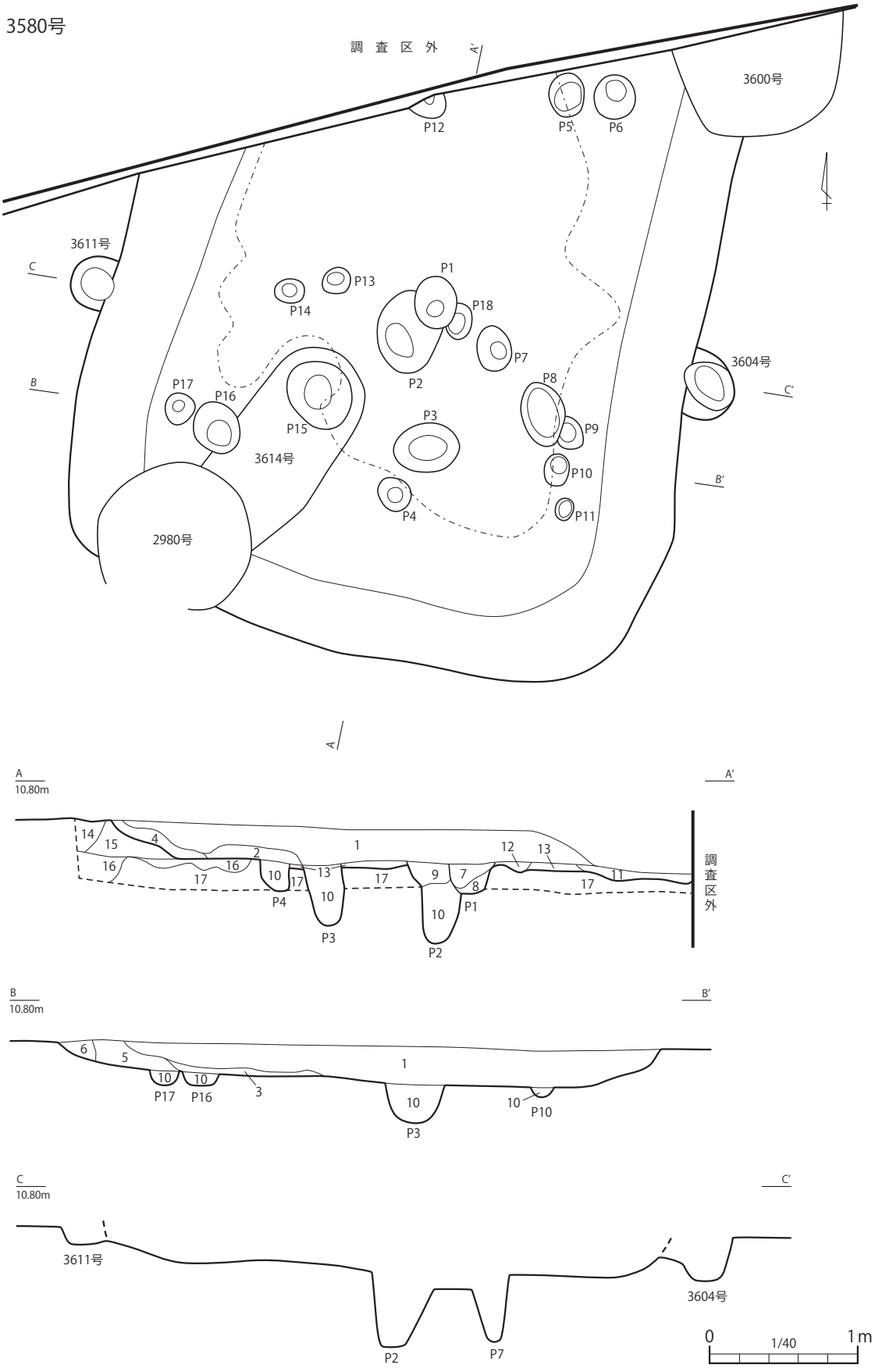
【土坑】

2910 号（第 1-277 図、第 3-16 表）

2910 号は短い溝状の掘り込みで、F-1 区 7 面で 1516 号や 1519 号に伴って検出されたものと同種の遺構であると考えられる。底面は平坦で、壁面は南側は真っ直ぐに、北側は緩やかに立ち上がっている。覆土は 2 層に分かれており、1 層はしまり、粘性の強い灰黄褐色土層で粘土ブロックを含む。2 層はしまり、粘性の強い黒褐色土層でロームブロックを含んでいる。遺物の出土はなく、検出面と覆土から旗本屋敷拝領以前の所産とした。

【ピット】（第 1- 図 277、第 3-16 表）

H-1 区 8 面では 76 基のピットを検出した。図示したもののうち、柱痕を持つものは、2911 号・3563 号・3564 号・3592 号・3605 号の 5 基であり、柱痕を確認したもののすべてである。また、



第 1-276 図　H-1 区 8 面の遺構（1）（1 /40）

3580 号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや強い　ローム粒φ1 ～ 10mm20%　ロームブロックφ20 ～ 40mm10%
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ローム粒φ1 ～ 5mm5%　炭化物粒φ10 ～ 20mm3%
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ1 ～ 5mm3%　炭化物粒φ10 ～ 20mm5%
4：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ローム粒φ1 ～ 10mm15%
5：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ローム粒φ1 ～ 10mm30%
6：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ1 ～ 5mm7%　炭化物粒φ5 ～ 10mm1%
7：10YR7/1(黒色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　ローム粒φ5 ～ 10mm2%　炭化物粒φ10 ～ 30mm3%
8：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ5 ～ 10mm10%
9：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ローム粒φ2 ～ 3mm2%
10：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　砂ブロックφ5 ～ 10mm1%　ローム粒φ2 ～ 5mm1%
11：10YR3/3(暗褐色)　しまり：強い　粘性：やや強い　ローム粒φ2 ～ 5mm2%
12：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：やや強い　ローム粒φ2 ～ 5mm2%
13：10YR2/1(黒色)　しまり：強い　粘性：やや強い
14：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ローム粒φ3 ～ 10mm3%
15：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ1 ～ 3mm3%
16：10YR3/1(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　シルトブロックφ10 ～ 20mm3%　地山層
17：N2/0(黒色)　しまり：やや強い　粘性：あり　シルトブロックφ10 ～ 20mm1%　地山層

第 1-6 表　3580 号内ピット一覧表

遺構名	検出レベル (m)	深　度 (m)	覆土
P1	10.28	0.21	1：10YR7/1(黒色)　しまり：やや強い　粘性：やや強　ローム粒φ 5 ～ 10mm2%　炭化物粒φ 10 ～ 30mm3% 2：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ 5 ～ 10mm10%
P2	10.24	0.52	1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ローム粒φ 2 ～ 3mm2%　2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　砂ブロックφ 5 ～ 10mm1%　ローム粒φ 2 ～ 5mm1%
P3	10.24	0.42	1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　砂ブロックφ 5 ～ 10mm1%　ローム粒φ 2 ～ 5mm1%
P4	10.26	0.17	1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　砂ブロックφ 5 ～ 10mm1%　ローム粒φ 2 ～ 5mm1%
P5	10.16	0.12	1：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　シルト粒φ 2 ～ 5mm2%
P6	10.15	0.26	1：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　シルト粒φ 2 ～ 10mm2%
P7	10.21	0.46	土説なし
P8	10.21	0.09	1：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　シルト粒φ 2 ～ 5mm2%
P9	10.19	0.09	土説なし
P10	10.20	0.05	1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　砂ブロックφ 5 ～ 10mm1%　ローム粒φ 2 ～ 5mm1%
P11	10.21	0.04	土説なし
P12	10.20	0.19	1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり
P13	10.26	0.10	土説なし
P14	10.26	0.05	土説なし
P15	10.18	0.14	1：10YR4/1(褐灰色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　炭化物粒φ 5 ～ 10mm3%　シルト粒φ 2 ～ 5mm2%
P16	10.32	0.14	1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　砂ブロックφ 5 ～ 10mm1%　ローム粒φ 2 ～ 5mm1%
P17	10.33	0.11	1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　砂ブロックφ 5 ～ 10mm1%　ローム粒φ 2 ～ 5mm1%
3604 号	10.47	0.31	1：10YR5/2(灰黄褐色)　粘土層　しまり：強い　粘性：極強　ロームブロックφ 10 ～ 20mm3% 2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　ロームブロックφ 10 ～ 20mm5%
3611 号	10.54	0.13	1：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　ロームブロックφ 10 ～ 30mm3%

2979 号は柱痕を確認できなかったが、根固め石を検出している。しかし、柱穴列や建物跡を構成するピットは確認出来なかった。平面形は 2911 号が長楕円形であるが、そのほかはすべて円形となっている。覆土はいずれのピットもおおむねロームブロックないし黄褐色砂ブロックを含む黒褐色土が主体となる。検出面および遺構の形態・覆土から旗本屋敷拝領以前の所産とした。

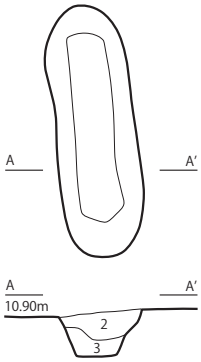
（佐藤）

3）H-2 区

A　7 面

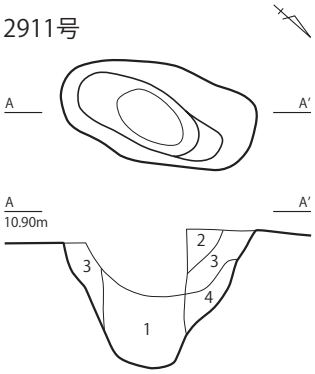
H-1 区同様、地山面に盛られた盛土層上を 7 面として調査を行った。7 面を形成する盛土は、H-2 区南西部から北西部にかけてに分布している。7 面盛土層は黄褐色砂粒を多く含む、しまりの強い盛土で、H-1 区とともに埋没谷上に遺構を構築するため沈下しにくく、水はけのよい土を持つ必要があったためと考えられる。一方、H-1 区の北東部から急激に落ち込んでおり、G-1 区から G-3 区にかけての谷に続いている。遺構は 7 面盛土層の分布範囲に集中して認められ、7 面盛土層の分布範囲外では遺構の分布は希薄となる。

2910号



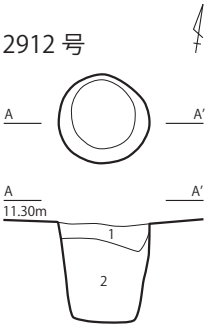
2910 号
1：10YR3/2（黒褐色） しまり：やや強い　粘性：弱い
砂質土層
2：10YR4/2(灰黄褐色) しまり：強い　粘性：やや強い
粘土ブロックφ10 ～ 20mm5%
3：10YR2/2(黒褐色) しまり：強い　粘性：強い
ロームブロックφ10 ～ 20mm2%

2911号



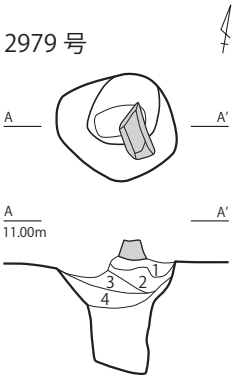
2911 号
1：10YR3/2(黒褐色) しまり：あり　粘性：あり
黄褐色砂ブロックφ10 ～ 20mm3%
2：10YR3/3(暗褐色) しまり：強い　粘性：強い
白色砂粒φ～ 1mm5%　ローム
3：10YR4/4(褐色) しまり：強い　粘性：強い
ロームブロック層
4：10YR3/4(暗褐色) しまり：あり　粘性：あり
ローム粒φ2 ～ 5mm10%

2912 号

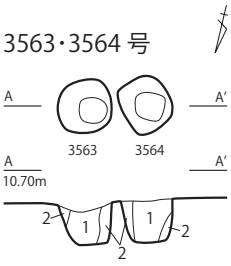


2912 号
1：10YR2/2(黒褐色) しまり：強い　粘性：強い
黄褐色砂ブロックφ10 ～ 20mm5%
2：10YR3/3(暗褐色) しまり：強い　粘性：強い
ロームブロックφ10 ～ 20mm10%

2979 号



3563･3564 号

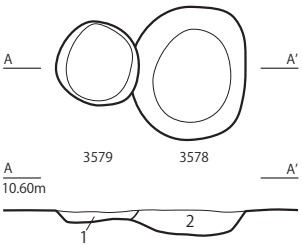


2979 号
1：10YR2/2(黒褐色) しまり：強い　粘性：弱い　細砂～砂質シルト粒φ1 ～ 5mm5%
2：10YR2/2(黒褐色) しまり：あり　粘性：あり
ローム (脱色・粘土化) 粒φ5 ～ 10mm5 ～ 8%　細砂 3 ～ 5%
3：2.5Y7/4(淡赤橙色) ～ 10YR5/6(黄褐色) しまり：強い　粘性：あり
細礫φ2 ～ 4mm10%　黒褐色土 40%　粗砂 (一部酸化)50%
4：10YR2/2　しまり：やや強い　粘性：強い　ローム粒φ3 ～ 5mm5 ～ 8%
細砂 5 ～ 8%

3563 号
1：10YR3/2(黒褐色) しまり：やや強い　粘性：あり　ロームブロックφ10 ～ 20mm7%
7 面盛土由来　柱痕
2：10YR2/2(黒褐色) しまり：強い　粘性：やや強い　ローム粒φ5 ～ 10mm3%

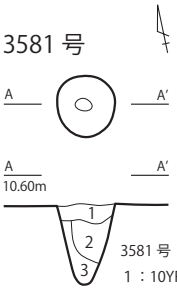
3564 号
1：10YR3/2(黒褐色) しまり：やや強い　粘性：あり　ロームブロックφ10 ～ 20mm7%
7 面盛土由来　柱痕
2：10YR2/2(黒褐色) しまり：強い　粘性：やや強い　ローム粒φ5 ～ 10mm3%

3578･3579 号



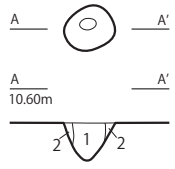
3578・3579 号
1：10YR3/3(暗褐色) しまり：やや強い　粘性：やや強い
砂 50%　ブロック状
2：10YR3/2(黒褐色) しまり：やや強い　粘性：やや強い
ロームブロックφ10 ～ 200mm40%　砂 10%

3581 号



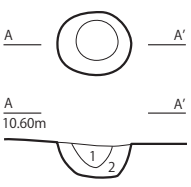
3581 号
1：10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり：あり
粘性：あり　ローム粒φ5 ～ 10mm2%
黄褐色砂φ5 ～ 10mm10%
焼土粒φ1 ～ 3mm2%　炭化物粒φ10mm1%
2：10YR4/3(にぶい黄褐色) しまり：あり
粘性：あり　焼土粒φ1 ～ 5mm1%
炭化物粒φ1 ～ 5mm1%
3：10YR3/2(黒褐色) しまり：強い　粘性：あり

3592 号

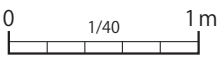


3592号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり:あり　粘性:あり
黄褐色砂φ10～20mm3%
2：2.5Y7/6(明黄褐色)　砂層

3605 号



3605 号
1：10YR5/2(灰黄褐色) しまり：強い　粘性：極強
ロームブロックφ10 ～ 20mm3%　粘土層
2：10YR3/2(黒褐色) しまり：やや強い　粘性：やや強い
ロームブロックφ10 ～ 20mm5%



第 1-277 図　H-1 区 8 面の遺構（2）（1 /40）

検出された遺構は、溝 13 条、土坑 33 基（方形土坑 1 基、その他の土坑 32 基）、礎石 4 基、砂利基礎 2 基、柱穴を含むピット 352 基である。

【溝】

4444 号（第 1-279 図、図版 3-52-3、第 3-16 表）

4444 号は H-2 区北西部に位置する南西―北東に伸びる溝で、F-1 区で検出されている掘立柱建物跡や溝とは軸線が異なるが、H -2 区で検出されている他の溝とは直行する関係になる。北側を 6 面の 4260 号に切られ、失われている。また、中央部を 4452 号に切られている。4444 号は幅約 1m、深さ約 0.8m と、7 面以下で検出された溝の中では最大の物となる。4444 号の断面形は U 字形で、南から北に向かって深くなる。覆土は南側（SPA-A'）では 3 層に分かれており、3 層はローム粒や黒褐色土粒を含むにぶい黄褐色土が柱痕状に堆積し、4 層・5 層はローム粒やシルト粒、砂を含むにぶい黄褐色土層が堆積する。1 層と 2 層はそれぞれ土坑 4453 号と 4452 号の覆土で、いずれもローム粒などを含む灰黄褐色土層である。4444 号北側（SPB-B'）では覆土は 4 層に分かれており、1 層と 2 層が柱痕状に堆積する層で、SPA-A'3 層に対応する。4 層と 5 層はそれぞれ SPA-A'3 層と 4 層に対応している。覆土上層に見られた柱痕状の堆積からは、4444 号には何らかの上部構造が存在した可能性がある。また、4444 号と平行して細い溝 4451 号が走っており、4444 号に付属する溝である可能性がある。なお、4451 号の覆土は SPB-B'5 層がそれにあたり、砂や炭化物を含む暗褐色土層となっている。この他、F-1 区 7 面で検出されたような北東―南西方向に走る細い溝が検出されている。いずれも 4444 号に直行することから、これらの溝は何らかの区画施設であるものと考えられる。出土遺物は総点数 1 点、総重量 21.4g である。出土遺物から 16 世紀以前の所産と考えられる。

4317 号・4318 号（第 1-279 図、第 3-16 表）

4317 号・4318 号は細い溝で、4444 号とは直行する北東―南西方向に走る。覆土は単層で砂を含む暗褐色土が堆積する。4317 号・4318 号の他、4306 号や 4307 号、4134 号、4316 号、4317 号、4318 号が同種の溝で、北東―南西方向に走る。4134 号は同様の方向に走る同種の溝であるが、ピット 4133 号を境に、90 度方向を替え、北西―南東方向に走っている。このことからこれらの一連の溝は方形に区画する区画施設の一部であると言えよう。遺物の出土はなく、検出面および遺構の形態から旗本屋敷拝領以前の所産とした。

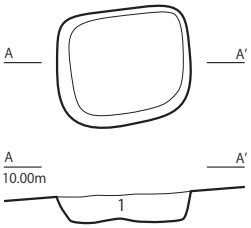
【方形土坑】

4550 号（第 1-278 図、図版 3-52-4、第 3-16 表）

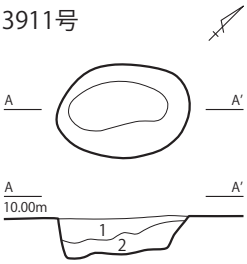
4550 号は長軸 2.58m ×短軸 1.78m、深さ 0.8 mを測る長方形の土坑で、ピット 4548 号・4632 号・4633 号に切られている。本遺構から検出された土坑のなかでは定形的な土坑と言え、その他の円形ないし不整形土坑とは分離できる。その形態から貯蔵施設を目的として構築されたものと考えられる。本遺構の底面は平滑に整えられ、壁面もほぼ垂直に立ち上がっており、F-1 区 1550 号と類似する。覆土は 5 層が覆土にあたり、ロームブロックを含むにぶい黄褐色土層となる。1 層と 2 層はピット 4632 号・4633 号の覆土にあたる。F-1 区 1550 号と同様に大部分が単一の覆土で埋められており、廃絶時に時間を置かず埋められたものと考えられる。出土遺物は総点数 3 点、総重量 33.9g である。検出面および遺構の形態・覆土から旗本屋敷拝領以前の所産とした。

【土坑】

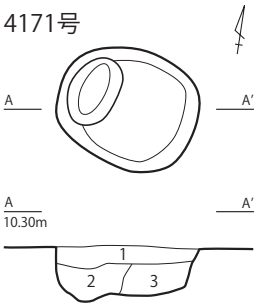
3735-1 号



3911号



4171号

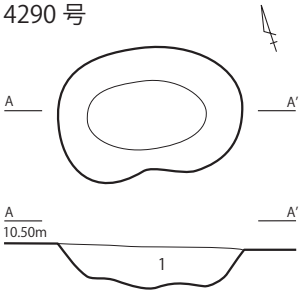


3735-1号
1：2.5Y4/1(黄灰色土)　しまり：極強　粘性：あり　炭化物粒φ1mm1%　錆10%
　錆を多く含む

3911号
1：10YR4/4（褐色）　しまり：強　粘性：極強　ローム粒φ3～5mm7%
　炭化物粒φ1～5mm2%　黄色砂1%　1層下面に極薄い砂層・暗褐色土層あり
2：10YR5/3（にぶい黄褐色）　しまり：極強　粘性：極強　ローム粒φ3～7mm40%
　黄色砂5%　焼土粒φ1～2mm1%

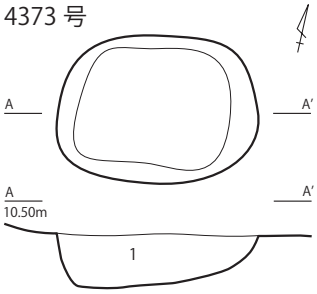
4171号
1：10YR4/4(褐色)　しまり：極強　粘性：極強　ローム粒φ1～5mm5%
　焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～2mm１%　赤味を帯びる褐色土主体
2：10YR4/4(褐色)　しまり：極強　粘性：極強　ローム粒φ5～10mm10%(斑紋状)
　炭化物粒φ1mm1%　粒子細　緻密
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり：極強　粘性：極強　炭化物φ1～2mm1%未満
　粒子細　緻密

4290 号



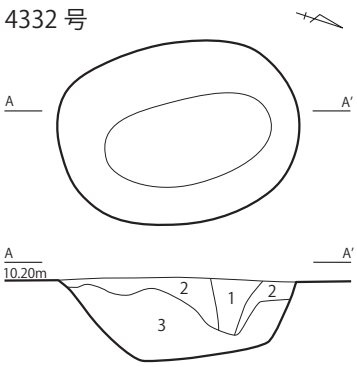
4290号
1：10YR4/4(褐色)　しまり：極強　粘性：極強
　ローム粒φ1～10mm10%
　ロームブロックφ15mm5%　焼土粒φ1～2mm1%
　炭化物φ1～2mm1%　やや空隙あり

4373 号



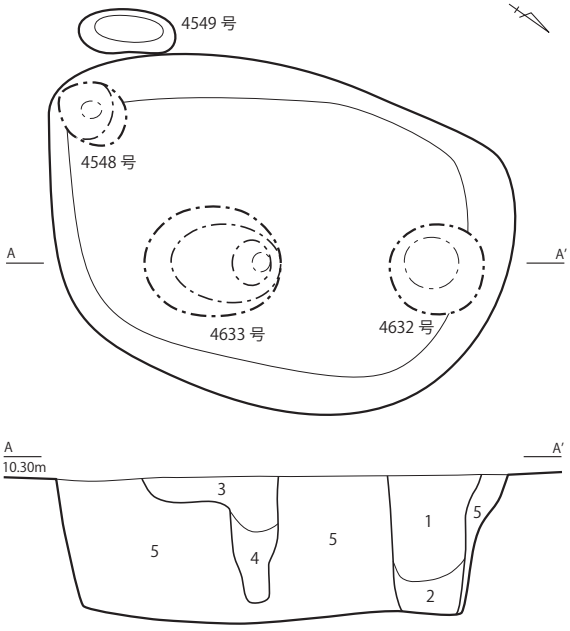
4373号
1：10YR5/6(黄褐色)　しまり：あり　粘性：極強
　ローム粒φ1～5mm30%　ロームブロックφ15mm7%
　炭化物φ1～5mm5%

4332 号

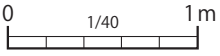


4332号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
　ロームブロックφ5～10mm3%
　黒色土ブロックφ30～50mm15%　柱痕か
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり
　ロームブロックφ10～30mm2%　砂ブロックφ10～20mm5%
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
　黄色砂ブロックφ10～50mm40%
　砂質シルトブロックφ10～50mm40%

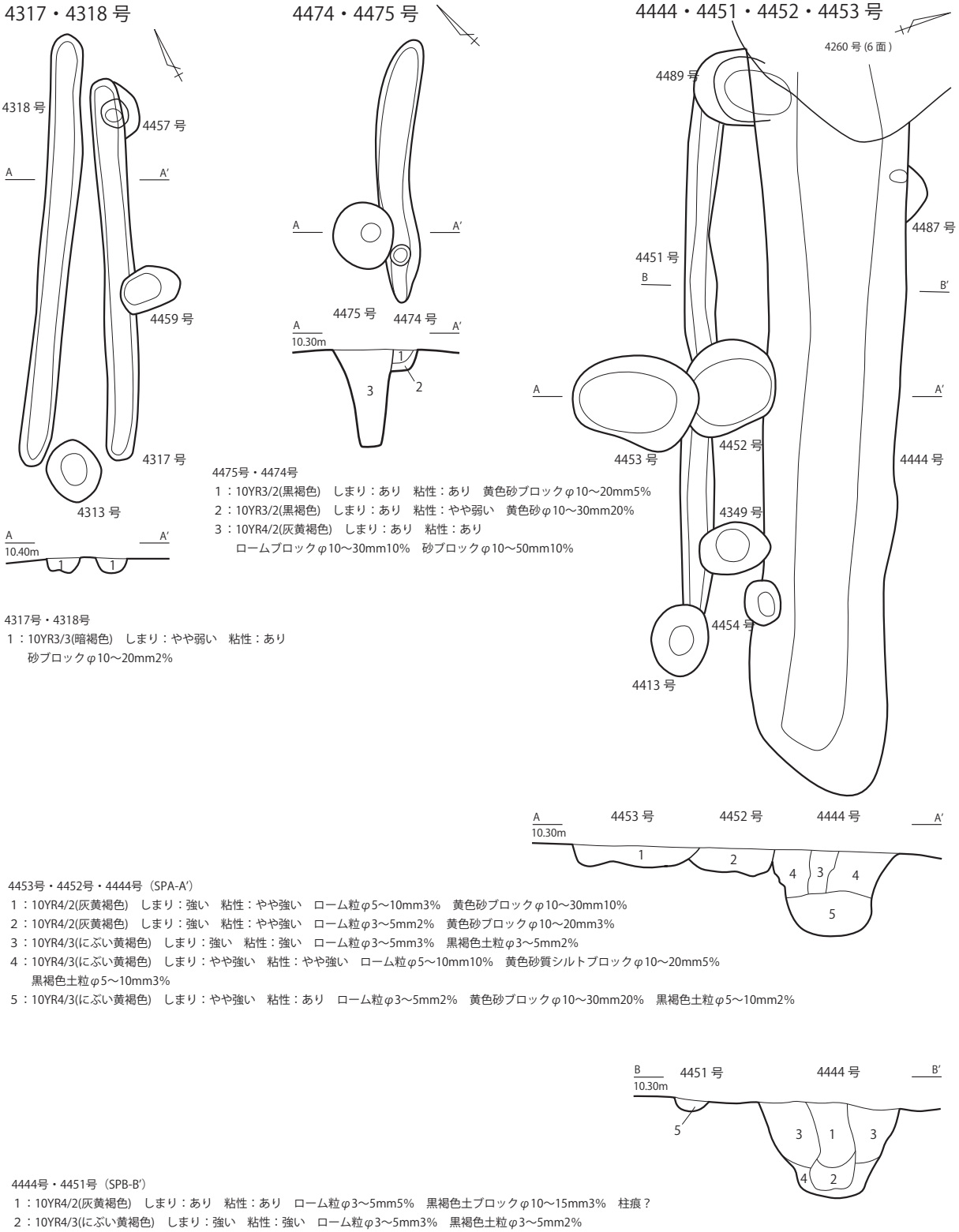
4548･4549･4550･4632･4633 号



4550号・4633号・4632号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ロームブロックφ20～30mm5%
3：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10～30mm5%
4：10YR4/1(褐灰色)　しまり：強い　粘性：あり
5：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ロームブロックφ10～40mm15%



第 1-278 図　H-2 区 7 面の遺構（1）（1 /40）



4475号・4474号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黄色砂ブロックφ10～20mm5%
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　黄色砂φ10～30mm20%
3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり
　ロームブロックφ10～30mm10%　砂ブロックφ10～50mm10%

4317号・4318号
1：10YR3/3(暗褐色)　しまり：やや弱い　粘性：あり
　砂ブロックφ10～20mm2%

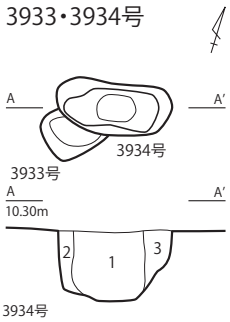
4453号・4452号・4444号（SPA-A′）
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：やや強い　ローム粒φ5～10mm3%　黄色砂ブロックφ10～30mm10%
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：やや強い　ローム粒φ3～5mm2%　黄色砂ブロックφ10～20mm3%
3：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ3～5mm3%　黒褐色土粒φ3～5mm2%
4：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　ローム粒φ5～10mm10%　黄色砂質シルトブロックφ10～20mm5%
　黒褐色土粒φ5～10mm3%
5：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ローム粒φ3～5mm2%　黄色砂ブロックφ10～30mm20%　黒褐色土粒φ5～10mm2%

4444号・4451号（SPB-B′）
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ3～5mm5%　黒褐色土ブロックφ10～15mm3%　柱痕？
2：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：強い　粘性：強い　ローム粒φ3～5mm3%　黒褐色土粒φ3～5mm2%
3：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや強い　ローム粒φ5～10mm10%　黄色砂質シルトブロックφ10～20mm5%
　黒褐色土粒φ5～10mm3%
4：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　ローム粒φ3～5mm2%　黄色砂ブロックφ10～30mm20%　黒褐色土粒φ5～10mm2%
5：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い　黄色砂粒φ2～5mm5%　炭化物粒φ3～5mm２%

0　1/40　1m

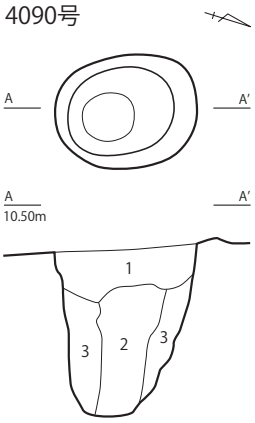
第 1-279 図　H-2 区 7 面の遺構（２）（1 /40）

3933・3934号



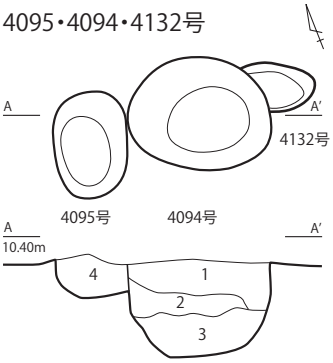
3934号
1：10YR3/4(暗褐色)　しまり：強い　粘性：強い
ローム粒φ1～7mm10%　炭化物粒φ1～3mm2%
2：10YR5/3(にぶい黄褐色)　しまり：極強　粘性：強い
ローム粒φ1～10mm20%
3：10YR3/4(暗褐色)　しまり：極強　粘性：強
ローム粒φ1～5mm10%　炭化物粒φ1～2mm1%

4090号



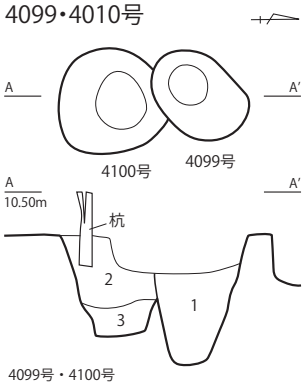
4090号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
黄色砂粒φ5～10mm3%
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや弱い　粘性：あり
黄色砂粒φ5～10mm3%　柱痕
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：やや弱い
黄色砂ブロックφ10～30mm3%

4095・4094・4132号



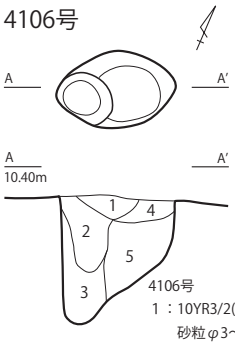
4094号・4095号
1：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
焼土粒φ4～5mm2%　炭化物粒φ4～5mm2%
2：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
1層＋砂ブロックφ10～30mm10%
3：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂30%
4：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　砂30%

4099・4010号



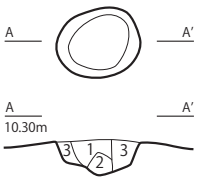
4099号・4100号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
黄色砂ブロックφ10～30mm10%
2：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：あり
粘性：やや弱い　黄色砂ブロックφ10～20mm5%
3：10YR4/2(暗灰黄色)　しまり：あり　粘性：あり
黄色砂ブロックφ10～30mm20%

4106号



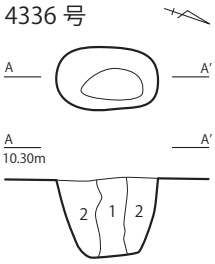
4106号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり
砂粒φ3～10mm5%
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
黄色砂φ5～10mm5%
3：10YR4/4(褐色)　しまり：強い　粘性：強い
ロームブロック層
4：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり
ロームブロックφ10～30mm20%
5：10YR3/3(暗褐色)　しまり：あり　粘性：あり
ロームブロックφ10～30mm20%

4149号



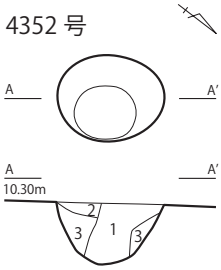
4149号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い
粘性：極強　焼土粒φ1～2mm1%
炭化物粒φ1～2mm1%　やや空隙あり
2：1層が空隙多くしまりなくなった部分
杭跡？
3：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：極強
粘性：極強　黄褐色砂φ1～10mm10%
焼土粒φ1～2mm1%　炭化物粒φ1～3mm3%

4336 号



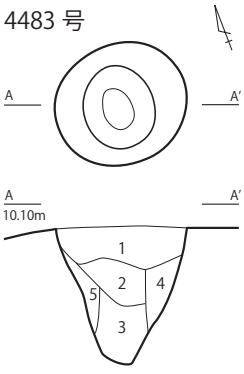
4336号
1：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
黄色砂ブロックφ10～20mm1%
炭化物粒φ2～5mm1%　柱痕
2：10YR3/2(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり
黄色砂ブロックφ10～30mm3%

4352 号



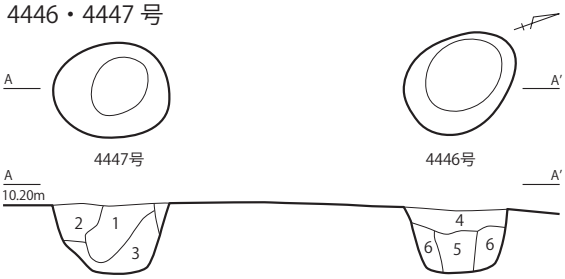
4352号
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり
粘性：あり
黄色砂ブロックφ10～20mm5%
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり
粘性：あり　黄色砂10%
3：10YR4/3(にぶい黄褐色)　しまり：やや強い
粘性：やや強い
ロームブロックφ20～50mm20%

4483 号



4483号
1：7.5YR3/1(黒褐色)　しまり：強い　粘性：極強　ローム粒φ1～5mm5%　炭化物粒φ1～2mm1%
赤錆7%
2：7.5YR4/4(褐色)　しまり：極強　粘性：極強　ローム粒φ1～5mm5%　黄褐色砂φ3～10mm20%
炭化物粒φ1～3mm3%
3：10YR3/1(黒褐色)　しまり：あり　粘性：あり　ローム粒φ5～10mm5%
4：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：あり　粘性：あり　黒褐色土ブロックφ10～30mm10%
5：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり

4446・4447 号



4447号・4446号
1：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：やや強い　粘性：やや弱い
ロームブロックφ10～20mm3%　砂粒φ5～10mm3%
2：10YR4/2(灰黄褐色)　しまり：強い　粘性：やや弱い　砂粒φ5～10mm2%
白色砂粒φ1～2mm2%
3：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：強い　砂ブロックφ10～20mm10%
4：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり
黄色砂ブロックφ10～20mm2%　炭化物粒φ5～10mm2%
5：10YR3/2(黒褐色)　しまり：やや強い　粘性：あり　柱痕
6：10YR3/2(黒褐色)　しまり：強い　粘性：あり　砂ブロックφ10～30mm20%

0　1/40　1m

第 1-280 図　H-2 区 7 面の遺構（3）（1 /40）

H-2 区 7 面からは複数の土坑が検出されている。検出された土坑には平面形が円形、楕円形、方形のものが見られた。ここでは代表的なものを図示した。

3735-1 号（第 1-278 図、第 3-16 表）

3735-1 号は平面形が方形の土坑で、底面は中央部がわずかに盛り上がっている。覆土は単層で黄灰色の粘性の強い土が堆積する。出土遺物はなく、検出面および覆土から旗本屋敷拝領以前の所産とした。

3911 号（第 1-278 図、第 3-16 表）

3911 号は平面楕円形の土坑で、底面は平坦に掘られている。覆土は 2 層に分かれており、1 層はしまり・粘性ともに強い、ローム粒や炭化物粒を含む褐色土層、2 層はしまり・粘性ともに強いにぶい黄褐色土層でローム粒や砂、焼土粒を含んでいる。出土遺物はなく、検出面および覆土から旗本屋敷拝領以前の所産とした。

4171 号（第 1-278 図、第 3-16 表）

4171 号は楕円形の土坑で、底面には北東隅にわずかに一段下がるように段が付く。覆土は 3 層に分かれており、1 層は赤みを帯びた褐色土を主体とする層で、ローム粒や炭化物粒を含む。2 層はしまり、粘性ともに極めて強い褐色土層でローム粒を斑紋状に含み、3 層はしまり、粘性ともに極めて強い黒褐色土層となる。出土遺物はなく、検出面および覆土から旗本屋敷拝領以前の所産とした。

4290 号（第 1-278 図、第 3-16 表）

4290 号は楕円形の土坑。底面は凹凸が目立つ。覆土はしまり、粘性ともに極めて強い褐色土層で、ロームブロックや焼土粒、炭化物粒を含んでいる。出土遺物は総点数 2 点、総重量 18.6g である。出土遺物から 17 世紀初頭以前の所産と位置付けられる。

4373 号（第 1-278 図、第 3-16 表）

4373 号は方形の浅い土坑で、底面は西に向かって深くなるように長軸に沿って傾斜している。覆土は単層で、ロームブロックを含む黄褐色の粘質土が堆積する。出土遺物はなく、検出面および覆土から旗本屋敷拝領以前の所産とした。

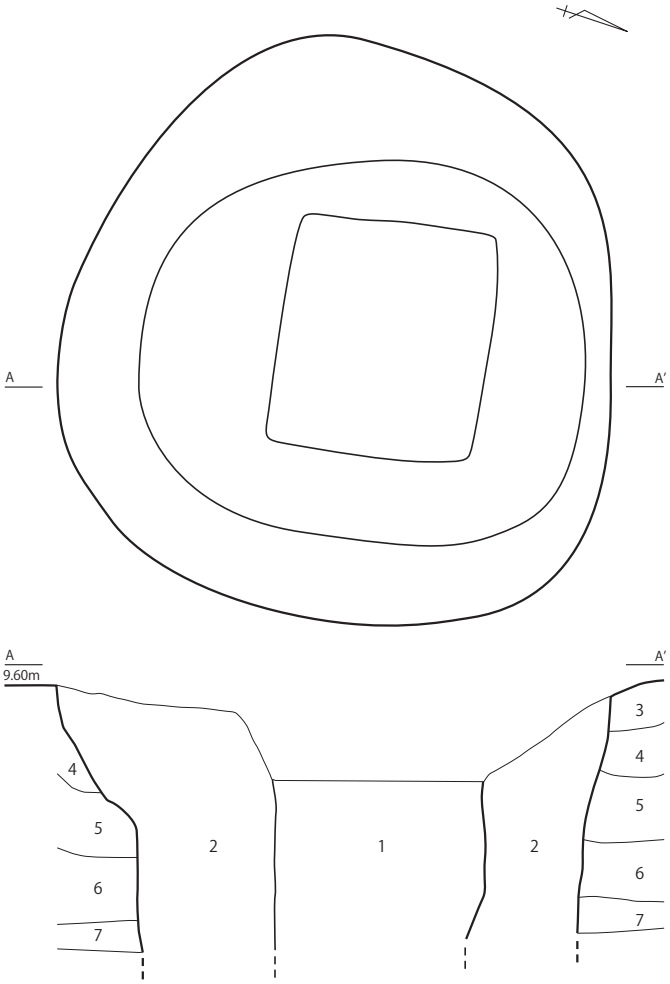
4332 号（第 1-278 図、第 3-16 表）

4332 号は楕円形の土坑で、底面は緩やかに南に傾斜している。覆土は 3 層に分かれる。1 層は柱痕と思われる層で、ロームブロックや黒色土ブロックを含む黒褐色土が堆積する。2 層はロームや砂をブロック状に含む灰黄褐色土、3 層は黄色砂ブロック、砂質シルトブロックを含む黒褐色土が堆積する。出土遺物はなく、検出面および覆土から旗本屋敷拝領以前の所産とした。

【ピット】（第 1-280 図、第 3-16 表）

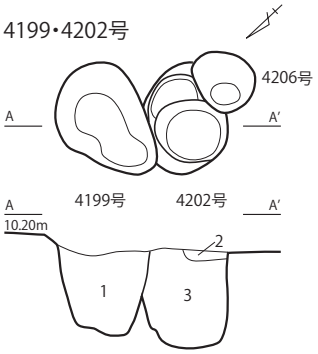
ピットは 352 基検出している。そのうち、13 基が柱痕を持っており、柱穴であると判断できる。いずれのピットも覆土は類似しており、ローム粒を含む暗褐色土ないし黒褐色土を覆土として、おおむね単一の時期に構築されたものであると考えられる。第 1-280 図に代表的なピットを図示した。そのうち 3933 号、4090 号、4106 号、4149 号、4336 号、4352 号、4483 号、4446 号、4447 号、4149 号は柱痕を確認している。しかし、F-1 区で発見されているような掘立柱建物跡の存在を確認することはできなかった。出土遺物から年代の分かるものは少なく、4381 号は 16 世紀以前の所産である可能性が考えられる程度である。

4200 号

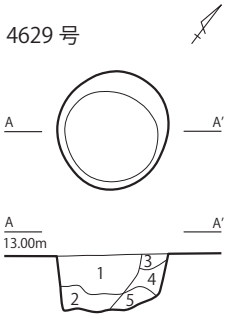


4200 号
1：2.5Y6/5(暗褐色) しまり：弱い 粘性：弱い
ロームブロックφ15mm15% 黄褐色砂質土ブロックφ15mm15%
2：10YR5/3(にぶい黄褐色) しまり：強い 粘性：極強
ローム粒φ3 ～ 5mm10% 黄褐色砂粒φ5mm5%
黄褐色砂ブロックφ15 ～ 20mm15% 粒子細かい 自然堆積層
3：10YR3/2(黒褐色) しまり：強い 粘性：極強 ローム粒φ1 ～ 3mm1%
黄褐色砂 3% 炭化物粒φ1 ～ 3mm1% 富士黒相当の黒褐色土 (Ⅱb ？)
4：10YR5/2(灰黄褐色) しまり：極強 粘性：極強
ローム粒φ1 ～ 5mm10%(斑紋状) 炭化物粒φ1 ～ 2mm1% Ⅱc 相当か
5：10YR6/6(黄褐色) しまり：極強 粘性：極強
黒色スコリアφ1 ～ 3mm1% ローム層
6：10YR3/4(暗褐色) しまり：極強 粘性：極強
ロームブロックφ10 ～ 15mm(斑紋状) 暗褐色粘質土層
7：10YR6/6(黄褐色) しまり：極強 粘性：極強
黒色スコリアφ1 ～ 2mm1% 赤色スコリアφ1 ～ 2mm1% ローム層

4199・4202号

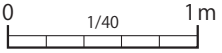


4629 号



4199号・4202号
1：10YR3/3 (暗褐色) しまり:強 粘性:極強 白色粒子1% ローム粒φ3～5mm10%
暗褐色粘質土主体 空隙あり
2：10YR3/3 (暗褐色) しまり:あり 粘性:極強 炭化物粒φ3～10mm20%
黄褐色砂3%
1層とほぼ同じだが、マトリクスがブロック化している
3：10YR4/2(灰黄褐色) しまり:強い 粘性:強い

4629号
1：10YR5/1(褐灰色) しまり:強い 粘性:強い ローム粒φ5～10mm3%
砂質シルトブロックφ10～20mm10% 白色砂粒φ3～10mm3%
2：10YR5/1(褐灰色) しまり:強い 粘性:極強 砂質シルトブロックφ10～20mm3%
3：10YR5/1(褐灰色) しまり:強い 粘性:あり ローム粒φ5～10mm15%
砂質シルト粒φ3～10mm10% 白色砂粒φ3~10mm2%
4：10YR5/1(褐灰色) しまり:極強 粘性:極強 砂質シルト粒φ3～10mm2%
5：10YR5/1(褐灰色) しまり:強い 粘性:あり ローム粒φ5～10mm15%
砂質シルト粒φ3～10mm10% 白色砂粒φ3~10mm2%



第 1-281 図 H-2 区 8 面の遺構（1 /40）

Ｂ　８面

７面盛土層下の自然堆積層上を８面として調査を行った。８面で確認した自然堆積層はF-1区７面南東部やH-1区で確認した黒褐色土層に連なる層で、南に向かって傾斜して堆積する。７面ではH-2区北東部で急激に南に落ち込んでいく状況が確認されたが、その状況は８面も同様であり、黒褐色土層はG-3区の方向に向い落ち込んでいる。遺構は落ち際に構築されていることから、南東に向かって開く弧状に分布していたと考えられる。検出された遺構は、井戸１基、土坑１基、ピット50基である。

【井戸】

4200号（第1-287図、図版3-52-5、第3-16表）

4200号はH-2区北東部に位置する井戸である。4200号は８面の他の遺構よりもやや標高の低い位置で検出されている。検出時は壁面が崩落していたためか、不整形な平面形であったが、井戸側が露出するまで掘削したところ、崩落していない壁面を検出し、平面形が方形であることが分かった。また、方形の井戸側の四隅には井戸側の縦板と支持材となる角柱が配されていた。掘方の平面形は円形で、ほぼ中央に方形に組まれた井戸側が据えられており、このことからＢⅣ類縦板隅柱横桟どめ（宇野1982）もしくはＢⅣ類のホゾのないタイプの井戸であると考えられる。井戸側内の覆土は確認することのできた範囲においては単層で、黄色の砂を主体し、ロームブロックを含む層で埋められている。また、掘方も確認できた範囲では単層で、ローム粒、黄褐色の砂を含むにぶい黄褐色の土層となっている。遺構の時期は出土遺物から中世後期～近世初頭（17世紀初頭以前）の所産であると考えられる。

【ピット】（第1-281図、図版3-52-6、第3-16表）

８面から検出されたピットは小型で単層のピットが大半を占めるが、切り合いのあるもの、単層ではない堆積状況のピットについては土層断面図を図示した。なお、８面においては柱痕をもったピットは確認されなかった。図示したのは4199号と4202号、4629号の３基である。4199号は4202号を切るピットで、暗褐色粘質土を覆土とする。4202号は4199号と4206号に切られており、覆土はしまり、粘性の強い灰黄褐色土である。4629号は円形のピットで覆土は５層に分かれる。いずれも褐灰色土で、ローム粒や砂質シルト粒を含んでいる。いずれの遺構も遺物の出土はなく、検出面および覆土から旗本屋敷拝領以前の所産とした。　（佐藤）

Ⅴ　縄文時代から古代の遺物

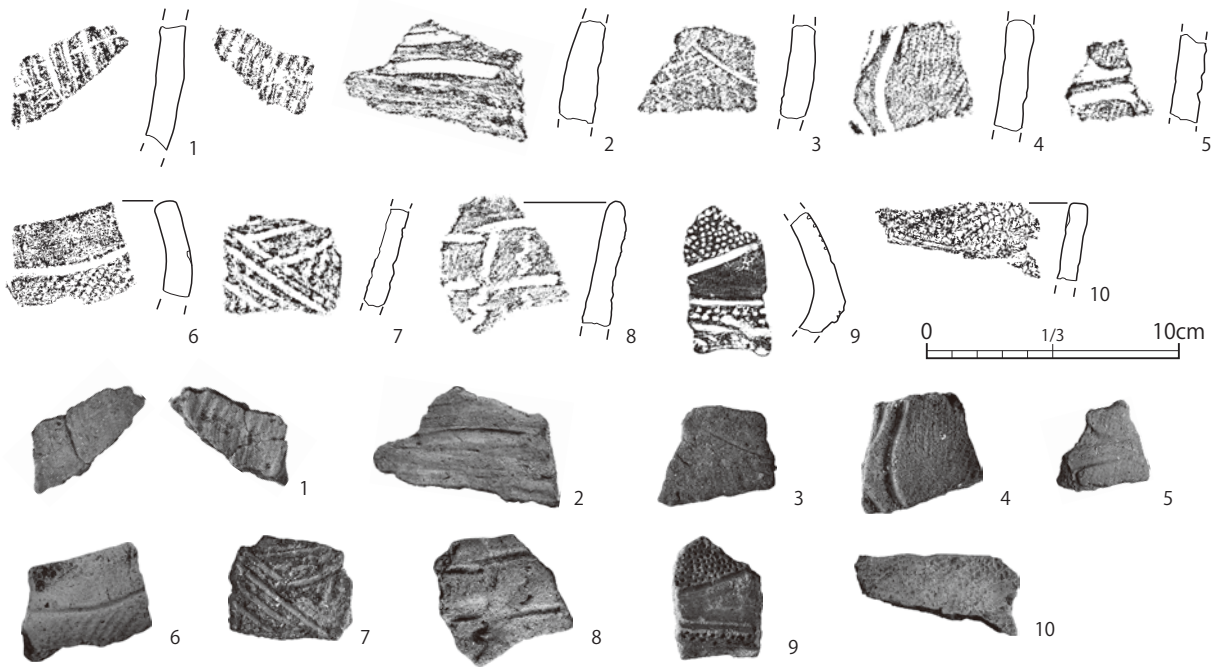
1．縄文時代の遺物

1）　縄文土器

縄文時代の遺構は確認できなかったものの、12 点・281.3g の縄文土器が自然堆積層、近世盛土中、近世以降の遺構覆土から出土した。このうち 10 点を図示した（第 1-282 図）。

第 1-282 図 1 は早期後葉の条痕文土器。内外面に条痕が見られ、胎土には繊維を多量に含んでいる。内外面の条痕は刷毛目のように凹部内に擦痕が顕著に見られることから、ハイガイとは異なる貝によるものの可能性が考えられる。 2 は前期前半の土器。胎土に繊維を含み、外面はヘラ状の施文工具により横位の条線が描かれている。黒浜式に比定される。 3 は前期後半諸磯 b 式の胴部破片。H-2 区南西断ち割りトレンチ内で確認された自然堆積層である黒褐色土層中から出土した。土器の器面、断面は摩耗が激しく、台地上より谷に流入したものと考えられる。 4 と 5 は中期初頭から前葉と考えられる土器の胴部破片である。 6 は中期末から後期初頭に位置づけられる土器の口縁部破片で、器形は波状口縁の深鉢であると考えられる。 7 ～ 10 は後期前葉～中葉の土器群。 7 は胴部破片で、半截竹管状工具による平行沈線で菱形状のモチーフが描かれると考えられるが、器面の摩滅が激しく平行沈線間の施文は観察することが出来なかった。 8 は口縁部破片で、角頭状の工具による単沈線による小波状文を同一の施文工具による横帯区画より垂下させる。沈線の底面には施文工具の木目状の擦痕が残る。 9 は胴部の屈曲する鉢形土器と考えられ、棒状工具による刺突が単沈線による区画内に充填施文されている。10 は器面に単節縄文 LR が横走する。また、口縁端部内面には単沈線が 1 条廻る。

（佐藤）



第 1-282 図　縄文時代の土器（1/3）

2．弥生時代の遺物

弥生時代の土器は 313 点・4,602.1g 出土し、そのうち 131 点を図示した（第 1-283 図～ 285 図）。なお、第 1-285 図 131 は焼成粘土塊であるが、弥生時代に含めた。時期は大きく、中期と後期にわかれる。中期はさらに中期前半と中期後半に細別される。後期は資料が少なく細分していない。２点の甕形土器（以下甕形土器は略し甕とする。他の器種も同様）がタタキ調整で間違いなければ終末期の位置づけになるが、小片で時期比定が難しい。また、胎土や調整から弥生時代とはわかるものの、中期後半か後期かはわからない破片もあり、弥生時代の土器としてまとめてある。

1） 弥生土器

中期前半（第 1-283 図 1 ～ 4）

条痕施文のものを本時期とした。第 1-283 図 1 は内湾口縁の深鉢と思われ、口唇部に近い位置の破片である。2 は深鉢の胴部片で、２本一単位の条痕を左下がりの斜位に施し、破片の下端にわずかに右下がりの条痕が認められることから、横位羽状条痕の可能性が高い。3・4 も外面調整に２条一単位の条痕を施す。胴部下半の破片である。

中期後半（第 1-284 図 5 ～ 52、第 1-285 図 53 ～ 96）

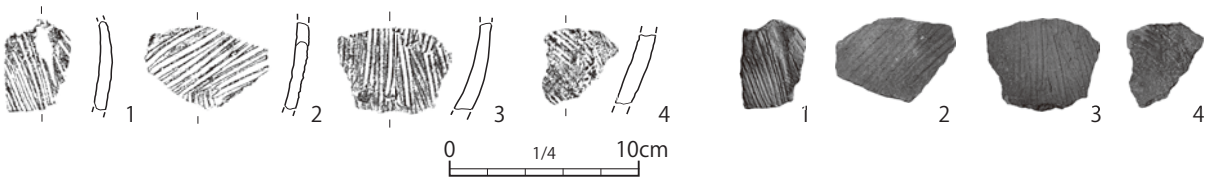
宮ノ台式土器とその並行する時期のものである。全形を知りえる遺存度のものはなく、すべて破片である。第 1-284 図 5 ～ 52 は甕（深鉢）で、5 ～ 10 は口縁部片、11 ～ 46 は胴部片、47 ～ 52 は底部片である。5 はハケ甕で口唇面取り後ハケ刻み、6 は口唇丸く収めヘラキザミ、7 ～ 10 は口唇部内外からの指頭捻り押捺である。7 はハケ甕、8・9 はナデ甕、10 は口縁部外面と口唇部に RL 縄文を施文する。胎土から搬入品と思われ、他の同時期の土器胎土とは明らかに相違する。

第 1-284 図 11 ～ 45 は頸部から胴部にかけての破片で、ハケ甕が主体でナデ甕は客体的である。14 はハケの後 3 本一単位の条痕を斜めに施す。46 は胴部外面無節縄文施文の甕で、施文の前に横位のヘラケズリを行う。このことから、器面の乾燥が進んだタイミングの縄文施文であり、非常に浅い圧痕である。縄文前期の可能性もある。

第 1-284 図 47 ～ 52 は甕底部で、その多くがハケ甕である。49 と 50 は外底面に木葉痕が残る。

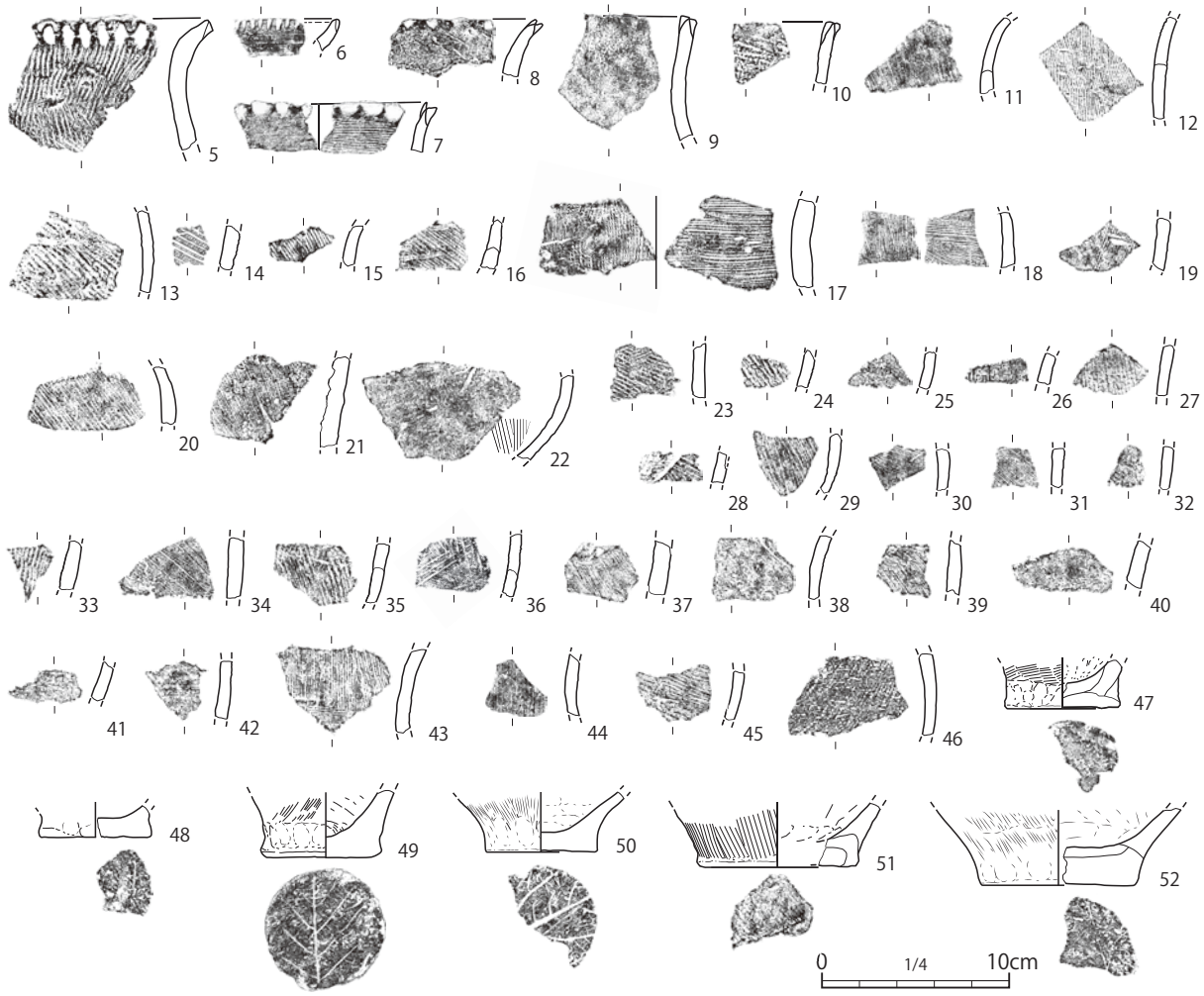
第 1-285 図 53 ～ 96 は壺である。53・54 は口縁部、55 ～ 58・68・69 は頸部、59 ～ 67・70 ～ 87 は胴部、88 ～ 96 は底部である。

第 1-286 図 53 は細首で受口状口縁を持ち、外面に縦位の浮文を添付する。外面と口唇部は LR 縄文を施文、内面は赤彩である。54 は単純口縁の広口壺で、口唇に LR 縄文を施す。頸部片のうち 56 は内外に赤彩が認められる。67 は横位の LR 縄文を２帯施し、その上下を３本一単位の櫛描波状文で区画する。69 は無区画の横位細縄文を頸部に施す。59・60 は横位縄文帯の縁を細い沈線で区画する。61 は曲線的に縄文を沈線区画する。結紐文か渦文であろうか。62 ～ 65 は横位縄文、66 は頸部に施

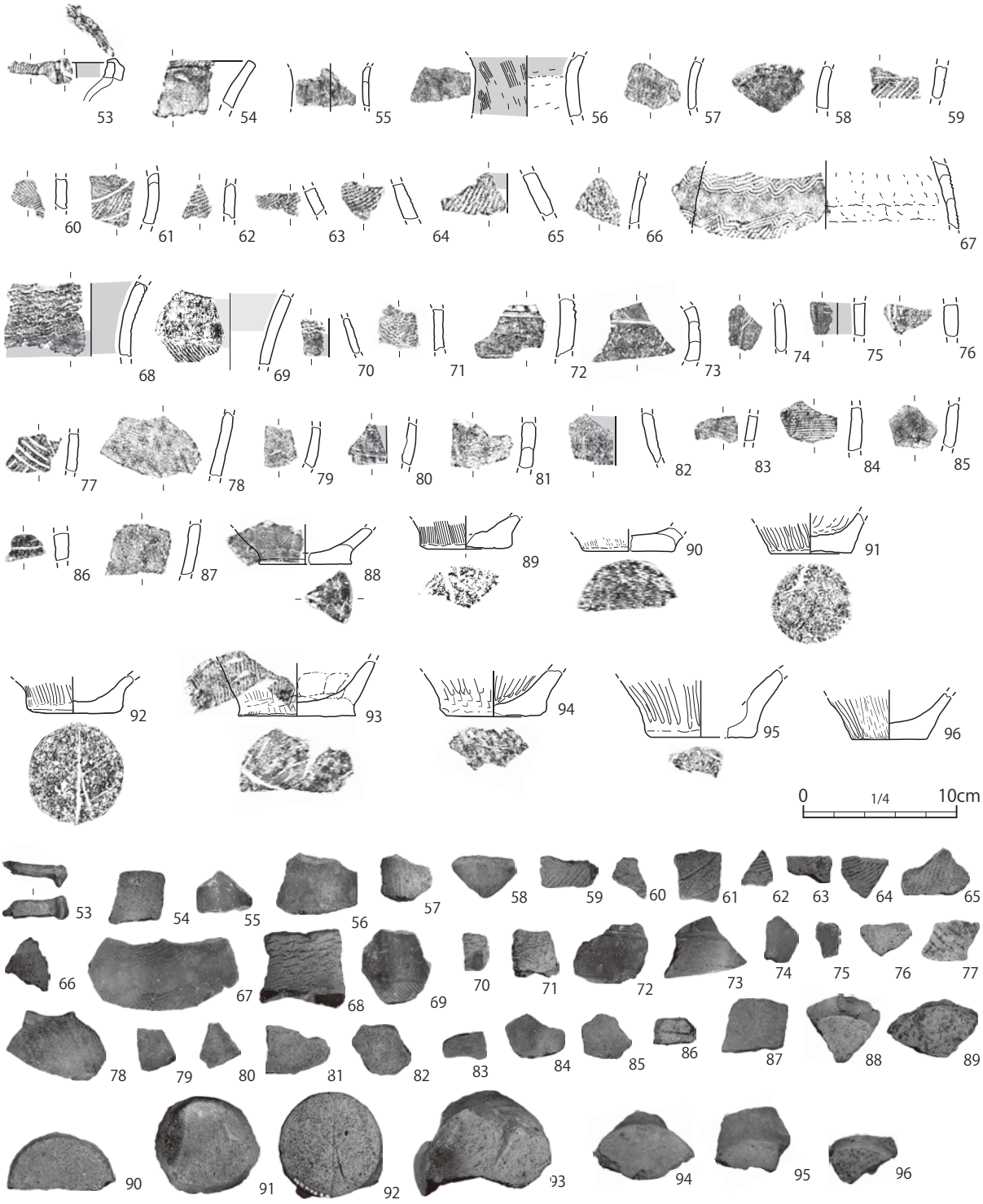


第 1-283 図　弥生時代中期前半の土器（1/4）

文方向等は不明だが無節縄文かと思われる浅い圧痕が認められる。胎土から搬入品である。70 は結節文を多条に施し、文様帯下端の区画はなく、以下は赤彩される。71 は結節文を横位と斜位に不揃いに施文し、結紐文状とし、下端は３本以上の櫛状工具による横位沈線で区画する。68 は内面も赤彩されることから広口壺であろう。72・73 は横位の太めの沈線を施す。72 は２条の沈線間に刺突列

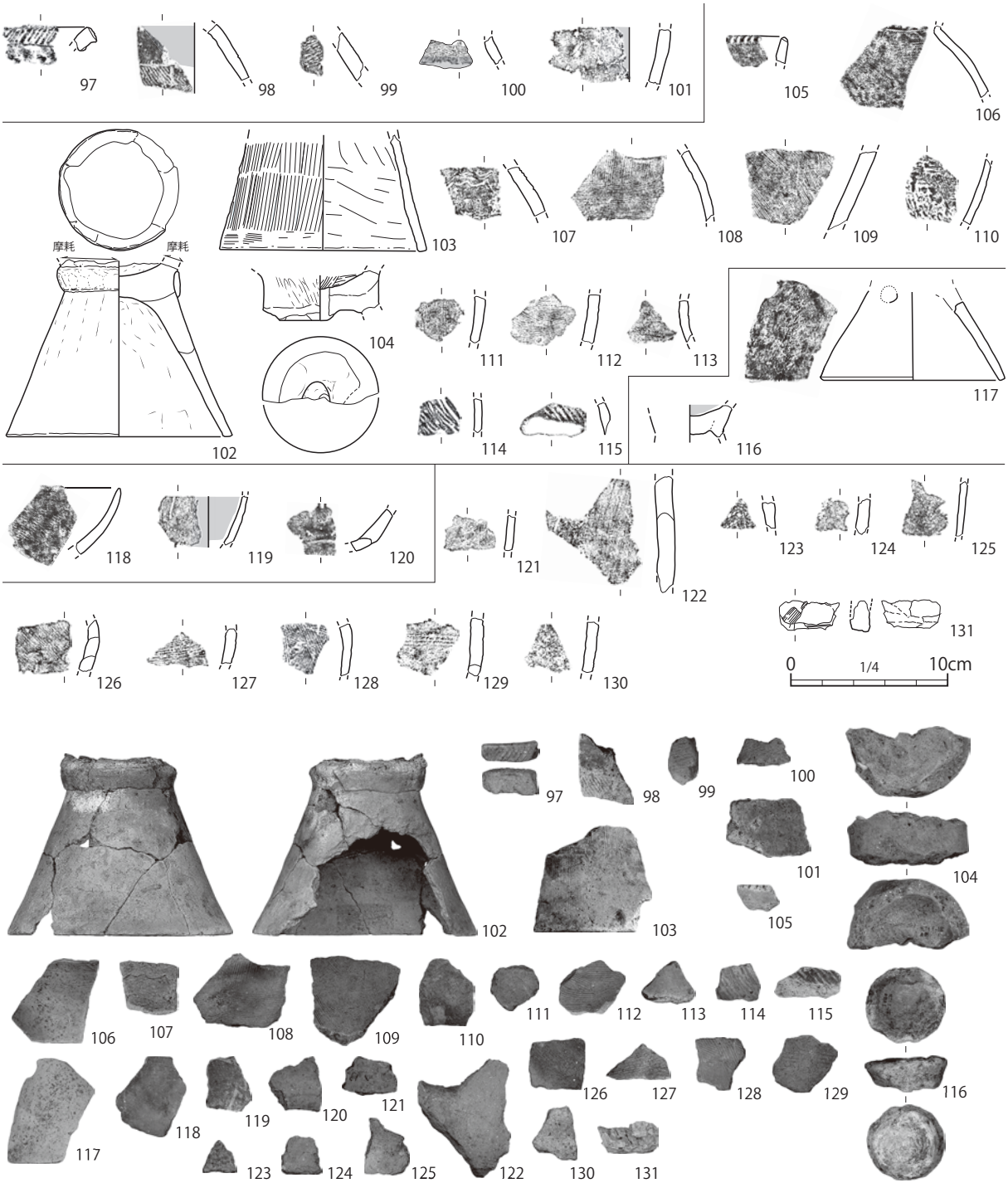


第 1-284 図　弥生時代中期後半の土器（１）（1/4）



第 1-285 図　弥生時代中期後半の土器（２）（1/4）

点文を巡らすようである。無文帯を挟んで図の下端にももう一条横位沈線があることから、下方にも文様帯が展開するようである。73 は当初縄文土器の可能性を考えたが、内面に横位刷毛目が認められることから弥生土器とした。74 ～ 76 は２本一単位の半截竹管による並行線文が認められる。74 は胴部片で斜位に施文される。75 は横位施文で内外面赤彩であり、頸部片であろう。76 は縦位施文である。77 は鋸歯文区画内を斜線充填すると思われる。78 ～ 87 は無文の胴部片である。



第 1-286 図　弥生時代後期の土器（1/4）

壺の底部は下方に突出ぎみとなるものが多く、89・93 は器面にハケが残るが、他はいずれも粗いミガキ仕上げである。外底面に木葉痕が目立つ。

後期（第 1-286 図 97 ～ 131）

この時期も全形を知りえるものはなく、台付甕の脚台部の比較的まとまりのある大破片があるが、他はいずれも小破片である。第 1-286 図 97 ～ 101 は壺。102 ～ 115 は甕、116 ～ 120 は高坏である。

第 1-286 図 97 は折返し口縁壺で口唇端面に幅広の面を持ち、櫛状工具による斜位の刺突文を密に

巡らす。東海地方菊川式土器壺の模倣品である。98 は細かい RL 縄文を横位施文し、上端を沈線で区画し、上位の無文帯は赤彩する久ヶ原式土器壺である。99 は無節縄文かと思われるが非常に浅く不明瞭である。100 は網目状撚糸文が施され、文様帯の区画はなく、文様以下は赤彩される。101 は外面赤彩の胴部で丁寧に磨かれる。胎土にシャモットを大量に含む。

第 1-286 図 102 はナデ台付甕の脚台部で、接合部に粘土帯を添付するいわゆる「ベルト甕」である。甕部との破面は摩耗しており、欠損後も転用されていた可能性が高い。破面も高温のため灰白色となっており、炉器台のような使われ方が予想される。104 もナデ台付甕の接合部かと思われる。甕部との接合に栓状の粘土が埋め込まれ、外底面に凸部が出張るいわゆる「出ベソ」が明瞭に残る。103 はハケ台付甕の脚台裾部である。105 は口唇部上方よりヘラキザミの施される甕口縁部で、朝光寺原式風の口縁である。107 は器面荒れるが櫛描波状文を上段と下段にそれぞれ施す。当初朝光寺原式甕の櫛描文としたが、内面の横位ハケは朝光寺原式の特徴的なハケではない。胎土も朝光寺原式というよりも東京湾系である。折衷の土器であろうか。106 はハケ甕頸部片、108 ～ 112 はハケ甕胴部で、111 は脚台部かもしれない。113 は久ヶ原式のナデ甕の頸部片である。114 はやや薄甕で右下がりの細筋のタタキ風の圧痕が認められるが、やや粗いハケかもしれない。内面にケズリはなくナデである。115 は太筋のタタキであろう。右下がりで内面は横位にヘラケズリを施す。

第 1-286 図 116 は内底面に赤彩が残ることから高坏の接合部と思われる。117 は高坏の脚部で、透かし穴を持つ。118 は東海系の椀状高坏、119 は後期在地系の椀状高坏で内外赤彩である。120 は東海系の有稜高坏である。

時期不明（第 1-286 図 121 ～ 131）

第 1-286 図 121 ～ 130 は弥生土器ではあるが、中期や後期といった時期比定の細分ができなかったものである。121 ～ 123 は壺、124 ～ 130 は甕である。

第 1-286 図 131 は焼成粘土塊で、他の土器の胎土とは明らかに異なり、部材であり壁などの構築材の一部であろう。幅 5 mm ほどの藁状の平行繊維圧痕が内外面に認められる。

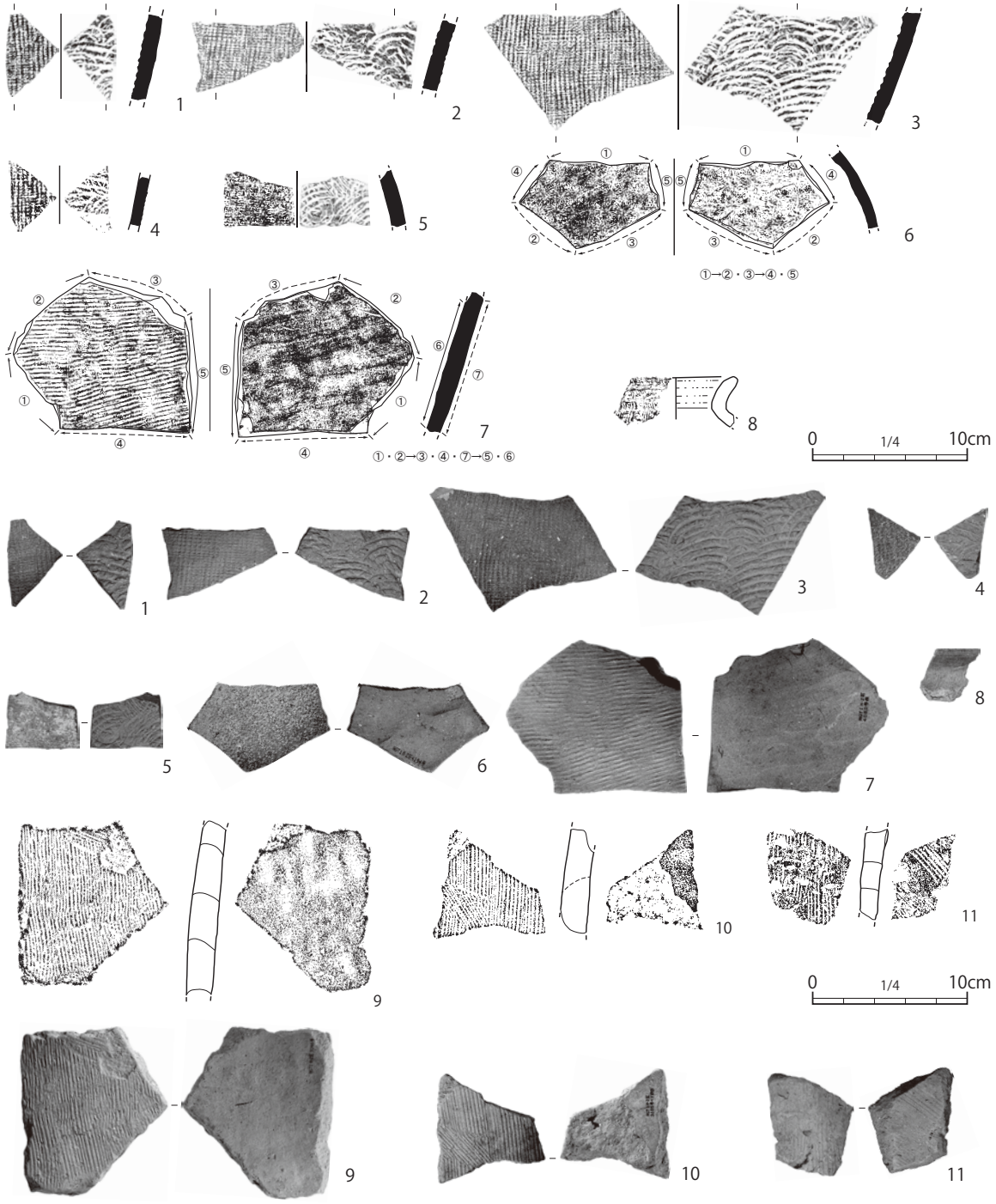
（及川）

3．古墳時代から古代の遺物

古墳時代から古代の遺物は 11 点・788.9g 出土し、そのうち 9 点を図示した（第 1-287 図）。

1） 須恵器（第 1-287 図 1 ～ 7）

須恵器は 7 点・426.4g 出土した。第 1-287 図 1 ～ 5 は同一個体と思われる甕の胴部片である。外面は細筋の正格子タタキ（縄蓆文風）、内面は青海波状の同心円当具痕が明瞭に残り、硬質な焼き上がりである。いずれも断面サンドイッチ構造で、芯部は灰褐からにぶい赤褐色で、いわゆる「あずき色」または「セピア色」と称する断面である。6・7 は須恵器甕で破片の状態で転用されている。6 は破面の①～⑤がいずれも摩耗しており、①→②・③→④・⑤の順に使用が顕著となる。外面はナデで降灰が著しい。内面は円形の当具痕が残る。7 は破面の①～⑤に加えて、内外面⑥・⑦も使用されており、①・②→③・④・⑦→⑤・⑥の順によくすり減っている。特に破面の⑤は砥石としての転用が顕著で、破面が直線的で平坦な面となっている。（及川）



第 1-287 図　古墳時代から古代の遺物（1/4）

第 1-7 表　縄文時代　土器観察表

挿図番号	図版番号	時期	器種	部位	出土位置	胎土	色調		施文	その他	重量(g)	遺物番号
							外面	内面				
1-282	1	早期後半	深鉢	胴	4238 号	繊維多　白色粒子	7.5YR4/6 褐	7.5YR5/3 にぶい褐	斜位の条痕	内面縦位の条痕	16.3	159
1-282	2	前期前半	深鉢	胴	H-2 区南東 近世 7 面	繊維	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	ヘラ状工具による条線	内面横位ヘラミガキ	45.7	85
1-282	3	前期後半	深鉢	口頸	H-2 区南西 断割トレンチ	白色粒子、雲母、石英	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/6 明赤褐	半截竹管状工具による平行沈線で弧線文を描く	内面ナデ	21.6	88
1-282	4	中期初頭 ～前葉	深鉢	胴	1103 号	白色粒子多	7.5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	単節 LR 磨り消し→沈線	内面平滑ナデ	32.8	83
1-282	5	中期初頭 ～前葉	深鉢	胴	1225 号	白色粒子多	5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	単節 LR 磨り消し→沈線	内面平滑ナデ	13.4	90
1-282	6	中期末～ 後期初頭	深鉢	口縁	H-2 区北東 近世 7 面	白色粒子少量	7.5YR6/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	横走 L →磨り消し→単沈線	内面ヨコナデ	29.0	157
1-282	7	後期前葉 ～中葉	深鉢	胴	2308 号	砂粒φ～ 5㎜	5YR6/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	半截竹管状工具による平行沈線で菱形状のモチーフを描く	器面摩耗激しい	25.0	84
1-282	8	後期前葉 ～中葉	深鉢	口縁	2500 号	白色粒子	7.5YR6/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	角頭状工具による垂下小波状文	内面ヨコケズリ	30.9	68
1-282	9	後期前葉 ～中葉	鉢	胴	1782 号	白色粒子少量	10YR4/2 灰黄褐	10YR4/1 褐灰	単沈線による区画→列点文を充填施文	内面ヨコミガキ	27.5	121
1-282	10	後期前葉 ～中葉	深鉢	口縁	H-1 区西側 近世 6 面 No.033	赤色粒子、白色粒子	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	横走 LR　指頭痕により磨り消える	単沈線　横位ミガキ	20.6	158

第 1-8 表　弥生時代　土器観察表

挿図番号	図版番号	器種	部位	出土位置	胎土	焼成	色調	備考	重量(g)	遺物番号
1-283	1	深鉢	口縁？	F-1 区 1108 号	亜角礫砂	良	表 :7.5YR5/4 にぶい褐 裏 :5YR5/6 明赤褐 断 :7.5YR5/4 にぶい褐	弥生中期前半 条痕	16.0	110
1-283	2	甕	胴	F-1 区 中央 6 面	長石粒目立つ	良	表 :7.5YR4/2 灰褐 裏 :7.5YR5/3 にぶい褐 断 :7.5YR6/4 にぶい橙	弥生中期前半 羽状条痕？	19.8	25
1-283	3	甕	胴下半	H-1 区 2965 号南	細砂多	良	表 :5YR5/4 にぶい赤褐 裏 :5YR5/4 にぶい赤褐 断 :7.5YR5/1 褐灰	弥生中期前半 2 本一単位条痕	29.6	137
1-283	4	甕	胴下半	H-1 区 2965 号南	細砂多	良	表 :10YR2/1 黒 裏 :7.5YR4/4 褐 断 :10YR5/2 灰黄褐	弥生中期前半 2 本一単位条痕 3 と同個か？	16.3	136
1-284	5	甕	口縁	F-1 区 2 面	細砂多	良	表 :10YR5/3 にぶい黄褐 裏 :10YR5/3 にぶい黄褐 断 :7.5YR6/4 にぶい橙	弥生中期後半 ハケキザミ	62.7	18
1-284	6	深鉢	口縁	F-1 区 1299 号	細砂多	良	表 :7.5YR にぶい橙 裏 :7.5YR にぶい橙	弥生中期後半 ヘラキザミ	5.7	97
1-284	7	深鉢	口縁	F-1 区 北側 4 面	細砂多	良	表 :10YR6/4 にぶい黄橙 裏 :10YR6/4 にぶい黄橙 断 : ススケ	弥生中期後半 内外指頭捻り押捺	10.0	99
1-284	8	深鉢	口縁	G 区 2292 号	赤褐乾質粒子含む	やや良	表 :5YR3/4 暗褐色 裏 :5YR4/6 赤褐 断 :5YR3/1 黒褐	弥生中期後半 断面芯黒のサンドイッチ　内外指頭捻り押捺	18.5	116
1-284	9	甕	口縁	F-1 区 1254 号	細砂	良	表 :10YR5/3 にぶい黄褐 裏 :7.5YR7/4 にぶい橙 断 :7.5YR7/4 にぶい橙	弥生中期後半 内外指頭捻り押捺	28.4	63
1-284	10	深鉢	口縁	F-1 区 470 号南東Ⅵ層	細砂多くザラつく	良 硬質	表 :7.5YR4/2 灰褐 裏 :7.5YR6/4 にぶい橙 断 :7.5YR4/1 灰褐	弥生中期後半 内外指頭捻り押捺	5.9	5
1-284	11	深鉢	頸	F-1 区 470 号南西Ⅴ層	細砂多	良	表 :2.5YR6/8 橙 裏 :7.5YR5/4 にぶい褐	弥生中期後半 ハケ	15.2	93
1-284	12	甕	頸	F-1 区 1400 号	細砂多	良	表 :7.5YR6/4 にぶい橙 裏 :7.5YR5/4 にぶい褐 断 :7.5YR6/4 にぶい橙	弥生中期後半 ハケ	19.2	46
1-284	13	甕	胴	F-1 区 1225 号南西	細砂多	良好	表 :10YR3/2 黒褐 裏 :7.5YR6/4 にぶい橙 断 :7.5YR6/4 にぶい橙	弥生中期後半 ハケ	18.2	40
1-284	14	甕	胴	F-1 区 1251 号	細砂多	良	表 :7.5YR3/1 黒褐 裏 :7.5YR4/2 灰褐 断 :7.5YR6/4 にぶい橙	弥生中期後半 ハケのち条痕	4.4	14
1-284	15	甕	頸	F-1 区 111 号	細砂多	良	表 :10YR6/4 にぶい黄橙 裏 :10YR6/4 にぶい黄橙 断 :10YR6/4 にぶい黄橙	弥生中期後半 ハケ	4.3	7
1-284	16	甕	胴	F-1 区 1056 号	細砂多	良	表 :7.5YR2/2 黒褐 裏 :7.5YR6/4 にぶい橙 断 :10YR6/4 にぶい黄橙	弥生中期後半 ハケ	8.3	4
1-284	17	深鉢	胴	F-1 区 1060 号	細砂多	やや軟	表 :7.5YR6/4 にぶい橙 裏 :10YR6/4 にぶい黄橙	弥生中期後半 ハケ	35.6	108
1-284	18	深鉢	胴	F-1 区 460 号南西上層	細砂多	良	表 :7.5YR5/3 にぶい褐 裏 :7.5YR5/3 にぶい褐	弥生中期後半 ハケ	8.4	94
1-284	19	甕	胴	F-1 区 1225 号	細砂	良	表 :10YR6/3 にぶい黄橙 裏 :7.5YR6/4 にぶい橙 断 :10YR6/3 にぶい黄橙	弥生中期後半 ハケ	7.8	64
1-284	20	甕	胴	F-1 区 1229 号	細砂多	良	表 :10YR3/2 黒褐 裏 :10YR5/3 にぶい黄褐 断 :10YR6/3 にぶい黄橙	弥生中期後半 ハケ	17.1	3
1-284	21	甕	胴	F-1 区 中央 6 面	砂多量	やや良	表 :10YR5/4 にぶい黄褐 裏 :10YR6/4 にぶい黄橙 断 :10YR6/4 にぶい黄橙	弥生中期後半 ハケ	27.1	23
1-284	22	壺	胴	F-1 区 1225 号南西	砂多	良	表 :7.5YR3/1 黒褐 裏 :7.5YR5/2 灰褐 断 :7.5YR6/4 にぶい橙	弥生中期後半 ハケ	34.2	39

挿図番号	図版番号	器種	部位	出土位置	胎土	焼成	色調	備考	重量(g)	遺物番号
1-284	23	深鉢	胴	F-2 区 整地層 A	亜角礫砂	良 硬質	表 :10YR7/2 にぶい黄橙 裏 :7.5YR5/6 明褐	弥生中期後半 ハケ	10.1	107
1-284	24	甕	胴	F-1 区 1510 号	砂粒多	良	表 :10YR6/4 にぶい黄橙 裏 :10YR7/4 にぶい黄橙 断 :10YR7/4 にぶい黄橙	弥生中期後半 ハケ	4.4	27
1-284	25	甕	胴	F-1 区 中央 6 面	砂粒多	やや良	表 :10YR5/3 にぶい黄褐 裏 :10YR6/4 にぶい黄橙 断 :10YR6/3 にぶい黄橙	弥生中期後半 ハケ	4.0	26
1-284	26	甕	胴 (脚台か？)	F-1 区 南側 5 面	砂粒多　角閃石	良	表 :10YR7/4 にぶい黄橙 裏 :10YR7/4 にぶい黄橙 断 :10YR7/4 にぶい黄橙	弥生中期後半 ハケ	4.0	19
1-284	27	深鉢	胴	F-1 区 1223 号	細砂	良	表 :10YR5/4 にぶい黄褐 裏 :10YR2/1 黒	弥生中期後半 ハケ	5.7	65
1-284	28	甕	胴	F-1 区 南側 5 面	細砂　亜角礫	良	表 :7.5YR5/4 にぶい褐 裏 :7.5YR5/4 にぶい褐 断 :10YR5/4 にぶい黄褐	弥生中期後半 ハケ	5.0	20
1-284	29	甕	胴	F-1 区 750 号南西	細砂多　骨針少量	やや良	表 :10YR3/2 黒褐 裏 :10YR6/4 にぶい黄橙 断 :10YR7/4 にぶい黄橙	弥生中期後半 ハケ	7.8	29
1-284	30	甕	胴	F-1 区 497 号下層 (暗褐色土)	砂粒多	良	表 :7.5YR5/4 にぶい褐 裏 :5YR5/4 にぶい赤褐 断 :5YR5/4 にぶい赤褐	弥生中期後半 ハケ	4.8	31
1-284	31	甕	胴	F-1 区 500 号東中央下層 (黒褐色土)	細砂 (亜角砂)	良	表 :10YR6/2 灰黄褐 裏 :7.5YR にぶい褐 断 :10YR7/2 にぶい黄橙	弥生中期後半 ハケ	4.4	32
1-284	32	甕	胴	F-1 区 470 号北西下層 3 層	細砂多	良	表 :7.5YR7/2 明褐灰 裏 :10YR7/2 にぶい黄橙 断 :7.5YR7/3 にぶい橙	弥生中期後半 ハケ	3.3	33
1-284	33	甕	胴	F-1 区 1144・1150 号	細砂多	良	表 :10YR5/3 にぶい黄褐 裏 :10YR6/4 にぶい黄橙 断 :10YR6/3 にぶい黄橙	弥生中期後半 ハケ	6.0	35
1-284	34	甕	胴	F-1 区 南斜面 2 面	細砂多	良	表 :7.5YR5/3 にぶい褐 裏 :10YR7/3 にぶい黄橙 断 :10YR6/3 にぶい黄橙	弥生中期後半 ハケ	14.8	42
1-284	35	甕	胴	F-1 区 1154 号	細砂多	良	表 :10YR6/4 にぶい黄橙 裏 :10YR7/4 にぶい黄橙 断 :10YR7/3 にぶい黄橙	弥生中期後半 ハケ	10.2	43
1-284	36	甕	胴	F-1 区 1166 号西側上層	細砂多	良	表 :10YR6/2 灰黄褐 裏 :10YR7/2 にぶい黄橙 断 :10YR6/1 褐灰	弥生中期後半 ハケ	11.6	49
1-284	37	甕	胴	F-1 区 1400 号	細砂多	良	表 :10YR4/2 灰黄褐 裏 :10YR7/4 にぶい黄橙	弥生中期後半 ハケ	13.8	66
1-284	38	甕	頸	F-1 区 1254 号	細砂多	良	表 :7.5YR6/6 橙 裏 :7.5YR6/6 橙 断 :7.5YR6/6 橙	弥生中期後半 ハケ	13.9	61
1-284	39	甕	胴	F-1 区 1400 号	粗砂粒多	良	表 :10YR7/3 にぶい黄橙 裏 :10YR7/1 灰白 断 :10YR7/2 にぶい黄橙	弥生中期後半 ハケ	7.4	55
1-284	40	甕	胴	F-1 区 1225 号 SPA-A' 南北ベルト	黒砂多量	良	表 :7.5YR5/4 にぶい褐 裏 :7.5YR7/4 にぶい橙 断 :7.5YR6/4 にぶい橙	弥生中期後半 ハケ	14.0	56
1-284	41	甕	胴	F-1 区 1071 号	細砂多	良	表 :7.5YR6/6 橙 裏 :7.5YR6/4 にぶい橙	弥生中期後半 ハケ	6.7	67
1-284	42	甕	胴	F-2 区 中央部表土	粗砂多	良	表 :10YR4/8 赤 裏 :10YR4/6 赤	弥生中期後半 細かいハケ？ナデ	7.4	72
1-284	43	甕	胴	F-2 区 509 号	細砂多	良	表 :7.5YR6/6 橙 裏 :10YR7/4 にぶい黄橙	弥生中期後半 細かいハケ？ナデ	28.5	76
1-284	44	甕	頸	H-1 区 3580 号	細砂多	良	表 :5YR5/6 明赤褐 裏 :10YR4/2 灰黄褐	弥生中期後半 細かいハケ？ナデ	6.8	141
1-284	45	甕	胴	F-2 区 509 号	砂っぽい	やや良	表 :10YR3/1 黒褐 裏 :5YR5/6 明赤褐	弥生中期後半 細かいハケ？ナデ	9.2	77
1-284	46	甕	胴	G-1 区 南東 2 面盛土 2-3 層	亜角礫多	良	表 :5YR5/6 明赤褐 裏 :7.5YR6/4 にぶい橙 断 :7.5YR3/1 黒褐	弥生中期後半 無節縄文　北関東系か？	21.3	117
1-284	47	甕	底	F-1 区 1251 号	細砂多	やや軟質	表 :10YR4/1 褐灰 裏 :10YR6/3 にぶい黄橙 断 :10YR5/2 灰黄褐	弥生中期後半 ハケ　復元径 6.2㎝	33.1	12
1-284	48	深鉢	底 1/4 片	F-1 区 攪乱 (南側)	細砂多	やや軟質	表 :10YR3/2 黒褐 裏 :10YR7/3 にぶい黄橙	弥生中期後半 復元径 6.0cm	16.3	109
1-284	49	深鉢	底全形	F-1 区 1255 号	細砂多	良	表 :5YR7/8 橙 裏 :7.5YR6/8 橙	弥生中期後半 断面芯黒のサンドイッチ　ハケ木葉痕 復元径 6.0cm	118.0	105
1-284	50	深鉢	底	F-1 区 北側 2 面	細砂多	良	表 :10YR3/2 黒褐 裏 :10YR3/2 黒褐	弥生中期後半 ハケ　木葉痕	57.3	106
1-284	51	甕	底 1/6 片	F-1 区 1400 号	細砂多	良	表 :7.5YR6/4 にぶい橙 裏 :5YR6/6 橙 断 :7.5YR7/4 にぶい橙	弥生中期後半 ハケ　木葉痕	24.5	53
1-284	52	深鉢	底 1/4 片	G-2 区 北 1-2 面	細砂多	良 やや軟質	表 :10YR3/1 黒褐 裏 :10YR6/2 灰黄褐	弥生中期後半 ハケ　木葉痕　復元径 8.6cm	82.4	115
1-285	53	壺	口縁	F-1 区 1166 号中央部	細砂多	やや良	表 :10YR7/3 にぶい黄橙 裏 :5YR5/3 にぶい赤褐 断 :10YR6/4 にぶい黄橙	弥生中期後半 口縁部浮文　口縁と口唇に縄文 LR	5.4	112
1-285	54	壺	口縁	F-1 区 4 面	細砂粒多	良	表 :7.5YR6/6 橙 裏 :7.5YR6/6 橙 断 :7.5YR6/4 にぶい橙	弥生中期後半 口唇に縄文 LR	11.6	1
1-285	55	壺	頸 1/4 片	F-1 区 470 号	細砂多	良	表 :10YR7/4 にぶい黄橙 裏 :10YR7/4 にぶい黄橙 断 :2.5YR4/4 にぶい赤褐	弥生中期後半	5.2	98
1-285	56	壺	頸	F-1 区 489・1108 号	細砂多	良	表 :2.5YR5/4 にぶい赤褐 裏 :10YR6/3 にぶい黄橙 断 :10YR7/4 にぶい黄橙	弥生中期後半 内外赤彩	21.5	28

挿図番号	図版番号	器種	部位	出土位置	胎土	焼成	色調	備考	重量(g)	遺物番号
1-285	57	壺	胴	F-1 区 1225 号 SPA-A' 南北ベルト	黒砂多	良	表 :10YR6/4 にぶい黄橙 裏 :10YR6/3 にぶい黄橙 断 :10YR6/4 にぶい黄橙	弥生中期後半	7.2	59
1-285	58	壺	口縁	H-1 区 西 8 面直上	細砂多く粉っぽい	やや良 軟質	表 :5YR6/6 橙 裏 :7.5YR6/4 にぶい橙	弥生中期後半	8.6	143
1-285	59	壺	胴	F-1 区 3-3 面	黒色角閃石多	良 やや軟質	表 :2.5YR5/6 明赤褐 裏 :5YR5/4 にぶい赤褐 断 :7.55/4 にぶい褐	弥生中期後半 頸部縄文 LR の上端沈線区画	6.3	6
1-285	60	広口壺？	胴	F-1 区 1550 号	砂礫多	良 軟質	表 :10YR6/4 にぶい黄橙 裏 :5YR3/6 暗褐色 断 :10YR7/4 にぶい黄橙	弥生中期後半 羽状縄文上下沈線区画	3.2	111
1-285	61	壺	胴	F-1 区 1231 号	骨針含む	良	表 :7.5YR6/4 にぶい橙 裏 :7.5YR6/4 にぶい橙 断 :7.5YR6/4 にぶい橙	弥生中期後半 沈線間に縄文 LR 充填	9.0	44
1-285	62	壺	胴	一括	砂粒多	良	表 :7.5YR5/4 にぶい褐 裏 :7.5YR5/4 にぶい褐	弥生中期後半 縄文 LR	2.6	17
1-285	63	壺	肩	H-1 区 西 6 面 No.143	砂粒多	良	表 :7.5YR6/6 橙 裏 :7.5YR6/6 橙	弥生中期後半 縄文 LR	4.0	135
1-285	64	壺	肩	H-1 区 2777 号	細砂多く粉っぽい	やや良 軟質	表 :10YR6/4 にぶい黄橙 裏 :10YR8/3 浅黄橙	弥生中期後半 縄文 LR	6.6	140
1-285	65	壺	頸	F-1 区 1254 号	細砂多	良	表 :10YR7/3 にぶい黄橙 裏 :10YR7/4 にぶい黄橙 断 :10YR7/3 にぶい黄橙	弥生中期後半 縄文 LR	11.5	60
1-285	66	壺	頸？	F-1 区 1254 号	亜角礫含む	良 硬質	表 :10YR5/2 灰黄褐 裏 :7.5YR5/4 にぶい褐 断 :10YR5/3 にぶい黄褐	弥生中期後半 搬入品？ 無節縄文か？	4.9	62
1-285	67	壺	胴	F-1 区 1225 号 SPA-A' 南北ベルト	チャート目立つ	良 硬質	表 :7.5YR3/1 黒褐 裏 :7.5YR5/4 にぶい褐 断 :7.5YR5/4 にぶい褐	弥生中期後半 縄文 LR の下端を 3 本一単位の櫛波状文で区画	48.6	41
1-285	68	広口壺	頸	G-2 区 2260 号	細砂多	良	表 :10YR7/4 にぶい黄橙 裏 :10YR5/2 灰黄褐 断 :10YR5/1 褐灰	弥生中期後半 7 条以上の結節文横位、赤彩	30.4	10
1-285	69	壺	頸	H-2 区 北西攪乱	細砂多	良	表 :2.5YR4/4 にぶい赤褐 裏 :7.5YR6/6 灰黄褐	弥生中期後半 縄文 RL	22.1	153
1-285	70	壺	胴	F-1 区 1225 号 SPA-A' 南北ベルト	黒砂多	やや軟質	表 :10YR7/4 にぶい黄橙 裏 :10YR7/3 にぶい黄橙 断 :10YR7/3 にぶい黄橙	弥生中期後半 結節文、赤彩	2.3	58
1-285	71	壺	肩片	F-1 区 470 号	細砂多	不良	表 :7.5YR6/6 橙 裏 :7.5YR6/6 にぶい橙	弥生中期後半 結節文による結紐文、下端は 3 条櫛	8.6	95
1-285	72	壺	胴	F-2 区 582 号	角閃石目立つ	不良	表 :10YR2/1 黒 裏 :7.5YR4/1 褐灰 断 :5YR2/1 黒褐	弥生中期後半 横位刺突列点文を太沈線区画	22.3	126
1-285	73	壺	胴	F-1 区 400 号西端中央上層	細砂主体で粉状	不良	表 :10YR4/2 灰黄褐 裏 :7.5YR5/4 にぶい褐 断 :7.5YR4/1 褐灰	弥生中期後半 太沈線区画	14.2	113
1-285	74	壺	頸	G-2 区 1424 号下部	細砂多	良	表 :5YR4/6 赤褐 裏 :5YR4/4 にぶい赤褐 断 :5YR6/4 にぶい橙	弥生中期後半 2 本一単位の半截竹管	4.8	119
1-285	75	壺	頸	G-3 区 南張出近世 3 面盛土	亜角礫多	良	表 :10YR3/6 暗赤 裏 :7.5YR3/6 暗赤 断 :2.5YR6/6 橙	弥生中期後半 2 本一単位の半截竹管	3.0	124
1-285	76	壺	肩片	G-2 区 4 面	細砂多	良	表 :10YR6/3 にぶい黄橙 裏 :5YR5/8 明赤褐	弥生中期後半 2 本一単位の半截竹管	5.9	128a
1-285	77	壺	胴	F-2 区 東側表土	細砂多	良	表 :10YR6/2 灰黄褐 裏 :7.5YR6/4 にぶい橙	弥生中期後半 鋸歯文区画内を沈線充填	7.1	71
1-285	78	壺	胴	F-2 区 554 号	砂細多	良	表 :10YR6/3 にぶい黄橙 裏 :2.5YR7/2 灰黄	弥生中期後半 ハケの後縦ヘラミガキ	22.1	75
1-285	79	壺	胴	F-2 区 589・590 号	砂細多	良	表 :10YR5/4 にぶい黄褐 裏 :10YR6/4 にぶい黄褐	弥生中期後半 ヘラミガキ？	5.0	78
1-285	80	壺	胴	F-1 区 4 面	細砂多	良	表 :10YR4/6 赤 裏 :10YR7/3 にぶい黄橙	弥生中期後半 ヘラミガキ、赤彩	4.1	68
1-285	81	壺	胴	F-1 区 1338 号	細砂多	良	表 :5YR6/6 橙 裏 :10YR6/3 にぶい黄橙 断 :10YR6/2 灰黄褐	弥生中期後半？ 弥生より新しい土師器か？ ヘラミガキ？	13.0	52
1-285	82	壺	頸	F-1 区 4 面	黒色砂多	良	表 :7.5YR6/4 にぶい橙 裏 :10YR6/4 にぶい黄橙 断 :10YR7/4 にぶい黄橙	弥生中期後半 ナデ、赤彩	9.0	21
1-285	83	壺	胴	F-1 区 4 面	骨針多量	良	表 :7.5YR5/3 にぶい褐 裏 :7.5YR5/4 にぶい褐 断 :7.5YR5/4 にぶい褐	弥生中期後半 ハケの後ヘラミガキ	3.2	22
1-285	84	壺？	胴	F-2 区 504 号	砂粒少	良 やや軟質	表 :10YR5/1 褐灰 裏 :10YR5/1 褐灰 断 :10YR6/4 にぶい黄橙	弥生中期後半 ハケの後ヘラミガキ	9.5	127
1-285	85	壺	胴	F-1 区 1238 号	細砂多	良	表 :7.5YR6/4 にぶい橙 裏 :7.5YR5/4 にぶい褐 断 :10YR6/4 にぶい黄橙	弥生中期後半 ヘラミガキ	7.1	30
1-285	86	壺か？	胴	H-1 区 一括	細砂多	軟質	表 :10YR6/3 にぶい黄褐 裏 :10YR5/2 灰黄褐	弥生中期後半 2 本沈線？	5.7	130a
1-285	87	壺	胴	F-1 区 中央 6 面	骨針多量	やや良	表 :7.5YR5/4 にぶい褐 裏 :7.5YR6/4 にぶい橙 断 :10YR6/3 にぶい黄橙	弥生中期後半 ハケの後ヘラミガキ	12.8	24
1-285	88	壺	底 1/4 片	F-1 区 中央 6 面	砂礫多	やや良	表 :10YR7/2 にぶい黄橙 裏 :10YR7/3 にぶい黄橙	弥生中期後半 外底面砂目　復元底径 6.0cm	22.4	101
1-285	89	壺	底 1/4 片	H-2 区 4455 号	亜角礫含む	やや良	表 :7.5YR6/8 橙 裏 :7.5YR6/8 橙	弥生中期後半 ハケ、木葉痕　復元底径 6.2cm	37.6	154
1-285	90	壺	底	F-1 区 4 面	粗砂　骨針	良	表 :7.5YR6/6 橙 裏 :10YR7/2 にぶい黄橙	弥生中期後半 外底面砂目	33.0	103
1-285	91	壺	底	F-2 区 563 号南東側	砂粒多	良	表 :10YR5/4 にぶい黄褐 裏 :10YR5/2 灰黄褐	弥生中期後半 ヘラミガキ　復元底径 5.1cm	78.1	81

挿図番号	図版番号	器種	部位	出土位置	胎土	焼成	色調	備考	重量(g)	遺物番号
1-285	92	壺	底	H-2 区 8 面	砂多	やや良	表 :7.5YR6/4 にぶい橙 裏 :10YR6/3 にぶい黄橙 断 :10YR5/2 灰黄褐	弥生中期後半 ハケ、木葉痕　復元径 6.2㎝	81.2	16
1-285	93	壺	底 2/3 片	F-1 区 南斜面 3-3 面焼土層 2 下　暗褐色土	φ 1mm 未満の亜角礫を多量に含む	良	表 :10YR3/2 黒褐 裏 :10YR7/2 にぶい黄橙	弥生中期後半 ハケ、木葉痕　復元底径 7.6cm	92.3	96
1-285	94	壺	底 1/4 片	F-2 区 510 号北西側	細砂	良	表 :7.5YR7/4 にぶい橙 裏 :10YR5/2 灰黄褐	弥生中期後半 ヘラミガキ、外底面撚糸の圧痕	43.8	74
1-285	95	壺	底 1/4 片	F-1 区	砂分多　骨針多	不良	表 :2.5YR4/8 赤褐 裏 :2.5YR4/3 褐	弥生中期後半 ヘラミガキ　復元底径 7.3cm	34.8	86
1-285	96	壺	底 1/4 片	G-1 区 858 号 2 層 +1 面盛土	砂礫やや多	良	表 :7.5YR5/4 にぶい褐 裏 :10YR5/3 にぶい黄橙	弥生中期後半 ヘラミガキ	22.5	120
1-286	97	壺	口縁	G-2 区 1 面	橙・白色シャモット多量	良	表 :10YR7/3 にぶい黄橙 裏 :10YR6/3 にぶい黄橙 断 :10YR6/3 にぶい黄橙	弥生後期　菊川式 折返口縁　斜ヘラ刺突文	34.7	48
1-286	98	壺	胴片	F-1 区 2 面	粗砂多	やや軟質	表 :10YR8/2 灰白 裏 :10YR8/1 灰白 断 : 赤彩 5YR5/3 にぶい	弥生後期久ヶ原式 縄文 RL の上端沈線区画、赤彩	10.4	104
1-286	99	壺	胴	G 区 1999 号炭化物層	粉っぽい	軟質	表 :5YR6/8 橙 裏 :5YR6/8 橙	弥生後期 網目状撚糸文風圧痕 土器ではなく、壁材か	5.3	122
1-286	100	壺	頸	G 区 1486 号	砂粒多く粉っぽい	良	表 :7.5YR5/6 明褐 裏 :10YR6/6 明黄褐 断 :10YR5/6 黄褐	弥生後期 網目状撚糸文	4.4	118
1-286	101	壺	胴	H-2 区 8 面 No.2	橙色シャモット多量	良 やや軟質	表 :5YR5/4 にぶい赤褐 裏 :10YR7/3 にぶい黄橙 断 :10YR7/3 にぶい黄橙	弥生後期 ヘラミガキ、赤彩	19.5	2
1-286	102	台付甕	脚台 3/4 片	F-2 区 整地層 D	細砂多	二次被熱を受け赤化・白化する	表 :5YR6/8 橙 裏 :2.5YR5/8 明赤褐	弥生後期 炉器台に転用か？ ナデ、ベルト甕	419	131
1-286	103	台付甕	脚台	F-2 区 整地層	細砂多　骨針少量	良 硬質	表 :5YR5/6 明赤褐 裏 :5YR6/8 橙	弥生後期 ハケ甕	49.3	79
1-286	104	ナデ台付甕	接合	F-1 区 南側	黄白色軟質粒子目立つ	軟質	表 :10YR5/6 黄橙 裏 :10YR7/4 にぶい黄橙	弥生後期 ホゾ穴接合（出ベソ）　接合径 7.2cm	85.5	102
1-286	105	甕	口縁	H-1 区 3590 号	粉っぽい	やや良 軟質	表 :5YR7/6 橙 裏 :7.5YR7/4 にぶい橙	弥生後期 朝光寺原式か？ 真上からヘラキザミ	2.6	142
1-286	106	甕	胴	H-1 区 3580 号 P3	粗砂目立つ	軟質	表 :7.5YR7/6 橙 裏 :7.5YR8/6 浅黄橙	弥生後期 ハケ甕	18.2	139
1-286	107	甕 (壺？)	胴	F-1 区 1225 号南東	細砂多	良	表 :10YR7/4 にぶい黄橙 裏 :10YR7/4 にぶい黄橙 断 :10YR7/4 にぶい黄橙	弥生後期 櫛描波状文 2 帯、内面ハケ	12.1	9
1-286	108	甕	胴	F-1 区 1338 号	角閃石多	良	表 :10YR6/3 にぶい黄橙 裏 :10YR6/3 にぶい黄橙 断 :10YR6/4 にぶい黄橙	弥生後期 ハケ甕	24.0	34
1-286	109	甕	胴	H-1 区 西 9 面以下 No.7	細砂多	良	表 :5YR5/6 明赤褐 裏 :5YR5/4 にぶい赤褐	弥生後期 ハケ甕	33.2	134
1-286	110	甕	胴下半	H-1 区 2965 号南	細砂多	やや軟質	表 :7.5YR4/4 褐 裏 :7.5YR5/3 にぶい褐	弥生後期 ハケ甕	10.2	138
1-286	111	甕	胴	F-1 区 1225 号 SPA-A' 南北ベルト	角閃石目立つ	良	表 :7.5YR6/4 にぶい橙 裏 :7.5YR5/4 にぶい褐 断 :7.5YR6/4 にぶい橙	弥生後期 ハケ甕	6.0	57
1-286	112	甕	胴	F-1 区 4 面	細砂多	良	表 :7.5YR5/4 にぶい褐 裏 :7.5YR5/4 にぶい褐 断 :7.5YR5/4 にぶい褐	弥生後期 ハケ甕	12.2	36
1-286	113	甕	頸	F-2 区 整地層	細砂　軟質	良	表 :7.5YR5/4 にぶい褐 裏 :7.5YR5/4 にぶい褐	弥生後期　久ヶ原式 ナデ甕	5.4	80
1-286	114	甕	胴	H-1 区 西側 7 面直上	亜角礫含む	やや軟質	表 :2.5YR6/6 橙 裏 :5YR6/6 橙	弥生後期 やや細めのタタキ	4.1	123
1-286	115	甕	胴	F-2 区西側 3-2 面盛土	粗砂粒多	軟質	表 :7.5YR8/4 浅黄橙 裏 :10YR7/3 にぶい黄橙	弥生後期 太筋タタキ、内面ヘラケズリ	4.5	129
1-286	116	高坏	接合	F-2 区 東側表土	細砂多	やや良	表 :7.5YR7/6 橙 裏 :7.5YR4/4 にぶい赤	弥生後期 内面赤彩	36.8	70
1-286	117	高坏	脚裾 1/6 片	H-1 区 西 9 面以下 No.4	亜角礫多 粉っぽい	やや良 軟質	表 :7.5YR7/6 橙 裏 :7.5YR8/6 浅黄橙	弥生後期～終末期？ 透かし穴あり	4.2	132
1-286	118	高坏	坏	H-1 区 西 7 面黄褐色盛土層	橙色シャモット多	良 黒色処理か？	表 :10YR4/3 にぶい黄褐 裏 :10YR5/4 にぶい黄褐	弥生後期～終末期？ 塊形高坏　東海系	14.0	133
1-286	119	高坏	坏	F-2 区 整地層	砂少	良	表 :7.5YR3/6 暗赤 裏 :7.5YR3/6 暗赤	弥生後期 内外赤彩　後期在地系	6.0	92
1-286	120	高坏	坏 or ドーナツ底の鉢底	H-1 区 3580 号 P7	亜角礫含む	良	表 :2.5YR5/6 明赤褐 裏 :7.5YR4/1 褐灰 断 :10YR5/6	弥生後期～終末期 有稜高坏　東海系	9.4	144
1-286	121	壺	胴	F-1 区 1267 号	細砂多	良	表 :2.5YR5/6 明赤褐 裏 :5YR5/6 明赤褐	弥生	5.2	69
1-286	122	壺	胴	G-2 区 4 面	細砂多く骨針含む	やや良	表 :7.5YR5/4 にぶい褐 裏 :7.5YR4/6 褐	弥生	51.1	128b
1-286	123	壺	肩	G-2 区 北西 1-4 面盛土	細砂多	やや良	表 :7.5YR6/6 橙 裏 :7.5YR6/6 橙	弥生	2.9	125
1-286	124	甕	胴	F-1 区 4 面	細砂多	良	表 :7.5YR6/4 にぶい橙 裏 :7.5YR5/4 にぶい橙 断 :7.5YR5/3 にぶい黄褐	弥生	5.5	37
1-286	125	甕	口～頸？	F-1 区 4 面	細砂多	良	表 :10YR5/3 にぶい黄褐 裏 :10YR5/3 にぶい黄褐 断 :10YR5/3 にぶい黄褐	弥生	5.0	38
1-286	126	甕	胴	F-1 区 4 面	細砂多	良	表 :7.5YR4/2 灰褐 裏 :7.5YR6/3 にぶい褐 断 :7.5YR6/3 にぶい褐	弥生	14.4	45

挿図番号	図版番号	器種	部位	出土位置	胎土	焼成	色調	備考	重量(g)	遺物番号
1-286	127	甕	胴	F-1 区 3-3 面	細砂多	良	表 :10YR7/4 にぶい黄橙 裏 :10YR6/1 褐灰 断 :10YR6/1 褐灰	弥生	5.9	47
1-286	128	甕	胴	F-1 区 1060 号上層下部	細砂多	良	表 :7.5YR6/4 にぶい橙 裏 :10YR6/4 にぶい黄橙 断 :10YR6/3 にぶい黄橙	弥生	8.2	50
1-286	129	甕	胴	H-2 区 5 面盛土	細砂多	良	表 :10YR5/2 灰黄褐 裏 :10YR4/1 褐灰 断 :10YR6/2 灰黄褐	弥生	14.4	51
1-286	130	甕	胴？	F-1 区 1400 号	粗砂多量	良	表 :10YR6/2 灰黄褐 裏 :10YR6/2 灰黄褐 断 :10YR6/2 灰黄褐	弥生	7.2	54
1-286	131	焼成粘土塊？		F-1 区 470 号南西 3 層	砂礫含まず粘土主体	不良	表 :10YR6/4 にぶい黄橙 裏 :10YR6/4 にぶい黄橙	弥生？ 土器の胎土ではない 厚さ 1.2cm の壁などの構築材	5.9	100

第 1-9 表　古墳時代・古代　土器・瓦・埴輪観察表

挿図番号	図版番号	種類器種	部位	出土位置	胎土	焼成	色調	備考	重量	遺物番号
1-287	1	須恵器甕	胴	H-1 区東側近世 7 面盛土	白砂	良 堅緻	表 :5YR4/1 灰 裏 :2.5YR5/1 黄灰 断 :7.5YR4/2 灰褐	古代 外面：平行タタキ　内面：青海波状当具痕	19.3	145
1-287	2	須恵器甕	胴	H-1 区西側 6 面 No.28	白砂	良 堅緻	表 :5YR5/1 灰 裏 :2.5YR5/1 黄灰 断 :7.5YR4/2 灰褐	古代 外面：平行タタキ　内面：青海波状当具痕	36.7	147
1-287	3	須恵器甕	胴	H-1 区近世 4 面盛土 検出時	白砂目立つ	良 硬質 堅緻	表 :5YR4/1 灰 裏 :2.5YR5/1 黄灰 断 :7.5YR4/2 灰褐	古代 外面：平行タタキ　内面：青海波状当具痕	100.4	146
1-287	4	須恵器甕	胴	H-2 区 3390 号	白色粒子少量含む	良	表 :2.5YR3/1 黒褐 裏 :2.5YR4/1 黄灰 断 :7.5YR5/2 灰褐	古代 外面：平行タタキ　内面：青海波状当具痕	11.4	149
1-287	5	須恵器甕	胴	H-2 区北西 南北ベルト	硬質	良	表 :7.5YR5/2 灰褐 裏 :2.5YR4/1 黄灰 断 :5YR5/3 にぶい赤褐	古代 外面：平行タタキ　内面：青海波状当具痕	24.2	151
1-287	6	須恵器瓶	胴	H-2 区 4194 号	骨針少量含む	良	表 :2.5Y6/2 灰黄 裏 :2.5Y5/1 黄灰	古代　砥石に転用 外面：ナデ　内面：円形無文当具痕	46.1	150
1-287	7	須恵器甕	胴	H-2 区南西 4080 号西側	細砂主体	良	表 :2.5YR6/1 黄灰 裏 :2.5YR6/1 黄灰	古代　砥石に転用 外面：平行タタキ　内面：ヘラナデ	188.0	152
1-287	8	土師器甕	口縁	H-2 区北西 近世 b 面直上	細砂主体	良	表 :7.5YR5/3 にぶい褐 裏 :7.5YR6/6 橙	古墳時代中～後期 外面：ハケの後ヨコナデ 内面：内ハケの後ヨコナデ	13.2	155
1-287	9	円筒埴輪	胴	H-2 区 3105 号ベルト②下層②	やや粗 雲母・長石多、赤色粒小	良	表 :5YR6/3 にぶい橙 表 :5YR6/3 にぶい橙	外面：タテハケ（9 本 /2cm）、ヨコハケ（本数不明） 内面：ナナメ方向ユビナデ　器厚 1.8cm	74.8	160
1-287	10	円筒埴輪	胴	H-2 区 3046 号南東	やや粗 長石・雲母多	良	表 :7.5YR6/3 にぶい橙 裏 :7.5YR6/3 にぶい橙	外面:タテハケ（9 本／ 2cm）、ナナメハケ（10 本 /1.5cm） 内面：ヨコナデ、剥落多い　器厚 1.6cm	227.5	161
1-287	11	円筒埴輪	胴	H-2 区 3590 号	やや粗 赤色粒・長石多、石英小	良	表：5YR6/6 橙 裏：5YR6/6 橙	外面：タテハケ（5 本／ 1cm） 内面：ナナメハケ（4 本／ 1cm）　器厚 1.1cm	46.6	156

2）　土師器（第 1-287 図 8）

土師器は 1 点・13.6g 出土した。第 1-287 図 8 は土師器甕口縁部である。古墳時代中期以降のハケ甕である。　（及川）

3）　埴輪（第 1-287 図 9 ～ 11）

埴輪は 3 点・348.9g 出土した。第 1-287 図 9 ～ 11 は円筒埴輪の胴部破片である。外面調整はいずれもタテハケである。9 は破片上面にナナメハケ、10 は破片中央にナナメハケが加えられる。いずれも胎土は雲母・長石を多く含む。11 は器厚が他の 2 片に比べ 1.1cm と薄い。

（合田）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ながたちょういっちょうめいせき
書　　名	永田町一丁目遺跡Ⅲ
副 書 名	内閣府新庁舎（仮称）整備等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
シ リ ー ズ 名	東京都埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第 393 集
編 著 者 名	大八木 謙司　佐藤 亮太　合田 恵美子　石﨑 俊哉　及川 良彦　長佐古 真也　宮本　由子　渋谷 葉子　中山 なな　梶ヶ山 眞里　坂上 和弘　山根 洋子　鈴木 伸哉　パリノ・サーヴェイ株式会社
編 集 機 関	公益財団法人東京都教育支援機構　東京都埋蔵文化財センター
所　在　地	〒 206-0033　東京都多摩市落合一丁目 14 番 2　　TEL 042‐374‐8044
発 行 年 月 日	西暦 2025 年 9 月 30 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
永田町一丁目遺跡	東京都千代田区永田町一丁目4番・5番	13101	37	35°40′23″	139°44′46″	20210701～20230512	2,968 ㎡	内閣府新庁舎（仮称）整備等事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
永田町一丁目遺跡（第３次調査）	散布地 屋敷	縄文		縄文土器	
		弥生		弥生土器	
		古墳～古代		土師器・須恵器・円筒埴輪	
		中世～近世初頭	掘立柱建物跡・墓坑・井戸・竪穴状遺構・土坑・ピット	舶載磁器・国産陶磁器土器・瓦・石製品・人骨	・緩斜面上に掘立柱建物跡、ピット群、単体の蔵骨器が検出
		江戸時代	建物基礎（礎石・掘立柱・土蔵）、石垣・石列、池、溝状遺構、地下室、木組遺構、ごみ穴、瓦溜、井戸、胞衣埋納遺構、埋桶、埋甕、炉、地形造成跡、礎石、敷石遺構、土間状遺構、土坑、ピット	陶磁器土器・瓦・土製品・金属製品・銭貨・木製品・漆製品・骨角貝製品・ガラス製品・石製品・金属加工関連遺物・自然遺物（動植物遺体）	・複数の旗本屋敷地（主要２区画）の調査 ・南側保科家屋敷地は１・２次調査を含めるとほぼ敷地全域の調査となる ・筑前福岡藩黒田家の家紋瓦など国元の刻印を有する瓦、陶磁器土器が多量に出土
		近代（明治～昭和戦前）	建物基礎（礎石・煉瓦）、池、石垣、煉瓦構造物		

要　約

千代田区永田町一丁目遺跡は、東京地下鉄国会議事堂駅の南方、武蔵野台地東端にあたる麹町台地の南斜面下部、南方の旧溜池の谷に連なる小谷に立地する。第３次調査地点は、既往調査同様、江戸時代を主体とし、1,000 石～ 5,000 石級の中上級の旗本屋敷地（主要２筆、計４筆の屋敷地）として変遷した地にあたる。明治期に主要２筆は、新政府の高官佐野常民の居宅となる。検出遺構は総数 4,000 基、遺物は収納箱 1,000 箱を越える。旗本屋敷の居住空間に関わる建物跡・土蔵跡・排水溝のほか、池跡、屋敷境を示す石垣や溝などが確認されている。災害や居住者変遷に伴う埋土や盛土造成の客土中には、近接する大名屋敷地、特に福岡藩黒田家に関係の深い遺物が多量に検出され、瓦礫処理を兼ねた斜面地造成の一端と捉えられる。また、旗本屋敷拝領以前の中世末～近世初頭期の遺構・遺物も発見され、地形改変の過程と土地利用が明らかになった。自然堆積層・盛土造成土中には縄文・弥生・古墳・奈良～平安・中世前期の遺物が散見され、周辺の古代以前の遺跡の存在がうかがえる資料が得られた。

印刷仕様

表紙	レザック	215kg（四六判）
見返し	上質紙	86.5kg（A判）
本文	マットコート紙	57.5kg（A判）
写真図版	マットコート紙	57.5kg（A判）
印刷方式	オフセット印刷	
使用インク	エコマーク商品認定基準適合	
製版線数	150線（カラー175線）	

本書は永久保存を考慮し、すべて中性紙を使用

千代田区

永田町一丁目遺跡Ⅲ

—内閣府新庁舎（仮称）整備等事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

（第1分冊）

東京都埋蔵文化財センター調査報告第393集

2025年9月30日発行

編集・発行　公益財団法人 東京都教育支援機構
東京都埋蔵文化財センター
〒206-0033
東京都多摩市落合一丁目14番2
TEL 042‐374‐8044

印刷　信毎書籍印刷株式会社
長野県長野市西和田1丁目30番3号